現代日本文學全集

PL Yamamoto, Sansei
755 Puroretaria bungaku shu
.7
Y34

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

プロレタリア文學

杉浦非水装幀

プロレタリア文學集

改造社版

LIBRARY
MAY 16 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

PL
755
.7
Y34

向つて右より〔上段〕林・小林・武田〔中段〕藤澤・村山・中野〔下段〕貴司・永德・落合の諸氏

「プロレタリア文學集」目次

巻頭寫眞（諸家照影）
「プロレタリア文學集」の序に……二

林房雄篇
都會双曲線……四
鐵窓の花……五一
年譜……五八

小林多喜二篇
不在地主……六三
救援ニュースNo.18.附録……一一八
「市民のために!」……一二六
蟹工船……一二九
年譜……一七六

武田麟太郎篇
暴力……一七八
荒つぽい村……一九八
休む軌道……二一二
色彩……二二〇
反逆の呂律……二三五
年譜……二三〇

藤澤桓夫篇
生活の旗……二三二
傷だらけの歌……二四八
赤ん坊の話……二五五
農村では……二六一
墓地で體操をする男……二六九
琉球の武器……二七三
子供……二七五
年譜……二七八

村山知義篇
暴力團記……二八〇
日清戰後……三一一
年譜……三四七

中野重治篇
砂糖の話……三五〇
波のあひま……三六五
病氣なほる……三七六
新しい女……三八三
モスクワ指して……三八六
ドイツ國民黨員……三九四
年譜……四一三

貴司山治篇
同志愛……四一六
舞踏會事件……四六七
チタの烙印……四七七
借家人組合ニュース……四九二
貞淑な細君……四九七
年譜……五〇〇

德永直篇
赤色スポーツ……五〇二
能率委員會……五二四
約束手形三千八百圓也……五三九
あまり者……五六一
プロマイドを捨てる……五六八
馬……五七四
眼……五七七
カットされない場景……五八一
年譜……五八四

落合三郎篇
染色體……五八六
年譜……六三〇

「プロレタリア文學集」の序に

一九三〇年に、日本プロレタリア作家同盟は數人の同志を、支配階級の手にうばはれた。これまでにもわれ〳〵の文學運動からは何人かの犧牲者を出してゐる。われ〳〵の進む道が正しき唯一の線に沿つてをればをる程、今後といへども犧牲はまぬかれぬであらう。それはわれわれの文學運動のみが眞に正しいプロレタリア文學の建設運動であり、われ〳〵の文學のみが眞によく勞働者農民の間に浸透し大衆をそれ自身の方向へと影響づけてゆく力があるかぎり、われ〳〵の文學運動に加はる多くの困難が豫想できるからである。

この集はしかしわれ〳〵のさうした目的のための闘爭として編された出版ではない。これは「現代日本文學全集」增卷刊行を機として改造社のすゝめにより、この全集愛讀者諸君に、日本には今自然主義文學について、文學の主流としてかやうにプロレタリア文學が目ざましく發達して來てゐるといふ新しい視野を提供するために、日本プロレタリア作家同盟員の九人を選びそのこれまでのなるたけ「有名な」作品のあれやこれやを編んで一册となしたものである。

そしてこの九人の中の四人までが犧牲者である。いひかへればその四人は日本プロレタリア文學のために最も多くの仕事をし力強き戰ひをなした同志である。これらの同志及びその家族をわれ〳〵はできるだけ救けねばならない。幸ひにこの出版はさういふ目的をも果してくれるので、われ〳〵の側からいへばこれは、第一にわれ〳〵同志の救護慰安のための出版となるのである。

讀者諸君は今迄あらゆる「有名なる文學者」の「文學」を愛讀することによつてそれらブルジョア文學家を富ませて來た。かれらの多くは著作の收入によつて土地を買ひ、家を建て、株主となり、蕩兒となつてゐる。

われ〳〵の同志は、われ〳〵の「文學」を作ることによつて、家と土地とあらゆる贅澤とを得る代りに、××を得るのである。

何故さういふ風に事情が異るか？ いふ迄もなく、われ〳〵の文學は階級の文學である。だから階級社會を揚棄する最後の階級であるプロレタリアートのためにしか、随つて正しい全社會のためにしか書かれないがゆゑに現在する支配階級に喜ばれないのは當然であらう。

で××はわれ〳〵には黃金の代りに石つぶてを、かれらには（一切のブルジョア的文學家にはつぶての代りに黃金を保證するのである。

しかし、われ〳〵の文學は××の石つぶてを浴び乍ら一歩一歩、或は十歩五十歩躍進しつゝ、プロレタリアートの側へ、すべての良心ある讀書子の側へと近づき、ひろがりつゝある。

かういふ時期に諸君はわれ〳〵のこの「プロレタリア文學集」を手にすることによつて、われわれを富ませる代りに、われ〳〵の困難な文學運動に加勢し、うばはれてゐるわれ〳〵の先進同志を援助することをさへしてくれるのだ。われ〳〵は亦われ〳〵の文學を通じて諸君にこの世の最も眞實なるものを語ることを以て酬いよう。

昭和六年一月

江口渙
貴司山治

都會双曲線
鐵窓の花

林房雄

都會双曲線

一

都會はお洒落だ。

身體の九分を眞黒にしておくのは平氣で、あとの一分を、たゞごて〳〵と飾りたてる。――だから都會は眞暗で、そして明るい。

暗い場所、それは都會の生産面である。明るい部分、それは都會の消費面である。

路を歩いて空を仰ぐ。――そこに見えるものは、もう大空の星ではない。苦く妖婦のひとみのやうに笑ふ大都會の首飾りである。ビルディングと大會館と廣告塔の夜光飾！

東京丸ノ内。十六世紀風に平和なお濠の水に、はげしい夜の光を投映してそびえたつてゐる帝國會館。その三階の大ホールで、今、ある大出版會社の創業十五周年を誇るための大祝賀會が開かれてゐる。

「金を積んだ驢馬の前には、人間が道を開く。

――といふローマの金言があるね。思ひださないかい。」

「黄金は、自由民を奴隷にし、奴隷を自由民にする。――これもローマの格言だつたらう。」

「一切がローマだ！」

「さうだ。ローマの貴族は、よく賤民共を集めて、今夜のやうに大宴會を開いた、と歴史にある。」

「すると、さしあたり僕達が、その賤民といふところか。」

「まあ、そんなところだね。なにしろ御馳走されて貴族の徳をたゝへてゐるのだから文句はいへないさ。」

メイン・テーブルに遠い、隅つこのテーブルの一つで、こんな會話が交されてゐる。

音樂團は今、ラ・パロマの曲を彈き終へたところである。曲の華やかさにも似ぬそれはもの悲しくたよりない餘韻であつた。トーキーに驅逐された映畫館からの落武者バンドでもあらうか……

食事は、デザートの一皿前まで進んでゐる。皿、ナイフのかち合ふ音、酒がまはり、腹の滿ちた客達の幸福な蜂のやうなうなり聲。その間を、白い上衣の給仕人が、皿を全身によろつて、氣品のない白鳥のやうに泳ぎまはる。

學者、思想家、藝術家、記者、――おそらく日本の最高文化水準を代表するであらう知識と文化の精華が三百名あまり、大ホールの飾燈の下で、赤く青くそれ〴〵の鼻頭を光らせながら、今夜の大饗宴に滿足しきつてゐた。

デザートに入ると、招待客達の祝賀演説が始まつた。それ〴〵の職業に恥ぢないだけの、博學と才智と適度の阿諛に滿ちた演説であつた。

「おい、水野、僕達はそろ〳〵失禮して、こゝらで奴隷から自由民にかへることにしようぢやないか。」

隅のテーブルの一つで、さつきの皮肉な會話の主の一人が、プディングの匙を口から離しながらさういつた。

「自由民にかへつて銀座へでも泳ぎ出さうといふのかい。よくない趣味だな、黒田。」

まだ若い頬の色と、まるく柔かなひとみの光をもつた水野誠一郎は、人のいゝ坊ちやんらしい笑顔でさういつた。彼は若手の評論家であるが　故郷に、地主である親父と、相續すべき

二十萬圓あまりの財産とを持つてゐる。彼の笑顔の非都會的なごや〳〵さは、おそらく後者の資格から生れるのであらう。

「どうせよくない趣味さ。第一こんな宴會にのこのこやつてくることからしてね。」淺黑く四角ばつた顏に、やゝ大きな髭を生やした黑田五郎は、細長く横に切れてきら〳〵光る眼に皮肉な微笑を含ませて、「だから出ようといつたのさ。今夜の君の財布はひどく重いとさつきいつたね。そいつを輕くするためにもこゝを出ることが必要だ。」

彼は水野の同鄕で、中學は三四年上、今は、あるあまり評判のよくない實業雜誌の記者。都會のはげしい空氣を全身の毛穴に吸つて、彼の言葉と行動は、野の狗のやうに俊敏で邪惡だ。

「ふゝ。」と水野は笑つて、「すると、今度は僕が金を積んだ驢馬の役割を演ずることになる。御免蒙るね、それだけは。」

「なに、今の世界では、金さへ積めば驢馬も駿馬になる――といつたら怒るか。」

その時、不揃な拍手がまはりのテーブルからパチ〳〵と起つて、高々と圓天井にはねかへつた。

二

それは、ある年老つた作家の、彼の小說のやうにだら〳〵ととりとめのないテーブル・スピーチの終つたことを示す退屈な拍手だつた。黑田は、ちよつと眼をあげただけで、すぐに言葉の先を續けた。

「なにしろ、君は、二十萬圓の……もつとあるかい……それだけの金の相續者ぢやないか、評論なんか書いて何年か經つて、結局こんな場所で、今の小說家のやうな退屈な演說をやることを考へるよりも、その金で大きく株でもやつて、逆に思想家や作家達を踊らしてやるのさ。……黃金は、奴隷を自由民にし、罪人を無罪にする。――黃金は、十四世紀以來神である。槍も楯も指環も寶冠も、友情も戀も名譽も、そして最後に道德も、黃金によつて製造される。これが商業社會の「黃金律」だ。現代の法則だ。そして人間の自由は、法則を驅使し支配するところから生ずる。おれは、この黃金の潮流に乘つて、奴隷から貴族に浮びあがるのだ。

それが、黑田の哲學であつた。

しかし、今は、たゞ重い財布を持つた水野を、銀座に一まづ誘ひだせばそれでいゝ。それが今夜の野心だ。

「出ようつたら、おい、もう澤山ぢやないか、こんなところ。」

「ところが黑田、ちよつと出られない事情がおれにはあるんだよ。」

水野がテーブルに頰杖をついてにやりと笑つてみせた。

「へえ、どうして。」

「さつき、僕、洗面室に立つたらう。――その時實は見るべからざるものを見て來たのさ。」

「なんだ、なにを見た。」

さう驚いた風に口ではいつたが、うれしさうに笑つてゐる水野の眼の色を、黑田はもう讀み取つてゐた。――はゝあ、女だな、この坊ちやん、女を見て來たな。

「なにを見たんだい、おい、おれも見たい。見せろ。」

「ぢや、ついて來い。」

水野は氣輕く立ち上つた。

二人は、扉を開けて廊下の厚い絨氈を踏んだ。絨氈は廊下の間接照明の中を五彩に延びて、廣い階段をエレベーターの昇降口まで續いてゐる。昇降口に向ひ合つて、小さな煙草の賣場があつた。賣場の扉は、今半ば閉ざされて、一人の

若い女が歸り支度をしてゐるところだつた。
「あれだ。」
と、水野が叫ぶやうにいつた。
「良子！」
黒田が立ち止つて眼をみはつた。
「さうだ、良子だ。たうとう發見したんだ、おれは。」
良子はかつて、ある酒場の小さな女王であつた。鳶色の皮膚と小さくくゝれた顎と、不思議な深さのある鋭い眼が、男達の動き易い心をひきつけて射すくめた。そして彼女は、一月ほど前に突然、彼女の玉座――銀座裏の酒場から姿を消した。横濱で見たといふ噂、場末の踊り場の籐のイスに坐つてゐたといふ噂、そのどれもが、本當でなかつた。男達は、やゝ血走つた眼で、彼女の行方を探した。そして失望した。――それを、多くの男の中でももつとも熱心な探求者の一人であつた水野が、今日發見したのである。喜ぶのも無理はなかつた。
「ひどく堅氣な場所に勤めてゐるぢやないか。これだから、わからなかつたのだよ。」
と、水野はいつた。
「堅氣だつてなんだつてかまふもんか。」と、黒田は例の調子でおつかぶせた。「こゝで見つけたのが百年目さ。かまはないから、とつつかまへてかつぎ出しちやはう。」
しかし、その間に良子は、近づいて來る二人の姿をみつけたらしく、賣場の扉を閉め、小さな包みをかゝへると、エレベーターの昇降口に小走りに近づいて行つた。

三

二人はすぐに追つかけた。昇降口で、彼女の肩をたゝいた。
「どこへ行く。――便所かい。」
黒田一流の汚く意地の惡い聞き方だつた。
「えゝ、さうよ。」しかし、良子はたじろがなかつた。冷たくにらみ返して、「あなたのことだから、きつと便所の中までも、平氣でついてくるんでせう。」
エレベーターが止つた。良子は肩をゆすつて黒田の手を振り切り、さつと乘り込んだ。
「おい、待て〳〵。」
二人も續いた。
エレベーターは上昇し始めた。
「あ！」
良子は小さく叫んだ。降りるのと間違へた。彼女もあわててゐた。
「はつはつ。」黒田は喜んで笑つた。「屋上便所といふやつか。こいつはいゝ。」
良子は脣をかんだまゝ默つてゐた。――その冷たい横顏に、臆病な視線を投げながら、水野は、はら〳〵してゐた。
「おれは不良少年ぢやないんだ。たゞ良子を本當に好きだと思つてゐるだけなんだ。黒田の尻馬に乘つて、こんな亂暴な眞似をしたのは惡かつた。見ろ、良子は怒つてゐる。」
五階――六階――七階。屋上庭は招待客達のためにまだ開かれてゐた。
籠が止ると良子はさつさと歩きだした。にやにや笑ひながら、黒田がおつかけた。水野もそれに續かざるを得なかつた。
屋上庭のまはりには自殺をふせぐための金網が張り渡されてゐた。如何にも都會らしい景物である。あらゆるところに、自殺の場所を求めてゐる都會人！――金網の向うには、お洒落な東京の夜がけば〳〵しく輝いてゐた。
良子は、その金網に額を押しつけるやうにして、コンクリートの欄干に頬杖をついた。追ひつめられて、彼女は自殺を考へてゐるのではなからうか？
水野はこは〴〵と近づいて、女の顏をのぞき

こむやうにした。

女の眼は、冷たく煙の色を照りかへしながら笑つてゐた。酒場にゐる時とちがつて、唇に紅の色はない。頬の白粉も落ちてゐる。アークの光を斜めにうけた顔が、紫色に透きとほつて。――水野はそれを美しいと思つた。

男の侮辱を全身に感じて、女は、しかし、青白く緊張してゐるのだつた。大聲で泣くかはりに、ぢつと脣をかんで、ニッと笑ふあの氣持だ。女に馴れぬ水野には、その表情の意味がすぐにはとれなかつた。

「どうして逃げたの。」

だから優しく水野はたづねた。

「ふゝ。」

女は鼻の先で笑つたやうであつた。が、答へようとはしなかつた。

「なんであんな堅氣の場所に勤める氣なんか起したのだい。」黒田はまたひやかした。「田舎から來た高等學校の生徒を、情人にもつたとでもいふわけかい。」

「うるさいわね。」良子は黒田を鋭くにらんだ。そして、水野の方を向いていつた。「煙草もつてるでせう。」

女の氣持がなほつたと思ひ、水野は安心したやうに笑つて、銀のシガレット・ケースをさしだした。爪の青い指に、彼女が一本を抜きとるのを待つて、マッチをつけてやつた。……街路の上のひつきりない交通の騒音が、彼女の紫色の煙を高く空中に散らした。

「あんたが、まるで自分をこの世で一番偉い惡黨のやうに考へてゐるのはをかしいわよ。」と彼女は黒田の方に突然向きなほつていつた。「あんたは、自分がめつたに出入しないところは、みんな堅氣の場所で、でないところは、みんな不良な場所だと思つてゐる。酒場よりもこの會館が、どうして堅氣だといへるの。こゝには、あんたの百倍もお金のある、そして百倍も不良な連中がやつてくる……」

四

「なるほどね。」黒田はまだからかひ半分の調子をやめなかつた。「ぢや、おれも早く百倍の金を持つて、百倍の不良になることにするかなあ。……その時には、どうだい、今晩のやうに逃げないかい。」

「今晩だつて逃げやしないわ。あたしは逃げるのは嫌ひさ。」

「これや素敵だ。」黒田は、大袈裟な身振りをした。「ぢや、すぐに三人で、これから出かけよう。」

「どこへ。」

「どこへでも。」

「なんのために。」

「うゝ、それや……」黒田はどもつた。「それやなにしろ、一ケ月間の捜索が、今晩やつと效を奏したんぢやないか。だからそのお祝なのさ。」

「ふん、金もないくせに。」

良子は指の間から青い煙をはいて、ちよつと肩をゆすつて見せた。

「それやあ、おれにはないさ。だがこの男が持つてゐる。」と、そばではら〱してゐる水野の肩をたゝきながら、「なにしろ近いうちに、親爺の財産を二十萬ばかり相續して、文士なんか廢業し、株を始めようといふんだからなあ。」

「馬鹿なことをいふのはよせ。」

しかし、良子の次の言葉は意外だつた。

「へえ、それやあ豪勢ね。ぢやゆくわよ、あたし。すぐ下に行つて、出る用意をなさい。そして出口で車を用意して待つてらつしやい。」

喜んで降りてゆく二人の男の後姿を、良子は、しかし、眉の間に險しい皺をよせて、ぢつとにらみつけてゐた。……

五分間の後。――會館の大玄關の厚い絨氈の上に、エナメルの靴の先を光らせて、水野がひとりで待つてゐた。

仕事着をぬぎ、化粧を直して、見ちがへるほど派手になつた良子が、エレベーターから出て來た。

「ひとり？――どうしたの、黒田さんは。」

「うん、席にかへつてテーブル・スピーチを始めたのさ。先に行つて出口で待つてをれ、といふのだ。」

「どんな演説してゐるの。」

「知らない。聞かなかつたから。」

「あの人のこつたから、こんな會館なんかつぶれてしまへ、などと強さうなことをいつてるかも知れないわね。いやな奴！」

「そして、今夜集まつた連中がみんな死んでしまつたら、日本の文化水準が何インチ下るだらうか、などとね。あれが癖だよ。」

「まあ、そんなところでせうね。」

良子はさつさと大玄關を出て、ちよつと左手をあげるやうにした。たまりに待つてゐた自動車の一臺が滑つて來た。さつさと乘り込んで、水野にいつた。

「早くお乘んなさいよ。」

「黒田を待たなきや。」

「二人で澤山ぢやないの。」

「でも……」

「いやなら、あんたもおよしなさい。人の演説のすむのをおとなしく待つてる女にあたしが見えて。」

ウインド・グラスを通して、良子の眼が針のやうに水野の頰を刺した。

「さうか、よし。」

ひとり選ばれたことの喜びと、それに男の虛勢も交つた勢ひよさで、水野は車に飛びこんだ。そしてどなつた。

「銀座へ！」

五

交叉點から見える新聞社の電氣時計が、午前一時をさした。――蒼ざめた鋪道と降ろされた鎧戸、東京はやうやく夜だ。

水野は、銀座の裏の、暗い酒場のボックスに、泥のやうにつぶれてゐた。

「おい、おうい！」

たれかに激しくゆすぶられて、眼を開けた。マドロスのやうに兩足をひろげて、これもふら〳〵と生醉ひの黒田が立つてゐた。

「やい、たうとう見つけたぞ。女はどうした。良子はどこへやつた。」

「うゝん……」

だらしないあくびを水野は答へに代へた。

「うゝんぢやない。無慮四時間、おれは探したんだ。」

「うゝん。」

水野はもう一度うなつて、あたりを見まはしたが、やがて氣がついて叫んだ。

「良子は？……」

「おや〳〵。」黒田は笑ひだした。「ぢや、今夜の三枚目は、おればかりぢやなかつたんだな。……おい、女給さん、この男の連れのお孃さんはどこへいつたい。」

「一時間ほど前にお歸りになりましたよ。」笑ひながら女給が近づいて來た。「でも、隨分御馳走樣でしたわ。とても濃厚なシーンだつたのよ。」

「ぢや、おれは一時間も寢たんだ。」

腕時計をのぞきながら水野がつぶやいた。黒田は、水野の横にどかりと坐つた。

「おい、ウヰスキーだ。女氣なしで飲みなほしと行かう。見事にふられた男二人がよ。」

「ふられたどころぢやないわよ。」と女給は惡戲

さうな唇をとがらせて、「なんだかとてもいゝらしいお約束を二人でしてたわ。あたしの家にいらつしやい、うん〳〵きつと行くよ、なあんて。……ね、さうだつたでせう、あなた。」

「ふゝ。」

ぽんと背中をひつぱたかれて、水野は、

と、細い眼をして笑つた。

「なあんだ。そんなにもう話が進んだのか。燒けるぜ。」

しかし、黒田には燒く氣はむろんなかつた女。――彼は、女とウヰスキーの間に本質的な區別を見ることを欲しない種類の男であつた。酒も戀も、神經の末端をちよつとくすぐる輕い昂奮劑にすぎない。

もつとも、良子には。――だが、それとても、人と爭つて眼に角をたてなければならないほどの強い氣持ではない。機會はいづれまはつて來よう。

それよりも今は、もつと重大な仕事がある。――水野の空しく抱いてゐる二十萬圓の金を、なんとかして、食つてやりたいものだ。

一切を黄金の尺度によつて評價せよ。アメリカ人は、ナイヤガラ瀑布の美觀を、率直にその發電能力の中に認めるといふ。「土一升金一升」――商業社會では大地でさへ、もはや人の母でもなければ神の家でもない。單なる投機と賣買の對象にすぎない。

「飲まう！」

黒田はウヰスキーの杯を高くあげた。

「飲まう！」

杯をつかんで、水野もふら〳〵と立ちあがつた。

と、その調子に、彼の上衣のポケオトから、白い小さな紙きれがひら〳〵床の上にまひ落ちるのを黒田は見た。

六

水野は氣づかずにふら〳〵と便所の方に歩いて行く。黒田はすばやく、紙きれを拾ひあげた。女の手で、地圖らしいものが書いてある。

「はゝあ。」

それをポケットにおしこんで、黒田はひとりうなづいた。

そこへ水野が歸つて來た。

「ね、おい、水野。君はほんとに、あの女にほれてるのかい。」

「うゝん。あいつはいゝ女だよ。」

水野は他愛がなかつた。

「ぢや、今晩これから行くのかい。」

「ちがふ、ちがふ。」あわててうち消して、「そんな仲ぢやないよ。おれは、あいつの力になつてやるのさ、力に！」

「パトロンか？――さすがに拔け目のない女だ。二十萬圓をちよつとにほはしたら、もう食ひつきやがつた。」

「ちがふつたら。あの女の前で、金なんかふりまはして見ろ、ひつぱたかれる。」

「ほゝ、それだけほれてゐれば澤山だ。――おい、女給、ウヰスキーだ。瓶ごともつてこい。」

今夜はつぶしてやるんだ、と黒田は心にきめた。つぶしておいて、良子のところへ乘りつける。

「女を探せ！」だ。――犯された犯罪の裏に女があるなら、これから犯罪を犯さうとするものは、まづ女を手にいれなければならぬ理窟だ。よろしい！

ニヤリと笑つて、黒田は、女給のもつて來たジョニイ・ウッーカアの瓶をつかんだ。

一度つぶれた男を、もう一度つぶすのは、わけなかつた。二十分と經たないうちに、水野はまた、ボックスの隅に、海老のやうに曲つてしまつた。

倒れた水野の内ポケットから、紙入を引きだして拂ひをすますと、黒田は自動車を命じた。車は夜を切つて走つた。街は斜めに曲つて飛んだ。

東京は寢卷を着てゐた。きたないしみだらけの表戸である。壽司の屋臺から、人絹の靴下とセーラー・パンツの一組が足をだしてゐた。パンクした圓タクの助手が、客と喧嘩をしてゐた。交番の前に醉つぱらひがつぶれてゐた。都會のだらしない寢相である。眺めながら黒田は、水野の財布からまた二三枚の札を抜きとつて、自分のポケットに押しこんだ。

「運轉手君、どこだい。」

「麹町の通りです。」

「ぢや、ストップ！――それからこの男は、麻布だ。支那公使館の裏の交番で水野と聞けば、わかる。寢てゐたら、かまはないからたゝき起して、……それでも駄目だつたら近所のホテルにでも放りこんでおいてくれ給へ。――おつと、これは車代。」

自動車のテール・ラ　プが街角に消えると、大きく一つ黒田は肩をゆすつた。

「さあ、これからはおれの舞臺だ。」

客欲しさうに、箱のシボレーが流して來た。勢ひよく、ステッキをあげた。

「どちらへ。」

「こゝだ。」

水野の上衣から落ちた地圖の紙きれを、そのまゝ彼は運轉臺に渡した。

七

良子は眠れなかつた。

酒には慣れて居るつもりであつたが、一人の男が倒れるまでにはかなり自分も杯の數を重ねねばならなかつた。酒場を出て、省線に搖られてゐる間は、まだ確かな足どりだつたが、家に歸つて床をつくつてしまふと、どつと一度に醉ひが出た。

四疊と六疊の汚れた二間。驛から二三町、植込と生垣の間の曲りくねつた小路の枝に、彼女の家は危くひつかゝつてゐた。そのみじめな鳥小屋の中に、彼女はたつたひとり暮してゐるのだ。

田舍から出て來たところは、たうてい、こんなところに、ひとりで住める彼女ではなかつた。それが都會の激浪を五年潛つた現在ではひとりの方がずつと氣樂だつた。都會は人間を孤獨にする。田舍の緩慢な生活を支配してゐるあの牧歌的な人と人との親密な紐が、都會の鐵槌の下では、粉々にくだけて飛ぶ。――これは、近代の科學が、色彩と生命に充ちた中世紀の自然界を、單純で非情な原子の世界に分解し去つた、その作用に似てゐる。

しかし、科學は、自然を原子と電子に粉碎し去つた後、やがてその廢墟の上に新しい力に滿ちた、新しい物質の世界を綜合しあげた。都會も、一度、古い人間の生活樣式を微塵にくだいた後に、新しい生活樣式と、新しい人間の型とを鍛へあげる。

田舍から都會に來たものが先づ襲はれるのは、あの骨をかむ望郷の心である。しかし、心の強い者は、勇しくこの惱みを押しきる。都會の激しい生活條件と戰ふことによつて、自らを強く鋭く鍛へあげる。新しい個性と、新しい能力をもつた獨立人が生れ出る。近代の誕生である。

良子も都會に鍛へられた女であつた。五年前の純眞で弱氣で、徒らに空想的な少女は、もう彼女の中で死んでしまつた。彼女は不羈である、奔放である。彼女は如何なる場合にも涙を流さない。泣く代りにぢつと脣をかむ。彼女は人間だ。――「女」ではない。

家のまはりは靜かであつた。遠く蜂のうなりのやうに、東京の寢息が聞える。夜の土を傳つてくる震動は、省線を走る終列車の音でもあらうか。その引いてゆく潮の音にも似た低音に乗つて、彼女は眠らうと努めて見た。が、眠れなかつた。

……枕元の夜光時計の針が、濃い暗の中で青白く午前一時をさしてゐる。

咽喉がいりつくやうに干いて來た。……水が欲しい。手探りで臺所の方に歩きだした。その時、

「ド、ドン、ドン――」

突然表戸が激しく鳴つた。

――はつとして、彼女は立ちすくんだ。

「今晩は、今晩は。」

男の聲だ。しかもあたりをはゞかるやうな！

耳をすました。また聞える。

「今晩は、――ゐませんか。」

聞きおぼえのない、太くかすれた男の濁聲。

水野？――ちがふ。

黒田？――それでもない。

本能的な恐怖、とでもいひたいものが、強く彼女の心臟をつかんだ。返事をしようと思つても、聲が出なかつた。

深夜の男。――そして男に對する數千年來の女の恐怖。心の奥深くかくれてゐた「女」が、良子の中に、今眼をさましたのだ。

八

都會の五年が、――轉々する職業の中の月日が、男達の前で極度に強くふるまふことの效果と快感を彼女に敎へた。そしてその敎理の示す方向を、今日まで彼女は、忠實に實踐して來た。人々は、彼女を、何ものにも、特に男性の前に微塵の恐怖を持たぬ近代の妖婦として取扱つた。

が、それは、都會の明るい燈火と、騎士的な習慣が支配してゐる場所の彼女に對してのみいへることにすぎなかつた。暗と孤獨の中で、一人の男に對する時、彼女の本能は、古い昔の女にかへつて、弱くもしぼんでふるへるのだ。

「ゐませんか。……ゐませんか。今晩は。」

扉は脅かすやうにまだ鳴りつゞけてゐる。

心當りの男の名前を急調に頭の中でくりひろげながら、良子は、追はれた鼠のやうに、臺所の障子のかげにうづくまつてゐた。

たれだらう？――

「チエッ、ゐやがらねえ！」

外の聲はあきらめたらしく、亂暴な調子でさうつぶやいて立ち去る樣子だつた。

「あゝ歸つた！」

ほつとして立ちあがらうとした時、裏口の方で、がちやり！――大きな音がした。

「あつ！」

扉の錠がねぢ切られたのである。

「たれ！――たれです！」

恐怖の底で、良子は叫んだ。自分でも驚いたほど、かん高く大きな聲であつた。叫んでおいて、なかば夢中で六疊の間に飛びこみ、パッと電燈を點けた。

「あ、驚いた。――やつぱりゐたのか！」

臺所の方で、案外に落着いた若い男の聲がした。

「たれです。名前をおつしやい。失禮な！」

「おれだ、おれだよ。良公。」

脊の高い黒い影がぬつと入つて來た。汚れた上衣とよれ〳〵のズボンの、一見勞働者風の青年であつた。短く坊主にかりこんだ頭に、ぺしやんこの鳥打帽が阿彌陀にのつかつて、……ひげだらけの顏の中から、鋭い眼が、しかし人懷つこく笑つてゐた。

「たれ？」

相手の親しげで、無害の態度にやつと安心して、良子は聲を落ちつけた。

「いやだなあ、忘れたのかい。おれだ、――啓太郎だ。」

「まあ、啓公！」

兩手をひろげて、良子は立ち上りさうにした。――同じ村から一しよに東京に出て來た啓太郎。それから、別れ〳〵の五年間を暮した啓公！

だが、その啓太郎が夜中に、しかも人の家の錠をねぢきつて！――と思ふと、良子のきかぬ氣の心にぐつとくるものがあつた。急にばたりと坐りなほして、良子はきつとなつていつた。

「あゝ、たしかに啓公だ。だがその啓公が、なんで今ごろあたしのところへやつて來たの。なんであたしの家の錠をねぢ切つたの！」

「うゝん、ゐないと思つたからさ。」

思ひがけなくきつい相手の調子に面食つて、啓太郎は頭をかいた。

九

「ゐないと思つたのなら、さつさと歸つたらいいぢやないか。あんたにあたしの家の錠まで破つて入つてくる權利があるとでもいふの。それとも、あんた、泥棒商賣でも始めたのかい。五年前にはいゝ子だつたがなあ。」

「……」

啓太郎は目をみはつた。頭に手を[illegible]げてぐいと帽子をつかむと、それを、兩手にきり〳〵と握りしめた。良子の顏を見つめるその眼がぎらぎらと燃えて、齒と齒の間で、厚い脣がぶるつと震へた。

いひすぎた！――と良子は思つた。だが、まだいくらか醉ひも殘つてゐた。それに、女としての本能的な復讐心が、こゝでも、激しく燃え立つて、男性の一人としての啓太郎に鋭く彼女をつきかゝらせるのであつた。

幼なじみの仲良しだが、五年振りに會つた同郷人だが、――だが、この男は、錠をねぢ切つて押入つて來た。女と思つて甘く見てゐるのだ。女とあなどつて馬鹿にして居るのだ！口惜しい。いゝ、しやくにさはる。良子は啓太郎の顏が、なつかしい「啓公」には見えなかつた。彼女は啓太郎の顏に、横暴な女性の壓制者としての男性一般の傲慢な顏を見たのだ。――それにさつきあんなにも、脅かされたこともしやくだつた。

「口惜しがつてるのかい。」と、良子はますます冷たく出る自分をおさへることが出來なかつた。「泥棒だといはれたくなかつたら、そんなところにぼかんと立つてゐずに、さつさとお歸りよ。そして明日、夜が明けてから、ちやんと表から入つてくるんだよ。さうすれや、まあ啓さん、よく來たのね、さういつて抱きついてもあげるんだ。……おや、まだ口惜しがつてるんだね。そんなにおつかない顏をして、あたしをなぐるとでもいふのかい。へん、どうせ裏口から錠をねぢ切つて入つて來た男だ。ぶんなぐられるくらゐこつちだつて覺悟してらあ！」

いけない、いけない、――と思ひながら、つい出る啖呵の口調だつた。そして、もつと惡いことには、酒がたしかに手傳つてゐる。……

しかし、啓太郎はなぐりはしなかつた。今にも飛びかゝりさうな激しい顏色を急に和げると、吐きだすやうにいつた。

「ぢや、歸らうよ。――だがいつとくがね。おらあ、泥棒にきたんでもなきや、物をもらひにきたんでもないんだ。ましてそこいらの紳士みたいに、お前の床にはひこむために來たのでもさら〳〵ねえんだ。變に氣をまはすこたあよしてもらはう。……おれあたゞ泊るところがなか

つたんだ。……もう忘れてるだらうが、半年ほど前、神田のけちなカフェーで、こゝにゐるからと紙に番地と地圖を書いてくれたのは、お前の方からだつたんだぜ。おれの方から敎へてくれと賴んだんぢやあなかつたんだ。おぼえてゐるか！」

「啓さん！――」

「ふん、何が啓さんだ。歸れといはれなくとも、こんな胸糞の惡い家は、こつちからまつぴらだ！」

良子がなにかいはうとした時、近くの小路で自動車の警笛が鳴つた。

啓太郎は、襲はれたやうにとび上つて、カーテンを押しわけて、外の暗をすかした。

「や、こつちに來やがる！」

彼はうなつた。そして振り返りざま、ぐいと良子をにらんだ。

「いやでも今夜はさやうならだ。あの自動車に乘つて來たのが、警察の旦那だらうが、それともお前の旦那だらうが、どつちにしろ己は逃げなきやならないんだ。ぢや、あばよ、お孃さん。――酒なんか飮みやがつて、己を泥棒だとぬかしたブルジョア娘！」

「お待ち。お待ちつたら、啓さん！」

啓太郎はさつと飛びだした。蒼白く昂奮して、良子がのぞきこんだ裏露路の闇には、彼の姿はもうなかつた。

そして、その代りに、――のそりと立つた男の姿。

自動車の客。――黑田である。

十

裏口に立ちはだかつたまゝ、啓太郎の走り去つた方向に、チラリと皮肉な視線をなげ、そして、

「やあ、これはいゝところにやつて來た！」

黑田らしいもののいひ方であつた。

良子は口惜しかつた。無上に腹が立つた。黑田に對して、水野に對して、啓太郎に對して、世のすべての男性に對して……。だから、ぴしりと思ひきり强く裏戸をとざした。――が、

「どつこい！」

黑田がその手をおさへた。そしてそのまゝ、のこ／＼とおしあがつて來た。

二人は、床の敷きつぱなしてある六疊の間に向ひ合つて坐つた。――女は險しく蒼ざめて、男は脣の隅でにや／＼と笑ひながら……

その沈默の底にある、はげしいエロティシズムを、男は身體中に感じた。――獸を追ひつめた狩獵者の殘酷な快感！

女は、しかし、叫びだしたかつた。追ひつめられた獸なら、獸らしく飛びかゝつて、相手の身體にきり／＼爪をたててやりたいあの氣持だ。黑田の厚い脣の上に油のやうにぎら／＼浮いてゐるものは、ひとり暮しの職業婦人が、みな賣春婦であつてくれたら、と祕かにのぞむ男性一般の、あの利己的な慾情だ。……

畜生奴！――

しかし、良子は口でさう叫ぶことはしなかつた。激しい感情が胸に燃ゆるとき、きまつて冷靜な態度に出るのが、彼女の不思議な癖であつた。

良子は、紙卷の一本をとりあげると、靜かな手つきでマッチをすつた。それを中指と藥指の間に美しくはさみ、細く斜めな煙を靑々とはいた。

「水。――水がほしいな。」

「……」

彼女の態度に押されてか、黑田はいくらかてれたらしかつた。水を、といひながら、苦しさうな風に、ネクタイをはづし、上衣と一しよにぽいとそれを机の上に投げた。その拍子に――あ

それはこれも、黒田らしい技巧だつたのかも知れないが――地圖を書いた例の紙きれが、ひらりと疊の上に舞ひ落ちた。ちらりと流し眼に見ただけで、良子は、しかし、眉さへ動かさなかつた。

「黒田さん、あんたは人間の眞面目さといふものを知つてて？――どんな人間にも……あたしのやうな女にも、眞面目さは心のどこかにあるものよ。その眞面目さをふみにじられた時人はどんな氣がするか、知つてゐて？」

「なあんだ、開きなほつた、開きなほつたね。」

「さう、開きなほつた。それがどうしたといふの。」と思ひきり激しい冷たさで、「お歸んなさい！　こゝはあたしのうちです！」

十一

ふん、そのくらゐのことあ覺悟してゐたらあ、――黒田は心で笑つた――今さつき、裏口から男を歸したばかりでゐて、よくそんな白々しいことがいへるものだ。

「へえ、それで、さつきの男も裏口からこつそり追ひかへされたといふわけかい。」

「勝手にあんたらしいことを想像してるがいゝ。さつきの人はね、あたしの……」

戀人さ！――といひきつてしまひたいこの場の氣持であつた。こんな奴がやつてくると知つてたら……いや、たとひ來ないときまつてゐても、あんなにして追ひかへすのではなかつた。啓さん、啓公、あたしは……あたしは……しばらく見ぬ間に、すつかり大人になつた啓太郎の男らしい姿と聲の調子が、今はつきりと、燃え上る火のやうな魅力をもつて、良子の胸を押して來た。――さうだ、あたしは啓太郎にほれた。今夜ほれた。ちがふ、……昔から……初めから、初めから……

この世の始まるその時から！

ほろりと涙が――珍しい涙が、左の側の頰つぺたを傳つて光つた。

「おや、こいつあ――」

「歸れ！　歸れつたら！――馬鹿！」

しかし黒田はどこまでも黒田であつた。

「ふゝ――僕でなくて、水野が來たんだつたら、まさか歸れとはいはないだらうね。」

「あ。――」身ぶるひが脊筋を走つた。どこまでも、この男は……良子は坐りなほした。「あの紙きれのことをあんたはいつてゐるのね。……ふん、だから、あんたらしい想像だといつたのさ。あれにはちやんとした理由があつたの。」

「つまり、パトロンになつてくれといつたからか。」

「おだまり！」

見る見る良子は蒼ざめた。

蒼ざめて良子は唇をかんだ。そして、血の出るやうな唇の痛みに、僅に自分を抑へることが出來た。

「怒つたのかい？」

「あんたなんかに腹を立てる女があつたら、それやよつぽど人のいゝ女だわ。ほゝ……」

「さうかい。それで安心した。」

「馬鹿！」

「馬鹿、はよかつたね。……するとなんかい、水野パトロン說は、僕の失言だといふわけなのだね。」

蛇め！　まだ探りを入れたがつてゐる。

「そんなに氣になるなら、地圖の由來も話してあげようよ。……あたしは、仕事らしい仕事がほしくてならなかつた。……酒場の醉つぱらひ達のお相手は、もう澤山。……とさう考へて帝國劇場の賣子にもなつて見たのだが、これも似たりよつたりの仕事で。だからその氣持を、今夜水野さんに話したら、あの人、だいぶ醉つてはゐたのだけれど、ひどく眞面目になつて、そ

れはもつともな考へだ、僕も早く文士のはしつくれみたいな仕事はよして、もつと仕事らしい仕事をやつて見たいと思つてゐる。幸ひ親爺の金が手に入つたし、近いうちに何か事業を始めるから、その時には、僕の祕書にでもなつて大いに助けてくれないか、といつてくれた。だから、あたしはあの地圖を書いて渡した。あたしでよろしかつたらどうぞ、とさういつて……」

「なるほどね！」

黑田は馬鹿に大袈裟にうなづいて見せた。

――この男はまだふざけてゐる、と良子は思つた。しかし黑田は決してふざけてゐるのではなかつた。水野に自ら進んで事業に手をだす意思のあることを、今の良子の言葉で、初めて知つて、占めた、おあつらへむきだ、と自分に感心した、その意味の「なるほど！」だつたのであつた。

十二

十八世紀の官學派は、「賤民を新しい利益に誘ふためには、鼻や耳をひつぱつてひきずりださなければならない。」と公言してゐたといふ。二十世紀の詭辯派である黑田も水野といふ理想派のお坊ちやんを、仕かけた罠のそばまでうまく引きだすためには、相當の勞力と詭計とが必要だらうと考へてゐた。それが、今の良子の言葉では、水野自らが進んで、罠の中に鼻をつつこまうとしてゐる！――なるほど、しめた！

かうなれば――こんな安煙草の臭ひのする女なんか問題でない。問題であるとしても、――實はこの女には、己もいくらかほれてゐるらしいのだが、しかし――Business is business！女はあとまはしだ。……眞面目な仕事が欲しい、などと新劇めいた臺詞まはしで、しばらく勝手な夢を見てゐるがよからう。

だが、己は計畫だ！　己は準備だ！

「何をひとりで感心してるの？」

相手が急にまじめになつたので良子も思はず調子を和らげてたづねた。

黑田はそれに答へて、ニヤリと笑つた。

「仕事のことを考へてゐるのだ。」

「仕事？……」

「仕事だ。今、君がいつた事業のことだ。水野の事業の協同者は實はおれなんだからね。……しかし、驚いた。おれに相談もせずに君を祕書に雇ふなんて。……けしからん。一つ、重役會議で反對意見をだすことにするかな。」

「……ほんと、それ？」

「ほんとだとも！」

「あぶない……」

「なにが？……ふゝ、何かあぶないもんか！三年待て、僕は、二十萬圓を三倍にして見せる。」と輕くひきとつて、黑田はさつと話頭を轉じた。「だが、今夜は、ほんとに水野は來なかつたのかい？」

これ以上不必要な會話を早くうちきるための、でたらめな問ひであつた。しかし良子は、それを眞にうけた。

「あら。――あんたは、水野さんを探しに來たの。」

「さうだとも。あいつ、銀座裏で、この地圖を殘したまゝ、どこかに消えてしまつたので……てつきりこゝだと思つてさ。」

「……さうだつたの。」

「ところが、水野はゐずに、君の戀人などがゐて……」

「………」

「ぢや、さよなら。水野がゐないとわかつたら、僕あ歸らうよ。」

黑田は立ちあがつた。

「さう。……だけどもう三時よ。よかつたら

とまつてらつしやい。あたしはかまはないから。……」
「なに、歸れる。――ぢや、失敬。」

十三

その翌朝、啓太郎はふら〳〵になつて、新宿の通りを歩いてゐた。

昨夜、良子の家をとびだしてから、一睡もせずに、歩き續けたのである。

「畜生！――ひでえ目にあはせやがつた！」

無上に腹がへつて、無上に眠かつた。――だが、ポケットには、十錢玉が二つあるきりだ。

割引電車が、朝の勞働者を滿載して、まだ寝ぼけて變に白つちやけてゐる街を走つて行つた。

「あゝ、おれも乘りてえな！」

だが、乘つても、行く工場はなかつた。一週間ほど前に、またくびになつて、「目下失業中」の啓太郎なのであつた。

失業！――人の心を細らせて、この上なく卑屈にする點で、失業に勝るものは、近代になからう。

「首を切る」と、言葉はたとへる。――だが、文字通りに、息の根をとめられた方が、職を奪はれて、のめ〳〵と生きながらへるよりいくらましかも知れない。奴隷根性から人間を救つてくれる一點だけでも、死は失業より人情的だ。

啓太郎は弱い男ではない。喧嘩なら二三人は平氣でひきうけるし、それに農民の呑氣な朗かさと、都會の工場勞働者の潑剌とした樂天性を適度に兼ね具へた、大柄で屈託のない氣質である。

だが、その誇らかな勇氣と自信も、工場にちやんと職をもつてゐる間だけのことで、一度「失業」に見舞はれて、街上にはふりだされると、いくら、元氣をだせだせと自分を叱つても、その勇氣と自信が見る見るしぼんで、消えてしまふ。

尤も、「合理化」時代の日本の勞働者の一人として、啓太郎にとつても、失業はあまり珍しい現象ではない。どんなにまじめにつとめてゐようと、一年に一度や二度は、ほとんど恆例的に、「會社の都合」で首を切られる。

そのたびごとの、あの賴りない絲の切れた風船玉氣分！

だが、この氣分だけには、いくら馴れようと思つても、馴れることが出來ない。うくわつに馴れたら、そのまゝ腹がへつて死んでしまふし、……

そして、これは別の話になるが、をかしなことには、啓太郎が良子のことを思ひ出すのは、特にこの失業の時が多いのであつた。

同じ村から出て來た二人。――といつてもむろん、しめし合せて驅落といふやうな色つぽい理由からでなく、瘠せてゆく農村の必然が、小作人の娘と息子を、ちやうど同じ日と時に村から都會に追ひだしたのにすぎないのであつて、……だから二人は、東京につくと同時にそれ〳〵の暮しの方法を求めて、職業から職業を轉々と、はなれ〳〵に暮して來た。それで、自然、ひごろは、とりまぎれて忘れてゐるのであるが、失業して仲間にはなれ、ぽつんと街の軒下に立たせられると、故郷の空氣のにほひと一しよに、良子のことを、しみ〴〵思ひだすのである。

「あいつ、どうしてるかなあ！」

まるで戀人でもあるかのやうに、思ひだす。

むろん、景氣がよくて、いくらか懷の暖かい時にも、まるで思ひださないといふわけではない。けれども、そんな時には、正直に啓太郎には、良子の思ひ出はなんだか土臭い。村の藁屋根の臭ひがして、……つまり都會の女の方

がいかい〳〵と派手で美しかつた。
それが、ちやうど半年ほど前のことである。全く偶然にとびこんだ神田の小さなカフェーで、見ちがへるやうに派手に美しくなつた良子に、啓太郎はぱつたり出會つた。

十四

良子は白いエプロンをかけてゐた。化粧のせゐだけではなく、ほゝに明るく血の色がとけて、白くひろがつた額には、くるりと氣どつた都會風の捲毛さへ垂れてゐた。

それに、言葉の調子から、身のこなしまで、溌剌と都會じみて、……むかしの藁屋根と溝川のにほひはどこにもなかつた。

「まるで毛蟲が蝶々になつたやうだぞ！――なるほど、女は化物だ。」

わけもなく啓太郎は感心してしまつた。だから、こゝにゐるのよ、遊びにいらつしやい、とバットの空箱に番地を書いてもらつた時には、ほんとにぽつと赤くなつた。

「あゝ、きつと行くぜ。今度の休みになあ。」

「えゝ、晝間ならゐてよ。待つてるからきつとね。」

ところが、次の工場の公休日を、啓太郎は、留置場の中で暮してしまつた。會社主催の春の慰安會で、仲間としめし合せて、ひごろから蟲のすかない職長をひつぱたいたのが、たゝつたのだ。

一週間ほどして出て來て、例のカフェーに行つてみたが、良子はもうそこにはゐなかつた。どこに行つたのか知らぬ、といふカフェーの女主人の、そつけない返事であつた。

すつかり、良子を見なほしてしまつた啓太郎は、もう諳記してしまつてゐる番地をたどつて、訪ねてゆかう、とたび〳〵思ひはしたのだつたが、たうとうその折がなくなつて、半年たつた。

そして半年目にまた失業。――失業して三日目に、例のふしぎな郷愁におそはれて、たうとうたまらなくなり、探し探して、十二時過ぎといふ變な時刻に、尋ね當てたのだが、さて尋ね當ててみるとあの有樣であつた。

あの時、自動車が來なかつたら、畜生、ひつぱたいてやるんだつたが、……いや、自動車が來たつてかまやしなかつた。乘つて來た奴も一しよに、ぐわんとやつてやればそれでさつぱりしたんだが、惜しいことをしちやつた。

これも、つまり失業者の弱氣だな、いけねえいけねえ。――ズボンのポケットの十錢玉を、指の先でこち〳〵はじきながら、啓太郎はいまいましさうに首を振つた。

それとも、やつぱりおれは――と先を考へた時に、啓太郎はちよつと赤くなつた。――おれは、あいつにほれてるのかもしれないぞ。あんな芝居の臺詞みたいな强がりを女の前でいふなんて、どうも怪しい。

「さういへば、おれがとびだした時、後から大きな聲で呼んでゐたつけ。」

遊廓からの朝歸りらしい客を積みこんだ圓タクが、これも寢ぼけた警笛を鳴らして、啓太郎の腰をかすらんばかりに、よろめいて行つた。

啓太郎は、もう一度首をふつた。そして自分の頭をこつんとたゝいた。

「うゝ、女のことなんかどうでもいゝや、あいつをブルジョアの食物にしておくのはちよつと惜しい氣もするが、……まあいゝ。おれあ、何はさておき、これから食つて寢なきやならねえんだ！」

さう考への方向を變へてしまふと、啓太郎は、もう若い勞働者らしく、さば〳〵と屈託がなかつた。

「だが、一體どこへ行つたものか。――どつか

のいんちき工場にもぐりこむまでの足だまりだが、…おれはそれを、良子の奴に賴みこむつもりだつたのに。――畜生奴！

と、ふと、立ち止つた眼の前に、大きな檜の看板がぶら下つてゐた。辯護士某の「法律事務所」といふ筆太の文字であつた。

「あゝ、有村辯護士のところへ行つて見よう。――こいつあ、いゝ！」

有村辯護士は、自由法曹團の若手で、いつか工場で爭議のあつた時、世話になつて、その折、いつでもやつて來給へ、と名刺をくれたことがある。それを看板から啓太郎は思ひだした。

「事務所は丸ノ内だつたな。よし、ゆかう！こんな時には、何といつても男の方がずつと賴りにならあ。」

まだ會ひもしないうちに、啓太郎は勝手にひとりで、賴りになるときめてしまつた。

十五

丸ノ内、共榮ビルディング。――

名前だけは一人前だが、どうやら假建築時代の遺物だらうと思はれるがた／＼の木造。…歩くと床が鳴り、廊下の薄暗に、眞黒なほこりが立つ。

そのビルディングの、泥靴にすれて、刷毛のやうに毛を立ててゐる暗い階段を、黑田は登つて行つた。

登りながら、腕時計を見た。三時に十分前。

――少し早すぎたかな。

上から給仕らしい少年が郵便物をもつて降りて來た。

「あゝ君々、大賀鑛業會社てのはどこだい？」

「三階の十二號――」無愛想にさう答へて、少年は蝙蝠のやうに階下の薄暗に消えようとしたが、思ひだしたらしくふりかへつて、「だが、行つても閉つてますぞ。…あれや、このビルディングの開かずの部屋ですからね。」

「いや、ありがたう。」

その開かずの部屋が今日から開くのだ。――

都會の屋根裏にすむ兇猛な大蜘蛛が、はひだす時がいよ／＼來たのだ。…美しい翅と軟かな肉とをもつた蟬が一匹、今飛びこんで來たばかりのところぢやないか！

三階の十二號室――

扉の前に立つて、こつ／＼とたゝいたが、果して中からは返事がなかつた。「大賀鑛業會社」と金に黑地の名標には、青いさびさへ浮いてゐる。…

「やつぱり早すぎた。――仕方がない、待つか。」

大賀鑛業會社は、資本金一千萬圓と稱してゐる。大戰中の氣狂ひ景氣に乘じて、浮び上つた典型的な泡沫會社の一つで、創立のそも／＼の初めから、登記料を高利貸から仰いだり、發起人もきまらないうちに株金の徵收をやつたり、集まつたその金の、半分は、創立委員の遊興の料に、半分は、人を食つた誇大な廣告の費用に、すつかり飛ばしてしまつたり、…だから、最初は、夕張、空知、磐城等の地方に、合せて三百萬坪あまりの試掘坑をもつてゐたのであるが、たちまちそれも抵當流れになつて、ある大財閥の手に移つてしまつた。殘つてゐるのが、北海道に三十萬坪あまり、磐城に二十萬坪あまりの小鑛區だが、それも現在採掘してゐるわけではなく、廢坑同樣の炭山に、赤錆びた機械と二人づつの番人が、月々百圓に足りぬ仕送りをうけながら放置されてゐる。馬鹿を見たのは、小さな株主連で、そのために、一時は、株主側から創立無效の訴訟を提起されかねないところまで進んだのであるが、その難局を、社長大賀とその腹心共の辣腕が、見事に押しきつた。だから、疑獄事件として新聞面を賑はすこともな

く、大賀鑛業會社は十年後の今日、堂々と存在し續けてゐるのである。

もつとも、株券の現在の賣値は五十錢そこそこ。――かつての一流ビルディングから、事務所も、三流の共榮ビルの三階のすみつこにまで都落ちした有様だが、しかし、たとひ名義だけにしろ、會社を會社として殘しておくのには、社長大賀以下、ちやんとした魂膽があつた。

と、いふ理由は――

十六

と、いふ理由は――おそらく現在の社會組織そのものの中にある。

社會が健康で潑剌としてゐるならば、狡猾な金貸だとか怠惰な利札切りだとか、貪慾ないかさま師などの寄生物は決して存在を許さるべきではない。――それが存在するのは、彼等が餌食とするやうな無力で餘分な物質が社會に存在するからだ、と、思想家は指摘してゐる。

無統制な經濟と、血緣を基礎とする不合理な相續法。――だから經濟的にまるで無經驗で無能力な息子や甥の手に、親父や伯父の莫大な財産がころげこみ、それが見事、いかさま師の手にかゝつて、無茶苦茶にされる、といふやうな事件も、ざらに起りかねない。

それでなくとも人々は金に餓ゑてゐる、金にかわいてゐる。メチールと知りながらも、アルコールなるが故にとびつく禁酒國の醉つぱらひのやうに、いかさままで危げだと思つても、何かの機會に誇大な好餌を眼の前にぶらさげられると、ついとびついて、自らみじめな破滅を導く。

株が三十錢だらうと、基礎財産のほとんど全部が人手に渡つてゐようと、僅かに殘つた鑛山が廢坑同様なものであらうと、兎に角會社の名義だけ殘して、墓場の吸血魔のやうに、安ビルディングの暗い一室で氣永に待つてをれば、やがて金の亡者が、墓掘人を先導に、何時か運ばれて來ないと限らないのだ。

そこに、大賀鑛業會社のやうな朦朧企業團の存在の基礎がある。

黒田の腕時計は漸く三時をまはつた。――階段に足音がして、薄暗の中から、やゝ猫脊のずんぐりと赭ら顔の、磨きのかゝつた藥罐のやうな顔をした男があがつて來た。

「やあ。待たせたね。」

大賀新平であつた。

カチ／＼と鍵をまはして、彼はなれた手つきで「開かずの扉」を開けた。型の如く綠色の布を張つた衝立と、壁の上の圖表と、中味のまばらな戸棚と、五六脚の椅子と――二人はがらんとした「事務所」の、空つぽな卓をはさんで坐つた。

「ちよつと耳寄りな話をもつて來たのだが――」

「といふと？」

「安く見積つて、ちよいと二十萬圓ばかりの……」

「待つた、待つた。」大賀は、あわてて黒田の口に、手でふたをするやうな大袈裟な手つきをした。「君からわざ／＼の呼びだしだから、内容はどうせそんなものだらうとだいたい見當はつけて來たがね。……ところで、こゝは相談の場所でない。」

「といふと？」

今度は黒田が訊いた。大賀は聲をひそめた。

「氣がきかないな、――こゝは會社の事務室だぜ。事務室は事務の場所で、祕密を要する謀事をめぐらす場所ではない。……どうせ、いかさまビルディングのことだ。どんな猛獸が、隣の部屋に巣くつてゐるかわかつたものではない。そら、ちよつとのぞいて見給へ。この事務所の

眞向ひは辯護士の事務所だ。最近引越して來たのだが、なんの辯護士だかわかつたものぢやない。隣の興信所にしろ、その向うの雜誌社にしろ、あぶないものだ。」

「そのもつとも尤なるものが大賀鑛業會社か。」

「ふゝ。——といふことにしておいて、出かけることにしようかな。どれ……」

「よからう。」

二人は、身支度をして廊下に出た。と、ちやうどその時、階段の向う側の、「有村法律事務所」といふ看板のかゝつたすりガラスの扉がパンと開いて、中からダブ／＼のズボンをはいた脊の高い青年が出て來た。

「おや？——」

黒田は、思はず心で叫んで足をとめた。

十七

「どこかで見たやうな……」

黒田は、その青年の額を見て、ふと思つた。

そのはずだ。——青年は、啓太郎であつた。つい二三日前のあの夜、——良子の家を襲つた夜、裏背戸の暗で、肩もふれんばかりにすれちがつた……。しかし、見たやうな、と思つただけで、それがたれだか黒田には思ひだせなかつた。

啓太郎も、ちよつと首をかしげた様子だつたが、これも別にそれとは氣がつかなかつたらしく、鋭い眼で迂散臭い二人の人間をちよつと横ににらんだまゝ、さつさと階段をおりて行つた。

「どうかしたのかね？」

大賀が階段の途中からふりかへつた。

「いや。」

たれだか思ひだせないまゝに、さう答へて、黒田も續いて階段をおりた。

十分間の後、二人の「企業家」は築地の一流の待合の、暗い祕密に滿ちた廊下を歩いてゐた。

待合——それは不思議な制度である。常識は、それを簡易なホテルだと解釋する。しかしそれは決して單なるホテルではない。今一つの常識は、それを淫逸な遊蕩の場所と考へてゐる。しかし、それは單なる遊蕩の場所ではない。それは近代の企業と政治の必要が生んだ神祕な密室だ。

資本家階級の企業とその政治は、すべて祕密主義を原則とする、たくみな民衆の僞瞞を必須條件とする二重主義の上に立つ。この資本家の原則が、日本に發達させた東洋的な密室、——それが待合である。

そして、城中の密室が、封建期の支配階級の專用であつたやうに、待合もまた現代の支配階級の專用である。少くとも待合を、——二流三流は知らず、少くとも一流の待合を、その本來の目的に活用し得るものは、支配階級とその友人だけだ。

一切のなれ合ひ、一切の買收、一切の妥協、一切の祕密を要する、道德の衣の彼方の遊蕩、——官廳と事務所の金看板の表に、描き現すことの出來ない暗い地獄繪卷は、すべて待合の奧まつた一室で展開する。

だから今、二人の歩いてゐる磨きのかゝつた長い廊下は、そのまゝ黄金魔神の玉座に通じるともいへるのだ。

「さて、商談にうつるとしようか。」褞袍にくつろぎ、女中をひきさがらせて、大賀は杯を取りあげた。「が、その前にまづ一杯。」

下の帳場では、女將が、卓上の受話器と話してゐる。

「……えゝ、あたしよ。どうも昨晩は……あれからどうしました？……無事にお家へ……ほゝ、どうだか、ちやんと證據はあがつてゐ

ますからね。……はあ〳〵……すぐいらつしやる？……二時間くらゐして……田舎からの大事なお客様、うんと金があつてあなたのためになる人……ほゝ、ぢや、せい〴〵、いゝお部屋をとつてお待ちしてゐます。で、藝者衆は？……はい〳〵、はい、承知しました。」

　女將が受話器を置くと、そばで油をうつてゐた若い藝者の一人がたづねた。

「お母さん。――さつきの松の間のお客、あれ大さんぢやなくて？」

「あゝ、大賀さんだよ。どうかしたかい。」

「ずゐぶん久しぶりね、あの人。」

「さうだよ、全く半年ぶり。……きつと、またひと仕事目論まうといふんだよ。それにちがひないよ。いゝかもでもつかまへてね。……なにしろ、景氣のいゝ時のあの人の氣前のいゝ遊びぶりつたらないんだから……いつまでもくすぶらせては惜しい。もう一度浮びあがらせてあげたいものだね。」

「すると、こつちの御商賣も繁昌。――おごつてよ。母さん！」

十八

　麻布の水野の家に、ぽつかりと――少くとも、外見だけはぽつかりと、黒田が姿を現した。

　水野の家は、彼が大學にゐる頃、國の父が建てゝくれた家で、建坪は小さいが、庭の廣々とした植込などに手の凝つた、美しい邸宅であつた。――彼はそこに老つた女中と二人きりで暮してゐる。

「やあ、勉強かい？」

　水野は書齋で、厚ぼつたい洋書をひろげてゐた。

「やあ……」不遠慮にづか〳〵とあがつて來た黒田を見ると、水野は本を片づけた。「この前は失敬したな、すつかり醉つぱらつて。」

「いやあ……あの晩は全く御馳走さま。」

　思はせぶりな調子を明かにひゞかせて、黒田は高く笑つて見せた。

「御馳走さま？……何かやつたかしら、僕？……」

　相手はもう、黒田の仕かけに乘つて來た。――あのくらゐ醉つてをれば何をいつたつておぼえてはしない、といふことを、黒田はよく知つてゐた。

「だつて、君はポケットからこれを……」と良子の家の地圖を書いてある例の紙きれをとりだして、「これを落したまゝ、どこかへ消えてなくなつたらう。……で、てつきりそこだと思つて、苦勞して出かけたさ。ところが、そこにも君はゐないぢやないか。……僕はあの女に散々油を絞られて……水野さんにこの地圖をさしあげたのは、あんたの解釋するやうなそんな意味ぢやない！……どんな意味なのかこつちには一向わからんのだが、とにかく、ひどい目に會つたよ、あの晩は！」

「さうかなあ。」水野は首を振つた。「まるで覺えてない。朝、眼がさめたら、自分の家に寢てゐたので、まあ〳〵よかつたと思つた次第だが、……しかし、ほんとに君、良子の家に行つたのかい。」

「ふゝ、氣にかけてるね。安心しろよ。たゞ行つただけさ。とまつては歸らなかつた。……」

と、これだけはほんとのことであつた。大事の前の小事だ、大切な餌を今傷物にしては、と思つて、あの晩は泊らずに黒田は歸つたのだつた。

「しかし、良子つて、なか〳〵いゝ女だな。きかぬ氣な一面、いやに、まじめで、しをらしいところがあるし、……あれや珍しい女だよ、君。」

「ほめるね……。案外もう、仕事をすませてゐ

るんぢやないのかい？」
はゝあ、氣にかけてゐるな。それでこそよし、と黒田は心で喜んだ。
「馬鹿な！……水野さんといふ方がちやんとついてゐるのに、どうして……」
「冗談！」
いひながら、しかし、水野はぽつと赤くなつた。
「いや、それはそれとして……」巧みに、黒田は話頭を轉じた。「今日は、全くまじめな相談をもつて來たのだが。」
「………？」
「といふのは、ちよつと變つたはなしなのだがね。……」と冒頭して、黒田は切りだした。「僕のちよつと關係してゐる會社に、大賀礦業會社といふのがあるんだが。その重役の一人が、最近ある事情で、身をひくやうになつたため、會社の基礎炭坑の一つが、休業のやむなきに至つた。百二十人ばかりの坑夫を使つてゐるちよつとした鑛山で、それが休業することは、むろん會社の損害だが、それのみならず、百二十人の坑夫と、その家族四五百人の、いはゞ生命にかゝはる問題なのだ。」
「それで僕に出資をたのむとでもいふのかい。」
と水野は先手をうつた。「僕は人道主義者ぢやないよ。」
「氣が早いな、どうも。たれもそんなこといやしないぢやないか。お終ひまで聞けよ。」黒田は、しやあ〳〵として、先を續けた。「君がそんなに警戒するんだつたら、委しい話はよすがね。」
「ついでにみんなよしてくれろよ。そんな話は、僕には不向きなんだ。」
これは話がちがふぞ――と黒田は思つた。

十九

しかし、黒田はひるまなかつた。商業社會の道德は、相手の感情を無視した一筋の頑張りである。耳のはしと鼻の頭を堅くはさんで、一途にぐい〳〵引張ることだ。
「まあいゝから聞けよ。元來、炭坑業といふものはね、最近の金融恐慌の影響を受けることもつとも少かつたといふ例を見てもわかる、堅實な産業なんだ。」黒田は平氣で出鱈目をまぜた。「むろん、世界戰爭の頃ほどの氣狂景氣はないさ。なにしろあの頃は、黒い色をしてゐたら、石つころにも羽が生えたのだからね。……しかし、そのうちに戰爭が起らないと限らぬし。」
「僕は戰爭は嫌ひだ。」
「ぢや、戰爭が起らないとしてもさ、利潤の率が確かな、投資甲斐のある産業なのだ。しかも、百二十人くらゐの鑛山だつたら、經常費月二萬圓くらゐで樂に經營できる。坑夫一人が、日に二トンから三トン掘るとして、平均單價を十三圓とみれば……少くふんで七八萬圓は月々入つてくる。」
「をかしな男だな。さつきからあれほど、人道主義者でも、利潤狂でも、僕はないのだ、といつてゐるぢやないか。」
「だから、お終ひまで聞け、とおれはいつてゐるのさ。この前の晩も話したとほり、君はいつまでも評論家のはしつくれでゐる男ぢやないんだ。それであつてはならないんだ。幸ひ親爺の金を手にいれたのを機會に、新しい、視野の廣い生活を振り出す義務が、いや權利があるんだ。その第一着手として、僕はこの安全な炭坑會社の重役の椅子を君に推薦しようと思つてゐるのだ。金をまうけること、それはむろん、君の目的でなくつてもいゝ。しかし、君は、新しい生活をその椅子の上から振りだすことが出來るのだ。もし、君が好めば、取締役の一人として、その鑛山に出張してもいゝ。そして坑長

と坑夫を指揮して、君の好きな間だけ、半年が一年でもいゝ、振ひたいだけの腕をふるつてみる。何よりもまづ必要なのは經驗だぜ。その貴重な經驗を、もつとも安全に積むことの出來る、いはゞ最適な練習場を、君に提供しようといふのだ。それがどうしていけないんだ。」

「むう……」

いつの間にか水野は腕を組んでゐた。

「こんな話がある。君の人道主義といふ言葉で思ひだしたんだがね、例の有島武郎、あの人が七十萬圓だかの財産を何年間か、放つておいたら、いつの間にかそれが百萬圓に殖えてゐた。驚いて彼は友人の經濟學者に聞きに行つた。これは一體どうした譯でせう、とね。――これは笑ひ話だ。しかし君の財産も、放つておいても殖えるだけは殖えるんだぜ。それが嫌だつたら、有島氏にならつて、全部小作人にでも返還してしまふがいゝ。しかし君は、そんな甘い人道主義者ではない。……だから、僕は思ふのさ、一つ投げだしたつもりで、大賀鑛業會社の重役の椅子の一つに坐り、そこから、これまで君の前に開かなかつた人生の祕密の扉の中に、大膽に足を踏みいれてみる。……そら、いつかもいつた、黄金を積んだ驢馬の前には、人間が道を開く、まして君は驢馬ではない。……そして僕は、君のうちの駿馬をならすための、もつとも安全なグラウンドを提供しようといつてゐるんぢやないか。それがどうして惡い。」

「むう、しかし……」

「しかしぢやないよ。」

「いや、なるほど、君のいふ意味はわかつた。…正直なところ、僕は、今の生活を變へることを欲してゐる。一人前の冒險心も持つてゐる。學校からすぐに書齋の中に、といふやうな現在の有様では我ながら心細いからね。……だが君への答へは、暫く待つてくれるだらうな。」

「いゝとも――。僕はたゞ、君に、かういふ仕事もあるといふことを知らせに來た、それだけなのだ。會社の勸誘員ぢやない。」

それ見ろ、やつぱり色氣たつぷりだ。――黒田の黒い心臟は眞赤な舌をぺろりとだした。しかしうはべはどこまでも、眞劍で親切らしい調子であつた。

二十

黒田は水野の家の歸りをそのまゝ帝國會館にまはつた。

地階でエレヴェーターを待つたが、やつて來ない。

「故障かな。」

氣輕に合點して、階段をはね上つた。

四階大ホール廊下、煙草賣場の箱に、良子は檻の中のペルシャ猫のやうに、眼を光らせて坐つてゐた。

「やあ、今日は！」

しかし良子はそつけなかつた。

「何にいたしませう。――バット？」

「ウエストミンスターの方がいゝな。」

黒田も負けてゐなかつた。

「いゝ景氣なのね。――空株もあたつたの。」

「株とはちよつとちがふね。――今日からいよいよ鑛業會社の高級社員さ。そして……」

わざと思はせぶりに言葉を切り、相手の顔をのぞきこむやうにして、ニヤリと笑つて見せた。

「そして？……」

良子はついつりこまれた。

「……水野がいよ／＼乗りだして、僕等の會社の重役の椅子に坐ることになつた。」

「まあ！」

「だから僕は、會社を代表して、君を水野の祕書にむかへに來た――といふつまりわけなのさ。」

「ほんと、それ？」
「ほんとだとも、ウエストミンスターの金口にかけて！」
「ウエストミンスターの煙にかけてぢやないの？　あんたのことだ、煙草の煙みたいにあてになつたもんぢやない。」
「ふん。――女だな。相變らず疑り深い。」
高い窓に夕暮が落ち始めてゐた。頭の上で、パッと電燈がついた。
「黒田さん！」
急に改まつた調子で良子がいつた。
「なんだい。」
「あんたは、水野さんを食つてしまふつもりぢやない？」
鋭い眼の光りであつた。ギクリと來たが、
「馬鹿な！」
と、こともなげに笑つてのけた。
「で、どうだい、君はいつでもこゝをやめて僕の會社に來てくれるね。」
「考へさせていたゞきますわ。」
良子は手をのばしてウエストミンスターの青い箱を黒田の前におき、七十錢いたゞきます、といつた。
「ほう、手きびしいご挨拶だな。」
退け時の勤人達が二三人、良子の箱で煙草を買つて、追ひだされる小鳥のやうに階段を降りて行つた。――その中に交つて色の明るい事務員風の上衣に、やゝ氣取つたネクタイを結び、額に大きな捲毛をたらした近代娘が一人、良子の箱に近づいてくると、心もち斜視の瞳を魅力的にチラリと光らせ、
「良ちやん、例のところで待つてるわ。」
さういひすてて、これもさつさと階段を降りて行つた。
「なんだい、あれ。」
「お友達よ。」
「へえ、モガだな。――例の所でどこだい？」
「氣にかゝる？　今晩二人で踊りに行くの。」
「ほう、ダンスにかい。」
「えゝさうよ。――」
當然さうに、さうよと答へて、良子はさつさと歸り支度を始めた。

二十一

「逃がしてなるものか。この女を逃がすことは、水野を逃がすことだ。――世話のやける金庫の錠前奴！」
心の中でつぶやきながら、黒田はエレベーターの入口でぢつと待つてゐた。
「なにを待つてゐるの。」
着物を着換へた良子が、化粧室から出て來た。
「エレベーターさ。」
「エレベーターはストライキよ！」
まるで自分がストライキをやつてゐるかのやうに勢ひよく叫んで、良子はさつさと階段を降りて行つた。――彼女はストライキのもつ意義といふやうなものについて、はつきりとした知識を持つてゐる女ではなかつた。しかし、自分の眼の前で、必ず動くものと思はれてゐたエレベーターが、見事にぴたりと二日間も止つて動かないことが、なにかしら痛快でならなかつた。市電が止つたのなら、彼女も小市民らしく、「市民の公益」を引き合ひにだしてなにか不平をならべたかもしれない。が、四階の階段ぐらゐは歩くのにたいして骨が折れぬ。……
「おい、待てといつたら。」
三階で、黒田は良子に追ひついた。
「僕は、會社を代表して、君を水野の秘書に雇ふことの交渉に來たのだぜ。わからない人だなあ。」
「おことわりするわ？――あたし堅氣な職業

なんか大嫌ひ!」
……堅氣な職業で身を立てようなんて考へは、さつぱり捨てた。——この會館に來て一月と經たないうちに、どこからかぎだしたのか、會館中の男達が、彼女の前身を知つてしまつて、わい／＼と女給扱ひだ。おかげで煙草はよく賣れて、マネージャーはほく／＼だけれど、それが彼女になんでうれしからう。男達がそんなに堅氣の女が嫌ひなのなら、堅氣でない女になつてやる!

良子の氣持のこの變化は、しかし、黒田にはわからなかつた。たとひ、わかつたとしても相手の氣持なんか、彼に何の關りがあらう。

「ほう、えらい元氣だね。——この前の晩とはちと話がちがふやうだが。」

退社時刻の人の流れに乘りながら、二人はいつの間にか地階まで來た。

入口に近い會館事務所の前に、人の山が出來てゐた。中からはげしくのゝしり合ふ男の聲がひゞいて來た。

「なんだ、なんだ。」

「泥棒か?……」

「エレベーターの連中が、交渉に來てるんだよ。……」

人波を押しわけて、良子も事務所の中をのぞいて見た。そして、思はず、あつ! と叫んだ。——テーブルをはさんで、事務所の者とはげしく口論してゐる青年の横顔が啓太郎だ!

有村辯護士のもとに半書生半食客の形でころがりこんだ啓太郎は、辯護士の代理として、今エレベーター爭議の交渉に來たのである。

「なるほど。つまり、事務所の奴をうまくとつちめればそれでいゝんですな。ようし、やつて見ませう。」

持前ののんきな無鐵砲さで、安くひきうけて、出かけて來たものの、爭議の交渉といふやうな駈引のいる仕事には、まだなれぬ啓太郎だ。慰勞會で職長をひつぱたいたやうな調子には行かず、つい激しい口論になつてしまつた。

「ぢや、どうしても要求をいれないといふのだな!」

「いれない! 絶對にいれない! それがどうした!」

「うぬ!」

しかし、握りしめた啓太郎のこぶしに對しては、事務所の方にもちやんと用意が出來てゐた。——奥から、目つきのよくない、肩幅の廣い男が四五人も出て來て、ぐるりと彼のまはりをとりかこんだ。

「やい、ぐづ／＼ぬかさずに、出てうせろ!——社會主義者奴!」

「社會主義者?——己はそんなものになつたおぼえはない。己は勞働者だ! 勞働者だから勞働者の利益と權利を主張するのだ。それが社會主義者なら、社會主義けつこう!

「なんだと!——おれが社會主義なら、貴樣らはなんだ!」

しかし、間に合はなかつた。いきなり、どんと胸をつかれて、よろ／＼となるところをぐいと兩方から腕をつかまれて、ずる／＼事務所の外に、彼はひきずりだされた。

二十二

「こいつあいけねえ。——逃げろ!」

さう思つて、とつさに、啓太郎は、二人の男に兩腕をとられた自分の身體を、どんと床の上にたゝきつけるやうにした。

ひきずられて倒れる男共の、ゆるんだ腕のすき間から、バネのやうにはね起きると、さつと大玄關のコンクリートの上を啓太郎は逃げだした。

「待て!」

あわてて追つかける男達の前に、その時――いきなりとびだしたものがある。兩手をひろげて、ふるへをおびた鋭い聲で、
「待つて！――追つかけてはいけません！」
良子だ。――男達はちよつと度膽をぬかれた形で、立ちどまつた。
「どけ！――女の出る幕ぢやねえ。」
「どきません、あの人はいゝ人です。」
「よう〳〵。――」
見物の間から、ひやかすものがあつた。それにつゞいてどつといふ笑ひ聲。――事務所の用心棒は出鼻をくじかれてしまつた。見物に合せて、自分も笑ひながら、
「いゝ人？――うつふつふ。なるほど、お前のいゝ人なんだな、あれ。」
見物がもう一度どつと笑つた。用心棒達は、勝ちほこつて事務所の中にひき返した。
良子は、そばに黒田のゐるのも忘れて、啓太郎の逃げた方に、ばた〳〵と驅けだして行つた。――會館の横の暗やみに、啓太郎はぼかんと立つてゐた。逃げだすつもりだつたのが、急に妙な女がとびだしたので、あつけにとられながら、またひき返して來たのだ。
「啓さん、どうしたといふの、いつたい。」
「あゝ、良公！」
「啓さん！――會ひたかつた！」
良子はなつかしく相手の眼をのぞきこむやうにした。が、次の瞬間電氣に打たれたやうにはつとした。はげしい憎惡の色が、啓太郎の眼の中で燃えてゐる――。この前の晩、良子の裏口で彼が示した眼の色と同じはげしい敵意の色だ！
「啓さん、怒つてるの。あの……この前の晩はね、あたし……」
ふとしたはずみから、つまらない意地みたいなものを張つて、ひどくすまなかつたと思つてゐる、どうぞゆるしてね、――と、良子はいふつもりだつたのだが、それを啓太郎がいはせなかつた。いきなり、鋭く、
「何いつてるんだ！ だれが手前なんかに怒るもんか。つまらないところで出しやばるない、女のくせに！」
啓太郎も心の中では何だかうれしい。思ひがけないところで、まためぐり合つて、何だか失はれた玉が、もどつて來たやうな、……それに今夜はつまり危いところを助けてもらつたのだし。……
――しかし啓太郎は若かつた。女に助けてもらふなんて、男の恥だ。それにこの前の晩のあのざまは何だ。……おれは男だ。こんな女の世話になつてたまるものか。
「ひつこんでろ！ おれなんかにお前は用はないはずだ。」
「いゝえ、あたしは用があるの。」
そこへ黒田が驅けて來た。
「何してるんだい、良ちやん。――ダンスに行くはずぢやなかつたのかい。」
妙な勞働者の前で、突拍子もない行動に良子が出たのを見て、こいつあ何かわけがある、ぐづ〳〵してるとこの女は途方もない方向にふつとんでしまふぞ、と黒田らしく敏感したので、早速かきまはしにやつて來たのだ。
「それ見ろ。」啓太郎は、薄闇の中で良子と黒田の顏をかはるがはるにらみつけながらどなつた。「お前がおれに用のあるはずがない。貴樣は骨までブルジョアの雌犬だ。勝手にダンスにでもカフェーにでも出かけるがいゝ。――淫賣野郎！」
「何をいふの、啓さん！」
良子は眉をふるはして叫んだ。そのすきに啓太郎は身をひるがへして驅けだそうとした。
良子はその腕をつかんだ。

「お待ち！」

「うるさい！」

さつとふりはらふ。良子はよろめいた。黒田がその身體を兩手で受けた。

啓太郎の姿は、瞬間、ビルディングの角を曲つて消えた。

「おい、どうした。しつかりしろよ。」

良子の肩をぢつと抱くやうにして、黒田がさゝやいた。脣のそばに、例の人を小馬鹿にした薄笑ひを浮べながら、……

良子は、啓太郎の姿の消えた方に、食ひいるやうな視線を向けて默つてゐた、二分……三分……。やがて、彼女は血走つた眼を黒田の方に向けると、叫ぶやうにいつた。

「黒田さん。」と大きく肩をぐいとゆすつて「あたし、水野さんの祕書になる！——雇つて下さい、どうぞ。」

二十三

もののはずみは恐ろしい。——ピストルの彈の一發から、三千五百萬の人も死ぬ。

個性と個性、民族と民族、層と層、階級と階級の戰ひを底深くひそめつゝ、僅に表面の均衡を保つてゐる我々の社會では、ふとしたものの小さなはずみが、思はぬ方向に反響をもち、思はぬ大きさの波亂を生む。複雜な原因の複雜な結果——それを人間は「偶然」と呼び「運命」と名づける。

良子が啓太郎にはつた意地、啓太郎が良子にはりかへした意地。——それがはからずも黒田の邪惡な意志に祝杯をあげさせるやうな結果になつた。惡い偶然であり、惡い運命でなければならぬ。

-水野さんの祕書になります。雇つて下さい、どうぞ！」といふ良子の言葉は、初めから一定の計畫に從つて行動してゐる黒田にとつては、即ち「わがこと成れり！」と飜譯出來る言葉に外ならなかつた。

翌日、彼は水野のところにとんで行つた。

-きのふ偶然良子に會つてね。——君がいよいよ近いうちに事業を始めるさうだ、といつたら、ぢや、あたし、水野さんのところにゆけるのね、と、にこにこ喜んでゐたよ。」

「そんなこといつちや困るぢやないか、まだきまりもしないうちに。」

水野ははにかんで頰を赤らめた。

「さうかなあ。」

黒田は空とぼけた聲をだした。

良子についてのこの報告は、果して水野を動かした。——人の心は芝居の舞臺に似てゐる。ちよつとスポット・ライトの色が變れば、一切のものが氣分と調子を變へて現れる。人の心の向き方が變りさへすれば、一切の背景と人物はまるで變つた光の中に登場する。——良子が彼の新しい事業を喜んでゐる、とたゞそれだけを聞いたばかりで、今まで信用しかねると思はれた黒田の言葉と計畫の一切が、眞實で親切らしく水野には思はれ始めた。

水野はまるで少年のやうに、田舍の美しい岡と谷川に取りまかれた鑛山事務所の回轉椅子に坐つて、潑剌と怜悧な良子を祕書とする「若き企業家」としての自分の姿を花やかな夢の額緣の中に見た。

黒田の奸計を、黒田がすゝめる革張椅子の中に祕められた鋭い毒の針を、水野が看破出來なかつた理由の一つは、彼の坊ちやんらしい夢であつたらうが、それよりも大きな他の理由は、良子への戀情であつたらう。

千里も一里といひ、痘痕も靨といふ。——戀愛は遠い時代の初めから、人を理性からひき離し、おどけた癡呆狀態に追ひこむ熱病であるらしい。

「女を捜せ！」――良子を手にいれることが水野を動かすことであるといふ黒田の公式は、だから見事に效を奏した。

重役出資として七萬圓を大賀鑛業會社に提供し、磐城炭田、夏井川の上流に眠つてゐる赤石炭坑の所長として赴任することを、水野は承諾した。

黒田五郎と大賀社長とは、築地の奥の待合の一室で祝杯をあげた。大賀鑛業會社の事務所は木造の共榮ビルから、石造の東亞ビルに移つた。――大きな獲物のためには大きな網を用意しなければならない。

新しいビルディングの新しい部屋で、水野は契約書に調印させられた。この同じ會社が、つい二三日前までは、家賃四十圓の木造ビルにあつたこと、「開かずの部屋」の名で呼ばれてゐたこと、――それらのことは夢にも知らずに。

良子も、帝國會館の箱の中からとびだして來た。水野とならんで、新しい卓に坐つた。

黒田は、赤石炭坑に向けて出發した。大急ぎで坑夫を募集し、赤錆びた機械と、水のたまつた坑道と、二人の番人を持つ炭坑を、とにかく炭坑らしく仕上げるためである。

この黒田の「準備」が出來次第、水野と良子は、出發しなければならない、――

二十四

常磐線は古い鐵道だ。――一時代前の速度で汽車がはふ。

ガターン〳〵と鈍重にゆれる二等車の、青いクッションにならんで、水野と良子は坐つてゐた。

窓の外は、文明に取り殘された農村の重い景色であつた。かたむいた藁屋根。搾取の必要が耕作の必要を無視して、猫の額よりも狹くくぎつた地主の田。その中で原始的な方法で終日自分を酷使してゐる百姓の姿。資本や文明から取り殘されることは、必ずしも農村の不幸ではなからう。しかし、現代の村と畑は、文明に取り殘されると共に、極度の貧乏にむしばまれてゐる……病氣の木の葉のやうに、色彩と活氣のない景色でなければならなかつた。

良子の心も、窓の外の景色のやうに重く色あせてゐた。彼女は自分の氣紛れに腹を立ててゐる。黒田に何か惡い企みのあることを薄々感づきながらも、啓太郎に對する反撥からつい水野の懷に飛びこんでしまつた氣紛れな自分！――

ものゝはずみは恐ろしい。

水野にとつては、しかし、窓の外の景色は蒼ざめてもゐなければ萎んでもゐなかつた。それは美しくすんだ秋の空、流れる空氣のにほひ、林檎酒のやうにあわ立つ谷川のさゝやき、眉をかすめる鳥影、――山と野を飾る一面の秋の更紗模様であつた。

彼は自分を若いロバート・オーエンのやうに感じてゐた。理想と希望に滿ちた若く聰明な經營者。――廢坑は、今、自分の手によつてよみがへる。

汽車は常磐の鑛山地帶に入つた。――一脈の活氣ともいふべきものが窓の外にみなぎり始めるのが感ぜられた。

左手の禿山の中腹に、古塔のやうにそびえ立つて、暮れ始める秋空を筆太く黒煙で染めてゐるのは、有名なH鑛山の大煙突だ。……汽車の動きにつれて、煙は靜かに方向と形を變へる。

驛といふ驛から、支線が延びて、鑛石と石炭を積む機關車が、深く山と山との間にもぐりこむ。昇降する客の數も次第に多く、住民の表情は漸く鋭さを加へ、町々の軒並も鋼鐵色に黒ずみ、光つて來た。――工業の生氣、近代の活力だ。

水野は幸福であつた。經營と管理、統制・支

配、——息をつく暇さへない生氣に滿ちた生產の世界、そのたゞ中に今自分はとびこむのだ。これが近代人の喜びでなくて何であらう。

しかも自分は一人でない。良子がゐる。良子は今、活潑で理智的な事務と活動の同伴者として、自分の橫に坐つてゐる。

生活が開ける。新しい仕事と新しい戀と！——胸の底をくすぐり流れる甘い酒に似た感情に頰をほてらせながら、水野はそつと良子の橫顏を見た。

良子の眼はぼんやり窓の外に注がれてゐた。彼女は何を考へてゐるのであらうか？

「良子さん。……」

「……………」

「良子さん。——」心持顏をあからめながら、水野は、思ひきつたらしい口調でたづねた。「君は結婚といふことをどんな風に考へてゐますか？」

「結婚？——」

良子は、ふりかへつて、水野の顏を見つめるやうにした。

二十五

「結婚は嫌ひです！」

強く、良子はいひきつた。

「どうして？……」

「わけなんかないの。——たゞきらひ、それだけ！」

「をかしいな。」

「え丶、あたしにもをかしいの。」

結婚は不幸な制度だ。——それは兩刃の鑢のやうに、日夜、夫と妻の身體をすりへらす。

ある時代には、結婚は、兩性の戀愛慾と性愛慾の唯一の實現形式であつたらう。しかし今は——特に女にとつて——あまりに明かにそれは「生活の方便」であり「職業の一種」だ。

だから結婚憎惡は、近代の女性の常感である。何故だ？と聞かれると答へることは出來ない。しかしそれは過渡期の生活そのものが生んだ動かすことのできない感情だ。

「ぢや、どんな相手とでも、結婚するのはいやだといふのですね。」

「え丶、いやなのです。」

「たとひ、心から好きな相手があつても？」

「え丶、さう。——一度、結婚が悲しい職業であることを知つた女は、ほかに職業がある間は、結婚する氣にはなれないのです。……すべての女は、その夫を愛することなく結婚してゐます。結婚がどこまでも職業だからです。……社長を愛するが故に入社する社員があるでせうか？たとひあつても、その人は入社と同時に社長をにくみ始めるでせう。——結婚したら、あたしはきつとあなたをにくみます。……」

これだけいふのは、良子には精一ぱいだつた。昂奮して、自分のいつてゐることが、自分によくわからなかつた。

この女は、自分の求婚を斥けるために、こんな筋の通らない理窟を振りまはしてゐるのだな、と水野は思つた。

「つまり、あなたは僕が嫌ひなのですね。」

「…………」

「僕がきらひだから——僕から結婚を申し込まれたら大變だと思つて、そんな變な理窟をならべるのでせう。」

「い丶え、ちがひます。わたしはあなたを嫌つてはゐません。——だけど、結婚はだれともしたくないのです。」

會話は途切れた。

しばらくして、良子が口をきつた。優しく水野の顏をのぞきこむやうにして、

「ね、もつと面白い話をしませう。」

水野がまじめに自分を愛してゐること、今度

の事業にのりだす氣になつたのも、自分が秘書になりますと進んでひきうけたのが、大きな原因になつてゐるらしいこと——それを知つてゐるだけ、良子は、水野の氣持を出來るだけいたはつてやりたい氣もするのであつた。

　窓の外はもう暮れかけてゐた。北國らしい秋景色が、流れる夕暗の中で、青くかすれて行つた。

　汽車はやつと、目的の驛に着いた。——磐城の國、夏井川に近い古い溫泉街。……軒並が湯の氣に濕つてうす黑かつた。

　プラットフォームに黑田が出迎へてゐた。

「よう、こゝだ、こゝだ。」

　彼は景氣よく帽子をふつた。

　彼は一緒に來た、肩の頑丈な四十男を坑夫頭だといつて紹介した。紹介されて坑夫頭は新しい取締役とその祕書に、うや〳〵しく胡麻鹽の頭をさげた。

二十六

　宿場の面影を明瞭にとゞめてゐる古い溫泉宿に一泊して、次の朝早く、一行四名は車體のさびた古フォードにつめこまれて、勇しく出發した。——扉を針金でくゝりつけた車は、街中で一番立派な自動車だといふことであつた。

　夏井川にそつて、葉の黃ばみ始めた崖下の道を、地方におけるセコンド・ハンドの都會文明を象徵しつゝ、古ぼけた自動車は、裂けた幌の天井に、一行の頭をぶつつけながら走つた。——「割物御注意」！

　川にそつて二十分も走つた時、左手の山の腹に、高い煙突とその下に小さく四五十軒のすゝけたバラックの聚落が見えた。

「やあ——あいつかい？」

　期待に胸ををどらせて、水野は聞いた。

「あれは、三井系の炭坑だ。……あれには千五百あまりはゐるだらうね、坑夫が。」

と、黑田は答へた。

　あれで千五百もゐるのだつたら、その十分の一の炭坑といふのは、いつたいどんなちつぽけなものだらう。……水野は少々心細くなつて來た。——これでは近代的な工業もくそもあつたものぢやない！

「まだ、遠いんだね。……」

「ちよつと二十分あまり。」

　道と並んで、鐵道の線路が赤く走つてゐたが、それも三井の炭坑をすぎると見えなくなつた。

「おや、鐵道もこゝまでしか來てないのだね。」

「赤石炭坑の方には、馬でひく一トン積の軌道があります。うちの鑛山にはそれも贅澤なくらゐです。」

と運轉臺から坑夫頭が說明した。

「馬でひくの？」

　良子が驚いた調子で口をいれた。

「はあ、機關車のついた鐵道は、大炭坑に限るので……馬も使はずに手で押したり、中には人間がかついでゆくのさへございます。」

「小規模の炭坑は、その方がいゝのだよ。その方が結局利潤の率が多い。」

と、黑田がつけ加へた。

　自動車はゆれながら走つた。

　胡麻鹽頭の坑夫頭は、見かけに似あはぬ人のいゝ口調でこの夏井川の下流が有名な新舞子で、上流がまた傳說で有名なアカイ岳、每年盆になると、御龍燈といふ不知火に似たものが川をのぼつて行く、もつとも見たものはまだないが、といふやうな話をした。……車にゆられて良子は尻が痛くなつた。

　そのうちに、漸く目的の赤石炭坑が見えだした。川から五六町離れたところに、坑から掘りだされた屑石が白い小山をつくつてゐるその下に、ガラスの破れたバラック建の十軒ばかり

と、少し離れて黑く倒れかゝつた坑夫小屋らしいのが、三棟あまり、平たくつぶれさうになつてゐるみじめな部落であつた。

　さつきの炭坑の三分の一ほどもない煙突がひよろひよろと立つて。――その下にある屋根のめくれかゝつたトタンぶきが機關場、捲場、選炭場、安全燈室、扇風機室、事務所等々だといふ坑夫頭の說明であつた。

　どうせ小さな鑛山だらうとはさつきから思つてゐたが、これぢやまるで、離れ小島の島奉行に流されたやうなものぢやないか。……

　が、自動車が部落に近づくと、水野のしよげた氣持を引き立てる、珍しい情景が眼の前にひろがつた。道化た太鼓の音が長屋の間から聞え、狹い道の兩側に二三百人はゐるかと思はれる人の黑山が出來て、それが新所長一行の自動車を見ると一せいに歡聲をあげたのであつた。

「なんだ、これは！」

二十七

「坑夫と近所の村のものが、お迎へに出てゐるのです。」

　坑夫頭がやゝ得意に說明した。

「今日は、新所長歡迎を兼ねた開坑祝で、鑛山中が大祝宴をひらくのだぜ。」

　黑田がつけ加へた。

　自動車からおりると、水野はバラック事務所の入口に立たせられて、廣場に集まつた坑夫と村人達にあいさつをさせられた。少からず昂奮して、大學生の演說じみたあいさつだつたが、話の切れ目〳〵に、素朴な歡聲がわきかへつて來た――水野は元氣をとりかへした。この調子なら案外面白くゆきさうだぞ。

　廣場ではやがて、四斗樽の鏡が拔かれ、怪しげな折詰がくばられた。…夜に入ると篝火がたかれて、季節はづれの盆踊りの輪が、いくつとなく作られた。太鼓の音が、靜かな山の空氣に素朴な點をうつた。

　その音を、遠くしみ〴〵と聞きながら、事務所から五・町も離れた、杉の木立にかこまれた「新所長邸」で、水野は黑田と杯をあげてゐた。――良子は勞れたといつて、離れの床に早くから入つてゐた。

「太鼓の音つていゝもんだなあ。――どん〳〵と、から柔かに心臟にひゞいて來て…」

「あれは、君の力で鑛山と坑夫がよみがへる、その脈搏の音だ。さうぢやないか、水野！」

　と、黑田は例の調子で煽動した。

「こんな炭坑が一つよみがへつたつて、大したこともなからうぢやないか。」

「謙遜するなよ。――幾度もいつたやうに、この炭坑は何よりもまづ僕の新しい生活への練習所だ。この炭坑がよみがへることは、君自身がよみがへることだ。さあ元氣をだして、飮め！」

　そして――翌日の午後。

　午前中に、現場と坑夫長屋の「視察」を簡單にすませて、バラック事務所の所長室――といつても、衝立一つで、その部分を仕切られてゐるだけの部屋に、水野は若い所長らしく坐つてゐた。

　窓の外では、煙突が濛々と煙をはいて、機關場と捲場から元氣のいゝ機械の叫び聲が聞えてゐた。

　坑夫頭が入つて來た。

「所長。さつき現場でちよつとお耳にいれておきました坑内軌道と選炭機の修繕はすぐにやつていたゞけるでございませうか。」

「あゝいゝとも。やらなきや、仕事が進まないぢやないか。それから、坑夫長屋の方、あれにも大工をいれてくれないか。」

　ところへ、扉があいて、大袈裟にびつこをひ

きながら黒田が入つて來た。
「あゝ痛い〳〵。亂暴な醫者の野郎だ。いきなり爪をぬきやがつた――。このおれを坑夫並に扱つて！」
　視察の途中で、つまづいて爪を割つた。村醫者で炭坑の醫局を兼ねてゐる老醫のところへ、手當をしてもらひに、黒田は出かけたのだが、そこで炭坑流の荒療治をやられたらしい。
「ほう、爪をぬかれたのかい。亂暴だなあ。」
「ひでえ藪醫者だ。あんなのはくびにしようよ、所長。」
「ついでに醫局も改良するかな。――ぢやあ君。」と坑夫頭をふりかへつて、「長屋と風呂場の方へ大工をいれることを至急たのむぜ。」
「おや〳〵。」と黒田が口を入れた。「長屋まで改良するのかい。よせよ、あれで澤山だ。」
「いや、あれでは東京の貧民窟よりもみじめだ。」
「こいつはをかしい。君は坑夫が貧民であつてはいけないとでもいふのかい。坑夫は立派な貧民ぢやないか。長屋はあれで澤山。――なあ、坑夫頭、さうだらう。」
「はい、長屋はどこの鑛山でもあんなものです。――だから、軌道と捲場の方を先に……」
「機械より人間だ！」
「それや、十九世紀の空想社會主義だぜ。僕だつたら先づ機械。それから採炭の方の利益があがり始めたら、長屋の方にも手をつける。」
「いゝから君は默つてゐ給へ。」水野はもう坊ちやんらしく癇癪を起してしまつた。「機械より人間だ。雇主がやらうとさへ思へば、兩方の改良が同時に出來るんだ！」
「だが、會社には、そんな豫算はないぜ。」
「その位の金ならまだ僕がもつてゐる！」
「困るなあ。君は人道主義者ぢやなかつたはずぢやないか。」
「いゝから、君は早く東京に歸り給へ。――あとは僕が引きうけた。」

二十八

　黒田が東京に着いたのは、ちやうど會社と事務所の退け時であつた。
　ビルディングの入口から、同じやうな服裝と、同じやうな顏付と同じやうな歩き振の會社員達が、希望と生氣のない憂鬱な列を作つて、停車場の方に流れてゐた。
　黒田は走る自動車の中で胸をそらせた。
「のろまな木偶人形共奴。毎日々々灰色の顏色をして歩いてゐる。奴等は、しぼられることを知つてしぼることを知らない。……朝の出勤、夕方の歸宅。ふん、狹いながらも樂しい我家か。……」
　自動車は、築地の例の待合に着いた。奧の部屋に大賀新平が待つてゐた。
「やあ、御苦勞々々々。」
　彼は女の枕のころがつてゐる蒲團の中から聲をだした。
「おや、その足はどうしたんだい。名譽の負傷か。――だが、お使者の役目は無事に果したらうな。」
「うん、どうやら送りこんでは來たがね。」と、大賀が床の上から差出す杯をうけて、「ところで、早速だが、お使者の勞をねぎらつてもらひたいんだが。」
「あゝ、いゝとも。ぢや、すぐに呼ぶぜ。えゝと、おなじみはだれだつたかなあ。」
「おい、藝者のことをいつてるんぢやあないぜ。」
「あゝ金か、なるほど。」大賀はうなづいてにやりと笑つた。「氣が早いね、君も。」
「氣が早い。――ぢや、なにかい、今度の仕事は君だけの手柄だとでもいふのかい。」

「何をいつてるんだ。―變に氣をまはすなよ。」

「君だけがそんな蒲團に寢てゐて、僕は……」

「だから女を呼ぼうと今いつたぢやないか。」

「藝者なんかきらひだ！」

「はゝあ、なるほど、もつと潑剌とし生きのいゝモガか。ふゝ、若いものにはかなはないな。」

大賀は枕元のかばんを引寄せて中から札束を拔いてぽいと投げだした。

「千圓ある。當座の小遣はこゝで十分だらう。大いに發展して來給へよ。」

「千圓？　まさかこれだけで僕を追つ拂ふつもりぢやなからうね。」

「いやにからんで來るな。―だから君は氣が早いといふんだ。まだやつと御當人を鑛山に送り込んだだけで、あの七萬圓はまだ〳〵我々のものぢやないんだぜ。もつと事件が進展しなきや、山分けも川分けも出來たもんぢやない。……それに、あの金を資金にして、もう一度大賀黑田合資會社を浮び上らせようといふのが君のプランぢやなかつたか。あせるな、あせるな。おれはかうしてこゝにゐて、逃げも隱れもしない。おい、黑田、貴樣も案外月足らずの惡黨だなあ。」

大賀の調子は威嚇的でさへあつた。

「なにもあわててゐやしない。當座の小遣だといふんならそれで分る。―ぢや、もらつてゆくぜ。」

「おい〳〵、もうゆくのかい。―いそがしい男だな。」

自動車に乘込んで黑田はポケットの札束をぽんぽんとたゝいた。

「さて、今晩のプログラムは？―」

車は銀座を横切つた。燈のいり始めた步道の上の群衆の中に、ちらりと彼は見た。見覺えのある女の横顏。―明るい樺色の事務員風の服、同じ色の圓い帽子、額に垂れた大きな捲毛。

「おつと、運轉手君、ストップ！」

身體を乘りだすやうにして黑田は叫んだ。

二十九

いつか、帝國會館で會つた良子の友達だといふモダン・ガール。―よし、こいつにぶつかつて見ろ。

扉を開いて、步道にとび降り、

「やあ、今晩は。」

ふりかへつて、女はいぶかしさうに眉をあげた。

「あたし？―なにか御用。」

「やあ、しばらく。これから夕飯を食べに行くところですが、つき合つてくれませんか。」

「あたし、あなたを知りません。」

「僕は知つてます。いつか帝國會館で會つた。……そら、あなたの友達の益田良子さん、あの人は今僕の會社にゐるので……だからあの人を通じてあなたを、僕はよく知つてゐるんです。」

「どんな風に？―いつでも男のお相手の出來る藝者のやうな女とでも、良子さんはいひましたか。」

「どうして〳〵、聰明な近代の處女だと！」

「うまいのね、お世辭が。」

「ぢや、つき合つてくれますね。」

「つき合ひますわ。」

「どうもありがたう。」

「なぜ？」

「でも、僕のために時間をさいて下さるんだから。」

「あんたのために？―ちがひますわ。あたしもちやうどご飯の相手がほしかつたところ。だからお禮は見當違ひよ。」

一時間の後、二人は新橋驛に近い、レストラン

のパーラーの長い椅子に、身體を埋めてゐた。食後の快い倦怠に包まれながら。
「ずゐ分たべたのね、あんた。」
黒田の横顔にいたづらさうな流し眼をくれながら、女がいつた。
「それや給仕が持つて來ただけはね。――だが、どうしてそんなことを？」
面くらつて黒田が聞きかへした。
「たいていの男は、女の前では食べ殘すものよ。」
「いけませんか？」
「いけなかないの。あたしは小食の男を見ると、なんだかはかない氣がしてならないのよ。」
「澤山食べる男を見ると？」
「ヴォルトの高いモーターを見るやうな氣がして――つまり、ひどく精力的な感じをうけていゝ氣持になるの。」
「旺盛なる食慾か。――あんたの說によると、それは近代の男性美なんですね。……ぢや、もう一つの慾の方は？」
黒田はさつと切り込んだ。
「ほゝ。」と女は笑つた。「それも旺盛でありさへすれば美ですわ。」
「おや／＼。負けた。」
「そんなに早く負けなくつてもいゝわよ。」
「ぢや、どうです、食慾的に僕を認めたんだから、更にもう一つの慾望の見地から、僕を認めてくれませんか。」
「ほゝ、追擊急なのね。」面白さうに女は笑つた。「その見地からも、十分認めてゐるつもりよ。」
「へえ、ほんとかなあ。……」
「ほら、あたしの顏をごらんなさい。あなたに近い方の頰つぺたが、赤くなつてないこと？ これは、あたしの血液があなたの性に關心を持つて、あなたの身體の方に集まつて行つたその證據よ。……」

三十

喜んだ黒田は、女の身體の方にそつと肩をよせるやうにした。
「ぢや、僕は、あなたの血液に愛されてゐるわけですね。」
「いやよ、うぬぼれちや。――」女はいたづらさうに肩をゆすぶつた。「あたしの血液は、男の人とならんでゐる時には、いつでもその方に集まるの。」
輕く逃げられてしまつた。……

レストランを出た黒田と女の自動車は、ほこりつぽく賑やかな裏露路の暗をはつて、とある脊の高いビルディングの根元に止つた。
「どこです、こゝは。」
「踊場よ。――さあ、降りませう。」
「いやだ。」
「踊れないの、あんた。」
「あんな馬鹿々々しいことが覺えられるもんか。」
「つまんないわね。ぢや、あたしだけ踊つてくるから、かつきり一時間したら、こゝまで迎へにいらつしやい。」
「殘念ながら、それほどのフェミニストでない。」
「ぢや、さやうなら。――いろ／＼ありがたう。」
「おつと／＼。待つてます、待つてます。ぢや、僕あ、そこらで飲んで來ますからね。かつきり一時間ですよ。間違ひないでせうね。」
「えゝ、一時間。」
女はひらりと入口に消えた。
ほど遠くない酒場の隅で、ウヰスキーの瓶を傾けながら、黒田は考へた。
「第二の神聖な慾望のための犧牲打か。つらい

話だな。……だが恐ろしく新時代だ。良子を手ごはいと思つたが、まだこんな上手がゐる。……黒田五郎、老いこんだな。」

壁の上に黒々とうつつてゐる自分のかげに、舞臺の役者のやうに黒田はそんなことを話しかけた。黒い影は、ニヤリと笑つて答へた。

「次の時代の浪が貴樣の足もとを洗つてゐるのだ。――うつかりしてゐると足をさらはれるぞ。」

――黒田は醉つたのだ。

だが、さすがに時間は忘れなかつた。車をひろつて、踊場の入口にかけつけると、女はもうそこに待つてゐた。

走りだす自動車のクッションの上で、陽氣なマリのやうに、黒田の心はまたはずみ始めた。

「あゝ、僕はまだあんたの名前を聞かなかつた。」

「あたしの名前?――どうしてそんなものが必要なの。」

「名前が必要でない。驚いた。……これやあ驚いた。……」

「醉つてるのね。あんたは。」

「仰せの通り。……ところで僕の名前は黒田五郎。これが名刺です。」

「いらないわ、そんなもの。あたしは今晩、あなたといふ特定の男と遊んでるんぢやなくて男一般と遊んでるんですからね。……つまりこんなつきあひなら、あんたでなくつても、男ならたれでもいゝつていふ意味よ。」

「ぢや、僕の方も、あんたを女一般として扱ふことにして、率直に男一般の慾望を提出しますよ。どうです、これから……」

「性慾は、人間の世界では、まだ食慾ほどに簡單に扱へませんわ。」

「そいつを扱つたらどうです。――金はこのポケットに入つてます。」

黒田は女の腕をぐいと抱いた。

「金?――それほど困つてないことよ、あたし。」

と、女は輕く男の腕をはらつた。

「ところが、僕は大いに困つてゐる……」

「ほゝ、駄々つ子ね。……ぢや、いゝところに連れてつてあげませう。お金ほんとに持つてますね。」

「持つてるとも。」

黒田は札束をふつて見せた。

「豪勢ね。ぢやいゝわ。」

女はその中から一枚拔いて運轉手臺に渡し、何か囁いた。ニヤリと笑ふ運轉手の顏がバック・ミラーに寫つた。

車は暗い横手にそれた。瞬間、二人の身體が、クッションにすひつけられてそりかへつた。速力計が三十マイルを指したのだ。

三十一

赤石炭坑のあわたゞしい一ケ月がすぎた。自分の力で、出來得べくんば理想的な炭坑を、と考へて水野は夢中であつた。坑夫長屋は改築され、新しい機械が取りつけられ、坑夫の賃銀も三井並に引上げられた。工事の方も二百フィートばかりの坑道が完成し、今二三十フィートで炭層につきあたるといふ見込がたつた。

いそがしい毎日の仕事の中で、水野は生甲斐を感じた。坑夫は心からの信頼を示してくれるし、良子もまたよく働いてくれた。そして二人の間はいつからともなくかうした立場におかれた男と女の關係にまですゝんでゐた。良子は結婚はきらひだといふ。そして事實きらひである。しかし、彼女とても男も知らぬ女ではなかつた。水野の純情の前に身體だけをまもり通す理由はなく、またまもり通すことは不可能であつた。

炭坑の一ケ月はかうして水野にとつても、良子にとつても、坑夫とその家族にとつても、順調に過ぎて行つた。

だが第二ケ月目の半ばから、そろ〳〵變なことが起り始めた。——本社から金を送つて來ないのだ。炭坑の賃銀は十五日勘定になつてゐる。最初の二回はそれ〴〵二千五百圓づつ送つて來た。それが三回目には來なかつた。電報を打つと、ちよつと今都合が惡いから支拂を延ばしておいてくれといふ返事であつた。

水野はそれを別に怪しまなかつた。事業界にはよくあることだらう、どうせついでだからと考へて、自分の金で立てかへておいた。水野が父からわけてもらつた二十萬圓は、うち五萬圓あまりが不動産で、七萬圓を重役出資としたので、現金は五六萬圓しかなかつた。それを彼の人のいゝ空想と「會社にそんな豫算はないぜ」と黒田にいはれ、「何おれがやる」と坊ちやんらしい意地をはつて、施設の改善その他をことごとく自費でやつたので、もう殘りはほとんどなかつた。元來、本社が賃銀として送つてくる二千五百圓なるものが、經費の五分の一にもあたらない額だ。それをどうせ會社の豫算外の仕事をしてゐるのだ、もう一月もすれば採炭も出來ることだし、さうなれば、と考へて平氣で自腹を切つたところ、いかにも水野らしくおつとりしてゐた。

しかし、最初から黒田の計畫を怪しいとにらんでゐる良子は、支拂をのばせといふ電報を見ると、すぐに水野に上京することをすゝめた。黒田と大賀に會つて、はつきりしたところをつきとめて來なければ、安心して仕事も出來やしない。——彼女は今は鑛山の女王であつた。鑛山の管理に新鮮な興味を感じ、事業を愛する氣持を水野よりも強くもつてゐた。

「なに、そんなことをしなくてもいゝよ。」水野はしかしいゝ氣なものであつた。「まだあるんだから立てかへておけばいゝさ。」

「でもをかしいことがあるのよ。この前もね、あたしのお友達の佐山久美子といふ人から手紙が來て、それによると、近頃黒田さんはたいへんな景氣で、亂暴な遊び方をしてるさうですよ。」

「だれだい？　その佐山つていふのは。」

「帝國會館にゐた時のお友達で、それや愉快な面白いひとなんですがね。そのひとを黒田さんが突然銀座でつかまへて、千圓だとかの札束をつきつけたり、それやたいへんだつたんださうですよ。しやくにさはつたからいゝ加減に釣つておいて、どうしてもホテルに行かうといつて聞かないのを、醉つぱらはせ、うまく替玉をつかつてすつぽかしてやつた、などと書いて來ましたわ。」

「はゝゝ、黒田の奴、見事に一杯食つたわけだな。愉快々々。」

「愉快どころぢやありませんよ。考へてもごらんなさい。黒田さんの手にどうして千圓などといふ金が入るはずがありますか。きつと何かをかしなことが……」

「むう、それもさうだなあ。

「だからあんたはすぐに上京して……」

「うむ、行つて來てもいゝ。あんな奴のペテンにかゝるのもおとなげないからな。」

三十二

「おい、大賀！」

血相をかへた黒田がとびこんで來た。——片手に水野からの電報をつかんでゐる。

「どうした〳〵。何をそんなに怒つてるんだい。」

大賀はそらとぼけた。そして、心の中でつぶやいた。——「小僧め、うるさい！」……築地の例の待合にもぐつて、今日も一日彼はとぐろを

巻いてゐたのである。

「どうもかうもない。貴樣はおれまでごまかさうとしてゐたんだな。」

「をかしなことをいふね、貴樣とは御挨拶だ！」

「挨拶もくそもない。この電報を見ろ。君が炭坑の方に送つたといつた金はまるでとゞいてゐないぢやないか。」

「はあん、そんなことか。」と、大賀は平氣なものだつた。「おれははじめから送るつもりはなかつたよ。あんな炭坑に金なんかつぎ込む馬鹿が今時あつてたまるもんか。」

「へえ。」と黑田はあきれた。「君はもう一度大賀鑛業をもりかへすつもりぢやなかつたんかい。」

黑田はやつぱり大賀より一枚役者が下だつた。彼のつもりでは、水野の金で炭坑を復活させ、それを基礎にして大賀鑛業の信用を堅め、企業界で一旗あげて見たい心組だつたのである。

だが、名前だけにしても一千萬圓の會社をやりくりしたことのある大賀だ、そんな子供らしい夢、信じなかつた。この不況期にそれくらゐの金はあつてもなくとも同じことだ。七萬圓はそのまゝ懐にいれておけばいゝ。殘りは炭坑の方に勝手につぎこませ、そのまゝ放つておいて、相手がなげだすのを待てば、どうせ炭坑は會社のものだし、水野の持金は全部食へるわけだ。

「そんなつもりはないよ。初めから君は二十萬圓をそつくりいたゞくといふ相談をおれに持つて來たぢやないか。」

「そんなことはいはん。」

「へえ、さう聞えたぜ。」

「ま、なんでもいゝ、とにかくこの電報が來て、水野が上京してくるといふんだ。」

「勝手に上京させたらいゝぢやないか。」

「そんな呑氣なことをいつてられちや困る。向うから出て來て内幕を見透されるよりもこつちから持つて行つてやつた方が賢明なやり方だ。……どうせ、どつちみち拂はなければならない金なんだから。」

「ふうん、なにがどつちみち拂はなければならない金なんだ。」

「外のことはともかく、從業員の給料だ。君はそれだけは必ず送るとおれにいつておきながらしかも送つてゐない。このおれまでごまかすとは何だ。出し給へ。僕が持つて行く。」

「從業員の給料。ふん、殊勝らしいことをいふね。君はいつ社會主義になつたのかい。」

「ぐづ／＼いはずに出し給へ。水野だつてさうさう續くものぢやない。今は給料をとゞこほらすところまで來てゐるんだ。われ／＼のやうに遠くはなれてゐればそれでいゝが、現にその場にゐるものにとつては、やりきれたものぢやなからう。」

「……。」

「折角水野が苦心してあそこまで仕立てあげたんだから、あの鑛山をあのまゝにしておくのは會社にとつてもをしい。この際金をもつて行つてやつて、事業を繼續させ會社の發展をはかつた方が得策だと思ふ。」

ふゝん、小僧奴、しをらしい夢を見てやがる、と、大賀は心で笑つた。

「とにかく僕は、今日中に現金をもつて出發する。出してくれ給へ。」

いきり立つた相手の顏色を見て、大賀は彼らしく腹の中で考へなほした。

「うるさい小惡黨だ。ついでだから、こいつもいつしよに片づけてしまふか。……」

三十三

「ぢや、出さう。」と大賀はいきなり調子をかへ

た。「君がこれから炭坑に出かけて、うまく始末をつけてくれるといふんなら、五千圓くらゐは出さう、どうだ、それだけあれば、まとめられるだらう、君の腕なら。」

「冗談！　思ひきつてすつぱりだし給へ。まごまごしてゐて辯護士かなにかに頼まれて、詐欺だの何だのと騒がれるのはみつともいゝ話ぢやないぢやないか。」

資本主義文明の中から生れた輕石のやうな小惡黨。――惡事はしてもその惡事の償をすることが彼には恐ろしい。

大賀は、あわててゐる黒田の腹の中が見透せてをかしかつた。この度胸のなさで、この男は、おれと一人前の太刀打が出來ると思つてゐるらしい。獲物もおれと山分けにでもするつもりでゐるらしいが、もと〳〵山分けなんていふ言葉は、同じ腕の相棒同士の間にしか通用しない言葉だぞ。笑はせやがる、味噌汁で面でも洗つて出直せ！……だが、いつまでもこんな月足らずの惡黨を相手にしては暇がかゝつてならぬ。

「よし、では一萬圓だけ出さう。それだけあれば一應かたがつくだらう。それで君がうまくかたをつけて、事業が繼續するやうにしてくれゝば、僕も考へなほして君の計畫通り、あの炭坑に力をいれることにしよう。」

「まあさうだと思つてやつてみろよ。疑へばきりがないからな。どうだ、一萬圓でやつてくれるか。」

「さうだなあ、それだけあれば、まあなんとかならぬでもない。……」

大賀が折れて出たやうに見えたので、腹に一物あるとは知らず、黒田も調子を變へておとなしく出た。

「ぢや、よろしくたのむ。」

大賀は鞄から小切手帳をとりだし、一萬圓の金額を書入れた。

「そら見ろ、ちやんとあるくせに。」

「馬鹿をいひ給へ。これでぎり〳〵だ。あとはみな外の方に貸しつけてある。こなひだの重役會議で……」

「へえ、重役會議なんてものがあるのかな。」

黒田はひやかした。

「冗談いつちや困る。大賀鑛業會社はちやんと定款の認可をうけてゐる株式會社なんだぜ。」

「表むきはね。」

小僧、きいた風なことをいふなと腹の中で笑ひながら、

「ま、なんでもいゝ。で、いつ發つ？」

黒田は小切手をかばんにしまつて、

「これを現金にかへて、その足ですぐたつ。ぐづぐづしてゐちや水野が可哀さうだ。」

「へえん。いやに友達甲斐のあるらしいことをいふね。」と時計を出して、「だがまだ時間がある　一杯やつてゆき給へ。」

「いや、早いほどいゝ、出かけよう。」

「さうか、ぢや、まあ萬事よろしくたのむ。」

黒田が立つてゆくのを見送つてひとりになると、大賀はどかりと坐つて大胡坐をかいた。

「ふゝ、小僧つ子奴。手前なんかに輕く見られる大賀漸平ぢやない。――ふゝ、今にほえ面かかしてやるから、待つてをれ！」

と手をたゝいて仲居をよんだ。

「何御用？」

と、手をつく。

「賴信紙だ。長文だから、一枚ぢや足りないぜ。」

「はい〳〵。どうせあたしは吝嗇だから、いつも電報用紙は一枚きりしかもつて來ませんからね、おほゝゝ。」

「こいつ生意氣をいふぜ！　あつはつは！」

三十四

「まだやつてこないかい——黒田の奴は。」

鑛山事務所の所長室で水野はさつきからいらいらしてゐた。

「くるといふ電報だけで、時間を書かないなんて無責任ね。——やはり夕方の汽車でせうか。」

と、良子も眉をよせた。

「早く來てくれないと困るんだがな。」

坑夫頭が入つて來た。間の悪さうに頭をさげると、朴訥な調子で、

「ごめんなすつて。」

「あゝ君か、坐り給へ。……給料の話だらう。どうも相すまない。だがかうして電報が來たんだからもう來ると思ふんだが。」

「はあ〳〵、それやあもう、二日や三日おくれたからつて、別にどうつていふわけはねえとあつしは思ふんですが、どうも野郎共がぐづ〳〵申しましてね。」

「すまない。仕事をさしておいて、きまつた給料日に支拂はないのは、何といつてもこつちが悪い。だが黒田が一萬圓持つて出發したといふ電報が來たんだから……」

「へえ、さうでございますか、それなら安心で。……なにせ、いろ〳〵お世話をかうむりまして、野郎共もどんなにか所長さんの御恩をありがたがつてゐるかしれませんやうな次第でして。……ですが何しろ、ナマを見せてやりませんてえと、その……つい嚊に小言をいはれたりして。……いやどうも、これはおしやべりいたしました。ぢや、さつそく歸つてさう野郎共に申しておきやせう。」

と、坑夫頭が出かゝつたその時、事務員が電報をもつてはひつて來た。

「あゝ、汽車の時間でも知らして來たのかな。」

さう思ひながら、手にとつたが、讀み下すなり、水野はよろ〳〵と机の角に手をついた。脣の色が青く失せて。……

「まあ、どうしました。」

と、良子がびつくりしてかけよつた。

「なんか變つた電報ですかい。」

と坑夫頭も近よつて來た。

「なんでもない、なんでもない。」水野は青ざめた顏をあげて手をふつた。「なんでもないんだ。いゝから君はあつちに行つてくれ給へ。兎に角今日確實に金を拂ふことは事實なんだから。」

「さやうですかい。お顏色がわるいので何か起つたかと思ひまして、へい。」

不審げに首をふりながら坑夫頭は出ていつた。

「どうしたの。黒田さんからまた何かいつて來たの。」

「こ、これを見てくれ。」

讀み下す電報には、——會社の事業が不振のため重役會議は責任を負つて總辭職した。新重役會議は、水野所長の獨斷的經營による赤石炭坑に責任をもたぬと決議した。自分一個のはからひでやつと一萬圓だけを黒田に持參させることにしたから、それで一切の始末をつけてもらひたい、といふ意味が書かれてあつた。大賀が待合から打つた電報だ。

「まあ！」

「畜生、やつぱり詐欺だつたのか！」氷のやうな冷氣が、足許から腦天に向つてつきぬけた。水野はもう立つてゐることが出來なかつた。「……僕にはわからぬ。僕には何もかもわからなくなつた。」

水野は椅子の中にくづれこんで頭をかゝへた。——金を失つたのが苦しいのではない。友に賣られた、世間の裏を見せられた、その驚きとその絶望！

ところへ、窓の外で、鑛山には珍しい自動車

の警笛が聞えた。
「あつ、來た。來たわ、黑田の奴！」

三十五

「おい、黑田！」
大きな折鞄を大切さうにかゝへて、のこ〳〵と入つて來た黑田を見ると、血相を變へて、水野は立ちあがつた。
「な、なんだ。どうしたといふんだ。」面くらつて、黑田はちよつとまごついた。「いきなりどなられちやわけがわからない。」
「き、貴樣は‥‥」
「まゝ待つてくれ。」はゝあ、金を送らないのを怒つてゐるんだな、と、黑田は簡單に解釋したので、「なるほど金を送らないのは惡かつた。だがそれは全くの手ちがひでね。本社の方の聯絡がうまくつかなかつたのだよ。怒るな、まあ坐つてゆつくり話さう。」
「まだそんな白々しいことをいつてるんだな、この電報を見ろ！」
「へえ！」と狐に魅まれたやうな顏をして、「おや、大賀からだな、なに、ジギヨウフシンノタメ、何だこれは！」
「それでもまだ白つぱくれる氣か！」
「むう。」と、どかりと坐つた。電報を右の手につかみつぶして、黑田はうなつた。「畜生！ 畜生！ たうとうやりやがつた！」
耳の先まで眞赤になり、肩で息を切つてゐる黑田の姿。——
良子は不思議に思つてたづねた。
「おや、あんたこの電報をしらなかつたの。」
「知らない。知るはずはない。大賀は、事業を繼續させるための金だといつて、おれにこの一萬圓を渡したんだ。だからこそおれはこゝまで、わざ〳〵やつて來たんだ。」
「へえ、するとあんたはこの大賀といふ奴と初めから共謀ぢやなかつたのね。」
「馬鹿、何をいふ。おれは大賀を信用して、水野に確實な事業の練習場としてこの炭坑を推薦したんだ。初めからさうだつたんだ。」
黑田はうそとほんとを半分づつ交ぜて答へた。
「どうだか。でも、この電報を知らないところを見ると、あんたも大賀にあやつられた方なのね。」
「畜生！ かうしちやゐられない。」と良子には答へず、水野の方に向いて、「確かにこれは詐欺だ。ぐづ〳〵しちやをれん。すぐに二人で上京して對策を講じようぢやないか。」
「さうか。君もやつぱり知らなかつたのか。すると、君が僕をペテンにかけたといふわけでもなかつたんだな。」
「よしてくれ、この上疑はれちやあ、おれの立つせがない。」
ところへ坑夫頭を先頭に十人あまりの坑夫が、どや〳〵と入つて來た。彼はさつき水野が電報を見てひどく驚いた風をしたのを怪しんで、坑夫といつしよにやつて來たのである。
「へえ、ごめんなさいまし。本社からいらつしやつたやうでございますが、御都合はどうでございませうか。」
「あ、いや。心配をかけてすまない。」水野はつとめて冷靜に、所長らしい威嚴をもつていつた。「本社の方に、ちよつと事件が起つたのだが、しかし金は無事にとゞいた。君達には決して迷惑はかけない。今すぐにも拂つてあげるから安心し給へ。」
「はあ、さやうで。なにしろあつし達にしても、日干しになるかならぬかの境なんでしたもんで、つい氣になりまして。」
「あ、わかつた〳〵。」と、黑田がづら〳〵しく進み出た。「本社の方と水野所長との連絡に食ひ

ちがひがあつたんだ。われ〳〵には君達を見殺しにしようなんて意志は毛頭ない。……金はここにある。今夜中にすつかり精算して、一錢も殘らずきれいに拂ふ なにしろ資本金一千萬圓の會社だ。安心して明日まで待つてくれ。」

おや、この男はまだうそをついてゐると良子は思つた。

「黑田さん、出たら目はおよしなさいな。」

「資本金一千萬圓もないものだ。」と、正直に水野も口をいれた。「この場合、そんなうそは役に立たぬ。」

「え、でたら目?」

坑夫頭が聞きとがめた。

「なんだ、うそだと。

坑夫の間にも不安な動搖が起つた。

三十六

「うそぢやない、うそぢやない!」形勢がおだやかでないと見てとつた黑田は、あわてて水野を眼で制すると、いきなり坑夫達の前に進み出で、持つて來た鞄のふたをあけた。中から札束を引きだしてそれを高々とうちふりながら、「ほら、このとほりちやんと持つて來てるんだ。こいつは手をつけないで明日までこの金庫の中にしまつておくよ。」

「うん、ぢや、明日きつともらへるだな。」と、坑夫の一人が安心した聲を出した。

「あゝ、きつとだとも。

「今日すぐもらふつてわけにや行かねえですかな。」

もう一人の坑夫が口を出した。

「この野郎、どうして一日べえ待てねえだ。」坑夫頭がたしなめた。「札束でもつて來てなさるだもの、そいつをわける時間がいるつてことに氣がつかねえか。」

「なんだつたら金庫の鍵は君達に預けておいてもいゝ。」と黑田は大きく出た。「明日君達と立會の上で金庫を開けて、町の銀行へ兩替にゆくことにしよう。」

「なに、それほどにしてもらはなくてもようがすて。」坑夫頭は一同をふりかへつて、「なあみんな。」

「あゝ、さうか。」黑田はすかさず、「わかつてくれたら、今日のところはみなおとなしく引きあげてくれ。」

「どうもはあ、失禮をいたしやして……」

一同をひき連れて、坑夫頭が出てゆく。そのあとの扉を黑田は用心深くそつと閉めた。

「おい、水野。どうも危い連中だな。この際へまをやつちや、たゝき殺されてしまふぞ。」

「黑田さん。」良子はもう怒つてゐた。「あの人達は理由もないのに亂暴をするやうな人ではありません。あぶないのはあなたの方です。あなたのおかげであの人達は干乾しにならうとしてゐるところです。」

「君に話をしてるんぢやない。……で、水野、君はまだこの炭坑の經營を續けてゆくつもりかい。」

「ペテンだとわかつて、それに默つてひつかゝつてる奴があるものか。僕は斷然やめる。」

「あゝ、それがいゝ。全くおれも大賀がこんな奴だとは知らなかつたんだ。君にはすまない。大いにすまない。ぢや、すぐ上京して、大賀の奴をとつちめよう。」

「よからう、金に未練はないが、後始末だけはきちんとつけたいからな。ぢや、明日、いや、今晚でも坑夫達にすつかり事情を話して、その一萬圓を渡し、足りない分は僕が引受け、いづれ不動產でも賣れたら、あとから送つてやることにしよう。」

「はつ〳〵、正直だな君は。——」黑田は笑つて、「それは不用な手續きといふものだぜ。」

「不用な？」

「考へても見ろ。大賀はあんな電報をよこしたが、明かにそれはペテンで、あいつに炭坑を放棄する意志はない。炭坑が會社のものである以上、坑夫に對する負債も會社のものだ。だからこの一萬圓は當然君に返されて然るべき金なんだ。」

「僕はそんなことは出來ない、それに第一、明日になれや坑夫達が押しかけてくる。」

「來たつて會はなきやいゝ。」

「馬鹿なことをいふな。會はないですまされるか。」

「それをすまされるやうにする。」

「え？　まさか君は……」

「さうだ、逃げるんだ、水野。――今夜のうちに逃げ出すんだ。」

「何をいふの。」たまりかねて良子が黒田の前にとびだした。「惡魔！　どこをおせばそんな音が出る。恥知らず！　あんたは人間の命を何と考へてゐるの！」

三十七

「ひどく腹がすいてきやがつたな。」

「がまんしろ。あと二百枚で刷りあがりだ。」

「お腹がすいてもひもじうない、か、――昔の人は便利だつたなあ。」

「なんだ、それ。」

「芝居のせりふだ。……だから昔は失業問題も起らなかつたといふ意味よ。ところでつと、おれは小便がたまつた。」

のんきなことをいつて、鐵筆をおき、「我等は若きプロレタリヤ」の節を口笛でふきながら相手は便所に立つて行つた。啓太郎も謄寫版を刷る手をやめて、うゝんと力一杯脊のびをした。

共榮ビルディングの午後、有村辯護士の事務所の謄寫版を借りて、啓太郎は仲間の一人と組合のビラを刷つてゐた。――帝國會館の事務所で、暴力團に社會主義者奴、とどなられてから、四ヶ月、その間に彼も、若い氣性の強い近代の勞働者のゆくところまでゆきついた。

口笛の音が聞えて、仲間が便所から歸つて來た。

「おうい、村田。あの大賀鑛業會社てやつがまた前の部屋に歸つて來てるぜ。消えたり現れたり、なるほど朦朧會社の名にそむかず、だな。」

「いろんなことを氣にする奴だ。」啓太郎はおしやべり好きな仲間の顏を見かへしながらいつた。「どうせいかさまビルディングの中だ、いろんなくづが巢食つてゐるよ。……さあ／＼己の方はもうぢきあがりだぜ。早く原紙を切つてくれよ。」

「だが、あゝいふ朦朧會社にひつかゝつて、株を買つたりする田舍の小地主や小商人こそいゝ面の皮だな。」

「今時そんな奴もゐないだらう。」

「馬鹿いへ。まだ／＼たくさんゐる。小金つていふものは、不思議に人間を金の餓鬼にするらしいからな。……現につい最近にも、大賀鑛業に金をつぎこんだ金持の馬鹿息子があるといふ話だ。それで、會社は東亞ビルだとかいふ大きなところに引越したんだが、それがまたのこのことこつちに歸つて來た。何か事情があるらしい……と、今便所でそんなうはさをしてゐた。」

「うまくまきあげて、食つてしまふと、また元の穴にひつこむ。まるで濱邊の泥棒蟹みたいな會社だなあ。」

「だが、惜しいもんだ。どうせまきあげられる金なら、おれ達の方へでも寄附してくれるとなあ。……慾はいはん、一萬圓でいゝや。」

贅澤いふな。さあ、しやべつてゐる間にどんどん仕事を片付けようぜ。」

パサリ〳〵白い紙がひるがへつて謄寫版が動き始める。……

その時、暗い廊下に奇妙な風體をした一隊が現れた。――ひつきり下駄をつつかけて、同じやうにぼう〳〵と髯をのばし、汚れた田舎縞のあはせの尻をはしよつて、腰に手拭をぶらさげた二人の男と、白粉氣のない顏と、粗末な瓦斯縞の若い女。三人は大賀鑛業の前までくると、こゝだ〳〵と口々にいひながら、扉をたゝいた。だが、例の如く「開かずの部屋」で、中からは返事もなかつた。とつ手をつかんでひつぱつたが、それも駄目だつた。

「開かない。やつぱりだれもゐないんだわ。どうせこんなことだらうと思つたんだが。……」

「所長の家の方に行つて見ちやどうかなあ。」

なまりの強い、朴訥な調子で、男の一人が答へた。

「それが分つてれやあ、こんな苦勞はしなくていゝんだけれど。」

眉をよせながら女は途方にくれた口調であつた。

「だれかくるまでこゝで待つてゐよう。それしかねえだ。大賀鑛業つて、ちやんと看板があるだから。」

「ちよつと聞いて見ませう。」

女は思ひついたらしく、隣の雜誌社の扉をたたいた。が、そこも開かなかつた。まあこゝも、と口の中でつぶやきながら、今度は有村法律事務所の前に立つた。とん〳〵とたゝいて、

「あの、ちよつとお伺ひしますが……」

と扉を開いて、のぞきこむと同時に女は、叫んだ。

「あら啓さん！」

「おゝつ、良公！」

これも劣らずびつくりした啓太郎の聲であつた。

三十八

「妙なところでまたぶつつかつた。手前どうして……何しに來たんだ。」

例の如く、ぶつきら棒な啓太郎の調子。良子にはそれがたまらなくなつかしい。

「いゝところで會つた。啓さん。……」

何からいつていゝかわからなかつた。すがりつきたい氣持の中で、わけもなくぼろ〳〵と涙が出た。

「おつと、おつと、待つてくれ。」

啓太郎は面くらつた。――帝國會館の横で別れてから、もう四ケ月近くもなる。どこにどうしてゐるかなあ、と何時も思つてはゐたが、あゝした別れ方をした以上、こつちからたづねて行くのは自分に氣がすまぬ。そのうちに女のことなんかどうでもいゝ新しい熱情の對象が、啓太郎には出來た。「新しい仕事」――組合の運動がそれだ。

だからかうして今日も、失業問題のビラを仲間と一しよに刷つてゐたのだが、そこへ思ひがけない良子が思ひがけないなりをしていきなりとびこんで來、涙を流したりするものだから、面くらつた上に、若者らしく少々てれた。

「……やめてくれよ、みつともねえや。」

「ほゝゝ、馬鹿ね、あたし。泣いたりして……」

良子もてれた笑顏になつて、「ね、啓さん、力を貸してくれない、ほんとにお願ひだから。」

「何を？……」

「あたしたち、今しがた上野に着いて、やつとこゝまで辿りついたところなの。そしたら……」

「上野に着いて？……」啓太郎はわけがわからなかつた。「お前、田舎に行つてゐたのかい。」

「あゝ、この人は何も知らなかつたんだ。」――

と良子は氣がついて、「あのね、この人達は、赤石炭坑の坑夫さん達なのですが……」

と改めて啓太郎に引合せ、事務所の中にいれてもらひ、てつとり早く初めからのいきさつを良子は話し始めた。

――大賀鑛業のペテンにかゝつて、散々食はれてしまつたこと、しかも、いよ〳〵最後の場で、黒田が坑夫を見捨てて逃げださうといひだしたこと、それに良子が强硬に反對したので、一度はとり消したが、ひそかに坑夫頭を買收して、明日給料を支拂ふと約束したその夜中に、こつそり石炭運搬用のトロッコを馬に引かせて逃げだしてしまつたこと、水野も、ぐづ〳〵してゐると殺されるとおどかされた上に、この急場を切り拔けるためにはどうしても一應坑夫頭をつれて、上京するより外はない、と巧みにごまかされたらしく、「無斷で出發するが、決して逃げるのではない。解決のつき次第、すぐに歸つてくるから。」といふ意味の置手紙をして、一しよに行つてしまつたこと。……

「へえ、ぢや、つまりすつかり逃げだしやがつたつてわけだな。」

啓太郎はもう自分のことのやうに憤慨し始めた。

「えゝ、逃げだしたの、卑怯者のそろひですわ！……ところが次の日みんなで探しにゆくと軌道の終點近くでそのトロッコがひつくり返つてゐるんです。……」

「ほう、ぢや、とつつかまへたのかい。」

「いゝえ、三人の姿も、そして馬も、どこへ行つたか見あたらないんです。……だけど、あたりに眞赤な血が……」

「血が？……」

「えゝ、血が散らばつたりしてゐて、……だから、きつと怪我したものがあるらしいのですが、兎に角、みんな逃げのびちやつたの。」

三十九

――で、一同は仕方なく坑山に引き返して、いろ〳〵相談したが、黒田は別として、水野はまあ信用のおける男だし、それに坑夫頭もついて行つてることだから、いづれ何とか始末をつけてくれるだらう、しばらく待つて見ようといふことになり、長屋中がとぼしい貯へを持ち寄り、足りないところは近所の村の百姓の仕事を手傳つたり、夏井川で魚をとつたり、……全く食ふや食はずの一月あまりを過ごしてたのだが、黒田達からは何ともいつて來ない。事務所に殘つたわづかの金で、電報もうち手紙も書いたが、それも梨の礫。……たうとうたまらなくなつて、事務所の備品や良子の着物を賣りとばし、やつとのことで三人きち〳〵の旅費をつくり、辨當を買ふ金もないので、飮まず食はずで、上野驛まで着き、東亞ビルに行つて見たら、そこはもうからつぽ。共榮ビルに引越したといふから、はる〴〵まはつて來たら、またこゝも看板だけ……

「ひでえ畜生共だ。」啓太郎は腹の底から太い聲をだした。「……で、何かい、君たち、ほんとに今朝から何も食はないのかい。」

「えゝ。」と良子はかすかに笑つて連れの坑夫達をふり返つた。「あたしはそれほどでもないんだけれど、この人達は、こんないゝ身體をしてゐるんだから……」

「もつともだ！　そんなことなら早くさういやいゝのに。……天丼でもとらう。」

「すまないわ。」

「へえ、もうそんなにしておもらひ申しちや。」

律儀に恐縮して坑夫も口をいれた。

「なに、いゝんですよ。」啓太郎はもう電話の方に立ちあがつて、「僕は文無しだが、もうぢきこの先生が來ますから拂つてもらひますよ。實

は僕達もさつきから腹がへつてゐたんで、はつはつは。」

蕎麥屋に電話をかけ終ると、椅子に歸つて、啓太郎は改まつて切りだした。

「それで何だい。これからどうするつもりなんだ。」

「どうするつて。」と、良子は答へた。「何とかして大賀と黑田をとつつかまへなくちや。‥」

「ぢや、自宅へ行かう。」

「それがわからないの。何しろ、あたしにしろこの人達にしろ、直接の交渉は水野だけだつたんでせう、だから‥‥」

「うくわつな話だなあ、少々こつちものんきすぎらあ。しかし、かうして會社の看板はあるんだから、時間さへかけれやあ、探しだせる。だが、てつとり早くやるには‥‥」

と、啓太郎は腕を組んだ。

「あゝ。」と何か思ひだしたらしく、良子が立ちあがつた。「ちよつと電話をかしてちやうだいね。久美子さんにかけて見よう。」

黑田と遊んだといふタイピストの佐山久美子。あの人に聞いたら、もしかすると、と思つたのだ。

良子が電話をかけてゐる間に、啓太郎は坑夫達と話してゐた。

「ひどい目に會つたですな。あんたがたの方には組合はないんですか？」

「組合？‥ありましねえだ。」

「さうですか‥なるほど！」

「それでどんなもんでがせう。大賀から金はとれるでがせうか？」

「あつし等は、はあ、取るまで死んでも歸られねえ。取れなかつたら社長の野郞の前で腹を切つて死んで見せると、みなに約束して來ましただ。」

「おつと、待つた〳〵、こつちが腹を切つちや步に合はねえ。切るのは先方だ！　はつはつは。」

と、口では冗談にしたが、啓太郎は、はげしい怒りで齒が鳴つた。――畜生奴！　こんな善良なおれ達の仲間をだましやがつて、探しだしたらたゞぢやおかねえぞ！

良子が電話口から歸つて來た。喜んで明るい聲で、

「黑田の居所がわかるらしいのよ、今心當りのお友達に聞いて見ましたらね、築地の何とかいふ待合に黑田の巢があるらしい、何だつたらそこへ案内してあげてもいゝ、といふ話でしたの。」

「さうか。どうせ奴等の穴はそんなところだらう。だが、どこへもぐつてゐたつて、探しだして見せるぞ。‥おつと、來た〳〵、蕎麥屋だ。」啓太郎もはしやいで、運ばれて來た丼の方に手をのばしながら、「さあ、みんな、食つた〳〵。腹ごしらへをしながら、ゆつくり戰略戰術をたてるとしようぢやないか。」

四十

「黑田さん、お電話！」

「大賀からか？」

「いゝえ。」

「‥困るぢやないか。おれはゐないことになつてゐるはずだ。」

「おほゝゝ、それがね‥まあいゝから出てごらんなさいよ。」

はて、と思ひながら受話器をはづすと、女の聲だつた。

「あたし。‥わかつて？‥久美子、佐山久美子。」

おやつ、と思つた。

「どうしてわかりました？　こゝにゐるのが。」

「まぐれあたりよ。‥遊びに行つてもいゝ？」

「うゝん…だめだ。残念ながらだめだ。」

女どころではなかつた。これから大賀と最後の交渉をやらなければならない。

鑛山から逃げだす途中トロッコがひつくりかへつて、水野は左の足を折り、それからずつと病院に寢てゐる。

「黒田、僕はわかつたよ。要するに僕のやうな人間は、この社會のどつち側にも役に立たない半端者さ。足が折れて片輪になつたこの姿こそ、僕の本當の姿なんだ。ふゝゝゝ。」

そんな空虚な自嘲の笑ひを白いベッドの上で笑つてゐる。

黒田は、しかし、あきらめきれなかつた。大賀を探して東京中をかけまはつた。どうにかしてとつつかまへて、ぎう／＼いふ目に會はしてやりたい。――水野がこんなひどい目に會つたのは、まるで大賀一人の責任であるかのやうに、そしてその責任を糾彈する正義の騎士が自分であるかのやうに、彼は考へてゐる。黒田のやうな人間がよくポケットからとり出す「正義」といふ美しい容器は、時々こんな妙な中味をもつ。

だが、空しく一月ばかりはすぎた。どこにもぐつたのか大賀の姿は見つからなかつた。最後の蛇の智慧をだして、黒田は、築地の例の待合に二三日豪奢なゐつゞけをしたあげく、女將に相當な金をつかませて、大賀がやつてくるとわかつたらすぐに知らせてもらふやうに手筈をきめた。やがて女將から知らせがあつた。その日が今日だ。――うくわつに女の誘ひの電話に應じられる場合でない。

「どうしてもだめ？」

「うん、今日一杯はこゝにゐなければ…」

「さう。…ぢや、さやうなら。」

黒田はどつかとあぐらをかいて、ニヤ／＼した。

「ぢや、さやうなら、か。――さつぱりしてやがる！」

廊下でバタ／＼はげしい足音がして、女將がころげこんで來た。

「黒田さん、たいへん！ 逃げて！」

「どうした、大賀か。」

大賀が暴力團でもつれて來たのかと思つた。

「いゝえ、ちがひます。あの…」

が、遲かつた。女將の後を追つかけて、啓太郎を先頭に、良子と久美子、それに二人の坑夫が、どか／＼乘り込んで來て、黒田をとりまいてしまつた。

「やい！ もう逃げようたつて逃がさねえぞ！」

坑夫の一人がどなつた。

「黒田さん、さつきは電話で失禮！」と、久美子が謎のやうに笑つていつた。そして良子の方をむくと、「ぢや、あたし歸るわ。あたしのお役目はこれでいゝんでせう。それにあたし今日、ほかにお約束があるの。さやうなら。」

さつさと歸つてしまつた。

坑夫に襟がみをつかまれた黒田がふるへ聲をだした。

「ま、待つてくれ。」黒田はまたいひのがれにかかつた。「僕は逃げやしない。この一ケ月間、大賀に會へなかつたんだ。今日やつと見つけだして、こゝで會ふところだ。…ちやうどいゝところに君たち來てくれた。」

「でたらめをおつしやい！」

「この野郎まだうそをついてゐるだ。」

良子と坑夫が口をそろへていつた。

「うそぢやない。己も黒田だ。この場におよんでうそはいはん。大賀は今ぢきやつてくる。君達も力を貸して、あいつをぎう／＼いはしてやつてくれ。」

「ほんとかしら。」

さういひながら良子は啓太郎の顏を見た。啓

太郎は兩腕を組み、足をふんばつて、仁王のやうに立つてゐた。
「うそぢやない。……ね、女將、今に大賀がくるだらうから、すぐこの部屋に案内してくれ。頼んだぜ。」

四十一

何氣なしに自動車をつけた玄關に、黑田がゐた。――しまつた、と思つたが、おそかつた。まあいゝや、と大賀らしく腹をすゑて、懷に手をいれ、のそり〱と奧へとほる。と、ぐるり、啓太郎の一隊に取り卷かれた。
「き、君達は……脅迫しようといふんだな、おれを！」
さすがに聲がふるへてしまつた。
「脅迫？」大賀の前に腕を組んだまゝどしんと坐つて、啓太郎が大きな聲をだした。「笑はせるない。――おれたちは働いただけの賃銀をもらひに來たのだ。ぐづ〱いはずにだせ！」
改めて理窟をいふ氣に啓太郎はなれなかつた。こんな奴には腕づくだ、と思つた。
「金なんかない。無茶なことをいふな。」
「どつちが無茶だ！」
坑夫の一人が、たまりかねてどなつた。
「大きな聲をだすのはよしてもらはう。」眼にすご味をもたせて、大賀はにらんだ。「金はない。水野のあれは、重役出資としてだしてもらつた金だ。會社の事業につぎこんでしまつたのは、あたりまへの話ぢやないか。……それに、だすだけはちやんと、そこにゐる黑田君に渡したはずだ。」
「おい〱、大賀さん。」と黑田がにじりよつた。「をかしないひがかりはよしてもらひたいね。あの金は、ちやんと水野に返してある。……さあ、かうなつた上は、あんたらしくさつぱりと、殘りを坑夫諸君に渡してもらはうぢやありませんか。」
「おい黑田。」と、ゐなほつて、「そんな口はゞつたいことを君がいへた義理かい。……最初に水野君の財産を卷きあげようと相談を持ちこんだのは、君ぢやなかつたか。」
「そ、そんな。……」
「何がそんなだ。……どうせおれは山師さ。だが山師と知りつゝ、わざ〱話を持ちこんで來たのは、君ぢやなかつたのかい。」
「あつはつは。」啓太郎が腹をかゝへて笑ひだした。「鼬ごつこか！大笑ひだ。……だが、そんな泥仕合は、後で二人でゆつくりやつてもらひたいね。……百二十人の坑夫と、その家族に對する責任の方が先だ。こつちから早く片づけてもらはう。おれは氣が短えからなあ。」
「君は一たいたれだ。」
威丈高に大賀がむきなほつた。
「ごらんのとほりの勞働者だ。」とおちついて、靜かに腕のあたりをさすりながら、「だから氣が短えんだ！」
「そ、それが脅迫だといふんだ。要求することがあるんなら、ちやんと法律をとほして、合法的にやつてくれ給へ。」
「法律？――あゝ、それもよからう。だが、おい！今日こゝで面と向ひ合つてゐるのはおれと貴樣だ。法律より先に、おれの腕の方が、どう動くかわからないんだぞ。向うが向うなら、こつちもこつち、てえ諺を貴樣知つてるか！」
じり〱と膝をよせた。
「まゝ待つてくれ。」
意氣地なく悲鳴をあげて、大賀は兩手であふぐやうな恰好をした。
「ぢや、出せ！」形勢がよくなつたのでよろこんだ黑田が口を入れた。「ぎり〱まけて三萬圓だ。」
「貴樣に出すんぢやない。……だがおれはこん

な手間のかゝるお客はいやになつたよ。あるだけ出すから安心しろ。」

小切手を書いて黒田の前にぽいとはふつた。

「何だ、二萬圓ぢやないか。」

「それだけしかない。うそだと思ふなら、銀行に電話をかけて見ろ。」

「わしたちは、二萬圓でたくさんだ。」

と坑夫がそばから口を出した。

「正直だなあ、あんたがたは！」

と黒田があきれてその顔を見た。

「正直がいけないのか。なるほど貴様らしいや。」と啓太郎が笑つた。「おれたちは、必要以上には要求しないんだ。……ぢや、かへらう、あばよ。」

と、立ち上るのを坑夫の一人がひきとめた。

「ちよつと待つて下され。おれはこの黒田ちふ人間にいひぶんがあるだ。」のし〳〵と黒田の前に進みよつて、「やい、いまだん〳〵と話を聞いてれや、手前、とんでもねえ野郎だぞ。おれたちのところへ來て、うそばかりこきやがつて。」

「な、何をするんだ。」

ポカリ！――黒田の身體が横にとんで、床柱の角でこつんと朗らかな音を立てた。

四十二

「ふゝゝ。」

ぐつたりになつた黒田を眺めて、小氣味よささうに、大賀が、くつ〳〵と笑つた。

「あれ、この野郎！　なにがをかしいだ。」と、も一人の坑夫がそれを見つけて、「手前こそ殺してもあきたらねえ野郎だぞ！」

ポカリ！――薬鑵頭をかゝへて、蟹のやうに横にはひ、隣の部屋の方に逃げだした。

大賀が逃げだす後姿を眺めて、今度は黒田が笑ひだした。

「あつはつは、はゝゝ、どつちもいゝざまだ。……だが、おれはなぐられてせい〳〵した。ありがたう、諸君！」と、芝居がかつて、坑夫と啓太郎の方にむきなほり、「考へてみればなるほど僕はつまらない惡黨でしたよ。二十萬圓なんて金は、大きな資本家の財産にくらべれやあ、目糞程のものだ。その目糞程のものをあてにして、一仕事やらうと企んだ僕は、お目出度く出來てゐましたよ。氣の毒なのは水野だが、しかしどうせあれも親爺からふんだくつた金だ。無一文になつた方がさば〳〵してかへつてよからう。ふゝふゝ、さうでせう、ね、良子さん。」

「……」

「あゝ〳〵、ほんとに清々した。おれはこれで元の木阿彌だが、良子さん、あんたも初めからまきなほしだ。もう一度酒場にでもかへつて、第二の水野でも待ちますかね。」

「まあ。」

良子は言葉が出なかつた。

「やい！」たまりかねて、啓太郎がすゝみ出た。「まだ圖々しいことをいつてるんだな。貴樣のその小惡黨根性が、どれだけ多くの人間を苦しめたか、まだ『わからねえ』のか。……貴樣は金持の馬鹿息子を食物にしようとした。そして貴樣よりも一枚うは手の惡黨から食物にされた。それもよからう。どつちみち鼬ごつこだ。そんな腐つたあぶくみたいな人間同士のことはどうでもいゝ。……だがそのために、正直に働いてゐた何百人かの人間が、山の中で干乾しになりかゝつたんだぞ。それでも貴樣笑へるのか。……うぬ、まだ笑つてやがるな。畜生奴！」

拳がうなつて、黒田の身體はもう一度横にとんだ。たら〳〵と鼻血が疊に落ちた。

「啓さん！」青くなつて良子がとめた。「堪忍してやりなさいよ。こんな男、なぐつたつて

仕方がないぢやないの。」

「だまつてろ。とめだてすると、お前も一緒にひつぱたいちまふぞ。」

「まあ。」

だが、良子は、なんだか心の底からうれしかつた。若い力の象徴のやうにがつしりとつつ立つてゐる啓太郎の姿！——昔の啓太郎には見られなかつた、確信と誇りにみちた眼の輝き。……この確信とこの誇りを、啓太郎に與へたものはなんだらう。何が啓太郎をこんなに強く美しくしたんだらう。あの胸に顔を埋めて、あの腕に全身を任せて、この不思議な力の源を聞いて見たい。あたしは聞きたい、どうしても聞きたい。

「さあ、歸らう〳〵。こんなところに長居は無用だ。……皆待つてるぜ、今晩にも鑛山に歸つてやらなくちやあ。」

「どうもはあ、えらら お世話になりました。……」

ニコ〳〵して坑夫が頭をさげた。

「さあ行かう。」

「あゝ行くべえ。」

どや〳〵と廊下に出た。——良子がぼつんと部屋に殘つた。

「おや。」と啓太郎がふり返つた。「良公。お前は來ないのかい？」

「あたし、行くところがないの。……」

「馬鹿！……こんなところに殘つてる奴があるか、さつさとついて來い！」

四十三

東京に夜のあかりがいり始めた。——啓太郎と良子は、上野驛で坑夫達を見送つて、公園の葉の落ちた櫻の木の間を歩いて行つた。

「……みな喜んでゐたわね。おかげで久しぶりに、白い御飯とうまい味噌汁が食べられますつて。……あたしほろりとしちやつたわ。」

啓太郎はだまつて、ずん〳〵先に歩いて行つた。

「啓さん、……怒つてるの？」

小走りに追ひついて、良子が顔をのぞきこむやうにした。

「何をおれが怒るんだ。」

「だつて、そんなにだまりこんで。……」

「おれは仕事のことを考へてゐるんだ。」

「仕事？……いゝのね、あんたにはちやんと全身をうちこめる仕事があつて。……あたしはまだふら〳〵なの。」

「ふら〳〵しなきやいゝぢやないか。」

ぶつきらぼうな例の調子であつた。

「まあ、うれしい。ぢや啓さん、あたしをあんたの仲間にしてくれる？……」

「え？」

と、立ちどまつた。

「……あんたと一しよに暮しながら、あたし、しつかり勉強して、えらくなりたいの。」

「おれたちの仲間に入つたつて、えらくなれやしねえぜ。それに養へないよ、お前なんか。」

「養つてもらへなくてもいゝわ。ね、仲間にしてくれるわね。だつて、……あたし、ほんとに啓さんが好きだし、啓さんもほんとにあたしを……」

「よせやい！」

「だつて、あたしこれまで、いろ〳〵あんたにすまないことをしてゐたの、それも忘れて、こんなに骨を折つて力を添へてくれたんですもの。きつと啓さんは心の中で、あたしを好いてゐてくれるんだわ。」

「うぬぼれるない」と、啓太郎ははづかしさうであつた。「おれはたゞ仲間の難儀をだまつて見てをれなかつたからやつたんだ。お前にたのまれたからぢやさら〳〵ねえ。」

「それはわかるわ。……だけど、啓さんがあたし

を好きでないといふのは、それはうそ！」
「……お前を嫌ひだなどといつたおぼえはないぜ。」
「ありがたうよ、啓さん。……」良子の眼がうるんで來た。「ぢやあたし、これからまた仕事を探すわ。そしたら啓さん、きつとあたしをあんたのゆく方にひつぱつてくれるわね。約束して、ね、啓さん。」
「約束するよ。」と、啓太郎は屈託がなかつた。「おれたちの仕事は、だれだから入つちやいけねえつてそんなものぢやないからなあ……おお、いつの間にかすつかり夜だ。どうだい、かうして見ると、東京もなか〳〵見かけだけはきれいだな。中味は、ねつからうす汚く出來てやがるんだが。……」
二人は何時の間にか、公園のはづれの崖の上まで來てゐた。――眼の下にひろ〳〵と、夜の化粧をすました東京が笑つてゐた。
「おつと時間だ。」思ひだしたやうに啓太郎がいつた。「おらあ今晩會がある。……お前泊るとこあるかい。」
「えゝ、久美子さんのところへでも。……でも、啓さん、是非ゆかなきやならないの、その會？」
「あゝ、どうしてもはづせない。」
「さう。……ね、お願ひだからもつと話して行かない。……あたし何だか、今晩別れたくない氣がするの。……」
「あつはつは。よさうぜ、色模様は。……なあに會ひたかつたら、もう何時だつて會へるんぢやないか。」と鉛筆を取りだして、バットの空箱に住所を書き、「おれのとこはこゝだ。明日にでもやつてこいよ。」
「さう。いつ行つてもいゝの。」
「いゝとも……安心してやつて來いよ。夜中に來たつて、おれはお前を裏口から追ひ歸すやうなことはしねいからな。はつはつは。これは冗談だ。……ぢや良公、あばよ。」
さつさと、宵暗の公園から、唸つてゐる街の交通の中へ、啓太郎は歩きこんで行つた。……
そして次の日の夕方。――良子は、地圖をたどり〳〵、本所の狹い露路の奥に、啓太郎の家をたづねあてた。
が、その家は空つぽであつた。散々に泥靴にふみ荒されて、戸が破れ、障子が折れ、電燈が割れて……
昨夜、大亂鬪があつて、集まつた勞働者が十人あまり――逃げたものも二三人はあつたらしいが――一せいに檢束されて行つた、といふ近所の人の話であつた。
茫然と、良子は露路の奥の暗にたちすくんだ。いつまでも、いつまでも……
都會の双曲線よ！――二人は、いつ、そしてどこで、まためぐり合ふことであらうか。
（昭和四年十―十一月）

鐵窓の花

昨年の冬から秋にかけて、私はK市の未決監で、三十八人の同志と一しよに暮してゐた。

*

僅か三分か四分、長くて五分とはないあわただしい散歩である。けれども毎日、私はその運動時間を待ちかねた。

獨房の窓からは、獄庭の壁のコンクリートの灰色が見える。ふり仰げば空も見える。が、鐵窓に仕切られた二尺四方の蒼白い斷片は、空と名付けるにはあまりに小さすぎた。屋根の重い、淀んだ空氣と薄い光線の小部屋から、屋上庭の大氣と日光と、街の屋根と、周りに霞む山々の景色の中に連れ出されることは、一週一度の入浴と共に何よりも嬉しく待たれた。

土窟の中の墓場のやうに、憂鬱に靜まり並んだ監房の列の前を通り、鐵の階段を登り、二階の中央から屋根へ抜けるコンクリートの階段を屋上庭に立つて、藁の心で編んだ古い編笠を捨てると、屋の上から、碧色に晴れ上つた空がさつと開ける。流れる風が肌に觸れ、木立と遠い屋根と、霞んだK市の山々が、高い周壁の向うから、光と音を持つた矢のやうに、視界に飛びこんで來る。足をのばし、手を振り、胸を張り、コンクリートの床をバタ〳〵鳴らし、私は愉快な驅足を始める。・・・・

屋上庭の驅足の音は、獨房の中にもよく聞えて來た。朝食前に、雜居囚の中隊教練のやうな運動が終つてしまふと、それから午後へかけて、私達獨房囚が一人づつ、編笠をかぶされては連れ出された。その姿が、金網を張つた覗き窓から見えるので、拘引されて一月もたつた頃には、どの監房に誰がゐるかは、ほゞ見當がつくやうになつた。讀書に疲れ、灰色の木材のやうになつた頭を扉にもたせて、覗き窓からそつとうかゞつてゐると、偶然前の監房の扉が開かれたりして、積みあげた蒲團の上に、辭書と書物を小さくひろげた、同志の熱心な讀書の姿が見えたりする。そんな時には新しい元氣が、不思議な泉のやうに湧き流れる。襟を正して坐りなほし、讀みかけた書物の頁に、燃ゆる視線を彫りつける。また、今、階段を登つて行つた同志の跫音が、やがて屋上庭の跫音となつて、壁を傳はり、一定の間隔を置いて、コンコン〳〵と弱く強くひゞいて來ることもある。その規則的な斷音を數へるともなく數へてゐると、ふとそれがよく外國の物語などにあるアルファベットの數を叩く囚人の通信のやうに思はれたり・・そんな幼い空想につい獨りで微笑んだりした。

*

二月が過ぎ、窓の雪が消え、三月が行き、雲の色が和み、四月が來て壁の上に太陽の光が明るい金色に澄み始めると、鐵柵を通して見る獄庭の壁ぎはに、小さく緑の草の芽が、鹿の子まだらに土を破り始めた。ひといろに緑ではあるが、あるものは濃く、あるものは淡く、あるものはかすかに赤みを帶び、あるものは銀色の生毛を持ち、空の晴れた時には小さい影を土の上に落し、雨の日には銀鼠の水粒をつけ、風の日には黑く萎んでぶる〳〵震へた。

裏門から裁判所へ通ふ五間あまりの石廊は、廣々とした芝生を兩側に展げてゐた。櫻の若

木が五六本、屋根ほどの高さで、不規則に植わつてゐた。冬の間は、骨ばかりの枝を延べて、吹く風の中に黒く凍りついてゐたので、感情なしに眺めてゐたのが、四月が近づくと、何時の間にか冬芽をふくらませ、花をつけ、花瓣を吹きこぼし、やがて飴色の空氣の中に、したゝる若葉を輝きなびかせ、重く甘い香氣を葉裏にこめて羽を展げた。

一週間に一度、二週間に一度、どうかすると一月に一度、獨房から呼び出されて、裏門の鍵の音を聞き、石廊を歩いて、私達は檢事の檢べをうけに出廷した。櫻の木が、冬芽から花、そして若葉になるまでの季節の成長も、實はその出廷の時々に、編笠の隙間から眺めたのである。

檢事に對しては、私達は飽くまで頑強であつた。彼等の手をつくした、ずるい罠に陷らないやうに、そして同志の計畫に破れ目を作らないため、あらゆる注意と努力が拂はれた。

あるものは、檢事が何を聞いても石のやうに口を開かなかつた。他の同志の調書をつきつけられると、それに書いてある通りのことを答辯して、それからまた頑として口をつぐんだ。

あるものは、檢事に幾何學の解けさうにもない難問を出した。そして言つた。――「この問題が解けたら、答へませうよ。」

さうした同志の消息が、出廷する度ごとに、檢事の何氣ない言葉の端から聞きとれた。そして私は元氣を出した。

私はよく檢事に議論をふきかけた。朝から日の暮れまでかゝつて、頭腦の力のありたけを絞り對手を滅茶に負かしてやつた。言葉が出なくなると、檢事は額の汗をふきながら言つた。

「君達には罪人意識が全くないのだから話にならぬ。」

「罪人でないものに、罪人意識があらう筈はない。」

私は昂然とさう答へ、そしてそのまゝ一週間か二週間獨房にはふつて置かれては、また呼び出されて同じことをくりかへさせられた。

檢事達は困り果てたらしく局面を展開する爲に、正攻法をとり始めた。被告一同を優待して、個人的な親密を增さうと心掛け始めた。そして私に歌でも作らないかと言つた。これが君達の仲間が作つた歌だと言つて紙片の綴りを見せた。私はその表に見覺えのある幾つかの手蹟を見た。

窓の鐵は太きこそよしわれをりて
　それを燒き切る焰を思ふ

Mの手蹟らしかつた。

城壁に旗ひるがへりそのもとに
　"Shot, killed" のビラ散りてあり
　　――北京の追憶――

Oの筆である。また、こんなのもあつた。

燕が窓に來ると言ふ
　ドイツの牢獄がなつかしい。
この窓は北向き
日の光さへやつて來ぬ。

さうかと思ふと――

その昔秀才の名の高かりし
　若き檢事のチョビたるひげよ。

讀んでゐるうちに微笑が湧いて來た。監房に歸つて、私も詩みたいなものを考へた。そして

次の出廷の時に檢事の紙の上に書きつけた。

　當世な療養院
未決監とは
當世なサナトリュームだ――
便所までが專用だ。
洗面所にベッド――專用の便所、
一人に一つ――まるでホテルだ。
壁の明るい小部屋が
屋根の上には屋上庭園
階下には浴室
散歩と入浴
時間を極めて、さうだ、時間を極めて。
食事も時間だ
新鮮で單純で衛生的で
食後は窓によってのどかに煙草――と
　は譃だ。
そんな不衛生は許されない
總てが衛生的に、然り衛生的に！
でも不自由だらう、と言ふのかい？
そりやあね――
忍びやかな靴音が廊下にひゞき、鍵の音
　がチリ〳〵鳴り、
鬚のある眼が時に覗窓に光るさ。
だから言つて置いた、未決監とはサナト
　リュームだ。
病院に不自由は、君、附き物さ。
そこでやがて、
晝が來て、夜が來て、時間が流れ、
療養空しからず、患者全快、
小獅子のやうに健やかになつて出たら、
出たら、
　さうだ、出たら！

＊

街と獄窓とを包む若葉の中で、そんな風に檢事の調べが徐々として重い鎖をひきずつてゐる頃であつた。――私は監房の中で、珍しいものを發見した。

　と云ふのは、一本の朝顏の蔓なのである。青く、細く、薄い葉を互ひちがひにつけて、娘のやうにすらりとのびた草の蔓を、朝の運動につれ出される階段の上から、足の下の明り窓の硝子を通して、階下の監房の中に發見したのであつた。

　私は思はず足をとめた。輕い驚きの叫びに似たものが、或は脣から洩れたかも知れない。――監房の中に青草の蔓が、しかも房々と葉をつけて、壁を這ひ、窓の鐵柵にからんで靜かに葉裏の生絲を光らせてゐる。

「歩け！」

　下から看守の聲がした。

「歩け！」

　二度目の聲で、漸く動き出した私は、自分の監房に歸ると、一日中朝顏のことを考へ續けた。

　次の日、私はまた階段の途中で足をとめた。氣のせゐか、朝顏の蔓は昨日よりも延びてゐるやうに思はれた。想像した通り、蔓は地面に近い空氣窓から生え出て、それが三尺の壁を傳ひ、窓の鐵格子に、春のびをする子供のやうに、細い銀色の蔓を卷いてゐる。

　と、その時、私は危く聲を出しさうになつた。明り窓の硝子と朝顏の蔓との間の空間に、人間の顏がぽかりと浮んだのだ。

「あ。」

　長い獨房の生活に、白蠟色に澄み始めたその顏は、同志の一人であるSの顏であつた。が、

まばらにのびた細い鬚に埋れたその顔は、眼を見はつて佇立してゐる私の顔に、チラリと微笑をなげたまゝそのまゝさつと消えてしまつた。

「歩け！」

うしろで看守の鋭い聲がした。

*

――鐵窓にからんだ朝顔の蔓を發見して以來、正直なところ私はやゝ抒情的になつた。

地面に近い空氣窓をそつと開いて、土の上を這つて來る冷い空氣の流れを頬に感じながら、壁の奧から射して來る微かな光のあたりに、若しや絹絲細工のやうな蔓の先きが、かすかに頭をあげて震へてゐはしないだらうかと、うかゞつて見たりした。

壁の外には、囚人の作つた花園がある。

鳳仙花や、鶏頭や、南瓜や、縞模樣のあるちさの葉や、それから綠の朝顔や、さうした草花の數々が、赤い煉瓦の壁の根につゝましく盛りあがつてゐるのを、所長室に呼び出された時に窓から見た。

花の種を蒔く囚人。その種が芽を吹き、葉を展げ、蔓をのばし、その蔓一本が壁を傳はつて獨房の空氣窓に迷ひこむ。或る朝、恐らく顏を洗はうとして、震へる蔓の薄綠の指先きを、若い獨房囚がふと見つける。……それがやがて、日毎に延び、とぼしい獨房の光の中で、その葉を青く吹き展げる。吹き展がつた葉の色を監房檢査の看守が發見する。……看守と若い獨房囚が顏を見合せる。囚人がまばたきをする。看守がまばたきをする。看守が脣をゆがめる。囚人が脣をゆがめる。看守が微笑する。囚人が微笑む。……急に看守が眞面目な顏をする。囚人がはつとして眼をみはる。が、看守は眞面目な顏をくづさずに、だまつて出て行く。扉がしまり、カチリと鍵の音がする。……朝顔は無事にのびて、もう窓まで來てゐる。淀んだ空氣の中に、その葉を吹き展げた。やがて花をつけ始めるであらう。

*

多くの時間がたつた。

その間に、私は何冊かの本を讀んだ。運動と生活の二重の勞働に追はれて、外に居る時に讀むことの出來なかつた本の何冊かを、熟讀することが出來た。頁の上に展開される新しい理論と新しい世界とは、獨房の屋根の重さに壓迫されて、やゝもすると萎みこむ私の心に火をつけた。そんな時には、明るい秋の午後のやうな風景が私の心に展がつて、暗い獨房の壁が、聖堂の壁のやうに輝いた。新しい計畫と勇氣が、五體の中に滿ち滿ちた。――腕を組み、胸を張り、若い騎士のやうに晴々と、私は監房の中を大股に歩くのであつた。

が、讀書は時々私を勞らせた。固く重い肩と、木屑のやうになつた頭と、ぐつたり氣の拔けた四肢の泥人形に、私の身體を變へてしまつた。そんな時には、ぼんやり壁にもたれては、色々な追憶やら空想やらに時を消した。

豫審は何時終ることやらわからない。身體の衰弱は眼に見えてひどくなつた。そして、獨房の空氣は近づく夏に、だん／＼暑さを增して來る。同志の中には、ぽつ／＼病人が出來始めたといふ。……さうした重い時分の時に、私はよく母のことを思ひ出した。

……子供のころ、小學校から歸ると、私はいつも母の働いてゐる製絲工場に出かけて行つた。暗い工場の中をちよこ／＼歩いて、女工さん達に繭を運んでやつた。絲枠が唸り、濕氣が立ちのぼり、立ちのぼる湯氣の中で、若い女工達の萎びた頬や髮の毛が薄くぼかされ、彼女達の桃色の腕と指先きが、湯槽の中でくる／＼踊

つてゐる眞白な繭の上で、不思議な花のやうに綴つてゐた。日が暮れて、絲枠と絲枠との間に古いランプがつく頃まで、私は工場で遊んでゐた。七時が來てボーが鳴り、水がひく時のやうな餘韻を殘して機械の音が靜まると、絲繰臺の上から降りて來た母の腰に、小さい頭をすりつけながら、私は工場の浴場へ連れられて行くのだつた。

溝の匂ひと、朽ちた木の匂ひのする脫衣場で、母は私を裸にしてくれた。そして、私の小さい裸の姿が、ちよこ〳〵湯殿のたゝきの上を歩いて、女工さん達で一ぱいになつてゐる浴槽の中にかくれるのを見屆けて、自分の衣物を脫ぎ始めるのだつた。

母は、その五十年の生涯を、地下水のやうに壓へられ、日蔭の草のやうにつゝましく生きて來た。そして、地下水のやうな、日蔭の草のやうな、優しく謙讓な心を持つてゐる。——私はそれを知つてゐる。

ある素封家に拾ひあげられて、私が學校に入れるやうになつた時、母は小豆を一合買つて來て、『先祖樣』に赤飯をたいた。そして私に食べさせた。

大學に入つて私が社會主義者として行動するやうになつた時、誰よりも深く悲しんだのは母であつた。そして、誰よりも早く理解してくれたのも母であつた。

母は今、東京にゐる。そして、大學の同志達の合宿の世話をしてくれてゐる。

「…夏の着物を送りました。私はたつしやですから御安心下さい。身體を大切にして、病氣をしないやうに氣をつけて下さい…」

「檢閱濟」の朱印のついたそんな手紙を、私は一月に一度位づつ受取つた。

母のことを考へると私は子供のやうに無邪氣に淋しくなつた。これから先き、どうして母を養つたものか、と考へたりした。週期的にまはつて來る憂鬱な退屈な折々に、私は歌のやうな歌でないやうなものを作りあげた。そして、出廷の折に、檢事の手帳の上にそれを書きつけた。

獄窓によりて母を想はぬ日のなきを
　心弱しと嘲るや君

わが母はいとしき母ぞわがために
　工場の冬を十年忍べる

われ泣けば母また泣きぬ
　金のなき米のなき日のつゞける果は

繭の毒に白くはれたる指をもて
　わが淚をば拭ひたる母

學窓に十年遊びてその子吾れ
　母の望みを裏切りしかな

女工の話例へにひきて主義をとけば
　母いくたびかうなづきて聞く

出世して家を興すといふ望み
　いつしか母も忘れたるらし

ほゝゑみてわれを送れる母の眼の
　笑まひのかげの淚忘れず

その子われ獄舍にありて母を想ふを
　心弱しと嘲はざれ君

＊

讀書やら追憶やら、時折襲つて來る病氣やら

に日を送つてゐるうち、やがてSの監房の朝顔は見事な花をつけた。

ある朝の運動時間に、階段の上から、今迄は唯一色に緑色であつた蔓と葉の間に、白くふくらんだ蕾を見つけた時、私の心は不思議な興奮と感傷で一杯になつた。その日一日、私はそは／＼と落ちつかなかつた。

私は中學生のころに讀んだ小さい物語を思ひ出してゐた。…：昔、高い塔の上に一人の囚人が幽屏されてゐた。ある日、彼は、おそらく風が運んで來たのであらう、一本の小さな草の芽を發見した。囚人は服のはしを裂いて、小さい輪をそのまはりにおいた。そして食事のスープを水に溶いては靜かにその根にそゝいでやつた。幾日かが立つて、草は小さい花をつけた。ある日高塔の番人がやつて來た。彼は、職務的な習慣から、何の氣なしに花の根を靴の先きでちよつと蹴つた。翌朝、囚人は石の床の上に白く萎んだ花の死體を見た。囚人は日を覆うた。その日の夕方塔の番人は塔の根許の敷石の上に、無慙にくだけた囚人の死體を發見した。…

この物語とちやうど逆の筋を、私は朝顔の紅い花の中に見た。おそらく、あの階段の上を通る同志達は、毎日階段の途中でちよつと足をとめては、看守に叱られてゐることであらう。

＊

朝顔の花が咲き盡し、黄色さを増した葉の間に、小さい手鞠のやうな實がふくらみ始めたころ豫審が終結した。八ケ月の獨房生活の後、私達は保釋されることになつた。

先づ病人が先きに出された。それから二人位の割合で、調べの早く濟んだものから、順々に出されて行つた。

覗き窓から、備品や本の包みを兩手にさげて、嬉々として出て行く同志達の姿が毎日うかがはれた。嬉しさに眠れない夜が續き始めた。急に時間の重さが數倍になつた。

保釋が始つて六日目であつた。

「さあ、愈々さよならですな。」

受持の看守が言葉を改めてさう言つて、微笑しながら、私の兩手に出廷用の手錠をゆるやかにかけた。

櫻の木の間の石廊を歩き、暗い階段をのぼり、檢事調室の扉をあけた時、私はそこに意外な顔を見た。檢事の代りに、Sの白くやせた顔があつたのだ。

「やあ！」

「やあ！」

二人は暫く、默つて顔を見合せてゐた。

「君も今日か。」

私は、はずんだ聲で、Sの晴やかな答を期待しながらさう聞いた。八ケ月振りに、同志と口を利くのが嬉しかつた。

「むう。」

Sはちよつと笑つて見せたが、どうしたことかすぐに笑顔を消して、默りこんで下をむいた。

「どうした。」

「むう、今、親爺に會つたのだ。」

「お父さんが迎へに來たのかい。」

「むう。親爺の顔が、僕がはひつた前に見た時よりも、十年ばかりも年をとつて見えたのだ。いしわが深くなつて、頬の肉がげつそり落ちてゐた。」

「……。」

私は言葉が出なかつた。暫くして、慰めるやうに言つて見た。

「でも、もう出るのだから…。」

「や。」と、Sは私の言葉をさへぎつた。「親爺にはすまないが、僕は出たくないとさへ思つてゐるのだ。僕の家庭はとても駄目なのだ。今

迄はうちには秘密に運動をやつてゐたのだが、今度出たら、運動はおろか、本も讀めなくなるに違ひない。新しい牢獄だ。こゝにゐれば、せめて本だけは讀めるのだが……。」

が、その時、看守が扉の外からSを呼んだので、私は彼の監房の朝顔の話もするひまもなく、別れなければならなかつた。

私はひとりで、檢事調室の堅い椅子によりながら、子の入獄に十年も年をとつたと言ふ父親のことを考へた。その親を前に見ながら、まだ獨房にゐたいと言ふ子のことを考へた。

子の主義を理解してくれる母をもつた私は幸ひである。然し、さうした牧歌的な肉親的感情に惠まれてゐるものが、三十八名の同志の中に果して何人あるであらうか？　社會主義者が肉親感情に溺れることは、過去に溺れることである。悲しい必然である。――私は歴史の齒車の鐵のやうな廻轉を、心の中にぎりぎりと感じた。

……書類をかゝへて檢事の姿がはひつて來た。

出獄して、一ケ月ほどたつたある日の午後であつた。同じ未決監にゐた同志の一人が訪ねて來た。

運動の進展がとても激しくて、思ひがけなかつた新形勢が展開してゐるので、それに歩調を合せることがとても骨だ、是が非でも讀まなければならぬ本だけでも十冊近くもある。……そんなことを話し合つた後、二人の話は自然、獨房生活の思ひ出話に落ちて行つた。

私はふと思ひ出したので聞いて見た。

「Sの監房に朝顔の花があつたな。憶えてゐるか？」

「あゝ、憶えてゐるとも。さうさう、面白い話がある。Sの奴がね、あの朝顔の花に、毎朝、息を吹きかけてやつたと言ふのだ。窓に近く、光に近い花は、丸く咲き展がるのに、床に近く、光に遠い花は、白く萎んで半分しか開かない。その半分しか開かない花に、Sが毎朝息をかけてやると、萎んだ花の一つ一つが、丸くぽつかりと咲き展がる……。」

「丸くぽつかりと？」

「むう、丸くぽつかりと――さういふ形容詞を使つて、S自身が皆んなに話して聞かせたのさ。」

「なるほどね。」

私は、うなづいて、相手の顏を見て微笑した。

相手も默つて微笑すると、服のポケットからとり出したバットに、靜かにマッチをすつたのであつた。

（昭和二年四月）

年譜

略歴

明治三十六年五月三十日、九州大分市の大分港で生れた。本名後藤壽夫。父は田舍の中農の次男で、教師、船乘、巡査等の經歷を經て、この頃、この港町で電車の切符や煙草や菓子を賣る小商人であつた。母は士族のあととり娘で、本姓の後藤は母方の姓である。

明治四十三年、大分縣立師範學校附屬小學校に入學した。十歲前後まで、裕福な商人の一人息子として、苦勞を知らぬ生活が續いた。十二歲の時、父は百姓の小心さと、商人の遊蕩から店をつぶしてしまつた。北大平寺といふ大分市の南端の農民部落にひきこんで、崩れかゝつた土藏を借り、そこで父は草鞋をつくり、母は製絲工場に入つた。父の作つた草鞋を賣り歩いた。やつと生きてゆくだけの生活が續いた。

大正四年、大分縣立中學校に入學した。沒落した一家を再興するものは、高等教育を受けた息子であることを父母は堅く信じてゐたから、窮迫の生活の中から、中等學校に通はせた。母が製絲工場で働いた金で、中學の五年間を續けることが出來た。

大正十年、第五高等學校に入學した。學校の成績がよかつたので、或特志家に見出されて、學資の補助を受けることが出來た。高等學校の二年の初頃まで、文藝部委員として、文藝部機關誌「龍南」に短篇小說を發表してゐた。しかし、此の時代は、意識的なプロレタリア作品ではなかつた。高等學校時代の半ばに、恐しい懷疑に襲はれた。性格らしいものが築かれ始めると共に、一切の價値が眼の前で轉倒し始めた。――丁度日本の近代的プロレタリアートが漸く戰ひ始めた時代であつた。煩悶と懷疑の中で、宗教に走り、藝術に溺れ、そして最後の救助者として社會主義に漸く近づいた。二年の半ばから社會主義研究を始め、RF會（ローテ・ファーネ）と稱する學生社會主義グループを組織した。同年秋に、帝大新人會（N・S）の一行が學生社會主義グループの全國的統一の目的を兼ねた講演旅行を關西から九州に亙つて行つた。これを機會に高等學校聯盟（HSL）が作られ、五高に於けるHSLの指導的立場にあつた。この頃は、文藝に關心を持たなくなつた。專ら學生社會運動に全精力を集中してゐた。

大正十二年、東京帝國大學法學部に入學した。大學の三年間は、自分の勞働によつて學資を得た。飜譯をし、「マルクス主義」同人となり、産業勞働調查所で働いた。大學入學と同時に、帝大新人會に入り、その中心的分子として活動した。大學二年の九月、第一回學生社會科學聯合會が開催され、學聯の創立と共にそれ以後は、學聯と新人會に屬し、學生運動の組織者であつた。この頃、半ば生活の爲、半ば自分の好みから小說を書いてゐた。雜誌「新人」に、「月の見た話」（『新いそつぷ物語』の一部）を發表したが、主として政治運動の方面に活動し、「マルクス主義」に『國際勞働組合の新展開』、總同盟分裂後、同誌に『日和見主義の誕生』等の論文を發表してゐた。大學二年の冬（大正十四年一月）父が死んだ。息子が社會主義者になつたため、一切の希望をうちくだかれ、僅かに貧乏人の本能で、息子の歩む道が間違つたものでないらしいことをおぼろげに理解したまゝで。父の死後、母を東京に呼び、此の後は母と共に暮した。大學三年の半ばから、社會主義文藝に積極的な關心を持ち始め、帝大學生間に、社會文藝研究會を起した。同年暮、小樽高商に

軍教事件起り、學聯のオルガナイザーとして北海道に派遣され、學生運動を指導すると共に小樽高商の學聯支部を作つた。處女作「林檎」は、この時に題材を得たものである。

大正十五年三月十二日、學生社會運動の指導分子の一人として檢擧され、三十七名の學聯關係の學生と共に、六ケ月の未決生活を送つた。八月三十日、この京大事件の豫審終結し、保釋された。この後、プロレタリア文藝運動に積極的に活動するやうになつた。東京帝大學生を中心に、マルクス主義藝術研究會を起した。十二月、プロレタリア文藝聯盟創立のために努力し、同聯盟成立に際し、第一回本部委員に選ばれた。京大事件保釋後、「繪のない繪本」「蘭」「當世實業家氣質」「N監獄署懲罰日誌」等を發表し、當時擡頭の葉山嘉樹と並び稱された。一方批評的活動にも見るべきものがあり、青野季吉と共に、「文藝戰線」の指導的理論家として活動した。又、此頃諷刺文學を提唱した。その理論を實踐した作品に「當世實業家氣質」「黑田九郎氏の愛國心」等がある。

昭和二年二月、「文藝戰線」に、同人會議で命ぜられて草した「プロレタリア文藝運動に關するテーゼを發表した。六月、日本プロレタリア文藝聯盟内部の觀念的極左的傾向に反對する一派と共に新に勞農藝術聯盟を組織し、その文學部に屬した。主として勞藝機關紙「文藝戰線」に、創作評論を發表してゐた。十一月、反勞農派の一派と共に、前衛藝術家同盟を組織した。機關誌「前衛」に據つて、勞農派と論爭すると共に、一方福本主義的傾向と鬪つた。この頃「歷史の發掘」といふ小論を發表し、その理論の實踐的作品として、「戰鬪艦ポチョムキン」を「前衛」に、「白髮の死骸」（後に「密偵」と改題し「戰旗」に發表した）を「無產者新聞」に掲載した。埋れた歷史を、その歷史的現實性に於て發掘することを意圖した作品である。

昭和三年三月、プロレタリア藝術聯盟と前衛藝術家同盟と合同し、全日本無產者藝術聯盟（ナップ）と改稱し、その文學部員となつた。十一月、國際文化研究所創立に參加し、現在同研究所改稱プロレタリア科學研究所員である。十二月、ナップ再組織され、全日本無產者藝術團體協議會と改稱され、その加盟團體日本プロレタリア作家同盟に屬した。現在、同作家同盟員である。この年の後半より、作家として最も活動した。

昭和五年五月二十八日、京大事件の大審院判決が言渡された。「禁錮二ケ年未決通算八十日。七月十八日、自傳的小說「海と飛魚の子と」を殘して入獄した。

作品

創作

『林檎』	「文藝戰線」	大正十五年	十二月
『公園の嫌叟』	「文藝戰線」	同	四月
『繪のない繪本』	「新小說」	同	七月
『蘭』	「解放」	同	七月
『新いそつぷ物語』	「新小說」	同	十月
『馬鹿』	「新人」	同	
『N監獄署懲罰日記』	「新潮」	同	十月
『當世實業家氣質』	「文藝戰線」	同	自十一月至十二月
『古典的な手紙』	「辻馬車」		
『牢獄の五月祭』	「文藝時代」	昭和二年	一月
『屑』	「文藝市場」	同	
『エティケット』		同	
『偉大なる創造主』		同	
『愛國者』	「讀賣新聞」	同	
『白銅貨』	「文藝道」	同	
『鐵窓の花』	「文藝戰線」	同	四月
『酒盃』	「改造」	同	五月

『R看守部長の寛大』「若　草」昭和二年
『工場の幽靈』「文藝公論」同
『夢を見る驢馬』同
『大進軍』同
『紅色の朝』同
『初夏の晴衣』同
『鎖』「新　潮」同　十月
『昭和獻木奇談』同
『戰闘艦ポチョムキン』「文藝戰線」「前　衛」昭和二年十二月 昭和三年三・四月
『黒川家の强盗』「文藝春秋」昭和三年　一月
『黒田九郎氏の愛國心』「太　陽」同
『近代的女性』「東京朝日」同
『獨房の筆』「文藝春秋」同　六月
『踊り』「サンデー毎日」同　七月
『曙人』「創作月刊」同　七・八・九・十月
『大助の結婚』「東京朝日」同　八月
『密偵』「戰　旗」同　九月
『百合子の幸運』「サンデー毎日」同
『檻の中の四人』「戰　旗」昭和四年　一月
『結婚の幸福』「新　潮」同　四月
『線の黨員章』「大　衆」同　四月
『斷髪の社會學』「近代生活」同
『霧のアパート』「大　衆」同　五月
『擬情』「新　潮」同　六月

『ロビンフッド事件』「新　潮」昭和四年　九月
『キエフ大劇場の暗殺』「改　造」同　九月
『S半島の輿論』「中央公論」同　九月
『妻の罰金』「大阪毎夕」同　九月
『都會双曲線』「東京朝日」同　自十月至十一月
『梨枝子の趣味』「婦人世界」同　十一月
『地底の火花』「戰　旗」同　十二月
『街に展く窓』「婦人世界」昭和五年　自一月至八月
『間米米吉氏の銅像』「改　造」同　一月
『劒舞の效果』地方新聞　同　一月
『一九三〇年の序曲』同　一月
『或る明るい物語』「若　草」同　三月
『早春戀愛史』「婦人畫報」同　自六月至十二月
『海と飛魚の子と』「改　造」同　八月
『金！』「經濟往來」同　十月

創作集

『縮のない繪本』、『牢獄の五月祭』、『鎖』、『一東古典的情書』（支那譯）、『密偵』、『都會双曲線』、『鐵窓の花』、『新選林房雄集』、『海と飛魚の子と』（『新鋭文學叢書』）

評論隨筆集

『都會の論理』

飜譯

『經濟科學概論』ア・ボグダーノフ
『社會意識學概論』同
『第三インタナショナルの崩壊』レーニン
『クーゲルマンへの手紙』マルクス
『小さいペーター』ミューレン
『眞理の城』同
『戀愛の道』コロンタイ
『戀愛と新道德』同

不在地主

救援ニュースNo.18.附録

「市民のために!」

蟹工船

小林多喜二

不在地主

この一篇を、「新農民讀本」として全國津々浦々の「小作人」と「貧農」に捧げる。「荒木又右衞門」や「鳴門祕帖」でも讀むやうな積りで、仕事の合間々々に寢ころびながら讀んでほしい。

一

「ドン〳〵、ドン」

泥壁には地圖のやうに割目が入つてゐて、倚りかゝると、ボロ〳〵こぼれ落ちた。――由三は半分泣きながら、ランプのホヤを磨きにかゝつた。ホヤの端を掌で抑へて、ハアーと息を吹き込んでやると、煙のやうに曇つた。それから新聞紙を圓めて、中を磨いた。何度もそれを繰返すと、石油臭い匂ひが何時迄も手に殘つた。

のめりかけてゐる藁屋根の隙間からも、いゝぴしやに取付けてある窓からも、煙が燻り出てゐた。出た煙はヂユク〳〵した雨もよひに、眞直ぐ空にものぼれず、ゆつくり横ひろがりになびいて、野面をすれ〳〵に擴がつて行つた。

由三は毎日のホヤ磨きが嫌で、嫌でたまらなかつた。「えツ、糞婆、こツたらもの破つてしまへ！」――思ひ出したやうに、しやつくり上げる。背で、泥壁がボロ〳〵こぼれ落ちた。と、すぐ近處かで牛のなく幅の廣い聲がした。と、今度はそれに答へるやうに別な牛が啼いた。――霧のやうに細かい、冷たい雨が降つてゐた。

「由ツ！　そつたらどこで、何時迄何してるだ！」――家の中で、母親が怒鳴つてゐる。

「今、えぐよオ。」

母親はベト〳〵した土間の竈に蹲んで、額をくツつけて、火を吹いてゐた。眼に煙が入るたびに前掛でこすつた。毎日の雨で、木がしめツぽくなつてゐた。――時々竈の火で、顏の半分だけがメラ〳〵と光つて、消えた。

「早ぐ、ランプばつけれ。」

家の中は、それが竈の中ででもあるやうに、モヤ〳〵けぶつてゐた。眼のあき所がない。由三は手さぐりで、戸棚の上からランプの臺を下した。

「母。油無えど。」

「？」――母親はひよいと立ち上つた。「無え？　……んだら、△さ行つて來い。」

「いゝ、ぜんこ？」

「ぜんこなんて無え。借りて來い！」

由三はランプの臺を持つたまゝ、母親の後でウロ〳〵してゐた。

「行げツたら行げ！　この糞たれ。」

「いゝ、ぜんこよオ！」――背を戸棚にすりつけた。「もう貸さね――エわ。」

「貸したつて、貸さねたつて、いゝ、ぜんこ無えんだ。」

「駄目、だめーえ、駄目！……」

「行げツたら行げツ！」

由三は毆られると思つて、後ずさりすると、何時もの癖になつてゐる頭に手をやつた。周章てて裏口へ下駄を片方はき外したまゝ飛び出した。――「えツ、糞婆！」

戸口に立つたまゝ、由三はしばらく內の氣配をうかゞつてゐたが、こつそり土間に這ひ込んで、片方の下駄を取出した。しめつぽい土の匂ひが鼻へヂカにプーンと來た。

雨に濡れてゐる兩側の草が氣持惡く脛に當る細道を拔けて、通りに出た。道の傍らには、

節を荒けづりにした新らしい木の香のする電柱が、間隔を置いて、何本も轉がさつてゐた——もうしばらくで、この村に電燈がつくことになつてゐた。毎日「停車場のある町」から電工夫が、道具をもつて入り込んできた。一本々々電柱が村に近くなつてきた。子供達はそれを何本、何本と毎日數へ直して、もう何本で村に入るか、云ひ合つた。皆は工夫達の仕事をしてゐるところに、一日中立つてみてゐた。

「お前達のうちに姉のゐる奴ゐるか？」

　子供達ははにかみ笑ひながら、お互に身體を押し合つた。

「此奴にゐるんだよ。」——一人が云ふ。「な！」

「ん、ん。」

「んか、可愛いか？——晩になつたらな、遊ぶに行ぐつてな、姉さ云つて置げよ。えゝか。」

　と、皆は一度にヤアーと笑ひ出してしまふ。

——子供達は何時迄もさうやつてゐるのが好きだつた。日が暮れさうになつて、やうやく口笛を吹きながら、棒切れで道端の草を薙ぎ倒し、なぎ倒し、村道を村に歸つてきた……。

　通りを三町程行くと、道をはさんで荒物屋、郵便局、床屋、農具店、種物屋、文具店などが二、三十軒並んでゐる「市街地」に出る。——由三は坊主頭と兩肩をデュク〳〵に雨に濡らしたきま走つた。

　軒下に子供が三、四人集つて、「ドン〳〵」をやつてゐた。由三はランプの臺を持つたまゝ側へ寄つて行つた。

「ドン〳〵、ドン！」

「ドン〳〵、ドン！」

「中佐か？——勝つたど！　少將だも。」

　相手は舌で上唇を嘗めながら、「糞！」と云つた。

「ドン〳〵——ドン！」

「ドン〳〵、アッ一寸待つてけれ。」——何か思つて、クルリと後向きになると、自分の札の順を直した。

「ドン〳〵ドン！」

「ドン〳〵ドン！」

「中將！」

「元帥だ！——どうだ！」——いきなり手と足を萬歳させた。

「あ、お前、中將取られたのか？……」——側の者が負けたものの手元をのぞき込んだ。「あと何んと何に持つてる？」

「默つてれでえ！……負けるもんか。」

「オ、由、組さ入らねえか？」——勝つた方が云つた。

「入れでやるど、えゝべよ。」

　由三はやりたかつた。然し今迄一度だつて「ドン〳〵」を買つて貰つたことがなかつた。——由三はだまつてゐた。

「無えのか？」

「由どこの姉、こんだ札幌さ行ぐつてな。」

　一人が軒下から、雨の降つてゐる道へ向けて、前を腹位迄まくつて小便をしてゐた。

「誰云つた？」

「誰でもよ。んで、白首になるツてな！」

「んか、白首にか！」

「白首か！　さうか！」——皆はやし立てた。

　由三はそれが何のことかハッキリ分らなかつた。分らないが、いきなりヒネられでもした後のやうに顏中がクヮッと逆上せてきた。

「夕燒小燒に日が暮れて……」——女の子が三、四人聲を張り上げて歌つてゐるのが、遠くに聞えてゐた。

　由三は急にワ　と泣き出した。

「泣くな、え、このメソ！」

　グイと押されて、ランプの臺を落してしまつた。少し殘つてゐた石油が、雨に濡れた地面にチリ〳〵と紫色の波紋をつくつて擴がつた。

——皆は氣をのまれて、だまつた。
「あーあ、俺でもないや、俺でもないや。」——少し後ずさりして云ひ出した。
「俺でもないや。」
「うえ、お前だど。——お前でないか！」
「俺でもないや。」
「俺でもないや、あーあ。」
「母さ云つてやるから！」——由三は大聲で泣きながら、通りを走り出した。
途中で片々の下駄を脱いで、手に持つた。走りながら、「母さ云つてやるから！」何度もそれを繰りかへした。
母親はすぐ裏の野菜畑の端で、末の子を抱へて小便をさせてゐた。鶏が畠のウネを越えて、始終キヨト〱しながら餌をあさつてゐる。
「ほら、とツと——なア。いゝゝ、とツと、こ、こ、こ、こ、こツてな。——さ、いゝゝ、しツこするんだど、可愛いから……」そして「シー、シー、シー。」と云つた。
子供は足をふんばつて、「あー、あー、あば、ば、ば、ば……あー、あー。」と、喋いだ。
「よし〱。さ、いゝゝ、しツこ、いゝゝ、しツこ、な。」
母親はバタ〱する兩足を抑へた。
その時、身體をびツこに振りながら、片手に下駄を持つて、畑道を走つてくる由三が見えた。それが家のかげに見えなくなつた時、すぐ、土間で敷居につまづいて、思ひ切り投げ出されたらしく、棚から樽やバケツの落ちる凄い音がした。と、同時に、ワアツと由三の泣き出すのが聞えた。
「犬餓鬼！　又喧嘩してきたな。……さ、いゝこもうえゝか？」
小指程のちんぼの先きが、露のやうにしめつてゐた。
「よし〱、可愛い、可愛い。」
由三は薄暗いベト〱する土間に仰向けになつたまゝ、母親を見ると、急に大きな聲を出し、身體をゴロ〱させて泣き出した。

S——村

由三は空の茶碗を箸でたゝきながら、「兄ちや歸らないな……」と、唇をふくれさせてゐた。
兄の健は、畠からすぐ市街地の「青年訓練所」に廻つたらしく、夕飯時に家に歸らなかつた。
——健は今年徴兵檢査だつた。若し、萬一兵隊にとられたら、今のまゝでも食へないのに大變なことだつた。「青年訓練所」に通へば、とにかく兵隊の期間が減る、さう聞いてゐた。それだけを頼みに、クタ〱になつた身體を休ませもせずに通つてゐた。
母親は背中へヂカに裸の子供を負つて、身體をゆすり〱外へ出てみた。——子供は背中でくびれた手足を動かした。その柔かい膚の感觸がくすぐつたく、可愛かつた。
「えゝ子だ、えゝ子だ。」母親は身體を振つた。
——一度、こんな風に負つてゐて、子供をすつぽり、そのまゝ畑へすべり落してしまつたことがあつた……。
野面は青黒く暮れかゝつてゐた——背が粟立つほど、底寒かつた。
健達の、このS村は、吹きツさらしの石狩平野に、二、三戸づつ、二、三戸づつと百戸ほど散らばつてゐた。それが「停車場のある町」から一筋に續いてゐる村道に、繩の結びこぶのやうにくツついてゐたり、ずウと畑の中に引ツ込んでゐたりした。丁度それ等の中央に「市街地」があつた。五十戸ほど村道をはさんで、兩側にかたまつてゐた。
平原を吹いてくる風は、市街地に躍りこむと、ガタ〱と戸をならし、砂ほこりをまき上げて、

又平原に通り拔けて行つた。――田や畑で働いてゐると、ほこりが高く舞ひ上りながら、村道に沿つて眞直ぐに何處までも吹き飛ばされて行くのが見えた。

どつちを見ても、何んにもない。見る限り廣茫としてゐた。冬はひどかつた。電信柱の一列が何處迄も續いて行つて、マッチの棒をならべたやうになり、そしてそれが見えなくなつても、まだ平らであり、眼の邪魔になるものがなかつた。所々箒をならべ立てたやうな、ポプラの「防雪林」が身體をゆすつてゐたり、雜木林の叢が風呂敷の皺のやうに匐つてゐた。

S村の外れから半里ほどすると、心持土地は上流石狩川の方へ傾斜して行つてゐた。河近くは「南瓜」や「唐黍」の畑になつてゐたが、畑のウネとウネの間に、大きな石塊が赤土や砂と一緒にムキ出しに轉がつてゐた。石狩川が年一度、五月頃氾濫して、その邊一帶が大きな沼のやうになるからだつた。――畑が盡きると、帶の幅程の、まだ開墾されてゐない雜草地があり、そこからすぐ河堤になつてゐた。子供達は釣竿を振りながら、腰程の雜草を分けて、河へ下りて行つた。

河向うは砂の堤になつてゐて、色々な形に區切られた畑が、丁度つぎはぎした風呂敷のやうに擴がつてゐた。こつちと同じ百姓家の歪んだ家根がポツ、ポツ見えた。

「移民案内」

「内地の府縣に於ては、自作地は勿論、小作地と雖も新に得ることは仲々困難であるのに反して、北海道に移住し、特定地の貸付をうけ、五ケ年の間にその六割以上を開墾し終る時は、その土地を無償で附與をうけ、忽ち五町歩乃至十町歩の地主となるを得、又資金十分なるものは二十町歩土地代僅か八百圓位で未墾地の拂下げを受け得べく、故に勤勉なるものは移住後概して生活に困難することなし……。」（「北海道移住案内」北海道廳、拓殖部編）

「……數年を經て、開墾の業成るの後は、穀物も蔬菜も豐かに育ち、生計にも餘裕を生じ、草小屋は柾屋に改築せられ、庭に植ゑたる果樹も實を結ぶなど、其の愉快甚だ大なるものあらん。この土地こそ、子より孫と代々相傳へて、此の畑は我が先祖の開きたる所、この樹は我先祖の植ゑたるものなりと言ひはやされ、其の功は行末永く殘るべし。」（「開墾及耕作の栞」北海道廳、拓殖部編）

「……實際、我國の人口、食糧問題がかくまでも行き詰りを感じてゐる現今、北海道、樺太の開墾は焦眉の急務であると思ひます。そのためには個人の利害得失などを度外視して、國家的な仕事――戰時に於ける兵士と同じ氣持を持ちまして、開墾に從事し、國富を豐かにしなければならない、かう愚考するものであります。」（某氏就任の辭）

「立毛差押」「立入禁止」「土地返還請求」「苛酷な小作料」――身動きも出來ないやうに縛りつけられてゐる内地の百姓が、これ等に見向きしないでゐることが出來るだらうか。――それは全くウマイところをねらつてゐた。

S村は開墾されてから三十年近くになつてゐた。では S村の百姓はみんな五町歩乃至十町歩の「地主」になつてゐたか？ そして、草小屋は柾屋に改築されてゐたか？

「誰も道で會はねばえゝな」

健達の一家も、その「移民案内」を讀んだ。そ

して雪の深い北海道に渡つてきたのだつた。彼等も亦自分達の食料として取つて置いた米さへ差押へられて、軒下に積まさつてゐながら、それに指一本つけることの出來ない「小作人」だつた。

健は兩親にともなはれて、村を出た日のことを、おぼろに覺えてゐる。十四、五年前のことだつた。——重い妹を負つて遊んで來ると、どこか家の中が變つてゐた。健は胸を帶で十字に締められて、龜の子のやうに首だけを苦しくのばしてゐた。

「母、もうえゝべよ。」と云つた。

母は細引を手にもつて、浮かない風に家の中をウロ〳〵してゐた。父は大きな安坐をかいたまゝ煙草をのんで、別な方を見てゐた。——母は健を見ると、いつになくけはしい顏をした。

「まだ外さ行つてれ！」

父はだまつてゐた。

健はずれさうになる妹をゆすり上げ、ゆすり上げ、又外へ出た。——半分泣いてゐた。それから一時間程して歸つてくると、家の中はガランとして、眞中に荷造りした行李と大きな風呂敷包が轉がつてゐた。父と母が火の氣のない大きく仕切つた爐邊にだまつて坐つてゐた。薄暗い、赤ちやけた電燈の光で、父の頰がガク〳〵と深くけづり込まれてゐた。

「早く暮れてければえゝ……」——獨り言のやうに云つた。父だつた。

暗くなつてから、荷物を背負つて外へ出た。峠を越える時、振りかへると、村の灯がすぐ足の下に見えた。健は半分睡り、父に引きずられながら、歩いた。暗い、深い谷底に風が渡るらしく、それが物凄く地獄のやうに鳴つてゐた。——健はそれを小さい時にきいた恐ろしいお伽噺のやうに、今でもハッキリ思ひ出せる。

「誰とも道で會はねばえゝな。」——父は同じことを十歩も歩かないうちに何度も繰りかへした。

五十近い父親の懷には「移民案内」が入つてゐた。

道廳で「その六割を開墾した時には、全土地を無償で交付する」と云つてゐる土地は、停車場から二十里も三十里も離れてゐた。假りに、其處からどんな穀物が出ようが、その間の運搬費を入れただけで、とても市場に出せる價格に引き合はなかつた。——それに、この北海道の奧地は「冬」になつたら、ロビンソンよりも賴りなくなる。食糧を得ることも出來ず、又一冬分を豫め貯へておく餘裕もなく、次の春には雪にうづめられたまゝ、一家餓死するものが居た。——石狩、上川、空知の地味の優良なところは、道廳が「開拓資金」の財源の名によつて、殆んど只のやうな價格で華族や大金持に何百町歩づつ拂下げてしまつてゐた。「入地百姓」——「移民百姓」は、だから呉れるにも貰ひ手のない泥炭地の多い釧路、根室の方面だけに限られてゐる。

「開墾補助費」が三百圓位まで出るには出た。然し家族連の移住費を差引くと、一年の開墾にしか從事することが出來なくなる。結局「低利資金」を借りて、どうにか、かうにかやつて行かなければならない。——五年も六年もかゝつて、やうやくそれが畑か田になつた頃には、然しもう首ッたけの借金が百姓をギリ〳〵にしばりつけてゐた。

何千町歩もの拂下げをうけた地主は、開墾した曉にはその土地の半分を無償でくれる約束で、小作人を入地させながら、いざとなると、その約束をごまかしたり、履行しなかつた。

健の父は二年で「入地」を逃げ出してしまつた。「移民案内」の大それた夢が、ガタ、ガタと眼の前で壞れて行つた。仕方のなくなつた父親

は「岸野農場」の小作に入つたのだつた。

「日雇にならねえだけ、まだえゝべ。」

村に地主はゐない

何處の村でも、例外なく、つぶれかゝつてゐる小作の掘立小屋のなかに「鶴」のやうに、すつきり地主の白壁だけが際立つてゐるものだ。そしてそこでは貧乏人と金持がハッキリ二つに分れてゐる。然し、それはもう「昔」のことである。

北海道の農村には、地主は居なかつた。——不在だつた。文化の餘澤が全然なく、肥料や馬糞の臭氣がし、腰が曲つて薄汚い百姓ばかりゐるそんな處に、ワザ／＼居る必要がなかつた。そんな氣のきかない、昔型の地主は一人もゐなかつた。——その代り、地主は「農場管理人」をその村に置いた。だから、彼は東京や、小樽、札幌にゐて、たゞ「上り」の計算だけしてゐれば、それでよかつた。——S村もそんな村だつた。

岸野農場の入口に、たつた一軒の板屋の、トタンを張つた家が吉本管理人の家だつた。吉本は首からかぶるジャケツに背廣をひつかけ、何時でも乘馬ズボンをはいて歩いてゐた。

「この村では、俺を地主だと思つてもらはにやならん。」

初めて來たとき、小作を集めてさう云つた。

S村——田の所有分布。

二百町歩——S村所有田
百五十町歩——大學所有田・「學田」
百二十町歩——吉岡（旭川）
五百町歩——岸野（小樽）
二百町歩——馬場（函館）
二百十町歩——片山子爵（東京）
三百町歩——高橋是善（東京）
外ニ　自作農五戸、百五十町歩。

「巡査」と「[△]の旦那」

市街地には、S村青年團、S村處女會があつて、小學校隣接地に「修養倶樂部」を設け、そこで色々な會合や芝居をやる。——會長は校長。副會長には「在郷軍人分會長」をやつてゐる[△]荒物屋の主人、巡査。それに岸野農場主が名譽相談役となつてゐた。——健達の通つてゐる「青年訓練所」も、その「修養倶樂部」で毎晩七時からひらかれてゐた。

巡査は一日置きに自轉車で、「停車場のある日町」に行つてきた。——おとなしい、小作の人達にも評判のいゝ若い巡査だつた。途中、よく自轉車を道端に置き捨てにして、劍をさげたまゝ、小便をしてゐた。それが田に働いてゐる小作達に見えた。暇になると、小作の家へやつてきて話して行つた。——然し・度岸野の小作達が小作料のことで、町長へ嘆願に出掛けたことがあつてから、小作人達のところへは、プッツリ話しに來ないやうになつてしまつた。そのことでは隨分噂が立つた。「岸野から金でも貰つたべよ。」と云つた。

以前、殊に親しくしてゐた健の母親はうらんだ。

隨分現金だな。——然し石田さんに限つて、そんな「噂」はある筈がない、と云つてゐた。

石田巡査はそれから[△]や吉本管理人と村道を、肩をならべて歩くのが眼につき出した。

——[△]の荒物屋からは、どんな小作も「店借り」をしてゐる。

一年のうち、きまつた時しか金の入らない百姓は、どうしても掛買しか出來ない。それに支拂は年二回位なので、そこをツケ目にされた。現金なら五十錢に賣り、しかもそれで十分に儲

けてゐるものを「掛」のときには、五十七、八錢にする。どの品物もさうする。小作人はそれが分つてゐて、どうにも出來ず、結局そこから買はなければならなかつた。——[△]は三年もしないうちに、メキ〳〵と「肥えて」行つた。

蜘蛛の巣を思はせる様に、どの百姓も皆[△]の手先にしつかりと結びつけられ手繰り寄せられてゐる。

村に「信用購買販賣組合」が出來てから、[△]との間に問題が起つた。——今迄とは比べにならない程安く品物が買へるので、小作人は「組合」の方へドシ〳〵移つて行つた。と、[△]はだまつてはゐない。——若し「組合」の方へ鞍替するやうな「恩知らず」がゐたら、前の借金がものを云ふぞ、と云ひ出した。人のいゝ小作達は、さう云はれて、今迄あんなに氣儘に借金をさせて貰つたのに、それは本當に忘恩なことだ、と思つた。

[△]は小作人が金が支拂へないと、米や雜穀でもいゝと云つた。——百姓が町へ行つて、問屋に賣る値段で、それを引きとつてくれた。それで[△]は貸金の回收をうけると同時に、それを又賣りして、そこから利ざやを——つまり二重に儲けてゐた。

在郷軍人分會長、衞生部長、學務何々……と、肩書をもつてゐる[△]の旦那のやうになりたい、それが小作人の「夢」になつてゐる。——小作人達は道で、[△]の旦那に會ふと、村長や校長に會つた時より、道をよけて、丁寧に挨拶した。

「青年訓練所」では、[△]の旦那が「修養講話」をやつた。

夜道

健達は、士官の訓練が終つて、[△]の「修養講話」になると、疲れから居睡りをし出した。「青年の任務」「思想善導」「農民の誇」……何時もチットモ變らないその講話は、もう誰も聞いてゐるものがなかつた。

外へ出ると、生寢の身體にゾクッと寒さが來た。霧雨は上つてゐたが、道を歩くと、チュクチュクと澱粉靴がうづまつた。空は暗くて見えなかつた。然し頭を抑へられてゐるやうに低かつた。何かの拍子に、雨に濡れた叢がチラチラッと光つた。

「もう一番終つたか？」——後から七之助が言葉をかけた。

健はたまらなく眠かつた。「えゝや、まだよ、人手がなくなつてな。」

誰かワザと大きくあくびをした。

「健ちやは兵隊どうだべな。」

「ん、行かねかも知らねな。……んでも、萬一な。」

「その身體だら行かねべ。青訓さなんて來なくたつてえゝよ。」

すると今迄默つてゐた武田が口を入れた。——

「徵兵の期間ば短くするために青訓さ行ぐんだら、大間違ひだど！」

始まつた、と思ふと、七之助はをかしかつた。

「あれはな、兵隊さ行ぐものばかりが色々な訓練を受けて、んでないものは安閑としてるべ、それぢや駄目だッてんで、あれば作つたんだ。兵隊でないものでも、一つの團體規律の訓練をうける必要はあるんだからな。」

「所で、現時の農村青年は輕チョウ浮ハクにして、か！……」

七之助が小便しながら、ひやかした。叢の葉に、今迄堪へてゐたやうな小便が、勢よくパチャ〳〵と當る音がした。

「ん。」——武田が眞面目にうなづいた。

恐らく、どんな勞働者よりも朝早くから、腰を折りまげて働いてゐる百姓が、都會の場末に巣喰つてゐる朝鮮人よりも慘めな生活をし

てゐる。それでも農村の青年は「輕チョウ浮ハク」だらうか。――これ以上働かして、それでどうしようといふのだ。――健は、出鱈目を云ふな、と思つた。
「七ちや、小樽行きまだか。」
「ん、もうだ。」
「もうか？」
又、七之助とも離れてしまはなければならないか、と思ふと、健は淋しかつた。――健の好きなキヌも札幌へ出て行つてゐた。製麻會社の女工に募集されて行つたのだつた。然し、それが一年しないうちに、バアの女給をしてゐるといふ噂になつて、健の耳に戻つてきた。
……話が途切れると、泥濘を歩く足音だけが耳についた。田の水面が、暗い硝子板のやうに光つてみえた。
七之助はとりとめなく、色々な歌の端だけを、口笛で吹きながら歩いてゐた。七之助も何か考へ事をしてゐる。
「三吾の田、出が悪いな。」――七之助が蹲んで、莖をむしつた。
「三吾も不幸ばかりだものよ。」
――三吾が自分のでもない泥炭地の田を、どうにか當り前にしようと、無理に、體を使つた。そして二度「村役場」と「道廳」から表彰された。「農夫として、その勤勉力行は範とするに足る」と云はれた。岸野が道廳へ表彰方を申請したのだつた。
その額緣を、天井裏のない煤けた家の中に掛けた日から、二月もしないうちに、三吾は寢がへりも出來ない程の神經痛にかゝつてしまつた。痛みは寢ると夜明け迄續いた。三吾は藁束のやうにカサ〱に乾しからびて、動けなくなつてしまつた。――毎日「表彰狀」だけを見てゐた。
それは然し、三吾ばかりでない。――東三線の伊藤のおかみさんは、北海道の冷たい田に、あまり入り過ぎたので、三月も腰を病んで、それからは腰が浮かんで、何時でも歩くときは、ひどい跛のやうに振つた。
吉本管理人の家へ、何かで集まることがある。彼等はどれもみんな巖丈な骨節をし、厚い掌をしてゐるが、腰が不恰好にゆがんだり、前こゞみであつたり、――何處か不具だつた。みんなさうだつた。
市街地の端から、武田が別れてアゼ道に入つて行つた。
「健ちや、武田の野郎やつぱり[ム]さ出入りしてるとよ。」
口笛をやめて、すぐ七之助が云つた。
「んか……」
「お前、それから岸野がワザ〱小樽から出てきて、とッても青訓や青年團さ力瘤ば入れてるツて知らねべ。」
「んか？」
「阿部さんや伴さんが云つてたど。――キット魂膽があるツて。」
「ん？」――健にはそれがハッキリ分らなかつたが――何か分る氣持がした。

「熱ツ、熱ツ、熱ツ!!」

健は足を洗ひに、裏へ廻つた。濕つた土間の土が、足裏にベタ〱した。物音で、家の中から、
「健かア――？」と母親が訊いた。
「う。」――口の中で返事をしながら、裾をまくつて、上り端に腰を下した。――厩の中から、ムレた敷藁の匂ひがきた。
由三はランプの下に腹這ひになつて、兩脛をバタ〱動かしながら、五、六枚しかついてゐないボロ〱の繪本を、指を嘗め〱頁を繰つてゐた。

「姉、こゝば讀んでけれや。」
　由三は爐邊でドザを刺してゐた姉の袖をひいた。
「馬鹿ッ！」
　姉はギクッとして、縫物をもつたまゝ指を口に持つて行つて吸つた。「馬鹿ッ！　針ば手に刺した！」
　由三は首を縮めて、姉の顔を見た。――「な、姉、この犬どうなるんだ？」
「よオ――」
「姉なんか分らない。」
「よオ――たら！――んだら、惡戯するど！」
「うるさい！」
　健は爐邊に大きく安坐をかいて坐つた。指を熊手にして、ゴシ／＼頭をかいた。
　家の中は、長い間の焚火のために、天井と云はず、羽目板と云はず、ニヤ／＼と黒光に光つてゐた。天井に渡してある梁や丸太からは、長い煤が幾つも下つてゐて、それが下からの焚火の火勢や風で搖れた。――ランプは眞中に一つだけ釣つてある。ランプの丸い影が天井の裸の梁木に光の輪をうつした。ランプが動く度に、その影がユラ／＼と搖れた。誰かがランプの側を通ると、障子のサンで歪んだ黒い影が、大きく窓を横切つた。ランプは始終チイ／＼と音をさせて、油を吸ひ上げた。時々明るくなつたかと思ふと、吸取紙にでも吸はれるやうに、すウと暗くなつた。
「さつきな、阿部さんと伴さん來てたど。」
「ン――何んしに？」
「なア、兄ちや、犬ど狼どどつちが強んだ。――犬だな。」
「道路のごとでな。今年も村費が出ねんだとよ。」
「今年もか――何んのための村費道路だんだ。馬鹿にずる。又秋、米ば運ぶに大した費用だ‥」
「兄ちや、犬の方強でアな！」
「んで、どうするツて？」
「暇ば見て、小作人みんな出て直すより仕方が無えべど。――村に金無えんだから。」
「犬だなア、兄ちや‥‥」
「うるさいッ！」いきなり怒鳴りつけた。――「又小作いぢめだ！　弱味をつけ込んでやがるんだ。放つてけば、どうしたつて困るのア小作だ。んだら、キツト自分の費用でやり出すだらうツて、待つてやがつたんだ。――村會議員なんて、皆地主ばかりだ。勝手なことばかりするんだ。」
　S村で、以前、村役場に對して小作爭議を起したことがあつた。北海道は町村が澤山の田畑を所有してゐて、それに小作を入地させてゐた。それで、よく村相手の爭議が起つた。――然しS村の村會議員が全部地主であつたために、後のこともあり、又やがては自分達の方への飛火をも恐れて、頑强に對峙してきたために、慘めに破れたことがあつた。
「明日吉本さんの處さでも集つて、相談すべアつて。」
　いゝ、おはぐろの塗りのはげた母親の、並びの惡い歯の間に、飯が白く殘つてゐた。
「‥‥‥‥――」
　健は鹽鱒の切はしを、せツかちにジュウ、ジュウ焼いて、眞黒い麥飯にお湯をかけ、ザブ／＼かツこんだ。
　風が出てきたらしく、ランプが輕く搖れた。後の泥壁に大きくうつつてゐる皆の影が、その度に、あやつられるやうに延びたり、ちゞんだりした。
　由三は焚火に兩足をたてて、うつら／＼してゐた。
「母、いゝたこツて何んだ？――山利さいゝたこ來てな、今日お父ばおろして貰つたけな、お父今

死んで、火の苦しみば苦しんでるんだとよ。」
「本當か？」
「いゝ、たこツて婆だべ、いゝ、いたこ婆ツてんだべ。——いゝ、たこ婆さ上げるんだツて、山利で油揚ばこしらへてたど。」
「お稲荷様だべ。」
「お稲荷様ツて狐だべ。んだべ！」——由三が急に大きな聲を出した。
「ん。」
「んだべ、なア！」——獨り合點して、「勝とこの芳な、犬ばつれて山利さ遊びに行つたら、とオても怒られたど。」
「さうよ。——勿體ない！」
「山利の母な、お父ば可哀想だつて、眼ば眞赤にして泣いてたど。」
「んだべ、んだべ、可哀想に！」
「な、兄ちや、狐……」——瞬間、爐の火がパチ／＼ツと勢よくハネ飛んだ。それが由三の小さいへうたん形のちんぽへ飛んだ。
「熱ツ、熱ツ、熱ツ!!……」
由三はいきなり繪本を投げ飛ばすと、後へひつくりかへつて、着物の前をバタ／＼とほろつた。泣き聲を出した。「熱ツ、熱ツ!!」
「ホラ、見れ！　そつたらもの向けてるから、火の神様に罰が當つたんだ。馬鹿！」
姉のお惠が、物差しで自分の背中をかきながら、——「その端なくなつてしまへば、えゝんだ。」と、ひやかした。
「えゝツ、糞ツ！　姉の白首！」
ベソをかきながら、由三が喰つてかゝつた。聞いたことのない悪態口に、皆思はず由三をみた。
母親がいきなり、由三の小さい固い頭を、平手でバチ／＼なぐりつけた。
「兄ちや、由この頃どこから覺えて來るか、こつたら事ばかり云ふんだど！」
お惠は背中に物差しをさしたまゝの恰好で、フイに顏色をかへた。それが見る／＼こはばつて行つた。
と、お惠は、いきなり、由三を物差しで毆りつけた。ギリ／＼と齒をかみながら、ものも云はずに。物差しがその度に、風を切つて、鳴つた。——そして、それから自分で、ワアツ！と泣き出してしまつた……
明日は三時半頃から田へ出て、他の人より遅れてゐる一番草を刈り上げてしまはなければならない。——健は、然し、寢むれなかつた。表を誰かペチャ／＼と足音をさして、通つて行つた。
健は起き上つた。ランプの消えた暗い土間を、足先きで探りながら、臺所へ下りて行つた。水甕から、手しやくで、ゴクリ／＼のどをならしながら、水を飲んだ。厩小屋から、尻毛でビシリビシリ馬が身體を打つてゐる音が聞えた。
夜着をかぶると、間もなく、ねぢのゆるんだ、狂つた柱時計が間を置きながら、ゆつくり七つ打つた。

二

「S相互扶助會」發會式

正面の一段と高いところには「、、、、」の寫眞がかゝつてゐた。
「修養倶樂部」の壁には、その外「乃木大將」「西郷大先生」「日露戰爭」「血染のボロ／＼になつた聯隊旗」などの寫眞が、額になつてかゝつてゐた。演壇の左側には、拂下げをうけた、古ぼけた舊式な鐵砲が三挺組合せて飾つてある。——乃木大將の話は百姓は何度きいても飽きなかつた。
演壇には「S相互扶助會」發會式の順序と、その兩側に少し離して、この會が主旨とする

所の標語が貼り出されてゐた。

海田山林の開發より
心田を開拓せよ！

强制なる獨立心と
服從の美德と
協同の精神へ！

會が終つてから、「一杯」出るといふ先觸があつたので、何時になく澤山の百姓が集つてゐた。「停車場のあるＨ町」からも來てゐた。大概の小作は、市街地の旦那やＨ町の旦那から「一年」「二年」の借金があるので、一々挨拶して歩かなければならなかつた。

小作が挨拶に行くと、米穀問屋の主人は鷹揚にうなづいた。

「今年はどうだ？」

「えゝ、まア、今のところは、えゝ、お蔭樣で……」

小作は腰をかゞめて、一言々々に頭をさげた。——それが阿部や健たちの居る處から一々見える。健も借金があつた。こんな時に、一寸挨拶して置けば、都合がよかつた。それに若し今年兵隊にとられるやうな事になれば、病身の父や女の手ばかりの後のことでは、キット世話にならなければならない。——健はフトその側を通りかゝつた、といふ風にして挨拶した。——挨拶をしてから、然し自分で眞赤になつた。健は「模範小作」だつたので、Ｓの旦那も心よく挨拶を返してくれた。

會場の中は、自然に、各農場別に一かたまり、一かたまり坐らさつた。お互が車座になつて、話し込んでゐる。——小作達は仲々から一緒になれる機會がなかつた。無骨な、日燒けした手や首筋が、たまにしか着ない他所行きの着物と不釣合に、目立つた。裂目の入つた、ゴハゴハした掌に、吸殼をころがしながら、嫁のこと、稻の出揃ひのこと、靑豌豆のこと、小豆のこと、天氣のこと、暮しのこと、旦那のこと……何んでも話し合つた。

——かういふ會の時は卷煙草を吸ふものだとしてゐる小作が、持ちなれない手つきで、「バット」を吸つてゐた。

夜遊びに、町へ自轉車で出掛けたり、始終村の娘達と噂を立ててゐる若いものは、その仲間だけ隅の方に陣取つて、人を馬鹿にしたやうな大聲を出して、しきりなしに笑つてゐた。女の話をしてゐた。伊達に眼鏡をかけたり、黒絹の首ハンカチを卷いたりしてゐる。然し青年團の仕事や「お祭り」の支度などでは、娘達とフザけられるので、それ等は先に立つて、よく働いた。

子供達は「鬼」をやつて、走り廻つてゐた。大人達を飛び越え、いきなりのめり込んだり——坐つてゐる大人を、まるで叢のやうに押しわけて、夢中で騷いでゐた。時々、大聲で怒鳴られる。が、すぐ又キャッ〳〵と駈け出す。……煙草の煙がコメて、天井の中央に雲のやうに、層をひいてゐた。

「阿部さん」

「小樽さ行ぐごとに決まつたど。」

阿部と一緒に七之助がゐて、健を見ると云つた。

「工場さ入るんだ。——伯母小樽にゐるしな。……んでもな、健ちや、俺あれだど、百姓嫌になつたとか、ひと出世したいとか、そんな積りでねえんだからな。——阿部さんどよく話したんだども、少しな考へるどこもあるんだ……」

「ん……」——健は分つてゐた。

「村を出れば、案外、村が分るもんだからな。」

阿部が何時もの低い、ゆるい調子で云つた。

——農場で何かあると、それが子供を產んだと

か、死んだとか、といふことから、小作調停、小作料の交渉まで、キット皆「阿部さん」を頼んだ。足を使つてもらつた。――四十を一つ、二つ越してゐた。荒々しい動作も、大きな聲も出さない もどかしい程温しい人だつた。

何時でも脣を動かさないで、ものを云つた。

「阿部さんは隅ツこにゐれば、一日中ゐたツて誰も氣付かねべし、阿部さんも默つて坐つてるべ。」――七之助がよく笑つた。

村では、四人も五人も家族を抱へて働いてゐる四、五十位の小作人の方が、遊びたい盛りのフラ〳〵な若い者達より、生活のことではずツと、ずツと強い氣持をもつてゐる。――小作爭議の時など、農民組合で働いてゐる若い人は別として何處でも一番先きに立つて働くのは、その年の多い小作だつた。――阿部はその一人だつた。

阿部は旭川の農民組合の人達が持つてくる「組合ニュース」や「無産者新聞」を、田から上つた足も洗はないで、床を低く切り下げて据付けてあるストーヴに、ゐざり寄つて讀んだ。丹念に、一枚の新聞を何日もかゝつて、一字々々豆粒でも拾ふやうに讀んでゐた。壞れた、糸でつないだ眼鏡を、その時だけかけた。

彼が畔道を、赤くなつてツバの歪んだ麥稈帽子をかぶり、心持腰を折つて、ヒョコ〳〵歩いてゐるのを見ると、吉本管理人ではないが、「あんな奴が栖をつくなんて！」考へられなかつた。

模範青年

「見れ、武田の野郎、赤い徽章ば胸さつけて、得意になつて、やつてる、やつてる！」

七之助が演壇の方を顎でしやくつた。――阿部はだまつて笑つてゐた。

「な、健ちや、青年同盟だ、相互扶助會だなんて云へば、奇妙にあのガキ〳〵の武田と女たらしの、ニヤケ連中が赤い徽章ばつけて、走つて歩くから面白いんでないか。――健ちやみだいな模範青年やるとえゝにな。」

健はひよいと暗い顔をした。

「笑談だ、笑談だ！　ハヽヽヽヽ。」

――健は役場から模範青年として、表彰されてゐた。その頃は、まだ丈夫だつた父親が「表彰狀」をもつて、どうしていゝか自分でも分らず、家のなかをウロ〳〵したことを覺えてゐる。――健も自分の努力が報いられたと思ひ、嬉しかつた。

ところが一寸經つて、健と小學校が一緒だつた町役場に出てゐる友達が、健に云つた。――近頃農村青年がともすれば「過激な」考へに侵され勝で、土地を何百町歩も持つてゐる地主は困りきつてゐる。丁度村に來てゐた岸野と吉岡が、町役場で、そんなことで相談したのを給仕であるその友達が聞いたのだつた。

「表彰でもして、――情の方から抑へつけて、喜んで働かして置かないと、飛んでもなくなる。」吉岡がさう云つた。

「少し張り込んで、金箔を塗つた立派な表彰狀を出してさ、授與式をワザと面倒臭く、おごそかにすれば、もう彼奴等土百姓はわけもなくころりさ。」――さう云つたのが岸野だと云ふのだつた。

――まさか!?

校長を信頼してゐた健が、そのことを直ぐ校長に話してみた。

「そんな馬鹿な、理窟の通らない話なんかあるものか。お前さんが親孝行だし、人一倍一生懸命に働くからさ。」と云つた。――健だつて、それはさうだらう、と思つた。

阿部だけは、地主やその手先の役場の、とても上手い奸策だと云つた。

「もう少し喰へなくなれば、模範青年ツて何んだか、よく分るえんになる。」――皆ねたんでゐる！――健はその當時は阿部に對してさへさう思つた。

然し、健は、父親の身體が變になり、働きが減り、いくら働いても（不作の年でも！）それがゴソリ／＼と地主に取り上げられて行くのを見ると、もとはちつともさうでなかつたのに、妙に投げやりな、底寒い氣持になつた。切りがない、――と思はさつた。――「何んだい模範青年が！」――阿部の云つたことが、思ひ當つてきた。

それから健は、誰にでも「模範青年」と云はれると、眞赤になつた。

「武田」

會が始まつた。

「開會の辭」で武田が出た。如何にも武田らしく演壇に、兵隊人形のやうに直立して、演説でもするやうに、固ッ苦しい聲で始めた。聞きなれない、面倒な熟語が、釘ッ切れのやうに百姓の耳朶を打つた。

――……この危機にのぞみ、我々一同が力を合せ、外、過激思想、都會の頽風と戰ひ、内、剛毅、相互扶助の氣質を養ひ、もつて我Ｓ村の健全なる發達を圖りたい微意であるのであります。

――……なほ、此度は旭川師團より渡邊大尉殿の御來臨を辱うし、農場主側よりは吉岡幾三郎氏代理として松山省一氏、小作方よりは不肖私が出席し、こゝに協力一致、擧村圓滿の實をあげたいと思ふのであります。

七之助は聞きながら、一つ、一つ武田の演説を滑稽にひやかして、揚足をとつた。

「武田の作ちやも偉くなつたもんだな。――惡たれだつたけ。」

健の前に坐つてゐる小作だつた。――「餘ッ程、勉學したんだべ！」

七之助が「勉學」といふ言葉で、思はず、プウッ！ とふき出してしまつた。

「大した勉學だ。――四と地主さん喜ぶべ。圓滿々々、天下泰平。」

健とちがつて、前から七之助にはさういふ處がある。洒落やひやかしが、百姓らしくなく、氣持のいゝ程切れた。

「地主代理」

地主代理は思ひがけない程子供らしい、細い聲を出した。それに話しながら、何かすると、ひよい／＼鼻の側に手を上げた。それが百姓達には妙に「人物」を輕く見させた。七之助は、そら七ツ、そら十一だ、そら又、……と、數へて笑はせた。――地主と小作人は「親と子」といふが、そんなに離れたものでなしに、「頭腦と手」位に緊密なもので、お互がキッチリ働いて行かなければ、この日本を養つて行くべき大切な米が出來なくなつてしまふ。他所では、此頃よく「小作爭議」のやうな不祥事を惹起してゐるが、この村だけはそんな事のないやうに、その意味でだけでも、この新たに出來た組合が大いに働いて貰ひたい。……地主代理は時々途中筋道をなくして、ウロ／＼しながら、そんな事を云つた。

「分りました。んだら、もう少し小作料は負けて貰ひたいもんですなア――」

誰か滑稽に云つた。――皆後を振りむいて、どッと笑つた。

「佐々爺」

かういふ會があると、「一杯」にありつける。何時でも、それだけが目當てでくる酒好きな、東三線北門號の「佐々爺」がブツ／＼こぼした。

「糞も面白ぐねえ。――早く出したら、どうだべ。」

「んだよ、んだよ、な、佐々爺。」――七之助が面白がつた。

「飽き〳〵するでえ！」

佐々爺は何時でも冷酒を、縁のかけた汁椀についで、「なんばん」の乾したのを噛り、噛り飲んだ。――それが一番の好物で、醉ふと澁い案外透る聲で、猥らな唄の所々だけを歌ひながら、眞直ぐな基線道路をフラ〳〵歸つて行つた。――佐々爺が寄ると、何處の家でも酒を出した。酒が生憎なかつたりすると、佐々爺は子供のやうに、アリ〳〵と失望を顔に表はして頼りなげに肩を振つて歸つて行つた。

佐々爺は晩出たきり、朝迄歸らない時がある。醉拂つて、田の中に腐つた棒杭のやうに埋つたきり眠つてゐた。探しに行つたものが搖り起しても、いゝ氣に眠つてゐた。

「女郎の蒲團さもぐり込んだえんた顔してやがる！」

ところが、佐々爺は村一番の「政治通」だつた。「東京朝日」「北海タイムス」を取つてゐるものは、市街地をのぞくと、佐々爺だけで、濱口、田中、床次、鳩山などを、自分の隣りの人のことよりも、よく知つてゐた。今度床次がどうする、すると田中がかうする。――分つた事のやうに云つて歩く。自分では政友會だつた。

阿部に「爺さんは、どうして政友會かな？」と、きかれて、「何んてたツて政友會だべよ。政友會さ。百姓にや政友會さ。景氣が直るし、仕事が殖えるしな。」と云つた。

「この會、政友會さ肩もつツてたら、うんと爺ちや應援すべな。」

七之助がひやかした。

「政友會ば？――んだら、勿論、大いにやるさ。勿論！」

「廣く農村にも浸潤されなければならない」

次は「渡邊大尉」だつた。

軍帽を脇の下に挾んで、ピカ〳〵した膝迄の長靴に拍車をガチャ〳〵させて、壇に上つてくると、今迄ガヤ〳〵騷いでゐたのが、抑へられたやうに靜かになつた。が、すぐ、ガヤ〳〵が返つて來た。――子供達は肩章の星の數や劒について、しやべり出した。口爭ひを始めた。――

百姓は、たまに軍人が通ると、田の仕事を忘れて、何時迄も見送つてゐた。兵隊のことになると、子供と同じだつた。

「農村に於ける軍人的精神」――それが渡邊大尉の演題だつた。軍隊に於ける嚴格なる秩序、正しい規律、服從關係を色々な引例をもつて說明し、これこそが外國から決して辱かしめられた事のない日本の强大な兵力を作つて居るものであり、そしてこの精神は、ひとり軍隊内ばかりでなく、廣く農村にも浸潤されなければならない。殊に外來惡思想がやゝもすれば前途ある青年を捉へ、この尊い社會秩序を破壞せんとするに於ては、益々健全なる軍人精神が、實に農村に於てこそ要求されなければならないのである。――さういふ意味のことを云つた。

武田達は終るのを今か今かと待つてゐて、さきがけをして拍手した。

「阿部さん。」

後から小作が聲をかけた。――「外來何んとか思想だかつて、あれ何んですかいな。さつきから、どの方もどの方も仰しやるんですけれどねえ。」

「さア……」阿部は一寸考へてゐた。「この村にそんなもの無えんでせう……」

それから別のことのやうに、笑談らしく、「んでも、あんまり小作料ば負けてけれ、負けてけ

れッて云へば、地主様の方で怒つて、過激思想にかぶれてゐるなんて、云ふかも知れないね。」——云つてしまつてから、口のなかだけで笑つた。

武田は又上ると、會の性質、目的、入會條件、事業等について説明した。餘興に入り、薩摩琵琶、落語、小樽新聞から派遣された年のとつた記者の修養講話——「一日講」があり、——そして、「酒」が出ることになつた。

「馬鹿に待たせやがつたもんだ。」

「犬でもあるまいし、な！」

胃の腑の中に、熱燗の酒がヂリ〳〵としみこんで行くことを考へると、日焼けした百姓ののどがガッ〳〵した。——誰でもさう酒に「ありつけ」なかつた。

「今日は若い女手は無えんだと。」

「んとか？」

「又、良え振りして、武田のしたごッだべ！」

それでも、女房達や胸に花をつけた役員などが、酒をもつて入つて來ると、急に陽氣になつた。

武田が股梯子をもつて來て、皆から見える高いところへビラを張りつけた。

一	酒一斗	校長先生
一	金三十圓也	岸野殿
一	ビール一打	[ム]殿
一	ビール一打	吉岡殿
一	手拭百本	H町長殿
一	金十圓也	相馬殿

右本會設立ヲ祝シ、各位ヨリ御寄贈下サイマシタ。有難ク御禮申上ゲル次第デアリマス。

幹事

「ホオーッ！」

「豪儀なもんだ。矢張りな。」

「有難いもんだ。」

盃と銚子がやかましく、カチャ〳〵と觸れ合つた。

——役員や招待された人や講演した人達は、吉本管理人の宅へ引き上げた。そこで水入らずの「酒盛」を始めた。H町からは、自動車で酌婦が七、八人やつてきた。——皆は夜明け近く迄騷いでゐた。酌婦達はその夜歸らなかつた……

阿部や健達は一足先きに表へ出た。星が高い蒼い空に、粒々にきらめいてゐた。出口から少し離れた暗がりで、二、三人、並んで長い小便をしてゐた。——側を通ると、

「オ、阿部君！」

ガラ〳〵聲で、伴だつた。健と七之助は頭を下げた。

寄つてきて、阿部に、「どうだ、この魂膽は！——直ぐ、あつちさ通信頼むど。」——聲を低めて云つた。

健は默つて、皆の後をついて行きながら、兎に角、近いうちに阿部を訪ねてみよう、と考へてゐた。

三

節は悲しかつた

「んで？……」

「……」

節は一言も云はなくなつてしまつた。

健もだまつた。だまつたまゝ歩いた。

晝のうち熟れてゐた田から、氣持の惡いぬるい風が、ボー、ボー、と兩頰に當つて、後へ吹いて行つた。歩いて行くのに從つて、蛙が鳴きやみ、逆に後の方から順々に鳴き出した。

「どうした？」

「……」

「えゝ？」

「……」

だまつてゐる。ひよいと見ると、闇の中で白い横顔がうつむいてゐた。

「川の方さでも行ぐか？」

「……………」

川の方へ曲ると、矢張りついてきた。悪戯をして、一寸つツついても、何時でも身體をはずませて、クツ／＼と笑ひこけるのに、顎をひいて、身體をコツちりさせてゐる。女に默られると、もうかなはなかつた。――途中の家々では窓をあけて、「蚊いぶし」をやつてゐた。腰巻一つの女が、茣蓙の上へ、ヂカにゴロ／＼してゐるのが見える。――暑苦しい晩だつた。

河堤に出る雑草を分けて行くと、細身の葉が痛く顔に當つた。何處かで、ヒソ／＼聲がする。――そんな組が二つも、三つもあつた。二番草を終つて、こゝしばらく暇だつた。

堤に出ると、すぐ足の下の方で、話し合つてゐる大きな聲と一緒に、ザブ／＼と馬を洗つてゐるらしい音がした。踏みの悪い砂堤に足を落し落し出鼻を廻ると、河原で焚火をしてゐた。――夜釣の魚を集めてゐるらしく、時々燃えさしを川の眞中へ投げた。バチ／＼と火の粉を散らしながら、赤い弧を闇にくつきり引いて、河面へ落ちると、チュンと音をたてて消えた。水にもそれが映つた。

「綺麗だね。」

今度は健がだまつた。そのまゝ沈默が少し續くと、

「怒つたの？……」と、節が云つた。

やつぱり節だ。――短い言葉に節がすつかり出てゐる。健は急に節がいとほしく思はれた。健は怒つてでもゐるやうに、無骨に、女の肩をグイと引き寄せると、いきなり抱きすくめた。はずみで、足元の砂がヅス／＼ツと、めり込んだ。

節は何時ものやうに、齒をしめたまゝの堅い唇を、それでも心持もつてきた。女の唇からは煮肴の、かすかに生臭い匂ひがしてゐた。

「何食つてきたんだ。口ふけよ。」

節は眞面目な顔をくづさずに、子供のやうに袖で口をぬぐつた……。

二人は草を倒して敷いて、その上に腰を下した。こつちの焚火が映つて、向う岸の雑木林の明暗が赤黒く、ハッキリ見えてゐた。

「健ちや、阿部さん好き？」

「…阿部さんのどこさあまり行ぐなツて云ひたいんだべ。」

「……………」

「んだども、ま、阿部さんや伴さんど話してみれ。初めは、そえア俺だつて……」

「良え人だわ、二人とも。んでも…この前の會のことで、ビラば一枚々々配つて歩いたべさ。あれでさ…」

――「相互扶助會」が本當は何のために建てられ、黒幕には誰と誰がゐて、表面如何にもつともらしく装つてゐても、裏には裏のあること、それ等の事が、「小作人よ、欺されるな。」といふ標題のビラにされてゐた。

「…あんなにしてやつたのに、ビラば配るなんて恩知らずだツて、怒つてるツ。」

「誰だ？」

「……………」

「お前もだべ？――んだべ。」

「…誰でもさ。」

「こけツ！」

二人ともかたくなに默り込んでしまつた。

「な、節ちや。」――調子が變つてゐた。「節ちやは、あれだらう。俺、模範青年になつてる方がえゝんだべ。」

健は節を「お前」と云つたり、「節ちや」と云つたりする。「節ちや」といふ時は、何か眞面目なことを心に持つてゐる時に限つてゐた。――節

はそれを知つてゐる。
健ちやだもの、滅多なことしねッて、わい思つてるわ。んでも淋しいの……。皆が皆まで健ちやば見損つた、見損つたッて云ふかと思へば……」
「節ちや、さう云つても、岸野の農場で阿部さんや伴さんさ誰だつて指一本差されねえんでねえか。」
「それァんだわ。良え人ばかりだもの。……んでも阿部さんば煙たがつてるわ。」
「小作で無え人はな。――俺達第一小作だからな。」
「變つたのね……」
「模範青年の口から、そつたら事聞くと思はないッてか？」
健はかへつて、それで自分を嘲つた。――「模範青年、模範青年！」
節は不意に顔を上げた。
焚火が消えると、四圍が暗く、靜かになつた。時々川の面で、ボチャッ――ボチャッ、と水音が立つた。魚が飛び上るらしかつた。
「今に分るさ……。遲くなつた、歸るか、ん？」
健は腰をあげて、前をほろつた。しめッぽい草の匂ひが、鼻に來た。節はしばらくぢッとしたまゝでゐた。――「ん？」と、もう一度うながすと、やうくく腰を起した。
「歸るゥ？」
健は雜草を分けて、歩き出した。
向うを、「こゝはみ國の何百里……」の歌を口笛で吹きながら、誰か歩いて行つた。
「口笛、武田でねえかな。――曲るど。見つけられたら、良え模範青年だからな。」そして大きな聲で笑つた。
「もう、模範青年、模範青年ッてのやめてよ。」
節は悲しい聲を出した。
――節は悲しかつた。健と會ふときは、何時でも何かの期待でウキくくする。然し自分でもハッキリ分らなかつたが、何んだか物足りない氣持を殘して、何時でも別れてゐた。健の何處かに冷たさがあると思つた。それが悲しかつた。
村に入る角の「藪」を曲ると、その向ひ側の暗いところから、女が誰かにくすぐられてでもゐるらしく、息をつめてクッくくと笑ひこけてゐるのが聞えた。が、二人の足音で、それがピタリとやんだ。草を掻き分ける音が續いた。
「な、節ちや。――此頃こんなに皆フザけてるんに、警察でなんで默つてるか知つてるか。」
外の人は何故から面白さうにして、夜會ふんだらう。――それを今見せつけられて、節はこみ上つてくる感情を覺えた。
「地主の連中があまり嚴しくしないでけれッて云つてあるんだとよ。」
節は聞いてゐなかつた。
無感動な男だ、何を考へてるんだらう！――
「活動もあるわけでなし、そば屋もなしよ、遊場もねえべ、んだから若い者が可哀想だんだとよ、どうだ？」――さう云つて、自分でムフ、、フ、と笑つた。「有難い地主さんだな……」
「ところがな、阿部さんが云ふんだ。――阿部さんッてば、お前すぐ嫌な顔すべ。――阿部さんが小樽の工場にゐた時なんて、工場の隅ッこさ落ちてる絲屑一本持つて外さ出ても、首になつたりしたもんだどもな、女工さんの腹ば手當り次第に大ッかくして歩いても、そんだら默つてるんだとよ。」
「まさか？……」
「だまつて聞け。――それがな、かういふ理由だんだと。そんなのを禁ずればな、お互ひ氣が荒くなつ……」みんな云はせないうちに、節がプッと吹き出してしまつた。
「この糞ッたれ！」

健はそのまゝ口をつむんだ。然しすぐ又口を開いた。
「な、仕事が苦しいべ、んだから何んかすれば直ぐ勞働組合にひツかゝつて行くんだ。さうさせないためにするんだ――」
「まア〳〵考へたもんだね。――んだら、わざわざ管理人さん達の肝入りで出來た處女會はどうなるの？」
健は後向きになつて、急に大きな聲を出した。
「さうさ、裏が裏だから、表だけは立派にして置ぐのさ。やれ節婦だ、孝子だッておだてあげて、――抑へて置くのよ。そこア、うまいもんよ。」
「分らないわ。」
停車場のあるH町から通つてゐる幌のガクガクした古自動車が、青白いヘッドライトを觸角のやうに長く振りながら、一直線に村道から市街地に入つてきた。入口から、お客を呼ぶための警笛を續け樣にならした。それが靜かな市街地全體に響き渡つた。㋥の雜貨店から、ガフ〳〵と戸を開けて周章てて誰か表へ飛び出した。
二人は市街地をよけて、畦道へ入つて行つた。
「だん〳〵こッたら事ばかし仕てゐられなくなるど。」
別れる時健が云つた。
節はだまつて唇をかんだ。
健が家へ歸つて床に入り、ウト〳〵しかけた頃、表のギシ〳〵する戸が開いた。
「惠か？――又だな…。何處さ今頃迄、けづかつたんだ？」
暑苦しいので寢られずにゐた母親が、眼をさまして聲をかけた。お惠はだまつたまゝ上つてきた。寢床のそばで、暗がりに伊達卷を解くシュウ〳〵といふ音だけがした。

四

「譃こけツ」

同じ石狩川でも餘程上流になつてゐたが、雜穀や米を運ぶために、稀に發動機船がボン〳〵と音をさせて上つてきた。その音は日によつては、ずウと遠く迄聞えた。「ホ、發動機船だ。」何處にゐる小作でも、腰をのばしながら音をきいた。
由三は村道を一散に走つた。帶の結び目が横へまはつて、前がはだけ、泥のはじけた汚い腹を出しながら、ムキになつて走つた。――發動機船の音をきいたのだ。他の子供も畦道を走つてくる、それが小さく見える。やがて村道で一緒になり、一緒に走り出した。
皆は堤の突端へ並んで腰を下し、足をブラブラさせた。河はくねつて、音もたてず、「流れ」も見せずに流れてゐた。――深かつた。
音はしてゐても、なか〳〵發動機船は姿を見せなかつた。そして、ひよツこり――まるツきりひよツこりと、青ペンキの姿をあらはした。青空に透きとほるやうな煙の輪を、ボン〳〵順よく吹き上げながら、心持身體をゆすつて、進んでゐるか、ゐないか分らない程の速さで上つてきた。艀を後に曳いてゐた。と、皆は手と足を一杯に振つて、雀の子のやうに口をならべて、「萬歲！」を叫んだ。
舵機室と機關室から、船の人が帽子を振つて何か云つた。皆は喜んで、又「萬歲！」を叫んだ。
「な、あのバタ〳〵ツてのな。」――由三が隣りの奴の手をつかんで、自分の胸にあてた。「な、胸ドキッ〳〵ッてるべ、これと同じだんだとよ。――あれが船の心臟だとよ。俺の姉云つてたわ。」

「んか――？」
「譃こけッ！」――三人目が首を突き出した。あれモーターッてんだ。」
「モーター？　モーターッたら、灌漑溝の吸ひ上げでねえか。えーえ、異ふわ、覺だ振りすなよ！」――由三は負けてゐない。
「んだ、んだ！」端の方が同意した。
――小さい口論の渦が卷く。
突然Ｓ村で、煙火が擧った。
眞夏の高い青空に、氣持よく二つにも三つにも、こだまをかへして、響き渡つた。
「ワアッ！」
由三達は歡聲をあげて、跳ね上つた。
「さ、遲れたら大變だど！」
皆はもと來た道を走り出した。遲れたのが、途中で下駄を脱いだ。
岸野農場の主人が、奥樣と令孃同伴で、農場見物にやつて來ることになつてゐた。――それが今日だつた。
東京にゐる、爵位のある大地主も、時々北海道へやつてきて、小作人や村の人達を「家來」に仕立てて、熊狩りをやつた。
――Ｓ村では、村長を初め[illegible]の旦那、校長などは大臣でも來たやうに「泡を食つて」ゐた。

地主、奥樣、御令孃

自動車二臺が眞直ぐな村道を、砂塵を後に煙幕のやうにモウ〳〵と吹き上げながら、疾走してきた。岸野農場の入口には、百十七、八人の小作が、兩側に並んで待つてゐる。町へ一日、二日の「出面」を取りに行つてゐるものも休んで出迎へた。
暑かつた。皆は何度も腰の日本手拭で顔をぬぐつた。
「もう少しな、俺達の忙がしい時にな、來てもらつたらえゝにな。」
「働いてるどこば見てけれ ばな。」
「ん、ん、んよ。」
「奥樣は何んでも女の大學ば出た人だと。」
「大學？　女の？　ホオ！」
「とオても偉い、立派なひとだとよ。」
「女、大學ば出る？　譃云ふな。女の大學なんてあるもんか。……まさか、馬鹿ア、女が……」
「んだべ、何んぼ偉いたつて！」
一かたまり、一かたまり別な事を云つてゐた。
「な、旦那もう少し優しい人だら一生懸命働くんだどもな。」
「働いだ事無えから分らないさ。」
「今度あまり急で駄目だつたども、こんな時あれだな、皆で相談ば纏めて置いてよ、お願ひせばよかつたな。」
阿部はみんなの云ふのを聞いてゐた。――阿部には、今度「見物」に來るといふことをワザと管理人がその前の晩になつて知らせた魂膽がハッキリ分つてゐた。二年程前、それで管理人が失態してゐた。皆が普段からの不平を持ち寄つて、岸野の旦那が來たとき、それを嘆願した。その事から大きな事件になりかけた事があつたからだつた。――で、今度は管理人に出し拔かれてしまつた。
自動車の後の埃の中をベタ〳〵な藁草履をはいた子供達が、四、五人追ひかけてゐた。のろくなると、皆は鈴なりに後へブラ下つてしまつた。――自動車は農場の入口の管理人の家の前で、ガソリンの匂ひをはいて、とまつた。
袖を輕く抑へて、着物の前をつまみ、もの慣れた身腰で、ひらりと奥樣が降り立つた。
「まア、とてもひどい自動車なこと」――上品に眉だけをひそめた。
續いて、一文字を手にして、當の主人が白絣に絽の羽織で、高い脊をあらはした。その後からクリーム色の洋裝した令孃が降りた。後の自

動車には、出迎へに行つた村長、校長、管理人、それにＨ町の警察署長が乘つてゐた。
小作達は思ひ思ひに腰をかゞめて挨拶した。
「ハ、まア、よオく御無事樣で……」
佐々爺は手拭で顏をゴシ〳〵こすりながら、何べんも頭を下げた。もう身體中酒でプン〳〵匂つてゐた。人集りに出るときは、佐々爺は何時でも酒をやらないと、ものが云へない癖があつた。
「お前達も達者で何よりだ。――ま、一生懸命やつてくれ。」
皆は一言、一言に小腰をかゞめた。佐々爺は、小さい緒顏を握拳のやうにクシャ、クシャにしながら追從笑ひをした。
「本當に、ご苦勞ね。」
奧樣は廣々とした田を見渡すと、輕く息を吸ひ込んだ。
小作の女房や娘達は、たゞ奧樣と令孃だけに見とれてゐた。後にゾロ〳〵ついて行きながら、着てゐるものが何かお互ひに云ひ合つた。が、北海道の奧地にゐる小作の女達には、見たことも、觸つたこともないものだつた。柄のことでも同じだつた。古くさい、ボロ〳〵な婦人雜誌の寫眞でだけしか、さういふ人のことは知つてゐなかつた。――然し、何より「自分達の奧樣」がこんなに立派な人だといふことが、皆の肩幅を廣くさせた。
「馬鹿、お前からして見とれる奴があるか！」
伴が自分の女房の後を突いた。
岸野は畦道にしやがんで、
「どうだい、今年は？」と、稻の穗をいぢりながら、吉本管理人にきいた。――昔の地主などとちがつて、岸野は田畑の事には緣が遠く、ただ年幾らの小作料が手に入るかしか知つてゐなかつた。
「えゝまア並です。二番草の頃は、とてもよかつたんですが、今月の初め頃にかけて蟲が出ましてね。殊に去年は全部駄目と來てゐるから、今年はどんなに良くても小作はつらいんです。――餘程疲弊してるんで……」
「ん……で、どうだい樣子は……？」
「え、今のところは……矢張り秋になつてみないと。」
――お互ひに聲が低くなつてゐた。
「氣をつけて貰はないとな。」
「それア、もう！」
「ん。」
岸野は正直にいつて、時々後から不意に田の中へ突きのめされはしないか、といふ脅迫めいた恐怖を感じてゐた。何かの拍子に何度も何度もギョッとした。一町も行かないうちに、汗をびつしよりかいてゐた。然し表面だけの威嚴は持つてゐなければならなかつた。
「この前のやうに、嘆願書をブッつける事はないだらうな。」
「その點こそ、今度は大丈夫ぬかりませんでした。」
「ん。」それで安心した。――然し後の方は口に出しては云はなかつた。そして鷹揚にうなづいて見せた。持つてゐた穗を田の中に投げると、小さい波紋の輪が稻の莖に切られながら、重なり合つて擴がつて行つた。
「ね、お百姓さんつて、何時でもこの水の中に入つて働くのねえ！」
「さうで御座います、お孃さん。」
二つ三つ田を越したところで、丁度同じ年位の娘が頰かぶりの上に笠をかぶり、「もんぺい」をはいて、膝ツ切り埋つて働いてゐるのが見えた。顏に泥がハジけると、そのまゝ袖でぬぐつてゐる。
「あれぢや足も手も――身體も大變ね！」
「えゝ、その何んでもないんで御座います。」

――追從笑ひをした。
「あたし學校の參考に稻を二、三本頂いて行きたいんですけれど・・・」
女房達が爭つて稻を取りにかゝつた。――吉本管理人は、これアうまい、と思つた。
「矢張り何んてたつて、大したもんだ。」
女房達は小腰をかゞめながら、稻を差出した。令孃は、
「有難う。」と云ひながら、フト差出された女達の手を見た。手？　だが、それは手だらうか！
――令孃は「ま！」と云つて、思はず手の甲で口を抑へた。
一通り田畑を見てしまふと、「いとも」滿足の態で、一行は管理人の家へ引き上げた。

「伴さん」

晩には小作人全部に「一杯」が出るので、皆はホク〳〵しながら二三人づつ、二三人づつ歸つて行つた。
「なア、えツ阿部君！　汗が出たアど。」
伴がガラ〳〵聲で、百姓らしくなくブツキラ棒に云つた。
阿部は何時ものやうに默つて笑つた。健はこはばつた顏で、少し後れてついて行つた。それに伴や阿部付の人達が四五人一緒だつた。――後から來る人達は、地主や奧樣達のことを聲高に噂し合つてゐた。
「あいつ等の着てゐるべラ〳〵した着物なんて、俺達がみんな着せてやつてるんだ位、もう分つてもえゝ頃だな。」
前を歩いてゐた小作が振りかへつた。
「伴さんにかゝると、かなはないね。」
伴もそれと一緒にウハヽヽヽヽと大聲を出して笑つた。
伴は何んでもズバ〳〵云つてのける癖があるので、地主から一番「にらまれ」てゐた。管理人が遠廻しに、小作權を坪幾何の割で買取つてもいゝとよく云つてくる。――何時でも態のいゝ追ひ出しを受けてゐた。が、反對に少しおとなしくしてくれゝば「管理人」にしてやるがといふ交渉もあつた。が、その度に伴のあたりかまはない「ウハヽヽヽヽ」に氣をのまれて歸つて行つた。
「な、えゝオ――イ、勝見さんよ、ボヤ、ボヤしてると、キンタマの毛ッこひん拔かれてしまふべよ。」
大きな聲で前のに云ふと、又ウハヽヽヽヽと笑つた。
「ハヽヽヽヽヽヽ。」――向うでも笑つてゐる。
默つてゐた阿部が、「伴さん、晩に管理さんのとこさ行ぐ時、一寸寄つてけれか？」と云つた。
「ん、ん。」
伴は着物をまくつて棒杭のやうな日燒けした毛むじやらの脛を出して、足をいたづらにブラブラさせたり、石を蹴つたりして歩いてゐた。

「のべ源」

「どうだ、健ちや。」後からのツぽの「のべ源」が聲をかけた。
「あのどつちでもえゝ、一晩抱いて寢たらな。」
「何んだ、お前今迄かゝつて、そつたら事考へてゐたのか。」
健は、初めて、ムカ〳〵ツと云つた。
「それんか他にあるか。」ニタ〳〵笑つた。
のツぽの「のべ源」をS村の小作達は、時々山を下りて來る「熊」よりも恐ろしがつてゐる。飲んだら「どんな事」でも平氣でした。馬鹿力を出すので、どの小作だつてかなはない。「のべ源」の亂暴をとめようとして、五、六人泥田に投げ込まれてしまつた事がある。それに女に惡戯した。

醉がさめると、手拭で頭をしばつて、一日中寢た。

「俺ア何アんもしねえど。俺ア——俺だけア何んもしねえど！」

きまつて、さう云ひながら唸り續けた。

健とは不思議に氣が合つた。——毎日の單調さ、つらい仕事、それで何處迄行つても身體の浮かない暮しをさせられてゐれば、誰だつて若い男は「のべ源」になる。ならずにゐられるものでない。皆、心の隅ッこに「のべ源」の少しづつを持つてゐるんだ。健はさう考へ、「のべ源」には他の人のやうな惡意は感じてゐなかつた。——どの村にも、實際グウだらはゐたし、居る筈だつた。

——然し、何時迄グウだらを繰り返したつて、どうなるものか、健は此頃はさう思つてきてゐた。グウだらが惡いんぢやない、グウだらにさせるものがある。それを誰も知つてゐない、さう思つた。

「な、ま、えゝさ。今晩飮めるんだ。」

「源、酒の……」

「のべ源」は、分つたよ、分つたよ、といふ風に、頭を振つた。伴は「どうしたい。」と、ひやかした。

「模範青年さんにかゝるとネ。」頭をかいて、眼を細くした。

「模範青年ツて誰だ!?」

健は不機嫌に云ふと、そのまゝ默つてしまつた。

阿部は口の中だけで笑つてゐた。

「野にゐる羊」

女達は酒盛の用意のため、三時から管理人のところへ出掛けて行つた。嫁取りだとか、法事だとか、何かのお祝ひだとか、さういふ事だと、お惠達は誘ひ合つて、喜んで出掛けた。——管理人の家の炊事煙突が、めづらしくムク〳〵煙をはいてゐた。裏口から襷をかけて、太い腕をまくり出した女達がザルを抱へたり、葱をもつたり忙がしく出入りした。

令孃は輕い頭痛を覺えてゐた。——汽車の窓から見たり、色々な小說を讀んだりして、何か牧歌的な、うつとりするやうな甘い、美しさで想像してゐたチョコレート色の藁屋根の百姓家！　それが然しどうだらう。令孃は二三軒小屋をのぞいてみた。——眞暗な家の中からは、馬糞や藁の腐つた匂ひがムツと來た。暗がりからワア——ンと飛び上つた金蠅の群が、いきなり令孃の額に豆粒のやうに、打ッかつた。令孃は「アッ！」と聲をたてた。腹だけが大きくふくれて、眼のギョロッとした子供が、爐の中の灰を手づかみにして、口へ持つて行つてゐた。上り端に喰ひかけの茶碗と、鹽鱒の殘つてゐる皿が置きッ放しになつて居り、それに蠅が黑々と集つてゐた。隅ッこに、そのまゝに積み重ねてある夜具蒲團の上から、鷄がコクッ、コクッと四圍を見廻しながら下りて來た。……管理人のところへ歸つてから、濡らしたハンカチを額にあて、令孃はしばらく横になつた。

夜になると、「ランプ」がついた。令孃は本當のランプを見るのが初めてだつた。都會のまばゆい電燈になれた眼には暗い。まるで暗い。然しランプの醸し出す雰圍氣は、初めて令孃を喜ばせた。

「素敵だわ！」

小樽や東京にゐる友達に、繪ハガキで是非ランプのことは云つてやらなければならないと思つた。

日が暮れかゝると、小作人がポッ〳〵集つてきた。土間にムシロを敷いて、高張りの提灯を幾つも立ててゐた。令孃を見ると、小作の人達は坐り直して、丁寧に挨拶した。敎會に通つて

ゐる令孃には、百姓は「野にゐる羊」のやうに純眞に思はれた。父が經營してゐる小樽のS工場の傲慢な職工達とは似てもつかない、と思つた。

「それだけ、それだけで終つてしまつた」

武田が仲間の二、三人と一緒に、少し早目にやつて來た。岸野に會つて、普段から種々お世話になつてゐる幾分もの御恩報じとして、この機會に自分達で角力大會を開いて御覽に入れたいと思つてゐる、と云つた。岸野は滅多になく、顏形をくづして喜んだ。

岸野は上機嫌だつた。――庭先の、少し高い所に立つて、小作に向つて簡單な「訓示」を與へた。そしてすぐ奥に入つてしまつた。吉本が是非さうしなければならないと云つてあつた。

「で、順々に一人づつ、奥でお會ひするさうだから。」

さう云ふと、皆の中から、

「吉本さん、吉本さん！」と、中腰をあげて、伴が呼んだ。

「色々と地主さんに聞いて貰はなけアならない事もあるし、又皆に話して貰はなけアならない事もあるし、是非一つこゝで……」

「それア出來ないんだ。」

皆は急にガヤガヤ話し出した。

「ア、皆さうやつちや駄目だ。――靜まつてけれ！」吉本が一生懸命制した。「今度のお出では、そんな面倒なことは一切拔きにしたものだから、それは又何時かの機會にして貰ひたいんだ。――頼む！」

「さうだ、さうだ、伴さん、酒席でもあるしな。」

小作のうちで、さう云ふものもゐた。

「どうだ！　健ちや、分るべ。」

めづらしく阿部も興奮してゐた。

「一杯食はせやがつたんだね。――阿部さん、會つた時やつたらえゝでせうさ。」

「會つた時？　一人と一人でか？――駄目、駄目！　ちりぢりばらばらだからな。」

「……………」

健は何か不服だつた。「お會ひするのは、ただ顏をみて、「まア、しつかりやつてくれ。」といふだけだつた。――ぢや、その機會をつかまう、健はさう思つた。

二枚重ねた座蒲團の上に、物なれたゆるい安坐をかいて、地主が坐つてゐるのを見ると、外で見たときとはまるで異つた――岸野の存在がその部屋一杯につまつて、グイグイと抑へつけてゐるやうに感じた。――健を見ると、輕く顎だけを、それも顎の先だけを、分らない程に動かした。

「田口健です。」吉本が取次いだ。

「ウ――これか？」

一寸管理人を見て、それから側に坐つてゐた奥樣と令孃へ、「これが農場一の模範青年なんだぜ。」と云つた。

「まアしつかりやつてくれ。――これからはお前達が一番頼りだんだからな……。よしよし。」

さう云つて顎だけを動かした。――管理人はもう次ぎを呼んでゐた。

それだけ、それだけで終つてしまつた。

健は身體中汗をグッショリかいてゐた。健は阿部と顏を合せられなかつた。カアーッと逆上せてゐた。――氣おくれした、意氣地のない自分を、紙ッ片か何かのやうに、思ひッ切り踏みにじつてしまひたかつた。

「のべ源」はもう醉拂つて、眼を据ゑながら、誰か相手でも欲しさうに見廻してゐた。

「健ちや、健ちや、健ツたら！」

健は返事をしなかつた。

「健よオ！　何そつたら不景氣な面してるん

だ。」

健はだまつたまゝ、暗い外へ出て行つた。

五

土方

大陸的な太陽が、ムキ出しな地面をジリ、ジリ燒いてゐた。陽炎が白熱した炎のやうに、ユラユラ立つて、粗雜に敷設されたトロツコのレールが、鰻のやうに歪んで見えた。——土の熱いムレッ返しが來る。

土方は皆褌一つで働いてゐた。身體は掘りかへして行く土より赫黑く燒けて、土埃のかゝツた背中を、汗が幾つにも筋を引いて、流れてゐる。鮮人は百人近くゐた。

急カーヴへ來ると、いきなりトロツコの外側が浮き上る。浮き上つた片方の車輪が空廻りした。——健達は五六人藪入り前を、こゝへ稼ぎに來てゐた。仕事は危かつた。

それは空知川から水を引いて、江別、石狩に至るまでの蜒々二十何里といふ大灌漑溝を作るための工事で、一旦それが竣成すれば、その分派線一帶にかけて、何千町歩といふ美田が出來上る。北海道の產米がそれで一躍鰻上りに增えるのだつた。

村長を看板にし、關係大地主が役員になつて、「土功組合」を組織し、北海道廳から「補助金」や「低利資金」の融通を受ける。拓殖銀行は特別低利で「年賦償還貸付」をした。北海道拓殖のためだつた。——その工事は「監獄部屋」に引受けさせる。土方を使へば、當り前一日三、四圓分位の勞働を五、六十錢でやる。で、頭も二重にも、三重にもハネられた。

大地主は只のやうな金で、その金の割合の何十倍もの造田が出來た。造田さへされゝば、「低利資金」位は小作料だけでドシ〳〵償却出來た。

——健にも分る。これだけのことを見ても、結局の背負ひどころは誰か。——小作人と土方！ それがハッキリ分る氣がした。

「アッ！」誰か叫んだ。

トロツコが土煙をたてながら、顚覆した。裏返しになつたトロツコの四つの車輪だけが、惰勢でガラ〳〵と廻つた。——乘つてゐた土方は土の下になつてしまつた。然し誰もそれにかまつてゐない。——日雇ひに行つてゐる健達は思はず立ち止つて、息を殺した。

「次のトロツコが見るに見かねて、少しグヅグヅしてたツけア、止つちやいかん、止つちやいかんッて、棒頭が怒鳴つてたど。」

健達は今度S村附近に陸軍の演習があるので、その宿割を受けてゐた。

「兵隊さんだけには、白い飯食べさせなかつたら恥だからな。」

母親に何度も、何度も云はれて、稼ぎに出てゐた。然し村から稼ぎに行つてゐるものは、三日と續かなかつた。途中でやめてしまつた。

「ま、俺達途中でやめられるからえゝが、土方達はどうする……」

歸り道は、身體中痛んだ。肩がはれ上つて、ウミが出た。

「土方人間で無えべ。——土方と人間が喧嘩したつて歌あるんだからな……」

「佐々爺云つてたども、北海道の開拓はどうしたつて土方ば使はねば出來ないんだつてよ！」

「んだかな。」

「馬鹿云ふもんでねえよ！」

健はムカ〳〵した。

「飯場さ入る時な、皆は裸にしてよ、入口でヒー、フー、ミー、ヨーッて數へるんだ。——窓つて窓は全部釘付けよ。」

健は明日からもうやめた、と思つた。——兵

隊にだつて、俺達と同じ黒飯を食はしたつて構ふもんか、要らない見榮なんてしない方がいゝんだ、と思つた。

「俺アもうやめた。」

次の朝三時頃、表から仲間が呼んだ。

行けば行けると思つてゐたのに、眼がさめると、身體が痛くて働ふことしか出來なくなつてゐた。

「何んだつて!?」――母親がむつくり頭をあげた。

健はものも云はずに又蒲團をかぶつた。

「健――これ健ツ、もう二日我慢してけれ、な、もう二日!」

「續かない、身體痛たくて、痛たくて!」

それつ切りだまつた。耐へ性なく、それに眠かつた。

母親は思ひ切り惡く、何時迄も枕もとでクドクド云つてゐた。それを、うるさい、うるさいと思つてきゝながら、何時の間にか又眠つてゐた。

「ハッ、兵隊さんだな。」

裏の畑のそばで、由三が蹲んで、

「日本勝つた、日本勝つた、ロシア負けたア・・・」

「日本勝つた、日本勝つた、ロシア負けたア・・・」

枝切れで蟻穴をつツついてゐた。

「赤蟻、露助。黒蟻、日本。――この野郎、日本蟻ばやツつける積りだな。こん畜生。こん畜生!」

ムキになつて、枝の切れッぱしで突ツつき出した。

「こら、こら、――こらツ!」

遠くで銃聲がした。由三はギクッと頭を擧げた。――續いて又銃聲がした。由三は枝ツ切れを投げ捨てると、いきなり表へ馳け出した。眼をムキ出して馳け出した。

「ハッ、兵隊さんだな!」

「何するだ、稻が、稻が!!」

晝頃、宿割をきめるに軍人と役場の人がやつてきた。健達は「青年訓練所」から演習の見學のために、一日だけ參加しなければならなかつた。――軍人と辛苦をともにして、如何な難事にも耐へる精神を養ふのだ、といふのだ。危い、危い、健は然し今ではもう行く氣がしてゐなかつた。――云ふことだけは立派だ。「難事に耐へる!」だが、何んの難事に耐へるのか。「×」を見ろ! いくら食へなくても、×××はヂッとしてゐなければならない、といふことの××ではないか!

朝から、遠くで銃聲がしてゐた。飛行機が高く晴れ上つた空に、爆音をたてて飛んだ。向きの工合で、翼が銀色にギラ〳〵ッと光つた。小作人達は所々に立ち止つて、まぶしさうに額に手をかざして、空を見上げてゐた。――子供は夢中だつた。

健は由三にせがまれて、外へ出た。ジリ、ジリと暑かつた。だまつてゐても、腋の下が氣持惡くニチャ〳〵と汗ばんだ。由三は今やうやく出來かけてゐる口笛を吹きながら、手にぶら下つたり、身體にからまつて來たり、一人で噪いでゐる。

市街地に入ると、郵便局の前に毛並のそろつた軍隊の馬が、つながつてゐた。小さい鞄を腰にさげた兵士が頼信紙に何か書いてゐた。

「えゝ馬だな。――俺アの馬ど比べてみれでア!」

由三は馬の側を離れないで、前へ廻つたり、後へ廻つたり、蹲んで覗き込んだ。

「兄ちや、來年兵隊さ行けば、馬さ乘るんだべか。えゝなア!」

村にはどの家にも役割の紙が貼らさつてゐた。——市街地を出ると、銃を肩にかけ、胸のボタンを二つ程外して、帽子の下にハンカチをかぶつた兵隊が三人、靴底の金具をチャリ〳〵させて、ゆるい歩調でやつてきた。

「S村つて、これですか。」——市街地を指した。片手に地圖を持つてゐた。

由三が健より先きに周章てて答へをひつたくつた。

「んですよ。」と云つた。

それだけで、それが由三には大した名譽なことに思はれた。

銃聲は東の方から起つてゐた。それで基線道路から植民區域七號線へ道を折れて入つた。少し行くと、處々道に見慣れなく新しい馬糞が落ちてゐた。

「あらッ！　あらッ！　あら、なア！」

由三が頓狂に叫んだ。田圃を越して、遠く、騎兵の一隊が七、八騎時々見え、かくれ、行くのが見えた。——もう、由三は夢中だつた。河堤に出ると、村の人達が二三十人かたまつて、見物してゐた。由三は健の手を離れて、先に走り出してしまつた。見てゐると、人の腋の下を潜り、グングン押しわけて一番前へ出てしまつた。

百人近くの兵隊が、銃を組んで休んでゐた。ムレた革と汗の匂ひが、皆の立つてゐる處までしてゐた。——日蔭になつてゐるところには、上半身を裸にして、仰向けに寢てゐるものが二三人ゐる。どの兵士も胸の中にがつくり頭を落したり、横になつたり——皆ぐつたりしてゐた。然し顏だけは逆上せたやうに、妙に赤かつた。それが氣になつた。汗が上衣まで通つて、背の出張つたところ通りの形にグッショリ濡れてゐた。

「どうしたんだべな。」

「追はれて來たんだべよ。——見れ、弱つてる！」

不意に、あまり遠くない處で銃聲がした。雜木林から吹き上げられたやうに、鳥の群が飛び立つた。續いて銃聲がした——と、上官らしいのが列外へ出て、何か號令をかけた。ガチャガチャと金具の音が起つた。が、皆はどうにもならない程、疲れ切つてゐた。

「グヅ〳〵しちアいかん！　グヅ〳〵しちアいかん！」

上官がカスれた聲で怒鳴つた。

「やつぱり兵隊つて、えゝものだね。——ラッパの音でもきいたら、背中がゾク〳〵してくるからな。」

健の隣りで話してゐる。——「青島」で右手がきかなくなつてから、働くことも出來ず、半分乞食のやうな暮しをしてゐる「在郷軍人」だつた。

「戰爭だつて、考へたり、見たりする程おッかねえもんでねえんだ。ワアッて行けば、何んしろ……」

皆に聞えるやうに、わざと聲を高めた。

兵隊は歩きづらい砂地を、泥人形のやうな無恰好さで、ザク〳〵歩き出した。だまりこくつて、空虛に眼を前方の一定のところにすゑたきり、自分のではない、何か他のものの力で歩かせられてゐるやうに、歩いてゐた。病人を無理に立たせて、兩方から肩を組み、中央にして歩かせた。が、他愛なく身體がブラ下つてしまつた。頭に力がなく、歩く度にグラ〳〵ッと搖れた。

皆はゾロ〳〵堤を引き上げた。雜木林の中から、その時だつた、突如喊聲が上つた。帽子の色のちがつた別な一隊が、附劍をして「ワアッ、ワアッ！」と叫びながら、さつきの兵隊の後横へ肉迫してゐた。——不意を喰つてしまつた。立ち直る暇もなく、そのまゝ隊伍を潰して、横へそれると、實りかけてゐる田の中へ、ドタド

タと入り込んでしまつた。見てゐる間に、靴の下に稻が踏みにじられてしまつた。

「あ、あッ、あ――あッ、あッ！」

田の向うに一かたまりにかたまつて見てゐた小作人が、手を振りながら夢中に馳けて來るのが見えた。健達も思はず走つた。――百姓達には、それは自分の子供の手足を眼の前で、ねぢり取られるそのまゝの酷たらしさだつた。

「何するだ！」

「何するだ！　稻!!　稻!!」

然し兵隊のワアッ、ワアッといふ聲に、それはモミ潰されてしまつた。士官は分つてゐて、××、やめなかつた。――もう百姓は棒杭のやうに、つッ立つてしまふよりない！

やうやく「休戰ラッパ」が鳴つた。

兵卒達はそれでも稻を踏まないやうに、跳ね跳ね田から出てきた。

士官は汗をふきながら、プリ〳〵して、

「後で主計が廻つてくるんだから、その時申告すれアいゝんだ。」

それは分つてゐる！　然し損害を受けただけを申告すれば、その度に「これを種にして儲けやがるんだらう。」「日本國民として、この位の損害をワザ〳〵申告するなんてあるか。」と云はれる。「帝國軍人のためだと云つて、申告しない百姓さへあるんだぞ。」そんな事も云ふ。――貧乏な、人の好い小作人はどうすればいゝか？――小作料を納める時になれば、地主はそんなことを考顧さへもしてくれない。

兵士達はそれ等の話を氣の毒さうに、離れてきいてゐた。――矢張り小作人の伜達がゐるんだらう、健はそのことを考へてゐた。

田を踏みにじられた隣りの農場の小作が、壞れた瀨戸物でもつなぎ合せるやうに、田の中に入つて行つて、倒れた稻を起しにかゝつた。――健にはそれは見てゐられなかつた。

「下稽古かも知れないど」

兵隊の泊つた朝、由三は誰よりも先きに起きた。――吃驚したやうにパッチリ眼を開けて、家の中をクルッ〳〵と見廻すと、ムックリ起き上つてしまつた。前の日に磨いて立てかけて置いた銃や劍や背嚢の前に坐ると、獨言を云ひながら、ちよッぴり〳〵いぢつた。魚が餌でもつツつくやうに。

母親が起きてきた。――母親は吃驚して、いきなり由三の耳をひねり上げた。

「これッ！　大切なものさ手ばつけて、をがしくでもしてみれッ！」

健は眼をさましたまゝ、寢床にゐた。――前の夕方、健が納屋から薪を取り出してゐたとき、すぐ横で、井戸の水をザブ〳〵させながら足を洗つてゐた兵隊が話してゐるのを聞いた。

「こゝの家ヒドイな……」

「うん、ま、御馳走はないな――」

「それでも……」

あと一寸聞えなかつた。息をつまらせて笑つてゐる。

「シャンだからな。」

「それに……な、色ッぽいところがあるぞ。」

「あれか、鄙にもまれなる……」

「……埋合せか。」

聲を合せて笑ひ出してしまつた。

健は暗がりの納屋の中にゐて、一人でカアーッと赤くなつた。

健は昨日からのお惠の燥いだ、ソハ〳〵した態度にムカ〳〵してゐた。

兵隊が起きると、由三は金盥に水をとつてやつたり、下駄を揃へてやつたり、氣をきかして先きへ先きへと走り廻つた。お惠は日燒けのした首に水白粉を塗つてゐた。塗つたあとが、そのまゝムラになつて殘つてゐた。

飯はお恵が坐つて給仕した。すると、由三が口を尖らした。

「兵隊さんに女なんて駄目だねえ。――健やるから、姉どけよ！」

兵隊は苦笑してしまつた。

母親は又昨夜のやうに、御馳走のないことをクド〳〵繰りかへした。

晝過ぎから土砂降りになつた。六時頃、兵隊は身體中を泥だらけにして歸つてきた。――ものも云へず、一寸つまづいただけで、そのまゝ他愛なくつんのめる程疲れ切つてゐた。――母親はそれを見ると、半分もう泣いてゐた。×××とられるかも知れない健のことが直ぐ考へられた。

その晩は最後であり、それにゆつくり出來ると云ふので、健は母親に云ひつかつて、裏で雞鶏を一羽つぶした。「今からは、「兵隊さんに出すのだから。」と云つて、やう〳〵酒を一升借りて來た。

醉つてくると、兵隊は色々兵營の面白いことを話してきかせた。由三は「眠くねえわ、眠くねえわ。」と眼をこすりながら、何時迄も起きてゐた。

「坊、大きくなつたら兵隊になるか。――ハヽハヽヽヽ。」

「僕も百姓ですよ。」と一人が云つた。「僕の從弟が内地の聯隊にゐたとき、自分の村で小作爭議が起り、それがドエライことになつてしまつた事があるんです。半鐘は鳴り、ドラはなり、何千人ッていふ小作人が全部まア……暴動ッて云ふかね、それを起したんですね。どうにもならなくなり、地主連が役所に頼み、役所が軍隊に頼み、軍隊出動といふ處までトウ〳〵行つてしまつたわけです。――が、何んしろその兵隊さんの親、兄弟、親類が村にゐるときてゐるし、それに自分等も村にゐたとき、毎日々々地主に苦しめられてきてゐる。――どうにも出來ない。とても苦しかつたさうですよ……」

「ハアねえ――」母親はワケも分らずうなづいた。

「あんまり御馳走してくれるんで、思ひ出したんだけれども、――御馳走するどころか、そんな風で案外これア敵かたきでないかと思つてネ。」と云つて、大聲で笑つた。――「この邊はどうです、僕の村あたりだと、毎年のやうに小作爭議が起りますよ。何處だつて村は困つてゐるし、又困つて行く一方ですからね。……ネ、何時か僕等が附劔して、この村へワアッて、やつて來ることでもある……ぢやないかと思つてネ……」

「まさか！」思はず皆で笑ひ出した。

後で、フトこの話を健が阿部にした。

「それア××だよ。」と阿部が考へ深さうに云つた。「あんまり内地で、所々に農民暴動が起るんで、××××だつてその下稽古かも知れないど……。」

次の晝頃、ラッパの音が聞えると、皆村道に出て行つた。

お恵は髪を綺麗に結び直して、由三を連れて出た。畦道を繩飛びをする時のやうに、小刻みに跳躍しながら走つた。

村を出て行くラッパの音は、皆を妙に興奮させた。それを聞いてゐると、何か胸が一杯になつた。足並の揃つた　ザク〳〵といふ音と一緒に埃が立つた。二日でも自分の家に泊つた兵隊が通ると、手を振つてゐる。

「あら〳〵、俺アの兵隊さん！」

眼ざとい由三が見つけると、姉の手を引張つた。

心持こつちへ顔を向けて――その顔が笑つてゐる。お恵は耳まで眞赤になつた。そして手を擧げた。が、胸のところしかあがらない……。

ラッパの音が遠くなつた。

そして行つてしまつた。

皆は兵隊の殘して行つた革の匂ひと埃の中に、何時迄も立ちどまつて見送つてゐた。

六

「あれは口の二つあるダニだよ」

「お茶ば飲みに來ないか。旭川の人も來るし、二三人寄るべから。」

前から伴や阿部のところに、四五人集ることのあるのは知つてゐた。健は初めてだつた。

仕事が終つてから、藁屑のついた着物を別なのに着かへて出掛けた。由三は獨り言を云ひながら、壁へ手で犬や狐の恰好の影をうつして遊んでゐた。

「兄ちや何處さ行ぐ?――由も行ぐ。」

出口までついて來て、駄々をこねた。

もう秋めいてゐる。夜空に星が水ッぽい匂ひをさせて一杯にきらめいてゐた。實りの薄い稻の輕いサラ〳〵した音がしてゐた。

政府の「米買上げ」と不作の見越しで、米の値は「鰻上り」に上つてきてゐる。然しその餘澤の一ッこぼれさへ百姓にはこぼれて來ない。――今時米を手持ちしてゐるのは誰だらう。百姓でだけはない。みんな一番安い十一月、十二月に俵の底をたゝいてしまつてゐる。――どんな百姓でも「米買上げ」が自分達には「クソ」にもならないことだけは知つてゐた。

「んでも、政府さんのする事だもの、やつぱし深い考えあるんだべよ。」と云つてゐた。

健がムキになつて「買上げ」をコキ下したとき、佐々爺が手に持つてゐた新聞をたゝいて、

「え、え、え、東京新聞も碌ッた見もしねえで、何分るッて! お前みだいた奴の、小さい百姓の頭で何が分るッてか。お前より千倍も偉い、學問のある東京の人が考えて、考えて決めた…だんだ。――東京新聞ば讀め! 東京新聞ば讀んでからもの云ふんだ。えゝか!」――顏をクシャ〳〵にさせた。

今年はこの後若し雨にでも降られゝば「事」だつた。

阿部の家の前の暗がりで、不意に犬が吠え立つた。家の中から誰か犬の名を呼んでゐる。小さい窓を大きく影が横切つて、すぐ入口の戸が開いた。阿部が顏を出した。

旭川の人はまだ來てゐなかつた。

八人程集つてゐたが、若いものは健一人だけで、皆家をもつてゐる農場でも眞面目な年輩の小作ばかりだつた。それは意外だつた。健は漠然と若い人達ばかりと思つてきたのだ。――然し、その人達を見ると、やつぱりこれが本當だと思はさつた。太い、ガッシリした根が、眼には見えず農場の底深くに、しつかり据ゑられてゐるのを感じた。

「作」のことが、やつぱり話に出てゐた。

吉本管理人は、いくら田を見せて賴んでも、決してそのまゝ岸野に知らせてやつてはくれなかつた。裏では、吉本を本名で呼ぶものはゐない。「蛇吉々々」と云つてゐる。管理人だから默つてゐるけれども、誰かに不幸があつたとき、地主が小作人に送つて寄す「香奠」から頭を割つた。自分ですつかり書き直して、それから小作のところへ香奠を持つてきた。道路や灌漑溝の修繕工事をすると云つて、日雇賃を地主から出さして置いて、小作人を無償で働かし、それをマンマと自分のものにしてしまつた。小作料の更新をするぞ、とおどかして、「坪刈」にやつてくる。然し本當は嘘で、自分の家に何百羽と飼つてある鷄や鵞鳥や七面鳥のエサにするための口實でしかなかつた。

この「蛇吉」はH町のある料理屋の白首を妾

同様にして通つてゐた。
「地主さんより上手だ。――地主さんはさう惡くないんだ。吉本よ、あの蛇吉よ！」
小作人のうちではさう云つてゐる。
「あれアダニだよ。」
「口の二つあるダニだ。」――健は自分で赤くなつて云つた。「一つで地主の血ばとつて、もう一つで小作から吸ふんだ。」
「ん。」
「地主からなら吸ふ血があるべども……」
健が云ひかけると、みんな云はせないで、「それさ。そこさ。それが大切などこさ。」――伴がガラ〳〵な大聲をたてた。
「××××××、彼奴ば一番先にヤルんだ。」

「血書」

「健ちや、××よかつたな。大した儲けだな。」――近所の小作だつた。紙捻を煙管の中に通してゐた。「石山の信ちやとられたものな。」
「ん、ん、可哀想なことした。」
「ところが、信ちや喜んでるんだとよ。――兵隊さ行つたら、毎日芋と南瓜ばかり食つてなくてもえゝべし、仕事だつてこの百姓仕事より辛い筈もなし、んだら一層のこと行つた方えゝべツて……」
「まさか……」
「んでもよ、働き手ば抜かれてしまふべ、行けるんだら親子みんなで行きたいツてよ。」
「ドン百姓からばかし××××やがるんだものな。一番多いさうだ。」
「誰か本當かな。」――阿部が云つた。「こんなこと聞いたど。村長が徴兵検査に行つたもののうちで、採否の分らねえやうなものに、こつそり血書ばさせて、村の名譽にしようとしたつて……」
「へえ！」
皆一寸だまつた。
「んかな……」
「まさかよ。」
「俺ありさうだつて思ふんだ。」――阿部は何時もの癖で、自分の手の爪の先を見ながら、隅の方でゆつくり云つた。「村長一人の考へからでもないんだ。絲をひいてる奴がゐるんだ。――農村青年の思想惡化だなんて、彼奴等青くなつてるんだから夢中よ。――此頃の北海タイムスや小樽新聞の農村欄ば見れ。ヤレ農村美談だ、ヤレ何々村の節婦だ、孝子だ、ヤレ何青年團の美擧だ、ヤレ何の記念事業だツて、ムキになつて農村の太鼓ばたゝいてゐるんでねえか。――所が、實際の農村はどうだ。何時迄も百姓は死に物狂ひだんだ。何時迄も百姓ばチッとさせて、何時迄も勤勉に仕事ばさせて置くためには新聞でこい、雜誌でこい、紀元節でこい、徴兵検査でこい、青年訓練所でこい、機動演習でこい、學校でこい、みんなその目當てのためにドンドン使つてしまふんだ。仲々それも一寸見は分らないやうにやるんだから危いんだ。――水も洩らさない。何んにも知らない百姓は、んだからウマ〳〵と、そのからくりに引懸つてしまふんだ。」
「面倒だて！」――伴は日焼けした顔を大げさにしかめた。「仲々な！」
「はがゆくてもよ、豆粒みたいによ、俺達のどこさよ、一人々々よ、××して來るんだな。」
「何アんでも一人ぢや脆いもんぢや。」――畑か田のことより知らない、歯の抜けてゐる四號の茂さんが(！)そんな事を云ふ。

農民組合の荒川さん

表で犬が吠えた。
「荒川さんだべ。」――阿部が立つて行つた。
「や、失敬々々。」

さう云つて、ズックの鞄をドサリと投げ出した。痩形の、少し左の肩が怒つてゐる二十二三の人だつた。髪を長くしてゐた。
「ご苦勞さまでしたな。」
「イヤ、イヤ。」
荒川は上つてくると、「ヤア。」と云つて、元氣よく皆に頭を下げた。そして眞黒に汚れた手巾で、額から首をゴシ〳〵こすつた。
「作は惡いね。――今年はこれア大したことになるね。」
「岸野さんがドウ出るか……」
「どう出るかつて？――」
後は笑談のやうに笑ひながら、
「そんなこと岸野の農場で十年も小作をしてゐれば、もう分つてもいゝ頃だらう――なア！」
皆笑つてしまつた。
聞き易いテキパキした調子で、時々笑はせながら、色々のことを話してくれた。
――秋田には「青田を賣る」といふことがある。それは新しい小作××で、立毛差押さへや立入禁止など喰ひさうに思ふと、小作人が先手を打つて、夏頃に出穗を豫想して、青田のうちに商人に賣つてしまふのだつた。金にして持つてしまへば、こつちのものだつた。――どうだい、やつてみないか、と荒川が笑談のやうに云つた。
近邊の農村を廻つて歩いてゐると、農村の生活水準がだん〳〵下つて行くのが分る。益々下つて行く。いくら村長や警察署長が「農村の美風」をかついで、ムキになつたつて、食へなくなれば、どうしても地主樣に「××ひ」しなければならなくなる。
それに、かうなつて來ると、困るのは水呑百姓ばかりでなしに、なまじツか十町、二十町歩位の田畑を持つてゐる「地主」で、反當りで計算してみても、灌漑費、排水費、反別割、其他の稅金、生活費用を見積ると、そこから上る六、七斗の小作料では引き合はなくなつてきてゐた。
――田に修繕を加へて、少しでも上り高を多くしようとすれば、どうしてもそれを拓殖銀行へ抵當に入れて「年賦償還」の貸付を受けなければならない。だが、さうすれば、今度は益々引き合はなくなる。大地主の存在がジリ〳〵と壓迫してゐた。小作人より苦しんでゐた。その癖、俺は地主樣だといふ氣持を、どうしても無くしない。どんなにヒッつぶれても、小作人達と同じ人間にされてたまるもんか、さう思つてゐる。
健の家と川を隔てて向ひ合つてゐる越後から移轉してきてゐる廣瀨がそれだつた。――頭がギリ〳〵に廻らなくなつてゐるのに、土地も自分のものでなくなつてゐるのに、自分の子供が由三達と遊ぶことを嫌つた。――「なんぼ成り下つたつて……」
荒川は硫黃分でインキのやうに眞黒になつてゐるお茶を飲みながら、内地の農民の話をした。――内地では、小作××で「ドンツキ」をやる。小作人が×××無理矢理ひつぱつてきて、逆さにつるして灌漑溝の水につけたり、上げたりやる。然し北海道のやうに、小作と一緒に村に住んでゐる地主がゐないので、殘念ながら、ドンツキは出來ない。」
「若しか岸野ばしたら、どうだべ。」――一人がいたづらに云つた。
「岸野か、さうだな……」
「そんな手荒なこと、なんぼ岸野さんだつてな……」
荒川はだまつてきいてゐた。
「あれだら、仲々頑張るど。」
「あの面だものな！」
「そんな事……馬鹿だな……」
「なんぼ岸野だつて、こつちは兎に角人數は多

いんだからな。」

「ハヽヽヽ、今度いくらでも實驗できる時來るさ。」

荒川は愉快に笑つた。――

荒川は何時でも警察に尾行をつけられたり、何回も刑務所へブチ込まれたりしながら、この方の××をしてゐた。――健もそれは聞いてゐた。然し、どうしてこんなに呑氣さうに、愉快でゐることが出來るんだらう。――健にはそれは分らなかつた。

ロシア××前と後とで、ロシアの百姓はどういふ風に變つたか、それが百姓本來の要求にどんなにピッたり合つたか。――さういふ話をきくと、自分達が實際にやつてゐる生活のことで、しかも誰もがそれと氣付かなかつたことが、ハッキリしてきた。

次の朝は早いし、家が遠いので、健は中座した。

「小便たまつた。」

阿部がついでに外へ立つた。

「阿部さん、俺も一生懸命やるから、何か用でも出來たら、させてけないか。」

健は興奮を抑へ、抑へ、阿部の顏を見ないで云つた。――たつたそれだけのことで、健は言葉が顫へさうでならなかつた。

「さうか、さうか！ 頼む！」

上氣した頰に、冷えた夜氣が心よかつた。――秋だつた。歩きながら、彼は何か聲を出したかつた。

「待つてろ、待つてろ、俺だつて！」

何度も獨り言した。

やもめの「勝」

道路を折れると、やもめの「勝」の家だつた。長い雨風で、ボロ／＼に腐れ切つたヨロ／＼の藁小屋で、風が强いと危いので、丸太二三本を家の後へ支へ棒にしてゐた。――四五年前に夫に死なれてから、一人で稼いでゐた。それから一年に一人づつ、お互に少しも顏の似てゐない子供を三人生んだ。誰が父親か分らなかつた。――色々な男がこつそり勝の家へやつてきた。勝はそれで暮しを立ててゐた。――村の娘等は少し年頃になると、（例へばキヌなどのやうに）札幌、小樽へ出て行つてしまふ。自分の母親達のやうに、泥まみれになつて、割の惡い百姓仕事をし、年を老る氣にはなれない。それで村の若い男は幾つになつても、仲々嫁を貰へなかつた。と云つて、又金を懐にしてワザ／＼H町まで出掛けて行くことの出來ないものは、日が暮れると、勝のところへやつてきた。

ひよいと見ると、勝の家から誰か男が出てきた。出口の幅だけの光を身體の半面にうけて、それがこつちから見えた。――武田だ！ 偉いこと云つて！――健は武田のさういふ處を見たのが愉快でたまらなかつた。

今に見ろ、畜生！

七

七之助の手紙

畑から歸つてくると、母親がプリ／＼怒つてゐる。

「見れでよ。切手不足だつて、無え金ば六錢もふんだくられた。」

手紙は七之助から來てゐた。――健は泥足も洗はずに、爐邊へずツて行つて、横になりながら封を切つた。

朝五時に起きて、六時には工場に行つてゐる。油でヒンやりする、形の無くなつた帽子をかぶり、背中を圓くし、辨當をブラ下げて出掛けて行く。俺の前や後に

も、やつぱりさういふ連中が元氣のない恰好で急いで行く。――工場では、ボヤボヤしてゐられない。朝の六時から晩の五時迄、弓の弦のやうに心を張つてゐなければならない。

俺が來てから、仲間の若い男が二人機械の中にペロ〳〵とのまれてしまつた。ローラーからは、人間が大市の雜市のやうな挽き肉になつて出てきた。一人の方の女房は、それから淫賣をやつて、子供を育ててゐるといふ評判をきいた。もう一人は青森の小作の三男ださうだ。背がゾッとする。

工場は大きな機械の廻る音で、グヮングヮンしてゐる。初めの一週間は家へ歸つても、耳も頭もグヮン〳〵して、身體がユキ〳〵し、新聞一枚讀めなかつたものだ。――俺はこのまゝ馬鹿になつてしまふんではないか、と思つた。今は慣れた。

此前キヌと會つた。キヌは岸野の經營してゐる「ホテル」にゐる。――岸野は雜穀、海産、肥料問屋、ホテル、××工場、精米株式會社を經營し、取引所會員、拓殖銀行其他の株主、商業會議所議員、市會議員をやつてゐる。他に何千町と歩いふ農場や牧場も持つてゐるわけだ。岸野が賣り殘して年を越したために、檢査に落ちて、どうにもならなくなつた鰊粕を、俺達の農場の方へ送り込んで寄こして、それを檢査品と同じ値段で賣つてゐることは、知つてゐる筈だ。然しあの岸野にしたら、こんな事ものの數でもない。

キヌが云つてゐたが、ホテルには二十人近く女給がゐる。――岸野が一週間に二度位廻つて行くと、必ず自分の室から女給を呼ぶ。そして肩をもませた。皆は自分に順番のくるのをどうすることも出來ず、たゞ待つてゐるばかりだ。嫌なら出て行け、然し出て行ける「金の持つてゐる」女なら、最初からそんな處に來る筈がない。みんな家の暮しのために、村から出てきた、云はゞ俺達と同じ仲間なのだ。――中には、落着いて髪を直しながら、ドアーから出てくるものもある。然し大抵外へ出るなり、フッと泣き出してしまふ。見てゐられないさうだ。岸野は來る度にキマッてさうした。

岸野が一體どんな事をしてゐるのか、百姓達は、ちつとも知つてゐない。――ここに來て、それが初めて分つた。阿部さんに紹介されて來た人達は、こゝで勞働問題などを研究してゐる。俺は何も分らなかつたが、すゝめられて出てゐる。出てよかつた。俺は色々のことをそこで知つた。

百姓のことでは、特別に皆から聞いた。

百姓といふものは、今のこの世の中では何處迄行つても、――行けば行くほど慘めになるものだ、といふ事を知つた。假りに百姓が自分の田畑を持つてゐて、小作料を拂ふことも要らず、必要なものは全部自分の家でこしらへ、物を賣ることも、買ふこともなかつたら、それは幸福かも知れない。――然しこんな處が世界の何處を探したつて、無いこと位は分りきつたことだ。

都會にゐればよく分ることだが、大工場では生活に必要な品物をドン〳〵作り出してゐる。それが大洪水のやうに農村を目がけて、その隅々も洩らさずに流れ

込んで行く。さうなつて來れば、もう土間にランプを下して、繩を綯んだり、着物を織つたりしてゐたつて間に合はなくなつてしまふ。追ッ付くものでない。——北海道では何處だつて、出稼ぎは別にして、冬の內職などするものがなくなつてしまつてゐるではないか。

百姓は、だからどんなものでも買はなければならなくなる。——で、要るものは金だ。百姓が金を手に入れる道はたつた一つしかない。出來上つたものを賣ることだ。——ところが、世界中で一番いゝものを下手糞に賣るものは百姓だ。健ちやも知つてゐるだらうが、村で都會の商品市場がどう變化してゐるか、又から變化しさうだから賣るとか、賣らないとか、秋にそんなことを考へて賣つたりする百姓が一人でもゐるか。どうして、どうしてだ。

三年前に、青豌豆の値が天井知らずに飛び上つたことがある。知つてるな。和蘭が不作のために、倫敦から大口の註文があつたからだ、とあの時は皆云つてゐたさ。ところが、今度小樽へ出て聞いてみると、さうでないんだ。その事もあるにはあつた、が小樽の大問屋で、大貿易商である「露」が、高く賣り飛ばすために、買ひ集めてしまつてから、さう宣傳したさうだ。——山の方の百姓はそんな事は知るもんでない。

次の年、どの百姓も「青豌豆、青豌豆」と青豌豆を作つたものだ。そして一年の丹精をして、大成金を夢見て、さて秋が來たときどうだ！ ガラ落ち！——和蘭が大豐作だと云ふ。然し本當はそれも七分の譃。落すにいゝだけ落して、安く安く買ひ集めたのは大問屋だつた。そのカラクリは仲々分るものでない。——首を縊つた百姓、夜逃げした百姓が何人あの年ゐたか。都會が凡ての支配權を握つてゐるのだ。

かういふ世界へ百姓が首をつん出して、うまく行く筈がない。山の中にゐて、市場の景氣もあつたものでない。工場などでは、昨日原料を仕入れゝば、明日にはもう賣り出せるやうに品物が出來上る。それが一年中切れ間もなしに續けられるし、賣れ工合によつては、自由に出來高の加減もその日〳〵のうちに出來る。ところが百姓はどうだ。——原料を一回仕入れて、その第一回目の品物が出來上る迄に一年！ この融通のきかなさ！ これだけでも分る。

工場に入つて驚いたけれども、機械だ。假りに一人の男が毎日毎晚働いて、一年もかゝる位の分量の仕事を一日位でしてしまふ。——そんな機械でばかり工場が出來上つてゐる。俺達はたゞ機械のそばについてゐて、手だけ動かしてゐればそれでいゝ。ところが、その眼で農村を見れば、まるで居眠りでもしたくなる程のんびりと昔風でないか！——追ひ付けるものでない。

都會にゐる地主でも、そんなワケで、地主だけではとても眼まぐるしいこの社會に、太刀打ちが出來て行かない。地主でも、百姓からは出來るだけ澤山の小作料を捲ればいゝといふ風に、放ッたらかして置いて、ドシ〳〵別な仕事をやつてゐる。——丁度、岸野のやうにだ。——だから、例へて云へば「人魚」のやうなものだらう。

上半分だけは「地主」だが、下の半分は「資本家」になつてゐる。ところが、下の部分の資本家の方が、ドン／＼上の地主の部分を侵して行く傾向ださうだ。——だから、今時の地主は地主自身、小作人が可哀想だとか、もう少しこの社會に當てはまるやうに改良してやりたいとか、そんな事に少しでもかまつてゐられない。逆に自分の方がをかしくなる。小作からは取れるだけ取つたら得、皆さう思つてゐる。

もう小作人は地主樣を當てにして、何んとかして下さるだらう、と待つてゐたら、百年經つたつて、待ちぼうけを食ふのが落ちだ。研究會の人が農村について云つた、今のこの世の中の組織——しくみが變らない以上、どんな事をしても農民は駄目になつて行く。勿論この忙しい都會の制度に當てはまるやうに直して行くこと、例へば百姓がチリ／＼、バラバラに仕事をすると、どうしたつてヒドイ目に合ふから、まア協同組合、協同耕作、協同經營そんなものでも作つて、中に入る狡い商人に儲けさせない方法もある、然しそれも程度もので、ウマク行く筈がない。——だから、何んと云つたつて、ドン／＼小作××をやつて、小作人の生活を向上させて行くことだ。これより無い。——要するに、×××のやうに勞働者と百姓だけで××××××××××、どうしてもウマク行かない。——皆この意見だ。云はれて見れば、どれもこれも頭へピン／＼來るではないか。

農村に政治、經濟の中心地があつたことがあるか。享樂、外交、流行、藝術の中心地であつたことがあるか、——考へるさへコッケイだ。昔五つか六つでしかなかつた「都會」が短い間にどんなに急激に殖えたか。——人口から云つても、もう半分以上は都會に集つてしまつてゐる。これだけ見ても分る。然し「都會」と「農村」は何處まで行つても敵、味方ではないのだ。たゞ、今の世の中のしくみがさうさせてゐるので、で、そのやうに見えてゐるだけだ。

岸野のことでは面白く話してくれた。——假りにS村から年五千圓上るとすると、彼奴はそれをまづ拓殖銀行に預金する。（一番上品に、知らん振りをしてゐるが、「銀行」といふものこそ、百姓の××をしめる親方の總元締であることを見てゐる百姓が一人でもゐるか！）——すると、その金は拓殖銀行から、又農業資金として、年賦貸付になつて出て行く。それを直接借りるのは自作農か囚のやうなものだ。囚が時々H町へ行くのは何んのためだか、知つてゐるか。あれは銀行から、年一割位で金を借りて、それを今度は困つてゐる小作に、月三分か四分で貸してやるためなのだ。——だから囚は他人の金を右から左へ持つて行つただけで、三分にして年三割六分、全く無償で二割六分、（二割六分！）も儲けてゐるのだ。——その金が、先にS村から小作料として取り上げた金であつてみれば、同じ小作は同じ金で、二回も搾り上げられてゐることになる。

岸野はその外に拓殖銀行から株の配當金を受取る。その金が矢張り、何處からでもない、農村から搔き集めて來た金でないか。三重！　又、その金の一部は（例へば、俺達工場に投資されて、俺達をし

こたまコキ使つて、それをS村にウンと高く賣りつけたとしたら、其處で又同じことが起る。これで一體、同じ小作人は何重に搾り上げられることになるのだ。――彼奴等の仕事はみんなからいふやうに關聯があるのだ。

それに、このウマイ事を何時迄もウマク出來るやうに、岸野は商業會議所議員になつたり、市會議員になつたりする。イザとなれば警察とも道廳とも、すつかりウマク行く。その職責を持つてゐれば、又それを使つて、逆に、自分の仕事に都合のいゝ事が出來る。

假りにS村がどうも思はしくなくなつた、とする。さうすれば、岸野は自分の黨派の議員をケシ立てて、S村に鐵道をひかせる。停車場をつける。さうすれば、附近の地價が上る。宅地にしてしまへば、收入では大したちがひだ。――まづ、こんな工合だ。

「百姓はまだ〳〵色々からいふ事が分つてゐない。

まだ〳〵分らないだらう。然しな、健ちや、どんなに難かしくても、長くかゝつても、俺達が一番先に立つて、やつて行かなければ、誰もやつて行くものはないのだ。――阿部さんからの話だと、村にも旭川の農民組合から人が來て、會をやつてるさうだ。健ちやも出るやうにして、お互に呼びあつてしてゐたら、どんなによいかと思ふ。

キヌは村へ歸るやうなことを云つてゐた。よく分らないが、歸らなければならなくなるだらう、と云つてゐた。――よく話をきいてみれば、あれだつて可哀想なものだ。あれが惡いばかりでない。百姓の生活だよ。これから村がダン〳〵底へ落ちこんで行くと、キヌのやうな女は、殖えらさる一方だ。

健ちやのことはよく聞きたがるが、節のこともあるらしいので、知らせてゐない。

「小樽」と「S村」――上ッ面から見ただけでも、前に云つたことがハッキリ分る。――製鑵工場、拓殖ビルディング、一流銀行、××工場、運河、倉庫、公園、大邸宅、自動車、汽船、高架棧橋…それ等が、まるで大きな渦卷のやうに凄じく入れ亂れ、喚いてゐる。その雜沓する街を歩いてゐると、世界の何處に、あの泥だらけの、腰のゆがんだ百姓といふものがゐるか、と思はせられる。草、山、稻、川、肥料、――これだけが農村だ！――だが、小樽の人は本當の百姓を眼の前で見たことが、一度だつて無いかも知れない。

又書く。

たゞ俺達は何時迄も「百姓」「百姓」ッて誤魔化されてゐないことだ。――これだけが大切なことだ。みんなに、よろしく。

こんな意味のことが書かれてゐた。――健は飯を食ひながら、丁寧にそれをもう一度讀み直した。それから、それを持つて阿部のところへ出掛けて行つた。

八

「百姓嫌になつた」

雨が二週間以上も續いた。

初め硝子の管のやうに太い雨が降つた。雷が時々裂けるやうな音を立てた。――何時も薄暗い家の隅までが、雨明りで明るく見えた。

それが上らず、そのまゝ長雨になつてしまつた。皆が當てにしてゐた雲の切れ目も無くなつて、飽き〳〵する程同じ調子で、三日も四日も續いた。五日目になると、小作はあわて出した。居ても立つても居られない。どこの家でも百姓が軒下に立つて、グジョ〳〵に腐りかけて、水浸りになつてゐる外を見てゐた。

「何んて百姓つて可哀想なもんだべな。」

佐々爺は東京新聞にも讀み飽きてしまつた。若いものの邪魔になりながら、ゴロ〳〵してゐた。――「可哀想に、手も出ない。――はがゆくつて、はがゆくつて！」

稻が實を結びかけてゐた大切な時を、雨は二十日間降つてしまつた。所々ポツン〳〵と散らばつてゐる小作の家は、置き捨てにされた塵芥箱のやうに意氣地なく――氣拔けしてしまつた。

一回仕入れた原料が出來上る迄に一年かゝる。――七之助はそれに驚いた。然し、それどころか！　その一年目にやうやく出來上るものさへ、からではないか。――これぢや、あのめまぐるしい都會の色々な産業や工業から時代おくれになつて、農村が首をしめられ、落ち込んで行くのは分りきつたことだ。

「百姓嫌になつた。」――健は集つてきた友達に云つた。

仕方がなくなると、紙に線をひいて、皆で軍人將棊をやつた。――母親は、風呂敷のやうに皺ッぽい、たるんだ乳房を赤子の口にふくませながら、小さい切窓から雨の外を、うつろに見てゐた。こめかみを抑へて、「あーあ、雨の音ば聞いてれば頭痛くなる。」

「S村の小作が、身欠鰊みたいに、ズラリ並んで首でもつる時來るべ。んだら見物だ。」

然し誰も笑へもしない。

五、六人で傘をさして、近所の田を見るに出た。誰かがついでに「蛇吉」に寄つてみようと云つた。何かと話して置けば、工合がいゝことがあるかも知れない。――ワザ〳〵なら、誰がこつたら管理人のどこさ來るツて、皆さう思つてゐる。

吉本は坐つたまゝ障子をあけて、黄色ツぽくムクンだ大きな顏を出した。小作達だと分ると、瞬間イヤな顏をした。

「何んだな。」

（猫撫聲だぞ！）

「ハ、別に……」

お客がゐた。――H町の警察署長だつた。健達はそれと分ると、理由なく尻ごみを感じた。

然し吉本の方が何か周章てたやうに、

「用事か？　今こつち、一寸……。後で駄目かな。」

「イヤ、その、この雨だもんで、ハ、そのオ、田ば見てきました……」

「ん――、今度のでは考へてる。――後にしてけれ。」

「あまり作がヒドイので、豫め岸野さんの方へ、一つ……」

健が云ひかけたのを、ウルサさうに、

「ん、ん、ん！」と抑へてしまつた。「お前等の指圖でやるんでないんだ。分つてる。」

警察署長と管理人！――何かあるな、健は歸りながら氣になつた。――S村では、まだ時々駐在所の巡査や校長へ、芋や大根や鷄を「初物」だと云ふので、持つてゆく。所が、その偉い旦那さん達が、裏では村の金持や有力者と、ちアんと結びついてゐる。そんな事を、然し健がどんなに小作に話してやつても、分りッこがなかつた。

夜になると、近しくしてゐる小作が、よく二三人づつ落ち合つた。――「一人で家にゐたら、氣が馬鹿になる。」

「どうしたら、えゝべな。」
「岸野さんどう出るかな……。」
不貞腐れて、時々酒に醉つ拂つてくる小作も出來た。——辻褄の合はないことを、一人で恐ろしく雄辯にしやべつた。

「あゝいふのば犬ツて云ふんだ」

三井の砂川炭山へ、馬を持つてトロ引きに出てゐたもの、Ｈ町の道路普請に行つてゐたもの、灌漑溝の土方へ日雇に行つてゐたもの、山林の夏出しに馬をやはり持つて行つてゐたもの……それ等が九月中旬過ぎると、みんな歸つてきた。
實が黑く腐つてゐても、穫入れて「米」にしなければならない。それから一ケ月位の間、小作は朝三時頃から夜の七時、八時頃迄働き通した。——收穫は「五割」減つてゐた。
五割！　では　小作は一體何のために働いたんだ。
健は稻のいがらツぽい埃で、身體をだるまにしながら、
「やめた、やめた！」カッとして、そのまゝ仕事を放り出して、上り端に腰を下してしまつた。
「惠、少し踏め！」
お惠は兄の劍幕を見ると、イヤ〳〵立ち上つた。——臺所にゐた母親は默つてゐた。
「半分だ。——えゝもんだな。一年働いて半分しか穫れなかつたら、丁度小作料だべ。岸野さそのまゝそつくりやつても足りねえ位だ。——百姓がよ一年働いたら、一升位な、たツた一升位氣まゝに自分の口さ入れだつて、罰も當るめえ……」
「昨年もあゝだし、岸野さんも何に云ひ出すか分らねえべ。」
母親は鼻をぐぢらせた。——「お前どころでねえ、五十何年もよくやつてきたもんだで、百姓ば！」
「何時かえゝぐなるべ、今度こそえゝぐなるべツてな。——んで、最後に、お氣の毒樣でしたか、えゝもんだ！」
母親は默つて、鼻をぐぢらせた。
田から上つた稻を一粒々々の米にする。ところが、その米が殘らずそのまゝ岸野に持つて行かれてしまふ。——それがハッキリ分つてゐる。分つてゐて、その米を一生懸命籾にして、穀をとり、搗いて白米にしてゐる。何んて百姓はお人好しの馬鹿者だ！
武田がひよつこり顏を出した。
「精出るなア。」
「何によ。——見れ、この籾。」——母親は寧ろ掌の上にたまつた籾を掌でザラ〳〵やつて見せた。——「今、謀叛でも起したくなつたツて話してたとこだ。」
武田はとつてつけたやうに、大きな聲で笑つた。
「な、健ちや、少し相談したいことあるんだが、仕事終つてからでも、俺の家さ寄つてけねえかな。」
健はだまつてゐた。
「今度の不作で、なんだか騷ぎでも起りさうでよ。村の不名譽でもあるし、相互扶助會としても工合が惡いし……」
「君のとこ幾ぼとれた。」——健は冷たく、別なことを云つた。
「やうやく半作よ。」
「小作料納めたら、どうなる？」
「ん——。食ふもの無くなるよ。んでも、そこばさ、何んかウマクやつて行くことば考へたらツて思ふんだ。」
吉本にでも賴まれて來たな、と健は思つた。
健は皮肉に云つた。——「伴さんがこんな事云つてたが、本當かな、來年の春、Ｈ町の議員

選擧で岸野さんが出るから、地盤ば荒されないやうに、今年だけは小作人ば誤魔化した方がええッて蛇吉が云つてるッて。えゝ？　俺達食ふか、食へないことば、そんなことでどうにも都合するんだナ！」

「…………」武田はだまつた。「まさか。」

武田は話を別な方にそらして、歸つて行つた。撥の惡さをかくすやうに、暗い表で、

「明日も天氣だ。」

と云ふのが聞えた。

「あゝいふのば、犬ッて云ふんだ。」――畜生犬！

――他の農場で小作料を下げたとか、下げるとか、そんな噂がすぐ岸野農場にも入つてきて、その度に皆をアヤフヤに動かした。

常任の交渉委員、伴、佐々爺、武田が吉本管理人のところへ何度も足を使つた。

「蛇吉の野郎、こんなに事情が分つてて、それで一から十、岸野の肩ば持ちやがるんだ。――今中さはさまつて、野郎デタバタしてる！」

歸りに健のところへ寄ると　佐々爺、武田の前で、伴がズバ〳〵云つた。

もう岸野の返事だけだつた。それだけで決まる。――それを待てばよかつた。

さうだ、十年も經つてゐる

夜が長くなつた。

土間の臺所で、手しやくで飲む水が歯にしみた。長い間の無理な仕事で、小作の板のやうになつた腰が、今度はズキ〳〵と痛んだ。母親は由三に錢をくれると云つては、嫌がる由三をだまして腰をもませた。――夜は靜かだつた。馬鈴薯を爐の灰の中に埋めたり、鹽煮にしたりして、それを食ひながら、腹這ひになつて色々な話をした。由三も皆の中に入つて、眼だけをパッチリ見張りながら、頬杖をして話を聞いた。好きだつた。――母親は昔のことをよく覺えてゐた。

床に入つても、身體が痛んで寢つけなかつた。曉方まで何度も寢がへりを打つた。――過ぎ去つてしまつた生涯が思ひかへされる。――こんな「北海道」に住むとは思はなかつた。一働きをして、金を拵へたら、内地へもどつて、安樂に暮さう、まア、二三年もゐて――皆さう思つて、津輕海峽を渡つてきた。だが、もう十年も經つてゐる。今更のやうに自分の身のまはりを見廻す。さうだ、十年も經つてしまつてゐる。――さうか。そんなら、死ぬだけは内地の村で死にたい。

誰か、内地の村に行つてくるといふものがあると、同じ「國來」のものが集つてきた。村に殘つてゐる自分の本家や別家の人達に、事づけを頼んだり、何かを屆けてもらつたり、村の樣子をきいてきて貰つたりした。

誰も何時かキット内地に歸る、そのことばかり考へてゐる。――追はれるやうにして出て來た村を、今では不思議な魅力をもつて思ひかへした。

夜が長くなると、夜中に何度も小便に起きた。半分寢言を云ひながら、戸をあけると、身體がブルン〳〵ッとすくむ。――秋の、深く冴えきつた外はひつそりとして、月が蒼々と澄んでゐる大空に、高く氷のやうにかゝつてゐた。――若い女でも、出口にそのまゝ蹲んで、バヂャバヂャと用を達した。

「もツきり」

收穫が終ると、百姓の金を當てにして、天氣さへ良ければ、毎日のやうに色々な商人が廻つてくる。寫眞を澤山さげた佛壇を背負つて、老人が鐘をならしながら表へ立つた。太物をもつた行商もきた。越中富山の藥屋が小さ

い引出しの澤山ついた桐の箱をひろげて、ペラペラ饒舌りながら、何時迄たつても動かなかつた。馬の繪をかいた藥臭いちらしを子供達にくれて、無理矢理に要らない藥袋を置いて行つた。――然し「長い」北海道の冬が待つてゐることを考へれば、襦袢の切れもうつかり買へないのだ。

正月を少しでも矢張り正月らしく送りたいために、小作人のうち又働きに出るものは出た。――娘達は、大根や馬鈴薯や唐黍などを荷車につけて、H町へ、朝暗いうちに、表をゴトゴトいはせて出掛けて行つた。自分達は荷馬車の上に乘つた。提灯を車の側にさした。聲のいゝ女は流行歌をうたつた。H町へつくと丁度夜が明けかける。

朝市に出るものは出、一軒々々裏口から「おかみさん」と云つて廻つて歩くものは歩く。そして晝頃、空になつた荷車にのつて、今度はキャツ〳〵とお互にふざけながら歸つてきた。――賣つただけの金で襦袢や腰卷の切れを買つたり、餅屋に寄つて「あんころ」などの買ひ喰ひをした。

「のべ源」はH町で青物を賣つて、少しでも金をつかむと、電信柱に馬をつないで、停車場前の荒物屋に入つて、干魚を裂きながら、コップの「もッきり」を飲んだ。

大概の百姓は歸りに寄つて、「もツきり」をひつかける。――店先には百姓の馬車が何臺もつながれてゐた。牝馬が多い。たまに牡馬が通ると、いなゝきながら前立ちになり、暴れた。荒物屋の中から、顏を赤くした百姓が飛び出して來て、牝馬を側の方へ引張つて行つた。

「のべ源」はこゝで醉ひつぶれると、そのまゝ白首のゐる「そば屋」へ行つた。――女達は「のべ源」を知つてゐた。――そして、イヤがつた。醉ふと、丸太のやうな腕で女をなぐりつけた。女が襖の足を拂ひ、チャブ臺をひつくりかへし、障子を倒して階段を芋俵のやうに轉げ落ちたことがあつた。

「のべ源」の馬はひつそりとした通りに、次の朝までつながれッ放しになつてゐた。

「來　世」

毎年の例で、小樽から「偉い坊さん」を呼んで、S村龍德寺で、四五日間說教が開かれた。――龍德寺の前には、岸野や吉岡などの大地主や、㈣、吉本などの寄附金の「芳名錄」の札がズラリと立つてゐる。岸野は「金壹千圓也」出してゐた。――小樽から坊さんを呼ぶのも、重に岸野のつてだつた。

年寄りはその日を、子供がお祭を待つより待つてゐた。

その日、年寄はしまつて置いたゴハ〳〵な手織の着物をきて、孫娘に手をひかせて出掛けた。――畦道を、曲つた錆釘のやうに歩いて行つた。健の母親も決して缺かしたことがなかつた。

「……現世は苦しい――嫌なこと、悲しいこと、涙のにじむやうなこと、淋しいことで滿ち〳〵てゐる。だが、これも前世イからの約束事、何事も因果の致すところぢや、さう思ウ――て、しのばにやならない。――お釋迦樣はさうおつしやツてゐなさる。」

坊さんはさう云ふ。年寄達は一句切れ、一句切れ每に、「南無阿彌陀佛」を繰りかへした。

「……その代り、あみだ樣のお側にお出でになつたとき、初めて極樂往生を遂げることが出來る。あーあ、お前も人間界にゐたときは苦しんだ。然し何事も佛樣の道を守つて、一口も不平を云ふことなく、よくこらへて來た、もう大丈夫ぢや、さ、手を合せて、かういふ風に合せて、たつた一言、ナムアムダブツ、さう稱へさ

へすれば大安心を得ることが出來るのぢや。蓮華の花の上に坐ることが出來るやうになるのぢや……」
「有難いお言葉ぢや。」
「あーあ、有難や、有難や。」
「ナムアムダブツ。」
「ナンマンダブ、ナンマンダブ……」
――百姓は心の何處かで、自分でも分らずに「來世」のことを考へてゐる。――長い間の生活があんまり「苦し」過ぎてゐた、それがそして何時になつたつて、どうにもなるものぢやなかつた。――あの世に行きさへすれば、年を取つてくれば、もうそれしか考へられない。
「何事も、何事もヂッと、ヂーイと堪へることぢや！」
坊さんはそれを繰りかへした。

キヌ

健はキヌが歸つてきたことを知らされた。
「やッぱし小樽だ、あの恰好な！　大家の御令孃さ。田舍の犬ば、見なれないんで、吠えるべ。――村の青年團もこれア一もめもめるべよ。」
健は笑ひもしなかつた。
キヌのことは別に頭になかつた。――戻つてきたから、どうなる、どうする、今更そんなことでもなかつた。
「キヌちや戻つてきたワ……？」
節がそれだけを健に云ふのに、吃つた。――眼が健の顏色を讀んでゐる。
「馬鹿！」
健は節の脣を指ではじいてやつた。
節は一寸だまつて、――と、
「さう？――まア、嬉しい！」
急に繩飛びでもするやうに跳ねて、かけ出して行つた。――後も見ずに。
健は二三日してから、嫌な噂をきいた。――キヌが姙娠してゐる、相手は大學生だとか云つてゐた。それでホテルにも居たゝまらず、「こつそり」歸つてきたのだつた。
父はキヌを家に入れない、と怒つた。――キヌは土間に蹴落された。ベト〳〵する土間に、それでも手をついて、「物置きの隅ッこでもいゝから。」と泣いて賴んだ。
まだ色々なことが耳に入つてきた。
――キヌはそんな身體で、無理をして働いた。手が白く、小さくなつたものは、百姓家には邪魔ものでしかなかつた。――自分で飯の支度をして、それを並べてしまふと、隅の方に坐つて、ヂッとしてゐる。皆がたべてしまつて餘りがあれば、今度はそれを自分でコソ〳〵たべる。――健は矢張り聞いてゐるのがつらかつた。
遲くなつて、健が伴のところから歸つてくると、母親が顏色をかへてゐた。
「キヌちや首ばつツたとよ！――來てけれツて。」
健はものも云はずに外へ出た。
外へ出ると、「やつたな！」と思つた。――月の夜だつた。キヌとの色々なことが、チラッと頭をかすめて行つた。
キヌは納屋で首を縊つてゐた。健が行くと、提灯をつけたものが七、八人ゐた。――父親が探した時、知らずに打ち當つたと云ふので、下つてゐるキヌの身體が眼につかない程ゆるく搖れてゐた。提灯の火だけでそれを見てゐると、寒氣がザアーッと身體を走つた。
「ハ、やうやく村の恥さらしものに片がつきました……」
父親が血の氣のない顏で云つて歩いてゐた。
健には、キヌの死んだ事が何故か、キヌといふ一人の人間たけのこと、それだけのことでなく思はれた。――もツと別なことが、色々その中にある氣がした。

S村と小樽、これをキヌが考へさせる！

九

「なア、お内儀さん達よ——」

岸野から返事が來た。

伴のところへ、吉本から人が呼びに來た。——それと、健がキヌの葬式に出掛けて行く途中會つた。

「聞かなくても分つてるんだ。」と伴が云つた。

「岸野のこッた。——歸りに寄る。」

膝の家の前で、父の一人々々ちがつた兄妹が田の引水をせきとめて、鮒をすくつてゐた。身體をすつかり泥水に濡らして、臍のあたりについてゐる泥が白く乾いてゐた。

「愛子オ。」——男の子が呼んだ。

「何アに。」

「愛子あーとて、あれきあんだれき、ありやのあり糞！」

女の子は負けてゐない。「源一げんとて、げりきんだれき、げりやのげり糞！　やあ、げり糞、いゝ糞！」

愈だ！　健は恐ろしいやうな、心臓のあたりをくすぐられるやうな氣持になつてゐた。

——吉本管理人は伴の顔をみると、「見ろ！」と云つて、眼の前に手紙を投げて寄こした。「あんなことを云つてやつたから、見れ、かへつて片意地にさせてしまつた。——んだから、馬鹿だつて云ふんだ。」

狸奴！　俺達の云つた通りのことを、貴様が正直に書いてやつたと誰が思つてる！　手前が自分の立場が可愛くて、小作人が飛んでもないことやらかしてるツて、有る事、無い事、譃八百並べてやつたんでないか。順序が順序だから手前のやうな奴を中にはさんだんだ！——

伴は手紙を懐に入れると、吉本に挨拶もしないで外へ出た。

「騒いだりしたら損だど。——分つてるべ、ん？」

出がけに吉本が云つた。——返事もしない。からなれア立場としては吉本は、可哀想なほどオロ〱だ。様ア見ろッ！

伴の家には五、六人集つてゐた。——健も居た。健は伴に會つてから、葬式どころでないと思つて、顔だけ出すと、直ぐこつちへ廻つてきた。——自分も變つたな、と思つた。キヌだつて分つてくれるさ、と思つた。

そこへ伴が歸つてきた。皆伴を見た。

瞬間、鋭い緊張がグイと皆を抑へた。

「ウハヽヽヽ。」

戸口に立つたまゝ、何んの前觸れもなく、伴は大聲で笑つた。そして懐から手紙を出すと、「こゝまでお出で」をするやうに振つてみせた。

「駄目ッ！」ぶッつり切つた。

皆はつられたやうに、「駄目か！」「やッぱり！」「んか。」「駄目か！」口々に云つた。——肩から力がガックリ抜けた。

「で、こんなものモウどうでもいゝこつた。——第二だ。」

伴は皆の眞中に大きく胡坐をかいた。

阿部は眼鏡を出してきて、ゆつくり手紙を讀んだ。

「第二だ、これは俺達のうちから代表を選んで、岸野に直き〱會つて、詳しい話をするために小樽へ出掛けることだ。——喧嘩はまだ早い。後で大丈夫だ。」

「したども、伴さん一番先きに喧嘩してえんだな。」——年輩の小作がひやかした。

兩手で頭を大げさに抑へて、伴がウハヽヽハヽと笑つた。

「さうした方順序だし、えゝ。」

「えゝべ。」

「んでも、伴さんみたいに喧嘩早い人は代表には駄目だネ。」

「これでも駈引になれば、駈引はうまいんだよ。」――伴がてれた。

何故そんな無駄な廻り道が必要なんだ。健は自分だけではさう思つた――分り切つたことでないか。

「喧嘩ツてなれば、矢張り乗るか、そるかだ。――やれることだけは、やつて置かねば駄目だ。」――阿部までさう云つた。

心配してゐた女房達が、懐へ子供を抱き込んで乳をふくませたり、背中にくゝりつけたまま、お互があゝだ、かうだ、と話しながら、二三人づつ、二三人づつ集つてきた。――子供が喚いて、背中で母親の尻を蹴る。――入口がやかましくなつた。

かう集つてみると、小作の女達は「汚」かつた。畑から抜いてきた牛蒡のやうに、黒くて、土臭かつた。――然し、そのどの顏もたつた一つのこと、「食へるか」「食へないか」で、引きつツてゐた。

「な、御内儀さん達よ。」伴が一言づつ顎をしやくりしやくり、何時ものを云ふときの癖で、眼をつぶつて――「聞いて貰はう。――この一年の間、寝る目も寝ず働いて、そのお蔭で、有難いお蔭で、今食ふや食はずになり、――どうか生かしてだけは置いてくれッて頼んだ事だ。それをどうだ！　この手紙を見てくれ。――馬鹿野郎だとか、氣狂ひだとか、監獄へブチ込んでやるぞ、とか――な、地主と小作は親と子だつて云ふ。眞赤な嘘だ。眞赤な嘘でないか。これで親も子もあるもんか。」

「まア。」

「まア、まア！」

女達はそれだけしか云へない。

子供が急に大きな聲を張りあげて泣き出した。いきなり平手で馬鈴薯のやうな子供の頭をパシッ〳〵毆つた。「默ッてれ、この餓鬼！」――母親がムキになつて怒つてゐる。

佐々爺と武田が「返事」のことで、ひよツこり顏を出した。佐々爺は東京新聞を振り上げながら、

「どうしたんだ？　どうしたんだ？　えゝ？　どうした？」

と、カス〳〵な聲を絞り上げた。

「俺の命でもとる氣か？」

交渉委員が小樽へ出發してから三日經つて、ハガキが來た。阿部だつた。

――誠意をもつて會つてはくれない。朝七時に、門から玄關まで山があつたり、池があつたりする立派な邸宅を訪ねると、三十分も待たしてから、「店」へ行つたと云ふ。その店までは歩いて行つて四五十分もかゝる。そこで又二十分も待たして置いてから、ヌケ〳〵と、工場の方です、と云ふ。教へられた道を迷つて、曲りくねつて、行き過ぎたりして、あげくの果てに工場が見付かる。見付かつたつて、何處からどう入つて行つて、どう云へば會へるか分らない。何人にも何人にも頼んで、その度に百姓は冷汗を流す。そして云ふことは同じ。ホテルに行つてる！　ホテルへ行けば商業會議所。泣きたかつた。――晩の十一時過ぎにやうやく家で會つてくれた。音もしない自動車に乗つて、醉つて歸つてきた。

「俺の命でもとる氣か、一日中尾行をつけて！」と、最初から怒鳴りつけられた。

佐々爺は、カラ駄目だ。――旦那様の云ふことは御尤で、へえ、どん百姓ッて

ものは我儘で、無理ばかり云つて、とか、まるでワケが分らない。

「小樽でグヅ〳〵してると、警察へ突き出すぞ！」終ひにさう云つた。

次の日はそれでも三時間程會つた。

「こんな事はお前等ばかりでなくて、お前等の後をつツついてゐる不穩分子がゐるから、きいてやるワケには行かない。」

不穩分子といふのは「農民組合」のことださうだ。

とう〳〵駄目だ。話にならない。駄目と分つたら、直ぐ歸る。

健は初めて伴から賴まれて、小作人の家全部を廻つて歩いた。――今度のことはモウ成行きがきまつてゐる。さうなつたら一人でもハグれないやうにするためだつた。――一廻り、廻つて來ると、健は他愛なくなる程疲勞した。

「ん、ん、ん！」

ときいてくれる隣りでは、何しに來やがつた、といふ顏をした。

「困るには困るども、穩當で無えべもしな。――後がオッかなくてよ。」

そんなことも云ふ。

「岸野さんだら、一度ウンとやつて置く必要あるんしな。」

そして何處でも、「へえ、健ちやが、健ちやがこんな事するやうになつたのか？」と、不思議がられた。

その度に健は耳まで赤くして、ドギマギした。

然し、たつたそれだけの事をしただけで、健は何か大きな自信と云つていゝものをつかんだやうに思はれた。

「納屋にあるのか？」

健が裏で、晩に食ふ唐黍をとつてゐた時だつた。

「健ッ！　健ッ!!」――母親の叫び聲が家の中でした。

その聲にたゞ事でない鋭さを感じて、健はグイと襟首をつかまれたと思つた。

家の中にかけ込んだ。かけ込んで――見た。

吉本管理人！　劍！　巡査だ！　役場の人！　鞄！　一瞬々々のひらめきのやうに、いきなり健の眼をくらました。

「氣の毒だが、小樽からの命令で、小作米を押へるから。」

吉本は戸口に立つたきりの健に、憎いほど落着いた低い聲で、ゆつくり云つた。

――健はだまつて裏へまはつた。皆はゾロゾロついてきた。母親はオロ〳〵して、吉本や特に親しかつた巡査の後から同じことを何度も云つた。

「お母さん、どうも仕方がないんだ。」

巡査はうるささうに云つた。

十

「小作調停裁判」

又順序をふんだ！

かうなると、健がジリ〳〵した。――「小作調停裁判」を申請するといふのだ。

「分りきつた無駄足を何故使ふんだ。」健はハッキリさう思つた。――何んと云つたつて、阿部も伴もやつぱり年寄だ、とさへ思つた。

然し、たゞ、今迄とはちがつて、兎に角「表へ出る。」――所謂社會的な地位のある人は、案外表へ出ることを嫌ふ。そこを衝いてみる必要がある――阿部も伴もその事を考へてゐた。

差押へを受けてから、小作人もちがつてきた。「モウ親も子もあるもんか。」――一番おと

なしい小作さへ口に出して云つた。
——小作は毎日々々の飯米にさへ困つた。納屋には米俵がつまさつてゐる。何十俵も積まさつてゐる。何十俵といふ米俵が積まさつてゐて、そして飯が食へなかつた。
「少しでも手をつけると罪人だぞ。」
巡査が時々廻つてきた。まるで岸野から言傳つて來たやうだつた。——小作人は「罪人」と云はれると、背中がゾッとした。
H町からの歸り、母親と由三が薄暗くなつたのを幸ひに、所々の他人の畑から芋や唐黍を盗んできた。——前掛けの端を離すと、芋、唐黍、大根が一度に板の間にゴトン〳〵と落ちた。
「兄ちやさも、惠にも云ふんでねえど！」
家のなかに上ると、母親はさすがにグッたりした。——とう〳〵泥棒をしてしまつた、と思つた。
「……んでも泥棒させるのは、岸野さんだ。……え〻ワ、え〻ワ！——何アに……」
横坐りになると、そのま〻何時迄もボンヤリした。
「母、俺ら學校の歸り何時でも取つてくるが？——由何んぼでも、見付からないやうに盗れるワ。」
「馬鹿！」——母親はいきなり叱りつけた。
食へなくなつた小作達は、默つてゐても、伴のところへ代る〴〵集つてきた。小作調停のことは、それで思つたより早く纏まつた。
武田と佐々爺は「何んとか外にないか。」「何んとかなア……」と云つてゐた。
伴外一名が代表になつて村長へ「口頭」で、小作調停裁判を申請した。村長は「遲滯なく」そのことを旭川地方裁判所へ提出した。それが「受理」されると同時に、小作米の差押へが解除された。——小作人はどうかした拍子に「かなしばり」がとけた時のやうな身輕さを感じた。——
「やれ、やれ。」
小作米は直ぐH町の「農業倉庫」に預け入りして、「倉荷證券」にした。それは何時でも現金にすることが出來るやうになつた。

「小作官」

道廳から「小作官」がやつてきた。黒の折鞄を抱へた左肩を少し上げて、それだけを振つて歩いた。伴の家に上ると、莫蓙敷のホコリとズボンの膝を氣にした。窮屈に坐つた。話をきゝながら、「朝日」を吸つた。——何本も何本も續けて吸ふ しばらくもしないうちに、白墨の杭のやうに、爐の灰の中に殻が突きさゝつた。
阿部が伴に代つて、初めから順序をつけて詳しく話した。
「ムー、それア、岸野さんにチイート無理なところがあるね。」
「何がチイートだい！」
歸つてから、伴が小作官の眞似をして、皆を笑はせた。——「あつたらヘナ〳〵に、百姓のこと何分るツて！」
調停委員には「實情に通じた」その土地の「名望家」が選ばれた。——相馬農場の老管理人、H町町長、S村の校長など。
判事が「調停主任」になつた。
「心細いな。小作人の本當の氣持が分つてゐてくれる人無えんだものよ……」
健が廻つて歩いてゐる小作の家でさう云ふと、
「んでも偉い立派な人達だもの——ためになるやうにやつてけるべ。」
健はがつかりした。
第一回の呼出狀が來た。
裁判所へ出ると云ふので、伴はさう度々着たことのない着物をきて出掛けた。
「何んも似合はねえな——どうだ、似合ふか？」

「熊が着物ば着たえんたとこだ。」
「熊？——可哀想に！　ハヽヽヽ。」
「さう云へば、百姓つて良え着物きたこと無えんだもの——似合ふワケ無えさ。」
出掛けに伴が云つた——
「これが駄目になつたら、最後だど！」

誰と誰が繋がつてゐるのか

恩を賣つた大畜生奴！　よくもこんな處さ持ち出して、赤恥かゝしやがつたな。勝手にしろ！——裁判所の眞ん中で、岸野がいきなり俺達を怒鳴りつけたんだ。

やつてみろ！　足腰たゝない位たゝきのめしてやるから！——これが、いくら地主であらうと、小作人に云ふ言葉か——俺はこの四十三の大人になつて、面と向つてこんな事を云はれたのは初めてだ。

三日のうち五度會つた、そして五度怒鳴り散らされた。——俺達は怒鳴られるために旭川まで出掛けて行つたんぢやない、調停して貰ふためにだ。

ところが、「調停委員」は一體どんなことをしたと思ふ。——まア、まア岸野さん！　それ位だ。こんなものが調停なら、誰にでも出來る。

後で、「農民組合」の辯護士が云つてゐた、「調停××」なんて名前はえゝが、こんなものは、これから益々起るおそれのある小作爭議をば體よく抑へて、大きくしないうちに揉み消しにして——結局地主ば安全にさせて置かうとするための××だ。ところが、一寸見がいゝために、何も知らない百姓はその人の好さから、あー有難いものが出來たと大喜びなんだ。そこが又×××してあるところだつて。

んだんだ。今度でそれがよッく分つた。——今年は全道みんな不作だ。何處でも小作爭議が起りさうだんだ。——それで何處かで、皮切りでもされゝば大變だ。んだから、外の地主も俺達のば何んとかして、うやむやにしてしまひたいので調停委員の後さこつそりついてゐるんだとよ。

小作官などは「この事件を無いことにしてくれゝば、岸野さんからお前等に慰勞金を出させてもいゝんだが、——社會のためにも、その方がいゝんだ」と云つたものだ。

聞いたか？——みんな××だ。

もう殘つたものは俺達ばかりよ。——かうなつたら、皆！　意氣地なく默つて首ば縊るか？　もう一日だつて食へねえんだからな。それに岸野は腕づくでも取つてみせるツてるんだ。——それとも死にたくなかつたら、最後までやるか？——もう、このどつちかに來てゐるんだ。どつちかだ。

んで、どつちだ！

——伴は自分でも泣いてゐた。

次に組合の荒川が「爭議團」を××して、即刻戰鬪の準備をしなければならないことを、皆に話した。「鐵は赤いうちに！」

寒い雨が降つてゐた。——もう冬が近い。そしてそれが知らない間に氷雨になつてゐた。さすがの（實際、さすがの、と健には思はれた）小作人もあり〳〵と興奮の色を顏に出してゐた。

「そんなことまでやるのか！　畜生奴！」

皆は雨の中を歸つて行つた。出口で傘をさすと、急に雨の音がやかましくなつた。どざだけをかぶつて、肩を濡らして行くものもゐた。雨に聲を取られないやうに、大きな聲でお互に話しながら歸つて行つた。

阿部、伴、健、荒川、その他小作人三人、組合員二人——これだけが、二日の間に三時間位しか寢むらずに、「岸野小作爭議團」結成のために馳けずり廻つた。ビラを書いたり、謄寫版の原紙を書いたり、刷つたりした。——健は初め

ての色々な經驗で興奮してゐた。
人數が纏まつて來た。——今迄健が捨石のやうに廻つて歩いてゐたのが、案外役に立つた。
佐々爺や武田は訪ねて行くと、譯の分らない議論を吹ツかけた。爭議團のものが分らないで、つまると、
「そんなんで地主さ楯つけるか？」
と、嘲笑つた。
武田が吉本管理人と相談し合つて、小作人の切り崩しをやつてゐる噂が入つてゐた。
荒川が鐵筆で頭をゴシ〳〵やりながら、
「かうなつたら佐々爺とか武田、それに『のべ源』あんなものに氣をつけなけア駄目だ。——何んしろ金でやつてくるんだからな。」
やもめの勝が、芋と唐黍を子供にも背負はせて、伴の家にやつてきた。
「——!?」
健はグイとこみ上つてきた氣持をどうすることも出來ない。
「なんぼなんでも、涙が出て、とても貰へないよ。」
阿部も「分る！　氣持だけで澤山だ！」と、何時もの阿部らしくもなく周章てたやうに押し戻した。

どんな事にでも直ぐ感激する伴は、何時迄も鼻をグズ〳〵させてゐた。
「な、どうだ、阿部君よ、勝たんばならないな！」
「驚いた！　こつちから持つて行つてやらなけアならない位の處から、持つてくるなんてなア！　矢張り、あゝなると本當のことが、默つてても分るんだな。」
健は身體に鳥膚が立つ程興奮を感じた。
伴の家では、伴のお内儀さんや阿部のお内儀さんも出て來て、てきぱきと家の中の細かい仕事を片付け、——暇々には、小作の家を廻つて歩いて「女は女同士」その方からも結束を固めてゐた。
死んだキヌの妹は自分から手傳ひに來てゐた。伴のおかみさんと氣心がよく合つて、氣持いゝ程仕事をしてくれた。ビラ書きを手傳つたりした。——顏はキヌとそのまゝ似てゐた。が何時でもツン〳〵してゐるので、何んだ此奴と思つて、健は嫌ひな女だつた——然し、こんな時に節が出てきてゐてくれたら、と思ふと、淋しかつた。が、あの可愛い節は、一日でも早く健が昔の健にかへつてくれるやうに、と祈つてゐるときかせられて、健はがつかりした。
小作爭議に入つてから、Ｓの旦那は爭議團に關係してゐる小作には絶對に「掛賣り」をしないと云つた。結局それは、小作には品物を絶對に賣つてくれない事と同じだつた。それに今迄の、何年もの間の「掛」をたつた今拂つてもらはう、と、おどかした。
「社會主義者どもの尻馬に乘つて、日本の尊い遺風にキズをつける大不忠者！」
店先きで怒鳴りつけられた。
「在鄕軍人の小作であつて、若し爭議に關係するものがあつたら、×××對して申譯がないと思へ！　軍人たるものの面汚しだ。」
同じことを「青年團」や「青年訓練所」のもの達にも云つて歩いた。
「んでもＳさん、食へないんだもの、どうも仕樣無えしな……。お前さん達なら、それでえゝかも知れねしどもな。」
小作もＳに云はれると、矢張りマゴ〳〵した。然しどうにも食へなかつたのだ。
健は然し、Ｓがそんな「偉い」ことを云つて歩いてゐながら、吉本管理人とちアんと結び合つてゐること——吉本と爭議のことで、Ｈ町の料理屋で會つたことを知つてゐた。
「恐ろしいもんだな。」
「恐ろしいもんだよ。——何處で、どう關係が

あるか、表ばかりの云ふことや、することを見てゐたんぢや分らないんだ。」

荒川が健から聞くとさう云つた。「絲を手繰ると、飛んでもな、意外な奴が、實は一緒になつてるもんだよ。」

學校では由三達が市街地の子供からいぢめられた。

あの「温厚な人格者」の校長が（健は殊にさう思つてゐたのだ！）時間がある毎に、小作爭議のことを「不祥事だ」「不祥事だ」と云つた。「若しお前達の親や兄弟で、あんな惡いことをするものがあつたら、やめさせるやうに一生懸命お願ひしなければならない。」

先生の云ふことなら、どんな事でもそのまゝ信じこむ由三は、家へ歸ると健に泣きついた。

——由三は學校へ行くと、いぢめられるので時々休んだ。そして健のところへ來た。手紙を屆けたり、ビラを配るのに手傳つた。——「××さ行ぐより、ウンとえゝわ。」

お惠は髪に油をテカ〳〵つけたしやれ男とブラ〳〵してゐた。

「兄ちやば皆偉いッて云つてるど。」

健が遲く歸つてくると、腹這ひになつて、講談本を讀みながら、見向きもしないで、ヘラ〳〵した調子で云つた。

「この恥ざらし！」

「んだから偉いんだとさ。」

健はだまつた。

彼は自分の妹や母親のことでは、どの位阿部や伜に肩が狹いかわからなかつた。

十一

「千回もやつてくれ」

第一回の「岸野小作爭議演説會」が町の活動小屋で開かれた。——各農場相手に生活をしてゐる町民や、他の農場の小作達も遠いところから提灯をつけてやつて來た。

「割れる程」入つた。

健は初めて「演壇」に上つた。壇へ上ると、クワッと興奮してしまつた。途中で何を云つたか分らなくなつてしまつた。分らなくなると、周章てるだけだつた。——時々、拍手と、「分つた分つた」「もうやめれ！」「その通り！」そんな野次の切れ端を覺えてゐるだけだつた。下りて裏へ行くと、キヌの妹が、

「上出來だよ、健ちや！」と云つた。

演説會は大きな反響を起した。——それから一週間もしないうちに、他の農場では爭議を起されないうちに、（申譯ばかりだつたが）小作料の輕減を行つた。

然し岸野からは、「お前等が假令千回演說會を開いても、蚤にさゝれたよりも、痛くも、かゆくもない。もつと元氣よく、もつと〳〵やつてくれ。」と云つてきた。

吉本はざま見ろ、といふ風に、それを持つてきた。

三度演說會を開いた。——然し「殘念ながら」何度開いても、それが具體的にどうなるわけでもなかつた。どうにかしなければならない。事實荒川や阿部達も行き詰りを感じてきてゐた。

——あせり出した。

方向轉換

筆不精なばかりでなしに、手紙などといふものを書いたことのない健が、思ひ出して、フト七之助に手紙を書いた。そして今度の爭議のことを知らせてやつた。

すぐ七之助から返事が來た。

——小樽の勞働組合のものに、そのことを話した。そしたら小樽へ出て來い、と

云ふのだ。いゝかいゝ、地主は小樽に居る。そんな處でいくら騒いだつて、岸野には百里も離れた向う岸の火事よりも恐ろしくない。都會の勞働組合が應援して、××にやらなければ、その爭議は決して×つことは出來ないだらう、と云つてゐる。一刻も早く爭議團が出て來るやうに、話すことだ云々――

このたつた一枚の葉書が、思ひがけなく、行き詰つてゐた方向に大きなキッカケを與へた。

さうだ、それだ！――氣付かなかつた。

爭議團は活氣づいた。――新しい編成が行はれた。

「爭議團小樽出張委員」、農場に殘る「連絡委員」の決定、――この爭議を岸野農場だけのものにせず、他農場も一齊に×つやうに、たゆまず××、××すること、――小樽に於ける情勢の刻々の變化に應じて、報告、示威、糺彈を兼ねた演説會を開くこと、これには農民組合S村支部が主に當ること――等が定められた。

健は小樽へ出て行きたかつた。然し連絡委員として殘らなければならなかつた。――仕事が急に忙がしくなつた。

「農業倉庫」に入れてある米を、倉荷證券で賣り拂つて、爭議資金に充てることにした。

爭議團小樽出張委員伴、阿部外十三名は、組合旗、流し旗をたてて小作人に送られた。小樽に出るといふことが分ると、吉本や武田は周章てて、遠まはしに調停めいたことを云つてきた。

雪は四、五日前から降つてゐた。滿目たゞ荒涼とした石狩平野には、硝子クヅのやうに鋭い空ッ風が乾いた上つ皮の雪を吹きまくつてゐた。

十二

手を握り合つて！

情報、一

吸血鬼、地主岸野と戰はんとして、S村岸野農場小作人代表十五名が、はる〴〵小樽へ出陣してきた。

直ちに、「農民組合聯合會」「爭議團」「小樽合同勞働組合」とで、

「勞農爭議共同委員會」

を組織し、茲に勞働者と農民の固き握手のもとに、此の爭議に當ることになつた。

農民を過去の封建的農奴的生活より、光ある社會へ解放し得るものは、都市勞働階級の力だ。

農民が都市に出陣してきて、「勞農爭議共同委員會」を鞏固に組織し、かゝる形態で地主と抗爭する小作爭議は、日本全國に於て、この岸野小作爭議をもつて最初とする。――農民運動の方向轉換期にあるとき、且つ又急速なる資本主義の發展に伴ふ地主のブルジョア化、從つて都市居住地主――不在地主が、その典型たらんとしつゝあるとき、この爭議こそ重大な意義をもつものと云はなければならない。

情報、二

三日夜六時、小作人十五名出樽。小樽合同勞働の約二百名の組合員の出迎へをうけ、直ちに岸野の店舖、工場、ホテル、商業會議所に押しかけ示威運動をする。元氣。

（七之助の手紙。）――停車場へ二百人近くも押しかけた。阿部さんも伴さんも驚いたらしい。眼に涙をためてゐた。面白いのは矢張り百姓だ。勞働組合の人も云つてゐたが、こつちが感極まつて、ワアッと云つても小作人達は

だまつてゐる。嬉しくないのかと思ふと、さうでもないらしい。こつちで十しやべると、それもモドカシクなる程ゆつくり三つ位しやべる。
――さすがに、伴さんのあのガラ／＼聲も、ウハ、、、も出ないで、組合の二階の隅の方にキチンと膝を折つて坐つてゐる。――組合員の一人が、農民とは如何なるものか、ときかれたら、組合の二階の板の間の、それもなるべく隅の方にキチンと膝を折つて坐るものであります、と答へればいゝと皆を笑はせた。）

情報、三

毎日、赤襷をかけて、岸野の店先きに出掛けるばかりでも、小樽の市民に「岸野の小作人」の顏を知らぬもの無きに到つた。

六日、「市民に訴ふ」といふ今迄の詳しいイキサツを書いたビラ一萬枚を撒布する。

農民は「働くと」年何百圓も借金をして行つた。――その詳しい「ちらし」が、市民の間に大きな反響を呼んでひろまつて行つた。

七日、「第一回眞相發表演說會」を開く。出演辯士相次いで「中止」、直ちに「檢束」を喰ひ、警察送り五名に達した。――だが、聽衆は場外にあふれて、所々に亂鬪騷ぎを起した。――市民の同情動く。

（七之助。――伴さんは「中止」とか「注意」に慣れてゐないので、「中止！」と云はれてから知らずに二三言しやべつてしまつた。それでいきなり壇から引きずり落されてしまつた。

組合の竹畑が檢束になつた。それに對して書記長の太田が抗議をしかけたら、「生意氣な、この野郎！」とばかりに、その場で滅茶苦茶になぐられた。――組合に歸つてから、伴さんや阿部さんは何處かしよげこんでしまつた。無理もないかも知れない。

「な、七ちやん、こんな工合で一體どうなるんだべ！」

――伴さんが云ふのだ。

初めての「凄さ」で、おぢけついたのだ、と組合の人が云つてゐた。

「これでまア、然しよくやめもしないものだ。」

伴さんには組合の人達の方が分らないらしい。）

小樽からは、一日も早く爭議團の「青年部」と「婦人部」を組織するやうに指令が來た。婦人部は伴と阿部の細君とキヌの妹が先きに立つて働き出した。

第一回の「情勢報告」の演說會を開いた。

――健はだん／＼面倒な仕事に自信が出來て來た。

「どうして節ちやにも仕事をして貰はないの？」

キヌの妹はそんな事を云ひ出してきた。

情報、四

岸野の邸宅、店鋪、其他には××が急に殖えた。その××は帽子をかぶり、劍をさげてゐる。

――かうなればハッキリしたものである。小作人代表の交渉付添ひに行つた組合の武藤君は、××に嚙みつかれてすぐ檢束された。

交渉に對して、岸野は飽くまで「正式交渉」を拒み、「交渉の代表」を認めない。

次席警部は武藤君に對して、「××は如何にも君等の言ふ通り、資本家の××だ。その積りで居れ。」とハッキリ云つた。

一日二回「共同委員會」を開催して、刻々の情勢に對して、策を練つてゐる。

情報、五

寄附左ノ如シ。

白米五俵　（日本農民組合××部外三）

行カレヌ、勞農提携ニヨル勝利ヲ天下ニ示セ　（大阪農民組合本部）

岸野搾取魔ヲ徹底的ニヤッツケロ　（日農××支部）

五圓八十錢　（市内運輸勞働者四十一名）

貳錢切手四十枚　一勞働者

鷄卵七個　同

（阿部からの手紙。――應援金を少しでもいゝから送つてくれるやうに運動して貰ひたい。さうすれば勞働組合や農民組合聯合會の人達に對しても面目が立ち、同時に爭議團一行の元氣を一層引き立てることが出來るから、皆で相談の上至急お願ひしたい。）

（七之助。――阿部さんは、どうして我々百姓の爭議に無關係な小樽の勞働者達が、（組合員はまづとして）仕事を休んでまでも、そして××へ引ッ張られて行つて、毆られて迄も應援してくれるのか分らない、と涙を光らせながら話した。お互貧乏な勞働者から、毎日のやうに寄附が集つてくる、それも不思議でならない、と云ふのだ。

「矢張り貧乏人だからよ。――地主と資本家とでは變つてをれ、お互に金のある奴から搾られてゐることでは同じからよ。」

「それアさうださ。んでも……こんなに……」

――中々分らない。

とにかく、俺さへ吃驚する程、勞働者が戰つてくれてゐる。めづらしいことだ。――やつぱり勞働者と百姓は、底の底では同じ血が通つてゐるんだ。

爭議が長びくかも知れないから、と云ふので、そつちから馬鈴薯五俵送つてきたのを見て、組合員が泣いたよ。米でなくて薯だつて！　食ふや食はずで仕事をしてゐる勞働組合員でも、薯を飯の代りにはしてゐない。――百姓ッてものが、どんなに低い生活をしてゐるか、而もそれでゐて、どんなに飢ゑなければならないか！

武藤などは、この「薯」のことだけでも、飽く迄戰ひ拔かなければならないと云つてゐる。

情報、六

出樽以來二週間に達した。爭議團のうちの小作人で、最初日和見のものも隨分ゐたやうであつたが、日々の交渉、集合による訓練、勞農黨員の「社會問題講座」の開設等によつて、（これは忙しい合間々々に行はれたが、その效果では著しいものがあつた。）次第に意識的、階級的立場に教育され、ビラ撒き其他の運動に積極的に「動員」がきいてきた。」

爭議團からは二名、「勞農共同委員會」に委員が出てゐるが、更に「交渉」「訪問」「文書」「會計」の部門にも、これを編入し、組織的に、活動に從事させてゐる。

健は、情報や個人々々から來る詳しい手紙や毎朝の新聞で、爭議がどういふ風に進んでゐるか、大體の見當はついてゐた。――其處ではどんな恐ろしい事が毎日起つてゐるとしても、（阿部からは、自分達は半分恐ろしさにハラ〳〵しながら、「一生懸命勞働組合の人達に引きずられてやつてゐる。あれ以來ゲッソリ痩せてしまつた。――S村で考へてゐたやうなものでない、と云つてきてゐた。）然し、健はさういふ「訓練」を受けることの出來ない自分を殘念に思つた。

情報、七

爭議勃發以前申立てた「小作調停」に對して、十五日旭川裁判所に、件外一名の代表が呼び出され、出頭した。

（勝見小作官、判事、調停申立人伴外一名、地主岸野。）

判事――お前達は誠意をもつて、おとなしく解決する氣か、騒いで解決する氣か。

伴――こつちは不誠意でも何んでもありません、地主が不誠意なのです。

判事――小樽あたりで演説會を何故やるか。どこ迄も喧嘩腰でやる氣なら、調停を取り下げて貰ひたい。

小作官――お前が喧嘩をして勝つと、小作人全體がきかなくなるから、そんな事をして貰つては困るぢやないか――お前等は金がない、味噌がないと云ふが何故小樽あたりへ行けるのか。

伴――組合支部の應援で行つてるのだ。

これは一字一句も直してゐない。それもたつた一部の寫しでしかない。

これを讀んだら「調停裁判」の本質が何んであるか、分る筈だ。

全道各地に「地主協議會」といふものを作り、蔭ながら岸野を援助してゐる。彼等も亦結束し出した。――××支廳長は「小作人勝タシムベカラズ。」といふ嚴祕の指令を管轄內の「有力者」に配つた。それが組合支部の一小作人の手に入つたのだ。

それならば、よし！　我等は益々結束を固めなければならない。

情報、八

岸野は會見の度毎に、言を左右にし、代人をもつて無責任な面會をさせ、誠意さらに無し。

「小作人が生意氣になつて働かなくなつたら、北海道拓殖のために大損害を與へることになる。――お前等の要求は、俺一個の立場からではなく、この大きな問題から云つても斷じて通すことはならん。」と放言した。

「北海道拓殖のため」は大きく出たものだ。その裏表紙には「俺の利益が減るから」と書かれてゐるのだ。

殆んど毎日市民に訴へるビラを撒布する。市民は明かに小作人に同情を寄せてゐる。そして今や一つの「社會問題」にまで進展しようとしてゐる。「岸野――小作人の問題」の限界を越えようとしてゐる。

我々は意識的に、精力的に、その方向へ努力しなければならない。

決　議

今回岸野小作人が遠路出樽、小作料減免を歎願せるは、一昨年來の凶作を考へるとき、その要求に何等不當なるものあるを認めるを得ず。速かにその解決のために努力せられん事を促すものである。

若し貴殿にして解決の誠意を示さざる時には、貴殿の荷物の「陸揚げ」を絶對に拒否し、貴殿工場のストライキ、貴殿發賣品の不買同盟を決行す。

右決議す。

全小樽陸産業勞働者會議

岸野殿

この決議は岸野の鼻を挫いた。

七之助からの手紙には、「工場」も動き出して來たと書かれてゐた。

情報、九

二十四日の「××糺彈演説會」當夜に於ける、××の血迷へる醜體！　劍を短く吊つた（イザツて云へばすぐだ！）警官を百人も會場の內外に配置する。會場の周圍には、要所々々に繩を張つて、交通を遮斷し（これでも交通××に

ならないから不思議だ。）來場の聽衆を一々誰何し、身體檢査をもつて威怖せしめるのだ。

印刷屋にはスパイを派して、ビラの印刷を妨害し、會場々々の先廻りをしては「あんな奴等に貸せば、會場を壞されるぞ。」と威壓的に、明かに「營業の目的」を迫害してゐる。

然し、此等の彈壓こそ逆に我々の鬪爭をより鞏固に、固く結びつかせるに役立つのだ。

一緒に仕事をしてゐるうちに、健は「ツン〳〵した」女にひきつけられてきた。

「節ちやがね、健ちやは魔がさしてるんだつて、悲しさうにしてたよ。」

さう云つてキヌの妹がキャッ〳〵と笑つた。勝氣らしく仕事をテキパキと片付けて行つた。

十三

「女は女同士」

> **地主樣の奧樣にお願ひして**
> **幼兒を背にして、五人の女房達きのふ小樽へ！**

大きな「見出し」で小樽新聞が書いた。――岸野農場の小作人十餘名は、三日來樽以來、苦鬪に苦鬪を重ねてゐるが、留守宅の細君等も安閑として日を過ごすことが出來ない。「**女は女同士**」奧樣にお願ひをしようと云ふので、家に老人や子供を殘し、村を後に出樽した五名の細君はゴハ〳〵の木綿着物に澱粉靴をはき、毛布の赤いキャハンを出して、幼兒を背に……云々。

健は「連絡委員」と入り代つて、女房達とは一足遲れて、小樽へ出てきた。

> どの面さげて出て來た！
> 「畜生奴」
> **散々罵られたが奧樣に面會せぬうちは歸らぬといふ女房**

（小樽新聞）悲痛な決心のもとに來樽した細君達は、直ちに岸野邸におもむき夫人に面會を求めたが、病氣の故で、遂に面會出來ないとの返事に對し、細君達は、家の何處でもいゝから寢かせて頂いて毎日でも待つて居ります、と云つたが、一應爭議團本部に引き上げることになつた。子供達は久し振りで父親の顏を見たので、父さん、父さんと呼んで、抱かるゝなど、一種の劇的場面があつた。

細君達は更に二十一日岸野氏宅に至り面會を求めるところがあつた。

婦人爭議團の一人伴君の女房語る。――私達は岸野樣の奧樣に面會して、農場を開くに苦心した當時の有樣を詳しくお話しし、そして今どんなに慘めな暮しをしてゐるか申上げたいと思つたのです。ところが、岸野の御主人樣は私共に「小樽に面白をかしく出て來たのか？――どの面さげて小樽に出てきたんだ。」とか、「眞人間になつて出直して來い。」とか云はれました。――眞人間になれッて、どんな事かチットモ私共には分りません。

然し、女なら女同士、この苦しいことが分つて頂けると思つて、やうやく奧樣にお會ひ出來て、お話しました。どうでせう！　ところが！

「お前達の顏も見たくない。」――いきなり大聲で叱りつけられました。

これは意外でした。――私共は家を出るとき、皆さんにキット奧樣の溫いお言葉を頂いて歸ると云つて來たのでした。

「お前等のために、この何十日ツてもの夜も滿足に眠れたことがないんだ。――この恩知らず

奴！」
私共は申しました。「いゝえ奥様、貴女は夜もおち／＼眠れないと仰しやいましたが、それは然したゞ眠れないだけのことでせう。然し私共は一日々々が生きて行けるか、行けないかのことなんです。命がけのことなんです。」
だが、もう決してお前達には會はないし、云ふこともきいてやらないから勝手にせ！　とうとうさう云つてしまひました。──涙ながらに語つた。
かくして岸野小作爭議は「社會的」に益々深刻を極めて行くものの如くである。

十四

「解散！　解散!!」

「演說會」が開かれた。健は組合の人や阿部、伴などと一緒に、劇場の裏口から入つた。入口で巡査から一々懐や袂を調べられた。
「よし。」さう云つて背中を押す。
「何が、よしだ！」──健にはグッと來た。
「御苦勞さんだな！」──組合員は小馬鹿にした調子を無遠慮にタヽキつけて、ドン／＼入つて行く。

二階から表を見下すと、アーク燈のまばゆい氷のやうな光の下で、雪の廣場はカチ／＼と凍ついてゐた。顎紐をかけた警官が、物々しく一列に延びて、入り損つた聽衆を制止してゐた。丁度眞下に、帽子の丸い上だけを見せて、點々と動いてゐる黑い服が、クッキリ雪の廣場に見えた。──所々に小競合が起つて、そこだけが急に騷ぎ出して、群集がハミ出してくる。警官が劍をおさへながら、そこへバラ／＼と走つて行く。
二千人近くのものが歸りもしないで、ジリジリしてゐた。
「立ち止つちやいかん。」
「固まると、いかん。」
「こら、こら！」
警官があちこちで同じことを繰りかへしてゐた。
群集のしやべつたり、怒鳴り散らしたりしてゐる聲は、一かたまりに溶け合つて聞える。時々鋭く際立つてそのなかから響くことがある。
──健は「有難かつた！」有難い！　有難い！　わけもなくその言葉が繰りかへされた。
寒氣れてゐた。廣場はギュン／＼なつて──

皆は絶えず足ぶみをしてゐた。下駄の齒の下で、ものゝ割れるやうな音をたてた。
演說會は最初から殺氣立つてゐた。
「橫暴なる彼等××……」
「中止！」
直ぐ入り代る。
「資本家の××……」
「中止ッ！」
──二分と話せない。出るもの、出るもの中止を喰つた。
──阿部も伴も演說が上手くなつてゐた。聽衆は阿部や伴のゴツ／＼した一言々々に底から搖り動かされてゐるではないか！　健は眼尻にジリ／＼と涙がせまつてくる。いけない、と思つて眼を見張ると、會場が海底でもあるやうにボヤけてしまふ。
伴の女房も演壇に立つた。──日燒けした、ひツつめの百姓の女が壇に上つてくると、もうそれだけで拍手が割れるやうに起つた。そしてすぐ抑へられたやうに靜まつた。──聽衆は最初の一言を聞き落すまいとしてゐる。
伴の女房は興奮から泣き出してゐた。──泣き聲を出すまいとして、抑へ／＼て云ふ言葉が皆の胸をゑぐつた。──あち、こちで鼻をかん

でゐる。

「……これでも私達の云ふことは無理でせうか？――然し岸野さんは畜生よりも劣ると云はれるのです。」

拍手が「アンコール」を呼ぶやうに、何時迄も續いた。誰か何か聲を張りあげてゐた。

「こんな事はない！」

組合の人が健の肩をたゝいて、すぐ又走つて行つた。――「こんな事はない！」

次に出た勞働組合の武藤は「三言」しやべつた。「中止！」そしてすぐ「檢束！」

警官が長靴をドカッ／＼とさせて、演壇に驅け上つた。素早く武藤は演壇を楯に向ひ合ふと、組合員が總立ちになつてゐる中へ飛びこんでしまつた。人の渦がそこでもみ合つた。聽衆も總立ちになつた。――武藤は見えなくなつてゐた。

「解散！　解散！！――」――高等主任が甲高く叫んだ。

聽衆の雪崩は一度に入口へ押し縮まつて行つた。健がもまれながら外へ出たとき、武藤は七、八人の警官に抑へられて、橇（檢束用）へ芋俵のやうに仰向けに倒され、そのまゝグル／＼と細引で、俵掛けのやうに橇にしばりつけられてしまつてゐた。仰向けのまゝ、巡査に罵聲を投げつけてゐる。――見てゐる間に橇が引かれて行つてしまつた。百人位一固まりになつた勞働者が「武藤奪還」のため警官と競合ひながら、橇の後を追つた。

會場の前には、入れなかつた群集がまだ立つてゐた。それと出てきたものとが一緒になると、喊聲をあげた。そして、道幅だけの眞黑い流れになつて――警察署の方へ皆が歩き出した。組合のものが、その流れの「音頭」をとつてゐることを健は知つた。

健は人を後から押し分け、――よろめき、打つかり、前へ、前へと突き進んだ。――もう、どんな事も何んでもなかつた！

知らないうちに、右手で拳がぎつしり握りしめられてゐた。

十五

事態が變つてきた

事態が變つてきた。

祕密に持たれてゐた「地主協議會」のうちから、今では殆んど社會全體と云つていゝ反感が地主に對して起きてゐる時、これをこのまゝ何處までも押し通して行つたら、「大變なことになる」といふことを考へる地主がだん／＼出て來た。――それ等の人達が岸野に「妥協」をすゝめた。

岸野の「工場」にストライキが起りさうになつてゐた。――七之助がそのために必死に働いてゐた。組合員がモグリ込んでゐた。千名から居る職工が怠業に入りかけたといふことが、岸野を十分に打ちのめしてしまつた。

爭議團では更にこの爭議を「社會的」なものにするために、學校に行つてゐる小作人の子供を一人殘らず盟休させて、小樽へ來させる策をたてた。それが新聞に出た。――體面を重んじるＨ町と小樽の教育會が動き出した。岸野に「かゝる不祥事を未然にふせがれるやうに」懇願した。

勞働組合に所屬してゐるもののゐる工場や沖、陸の仲仕などが「同情罷業」をしさうな樣子があり／＼と見えてきた。

――今迄暗に力添へをしてゐた他の資本家が、岸野に「何んとかしてくれなければ」と云ひ出してきた。

事態が急に變つてきた。

調停委員が立てられた。市會議員一名、警察

署長、辯護士、勞働組合代表、農民組合代表、小作人代表、有力新聞記者、岸野側。——物別れ、物別れを繰りかへしながら、三度、四度と會見を續けた。

そして出樽以來三十七日間の苦闘によつて、地主岸野は屈服した。——時、一九二七年十二月二十三日、午後九時四十八分。

その日の「ビラ」は組合員の手から都會の勞働者に、——全道の農民組合の手から小作人に——配られた。

……………………………

小作人は今や昔日の生存權なき農奴より、戰闘的勞働者階級の眞實の「同盟者」たり得ることを立證した。

封建的搾取と闘ふために！
耕作權確立のために！
日本農民組合に加入せよ！
勞働者と農民は手を結べ！

「勞」「農」提携爭議大勝利、萬歳!!

「もう五つ——」

爭議團は小樽の勞働者達に見送られて、——一ケ月以上の「命がけ」の（伴は、あとで思ひ出すと、背中がゾッとする、とよく云つてゐた。——よくまアやつてきたもんだ。）闘爭の地を後にした。

あと九ツでＨ停車場だ！——もう七ツだ——もう五ツ——四ツ——三ツ、と、なると皆は云ひやうのない氣持に抑へられた。近くなればなる程、小作人達はムッつり默りこんできた。

——伴の厚い、大きな肩が急に激しく搖れた。と、ワッと泣き出してしまつた。雪焼した赭黑い顏に、長い間そらなかつた鬚が一面にのびてゐた。——伴は自分の肱に顏をあてた。そして聲をかみ殺した。

嬉しかつた！　たゞ嬉しい。**それをどうすればいゝか分らないのだ。**

女達も思はず前掛で顏を覆つてしまつた。

十六

「毎日毎日、一月も考へた」

「ねえ、健ちや……」

節は餘程云ひ難いことらしかつた。

「…お父な、嫁にでも直ぐ行くんでなかつたら、都會さ稼ぎに出れッてるんだども……！」

——とう／＼さう云つた。

「俺…俺一緒にならない。」——健は苦しかつた。

「……!?」

暗かつたが、節の顏が瞬間化石したやうに硬ばつたことを健は感じた。

「…考へることもあるんだ。俺小樽から歸つてから毎日々々、一月も考へた。…考へたあげく、とう／＼決めることにしたんだ…俺は、旭川さ出る積りだよ。」

「…何しに？」

「うん？」

「何しによ？」

「後で分るよ…」

「……」

——節は健のうしろにまはしてゐる手を、何時の間にか離してゐた。

健は固い決心で旭川に出て行つた。キヌの妹が見送つてきてくれた。

彼は、そして「農民組合」で働き出した。

——一九二九・九・二九——

冬が來た。プロレタリアの骨節にこたへる冬が來た！
獄中にゐる**我等の**××に綿入れは入つてゐるか？
遺族は路頭に迷つてゐないか？

救援ニュース No. 18. 附録

（これはある部分抜けてゐる。然し文章を少し直しただけでそのまゝ附録とした。）

んで行きました　みんな一列にならんで、おいしやさんのところへ一人づつつめて行きました。おいしやさんは生徒のむねをこつ〳〵たゝいたり、きかいをあてたり、目をひつくりかへしたりして、そばにゐる人に何か云つてゐました。私のばんにきました。私は赤くなつて、からだがふるへ、こまつてゐました。はづかしくてならなかつたのです。私ははだかになるのが、どんなにいやだか分りません。

私は先生のお話をきいてゐるときなど　からだを何びきもしらみが走つて、ちつともぢつとしてゐられないのです。私はいつでもふところの中に手をいれてやつて、しらみを手さぐりでおさへてゐました。**一生けんめいに、それをゆび先きでこすつて、つぶすのです。**でも、すぐ又からだのほかの方で、ざわ〳〵走りだすのです。私はそれではだかになるときに、からだにしらみがついてゐるのではないかとおもつて、いつでもいやで〳〵たまらなかつたのでした。いつか、たいかくけんさの時に、私のまへにならんでゐた人のくびに、しらみがあるいてゐたのをみました。その時それがちやうど自分であつて、よその人にでもみられたときのやうに、私はまつかになりました。

そればかりでなく　おゆに入つてゐないし、じゆばんがぼろ〳〵してゐるし、こしまきもなく、からだがく（七、八字程不明）おいしやさんは何んべんもあたまをふりました。ほかの人よりくはしくみるのです。私はむねがどき〳〵して、**じぶんで赤くなるのが分る**ほどでした。おいしやさん**はほうと云ひました。**そばの人にそして何かいひました。

おいしやさんはあとで私だけをよんで、いろいろのことをきゝました。お母さんはゐるか。私は二人ゐますとこたへました。お母さんが二人もかい、とびつくりしてきゝかへしました。お母さんが二人、へんだなあ。ほんとうのと…さう私がいひかけると、ほんとうのと、うそのかいとわらつて云ひました。私はあたまでうなづきました。おいしやさんはだまつて、そしてしばらく私のかほをみてゐました。もらはれたんだね、と云ひました。

どうだね、うそのお母さんは。

お母さんはいつでも早く大きくなれといつてゐます。私はそのとほりこたへました。それでもお前はごはんさへろく〳〵たべてないではないか、からだをみればすぐ分る、さう云ひました。私はだまつてゐました。お母さんは私が大きくなつたら、賣るといつてゐるのです。私はそれがどんなことであるか分りません。しかしそれはきつとおそろしいことなのです。お母さんはいつでも早く大きくなれと云ひます。私はさう云はれるたびに、それがどんなにおそろし

いか。お母さんはその時やくにたつのだといつて、いろ〳〵なうたをしへてくれてゐるのです。

うたのことでおもひ出しましたが よほどまへ、私がほんとうのお母さんのところへ行つて、弟とあそんでゐながら、しらないうちに、ひくいこゑで、月はよるでて、あさかへる……とうたつてゐました。私がなにかで、ひよいとうしろを見たら、はんぶんあいたしやうじのところによりかゝつて、お母さんがぢつとうしろから私をみてゐました。私はお母さんの目がなみだで一ぱいにひかつてゐるのをみました。

お父さんがゐたときから くみあひの人がくるとすぐ弟がこたつの上にふんばつて、おれらはぷろれたりや、しほんかはてきだ、と云つて、みんなをよろこばしてゐました。お父さんがをしへるのです。はじめ私だちはなか〳〵ぷろれたりやといふことばが云へなかつたのです。弟はふんばりはふんばつても、そのぷろれたりやといふのが口がまはらず、どもつて、かほをしかめ、それからとう〳〵あたまをかいてしまふことがありました。私だちは赤はたのうたといふのもおぼえてゐます。よくこゑを合せてうたひました。ひけふもの、去らば去れ、そこがすきで、そこばかりくりかへしてうたつてゐました。お父さんやくみあひの人が、そのたびに、えらい、えらいと云つて、あたまをなでてくれました。お父さんは、大きくなつたら弟や私をどうしてもこうばに入れて、ぷろれたりやにするのだといつてゐました。お父さんがけいさつにつれて行かれ、たべることができなくなつてしまひ、それに私がこんなにな（一行程不明）のに、月はよるでて、あさかへる……お前はもうお父さんがをしへてくれたうたの方はわすれたらうね、とお母さんがそのとき云ひました。いつのまにか、私はあかはたのうたもうたはないでゐたのでした。それで私は今でもそのときのことが、あたまのなかにのこつてゐるのです。

おいしやさんは 私がなにも云はなくなつたので、「もうよし〳〵と云つて、お母さんにもつてゆくんだよ、とてがみをわたしてくれました。私はどつちのお母さんかとおもひ、みち〳〵かんがへました。が、今のお母さんにはみせるきがせず、ほんとうのお母さんのところへもつて行かうとかんがへました。しかし、さうきめても、心がうしろから、うしろからおひかけられるやうでした。ほんとうのお母さんのところへ行つたのを、今のお母さんにみつけられると、私ははりへつるされるのです。私はいちどさうされてから、まだ右の手のふしがいたんでなりません。私ハアルイテキルウチニ、ダン〳〵シンパイニナリマシタ。ソノ手ガミノ中ニハ、何カキツトタイヘンナコトガカイテアルノデハナイカト思ハレテキタノデシタ。一度サウオモフト、モウ私ハハンブンナキダシサウニナリマシタ。フトコロノ上カラテガミヲオサヘテ、人ゴミノナカヲ走リダシマシタ。

ウチノカドマデキテ 一ドタチドマリマシタ。イツデモサウシテキルノデス。何モカハツタコトガナイヤウデシタ。私ハウラノ方ヘマハラウトシテ、トソノトキ、フクヲキタ人ガデテキタノデス。私ハギョットシテ、足ガチヾマサリマシタ。やあ、キヌか、その人は私のなをいひました。でも、私はなんだか、その人がにくらしい人で、おそろしい人であるきがして、だまつてゐました。それにひざかぶが、どうしてもかた〳〵ふるへてなりませんでした。私はおもひつきました。それはほんとうににくらしいやつなのです。いつでもお父さんのあとをついて行つたり、お父さんがどこへ行つたか、お前しつてるだらう、ときいたりするスパイでした。

どうだ、あたらしいお母さんにめんこがられてゐるか、と云ひました。私はへんじをしないで、そいつのかほをにらんでやりました。それから、をぢさん、お金ちやうだいよ、と云ひました。けいさつの人は、へえ、といふかほをして、私のかほをみてから、ふうん、ばかやろ、さう云つて、行きかけました。私は、よお――と云つて、うしろからひぢにつかまりました。をぢさんがお父さんをつれて行つてしまつたから、お母さんがとつてもこまつてゐるんだもの、と云ひました。づう〳〵しいやつだ、こいつらはみんなかうだ、ぶつ〳〵いつて、それでもしかたがなくかくしをさがし出しました。見ろ、とおもひました。先生、私ハ心ノ中デ、コレデオ父サンノカタキガトレタ、トオモツテ、ウレシクテ、ウレシクテ、ナリマセンデシタ。スパイハ手ノヒラヲヒラ゛カセテ、ソレニ十センダマ一ツノセテクレマシタ。ソレカラ、ソツトシタヲ出シタノモ知ラナイデ、カタヲフツテ、グジヨグジヨシタミチヲカヘツテ行キマシタ。ソレヲヂツト見テヰルウチニ、私ハジブンデモ分ラズニ、ナミダガ出テキマシタ。イチド出ルト、アトカラ、アトカラ出テキマシタ。ナゼダカ分リマセン。

私ノカホヲミルト オ母サンハモウ泣キダシテキマシタ。ズヰブン長イ間コナカツタノデス。アシタオ前ノトコロヘ、コツソリモツテ行ツテヤラウトオモツテ取ツテオイタノダト云ツテ、ミカントアンパンヲ出シテクレマシタ。ソノトキ、オシ入レガガタ〳〵シタノデス。私ハコエヲアゲルトコロデシタ。スルト男ノ人ガノツソリ出テキマシタ。モウ行ツタラウ、ト云ヒマシタ。クミアヒノ人デシタ。オ母サントハナシヲシテキタトコロヘ、ケイサツノ人ガキタノデ、アワテヽソノ中ニカクレテキタノダト云ヒマシタ。ソレデ、ミンナデヲカシクナツテ、コエヲ出シテワラヒマシタ。

クミアヒノ人ハ、オ父サンノコトヲワスレズ、トキ〴〵マハツテキテクレテキマシタ。ケイサツニ行ツテヰルノハ、オ父サンバカリデナク、何ンデモコノ市カラ二十四、五人モヰルサウデス。コノクミアヒノ人ダチハ、ミンナデ、私ノウチノヤウナ人ダチヲタスケルタメニ、オ金ヲアツメテ、ソレヲクバツテアルイテヰルノデス。チヤウド、ソレヲモツテキテクレテキタノデシタ。

弟ハボロ〳〵ニナツタヱ本ヲ ミテキマシタ。アタマダケガダン〳〵大キクナツテ、目ガコノ前ノトキヨリモ又モツトギヨロ〳〵シテキマシタ。私ハ、弟ノホソイクビヲミルト、カナシクナツテキマシタ。オ母サンニハ、弟ガドコカワルイノデナイノ、トキヽマシタ。オ母サンハウカナイカホヲシマシタ。弟ハ學校デハヨクケンクワヲシカケラレタリ、ナカマハヅレニサレテキマシタ。オ父サンノコトガスツカリ分ツテキタノデス。ソレデ弟ハ學校ヘ行クノヲイヤガツテキマシタ。

クルタビニ ウチノ中ガダン〳〵ガラントシテキテキマシタ。ソレハ私ニモワカリマシタ。ウチニキタトキ、私ハオ母サンノアトニツイテ、シツヤヘヨク行キマシタ。オ母サンハオビヤタビマデモツテ行キマシタ。ソレカラドコヘ行クニモ、ヒモバカリシメテキマシタ。冬ガチカクナルト足ニヒヾガキレテ、赤クワレテ、ニクガミエマシタ。シヤウジハクミアヒカラシンブンノアマリヤ、ビラノアマリヲモラツテキテ、ベタ〳〵ハツテアリマシタ。ソレモヤブレテ、ツメタイ風ガ入ツテキマシタ。ウラ口カラ入ツテクルト、オモテヘソノマヽフキヌケテ行クノデス。

私ハオ母サンガ ドンナニシンパイスルカトイフコトガ分ツテキテモ、今マデアツタコトヲ、

ナンデモ、カンデモ云ッテ、アマエタイ心デ一パイデシタ。イツデモヒネラレタリ、タヽカレタリシテキルノデスモノ。私ハオ母サンノトコロヘクルトキニハ、アルキナガラ、アノコトモ、コノコトモト一ツ一ツカゾヘテソレヲワスレナイヤウニ何ンベンモ、何ンベンモ、オボエナホスコトニシテキルノデス。

オ母サンハ字ガヨメマセン。オイシヤサンノ手ガミハクミアヒノ人ニミテモラフコトニシマシタ。クミアヒノ人ハヨミナガラ、私ノカホヲミテ、キヌチャンガエイリヤウフレヤウダカラ、ウチデ何カジヤウニナルモノヲタベサスヤウニシナケレバナラナイ、ト云ヒマシタ。キノヨワイオ母サンハ、ワケハ分ラナイガ、モウオロオロシテ、私ノ手ヲギッチリニギリナガラ、ソレハドウイフコトカトキヽマシタ。オ母サンハドモッテシマッテ、エイリヤウ(鉛筆ノタメ、二行程不明)キカレマシタ。ハジメハワカリマセンデシタガ、ダン〱何ンド目ヲコスッテ、見ナホシテモ、ヲカシイノデス。イツデモ目グレチカクナルト、サウデシタ。ウラ口ヘスミヲトリニ行クトキナド、ジブンデモヲカシイ、ヲカシイトオモヒナガラ、ソレデキテツマヅキマシタ。ソシテ、イキナリ上リ口ヘノメリマシタ。次ツギカラハ、コノヘンニ何カアッタトオモッテ、キヲツケテキナガラ、ヤッパリスグツマヅイテシマヒマス。クミアヒノ人ハ、ソレハトリ目ニナッテキルノダ、ト云ヒマシタ。

クミアヒノ人ガカヘッテカラ、オ母サンガカンゴクニキルオ父サンカラキタ手ガミヲ出シテキマシタ。私ニモ分ルヤウニ、カタカナデカイテアリマシタ。私ハコヱヲダシテ、一字一字オ母サンニヨンデキカセマシタ。私ハダン〱ヨメナクナリマシタ。ナミダガデテキテ、字ガドウシテモ見エナクナルノデス。ソレニコヱガフルヘルノデス。オ母サンモ目ヲコスッテ、ナンドモハナヲカミマシタ。オ父サンニカウカウヲシテクレルナラバ、ドウシテオ前タチノオ父サンガ、カンゴクニツレテ行カレタカトイフコトヲヨク考ヘテミテ、オ父サンノアトヲツイデクレルコトダ。オ父サンガキナクナッテ、クルシイコトバカリダラウ。ソレデモ、ケッシテコレダケハワスレナイデオクレ。オ前ダチガコノコトヲ分ッテクレ、ドン〱大キクナリ、ツヨイ人間ニナッテクレルナラ、オ父サンハカンゴクノ中ニキテモ、チットモサビシイコトガナイ。ソレバカリヲマイニチタノシミニオモッテキル。私ハコヱヲアゲテナイテシマヒマシタ。コレ健ヤ、オ前キイタカ、オ母サンハ弟ノカタヲユスリマシタ。ソノトキ、ヒヨッコリ、サッキノクミアヒノ人ガ入ッテキマシタ。オ金ヲ二圓モッテキタノデシタ。私ニ八ツメウナギヲタベラシタライ、ト云フノデス、ミルト、サッキキテキタジヤケツヲキテキマセンデシタ。

私ハホツペタヲヒネリアゲルオ母サンガ、マチカマヘテキルコトガ分ッテヲリ、ソレガ目ノマヘニチラ〱シテキナガラ、ヤッパリカヘルノヲモウ少シ、モウ少シノバシテキマシタ。オ母サンモカヘシタガラナイノデス。イモヲフカシテクレタリ、カミニクシヲ入レテ、シラミヲトッテクレタリ、オヤユビノデタ足ビニツギヲアテヽクレタリ、少シデモカヘスノヲノバシテキルノデス。ソレガ私ニモ分リマス。スルト、モウドウシテモカヘリタクナクナルノデシタ。

日ガクレカケテキマシタ。オ母サント弟ガコウヂヲトホリマデ、オクッテキテクレマシタ。弟ハカタヲスボメテ、セキヲシテキマシタ。ソトハカゼガサムクフイテキマシタ。ミチ〱ナント云ヒワケシヨウカ、ソレバカリ考ヘテキルト、シラナイウチニ、ドン〱ハシラサッテキマシタ。夜ニナッタラチリガミヲウリニデナ

ケレバナリマセン。

先生トハオ別レデスカラ、ナンデモ云ヒマス。うそのお母さんのところへは、まいばんちがつたお父さんがくるのです。お母さんはそれをお父さんと云へといひます。年をとつた女の人が、いつでもおそくなつてから、うら口からこつそり男の人をつれてくることになつてゐました。ソシテソノ男ノ人ハ次ノアサカ、オヒルコロカヘツテ行キマシタ。ヒトバン中サケヲノンデ、サワグコトガアリマシタ。シマヒニ、ケンクワニナツテ、オ母サンガナグラレタリ、カミヲツカンデ引キズリマハサレタリスルコトガアリマス。デモ、ソレヨリ、イクラ先生ニデモ云ヘナイヤウナコトヲ、私ガソバニヰルノニスルノデス。私ハドウスレバイヽカ、ドウニモデキナクテ、タヾウロ〳〵スルバカリデス。ソレダノニ、オ母サンハ、オ前モハヤクコンナコトヲオボエテ、オ母サンニオ金ヲカセイデクレナケレバナラナイ、ト云フノデス。私ハオシ入レノ中ニチヾコマツテ、フルヘテヰルヨリドウスルコトモデキマセンデシタ。

コノ前デシタ。私ハ、ハシゴダンノドタン〳〵トイフ音デ、ビツクリシテ目ヲサマシマシタ。スグ火事ダトオモツテ、私ハトナリニヰルオ母サンヲヨビマシタ。ト、オ母サンノヰルヘヤデ、キフニ何カサワギガオコツタノデス。私ハブルブルフルヘナガラ、シヤウジヲアケマシタ。アケテ私ハハツトシマシタ。ジュンサガ上ツテキテヰルノデス。前ノバンニキテヰタ男ノ人ハ何カキカレテヰマシタ。オ母サンハソレカラ一シウカンモ、ケイサツカラカヘツテキマセンデシタ。私ハサムクテ、ハラガヘツテナイテヰナケレバナリマセンデシタ。

私ダチハ人ノニカイヲ二マカリテヰタノデス。オ母サンハ私ノヰル方ヲ、私ダケデハモツタイナイト云ツテ、ツミトリニンプ（積取人夫）ヲツレテキテ、ゲシュクサセマシタ。フトンガ一枚シカナイノデス。私ハネルトキガキテモ、スミコニチヾマツテヰマシタ。カゼヲヒクヨ、ネツチヤ、ソノ人ハサウ云ヒマシタ。シカタナク、私ハ石コロミタイニ、コツチリカタクナツテ、フトンノハシノ方ニ入ツテネマシタ。ソノツミトリニンプハトキ〴〵ヨツパラツテ、カヘツテキマシタ。私ハサケクサイイキヲカケラレルト、ムネガワルクナリ、アサマデネムレマセンデシタ。トナリデハオ前ノオ母アガウマイ**コトヲシチルンダカラナ**、ソンナコトヲ云ヒマシタ。私ハゾツトシマシタ。オ母サンニオキヤクサンガナイト、ソノニンプガオ母サンノトコロヘ行ツテヰルノデ、私ハドンナニオ母サンニオキヤクサンガナイノヲヨロコンダカシレマセン。先生、ソレニコンナコトガアツタノデス。私ハコノ前ノ夜、キヤツト云ツテ、ハネ上リマシタ。ネテヰルマニ、ニンプガ私ニヒドイコトヲシヨウトシテヰルノデス。私ハマツサヲニナツテ、イキナリカイダンノトコロヘハシリマシタ。ソシテ、ソノマヽノメツテ、カイダンヲヒドイ音ヲタテナガラ、オチテ行キマシタ。私ハモウ何モカモ分ラズ、ムチウダツ（以下二行程不明――この邊から鉛筆がペンになつてゐる）オソロシイバカリデス。デモ、ミンナヤツパリオ金ガナイカラダトオモヒマス。私ニダツテソレハ分リマス。オ金ガナカツタラ、オ母サンノヤウニモナラナケレバナラナイトオモヒマス。ミンナイヽ人デス。私ハシカシドンナコトガアツテモ、オ父サンノ云ツタトホリコウバニ入ツテ、女工サンニナラウトオモツテヰマス。ソシテ三ネンスルト出テクルオ父サンヲヨロコバシテアゲタイ、トオモツテヰルノデス。デモ、私ハウラレ、

（この次に續かなければならない分が脫け

てゐるらしい。」

ワカリマセン。ドコデモ、イキナリダメ〳〵ト云ヒマス。オ客サンノジャマニナルンデナイノ、キノフモヲトツヒモキタクセニ、ウスギタナイ、ヂョキフサンハキレイナカホヲ、イヂワルクシカメテ、ニラミツケタリシマシタ。私ハサウ云ハレルタビニ、心デハウロ〳〵シナガラ、ソレデモ立ツテヰルノデス。しらんかほをして、びーるをのんでゐる人や、きぶんがわるくなつたと、こそ〳〵云つてゐる人や、あります。私はひとり〳〵、をぢさんちり紙をかつて下さい、とてえぶるによつて行くのでした。こまつたな、かねがないんだよ、といふ人がゐました。私はおもはずてえぶるの上をみます。私などのしらないれうりがたくさんのつてゐるのでした。私はそれとお客さんのかほを何んどもみてゐるうちに なんだかさびしく、はづかしくなつてきます。おきやくさんのうちには、わざにふところからさいふを出して、それをてえぶるにたゝいてみせたり、しました。私はつぎのてえぶるに行きます。よつぱらつたお客さんはいきなりばかツと、どなるのです。うるさい、うるさい、でて行きやがれ。私はおきやくさんがかへつて行くときに、五、六圓もはらつて、一ゑんもてえぶるにのこして行くのを何んどもみたことがあります。私はところが、一ばん、あさの二時ごろまで市のなかをあるいて、それで一圓になることなんか、なか〳〵ないのです。先生は私がどうしていつでも教室でえねむりをしてしかられたか、今わかつて下さることとおもひます。うちへかへつてねるのが、三時になることさへあるのです。

なかには、よし〳〵ひとつ買ふかな、と云つてくれる人もあります。よぶんなお金をてのひらににぎらしてくれる人もありました。ところが私が入つてゐるところへ、ほかのやつぱり同じやうにまはつてあるいてゐる人が入つてくることがあります。私はかほがまつかになつて、おたがひにきまりわるく、いそいで外へにげてしまふこともありました。私はいろ〳〵な同じ人を知りました。かんごくべやからきたといふ、いつでも足のぶる〳〵してゐる、はんてんをきた人や、なにはぶしやしばゐのやくしやのまねをしてあるいてゐる人や、私よりも小さい男の子や女の子などのゐることもしりました。はんてんの人は、お金やたばこをもらつてあるいて、それがをはると、ていしやばのいすにねるのだと云つてゐました。かへりに一しよになると、いくらになつたときいて、私が少なかつたりすると、おれは今日すこし多いから、といつて、おかねを分けてくれることがありました。足がぶる〳〵ふるへて、はやくあるけないので、私はとき〴〵まつたり、ゆつくりあるかなければなりませんでした。つじうらをうつてあるいてゐる小さい男の子が、ふゞきのばんに、手がつめたい、つめたいとなきながらあるいてゐるのを、私があごの下に入れて、あつためてやつたこともありました。でも、なかにはひどい人もゐました。ちやうど、かふえの前で、ほかの女のひとと一しよになつたとき、その人が、お前も入つてきたら、ぶんなぐるぞと云つて、私をいきなり雪のなかにおしこんだりしたことがありました。

私は一人の男の子と しりあひになりました。あるとき、かふえに入つて行くと、お客さんがその男の子を、このほいと(乞食のこと)出ていきやがれ、と云つたさうです。男の子はむつとして、どこがほいとだ、と口をかへしました。ところが、おきやくが、ばかやらう、金をもらひにきたくせに、と云つた。男の子はいきなりじぶんのもつてゐたつじうらを、おきやくの

かほにぶつけると、だれがお前に金をくれといつた。さう云つて、足にかじりついたのでした。あとでさん〲なぐられて、雪のふつてゐた外へなげ出されたさうです。私はその話をきいてゐるうちに、からだがふるへてきました。それでも男の子は、おれだちは何もほいとをしてあるいてるんでないんだから、少しもびくびくしてゐなくてもいゝんだと云ひました。私はそれはさうだとおもひました。何かお金のある人とない人、お父さんの云はれてゐたことが、わかるきがします。然しなかまの人はその男の子をなまいきだと云つて、あまりしたしくしてゐませんでした。

少しでもお金がよぶんに入ることがあると、私はそれをもつて、こつそりうちへより、弟にやることにしてゐました。弟はほんとうによろこんでくれました。私は弟によろこんでもらふことぐらゐ、うれしいことはありません。ねつちや、さむかつたろ、弟がさう云つてくれます。元氣のいゝときには、お父さんとそれにねつちやのかたきをとつてやらなければならないんだ、など云ひました。

お母さんはこまつてゐました。どこへ行つても、お父さんのことで長くゐることはできなかつたのです。男のにんぷと一しよにはまで俵をかづいたり、豆よりへ行つたりしてゐました。夏からみるとだん〱やせてきてゐました。

夜おそくなつてからでした。すこしお金をもつてゐたので、私はうちの方へまはりました。入らうとしたとき、だれか人がきてゐたので、だれかとおもつて、うらへまはつてみました。すばいです。そしてくものやうな、そのうすきみのわるいすばいが、お母さんに何かいたづらをしてゐるのです。私のからだは石のやうになりました。私はお母さんとさけんだきり、そこへたふれてしまひました。すばいはお母さんに、いゝくらしをたすけてやるからと云つて、前からなんどもそんなことをしてゐたのです。

私はおそろしいきがします。これからどんなことが、もつと、もつとくるのでせう。くみあひの人もどうしたのかゐなくなりました。私はくみあひの人からたのまれてゐることがありました。毎ばんしやうばいに出るとき、をしへられたところへよつて、そこからてがみをもつて、やつぱりをしへられた別のところへもつて行くことになつてゐたのです。それが二、三日前からどつちの方にも、だれもゐなくなつてしまひました。お母さんはまた何かおこつたんでないか、としんぱいしました。それで、とき〲今までもつてきてくれたお金なども、ちつともこなくなつてしまつたのでした。

ふゞいてゐたばんでした。十二月のをはりころになると、くるばん、くるばんふゞいてばかりゐました。一時すぎると、外はだれもあるいてゐません。雪とかぜだけが、だれもゐなくなつたまちのとほりを、ぐる〲うづをまいて、ふいてゐるばかりです。まへからきたとおもつて、うしろむきになると、又まつしやうめんからふいてくるのです。ふゞきで、そとにつけてあるでんとうも見えなくなつたりしました。かぜがおそろしいうなりをたててゐました。私ははらがへり、それにさむさで、はんぶん泣いてゐました。こんなときお父さんは火もなんにもないかんごくの中で、どうしてゐるだらうか、とそれがおもはさりました。かへつてくるとお母さんにはおきやくさんがゐました。お母さんはさけをのんで、赤いかほをしてゐました。私をみると、お前の弟が死にさうだと、さつきつかひがきてゐたと云ひました。私は立ちすくんでしまひました。かへつてぼかんと立つてゐました。私は何をきいたのか、それがじぶんで分らないやうでした。それから私はきふに、

あつ、あつとおもはずこゑを出すと、そとへはしりでました。私はむちうではしりました。私は二どもすべつて、雪のなかに手をつきました。しかしすぐおき上りながら、はしりました。すこし行くと、ふところに入れてあつた賣りのこりのちりがみがおちたのにきづきました。私はそれをひろつて、ふところに入れました。ところが、ちよつと行くうちに、又ちりがみがふところからおちました。雪といろがおなじなので、私はめくらにでもなつたやうに、むちうでそれを雪やぶのなかからさがし出すと、ふところにぐじや／＼におしこんではしりました。ふゞきはなほひどくなつてゐました。死ねばだめだ、死ねばだめだ、私ははしりながら、こゑを出して泣いてゐました。ゆきのなかにのめつたり、下のかち／＼のところではすべりころんだり、弟の名をよびながら、たえずあつ、あつとこゑをあげて、私は（六字程不明）お母さんや私がどんなに弟をあてにしてゐるか分りません。弟が大き

（これはこゝまでで終つてゐる。）

――一九二九・一二・七――

「市民のために！」

1

こんな時に有助が燥ぎたくて燥ぎたくてたまらなくなつてゐると云つたつて、それは何も不思議なことはない、鐵の棒のやうな堅ざうによくあることだが、――有助も確かにその一人だが、かういふ人が何かトテツもなく「立派な」事をやつてのけた後は、他の人より無邪氣に燥ぎたくなるものだ。それにいゝことか悪いことか、有助はめづらしく仲間の二三人とたつた一杯やつてゐた。

――一杯やらずにゐられるもんか！

第一こんな事を云ふのさへ、有助には此上なくめづらしいことなのだ、「で何が彼をさうさせたか。（この言葉は最近の流行である）――彼はこの四日間「足を奪はれた東京」四百萬の市民のために、一青年團員として出動した。そして今日といふ今日、さしもの市電總罷業も圓滿解決したのだつた。有助はまるで千貫の重石を肩からおろしたやうにホッとした。「どうだ、見ろ、俺のしたことは決して小ッちやくはなかつたぞ！」――彼には、口々に感謝の言葉を自分達に投げてゐてくれる市民の色々な顔がそのまゝ見えた。――市のヒーロー！

街々の角では、せはしい鈴の音がアスファルトの上に錯綜してゐる足並を澱ませた。夕刊はどの夕刊もデカ〳〵と市電のことを載せてゐた。有助は涙ぐましい程ぞく〳〵した。

――なアおい、もう一杯やらう！ ぢつとしてられれツかい。

有助は仲間の一人の肩をつかんで、新宿の裏小路へ引張つた、店先きの暖簾をワザと左肩でグイと切つて、威勢をつけて入り込んだ。彼は醉つてくると、（善良な青年團員だつて醉ふ。）手を振り、足をバタ〳〵させて立ち上つた。そして彼はアッ氣にとられてゐる人達に向つて、自分が榮譽ある我帝國在鄕軍人あがりの青年團員であること、今度の爭議で自分は如何に働いたかをしやべり出した。肉ダンで一杯やつてゐた職人がパチ〳〵と手をたゝいた。

お偉いこッてす！ お偉いこッてす！ 今時の若い人にも似合ひませんなア。いや感心なものです！

彼はドンと腰を下す拍子に、クラ〳〵ッと眼まひを感じた。テーブルと皿と銚子と顏と腕と壁が入り錯つて、グイと眉間にのしかゝつてきた、――だが彼は誰一人として自分を胴上げにしてくれるもののゐないことが淋しかつた。そのことを頭の何處かで、チラッと考へたとき氣を失つてゐた。そして、オイッ！ と仲間に肩をたゝかれて、有助は顏をあげた。

――玉ノ井だ！ 玉行きだ。自動車を呼べ。金は、金はたんまりあらア！ こんな愉快な時に誰が犬戻りに眞直ぐ家に歸られるかイ！

2

同じ「爭議」と云つても、それは色々な意味をもつてゐる。小樽で陸仲仕と沖仲仕のゼネラル・ストライ が起つたときは、小樽の糧道が斷たれたと同じだつた。で、「青年團が市民のために「日常必需品の運搬に出動した。朝鮮元山、釜山の運輸勞働者のストライキにもキット同じことがあつた筈である。戰爭間近に、軍器工場がストライキになつたら、それは「國家

のために」(誰の國家か、そんなことはちアんと分つてゐる。)勞働者の「命の主張」は踏みにじられてしまふ。東京市電の大爭議も、この例から洩れる筈がなかつた。——四百萬の市民が足を失つたことは、爭議發生の兩方の事情がたとひどうであれ、とにかく「喧嘩をしたかつたら、やらせて置け」で濟まされないことだけに、全東京は動脈瘤にかゝつた老人のやうに手足をケイレンさせて跪き出した。

新宿驛の前では、たつた一臺の電車が入つてくると、忽ち蟻の群のやうに群集がそれを取り卷いてしまつた。然し次の一臺は待つても待つても來ない。九時十分前にはどうしても會社へ出なければならない勤人が、人にもまれながら、しきりなしに時計を出してゐる。その顏が歪んで、舌打ちをしてゐた。

——飛んでもないことをする。爭議をやるのは勝手だが、他人の迷惑にならないやうにやつてくれ。

財布の輕い彼等は、何時もより眼ざはりに辷りくさつてゐる圓タクを眼の隅から見てゐた。身缺鰊のやうに省線電車に押し込まれて、さて、それが驛口からハキ出されても、彼等は何處へも行けずに、そのまゝウロ〳〵した。——心あるもの等はその時になつて初めて、あの運轉手や車掌たちがその「安い日給」とは不釣合ひにもとてつもなく、重大な仕事をしてゐたことに氣付いた。今迄誰もこんな簡單なことに氣付かなかつた。然し本當は氣付いたところで自分だけのことで一杯になつてゐる彼等にはそれツ切りのことでしかなかつた。

本所では、勞働者が城取りでもするやうに電車に飛びかゝつてゐた。そして磁石に吸はれた釘のやうにブラ下つたまゝ運ばれて行つた。——然しテツ〳〵と懸命に歩いてゐる勞働者の五六人はその電車をみると、ムキ出した鼻をひねつて、手洟をひツかけた。

——馬鹿野郎、裏切り電車に俺ラ同じ勞働者がおめ〳〵乘れるツかい。テクれ、この野郎!

二日それが續いた。三日目になつた。そして事態が全く笑談でなくなつた。で、青年團がユニフォームの腕に赤い布を卷いて、車臺に乘つた。有助ばかりでなく、誰も皆何か敵地に乘りこんでゆく選ばれた人達のやうな緊張と誇りを持つてゐた。乘り込んでくるどの人たちも感謝のまなざしを彼等に投げて行つた。

電氣局長はこの蟲ツけらのやうな青年團員の前で涙を流した。その思ひがけないことは有助たちを吃驚させ、興奮させ感激させた。俺達は飽迄も四百萬の市民のために働かなければならないと考へた。誰もさう考へたのだ。——慣れない彼等は大げさに云つて、「命を賭け」てゐた。三宅坂でブレーキを誤つて有助は前の電車の尻をのめしてしまつた。圓太郎に廻つた仲間はとう〳〵滅茶々々に車體をつぶした。その寫眞が次の日の新聞にさへ載つた。

處が、有助は二つの不愉快なことに出會つた。一つは彼の運轉してゐた電車が次の停留所の少し前を徐行してゐたときだつた。すれ〳〵に歩いてゐたあまり人相の良くない三人連れが急に眼をムキ出して彼をにらんだ。

——このスキャップ! 覺えてろ!

「スキャップ」? 彼はその時それがどんな意味か知らなかつた。が、後で分つたとき、彼はスーと自分の顏から血がひけるのを覺えた。

もう一つは、仕事を終つて新橋の驛から省線に乘らうとしたとき、足竝をそろへて罷業をしてゐるバスの女車掌が、いきなりビラを撒いて馳け出した。と、二人の洋服がパラ〳〵とその後を追つた。一人が女の肩に手をかけた 別な手が女の頰を力まかせで毆つてゐた。足が女の腰を蹴つた。女車掌の身體は二三間向う

へ仰向にひつくりかへされた。その上に二人の××が折り重つてしまつた。――有助は息をのんでゐた。それは見てゐられなかつた。ビラは、鐵道の從業員に同情罷業を訴へてゐた。「鐵道の皆さん……」そんな文句で始まつてゐた。然し、

――馬鹿なことをするもんだ。

次の日には有助は矢張り眞面目な青年團員だつた。誰かキット「後にゐるんだ。」それが今や恐ろしい勢ひで日本を風靡してゐる魔物であることが彼にはよく分つた。

3

有助の自動車が淺草橋を過ぎるときに、河向うの灯を見たと思つた。何んだか分らない狹い道をワケも分らずに引きずられたことを覺えてゐる。女の眼と頰と口が直接にムッとした匂ひを送つた。そして彼は斷髪のフサ〳〵した感觸を頰に樂しみながら、同じ床に眠つてゐた。それが玉ノ井だつた。

けれども、いかな有助も其處で飛んでもない運命が待つてゐたことを知らなかつた。勿論有助が誰とも分らないこの斷髪に向つても、市電の爭議のことを誇らかに話さずにゐるわけはない。ところが、斷髪はいきなり起き直つた。

――ぢや、妾たちがストライキを起したとしたらあんたは自分の妹さんを此處へ連れてきて、お代りさせること出來る？　同じ理窟でせう。

――何云つてるんだい。

だが、これは恐ろしい言草だ。それに斷髪はもつと恐ろしいことをしやべり出した。

今度の市電の爭議は、最初から市當局が右翼幹部の寢返りを豫定して、何んかすると直ぐ騷ぎたてる左翼分子の追ひ出しを計畫してのものだつたこと、その買收資金六萬圓がちアんと彼奴等に手渡しされてゐたこと、半纏を着てゐる寫眞で有名なダラ幹が××待合からベロン〳〵に醉拂つて出てきたこと、そして自動車の中で札ビラを切つて「この爭議の鍵を握つてゐるものはこの俺樣だ！」とタンカを切つたこと――之等の體裁を隱すために、市當局が逆に「四百萬の市民に訴へて」來たこと。その證據には、爭議が解決してから、何百人の首切りと前にもました貧窮のうちにやう〳〵に就職したとき、その裏切り幹部はマンマと六萬圓をせしめてゐる。

――あんたは成程お偉いお手傳をしたのネ。

前に有助がこの上もなく眞面目な、鐵棒のやうな堅ざうだと云つた。かういふ青年が自分のあらゆる熱意をもつてやつた仕事にハタと疑問をもつて打ち當つたときは、これは全く飛んでもないことになるといふことはよくある事である。彼はフイに眞ツ青になつてしまつた。それに、「玉ノ井」とか「龜戸」にこんな不義な女がひよいと居るものだといふことも、別にめづらしい事ではない。この女は有助にもつと〳〵詳しいことを話し出した。――で、全く飛んでもないことが、その夜明けに起つてしまつたのである。もう一度云つて置くが、有助は此上もなく機關車のやうに一本調子な堅ざうなのである、惡いことには、それに醉つてゐた。

その飛んでもない事と云ふのは、有助が青年團のユニフォームのまゝ便所の中で首を縊つてゐたことなのである。

＊　＊　＊　＊

こゝで作者が不器用な差出口をして置きたいが、――これは有助君一人のことではないですぞ！

――一九三〇・五・一七――

蟹工船

一

「おい地獄さ行ぐんだで！」

　二人はデッキの手すりに寄りかゝつて、蝸牛が背のびをしたやうに延びて、海を抱へ込んでゐる函館の街を見てゐた。――漁夫は指元まで吸ひつくした煙草を唾と一緒に捨てた。巻煙草はおどけたやうに色々にひつくりかへつて、高い船腹をすれ〲に落ちて行つた。彼は身體一杯酒臭かつた。

　赤い太鼓腹を幅廣く浮ばしてゐる汽船や、積荷最中らしく海の中から片袖をグイと引張られてでもゐるやうに、思ひツ切り片側に傾いてゐるのや、黄色い、太い煙突、大きな鈴のやうなヴイ、南京蟲のやうに船と船の間をせはしく縫つてゐるランチ、寒々とざわめいてゐる油煙やパン屑や腐つた果物の浮いてゐる何か特別な織物のやうな波……。風の工合で煙が波とすれ〲になびいて、ムッとする石炭の匂ひを送つた。ウインチのガラ〲といふ音が、時々波を傳つて直接に響いてきた。

　この蟹工船博光丸のすぐ手前に、ペンキの剝げた帆船が、へさきの牛の鼻穴のやうなところから、錨の鎖を下してゐた。甲板を、ドロス・パイプをくはへた外人が二人同じところを何度も機械人形のやうに、行つたり來たりしてゐるのが見えた。ロシアの船らしかつた。たしかに日本の「蟹工船」に對する監視船だつた。

「俺らもう一文も無え。――糞。こら。」

　さう云つて、身體をずらして寄こした。そしてもう一人の漁夫の手を握つて、自分の腰のところへ持つて行つた。半纏の下のコールテンのズボンのポケットに押しあてた。何か小さい箱らしかつた。

　一人は默つて、その漁夫の顏をみた。

「ヒヽヽヽ……」と笑つて、「花札よ。」と云つた。

　ボート・デッキで、「將軍」のやうな恰好をした船長が、ブラ〲しながら煙草をのんでゐる。はき出す煙が鼻先からすぐ急角度に折れて、ちぎれ飛んだ。底に木を打つた草履をひきずッて、食物バケツをさげた船員が急がしく「おもて」の船室を出入した。――用意はすつかり出來て、もう出るにいゝばかりになつてゐた。

　雜夫のゐるハッチを上から覗きこむと、薄暗い船底の棚に、巣から顏だけピョコ〲出す鳥のやうに、騷ぎ廻つてゐるのが見えた。皆十四五の少年ばかりだつた。

「お前は何處だ。」

「××町。」みんな同じだつた。函館の貧民窟の子供ばかりだつた。さういふのは、それだけで一かたまりをなしてゐた。

「あつちの棚は？」

「南部。」

「それは？」

「秋田。」

　それ等は各々棚をちがへてゐた。

「秋田の何處だ。」

　膿のやうな鼻をたらした、眼のふちがあかべをしたやうにたゞれてゐるのが、

「北秋田だんし。」と云つた。

「百姓か？」

「そんだし。」

　空氣がムンとして、何か果物でも腐つたすッぱい臭氣がしてゐた。漬物を何十樽も藏つてあ

る室がすぐ隣りだつたので、「糞」のやうな臭ひも交つてゐた。
「こんだ親父抱いて寢てやるど。」――漁夫がベラベラ笑つた。
　薄暗い隅の方で、半纏を着、股引をはいた、風呂敷を三角にかぶつた女出面らしい母親が、林檎の皮をむいて、棚に腹ん這ひになつてゐる子供に食はしてやつてゐた。子供の食ふのを見ながら、自分では剝いたぐる〳〵の輪になつた皮を食つてゐる。何かしやべつたり、子供のそばの小さい風呂敷包みを何度も解いたり、直してやつてゐた。さういふのが七、八人もゐた。誰も送つて來てくれるもののゐない内地から來た子供達は、時々そつちの方をぬすみ見るやうに、見てゐた。
　髮や身體がセメントの粉まみれになつてゐる女が、キャラメルの箱から二粒位づつ、その附近の子供達に分けてやりながら、
「うちの健吉と仲よく働いてやつてけれよ、な。」と云つてゐた、木の根のやうに不恰好に大きいザラ〳〵した手だつた。
　子供に鼻をかんでやつてゐるのや、手拭で顏をふいてやつてゐるのや、ボソ〳〵何か云つてゐるのや、あつた。
「お前さんどこの子供は、身體はえゝべものな。」
　母親同志だつた。
「ん、まあ。」
「俺どこのア、とても弱いんだ。どうすべかツて思ふんだども、何んしろ……。」
「それア何處でも、ね。」
　――二人の漁夫がハッチから甲板へ顏を出すと、ホッとした不機嫌に、急にだまり合つたまゝ雜夫の穴より、もつと船首の、梯形の自分達の「巣」に歸つた。錨を上げたり、下したりする度に、「コンクリート・ミキサの中に投げ込まれたやうに、皆は跳ね上り、ぶツつかり合はなければならなかつた。
　薄暗い中で、漁夫は豚のやうにゴロ〳〵してゐた。それに豚小屋そつくりの、胸がすぐゲエと來さうな臭ひがしてゐた。
「臭え、臭え。」
「そよ、俺たちだもの。えゝ加減、こつたら腐りかけた臭ひでもすべよ。」
　赤い臼のやうな頭をした漁夫が、一升瓶そのまゝで、酒を端のかけた茶碗に注いで、鯣をムシャ〳〵やりながら飲んでゐた。その横に仰向けにひつくり返つて、林檎を食ひながら、表紙のボロ〳〵した講談雜誌を見てゐるのがゐた。
　四人輪になつて飮んでゐたのに、まだ飮み足りなかつた一人が割り込んで行つた。
「……んだべよ。四ケ月も海の上だ。もう、これんかやれねべと思つて……」
　頑丈な身體をしたのが、さう云つて、厚い下唇を時々癖のやうに嘗めながら眼を細めた。
「んで、財布これさ。」
　干柿のやうなべつたりした薄い蟇口を眼の高さに振つてみせた。
「あの白首、身體こつたらに小せえくせに、とても上手えがつたどオ！」
「オイ、止せ、止せ！」
「えゝ、えゝ、やれ〳〵。」
　相手はへゝゝゝゝと笑つた。
「見れ、ほら、感心なもんだ。ん？」醉つた眼を丁度向ひ側の棚の下にすゑて、顎で、「ん！」と一人が云つた。
　漁夫がその女房に金を渡してゐるところだつた。
「見れ、見れ、なア！」
　小さい箱の上に、皺くちゃになつた札や銀貨を並べて、二人でそれを數へてゐた。男は小さ

い手帖に鉛筆をなめ〳〵、何か書いてゐた。
「見れ。ん！」
「俺にだつて嚊や子供はゐるんだで。」白首のことを話した漁夫が急に怒つたやうに云つた。
そこから少し離れた棚に、宿醉の青ぶくれにムクンだ顔をした、頭の前だけを長くした若い漁夫が
「俺アもう今度こそア船さ來ねえツて思つてたんだけれどもな。」と大聲で云つてゐた。「周旋屋に引つ張り廻されて、文無しになつてよ。又――、長えことくたばるめに合はされるんだ。」
こつちに背を見せてゐる同じ處から來てゐるらしい男が、それに何かヒソ〳〵云つてゐた。
ハッチの降口に初め鎌足を見せて、ゴロ〳〵する大きな昔風の信玄袋を擔つた男が、梯子を下りてきた。床に立つてキョロ〳〵見廻してゐたが、空いてゐるのを見付けると、棚に上つてきた。
「今日は。」と云つて、横の男に頭を下げた。顔が何かで染つたやうに、油じみて黑かつた。「仲間さ入れて貰えます。」
後で分つたことだが、この男は、船へ來るすぐ前まで夕張炭坑に七年も坑夫をしてゐた。それが此前のガス爆發で、危く死に損ねてから――前に何度かあつた事だが――フイと坑夫が恐ろしくなり鑛山を下りてしまつた。爆發の時、彼は同じ坑内にトロッコを押して働いてゐた。トロッコに一杯石炭を積んで、他の人の受持場まで押して行つた時だつた。彼は百のマグネシュムを瞬間眼の前でたかれたと思つた。それと、そして $\frac{1}{500}$ 秒もちがはず、自分の身體が紙ツ片のやうに何處かへ飛び上つたと思つた。何臺といふトロッコがガスの壓力で、眼の前を空のマッチ箱よりも輕くフッ飛んで行つた。それツ切り分らなかつた。どの位經つたか、自分のうなつた聲で眼が開いた。監督や工夫が爆發が他へ及ばないやうに、坑道に壁を作つてゐた。彼はその時壁の後から、助ければ助けることの出來る炭坑夫の、一度聞いたら心に縫ひ込まれでもするやうに、決して忘れることの出來ない、救ひを求める聲を「ハッキリ」聞いた。――彼は急に立ち上ると、氣が狂つたやうに、
「駄目だ、駄目だ！」と皆の中に飛びこんで、叫び出した。（彼は前の時は、自分でその壁を作つたことがあつた。そのときは何んでもなかつたのだつたが。）
「馬鹿野郎！　こゝさ火でも移つてみろ、大損だ。」
だが、だん〳〵聲の低くなつて行くのが分るではないか！　彼は何を思つたのか、手を振つたりわめいたりして、無茶苦茶に坑道を走り出した。何度ものめつたり、坑木に額を打ちつけた。全身ドロと血まみれになつた。途中、トロッコの枕木につまづいて、巴投げにでもされたやうに、レールの上にたゝきつけられて、又氣を失つてしまつた。
その事を聞いてゐた若い漁夫は
「さあ、こゝだつてさう大して變らないが…。」
と云つた。
彼は坑夫獨特な、まばゆいやうな、黃色ツぽく艶のない眼差を漁夫の上にぢつと置いて、默つてゐた。
秋田、青森、岩手から「百姓の漁夫」のうちでは、大きく安坐をかいて、兩手をはすかひに股に差しこんでムシッとしてゐるのや、膝を抱へこんで柱によりかゝりながら、無心に皆が酒を飲んでゐるのや、勝手にしやべり合つてゐるのに聞き入つてゐるのがある。――朝暗いうちから畑に出て、それで食へないで、追拂はれてくる者達だつた。長男一人を殘して――それでもまだ食へなかつた――女は工場の女工に、

次男も三男も何處かへ出て働かなければならない。鍋で豆をいるやうに、餘つた人間はドシドシ土地からハネ飛ばされて、市に流れて出てきた。彼等はみんな「金を殘して」內地に歸ることを考へてゐる。然し働いてきて、一度陸を踏む、するとモチを踏みつけた小鳥のやうに、函館や小樽でバタバタやる。さうすれば、まるツきり簡單に「生れた時」とちつとも變らない赤裸になつておつぽり出された。內地へ歸れなくなる。彼等は身寄りのない雪の北海道で、「越年」するために、自分の身體を手鼻位の値で「賣らなければならない。」——彼等はそれを何度繰りかへしても、出來の惡い子供のやうに、次の年には又平氣で(?)同じことをやつてのけた。

菓子折を背負つた沖賣の女や、藥屋、それに日用品を持つた商人が入つてきた。眞中の離島のやうに區切られてゐる所に、それぞれの品物を擴げた。皆は四方の棚の上下の寢床から身體を乘り出してひやかしたり、冗談を云つた。

「お菓子めえか、えゝ、ねつちやよ?」

「あッ、もッちよこい!」沖賣の女が頓狂な聲を出して、ハネ上つた。「人の尻さ手ばやつたりして、いけすかない、この男!」

菓子で口をモグモグさせてゐた男が、皆の視線が自分に集つたことにテレて、ゲラゲラ笑つた。

「この女子、可愛いな。」

便所から、片側の壁に片手をつきながら、危い足取りで歸つてきた醉拂ひが、通りすがりに、赤黑くプクンとしてゐる女の頰ぺたをつツついた。

「何んだね。」

「怒んなよ。——この女子ば抱いて寢てやるべよ。」

さう云つて、女におどけた恰好をした。皆が笑つた。

「おい饅頭、饅頭!」

ずウと隅の方から誰か大聲で叫んだ。

「ハアイ……」こんな處ではめづらしい女のよく透る澄んだ聲で返事をした。「幾ぼですか?」

「幾ぼ? 二つもあつたら不具だべよ。——お饅頭、お饅頭!」——急にワッと笑ひ聲が起つた。

「この前、竹田つて男が、あの沖賣の女ば無理矢理に誰もゐねえどこさ引つ張り込んで行つたんだとよ。んだけ、面白いんでないか。何んぼ、どうやつても駄目だつて云ふんだ……」醉つた若い男だつた。「……猿又はいてるんだとよ。竹田がいきなりそれを力一杯にさき取つてしまつたんだども、まだ下にはいてるツて云ふでねか。——三枚もはいてたとよ……。」男が頸を縮めて笑ひ出した。

その男は冬の間はゴム會社の職工だつた。春になり仕事が無くなると、カムサツカへ出稼ぎに出た。どつちの仕事も「季節勞働」なので(北海道の仕事は殆んどそれだつた。)イザ夜業となると、ブッ續けに續けられた。「もう三年も生きれたら有難い。」と云つてゐた。粗製ゴムのやうな死んだ色の膚をしてゐた。

漁夫の仲間には、北海道の奧地の開墾地や鐵道敷設の土工部屋へ「蛸」に賣られたことのあるもの、各地を食ひつめた「渡り者」や、酒だけ飲めば何もかもなく、たゞそれでいゝものなどがゐた。青森邊の善良な村長さんに選ばれてきた「何も知らない」「木の根ツこのやうに」正直な百姓もその中に交つてゐる。——そして、かういふてんでばらばらのもの等を集めることが、雇ふものにとつて、この上なく都合のいいことだつた。(函館の勞働組合は蟹工船、カムサツカ行の漁夫のなかに組織者を入れることに死物狂ひになつてゐた。青森、秋田の組合な

どとも連絡をとつて。――それを何より恐れてゐた。」

糊のついた眞白い、上衣の丈の短い服を着た給仕が、「とも」のサロンに、ビール、果物、洋酒のコップを持つて、忙しく往き來してゐた。サロンには、「會社のオッかない人、船長、監督、それにカムサッカで警備の任に當る驅逐艦の御大、水上警察の署長さん、海員組合の折鞄」がゐた。

「畜生、ガブ〳〵飲むつたら、ありやしない。」

――給仕はふくれかへつてゐた。

漁夫の「穴」に濱なすのやうな電氣がついた。煙草の煙や人いきれで、空氣が濁つて、臭く、穴全體がそのまゝ「糞壺」だつた。區切られた寢床にゴロ〳〵してゐる人間が、蛆蟲のやうにうごめいて見えた。――漁業監督を先頭に、船長、工場代表、雜夫長がハッチを下りて入つて來た。船長は先のハネ上つてゐる髭を氣にして、始終ハンカチで上唇を撫でつけた。通路には、林檎やバナヽの皮、グジョ〳〵した高丈、鞋、飯粒のこびりついてゐる薄皮などが捨ててあつた。流れの止つた泥溝だつた。監督はじろりそれを見ながら、無遠慮に唾をはいた。――どれも飲んで來たらしく、顏を赤くしてゐた。

「一寸云つて置く。」監督が土方の棒頭のやうに頑丈な身體で、片足を寢床の仕切りの上にかけて、楊枝で口をモグ〳〵させながら、時々齒にはさまつたものを、トッ〳〵と飛ばして、口を切つた。

「分つてるものもあるだらうが、云ふまでもなくこの蟹工船の事業は、たゞ單にだ、一會社の儲仕事と見るべきではなくて、國際上の一大問題なのだ。我々が――我々日本帝國人民が偉いか、露助が偉いか、一騎打ちの戰ひなんだ。それに若し、若しもだ、そんな事は絕對にあるべき筈がないが、負けるやうなことがあつたら、睾丸をブラ下げた日本男兒は腹でも切つて、カムサッカの海の中にブチ落ちることだ。身體が小さくたつて、野呂間な露助に負けてたまるもんぢやない。

それに、我カムサッカの漁業は蟹鑵詰ばかりでなく、鮭、鱒と共に、國際的に云つてだ、他の國とは比べもならない優秀な地位を保つて居り、又日本國內の行き詰つた人口問題、食料問題に對して重大な使命を持つてゐるのだ。こんな事をしやべつたつて、お前等には分りもしないだらうが、ともかくだ、日本帝國の大きな使命のために、俺達は命を的に、北海の荒波をつッ切つて行くのだといふことを知つてて貰はにやならない。だからこそ、あつちへ行つても始終我帝國の軍艦が我々を守つてゐてくれることになつてゐるのだ……それを今流行の露助の眞似をして、飛んでもないことをケシかけるものがあるとしたら、それこそ、取りも直さず日本帝國を賣るものだ。こんな事は無い筈だが、よッく覺えておいて貰ふことにする……。」

監督は醉ざめのくさめを何度もした。

醉拂つた驅逐艦の御大はバネ仕掛の人形のやうなギクシャクした足取りで、待たしてあるランチに乘るために、タラップを下りて行つた。水兵が上と下から、カントン袋に入れた石ころみたいな艦長を抱へて、殆んど持てあましてしまつた。手を振つたり、足をふんばつたり、勝手なことをわめく艦長のために、水兵は何度も眞正面から自分の顏に「唾」を吹きかけられた。

「表ぢや、何んとか、かんとか偉いこと云つて、この態なんだ。」

艦長をのせてしまつて、一人がタラップのをどり場からロープを外しながら、ちらつと艦長の方を見て、低い聲で云つた。

「やつちまふか!?……」
二人一寸息をのんだ、が……聲を合せて笑ひ出した。

二

祝津の燈臺が、廻轉する度にキラッ／＼と光るのが、ずウと遠い右手に、一面灰色の海のやうな海霧の中から見えた。それが他方へ廻轉してゆくとき、何か神秘的に、長く、遠く白銀色の光芒を何浬もサッと引いた。

留萌の沖あたりから、細い、チュク／＼した雨が降り出してきた。漁夫や雜夫は蟹の鋏のやうにかじかんだ手を時々はすがひ懷の中につッこんだり、口のあたりを兩手で圓く圍んで、ハアーと息をかけたりして働かなければならなかつた。――納豆の絲のやうな雨がしきりなしに、それと同じ色の不透明な海に降つた。が、稚内に近くなるに從つて、雨が粒々になつて來、廣い海の面が旗でもなびくやうに、うねりが出て來て、そして又それが細かくせはしくなつた。――風がマストに當ると不吉に鳴つた。鋲がゆるみでもするやうに、ギイ／＼と船の何處かが、しきりなしにきしんだ。宗谷海峽に入つた時は、三千噸に近いこの船が、しやつくりにでも取りつかれたやうに、ギク、シャクし出した。何か素晴らしい力でグイと持ち上げられる。船が一瞬間宙に浮ぶ。――が、ぐウと元の位置に沈む。エレヴエターで下りる瞬間の、小便がもれさうになる、くすぐつたい不快さをその度に感じた。雜夫は黃色になえて、船醉らしく眼だけとんがらせて、ゲエ、ゲエしてゐた。

波のしぶきで曇つた圓い舷窓からひよい／＼と樺太の、雪のある山並の堅い線が見え。然しすぐそれはガラスの外へ、アルプスの氷山のやうにモリ／＼とむくれ上つてくる波に隱されてしまふ、寒々とした深い谷が出來る。それが見る／＼近付いてくると、窓のところへドッと打ち當り、碎けて、ザアー……と泡立つ。そして、そのまゝ後へ、後へ、窓をすべつて、パノラマのやうに流れてゆく。船は時々子供がするやうに、身體を搖つた。棚からものが落ちる音や、ギーイと何かたわむ音や、波に横ッ腹がドブーンと打ち當る音がした。――その間中、機關室からは機關の音が色々な器具を傳つて、直接に少しの震動を伴つて、ドッ、ドッ、ドッ……と響いてゐた。時々波の背に乘ると、スクリュが空廻りをして、翼で水の表面をたゝきつけた。

風は益々強くなつてくるばかりだつた。二本のマストは釣竿のやうにたわんで、ビュウ／＼泣き出した。波は丸太棒の上でも一またぎする位の無造作で、船の片側から他の側へ暴力團のやうにあばれ込んできて、流れ出て行つた。その瞬間、出口がザアーと瀧になつた。

見る／＼もり上つた山の、恐ろしく大きな斜面へ玩具の船程に、ちよこんと横にのッかることがあつた。と、船はのめつたやうに、ドッ、ドッ、とその谷底へ落ちこんでゆく。今にも、沈む！ が、谷底にはすぐ別な波がむく／＼と起ち上つてきて、ドシンと船の横腹と體當りをする。

オホツク海へ出ると、海の色がハッキリもつと灰色がかつてきた。着物の上からゾク／＼と寒さが刺し込んできて、雜夫は皆唇をブシ色にして仕事をした。寒くなればなる程、鹽のやうに乾いた、細かい雪がビュウ、ビュウ吹きつのつてきた。それは硝子の細かいカケラの樣に甲板に這ひつくばつて働いてゐる雜夫や漁夫の顏や手に突きさゝつた。波が一波甲板を洗つて行つた後は、すぐ凍えて、デラ／＼に滑つた。皆はデッキからデッキへロープを張り、それに各

自がおしめのやうにブラ下り、作業をしなければならなかつた。——監督は鮭殺しの棍棒をもつて、大聲で怒鳴り散らした。

同時に函館を出帆した他の蟹工船は、何時の間にか離れ〱になつてしまつてゐた。それでも思ひッ切りアルプスの絶頂に乘り上つたとき、溺死者が兩手を振つてゐるやうに、搖られに搖られてゐる二本のマストだけが遠くに見えることがあつた。煙草の煙ほどの煙が、波とすれ〱に吹きちぎられて、飛んでゐた。……波浪と叫喚のなかから、確かにその船が鳴らしてゐるらしい汽笛が、間を置いてヒュウ、ヒュウと聞えた。が、次の瞬間、こつちがアプ、アプでもするやうに、谷底に轉落して行つた。

蟹工船には川崎船を八隻のせてゐた。船員も漁夫もそれを何千匹の鱶のやうに、白い齒をむいてくる波にもぎ取られないやうに、縛りつけるために、自分等の命を「安々」と賭けなければならなかつた。——「貴樣等の一人、二人が何んだ。川崎一艘取られてみろ、たまつたもんでないんだ」——監督は日本語でハッキリさう云つた。

カムサッカの海は、よくも來やがつた、と待ちかまへてゐたやうに見えた。ガツ、ガツに飢ゑてゐる獅子のやうに、えどなみかゝつてきた。船はまるで兎より、もつと弱々しかつた。空一面の吹雪は風の工合で、白い大きな旗がなびくやうに見えた。夜近くなつてきた。然し時化は止みさうもなかつた。

仕事が終ると皆は「糞壺」の中へ順々に入り込んできた。手や足は大根のやうに冷えて、感覺なく身體についてゐた。皆は蠶のやうに、各々の棚の中に入つてしまふと、誰も一口も口をきくものがゐなかつた。ゴロリ横になつて、鐵の支柱につかまつた。船は、背に食ひついてゐる虻を追拂ふ馬のやうに、身體をヤケに振つてゐる。漁夫はあてのない視線を白ペンキが黃色に煤けた天井にやつたり、殆んど海の中に入りッ切りになつてゐる青黑い圓窓にやつたり……中には、呆けたやうにキョトンと口を半開きにしてゐるものもゐた。誰も、何も考へてゐなかつた。漠然とした不安な自覺が、皆を不機嫌にだまらせてゐた。

顏を仰向けにして、グイとウイスキーをラッパ飲みにしてゐる。赤黃く濁つた、にぶい電燈のなかでチラッと瓶の角が光つてみえた。——ガラ、ガラッ、とウイスキーの空瓶が二、三ケ所に稻妻形に打ち當つて、棚から通路に力一杯に投げ出された。皆は頭だけをその方に向けて眼で瓶を追つた。——隅の方で誰か怒つた聲を出した。時化にとぎれて、それが片言のやうに聞えた。

「日本を離れるんだど。」圓窓を肱で拭つてゐる。

「糞壺」のストーヴはブス〱燻つてばかりゐた。鮭や鱒と間違はれて「冷凍庫」へ投げ込まれたやうに、その中で「生きてゐる」人間はガタガタ顫へてゐた。ズックで覆つたハッチの上をザア、ザアと波が大股に乘り越して行つた。それが、その度に太鼓の内部みたいな「糞壺」の鐵壁に、物凄い反響を起した。時々漁夫の寢てゐるすぐ横が、グイと男の强い肩でつかれたやうに、ドシンとくる。——今では、船は斷末魔の鯨が、荒狂ふ波濤の間に身體をのたうつてゐる、そのまゝだつた。

「飯だ！」賄がドアーから身體の上半分をつき出して、口で兩手を圍んで叫んだ。「時化てるから汁なし。」

「何んだつて？」

「腐れ鰮引！」顏をひつこめた。

思ひ、思ひ身體を起した。飯を食ふことには、皆は囚人のやうな執念さを持つてゐた。ガツガ

ッだつた。
　鹽引の皿を安坐をかいた股の間に置いて、湯氣をふきながら、バラ〱した熱い飯を頬ばると、舌の上でせはしく、あちこちへやつた。「初めて」熱いものを鼻先にもつてきたために、水洟がしきりなしに下つて、ひよいと飯の中に落ちさうになつた。
　飯を食つてゐると、監督が入つてきた。
「いけホイドして、ガツ〱まくらふな。仕事もろくに出來ない日に、飯は鱈腹食はれてたまるもんか。」
　ジロ〱棚の上下を見ながら、左肩だけを前の方へ搖つて出て行つた。
「一體あいつにあんな事を云ふ權利があるのか。」――船醉と過勞で、ゲツソリやせた學生上りがブツ〱云つた。
「淺川ツたら、蟹工の淺か、淺の蟹工かツてな。」
「×××は雲の上にゐるから、俺達にヤどうでもいゝんだけど、淺つてなれば、どつこいさうは行かないからな。」
　別な方から
「ケチ〱すんねえ、何んだ、飯の一杯、二杯！」
　脣を尖んがらした聲だつた。
「偉い〱。そいつを淺の前で云へればなほ偉い！」
　皆は仕方なく、腹を立てたまゝ、笑つてしまつた。
　夜、餘程過ぎてから、雨合羽を着　監督が、漁夫の寢てゐるところへ入つてきた。船の動搖を棚の枠につかまつて支へながら、一々漁夫の間にカンテラを差しつけて歩いた。南瓜のやうにゴロ〱してゐる頭を、無遠慮にグイ〱と向き直して、カンテラで照してみてゐた。フンづけられたつて眼を覺ます筈がなかつた。全部照し終ると、一寸立ち止まつて舌打ちをした。――どうしようか、そんな風だつた。が、すぐ次の賄部屋の方へ歩き出した。末廣な、青ツぽいカンテラの光が搖れる度にゴミ〱した棚の一部や脛の長い防水ゴム靴や、支柱に懸けてあるドザや、半纏それに行李などの一部分がチラ、チラツと光つて、消えた。――足元に光が顫へながら一瞬間溜ると、今度は賄のドアーに幻燈のやうな圓い光の輪を寫した。――次の朝になつて、雜夫の一人が行方不明になつたことが知れた。
　皆は前の日の「無茶な仕事」を思ひ、「あれぢや、波に浚はれたんだ。」と思つた。イヤな氣持がした。然し漁夫達が未明から追ひ廻されたので、そのことではお互話すことが出來なかつた。
「こつたら冷ツこい水さ、誰が好き好んで飛び込むつて！　隱れてやがるんだ。見付けたら、畜生、タヽキのめしてやるから！」
　監督は棍棒を玩具にグル〱廻しながら、船の中を探して歩いた。
　時化は頂上を過ぎてはゐた。それでも、船が行先きにもり上つた波に突き入ると、「おもて」の甲板を波は、自分の敷居でもまたぐやうに何んの造作もなく、乘り越してきた。一晝夜の鬪爭で、滿身に痛手を負つたやうに、船は何處か跛な音をたてて進んでゐた。薄い煙のやうな雲が、手が屆きさうな上をマストに打ち當りながら、急角度を切つて吹きとんで行つた。小寒い雨がまだ止んでゐなかつた。四圍にもり〱と波がムクレ上つてくると、海に射込む雨脚がハッキリ見えた。それは原始林の中に迷ひこんで、雨に會ふのよりもつと不氣味だつた。
　麻のロープが鐵管でも握るやうに、バリ、バリに凍えてゐる。學生上りが、すべる足元に氣を配りながら、それにつかまつて、デッキを渡つてゆくと、タラップの段々を一つ置きに片足

で跳躍して上つてきた給仕に會つた。

「チョッと。」給仕が風の當らない角に引張つて行つた。「面白いことがあるんだよ。」と云つて、話してきかせた。

――今朝の二時頃だつた。ボート・デッキの上まで波が躍り上つて、間を置いて、バジャバジャ、ザアッとそれが瀧のやうに流れてゐた。夜の闇の中で、波が歯をムキ出すのが時々青白く光つてみえた。時化のために皆寝ずにゐた。その時だつた。

船長室に無電係が周章てかけ込んできた。

「船長、大變です。S・O・Sです！」

「S・O・S？――何船だ？」

「秩父丸です。本船と並んで進んでゐたんです。」

「ボロ船だ、それア！」――淺川が雨合羽を着たまゝ、隅の方の椅子に大きく股を開いて、腰をかけてゐた。片方の靴の先だけを、小馬鹿にしたやうに、カタ〱動かしながら笑つた。「もつとも、どの船だつて、ボロ船だがな。」

「一刻と云へないやうです。」

「うん、それア大變だ。」

船長は舵機室に上るために、急いで、身支度もせずにドアーを開けようとした。然し、まだ開けないうちだつた。いきなり、淺川が船長の右肩をつかんだ。

「餘計な寄道せつて、誰が命令したんだ。」

誰が命令した？「船長」ではないか。――が、咄嗟のことで、船長は棒杭より、もつとキョトンとした。然し、すぐ彼は自分の立場を取り戻した。

「船長としてだ。」

「船長としてだ――ア？」船長の前に立ちはだかつた監督が、尻上りの侮辱した調子で抑へつけた。「おい、一體これア誰の船だんだ。會社が傭船してんだで、金を拂つて。ものを云へるのア會社代表の須田さんとこの俺だ。お前なんぞ、船長と云つてれや大きな顔してるが、糞場の紙位の價値もねえんだど。分つてるか。――あんなものにかゝはつてみろ、一週間もフイになるんだ。冗談ぢやない、一日でも遅れてみろ！　それに秩父丸には勿體ない程の保険がつけてあるんだ。ボロ船だ、沈んだらかへつて得するんだ。」

給仕は「今」恐ろしい喧嘩が！　と思つた。それが、それだけで濟む筈がない。だが（！）船長は咽喉へ綿でもつめられたやうに、立ちすくんでゐるではないか。給仕はこんな場合の船長を曾つて一度だつて見たことがなかつた。船長の云つたことが通らない？　馬鹿、そんな事が！　だが、それが起つてゐる。――給仕にはどうしても分らなかつた。

「人情味なんか柄でもなく持ち出して、國と國との大相撲がとれるか！」唇を思ひッ切りゆがめて唾をはいた。

無電室では受信機が時々小さい、青白い火花を出して、しきりなしになつてゐた。とにかく經過を見るために皆は無電室に行つた。

「ね、こんなに打つてゐるんです。――だんだん早くなりますね。」

係は自分の肩越しに覗き込んでゐる船長や監督に説明した。――皆は色々な器械のスウィッチやボタンの上を、係の指先があち、こち器用にすべるのを、それに縫ひつけられたやうに眼で追ひながら、思はず肩と顎根に力をこめて、ぢいつとしてゐた。

船の動搖の度に、腫物のやうに壁に取付けてある電燈が、明るくなつたり暗くなつたりした。横腹に思ひッ切り打ち當る波の音や、絶えずならしてゐる不吉な警笛が、風の工合で遠くなつたり、すぐ頭の上に近くなつたり、鐵の扉を隔てて聞えてゐた。

チイ――ヂイ――イと、長く尾を引いて、スパアクルが散つた。と、そこで、ピタリ音がとまつてしまつた。それが、その瞬間、皆の胸へドキリときた。係は周章てて、スウイッチをひねつたり、機械をせはしく動かしたりした。が、それッ切りだつた。もう打つて來ない。

係は身體をひねつて、廻轉椅子をぐるりとまはした。

「沈沒です！……。」

頭から受信器を外しながら、そして低い聲で云つた。「乘組員四百二十五人。最後なり。救助される見込なし。Ｓ・Ｏ・Ｓ、Ｓ・Ｏ・Ｓ、これが二、三度續いて、それで切れてしまひました。」

それを聞くと、船長は頸とカラアの間に手をつッこんで、息苦しさうに頭をゆすつて、頸をのばすやうにした。無意味な視線で、落着きなく四圍を見廻してから、ドアーの方へ身體を向けてしまつた。そして、ネクタイの結び目あたりを抑へた。――その船長は見ておられなかつた。

…………

學生上りは、「ウム、さうか！」と云つた。その話にひきつけられてゐた。――然し暗い氣持がして海に眼をそらした。海はまだ大うねりにうねり返つてゐた。水平線が見る間に足の下になるか、と思ふと、二、三分もしないうちに、谷から狹められた空を仰ぐやうに、下へ引きずりこまれてゐた。「本當に沈沒したかな。」獨言が出る。氣になつて仕方がなかつた。――同じやうに、ボロ船に乘つてゐる自分達のことが頭にくる。

――蟹工船はどれもボロ船だつた。勞働者が北オホツクの海で死ぬことなどは、丸ビルにゐる重役には、どうでもいゝ事だつた。資本主義がきまりきつた所だけの利潤では行き詰り、金利が下つて金がダブついてくると、「文字通り」どんな事でもするし、どんな所へでも、死物狂ひで血路を求め出してくる。そこへもつてきて、船一艘でマンマと何拾萬圓が手に入る蟹工船、――彼等の夢中になるのは無理がない。

蟹工船は「工船」（工場船）であつて、「航船」ではない。だから航海法は適用されなかつた。二十年の間も繋ぎッ放しになつて、沈沒させることしかどうにもならないヨロ〳〵な「梅毒患者」のやうな船が恥かしげもなく、上べだけの濃化粧をほどこされて、函館へ廻つてきた。日露戰爭で、「名譽にも」ビッコにされ、魚のハラワタのやうに放つて置かれた院船や運送が、幽靈よりも影のうすい姿を現はした。――少し蒸氣を強くすると、パイプが破れて、吹いた。露國の監視船に追はれて、スピードをかけると、（そんな時は何度もあつた。）船のどの部分もメリメリ鳴つて、今にもその一つ、一つがバラ〳〵に解れさうだつた。中風患者のやうに身體をふるはした。

然し、それでも全くかまはない。何故なら、日本帝國のためどんなものでも立ち上るべき「秋」だつたから。――それに、蟹工船は純然たる「工場」だつた。然し工場法の適用もうけてゐない。それでこれ位都合のいゝ、勝手に出來るところはなかつた。

利口な重役はこの仕事を「日本帝國のため」と結びつけてしまつた。嘘のやうな金が、そしてコッソリ重役の懷に入つてくる。彼は然しそれをモット確實なものにするために、「代議士」に出馬することを、自動車をドライヴしながら考へてゐる。――が、恐らく、それとカッキリ一分も異はない同じ時に、秩父丸の勞働者が、何千哩も離れた北の暗い海で、割れた硝子屑のやうに鋭い波と風に向つて死の戰ひを戰つてゐるのだ。

……學生上りは、「糞壺」の方へ、タラップを下りながら、考へてゐた。
「他人事ではないぞ。」
「糞壺」の梯子を下りると、すぐ突き當りに、誤字澤山で、

> 雜夫、宮口を發見せるものには、バット二つ、手拭一本を賞與としてくれるべし。
>
> 淺川監督

と、書いた紙が、糊代りに使つた飯粒のボコボコを見せて、貼らされてあつた。

三

霧雨が何日も上らない。それでボカされたカムサツカの沿線が、する〳〵と八ツ目鰻のやうに延びて見えた。
沖合四浬のところに、博光丸が錨を下した。——三浬までロシアの領海なので、それ以内に入ることは出來ない「ことになつてゐた。」
網さばきが終つて、何時からでも蟹漁が出來るやうに準備が出來た。カムサツカの夜明けは二時頃なので、漁夫達はすつかり身支度をし、股までのゴム靴をはいたまゝ、折箱の中に入つて、ゴロ寢をした。
周旋屋にだまされて、連れて來られた東京の學生上りは、こんな筈がなかつた、とブツ〳〵云つてゐた。
「獨り寢だなんて、ウマイ事云ひやがつて！」
「ちげえねえ、獨り寢さ、ゴロ寢だもの。」
學生は十七、八人來てゐた。六十圓を前借りすることに決めて、汽車賃、宿料、毛布、蒲團、それに周旋料を取られて、結局船へ來たときには、一人七、八圓の借金（！）になつてゐた。それが初めて分つたとき、貨幣だと思つて握つてゐたのが、枯葉であつたより、もつと彼等はキヨトンとしてしまつた。——初め、彼等は青鬼、赤鬼の中に取り巻かれた亡者のやうに、漁夫の中に一かたまりに固つてゐた。
函館を出帆してから、四日目ころから、毎日のボロ〳〵な飯と何時も同じ汁のために、學生は皆身體の工合を惡くしてしまつた。寢床に入つてから、膝を立ててお互に脛を指で押してゐた。何度も繰りかへして、その度に引つこんだとか、引つこまないとか、彼等の氣持は瞬間明るくなつたり、暗くなつたりした。脛をなでてみると、弱い電氣に觸れるやうに、しびれるのが二、三人出てきた。棚の端から兩足をブラ下げて、膝頭を掌刀で打つて、足が飛び上るか、どうかを試した。それに惡いことには、「通じ」が四日も五日も無くなつてゐた。學生の一人が醫者に通じ薬を貰ひに行つた。歸つてきた學生は、興奮から青い顔をしてゐた。——「そんないゝ、ぜいたくな薬なんて無いとよ。」
「んだべ。船醫なんてんなものよ。」側で聞いてゐた古い漁夫が云つた。
「何處の醫者も同じだよ。俺のゐたところの會社の醫者もんだつた。」——坊山の漁夫だつた。
皆がゴロ〳〵横になつてゐたとき、監督が入つてきた。
「皆、寢たか——一寸聞け。秩父丸が沈沒したつていふ無電か入つたんだ。生死の詳しいことは分らないさうだ。」脣をゆがめて、唾をチエツとはいた。癖だつた。
學生は給仕からきいたことが、すぐ頭にきた。自分が現に手をかけて殺した四、五百人の勞働者の生命のことを、平氣な顔で云ふ、海にタヽキ込んでやつても足りない奴だ、と思つた。皆はムク〳〵頭をあげた。急に、ザワ〳〵お互に話し出した。淺川はそれだけ云ふと、左肩だけを前の方に振つて出て行つた。

行方の分らなかつた雜夫が、二日前にボイラの側から出てきた所をつかまつた。二日隱れてゐたけれども、腹が減つて、腹が減つてどうにも出來ず、出てきたのだつた。捕んだのは中年過ぎの漁夫だつた。若い漁夫がその漁夫をなぐりつけると云つて、怒つた。

「うるさい奴だ。煙草のみでもないのに、煙草の味が分るか。」バットを二個手に入れた漁夫はうまさうに飲んでゐた。

雜夫は監督にシャツ一枚にされると、二つあるうちの一つの方の便所に押し込まれて、表から錠を下ろされた。初め、皆は便所へ行くのを嫌つた。隣りで泣きわめく聲が、とても聞いてゐられなかつた。二日目にはその聲がかすれて、ヒエ、ヒエしてゐた。そして、そのわめきが間を置くやうになつた。その日の終り頃に、仕事を終つた漁夫が、氣掛りで直ぐ便所のところへ行つたが、もうドアーを内側から叩きつける音もしてゐなかつた。こつちから合圖をしても、それが返つて來なかつた。――その遲く、睾隱しに片手をもたれかけて、便所紙の箱に頭を入れ、うつぶせに倒れてゐた宮口が、出されてきた。脣の色が青インキをつけたやうに、ハッキリ死んでゐた。

朝は寒かつた。明るくなつてはゐたが、まだ三時だつた。かじかんだ手を懷につッこみながら、背を圓くして起き上つてきた監督は雜夫や漁夫、水夫、火夫の室まで見廻つて歩いて、風邪をひいてゐるものも、病氣のものも、かまはず引きずり出した。

風は無かつたが、甲板で仕事をしてゐると、手と足の先きが擂木のやうに感覺が無くなつた。雜夫長が大聲で惡態をつきながら、十四、五人の雜夫を工場に追ひこんでゐた。彼の持つてゐる竹の先きには皮がついてゐた。それは工場で怠けてゐるものを機械の枠越しに、向う側でもなぐりつけることが出來るやうに造られてゐた。

「昨夜出されたきりで、ものも云へない宮口を今朝からどうしても働かさなけアならないつて、さつき足で蹴つてるんだよ。」

學生上りになじんでゐる弱々しい身體の漁夫が、漁夫長の顏を見い、見いそのことを知らせた。「どうしても動かないんで、たうとうあきらめたらしいんだけど。」

其處へ監督が身體をワク／＼ふるはせてゐる雜夫を後からグイ／＼突きながら、押してきた。――寒い雨に濡れながら仕事をさせられたために、その雜夫は風邪をひき、それから肋膜を惡くしてゐた。寒くないときでも、始終身體をふるはしてゐた。子供らしくない皺を眉の間に刻んで、血の氣のない薄い脣を妙にゆがめて、癇のピリ／＼してゐるやうな眼差しをしてゐた。彼が寒さに堪へられなくなつて、ボイラーの室にウロ／＼してゐたところを、見付けられたのだつた。

出漁のために、川崎船をウインチから降してゐた漁夫達は、その二人を何も云へず、見送つてゐた。四十位の漁夫は見てゐられないといふ風に、顏をそむけると、イヤ／＼をするやうに頭をゆる／＼二三度振つた。

「風邪をひいてもらつたり、不貞寢をされてもらつたりするために、高い金拂つて連れて來たんぢやないんだぜ。――馬鹿野郎、餘計なものを見なくたつていゝ！」

監督が甲板を棍棒で叩いた。

「監獄だつて、これより惡かつたら、お目にかからないで！」

「こんなこと内地さ歸つて、なんぼ話したつて本當にしねんだ。」

「んさ。――こつたら事つて第一あるか。」

スティムでウインチがガラ／＼廻り出した。

川崎船は身體を空にゆすりながら、一齊に降り始めた。水夫や火夫も獨り立てられて、甲板のすべる足元に氣を配りながら、走り廻つてゐた。それ等のなかを監督は鷄冠を立てた牡鷄のやうに見廻つた。

仕事が切れ目が出來たので、學生上りが一寸の間風を避けて、荷物のかげに腰を下してゐると、炭山から來た漁夫が口のまはりに兩手を圓く圍んで、ハア、ハア息をかけながら、ひよいと角を曲つてきた。

「生命的だな！」それが――心からフイと出た實感が思はず學生の胸を衝いた。「やつぱし炭山と變らないで。死ぬ思ひばしないと、生きられないなんてな。――瓦斯で恐ッかねど、波もおつかねしな。」

晝過ぎから、空の模樣がどこか變つてきた。薄い海霧が一面に――然しさうでないと云はれれば、さうとも思はれる程、淡くかゝつた。波は風呂敷でもつまみ上げたやうに、無數に三角形に鷲ぎ立つた。風が急にマストを鳴らして吹いて行つた。荷物にかけてあるズックの覆ひの裾がバタ〳〵とデッキをたゝいた。

「兎が飛ぶどオ――兎が！」誰か大聲で叫んで、右舷のデッキを走つて行つた。その聲が強い風にすぐちぎり取られて、意味のない叫び聲のやうに聞えた。

もう海一面、三角波の頂きが白いしぶきを飛ばして、無數の兎が恰も大平原を飛び上つてゐるやうだつた。――それがカムサツカの「突風」の前ブレだつた。にはかに底潮の流れが早くなつてくる。船が横に身體をずらし始めた。今迄右舷に見えてゐたカムサツカが、分らないうちに左舷になつてゐた。――船に居殘つて仕事をしてゐた漁夫や水夫は急に周章て出した。

すぐ頭の上で、警笛が鳴り出した。皆は立ち止つたまゝ、空を仰いだ。すぐ下にゐるせゐか、斜め後に突き出てゐる、思はない程太い、湯桶のやうな煙突が、ユキ〳〵と搖れてゐた。その煙突の腹の獨逸帽のやうなホイッスルから鳴る警笛が、荒れ狂つてゐる暴風の中で、何か悲壯に聞えた。――遠く本船を離れて、漁に出てゐる川崎船が絶え間なく鳴らされてゐるこの警笛を頼りに、時化をおかして歸つてくるのだつた。

薄暗い機關室への降り口で、漁夫と水夫が固り合つて騷いでゐた。斜め上から船の動搖の度に、チラ〳〵薄い光の束が洩れてゐた。興奮した漁夫の色々な顏が、瞬間々々、浮き出て、消えた。

「どうした？」坑夫がその中に入り込んだ。

「淺川の野郎ば、なぐり殺すんだ！」殺氣だつてゐた。

監督は實は今朝早く、本船から十哩ほど離れたところに碇つてゐた××丸から「突風」の警戒報を受取つてゐた。それには若し川崎船が出てゐたら、至急呼戻すやうにさへ附け加へてゐた。その時「こんな事に一々ビク、ビクしてゐたら、このカムサツカまでワザ、ワザ來て仕事なんか出來るかい。」――さう淺川の云つたことが、無線係から洩れた。

それを聞いた最初の漁夫は、無電係が淺川ででもあるやうに、怒鳴りつけた。「人の命を何んだつて思つてやがるんだ！」

「人間の命？」

「さうよ。」

「所が、淺川はお前達をどだい人間だなんて思つてゐないよ。」

何か云はうとした漁夫は吃つてしまつた。彼は眞赤になつた。そして皆のところへかけ込んできたのだつた。

皆は暗い顏に、然し爭はれず底からヂリ、ヂリ來る興奮をうかべて、立ちつくしてゐた。父

親が川崎船で出てゐる雜夫が、漁夫達の集つてゐる輪の外をオド〳〵してゐた。ステイが絶え間なしに鳴つてゐた。頭の上で鳴るそれを聞いてゐると、漁夫の心はギリ、ギリと切り苛まれた。

夕方近くブリッヂから大きな叫聲が起つた。下にゐた者達はタラップの段を二つ置き位にかけ上つた。――川崎船が二隻近づいてきたのだつた。二隻はお互にロープを渡して結び合つてゐた。

それは間近に來てゐた。然し大きな波は、川崎船と本船を、ガタンコの兩端にのせたやうに、交互に激しく搖り上げたり、搖り下げたりした。次ぎ、次ぎと二つの間に波の大きなうねりがもり上つてローリングした。眼の前にゐて、なか〳〵近付かない。――歯がゆかつた。甲板からはロープが投げられた。が、とゞかなかつた。それは無駄なしぶきを散らして、海へ落ちた。そしてロープは海蛇のやうに、たぐり寄せられた。それが何度もくり返された。こつちからは皆聲をそろへて呼んだ。が、それには答へなかつた。漁夫の顔の表情はマスクのやうに化石して、動かない。眼も何かを見た瞬間そのまゝに硬ばつたやうに動かない。――その情景は、漁夫達の胸を、眼のあたり見てゐられない凄さで、ゑぐり刻んだ。

又ロープが投げられた。初めゼンマイ形に――それから鰻のやうにロープの先きがのびたかと――思ふと――その端が、それを捕へようと兩手をあげてゐる漁夫の首根を、横なぐりにたゝきつけた。皆は「アッ！」と叫んだ。漁夫はいきなり、そのまゝの恰好で横倒しにされた。が、つかんだ！――ロープはキリ〳〵としまると、水のしたゝりをしぼり落して、一直線に張つた。こつちで見てゐた漁夫達は思はず肩から力を抜いた。

シテイは絶え間なく、風の工合で、高くなつたり、遠くなつたり鳴つてゐた。夕方になる迄に二艘を殘して、それでも全部歸つてくることが出來た。どの漁夫も本船のデッキを踏むと、それッきり氣を失ひかけた。一艘は水船になつてしまつたために、錨を投げ込んで、漁夫が別の川崎に移つて、歸つてきた。他の一艘は漁夫共に全然行方不明だつた。

監督はブリ〳〵してゐた。何度も漁夫の室へ降りて來て、又上つて行つた。皆は燒き殺すやうな憎惡に滿ちた視線で、だまつて、その度に見送つた。

翌日、川崎の搜索かた〴〵、蟹の後を追つて、本船が移動することになつた。「人間の五、六匹何んでもないけれども、川崎がいたまし」かつたからだつた。

朝早くから、機關部が急がしかつた。錨を上げる震動が、錨室と背中合せになつてゐる漁夫を煎豆のやうにハネ飛ばした。サイドの鐵板がボロ〳〵になつて、その度にこぼれ落ちた。――博光丸は北緯五十一度五分の所まで、錨をなげてきた第一號川崎船を搜索した。結氷の碎片が生きもののやうに、ゆるい波のうねりの間々に、ひよい〳〵身體を見せて流れてゐた。が、所々、その碎けた氷が見る限りの大きな集團をなして、あぶくを出しながら、船を見る〳〵うちに眞中に取り圍んでしまふ、そんなことがあつた。氷は湯氣のやうな水蒸氣をたててゐた。と、旋風機にでも吹かれるやうに「寒氣」が襲つてきた。船のあらゆる部分が急にカリッ、カリッと鳴り出すと、水に濡れてゐた甲板や手すりに、氷が張つてしまつた。船腹は白粉でもふりかけたやうに、霜の結晶でキラ〳〵に光つた。水夫や漁夫は兩頰を抑へながら、甲板を走つた。船は後に長く、曠野の一本道のやうな

跡をのこして、つき進んだ。
　川崎船はなか／＼見つからない。
　九時近い頃になつて、ブリッヂから、前方に川崎船が一艘浮かんでゐるのを發見した。それが分ると、監督は「畜生、やつと分りやがつたど。畜生！」デッキを走つて歩いて、喜んだ。すぐ發動機が降された。が、それは探してゐた第一號ではなかつた。それよりは、もつと新らしい第36號と番號の打たれてあるものだつた。明かに×××丸のものらしい鐵の浮標がつけられてゐた。それで見ると×××丸〃何處かへ移動する時に、元の位置を知るために、さうして置いて行つたものだつた。
　淺川は川崎船の胴體を指先きで、トン／＼たたいてゐた。
「これアどうしてバンとしたもんだ。」ニヤッと笑つた。「引いて行くんだ。」
　そして第36號川崎船はウインチで、博光丸のブリッヂに引きあげられた。川崎は身體を空でゆすりながら、雫をバジャ／＼甲板に落した。「一働きをしてきた。」そんな大樣な態度で、釣り上つて行く川崎を見ながら、監督が、
「大したもんだ。大したもんだ！」と、獨言した。

　網さばきをやりながら、漁夫がそれを見てゐた。「何んだ泥棒猫！　チエンでも切れて、野郎の頭さたゝき落ちればえんだ。」
　監督は仕事をしてゐる彼等の一人々々を、そこから何かゑぐり出すやうな眼付きで、見下しながら側を通つて行つた。そして大工をせつかちなドラ聲で呼んだ。
　すると、別な方のハッチの口から、大工が顏を出した。
「何んです。」
　見當外れをした監督は、振り返ると怒りッぽく、「何んです？――馬鹿、番號をけづるんだ。カンナ、カンナ。」
　大工は分らない顏をした。
「あんぽんたん、來い！」
　肩幅の廣い監督のあとから、鋸の柄を腰にさして、カンナを持つた小柄な大工が、びつこでも引いてゐるやうな危い足取で、甲板を渡つて行つた。――川崎船の第36號の「3」がカンナでけづり落されて、「第六號川崎船」になつてしまつた。
「これでよし。これでよし。うツはア、樣見やがれ！」監督は、口を三角形にゆがめると、脊のびでもするやうに哄笑した。

　これ以上北航しても、川崎船を發見する當がなかつた。第三十六號川崎船の引上げで足ぶみをしてゐた船は、元の位置に戻るために、ゆるく、大きくカーヴをし始めた。空は晴れ上つて、洗はれた後のやうに澄んでゐた。カムサツカの連峯が繪葉書で見るスイッツルの山々のやうに、くつきりと輝いてゐた。
　行方不明になつた川崎船は歸らない。漁夫達は、そこだけが水溜のやうにポツンと空いた棚から、殘して行つた彼等の荷物や、家族のゐる住所をしらべたり、それ／＼萬一の時に直ぐ處置が出來るやうに取り纏めた。――氣持のいゝことではなかつた。それをしてゐると、漁夫達は、まるで自分の痛い何處かを、覗きこまれてゐるやうなつらさを感じた。
　中積船が來たら託送しようと、同じ苗字の女名前がその宛先きになつてゐる小包や手紙が、彼等の荷物の中から出てきた。そのうちの一人の荷物の中から、片假名と平假名の交つた、鉛筆をなめり、なめり書いた手紙が出た。それが武骨な漁夫の手から、手へ渡されて行つた。彼等は豆粒でも拾ふやうにポツリ、ポツリ、然しむさぼるやうに、それを讀んでしまふと、嫌な

ものを見てしまつたといふ風に頭をふつて、次ぎに渡してやつた。——子供からの手紙だつた。

　ぐずりと鼻をならして、手紙から顔を上げると、カス〱した低い聲で、「淺川のためだ。死んだと分つたら、弔ひ合戰をやるんだ。」と云つた。その男は圖體の大きい、北海道の奥地で色々なことをやつてきたといふ男だつた。もつと低い聲で、

奴、一人位タヽキ落せるべよ。」若い、肩のもり上つた漁夫が云つた。

「あ、この手紙いけねえ。すつかり思ひ出してしまつた。」

「なア、」最初のが云つた。「うつかりしてゐれば、俺達だつて奴にやられるんだで。他人ごとでねえんだど。」

　隅の方で、立膝をして、拇指の爪をかみながら、上眼をつかつて、皆の云ふのを聞いてゐた男が、その時、うん、うんと頭をふつて、うなづいた。「萬事、俺にまかせれ、その時ア！　あの野郎一人グイとやつてしまふから。」

　皆はだまつた。だまつたまゝ、然し、ホッとした。

博光丸が元の位置に歸つてから、三日して突然(！)その行方不明になつた川崎船が、しかも元氣よく歸つてきた。

　彼等は船長室から「糞壺」に歸つてくると、忽ち皆に、渦巻のやうに取巻かれてしまつた。

　——彼等は「大暴風雨」のために、一たまりもなく操縱の自由をなくしてしまつた。さうなればもう襟首をつかまれた子供より他愛なかつた。一番遠くに出てゐたし、それに風の工合も丁度反對の方向だつた。皆は死ぬことを覺悟した。漁夫は何時でも「安々」と死ぬ覺悟をすることに「慣らされて」ゐた。

　が(！)こんなことは滅多にあるものではない。次の朝、川崎船は半分水船になつたまゝ、カムサッカの岸に打ち上げられてゐた。そして皆は近所のロシア人に救はれたのだつた。

　そのロシア人の家族は四人暮しだつた。女がゐたり、子供がゐたりする「家」といふものに渇してゐた彼等にとつて、其處は何んとも云へない魅力だつた。それに親切な人達ばかりで、色々と進んで世話をしてくれた。然し、初め皆はやつぱり、分らない言葉を云つたり、髪の毛や眼の色の異ふ外國人であるといふことが無氣味だつた。

　何アんだ、俺達と同じ人間ではないか、といふことが、然し直ぐ分らされた。

　難破のことが知れると、村の人達が澤山集つてきた。そこは日本の漁場などがある所とは餘程離れてゐた。

　彼等は其處に二日ゐて、身體を直し、そして歸つてきたのだつた。「歸つてきたくはなかつた。」誰がこんな地獄に歸りたいつて！　が、彼等の話は、それだけで終つてはゐない。「面白いことが、その外にかくされてゐた。

　丁度歸る日だつた。彼等がストーヴの周りで、身支度をしながら話をしてゐると、ロシア人が四、五人入つてきた。——中に支那人が一人交つてゐた。——顏が巨きくて、赤い、短い鬚の多い、少し猫背の男が、いきなり何か大聲で手振りをして話し出した。船頭は、自分達がロシア語は分らないのだといふ事を知らせるために、眼の前で手を振つて見せた。ロシア人が一句切り云ふと、その口元を見てゐた支那人は日本語をしやべり出した。それは聞いてゐる方の頭が、かへつてごちや〱になつてしまふやうな、順序の狂つた日本語だつた。言葉と言葉が醉拂ひのやうに、散り〱によろめいてゐた。

「貴方方、金キット持つてゐない。」
「さうだ。」
「貴方方、貧乏人。」
「だから、貴方方、プロレタリア。――分る？」
「うん。」
ロシア人が笑ひながら、その邊を歩き出した。時々立ち止つて、彼等の方を見た。
「金持、貴方方をこれする。（首を締める恰好をする。）金持だん〳〵大きくなる。（腹のふくれる眞似。）貴方方どうしても駄目、貧乏人になる。――分る？――日本の國、駄目。働く人、これ。（顏をしかめて、病人のやうな恰好）働かない人、これ。えへん、えへん。（威張つて歩いてみせる。）」
それ等が若い漁夫には面白かつた。「さうだ、さうだ！」と云つて、笑ひ出した。
「働く人、これ。働かない人、これ。（前のを繰り返して。）そんなの駄目。働く人、これ。（今度は逆に、胸を張つて威張つてみせる。）働かない人、これ。（年取つた乞食のやうな恰好。）これ良ろし。――分る？ ロシアの國、この國。働く人ばかり。働く人ばかり、これ。（威張る。）ロシア、働かない人ゐない。ずるい人ゐない。人の首しめる人ゐない。――分る？ ロシアちつとも恐ろしくない國。みんな〳〵ウソばかり云つて歩く。」
彼等は漠然と、これが「恐ろしい」「赤化」といふものではないだらうか、と考へた。が、それが「赤化」なら、馬鹿に「當り前」のことであるやうな氣が一方してゐた。然し何よりグイ、グイと引きつけられて行つた。
「分る、本當、分る！」
ロシア人同士が二、三人ガヤ〳〵何かしやべり出した。支那人はそれ等をきいてゐた。それから又吃りのやうに、日本の言葉を一つ、一つ拾ひながら、話した。
「働かないで、お金儲ける人ゐる。プロレタリア、いつでも、これ。（首をしめられる恰好。）――これ駄目！ プロレタリア、貴方方一人、二人、三人……百人、千人、五萬人、十萬人、みんな、みんな、これ。（子供のお手々つないでゝの眞似をしてみせる。）強くなる。大丈夫。（腕をたゝいて。）負けない。誰にも。分る？」
「ん、ん！」
「働かない人、にげる。（一散に逃げる恰好。）大丈夫、本當。働く人、プロレタリア、威張る。（堂々と歩いてみせる。）プロレタリア、一番偉い。――プロレタリア居ない。みんな、パン無い。みんな死ぬ。――分る？」
「ん、ん！」
「日本、まだ、まだ駄目、働く人、これ。（腰をかゞめて、縮こまつてみせる。）働かない人、これ。（威張つて、相手をなぐり倒す恰好。）それ、みんな駄目！――働く人、これ。（形相凄く立ち上る。突つかゝつて行く恰好。相手をなぐり倒し、フンづける眞似。）働かない人、これ。（逃げる恰好。）――日本、働く人ばかり。いゝ國。――プロレタリアの國！――分る？」
「ん、ん、分る！」
ロシア人が奇聲をあげて、ダンスの時のやうな足ぶみをした。
「日本、働く人、やる。（立ち上つて刃向ふ恰好。）うれしい。ロシア、みんな嬉しい。バンザイ――貴方方、船へかへる。貴方方の船、働かない人、これ。（威張る。）貴方方、プロレタリア、これ、やる！（拳鬪のやうな眞似――それからお手々つないでをやり、又突つかゝつて行く恰好。）大丈夫、勝つ！――分る？」
「分る！」知らないうちに興奮してゐた若い漁夫が、いきなり支那人の手を握つた。「やるよ、キットやるよ！」

船頭は、これが「赤化」だと思つてゐた、馬鹿に恐ろしいことをやらせるものだ。これで――！この手で、露西亜が日本をマンマと騙すんだと思つた。

ロシア人達は終ると、何か叫聲をあげて、彼等の手を力一杯握つた。抱きついて、硬い毛の頬をすりつけたりした。面喰つた日本人は、首を後に硬直さして、どうしていゝか分らなかつた……。

皆は「糞壺」の入口に時々眼をやり、その話をもつと〳〵うながした。彼等は、それから見てきたロシア人のことを色々話した。そのどれもが、吸取紙に吸はれるやうに、皆の心に入りこんだ。

「おい、もう止せよ。」

船頭は、皆が變にムキにその話に引き入れられてゐるのを見て、一生懸命しやべつてゐる若い漁夫の肩を突ツついた。

四

靄が下りてゐた。何時も厳しく機械的に組合はさつてゐる通風パイプ、煙筒、ウインチの腕、吊り下つてゐる川崎船、デッキの手すり、などが、薄ぼんやり輪郭をぼかして、今迄にない親しみをもつて見えてゐた。柔かい、生ぬるい空氣が、頬を撫でて流れる。――こんな夜はめづらしかつた。

トモのハッチに近く、蟹の腦味噌の匂ひがムッとくる、網が山のやうに積まさつてゐる間に、高さの跛な二つの影が佇んでゐた。

過勞から心臓を惡くして、身體が青黄色く、ムクンでゐる漁夫が、ドキッ〳〵とくる心臓の音でどうしても寝れず、甲板に上つてきた。手すりにもたれて、フ糊でも溶かしたやうにトロッとしてゐる海を、ぼんやり見てゐた。この身體では監督に殺される。然し、それにして、この遠いカムサツカで、しかも陸も踏めずに死ぬのは淋し過ぎる。――すぐ考へ込まされた。その時、網と網の間に、誰かゐるのに漁夫が氣付いた。

蟹の甲羅の片を時々ふむらしく、その音がした。

ひそめた聲が聞えてきた。

漁夫の眼が慣れてくると、それが分つてきた。十四、五の雑夫に漁夫が何か云つてゐるのだつた。何を話してゐるのかは分らなかつた。後向きになつてゐる雑夫は、時々イヤ、イヤ、イヤをしてゐる子供のやうに、すねてゐるやうに、向きをかへてゐた。それにつれて、漁夫もその通り向きをかへた。それが少しの間續いた。漁夫は思はず（そんな風だつた。）高い聲を出した。が、すぐ、低く早口に何か云つた。と、いきなり雑夫を×××××しまつた。喧嘩だナと思つた。着物で口を抑へられた「むふ、むふ……」といふ息聲だけが、一寸の間聞えてゐた。然し、そのまゝ動かなくなつた。――その瞬間だつた。柔かい靄の中に、雑夫の×がローソクのやうに浮かんだ。と、××××、すつかり×になつてしまつてゐる。それから雑夫はそのまゝ蹲んだ。と、×××、××××××××××××た。それだけが「眼の前」で、短い――グッと咽喉につかへる瞬間に行はれた。見てゐた漁夫は、思はず眼をそらした。醉はされたやうな、撲られたやうな興奮をワク〳〵と感じた。

漁夫達はだん〳〵内からむくれ上つてくる性慾に惱まされ出してきた。四ケ月も、五ケ月も不自然に、この頑丈な男達が「女」から離されてゐた。――函館で買つた女の話や、××××××の話が夜になると、きまつて出た。一枚の××がボサ〳〵に紙に毛が立つほど、何度も何度もグル〳〵廻された。

…………………

××××

×××××××

××××

××××××

×××××

×××、、、×××××××××

誰か歌つた。すると、一度で、その歌が海綿にでも吸はれるやうに、皆に覺えられてしまつた。何かすると、すぐそれを歌ひ出した。そして歌つてしまつてから、「えッ、畜生！」と、ヤケに叫んだ、眼だけ光らせて。

漁夫達は寢てしまつてから、

「畜生、困つた！　どうしたつて眠れないや。」と、身體をゴロ〳〵させた。「駄目だ、×××××！」

「どうしたら、えゝんだ！」――終ひに、さう云つて、××××××××××××ながら、裸で起き上つてきた。大きな身體の漁夫の、さうするのを見ると、身體のしまる、何か凄慘な氣さへした。度膽を拔かれた學生は、眼だけで隅の方から、それを見てゐた。

××をするのが何人もゐた。誰もゐない時、×××××なつて××をするものもゐた。――柵の隅に、××××、汚れた猿又や褌が、しめつぽく、すえた臭ひをして圓められてゐた。學生はそれを野糞のやうに踏みつけることがあつた。

――それから、雜夫の方へ「×××」が始まつた。バットをキャラメルに換へて、ポケットに二つ三つ入れると、ハッチを出て行つた。

便所臭い、漬物樽の積まさつてゐる物置を、コックが開けると、薄暗い、ムッとする中から、いきなり横ッ面でもなぐられるやうに、怒鳴られた。

「閉めろッ！　今、入つてくると、この野郎、タヽキ殺すぞ！」

×　×　×

無電係が、他船の交換してゐる無電を聞いて、その收獲を一々監督に知らせた。それで見ると、本船がどうしても負けてゐるらしい事が分つてきた。――監督がアセリ出した。すると、テキ面にそのことが何倍かの強さになつて、漁夫や雜夫に打ち當つてきた。――何時でも、そして、何んでもドン詰りの引受所が「彼等だけだつた。監督や雜夫長はわざと「船員」と「漁夫、雜夫」との間に、仕事の上で競爭させるやうに仕組んだ。

同じ蟹つぶしをしてゐながら、「船員に負けた」となると、(自分の儲けになる仕事でもないのに、)漁夫や雜夫は「何に糞ッ！」といふ氣になる。監督は「手を打つて」喜んだ。今日勝つた、今日負けた、今度こそ負けるもんか――血の滲むやうな日が滅茶苦茶に續く。同じ日のうちに、今迄より五、六割も殖えてゐた。然し五日、六日になると、兩方とも氣拔けのしたやうに、仕事の高がズシ、ズシ減つて行つた。仕事をしながら、時々ガクリと頭を前に落した。監督はものも云はないで、なぐりつけた。不意を喰つて、彼等は自分でも思ひがけない悲鳴を「キャッ！」とあげた。――皆は敵同志か、言葉を忘れてしまつた人のやうに、お互にだまりこくつて働いた。ものを云ふだけのぜいたくな「餘分」さへ殘つてゐなかつた。

監督は然し今度は、勝つた組に「賞品」を出すことを始めた。燻りかへつてゐた木が、又燃え出した。

「他愛のないものさ。」監督は、船長室で、船長を相手にビールを飲んでゐた。

船長は肥えた女のやうに、手の甲にゑくぼが出てゐた。器用に金口をトン〳〵テーブルにたゝいて分らない笑顔で答へた。――船長は、

監督が何時でも自分の眼の前で、マヤ〳〵邪魔をしてゐるやうで、たまらなく不快だつた。漁夫達がワッと事を起して、此奴をカムサツカの海へたゝき落すやうなことでもないかな、そんな事を考へてゐた。

監督は「賞品」の外に、逆に、一番働きの少ないものに「燒き」を入れることを貼紙した。鐵棒を眞赤に燒いて、身體にそのまゝ當てることだつた。彼等は何處迄逃げても離れない、まるで自分自身の影のやうな「燒き」に始終追ひかけられて、仕事をした。仕事が尻上りに、日盛りをあげて行つた。

人間の身體には、どの位の限度があるか、然しそれは當の本人よりも監督の方が、よく知つてゐた。――仕事が終つて、丸太棒のやうに棚の中に横倒れに倒れると、「期せずして」う、う――、うめいた。

學生の一人は、小さい時に祖母に連れられて、お寺の薄暗いお堂の中で見たことのある「地獄」の繪が、そのまゝからであることを思ひ出した。それは、小さい時の彼には、丁度うはゞみのやうな動物が、沼地ににょろ、にょろと這つてゐるのを思はせた、それとそつくり同じだつた。――過勞がかへつて皆を眠らせない。夜中過ぎて、突然、硝子の表に思ひッ切り疵をつけるやうな無氣味な齒ぎしりが起つたり、寢言や、うなされてゐるらしい突調子な叫聲が、薄暗い「糞壺」の所々から起つた。

彼等は寢れずにゐるとき、フト、「よく、まだ生きてゐるな……。」と自分で自分の生身の身體にさゝやきかへすことがある。よく、まだ生きてゐる――さう自分の身體に！

學生上りは一番「こたへて」ゐた。

「ドストイエフスキーの死人の家な、こゝから見れば、あれだつて大したことでないつて氣がする。」――その學生は、糞が何日もつまつて、頭を手拭で力一杯に締めないと、眠れなかつた。

「それアさうだらう。」相手は函館から持つてきたウイスキーを、藥でも飲むやうに、舌の先きで少しづつ嘗めてゐた。「何んしろ大事業だからな。人跡未到の地の富源を開發するッてんだから、大變だよ。――この蟹工船だつて、今はこれで良くなつたさうだよ。天候や潮流の變化の觀測が出來なかつたり、地理が實際にマスターされてゐなかつたりした創業當時は、幾ら船が沈沒したりしたか分らなかつたさうだ。露國の船には沈められる、捕虜になる、殺される、それでも屈しないで、立ち上り、立ち上り苦鬪して來たからこそ、この大富源が俺達のものになつたのさ。……まア仕方がないさ。」

「……。」

――歷史が何時でも書いてゐるやうに、それはさうかも知れない氣がする。然し、彼の心の底にわだかまつてゐるムッとした氣持が、それでちつとも晴れなく思はれた。彼は默つてベニヤ板のやうに固くなつてゐる自分の腹を撫でた。弱い電氣に觸れるやうに、拇指のあたりが、チヤラ〳〵としびれる。イヤな氣持がした。拇指を眼の高さにかざして、片手でさすつてみた。――皆は夕飯が終つて、「糞壺」の眞中に一つ取りつけてある、割目が地圖のやうに入つてゐるガタ〳〵のストーヴに寄つてゐた。お互の身體が少し溫つてくると、湯氣が立つた。蟹の生つ臭い匂ひがムレてムッと鼻に來た。

「何んだか、理窟は分らねども、殺されたくねえで。」

「んだよ！」

憂々した氣持が、もたれかゝるやうに、其處へ雪崩れて行く。殺されかゝつてゐるんだ！ 皆はハッキリした焦點もなしに、怒りッぽくなつてゐた。

「お、俺だちの、も、ものにもならないのに。く、糞、こツ殺されてたまるもんか！」

　吃りの漁夫が、自分でももどかしく、顏を眞赤に筋張らせて、急に、大きな聲を出した。

　一寸、皆だまつた。何かにグイと心を「不意に」突き上げられた――のを感じた。

「カムサツカでア死にたくないな……」

「中積船、函館ば出たとよ。――無電係の人云つてた。」

「歸りてえな。」

「歸れるもんか。」

「中積船でヨク逃げる奴がゐるつてな。」

「んか!?……えゝな。」

「漁に出る振りして、カムサツカの陸さ逃げて、露助と一緒に赤化宣傳ばかやつてゐるものもゐるツてな。」

「……。」

「日本帝國のためか、――又、いゝ名義を考へたもんだ。」――學生は胸のボタンを外して、階段のやうに一つ〳〵窪みの出來てゐる胸を出して、あくびをしながら、ゴシ〳〵掻いた。垢が乾いて、薄い雲母のやうに剝げてきた。

「んよ、か、會社の金持ばかり、ふ、ふんだくるくせに。」

　カキの貝殼のやうに、段々のついた、たるんだ眼蓋から、弱々しい濁つた視線をストーヴの上にボンヤリ投げてゐた中年を過ぎた漁夫が、唾をはいた。ストーヴの上に落ちると、それがクルックルッと眞圓にまるくなつて、ヂュウ〳〵云ひながら、豆のやうに跳ね上つて、見る間に小さくなり、油燒粒ほどの小さいカスを殘して、無くなつた。皆はそれにウカツな視線を投げてゐる。

「それ、本當かも知れないな。」

　然し、船頭が、ゴム底タビの赤毛布の裏を出して、ストーヴにかざしながら、「おい〳〵、叛逆なんかしないでけれよ。」と云つた。

「……。」

「勝手だべよ。糞。」吃りが、脣を蛸のやうに突き出した。

　ゴムの燒けかゝつてゐるイヤな臭ひがした。

「おい、親爺、ゴム！」

「ん、あ、こげた！」

　波が出て來たらしく、サイドが微かになつてきた。船も子守歌程に搖れてゐる。腐つた海漿のやうな五燭燈で、ストーヴを圍んでゐるお互の、後に落ちてゐる影が色々にもつれて、組合つた。――靜かな夜だつた。ストーヴの口からの赤い火が、膝から下にチラ〳〵と反映してゐた。不幸だつた自分の一生が、ひよいと――まるツきりひよいと、しかも一瞬間だけ見返される――不思議に靜かな夜だつた。

「煙草無えか？」

「無え……。」

「無えか？……」

「なかつたな。」

「糞。」

「おい、ウイスキーをこつちにも廻せよ、な。」

　相手は角瓶を逆さに振つてみせた。

「おツと、勿體ねえことするなよ。」

「ハヽヽヽヽヽ。」

「飛んでもねえ所さ、然し來たもんだな、俺も……。」その漁夫は芝浦の工場にゐたことがあつた。そこの話がそれから出た。それは北海道の勞働者達には「工場」だとは想像もつかない「立派な處」に思はれた。「こゝの百に一つ位のことがあつたつて、あつちぢやストライキだよ。」と云つた。

　その事から――そのキッかけで、お互の今迄してきた色々のことが、ひよい〳〵と話に出てきた。「國道開拓工事」「灌漑工事」「鐵道敷設」「築港埋立」「新鑛發掘」「開墾」「積取人夫」「鰊

取り」――殆んど、そのどれかを皆はしてきてゐた。

――内地では、勞働者が「横柄」になつて無理がきかなくなり、市場も大體開拓されつくして、行詰つてくると、資本家は「北海道・樺太へ！」鉤爪をのばした。其處では、彼等は朝鮮や、臺灣の殖民地と同じやうに面白い程無茶な「虐使」が出來た。然し、誰も何んとも云へない事を、資本家はハッキリ呑み込んでゐた。「國道開拓」「鐵道敷設」の土工部屋では、虱より無造作に土方がタヽキ殺された。虐使に堪へられなくて逃亡する。それが捕まると、棒杭にしばりつけて置いて、馬の後足で蹴らせたり、裏庭で土佐犬に噛み殺させたりする。それを、しかも皆の眼の前でやつてみせるのだ。肋骨が胸の中で折れるボクッとこもつた音をきいて、「人間でない」土方さへ思はず顔を抑へるものがゐた。氣絶をすれば、水をかけて生かし、それを何度も〳〵繰りかへした。終ひには風呂敷包みのやうに、土佐犬の強靭な首で振り廻されて死ぬ。ぐつたり廣場の隅に投げ出されて、放つて置かれてからも、身體の何處かが、ピク〳〵と動いてゐた。燒火箸をいきなり尻にあてることや、六角棒で腰が立たなくなる程なぐりつけることは「毎日」だつた。飯を食つてゐると、急に、裏で鋭い叫聲が起る。すると、人の肉が燒ける生ツ臭い匂ひが流れてきた。

「やめた、やめた――とても飯なんて、食へたもんぢやねえや。」

箸を投げる。が、お互暗い顔で見合つた。

脚氣では何人も死んだ。無理に働かせるからだつた。死んでも「暇がない」ので、そのまゝ何日も放つて置かれた。裏へ出る暗がりに、無造作にかけてあるムシロの裾から、子供のやうに妙に小さくなつた、黄黒く、艶のない兩足だけが見えた。

「顔に一杯蠅がたかつてゐるんだ。側を通つたとき、一度にワアーンと飛び上るんでないか！」

額を手でトン〳〵打ちながら入つてくると、さう云ふ者があつた。

皆は朝は暗いうちに仕事場に出された。そして鶴嘴のさきがチラッ、チラッと青白く光つて、手元が見えなくなる迄、働かされた。近所に建つてゐる監獄で働いてゐる囚人の方を、皆はかへつて羨ましがつた。殊に朝鮮人の親方、棒頭からも、同じ仲間の土方（日本人の）からも、「踏んづける」やうな待遇をうけてゐた。

其處から四、五里も離れた村に駐在してゐる巡査がそれでも時々手帳をもつて、取調べにテク〳〵やつてくる。夕方迄ゐたり、泊りこんだりした。然し土方達の方へは一度も顔を見せなかつた。そして、歸りには眞赤な顔をして、歩きながら道の眞中を、消防の眞似でもしてゐるやうに、小便を四方にジャ〳〵やりながら、分らない獨言を云つて歸つて行つた。

北海道では、字義通り、どの鐵道の枕木もそれはそのまゝ一本々々勞働者の青むくれた「死骸」だつた。築港の埋立には、脚氣の土工が生きたまゝ「人柱」のやうに埋められた。――北海道の、さういふ勞働者を「タコ（蛸）」と云つてゐる。蛸は自分が生きて行くためには、自分の手足をも食つてしまふ。これこそ、全くそつくりではないか！ そこでは誰をも憚らない「原始的」な搾取が出來た。「儲け」がゴゾリ、ゴゾリ掘りかへつてきた。しかも、そして、その事を巧みに「國家的」富源の開發といふことに結びつけて、マンマと合理化してゐた。抜目がなかつた。「國家」のために、勞働者は「腹が減り」「タヽキ殺されて」行つた。

「――其處から生きて歸れたなんて、神助け事だよ。有難かつたな！ んでも、この船で殺されてしまつたら、同じだべよ。――何アーんでえ！」

そして突調子なく大きく笑つた。その漁夫は笑つてしまつてから、然し眉のあたりをアリ〱と暗くして、横を向いた。

鑛山でも同じだつた。新らしい山に坑道を掘る。そこにどんな瓦斯が出るか、飛んでもない變化が起るか、それを調べあげて一つの確信をつかむのに、資本家は「モルモット」より安く買へる「勞働者」を、乃木軍神がやつたと同じ方法で、入り代り立ち代り造作なく使ひ捨てた。鼻紙より無造作に！「マグロ」の刺身のやうな勞働者の肉片が、坑道の壁を幾重にも幾重にも丈夫にして行つた。都會から離れてゐることを好い都合にして、此處でも矢張り「ゾッ」とすることが行はれてゐた。トロッコで運んでくる石炭の中に拇指や小指がバラ〱に、ねばつて交つてくることがある。女や子供はそんな事には然し眉を動かしてはならなかつた。さう「慣らされてゐた。」彼等は無表情に、それを次の持場迄押してゆく。――その石炭が巨大な機械を、資本家の「利潤」のために動かした。

どの坑夫も、長く監獄に入れられた人のやうに、艶のない黄色くむくんだ、始終ボンヤリした顔をしてゐた。日光の不足と、炭塵と、有害ガスを含んだ空氣と、溫度と氣壓の異常とで、眼に見えて身體がをかしくなつてゆく。「七、八年も坑夫をしてゐれば、凡そ四五年間位は打つ續けて眞暗闇の底にゐて、一度だつて太陽を拜まなかつたことになる、四、五年も！」――だが、どんな事があらうと、代りの勞働者を何時でも澤山仕入れることの出來る資本家には、そんなことはどうでもいゝ事であつた。冬が來ると、「矢張り」勞働者はその坑山に流れ込んで行つた。

それから「入地百姓」――北海道には「移民百姓」がゐる。「北海道開拓」「人口食糧問題解決、移民奬勵」、日本少年式な「移民成金」などウマイ事ばかり並べたてた活動寫眞を使つて、田畑を奪はれさうになつてゐる内地の貧農を煽動して、移民を奬勵して置きながら、四、五寸も掘り返せば、下が粘土ばかりの土地に放り出される。豐饒な土地には、もう立札が立つてゐる。雪の中に埋められて、「馬鈴薯も食へずに、一家は次の春には餓死することがあつた。それは「事實」何度もあつた。雪が溶けた頃になつて、一里も離れてゐる「隣りの人」がやつてきて、初めてそれが分つた。口の中から、半分噛みかけてゐる藁屑が出てきたりした。

稀れに餓死から逃れ得ても、その荒蕪地を十年もかゝつて耕し、やう〱これで普通の畑になつたと思へる頃、それは實にちアんと「外の人」のものになるやうになつてゐた。資本家は――金利貸、銀行、華族、大金持は、嘘のやうな金を貸して置けば、（投げ捨てて置けば、）荒地は、肥えた黒猫の毛並のやうに豐饒な土地になつて、間違ひなく、自分のものになつてきた。そんな事を眞似て、濡手をきめこむ、眼の鋭い人間も、又北海道に入り込んできた。――百姓は、あつちからも、こつちからも自分のものを噛みとられて行つた。そして終ひには、彼等が内地でさうされたと同じやうに「小作人」にされてしまつてゐた。さうなつて百姓は初めて氣付いた。――「失敗つた！」

彼等は少しでも金を作つて、故里の村に歸らう、さう思つて、津輕海峽を渡つて、雪の深い北海道へやつてきたのだつた。――蟹工船にはさういふ、自分の土地を「他人」に追ひ立てられて來たものが澤山ゐた。

積取人夫は蟹工船の漁夫と似てゐた。監視付きの小樽の下宿屋にゴロ〱してゐると、樺太や北海道の奥地へ船で引きずられて行く。足を「一寸」すべらすと、ゴン〱〱となりながら、地響をたてて轉落してくる角材の下になつ

て、南部センベイよりも薄くされた　ガラ〳〵とウインチで艀に積まれて行く、水で皮がベロベロになつてゐる村木に、拍子を食つて、一なぐりされると、頭のつぶれた人間は、蚤の子よりも輕く、海の中へたゝき込まれた。

――内地では、何時迄も、默つて「殺されてゐない」勞働者が一かたまりに固つて、資本家へ反抗してゐる。然し「植民地」の勞働者は、さういふ事情から完全に「遮斷」されてゐた。

苦しくて、苦しくてたまらない。然し轉んで歩けば歩く程、雪ダルマのやうに苦しみを身體に背負ひこんだ。

「どうなるかな……？」

「殺されるのさ、分つてるべよ。」

「…………。」何か云ひたげな、然しグイとつまつたまゝ、皆だまつた。

「こ、こ、殺される前に、こつちから殺してやるんだ。」どもりがブッきら棒に投げつけた。

ドブーン、ドブーンとゆるく腹に波が當つてゐる。上甲板の方で、何處かのパイプからステイムがもれてるらしく、シー、シーシ、シーンといふ鐵瓶のたぎるやうな、柔かい音が絶えずしてゐた。

×　×　×

寢る前に、漁夫達は垢でスルメのやうにガバガバになつたメリヤスやネルのシャツを脱いで、ストーヴの上に擴げた。圍んでゐるもの達が、炬燵のやうに各々その端をもつて、熱くしてからバタ〳〵とほろつた。ストーヴの上に虱や南京蟲が落ちると、プツン〳〵と、音をたてて、人が燒ける時のやうな生ッ臭い臭ひがした。熱くなると、居たゝまらなくなつた虱が、シャツの縫目から、細かい澤山の足を夢中に動かして、出て來る。つまみ上げると、皮膚の脂肪ッぽいコロッとした身體の感觸がゾッときた。かまきり蟲のやうな不氣味な頭が、それと分る程肥えてゐるものもゐた。

「おい、端を持つてけれ。」

褌の片端を持つてもらつて、擴げながら虱をとつた。

漁夫は虱を口に入れて、前齒で音をさせてつぶしたり、兩方の拇指の爪で、爪が眞赤になるまでつぶした。子供が汚い手をすぐ着物に拭くやうに、半纏の裾にぬぐふと、又始めた。それでも然し眠れない。何處から出てくるか、夜通し虱と蚤と南京蟲に責められる。いくらどうしても退治し盡されなかつた。薄暗く、ジメジメしてゐる棚に立つてゐると、すぐモゾ〳〵と何十匹もの蚤が脛を這ひ上つてきた。終ひには自分の身體の何處かが腐つてでもゐないのか、と思つた。蛆や蠅に取りつかれてゐる腐爛した「死體」でないか、そんな不氣味さを感じた。

お湯には、初め一日置きに入れた。身體が生ッ臭くよごれて仕樣がなかつた。然し一週間もすると三日置きになり、一ケ月位經つと一週間一度。そしてたうとう月二回にされてしまつた。水の濫費を防ぐためだつた。然し、船長や監督は毎日お湯に入つた。それは濫費にはならなかつた(!)――身體が蟹の汁で汚れる、それがそのまゝ何日も續く、それで虱か南京蟲が湧かない「筈」がなかつた。

褌を解くと、黑い粒々がこぼれ落ちた。褌をしめたあとが、赤くかたがついて、腹に輪を作つた。そこがたまらなく痒かつた。寢てゐると、ゴシ〳〵と身體をやけにかく音が何處からも起つた。モゾ〳〵と小さいゼンマイのやうなものが、身體の下側を走るかと思ふと――刺す。その度に漁夫は身體をくねらし、寢返りを打つた。然し又すぐ同じだつた。それが朝迄續く。皮膚が疥癬のやうに、ザラ〳〵になつた。

「いゝ死に虱だべよ。」

「んだ、丁度えゝさ。」

仕方なく、笑つてしまつた。

五

あわてた漁夫が二、三人デッキを走つて行つた。

曲り角で、急にまがれず、よろめいて、手すりにつかまつた。サロン・デッキで修繕をしてゐた大工が脊のびをして、漁夫の走つて行つた方を見た。寒風の吹きさらしで、涙が出て、初め、よく見えなかつた。大工は横を向いて勢よく「つかみ洟」をかんだ。鼻汁が風にあふられて、歪んだ線を描いて飛んだ。

ともの左舷のウインチがガラ〱なつてゐる。皆漁に出てゐる今、それを動かしてゐるわけがなかつた。ウインチにはそして何かブラ下つてゐた。それが搖れてゐる。吊り下つてゐるワイヤーが、その垂直線の圍りを、ゆるく圓を描いて搖れてゐた。「何んだべ？」——その時、ドキッと來た。

大工は周章てたやうに、もう一度横を向いて「つかみ洟」をかんだ。それが風の工合でズボンにひつかゝつた。トロッとした薄い水洟だつた。

「又、やつてやがる。」大工は涙を何度も腕で拭ひながら眼をきめた。

こつちから見ると、雨上りのやうな銀灰色の海をバックに、突き出てゐるウインチの腕、それにすつかり身體を縛られて、吊し上げられてゐる雜夫が、ハッキリ黒く浮び出てみえた。ウインチの先端まで空を上つてゆく。そして雜巾切れでもひツかゝつたやうに、しばらくの間——二十分もそのまゝに吊り下げられてゐる。それから下つて行つた。身體をくねらして、もがいてゐるらしく、兩足が蜘蛛の巣にひつかゝつた蠅のやうに動いてゐる。

やがて手前のサロンの陰になつて、見えなくなつた。一直線に張つてゐるワイヤーだけが、時々ブランコのやうに動いた。

涙が鼻に入つてゆくらしく、水洟がしきりに出た。大工は又「つかみ洟」をした。それから横ポケットにブラン〱してゐる金槌を取つて、仕事にかゝつた。

大工はひよいと耳をすまして——振りかへつて見た。ワイヤ・ロープが、誰か下で振つてゐるやうに搖れてゐて、ボクン〱と鈍い不氣味な音は其處からしてゐた。

ウインチに吊された雜夫は顏の色が變つてゐた。死體のやうに堅くしめてゐる脣から、泡を出してゐた。大工が下りて行つた時、雜夫長が薪を脇にはさんで、片肩を上げた窮屈な恰好で、デッキから海へ小便をしてゐた。あれでなぐつたんだな、大工は薪をちらつと見た。小便は風が吹く度に、ヂャ〱とデッキの端にかゝつて、はねを飛ばした。

漁夫達は何日も〱續く過勞のために、だんだん朝起きれなくなつた。監督が石油の空罐を寢てゐる耳もとでたゝいて歩いた。眼を開けて、起き上る迄、やけに罐をたゝいた。脚氣のものが、頭を半分上げて何か云つてゐる。然し監督は見ない振りで、空罐をやめない。聲が聞えないので、金魚が水際に出てきて、空氣を吸つてゐる時のやうに、口だけパク〱動いてみえた。いゝ加減たゝいてから、

「どうしたんだ、タゝキ起すど！」と怒鳴りつけた。「いやしくも仕事が國家的である以上戰爭と同じなんだ。死ぬ覺悟で働け！　馬鹿野郎！」

病人は皆蒲團を剝ぎとられて、甲板へ押し出された。脚氣のものは階段の段々に足先きがつまづいた。手すりにつかまりながら、身體を斜めにして、自分の足を自分の手で持ち上げて、

階段を上つた。心臓が一足毎に不氣味にピンピン蹴るやうにはね上つた。

監督も、雑夫長も病人には、梃子にでも對するやうにジリ〱と陰險だつた。「肉詰」をしてゐると追ひ立てて、甲板で、「爪たゝき」をさせられる。それを一寸してゐると「紙卷」の方へ廻される。底寒くて、薄暗い工場の中ですべる足元に氣をつけながら、立ちつくしてゐると、膝から下は義足に觸るより無感覺になり、ひよいとすると膝の關節が、蝶つがひが離れたやうに、不覺にヘナ〱と坐り込んでしまひさうになつた。

學生が蟹をつぶした汚れた手の甲で、額を輕くたゝいてゐた。一寸するとそのまゝ横倒しに後へ倒れてしまつた。その時、側に積まさつてゐた罐詰の空罐がひどい音をたてて、學生の倒れた上に崩れ落ちた。それが船の傾斜に沿つて、機械の下や荷物の間に、光りながら圓く轉んで行つた。仲間が周章てて學生をハッチに連れて行かうとした。それが丁度、監督が口笛を吹きながら、工場に降りてきたのと會つた。ひよいと見てとると、

「誰が仕事を離れつたんだ!」

「誰が!?……。」思はずグッと來た一人が、肩でつッかゝるやうに、せき込んだ。

「誰がア――? この野郎、もう一度云つてみろ!」監督はポケットからピストルを取り出して、玩具のやうにいぢり廻した。それから、急に大聲で、口を三角形にゆがめながら、脊のびをするやうに身體をゆすつて、笑ひ出した。

「水を持つて來い!」

監督は桶一杯に水を受取ると、枕木のやうに床に置き捨てになつてゐる學生の顏にいきなり――一度にそれを浴せかけた。

「これでえゝんだ。――要らないものなんか見なくてもえゝ、仕事でもしやがれ!」

次の朝、雑夫が工場に降りて行くと、旋盤の鐵柱に前の日の學生が縛りつけられてゐるのを見た。首をひねられた鷄のやうに、首をガクリ胸に落し込んで、背筋の先端に大きな關節を一つポコンと露はに見せてゐた。そして子供の前掛のやうに、胸にそれが明かに監督の筆致で、

「此者ハ不忠ナル僞病者ニツキ、麻繩ヲ解クコトヲ禁ズ。」

と書いたボール紙を吊してゐた。

額に手をやつてみると、冷えきつた鐵に觸るより冷たくなつてゐる。雑夫等は工場に入る迄ガヤ〱しやべつてゐた。それが誰も口をきくものがない。後から雑夫長の下りてくる聲をきくと、彼等はその學生の縛られてゐる機械から二つに分れて各々の持場に流れて行つた。

蟹漁が忙がしくなると、ヤケに當つてくる。前齒を折られて、一晩中「血の唾」をはいたり、過勞で、作業中に××したり、眼から血を出したり、平手で滅茶苦茶に叩かれて、耳が聞えなくなつたりした。あんまり疲れてくると、皆は酒に醉つたよりも他愛なくなつた。時間がくると、「これでえゝ。」と、フイと安心すると、瞬間クラ〱ッとした。

皆が仕舞ひかけると、

「今日は九時迄だ。」と監督が怒鳴つて歩いた。「この野郎達、仕舞ひだッて云ふ時だけ、手廻しを早くしやがつて!」

皆は高速度寫眞のやうにノロ〱又立ち上つた。それしか氣力がなくなつてゐた。

「いゝか、此處へは二度も、三度も出直して來れるところぢやないんだ。それに何時だつて蟹が取れるとも限つたものでもないんだ。それを一日の働きが十時間だから十三時間だからツて、それでピッタリやめられたら、飛んでもないことになるんだ。――仕事の性質が異ふんだ。い

いか、その代り蟹が採れない時は、お前達を勿體ない程ブラ〳〵させておくんだ。」監督は「糞壺」へ降りてきて、そんなことを云つた。「露助はな、魚が何んぼ眼の前で群化てきても、時間が來れば一分も違はずに、仕事をブン投げてしまふんだ。んだから――んな心掛けだから露西亞の國があゝなつたんだ。日本男兒の斷じて眞似てならないことだ！」

何に云つてるんだ、ペテン野郎！　さう思つて聞いてゐないのもあつた。然し大部分は監督にさう云はれると日本人は矢張り偉いんだ、といふ氣にされた。そして自分達の毎日の××な苦しさが、何か「英雄的」なものに見え、それがせめても皆を慰めさせた。

甲板で仕事をしてゐると、よく水平線を横切つて驅逐艦が南下して行つた。後尾に日本の旗がはためくのが見えた。漁夫等は興奮から、眼に涙を一杯ためて、帽子をつかんで振つた。――あれだけだ。俺達の味方は、と思つた。

「畜生、あいつを見ると、涙が出やがる。」

だん〳〵小さくなつて、煙にまつはつて見えなくなる迄見送つた。

雜巾切れのやうに、クタ〳〵になつて歸つてくると、皆は思ひ合はせたやうに、相手もなく、たゞ「畜生！」と怒鳴つた。暗がりで、それは憎惡に滿ちた牡牛の唸り聲に似てゐた。誰に對してか彼等自身分つてはゐなかつたが、然し毎日毎日同じ「糞壺」の中にゐて、二百人近くのもの等がお互ブッキラ棒にしやべり合つてゐるうちに、眼に見えずに、考へること、云ふこと、することが、（なめくぢが地面を匍ふほどののろさだが）同じになつて行つた。――その同じ流れのうちでも、勿論澱んだやうに足ぶみをするものが出來たり、別な方へ外れて行く中年の漁夫もある。然しそのどれもが、自分では何んにも氣付かないうちに、さうなつて行き、そして何時の間にか、ハッキリ別れ〳〵になつてゐた。

朝だつた。タラップをノロ〳〵上りながら、炭山から來た男が、

「とても續かねえや。」と云つた。

前の日は十時近くまでやつて、身體は壞れかかつた機械のやうにギク〳〵してゐた。タラップを上りながら、ひよいとすると、眠つてゐた。後から「オイ。」と聲をかけられて、思はず手と足を動かす。そして、足を踏み外して、のめつたまゝ腹ん這ひになつた。

仕事につく前に、皆が工場に降りて行つて、片隅に溜つた。どれも泥人形のやうな顏をしてゐる。

「俺ア仕事サボるんだ。出來ねえ。」――炭山だつた。

皆も默つたまゝ、顏を動かした。

一寸して、

「大燒きが入るからな……。」と誰か云つた。

「ずるけてサボるんでねえんだ。働けねえからだよ。」

炭山が袖を上膊のところまで、まくり上げて、眼の前ですかして見るやうにかざした。

「長えことねえんだ。――俺アずるけてサボるんでねえど。」

「それだら、そんだ。」

「…………。」

その日、監督は鷄冠をピンと立てた喧嘩鷄のやうに、工場を廻つて歩いてゐた。「どうした、どうした!?」と怒鳴り散らした。がノロ〳〵と仕事をしてゐるのが一人、二人でなしに、あつちでも、こつちでも、――殆んど全部なので、たゞイラ〳〵歩き廻ることしか出來なかつた。漁夫達も船員もさういふ監督を見るのは初めてだつた。上甲板で、網から外した蟹が無數に、ガサガサと歩く音がした。通りの惡い下水道のやうに、仕事がドン〳〵つまつて行つた。然し「監督

の棍棒」が何の役にも立たない！
仕事が終つたから、煮しまつた手拭で首を拭きながら、皆ゾロ〳〵「糞壺」に歸つてきた。顏を見合ふと、思はず笑ひ出した。それが何故か分らずに、をかしくて、をかしくて仕樣がなかつた。

それが船員の方にも移つて行つた。船員を漁夫とにらみ合せて、仕事をさせ、いゝ加減に馬鹿をみせられてゐたことが分ると、彼等も時々「サボリ」出した。

「昨日ウンと働き過ぎたから、今日はサボだど。」

仕事の出しなに、誰かさう云ふと、皆さうなつた。然し「サボ」と云つても、たゞ身體を樂に使ふといふことでしかなかつたが。

誰だつて身體がをかしくなつてゐた。イザとなつたら「仕方がない。」やるさ。「殺されること」はどつち道同じことだ。そんな氣が皆にあつた。――たゞ、もうたまらなかつた。

× × ×

「中積船だ！ 中積船だ！」上甲板で叫んでゐるのが、下迄聞えてきた。皆は思ひ〳〵「糞壺」の棚からボロ着のまゝ跳ね下りた。

中積船は漁夫や船員を「女」よりも夢中にした。この船だけは鹽ッ臭くない――函館の匂ひがしてゐた。何ケ月も、何百日も踏みしめたことのない、あの動かない「土」の匂ひがしてゐた。それに中積船には日附の違つた何通りもの手紙、シャツ、下着、雜誌などが送りとゞけられてゐた。

彼等は荷物を蟹臭い節立つた手で、鷲づかみにすると周章てたやうに「糞壺」にかけ下りた。そして棚に大きな安坐をかいて、その安坐の中で荷物を解いた。色々なものが出る。――側から母親がものを云つて書かせた、自分の子供のたど〳〵しい手紙や、手拭、齒磨、楊枝、チリ紙、着物、それ等の合せ目から、思ひがけなく妻の手紙が、重さでキチンと平べつたくなつて、出てきた。彼等はその何處からでも、陸にある「自家」の匂ひをかぎ取らうとした。乳臭い子供の匂ひや、妻のムッとくる膚の臭ひを探した。

…………………

×××にかつれて困つてゐる、
三錢切手でとゞくなら
×××罐詰で送りたい――かッ！

やけに大聲で「ストゝン節」をどなつた。

何んにも送つて來なかつた船員や漁夫は、ズボンのポケットに棒のやうに腕をつッこんで、歩き廻つてゐた。

「お前の居ない間に、男でも引ッ張り込んでるだんべよ。」

皆にからかはれた。

薄暗い隅に顏を向けて、皆ガヤ〳〵騷いでゐるのをよそに、何度も指を折り直して、考へ込んでゐるのがゐた。――中積船で來た手紙で、子供の死んだ報知を讀んだのだつた。二ケ月も前に死んでゐた子供の、それを知らずに「今迄」ゐた。手紙には無線を頼む金もなかつたので、と書かれてゐた。漁夫が!?と思はれる程、その男は何時迄もムッつりしてゐた。

然し、それと丁度反對のがあつた。ふやけた蛸の子のやうな赤子の寫眞が入つてゐたりした。

「これがか！」と頓狂な聲で笑ひ出してしまふ。

それから「どうだ、これが産れたんだとよ。」と云つてワザ〳〵一人々々に、ニコ〳〵しながら見せて歩いた。

荷物の中には何んでもないことで、然し妻でなかつたら、矢張り氣付かないやうな細かい心配りの分るものが入つてゐた。そんな時は、急に誰でも、バタ〳〵と心が「あやしく」騷ぎ立つた。――そして、たゞ無上に歸りたかつた。

中積船には、會社で派遣した活動寫眞隊が乘り込んできてゐた。出來上つただけの罐詰を中積船に移してしまつた晩、船で活動寫眞を映すことになつた。

平べつたい鳥打ちを少し横めにかぶり、蝶ネクタイをして、太いズボンをはいた、若い同じやうな恰好の男が二、三人トランクを重さうに持つて、船へやつてきた。

「臭い、臭い！」

さう云ひながら、上着を脱いで、口笛を吹きながら、幕をはつたり、距離をはかつて臺を据ゑたりし始めた。漁夫達はそれ等の男から、何か「海で」ないもの——自分達のやうなものでないもの、を感じ、それにひどく引きつけられた。船員や漁夫は何處か浮かれ氣味で、彼等の支度に手傳つた。

一番年かさらしい下品に見える、太い金緣の眼鏡をかけた男が、少し離れた處に立つて、首の汗を拭いてゐた。

「辯士さん、そつたら處さ立つてれば、足から蚤がハネ上つて行きますよ！」

と、「ひやア——ッ！」燒けた鐵板でも踏んづけたやうにハネ上つた。

見てゐた漁夫達がドッと笑つた。

「然しひどい所にゐるんだな！」しやがれた、チャラチャラ聲だつた。それは矢張り辯士だつた。「知らないだらうけれども、この會社が此處へからやつて、やつて來るために、幾何儲けてゐると思ふ？　大したもんだ。六ケ月に五百萬圓だよ。一年千萬圓だ。——口で千萬圓つて云へば、それつ切りだけれども、大したもんだ。それに株主へ二割二分五厘なんて滅法界もない配當をする會社なんて、日本にだつてさうないんだ。今度社長が代議士になるツて云ふし、申分がないさ。——矢張り、こん風にしてもひどくしなけア、あれだけ儲けられないんだらうな。」

夜になつた。

「一萬箱」を兼ねてやることになり、酒、燒酎、するめ、にしめ、バット、キ　ラメルが皆の間に配られた。

「さ、親父のどこさ來い。」

雜夫が、漁夫船員の間に、引張り凧になつた。「安坐さかいて見せてやるからな。」

「危い、危い！　俺のどこさ來いてば。」

それがガヤ〳〵しばらく續いた。

前列の方で四、五人が急に拍手した。皆も分らずに、それに續けて手をたゝいた。監督が白い垂幕の前に出てきた。——腰をのばして、兩手を後に廻しながら、「諸君は」とか、「私は」とか、普段云つたことのない言葉を出したり、又何時もの「日本男兒」だとか、「國富」だとか云ひ出した。大部分は聞いてゐなかつた。こめかみと顎の骨を動かしながら、「するめ」を咬んでゐた。

「やめろ、やめろ！」後から怒鳴る。

「お前なんか、ひつこめ！　辯士がゐるんだ、ちアんと。」

「六角棒の方が似合ふぞ！」——皆ドッと笑つた。口笛をピュウ〳〵吹いて、ヤケに手をたゝいた。

監督もまさか其處では怒れず、顏を赤くして、何か云ふと（皆が騷ぐので聞えなかつた。）引込んだ。そして活動寫眞が始まつた。

最初「實寫」だつた。宮城、松島、江ノ島、京都……がガタピシャ〳〵と寫つて行つた。時々切れた。急に寫眞が二、三枚ダブつて、目まひでもしたやうに入り亂れたかと思ふと、瞬間消えてパッと白い幕になつた。

それから西洋物と日本物をやつた。どれも寫眞はキズが入つてゐて、ひどく「雨が降つた。」それに所々切れてゐるのを接合させたらしく、

人の動きがギクシャクした。――然しそんなことはどうでもよかつた。皆はすつかり引き入れられてゐた。外國のいゝ身體をした女が出てくると、口笛を吹いたり豚のやうに鼻をならした。辯士は怒つてしばらく說明しないこともあつた。

西洋物はアメリカ映畫で、「西部開發史」を取扱つたものだつた。――野蠻人の襲擊をうけたり、自然の暴虐に打ち壞されては、又立ち上り、一間々々と鐵道をのばして行く。途中に、一夜作りの「町」が、まるで鐵道の結びコブのやうに出來る。そして鐵道が進む、その先へ、先へと町が出來て行つた――其處から起る色々な苦難が、一工夫と會社の重役との娘の「戀物語」ともつれ合つて、表へ出たり、裏になつたりして描かれてゐた。最後の場面で、辯士が聲を張りあげた。

「彼等幾多の犧牲的靑年によつて、遂に竣功するに至つた延々何百哩の鐵道は、長蛇の如く野を走り山を貫き昨日迄の蠻地は、かくして國富と變つたのであります。」

重役の娘と、何時の間にか紳士のやうになつた工夫が相抱くところで幕だつた。

間に、意味もなくゲラ〳〵笑はせる、短い西洋物が一本はさまつた。

日本の方は、貧乏な一人の少年が「納豆賣り」「夕刊賣り」などから「靴磨き」をやり、工場に入り、模範職工になり、取り立てられて、一大富豪になる映畫だつた。――辯士は字幕にはなかつたが、「げに勤勉こそ成功の母ならずして、何んぞや！」と云つた。

それには雜夫達の「眞劍な」拍手が起つた。然し漁夫か船員のうちで、

「譃とけ！ そんだつたら、俺なんて社長になつてねかならないべよ。」

と大聲を出したものがゐた。

それで皆は大笑ひに笑つてしまつた。

後で辯士が、「あゝいふ處へは、ウンと力を入れて、繰りかへし、繰りかへし云つて貰ひたいつて、會社から命令されて來たんだ。」と云つた。

最後は、會社の、各所屬工場や、事務所などを寫したものだつた。「勤勉」に働いてゐる澤山の勞働者が寫つてゐた。

寫眞が終つてから、皆は一萬箱祝ひの酒で醉拂つた。

長い間口にしなかつたのと、疲勞し過ぎてゐたので、ベロ〳〵に參つて了つた。薄暗い電氣の下に、煙草の煙が雲のやうにこめてゐた。空氣がムレて、ドロ〳〵に腐つてゐた。肌脫ぎになつたり、鉢卷をしたり、大きく安坐をかいて、尻をすつかりまくり上げたり、大聲で色々なことを怒鳴り合つた。――時々なぐり合ひの喧嘩が起つた。

それが十二時過ぎ迄續いた。

脚氣で、何時も寢てゐた函館の漁夫が、枕を少し高くして貰つて、皆の騷ぐのを見てゐた。同じ處から來てゐる友達の漁夫は、側の柱に寄りかゝりながら、齒にはさまつたするめを、マッチの軸木で「シイ」「シイ」音をさせてせゝつてゐた。

餘程過ぎてからだつた。――「糞壺」の階段を南京袋のやうに漁夫が轉つて來た。着物と右手がすつかり血まみれになつてゐた。

「出刃、出刃！ 出刃を取つてくれ！」土間を匐ひながら、叫んでゐる。「淺川の野郎、何處へ行きやがつたか居ねえんだ。殺してやるんだ。」

監督のために なぐられた事のある漁夫だつた。――その男はストーヴのデレッキを持つて、眼の色をかへて、又出て行つた。誰もそれをとめなかつた。

「な！」函館の漁夫が友達を見上げた。「漁夫

だつて、何時迄も木の根ッこみたいな馬鹿でねえんだな。面白くなるど！」

次の朝になつて、監督の窓硝子からテーブルの道具が、すつかり滅茶苦茶に壞されてゐたことが分つた。監督だけは、然し何處にゐたのか運よく「こはされて」ゐなかつた。

六

柔かい雨曇だつた。——前の日迄降つてゐた。それが上りかけた頃だつた。曇つた空と同じ色の雨が、これも矢張り曇つた空と同じ色の海に、時々和かな圓い波紋を落してゐた。

午過ぎ、驅逐艦がやつて來た。手の空いた漁夫や雜夫や船員が、デッキの手すりに寄つて、見とれながら、驅逐艦についてガヤ〳〵話し合つた。物めづらしかつた。

驅逐艦からは、小さいボートが降されて、士官連が本船へやつてきた。サイドに斜めに降されたタラップの、下のをどり場には船長、工場代表、監督、雜夫長が待つてゐた。ボートが横付けになるとお互に擧手の禮をして船長が先頭に上つてきた。監督が上をひよいと見ると、眉と口隅をゆがめて、手を振つて見せた。「何を見てるんだ。行つてろ、行つてろ！」

「威張んねえ、野郎！」——ゾロ〳〵デッキを後のものが前を順に押しながら、工場へ降りて行つた。生ッ臭い匂ひが、デッキにたゞよつて、殘つた。

「臭いね。」綺麗な口髭の若い士官が、上品に顏をしかめた。

後からついてきた監督が、周章てて前へ出ると、何か云つて、頭を何度も下げた。

皆は遠くから飾りのついた短劍が、歩くたびに尻に當つて、跳ね上るのを見てゐた。どれが、どれより偉いとか偉くないとか、それを本氣で云ひ合つた。しまひに喧嘩のやうになつた。

「あゝなると、淺川も見られたもんでないな。」監督のペコ〳〵した恰好を眞似して見せた。皆はそれでドッと笑つた。

その日、監督も雜夫長もゐないので、皆は氣樂に仕事をした。唄をうたつたり機械越しに聲高に話し合つた。

「こんな風に仕事をさせたら、どんなものだべな。」

皆が仕事を終へて、上甲板に上つてきた。サロンの前を通ると、中から醉拂つて、無遠慮に大聲で喚き散らしてゐるのが聞えた。

給仕が出てきた。サロンの中は煙草の煙でムンムンしてゐた。

給仕の上氣した顏には、汗が一つ〳〵粒になつて出てゐた。兩手に空のビール瓶を一杯もつてゐた。顎でズボンのポケットを知らせて、「顏を賴む。」と云つた。

漁夫がハンカチを出してふいてやりながら、サロンを見て「何してるんだ？」ときいた。

「イヤ、大變さ。ガブ〳〵飲みながら、何を話してるかつて云へば——女のアレがどうしたとか、かうしたとかよ。お蔭で百回も走らせられるんだ。農林省の役人が來れば來たでタラップからタヽキ落ちる程醉拂ふしな！」

「何しに來るんだべ？」

給仕は、分らんさ、といふ顏をして、急いでコック場に走つて行つた。

箸では食ひづらいボロ〳〵な南京米に、紙ッ切れのやうな、實が浮かんでゐる鹽ッポい味噌汁で、漁夫等が飯を食つた。

「食つたことも、見たことも無えん洋食だ、サロンさ何んぼも行つたな。」

「糞喰え——だ。」

テーブルの側の壁には、

一、飯のことで文句を云ふものは、偉い人間になれぬ。

一、一粒の米を大切にせよ。血と汗の賜物なり。
一、不自由と苦しさに耐へよ。

振假名がついた下手な字で、ビラが貼らさつてゐた。下の餘白には、共同便所の中にあるやうな猥褻な落書がされてゐた。

飯が終ると、寢る迄の一寸の間、ストーヴを圍んだ。——驅逐艦のことから、兵隊の話が出た。漁夫には秋田、青森、岩手の百姓が多かつた。そこで兵隊のことになると、譯が分らず、夢中になつた。兵隊に行つてきたものが多かつた。彼等は、今では、その當時の××に充ちた兵隊の生活をかへつて懷しいものに、色々想ひ出してゐた。

皆寢てしまふと、急に、サロンで騷いでゐる音が、デッキの板やサイドを傳つて、此處迄聞えてきた。ひよいと眼をさますと「まだやつてゐる」のが耳に入つた。——もう夜が明けるんではないか。誰か——給仕かも知れない、甲板を行つたり來たりしてゐる靴の踵のコツ、コツといふ音がしてゐた。實際そして、騷ぎは夜明け迄續いた。

士官連はそれでも驅逐艦に歸つて行つたらしく、タラップは降されたまゝになつてゐた。そしてその段々に飯粒や蟹の肉や茶色のドロドロしたものが、ゴチャ〳〵になつた嘔吐が、五、六段續いて、かゝつてゐた。嘔吐からは腐つたアルコールの臭ひが強く、鼻にプーンときた。胸が思はずカアーッとくる匂ひだつた。

驅逐艦は翼ををさめた灰色の水鳥のやうに、見えない程に身體をゆすつて、浮かんでゐた。それは身體全體が「眠り」を貪つてゐるやうに見えた。煙筒からは煙草の煙よりも細い煙が風のない空に、毛絲のやうに上つてゐた。

監督や雜夫長などは晝になつても起きて來なかつた。

「勝手な畜生だ！」仕事をしながら、ブツ〳〵云つた。

コック部屋の隅には、粗末に食ひ散らされた空の蟹罐詰やビール瓶が山積みに積まさつてゐた。朝になると、それを運んで歩いたボーイ自身でさへ、よくこんなに飲んだり、食つたりしたもんだ、と吃驚した。

給仕は仕事の關係で、漁夫や船員などが、とても覗ひ知ることの出來ない船長や監督、工場代表などのムキ出しの生活をよく知つてゐた。と同時に、漁夫達の慘めな生活（監督は醉ふと、漁夫達を「豚奴々々」と云つてゐた。）も、ハッキリ對比されて知つてゐる。公平に云つて上の人間はゴウマンで、恐ろしいことを儲けのために「平氣で」謀んだ。漁夫や船員はそれにウマウマ落ち込んで行つた——それは見てゐられなかつた。

何も知らないうちはいゝ、給仕は何時もさう考へてゐた。彼は、當然どういふことが起るか——起らないではゐないか、それが自分で分るやうに思つてゐた。

二時頃だつた。船長や監督等は、下手に疊んでおいたために出來たらしい、色々な折目のついた服を着て、罐詰を船員二人に持たして、發動機船で驅逐艦に出掛けて行つた。甲板で蟹外しをしてゐた漁夫や雜夫が、手を休めずに「嫁行列」でも見るやうに、それを見てゐた。

「何やるんだか、分つたもんでねえな。」

「俺達の作つた罐詰だ、まるで糞紙よりも粗末にしやがる！」

「然しな……」中年を過ぎかけてゐる、左手の指が三本よりない漁夫だつた。「こんな處まで來て、ワザ〳〵俺達ば守つてけるんだもの、えゝさ——な。」

——その夕方、驅逐艦が、知らないうちにムクムクと煙突から煙を出し始めた。デッキを急が

しく水兵が行つたり來たりし出した、そして、それから三十分程して動き出した。艦尾の旗がハタ／＼と風にはためく音が聞えた。蟹工船では、船長の發聲で、「萬歲」を叫んだ。

夕飯が終つてから、「糞壺」へ給仕が降りてきた。皆はストーヴの周圍で話してゐた。薄暗い電燈の下に立つて行つて、シャツから虱を取つてゐるのもゐた。電燈を横切る度に、大きな影がペンキを塗つた、煤けたサイドに斜めにうつつた。

「士官や船長や監督の話だけれどもな、今度ロシアの領海へこつそり×入して漁をするさうだと。それで艦がしつきりなしに、側にゐて番をしてくれるさうだ――大分、コレやつてるらしいな。（拇指と人差指で圓くしてみた。）

皆の話を聞いてゐると、金がそのまゝゴロゴロ轉つてゐるやうなカムサッカや北樺太など、この邊一帶を行く／＼はどうしても日本のものにするさうだ。日本のアレは支那や滿洲ばかりでなしに、こつちの方面も大切だつて云ふんだ。それにはこゝの會社が三菱などと一緒になつて、政府をウマクつゝついてゐるらしい。今度社長が代議士になれば、もつとそれをドンドンやるやうだと。」

それでさ、驅逐艦が蟹工船の警備に出動すると云つたところで、どうして／＼、そればかりの目的でなくて、この邊の海、北樺太、千島の附近まで詳細に測量したり氣候を調べたりするのが、かへつて大目的で、萬一のアレに手ぬかりなくする譯だな。これア祕密だらうと思ふんだが、千島の一番端の島に、コッソリ××を運んだり、××を運んだりしてゐるさうだ。

俺初めて聞いて吃驚したんだけれどもな、今迄の日本のどの戰爭でも、本當は――底の底を割つてみれば、みんな二人か三人の金持の（そのかはり大金持の）指圖で動機だけは色々にこじつけて起したもんだとよ。何んしろ見込のある場所を手に入れたくて、バタ／＼してるんださうだからな、そいつ等は。――危いさうだ。」

七

ウインチがガラ／＼となつて、川崎船が下つてきた。丁度その下に漁夫が四人程居て、ウインチの腕が短いので、下りてくる川崎船をデッキの外側に押してやつて、海までそれが下りれるやうにしてやつてゐた。――よく危いことがあつた。ボロ船のウインチは、脚氣の膝のやうにギクシャクとしてゐた。ワイヤーを卷いてゐる齒車の工合で、ガイと片方のワイヤーだけが跛にのびる。川崎船が燻製鰊のやうに、すつかり斜めにブラ下つてしまふことがある。その時、不意を喰つて、下にゐた漁夫がよく怪我をした。――その朝それがあつた。「あツ危い！」誰か叫んだ。眞上からタヽキのめされて、下の漁夫の首が胸の中に、杭のやうに入り込んでしまつた。

漁夫等は船醫のところへ抱へこんだ。彼等のうちで、今ではハッキリ監督などに對して「畜生！」と思つてゐる者等は、醫者に「診斷書」を書いて貰ふやうに賴むことにした。監督は蛇に人間の皮をきせたやうな奴だから何んとかキット難くせを「ぬかす」に違ひなかつた。その時の抗議のために診斷書は必要だつた。それに船醫は割合漁夫や船員に同情を持つてゐた。

「この船は仕事をして怪我をしたり、病氣になつたりするよりも、ひつぱたかれたり、たゝきのめされたりして怪我したり、病氣したりする方が、ずウッと多いんだからねえ。」と驚いてゐた。一々日記につけて後の證據にしなければならない、と云つてゐた。それで病氣や怪我をした船夫や船員などを割合に親切に見てくれてゐた。

診斷書を作つて貰ひたいんですけれどもと、一人が切り出した。

初め、吃驚したやうだつた。

「さあ診斷書はねえ……。」

「この通りに書いて下さればいゝんですが。」

はがゆかつた。

「この船では、それを書かせないことになつてるんだよ。勝手にさう決めたらしいんだが。……後々のことがあるんでね。」

氣の短い吃りの漁夫が「チェッ！」と舌打ちをしてしまつた。

「この前、淺川君になぐられて、耳が聞えなくなつた漁夫が來たので、何氣なく診斷書を書いてやつたら、飛んでもないことになつてしまつてね、――それが何時迄も證據になるんで、淺川君にしちやね……。」

彼等は船醫の室を出ながら、船醫も矢張り其處まで行くと、もう「俺達」の味方でなかつたことを考へてゐた。

その漁夫は、然し「不思議に」どうにか生命を取りとめることが出來た。その代り、日中でもよく何かにつまづいて、のめる程暗い隅に轉つたまゝ、その漁夫がうなつてゐるのを、何日も何日も聞かされた。

彼が直りかけて、うめき聲が皆を苦しめなくなつた頃、前から寢たきりになつてゐた脚氣の漁夫が死んでしまつた。――二十七だつた。東京、日暮里の周旋屋から來たもので、一緒の仲間が十人程ゐた、然し、監督は次の日の仕事に差支へると云ふので、仕事に出てゐない「病氣のものだけ」で、「お通夜」をさせることにした。

湯灌をしてやるために、着物を解いてやると、身體からは、胸がムカーッとする臭氣がきた。そして無氣味な眞白い、平べつたい虱が周章ててゾロ／＼走り出した。鱗形に垢のついた身體全體は、まるで松の幹が轉つてゐるやうだつた。胸は、肋骨が一つ／＼ムキ出しに出てゐた。脚氣がひどくなつてから、自由に歩けなかつたので、小便などはその場でもらしたらしく、一面ひどい臭氣だつた。褌もシャツも赭黑く色が變つて、つまみ上げると、硫酸でもかけたやうに、ボロ／＼にくづれさうだつた。臍の窪みには、垢とゴミが一杯につまつて、臍は見えなかつた。肛門の周りには、糞がすつかり乾いて粘土のやうにこびりついてゐた。

「カムサツカでは死にたくない。」――彼は死ぬ時さう云つたさうだつた。然し、今彼が命を落すといふとき、側にキット誰も看てやつた者がゐなかつたかも知れない。そのカムサツカでは誰だつて死にきれないだらう。漁夫達はその時の彼の氣持を考へ、中には聲をあげて泣いたものがゐた。

湯灌に使ふお湯を貰ひにゆくと、コックが、「可哀想にな。」と云つた。「澤山持つて行つてくれ。隨分身體が汚れてるべよ。」

お湯を持つてくる途中、監督に會つた。

「何處へ持つてゆくんだ。」

「湯灌だよ。」

と云ふと、

「ぜいたくに使ふな。」まだ何か云ひたげにして通つて行つた。

歸つてきたとき、その漁夫は、「あの時位、いきなり後から彼奴の頭に、お湯をブッかけてやりたくなつた時はなかつた！」と云つた。興奮して、身體をブル／＼顫はせた。

監督はしつこく廻つてきては、皆の樣子を見て行つた――然し、皆は明日居睡りをしても、のめり乍ら仕事をしても――例の「サボ」をやつても、皆で「お通夜」をしようといふことにした。

八時頃になつて、やうやく一通りの用意が出來、線香や蠟燭をつけて、皆がその前に坐つた。

監督はたうとう來なかつた。船長と船醫が、それでも一時間位坐つてゐた。片言のやうに――切れ〴〵にお經の文句を覺えてゐた漁夫が、「それでいゝ、心が通じる。」さう皆に云はれて、お經をあげることになつた、お經の間シーンとしてゐた。誰か鼻をすゝり上げてゐる。終りに近くなるとそれが何人もに殖えて行つた。

　お經が終ると、一人々々燒香をした。それから坐を崩して、各々一かたまり、一かたまりになつた。仲間の死んだことから、生きてゐる――然し、よく考へてみればまるで危く生きてゐる自分達のことに、それ等の話がなつた。船長と船醫が歸つてから、吃りの漁夫が線香とローソクの立つてゐる死體の側のテーブルに出て行つた。

「僕はお經は知らない。お經をあげて山田君の靈を慰めてやることは出來ない。然し僕はよく考へて、から思ふんです。山田君はどんなに死にたくなかつたべか、とな。――イヤ、本當のことを云へばどんなに殺されたくなかつたか、と。確かに山田君は殺されたのです。」

　聞いてゐる者達は、抑へられたやうに靜かになつた。

「では、誰が殺したか？――云はなくたつて分つてゐるべよ！　僕はお經でもつて、山田君の靈を慰めてやることは出來ない。然し僕等は、山田君を殺したものの仇をとることによつて、とることによつて、山田君を慰めてやることが出來るのだ。――この事を、今こそ、山田君の靈に僕等は誓はなければならないと思ふ……。」

船員達だつた、一番先きに「さうだ。」と云つたのは。

　蟹の生ツ臭いにほひと人いきれのする「糞壺」の中に線香のかをりが、香水か何かのやうに、たゞよつた。九時になると、雜夫が歸つて行つた。疲れてゐるので、居睡りをしてゐるものは、石の入つた俵のやうになか〳〵起き上らなかつた。一寸すると、漁夫達も一人、二人と眠り込んでしまつた。――波が出てきた。船が搖れる度に、ローソクの灯が消えさうに細くなり、又それが明るくなつたりした。死體の顏の上にかけてある白木綿が除れさうに動いた。ずつた。そこだけを見てゐると、ゾッとする不氣味さを感じた。――サイドに、波が鳴り出した。

　次の朝、八時過ぎ迄一仕事をしてから、監督のきめた船員と漁夫だけ四人下へ降りて行つた。お經を前の晩の漁夫に讀んでもらつてから、四人の外に、病氣のもの三四人で、麻袋に死體をつめた。麻袋は新らしいものは澤山あつたが、監督は、直ぐ海に投げるものに新らしいものを使ふなんてぜいたくだ、と云つてきかなかつた。線香はもう船には用意がなかつた。

「可哀想なもんだ。――これぢや本當に死にたくなかつたべよ。」

　なか〳〵曲らない腕を組合はせながら、涙を麻袋の中に落した。

「駄目々々。涙をかけると……。」

「何んとかして、函館迄持つて歸られないものかな。……こら、顏をみれ、カムサツカのしやつこい水さ入りたくねえッて云つてるんでないか。――海さ投げられるなんて、賴りねえな……。」

「同じ海でもカムサツカだ。冬になれば――九月過ぎれば、船一艘も居なくなつて、凍つてしまふ海だで。北の北の端れの！」

「ん、ん。」――泣いてゐた。「それによ、かうやつて袋に入れるッて云ふのに、たつた六、七人でな。三、四百人もゐるのによ！」

「俺達、死んでからも、碌な目に合はないんだ……。」

　皆は半日でいゝから休みにしてくれるやうに賴んだが、前の日から蟹の大漁で、許されなか

つた。
「私事と公事を混同するな」監督にさう云はれた。
監督が「糞壺」の天井から顔だけ出して、
「もういゝか。」ときいた。
仕方がなく彼等は「いゝ。」と云つた。
「ぢや、運ぶんだ。」
「んでも、船長さんがその前に弔詞を讀んでくれることになつてるんだよ……」
「船長オ？　弔詞イ？――」嘲るやうに、「馬鹿！　そんな悠長なことしてれるか。」
悠長なことはしてゐられなかつた。蟹が甲板に山積みになつて、ゴソ〳〵爪で床をならしてゐた。
そして、どん〳〵運び出されて、鮭か鱒の菰包みのやうに無造作に、船尾につけてある發動機に積み込まれた。
「いゝか――？」
「よオ――し……」
發動機がバタ〳〵動き出した。船尾で水が掻き廻されて、アブクが立つた。
「ぢや……。」
「ぢや。」
「左樣なら。」
「淋しいけどな――我慢してな。」低い聲で云つてゐる
「ぢや、賴んだど！」
本船から、發動機に乘つたものに賴んだ。
「ん、ん、分つた。」
發動機は沖の方へ離れて行つた。
「ぢや、な！……。」
「行つてしまつた。」
「麻袋の中で、行くのはイヤだ、イヤだつてしてるやうでな……眼に見えるやうだ。」
――漁夫が漁から歸つてきた、そして監督の「勝手な」處置をきいた。それを聞くと、怒る前に、自分が――死體になつた自分の身體が、底の暗いカムサツカの海に、さういふやうに蹴落されでもしたやうに、ゾッとした。皆はものも云へず、そのまゝゾロ〳〵タラップを下りて行つた。「分つた、分つた。」口のなかで、ブツブツ云ひながら、鹽ぬれのドッたりした半纏を脱いだ。

八

表には何も出さない。氣付かれないやうに手をゆるめて行く。監督がどんなに思ひッ切り怒鳴り散らしても、タヽキつけて歩いても、口答へもせず「おとなしく」してゐる。それを一日置きに繰りかへす。（初めは、おつかなびつくり、おつかなびつくりでしてゐたが。）――さういふやうにして「サボ」を續けた。水葬のことがあつてから、モットその足並が揃つてきた。
仕事の高は眼の前で減つて行つた。
中年過ぎた漁夫は、働かされると、一番それが身にこたへるのに、「サボ」にはイヤな顏を見せた。然し内心……心配してゐたことが起らずに、不思議でならなかつたが、かへつて「サボ」が效いてゆくのを見ると、若い漁夫達の云ふやうに、動きかけてきた。
困つたのは、川崎の船頭だつた。彼等は川崎のことでは全責任があり、監督と平漁夫の間に居り、「漁獲高」のことでは、すぐ監督に當つて來られた。それで何よりつらかつた。結局三分の一だけ「仕方なしに」漁夫の味方をして、後の三分の二は監督の小さい「出店」――その小さい「〇」だつた。
「それア疲れるさ。工場のやうにキチン、キチンと仕事がきまつてるわけには行かないんだ。相手は生物だ。蟹が人間樣の都合よく、時間時間に出てきては呉れないしな。仕方がないんだ。」――そつくり監督の蓄音機だつた。

　こんなことがあつた。――糞壺で、寝る前に、何かの話が思ひがけなく色々の方へ移つて行つた。その時ひよいと、船頭が威張つたことを云つてしまつた。それは別に威張つたことではないが、「平」漁夫にはムッときた。相手の平漁夫が、そして、少し醉つてゐた。
「何んだつて？」いきなり怒鳴つた。「手前、何んだ。あまり威張つたことを云はねえ方がえゝんだで。漁に出たとき、俺達四、五人でお前を海の中さタヽキ落す位朝飯前だんだ。――それッ切りだべよ。カムサツカだどお前がどうやつて死んだつて、誰が分るツて！」
　さうは云つたものはない。それをガラ〳〵な大聲でどなり立ててしまつた。誰も何も云はない。今迄話してゐた外のことも、そこでブッつり切れてしまつた。
　然し、かういふやうなことは、調子よく跳ね上つた空元氣だけの言葉ではなかつた。それは今迄「屈從」しか知らなかつた漁夫を、全く思ひがけずに背から、とてつもない力で突きのめした。突きのめされて、漁夫は初め戸惑ひしたやうにウロ〳〵した。それが知られずにゐた自分の力だ、といふことを知らずに。
　――そんなことが「俺達に」出來るだらうか？
　然し成る程出來るんだ。
　さう分ると、今度は不思議な魅力になつて、反抗的な氣持が皆の心に喰ひ込んで行つた。今迄、慘酷極まる勞働で搾り拔かれてゐた事が、かへつて其の爲には此上ない良い地盤だつた。――かうなれば、監督も糞もあつたものでない！　皆愉快がつた。一旦この氣持をつかむと、不意に、懷中電燈を差しつけられたやうに自分達の蛆蟲そのまゝの生活がアリ〳〵と見えてきた。
「威張んな、この野郎。」この言葉が皆の間で流行り出した。何かすると「威張んな、この野郎。」と云つた。別なことにでも、すぐそれを使つた。――威張る野郎は、然し漁夫には一人もゐなかつた。
　それと似たことが一度、二度となくある。その度毎に漁夫達は「分つて」行つた。そして、それが重なつてゆくうちに、そんな事で漁夫等の中から何時でも表の方へ押し出されてくる、きまつた三、四人が出來てきた。それは誰かが決めたのでなく、本當は又、きまつたのでもなかつた。たゞ、何か起つたり又しなければならなくなつたりすると、その三、四人の意見が皆のと一致したし、それで皆もその通り動くやうになつた。――學生上りが二人程、吃りの漁夫、「威張んな」の漁夫などがそれだつた。
　學生が鉛筆をなめ、なめ、一晩中腹這ひになつて、紙に何か書いてゐた。――それは學生の「發案」だつた。

發案　（責任者の圖）

二人の學生
吃りの漁夫
「威張んな」
…A

雜夫の方一人
川崎船の方二人
水夫の方一人
火夫の方一人
…B

國別にして各々その內の餓鬼大將を一人づつ
各川崎船に二人づつ
水夫火夫の諸君
…C

A ⇄ B ⇄ C ⇄（全部の諸君）

　學生はどんなもんだいと云つた。どんな事がAから起らうが、Cから起らうが、電氣より早く、ぬかりなく「全體の問題」にすることが出來る、と威張つた。それが、そして一通りきめられた。――實際は、それはさう容易く行はれなかつたが。
「殺されたくないものは來れ！」――とその學生上りの得意の宣傳語だつた。毛利元就の弓矢を折る話や、內務省かのポスターで見たことのある「綱引き」の例をもつてきた。「俺達四、五

人ゐれば、船頭の一人位海の中へタヽキ落すなんか朝飯前だ。元氣を出すんだ。」

「一人と一人ぢや駄目だ。危い。だが、あつちは船長から何からを皆んな入れて十人にならない。處がこつちは四百人に近い。四百人が一緒になれば、もうこつちのものだ。十人に四百人！ 相撲になるなら、やつてみろ、だ。」そして最後に「殺されたくないものは來れ！」だつた。――どんな「ボンクラ」でも「飲んだくれ」でも、自分達が半殺しにされるやうな生活をさせられてゐることは分つてゐたし、（現に、眼の前で殺されてしまつた仲間のゐることも分つてゐる。）それに、苦しまぎれにやつたチョコ〳〵した「サボ」が案外效き目があつたので學生上りや吃りのいふことも、よく聞き入れられた。

一週間程前の大嵐で、發動機船がスクリュを毀してしまつた。それで修繕のために、雜夫長が下船して、四、五人の漁夫と一緒に陸へ行つた。歸つてきたとき、若い漁夫がコッソリ日本文字で印刷した「赤化宣傳」のパンフレットやビラを澤山持つてきた。「日本人が澤山かういふことをやつてゐるよ。」と云つた。――自分達の賃銀や、勞働時間の長さのことや、會社のゴッソリした金儲けのことやストライキのことなどが書かれてゐるので、皆は面白がつて、お互に讀んだり、ワケを聞き合つたりした。然し、中にはそれに書いてある文句に、かへつて反撥を感じて、こんな恐ろしいことなんか「日本人」に出來るか、といふものがゐた。

が、「俺アこれが本當だと思ふんだが。」と、ビラを持つて學生上りのところへ訊きに來た漁夫もゐた。

「本當だよ。少し話大きいどもな。」

「んだつて、かうでもしなかつたら、淺川の性ッ骨直るかな。」と笑つた。「それに、彼奴等からはモットひどいめに合はされてるから、これで當り前だべよ！」

漁夫達は、飛んでもないものだ、と云ひながら、その「赤化運動」に好奇心を持ち出してゐた。

嵐の時もさうだが、霧が深くなると、川崎船を呼ぶために、本船では絶え間なしに汽笛を鳴らした。巾廣い、牛の啼聲のやうな汽笛が、水のやうに濃くこめた霧の中を一時間も二時間もなつた。――然しそれでも。

うまく歸つて來れない川崎船があつた。ところが、そんな時仕事の苦しさからワザと見當を失つた振りをして、カムサッカに漂流したものがあつた。祕密に時々あつた。ロシア領海内に入つて、漁をするやうになつてから、豫め陸に見當をつけて置くと、案外容易く、その漂流が出來た。その連中も「赤化」のことを聞いてくれるものがあつた。

――何時でも會社は漁夫を雇ふのに細心の注意を拂つた。募集地の村長さんや、署長さんに頼んで「模範青年」を連れてくる。勞働組合などに關心のない、云ひなりになる勞働者を選ぶ。「拔け目なく」萬事好都合に！ 然し、蟹工船の「仕事」は、今では丁度逆に、それ等の勞働者を團結――組織させようとしてゐた。いくら「拔け目のない」資本家でも、この不思議な行方までには氣付いてゐなかつた。それは、皮肉にも、未組織の勞働者、手のつけられない「飲んだくれ」勞働者をワザ〳〵集めて、團結することを教へてくれてゐるやうなものだつた。

九

監督は周章て出した。

漁期の過ぎてゆく其の毎年の割に比べて、蟹の高はハッキリ減つてゐた。他の船の樣子をきいてみても昨年よりはもつと成績がいゝらしかつた。二千函は遲れてゐる。――監督は、これ

ではもう今迄のやうに「お釋迦樣」のやうにしてゐたつて駄目だ、と思つた。

本船は移動することにした。監督は絶えず無線電信を盗みきかせ、他の船の網でもかまはずドン〳〵上げさせた。二十哩ほど南下して、最初に上げた澁網には、蟹がモリ〳〵と網の目に足をひつかけてかゝつてゐた。たしかに××丸のものだつた、

「君のお蔭だ。」と、彼は監督らしくなく、局長の肩をたゝいた。

網を上げてゐる所を見付けられて、發動機が這々の態で逃げてくることもあつた。他船の網を手當り次第に上げるやうになつて、仕事が尻上りに忙がしくなつた。

> 仕事を少しでも怠けたときには大燒きを入れる。
> 組をなして怠けたものにはカムサツカ體操をさせる。
> 罰として賃銀棒引き。
> 函館へ歸つたら、警察に引き渡す。
> いやしくも監督に對し少しの反抗を示すときは××されるものと思ふべし。
>
> 淺川監督
> 雜夫長

この大きなビラが工場の降り口に貼られた。監督は彈をつめッ放しにしたピストルを始終持つてゐた。飛んでもない時に、皆の仕事をしてゐる頭の上で、鷗や船の何處かに見當をつけて、「示威運動」のやうに打つた。ギョッとする漁夫を見て、ニヤ〳〵笑つた。それは全く何かの拍子に「本當に」打ち殺されたさうな不氣味な感じを皆にひらめかした。

水夫、火夫も完全に動員された。勝手に使ひまはされた。船長はそれに對して一言も云へなかつた。船長は「看板」になつてさへゐてくれゝば、それで立派な一役だつた。前にあつたことだつた――領海内に入つて漁をするために、船を入れるやうに船長が強要された。船長は船長としての公の立場から、それを犯すことは出來ないと頑張つた。

「勝手にしやがれ！」「頼まないや！」と云つて、監督等が自分達で、船を領海内に轉錨さしてしまつた。ところが、それが露國の監視船に見付けられて、追跡された。そして訊問になり、自分がしどろもどろになると、「卑怯」にも退却してしまつた。「さういふ一切のことは、船としては勿論船長がお答へすべきですから……。」無理矢理に押しつけてしまつた。全く、この看板は、だから必要だつた。それだけでよかつた。

そのことがあつてから、船長は船を函館に歸さうと何べんも思つた。が、それをさうさせない力が――資本家の力が、やつぱり船長をつかんでゐた。

「この船全體が會社のものなんだ、分つたか！」ウアハヽヽヽヽと、口を三角にゆがめて、背のびするやうに、無遠慮に大きく笑つた。

――「糞壺」に歸つてくると、吃りの漁夫は仰向けにでんぐり返つた。殘念で、殘念で、たまらなかつた。漁夫達は、彼や學生などの方を氣の毒さうに見るが、何も云へない程ぐツしやりつぶされてしまつてゐた。學生の作つた組織も反古のやうに、役に立たなかつた。――それでも學生は元氣を割合に保つてゐた。

「何かあつたら跳ね起きるんだ。その代り、その何かをうまくつかむことだ。」と云つた。

「これでも跳ね起きれるかな。」――威張んなの漁夫だつた。

――かな――？馬鹿。こつちは人數が多いんだ。恐れることはないさ。それに彼奴等が無茶なことをすればする程、今のうちこそ内へ、内へとこもつてゐるが、火藥よりも強い不平と不滿が

皆の心の中に、つまりいゝだけつまつてゐるんだ。――俺はそいつを頼りにしてゐるんだ。」

「道具立てはいゝな。」威張んなは、「糞壺」の中をグル／＼見廻して、

「そんな奴等がゐるかな。どれも、これも…。」愚癡ツぽく云つた。

「いゝ、いゝ、愚癡ツぽかつたら――もう、最後だよ。」

「見れ、お前だけだ、元氣のえゝのア。――今度事件起してみれ、生命がけだ。」

學生は暗い顔をした。「さうさ…。」と云つた。

監督は手下を連れて、夜三回まはつてきた。三、四人固つてゐると、怒鳴りつけた。それでも、まだ足りなく、祕密に自分の手下を「糞壺」に寢らせた。

――「鎖」が、たゞ、眼に見えないだけの異ひだつた。皆の足は歩くときには、吋太の鎖を現實に引きずツてゐるやうに重かつた。

「俺ア、キツト殺されるべよ。」

「ん。んでも、どうせ殺されるツ分つたら、その時アやるよ。」

芝浦の漁夫が、

「馬鹿!」と、横から怒鳴りつけた。「殺されるツて分つたら? 馬鹿ア、何時だ、それア。――今、されてゐるんでねえか。小刻みによ。彼奴等はな上手なんだ。ピストルは今にもうつやうに、何時でも持つてゐるが、なか／＼そんなヘマはしないんだ。あれア「手」なんだ。――分るか。彼奴等は、俺達を殺せば、自分等の方で損するんだ。目的は――本當の目的は、俺達をウンと働かせて、締木にかけて、ギイ／＼搾り上げてしこたま儲けることなんだ。そいつを今俺達は毎日やられてるんだ。――どうだ、この滅茶苦茶は、まるで蠶に食はれてゐる桑の葉のやうに、俺達の身體が殺されてゐるんだ。」

「んだな!」

「んだな、も糞もあるもんか。」厚い掌に、煙草の火を轉がした。「ま、待つてれ、今に、畜生!」

あまり南下して、身體の小さい女蟹ばかり多くなつたので、場所を北の方へ移動することになつた。それで皆は殘業をさせられて、少し早目に(久し振り!)に仕事が終つた。

皆が「糞壺」に降りて來た。

「元氣ねえな。」芝浦だつた。

「こら、足ば見てけれや。ガク、ガクツつて、段ば降りれなくなつたので。」

「氣の毒だ。それでもまだ一生懸命働いてやろツてんだから。」

「誰が!――仕方ねんだべよ。」

芝浦が笑つた。「殺される時も、仕方がねえか。」

「……………。」

「まあ、このまゝ行けば、お前こゝ四、五日だな。」

相手は拍子に、イヤな顔をして、黄色ツぽくムクンだ片方の頬と眼蓋をゆがめた。そして、だまつて自分の棚のところへ行くと、端へ膝から下の足をブラ下げて、關節を掌刀でたゝいた。

――下で、芝浦が手を振りながら、しやべつてゐた。吃りが、身體をゆすりながら、相槌を打つた。

「…いゝか、まア假りに金持が金を出して作つたから、船があるとしてもいゝさ。水夫と火夫がゐなかつたら動くか。蟹が海の底に何億つてゐるさ。假りにだ、色々な仕事をして、此處まで出掛けてくるのに、金持が金を出せたからとしてもいゝさ。俺達が働かなかつたら、一匹の蟹だつて、金持の懷に入つて行くか。いゝが、俺達が此一夏こゝで働いて、それで一體ど

の位金が入つてくる。ところが、金持はこの船一艘で純手取り四、五十萬圓ッて金をせしめるんだ。――さあ、んだら、その金の出所だ。無から有は生ぜじだ。――分るか、なア、皆んな俺達の力さ。――んだから、さう今にもお陀佛するやうな不景氣な面してるなんて云ふんだ。うんと威張るんだ。底の底のことになれば、うそでない、あつちの方が俺達をおッかながつてるんだ　ビク〳〵すんな。

水夫と火夫がゐなかつたら、船は動かないんだ。――勞働者が働かねば、ビタ一文だつて、金持の懷にや入らないんだ。さつき云つた船を買つたり、道具を用意したり、支度をする金も、やつぱり他の勞働者が血をしぼつて、儲けさせてやつた――俺達からしぼり取つて行きやがつた金なんだ。――金持と俺達とは親と子なんだ……。」

監督が入つてきた。

皆ドマついた恰好で、ゴソ〳〵し出した。

十

空氣が硝子のやうに冷たくて、塵一本なく澄んでゐた。――二時で、もう夜が明けてゐた。カムサッカの連峯が金紫色に輝いて、海から二、三寸位の高さで、地平線を南に長く走つてゐた。小波が立つて、その一つ〳〵らけて、夜明けらしく、寒々と光つてゐた。――それが入り亂れて碎け、入り交つて碎ける。その度にキラ〳〵と光つた。鷗の啼聲が（何處にゐるのか分らずに）聲だけしてゐた。――さわやかに、寒かつた。荷物にかけてある、油のにじんだズックのカヷアが時々ハタ〳〵となつた。分らないうちに、風が出てきた。

半纏の袖に、カヾシのやうに手を通しながら、漁夫が段々を上つてきて、ハッチから首を出した。首を出したまゝ、はじかれたやうに叫んだ。

「あ、兎が飛んでる。――これア大暴風になるな。」

三角波が立つてきてゐた。カムサッカの海に慣れてゐる漁夫には、それが直ぐ分る。

「危え、今日休みだべ。」

一時間程してからだつた。

川崎船を降すウインチの下で、其處、此處七、八人づつ漁夫が固つてゐた。川崎船はどれも半降しになつたまゝ、途中で搖れてゐた。肩をゆすりながら海を見て、お互云ひ合つてゐる。

一寸した。

「やめた〳〵！」

「糞でも喰え、だ！」

誰かキッカケにさういふのを、皆は待つてゐたやうだつた。

肩を押し合つて、「おい、引き上げるべ！」と云つた。

「ん。」

「ん、ん！」

一人がしかめた眼差しで、ウインチを見上げて、「然しな……。」と躊躇つてゐる。

行きかけたのが、自分の片肩をグイとしやくつて、「死にたかつたら、獨りで行げよ！」と、ハキ出した。

皆は固つて歩き出した。誰か「本當にいゝかな。」と、小聲で云つてゐた。二人程、あやふやに、遲れた。

次のウインチの下には、船夫達は立ちどまつたまゝでゐた。彼等は第二號川崎の連中が、こつちに歩いてくるのを見ると、その意味が分つた。四、五人が聲をあげて手を振つた。

「やめだ、やめだ！」

「ん、やめだ！」

その二つが合はさると、元氣が出てきた。どうしようか分らないでゐる遲れた二、三人は、

まぶしさうに、こつちを見て、立ち止つた。皆が第五川崎のところで、又一緒になつた。それ等を見ると、遅れたものはブッ〳〵云ひながら後から、歩き出した。

吃りの漁夫が振りかへつて、大聲で呼んだ。

「しつかりせツ!」

雪だるまのやうに、漁夫達のかたまりがコブをつけて、大きくなつて行つた。皆の前や後を、學生や吃りが行つたり來たり、しきりなしに走つてゐた。「い、か、はぐれないことだど!何よりそれだ。もう、大丈夫だ。もう――!」

煙筒の側に、車座に坐つて、ロープの繕ひをやつてゐた水夫が、のび上つて、

「どうした。オ――イ?」と怒鳴つた。

皆はその方へ手を振りあげて、ワアーッと叫んだ。上から見下してゐる水夫達には、それが林のやうに搖れて見えた。

「よオし、さ、仕事なんてやめるんだ!」

ロープをさつさと片付け始めた。「待つてたんだ!」

そのことが漁夫達の方にも分つた。二度、ワアーッと叫んだ。

「まづ糞壺さ引きあげるべ。さうするべ。――非道え奴だ。ちやんと大暴風になること分つてゐて、それで船を出させるんだからな。――人殺しだべ!」

「あつたら奴に殺されて、たまるけア!」

「今度こそ、覺えてれ!」

殆んど一人も殘さないで、糞壺へ引きあげてきた。中には「仕方なしに」随いて來たものもゐるにはゐた。

――皆のドカ〳〵ッと入り込んできたのに、薄暗いところに寢てゐた病人が、吃驚して板のやうな上半身を起した。ワケを話してやると、見る〳〵眼に涙をにじませて何度も、何度も頭を振つてうなづいた。

吃りの漁夫と學生が、機關室の繩梯子のやうなタラップを下りて行つた。急いでゐたし、慣れてゐないので、何度も足をすべらして、危く、手で吊下つた。中はボイラーの熱でムンとして、それに暗かつた。彼等はすぐ身體中汗まみれになつた。汽鑵の上のストーヴのストロールのやうな上を渡つてまたタラップを下つた。下で何か聲高にしやべつてゐるのが、ガン、ガンと反響してゐた。――地下何百尺といふ地獄のやうな竪坑を初めて下りて行くやうな不氣味さを感じた。

「これもつれえ仕事だな。」

「んよ、それに又、か、甲板さ引つぱり出されて、か、蟹たゝきでも、さ、されたら、たまつたもんでねえさ。」

「大丈夫、火夫も俺達の方だ!」

「ん、大丈――夫!」

ボイラーの腹を、タラップで下りてゐた。

「熱い、熱い、たまんねえな。人間の燻製が出來さうだ。」

「冗談ぢやねえど。今火たいてゐねえ時で、こんだんだど。燃いてる時なんて!」

「んか、な、んだべな。」

「印度の海渡る時ア、三十分交代で、それでヘナヘナになるてんだとよ。ウッカリ文句をぬかした一機が、シャベルで滅多矢鱈にたゝきのめされて、あげくの果て、ボイラーに燃かれてしまふことがあるんだとよ。――さうでもしたくなるべよ!」

「んな……。」

汽鑵の前では、石炭カスが引き出されて、それに水でもかけたらしく、濛々と灰が立ちのぼつてゐた。その側で、半分裸の火夫達が、煙草をくはへながら、膝を抱へて話してゐた。薄暗い中で、それはゴリラがうづくまつてゐるのと、そつくりに見えた。石炭庫の口が半開きに

なつて、ひんやりした眞暗な内を、不氣味に覗かせてゐた。

「おい。」吃りが聲をかけた。

「誰だ？」上を見上げた。——それが「誰だ——誰だ、——誰だ。」と三つ位に響きかへつて行く。

そこへ二人が降りて行つた。二人だといふことが分ると、

「間違つたんでねえか、道を。」と、一人が大聲をたてた。

「ストライキやつたんだ。」

「ストキがどうしたつて？」

「ストキでねえ、ストライキだ。」

「やつたか！」

「さうか。このまゝ、どん〳〵火でもブッ燃いて、函館さ歸つたらどうだ。面白いど。」

吃りは「しめた！」と思つた。

「んで、皆勢揃えした所で、畜生等にねぢ込まうツて云ふんだ。」

「やれ、やれ！」

「やれ〳〵ぢやねえ。やらう、やらうだ。」

學生が口を入れた。

「んか、んか、これア惡かつた。——やらうやらう！」火夫が石炭の灰で白くなつてゐる頭をかいた。

皆笑つた。

「お前達の方、お前達ですつかり一纏めにして貰ひたいんだ。」

「ん、分つた。大丈夫だ。何時でも一つブンなぐつてやりてえと思つてる連中ばかりだから。」

——火夫の方はそれでよかつた。

雜夫達は全部漁夫のところに連れ込まれた。一時間程するうちに、火夫と水夫も加つてきた。皆甲板に集つた。「要求條項」は吃り、學生、芝浦、威張んないが集つてきめた。それを皆の面前で、彼等につきつけることにした。

監督達は、漁夫等が騷ぎ出したのを知ると——それからちつとも姿を見せなかつた。

「をかしいな。」

「これア、をかしい。」

「ピストル持つてたつて、かうなつたら駄目だべよ。」

吃りの漁夫が、一寸高い處に上つた。皆は手を拍いた。

「諸君、たうとう來た！　長い間、長い間俺達は待つてゐた。俺達は半殺しにされながらも、待つてゐた。今見ろ、と。しかし、たうとう來た。

「諸君、まづ第一に、俺達は力を合はせることだ。俺達は何があらうと、仲間を裏切らないことだ。これだけさへ、しつかりつかんでゐれば、彼奴等如きをモミつぶすは、蟲ケラより容易いことだ——そんならば、第二には何か。諸君、第二にも力を合はせることだ。落伍者を一人も出さないといふことだ。一人の裏切者、一人の寢がへり者も出さないといふことだ。たつた一人の寢がへりものは、三百人の命を殺すといふ事を知らなければならない。一人の寢がへり……（分つた、分つた。……「大丈夫だ。」「心配しないで、やつてれ。」）……

俺達の交渉が彼奴等をタヽキのめせるか、その職分を完全につくせるかどうかは、一に諸君の團結の力に依るのだ。」

續いて、火夫の代表が立ち、水夫の代表が立つた。火夫の代表は、普段一度も云つたことのない言葉をしやべり出して、自分でどまついてしまつた。つまる度に赤くなり、ナッパ服の裾を引張つてみたり、すり切れた穴のところに手を入れてみたり、ソハ〳〵した。皆はそれに氣付くとデッキを足踏して笑つた。

「……俺アもうやめる。然し、諸君、彼奴等はブンなぐつてしまふべよ！」と云つて、壇を下り

た。
　ワザと、皆が大げさに拍手した。
「其處だけでよかつたんだ。」後で誰かひやかした。それで皆は一度にワッと笑ひ出してしまつた。
　火夫は、夏の眞最中にボイラーの柄の長いシャベルを使ふときよりも、汗をびつしよりかいて、足元さへ賴りなくなつてゐた。降りて來たとき、「俺何しやべつたかな？」と仲間にきいた。
　學生が肩をたゝいて「いゝ、いゝ。」と云つて笑つた。
「お前だ、惡いのア。別にゐたのによ、俺でなくたつて……。」
「皆さん、私達は今日の來るのを待つてゐたんです。」――壇には十五、六歳の雜夫が立つてゐた。「皆さんも知つてゐる、私達の友達がこの工船の中で、どんなに苦しめられ、半殺しにされたか。夜になつて薄ッぺらい蒲團に包つてから、家のことを思ひ出して、よく私達は泣きました。此處に集つてゐるどの雜夫にも聞いてみて下さい。一晩だつて泣かない人はゐないのです。そして又一人だつて、身體に生キズのないものはゐないのです。もう、こんな事が三日も續けば、キット死んでしまふ人もゐますよ。――ちよつとでも金のある家ならば、まだ學校に行けて、無邪氣に遊んでゐれる年頃の私達は、こんなに遠く……。（聲がかすれる。吃り出す。抑へられたやうに靜かになつた。）然しもういゝんです。大丈夫です。大人の人に助けて貰つて、私達には憎い〱、彼奴等に仕返ししてやることが出來るのです……。」
　それは嵐のやうな拍手を惹き起した。手を夢中にたゝきながら、眼尻を太い指先きで、ソッと拭つてゐる中年過ぎた漁夫がゐた。
　學生や、吃りは、皆の名前をかいた。誓約書を廻して、捺印を貰つて歩いた。
　學生二人、吃り、威張んな、芝浦、火夫三名、水夫三名が、「要求條項」と「誓約書」を持つて、船長室に出掛けること、その時には表で示威運動をすることが決つた――陸の場合のやうに、住所がチリ〲バラ〲になつてゐないこと、それに下地が十分にあつたことが、スラ〲と運ばせた。ウソのやうに、スラ〲纏つた。
「をかしいな、何んだつて、あの鬼顏出さないんだべ。」
「やつきになつて、得意のピストルでも打つかと思つてたどもな。」
　三百人は吃りの音頭で、一齊に「ストライキ萬歲」を三度叫んだ。學生が「監督の野郎、この聲聞いて震へてるだらう！」と笑つた。――船長室へ押しかけた。
　監督は片手にピストルを持つたまゝ、代表を迎へた。
　船長、雜夫長、工場代表……などが、今迄たしかに何か相談をしてゐたらしいことがハッキリ分るそのまゝの恰好で、迎へた。監督は落付いてゐた。
　入つてゆくと、
「やつたな。」とニヤ〱笑つた。
　外では、三百人が重なり合つて、大聲をあげ、ドタ、ドタ足踏みをしてゐた。監督は「うるさい奴だ！」とひくい聲で云つた。がそれ等には氣もかけない樣子だつた。代表が興奮して云ふのを一通りきいてから、「要求條項」と、三百人の「誓約書」を形式的にチラ〱見ると、
「後悔しないか。」と、拍子拔けのするほど、ゆつくり云つた。
「馬鹿野郞ッ！」と吃りがいきなり監督の鼻ッ頭を毆りつけるやうに怒鳴つた。
「さうか、いゝ。――後悔しないんだな。」
　さう云つて、それから一寸調子をかへた。「ち

や聞け。いゝか、明日の朝にならないうちに、色よい返事をしてやるから。」——だが、云ふより早かつた、芝浦は監督のピストルをタヽキ落すと、拳骨で頬をなぐりつけた。監督がハッと思つて、眼を押へた瞬間、吃りがキノコのやうな圓椅子で横なぐりに足をさらつた。監督の身體はテーブルに引つかゝつて、他愛なく横倒れになつた。その上に四本の足を空にして、テーブルがひつくりかへつて行つた。

「色よい返事？　この野郎、フザけるな！　生命にかけての問題だんだ！」

芝浦は幅の廣い肩をけはしく動かした。水夫、火夫、學生が二人をとめた。船長室の窓が凄い音を立てて壞れた。その瞬間、「殺しちまへ！」「打ッ殺せ！」「のせ！　のしちまへ！」外からの叫び聲が急に大きくなつて、ハッキリ聞えてきた。——何時の間にか、船長や雜夫長や工場代表が室の片隅の方へ、固まり合つて棒杭のやうにつッ立つてゐた。顔の色がなかつた。

ドアーを壞して、漁夫や、火、水夫が、雪崩れ込んできた。

晝過ぎから、海は大嵐になつた。そして夕方近くになつて、だん〳〵靜かになつた。

「監督をたゝきのめす！」そんなことがどうして出來るもんか、さう思つてゐた。ところが！　普段自分達の「手」でそれをやつてのけたのだ。普段おどし看板にしてゐたピストルさへ打てなかつたではないか。皆はウキ〳〵と燥いでゐた。——代表達は頭を集めて、これからの色々な對策を相談した。「色よい返事」が來なかつたら、「覺えてろ！」と思つた。

薄暗くなつた頃だつた。ハッチの入口で、見張りをしてゐた漁夫が、驅逐艦がやつてきたのを見た。——周章てて「糞壺」に驅け込んだ。

「**しまつた**ッ!!」學生の一人がバネのやうにはね上つた。見る〳〵顔の色が變つた。

「感違ひするなよ。」吃りが笑ひ出した。「この、俺達の狀態や立場、それに要求などを、士官達に詳しく說明して援助をうけたら、かへつてこのストライキは、有利に解決がつく。分りきつたことだ。」

外のものも、「それアさうだ。」と同意した。

「我帝國の軍艦だ。俺達國民の味方だらう。」

「いや、いや……」學生は手を振つた。餘程のショックを受けたらしく、脣を震はせてゐる。言葉が吃つた。

「國民の味方だつて？……いや〳〵……。」

「馬鹿な！——國民の味方でない帝國の軍艦、そんな理窟なんてある筈があるか!?」

「驅逐艦が來た！」「驅逐艦が來た！」といふ興奮が學生の言葉を無理矢理にもみ潰してしまつた。

皆はドヤ〳〵と「糞壺」から甲板にかけ上つた。そして聲を揃へていきなり、「帝國軍艦萬歲」を叫んだ。

タラップの昇降口には、顔と手にホータイをした監督や船長と向ひ合つて、吃り、芝浦、威張んな、學生、火、水夫等が立つた。薄暗いので、ハッキリ分らなかつたが、驅逐艦からは三艘汽艇が出た。それが横付けになつた。十五、六人の水兵が一杯つまつてゐた。それが一度にタラップを上つてきた。

叫ッ！　付劍をしてゐるではないか！　そして帽子の顎紐をかけてゐる！

「しまつた！」さう心の中で叫んだのは、吃りだつた。

次の汽艇からも十五、六人。その次の汽艇からも、やつぱり銃の先きに、付劍した、顎紐をかけた水兵！　それ等は海賊船にでも躍り込むやうに、ドカ〳〵ッと上つてくると、漁夫や水、火夫を取り圍んでしまつた。

（此の頁全部削除）

すぎるし、出來高だつて問題にならない程少ないし。…うまくやつたら、これア案外大丈夫だど。」

「大丈夫だよ。それに不思議に誰だつて、ビクビクしてゐないしな。皆、畜生！ッて氣でゐる。」

「本當のこと云へば、そんな先の成算なんて、どうでもいゝんだ。――死ぬか、生きるか、だからな。」

「ん、もう一回だ！」

そして、彼等は、立ち上つた。もう一度！

附記

この後のことについて、二、三附け加へて置かう。

イ、二度目の、完全な「サボ」は、マンマと成功したといふこと。「まさか」と思つてゐた、面喰つた監督は、夢中になつて無電室にかけ込んだが、ドアーの前で立ち往生してしまつたこと、どうしていゝか分らなくなつて。

ロ、漁期が終つて、函館へ歸港したとき「サボ」をやつたりストライキをやつた船は、博光丸だけではなかつたこと。二、三の船から「赤化宣傳」のパンフレットが出たこと。

ハ、それら監督や雜夫長等が、漁期中にストライキの如き不祥事を惹起させ、製品高に多大の影響を與へたといふ理由のもとに、會社があの忠實な犬を「無慈悲」に涙銭一文くれず、（漁夫達よりも慘めに！）首を切つてしまつたといふこと。面白いことは「あ――あ、口惜しかつた！俺ア今迄、畜生、にだまされてゐた！」と、あの監督が叫んだといふこと。

ニ、そして「組織」「鬪爭」――この初めて知つた偉大な經驗を荷つて、漁夫、年若い雜夫等が警察の門から色々な勞働の層へ、それ〲入り込んで行つたといふこと。

――この一編は、「殖民地に於ける資本主義侵入史」の一頁である。

――一九二九・三・三〇――

年譜

ぼくは一九〇三年秋田の田舎に生れた。母は舊曆八月二十三日だと云つてゐるが、村役場の帳面には十二月一日となつてゐる。ゴーゴリーの主人公になりさうな、この上もなくのんびりした村長さんでもゐたらしい。父は自作兼小作農で、母は日雇の娘だつた。農閑期には二人で近所に建つてゐる土工のトロッコ押しに出掛けたりしたさうだ。切り立つた崖鼻の鋭いカーヴを、ブレーキを締めながら疾走したときの事を、母は時々ぼくに話す。

ぼくが四歳の頃、食へなくなつたぼく達の一家は北海道小樽に移住した。場末の町で駄菓子屋を始めた。爾來ぼくは其處に二十何年住んだわけである。だが、生活は依然として食ふや食はずだつた。ぼくは學校へ通ふ長い道を、鑛山を發見して、母を人力車へ乘せてやることばかりを考へてゐた。

姉は火山灰會社に働きに行つて、眞白になつて歸つてくると、長いことかゝつて髮を洗つてゐたことや、妹が石炭ガスの捨場へコークスを拾ひに行つたことを覺えてゐる。――だが、親類のものが、ぼくを特に學校へ出してくれた。小樽商業から小樽高商に通つた。その間パン工場で働いたり、潛水夫のポンプ押しなどをしたこともある。ぼくは、そして、金持になることを本氣に考へてゐた。學校を出てから、北海道拓殖銀行小樽支店へ勤務した。一九二四年だつた。

丁度その頃、ぼくは小樽高商の所謂「軍教反對問題」に關係した友人から「マルクス」や「レーニン」や當時評判だつた「福本和夫」の著作を讀むことをすゝめられた。なほその上に、山本懸藏の立候補、種々の研究會、あの「三・一五事件」等々が、そのぼくの傾向を決定的なものにした。ぼくは又プロレタリア藝術理論や葉山嘉樹などを貪り讀んだ。

ぼくは『一九二八年三月十五日』を(この作をまづ普通云ふ意味で處女作とすれば。)「戰旗」(一九二八年十一、十二月號)に發表した。その以後ぼくは重な作品を次のやうに書いてゐる。

『蟹工船』(「戰旗」一九二九年五、六月號)
『不在地主』(「中央公論」一九二九年十一月號)
『救援ニュースNo.18附錄』(「戰旗」一九三〇年二月號)
『暴風警戒報』(「海潮」一九三〇年二月號)
『工場細胞』(「改造」一九三〇年四、五、六月號)
『東倶知安行』(「改造」一九三〇年十二月號。これは但し舊作。)

其他『同志田口の感傷』(「週刊朝日」)、『市民のために!』(「文藝春秋」)等がある。『蟹工船』は新築地劇團によつて帝劇で、『不在地主』は左翼劇場によつて市村座で公演されたし、二三の作品が支那、ソヴェート・ロシア等に飜譯された。

ぼくは一九三〇年三月末小樽から上京した。そして六月末から翌年一月末迄監獄にゐて、四日前に保釋になつた。現在ぼくは二つの事件で起訴されてゐる。

ぼくは今迄のどの作品に對しても實にアイソをつかしてゐるので、これからこそヅバ拔けたものを書きたいと思つてゐる。

――一九三一・一・二五記――

暴力

荒っぽい村

休む軌道

色彩

反逆の呂律

武田麟太郎

暴力

1 白い手

家畜が列んでゐる。獸醫は一匹づつ丁寧に檢査した。食用に差しつかへのないのには、べタベタと紫の判を押した。——今、青年たちは、その家畜のやうに裸體で押し列んでゐた。彼らも檢査されるのだ。カーキ色で平腰の軍人が、一人づつを丁寧に調べあげた。そして、彼らの役に立つのには、合格の判をペタリと押した。

杉平治も二十一歲になつてゐた。强制的に彼も亦この檢査場に連れて來られた。

「何と云ふ身體だ——不忠者め」

軍醫はピンとはねた髭をしかめて呶鳴つた。そしてパチパチと薄い平治の胸を叩き、白い細い腕をねぢあげた。この身體は明かに用には立たない。平治は助かつた。

それから永い間、檢査場の板の間に起立したまま、青年たちは待たされた。午後一時になつて、將校が訓示をはじめた。

それはアメリカの軍備についてであつた。ロシアでは共產主義が不可能なので、資本主義制度に立ちかへつた、とその肩章をキラキラさせた男は云つた。日本でも一旦緩急がある場合にはバスはすべて陸軍の手に收められ、改正された軍用道路の上を驅けることができる、と彼は威張つた。「都市計畫にはそんな重要な意味がふくまれてゐるのを忘れてはいけない」——

彼は明かに××について語つたのだ。

この演說の間に平治は背中に强い視線を受けてゐるのを感じた。ふりむく。すると、髪の長い、太い眼鏡をかけた、青年がゐた。彼は猛々しい、脂の浮いた顏をしてゐた。ぢつと見つめるとその容貌の中から、中等の初年級の時、同じ組だつた三好の稚い顏が浮び出て來た。彼は大へん變化してゐる。

歸途、三好は平治を喫茶店につれて行つた。そして盛に煙草を吸ひ、激しい口調で、彼の最近について語り出した。それは東京に於ける彼や仲間の生活であつた。彼は支配者に對する反抗について云つた一切。の政治權力の××××××語つた。勞働者の暴力について云つた。××××××云つた。

きいてゐるうちに、平治は飛びかかつて來る恐ろしい黑い機關車のやうなものを感じた。それらの新しい言葉は彼を壓倒した。そして永い間忘れてゐた激情の思ひ出が彼の胸に歸つて來た。幼年時代に彼が好いた傳奇小說の中に「魯國虛無黨員」といふ言葉を見出した。彼はこれにある異樣な心のときめきをおぼえた。

又、ある日の新聞に、その頃高名な無政府主義者が情婦に刺された記事が載つた。「社會主義者——氏」と書かれてあつた。彼には「社會主義者」の意味を理解することはできなかつた。だが、その文字は烈しく彼を魅惑した。——今、それらの記憶が歸つて來たのだ。

「うむ」と彼は云つた。

三好はつづけて、こちらで捕縛されてゐる彼の同志たちに差し入れをしなければならないと云つた。その同志たちは、將軍を屠殺しようとしたのだ。

「屠殺！」

平治は繁榮する大通りの裏にある自家に歸つて來た。家の中は暗かつた。そして坊主は晝寝

をしてゐた。この坊主は死人の絶え間なかつた杉の家の、佛守りとして、寺からやつて來てゐたのだ。彼は平治の嬰兒の時代にやつて來た。そして、何時の間にか家の總支配權を握つてゐた。彼が仲介になつて總本山の方へ毎年多額の寄進をさせられた。そのために僅かの財產も次第に殘り少くなる。總本山の法主の豪奢な放蕩は新聞記事を賑してゐた。杉はこの坊主を極端に憎んだ。だが杉の祖母は「極樂に行ける」と樂しんでゐた。その祖母は奥の間で年中蒲團の中にゐる。彼女の身體はもう動かなかつた。やがて彼女も死ぬにちがひない。すると杉の家では平治だけが殘るのだ。

　平治は殺伐な顏をして、佛壇の列んでゐる部屋を通つて、奥の間に來た。老婆は彼が兵隊にとられなかつたことを聞き、「やれ、やれ」と悦んだ。

　東京へ去つた三好からは、毎月彼らの定期刊行物を送つて來た。平治はその薄い雜誌の理論については考へるよりも感じることができた。

　彼の今まで知らなかつた世界についての興味が起つた。彼は時々遠くの工場街へ出かけて行つた。彼はそこで「勞働者」に逢へるだらうと考へた。だが、何時も工場は大きな灰色の壁で包まれてゐた。彼の視線は內部までとどかなかつた。煙は太く地にまで下りて來て彼の鼻を痛めた。大工場の入口にある交番では若い巡査が、風呂歸りの近所のアイマイ屋の女と冗談を云つては、野卑に笑つてゐた。どこもここも殺風景だ。街角に小さな寫眞屋がある。彼は近づいてガラスの飾窓を覗きこんだ。五人の女給姿の寫眞があつた。そのうちの一人はエプロンの上に、三好が送つてくれる無政府主義の雜誌をのせてゐた。その横にある鐵工組合の爭議記念の大きな寫眞がある。だが、それらの勞働者の顏は、平治の想像の丁度反對であつた。彼は失望した。何と云ふ精氣のない！　何といふ鈍感さうな！

　それから夏が來た。祖母は次第に衰弱した。彼は老人が死ぬことには少しの憐みも持つことはできなかつた。醜い彼らの姿が消えて了ふ方が、世界は少しでも美しく見えるだらう。――老婆は大袈裟に苦痛を訴へた。平治はそれをきいてゐると海へ行きたくなつた。

　そして海へ來た。海は廣くて、光に滿ちてゐた。男女の皮膚も生々してゐた。彼は泳げない。だが脫衣するために、葭簀張りの中にはひつた。そこで衣類を預つてくれるのだ。彼はキモノを取りながら、番人を見た。番人は少女であつた。少女は男のやうにタオルを首に捲き、ハモニカを吹いてゐた。頰と圓い肩とは栗色に燒けてゐる。眼はつりあがり、白眼がちだ。

　彼は海に出て、冷たい水の中で、その少女について考へた。それから濡れて光る身體のまま、砂にはらばつて葭簀の中を覗つた。少女はキモノ籠を整理しながら、彼を睥んだ。その大きな眼は極めて非女性的であつた。平治は「これは美しい」と思つた。

　畑の眞中に高いコンクリートの塀が聳えめぐらされてゐた。その周圍は五町もあるだらう。その塀の中に監獄があつた。外界から遮斷された中では、腰に鎖をつけた囚人が働いてゐた。しかし表からは靜寂だけしか見られなかつた。

　夜、月が昇り、その灰色の塀は一層巨大に、怪しく見えた。それに沿つて少女が走つた。平治が追ひかける。遊戲だ。少女は逃れて土手に來た。土手の下には川が流れて音を立ててゐた。上には長々と鐵橋がかかつてゐる。夏草の中に少女は倒れた。息切れをしながら平治が飛びこ

んで來た。突然、明るい窓を持つた列車が、鐵橋の上を音を立てて走つた。

その夜晩く、平治はしみこんだ草の香に、鼻をクンクン云はせて歸つて來た。すると老婆は死んでゐた。

坊主と平治とが暗い家に殘つた。二人は共に生活することはできないだらう。二人は毎日睨みあつた。だが、この暗い家も潰れる時が來た。都市計畫の地圖で、ここは大きな道路に指定されたのだ。――こんな家は早くつぶされた方がよい！

立退きの代償として若干の貨幣が貰へることになつた。坊主はそれを區役所に受取りに行つた。そしてその金子を持つたまま逃走した。これは愉快な解決であつた。平治はのびのびとして、家財を賣り始めた。

少女は海水浴場が秋になつたので、自分の家に歸つて來た。彼はそこでセツ子と呼ばれてゐた。家には義父と親戚の男とがゐた。どちらも大工だ。その親戚の男と彼女とは結婚することになつてゐたのだ。

「あんたは私がその七造さんと一緒になつても構はないの」と少女は云つた。

どうしていけないのか。平治はこれは普通の愛ではないと思つた。彼女を愛すると云ふのは、こんな風ではいけないのか。――彼には動物的な愛情は感じることができた。だが、それ以上のものはなかつた。

少女はタイピストになつたと云つた。彼は彼女がつとめてゐるビルディングに出かけて行つた。すると、彼女はエレベーターの運轉をしてゐた。

「どちらも指を使ふ職業ですわ」と氣取つて東京語を使つた。そして、彼らは六階の間を往復して、しやべりつづけた。

冬から春が來た。たうとう古い家を立ち退く期限が來た。平治はこのまま東京へ行つて了はうと考へた。そして、セツ子には默つて出掛けることにした。彼女は大袈裟に自分を悲劇の主人公にして芝居じみて泣くだらう――そのことは堪へられなかつたから。

悪いことに、その朝、セツ子は笑ひながらやつて來た。彼は口も利かずに家を出た。道路になつて了ふこの生れた家を出た。停車場はこの都會の北の端にある。彼はそこまで歩いて行かうと考へた。そして歩いて行つた。すると、少女は口笛を吹きながら、彼の先になつたり、後になつたりしてついて來た。途中で、風は雨に變つた。最初の雨滴がセツ子の髮の毛の上に落ちた。さし延ばした平治の掌の上に、つづいて圖太く雨は降り出した。彼は少しく考へてゐたが、乘物にも乘らずに、どんどん歩いて行つた。少女も草履をペタペタ云はせて、ずぶ濡れになつてついて來た。停車場へ來た。その中は人いきれでムッとしてゐた。短銃をさげた憲兵が人々を睨み廻す。平治は人々と荷物の間を通つて切符を買つた。

「あんた、どこへ行くの」

セツ子はキョトンとして訊ねた。平治は切符を見せた。彼女はそれを見ると赤くなつた。

「あんた！」と云つて彼の顔を見た。それから悲しさうな顔に變つた。

彼は改札口の方へ行つた。セツ子は駈けて行き、切符を買つた。だが、彼女には見送りの入場券しか買へない。

歩廊の中まで雨は横に降りこんで來た。汽車は來た。彼は乘込む前に少女を見た。セツ子はぐつと口を食ひしばつて低い聲で云つた。

「あんたは、たうとう私を捨てたのね」

「捨てる？」平治は何か云はうとした。だが、

その前に手でポケットの中で貨幣のいくらかを掴んだ。とつさに、彼はそれを彼女に突き出した。

「傘でも買つて歸れ」

　そして乘込んだ。こんでゐた。歩廊の反對側に席を見つけた。前には朝鮮人がゐて、キヨロキヨロしてゐた。窓の外では、セツ子は銀貨を手にしたまゝ、ぼんやりしてゐた。やがて發車した。彼女の大きく見開かれた眼が去り、長い歩廊を出ると、車室はパツと明るくなつた。

2　東京の埃

　首府は乾燥してゐた。そのために、トラックの車輪や、自動車の警笛や、人間の叫び聲が少しの調和もなくぶつかりあひ、空に撥ねかへつて、人々にトゲトゲしい、焦立たしい心を起させた。空は灰色に塗りこめられ、土地には風が吹いて、砂塵が烈しく立つた。建築中の建物は裸かの骨骼をさらし道には穴が掘られ、シャベルだけが見えて泥砂をくみ出した。――平治はその中に立つた。どこへ行かうか。目的はなかつた。

　高いビルディングとビルディングとの間を、小さい彼が歩いた。埃が眼を痛めた。涙をハンカチで拭いた。そして眼を開くと王宮が彼の前にひかへてゐた。だが、それは近いやうに見えてなかなか遠いところにあるのだ。突然彼の前を憲兵がオートバイで走つた。眼を轉じると、一隊の兵士が城の周圍を行進してゐた。――平治はクルリと踵をかへした。ガードの下を通り、電車通りに沿つた。どこへ行けばよいか。

　彼は雜誌店に飛びこんだ。三好の關係してゐた雜誌の發行所を調べて、そこへ彼を訪ねて行かうと思つたのだ。東京の中で唯一人の知人だ。多くの雜誌が彩色されて列んでゐた。そのうちに被支配階級の主張を公然と掲げてゐる雜誌は片隅にかためられてあつた。だが、そのうちに三好らの雜誌は發見できなかつた。

「あれは最近は出てゐません」

　店員は無愛想に云つた。遂に古本屋の店さきで、三好の住所が分つた。その時はもう夜になつてゐた。

　奥露路の中をはひつて行つた。あんまやがあり、駄菓子屋があり、ひつこし手傳屋があり、多人數の家族がやかましく食事をしてゐる家があつた。共同水道の前の二階家が三好のゐるはずの×　社だ。その古い木札がマッチの先に現れた。すると、彼はグイと肩を掴まれた。振り向くと一人の背廣が、彼の額にすれすれに顔を持つて來た。

「きみはどこへ行くのです」

「ここへ來たのです」

「何の用だ！」

「どうして、そんなことをきかねばならないんだ」

「いや、職務ですので――おききして、如何しようと云ふのではありませんが」

「名刺はありますか」

「これです」

「ぼくは三好と云ふ友人をここへ訪ねて來たのです」

「三好さん？　三好さんて方はおいでにならないでせう」

「そんなはずはない」

　平治は格子戸をあけた。すると二階から大急ぎで男が下りて來た。破れ障子を開くと、それは小さい、もう可成年とつた人だつた。彼も亦、五六ケ月前から三好はゐないことを告げた。

「どうしたのです――どこにゐるか分りませんか」

　男は暫く平治を觀察してゐた。平治は漸く

から、わざわざ彼を訪ねて來たのだと云つた。
「ぢや、とにかく上んなさい」
疲れた平治は二階へ通つた。あがりきつたところに「死を恐れざる者に恐怖せよ！」と云ふ貼紙がしてあつた。彼はそれに頭をぶつつけさうになつた。クロポトキンの像や、虐殺された彼らの首領の寫眞があつた。粗末な机と椅子。
「三好君は元氣のいい人でしたが、女ができてからすつかり影をひそめて了ひました。戀愛の方が革命よりも力強いのかも知れませんな」
そして男は柔和に眼を細めて笑つた。平治は無感覺にそれをきいてゐた。疲れてゐる。
「大へんあつかましいのですが、今夜ここへとめてくれませんか。宿屋へ行けさうもないので」
男は再び彼を觀察して考へてゐた。
「いいでせう。雜魚寢しかできませんよ」
脂で冷たく、じめじめした固い蒲團に身を横へた。そしてやがて眠つた。眠つて幾時間か經つて、太い男の聲や、ガヤガヤした足音を彼はきいた。「誰だ、誰だ」と云ふ聲もする。そして彼の蒲團の中にも大きい男がはひつて來た。だが平治は身動きもしないで眼をつぶつてゐた。
朝は早く起きた。戸を閉めないので、汚い部屋の中は白つぽい光が溢れてゐた。彼は頭を動かして男たちを眺めだした。男たちは、蒲團を頭から被つてゐたり、齒を軋ませたり、「よし」とか「何を！」とか寢言を云つてゐた。一つの寢床だけが蟬の脫殼のやうに空になつてゐて、枕もとには泥だらけの脚絆が置いてあつた。——平治の横に這入つて來た肥つた男は口を薄くあけて、脂で赤い顏をしてゐた。そして平治が立ちあがると、寒さうに蒲團は全部自分の身體に捲きこんで了つた。
肥つた森田が歩いて、小さい平治はそのあとについて行つた。廻轉扉が廻轉する。制帽をきたビルディングの守衛がジロリと二人の風采を見た。肥えた森田は立ちどまつて、彼のつれを待つた。エレベーターが下りて來た。それに乘るのだ。「三階」三階では森田はしばらくキョロキョロしてゐた。だがすぐに目的の會社のガラス戸の金文字が眼にはひつた。
「ここだ！」
平治は「×」の實地見學に來た。教はつた通りにやるのだ。
「庶務課長さんはおいでですか」
給仕は案内した。
森田は深々とした椅子に腰を下し、緣の革を撫でまはした。平治は暫く額になつたキリストを見てゐた。首の太い人物が輕く現れた。いそがし氣に「さあ」と椅子をすすめた。平治は白々しく切り出した。バットの箱にでたらめの名を書いたのを名刺としてさしだした。
「實は××社のかういふ者です。以後、御ヂッコンにお願ひします。——今は浪人してゐるので何分の御扶助を願ひたいのです」
いちど課長の姿は消え、狀袋を手にして再び這入つて來た。狀袋は平治に手渡された。すると突然、森田は横からそれを奪つて、バリバリと封を切つた。そして、中をあらためると、彼は立ちあがつた。
彼らはそれで酒を飲んだ。平治は酒に弱かつた。晝間から飲んだので、彼は醜く眞赤になつて凋れた。
「森田さん、ぼくは飯を食ふ」
「杉君、きみはなかなか度胸がある」
そして、彼は日をきめて「出す」會社や、五十圓包みをくれる喜劇俳優や、どんなのが行つても、「必ず大丈夫」な火葬場の事務所のはなし

をしだした。そして、女給に酒を命じた。平治はまづい食物を半分でよして、肘でその皿を押しやつた。そして、三十五、六すぎの森田の顏を見てゐた。その子供じみた顏を見てゐると次第に憂鬱になつた。

「なあに、奴らの×××××××××いいのだ。奴らア我々の兄弟×××××××××るのだ！　××××××××××××××何の不思議がある！」

そして、その「兄弟たち」はどこにゐるのだ。ここではレコードは廻轉し、薄化粧した學生の一團とスカートの短い桃色の圓い顏をした少女とが笑つてゐた。

「出ませう！」

「まあ、ゆつくりし給へ。もう一杯」

出た時はすつかり夜になつてゐた。電燈がキラキラと美しい。夜はこの通りに人々を押し出した。彼らは別に用はなかつた。だが、男と女とは腕を組んで濶歩し、獨身ものは振りかへり振りかへり歩いた。店毎に置かれてあるラヂオの擴聲器が一齊に「世界の中心としての日本」と云ふ演説をはじめた。森田はそれを一軒一軒「フム、フム」と云つて聽いて廻つた。そして四つ角に來ると、立ちどまつて「待てよ！」と云つて財布を調べた。

「これは足りない！　行けないぞ！　せつかくきみを案内しようと計畫してゐたのに——」

平治はその意味を察した。

「ぢや、ぼくは一足先きへ歸りませう。あなただけ行つていらつしやい」

森田は圓タクの中からステッキをあげて「やあ失敬！」とどなつた。それから車は走つて行つて了つた。平治は××社の方へ歸つて來た。

そこは學生町の通りに繋つてゐた。明るい街や通りや人ごみは何故誘惑するのか。無意識のうちに平治は大學寄りの寂しい通りから電車線路を越えて、露店の賑やかに列んだ方へ來てゐた。——そしてその中で彼は立ちどまつて了つた。セツ子がゐるのだ。セツ子が露店で電燈の下で安物の玩具を列べて坐つてゐる。セルロイドの滑稽な人形、赤く塗られた鐵の汽車。少女は平治を烈しく睥んだ。その瞬間セツ子の姿は彼女から消えた。彼女はセツ子よりは少し身體が大きかつた。殊に上向いた時の四角い廣い肩が眼立つて大きかつた。粗末な陰氣なキモノをきてゐた。眼の下もセツ子よりは黝んでゐた。——だが、こんな酷似は滅多にあるものではない。平治は暫くの間、動搖してゐた。

露路の奥の××社の向ひ側に駄菓子屋があつた。露店の玩具賣りはそこの娘であることが發見された。ひるすぎ、平治が××社から出ると、再びセツ子の模型に逢つたのだ。彼女は今起きたばかりの表情をして、表を眺めながら、茶碗を手にしてゐた。そして、ゆつくりと飯を口に運んだ。晴れた日だつたので、平治はつい微笑して了つた。すると少女は茶碗を置いて烈しく彼を睥んだ。その睥みは彼をよろめかした。彼は街へ出た。

街はすでに夏の光に滿ちてゐた。號外がやかましく出て金融恐慌の後始末のため、政府は×××九億圓を財閥にくれてやつたことを報じた。共産主義者は×××××××戰つてゐた。彼らはブルジョア議會の解散を要求した。そして示威運動を行はうとして示威運動は蹴ちらされた。小さい工場は腐つた塀のやうにパタリパタリと倒れた。大きい工場では生産を合理化するために、何千人もの勞働者を嚴重な×××××××うちに、馘首した。——勞働者たちは飢ゑの前に立たされ、不安になつて來た。

各所に工場代表會議が開かれた。だが、何故××社の仲間は動かないのだらう。彼らは勞働者の自發的な運動も共產主義者の煽動としてとりあげなかつた。眞實に勞働してゐる無政府主義者はさうでもなかつた。だが、ここに巢くつてゐる無政府主義者たちは今はすつかり大衆から離れて了つてゐた。そして口だけで「政治はダラクだ」と云つて、非實踐的なのを、非鬪爭的なのをゴマカしてゐた。

玩具賣りの少女は何故笑はないのか。森田はこれを說明することができた。

少女の兄は小倉服を着て驛夫をしてゐた。專制的な政治權力を自分の階級のために恣にしてゐ首相が、彼の勢力を誇りながら、東京驛から出發しようとしてゐた。かゝる×××××××××である。そして少女の兄は×××××××××××した。傲慢な彼は一言もなく、色を失つた大臣たちの腕の上に倒れた。霜夜であつた。××××××××、監獄に繋がれた。そして、一家は笑ひを失つた。

「我々の眼の先に少年テロリストがゐたのだ。彼は我々の知らぬ間に行動した」

森田はその頃からこの社にゐた。その頃は活氣のある愉快な時代であつた。殺されたり、死刑になつたり、無期になつてゐる諸先輩はまだここにゐた。森田も亦、危い仕事をして來た。だが今日は？

だが、生活はここではだらだらと流れた。遠いアメリカで魚屋と靴屋が無政府主義者である理由から不當に絞殺された。これは××社に衝動を起した。これに抗議するためにパンフレットを發行した。それから淺草で仲間の全國的な大會があつた。××社からも代表に勞働者あがりの秋山が出た。これらの事件がやつと平穩な流れに抗した石であつた。流れはその石に打つかつて、一時白く泡立ち激した。だが勿論、それは××社の力ではなかつた。現實に戰つてゐる勞働者の壓力がここまでやつて來たのだ。

平治は次第に彼を激動させるものを要求しだした。冬近く、彼は仲間の者と、最も精鋭な共產主義者の多く活動してゐる大衆的日常政治行動團體の第二次全國大會に出かけて行つた。それをぶちこはすためだ。彼ら共產主義者たちは勞働民衆を踏臺にして新しい獨裁を、しかも今と同じい支配するものを將來しようとしてゐる、と云ふ意見から。

彼らは出かけた。傍聽席にかたまつて陣をとらうとした。だが、滿員のために離れ離れになつて了つた。赤い腕章を捲いた青年勞働者が整理した。

開會の直前に窓の下に喊聲が起つた。それは紋附羽織を着て白鉢卷をした一隊が、菊水の旗を押し立てて、鬨タクで襲擊して來たのだ。やはりこの集會をぶちこはすために。

だが、彼らは頑丈な赤色自衞隊のために簡單に追拂はれて了つた。その次には會場は、あごひもかけた警官隊に埋められた。演壇の下に金筋もでしやばつて來た。彼らもやはりこの集會をぶちこはさうとしてゐるのだ。

だが、會衆の一人は單純に一人とは計算できなかつた。一人は何十人何百人××××××××××全國から集まつて來てゐるのだつた。これらの力は自然と會場に滿ちてゐた。から云ふ會合は眼に立たぬやうにぶちこはされねばならなかつた。官憲はこのことを十分知つてゐた。

「我等の大會を守れ、大膽に、細心に、嚴肅に」

會議は白熱して來た。人々の吐くエネルギ

イが重々しく、爆發する程、會場に滿ちた。身動きもならなかつた。平治は傍聽席に挾まつたまま、會議に吸ひとられてゐた。そこでは日常的な細微な鬪爭についてまで議せられた。この團體にゐる××主義者のすぐれた手腕が眼立つた。××××××、その實際の鬪爭を通じて、××××××、×××、×××受けてゐる。全國的に、日々、しつこくなされてゐる現在の支配階級への戰爭、××××、力と力の、最後には××××××ひを、平治は二階の傍聽席から縱斷的に見下すことができた。

「これは明かに戰つてゐる―」

晝飯の休憩が大へんおくれて來た。だが、身動きもできなかつた。彼の横の女工たちは小さい辨當包みを開き、男たちは大きな握飯を食ひはじめた。

「一つどうです」

青海苔で卷いた拳程の握飯を摑んでさし出した。平治はそれを受取つて食つた。中からは眞赤な梅干が出て來た。背後の學生は林檎を一つだけ食つて、平氣な顏をして議事について、刷物を讀んでゐた。

夜にはひつてもまだ會議はつづいた。明日もあるだらう。失敗した平治の仲間たちは何事もなかつたやうな顏で歸つて行つた。

「杉君、東京の方の代議員で大原つて男がゐたのに氣がついたか」

森田は云ひだした。それは四角な頭を持ち大きな吼える口を持ち、最も戰鬪的に今日の會議で働いた男であつた。その男の印象は誰にも殘つてゐた。森田はつづけて云つた。

「あいつは、もと我々の仲間にゐたんだが、ボルにダラクして了ひやがつた。反抗心が徹底してゐて、面白い男だつたが――」

彼がボル（共產主義者）に移つた時、以前の仲間は彼を襲つた。

「裏切り者！」二週間もの間、彼は頭には繃帶をし、腕はつるして歩いた。だが、彼は「ボル」の團體でよく働いた。彼は以前の仲間には裏切つた。だが、彼の階級には裏切られなかつたのではないか。――森田の言葉にはどことなく、そんな意味がふくまれてゐた。

「俺も、もう一度、あいつらの中で働くかな」

北海道から來てゐた勞働者上りの秋山が云つた。「すると、きみたちは俺を足腰の立たぬ程やつつけるか」

誰も答へなかつた。肥えた森田だけが、昔の活潑であつた「××××××」の思ひ出と共に、かなしい感慨をした。

秋山は以前は「ボル系」であつた。彼は雪の北海道で、政治はダラクであることを、身を以て經驗して來た。だが、彼は政治行動と云ふ意味を議會行動とまちがへてゐたのだ。彼はそこで三週間、不眠で働いた。それは同地方の政治的な先驅者を道會議員に立てるためであつた。中央から共產主義者が煽動のために潛んでやつて來た。殖民地の荒くれ男たちは、「ストライキ」と云ふものに血を燃した。各所にそれが勃發した。そして、その勢で彼らの候補者は當選した。

當選した翌日にはもうブルジョア政黨から「懇談」に來たり、その政黨の正一位の首領から親展書が來たりした。買收だ。――×××××××が當選者の前にぶらぶら動いた。彼はその動く餌に知らず知らず首を動かした。

秋山は應接室の敷物の上に、疲れの爲めにころがつて、下から新議員の顏を見てゐた。新議員は椅子の上で腕を組んでゐた。彼らは數時間、そんな風に睨みあつてゐた。遂に秋山は叫んだ。

「黨支部大會を臨時に開かう！」

そこで、議員の全部の行動は支部統制委員會の下に置かるべきであることを、嚴格に決定しようと、秋山は考へた。だが金錢の力は大きい。新議員は策動した。そしてその臨時大會には突如として「一定の政治的意見の拒否」案が上程された。意味するところは共産主義者排擊――秋山の一派排擊であつた。秋山は戰つた。だが××××××××××力のまだ十分にない時代であつた。殊に北海道だ。秋山は負けた。すると同時に彼の情婦が繼母のために昇汞水をのまされて死んだ。彼はよろよろした。

その時、東京から無政府主義者の一團が宣傳に乘込んで來た。彼らは景氣のいい演說會を開いた。殖民地の官憲の暴壓は極端であつた。彼らは口を開くや否や「中止!」を命じられた。「中止!」はダラダラした演說よりは大抵の場合、ずつと煽動的なものだ。疲れた秋山の頭には、彼らが云はうとして云へなかつた言葉が火花を散らした。無政府主義者は東京へ引きあげた。そして「××××××」と云ふ叫びは殘つた。秋山があれ程身命をすり減らして、政治的に戰はすために立てた議員の行動はどうであつたか。――彼は蒼白い顏をして內地へ戾つた。そして××社にまで流れて來た。

今日、北海道で彼が「敎育」した連中の多くに出くはした。彼らはみな立派な、大衆と共に戰ふ鬪士となつてゐた。その彼らの會議を潰すために彼は出かけたのだ。

「秋山さんぢやありませんか」

から呼びかけられて、彼は容易に彼らの顏を見ることができなかつた。

3 組織的な組織

秋山は××社を去つた。平治はまだ殘つてゐた。彼は少年時代ひそかに師事してゐた詩人の所にも「×」××××た。その詩人はケチン坊で有名だつた。彼はその詩人が出さないので、×××××××。へたばつた詩人は××××、××出した。彼は「あつ！ 血だ、血だ！」と大仰に叫んで平治につつかかつて來た。平治はもう×××××××。詩人の細君が巡査をひつぱつて來た。平治は逃走した。そして歸つて來た。

自分より弱い奴がゐると思ふと彼は愉快になつて來た。そして諳誦してゐるその詩人の詩を高く歌ひ出した。冬になつた。

玩具賣りの少女はあひかはらず平治を烈しく睥んでゐた。だが次第に彼女は顏は蒼く彈力を失つて來た。腰部の變化が眼につきだした。それは孕んでゐるのだ。平治はそのやうに診斷して笑ひだした。

ある日、彼のもとに手紙が來た。手紙と云ふものが來るのは不思議であつた。セツ子からである。數ヶ月前に彼が書いた拙い詩が揭載された雜誌社から轉送されて來たのだ。封を切る。

「私は身ごもつてゐます。私は確かにあなたの子供を身ごもつてゐます」

平治はもう一度笑ひだした。東と西で、よく似た容貌の少女が同時に孕んでゐる……だが、大工の七造と結婚してゐるセツ子が子を産むのに何の不思議があるか。それは自分の子ではない。手紙は尙も書きつづけてゐる。

「それが夫の子でないことは日數で分りました。夫はまだこの事實は知らずに悅んでゐます。知つてゐるのかも知れないわ。知つてもきつとあの人は知らない風をしてゐるでせう。私がうちあけてもあの人は怒らないでせう。きつとさうだ。私たちは今十分幸福ですから」

冬の曇空の下を、平治はムヤミに歩き出した。どこかで火薬庫が爆發してゐる幻想が來

た。

正月の二日に「赤旗開き」が行はれた。偶然、交叉點で出くはした秋山は平治に「來い」と云つた。平治は「どこへでも連れて行つてくれ」と云つた。彼らは長い間電車に乘つた。雪が降り出した。大きな橋の欄干に雪はつもりだした。工場の角をグイグイと幾度も曲つた。泥溝の臭氣が流れて來る。事務所についた。大きな木札がかかつてゐる。背廣が表に五人も、寒いので、足をバタバタさせて立つてゐた。

「秋山さん、雪が降つてるのですよ。入れて下さいよ」

大きな身體のくせに小さな口髭をはやしたのが嘆願した。

「くせになるからな」と秋山は笑つた。「よし、はひれ！　だが、今日はどんなことがあつても二階へあがつて來てはならんぞ」

彼らはやつと、上りがまちに押しあつて腰を下した。だが來會する顔觸れを、餌食に餓ゑた猛獸のやうに舌なめずりをしながら、うれしさうに眺めまはしてゐた。その次には卑しい三角眼を光らせて二階の氣配に耳を澄した。

擦り切れた疊。ポスタアで破れを押へた襖。二階へあがる。男らしい談笑の聲が溢れ出て來て、平治を押し包んだ。

「東京××勞働組合」の×旗の下に、角刈りの眼の大きな男がゐた。それがこの地方の組合の指導者だ。彼は立ちあがつた。開會のアイサツだ。

「人々には屠蘇がある。我々には鬪爭がある。新しい決意を以て今年も鬪爭をつづけよう」

×旗の歌がひびいた。「これ告別の歌ぞ！」

爭議の經驗談があつた。角刈りの男の大阪での武勇傳をある男が面白く話した。そこで組合評議會の大會があつたのだ。角刈りの男は二名の警官に追はれた。追はれることは癪だ。彼は憤然として後戻りし、彼を捕へようとする男たちを××××××××した。サーベル×××、×××飛んだ。女の鬪士は留置場での看守のしうちについて話した。看守たちは下卑た顔をして、×××××××。最近に行はれるはずの國會選擧のはなしが出た。秋山は彼が過去に犯した誤りを打ちあけた。我々にとつて最初で最後のものはあくまで議會外の大衆行動だ。議會に於ける代表者の任務はこの大衆行動に絶對に從屬せしめられて、ブルジョア議會の本質をバクロし、敵の牙城に肉薄するところに意義があるのだ、と彼は云つた。順番は平治に來た。彼は云ふことがなかつた。唯、この戰ひ旗の×色が如何に彼の血を湧きかへらせるか、と云ふことを云つた。それはムシロ詩人的空想に滿ちた幼稚な云ひ方であつた。彼の次には六十ばかりの婆さんが演説をした。彼女は地震當時のウラミを述べた。あの時に××××××××××××者の血は彼女を青年と同じやうに燃え立たせると云つた。きつと私たちは私たちの日を迎へる時が來ます。私はその日までは、私のムスコたちと一緒に生きてゐなくてはならぬ。この永い間の營養不良で傷んでゐる身體を、しかも今になつても日々のパンのために、セルロイド工場でこきつかはれてゐる身體を、持ちこたへねばならぬ。私はそれまでは決して死ねません。

――階下では背廣たちがヤキモキ氣を揉んでゐた。彼らを尻目にかけて平治たちは表へ出た。冷たい空氣が流れてゐる。雪のために夜は白く見えた。だが、「困つた雪だ――」長靴をはいて來たものは賢かつた。雪は解けて、町は汚く泥濘んでゐた。

平治はやはり××社の二階にゐた。彼は江東

にゐる秋山や、あの夜の角刈りや老婆を時々思ひ出した。思ひ出すと激情が起つた。だが、今までの惰力で、ぢつとしてゐた。

駄菓子屋から赤ん坊の泣き聲が聞えてゐた。それは極めて健康であつた。玩具賣りの少女がたうとう分娩したのだ。すると、平治のところに又、手紙が來た。男の手蹟だ。

「セツは子供を産みました。それがあなたの子供であることをセツはあつさりと打ちあけてくれました。一時は私もいやな氣がしました」

月並な悲劇か。平治はしかし次に驚くべき大工の考へを發見した。手紙はかいてゐる。

「だが、そんなことにこだはつてゐてもしかたがないでせう。子供などと云ふものは、どうせ世の中全體のものです。私の子供とか、あなたの子供とか、云つても、つまるところは社會全部のものです。さう私は考へました。さう考へると、私は悦んで、この社會に屬してゐる子供を、一時、代つて育てようと、決心しました。これはまちがつてゐないと思ひます」

手紙はまだ續いてゐる。

「私はそれにあなたが今プロレタリアのために戰つてられることを、うすうす承知してゐます。實は私もセツの親父には祕密で、勞働夜學校に通つて見ました。そこで私は色々と教はつたのですが、また自分が大工で本當のプロレタリアでないことも教へられたのですが、とにかく、自分たち大工も×××××、××××てゐるものだと云ふことを知りました。そしてもつとよい社會を作るために大工も、大工組合のやうなものを作つてブルジョアの××××××××××なりません。私はそれに努力します。あなたも矢張この道に努力してゐられる。すると味方同士ではありませんか。さらにこの點から云つても、私は同志の子供として、セツの生んだ子供を育てる義務があるのです。だから、くれぐれも安心して、健闘して下さい。七造」

平治は二階の窓から、玩具賣りの少女の、顏をしかめて泣いてゐる赤ん坊を見る。「自分は今プロレタリアのために戰つてゐる？」誤解した七造に羞ぢろ！

國會選擧がはじまつた。再び秋山は平治をつれて橋を渡つた。河はいつかのやうに鈍く流れてゐた。河を越えた選擧區では、あの×旗の下にゐた角刈りの男が候補者にあげられてゐた。彼はまだ三十を越えた許りだ。獨身生活をしてゐた。つくと、彼も筆を動かしてポスターを書いてゐた。

「きみは字が巧いだらう」と秋山が云つた。平治は拙いので「拙い」と云つた。だが、勞働者たちよりは巧いはずだと云ふことになつた。そして選擧ニ　ース第一號の原紙を切ることになつた。ちびて先の圓くなつた鐵筆を握らされた。机の足がガタガタするので餘計やりにくい。眼の前を、汚れたズボンが行つたり來たりした。駈足で來て、角刈りの候補者に耳打ちすると、又飛び出して行く鳥打もゐた。「畜生、あすこの親父め、警察からおどかされて、突然貸さないと云ひだしやがつた！」とどなりながら歸つて來た春のズングリしたのもゐた。演說會場に官憲が干渉したのだ。選擧妨害である。——原紙を切り終つた。角刈りの男が見た。

「これはダメだ」と彼は強く平治に云つた。

「こんな書きやうではダメだ。一眼で讀めるやうにしなければ勞働者は眼もくれない。重要な

とこはゴシックに大きく書いてすぐ解るやうにしなければダメだ。勞働者はゴタゴタしたものは嫌ひだ。原稿を見せてごらん」

彼は原稿を太い節くれ立つた指で押へながら、平治に書き方を指圖した。まるで叱つてゐるやうな調子であつた。その調子が彼を捕へた。

それから戰場のやうな中に平治は生活した。不規則な飯の食ひ方をした。いつも鹽辛い何も實のない味噌汁か、噛みきれない黄色い澤庵を食つた。洋服のまゝ二三時間雜魚寢をすると、もう起された。朝早くから工場へビラを撒きに行つた。

「今朝のは女工さんが多いよ」彼の同伴者はさう云つて、ずんずん先に立つて行つた。霜はキビシかつた。霜の强い朝は、太陽が眞赤に燃え上つて、美しかつた。

平治は不規則な生活のうちに、少しもそこなはれない自分の身體に驚いた。「これは助かつた」肉體が救はれると精神も救はれた。兩方とも强くなつて來るのが分つた。「これはうまい！」

候補者は自轉車に乘つて、演說會場から演說會場へ行つた。そのあとから尾行も自轉車に乘つてついて來た。

演說會場では候補者は餘り多く喋舌れないやうになつてゐた。

「辯士中止！」の聲は「お前を當選させては大へんだ！」と云ふ意味だつた。だが鐵のやうな工場勞働者で會場が一杯になると、臨監も恐しかつた。彼は遠慮して、中止を切り出すのに躊躇してゐた。その間に候補者はどんどん我々の政策を述べ、しまひには支那革命の問題から、第二次帝國主義戰爭反對の聲まであげた。

ある寒風の强い夜、演說會場は人の臭氣のためにムンムンむれてゐた。突然四方からビラが投げられた。それは花片のやうに人々の頭の上でヒラめき、早い速度で降つて來た。赤刷りのビラだ。聽衆は總立ちになつた。そして、ビラを掴まうとして、逞しい脂で汚れた腕が林立した。

「日本×××のビラだ！」

「×××だ！」

日本×××が、勞働者階級のために不斷に戰つてゐる、角刈りの候補者を絕對に支持することを、聲明したものだ。

——うめき聲のやうなものが起つた。それは次第に一つの叫び聲に統一されて行つた。

「××××××××！」

「××××××××！」

「××××××××」

會場は喧騷に陷つた。あちらこちらで黑服と勞働者との組打がはじまつた。椅子が投げられた。喊聲が起ると、聽衆は會場から眞黑なかたまりになつて雪崩れ出た。彼らは彼らの方法で歡喜を表現した。デモだ！　腕を組め！

平治はその夜、歸り道で、工場の塀や電柱に張られてある日本×××のポスターを見た。勞働者階級のためのスローガンがはつきり掲げられてあつた。行きかふ夜業歸りの勞働者は皆、××××××××××の存在と活動とに昂奮してゐた。

「書いてあることは××××××、どうも×××の名がいけない。日本ぢや他の名前の方がいいんだが」と心配してゐる中年の男もゐた。——

活氣は眼に見えてました。

4　嵐は强い樹を作る

選擧運動は概して成功した。まだ開墾されて

ゐない工場に、政治權力に對する闘爭の種がおろされた。それは生長し、實を結ぶだらう。

選擧の日は日曜日にあたつてゐた。政府はこのことを一般勞働民衆のためを考へた結果だと大宣傳をした。だが、多くの工場では休みにはならなかつた。居住年限や年齢の制限もあつた。それは決して「普通選擧」ではなかつた。休み番になつてゐるので俺たちの候補者へ投票しようと身構へてゐた戰鬪的な市電乘組員の一團は、わざわざ臨時にその日を出番に變更されたりした。——開票された。角刈りの候補者は落選した。しかし、これはさう重要なことではなかつた。あちらこちらに張られてある選擧ポスターは風や雨のために汚くなりつつも、永い間殘つてゐた。

平治もこちらの街に住むことになつた。地震以後の假小屋ばかりのこの方面で貸間を搜すには骨が折れた。人々はその多い家族と一緒に狹い間に住んでゐたから。靴屋の二階があつた。それを自由勞働者の大原と云ふ男と一緒に借りることになつた。大原は暫く田舍の方に「派遣」されてゐて、最近に歸つて來た。平治はこの强壯な顋に見覺えがあつた。やつと思ひ出した。いつか彼の仲間とぶちこはしに行つた大會で見かけたのだ。「ボルにダラクした」男であつた。

大原は平治より一つ年下であつた。そして毎日仕事にでかけた。彼の仕事は、警視廳の建築場で、鐵筋の鎔接をやることであつた。「俺たちをギュウギュウ云はせるための警視廳を建ててると思ふから腹が立つのだ。いつか俺たちが××××××××十分役立たせるためだ——今から準備しておくのだと思つてやつてゐる。まあせいぜい丈夫なやつを作ることさ」

春はなかなか來なかつた。空はいつも煤で暗かつた。千葉縣では大きなストライキが起つてゐた。この街の鑄物工場でも六十人ばかりのストライキが起つた。それは右翼社會民主主義者に指導されてゐた。左翼勞働組合はこれを應援しなければならぬ。平治も應援者の一人に加へられた。

爭議團本部では、勞働者たちは、今度ストライキのために作られた歌をうたつてゐた。そして、やつて來た應援者を拍手して迎へた。だが、二階で「策戰」をこらしてゐる幹部たちには困つたことであつた。彼らは應援者を引見した。そして、このストライキはできるだけ大きくしないで解決したい、他の團體の應援は、さう云ふわけでお斷りする、と云つた。彼らの親分は、その親分の鈴文とそつくりで、ぶくぶくに肥え、ロイド眼がねをかけてゐた。まるで學者のやうに口を利いた。

「お互ひに闘爭の原理があつて闘爭してゐるのです。お互ひの道を行きませう」

「原理とか何とか、そんなムツカシイことではないのです。唯同じ地方の勞働者として何分の應援をしたいのです」平治は無意識のうちに大きな聲を出して云つた。

彼らは應援者が苦しい中から集めて持つて來た應援の寄附も斷つた。

「組合費が十分たまつてゐますから」

そして彼らの一人は、さきほどから描きかけてゐた漫畫をつづけた。それは鑄物工場の主人が警官に叱られ、職工が指をさして嘲笑してゐる圖だつた。彼らはストライキを警察の力で解決して貰はうと考へてゐるのだ。彼らは勞働者の力を信じない。

その間に大原は階下に飛び下りた。そして爭議團員の中に割りこんで演説をはじめた。こんな些細な要求をすらもストライキで戰はね

ばならぬこと、そしてこれだけが何も持たない我々の唯一つの武器であること、我々の最後の解放もこれによつてのみなされることを彼は説いた。煽動はきいた。「我々の組合も亦諸君を見すてない。應援は形式上諸君の幹部によつて拒絶された。だが、ことわられたからと云つて、兄弟たちの生命がけの闘爭をオメオメ默つて見てゐられるものか！」

幹部は狼狽した。そして警官が呼びにやられた。その間に、平治たちはひきあげた。

大原に戀人があることが分つた。彼がまだ田舍で百姓をしてゐた時からの仲であつた。彼女は東京へ來たがつた。土地も持たず、年中多人數の家族が飢ゑに苦しんでゐる生活に、彼女はアキアキした。東京へ行けば裕福にくらせるだらう。早く大原にひきとつて貰ひたかつたのだ。彼女の一家もさうなれば助かるのだ。

「これがさうなんだ。スガ子と云ふのだ」

寫眞がある。寫眞は平凡であつた。口許の食慾的なのが目立つた。なかなかすまして寫つてゐた。

朝、たうとう一日の仕事を休んで、大原は上野の停車場へ迎へに行つた。そして大きな信玄袋を肩にして、彼女をつれて來た。

「杉君だ」

スガ子は、だが、極めて無愛想だつた。何故自分の戀人がこのやうな男と一しよに住んでゐるのかが分らなかつた。平治は組合の事務所に行くために、彼らを殘した。靴屋の二人の子供は「アレ、誰のヲバさん？」と平治に不思議さうに質問した。

夜、歸つて來ると途中でスガ子と一緒に大原に出くはした。大原は平治を家のかげにつれて行つて苦笑ひをした。

「今夜はきみは事務所でとまつてくれ――俺たちは結婚式をあげるのだ。スガ子はどうもきみを好いてゐないので困つてゐるのだ」

平治は「さうか」と云つた。その夜は皮膚を刻み切るやうな冷たさであつた。彼は事務所へもどつて來た。

「寒い、寒い」仲間は二人ゐて震へてゐた。

「電氣コンロがあればいいんだがな」と一人が云つた。そして押入れをゴトゴト云はせて、奧の方から古新聞や埃だらけの書類の綴ぢたのを引きずり出して來た。

「おい、こんなものを取つて置いちやダメぢやアないか」

平治はそれらの書類が歴史的な文獻になる日のことを考へた。惜しい氣がした。しかし、その時にはそれは火鉢の中で燃えあがつてゐた。焔は三人の顔を明るくした。彼らはその火に手をかざした。

「やつとしのげた」

「これを機會に古い書類を整理して暖まらうぢやないか」

行李やら手箱やらが丁寧に調べられ、少しでも殘して置いてはいけないのは、どんどん火鉢にくべた。火鉢の中は紙の灰が堆高くたまつた。煙は部屋にこもつた。

「こんなものがあつた！」

濕つてヨレヨレになつた海苔の一包みが出て來たのだ。それを焙つた。紙の火はじりじりとすぐにそれを焦がした。食ふとカビ臭くてまづかつた。

「あすは新聞が出るな」

新聞とは無産新聞のことだ。第一號からの揃つた新聞を整理しながら、平治が云つた。あすは五の日だつた。三月十五日だ。

留置場の中は滿員だつた。角刈りの候補者は十人がかりで×××××××、××××連れら

れて來た。××××××××逃走するかも知れないのだ。誰も彼もゐるので、賑やかでやかましかつた。秋山も大原も來た。なんでやられたのか、ハッキリしなかつた。普通の事件でないことは、苛酷な調べぶりで分つた。――×××××××××××××××××つけられて、氣を失つた男もゐた。××××××られた。××××なつた。平素から弱かつた山下と云ふ男は眞正面に浴びせかけられる××××××、××××××××。女の闘士は、×××××××××××××××、××××××××かれた。平治は×××××××××××がされた。彼は三回目に×××××糞をした。心臓が浮きあがつて苦しかつた。――彼らの質問の要點は「×××××××××××云ふ風になつてゐるか。××××委員會の組織は？」と云ふことであつた。事件の内容は明白になつた。

三週間目に平治は出て來た。陽の光はヤケに白くて眩しかつた。鬚の延びた顏のまま、事務所に運んだ。事務所には威張つた背廣が固めてゐた。靴屋の二階には、花嫁のスガ子が茫然として大原の歸りを待つてゐた。彼女は平治を見ると急に泣きだした。

「あの人はどんな悪いことをしたのです。盗みをしたと云ふのですか？　私の荷物まで調べて――」

「警察の人はこれがいけないつて云ふの」

彼女は指さした。それは壁に貼られてある煽動家レーニンの像であつた。

「この人は一體誰なのです」

蜘蛛の網のやうなものだ。風はそれを一時吹き破つた。だが執拗な蜘蛛は再び網の目を作り出した。――四月十日に左翼三團體の解散が命ぜられ、全國的に連絡網は斷ち切られたが、十月にはすでに回復した。

その頃、靴屋の二階へ背廣がやつて來た。

「大原令夫人はゐるかね」

彼らはそんな風な云ひ方をした。そしてスガ子を連れて行つた。夕方になつて歸つて來た。

「あの人に逢はせてくれました。あの人は黄色い顏をしてゐた――色の悪いつたら――」

背廣たちはもう大原は生きて歸るまいとスガ子をおどした。そして最後のお別れをしろ、と二人だけにして、すき燒を食はしたと云ふのだ。

スガ子は署を出る時、嚴重に體格檢査をされた。

「大工場の中へ」と云ふ合言葉が強く叫ばれた。平治は時計工場と紡績へ「試驗」を受けに行つた。だが、いつも體格ではねられた。彼は組合の事務に從つた。

スガ子は見知らぬ同居人が自分に親切にしてくれるのを不思議さうにしてゐた。大原のルス中に自分を取らうとしてゐるのだらう、と最初は考へた。そして警戒した。しかし、平治が苦しい中から、大原への差入れなぞもしてくれるのを見ると、さう云ふ考へをしたのが恥かしかつた。とにかく、この不可解な親切に對して酬いなければならなかつた。平治のたまつてゐる汚れものを丁寧に洗つてやつた。冬の着物もほどいて洗つた。疲れて歸つて來る彼を愉快にするために部屋をできるだけ綺麗にした。ガラス窓の埃を拭き障子や襖の破れを張つた。しかし、すぐにすることはなくなつた。ポツンとしてレーニンの像を見てゐた。

もう蚊が出て來た。蚊は眞黒にかたまつて食ひに來た。彼らは狹い蚊帳を求めねばならなかつた。それから夏が來た。八月の熱い日に「たうとう情勢は切迫して來た！」と秋山がやつて來た。秋山はあるゴム工場へ、他人の戸籍謄本

と名前ではひりこんでゐた。そのゴム工場の勞働條件は極端に惡かつた。男工で一圓十錢、女工七十錢で最高であつた。おまけに一週毎に徹夜勞働があつた。秋山は日中寢て、夜の七時に勞働につき、朝の八時にボンヤリして歸つて來た。「どうも寢る時は人並みにしないと身體にこたへる」と云つてよく靴屋の二階へ遊びに來た。その度に、工場からゴムマリやゴム製人形を「カッパラッて來て」下の子供にやつた。スガ子は「やさしい秋山さん」と呼んでゐた。

「情勢が切迫して來た」彼のしつこい煽動がききめを現して來た。そしてストライキははじまつた。――最初、怠業のまま、擧げられた交渉委員が、會社の事務所のガラス戸の中へはひつて行つた。工場主はあわてた。

「一寸待つてくれ給へ」さう云つて彼は電話口へ飛んで行つた。

「どこへ電話をかけようと云ふのです！」

電話口にはすでに二人の勞働者が頑張つてゐて、呶鳴りつけた。

「よし、きみたちがそんな亂暴な態度に出るならば、要求については少しも考慮する餘地はない。全部拒絶する！」

ガラス戸の外では喊聲があがつた。勞働者たちは機械に、脂油を塗つて引きあげた。永びくであらうストライキ中、機械が錆びつかないやうに。

江東のゴム工場全部が動搖しはじめた。爭議團本部はゼネ・ストの用意に忙しかつた。暴力團が兇器を手にして躍りこんで來た。爭議自衞團は雄叫びをあげて夏の夜に戰つた。この戰ひに勝つて昂奮した爭議團員は、そのままどつと工場主の邸宅に躍りこんだ。守つてゐたサーベルと衝突した。多數の檢束者を出した。

スガ子はこの爭議本部に手傳ひに來た。一圓十錢でどうして家族を養つて行けるか。それを値あげしろと云ふのが何故惡いのか。人並みに夜は寢たいのが人情ではないか。――スガ子が見聞きした事柄は色んなことを彼女に敎へた。

爭議は表面上勝つたやうに見えて解決した。警察は近づく秋の×××にも係らず、こんな物騷なストライキが起り、それが同地方のゴム產業のゼネ・ストにまでひろがらうとしてゐる狀勢のために、上の役所から大へん叱られた。そこで警察は大急ぎで鎭壓しなければならなかつた。秋山をはじめとして先頭に立つ分子を拘留處分にした。一方工場主に泣きついて、一圓三十錢に値上げする要求だけを通さした。爭議はこんな風に解決されて了つた。失敗だつた。數名の者は工場から追ひ出され、機械は再び動き出した。

夏は臭かつた。ストライキの後、スガ子は犧牲者救援會で働くことになつた。おぢいさんのレーニンが誰であるかも知り出した。手垢で汚れたパンフレットにもまして、實際の仕事が彼女を敎育した。平治に「あんたは同志でせう」と云つて笑つた。同志だからこそ、彼は夫や自分に親切であつたのだ。だが、何故彼が同志になつたのか。貧乏をし、いぢめられて來た者がお互ひに味方になり、親切であるのには何の不思議もない。だが、平治の弱さうな身體――恐らく今まで勞働をやつたことのなささうな白い手を見ると、何故彼が同志になつたかが分らなかつた。

附箋の二つもついた手紙が平治のもとに來た。中から寫眞が落ちた。裸かの子供がゐる。手紙は書いてあつた。

「おたつしやに、働いてゐられることと存じます。この同封したのが我々の太郎です。弱いとおききしてゐるあなたの子供

とは思へません。大へん丈夫です、先日、赤ん坊健康共進會に出しました。お醫者もびつくりする程發達がよろしいのです。そして一等をとりました。一寸おしらせします。そして、私たちは、太郎をプロレタリアにします。私なぞとはちがつた、あの本當の工場プロレタリアにしあげます。さうなれば太郎の將來は實にかがやかしいものです。以上、ちよつと。こちらへお出での節はお寄り下さい。セツもお待ち申してゐます。七造。」

――手蹟はセツ子のものだつた。平治は小さい寫眞を壁に張りつけた。

「誰？」

「太郎です。プロレタリアの子供です」

太郎は肥えた身體をねぢて、クリクリした眼で彼らを睥んでゐた。蝕まれた杉の血統は平治で斷たれた。新しい血はプロレタリアの血として！

太郎よ、健康であれ！

大學通りの露店の夜は、やはり明るく、人々が浴衣着で群れてゐた。通りの本屋には多くの××主義の書が古本になつて出た。こんなことは今までになかつた。動搖した學生が賣り拂つたのだ。大學も三月十五日以來大へん荒されてゐた。急進的な大學生の數名はすでに收監されてゐた。

玩具賣りの少女は店を出してゐた。彼女は樽のやうな乳房を出して、子供にふくませてゐた。平治はその前で立ち止つて、彼女と嬰兒とを見た。少女は睥んでアイサツした。

靴屋の二階へ裏口から背廣が時々だまつて上つて來た。そして空巣ねらひのやうに、あちらこちらを搔き廻し、樋の中から疊の縁まで探した。靴屋の親父はたうとう怒つた。鋲を口にモグモグさせながらどなつたのだ。

「あんた方は一體何です。いつもいつもあつかましくダマつて人の家にはひつて來る。いくら警察の人でもあんまりぢやないですか、少しは恥ぢを知りなさい」

靴屋の子供は二人並んでこの奇妙な髭をはやした侵入者たちの狡い顏を見てゐた。そして姉の方が突然歌ひ出した。弟もついて歌つた。

「光かがやく江東に
つどふ我らに力あり
心ひとつに結びつつ
ともに未來に進むかな」

奇妙な男女は夜晩く歸つて來た。彼らは疲れたまま、窓の外を見た。窓の外の風景は秋から冬へと移つて行つた。だが、いつも彼らの見得るものは暗い夜であつた。

反動は次第に烈しかつた。しかしそれは彼らの最後のアガキだ。嵐は一時樹の葉を枯れさすだらう。だが根は表面から見えず、次第に大きく擴がつた。嵐に耐へた後の、樹の強さが想はれた。

靴屋の親父は白い唾を盛に飛ばしながら背廣と爭つた。背廣は大袈裟なことを云つて彼をおどしたのだ。

「××××××どうなのです。×××××何だつていいぢやないか。それぞれ確信があつてやつてゐなさるのだろ――それにあの人たちは毎月高い部屋代をキチンキチンと下さるのだ。そんないい×××××××××できますものか」

だが、彼らの部屋代はもう幾月か溜つてゐた。未決の大原からは、單物は寒いと云つてよこした。

「單物は寒い。インテリゲンチャの方は

知人が多いので矢張差入れも十分あるらしい。これはへんな嫉妬ではない。唯、勞働者はどこまでも何も持たないと云ふ意味なのだ――

彼らはたうとう靴屋の二階にゐられなくなつた。學生あがりの鬪士の紹介で、醫學生の上村の家にやつて來た。上村はニコニコしながら「さあ、こちらへ」と云つた。そして、持つて來た少しばかりの荷物を受けとつて案内した。

上村は地主の息子だ。彼はゆたかに生活し、ゆたかに勉學した。科學は彼に社會批判の眼を開かした。彼は自分の階級の科學をつきつめたために、敵階級の方へ手をさしのばす結果になつた。そのさしのばされた手の中に平治とスガ子とが入つて來た　だ。

今、スガ子は成長してゐた。「お金持の」上村が彼らの後だてをする意味も、十分理解するやうになつてゐた。

5　過渡期の感情

川の岸に草は枯　てゐた。水は冷たかつた。

山は青く、雪は絶え間なく降つた。

――××黨を支持してゐた左翼代議士が汚い宿屋の六疊で刺された。反動のゴロツキだ。反動のゴロツキは玄關にまで重傷を受けた代議士に追つかけられた。袂を掴まれた。卑怯者は逃げるのを焦つた。最後の一撃が來た。代議士の心臟は潰れた。彼はガバと倒れ、手に掴みとつたゴロツキの袂が殘つた。首府の眞中の出來事だ。――

川べりにあるのが殺された代議士の生家だ。二階の廣間には死面像が置かれ、左翼團體の×旗がこれを守つた。地方農民が最後のお通夜をするために苦勞してやつて來た。家への道は三方とも、官憲のためにふさがれてゐた。農民たちは背後の山を越えてやつて來た。道のないところを踏み分けて來た。野生の棘草のために、足をひつかかれ、血を出してやつて來た。

「しののめ暗く反動の
刃に友は倒れ
…………」

殺された人の子供は、紫のマントから赤い手を出し、歌つた。農民の一人は、

「わしらが代議士にしなかつたならば、先生も殺されはることはなかつたらうに」と云つた。

その嘆き聲を蔽ひ去つて、人々は復讎の歌をうたひ出した。

「祭壇まもるわが友の
××××××××、
…………」

――平治もここに來てゐた。この勞働者農民葬に參加するために。葬式の日は丁度、忘れられない三月十五日になつてゐた。勞働者と農民とは彼ら自身の方法で、この殺された同志のために××××××××行はうとしてゐた。だが、工場は鋭い監視の下に置かれた。當日のゼネ・ストを警戒したのだ。農村からは戰鬪的な百姓が豫備檢束をされた。

葬式の當日はあけた。警官は葬列の中へ飛びこんで來て、參列者を捕へた。葬列は泥靴のために亂れた。遺族たちは一かたまりになり、抱きあつて齒を喰ひしばつた。

停車場の前の廣場には朝早くから群集が四方から集つて來た。彼らは日本のカールによそながら訣別しようと云ふのだ。次第に人々は集つて來た。廣場は埋つた。朝鮮人は白衣で、かたまつてやつて來た。すると突然、一隊の騎馬警官がかけて來た。××××××××××××。蹄の音はひびき、人々は陰慘な叫び聲をあげた。××××××××××、馬は何も奔放に驅けた。群集は次第に裏町へと追ひつめられた。葬列は停車場に到着した。そして、その列

は大通りを行きはじめた。群集は裏町から雪崩れを打つて大通りへ押し出た。人々は臆斬し、頭をたれた。悲しい行列は去つた。

式場の附近ではサーベルと背廣とで垣を作つた。彼らは來會者の氏名や住所を一々訊問した。―お前はどんな縁故で葬式に參列するのか―

檢束にもれた農民たちは、夫婦揃つて紋附を着、汚れた袴でやつて來た。式は始まり、開會の辭は祭壇の上で「××」×××。×××××××××××。×××××××××××。×××××××××なかつた。××××××××なかつた。

會場の重い、しかし××××××××××××空氣のうちに、背廣たちは帽子を脱らずに、ガヤガヤ突立つてゐた。彼らは煙草を盛に吸ひ、笑ひ聲を立てた。式が最後の默禱になり、會場が靜まりかへつた時に、これらの××××××、ドカドカと靴音を立てて出て行つた。靜けさは破られた。

平治はこちらへ來た機會に、近くにゐる七造に逢はうかと思つた。それは誘惑した。だが、彼の前に最後の夜行列車が來て了つた。乘りこんだ。

東京驛にはいつでも、眼を三角に光らせて獲物を待つてゐる背廣達一隊がゐた。平治はどんと背中を押され、腕を掴まれて了つた。

「杉君、永い間きみを待つたよ」

××つれられて來た。

「細君も先刻からお待ちかねだ。へへへへへ」

眼がねをかけた背廣は云つて、大きな汚い齒を剝き出して笑つた。

―細君」

×××××一室にスガ子が淫賣たちと一緒にキチンと坐つてゐた。平治は、格子の陰影のついた彼女の顏をぢつと見た。彼女は瘦せてゐた。やがて留置場に夜は來た。どこからかラヂオがきこえて來た。春めいた音樂に囚人たちは焦立ち、喧嘩をはじめた。

スガ子は骨ばり、臭くなつて、先に歸つて行つた。〃子の目を通して、平治に「おさきへ」とアイサツした。看守が「莫迦、莫迦」と云つて、その背中をわざと叩きながら、外へ押し出した。×××××、平治は消えた彼女のうしろ姿に、輕い寂しさをかんじた。

平治が出される日には朝早くから上村が迎へに來た。彼は幾時間も待たされた。正午前になつてやつと、平治はヒヨロヒヨロしながら、出て來た。上村は彼を風呂に連れて行つた。平治の洋服は虱だらけになり、顏は眞黑になつてゐた。

「さあ。これをはき給へ」

上から下までの新しい清潔なのが用意されてゐた。

上村の家には、赤い造花や、果物が買つて來てあつて、平治の疲れを休めさせるやうに心配してあつた。そこへスガ子が仕事から歸つて來た。上村は云ひ出した。

「この詩を見てくれ」

その詩は極めて拙かつた。その詩では、暗がりの中へ何らの意識もなく入つて行く女のことがかかれてあつた。それは彼の從妹のことであつた。彼はその少女を明かに好いてゐた。然し、彼女は彼の故郷の銀行家と結婚した。昨夜の事だ。これと對比して、今朝、暗やみから出て來る男のことがかかれてあつた。平治のことだ。

―ぼくは今、極めて短時間の間に、まるで方向のちがつた男と女の行く道を生々と見せられた。どちらも親しい人であるので、ぼくは悦ばうとすると悲しみが來、悲しまうとすると悦びが來る」

平治は上村の感情の動きをぢつとうかがつ

た。そして、つくして呉れたことに感謝した。

だが、こんな風な感謝は、云ひ現さうとするには、不機嫌な顔をするより仕方がなかつた。

その夜、平治を眞中にして、三人で列んで寢た。平治は柔かい蒲團になれないので、なかなか寢つかれなかつた。スヰッチをひねると明るくなつた。横にゐるスガ子は義眼の樣に眼をはつきり開けてゐた。

「眠れない！」と云つた。

「さうか」平治は電燈を見てゐた。するとスガ子が云ひはじめた。

「私は今、自分が誰の妻であるか分らなくなつた。——さう考へても、私は別に大原にすまないとは思ひません」

平治は眼をつぶつた。暗い眼の中では、同志がまだ未決のままに苦しんでゐた。彼にスガ子は屬してゐた。だが、このことが今どんな意味を持つてゐるのか。平治も亦、彼女と同じやうに云ふことができた。そして、そのやうに云つた。

すると×××××××××××××××
×××××××××××××××いた。新しい感情が來た。

一九二九年、五月十日。——倉卒のとの小篇を、特に、我々の友情のしるしにまで、同志N・Oにおくる。

荒つぽい村

1

　大きな熊が、それをのつけて來た荷車をそのまま利用した屋臺店の上にころがつてゐた。粗い毛のさきなんか泥がついてゐたりして隨分と汚かつたが、黒い鼻のさきや、縮めてゐるやうな足の裏が、妙にこの動物の愛嬌さを人々に感じさせるのである。と云つて、こいつは生きてゐるのではなかつた。深い山奥から下りて來て、畠の物を荒すこの悪い奴は、二發もの彈丸を受け、その毛の中の傷口には赤い血を凍らした死骸なのだ。腹は立ち割られ、肩もとから鋭利な小刀で幾度も肉を切られては賣られてゐる。その切り口の肉は、空高くから吹きおろす寒風の中にひきしまり、脂つこく光つて見られた。

　人々はそのまはりに肩と肩とを押しあつて、この見事な獲物を見物し、それを射ち殺してこの町に賣りに來てゐる多賀村の若者たちは、どれも同じやうな圓つこい顔に、少しの表情も動かさずに、ぢつと立ちはだかつてゐる。

　石川は――後年この多賀村に組織者として這入りこんだ石川は、こんな情景を記憶してゐる。それはまだほんの小さかつた時だ。一月の末、町の西はづれで、藥師の縁日が催される。その日には、田舎町の人々の財布をあてこんだ旅廻りの露店商人や野師がたくさんやつて來るのだが――そして、この日に町の人々は呉服物や、化粧品や、帳面や、農具や、その他子供のものなぞを買ひ入れるのである。――それらの店にまじつて、この熊が切り賣りされてゐたのだ。その年は珍らしくこんな大きな奴がとれたのであらう。

　熊の屋臺店にはサラシ木綿の旗が立ち、風に搖られ、筆太に「多賀村農會」と書いてある。商賣にもの慣れぬ村の若者たちも、同じやうに記したキレ地を腕に卷きつけてゐた。

「でけえ熊ですな」

見物の方から感嘆の聲が出る。

「熊が出たぞ！」――そのしらせに村中がひつくり返つて活氣立ち、誰も彼もが手に手に銃をひつさげて、夏の間に見つけて置いた熊穴の方向へと、雪の山をかけめぐつた結果、この大手柄をした。そのはなしを、町の人間は聞きたがつてゐるにちがひない。

　――けれど、「商賣」に來た村の若者たちはブッキラ棒にダマリこんでゐるだけだ。肉を切るのはうまくても、それを竹の皮に包む手際の不器用な彼ら。大きな札でも出されると、釣錢の勘定にまごついて、二三人ボシャボシャと相談するやうな彼ら。熊の膽はキタイに利くでな、と大量に買つてくれるいいお客にも、ありがたう一つあびせ得ない彼ら。――その彼らの口は熊について何の物語も語らうとしない。だから、町の人たちは、ジロジロと熊を見、それから村の若者の顔を見、そして、この町から三里ばかり上つた、山と山とに挾まれた小さな多賀村についての定評を、ちよつと、頭の中に思ひ浮べるのである。

　その定評と云ふのは――多賀村のやつらア氣が荒い、と云ふことだ。他と一割ちがつたやうに、荒つぽいこの村は、次のやうな事件のあつた後、恐怖さへつけ加へて、益々その定評を

動かせぬものにした。石川は子供心にうつつた、その事件の概略を、おぼえてゐる。からなのだ。

村に新しい駐在所の巡査が來た。こいつは軍人の古手だが、まだ若く、いやにキチンキチンとし、法律を振り廻し、村民にいつも澁面を見せてゐた。まだ獨身なので、暇のあるに任せ、村の改革を思ひ立つた。

改革することはいいことだ。だが、この出世をはげむ巡査は、村の惡風を、卽ち一つは墮胎の習はし、もう一つは無免許に銃を所持することを、なくして了はうと考へたのだ。

彼の意見によると、どちらも法律上の罪惡である。墮胎は日本帝國の人口の減少を來すことだ、又、銃を持つてゐるのは秩序の上から困つたことだ。その銃は現在の不和を亂すことがあるからだ。

だが、村民の意見によると、「まびく」ことは別に惡いことではなかつた。このカツカツに食つてゐるところへ、もう幾つかの食物をほしがる口がふえて如何なることだらう。それに鐵砲も大切な生計の道具である。田作りと養蠶とだけでは、今の生活もつないで行けない。農閑期には內職として、獵に出なければならない。山へ行き、山の樹々が、鐵砲の音に木魂して震へ、そして、山鳥とか兎とかが彼らの手にはひる。もしも、鐵砲がなければ、それこそ、村の不和を亂して了ふのではないか。

いつもは頰が赤くて、肩のいかつい、五助の嚊は靑い顏をし、トロンとした眼をして、町場の警察へつれて行かれた。彼女は年兒を生まぬ算段をしたのだ。去年生んだばかりのガキは町へつづく長い街道を泣きつづけた。三月にもなつた×に×を立てて、×をやぶつて、まだ×の塊りのやうなのを流し出したので、衰弱は極めて烈しかつたが、法律と云ふものはそんなことには容赦せぬ。アバラ家では五助が飯たきから一切して、殘された子供の面倒を見なければならなかつた。

雜草にまじつて生えてゐる「ノビル草」の根を、軒下につりさげて乾してゐた安藏のお神も長い間、駐在所で調べられた。その草の根を煎じてのみ、腹の子をおろすのだらう、と云ふのである。だが、お神はまだ姙娠してゐなかつたのだ。

こつそりと巡査は、巡廻の途中、脚絆をはいて農家の緣先に現れたり、裏の藪かげからのぞき込んだりした。鐵砲の手入れでもしてゐるものなら、ヅカヅカとはひつて來るのだ。

彼はすでに調べてゐた。村で銃の鑑札を持つてゐるのは、たつた五人だ。だが、大抵の奴が銃を持つてゐるのである。

「あきれたやつらだ、うしろ手になることも恐れねえで」

荒つぽい村民も巡査とか官員様にはわけもなく從順に馴らされてゐた。こいつは古い封建時代の名殘りの習慣であつた。だから、今度の××の仕打にも、最初は手向ひすることなんか考へもつかなかつた。

そこで、彼らは畑のものや獲物を持つて「ナキを入れに」駐在所に出向いて行くのである。

「こいつは屆けものが不足したと云ふにちがひねえ」

立てつけの惡い、山の影を歪んでうつしてゐるガラス戸をあけ、駐在所の中へ、へつぴり腰ではひつて行くのであつた。そして、大目に見てくれるやうに賴んだ。

「前の旦那も大目に見さつしておくれやしたで」

さう附け加へることを忘れなかつた。

けれど、何の效果もなかつたので、村民は面

喰つて了つた。四角い顔の巡査は白い歯を見せて、どなつたものだ。

「何だア」

ぢいつと、ナキを入れる男の顔を見ながら、急に早口になつた。

「何だと！　莫迦こくな！　腰繩つけられてえか」

そして、彼は彼の任務にいそし　だわけだ。

春はまだ淺く、重い灰色の空の裂け目から、時々弱い陽が洩れ、それが西北につらなる日本アルプスの山々の雪を白く光らせて、帶のやうにこの村にも及んで來る午後だ。白樺の林の中から、モンペ姿の子供が三人、赤い手をあげ、走つて下りて來た。口々に何か大聲で喚いてゐるのである。――畑地にゐた男たちは鍬を休ませて、子供のこちらに段々近づいて來るのを待つた。そして、大へんなことをきいて了つた。

「死骸見つけただ！」

「×××さ死んでるど！」

――靜かな林の奧で、××は和服のまゝ、簡單に殺されてゐた。誰かが、その左の××に××を打ちこみ、それからてつぺんから×××したのだ。どつかで大分ひきずり廻したらしく、洋服や死人色の頰つぺたが土に擦り切れてゐた。眼は白くむかれ、帽子はあとから持つて來て置いたのであらう、胸のところにチョコンとのつかつてゐる。林の奧は小暗く、どつかで山鳥が鳴いた。次第に夕方は近づき、あたりは眞暗になるまで、百姓たちは、ぢつと立ちつくしたり、うづくまつたりして、死骸をとりまいて見物してゐた。誰一人として役場へ、この出來事を知らせに行かうとするものもなかつた。××の死骸を見物するのは中々飽かないものである。

だから、村役場にこのことが知れ、町の警察から官吏たちが、提灯をぶらさげた自轉車を幾臺もつらねてやつて來たのは、隨分と夜更けだ。村の家々は戸締りされ、燈は消されて、人々はすでに今日の異常事の昂奮からもさめて、寢についてゐた。――その散在してゐる家々を提灯は走り廻る。月が出た。戸はどん〳〵と叩かれ、片つ端から縛りあげられた。誰も彼もが鐵砲をもつてゐるので、みんな嫌疑がかゝつたわけだ。官吏たちは朝方までに大活動をした。――だが、

「身におぼえのねえこたあ、なんちゆはれても、知りやせんでごわす」

無表情な彼らが、強い太い眉を動かして云つた言葉はこれだけなのだ。

めづらしく、その日は誰も山に狩りに行かなかつたと見えた。どの銃口をかいでも、最近の煙硝の匂ひはなかつたのである。

殺した男は遂に知れずに終つた。唯、おびただしく、無鑑札の罰金が云ひ渡され、村民に彈丸を密賣してゐた町場の鐵砲屋がばれただけだ。

もちろん、近在の者が噂して云つたやうに、××殺しは、村のものにちがひない。

「何せえ、熊を生捕つたちふ男もゐるつちふし、氣性の荒つぽい村だに――」

さう、彼らは口を利いてゐた。

定評は譃でなかつた。多賀村は氣性の荒つぽい村だ。そこでは人々は、せつぱつまると、命知らずの振舞をした。暴力の驅使できる人間は尊敬される。田植時の水爭ひ、正月の消防出初式、御柱引き出しなど、村々對峙の喧嘩には、女房や子供たちまで、一つの昂奮に抑し包まれるのだ。

「おら村、昔つから、負けたことせえねえぞ」

――しかし、村と村で爭つて見たところで、彼らの生活が根つこからよくなつたことはない

のだ。荒つぽい氣性はもつとちがつたところに使はれねばならなかつた。彼らの生活をどんどんと苦しさの底に追ひつめて行くものに向けられねば！　そして、向けられた。そのはなしをするのが、この小說である。つゞけて讀んで貰ひたい。

2

――村は長い間、表面は平和にすぎてゐた。射殺された四角い顎の××の後によく肥つた佐竹と云ふ男が來てから、もう十年近くになるのである。この男は山の中の、しかもお上をお上とも思はず××して了ふやうな、多賀村に駐在されたことが、最初は大へん不平であつた。しかし、彼の頭はもうかなり白いものを交へ、そいつは增して行くのが眼に見えるのだ。さう云ふ年輩になつて了ふと、不平も次第にあきらめに變化するらしい。――今となつては、巡廻のついでに、小高い山の中腹にあつて、村からはその土塀の一部と塔とが見える安養院と云ふ寺に立ちよつて、和尚にこんなことを云つたことがあつた。

「わしも、もうこゝでせえ骨になつて本懷でごわすわい。このお寺さまの御厄介になりやせうで――」

彼は村民を恐れ、憎まれてはならぬと、何ごとも事なかれ主義に、大目にやつてゐた。だから、今では公然と、××も行はれ、鑑札のない銃も平氣で駐在所の前の道を通り、ヤアと彼にアイサツして行くのである。

百姓の馬が病死した、と屆けがある時なぞでも、彼は、うん、うんと頷くのである。

「そいつはでかい損をしたな。――だが、まあよく石油せえぶつかけて燒いてから、埋めて了へよ。病氣馬の肉は毒だで食ふでないど――」

さう云つただけで、佐竹巡査は、燒く現場には一度も立合はなかつた。彼は村の風習が規則とちがつてゐるのを知つてゐたからだ。――百姓たちは馬の皮を剝ぎ、それを燒きすてるやうなことはしない。そんなモツタイない丸損を見す見すやるはずがなかつた。毒だと云はれるその肉も、百姓たちは平氣で食ひ、又他に賣り、くらしのたしにしなければならなかつた。そして、その肉のうちの幾らかが、いつかこつそりと內々のお禮として、×××の勝手口に屆けられるのが慣となつてゐる。

佐竹もそいつを食ひながら、女房に云つたものだ。

「こいつは、ドカンとやられるのとはでかいちがひだで――」

こんな巡査には百姓と云ふものは心易さを感ずるものだ。こいつはくだけた旦那だ。百姓たちは、大根や豆やの畑のものから、栽培してゐる林檎や杏や梅の實なぞを持つて來ては、白い髭の佐竹巡査と、おら口調で話しこんでは悅んでゐた。彼が村道をぶらぶら步いてゐると、ひまな時には家ん中へ呼び入れられた。官服のままで上りかまちに腰を下して、茶の御馳走になり、お茶うけの漬物を口に入れて、モグモグやるのだ。家々のこまごました、內わごとやら緣談の相談までも持ちかけられた。（この習慣は喜作が村の「大立物」になるまでつゞいた。）

時々は、それでも佐竹の手をやく事件が起つた。――二三人の百姓たちや、金切り聲をあげた女房が駈けこんで來ることがあつた。駐在所の戶口で、女房は氣狂ひのやうに甲高く喚くのである。

「またあん畜生が――暴れやがつて――畜生野郎！」

佐竹は、帽子が飛ばないやうに手で押へなが

ら、アタフタと走つて行くのである。

村にはどこにも、手のつけられぬ亂暴者がゐる。ここにも際立つて亂暴な勘次がゐた。こいつが、醉拂つて少しでも氣に食はぬことがあると、喧嘩をぶつかけるのだ。相手か自分かのどちらかが血を流して、ヘコタレルまで、狂ひ廻るのである。けれど、荒つぽいことの好きな村の人々は、それまで止めようとはしない。そこで、勘次にひどい目にあはされてゐる男の女房が、駐在所にかけて來る始末だ。――

佐竹の白い髭が現れると、大抵は勘次も靜まつた。

「少しは亂暴も手びかへろよ。いつもぢやないか」

すると、勘次は厚ぺつたい唇を歪めてクドクドと云ひ出すのだ。

「こつちにや、蚤のキンタマくれえのまちげえもねえ――ねえでごわす」

「まちげえのねえ」と云ふのが、この男の口癖だ。

「まちがひのあるもないも、醉拂つて解りつこないぢやないか、いつも――

「ねえ。ねえつたらねえ。わつしは解らねえ男ぢやごわせん」

「解らねえ男でなけれや、お前、さう何も亂暴なまねをしでかさなくても――」

勘次と云ふ男の毛深い右腕には、黑い傷痕があつた。これはある年の熊狩りにその爪を立てられたのだ。これが又、自慢なのである。

「なかなか消えねえもんだに、熊の爪傷せえは――」

そして、彼の殘念がるのは、近年は熊も滅多に出ないことである。――

荒つぽい多賀村のことだ。亂暴者の彼は、亂暴なそのことのため人望があつた。だから、どこの村でもやるやうな酒の振舞なんかしなくても、人々は彼をちやんと消防小頭に選擧することを忘れなかつた。村對峙の喧嘩には、いつも小頭の法被を着て、まつさきに乘り出して行つた。そこで、近郷の人々も「多賀村の暴れもの」として、彼をおぼえこんでゐた。――繭賣りに、町の繭絲會社に行つた歸途など、居酒屋やソバ屋でよく、勘次は見知らぬ百姓たちに横眼でジロジロと眺めまはされることがある。彼がおほひかぶさつたやうな眉の下から睨みつけると、こつそり向けてゐた顏をそむけてアタフタと出て行くのである。こんな野郎に係りあつては！　一度、彼がこんな場合に、それも醉拂つてゐたからではあるが、他村の若者六人を相手に暴れ狂つたことを誰も知つてゐるからだ。

冬も來て、百姓たちが小作米を地主の庭に運び込む時になると、勘次はきまつたやうに燒酎に醉拂つた。小作が足りないのである。正氣ぢやタンカが切れないのだ。庭の莚の上にアグラをかいて、上の旦那を見あげて云ふ。旦那はこれでは足りないのである。

「これ以上ぢや、こつちが食ふだけも殘りやせんわ。――今年はこれだけでまア――」

「お前とこだけ凶作つづきでもなかんべえ。毎年、毎年！」

「凶作にしろ何んにしろ、こつちは食ふにも足りねえくれえの米しかごわせんわ」

これでつつぱなすのだ。地主も亂暴ものの勘次にだけは餘りキビシク文句も云へなんだ。こんな男は何を仕出かすか知れぬ。そこで、その償ひをしでもするやうに、他の百姓たちには一升のカケにもやかましかつた。――

百姓たちは地主の庭へ出ると、腰をまげ、首から手拭をはづし、むやみにペコペコとした。負けてくれるやうに苦しさを訴へに來たのだが、それは切り出しにくかつた。そこで、彼

らも勘次にならつて、車をひく足もともヒョロヒョロするほど醉拂ひ、赤い顔をして、俵を地主の庭に運んで來るのである。こんな連中が次第に増して行つたが、こいつは百姓が益々食へなくなつて行くことを物語つてゐた。

赤い顔した小作人の訴へをきくと、地主は縁先に出て來てどなつた。

「ごろつきどもめ！　おとなしくしてゐれや、つけあがりやがつて――小作がいやなら、勝手に何處へでも行きやがれ！」

それから奥へひつこんで了つた。地主に使はれてゐる作男は桝目の足りない百姓を、自分の責任になるのを恐れて、ピシピシときめつけた。赤い顔して舌もつれの言葉でブツブツ云つてゐるのを小突きとばした。その百姓は倒されたまま、醉拂つたからだを、地べたに横たへて眼をつぶつてゐた。頭の禿げた年寄りが、地に膝をついて、ペコペコと云ひわけをやる。作男は地主見たいな顔でどなるのだ。

「手前らタダで田地せえ作りやがるだか！　どいつもこいつも！」

百姓たちは腹の中では、「水でものんでゐろとでも吐すだか。小作なんか納めやがつてせえ」と思ふのだ。だが、そいつは動作にまで出なかつた。小作米の取立てが、どれ位苦痛でも、これは親代々あたりまへのことと考へさせられてゐたのだ。しかし、親代々耕しに耕して來た土地が――先祖から苦しみも感じ愛情を持つて手入をして來たその土地が彼らのものでないのこそ、をかしいことであつた。そこに、地主が一度でも手を觸れたことがあつたか。草一本ムシリ取つたことがあつたか。――地主は唯、苦勞の結果の收穫だけを取る權利を持つてゐるのだ。事實、小作人たちは親代々の長い間の耕作で、その土地はいつの間にか、自分の土地のやうに思へてゐるのである。しかし、小作米納入日には、あれは他人のものだつた、と寂しく氣附いた。

不景氣と云ふ字が、村役場に來る町の新聞に、幾度も使はれ出してから、百姓たちは蠶を飼つても、來る年來る年、損ばかりした。一貫十五圓から二十圓もしてゐたのが、七、八圓にまで下つた。かうして繭絲會社の相場はいつも、百姓の胸算用から、ひどくはづれてゐるのだ。――

「百姓しても食へねくなるつきりだよ」

だが、百姓をやめてどうするのだ。そんなことを考へるのは、彼らは不得手だつた。默つて家を叩んで、山の風を背にうすら寒く感じながら、町へ出て行くのもあつた。だが、それらが町へ行つて食へるやうになつたか、どうかはちつとも村の方へ知れなんだ。――そこで、彼らは營養不良に陷りながら、田を作り、蠶を飼ふより仕方がないのである。

春繭の格安にアテがはづれ、ガッカリしてゐると、百姓たちの間にいつのまにか、夏蠶は値が出ると云ふ噂がひろがる。それにやつと彼らは元氣づくのだ。だが、繭にして見ると、相場はやはり同じであるのが常であつた。同じやうなことが秋蠶にも、待つてゐた。――繭の買ひ出しにやつて來てゐる仲買人や、製絲工場の買手たちは、かうして百姓たちからの繭「買ひたゝき」や「買ひなめ」をやつた。

「何しろ生絲の値も安いし、外國向きも惡いつて云ふわい。不景氣なことだで」

百姓たちは語りあつた。しかし、會社は前と同じやうに儲けてゐた。不景氣のせゐで損をするのは、百姓たちの方なのだ。――

村から町へ繭を賣りに行つても、アテにしてゐた金も受取れず、買はうと思つてゐたものも買へなかつた。そこで、町場の盛り場や、隣村

の出端れにある、百姓相手のアイマイ屋は、養蠶になつても金が落ちて來ないのである。横太りに肥えた、首すぢの鼠色の女たちは、のれんのかげから飛び出て來ては、繭賣り歸りのシヲレた百姓の袖をヤッキになつてひつぱつた。だが、多くの百姓はからかひの言葉だけを投げ、それから女の手を振りきつた。すると、女たちはヤケになつて、彼らを罵るのであつた。中には、目腐れ金に棄鉢になり、そこで懐にありつたけをぶちまいて、飲みつくす男もゐた。もう、どうにでもなりやがれ！

そしてある朝、眞夏の杉林の中で村の百姓が古びた鳥打を被つたまま、首を吊つてぶらさがつてゐた。帶から垂れた紐のさきの財布には、十錢白銅が二つ、銅貨が三つ四つ殘つてゐるだけだ。この百姓は五人もの子供を持つてゐた。女房が赤ん坊をせおつてやつて來た。赤ん坊は背中の上で女房の亂れた髮をひつつかんで笑つてゐた。

女房はどうなるのだ。

「誰がせえおら父つあんせえ誘つただ！　スケベ野郎！」

死骸をとり圍んだ野良着の百姓や女や子供にまじつて、勘次ものつそりと突立つて、默りこみ、厚べつたい脣を噛みしめてゐた。彼の眼は黄色くドロンとし、少しばかりの涙もあつた。實は、彼はこの首を吊つた男と一しよに、前夜、隣村の上條村のアイマイ屋へ上つたのである。だが、誘つたのはこの百姓の方だ。――彼は暗い氣持の中に、何かに摑みかかりたい欲望を感じながら、腹の中でヒソカに云ひわけを呟くのである。

「おら、おら、これつぽつちも、まちげえねえ」

家では、手垢で汚れた長い財布を前にして、勘次の女房は子供の口に乳房を押しつけながら、ションボリしてゐた。夫が歸つて來ると、彼女は頭髮をくるんだ手拭の中から、日燒した黒い顏を歪めて、云ひ募つた。

「どこにせえ繭の金、棄てで來ただ、え？　お父つあん」

「おら、知らねえ！」

「あんまりひでえでねえか。無鐵砲云ふものづら。さあ、どこにせえ金、棄てて來ただ」

「うんにや、だまらね。あんまり――」

「だまらねか！」

「このあま！」

平手で打つ音がする。女房は泣かなかつた。夫に摑みかかつて行つた。子供は乳房を離されて泣き出した。

だが、翌日は女房は赤ん坊を背にくくりつけて、桑摘みに出かけるのである。勘次も髭面を暗くしがめて、默つて立働いた。彼は胸ん中であばれ廻るものを感じた。蠶飼つたり、野良働きやり通して、そいで百姓はいつてい何んの得せえするだ。莫迦くせえ。

――桑籠をかついで勘次が日光に白つぽい街道端へ出ると、自轉車を曳いた若い男がやつて來た。その汚れたズックの鞄を持つた男は經木作りの帽子をとつて、

「恐れ入りやすが――」と言葉をかけた。

勘次が頰かぶりの顏を向けると、

「宮田喜作さんとこ、どう行つたらようごわしよ」

勘次がブッキラ棒に教へてやると、この若い男は禮を云つて、自轉車を曳きながら、何も彼とならんで歩いてくるのである。そして、村の首縊りの話から、繭相場のこと、小作料のことまでも話しかけた。

「不景氣でごわすからな。こんなままぢや今に百姓はみんな首縊りでもしなけれや――」

勘次は返事もしずにこの若い男を、じろつ

と見た。それから、むつつりした言葉でたづねた。
「おめえさん、百姓かえ」
「はあ、上條村のもんでごわす」
「この忙しい時期に、おめえ――」
すると、若い男は眞黒な齒を見せて、薄笑ひをした。
「はあ、もつと忙しい要事せえできて――」
そして、ありがたうごわす、を云ひ、自轉車にまたがつた。だが、ペダルを踏まうとして、氣がついたやうに、又跳び下りた。汚れたズックの鞄の中をのぞきこみ、刷物を出して、勘次に手渡すのだ。
「こいつを」
「何んだえ」――勘次は半分手を出しながら云つた。
「わしら百姓の首縊らねえやうに考へるやつで――」
「首縊らねえやうに？」
上條村の男はうなづいて、再びアイサツをし、自轉車を走らせて行つた。その土埃をあげてゐるうしろ姿を見送りながら、勘次はケタイな奴だと思つた。そして、その刷物を懐にねぢこんだ。

夜、蟲の集つてゐる薄暗い電燈の下で、勘次は刷物を讀んでゐた。假名をひろつて讀むと、何か百姓みんなに叫びかけてゐるらしく、仲々もつともなのである。

「今、丁度、蠶期だし、農繁期だ。だが、新繭の相場はガタ落ちで、養蠶家の損失は莫大だ。それだのに政府は絲價補償法と云ふものをつくつて、農民や勞働者から捲きあげた金を、銀行や製絲工場の資本家にくれてやることをもくろんでゐる。こんなことは大反對だ。資本家に出す金があれば俺たちによこせ。桑畑の小作料は全免にしろ！

これから水問題が起る。用水のせつびを地主に負擔させろ！

――――」

字を讀みつけない彼は疲れた。唯「立禁」共同耕作」「勞働者と力をあはせ」「町は失業者で一杯」「製絲女工、紡績女工の首きり、賃銀不拂、賃銀値下も我々農民の問題だ」「土地を農民へ！」――なぞの文字が眼にチラチラした。最後に大きく「全國農民組合長野縣聯合會」と書いてあるので、彼は口の中で幾度も繰りかへし「ノウミンクミアヒ」と云つた。ぶんぶんと蚊が來る。ピシャリと太股を叩き、その紙を庭に投げすてた。しかし、ちよつと考へて、彼はもう一度そいつをひろひあげ、佛壇の棚にのつけて置いた。

（ついでにここで云へば、この勘次に刷物を手渡した若者と云ふのが、最初の方に書いた石川と云ふ男である。）

3

山間の多賀村の秋は早く來る。秋晴れの高い空から寒い風が吹きはじめた。黄色く、重さうな穗がザワザワと鳴り、山の樹々は裸になるのである。早くも氷雨が横に地を打つ日が來た。すると、百姓たちはあわてて、刈り入れにかかるのであつた。

その頃のある日、年寄り百姓が、隣りの上條村で地主と小作とのモメ事が起つてゐると云ふことを云ひふれて歩いた。實は彼はそれを喜作にきいたのだ。おしやべりのこの老人は新聞のやうな役目をした。――彼はひどく昂奮して、首をかしげて話すのだ。上條村では、小作を負けろ、とのことから、地主が土地を取りあげて了つた。そこで大騒動が起つたわけだ。それを

勘次もきく。
「農民組合とか云ふものが出來ただとよ」
「農民組合？」
「うん、そいで、地主の方ぢや渡り者を雇つてさ、おめえ、大喧嘩おつぱじめさうだわ。巡査も來てゐるつて云ふぞ」
大喧嘩？」と、多賀村の暴れ者が、再びききかへした。
「うん」
勘次の眼の中に、もう忘れきつて了つたと思つてゐた上條村の若い男、經木の帽子をかぶり、自轉車に乗つて走つて行く姿が、見えた。年寄りの百姓が歸つてから、彼は思ひ出して、佛壇の棚を探した。しかし、例の刷物は見つからず、大きな掌がたまつてゐる埃で汚れて了つた。
「ここにせえ載せて置いた書きものせえ、どこへやつた」
「書きもの？」
女房は顔を向け、ケゲンな表情を浮べた。
――「どれな？」
「書きものよお。莫迦！」
だが、女房には勘次が「書きもの」を探すのが解せないのである。彼の物を書くのは倘のこと、讀むのも見たことのない彼女は、ひどく熱心になつてゐる彼の様子がをかしくさへ思へた。
「だいじなものだか？　きつと、放せえかんで、ぶちやりでもしただよ」
「ぶちやつただ！」勘次はうなつた。「この性なしめ！」
あの刷物を讀みたくてたまらぬ氣が、隣村の爭議に刺戟されて、彼の心のうちに起つたのだ。
朝早く、佐竹巡査が、卷いた黒のマントを肩にかけ、同じやうに黒い脚絆をつけて出て行く姿が見られた。
「上條村までな。なんか騒ぎが起つたつて召集されてな」
途で出會つた村民に、彼はしやべつた。この村でそんな騒動が起らないのが彼にはありがたかつた。この分では無事につとめおほせるだらう。
だが、多賀村に歸つて來た時、この白い髭の巡査はすつかり困惑してゐた。駐在所へ戻り、ドカツと腰を下ろすと、疲れきつたやうに脚をのばして、暫く休んだ。もう、日はすつかり落ちてゐたが、夕飯も食はずに、佐竹はそのまま、再び出向いて行つた。そして、宮田喜作のところへ來た。
「わしも、もう十年もゐるんで、とやかくやかましくは云はんが、まあ、あんまり亂暴なことはせんでくれよ。君や他二三人、上條村の騒ぎに加はつてゐるつてんで、本署から叱られたでな」
「そいつはお氣の毒だで」
それから佐竹は喜作に、農民組合つてものは「日本人」のやることではないと說き出した。すると、喜作はもう彼の云ふことなんか聞いてゐないのである。藁繩をなひはじめながら、
「もう、あんたも恩給でごわしよ。大分長いことだで」
「うん、さやう」
「ようごわすな」
「なにお前、わしの恩給位ぢや暮せんわ。これで、今首にでもなると、土地を持つてるではなし――」
そこでこの老いた巡査は、あまり表向きにはやらぬやう、喜作に頼むのである。今になつて、この村から事を起したくない、と彼は云つた。もしも隣村のやうなことが起れば、彼の責

任になるからだ。小作が地主に對抗するやうなことになると、それは警察官の取締不行屆きになるのだ。――すると、村の×××は地主のために存在してゐるのであるか。から云ふ疑問が、クドクドと嘆願してゐるうちに、佐竹は自分の言葉の中から生じるのを感じた。彼は頭を振り振り、暗い夜道を歸つて行つた。

「喜つさんせえも、から云つただ」

村民はよくこんな風に云つた。喜作は二里ほどさきの郡立農學校に三年まで通つた。百姓仲間では「頭のある」方なのである。農民組合の縣聯合會の石川は彼に眼をつけた。そして、この村では、彼を中心に若者たちが三四人寄り集るやうになつてゐたのだ。

山一つ迂回した土地つづきである上條村の小作爭議の噂は、嫌でもこの村にどんどん傳へられて來た。すると、村民は不思議な感を抱くやうになつた。どうにもならぬと思つてゐた地主の壓迫が「組合」と云ふものの力ではね返さうとすることが出來るのを知つたのだ。生きた實例は隣村で、刻々と動いてゐる！ 勝つか、負けるかは、ひとごとではなく、村民たちの氣をもませた。勝たせねばならぬ。そして、自分たちも勝たう！

「農民組合」と云ふ言葉は十分と村民の間に行き渡つて了つた。そして、

「上條村の百姓が小作せえ負けさせたら、おら村だつて、組合せえ作らず」と云ふものさへ出て來た。

この機會を失つてはならない。喜作たちは、その間を、說いて廻つた。

「おら百姓たちはいつまで地主にこき使はれるこたあねえ。組合作つて、自分で作つた米ぐれえ口に入るやうにするだ」

永の間の鬱憤は、たやすく、この言葉を受入れさせた。誰もがうなづくのだ。もちろん年寄つた連中のうちには、

「そげえなこと、若いものでやつてくんろよ。贊成だが、おらまで出ることあなかんべに」

と、云つて無關心を見せるものもゐた。

だが、丁度小作米納入の日をひかへてゐる。この折に組合の力によつて、年貢米を負けさせねば、と云ふ意見が村を支配して來た。

霜柱が立つて凍りついた地肌を踏んで、喜作は勘次のところへ顏を出した。彼も十分に說き伏せて置かねばならなかつたのだ。すると、爐端にゴロリとなつてゐる勘次の方から、馴れ馴れしく、やあ、と云つた。

「おら、とつくにおめえにひとつ聞きてえと思つてただが、出かけるなあ、おつくうなもんで――」

彼は今年の暑い時分に、上條村の若い男に刷物を貰つたことを話した。笑つて附け加へるのである。

「俺がおめいのとこ教へてやつたのさ。――ところが、その刷物せえ讀まねえでなくしちやつたんでな」

勘次は隣村の大喧嘩の祕密も、あの一枚の刷物が說明してくれるのだらうと思つた。そして、今、このやうな彼の態度に、喜作は元氣づいて、あの刷物の代りになつて語つた。百姓の貧乏と地主の搾取、町の勞働者との關係。――勘次は首をかしげ、その太い眉の下の眼をぢつと据ゑてきいた。そして、時々分らなくなると、首を起して喜作を見た。喜作はもつとそこの點を丁寧に說明してやる。すると、又、フンフンとうなづいた。

「そいで、おら村でも、その――組合つくるに文句吐す奴あるだか」

「ねえ。ねえわけだが、なかなか昔からこびれ

ついた考へがぬけねでさ、まだ合點の行かねものもあるだ。まあ、大方のものは贊成だわ」

「早速つくれや。おらも出來るだけ手をかすぞ。邪魔でも入れようつてんなら、おめえ、こいつで——」

多賀村の暴れ者は熊の爪痕のある腕をまくつた。——「もう長いこと寢かしつぱなしだで」と云つた。

4

山から吹き下す風に粉雪が舞ひ、それが溶けずに積りはじめた。時々、日が照ると見渡す限りの白い反射が、眼をチカチカと刺した。その間を雪靴をはいた村民が黒く動いてゐる。

土間に俵を積んだまま、百姓たちは、例年になく早い雪を載せた家根が、時々ミシリと軋むやうな音を立てるのをきいた。小作の納入日は眼の前に近づいて來てゐる。——

上條村はたうとう×を流した。百姓を×さうとした暴力團との間に××がひらめき、遂に小作のデモは大地主草鹿の邸宅を×××つて了つたのだ。——こちらの佐竹も毎日、その後の大××のために動員されてゐた。

この隣村の××騷ぎは益々この村の若者たちを昂奮させた。愈々組合の發會式にまでこぎつけるために、彼らは雪靴をはき、鼻を赤くして、家から家へと動き廻るのであつた。

發會式の日は定つた。そいつは、丁度多賀村の三人の地主のうち（この三人の中には、塔のある安養院もまじつてゐる）の最も大地主、降旗の納入日なのだ。村中をデモつてから、多賀平で、組合を結成し、その決議をすぐに降旗につきつけることとなつた。——すべての手はずは口から口へと傳はるのである。

——だが、爐端に話しこんでゐる年寄り連は、まだはつきりとは呑みこめぬやうだつた。彼らは發會式には出ないつもりだつた。小作米は如何かして納めなければ、いつ土地を取りあげられるかも知れぬ、と恐れてゐるのだ。

一軒の農家の土壁のところで、ゴマ鹽の不精髭をはやした百姓が、若い男に說かれてゐた。

「みんな出にや、おめえ、發會式だにさ」

「でもさ、おめえたち、若い衆にヨロシクやつて貰へばよ。何も反對だといふでねえで」と、その男は抗辯した。

「農民組合つて、おめえ、それなもんとわけがちがふで——。みんなで、氣勢あげにや。人まかせのことではねえでな。出ろや」

喜作の狹い家には色んな顏が重なつてゐた。それらは野良でしやべつてゐるやうに大きな聲で話しあつた。——村の大方は出るがまだ動かない連中もゐると、誰かがみんな聞えるやうに云つてゐる。喜作は、忙しさうに、集つた連中に色々と言葉をかけてゐた。そこへ顏を出した勘次は、獨り言のやうに云つた。

「この三四年、熊も出ねえが、こいつは熊狩りの時みたいにやるがええぞい。出ねえ奴にや割前もやらねえでよ。つまり、おめえ、意氣地なく小作搾られても文句も云へねえでな——」

側にゐた脊のスラリとした、頭をエリマキで包んだ百姓が、うなづいてから、切り出した。

「腰据ゑてる奴らみんな引つぱり出すにや、おら、ええことせえあるぞ」

こいつはいつも何か突拍子もないことを云つたり、したりする男だ。

「又かえ。おめえのええことせえは——」と、ナタギセルを口から離して、赤ら顏の百姓が笑つた。この會話の中に、喜作はみんなに

云つた。

「組合旗は間に合はねかつだが、赤い布でせえでけえ奴作らにや。そいから、蓆旗も五つ六つ立てるだよ―

隣村は大検擧で、男は一人もゐなくなつたと云ふ噂が、發會式の前日の夕暮みんなのところへ屆いた。檢擧も今日位で打ち切りらしかつた。佐竹は疲れて戻つて來た。

その時、もう一つの報知が傳つた。そいつは、夜のうちに多賀村の隅々に行き渡るのであつた。

「熊が多賀平の上の方へせえ出たつて云ふぞ！」

今年の早い冬に、もう熊が出たのか。一四五十貫になる熊ののそりとした姿を思ひ浮べながら、百姓たちは異常な活氣を表情に見せながら、銃と彈丸を調べた。――

この報知につづいて、又、口傳へが來た。

「明日は農民組合發會式をやつてから、熊狩りだとよ」

佐竹は隣村から歸り、もう動けぬほど疲れた身體を再び町の方へ運ばねばならなかつた。女房の入れた茶を一ぱい飲んでから、腰をあげ、灯を入れた提灯を自轉車につけた。手さきはジクジクと冷たさに痛み、そこだけ出てゐる頬つぺたは刻まれるやうに寒かつた。町の本署までは三里からある。――あす、この村でも恐ろしい農民組合が突然できることを、彼は少しも知らなかつたのだ。そんなことを探知し、豫め防ぐのが、彼の役目ではなかつたか。だが、今日の夕方になつて、降旗の代理人がこのことを知らせ、職務怠慢を責めに來たのだ。降旗の方も、はじめて、それを賣りに來た小作人からきいたのであつたが。――恩給前の佐竹の心は、自轉車のペダルを踏みながら、次第に痛み、白い髭の上には洟汁がカサカサと凍りつくのであつた。

喜作の家で、もうかなり更けてゐたが、人々はまだ散らなかつた。勘次が腕組みをして、頭をエリマキで包んだ男を見据ゑてゐた。

「おめえ、本當に見たのかや。うん」

「本當ともよ。でけえ奴が歩いてゐるんで、おら、まつくろけつて、逃げて來たわ」

云つて、このスラリとした男は、眼玉をキョロと動かした。すると、別の百姓が笑ひながら挾むのだ。

「おめえの云ふことだで。は。遠くの人間の姿でも見ちげえたのだらずに、はア」

「莫迦こけ。人間が四つん這ひで歩くかえよ」

エリマキの男はおどけた眼をした。喜作がその方へ向いて云つた。

「いいでねえか。村中で熊狩り出來るんだでよ。ぶすぶす云つつる百姓や女たちも手傳ひに出るで――」

5

普通ならば、百姓たちは車に年貢米を積み、地主の庭に運び、品質のことやら、桝目のことで、どなられ、こづかれする日だ。だが、今日は少しちがつてゐる。

「農民組合發會式だ！」

「熊狩りだとよ！」

白く積つた雪を踏んで、百姓たちは次第に列をなし出した。多賀平へと向ひつつ、各々の家から男たちは走り出して來て、それに加はるのだ。遠く離れた區の男たちはかたまつて石橋の上で列の來るのを待つてゐた。――先頭には赤い旗を立てた。幾つもの蓆旗は列の中で分隊をくぎつてゐるやうに見えた。鐵砲を肩にかけたのが大多數を占めてゐる。地主の白壁の傍

を通る時、加はつてゐた女房たちが、先づ「わあつ！」と聲をあげた。すると、男たちも、それに和した。口々の罵り聲は暫くの間、ドヨメキ渡つた。門は堅く閉ざされ、三匹の犬が後退りをしながら吠えた。——それから、多賀平へと進んだ。しかし歌を用意してなかつたので、時々列のはなし聲が雜然とし．それがダレた氣分を人々に與へた。喜作は、しまつたと思つた。彼はとつさに思ひついてうたひ出した。それは彼から一人に傳はり、二人になり、三人がうたひ、四人に增し、五人ともおぼえ、やがて、耳をすました百姓全部にまでひろがつて行つた。

「もし、もうし、降旗、降旗さん
世界のうちでお前ほど
がうよく非道なやつはない
どうして年貢をまけないか」

×××は正午近くになつてやつと、町からついた。蒼く、眼まひを時々かんじてゐる佐竹の案内によつて、多賀平へと向つた。

だが、小高い丘の平に密集した百姓たちは、すでに農民組合を結成し、全村一致で、降旗、安養院、もう一人の地主に小作料永久減額の要求を提出することとし、その回答のあるまでは、年貢米××の武器を以て戰ふことにきまらうとしてゐた。

×××はこの野天の會合に臨み、事によれば解散を命じなければならなかつた。丘の平に進んで行くと、上の方で突然××がした。

たつた一發の銃聲であつた。だが、そいつは勢よく空にはねかへつた。それを射つたのは、れいのエリマキの男だ。彼は、

「熊が出たぞ」

と叫びながら、そのくせ、一歩も百姓の列から動かずに、もう一度、銃を肩にあてがつた。再び引金は引かれ、冬空はとどろき、山々は暫くの間木魂して震へた。

×××は立ちすくんで了つた。見ると、大抵が、銃を肩にかけてゐるのだ。——しかたなく彼らは×、したまま、麓に屯した。丘の上では決議文が讀まれてゐた。それから×旗と蓆旗が搖れて「多賀村農民組合萬歲！」が三唱された。——

翌朝、午前三時。××ははじまつた。町の×××は安養院と村役場に殘つてゐたのだ。暴れ廻つた勘次、エリマキの男、喜作、その他三人が町へ引つぱられた。——熊が出ると云ふので打つぱなした、とエリマキの男は頑張つた。

みんなは二週間ばかり後、村へ歸つて來た。——降旗その他の地主は上條村の事件を思ひ、又、荒つぽいこの村民の氣性に恐れて、要求を通した。しかし、まだ、土地は彼らのものだつた。農民の手に×××××るのはまだまだ、これから組合にたてこもつて戰はねばならなかつた。

雪が溶け始め、春の鬱勃とした氣が立ちこめる頃になつた。村に十年から髭の白くなるまで駐在した佐竹は、當然、×になつた。あとには、若い體格のいいのが、急に三人に增されてゐる。「老いぼれた、人のいい」××では、もう組合のできるやうな村は取締れないのだ。

佐竹は村を出發する日、水洟を白髭の上に玉のやうにためながら、アイサツに廻つた。勘次のところへも來た。

「あんたぢや、はりとばしも出來ねが、こんだは遠慮もいらねで、グヅグヅ云ひや、××だらうが、こいつを——はア」

彼は腕をまくつて見せた。

「まあ、荒つぽいことはムヤミとするでねえで

——こんだあ、わしもからだに役目がねえで、のうのうしたで、町へでも出たら寄つてくんろ。何か小賣店でも始めるに」

「行くぞい。こんど××に引つぱられた歸りにでも寄らずよ。はア」

「うん、きつと、寄つてくんろ——ぢや、達者でな——」

佐竹は去つた。

この事件の後、附近の村々や町場では、亂暴で定評のある多賀村については、から語りあつたものだ。

「荒つぽい村だで。——××せえぶつぱなして、農民組合作つたつて云ふで」

だが、上條村爭議が多賀村の百姓の眼をさましたやうに、この荒つぽい村の話は、他村の農民に知らず知らずのうちに、階級的な影響を與へてゐた。その影響は野火のやうに遠くまでひろがつたが、その話は別の小説になるわけだ。

(一九三〇年七月九日午、後。)

休む軌道

1

人々はレエルの休む時を知つてゐる。レエルは深夜になると休息するのだ。それは生きもののやうに長々と寢そべり、腹に電柱からの微光を不氣味に受ける。隨分遠くまで延びてゐる。ある點まで走りつくと他のレエルと交叉した。柔かくカアヴする。行きどまる。かうして幾すぢものレエルは複雜に組み合つて、この大都會を網の目に切斷する。――電車の影のないレエルは寂しいものだ。人々はこのレエルの上で色んな光景を見た。ゴバン縞の醜い制服を一様に着せられた女工の一列が、軌道の上を横ぎる。彼女たちは蒼い顏を伏せ、肘と肘とを觸れあはせ、自然と小走りになつてゐた。亂暴な監視の大男がじろじろと睨んでゐるので、脚はさう云ふ風に動くのだ。列んだ彼女たちの頭の上では深夜業の汽笛が白い蒸氣を吹きあげながら鳴る。（一九二四年頃には今日のやうに、產業合理化の結果としての深夜業廢止はまだ行はれてゐなかつた。）突然、犬が犬を追ひかけて、空虚な軌道を自由げに走る。朝の市場のために田舍から來た野菜車の列、牛は鈍くて眠さうに車をガラガラと引く。交叉點を自轉車で折れる若もの、口笛を夜空に吹く。明滅する廣告燈は遠くて、通りの家々の戸締りは堅い。

――かうした光景を人々は見ることができる。そして、この休息してゐる軌道が、如何に夜の深い影のために不氣味に見えようとも、人々は別に奇異な感じに打たれることもあるまい。深夜には、外見だけでもすべてのものが休んでゐるやうに、レエルも休まねばならぬことを知つてゐるからだ。だから、すべてのものが動きを刻んでゐる白晝にレエルだけが休んでゐるならば、どんなにか異常な感じに打たれることだらう。――

そして、ある夏の眞晝間レエルはのびのびと休息してゐたのだ。

人々は頭を左右に動かして幾度も見廻す。だが、電車の影はない、軌道の敷石は徒らに白つぽい。彼らは忙しい。商業は停止してゐぬ。勤務は平日通りある。煙突はあひかはらず煙を吐き、街はリズムを打つてゐる。行かねばならない。彼らは群がつてレエルの上を踏んで行く。夏の陽は直射する。誰もが喘ぎ聲を出した。すると、埃を立てて自動車が彼らの間に突入する。彼らは慣れて了つたので振りかへりもせずに、それを避けた。幾臺も續くのだ。自動車だけが、速力ある交通機關として殘つてゐた。だが、自動車は多額の費用を必要とする。それに耐へぬ者は歩かねばならぬ。彼らは歩く。夏の陽は直射する。電車と云ふものの日常生活に於ける重要さ。あれは一時間も缺くことのできぬものだ。それを停止したのは？ それは誰だ。市電從業員が電車を運轉することを拒否したのだ。彼らは彼ら自身の私利のために市民の脚を奪つた。呪あれ！ 人々の憤激を從業員に向けるために反動團體は動いた。スローガンを投げつける。――「今回のストライキは卽ち天人共に怒る暴擧なり」そして「大阪市民の公敵を葬れ！」

すでに市電はストライキに入つてゐたのだ。

2

少しく時日をさかのぼる必要がある。

　七月三日、午前十一時二十分すぎ。電氣局樓上の會議室の出口から一群れが飛び出して來た。彼らは互ひに肩と肩とを押しあひながら、階段を螺旋狀形に下へ落ちて行つた。各自、手には白い紙片をふりかざしてゐる。建物の外へ出た。別の群集が彼らを取り圍んで了つた。それは從業員たちだ、彼らは嘆願書の回答を受けに行つた代表者たちを待つてゐたのだ。彼らは失望する。下りて來たのは立ち會つた新聞記者團だつたからだ。彼らは從業員たちの間をくぐり拔けながら、ダメだダメだと云ふ風に首を振つた。それから各自の社へ電話をかけるために散つて行つた。背中の方に戰ふ前の呻き聲をきく。代表者たちが姿を現したのだらう。

　のつぽの記者が走る。彼は彼の新聞社の代理店へ來た。電話口に食ひつく。通話するのは手間取ることだ。彼は受話器を耳にあて、額を手巾で拭ひながら、振り向いた。代理店の疊の上に配達夫が一人仰向きに寢ころんでゐる。

「きみ！　氣の毒だが氷水を二三杯云ひつけて來てくれ給へ！　あつ！　本社ですか。社會部へ。あつ……木村君ですか。杉本です。唯今電氣局長の回答がありました。從業員側からは運轉、車輛、電務、軌道、倉庫、印刷、轉轍、信號、變電の九課を代表して三十一名。ええ、三十一名。午前十一時、電氣局長と會見。かねて、もしもし、かねて、提出された六十餘箇條の嘆願書に對して、公式回答がなされた。大要左の如し。先づ、今回の嘆願に對する市としての解決は、各郊外電鐵を初めとし、京阪神の各種工業團體の事業に多大の影響を及ぼす、ええ、各種工業團體の事業に多大の影響を及ぼす、重大なる問題である。私は本年二月就任以來、諸君の待遇に關し種々の考慮を重ねてゐたが、かうした結果を見たのは甚だヰカンである。諸君の要求のうち、八時間勞働實施の件、最低賃銀制定の件は、これを學說にも聞き、理論上いいものではあるが、理論上、もしもし、いいものではあるが、全國でこれを實行してゐるものは數ふるに足りない。全國諸官署に先ち、市電に於て、これを行ふことはできぬ。中休制（一日二回出勤制）廢止は十分考慮の餘地がある。半期賞與六十日分給與や、住宅補助料七圓給與の件は財政上餘裕がない。要するに――」

　氷水が運ばれて來た。記者はそれを飲む。一氣に咽喉の中に押しこんだので、暫くむせんだ。

「要するに、諸君の嘆願に對して全部をはねつけるのではないが、直ちに實行せよと云ふなれば、明白に拒絕する。明白に拒絕する。終りに諸君に一言したいのは、諸君の宣傳ビラに、ええ、さう、宣傳ビラに『ストライキのためにストライキをするものではない』と云ふ字句を見たが、之は非常に結構であると思ふ。萬一諸君が同盟罷業を斷行した刹那の氣分を推察する時、淚なきを得ない。諸君は罷業によつて市民の交通を阻害するのである。諸君は市民を敵として廻すのである。萬一諸君がストライキを斷行し得ても、多くの反對に逢はねばならない。當局としても、多大の費用を要するが、應急策を講じ得るのである。」

　記者は報告した。語られてゐるのは局長の言葉だ。だが、語つてゐるのは常識を持つた彼だ。彼はその言葉のうちに含まれてある矛盾と高壓的なおどかし文句に氣がつき出した。けれども彼は報告した。――汗を荒々しく拭つた。

　氷水二杯がすつかり溶けてゐる。

「ええ、それで、記事はあなたの方で作つて置いて頂きたいのですが、ええ、もしもし、從業員側は、午後直ちに九條市民館に引揚げ、代議

員大會を開く豫定なので――さう、藤井君はもう、そちらの方へ廻つて貰つてあるのですが、ぼくもこれから行かうと思つてゐます。もしもし、從業員側としては、この市當局の挑戰的な態度と爭ふために、最後の手段をとる意氣ごみらしいのです。ストライキは遂に不可避になりました。市民の脚は――」

3

一つの部屋を假想しよう。入口に「ストライキ」の名札がかゝつてゐる。西部交通勞働同盟に組織されてゐる市電從業員四千名はここにはひらねばならなくなつた。そして、やつて來た。ドアを開く。すると、彼らの敵の市電當局者がすでにその部屋にはひつて居り大きなテーブルを占めてゐるのを、彼らは見るのだ。それだけではない。そのテーブルの上では、もはや十分と彼らの計畫は綿密に描き出されて、實行に取り掛つてゐる。おまけに彼らは多くの紐を持つてゐる。紐の先にはいろんな顏の人形がくくりつけられてあり、それらは紐が引張られると、ピョイピョイと踊り出す。人形の顏には次のやうなのが見られる。先づ警察。それから、ブルジョア新聞紙。在郷軍人會。上級市電從業員。學生。更に暴力團。――市電從業員はこれらの手先人形とも戰はねばならないのだ。見よう。

九條市民殿「キリスト教教會」では市電從業員代議員大會が開かれた。午後一時半。恐ろしく濃い空氣が左右する人間によつて動搖させられてゐる。開けはなされた窓からは聲が洩れる。時々一齊に口が動く。吸ひかけの煙草を床下に投げて、突然立ちあがつて發言する車掌服。腕と一緒に乘り出して聞かうとする耳。指導者の眼が輝いてゐる。暑さうに安物の扇子をバタバタさせるスパイの手。議論は速記錄の上に進行した。委員會選擧。

討論が續けられてゐる時、各車庫に貨物自動車が列んで乘りこんで來た。そこから夜具が運び下される。夜具は從業員を歸宅させないために、不法監禁するために使はうと云ふのだ。午後三時。重い夏のくもり空の下を不安氣に電車が走つてゐる。苦しい程、人間のつまつた部屋の中では委員會が沸きかへつてゐる。委員會はすでに提出された嘆願書を要求書として再提出することに決定した。二三の附け加へがなされる。その一つに「此の問題に對して絕對に犧牲者を出さざること。」

夕暮だ。軌道にも撒水がされてある。何處かで太陽が沈む。ラッシュ・アワアの客を滿載して電車が走つてゐる。その電車の前を横切つて行くのは市電從業員の代表者たちだ。會議を終へた彼らは再び、電氣局に來た。面會を求められた局長は、局長と云ふもののすべてと同じく、不在してゐる。そこで、要求書は、昂奮した手から、庶務課長の冷酷な手に渡される。彼はずるく笑つた。――「明日午前十一時、市廳舍で回答致します。」

當局は豫想した。先づ怠業が始まるだらう。そして怠業は始まつた。色々な口實が作られて電車は次から次へと入庫した。午後七時。從業員は歸宅しようとするのだ。人形を呼ぶ紐が引張られる。數十名の警官が出動した。阻止。小競合。主立つた者の檢束。强制的に明日の出勤誓約がなされる。午後八時。まばらに動いてゐる電車は客を滿員にしたまゝ、突然、行先を車庫入りに變更する。雜沓が各所に起つた。雜沓の中には事件についての噂が高い聲でなされる。交通機關のやうな公共のものを停止させるのは從業員側にどんな理由があつてもケシ

カランと洋服男は云ふ。若い男が、そんな重要機關の勞働者だからこそ、もつと經濟的にも優遇さるべきだ。今度の當局の態度は實に不眞面目でストライキを挑んでゐる、當局こそ市民の敵だ、と熱辯する。雜沓に潛んでゐるスパイが突然身を現して、若い男の腕をつかんで連れて行つた。雜沓はますます混雜した。しかし、やがて彼らも次第に散つて行つた。時刻はすぎて、夜半になつたのだ。

空氣も少しく冷えて來た。海からは眼に見えぬ風が吹いて來る。夕凪橋の西部交通勞働同盟の本部から、洋服のボタンを外したまゝの男が出て來た。彼は外氣にあたつて、今までの昂奮から解き放され、思はず深く息をする。夜のあけぬうちに本部を移すことが必要になつた。そこで爭議の方針が熱議された後、移るための整理があつた。彼が働いた。彼は忘れてゐた小便を思ひ出して、夏草の茂りの中に長々とする。家の中ではまだガヤガヤとしてゐた。彼らももうすぐ出て來るだらう。その時、小便をしてゐる男は突然、自動車の白いヘッド・ライトに全身を照し出された。眼がくらむ、あつ！ と云つた。數臺の自動車があちらの家かげから現れたのだ。そこには白服の警官が滿載されてゐる、――時間が經つて、騷音が靜まつた。家の中では紙片が散亂して居り、インクは疊の上を流れ、倒れた唐紙は靴あとを殘してゐた。點いたまゝの電燈はいつまでも搖れてゐる。原一つ距てた家々の二階で蚊帳から出て、見物してゐた人たちもやがて寢についた。

ストライキを破るためには、その一つとして、ストライキが何ら痛さを市當局に與へぬと云ふことを見せねばならぬ。それには平日通り、電車を運轉し得る技術者が必要だ。それをどこに求めよう。監督と云ふものは、平の從業員から出世して、平の從業員の敵になつてゐる。彼らは昔の日を思ひ出して運轉に從事するだらう。それから敎習所生。未熟な技術も無いよりましである。敎習生が煽てられた。「諸君の習ひ覺えた腕をタメス時が來た。今回の不穩事は諸君を平常より早く一人前の乘務員にした。幸福な諸君！」敎習所生は四日早朝の勤務のため、胸ををどらす。ガラン洞の金で作られた市電の帽章はモオルのと代へられた。大きな立看板が各詰所で、監督によつて作られてゐる。そこには次のやうに書かれるのだ。「經驗ある車掌運轉手の臨時大募集！」

だが、この當局の徹夜の準備にも係らず、まだストライキは始まつてゐない。唯、不安な怠業狀態が支配してゐるのだ。夜はあける。そして、四日、全市に亙つて、僅かに百五十臺の電車が動いた。

この日の午前十一時には要求書に對する回答がなされることになつてゐる。市廳舍の定められた室に、電氣局長はやつて來た。彼の大きな飛び出した眼玉や、短い首はキャッキャッと笑つてゐる。從業員に先手を打つた事について大に誇つてゐるのだ。新聞記者たちがかたまつてゐた。局長はそれを見ると、急に嚴肅な顏になり、近づいた。「いや、今回はどうも困つたことが起りまして、市民諸君に對して、誠に申譯ない次第であります。いや、どうも」彼は滿足氣に新聞記者の顏を見廻す。新聞紙はストライキにはひらうとする從業員に對しては筆を揃へて攻擊するだらう。だが、ストライキにまで誘ひこんだ當局については何も云はないはずだ。時刻が來る。午前十一時。從業員代表は一人も姿を見せない。「どうしたのでせう」みんなもつたいぶつた顏で云つた。「どうしたので

せう——それでも來ぬ。敢然として、電氣局長は新聞記者席の前に立つた。「諸君、ごらんの如く、從業員側は實に不誠意極つて居ります。この市民百五十萬の利害に關係いたす、重要なる會見にも一人として出席しようとは致しませぬ。諸君の新聞を通じてこのことを市民に廣く傳へ願ひたいのであります」それから、彼は猪首の汗をぐるりと拭つて、大きな聲を出した。「市當局と致しましては、從業員が組合に煽動されて提出しました要求全部に對して、誠にキカンながら、拒絶いたします」大きな沈默が室に滿ちる。新聞記者が紙に筆記する音だけだ。暫くして、正午のサイレンがなりひびいた。電氣局長は更に悲壯な顏を作つた。

代表者たちはこの會見に出席できなかつたのだ。彼らは未明に、本部から引張られて了つてゐるから。彼らの身體は家宅侵入罪と云ふ、トテツもない罪名で留置されてゐる。一切の必要書類と、勞働者から掻き集められた罷業資金とは、警察のテーブルの上に安置されてゐる。電氣局長はこれを思ひ出して、クックッと笑つた。

緊急市會召集、午後二時四十分。市長は要求の不當を說明する。きかされた通りに、同じ考へ方をしなければ損である市會議員は譯もなく市長に同意する。そして、次のやうに申合せた。「あくまで強硬な態度をとると同時に、この際を利用して市電從業員の不良分子を一掃すること」

新聞のザラ紙に不鮮明な寫眞が載つてゐる。「在鄕軍人會の奮起！」暗い夜に、二人のカアキ色の兵隊服を着た男が、提灯を持つて、休んだ軌道の見張りをしてゐるのだ。二人は實は會話をしてゐた。新聞社のマグネシウムはこれを寫し取らなかつた。次のやうに云つてゐた。「どないしてた」「どないもこないもあらへん。忙しうてくたびれてゐるのに、分會長の方から、至急に制服で來い云うて來たよつて、やつて來ただけや。——夜通し、レエルの見張りせんならんのか」「あほ云へ。そんなことしたら、あした働きに出られんわい」「なんで見張りするのやろ。ストライキの電車乘りがバクダンでレエル道をめちやくちやに毀すかも知れん云ふことやつたけどな」「あほらしい。そんなことになる位やつたら、もつとはよ、電車乘りの云ふこときいといた方がええやないか。もうねぶたいし、からだがクタクタになつてゐるよつて、ここらで失敬さしてもろて、歸んで寢ますわ」「待ちなはれ。わしも歸ぬ、提灯だけ返しに行つとこやないか」云々。マグネシウム。

「今回の市電爭議に對し吾人は罷業團に反對するものに非ず、唯、市民諸氏の苦痛を見るに忍びず、社會奉仕の精神を以て奮起せるものなり」檄文が發しられる。高等專門學校の生徒が奮起した。感謝狀を送り、學期試驗を拔きにすると云ふ條件で、彼らは社會奉仕として乘車勤務を行つて、罷業團に苦痛を與へることができた。彼らはパンパン切符に鋏を入れる。上向いて、不慣れな手つきで、まぶしさうな眼をしながら、ポオルを外し換へる勞働は樂しかつた。それはちよつとした遊戲である。彼らはそれで食つてゐると云ふわけではなかつたから。

4

電車が動かなくなつたから、どうしたと云ふのだ。そんなに大騷ぎをする程の大事件ではない。どうせストライキなどと云ふものは下らない。勞働者の方でも勝ちつこがないことをクドクドと繰り返してゐるのだから。今度のことに

しても電車の利用が停ると困惑すると云ふのは實に古い。あんなのろまな交通機關に愚劣な民衆がたよらねばならぬことは、彼らの文明の低さを證明するのにすぎない。かかることからひき起される今回の騒動はぼくにとつて何の興味もない。ぼくたちは自分の自動車を持つてゐるから。しかし、この際、この車を獨占しすぎると云ふことはしなかつた。ぼくと雖も、社會奉仕を行つて置かねばならぬ時を知つてゐるのだ。朝、いつになく早く起きて、ぼくはある終點まで車を走らせた。そこでぼくの見たのは恐ろしく多い働きに出かける民衆だつた。恐ろしい程ゐることを最初に學んだ。それらが、ガヤガヤとしながら、ほんの思ひ出したやうに來る電車に大きな期待をかけてゐる。尤も市電當局も新聞などに、殆んど平日通り運轉能力を回復したと宣傳した　が惡い。後にきけばこれは罷業團に對する示威ださうだ。だが、いつでも民衆は莫迦正直でだまされやすい。カラ宣傳を信じて、幾臺も連續して來るのを幻想しながら待つてゐる。來やしない。やつと來たのにはヘナチョコ學生が車掌を氣取つて、運轉臺にはいかめし　警官が二名も乘りこんでゐる。さあ、乘れ！　悲鳴が起り、洋服が破れ、見るうちに滿員だ。定員八十二名もクソもない。窓にも救助綱にも人間がつりさがつてゐる。動き出すと、それらがバラバラと振ひ落される始末である。乘りおくれた群衆はぼくの方、即ちぼくの車の方をうらめし氣に見てゐる。この時、ぼくは金のない者の無力をはつきり知つた。富める者は禍なるかなと云ふ聖句は明に譃である。ぼくは、しかし、突然銜へてゐた煙草を落す程、ハッとした。ぼくはあの何時でも愛すべき女たちのことを忘れてゐた。これはぼくの一生の失策である。今日では働きに出るのは男だけに限られてないらしい。現に、この電車を待つてゐる黒い群衆の中には十數人の女を見ることができた。紳士であるぼくは彼女たちには親切に振舞はねばならぬ。ぼくは見廻した。だが失望がつづいた。何故ならば、彼女たちは女性の恥辱であつた。乾燥した皮膚。整理されてない不健康な毛髪。着物――ボロッ切れだ！　ぼくはここでもぼくたちの階級の勝利を見た。現在では美人はぼくたちの階級にだけ屬してゐるのだ。伸び切れない骨格と、營養不良の彈みのない肉體を持つて、何の美人ぞ！　だが、ぼくは考へた。ぼくは、小間使に手をつけるぼくたちの親に對して、その遺傳を示さねばならぬ。ぼくは苦心して、できるだけ清潔さうなのを物色した。ぼくは近づいて彼らにぼくの車を利用して勤め先へ行くやうに誘ふ。だが、貧しさのために卑屈な彼女ら。たつた三人を說き伏せるのにぼくは多くの努力をした。それから、ぼくのかつて知らなかつた快い潮風の中を、車を飛ばした。彼女たちを勤め先に行くのをいやにする位は、ぼくとしては簡單にしとげ得られる。彼女たちはこの機會に一生かかつても觸れることのできぬ目上の階級のぼくに親しく接することができた。幸福のカケラを彼女たちは受取つた次第である。ははは。

5

都會の場末から一本の軌道が流れ出た。それは三十里もの間走りつづけた。最初に平野があつて、稻の葉が揃つて風の方向になびいてゐた。暑い白い雲の下にレエルは熱して來る。鐵橋の下には涸れた砂川が流れてゐた。小さい村落、眞中を貫く。山と山との間。傾斜しただんだら畠。小川では子供が背中を光らせながら水を浴びてゐる。軌道は何も流れた。カアヴして、又、カアヴする。それから海拔二千三百尺の高野山の麓に停止した。――山に達するこ

の軌道の電車に、朝以來、どれにも二十人乃至三十人の市電の制服が見られた。彼らは當局の老巧な切り崩しを恐れて、更に結束を固くするために、山に集るのだ。

山は嶮しい。シャツと猿股だけになる。市電のマアク入の帽子で身體に風を入れた。椎出から急勾配にはひつた。杉の森が人間の一行を小さく見せる。折れまがるトタン、ヒョイと遠く銀色の海が見えた。人間の列は陸續としてゐる。組合歌が各々の口から歌はれて列はつづいてゐる。いつまでつづくのだらう。晝は夜になる。暗い木立は白い冷氣を吹き出し、それが彼らを包んだ。「螢！」熊笹の葉に螢火が消える。谷川が彼らの耳にひびいて來た。これらは永らく日々の勞働のために忘れてゐた光景だ。人間の列は二日間に亙つて山道をよぢ登つた。頂上に散在する百二十の寺々は一個の街を作つてゐた。人間の一行はこの中に吸ひこまれた。誰も十分この山を知らなかつたので、野營するつもりでやつて來た。だが、寺々が宿を提供した。「疊の上に寝られるとはありがたい」と口々に云ふ。二千六百五十名の市電罷業團がここに結束した。それらは一つの中心を取りかこんで組織的に配置された。

七日。罷業全員に對して、出勤命令が内容證明郵便で出された。ルスゐの妻女たちがこれを受取つた。「十二日までに出勤せざる者は當然解傭すべし」妻女たちはやはり狼狽を禁じ得ないのだ。それに乘じこむやうにして訪問者が來る。最初におどし文句のうまいスパイが來、それからおとなしい監督が色々と說く。うるさい程、屢々やつて來た。罷業に加はらなかつた從業員をごらんなさいと云ふ。彼らは特別手當の餌の前に首を振つてゐる。彼らははじめて仲間を裏切ると云ふ不道德を賞められた。彼らを新聞紙はねぎらふ。彼らのために實業團はサイダーのお土産を作つた。時にはビイルを。それをのんで彼らは醉拂つてゐた。

山の上では物價が急に高くなつた。米や日常食糧品は山の下から、馬の背に積まれて搖られて來た。あるものはケーブルで谷間を渡つて持つて來られた。商人と云ふ非人間的存在は此際に眼をつける。彼らは一齊に買ひ占めをはじめた。罷業團員はここにも敵を受ける。苦痛と不便とが彼らを襲ふ。罷業資金は加速度的に減つた。各地の電車從業員は、激勵の代表者を送つて來た。それらはわづかの應援金を與へ、しかし多くの元氣をみんなに殘して下山した。

霧雨が降つてゐる。その中を配達夫が持ちきれぬ程の電報を携へてやつて來た。彼はニコニコしながら、數百通の電報を宿坊から宿坊へと配つて歩く。各人の手に渡り、開かれる。讀む。讀まれた處から騷ぎが起り、それは次第にひろがる。「チチキフビ　ヤウスグ　カヘレ」これを配られた運轉手は大笑ひをして泣きだした。彼の父は彼の子供の頃、戰爭で殺された。兄弟共に罷業團にゐるのが顏を揃へて次のやうに讀む。「アニキトクスグ　キタクアレ」——！電報はどれも近親の危篤を報じてゐる。だが、不合理な内容が知れ渡ると賑かな笑聲で一杯になつた。この數百通の電報の發送人はいつまでも分明しなかつた。

車庫出入りの小商人が團體で慰問品を持つてやつて來る。そのあとから從業員の妻女たちの列がつづいた。彼女たちは古ぼけた洋傘を杖にし、尻からげしてやつて來た。夫を說き伏せようと思つたのだ。十二日までに復職しなければ家族の食事はどうなることであらう。だが、

登山して彼女たちは罷業團の網の目にひつかかつて了つた。廻轉する網の目は彼女たちを巻き込みながら、廻轉した。彼女たちは炊事の手傳ひをする。谷川で汚れものを洗ふ。谷川の水は恐ろしく清くて冷かつた。彼女たちは驚くのだ。

6

レエルは何も炎天の下に白々しく乾いて殘つてゐた。その上を軋む電車も永い間通らなかつた。人々は危險なしに軌道を踏んで行くことができる。人々の脚を滑つて、レエルは隨分と遠くまで延びてゐた。今は多くの數字を物語りながら、ストライキはすでに六日つづいた。以來市電の損害四十萬圓。從業員の給料は一日二回出勤、十時間勞働で一圓六十錢。猪首の電氣局長は年に一萬二千圓受ける。レエルは交叉する。六十箇條の要求のため戰つた組合員四千のうち二千六百五十名が山にゐる。警察には百二十名が檢束のムシ返しだ。レエルは曲る。首謀者と目せられるものの解雇百七十一名、終點で行きどまつてゐるレエル。そこで二つのビラがもつれあひながら散つてゐた。一つは反動團體主催の市電罷業團膺懲市民大會のビラ。他は學生罷業破り反對のだ。レエルは車庫にはひつて行く。車庫の戸はいつもの通り開かれてゐるが、電車はダマリこんで動かうともしなかつた。彼らは使用されないことによつて、少しく汚くなつた。けれども、憤りを押へながら、主人の手によつて動かされる日を待つてゐた。

（一九二九年十一月二十四日、朝。）

色彩

　男ばかりの世帶は家を汚くする。男は大體が亂暴ものだから。彼らは力まかせに襖を開けたてする。襖の引手がとれると、そこから段々と紙が剝がれて來る。それでも平氣だ。障子に手をつつこんで破つても、張らうとはしない。それどころかナイフで柱を削つたり、角力をとつてガラスをわつたりする。黑い足をちつとも拭かずにどんどんと疊の上を歩く。疊がべとべとと汚れても、長い間に埃がたまつても中々掃除しようとはしない。しても、どうもぞんざいである。部屋の隅にはきつと綿屑のやうな埃がたまつてゐる。だから、家主も考へて、男ばかりの世帶には貸さぬやうに心がけてゐる。ところが、この家には四人の粗つぽいらしい若者が住んでゐるのだ。

　彼らは家主を計略にかけた。最初、家主のところへ一組の男女がやつて來た。家主はその風采を見て、これは貧乏人だな、と考へた。貧乏人であることは別に家を貸さぬ條件にならぬ。もともと、彼は貧乏人相手の借家を建てて、今までそれから家賃をとつて金を貯めて來たからだ。だから、この夫婦らしい男女の申込みを承諾した。それも、敷金三つのところを、相手のいふままに二つに負けてやつて。

　すぐに彼らはひつこして來た。荷物は別にない。しかし、厄介なことは、彼らだけではなく、他に三人も荒くれ男がやつて來た。そして、二三日すると女の姿は消えて見られなかつた。彼女は家を借るための道具にすぎなかつたのだ。

　家主は憤慨した。が、もう彼らは動かなかつた。それに彼らは堂々と家の前に、勞働組合支部の木の看板をぶらさげたので、すつかりびつくりして了つた。今にも警察から呼び出しが來るだらう。何故彼らに家を貸したか、と叱られるだらう。勞働組合といふものは、惡漢の團體だからである。しかし、實をいふと、この警察からの叱責よりも、家賃がうまく取れるかしら、といふことが心配であつた。果して、拂ひは惡かつた。敷金が切れて了つても、うまくいひのがれながら、住みつづけてゐた。

　それでも四人の男のうちには女房役に廻るのがゐた。中山といつて眼がねをかけた脊の高いのが、それだ。彼は炊事が巧い。土釜でめしをたく。硬すぎたり、軟かすぎたりすることはあつても、芯のあるのは決してこしらへなかつた。漬物を切る手際もいい。安いお菜も時々御馳走する。それから整頓ずきであつた。掃除をするのは彼にきまつてゐた。藁の箒で、シュッシュッと疊に氣持よい音を立てながら塵を掃き出した。——

　だが、何といつても男ばかりの世帶は荒涼としてゐる。どこやらに臭いにほひがする。暗いドス黑い色が影を作つてゐる。空氣も粗くて手觸りが惡い。時々、これらの乾いたものが彼らの氣持を苛立たせるのだ。彼らは大きな聲で歌つたり、議論したりする。忙しく次から次へと用事をこしらへて働く。暇があると、その暇を意識しない前に、熱心に本を讀み耽る。一晩中、謄寫版を刷つては、朝の暗いうちにその紙片を持つて出かけて行く。

　この色どりのない生活の中へ、一つの色どり

ができた。からである。以前鑄型職人であつた岡村といふ、四人のうちの一人が、ある夜、遲く歸つて來た。彼は朝以來食つてないので實に腹がへつてゐた。だが惡いことには御飯の殘りがなかつた。で、特別に、その日は金が少しばかりはひつたので、表通の食堂へ食ひに行くことが許された。彼は悦んででかけた。豫算としては、飯が二杯十錢也、肉豆腐五錢也、締めて十五錢也であつた。食堂へ行くと、彼の氣がついたことは今は晩春であることだつた。竹の子の煮たのがあつたからである。彼はそれが大へん好きだ。で、肉豆腐の代りにそれを食ふことにした。やはり五錢なので少しも差支はない。人夫らしいのが二人で酒を飲んでゐる。彼は少しは誘惑された。だが、そいつは高いからダメだ。――彼がボキボキと竹の子の甘煮を食ひはじめると、赤い襷をかけた給仕女が彼の側にやつて來た。そして、親しさうに、話しかけたので、岡村はすつかり驚いた。彼女はかういふのである。

「あんた組合の事務所にゐる方でしよ」

それを知つてゐるわけは、この食堂の裏がちやうど彼らの住家にあたつてゐる。彼女は物干臺へ洗濯物を持つて行くと、そこから家の中まで見おろせる。そこは四人の男が荒つぽい動作で生活をしてゐる、岡村はなるほどと思つた。今まで背中合せの家がこの食堂であることに氣がつかなかつた。さういへば、なんだかいつも皿を洗ふ音や、殊に腹をくすぐる煮燒きの香ひがしてゐたのを思ひ出した。

それから、彼女は彼のために二錢のおしんこを持つて來てくれた。彼が

「おい、ダメだ。俺は十五錢しか、持つてやしないんだから」といふと

「いいのよ、これはこつそりとお添物にしてあげるのさ。だつて、さ、組合の人つて、みんな善人なんだものね」

岡村は歸つて來た。報告しなければならぬ。みんなも膝をのり出して聞いた。それから立ちあがつて緣側へ出て見あげた。夜だからはつきり見えぬが、物干臺が認められる。

「アレだな、あすこから見られてゐるのだ。スパイには持つて來いの物干臺だ」

娘は大へんな人氣をひき起した。一人づつ順番に彼女を見に行くことにした。食堂へ行くのは金がかゝるので、みんな一度に行けないのだ。

彼らは歸つて來て大へんな滿足だつた。

「俺も知つてやがつた」

次のものもいつた。

「俺も知つてやがつた」

だから、どうのといふわけもなかつた。だが、カサカサした生活の中に、こんな些細なことも、一寸した色どりになつて來るのを彼らは意識した。

娘は美しい方ではない。だから、誰も彼も彼女の容貌については沈默を守つてゐた。脊が高く、肩つきなどもガッシリとしてゐて、男じみてゐた。唯、額が廣いのと、ものをいつたあとでグッと下唇を嚙むのがよかつた。それ位だ。

評判娘はたうとう、彼らの住家にやつて來た。もう夏らしい生き生きとした冷たさが、こんな混雜した街にも流れてゐる、朝早くだつた。彼女はハッキリした大柄の絣に、胸をふくらませて、やつて來た。あまり早い時刻なので、まだみんな手をのばしたり、足を亂したりして、寢てゐた。近藤といふヅングリした鬚男が、彼女が叩いてゐる戶を押し開いて、やつ！と聲

を出した。
「まだみんなお休みでしよ。だけど、今朝は、少し早く起きなさいな」
彼女は男たちの枕もとに立つた。三人はぼかんとして眼を開け、彼女の顔を下から見あげた。
「まあ、起きなさいつてば」
それから彼女は部屋を檢査した。まあ、色んなものを張りつけたわね。これ、なに、あなた方の新聞のビラでしよ。あら、このお爺さん、鳥打をつかんで演說してゐるのね。大へんな見幕でさ。同じ志の死を血をもて、これ何といふ字かしら、血をもて――ムクへと讀むの、ああ、これあすこの川つぺりの織物會社のストライキの時のビラでしよ。この漫畫なかなかいいわ。あすこの親父が職工に蹴られてゐるのね。おでこから火花が飛びだしてゐるわ。あんたらなかなか本を持つてるわね。面白いのがあつたら貸してくれない。でも、やさしいのでなくちやダメ。この椅子ガタガタぢやないの。あたしなんか掛けるとつぶれちやふわよ。でも、机はいいわ。たくさんの判があるわ。組合の判なの。――ねえ、みんな、起きなさいよ。あたし、ほんの朝のうちしか暇を貰へないんだから、さ。
彼女は掃除にやつて來たといふわけだつた。袂から赤い襷を出し、熱心に働き出した。
「この埃！　ごらんなさいよ」
疊の上のインクのシミは拭いてもとれなかつた。
「これはね、こぼしたら、すぐにお湯でふけば綺麗になるんだからね、おぼえてなさいよ」
すると岡村は口答へをした。
「俺たちや湯なんぞゼイタクなものを沸しやしないんだ。へッ！　どうせ、强慾家主の疊だよ、少しぐらゐ汚れてもかまやしない」
で、みんな愉快になつて了つた。彼女の時間はすぐになくなつた。御飯だけは火の上へかけて置いてくれて、歸る支度をした。
「ねえ、洗ふものがあつたら、お出しよ。一度にたくさん出來ないけど、洗つて置いてあげるから、さ。あの物干に乾すんだよ」
と指さした。だが、みんな遠慮して出さない。彼女が押入れを調べると、冬の物なぞは夥しく汚れて、すて置かれてあつた。すぐに必要なものだけを彼女は持つて歸ることにした。すると、彼女はいつの間にか、一しよにバットの空殼もしまひこんでゐた。これを呉れ、といふのだ。どうするのかときくと、この青い殼では土瓶敷きだの釜敷きなぞを作り錫紙は集めて大きなボールにこしらへてゐる、と答へた。
「こんなに大きいのよ」
彼女は手を自分の頭位の大きさをこしらへて見せた。「廢物利用よ。心がけがいいからね」
そして、襷をはづして折つて、袂に入れると、また、來るわ、と歸つて行つた。――暫くの間、四人の荒くれ男はぼんやりして了つた。それほど、彼女はこの部屋によく廻轉した色彩であつた。そのあとには一つの空虚なものが殘されるのである。――と、火にかけたまま忘れられてゐる土釜から飯の焦げつく香ひが、烈しく流れて來た。中山はびつくりして、鼻をピクピクさせながら、飛んで行つた。「あつ、しまつた！」と、うなつてゐる。

この事務所の係になつてゐるスパイの山川は、いつも、朝の九時前から來て、午後二時ごろまで、上りかまちに腰を落ちつける。どれ位、痛罵されても、相手にされなくても、唾のやうに圖々しい額付で、何かクドクドいつてゐる。その男が今變なことをいひ出したのだ。
「ねえ、近藤君、ぼくの責任問題になるのだか

らな、うちあけてくれ給へよ。唯、名前だけ解ればいいんだよ。ここへ出入りしてゐる限りの者を知らなくちや、ぼくのおまんまの食ひあげになるんだよ。ねえ、その女のひとはどこから來てるんかね」

彼は鼻の下の口髭をチャップリンのやうに動かしながら嘆願する。近藤はソッポを向く。山川は再び「ねえ、中山君」と呼びかけるのだ。

彼女のこの家に朝早く來るのは眼立つて來た。スパイには家主がいひつけたにちがひない。

彼女はやつて來るごとに何かを持つて來た。何か持つて來なくては好意が示されないと考へてゐるのである。ある時は食堂のカツレツを四枚、竹の皮に包んで快活にやつて來た。カツレツはカチカチに硬くなつてゐ、肉は恐ろしく薄かつた。だが、添へられてある白いキャベツや、小さい藥瓶に入れた酸つぱいソースが彼らの氣に入つた。

「御馳走樣、御馳走樣―

洗濯物は彼女自身餘り時間がないのでハカドラなかつた。けれども、最近は四人は比較的垢のないものを身につけられた。夏が近づくに從つて、これはありがたいことだつた。

ある時は、大きな風呂敷包を提げてうれしさうに脣を嚙みながら來た。單純な男たちはこの御馳走らしいものの周圍に集つて來るのである。

「何か、あてて見なさいよ」

「さあ」「さあ」、さあ」「西瓜にしては早すぎるが」

風呂敷の中からは大きな錫紙のボールが出て來た。みんな一度は失望し、やがて、笑ひ出して、この大きな塊を賞讃した。彼女は食堂に來る勞働者の煙草のカラを貰つて中の錫紙を貯めたのだ。

「大へんよ、これまでにするのは。隨分といい値段で賣れるにちがひないわ」

彼女は自慢するのである。實際それは見事であつた。――

夏はどんどん來た。みんな裸になつて暮した。着る物の心配をしないですむ、夏は實にいい。それでも組合の仕事はやはり忙しかつた。外出をしなければならぬ。男たちは、自分たちの短い影を踏みながら、工場にゐる勞働者に會ひに行つたり、爭議の應援に行つたりした。

食堂の娘はやはり彼らの間の一つのうるほひだつた。誰もが、彼女を自分の戀人のやうに考へてゐる。だが、みんな戀人といふものの意味を知らないのだが。――非人間的な生活を破るために、もつと非人間的な生活を强ひられてゐる彼らに、どうして戀愛といふものの意味が摑めようぞ。戀愛は今のところ、多少とも時間や金の餘裕のあるところに寢そべつてゐる。

時がすぎる。すると人間と人間との關係が變化する。今、變化が來た。卽ち、娘は食堂の給仕女をやめて、田舍へ歸る時が來たのである。彼女は村でお嫁に行く。彼女の心配なのは、小作人の妻になつて食つて行けるかしらといふことであつた。

別れは悲しいものだつた。好意を持つてゐてくれた一つの色彩がここから離れる。再び會ふこともない。男たちはそんな時には、空元氣を出して、何でもない表情をする。彼女もまた、それに倣つて何でもない表情で別れをいつた。

「さよなら」

そして、彼女は何かを記念に彼らに與へたいのだ。だが何があらう。たうとう決心して錫のボールを置いて行くことにした。

「あたしも重いから、あげるわ。賣つてもいい

のよ」

そして、彼女は秋口の風に吹かれながら汽車に乘つた。

「さやうなら」

世界の勞働者の記念日である十一月の日を迎へる準備中、事務所は突然家宅搜索をうけた。近藤を除いて他の男はつれられて行つた。スパイは家中をゴソゴソと調べ、多くのものを押收した。しかし、まだもつと彼らの功名心を滿足させるやうなものを見つけ出したかつた。それは重大なものでなければならぬ。彼らは努力して求めた。だが、出て來ないのだ。と、一人の官吏は突然、異樣なものに眼をつけた。彼の顏は急に光り出した。これだ！

彼はとりあげる。重い錫紙のボールだ。それは最初のうちは四人に好意を持たれてゐたが、今では誰にも顧みられなかつた。そこからは御馳走が出て來ないので。——長い間、それは部屋の片隅に追ひやられ、冷たい光りを見せながら、埃を被つて動かなかつた。それを久し振りで、人の手がとりあげた。

「これだ！」

この中に、れいの重要なものが隱されてゐるのにちがひないと、彼は考へたのだ。そこで、二人掛りで、その錫紙を一枚一枚剝ぎ出した。玉葱の皮をとるやうに、幾ら剝いでも中々しまひが來さうもなかつた。

彼らは氣狂ひじみて熱心になつて來た。一枚一枚と錫紙は部屋中に溢れて來る。最後まで彼らはやるだらう。

近藤はそれを皮肉な顏で見てゐた。すると、この獸のやうな男の所業は、次第に彼の氣を苛立たせて來る。彼は今にも怒鳴らうとした。だが、何にもならないからやめた。憤りは轉じて、突然、あの娘のことがセンチメンタルに回想されて來た。小作の妻になつてあれは働いて働いてゐるだらう。生活に苦しんでやしないか。——せいの低い、しかしガッシリした近藤は髯だらけの顏で、それを考へてゐた。そして、この散亂した錫紙をもう一度、彼女の記念のためにボールに作らうと決めてゐる。

（一九二九年十月二十五日、朝。）

作者註。これは一九二六年の插話です。

反逆の呂律

1

囚衣を脱ぐ。しかし、着るものがなかつた。連れて來られた時は木綿縞の袷だつた。八月の炎天の下をそれでは歩けないだらう。考へて襦袢一枚になつた。履きものには三錢の藁草履を買つた。

仙吉はかうして午前五時、S監獄の小門から出た。癪なので振りかへらずに歩いて行つた。畠と畠との間の白い道がステーションまで續いてゐる。彼のうしろで次第に高いコンクリートの塀を持つた監獄が遠くなつた。

汽車に乘るまでには時間があつた。三ケ月の服役の報酬としての四圓十錢のうちから、驛前で大福餅を食つた。昨夜のらしく、餡は饐えてゐた。だが彼は頬を盛に動かし、茶をのんでは、咽喉骨をゴクリゴクリとさせた。

汽車を下りてから、村まではなかなか遠い。夕方の燈が點く。稻の葉の香が際立つて鼻をついて來た。野良歸りには不思議に逢はなかつた。唐もろこしに圍まれた姪の家まで來た。背後の山はもう眞黑に暮れてゐた。

姪の家では縁側で彼の娘のウメ子が泣いてゐた。部屋の中の黄色い電燈を逆に受けて、ウメ子はミジメに見られた。ケチン坊の姪の扱ひ方が想はれた。仙吉はトッサに提げて來た袷を投げて、娘を片手で抱いた。びつくりして、もつと泣き出した。

夜更けるまで、姪夫婦と諍つた。姪は養育費を一圓五十錢よこせと、云つた。仙吉はアホコケと云つた。一ケ月三十錢にしても、一圓もかかるまい、とどなつた。そして脂臭い一圓札を投げた。姪はそれを拾つて、いつも腹にくくりつけてある胴卷の中にしまひこんだ。

朝になれば如何しよう。仙吉にはもう耕す土地はなかつた。小屋もとりあげられた。村の旦那と爭ふものは、いつも、このやうな結果になるのだ。村に居られないものは、O市に出るよりしかたがなかつた。都會へは四方からいろんな人が集つて來る。そして、仙吉の考へに從へば「榮エウに暮せるのだ」何をコセコセした村でなんかくすぼつてることがあらうぞ。

朝になつた。仙吉は去年のまま洗つてないので、黄色くなつてゐる浴衣を着た。その上に、黑帶でウメ子を背負つた。

「一生、こんな村には歸つて來んぞ」

姪はかまどの煙の中から、どなり返した。

「さつさと失せろ！　顏見るのもイヤぢや」

駐在所では仙吉の歸つたのを知つてゐた。駐在所は地主の家に怒鳴りこんだ仙吉を取り押へる際に、彼のために、池ん中へ投げられた。そのしかへしは、彼を三ケ月の間、S監獄に送つたのでは足りなかつた。村の若い連中をそそのかした。あんな旦那にタテつく社會主義の野郎は思ひ切りこらしめてやらにやならん。村の若い連中は仙吉を待ち伏せした。

池の側で仙吉は襲はれた。まだ朝の氣が池の上をはつてゐた。ウメ子は柿の木の下に投げおろされた。草の露で彼女は濡れた。幾度も若者たちは怒聲を發した。その度毎に仙吉の苦しさうな呻き聲がきかれた。池の水は多くの波紋を作つて搖れた。若者たちが去ると仙吉は柿の木の下に來た。浴衣からは水が滴り、眞青な頬からワナワナ震へる脣にかけて、小さい浮草が

一面にくつついてゐた。裸體になり、娘の横に彼も倒れた。そして、ウメ子は列んで泣きだした。

2

この小さい文章の書き手である武田はウメ子から、以上の話をきかされた。しかし、それは彼女がやつと四歳の時だ。だから、以上は彼女が實見したいではないだらう。父の仙吉が醉つぱらつて、幾度も彼女に話したのが、はつきりとした形を彼女の頭の中に作つたのにちがひない。彼らはO市へ出て來た。そして、それから十五年も經つ。十五年と云ふ年月は貧乏人のところでは色んな事件を起させるに十分だ。しかし、くはしいことは貧乏人である讀者の想像に委せて、物語に必要な點だけを、書き拔かう。ウメ子の語つた通りに。

3

仙吉は色んな職業の中を轉がつた。最初、車夫をした。町の道すぢもはつきり知らなかつた頃だ。脚を惡くして稼いだ。すると、警察から親方のところへ來た。村で小作料のことで地主と爭つたことのために、彼は「社會主義者」の札をつけられてゐた。親方は曳き子の仙吉を逐ふ決心をした。その夜、仙吉はやつと遊廓へ行く客を得て走つた。冴えた霜夜であつた。二十錢を受取つて歸つた。遲い夕食として夜泣きうどんを食はうとすると、確かにどんぶりの中へ入れた金がなかつた。仙吉は二時すぎの橋の上から、暗い川水を眺め、暫くは動けなかつた。欄干には霜が白い。親方の二階に歸つて來、すでに寢てゐるウメ子の横に、空腹の仙吉は眠つた。明日出て行くことを宣言されるのも知らずに。

それから市の塵芥人夫になつて惡臭を頭に被つた。オイチニの藥賣りになつて手風琴をならして歩いた。歸つて來るとウメ子はそれを玩んだ。ブウブウと鳴るのだ。運河から荷を揚げて倉庫へ運ぶ人夫になつた。重い梱を肩にしてうつむき加減に運んでゐる仙吉の眼の下に大きな手がその日の給料をのせてさし出された。驚いて梱を下し、肩あての布で汗をふきながら見ると、監督の男だ。仕事をやめて出て行けと云ふのである。ウメ子はまばらに草の生えてゐる川べりで、云ひわけをしてゐる父の姿を見てゐた。Sの歡樂場が計畫された。仙吉は土方になつた。秋の空の下をトロッコに土をのせて走る。請負人は「なに、前科者でも、主義者でも、かまふもんか。そんなこと氣にせいで働け、働け。惡いやうにはせん」と云つた。しかし、S歡樂場の建設は中止になり、請負人は使用人に賃銀を拂はずに逃亡した。ウメ子は七歳になり、學校へ行かねばならなかつた。

いつも仙吉には肩書きがついて廻つた。何故か主義者なのである。人民保護の巡査を×つて前科一犯であつた。すると、次第に彼も兇暴になつて來た。齒には齒を以て酬いよ。待遇されるところを以て返禮しようと彼は考へ出した。少し金がはひると酒をのんだ。のまずにすませないのだ。そして地主と警察をののしつた。貧乏な生活からして金持の惡口を云はずにはをられなかつた。だが、そんな時の、マジメに聞いてゐる相手はいつもウメ子ひとりだ。小さい彼女はダマッて父の前に坐つてゐた。

小學校に通ひだした、ある秋の日、ウメ子は朝、出るとすぐ歸つて來た。その頃、仙吉はペンキ屋に雇はれてゐた。彼は百姓生れにも似ず筆蹟がよかつた。それが役に立つたのだ。ウメ子の姿を認めると大きな看板文字を書いてゐた仙吉は梯子の上からどなつた。「どうした、もう學校しもたのか」すると、ウメ子は説明した。

平常通り學校へ出ると先生に叱られた。袴をはいて來なかつたと云ふので。今日は天長節であつた。「先生は不忠者や云ひはつてん」仙吉は梯子の上から下りて來た。「何ぬかす。これから行つてその先生に云うてやる。貧乏人×××も糞もあるものか。袴やええ着物がいるのやつたら買うて寄こせ云うたる」そしてさう云つた。結果は失業であつた。ウメ子は學校から極端にいぢめられた。

二年生になる頃から、同居してゐるお神さんに敎へられて、風船を作ることになつた。赤、紫、黄、青、白、五色の花瓣のやうな紙片をチャブ臺の上にのせた。每日糊をこしらへてそれを作つた。そして夜になると、お神さんのこしらへたのと一緒に紺の風呂敷に包んで坂を越えて遠い道を歩き、問屋町の風船屋へ持つて行つた。しかし、八つや九つの女の子は風船を作るより、それで遊んでゐるのが普通である。

それからセルロイド櫛の飾り附けもやつた。これはアラビヤ糊と云ふ西洋の糊を使つた。小さい金具の飾りを「ピンセット」で挾むのだ。この方がダメになると袋の紐附けをやつた。仙吉が失職すると、彼もこのあまり金にならない仕事をしてゐる少女の手傳ひをした。

4

少し手間どつて來た。簡單に書かう。こんな狀態のラレツは讀者には餘り興味あるものではないから。とにかく以上のやうな父親とその生活の感化のもとに彼女は次第に反逆の呂律をおぼえたのだ。このロレツがしつかりとした言葉になつたのは、彼女が燐寸工場の女工になつてからであつたが。

5

齒ブラシにする牛の骨を柔かくするために、漬けた桶が幾つも並んでゐる。牛骨は黄色くて、臭い。仙吉はそこで働きだした。荒削部だ。白いザラザラの粉を頭から肩にかぶつた。新聞に勞働爭議の記事が多くのつた年だつた。職人（仙吉は勞働者のことをから云つた）たちは每日熱心にこの記事を讀んだ。ひる休みにもそのことばかりが話の種になつた。「日給を二十錢あげい云うて、E鑄物工場がストライキやつとる。うちもどうしても二十錢や三十錢はあげて貰はんならんやないか」有志のものは寄りあつて、同じ境遇である他の工場の勞働者のストライキがどうして起るのかを研究しはじめた結果、この工場でもストライキにはひることになつた。「表門だけでなく、裏門をこしらへろ。多くの勞働者はムダな廻り道をしなければならぬから」と云ふ要求まで出された。最初は怠業から始めた。そして、勞働組合友愛會の支部に應援を求めた。「主義者」の仙吉には初めての經驗のストライキであつた。彼は勇敢に戰つた。爭議は永かつた。幾度も彼はひつぱられた。それでも彼は「敵打ち」のつもりで、皆の先頭に立つてひるまなかつた。要求の大半は通り、解決した。

仙吉は工場分會長になつた。彼は子供のやうに得意になつた。それから比較的落ちついた生活が續く。ガラス問屋と下駄屋との間の露路に平家を一軒借りた。そして、ウメ子も燐寸工場に働くまでに成長した。スパイはつねに出入りしだした。しかし、今は仙吉に少しばかりの畏敬の念を持つてゐるやうに見られた。彼らは小娘のウメ子にふざけたり、彼と冗談を云つたりした。

6

日本の勞働運動は次第に自然發生的なものから意識的なものへと移つて行つた。今までの運

動は建て直された。指導者は色々とムツカシイ問題について考へねばならないのだ。一回のストライキ以來、平穏に存續して來たMハブラシ工場の組合分會の中にも、仙吉に云はせると、小ムツカシイ理窟を云ふ若いやつが出て來た。仙吉には「かなはん」ことであつた。だが「あのストライキの時の俺を忘れて貰つては困る」と彼は云つた。若い連中はこの先輩にも別に遠慮しなかつた。俺は引退しよう。そして彼は平の組合員になつた。何だか、彼には精確な理論によつて動いたり、規律を守つて行くのが窮屈に思はれたのだ。もつと、お祭り騒ぎのやうに反抗したかつたのだ。

7

汚い溝川が流れてゐる。小さい木橋がその間に架つてゐた。東側に古い警察署があつた。川を越えて、丁度その向ひ側に、代書屋が四五軒並んでゐた。そのうちに、しもた屋の店さきを借りて、仙吉は坐つてゐる。彼もいつの間にか代書人になつてゐるのだ。へんに心易くなつたスパイにでも便宜を計つて貰つたにちがひない。筆蹟のいゝ彼は、客を待つて、屆書や證書類の代書をやつてゐた。夕方までそこにゐて、それから、ガラス屑屋と下駄屋との間の家へ歸つて行つた。時々、家の中は電燈もついてゐなく、夕飯もできてゐなかつた。燐寸工場に出てゐるウメ子は娘らしくなく、退け時が來ても歸つて來ぬことがあつたのだ。今でも定期的にたづねて來る藤本といふスパイは、代書店にゐる仙吉のところへ來て、四方山話をした後、

「おウメちやんにも氣をつけた方がええぜ。蟲がつくかも分らへんからな」と云つた。

蟲？　ウメ子のところへはよく會社の若い男が遊びに來た。仙吉は彼を相手に「主義者」としてのかつての自分を愉快にはなすことが度々あつた。「今の若いやつの運動見てられへん。危かしうて」と云つた。さう云ふ風に語つたり毎日毎日が安穩に暮せると、若い連中の組織的な力に嫌惡の念さへ湧いて來るのだ。これは不思議な現象であつた。――あの遊びに來る若い男が蟲なのであらうか。――彼は考へる。

ちやうどそんな時に煉瓦塀にもたれて、その蟲である若い男が、ウメ子が工場から出て來るのを待つてゐた。彼らは色々と話すことがあつた。燐寸會社の古い頽れた煉瓦塀に浴ひながら、彼らは歩いて行つた。まだ寒い頃だ。風が吹いて、ウメ子の黒い肩掛がヒラヒラした。話のとぎれた時、突然、ウメ子は云つた。

「これ逢ひ引き云ふもんちがふ？　わてら何やら活動にあるやうな戀人どうし見たいなわ」

それから二人は若々しく笑ひだした。その夜、晩く、彼女は歸つて來た。頰ぺたと右肩に糊が冷たさうに、硬ばつてくつついてゐた。手をもむとボリボリと糊が垢と一しよに黒くなつてこぼれた。

――ポスターを張りに行つた二人であつた。議會解散要求のポスターは風がきついので張りにくかつた。糊はいくども吹き離された。若者は外套をひろげて風を防いだ。小さいウメ子はポスターと一しよに、それに包まれた。

「ほんまに、わてら戀人どうし見たいなわ。戀てきつとこんなものやろな」と云つた。

8

夏近く、父親はことごとに娘にあたつた。彼はあのストライキの思ひ出だけに生きてゐた。遊びに來る若者が、ウメ子を惡い方に誘惑してゐるやうな氣がしてならなかつた。惡い方――あの最近の勞働運動のやり方を意味してゐた。をかしい程、反動し、老いが表情に現れ出し

た仙吉の顏を、彼女はヂッと見た。

「そんなことあれしまへん。あれしまへん」

打消されば、川一つのあちらからよく訪ねて來る藤本にどんなことを父が云ふか、分らない。ウメ子はそんな心づかひをしなければならないのが情なかつた。反逆の呂律の手ほどきをしてくれたのはこの父ではなかつたか。その頃まかれた種は芽生えようとしてゐる。燐寸工場で刷板部の勇敢な女工の組織を彼女が中心になつて始めてゐたのだ。

暮れ方の色が濃くなつて來た。溝川はブツプツと泡立ち、空はドンヨリと曇つてゐた。仙吉が店をしまつて歸らうとすると依賴人が來た。建築の屆書を書いてやり、一枚九錢の要求をした。依賴人はのんきにも判を忘れてゐた。彼は慌てて取りに行つた。仙吉は店じまひをし歸るしたくをした。机の上に白い屆書をのせてボンヤリと依賴人の歸つて來るのを待つてゐた。軒に蚊がうなつてゐる。その時、川向うの南の方から小柄な女が背廣二人にひきずられるやうにやつて來た。無感覺に眺めてゐた仙吉の眼は突然ギラとして、腰をあげた。不思議な光景であつた。ウメ子がスパイに捕まつて！　彼女は川一つ越して、父の立姿を認めた。そして一つおじぎをし、警察の中に消えた。彼はキョトンとして了つた。彼の本心は娘は無キズ者にして置きたかつたのだ。だが、蟲がついた。蟲が――「お賴みします。お賴みします」

その時、歸つて來た依賴人は彼のうしろから判をさし出しながら幾度も繰りかへして云つた。

（一九二九年九月十九日、朝。）

年譜

一九〇四年五月九日、大阪市南區に生れた。家族と一しよに大阪市中を轉々した。これは一家の貧窮化を意味してゐる。子供にも冷い風が吹いた。それが、最初に彼の眼をさまさせた。小學時代に漢學に興味を持つた。懐徳堂の講義に精勤したのは五年生頃だ。藤澤桓夫の父、黄坡先生に孔子家語を聞いた記憶がある。南岳先生の名をききながら、一度もお眼にかかれずに終つた。小學校を卒業すると、家族は彼の立身出世を願つた。苦しい中に少年は中學生になつた。小さい中學生は従兄の家に寄宿して軍國主義的な學校に通つた。一年生の夏、米騒動が起つた。彌次馬として彼は活躍した。そして學校をよさうと考へた。政府のやつてゐる電信工手養成所にはひつて、自立しようと、その規則書を貰ひに行つた。父親が反對してやめた。相變らず中學校へ通つた。成績は極めて惡かつた。藤澤や小野勇が同級である。その級は文學愛好者が大へん多かつた。小さい中學生もそれにまきこまれた。母親が愛讀してゐた『金色夜叉』と『高野聖』とを借りた。そして、俺は小説家になると云つた。母親は岩野泡鳴位になれるならやれと云つた。しかしダメだらうから、勉強して文官高等試驗をとれと訓した。十七の正月、母親は急死した。その夜、彼は、やはり小説家になり、岩野泡鳴位にならうと考へた。それから、手當り次第に文學書を讀んだ。短篇小説の手習をした。父親は文學士にして、飯の種にありつかせようとした。そこで、京都高等學校に入れた。彼はその頃、小説に飽いた。しかし、サークルの雜誌に幾つかの小説を書いた。學校を缺席して、のろのろと下らない生活をしてゐるうちに卒業して了つた。父親の意圖に從つて、東大の佛蘭西文學科に籍を置いた。大學校ではたうとう、教室も教師の顏も知らずに終つた。角帽も制服もなかつた。益々小説に飽いた。しかし、書くなら、戀愛が主題でないやつを書かうと決心してゐた。そこへ、日本のプロレタリアートは躍進した。これがぼんやりした頭の文學青年をひきずり込んで了つた。新人會員になり、柳島の勞働學校の講師になり、それから南葛の勞働者の中で、ひもじい、忙しい生活をした。金に困ると、暇を見て文藝春秋社の刊行物の手だすけをした。すると、『文藝春秋』に小説を書けと菅忠雄が云つた。書かうとしてゐると捕つた。一ケ月ばかりし、出て來ると飯も食はずに三日程で『暴力』を書いた。內務省がいけないと云つたので、『文藝春秋』はこれを破つて發行された。一九二九年六月號だ。それから、事情あつて滿洲へ行つた。歸途、京都に寄り、下加茂の松崎啓次の二階で『反逆の呂律』を書き、『1929』と云ふ雜誌にのせた。東京へ歸つて、北川冬彦に厄介になつた。『色彩』『休む軌道』『脈打つ血行』等、彼と並んで書いた。『色彩』は『週刊朝日』、『休む軌道』は『新潮』、各々三〇年新年號。『荒つぽい村』は『中央公論』三〇年八月號にのせた。この小說によつて、都會にばかりゐた作者はもつと農村を知らなければダメだと云ふことが分つた。それに前後して『暴力』『反逆の呂律』と云ふ短篇集を二冊出した。作家と云ふスタンプが押されると、三〇年のジャーナリズムは色んな小さな仕事を彼に課した。結果、彼の力は分散された。今、彼はそれを大へん悔いてゐる。この後、そんな過ちを犯さずに進まうと決心してゐる。

生活の旗
傷だらけの歌
赤ん坊の話
農村では
墓地で體操をする男
琉球の武器
子供

藤澤桓夫

生活の旗

1

「ブル公はだやられてるらしいね。——今ちょつと支部へ寄つて來た。」

跫音が階段を軋ませながら上り切ると、先づ彈力のある聲がはひつて來た。つづいて、性根の歪んだ襖が抵抗しながら開き、ガリガリ頭と、ロイド眼鏡のついた血色の好い頬と、大學の制服に包まれた長い身體とが現はれた。

「仕事か？」

高木の手を放れた制帽は少し轉がると跳ね返つた疊の焦茶色の破れに躓いた。

「もうすぐだ。」

久保田は見上げないで答へた。机の上には本が三冊開かれてゐた。その一冊に彼は速力をもつて書きこんでゐた。

「今夜はこつちの研究會なんだ。——怠けて行くと講師の方が勞働者に散々やつつけられる。」

高木は、バットに火を點けると、

「空氣を換へろ！」

とひとりごとのやうに言つて、障子の棧を掴んだ。障子の外は粗末な物干臺だ。高木の鼻さきに、乾して間のない階下の内儀さんの洗濯物と赤ん坊の襁褓とが、十一月の弱い陽ざしを受けて、豐富に現はれた。

「ほお！　これはいかん！」

高木は、乾されたものに對つて挨拶するやうにさう言ふと、急いで障子を閉めかけた。が、半分ばかり閉めると、「まあいいや。」と呟いて障子から手を放した。そして、開かれた部分の閾に腰をかけると、狹い部屋のなかを見廻した。

狹い部屋のなかは落ちた箱のやうに不潔だつた。この箱は半ば潰れてゐた。天井は水に浸つたことのあるボール紙を想はせた。それは、誰かが始終逆さに天井に足をつけて歩きでもするやうに汚れてゐた。この部屋へはひつた人間にそんな空想が湧いて來るのは決して偶然ではなかつた。恐らくこの箱を建てた大工の自己嫌惡の記念であらう、天井には、ほんたうに、人間の黑い足跡が二つ、はつきりとついてゐた。

狹い部屋を組み立ててゐる久保田の持ちものも亂暴だつた。持ちものの大部分は幾らかの本だつた。重なつた本は、高木に言はせると、市街戰のあとのバリケードのやうに崩れてゐた。

しかし、部屋は、いつどんな種類の人間が上りこんで搔き廻して行つても、構はないやうに出來てゐた。さう言ふ意味では、整頓してゐた。

階下は米屋だ。米搗機械の鼓動が、一日中、規則的に、障子を震はせてゐた。それは小蒸汽に乘つたことのあるものからその記憶を搖り出した。

「あれ——撒いた？」

書きこみの手を休めずに、久保田が、唇を動かした。高木は俯向いてゐる久保田の襟首へ煙の輪を吹きこんだ。

「今撒いてその足でやつて來たんだ。」

「うまく行つたか？」

「うまく行つた。——もつとも……」

「見つかつたか？」

「守衛の奴が見つけて大勢で追つかけて來やがつた。だけど、みんな逃げた筈だ。俺と岸の受持は法科の大教室だつた。學生が教授の來るのを待つてゐるところを狙つたんだ。岸が入口で

立番をしてゐて、俺が机の間を撒いて歩いた。すると、中途で守衛の奴が駈けつけて來やがつた。守衛の奴が教室へ駈けこまうとすると、岸が、胸を突き飛ばして、思はぬ傑作をやつた。神聖な教室へ小使の分際で何んだ！　さう怒鳴つたんだ。その隙に、俺は、殘つたビラを天井へ叩きつけて、もう一つの入口から逃げて來たんだ。みんな拾つてたぜ。」

　數人の進歩的な大學生がまたしても學校を追はれた。それに反對する「學聯」のビラだ。

「岸は大丈夫か？」

「大丈夫だ。あとでちよつと逢つた。――岸の野郎、今朝、賴りないと思つて、下宿へ引つ張り出しに行つたら、案の定、よく眠つてやがるんだ。蒲團をひんめくつてやつたら、やつと起きた。俺は六時半に起きた。朝はもうずゐぶん寒いんだぜ。」

「えらい、えらい！」

　共通の彼等の故鄉で母親が子供の雄辯に當てられた時などに使ふひやかしを眞似てさう言ふと、久保田は、鉛筆を抛げ出し、はじめて、顏を上げた。そして、「あは、あは、あは！」と笑ひ出した。久保田の笑つた顏には特徵があつた。それは苦痛が極限まで行つた時にはきつとこんな笑ひになるだらうと言ふやうな笑ひだつた。それは相手の心を刺した。そして、やはらかにした。

「厭なことを言やがる！」

　子供のやうな大學生は立ち上ると五尺七寸五分の後姿を見せた。窓の外へ首を突き出した。洗濯物の向うには、バラックのひしやげた長屋を隔てて、市營の共同宿泊所のセメントの建物が、一本の斜線で空を切つてゐた。開かれた窓が、ずらりと竝んで、こちらを向いてゐた。どの窓からも乾された蒲團が垂れてゐた。女が雜巾がけをしてゐる部屋、空つぽの部屋、窓際のミシン臺の上で女の首が日蔭の花のやうに咲いてゐる部屋、病人の臥てゐる部屋。距離がそれらの情景を遠い舞臺のやうに平面にしてゐた。そして、晝前の空は、その上で、煙のために、泥溝のやうに不透明だつた。工場地帶に建てられたこの共同宿泊所には二百五十ほどの部屋があつた。市が居住者を公募した最初の日に、二千人近い希望者が殺到した。

　共同宿泊所の向う側は、大きな銅器製作所だつた。その向うは腐つた一本の川だつた。その向うは、私娼窟だつた。

　久保田と高木とは同じ地方の高等學校を卒業した。久保田の方が二年先きに卒業して東京に來てゐた。高木は東京へ來てから運動のなかへはひつて來た。それはつい最近だつた。彼等が友達になり出したのもつい最近だ。それまではお互ひに殆ど知らなかつた。

　久保田は不意に高木が好きになり出した。久保田は高木の單純な透明さが好きなのだ。五尺七寸五分の後姿を見てゐると、ますます好きになつて來た。そこで、また、「あは、あは、あは！」と笑ひ出した。

　トタン屋根の庇をかすめて、半分の自轉車屋と木賃宿とが見下された。白ペンキの看板に、下手な赤い漢字で、「民衆ホテル朝日家」と書いてある。その字の下手さに感嘆しながら、高木は、考へ出した。久保田は一體あの笑ひ顏をどこで手に入れて來たのだらうか？　と。

　久保田の笑ひが耳に響くと、高木はいつも自分と彼との間に十年もの年齡の隔りがあるやうな氣がして來るのだ。久保田はあの笑ひをどこで手に入れたか？　久保田はどんな過去を持つてゐるのだらうか？　久保田は大學には行かないけれど大學生だ。だから、彼の背後には二十年の學校生活が長くつづいて來てゐる譯だ。この二十年の道は恐らく中產階級的な雰圍氣の

なかをうねつて來たものに相違ない。だが、彼は一度もそれに就いて語つたことがない。彼は振り捨てた。彼は振り捨てた方を決して振り向かうとはしない。彼は、勞働者のなかで、勞働者と一緒に、生活してゐる。勞働者と同じやうに考へ、勞働者と同じやうに行動してゐる。彼はインテリゲンツイアだ。そして、このインテリゲンツイアは勞働者から非常に愛されてゐる。勞働者は今ではもう彼を「やつて來た男」と考へることを忘れ切つてしまつた。「仲間」だと思ひこんでしまつてゐるのだ。この「仲間」と自分達との間には、解放の戰爭で、唯、受持つ持場に、幾らかの相違があるだけなのだと言ふ風に考へてゐるのだ。かう言ふ過程は、しかし、運動のなかへはひつて來るインテリゲンツイアに就いて、決して一般ではない。むしろ、悲しんでいいほど、今のところ、まだ、比較的、少ないのだ。

そこで、久保田の笑ひ顏は？

これは過去とたたかつてゐる笑ひ顏なのだ。絶えず勝つてゐる笑ひ顏なのだ。過去を持たない笑ひ顏なのだ。

久保田は平凡な人間なのだ。高木が、みんなが持つてゐる苦しみや惱みや空虚を、久保田もまた持つてゐるのだ。そして、久保田はそれを持つてゐないのだ。――と高木は結論した。

「俺はこの頃欲望がとてもはげしくつて。」と高木が不意に上半身を折つてはじめた。彼は性慾のことを意味したのだ。

「そいつは個人的な問題だな。」と久保田は言つた。

「とてもひどいんだ。なかなか容易に寢つかれない。そして、夜なかに眼が覺めでもしたら、大變だ。二三時間は完全に眠れないんだ。俺はもう二十二だ。俺の身體が大人になつて來たんだ。それに俺は決して發育不完全ではないからな。」

「あは、あは、あは！」と久保田は笑つた。

「俺は、ずゐぶん早く、中學の一二年時分、近くの遊友達の少女と知つた。それはその時すでに十分樂しかつた――俺のひどさは一つはさう言ふ點から來てゐるのかも知れないんだ。

「さう言ふ個人的な問題は自分で解決するより仕方がないな。」と久保田は言つた。「原則として、男女關係の形態はその社會の經濟的發達の段階に適應するものなのだ。ところで、今は轉換期だ。一つの社會形態がより高度のそれへ發展する過渡だ。舊い男女關係は急速に崩壞しつつある。そのなかから、新しい男女關係が生れかけてゐる。だが、それはまだ生れてはゐない。さう言ふむつかしい時なのだ。このむつかしいなかを生きて行くんだからむつかしい。利口なものが結局一番利口に生きるんだ。だが、次のことだけははつきり言へると思ふ。――われわれ××主義者は、ブルジョア的な清教徒主義の不潔さには唾棄するのだが、少くとも、出來るだけ清教徒的な生活を必要とすると言ふこと――これだけはあらゆる意味で強調していいと思ふんだ。理窟を拔きにして、時間と精力とを無駄にすると言ふ點だけでもね。」

そして、久保田は、或る組合でのコロンタイズムの惡かぶれが、幾人かの有能な婦人闘士を、腹膨れその他にして、運動の線から外へ弾き出してしまつた事實を語つた。

「無論彼女達が莫迦だつたのさ。コロンタイの××的な部分だけを生活のなかで自分のものとすることに失敗したのだ。彼女達のなかの根强い舊い部分が持ち慣れない彼女達の新しい武器をへし折つてしまつたのだ。――だが、さう言ふ現象は單に彼女達が莫迦だつただけで片づけてしまへるか？　誰が損失を受けたか？」

言葉はここまで拋物線を描いて一氣に盛り上

つて來た。

「だから、むつかしいよ。あは、あは、あは！」と久保田の聲は急に落ちて行きながら笑つた。

「僕はしかし近いうちに漾子と同棲しようかと考へてゐるんだが。」と高木は云つた。「漾子も同意してゐるんだ。」

漾子は高木の高等學校時代の戀人だ。彼女は高木と一緒に上京し運動のなかへはひつて來た。今は或る專門學校の寄宿舍にゐる。

「それもいいだらう。――困難はどこにでもゐるんだ。問題はいつもいかにそれを自分の手下にするかにあるんだからな。」

2

灰色の空が都會の上に垂れてゐた。空氣は濕つて重かつた。いつ夕暮が來たのか解らなかつた。そして、夕暮はいつの間にかビルディングの谷を埋めてアスファルトの道路を這つてゐた。發電所の手がスヰッチを捻つた。都會は明るく瞬いた。一齊に早い夜がはじまつた。ビルディングは慌てたやうに何千と言ふ人々を吐き出した。

圓形の廣場があつた。人々は廣場に溢れた。電車と乘合自動車の群が、噴み出した腹を傾けながら、人々の間を動いた。

廣場を抱いて、東京停車場の赤い建物が、早い夜のなかに盛り上つてゐた。停車場の玄關はスパイの嗅ぎ出す眼で飾られてゐた。人々の夥しい旋流は玄關のなかへうねつた。このうねりの大部分は省線の乘客だつた。別に、汽車を待つ人々やその他の群が、停車場を作つてゐた。廣い停車場は混雜した。

汽車の改札口の上にぶら下つた大きな發車時刻表の黑板を見上げて、二人の青年が突つ立つてゐた。

資本家と地主の政府が、停車場の群集のなかへ、その代表――複數の「嗅ぎ出す眼」を派遣してゐる時、申し合はせたやうに、資本家と地主自身もまた、幾組かの彼等自身の代表を派遣してゐた。一二等の待合室に充ち滿ちた裝飾的な人物がそれであつた。停車場は、その他、實に、種々雜多の人間で出來てゐた。しかし、それらの群集のなかで、二人の青年の姿が眼立つた。少くとも「嗅ぎ出す眼」には。

二人の青年は、久保田と岸とだつた。

岸は、學生服を隱すやうにソフトの下で、外套の黑い衿を立て、兩腕を直線に外套のポケットに突つこんでゐた。彼は痩せた傘の恰好をしてゐた。汚れた鳥打帽を被つた久保田の黃色い雨外套は引き摺るやうだつた。彼は泥の長靴をはいてゐた。雨でない都會の日に何故泥の長靴が必要であるか？「政府の代表」が一番上等の答案を用意してゐる。彼等のすばらしい構想は不潔な場末を描き出す。――そこは工場地帶と勞働者と失業者とで出來てゐる。そこの道路にはローラーがかけてない。そこは水捌けが惡い。そこの道路は晴天が重なつても意地の惡い泥濘なのだ。

二人の青年の服裝は、不潔な場末から運ばれて來た。もつと正確に言ふなら、これは疑ひもなく社會主義者の服裝なのだ。

だが、彼等を眼立たせるものは、決してその服裝ばかりではなかつた。彼等の態度が變だつた。發車時刻表を見上げてゐた彼等は、人々を避けるやうに、賣店の前を通つて、便所の方へ歩いて行つた。壁に喰つついた。久保田は、泥を落すために、長靴で壁を蹴りながら、何か速口で喋つた。彼等はこちらへ五六歩運んで立ち止つた。久保田の手のなかに小さな手帳があつた。久保田が或る頁を開いた。二人でそれを覗き込んだ。かと思ふと、また群集のなかへ出て行つて、發車時刻表を見上げた。彼等はそれに

似た動作を繰り返した。それに、久保田は、がつしり詰めこんだ革鞄を、非常に注意して、左の腕の下に抱へこんでゐた。久保田は、この革鞄を抱へて、汽車に乘りこむらしく見えた。岸はそれを見送りに來てゐるらしく見えた。

彼等の切り離された動作の一つ一つまでもが彼等を眼立たせるやうに思はれた、と言ふより、むしろ、彼等は、どうにかして、自分達の存在を、「政府の代表」の眼のなかに捩ぢこまうと努力してゐるやうにさへ見えた。そして、その通りなのであつた。

その時刻に、彼等の仲間の一人の勞働者が、この停車場から遠い或る地方へ出發することになつてゐた。階級鬪爭の激化は敵と味方との正體をお互ひにますます明らかにした。今まで味方のやうな振りをしてプロレタリアの間でひそかに惡いことをしてゐた者どもが、公然と敵と慣れ合つて、ますます惡いことをしはじめた。左翼社會民主主義者と言ふ惡者の新型まではびこつて來た。それとともに、ほんたうの味方に對する敵の壓迫は、あらゆる意味で、極端に暴力的になつて來た。日本のプロレタリアートは、この反動に耐へて行くために、壓迫の次ぎ次ぎの經驗を、新しい武器に轉化して行かねばならなかつた。恐らく敵は青木を嗅ぎ出すに相違ない。そして、嗅ぎ出されることが決して致命傷であつてはならない。だが、青木は、目的地へ着くまで、着いてからも、出來得る限り、敵から、自分の姿を隱してゐることが、非常に望ましかつた。スパイに顏を知られてゐないよき指導者などと言ふものがあり得ようか？　青木に取つて、うまく拔け出すことはかなり困難なことだつた。そのために、いろんなことがなされねばならなかつた。その時刻に手の空いてゐる久保田と岸とは、一つは青木の出發を見送つてやるんだと言ふ考へもあり、そのいろんなことの一つを受持つたのだ。姿を變へた青木は恐らく停車場のどこかに潛んで汽車を待つてゐる。その青木に隱蓑を着せるために、「嗅ぎ出す眼」を一つでも餘計にこちらへ奪つて置くこと、これは可能ではないだらうか。

「だが、これは實にちつぽけな仕事だ。」と言ふ考へがふと岸に浮んだ。「第一、こんなことをやつたつて、ほんとに效果があるだらうか？」

大變疑はしい。むしろ却つて裏を掻かれはしないだらうか？　すると、岸には、かうして混雜のなかで立つたり動いたりしてゐる自分達を、スパイが影で嗤つてゐるやうな氣がして來た。彼は、屈辱を感じ、それを跳ね返すやうに、外套に突つこんだ兩腕を一層直線にすると、下脣を噛んだ。だが、久保田はそんなことに、一切、無頓着だつた。彼は、革鞄を、一生懸命に、抱へこんでゐた。久保田はいつも唯それが運動のために必要だと思つたなら一日中でも空を眺めてゐようと考へてゐる。確かにこれは實にちつぽけな仕事かも知れなかつた。が、ちつぽけだからと言つて、彼等が頭から停車場へやつて來ないのと、かうして來てゐるのとは、決して同じことではない。それに、久保田には、仲間の勞働者の大切な出發を、見送つてゐると言ふ意識だけでも、それがこんな風な見送りであればあるだけ、革鞄を一生懸命に抱へこんでゐることに、十分の愉快さがあつた。

彼等は、彼等の動作をつづけながら、青木らしい姿がどこかに見當らないかと、それとなしに、注意してゐた。だが、青木はなかなかうまくやつてゐるらしかつた。

突然、擴聲器がゆつくりと喋り出した。改札口が連續的な鋏の音を響かせはじめると、乘客の長い列が鈍く縮まつて行つた。この汽車に青木は乘りこむのだ。そして、青木はますます

うまくやつてゐるらしかつた。青木が停車場へ來るまでにやられると言ふ懼れは九十九パーセントまでなかつた。その確信は十分こちらにあつた。久保田と岸とは、彼等に必要な汽車はこの汽車ではないと言ふ顔を揃へて、傲然と、三等待合室の方へ歩き出した。

「失敬！」

「失敬！」

汽車の尾がこの都會の圓周から切れる頃、彼等はガードの横で別れた。すつかり夜であつた。都會の壓力が八方から電車を待つ久保田に對つて倒れて來た。汽車が運んで行つた青木の仕事の重量が彼の身體を力強く突き拔けた。

久保田の瞳は岸の影が建物の霧のなかに消えて行くのを見送つてゐた。

3

交叉點では、幾臺もの自動車のヘッド・ライトが重なつた。その重なりの焦點には、將軍のやうな口髭をつけた交通巡査が身振りをしながら照らし出された。時間のすぎた百貨店は蜃氣樓のやうに夜空のなかに取り殘されてゐた。銀行の建物の前で、鋭い鈴が夜の新聞を賣つてゐた。明るい無數の電球が都會のこの部分の動悸を高めてゐた。人々は魚のやうに喋りながら道路の幅を埋めて流れた。岸の耳は、この雜沓のなかで、アスファルトを敲く自分の靴音の一つ一つを、はつきりと聞いた。

或る街角を折れた。歌つてゐるカッフェの淡紅色の光りが瞬間彼の半身を染めた。腸詰ばかり賣る店から、腕を組んだ外國人の夫婦が、大股に、歩み出て來た。二人ながらすばらしく高慢な體格をしてゐた。女の張つた胸の上には、熱帶の果實のやうな一對の球が、乘つかつてゐた。その體格のすばらしさは、擦れ違ふ瞬間、岸に、ちらと、彼等の閨房のことを考へさせた。

「靴音は俺をどこへ運んで行くのか？」

忽ち空虛が彼のなかに擴がつて來た。その空虛を螺旋狀の憂鬱が一杯にした。黑い風が荒涼と彼のなかを吹きまくるのだ。岸は自分の背負つてゐる荷物の實に複雜な重量がまたしても執拗く自分を締めつけるのを感じた。それに抵抗するやうに、彼は、靴音に合はして、この頃ひとり道を歩く時の口癖になつてゐる無意味な言葉を、呟きはじめた。

「俺には生活がない。」

「俺には生活がない。」

「俺には生活がない。」

雅子の蘆のやうな睫毛の手近な記憶が、その言葉のリズムを掻き廻すやうに、突然、彼のなかを走り出した。愛撫の粗野な衝動が彼を締めつけた。岸の眉は、立てた外套の黑い襟のなかで、悲しげに輝きはじめた。

兄と岸とは年齡が八つ違つた。雅子は岸よりも二つ年長だつた。雅子は岸の家と遠縁の娘だつた。彼女は生れると間もなく孤兒になつた。岸の記憶のはじまりから、彼女は、彼の姉として、彼の家で、彼や彼の兄と一緒に暮らしてゐた。

岸が十三の時のことだ。だから、雅子は十五だ。兄はもう高等學校の生徒だつた。その冬を彼等の家族は山のなかの或る温泉ですごしてゐた。ところが、どうした譯だつたか、兩親は東京へ引き上げてしまつて、兄弟と雅子と、三人だけがあとへ殘つたことがあつた。はつきりしないのだが、岸の記憶によると、女中達もみんな兩親と一緒に引き上げてしまつてゐた。すると、兄が突然、熱を出した。ひどい熱だつた。見る見る三十九度を越えた。醫者が來た。山のなかの老人の醫者だつた。醫者の曲つた紋

附の背中が障子の向うに見えなくなると、雅子がすつと兄の枕元から立ち上つた。岸にはその瞬間彼女の脊丈が非常に高く見えた。

「電報を打たなくては。」と彼女がはつきり言つた。

「さうだ。」と言つて岸も我れ知らず立ち上つた。

「あたし打つて來るわ。」

雅子はさつさと部屋を出て行つた。岸にも何故だか宿の誰かに打たせればよいと言ふ考へが少しも起らなかつた。

「僕も行かう。」

彼は、自分にさう言ふと、つづいて部屋を出た。彼は肝心の臥てゐる兄のことはすつかり忘れた氣持だつた。しかも、子供心に、非常に重大な嚴肅なものを感じてゐた。その感じは確かに死の觀念に結びついてゐた。

岸が下駄を突つかけて戸外に出ると、雅子はもう五六間も前を歩いてゐた。彼女は傍見をせずにずんずん歩いた。岸はやつと彼女に追ひついたが、彼女の足が速いので、なかなか並んで歩けなかつた。

郵便局へ行くために、谷を一つ越えねばならなかつた。谷には長い吊橋が架つてゐた。向うの谷の襞のところどころに白い苔のやうなものが附着してゐた。吊橋を渡つて行くとそれがだんだん白い梅の花に變つた。

郵便局へ着くまで、彼女は、一度も彼を見なかつた。口を利かなかつた。彼女は、何かしら威嚴のある怒つたやうな表情をつづけて、視線は絶えずまつすぐに前方を瞶めてゐた。

山のなかの小さな郵便局の窓口でも、彼女はまだその表情を崩さなかつた。賴信紙の上に借りた鉛筆を走らせてゐる雅子の横顔の額際は少し汗ばんでゐた。その横顔は美しかつた。その美しさがはげしく少年を打つた。雅子に對する岸の心の交渉はその瞬間にはじまつた。

十七の岸は中學生だつた。兄はもう大學を卒業しかけてゐた。よく伸びた雅子の身體は高貴な鹿のやうに痩せて美しかつた。夏は彼等を高原にある父の持家へ運んだ。三人はお互ひに明るく微笑し合つた。文學書などを讀み出した岸は意識して彼女を戀してゐた。そして彼女は？　彼女は兄弟のどちらにより多く惹きつけられてゐるのか？　それを考へることは岸には苦痛だつた。しかし、それを考へることが岸に取つてむしろ喜びに價する瞬間も決して少くはなかつた。

よく晴れた晝前だ。岸は一匹のテリアを連れて雜木林のなかを散歩してゐた。透明な空氣だつた。草の香が青く肺臟に流れこんだ。雜木林が切れて、次の雜木林がはじまるところに、赤土の崖に圍まれた廣い窪地があつた。殆んど三四尺もある萱のやうな雜草が窪地を隱してゐた。

その近くまで來た時だ。テリアが、急に、短く、吠えた。かと思ふと、雜草のなかに跳びこんだ。光線のやうに、見え隱れに、雜草の戰ぎを縫つて、駈けて行つた。そして、三四十間向うの灌木の叢のなかへ、抛げた毬のやうに、落ちこんだ。

すると、その叢のなかから、はげしく犬を叱る兄の聲が起つた。豫感が反射的に岸を一本の木の幹に隱した。犬を罵りつづける兄の上半身が雜草の上に起き上つた。少し間を置いて、岸の全感覺は、兄の背後に、雅子の上半身が浮び上るのを見た。三四十間の距離はあつたが、岸は非常にはつきりと彼女の顔を見ることが出來た。後れ毛までがはつきりと見えた。朱を刷いたその頰は高原の透明な空氣のなかでこの上もなく氣高く見えた。白い手で後れ毛を掻き上げながら、彼女は微かに微笑んでゐるやうにさ

へ感じられた。はげしい太陽。草の香。次の瞬間、岸の身體は雑草のなかに倒れた。

翌年の春、兄と雅子とは結婚式を擧げた。子供が生れた。しかし、雅子に對する岸の心の交渉がそれで終つた譯ではなかつた。

岸は二十二三の頃から少しづつ運動のなかへはひつて來た。彼にその端緒を與へたものは友人達の刺戟と學校の内部の研究會とだつた。その根本では、階級闘爭の激化、日本のプロレタリアートの政治的勢力の成長が、彼を搖り動かしてゐたのだつた。しかし、背後から彼を運動のなかへ突いたものの一つは、確かに、彼の戀愛だつた。彼は彼の戀愛にきつぱり別れを告げねばならないと決心した。しかも、その一面で、或る動機から、雅子と彼と、交渉が不意に高まつた。彼は次第に兄を憎み出した。兄は最初彼女を手籠めにしたのだと彼は考へるやうになつた。

岸は決して莫迦な男ではなかつた。それだけに、マルクスやレーニンの理論はしつかりと彼の腦髄を摑んだ。どうしなければならないか、それが彼には實にはつきりと解つた。

道があつた。

彼はその道に踏みこまねばならないのだつた。彼は踏みこんだ。一歩一歩に、困難は彼の足に絡みついた。この困難は決して彼一人のものではなかつた。背負つてゐる荷物の實に複雑な重量を抛げ捨てねばならないすべての人間に屬してゐた。そして、困難は抛げ捨てることそのことのなかにあつた。岸にはこの重量が人一倍重く感じられた。

彼の荷物――それは彼の引き摺つて歩いてゐるいろんな意味での「財産」だつた。抛げ捨て切れない戀愛がそれを象徴した。

そして、靴音は彼をどこへ運んで行くのか?

だが、彼は、ちやうどこの時、運ばれて來た。廻轉扉。光る階段。鉢植の椰子の葉。白い電燈。リノリウムの長い廊下。番號のついた部屋。

「もう歸らうと思つてゐたところよ。」

佛蘭西の香料と、近東の寶石と、北極の毛皮と、――兄の妻は綠色の長椅子から駘蕩と立ち上つた。

4

二人の大學生が傲然と三等待合室の方へ歩き出した頃、代田は出されることになつた。この若い勞働者は二十九日を喰つてゐたのだ。

「おい、ブル公。お前みたいな奴をあんな仕事に使ふなんて拙かつたな。」と代田の係りの男が言つた。「第一その御面相ぢや拙いよ。」

代田の顔は醜かつた。それは壓搾器で頭から押へつけた顔だつた。顔ばかりではない、身體全體がひしやげつてしまつてゐた。

――何を言やがる。手が足りねえ時は仕方がねえ。それに仕事は山ほどあるんだ。――そんなことあそつちの方がよく知つてる筈ぢやねえのか?」

さう言ひながら、代田は、しかし、確かに拙かつたと考へた。彼は或る仲間が冗談に「貴様は何もしなくても『顔面騒擾罪』と言ふのを構成する。」と極めつけたことがあつたのを思ひ出した。

「お前なんぞは……」

相手がさう言ひかけるのを、聞えない振りで、代田は、刑事室の柱時計を見上げた。

「もう六時だね、おつつけ。」

「それがどうした?」と男は云つた。

「晩飯を喰はさんのかね?」

「勝手なことをぬかすな。」

「喰はしてから出してもらひてえな。今時分を見計らつて空きつ腹で出すなんて狡すぎるぢやねえか？」

男は、平手打ちを喰はさうかと、暫く、代田の額を睨めてゐたが、急に、古道具屋のやうに笑ひ出した。入口に立つてゐた老人に怒鳴りつけた。

「小使！」

「へえ。」

「もりを二つ取つてやれ！」

「へえ！」

柱のかげに半分見えなくなつた老人の猫脊を代田の聲が追つかけて摑んだ。

「おい、爺さん！ かけにしてくれ！ かけに！」

老人は引き返して來た。眼脂の溜まつた眼が當惑して二人を見比べた。

「かけにしてもらひてえな！ かけに！ どちらだつて同じ値段ぢやねえか。」

男は暫く默つてゐた。それから、峻嚴な眉を作つて、吐き出した。

「かけにしてやれ。仕樣のねえ野郎だ！」

そして、老人が引き下ると、また古道具屋の笑ひになつて、ぐつと首を突き寄せて來た。

「覺えて置け。今のは俺が奮發んでやつたんだぞ！」

「何をぬかす！」と空つぽになつた代田の胃袋が答へた。

狹い坂をのろのろと電車が走つた。坂の曲り角に派出所があつた。派出所の隣りが三等郵便局だつた。代田は郵便局から出て來た。

「もしもし。」と背後から呼んだ。

振り返ると、派出所の××が、片手を擧げながら、二三歩寄つて來た。

代田はじろりと睨んだ。彼は、どんな場合でも、普通の、もしくは普通を裝つた額で、××などの一味を見ることが出來なかつた。この若い勞働者の心臟は野蠻で殺伐で不恰好な形をしてゐた。それが反射的に膨れ上るのだ。代田のじろりと睨んだ額は、大變印象的であつた。

「君ですか、今小包を出したのは。」

代田はしまつたと思つた。

「違ふよ。」と突き返した。

××はちよつとその見幕にためらつた。すると、背後へ來てゐた黑い仕事服の若い局員が叫んだ。

「いいえ その人ですよ！」

その途端に、その男のおせつかいな脣が、××の背中越しに、醜く、一尺ほどに伸びるのを、代田は見た。これはきつと夜は青年團のウンコ色の制服を着て町中を警備する野郎の一人だ。あらゆる憎しみを籠めて、ひよつくり、そんな考へが代田をかすめた。そして、その時、彼の足はもう驅け出してゐた。××が叫んだ。

「泥棒、泥棒！」

これが奴等の社會主義者を追跡する呪文なのだ。この手でやられた仲間は、代田の知つてゐるだけでも、かなり多かつた。

ちやうど退け時なのだ。電車通りは相當の人だつた。代田は、拙いと思ひ、左へ折れた。折れながら、振り返ると、彌次馬が十四五人走つて來た。

逃げることにかけては代田は自信があつた。しかし、代田は、誤つた。彼の逃げこんだ道は、左手に學校の長い塀があり、右手は大きな邸つづきだ。一筋だ。拔道がない。それに、すぐに、はげしい息切れがして來た。この前やられた時に、粗食のおかげで、脚氣にやられた。それが治つてゐないのだ。駄目だ。咽喉が詰まつて來た。

代田は立ち停まつた。右手を擧げた。はあはあ息をすると、堅い土の上へへたばつた。そし

て、
「水をくれ！」
と怒鳴つた。

出された代田の足はひとりでに電車の停留所に向いた。高い空のある夜は新しかつた。そして、建物は兩側から冷たく代田の醜い顏を照らした。代田は建物に反撥した。から言ふ瞬間、代田は漠然とすべての人間に憎惡を感じた。彼は、忙しさうに彼の側を通りすぎて行く女房や娘つ子の顏を、一つ一つ、丁寧に睨みつけて歩いた。

その顏の一つ一つに、代田は、野蠻で殺伐で不恰好な欲望を、感じた。彼は、それが面倒なことにさへならないなら、跳びかかつて女を捩ぢ倒すかも知れなかつた。彼は幾人かの女を知つてゐた。それらの女はすべて淫賣婦だつた。高慢ちきで基督の阿母のやうに取り濟ましたブルジョアの女どもを見る時、それらの女はきまつて光る自動車で素早く彼の側をすぎて行くのだが、一番はげしい感情が代田のなかに燃え上つた。それは鬼のやうな憎惡と敵意とだつた。それらの女を泥の上に突き倒す瞬間のことを考へると、考へるだけでも强い身震ひが全身を走つた。

出された代田の足がひとりでに電車の停留所に向いたのは、決して、彼のポケットに十錢銀貨が一枚しかなかつたせゐばかりではない。都會の勞働者の住んでゐる部分、たたかつてゐる仲間のゐる街、馴染の巢、そこへ歸らないとしたら、彼は一體どこへ行けばいいのだらう？

代田は、三年の時、小學校を止して、近所のコークス屋へ手傳ひに行つた。職工をしてゐた親父が酒を飲みすぎて死んだからだ。コークス屋の日給は十八錢だつた。阿母は、彼の二人の弟と女の赤ん坊とを背負つたり、小突いたりして、他家の洗濯物をしてゐた。彼の日給と阿母の洗濯代とでやつと米が買へた。夕暮、商人達がすつかり引き上げた頃、阿母や彼の姿が、がらんとした薄暗い市場の臭氣のなかに、現はれた。そこには、魚の尻つ尾や野菜の切れつぱしや臓物が落ち散らかつてゐた。彼等はそれを拾つて歸つて味噌汁を作るのだ。しかし、よほどうまく時刻を見計らつて行かねばならなかつた。野良犬どもに先を越されるのだ。彼等は棒切れで犬を追ひながら拾つた。雨が降ると、普通の日でもぬるぬるしてゐる市場の土間へ、泥水が流れこんだ。しかし、雨の日はまだよかつた。市場には月二回の公休日があつた。

そのうちに、阿母は、洗濯物をしすぎたせゐだらうか、脊髓をやられた。阿母は臥ついた。しかし、臥てばかりもゐられなかつた。阿母はゴソゴソした。しかし、彼の日給だけでは勿論米代にも足りなかつた。

或る日、彼が汚れてコークス屋から歸つて來ると、阿母は、赤ん坊を抛り出して、敷きつ放しの襤褸の上で、呻いてゐた。その夜、彼は、阿母の腰を、三十分ばかり、叩かされた。阿母の腰を叩かねばならない日が多くなつて來た或る日、彼はいつもより早く歸つて來ると、薄暗い家のなかから、土方の親方のやうな男が、慌てて、飛び出して來た。家のなかには、弟達の姿が見えなかつた。赤ん坊だけが啼いてゐた。そして、阿母は、敷きつ放しの襤褸の上で呻いてゐた。その夜も、彼は、腰を叩かされた。

上の弟が、突然、盲目になつた。しかし、仕合はせなことには、この盲目は、その後間もなく、フラフラと戸外へ出て行つて、電車に跳ねられて、片づいた。赤ん坊がつづいて疫痢で片づいた。すると、阿母が死んだ。四つになつてゐた下の弟は貰つてくれる人があつた。代田の工場生活は十三の時からはじまつた。

そのやうな「財産」を引き摺つて歩いてゐる代田に十五の時から勇敢な社會主義者としての生活がはじまつたとしても、どこに不思議があるだらう。彼はまだ十九だつた。

空腹を詰めこんだ電車はギリギリに混んでゐた。場末の終點が近くなるにつれ、電車はますます混んで來た。それとともに、乘客の種類はだんだん統一されて來た。それらはみんな不潔で行儀の惡い乘客だつた。そして、代田は、その「押すな押すな」のなかで、次第に落ついて來た。

電車のなかでは、眼に見えない大きなプロペラが、亂暴に、唸つてゐた。その唸りの廻轉は、電車のなかに充滿した乘客の臭氣を、容赦なく掻き廻した。——鐵錆の臭氣。赤ん坊の啼き立てる小便の臭氣。蟲齒の臭氣。炭酸瓦斯の臭氣。汗を掻いた襯衣の臭氣。梅毒の臭氣。下水路の臭氣。辨當包みに滲みついた煮物の臭氣。垢の蒸發する臭氣。猥褻の臭氣。

それらの臭氣は鼻孔を潛つて代田の肺臟を一杯にした。しかし代田は平然として吊皮と引つ張り合ひしてゐた。永い習慣は彼の鼻を大抵の臭氣に對して完全な聾にしてゐた。

或る停留所へ來ると、電車はちよつと動かなくなつた。乘客の一人が後部の車掌と喧嘩をはじめたのだ。すると、電車は湯沸器のやうに熱い泡を吹き出した。

「早く出せ！」

「何してやがるんだ！」

「そいつを叩き出せ！」

電車は乘客と車掌との喧嘩を乘せたまま動き出した。その乘客は他の勞働者連中と稍毛色の變つた風體をしてゐた。インバネスを着て金メッキの眼鏡をかけたその面は、勞働者の上前を刎ねる面だ。これは請負師の面だ。乘客の多くの視線はこの面に反撥した。

「止せ！」

「靜まれ！」

「莫迦野郎！」

罵聲と喧嘩とは電車が次の交叉點に停まつてもまだ止まなかつた。新しい乘客が押し寄せた。

「降りて下さい！　降りて下さい！」

車掌は喧嘩の相手の肩を邪慳に突いた。

「何を！」

その男は、突き降ろされると、横に歩いて、近くに立つてゐた監督の腕を摑んだ。そして、請負師の面をやけに赤くし、「紳士」の言葉を使はうとやけに骨折りながら、先づ事の起りから說きはじめた。乘客の罵聲がその後姿を滑稽なものにした。

「何言つてやがんだ！　貴樣の方がよくねえんだぞ！」

監督は、にやにや笑つて他のことを考へながら、運轉手に眼で合圖した。その男の姿は今度は監督に喰つてかかつた。電車は動き出した。乘客の笑つた顏が片側の窓に竝んで「莫迦野郎！」とその男に浴びせかけると、電車は不恰好に一つ跳ね上つて線路を越した。

「乘客諸君！」と車掌が剽輕な苦い調子ではじめた。「諸君はわれわれ車掌によく喰つてかかれるのでありますが、諸君がわれわれを相手にいくら見事に喧嘩をされたところで、そのために電車が乘りよくなる譯でも、空いた電車がやつて來るわけでも、決してないのであります。何んにもならないのであります。それほど電車に腹が立つなら、諸君は何故電氣局相手に喧嘩をなさらないのでありますか？　さうしない限りはいつまで經つても埒が明かない譯なのであります。われわれ車掌は電氣局に雇はれてゐる勞働者にすぎないのでありまして、この雇人

はまことに劣悪な條件で働かされてゐるのであります。」
　そして、車掌は鋏をパチンパチンと鳴らした。電車のなかのプロペラは元氣に笑ひ出した。
　終點で、代田が降りようとすると、強い手が彼の怒つた肩を掴んだ。久保田が笑ひながらつづいて降りて來た。

5

久保田の右の指は謄寫板用の鐵筆を握つてゐた。彼は、小型の原紙の上へ、一字づつ、念を入れて、彫り込んでゐた。鐵筆板は彼の耳のなかで一字づつの意味を反響するやうに軋つた。米搗機械の鼓動は原紙の上の蠟の粉末にまで傳はつてゐた。
「ゐるか？」と彈力のある聲が大きく呼んだ。
　久保田は怒つた男のやうに立ち上つた。そして、むしろ兇暴な調子で、障子を開いた。半分の自轉車屋と木賃宿との間から、高木のロイド眼鏡が、午後の光線を反射しながら、見上げてゐた。
「上れ！」
　久保田は殆ど怒鳴りつけるやうに言つた。こんな言葉の調子は彼には全く珍らしかつた。彼は障子を音立てて閉めた。
　高木がはひつて來た時、久保田の右の指は鐵筆を握つて靜かに動き出してゐた。そして、彼の言葉も靜かだつた。
「これからあんなところから呼んではいけないよ。氣をつけてくれなくては。」
「なるほど、惡かつた！」
　高木は、惡かつた顏をすると、少しばかり悄氣て行きながら、訊ねた。
「今日はとても忙しさうだな？」
「とても忙しい。これをあともう半分書いたら四時までに刷りに出かけなければならないんだ。今夜は日曜で奴等は幾らか手薄なんだ。そこを見越して、この邊の工場一帶に手筈が出來てゐるんだ。『反戰』のビラ貼りだ。——さらさら、君の好きなブル公歸つて來たぜ。」
「元氣か？」
「あいつは殺されても元氣だ。——君の方は捗つてゐるか？」
「駄目だ。動員がからつきし利かないんだ。學生はこの頃どうも酒を飲んだりしてシュルンペッてやがる。奴等は、運動の調子がいいとすぐに燥ぐが、少し逆境にはひるともう意氣悄沈して游離してしまやがる。それに、この頃は暴壓のせゐで、新書齋派的傾向がとても濃厚なんだ。俺はもう今の仕事は厭だ。誰かに代つてもらつてこちらへ來たいと本氣に考へてゐるくらゐだ。」
「それや來たつていいさ。だけども、ずゐぶん苦しいぜ。それに仕事は決して派手な仕事ぢやないからな。仕事はとても面白くてやりごたへがある。だが、その面白味が解つて來るだけでも大變なんだ。それに辛抱出來る覺悟さへついたら、あるひは思ひ切つて來る方がいいかも知れないな。——ところで、何時だ？」
　高木の腕時計は二時二十分を示した。
「二時二十分？——それではまだいい。二時半まで喋ることにしようや。十分間。」
　久保田は投槍のやうに鐵筆を疊の上に拋げた。斜めに立つた。
「實は今日は漾子が一緒なんだよ。」と高木が言つた。
「何んだ。それならさつさとさう言へばいいぢやないか。どこにゐるんだ？」
「そこの辻に待たせてあるんだよ。」
「ひどい奴だな。一緒に連れて來ればよいのに。」
　久保田は「あは、あは、あは！」と笑ひ出した。

「ぢやあ呼ぶよ。」

高木は、立ち上ると、首を突き出す姿勢で片手を障子の方へ伸ばしかけたが、そこで、

「おつといけない！」と叫んだ。そして、襖から出て行つた。

恐らく暗い凍つた夜が幾つも高木を待つてゐることだらう。高木の單純な透明さはこれからさきそれらの夜のなかをどんな風に滑り抜けて行くのだらうか？——久保田がふとさう考へた時、

「この部屋だよ。」

高木は漾子を抱くやうにしてはひつて來た。少女は小さな身體をしてゐた。蒼白い頬に忘れたほどの微かな血が泛んでゐた。頭髪を引き詰めて毬のやうに束ねてゐるので、その小さな顔は餘計に小さく感じられた。彼女は暗い地の同じ布切れで拵へた着物と羽織とを着てゐた。そのため、彼女の顔は、時々脆い花瓶に插したはかない草花を想はせた。彼女は高木の長い身體に凭れかかるやうにして行儀よく坐つた。黒い火のやうな瞳が瞬かないで久保田を見た。

「この頃は身體はいいんですか？」と久保田は言つた。

「ええ。」睫毛が瞬間鳥の羽搏きのやうに垂れた。かと思ふと、そのかげから黒い火が現はれた。「夜風に少し當りすぎたりしますとあとで咳に苦しみます。でも、少しくらゐ無理をしたつて平氣ですわ。」

「それはいけないな。」

この少女の前にも幾つかの暗い凍つた夜が來るだらう。學校當局が警察と腕を組んで嚴重に禁止の札を振り廻してゐる今、彼女の專門學校で研究會がどんな風に持たれてゐるかに就いて、三人は暫く語り合つた。

「僕達はやはり一緒になることに決めたんだよ。な、漾子？」

少女の肩を高木はまた抱くやうにした。

「そして、思ひ切つて、こちらへ來てしまはうかと思ふんだよ。近いうちに。」

「學校はどうするんだ？」

「學校は……」

三人は急に聲を合はせてほがらかに笑ひ出した。

「おや、もう二時半が來やがつた。」と高木が言つた。「漾子、時間が來たんだよ。」

「まあいいさ、そこにさうして坐つて僕の仕事つ振りを見てゐたまへ。君達がゐたつて僕は仕事を片つけることが出來るからね。一緒に出かけようよ。それに君達がさうして竝んで坐つてゐるのはなかなかいいんだよ。」

久保田は冗談でも笑ひ顔でもなしに嚴格にさう言つた。鐵筆は動き出した。

暫くその動きを見てゐた高木が、そつと立ち上つて、横手の襖を引つ張つた。その向うは薄暗い四疊半だつた。階下の米屋では誰もその部屋を使はなかつたので、久保田は、その部屋も、二階全部を借りてゐるやうな工合になつてゐた。その部屋を覗いてゐた高木が急に振り返つた。

「おい、久保田。」

「何んだ？」

「この部屋をちよつと借りても構はないか？」

その意味が稍突飛だつたので、久保田はちらと眼を上げた。

「——構はないよ。」

久保田は、そのままの顔で答へ、また仕事にはひつた。

「おい、漾子。」と高木は呼んだ。「ちよつとおいで。」

黒い火は少し驚いて見上げた。

「いいから來たらいいんだよ。」と高木はつづけた。

「でも。」と言つて、暫く膝の尖端を見てゐた。

そして、漾子は立ち上つた。

襖が閉まつた。

鐵筆の音は休まずにつゞいた。久保田は、一字づつ、念を入れて、彫りこんで行つた。

……

暫くしてから、突然、襖が、強く、ガタンと一つ音を立てた。その瞬間、ほんたうに瞬間、久保田の頭が微かに動いたかも知れなかつた。鐵筆の音は休まずにつゞいた。

久保田は、書き上げた原紙を、新聞紙に挾んで注意して四つに折ると、それを鳥打帽のなかへ挾んで頭に被つた。そして、靜かに、軋む階段を降りて行つた。

6

耳は美しく燃えた。岸は、片手でその耳を、もう一方の手で強くウェイヴのかかつた匂ふ頭髪を掴んだ。そして、自分の顏のすぐ近くまで引きよせた。ところどころ薄い白粉が剝げてそれが岸にはリズムをもつて動く模様のやうに感じられた。薄青い陰影のやうな暈のある眼瞼が蘆のやうな睫毛を重ねて顫へてゐた。瞶めてゐるうちに、岸には、それが雅子ではなくて、唯、一人の疲れたブルジョアの妻でしかなくなつて來た。その顏を岸は突き排けると叫んだ。

「歸れ！」

雅子の上半身は横に倒れた橇のやうに寢臺の白い敷布の上で彈むと彼の肩から胸を眼がけて跳ね返つて來た。

「厭！」

「歸れ！」

そして、岸の視線は、雅子の肩の曲線を抱いて、意志のない人のやうに悲しんで來た。

「あたしほんたうはもう歸つた方がいいかも知れないのよ。」

彼女が不意に彼の胸から顏を擧げると他人のやうに言つた。あまり強く壓しつけてゐたのでその顏には彼の胸衣の皺が幾筋も赤くついてゐた。しかし、その言葉の調子は、彼女が何を思ひ出したかを、はつきりと岸に感じさせた。個人的所有の下等な感情が、矢庭に岸から溢れ出て來た。

「歸れ！」

岸は、彼女の肩が二本の腕になるところを十本の指で掴むと、はげしく搖す振つて引きよせようとした。

「あたし歸るわ！」

彼女は齒切りをする時のやうに上下の齒を歪めて白く合はせると抵抗した。彼等は仇敵のやうに抱き合つた。彼女の顏で笑ひが死んだ。

「惡魔！　惡魔！」

雅子が銳い獸慾の聲を擧げると、兩手で雨のやうに彼の首を打つた。

岸は六時までに間に合はねばならないのだつた。或る場所で四五人の仲間が集合することになつてゐた。いろんな事情と必要とが彼等に執拗く時間の嚴守を要求した。

夕暮の都會は窓をかすめて疾走した。岸は、座席の上で揉まれながら、努力して、身體を前へ屈めた。

「出來るだけ速くやつてくれたまへ。」

しかし、彼のウォルサムの二本の針は殆ど一直線になりかけてゐた。

突然、一つの部屋が、彼の空想のなかへ、浮き上つて來た。夕暮の弱い電燈のぶら下つた見すぼらしい部屋であつた。部屋のなかには勞働者を混へた四五人の男が坐つてゐた。仲間だ。

仲間の視線は、みんな、入口の煤けた障子に集まつてゐた。その障子には、活動寫眞のスクリーンのやうに、一臺の疾走する自動車が映

つてゐた。

その自動車に乘つてゐるのは、岸だ。

さうだ、その障子のスクリーンには、先刻から、岸の行動が連續的に映つてゐるのだ。それを眺めながら、仲間は彼の來るのを待つてゐるのだ。

よろめく感情が岸を打つた。自分の身體のなかに住んでゐる敵に對する憎惡が彼を蒼ざめさせた。

「死ね！　死ね！」と岸は半ば無意識に口走つた。

やがて、スクリーンには、停る自動車が映つた。岸の姿が飛び降りた。腕時計を見ながら、駈けるやうに歩き出した。場末の複雜な狹い道路。岸の姿はその道路の上を移動した。そして、或る露路の前へ來た。その露路をはひつた、突き當りの一軒の家に跳びこんだ。仲間の視線は、スクリーンの上に、階段を駈け上つて來る岸の姿を見た。そして、仲間の耳はその音を聞いた。岸の手が障子にかかつた。

現實に、煤けた障子が開かれた。スクリーンが破れたのだ。

――部屋のなかには、誰もゐなかつた。

岸の頭のなかが一挺のピストルになつた。

7

或る夕暮、米屋の内儀さんと自轉車屋の内儀さんとが道の上でお喋りをしてゐた。どちらも、赤ん坊を背負ひ、調子を取つてお臀を搖振つてゐた。話題は、木賃宿にゐる或る老人に就いてだつた。その老人に關しては、或るブルジョア新聞の「ドン底訪問」と言ふ連續記事のなかに、「塵箱を漁る老遍路」と言ふ題で、次のやうに出てゐた。

子澤山の惱みは前途に希望がある、しかし老齢と貧困に絶望の吐息をつく寄る邊のない身が、さらに病患に惱むに至つては悲慘といふも愚である。××區××町の木賃宿日の出家――假名――に山本吾一（八一）――假名――といふ遍路がゐる。千葉縣で相當の生活を續けてゐたが失敗して東京に出た、けれども都會の生活は六十近い彼のために衣食の道を與へてくれないので再び放浪の旅に出て最近は遍路になつた、近頃の不景氣のため世間の人々はこの落ちぶれた遍路に對し滅多に喜捨しないので朝早く起き出て塵箱の蓋を開けその日の食物を得るといふ有様である、この天涯孤獨の老人にも××厚く×××には××を頂戴するの光榮に浴した、老人はこの××大切に納めて暇ある毎に禮拜をしてゐるが老齢のため精神に異狀を來して不淨の流れるのすら覺えない、隣近所の人達はむろん同情してゐるけれども不淨物の世話までは手がとどかない、彼には郷里に知人もあるだらう、しかし落ちぶれた者には近寄る人がない。

「どうしてくたばらないのだらうね？　全く呆れてしまふよ。」と米屋の内儀さんが言つた。

「全くね、早く片づけばいいのに。あの爺さんは前世の罪業がよつぽど深いんだよ。だから、あんなにまでなつてゐながらいくら經つてもお迎へが來ないんだよ。怖ろしいこつた。」と自轉車屋の内儀さんが答へた。

その時、二人の男が米屋へはひつて來た。誰もゐない米屋の店の間では米搗機械だけが働いてゐた。

「お宅では二階を久保田と言ふ人に借してをられるさうですね。」と一人が言つた。

「そんな人には借してゐませんよ。」と戻つて來

た内儀さんが突つ放した。「わたしのとこの二階にゐるのは村瀬つて人ですよ。」

「村瀬でも結構。」ともう一人が言つた。「その村瀬つて人はゐますかね？」

「村瀬さんならどうした譯だかこの二三日お歸りにならないんですよ。」

二人の男は低い聲で符牒のやうに内緒話をはじめた。

「村瀬さんがどうかしたんですか？」

と内儀さんが訊ねかけると、

「いや、お邪魔をしました。」と言つて出て行つた。

その時刻に、久保田は、そこからあまり離れてゐない往來で、ちよつと立ち停まつて、一臺の引越しの車が行くのを見送つてゐた。――机と蒲團と本棚と行李と、大した荷物ではなかつた。ヂャケツ一枚の青年が車の梶棒を引つ張つてゐた。小さな身體の少女が手巾で時々額を押へながら背後から車を押してゐた。

高木と漾子とだつた。

彼等は久保田に氣づかないらしかつた。久保田も呼びかけようとはしなかつた。久保田は、あの笑ひ顔で、見送つてゐた。

「御機嫌よう、村瀬。」と久保田の眼が言つた。

「どうやら暫く逢へなくなるらしいんだよ。」

空氣が凍りはじめた。省線が夜のなかへ乘客を吐き棄てて滑つて行つた。それは或る海の見える工場地帶だつた。吐き棄てられて散る人々のなかに、久保田の姿が混つてゐた。

そこもまた泥濘だつた。久保田の泥の長靴を新しい泥が啣へこんだ。倉庫がトタン板を寒く光らせながら竝んでゐた。高い鐵骨が斜めに夜空を突いた。或る工場の長いセメントの塀の曲り角の闇のなかから二人の勞働者が現はれた。久保田と彼等とは簡單な言葉を交換した。青年のたくましい肩が三つ繋がつて歩き出した、闇が忽ち彼等を吸ひこんで膨れた。

空氣は加速度で凍つて行つた。永い冬の夜が來るのであつた。

（一九二九年二月）

傷だらけの歌

……明日は　インターナショナル　われらがもの……

一

一九二六年十一月。モスコーにて。

故國の同志よ。

マムシよりも執拗にたたかひつづけてゐる君たちを想ふ。

早いものだ。僕が、君たちと京城とに別れを告げ、スパイと憲兵と騎馬巡査とにもひそかに別れを告げ、杏の樹と溫突と玉蜀黍畑と赤禿げの痩せた山々とから成り立つてゐる故國の風物にも別れを告げ、豆滿江を渡り、長白山脈を越え、無事にシベリア鐵道に投じてから、すでに百五十日がすぎ去らうとしてゐる。

そして、僕はもうすつかりこの革命の赤い都會の生活に慣れてしまつた。僕は、露西亞人たちがするやうに、湯沸器からお茶を飲み、酸乳を頰張り、安煙草のマホールカの甘い刺戟性の青い煙を吐き出してゐる。そして、海狸の古つぽい帽子をすつぽりと被り、高架索人のやうな恰好をして街を歩いてゐる。

極東共產主義大學の生活は、非常に愉快であり、不斷に僕を鬪爭へと驅り立て訓練づけてくれる。僕たち朝鮮人の學生は日本の同志たちと一緒の教室だ。みんなよく勉强する。が、僕も決して負けてはゐない。みんな若い勞働者だ。が、そのなかでも十八歲の僕が一番若いのはちよつと愉快だ。とにかく、故國へ歸る日のことを考へ、懸命にやつてゐます。教室は討論會だ。教室以外に、勞働組合や工場の見學が殆ど毎日ある。これがまたとても有益だ。

故國では、樹の葉が乾いて散り、蒙古の風が黃色い砂塵と一緒に少しづつ冬を運んでゐるに相違ない。が、モスコーではとつくに嚴冬がはじまつてゐる。氣溫は氷點よりも低下し、凍つた雪が鋪道を固くし、灰色の空が重く垂れ下つてゐる。日沒は早く、そしてこの革命の赤い都會では、黃昏は、青い色をして、雪と工業の新しい鐵骨と會堂——そこでは、坊主の代りに、勞働服に星のマークをつけた赤衞兵が喇叭を吹いてゐる——とウクスクの樹立との上へ降りて來るのだ。そして、社會主義的建設の巨大な齒車は、都會全體に、唸りをあげてドッドと廻轉してゐる。フェルトの長靴をはいた輕快な斷髮の女子青年共產黨員は、寒い凍つた空氣のなかへ白い息を吐き出しながら、歌ふのだ。

以前はみんな××の
××から遠く離れてゐたが
傍まで行つてよくよく見ると
××に坐つてゐたのは鴉さ！

かう言ふ自由そのもののやうな歌聲ほど、階級的搾取と××的抑壓と——この二重の桎梏の下に喘ぎつづけてゐる故國の人々のことを、對蹠的に、僕に思ひ起させるものはない。敵へのはげしい憤りと復讐の感情とがどつと僕を突き拔ける。

が、故國の同志よ。僕は、今日は、ゴリキーの新刊の小說のなかに出て來るその快い歌についてではなく、もつと別の歌——傷だらけの歌について、君に書いて送らうと思ふ。

傷だらけの歌——それは「インターナショナルの歌」だ。第三インターナショナルの歌であり、世界の勞働者農民の團結と鬪爭と勝利への

歌である「インターナショナルの歌」だ。

何故それは傷だらけの歌なのか？　何がそれを傷だらけの歌にしたか？

毆打、足蹴、宙吊り、逆吊り、鞭、竹刀、赤いゴムの太管、指折り、水漬け、その他ありとあらゆる××と、ピストルと、機關銃と、絞首臺と、電氣椅子とが、それを傷だらけの歌にした。世界の××主義の强盜どもとその同盟者どもとそのあらゆる手先どもが、それを傷だらけの歌にした。われわれを苦しめ、妨害し、追及し、傷つけ、××にする、一切のものが、それを傷だらけの歌にした。

故國の同志よ。僕のこの比喩めいた言ひ方は、思ひあがつた感傷主義として、君を不愉快にさせただらうか？　あるひはさせたかも知れない。が、もう少しこの手紙を讀み進めてくれ。さうしたら、君は決してそれを思ひあがつた感傷主義だと思はなくなるに相違ない。きつと僕の言ひ方に同意してくれるに相違ない。

去る七日、露西亞革命第九周年記念が祝はれた。京城でも、いや、勞働者農民の組織のあるところではどこでも、世界中で、いろんな催しが持たれたことだらう。が、本元のこの國がいかに美しく沸騰したかは、言ふまでもなく、それとは比べものにならぬ。モスコーではすべての人間が明るく笑つた。赤の廣場を中心に、何十萬と云ふ勞働者、兵士、少年團の示威行列が力强く盛り上り渦卷いてゐる容子を、よろしく想像してくれ。

夜、勞働者會館の一室を借りて、そこで世界被抑壓民族大會が臨時に持たれた。僕たちも出席した。百五六十人のいろんな皮膚の色が集まつた。第三インターナショナルの中央委員をしてゐる支那の或る同志が司會者で會は開始された。そして、それは異常に劇的な感動のうちに進行したのだ。想像してくれ。街ではすでに××の第一の段階を經過して來た何十萬と云ふ人々がその喜びを狂人のやうに祝つてゐるのだ。その喜びのどよめきや打ち上げられる花火の音は僕たちの密集してゐる部屋の窓硝子を震はせながら部屋のなかまでも殺到して來てゐるのだ。その部屋のなかでは、まだ喜びを知らない人々の代表者が、階級的搾取と民族的抑壓と——この二重の桎梏の下で喘ぎつづけてゐる人々の代表者が、演説をし討論をしてゐるのだ。

南阿の同志、巨大な××の歩みをはじめてゐる支那の同志、濠洲の同志、南米の同志、印度の同志らが交る交る血の出るやうな演説をした。みんな大抵自國の舌で語つた。で、言葉の意味はまるで解らなかつた。が、演説者の全く格鬪をしてゐるやうなはげしい身振り、唸るやうな、引き割くやうな、燒け焦げるやうな肚の底からの叫喚は、一句一句、投槍のやうに正確に、聽くものの耳へではなく肺腑へ突き刺さつた。すべてが了解され、僕たちは驀地に昂奮して行つたのだ。そして、この昂奮の頂點で、會の終りに僕たちは「インターナショナルの歌」を歌つたのだ。いろんな國語で。一つの心で。聲が破れるやうな聲で。（この歌がまだ××語に飜譯されてゐないことは大變殘念だ。僕は露西亞語で歌はねばならなかつた。あまり殘念だつたので、あとで二三日かかつて譯してみた。この手紙と同封する。みんなが集會などで歌つてくれるやうに。）

そして、歌ひながら、僕は感じたのだ。理窟ではなしに、はつきりと、實感をもつて、感じたのだ。——これは傷だらけの歌だと。そして、この歌は、傷だらけになつて行けば行くほど、傷が一つ殖えれば殖えるだけ、それだけ不死身になつて行く歌だと。さう感じたのだ。世界××の勝利の日のためには、即ち僕としてはわ

が××××黨のためには、きつと死んでも悔いないぞ――この信念を新しく燃え立たせながら。……

2

吹雪はいつの間にか密度の濃い雨に變つた。雨は霧のやうに京城の街を煙らせた。二月の風は叫びながら雨の裾を拂つて馳けて行つた。夜は深かつた。街は眠つてゐた。

が、警察署は起きてゐた。川は凍りながら黒く流れた。川を背に、その灰色の建物は、陰慘な顰め面をして、寒く、ふんぞり返つてゐた。

雨は飛沫を跳らせながら、窓硝子を叩く。窓と云ふ窓から、電燈の光線が流れ、雪にぬかるんだ鋪道の上に跳る雨脚を描き出してゐた。警察のマークのついた一臺の自動車は、雨に全身を洗はせ、ヘッド・ライトの放射狀の白光を闇にむかつて抛げながら、建物の正面に停つてゐた。

建物の内部では、欠伸と水洟とを白い頬髯になすりつけた小使の老人を除いて、何十人かの人間が、深夜にもかかはらず、異常に活氣づいて動いてゐた。――××。××。私服。制服。書類。カンカン灼けた煖爐。或るものは雨の滴る冬外套のまま、みんな脂切つた鼻の頭を赤くし、ぶら下げた細長い金屬の音を立て、眼をギラギラと光らせ、白い息を吐き……。

何人かが再び雨のなかへ出て行き、何人かが新しい雨の滴りと一緒にはひつて來る。

オートバイの爆音が、夜を引き裂き、近づき、建物の正面で止る。

3

かうした××署の光景が、呉永鐘の腦壁のスクリーンには、先刻から、痛いほど鮮かに映りつづけてゐるのだ。

――チエッ！

彼は舌打ちをする。耳をすませる。が、雨の他、何の音もしない。夜が深くなるにつれ、雨は更に密度を加へて來たらしい。ここは町外れの溫突一間つきりの小さい民家だ。そして、溫突の暖氣はしづかに床下を這つてゐる。が、寒さはどこからともなくピシピシと彼の身體のなかへ針を打ちこんで來るのだ。

突然、電線が千切れるやうに短く風に鳴つた。身震ひが思はず直線的に身體を走つた。と、またしても、××××の光景が、腦壁に映り出した。

――落ちつけ！　呉永鐘、落ちつけ！

彼は、自分にむかつて、呟いた。そして、もつと自分を落ちつかせるために、低い低い口笛で、大好きな「インターナショナルの歌」をゆつくり歌ひ出した。すると、水のやうに、記憶が泛んで來た。一昨年の秋、モスコーの極東共產主義大學の寄宿舍から、この京城の或る先輩の同志の許へ、この歌について書いて送つた記憶が泛んで來た。

が、その同志も、やられた。今日、やられたのだ。何度目かの××××黨の手入れが、今日、夕暮、一齊に行はれた。百人以上のものが網にかかり、彼自身も鋭い追及の前に曝されてゐるのだ。が、一番いけないのは、祕密本部が襲はれたことだつた。不覺にも、名簿や細胞圖が奪はれたのだ――あの××××へ。明日になつたら、早速それは檢事局へ持つて行かれてしまふだらう。

音が烈しく戸を叩いた。

「誰だ？」

「俺だ。俺だ。開けてくれ。」

一人の青年がびつしより雨に打たれて吹きつける雨と一緒に蹌踉きこんだ。

「おお、寒つ、寒つ！」

帽子と冬外套とを取ると、光澤のない紫色に死んだやうな顏が現はれた。眉毛に溜つた雨は細かく凍つてゐた。が、眼は燃えてゐた。

「どうだつた、おい！」吳永鐘はその青年の肩を摑んで叫んだ。「遲いもんだから案じたぞ。」

「連絡だけはどうにかつけて來た。が、すんでのことでやられるところだつた。街は非常警戒の網の目だ。」

寒さがその青年の舌から廻轉を奪つてゐた。痺れるやうな言ひ方だつた。

「さうだらうな。×等は今夜は徹夜でやるんだらう。」

「この家も危い。いつ踏みこまれるか知れないぞ。」

青年は下着のなかから××××を取り出して無造作に自分の前に抛げ出しながら言つた。そして、赤く凍え上つた兩手で、暫く、顏中をブルッブルッと擦り廻した。

「その用意は出來てゐる。だからさ、」吳永鐘は自分でも吃驚して嬉しくなるほど落ちついた聲を出した。「だから、餘計重要なんだ。」

そして、説明するやうに、つづけた。

「この瞬間に、俺たちが、周到に、迅速に、何をどうしなければならないかが、餘計重要になつて來てゐるのだ。」

「うん、いかにして被害を最少限度で受け止めるか、いかにして同志の犧牲を出來るだけ少くするか、いかにして……」

電燈の弱々しい赤味がかつた光の下で、二人の青年は近々と眼を合はせた。

「さうだ、それだよ。で、――あれは？」

「奪はれた書類か。あれはやつぱりあの×××へ持つて行つたままらしい。明日にならなければ解らない。が、今夜あの建物のなかに置いてあることだけは確かだ。」

「うむ。」

沈默が來た。叩きつける雨が二人の心の平面で跳ね返つて音を立てた。そして、二人は、別々に、同じ一つのことを考へ出した。――檢事局へ持つて行かれてしまふ。××裁判がはじまる。歷然たる證據が×の掌中にあるのだ。すると、どうなるか？――また細胞圖に從つて、明日にも、工場が、農村が、到るところで、襲撃され、×の手で掘り返されるのだ。すると、どうなるか？

「よし！」

不意に、吳永鐘がきつと鋭い眉を擧げた。喋り出した。

「あるひは萬一俺は誤つてゐるかも知れない。あるひは萬一俺のこれから取らうとする行動は××統制に觸れるものであるかも知れない。もしさうなら、俺はあらゆる刑罰を甘受しよう。だが、今は非常な非常時なのだ。しかも、この非常時は、先刻から、儼として俺に一つの行動を要求してゐるのだ。俺はその要求を仔細に分析して見た。そして、その要求の聲は依然××聲として俺の耳に響くのだ。だから、俺はその聲に從はうと思ふのだ。俺は決行する。今夜、これからすぐに、決行する。」

彼の頰からはいつの間にか血がすつかり引いてゐた。蒼く引き緊つた顳顬のあたりの皮膚がピクピクと痙攣した。

「何を――何を決行するのだ？」

さう言つた青年もいつの間にか蒼ざめた頰になつてゐた。

「――何を？」

吳永鐘は思はずから反問した。同志よ、お前には俺が何を決行しようとしてゐるかが十分に呑みこめてゐながらどうしてそんなことを訊くのだ？――と言ふやうに相手の瞳をまつすぐに覗きこみながら。と、またしても、あの歌が、傷だらけの歌が、肚の底から、波濤のやうに、紆り

ながらぐつとこみ上げて來た。つゞいて、あの世界被抑壓民族臨時大會の夜の感動が。

　彼は、ゆつくりと、一語一語に力を入れて、答へた。

「××××××するのだ。」

　吳永鐘は、立ち上ると、押入れを開き、そのなかへ首を突つこんだ。電線がつづけざまに鳴り出した。風が次第に嵐に高まつて來たのだ。嵐は雨の大束を横ざまに抱いては地上をめがけてビユウビユウと叩きつけて來た。

「見ろ、これだ！」

　差し出された彼の片手の上では、小型の眼覺時計の形をしたものが、冷たい金屬の光を放つて縮かんでゐた。

「う。」

　と青年は咽喉を詰めたやうな聲で答へた。

「三十年以前の化學的製品は×××××停車場の一隅に××者の一人の忠僕を××にした。が、一九二八年のこれ一個は優に××××停車場全體をさへ××にしてしまふだけの威力を持つてゐると言ふ話だ。あんな××の一つぐらゐ何んでもあるまい。――名簿も、椅子も、カンカン灼けた煖爐も、××も、壁も、細胞圖も、天井の汚點も、何もかも、××××××、×××××××××××××××れようと思ふのだ。――それとも、君は不贊成なのか。」

「いや、不贊成と言ふわけではない。が、あいつらはどうするのだ？　あの二人は？」

「うむ。」

　今日やられた同志たちは、奪還と逃亡との警戒から、みんな直接に××所の×××へ送りこまれて、あそこにはゐない。が、あそこには、あそこの留置所には、もう二三箇月も以前から、二人の同志が或る暴動事件で呻吟してゐるのだ。尤も、二人ながら、××の結果、精神×××にはされてしまつてはゐるが。一定の時間を置いて××で××を××されたりしたため、××に、永遠の××にされてしまつてはゐるが。

「なるほどあいつらは可哀さうな××にされてしまつたと言ふ話だ。」と青年はつづけた。「が、いくら××にされてしまつたと言つても、あいつらはまだ生きてゐるのだ。尊い同志だ。あいつらは×を守つたがためにこそ、白癡にもなつたんだ。最後まで××に耐へたからこそ：：」

「待つてくれ。君の言ふ通り、あいつらは確かに尊い同志だ。手本にすべき同志だ。が、それにもかかはらず、あいつらが現在不治の白癡であることも依然として動かすべからざる事實なんだ。あいつらは立派に×を守つた。が、あいつらはすでに廢物なんだ。今あいつらに何が出來る？　あいつらはこれ以上に生きてゐたところで何の役にも立たないのだ。あいつらは死んで生きてゐるのだ。」

「……。」

「だから、俺はあいつらにも一緒に死んでもらはうと思ふのだ、×のために、あの××と一緒に××になつてもらはうと思ふのだ。もし萬一あいつらが――いや、こんなことを言つてゐる間にも夜が明けさうで氣が氣でない。俺は出かける。」

　さう言ふうちにも、吳永鐘は、立ち上り、壁にかかつてゐた冬外套に腕を通し、小型の眼覺時計の形をしたものを、用心深くポケットのなかへ突つこんだ。

「解つた。君が正しいのだ。俺も行かう。」

　嵐のなかへ――二人の青年は出て行つた。

4

　そして、何ごとが起つたか？――作者はここにそれを物語る自由を持たない。が、次の事實だけはつけ加へることが出來る。――それから數日してから、數人の青年が、××××黨員の

嫌疑者として、同時に、別のある重大犯の嫌疑者として、京城府の內外で、逮捕された。そのなかに、あの青年と吳永鐘の名前も見出された。……

そこで、どうなるか?

「東京朝日新聞」は、一九二九年の十一月二日の朝刊に於いて、「××××員の第三次の陰謀發覺」と題して、「昨年二月の檢擧後「一年有半に渡る審理終了ーて」「二十八名有罪と決定」「二日午前十一時一部記事の差止めを解除された」由を報道してゐる。即ち、この記事によつても明らかである通り、二十八名が起訴されたのだ。もつと解りやすく言ひ直すなら、——恐らくその何倍かの人數が檢擧された筈にもかかはらず、わづかに、その何分の一かの二十八人だけが起訴される結果になつたのだ。

この事實は何を物語るか?——が、作者は沈默しなければならぬ。そこで、その沈默のしるしに大阪××勞働組合西成支部が、一九二八年の初夏、內地の各無產團體へ送つた一枚の檄文を、ここへ插入しよう。(檄文に記されてあつた責任者の住所姓名は省略する。)

見よ! この××××なる事實を! ××あつて何の××ぞ!

××民族××の爲め勇敢にも戰つて來た百一名の同志は×××となつてしまつた。

俺達は××裁判に絕對反對だ!

一、××××××政治に絕對反對だ!

一、×××××××被告を卽時釋放せよ!

一、××を×じた責任者及直接××したる××を處罰せよ。

一、××××されたる×××に損害を賠償せよ!

一、××××に對する特殊的××を卽時××せよ!

一、正式××に依らざる××、××、××絕對反對だ!

萬國の勞働者××せよ!

5

吳永鐘は、半年餘りも、未決監にゐた。そして、證據不十分の廉で、釋放された。

彼は出て來たのだ。が、まるで別の吳永鐘になつて。——蒼く膨れて。鉛色の顏に鉛色の動かぬ瞳を鈍く光らせて。瞬きを忘れて。だらしなくはだけた脣の裾からヨダレの條を引いて。世にも魯鈍な表情を動かぬ假面のやうに喰つつけて。——彼もまた、精神×××になつて、××に、永遠の×人になつて、出て來たのだ。

出て來たけれど、彼には身寄りは一人もなかつた。彼は元山の埠頭勞働者の子供に生れた。が、とつくに兩親を失ひ、十歲頃から、彼には、孤獨な放浪と勞働の生活がはじまつてゐたのだ。

が、白癡を、いつまでも道の上に立たせて置くわけにも行かなかつた。或る勞働團體の合法的な事務所が彼の身柄を引き取ることになつた。この輝かしい××家を、そこで、飼ひ殺しにすることになつたのだ。

そして、日が、重なり、すぎて行つた。

吳永鐘は、いつも、薄暗い事務所の一隅に、ぢつと、押默つて、坐つてゐた。彼が未決監へ忘れて來たものは、あらゆる思想と瞬きをすることだけではなかつた。彼は、同時に、ものを言ふことをも忘れて來てゐた。彼は、いつも、押默つてゐた。言語は言ふまでもない、舌と脣とが作り出すあらゆる音の破片の破片までも、彼は忘れて來たらしいのだ。つまり、彼の脣の間から、とりとめのない音一つさへ、誰一人として、つひぞ聞くことが出來なくなつたのだ。

こんな工合に、押默つて、日がすぎて行つた

のだ。
　これは周圍のものたちに取つて氣味の惡いことだつた。譫言でも時たま口走つてくれる方が、まだ××らしくて陽氣でよい。が、押默つて、どうしても口を動かさない白癡――これは時々みんなをぞつとさせた。そして、それだけに、×への嚇怒がみんなにこみ上げた。殊に、精悍な口調の煽動家としての彼を知つてゐる人たちには耐らなかつた。
「おい、吳永鐘！　どうしたと言ふのだ？　君は何を考へこんでゐるのだ！　どうしてものを言つてくれないのだ？」
　耐らなくなつて、彼に叫びかけたり、彼の兩肩をはげしく搖さ振つたりする青年もあつた。が、吳永鐘は、押默つたまま、假面のやうな表情を崩さうとはしなかつた。
　かうして、何箇月かがすぎた。冬が來てゐた。
　或る夜、五六人の青年が、事務所にゐた。夜が更けた。それは非常に寒い夜だつた。
「寒いな。」
　一人が齒を鳴らしながら言つた。すると、みんなが「寒い。」「寒い。」と言ひ出した。が、燃料になりさうなものは何も見當らなかつた。金を持つてゐるものも一人もゐなかつた。
　青年たちが寒さについて騷いでゐる一隅で、吳永鐘は、寒さも感じないのか、置きものゝやうに、押默つて、いつものやうに、坐つてゐた。
　そして、夜が更け、寒さが募つた。
　青年たちは、たうとう、歌を歌つて寒さをごまかすことにした。そして、彼らは「インターナショナルの歌」を歌ひ出したのだ。××語で歌ひ出したのだ。
　が、聞えるのか聞えないのか、吳永鐘は、やはり、押默つて、坐つてゐた。彼自身の果した英雄的行動によつて立派に傷を一つ殖やしたその歌が、彼自身の譯した歌詞によつて歌はれてゐる。その横に、ぢつと、押默つて、坐つてゐた。
　二番がすんで、三番に進んだ。一人の青年は、その頃から、吳永鐘の容子が、少しづつ可笑しくなるのに氣づきはじめた。――彼は、何かを眼で探しでもするやうに、キョロキョロと首を左右に動かし出した。だんだん落ちつきを失つて行くやうに、ソハソハしはじめた。さう言ふ動作がだんだんはげしくなつて行つた。そして、青年は、吳永鐘の鉛色の頰に突然血が登つて來、眼が狂暴に輝き出すのを見た。
　その時、歌は、おしまひの繰返しの

ところへかかつた。瞬間、吳永鐘は、猛獸のやうな荒々しい叫びを擧げ、意味の解らないことを喚き出した。そして全身で、部屋一杯に、暴れ出した。
　青年たちには殆ど呆氣に取られる時間さへ與へられなかつた。彼らは吳永鐘を鎭めるために亂れて立ち上らねばならなかつた。
　二三分かかつて、やつと、押へつけた。が、××は、押へつけられながら、手足をばたつかせる力を緩めなかつた。意味の解らないことを猛獸のやうに喚きつづけながら。
　手がつけられないので、青年たちはたうとう彼を紐や帶で身動きの取れぬやうに縛り上げた。が、彼は喚くことを止めなかつた。
　彼は、少しも休まずに、夜通し、喚きつづけた。朝になつても喚いた。青年たちが、××××黨員吳永鐘を精神病院へ送ることを決議したあとでも、まだ喚いてゐた。

（一九二九年十二月）

赤ん坊の話

上

僕は、友人の若い夫婦と、話し合つてゐた。

その部屋のなかでは、眼玉の大きい女の赤ん坊が、お尻を振りながら僕たちの前を、よよよち歩いてゐた。生れて一年四ケ月にしかならない赤ん坊は、まだ言葉を知らなかつた。が、机の上にあつたバットの箱を、小さな手で掴み上げると、默つて僕の友人のところへ持つて來て渡したりした。

僕たちは、その赤ん坊のことを、話し合つてゐた。

赤ん坊はその若い夫婦の子ではなかつた。赤ん坊の父親のM氏は×××員だ。現在多くの同志とともに捕はれて市ケ谷に××されてゐる。諸君のなかには、赤ん坊を背負つて無産者新聞社で働いてゐた若い健氣な婦人の姿を記憶してゐる人が少なくはないだらう。M氏の妻女だ。

そして、その時背中にゐた赤ん坊がこの赤ん坊だ。M氏の妻女は生活費のために最近新宿へ屋臺店のおでん屋を出した。いろんな事情で誰か赤ん坊を預かつてくれる人があれば都合がよかつた。僕の友人夫婦がそれを引き受けた。

（そのおでん屋は、「のんだくれ」で「親切」な「マルキシスト」たちがよく行くので、この頃ではとにかくやつて行けるさうだ。）

預かるにつけても、いろんな××があつた。赤ん坊一人にさへ、××はさまざまの邪魔を入れたのだ。僕の友人夫婦は、代り番こに、××の×××について、僕に話してくれた。强い怒りと憎しみとでそれを話した。

何かを見ても聞いても、それが少しでも僕の心を打つと、その瞬間、僕の空想は僕の頭腦のなかにそれについての一つの物語を描き出す。僕はさう言ふ妙な癖を持つてゐる。友人夫婦の話を聞きながら、よちよち歩いてゐる赤ん坊を見てゐると、またしてもその癖が出て、僕には一つの物語が浮んで來た。

僕はちやうど或る雜誌に短い小說を書く約束をしてゐた。締切りはすでにすぎてゐた。僕は慌てて書かねばならなかつた。僕は、その時僕に浮んで來た物語をそのままに書き、「娘」と言ふ題をつけて送つた。

中

小說「娘」

一

「あの赤ん坊は君の子ぢやないだらう？」

「いえ、僕の子です。」

「なるほど。しかし、君達夫婦のほんとの子とは違ふだらう？」

「それは違ひます。あの子は貰ひ子です。が、今では僕達夫婦の子です。」

「貰ひ子？　では、誰から貰つたんだ？　あの赤ん坊の親は誰だ？　君は知つてるだらう？　知つてて貰つたんだらう？」

「あの赤ん坊の親がたとひ誰だつたにしても、そんなことはどうでもいいぢやありませんか？」

「ところが大いにさうぢやないんだ。だから、言つてみたまへ。」

「厭です。そんなこと僕は答へる必要を認めません。」

「さうまあ肚を立てなくつたつて いいよ。い

や、君の方で言はないなら言はないでいいんだ。僕達の方にはちやんとかう言ふ便利な設備があるんだからな。」

手垢で汚れた寫眞帳だ。横柄な言葉を使ふ男は、そのなかの一つの寫眞を、若い藥劑師の鼻さきへ突きつけた。

「見給へ。これぢやないか。」

そこには大きく撮された生れて間のない赤ん坊の顏があつた。

「名前も解つてゐるんだ。潛子つて言ふんだらう？ それも片山潛の潛から取つたと言ふので、これの親父がとても得意になつてやがつたと言ふぢやないか。」

男は急にひとりで喋り出した。

「君は貰ひ子だと言つたが、それは譃だ。君はあの赤ん坊を預かつてやつてるんだ。君はあの子の親父が刑期を終へて出て來るまであの子を預かつて育ててやるつもりでゐるんだ。いくら君がごまかさうとしたつて、ちやんと解つてるんだ。あの子の母親は、喰つて行けんもんだから、近頃、屋臺店の牛どん屋をはじめやがつた。まだ若いし、それに勞働者の噂にしちやあいい面をしてゐる。だから、莫迦な連中がたかつて來て店は流行らなけれやあならない譯なんだ。ところが、思つたより流行らない。それでは亭主に差入れ一つ思ふやうに出來ない。そこで、いろいろ考へて見た擧句、赤ん坊だと言ふことになつたんだ。赤ん坊を背中に負つてゐる。それがお客の氣に入らない。そこに氣がついた。さうだらう？ それで君達夫婦があの子を預かつてやることになつたんだらう、表面は君達夫婦の子と言ふことにして？ それに、あの女は、晝間だつて、いろいろ――さうだとも、いろいろ用事がある筈だし……」

「たとひあなたの今言つたことがみんなほんとだとしたところで、あの子を養ふことがどうしていけないんです？」若い藥劑師はわれを忘れて叫んだ。「捨子がある。そのことが新聞へ出る。すると、何十人と言ふ子のない人がきまつてその捨子を貰ふために警察へ押しかける。すると、あなたがたは奇篤な志の人達だと言つて感心する。そのあなたが何故そんなに僕があの子を養ふことに邪魔を入れるのです。可哀さうに、あの赤ん坊を養つてやらうと言ふ人は僕の他には誰もゐない。だから、僕が引き取つてやつたのです。誰があの子をそんな同情のないものにしたか？ あなたがたが一番よく御存知の筈だ。」

「ぢやあ、君は、何んだね、あの子の親父が××主義者だと言ふことを承認しながら、あの子を養つてゐるんだね？ あの子の親父は一味と一緒に今の×××××××の××××ようとして投獄された。君はそれを承知の上なんだね？ ぢやあ、いい。もう何も言はなくてもいい。歸り給へ！ 君はいかにも同情したやうなことを言つてゐる。が、君が、どう言ふきつかけであの子を預かることになつたか、その筋道がどの邊にあるか、それだつてこちらはまんざら盲目ぢやないんだ。もういい！ 歸り給へ！ 歸り給へ！」

彼女の良人が警察でそんな風に脅喝されてゐる時、潛子を膝の上に抱いた藥劑師の妻は、引つ張つて行かれた良人の歸りを案じながら、店番をしてゐた。

薄暗い店の間は、どこもかも藥で出來てゐた。いろんな藥の香が混り合つて重く動いてゐた。そのなかで、潛子は自分の袖口をべとべとに嚙みながら、前歯の三つだけ生えた唇で、「パッパ！ パッパ！」と言つてゐた。彼女はそれだけ言へた。まだそれだけしか言へなかつた。ものに捉まつてやつと立ち上ると倒れた。滿一年四

ケ月になつたばかりだつた。

が、××は、彼女に、決して最初ではなかつた。おなかの潛子と一緒に母親は何度も留置場に拋げこまれた。母親はまた潛子を背負つて拋げこまれたこともあつた。××は彼女の生命がはじまつたその瞬間から執念く彼女に纏ひついてゐるのだつた。

日が暮れ出すと、藥ヽ香はだんだん濃く動き出した。若い藥劑師の妻は、心細さを揉み消すやうに、自分の頰を、強く、赤ん坊の薄いお河童に擦りつけた。

「ね、潛子ちやんはいい子だわね！　潛子ちやんはいい子だわね！」

さうすると、潛子は、「パッパ！　パッパ！」と言ひながら、やさしい小母さんの動く脣を摑まうとして、仰向けに差し上げた小さな片手の指を屈げたり伸ばしたりした。

2

そこは晝間でも人間が一杯歩いてゐた。活動寫眞館があつた。見世物小屋があつた。幾つでもあつた。金さへ渡せば身體を時間ぎめに自由にさせる女達の住んでゐる部落も近かつた。夜は餘計に人間が集まつた。速く歩くと人の足を踏んだり蹴られたりしなければならないので、みんなゆつくりと歩いた。

電車道の片側には、夜になると、縁日が出た。食べものの屋臺店がずらりと竝んだ。

娘は、夕暮になると、どこからともなく現はれた。風呂敷包と醬油のはひつた一升壜の重みに小さな身體を傾げながら。

鮨屋が鮨の屋臺を用意してゐる。彼女はその屋臺の上へ首を突き出す。

「小父さん、今晩は！」

「よお、今晩は！　やつて來たね！」

「小父さん、またお願ひするわ！」

「よし來た！」

彼女の屋臺は、晝間、電車道をちよつと橫露路へはひつたところに、置かせてもらつてある。鮨屋が每夜それを電車道まで運び出してくれるのだ。

「小父さん、ありがたう！」

そして、彼女は、その鮨屋と燒鳥屋との間で、支度をはじめるのだ。――先づ、澁團扇で火を起す。火種は大抵燒鳥屋が分けてくれる。火が起きると、大きな鍋をかける。やさしいお內儀さん　ゐる近くの唐物屋の水道でバケツに一杯水を汲んで來る。それから、暖簾を張る。彼女の暖簾は、汚れた白い布一杯に朱で「牛」と書いてある。その「牛」と言ふ字の眞んなかの棒の兩側に、それぞれ「うどん」「めし」と黑で書いてある。どちらも十錢だ。暖簾がすむと、風呂敷包を擴げる。小さな飯櫃。葱。牛肉の屑の竹の皮包。饂飩の玉。

潛子は數へ年で十一になつてゐた。小學校の四年生だ。が、身體が秀れて大きかつたので十三四に見えた。

彼女が六つになつた或る日、お父さん――若い藥劑師を彼女はさう呼びはじめてゐた――を警察の人が呼びに來た。お父さんはそれつきり戾つて來なかつた。それから暫くすると、お母さん――若い藥劑師の妻を彼女はさう呼びはじめてゐた――の父親と言ふ老人が田舍からやつて來た。お母さんは泣いた。そして、むりやりに田舍へ連れられて行つてしまつた。その日から、潛子はもう一人のお母さんの手に戾つた。牛どん屋の屋臺の奧には、每夜、母と子の姿が竝んで坐つた。そして、潛子は十一になつた。

この頃では、お母さんは大抵姿を見せなかつた。潛子ひとりで十分に商賣が出來るやうになつたからだ。お母さんは家で他の賃仕事をしてゐた。それにお母さんは組合のいろんな仕事

をしなければならなかつた。お母さんの身體は足りなかつた。潛子のお父さんは、二人とも、まだ出て來てゐなかつた。

迫害は潛子を見離した譯では決してなかつた。やはり執念く彼女に纏ひついてゐた。どこまでもついて來た。彼女が小學校へはひれば小學校のなかまでついて來た。そして、彼女は、反對に、迫害によつてだんだん敎育されて來た。勞働者特有のものの見方がだんだん彼女を染めて來てゐた。それに、組合や彼女の周圍にゐる人々はみんな彼女を可愛がつてくれた。いろんなことを敎へてくれた。

明るい娘だ。

顏も明るかつた。跳るやうな瞳が動いてゐた。

3

牛どん屋は相當に繁昌した。お客は、自由勞働者や、浮浪人や、醉ひどれや、俥屋などが主だつた。みんな不潔で太い指を持つた連中だ。が、みんな氣前がよく、ひいきにしてくれた。二三人連れの學生が時々喰ひに來ることもあつた。が、さう言ふ學生は、大抵彼女の顏を見に來るのだつた。一杯の牛うどんを喰べる間にロイド眼鏡のなかから七十遍ぐらゐ彼女の顏を見る學生もゐた。彼女はさう言ふ學生は氣味が惡かつた。そんな時には、組合で働いてゐる學生さん達の氣持のいい笑ひ顏が思ひ出された。

時々來る連中のなかに、自由勞働者らしい一人の朝鮮人がゐた。もう五十に近いやうな、何んだか年よりのやうな感じのする朝鮮人だつた。

この朝鮮人も、ずゐぶんよく、彼女の顏を見る方だつた。が、彼に顏を見られることは、彼女には、別に氣味惡くはなかつた。この朝鮮人の眼のなかには、彼女の顏を見る時、何んとも言へない悲しいやさしさが一杯に溜つた。それが彼女のなかへ流れこむのだつた。

「この頃いつもひとり。お母さん病氣か？」

下手なゆつくりの日本語で、こんなことを訊くことがあつた。すると、潛子は子供心に親切を感じた。さうではないが忙しくて來られないのだ、と言ふ意味を彼女は答へた。

或る夜は、彼女に、お父さんはどうしてゐるのだ、ないのか、死んだのか、と訊いた。が、この問には彼女は微笑ふだけで答へなかつた。

そして、朝鮮人は、或る夜、十一の潛子にむかつて、下手なゆつくりの日本語で、長い長い話をして聞かせた。その話によると、彼にも、ちやうど潛子の年恰好の娘が一人あると言ふのだ。妻もある。他に小さい子供もあつた。みんなで樂しく田を耕して暮らしてゐた。すると、不意に、悲しい出來事が起つた。その出來事を朝鮮人は別に話さなかつた。が、悲しい出來事であることだけは、潛子にもよく呑みこめた。その結果、彼は大切な妻や子供達と別れ別れになつて、自分はかうして內地へ働きに來ねばならなくなつた。そして、今では、自分の妻や子供達が生きてゐるのかそれとも死んだのかさへ、彼には解らなくなつてしまつた。そして、そんなひどい目に逢つたのは決して彼ひとりではないらしかつた。何千人と言ふ朝鮮人がそんな目に逢つたらしかつた。そして、彼と同じやうに內地へ働きに來てゐるらしかつた。

氣の毒で潛子は泣いた。彼女は朝鮮人の勞働者がどんなひどい暮らしをしてゐるかも知つてゐた。また朝鮮人がどんなに氣の毒な人達であるかも、いろいろ話で聞いてゐた。だから、氣の毒で泣いた。

それから、潛子は、その朝鮮人と、仲好しになつてしまつた。あまり長いことやつて來ないと、氣になつたりした。

その朝鮮人はつづけて來るかと思ふと、一月も二月も姿を見せなかつたりした。かと思ふと、またやつて來た。そして、今日はうどんを三四本少なくしといてほしいと言ふ意味のことを微笑ひながら言つたりした。彼女が理由を訊くと、答へる代りに、一錢銅貨を八枚彼女の前へ並べた。

4

秋の夜だつた。

暫く振りに、朝鮮人がやつて來た。彼女の顏を見ると同時に、彼女は今夜非常に嬉しさうな顏をしてゐる、と言ひ出した。何かきつと嬉しいことがあるに相違ない、何がそんなに嬉しいのか、と言ひ出した。

「あたしそんなに嬉しさうな顏をしてゐる？」

彼女は、さう言つて、自分ながら、自分の顏がますます嬉しさうな顏になるのを感じた。

明日はお父さんが出て來るのだ！　お父さんが！　自分がまだ赤ん坊の時分に×はれて行つたきりになつてゐたお父さんが！

濟子にはお父さんの仕事がどんな仕事であるかがぼんやりながら解つて來てゐた。お父さんがどんな立派な人であるかが。そのお父さんが歸つて來るのだ。寫眞以外にはまだ一度も見たことのない、しかし誰よりも親しいお父さんが！

濟子はよほど朝鮮人に自分の嬉しい理由を打明けてやらうかと考へた。が、お母さんはいつも屋臺店では決してお父さんのことを口にしてはいけないと自分に教へた。そこで、彼女はやつと耐へた。

5

朝だ。青い硝子の空氣を碎いて、××な旗がひらひらした。××な旗は一本ではなかつた。いろんな團體が、出て來る同志達を迎へるために、あとから、あとから、×××の前へ集まつて來た。

濟子は組合の人達の間で、しつかりお母さんの手を摑んでゐた。彼女は全身が震へた。みんながやがや言つてゐる。が、何も聞えない。嬉しい。人數はだんだん增える。警察の方もだんだん增える。お父さん達はまだ出て來ない。

そして、彼女は、群集の波を割つて、誰かの笑ひ顏が、まつすぐ、彼女の方へ近づくのを感じた。見た。――昨夜のあ　朝鮮人だ。仲好しの朝鮮人だつた。

「あの人もお父さん達を迎へに來た。あの人もお父さんの仲間だつた。」

青い硝子の空氣も、群集も、××な旗も、自分のすぐ近まで近づいて來た朝鮮人の顏も、何もかもが、いつか組合で誰か學生さんの近眼鏡をかけて見た時のやうに、急に、濟子の瞳のなかで、霞みながら、廻轉した。

下

赤ん坊のほんたうの名前は郁子だ。その頃はまだ「われらの委員長」であつた大山郁夫氏の郁を取つてM氏がつけたのだ。が、小說では、片山濟から、僕は濟子と言ふ名前にした。

小說では赤ん坊は數へ年で十一にまで成長してゐる。そして、小說は濟子の父親が刑務所から出て來る朝で終つてゐる。

が、送つてしまつてから、僕はこの結末が大變不滿になり出した。小說では、赤ん坊が數へ年で十一になつても、社會の狀勢は、まだ現在の×××××形態を維持してゐるかのやうに書かれてゐるではないか。だが、ブルジョアと社會民主主義者以外の誰がそんなことを豫斷出來よう！

僕はちよつと憂鬱になつた。

一週間ほどして僕はまたその友人に逢つた。「娘」の載る筈の雜誌は、まだ本屋の店さきに出てはゐなかつた。ところが、友人は僕に意外な報知を抛げつけた。よちよち歩いてゐた赤ん坊が、もうこの世にゐなくなつてしまつたと言ふのだ。消化不良と大腸カタルで、赤ん坊は死んでしまつたと言ふのだ。

赤ん坊はどんな風に死んだか？

僕は、小說で、赤ん坊がいろいろな××のなかでだんだん大きくなつて行くことを書いた。××は赤ん坊が生れる前から執念深く赤ん坊につきまとつてゐたと書いた。これは事實だつた。××は、おなかに赤ん坊のゐる××××××にして、片××××××××置いて、××を一本づつ××××いた。（そして××××××××××どもはそれを取り卷いて見てゐたのだ！）母と子はこんな×道もくそもない××を受けたことさへあつたのだ。

赤ん坊は死んだ。そして、××は、赤ん坊が死んだあとまでも、まだまだ執念深くつきまとつた。××は赤ん坊の死んでゐる或る靴屋の二階の周圍をものものしく警戒した。赤ん坊のデス・マスクを取つて置かうと言ふことになつた。僕の友人は石膏やその他の材料を持つて道を急いでゐた。すると、二三十人が、彼を取り卷いてしまつた。そこは往來だ。人が澤山歩いてゐる。友人はそこではだかになれと命ぜられた。サルマタまで脱がされた。××はしまひには石膏の粉末の一つ一つまで丁寧に調べた。白い粉末が往來に散つた。

何も出て來なかつた。そして、身體檢査が終ると奴等はデス・マスクは絶對に取つてはならぬ、と怒鳴つた。

たうとう男は一人も赤ん坊の死顏を見ることが出來なかつた。二人の女だけが赤ん坊の死顏を見て泣くことを許された。お通夜は赤ん坊の母親がひとりきりでしなければならなかつた。

××はかうして赤ん坊をこの世から完全に×ひ出してしまつた。

（一九二八年六月）

農村では

1

Fと言ふ法學博士を知つてゐるだらう。マルクスの「資本論」からどうにかしてアラを見つけ出さうと思つて、末端のくだらん字句を引つ張り出して來てはそれにいい加減難癖をつけることを畢生の事業にしてゐる有名な大學教授さ。そのF博士が或る時農村視察と言ふ觸れこみでどこかの田舍へ出かけて行つた。

空が青い。その下で農民諸君はせつせと田を耕してゐる。牛が草を食つてゐる。雲雀が囀つてゐる。うつかりすると、鶯も啼いてゐる。それは、ちよつと見るといかにも靜かな風景だ。F博士はそばにゐたものを振り返つてから言つた。

「見給へ、君。何んと言ふ平和な美しい眺めだらう。農村には階級鬪爭はない。この平和な眺めこそ日本の農民の姿なのぢや。」

笑つちやいけない。ほんとにさう言つたと言ふことを、僕は或るたしかな學生から聞いたことがあるんだ。勿論そんな言草は農民諸君を今のままの奴隷狀態に繫いで置くための嘘つぱちのでたらめさ。それは絶對に現實の農民の姿ではない。年を追つて全國に捲き起つて來た立入禁止や立毛差押の鬪爭の夥しい記錄はちやんとこのことを裏書きしてゐる。しかも、それは近年ますます暴動の性質を帶びて來た。近くは岐阜の教訓がある。農村の…エネルギーは、われわれが頭のなかで考へてゐるよりも、遙かに、左翼化の線をたどつて來てゐるのだ。

去年の暮れからこの春へかけて、僕は、東京××勞働から派遣されて、山梨のY郡の地方の農村へ出かけた。

2

僕の出發は豫定より四五日も遲れた。十二月二十四日、本所公會堂で行はれてゐた新勞農黨の結黨大會が、反動政府の手で解散を喰つたためだ。われわれはこの解散を見越してゐた。が、われわれはこの大會の前後を通じて急速に運動の方針を樹て直さねばならなかつた。逮捕と追及との危險とたたかひながら、われわれはそれをした。合法主義の殘りのカスがわれわれの陣營から徹底的に叩き出された。われわれはわれわれの唯一の黨である…旗の下に最後までたたかふことを誓つた。その間の消息は君たちの方がよく知つてるだらう。

僕の汽車が山梨の境界へはひつたのは、十二月三十一日の夜がはじまる頃だつた。汽車はのろかつた。どの驛も雪で汚れてゐた。汽車はその一つ一つの驛に停車した。そして、またのろのろと出發した。一つの爭議が行く先で僕を待つてゐた。R製絲工場。その爭議の應援は行く先で僕の果さねばならない重要な仕事の一つだつた。女工さんたちは爭議をどう發展させてゐるだらうか。持ちこたへてゐるだらうか。僕にはそれが氣づかはれてならなかつた。汽車ののろさが僕にはたまらなかつた。が、汽車はやつぱりのろかつた。僕は、ぷりぷりしながら、眞黑い何も見えない同じ風景が次ぎ次ぎに背後へ走つて行く窓硝子を睨んでゐた。車室のスチームの暖氣で曇つたその窓硝子には、ぷりぷりしてゐる僕の可笑しな顏が、小さく震動しながら、ぼんやり寫つてゐた。

汽車は、やつとこさで、僕を或るちつぼけなガランとした田舍の驛のプラットへ降ろした。そして、氣のせゐか、僕を降ろすと、急に速力を出して、走り去つて行つた。僕は、呆れて、ちよつと、汽車の尻尾に點いた青いカンテラの灯が夜のなかに遠くなつて行くのを見送つた。僕が改札口の方へ歩き出すと、驛の時計が鳴り出した。僕の歩調に合はせて、八つ鳴つて鳴り止んだ。

3

僕は電報を打つて置かなかつた。その方が安全だと思つたから。驛へは誰も迎へに來てゐなかつた。雪は降つてはゐなかつたが、道は雪解けでぬかるんでゐた。僕は驛の近くの或る農家の戸を叩いた。爐のそばで、一人の青年が臥轉んで新聞を讀んでゐた。暗い電燈がぶら下つてゐた。僕は農民組合の事務所へはどう行けばよいのかと訊ねた。左翼の――もとの日本農民組合系の事務所だと言ふことを僕はつけ加へた。

「御案内しませう。」

青年は起き上つて、出て來てくれた。つい近くだと言ふことだつた。歩きながら東京からおいでなさつたのかと僕に訊ねた。凍つた夜氣のなかへ白い息を吐き出しながら、訊ねた。僕はさうですと答へた。すると、青年は、殘念さうに、言ひ出した。

「もう二時間早かつたらなあ。」

そして、青年は、R製絲工場の女工さんたちの爭議團が、夕暮の六時に、今からたつた二時間前に、解散したところだと言ふことを敎へてくれた。東京から勞働者がきつと應援に來てくれる。そして、自分たちを指導して有利に解決してくれる。さう信じて、今日まで、踏ん張つて、待つてゐた。が、いくら待つてもやつて來ない。それに、ブル新聞には、新勞農黨の結黨大會の解散の記事が、逆宣傳の尾鰭をつけて、ものものしく報道された。應援に來てくれる筈の東京の勞働者は、自由を奪はれたり、自分たち自身の仕事が急に忙しく手が拔けられなくなつたりして、それでやつて來ないのだらう。さうきめて、夕暮の六時に、たうとう解散してしまつたと言ふのだ。敗戰したと言ふのだ。

「一足違ひでしたになあ。」と青年は言つた。

僕は參つた。電報を打つて置けばよかつたのだ。

僕は、解散した女工さんたちの、爭議團の應急策を頭のなかで考へながら、その青年に訊ねた。

「君も農民組合へはひつてゐますか？」

はひつてゐると言ふ話だつた。この邊の農民はみんなはひつてゐると言ふ話だつた。しかし、話してゐるうちに、その青年のはひつてゐる農民組合は中間派のHやNらのダラ幹の指導下にある組合だと言ふことが僕に呑み込めて來た。僕が、やつらダラ幹の名前を擧げて、あの組合でせうと言ふと、青年は大變恥かしさうにさうでごわすと答へた。

4

事務所と言つても、普通の農家だ。組合の常任の家なのだ。僕は、はじめての土地だし、誰とも初對面だ。が、みんな喜んで迎へてくれた。どんなに待つてたかと言つてくれた。僕が來たと言ふので組合の連中が、夜なかを、どんどん集まつて來てくれた。

爐を圍んで、熱いお茶を啜りながら、僕たちは殆ど朝まで話しこんだ。疲れてるだらうから今夜は早くやすむといい。さう言つてくれながらみんな話しこんだ。

先づ第一には、R製絲工場の爭議のことで話

した。ここでも、みんな僕の汽車がもう二時間早かつたらと殘念がつた。解散と同時に僕がついてゐたら、われわれは爭議團をもう一度しつかりと固め直すことが出來たらうと思はれる。が、一度散り散りばらばらになつた以上、それは困難だつた。何故かと言ふと、女工さんたちはとつくに解雇されてゐたのだ。爭議の中心點は解雇反對だつた。が、一般の解雇反對とはいくらか違つてゐた。このあたりの製絲工場は、どの工場も、冬になつて仕事がなくなると、毎年、定期的に、工場を閉鎖するのだ。そして女工さんたちを解雇してしまふのだ。ところが、工場主の方では、雇ひ入れる時にはただの一年契約で雇ひ入れる。解雇してしまへばもう一切の責任を持たないのだ。だから、今年雇ひ入れられたからと言つて、その女工さんは來年も雇ひ入れられるとは決まつてゐない。この一年契約の制度は女工さんたちの生活を保證しないばかりか非常な不安へ繋いでゐた。この制度はまた就業年限による賃金の增加を巧妙に回避してゐた。その上、前の年の搾取で身體を惡くしてゐる女工さんや能力の鈍い女工さんを、次の年にはどしどし篩ひ落すことも出來たし、それに第一、工場主に取つて一番怖ろしい永續的な女工組合の成立を妨害することが出來た。

今度の爭議の中心點は、この「一年契約を永久契約にしろ！」と言ふ要求だつた。每年定期的に工場を閉鎖するにしろ、同じ工場主が同じ製絲業を翌年もつづけてやるのだから、翌年も「わたしたち」を雇ひ入れろ、と言ふ至極正しい要求だつた。そして、指導者のないために敗戰したのだ。

僕たちは工場主への對策について相談した。女工さんたちのなかには、よその土地から來てゐる人も少なくはなかつたが、その大部分はみんな農民諸君のお內儀さんや妹さんや娘さんたちだつた。決してよそごとではなかつた。明日、僕と農民組合の重立つた人二三人とで、工場主の邸へ押しかけることに決まつた。そして、別に、新年會と言ふ名義で、女工大會を待ち、その席で、工場主との會見の顛末を報告し、アヂと組織とをやることに決まつた。

5

それから、ヨモヤマの話になつた。

が、農民諸君が、僕から眞つ先に熱心に、いろいろ聞かうとして、その善良な眼を輝かしたのは、一體、何だつたと思ふ？

×××ことなのだ。われわれの唯一のプロレタリア黨のことなのだ。僕と一緒に爐を圍んでゐる人のなかには、五十以上の老人もゐれば、青年もゐた。そして、僕は彼等から黨に關する實に種々雜多な質問を浴せられたのだ。そして、それらの質問を通じて、僕は、われわれの前衞たちの英雄的行動が、ブルジョアジーと社會民主主義者の一切の逆宣傳にも拘らず、どんなに力強い感動を農民諸君の胸のなかに叩きこんでゐるかをありありと感じた。

それらの質問を通じて、もう一つありありと感じたことがあつた。それは、農民諸君が、都會の勞働者の役割を正當に評價しはじめてゐると云ふことだつた。彼等の土地に對する鬪爭も、結局、都會の勞働者と握手して、都會の勞働者の指導の下になされない限り、最後の勝利を得ることは出來ないと言ふ思想だ。僕は決していい加減な獨合點を話してゐるのではない。僕は東京へちゃんとその生きた證據を連れて歸つて來た。僕は山梨に二月の末までゐたが、僕がいざ東京へ歸ると決まると、年老つた農民諸君が幾人も僕のところへやつて來て、かう言ふのだ。

「これからは農民運動をやるにしても、やつぱ

り都會の勞働組合でたんまり修業を積んで來んことにはロクなことは出來んしお話になりませんわ。それでお願ひに上りましたのぢや。わしんとこの倅はどうぞして一人前の鬪士にして地主をうんうん言ふまでやつつけてやらんけれやならんとわしは日頃から考へとります。どうぞわしんとこの倅をお邪魔ぢやろが一緒に東京へ連れて歸つてあんたの組合へ入れて叩き上げてやつて下さるわけには參りますべいか？」

つまり、東京の左翼の勞働組合へ留學させたいと言ふのさ。さう言ふのが十四五人もやつて來た。この申し出は僕を喜ばせた。が、十四五人みんな連れて歸るわけにも行かぬ。で、籤を引いて、そのなかから三人だけ連れて歸ることにした。そして連れて歸つて來た。生きた證據と言ふのはこれだ。

さて黨の話だが、僕は説明出來るだけは平易に説明した。が、或る質問にははつきり答へるわけには行かなかつた。また或る質問には、答へる代りに、默つて笑つてゐるより仕方なかつた。だつて、仕方がないぢやないか。僕は黨にはひつてゐるわけではなし、黨のことははつきり知らないのだし：：。

もう一つ突つこんで説明しようとしない僕の答へ方は、農民諸君には非常に不滿らしかつた。それは彼等の表情で解つた。が、あとで聞くと、彼等は、非常に不滿だつたと同時に、そのことで僕に好意を持つたと言ふのだ。やつぱり「東京の人」は違ふ。初對面のわれわれにむかつて、滅多なことは決してペラペラ喋つたりしない。口にカンヌキを落すべきところではちやんと落す。さう言つて、アベコベに僕に好意を持つたと言ふのだ。これを聞いた時にはすつかり恥かしくなつたが、好意を持たれたと言ふことは嬉しかつた。

農民諸君が第二に聞きたがつたのは、東京の勞働組合の話だ。第三には、日本の狀勢だつた。

6

夜が明けると、一月一日だ。もつとも、このあたりは正月は舊で祝ふが、しかし、一月一日は一月の一日だ。朝のうちに、僕と農民組合の人二人と、三人で、工場主の邸へ押しかけた。よくあることだが、地主を兼ねてゐた。そこで、村はづれの、森を背景にした工場主の邸の長い白壁には、農民諸君の憎しみがコゲついてゐる。

表玄關へ立つて、僕たちは、大きな聲で、「頼まう！」と怒鳴つた。執事と言ふのか、番頭と言ふのか、とにかく、頭の禿げたそんなやつが出て來た。今日は何しろ元日ですから、いづれ日を見て、とぬかした。玄關拂ひをしようと言ふのだ。その手は喰はない。貴樣に用事はない、主人を出せ！　で突つ張つた。すると、主人は所用で新潟へ行つてゐると逃げた。今日は何しろ元日ですからと言つたその口で逃げた。そこで、ここの主人は元日から旅行に出るのか！　と突つ張つたら、奥へ逃げこんで暫く出て來なかつた。やつと出て來て、どうぞお通りをと言つて部屋へ案内した。それから、また大分待たせて主人が出て來た。

僕たちと工場主とは二三時間も言ひ爭つた。僕はもう警察が來さうな時分だと思つたがどうしたわけだかやつて來ないのでむしろ拍子拔けがした。元日のせゐだつたかも知れない。

工場主はとても頑固なやつだつた。僕が東京やよその地方の工場の例を引いたりしても駄目だつた。たうとう僕は癇癪を破つた。

「もう結構だ。勝手に頑固を張り給へ。その代り、こちらは東京から應援をウントコサと

呼んで、もう一度爭議をやり直すから、覺悟しろ！」

僕はさう怒鳴つた。すると、やつは急に蒼くなつた。そして、一年契約を永久契約に變更することをたうとう承認した。僕たちは念のために證文を書かせた。僕はそれから女工さんたちに休職の臨時手當を出すことを要求した。これは、どうしてもうまく行かなかつた。しかし、僕たちは元氣よく引き揚げた。

女工大會は、その夜、お寺の本堂を借りてやつた。來年の保證が出來たので、女工大會は活氣づいた。僕は女工さんたちがこの集まりを機緣に、何か會を作つて、それをいつまでもつづけて行つてはどうだらうか、と提案した。滿場一致で贊成だ。友愛會と言ふのが出來た。その場で役員を選擧した。會の形式は婦人會か何かのやうだが、役員の編成は勞働組合と同じものに僕は拵へ上げた。

「今度爭議をやる時にはこの友愛會がそのままに爭議團になるのです。」と僕は說明した。「この會はどんなことがあつても潰してはいけません。また、みなさんのなかで、よその地方へ行つてよその工場へはひられる人があつたら、その人はその工場の女工さんたちを說いてそこでも友愛會を作らなければいけません。友愛會と友愛會とは親密に手を繫がなければいけません。そして、援け合つて、どしどし爭議をおやりなさい。さうしたら、僕たちはいくらでもまた應援に來ます。」

大變な拍手だつた。

7

警察から、僕を呼びに來た。署長が會ひたいと言ふのださうだ。僕は出かけた。

田舍の××は、東京の××ほどまだ意識化してゐない。われわれの人格を變に認めるのだ。その署長もさう言ふ一人だつた。その男の言つたことを搔いつまんで話すと。——君は××主義者だ。この山梨と言ふ土地へはこれまで××主義者がまだ一度も足を入れたことがないのだ。社會民衆黨や日勞黨ならいくらはひつて來ても構はない。むしろ歡迎する。が君たちは困る。で、君がすぐに東京へ歸つてくれると言ふのなら、こちらでは紳士的に丁寧に東京までお送りする。が、まだこの土地に留まると言ふなら、殘念だが、斷然たる處置に出なければならん。

僕が答へた。

「われわれは、或る目的を持つて或る土地へはひつた以上は、その目的を遂げるまでは斷じて退かない。死んだら別だが。だから、僕は留まります。」

8

農村批判の演說會をやつた。

この土地には、一萬二千の農民諸君が、組合に組織されてゐる。右翼の社民系の大衆が五千。中間派の指導下にある大衆が七千。そして、左翼は、指導者を入れて僅かに八十人餘りなのだ。が、一萬二千の大衆は實際には殆ど左翼を支持してゐるのだ。よき指導者さへ行けば、一萬二千の大衆は立ちどころに動員出來るのだ。

こんな話を聞いた。或る時、社民黨の演說會で、肥つちよのS代議士が東京からやつて來た。ところが、いよいよ彼が演壇に立つと、彼を支持してゐる筈の右翼の組合員諸君が、一齊に、「ダラ幹！　ダラ幹！」と騷ぎ出した。あまり騷がしいので、演說も出來ない。臨官が立ち上つて、「そんなに騷ぐと解散にするぞ！」と叫んだ。すると、聽衆は、「解散なり何なりとしてくれ。こんなダラ幹の演說を聞くよりは、地主の家でも襲擊する方がずつと面白いや。」と

言つて、農民歌をうたひながら、さつさと引き揚げてしまつた。演説會はオヂャンさ。Sの野郎に憤つて、「山梨のやつらには俺の演説を二度と聞かしてやるものか！」とステゼリフを殘して歸つて行つたと言ふ美談だ。

この土地の大衆諸君は、演説會へは、デモで來てデモで歸る習慣を持つてゐる。これは氣持がよかつた。そして、かう言ふ調子だから、小作爭議は大抵地主の方ですぐに參つてしまふさうだ。

農村批判の演説會はやはりお寺の本堂を借りてやつた。六百人くらゐデモでやつて來た。東京本部から檄が來ることになつてゐたが、中途で奪はれたらしく、手にはひらなかつた。で、僕の下手な文章で物凄いやつを作つた。僕は、讀み出したらすぐに中止が來るだらうと豫想して、ずゐぶん思ひ切つたことを書いた。

讀み出したところ、一向、中止がかからない。で、ぐんぐん讀んだ。自分の文章だからぐんぐん讀めた。ところが、意外にも、おしまひまで、中止はかからなかつた。僕は、讀んでしまふとすぐに便所へはひつて、それを燒き棄てた。

それから、組合の諸君のあとで、一時間ばかり喋つた。本部からやれと命ぜられてゐた方針通りの僕の演説は非常に成功した。

「大抵の人は、農民に土地を與へよ、あればかりやるから聞く方でだれる。あんたはその他に電燈料の問題や租税の問題を取り上げてやつてくれたから大衆はすつかり沸いたんですよ。」

一人の組合員があとでさう言つて僕の肩を叩いた。

翌る朝、ねてゐるところへ、スパ公が一人訪ねて來た。

「おやすみになつてゐるところをお起ししてすみません。」

さう前置きして、昨日の檄があつたら借して戴きたいのですが、と切り出した。僕は、とぼけて、言つた。

「いや、僕の方でもあれを探してるんだが、君、會場に落ちてなかつたかい？」

「いや、それがずゐぶん丁寧に探して見たんですが、どこにも見當らないんで。」

「しかし、君、昨夜は速記係が速記してたぢやないか？」

「ところが、速記係の野郎が新參なやつでして、ところどころしか寫せてないんです。」

かう言ふところは田舍だと思つて感心したよ。

9

僕は驚いた。道で、小學生諸君に逢ふと、みんな僕にお辭儀をするのだ。もつと小さい連中は、僕が通つてゐるのを見ると、かう叫んでついて來るのだ。

「やあ、×××先生が來た！」

僕は一人の小學生をつかまへてわけを聞いてみた。この土地では、どんな貧乏な農家でも、父親のことを「お父さん」母親のことを「お母あ」と呼ぶ習慣がある。その子供は答へた。

「うちのお父さんが、あの人は東京の×××から來てゐる僕ら貧乏人の味方のえらい人で、學校の先生よりえらい先生だから、道で逢うたらお辭儀しなさいと言ひました。」

僕は咽喉がつまつた。「僕は決してそんなえらい人ではない。君と同じやうな貧乏人です。だから、これからはお辭儀をしてはいけません。みんなにさう言つといて下さい。」

そして、僕は、それからは、子供のゐる晝間は滅多に外出しないことにした。

10

一月から二月へ、僕はいろんな村で五つの

演說會と十五の研究會とを持つた。演說會には臨官がつくが、研究會は屆けだけ出して置けば自由にやれた。左翼の組合諸君だけではなしに、中間派や右翼の諸君も、どしどし研究會へやつて來た。五つの演說會のうち、二つは中間派の演說會だつたのは愉快ぢやないか。どうしても僕に出ろと言ふのだ。しかも、おしまひに出すのだ。はじめに僕を出すと、みんな僕のがすむと歸つてしまふと言ふのだ。さて、僕らの方で最後にやつた演說會の夜のことだ。

　僕が出て、社會民主主義のダラ幹のバクロから議會主義のバクロへはひりかけると、中止！　と來た。僕は、壇上から、ダンアツのひどい東京でさへわれわれに議會主義のバクロをやらせるのに、何故中止か？　と捩ぢ返した。すると、今さき本廳から今後君には一言も喋らせてはならぬ、と言ふ指令が來たと言ふのだ。そして、聽衆が騷ぎ出すと、解散！　と來た。

　そのとたん、誰かが電球に石を抛げた。眞つ暗だ。そこも或る寺だつた。農民諸君は讀經に使ふ小机を振り廻したりして暴れ出した。むかうの方にかなり怪我人が出た。手がつけられなかつた。

「これから社民黨の演說へデモだ！」

誰かが叫んだ。農民諸君に、僕を先頭にして、社民黨がちやうど演說會をやつてゐた近くの小學校へ、雪崩れを打つた。そしてまた、誰かが小學校の電燈を消してしまつた。大變な騷ぎがおつぱじまつた。

　そして、僕はたうとう奪はれた。僕を奪ひ返さうとして、二三十人の農民諸君がまた奪はれた。そのなかには婦人も一人ゐた。その婦人は取調べを受けた時、自分たちの奪はれた指導者をたしかに奪ひ返さうと自分は努力したと主張した。

　その婦人と、他にもう二人が職務妨害と暴行罪とで起訴された。

　僕はひどい×××受けた。×××殘黨で引つかけるため、一言も喋りもしない僕に、厚さ一寸ほどの調書が作られた。そして、六七人がかりでムリヤリに判をつかせた。

　僕は檢事の前ですべてを否認した。證據は何もないではないか。それに、つかれた判を見るがいゝ。つかうと思つてついた判なら、にじまないで靜かにはつきりとつかれてゐる筈ではないか。これには地方檢事も弱つたらしかつた。何しろ證據がない。仕方なしに、たうとう僕を騷擾罪で起訴した。僕は汽車に乘せられた。東京へ護送されるのだ。

　僕は、汽車が最初の次の驛に停車する少し前から、便所にはひつてゐた。便所の前では靴音がしてゐた。汽車が停車し、やがてゴトリと動き出した。その時、靴音がコツコツと車室のなかへ少し遠ざかるのを聞いた。僕は飛び出した。もう一足でプラットが盡きるところで、僕は跳び降りた。あとで聞くと驛の前ではずゐぶん要心して張つてあつたさうだ。が、僕は、柵を、越えて、夢中で、走つた。

11

が、僕が、農民組合の事務所の二階で、虱たらけの着物を着換へようとしてゐると、五六人でやつて來た。音で解つた。駄目だと思つた。が、階下の人は突つ張つてくれた。

「來やしませんでしたよ。わしらの方では却つてあの人を怨んでるくらゐでさあ。これだけ好しになつときながら、歸る時には一言の挨拶にも來てくれないなんて少し薄情すぎるつてね。」

　その間に素早くレポが飛んだ。田畑から事務所の前へ農民諸君がどんどん集つて來た。いくらでも集つて來た。百人以上も集つて來た。

「いや來てる。」「來てやしませんよ。」そんな押し問答の擧句、こんな聲が聞えた。
「おや、これだけ來てやしませんと言ふのにまだ信用しないでムリヤリに探すと言ふんですな。よがす。わしらが地主の邸の玄關まで行つただけでもあんたがたはわしらを檢束してしまひなさる。よがす。その代り、片足でも上つてみさつしやれ。わしらはわしらの方法であなたがたを檢束する。わしらの檢束は御存知の水漬けぢや。」
この土地では、農民諸君の怨みを買つたものは、あとで、闇の夜など、とてもひどい仕返しを喰ふと言ふ話だつた。或る評判の惡かつたスパ公は、いつだつたか五六人の農民諸君の手で、ムリヤリに近くの川へ連れて行かれ、三四時間も首だけ出して川のなかへ漬けて置かれ、身體中から氷柱が下がつたと言ふ話を聞いたことがある。僕はそれを思ひ出した。その時、こんな聲が聞えた。
「いや、たつて上らうとは言はないさ。君達がそれほどゐないと言ふのなら君達の人格を信用して、われわれは引揚げることにするよ。」
歸る音が聞えた。

——一九二九年七月——

墓地で體操をする男

或る鐵工所の爭議が暴動化した。私は煽動者として起訴された。六ケ月間ぶちこまれた。私は出て來ると、私の身體の芯はひどく傷んでゐた。汽車は、バラバラに解きほぐれたやうな私の身體を、瀨戸内海に臨んだ山陽の或る小さな工業都市へ運んだ。

一冬を私はそこで送つた。

三年以前のことだ。從つて、その頃のわが國の勞働者運動の狀勢は、今とはすつかり別のものだつた。第一、その頃はまだプロレタリア黨が公然と登場してはゐなかつた。言はば、まだ胚芽の狀態にあつた。勞農黨が全體の運動を指導して活潑にたたかつてゐた。

その一冬、私は熊木久一と言ふ自由勞働者の家で厄介になつた。どこの都會へ行つたつて勞働者の住む家は同じやうに見窄らしくて狹つ苦しい。その家も見窄らしくて狹つ苦しい長屋の一つだつた。が、海に近く、太陽が朝から美しく雪崩れこんだ。

熊木久一はすばらしい體格を持つた三十すぎの男だつた。身長五尺八寸、體重が二十五貫、それくらゐはたつぷりあつた。

私は今でもはつきりと彼の掌を思ひ出す。私は勞働者の大きな掌をずゐぶんと見て來てゐるのだが、それが私の見た掌と云ふ掌のなかでとび拔けて一番大きな掌だつた。中指の尖端から掌の裾まで法螺ではなしに一尺はあつたらう。そして、幼年時代からの勞働で、豆の潰れるあとから豆が出來て行つた結果だらう、掌一面が皮砥か何かのやうに分厚い板になつてゐた、その上を針金のやうな垢の筋が縱横に黑く走つてゐた。彼は指紋と言ふものを持たなかつた。指紋の纖細な渦卷などはとつくの昔に擦り潰れてしまつてゐるのだ。彼の指がまたすばらしかつた。どの指だつたか忘れたが、鉞力の破片が彼の指をひどく切つたことがあつた。その當座、彼が指袋の代りにコンドームを傷いた指にはめて平氣で仕事に通つてゐたのを、私は憶えてゐる。彼の指はまた平氣で炭火を摑んだ。空つ風が吹き拔ける凍てついた日など、そんな日は大抵仕事にあぶれて歸つて來ると、彼は、紫色になつた脣で「おゝ寒む寒む寒む！」と呟きながら、火鉢の上へ屈みこんだ。そして、二つの掌を炭火のなかへ突つこんでガラガラと搔き廻した。

「おいおい、そんな無茶をするとしまひにヘウソになるぜ。」

私が呆れながら注意すると、熊木久一は笑ひながら答へた。

「何あに、大丈夫ですよ。わしの掌を燒く炭火なら水のなかへ叩きこんでも消えることはあるまい。」

顏がまた自由勞働者らしく樂しい亂暴さで出來てゐた。で、全く大男と言ふ感じだつた。そして、熊木久一は、いい意味で、大男總身に智慧が何んとか、と言ふあれを聯想させるやうな性格を持つてゐた。人好きのする單純さとでも言ふのか。

彼は小學校の敎育も滿足に受けてゐなかつた。十一の時、搔つ拂ひをやつて、感化院に抛げこまれた。逃げ出した。それから、いろんなことをやつて來た。葬儀人夫、煙突掃除夫、道路工夫、沖仲仕、鐵道工夫、石炭運搬夫、酒をどか呑みした。或る日、仕事にあぶれて、街を步い

てゐた。勞農黨の演說會があつた。退屈と飢凌ぎにはひつた。そして、忽ち、昂奮した。

　これが熊木久一と勞働者運動とを結びつける結び目だつた。酒を止めてしまつた。彼の意識はまだまだ低かつた。が、運動が力強く進み、彼は力強く進んだ。この都會で、左翼の演說會や集會が持たれる時には、彼は必ず警備隊長に任命された。

　話し遲れたが、熊木久一には女房があつた。彼が人並外れて大きな男であつたのと比例して、彼の女房は人並外れて小さい女だつた。

「わしはこいつを道で拾つて來たんですぜ。」と熊木久一は笑ひながら私に語つた。

　それはほんたうらしかつた。彼女は氣を喪つたまま夜更けの道の上に落つこちてゐた。熊木久一はそれを大きな腕のなかに抱へて家へ連れて戾つた。

　息を吹き返した。が、彼女は、何故夜更けの道の上に落つこちてゐたか、どんな生活を通り通つて氣を喪ふところまで來たか、それらの事情について一言も口を開かうとはしなかつた。彼もまた一言も訊ねようとはしなかつた。が、彼女の脅え切つた冷たい瞳孔と荒んだ皮膚と垢染みて膝の拔けた着物とは何もかもを十分に喋つてゐた。これはよほど苦勞をして來た女に相違ないと熊木久一は考へた。彼は彼女の身體が恢復するまで家のなかに放つて置いた。彼女はそのまま彼の女房になつた。

　彼は女房を可愛がつてゐた。私にはそれがよく解つた。彼女はまだ若かつた。二十一二に見えた。肺を患つてゐた。病氣はずゐぶん進んでゐると私には想像された。憔悴した小さな身體を彼女は晝間でも大抵薄い蒲團にくるんでゐた。そして、底にいくらか液體の殘つてゐる瓶をゆつくり振るやうな、不思議な咳をした。食事の支度などは、大抵、彼が、彼がゐない時には私が、やつた。さう言ふ時、彼女は低い聲で「すみません、ほんとに。」と言ふだけで、起き上らうとする氣配もなかつた。起き上つて手傳はうと言ふ氣持を起させるだけの生活力さへ既に彼女のなかで死んでしまつてゐたのだ。

　それほど、彼女の身體は弱つてゐた。鍋を洗つたりカンテキの下を團扇でバタバタやつたりしながら、私は、若い彼女を呼吸をする死體にしてしまつた陰慘な彼女の過去についていろいろと考へた。

　二月に近かつた。珍らしく暖かな晝すぎがあつた。彼女は、熊木久一の、だから彼女の身體が五つくらゐはひりさうな褞袍にくるまつて、緣側で日向ぼつこをしてゐた。彼は出かけてゐた。私は本を讀みながらぼつりぼつり彼女の話相手になつてゐた。

「あの鷄を見てゐたら、わたし思ひ出したことがありますよ。」と彼女が言つた。

　低い垣越しに、隣家の狹い庭が、すぐ鼻さきにあつた。葉を落し・柿の樹が一本、折れた脚のやうに立つてゐた。その根元に、三羽の鷄が、暖かだとは言つても、ひどく弱々しい冬の陽ざしを浴びて、ぢつと羽根を膨らませながら、寒さうな一つの塊になつてゐた。

「ちやうどあんな工合に、わたしも、四五人の子供たちと、大きな樹の根つこにかたまつて、寒さに震へながら、日向ぼつこをしたことがあるのです。あの時わたしはいくつだつたでせう、五つ？　六つ？　そのくらゐでしたわ。」

　蒼黝い隈を持つた彼女の疲れた眼ざしが遠い幼年時代を手繰りよせた。

「わたしたちは寒かつた。それに、おなかがひどく空いてゐました。けれど、どの子供もそれを口に出して言ひはしませんでした。却つて、何も喰べたくないやうな氣持でした。泣きたかつた。けれど、どうしても泣けませんでした。

それは汚れた空家の庭でした。空家のなかには勿論疊も敷いてありませんでした。そのぢかの板の間に藁蓆や破れ蒲團を敷いて、落盤で腰を碎いた坑夫や、中風の老人や、男や女の病人たちがごろごろ重なつて臥てゐました。喰べるものは何もありませんでした。礦山を叩き出された坑夫の家族たちでした。そのなかにはわたしのお母さんも臥てゐたのです。」

涙が彼女のこけた頰を走り出すのを私は見た。

「わたしのお母さんは臨月だつたのです。お母さんはその汚れた藁蓆の上へ赤ん坊を產み落しました。みんなが見てゐる眞中でですよ。赤ん坊は暫く啼くとそのまま呼吸をするのを止めてしまひました。」

「お父さんはどうしたんです？」と私は訊ねた。

「お父さんはずつと警察へ引つ張られてゐました。澤山の坑夫が引つ張られて行つたのです。わたしのお父さんも坑夫でした。何でも礦山に大騷ぎが起つたのです。兵隊が澤山繰り出して來ました。引つ張られたのはみんな組合へはひつた坑夫達でした。そして組合へはひつた坑夫たちの家族は情容赦もなくみんな礦山を叩き出されたのです。住む家も行くところもありませんでせう。みんなは汚れた空家を見つけて野宿をする代りにとにかく病人たちをそこへ臥かしたのに違ひありませんでした。」

そこまで話すと、泣き聲と咳とが一つになつた苦痛の呻きで、彼女はそこへ俯伏した。

彼女の過去について、私の知ることの出來たのは、あとにもさきにも、それだけだつた。そして、それが彼女の持つてゐる最初の記憶らしい容子だつた。

間もなく、私は、熊木久一夫婦や知り合ひになつた同志たちやその都會にサヨナラをし、東京へ戾つた。

私が用事で二度目にその都會を訪ねたのは、去年の秋だ。その時も、私は熊木久一の家で厄介になつた。

彼の女房は、死んで、ゐなかつた。

三・一五は、その都會からも、幾人かの秀れた同志を奪ひ去つてゐた。熊木久一は三年以前よりも遙かに重要な戰列へ押し進められてゐた。

彼の狹い家には、若い元氣のある勞働者が四五人も寢起きしてゐた。合宿のやうだつた。私も彼等と一緖に寢起きした。

幾日かがすぎた。そのうちに、私は、熊木久一が、毎朝、早くみんながまだ眠つてゐる間に、どこかへ出かけて行くのに氣づいた。彼は一時間ほどで戾つて來た。或る日、私は訊ねた。

「おいおい、君は毎朝どこへ出かけて行くのだい？」

「はつはつは！　解つたか。明日一つ一緖においでなさいよ。」

次の朝、私は大男の背後からついて行つた。

海岸の砂丘づたひに、澄み切つた秋の空氣のなかを、彼はどんどん歩いた。松林を拔けた。海に突き出た廣い共同墓地まで來ると、足を止めて、私を振り返つた。

「これがわしの女房の墓だよ。」彼はかなり雨露に打たれたらしい一本の木の墓標を私に示した。「可哀さうな奴だつたよ。あいつは一生を虐げられ通して來ながら、自分を虐げた敵をはつきり知らなかつたんだからなあ。わしは敎へてやりましたよ。だけど、その時にはあいつはもう死ぬんだつた。」

彼はまた別の墓標を示した。それは、永い獄中の生活から、やはり胸をやられて死んだ、評議會の若い同志の墓だつた。

「さあ、暫く見物してゐて下さいよ。」

熊木久一は雙肌脱ぎになつた。たくましい筋肉の隆起が現はれた。彼は、死んだ女房と同志との墓に對つて、體操をはじめた。兩腕を上へ擧げたり、前へ擧げたり、横へ擧げたり、一心不亂にやり出した。ウッシ！ ウッシ！ と力一杯のかけ聲をかけながら。

太陽は輝き出してゐた。新しい磯の香がした。外國通ひらしい汽船が青い沖を走つてゐた。

彼の動作につれ、たくましい筋肉の隆起が美しく變化した。私はそれに見恍れた。體操は十分ほどつづいた。彼の顏はだんだん赤くなつて來た。そして、動作のテムポがだんだん速くなつた。おしまひには、とても速くなつた。汗が飛んだ。そして、體操は終つた。

「お待遠。」

熊木久一は背中の汗を拭きながら、眞赤な顏のなかから、言つた。

「君は毎朝ここへ體操をしに來るのかい？」と私は訊ねた。

「さう。」と彼は答へた。「そして、體操をしながら、わしは心のなかでかう怒鳴つてるんですよ。――死んだ女房よ。死んだ仲間よ。見てくれ。わしは相變らずこんな立派な身體をしてゐるぞ。わしは生きてる限り最後まで敵とたたかふぞ。見てゐてくれ。きつと貴樣たちの敵を討つてやるぞ。」

熊木久一は、多くの同志とともに、今度の四・一六でやられた。二十何人が彼一人を逮捕するために派遣された。そして、着物を着せて置くと途中で逃亡する懼れがあると云ふので、彼の家から警察まで、熊木久一は丸裸で護送された。そんな噂が私の耳に傳はつて來た。

同志よ、獄中で解黨派的傾向や敵のさまざまな術策と勇敢にたたかつてゐるすべての同志たちよ、健在なれ！

熊木久一は、彼のことだから、獨房のなかでも、毎朝、きつと、元氣よく體操をしてゐるに相違ない。ウッシ！ ウッシ！ と力一杯の聲をかけながら。

――一九二九年十月――

琉球の武器

カラテはその威力の故に大變有名になつて來ました。京都大學の醫學部では、何んでも、最近、カラテの威力を學理的に闡明するために、わざわざその道の達人を琉球から招いて研究を續けてゐると言ふ話です。

人も知るごとく、カラテは琉球の生んだ特有の拳法です。得物を持たないで、素手で、わが身を防禦し敵を仆す術です。

琉球出身の勞働者運動の闘士は近年非常に多く現はれて來ましたが、彼等のなかにはカラテの達人がなかなか少なくありません。心强いことです。片岡鐵兵さんの「强い男はゐる」と言ふ小說のなかにも鶴見方面のカラテのよく出來る勞働者が出て來てゐたと記憶しますが、關東自由にも一人物凄いのがゐます。集會などではオマハリの方でもちやんとそれを知つてゐて、彼を檢束するためにいつも十數人が用意されて來るのです。小柄で一見强さうにも見えない彼は、或る時、自由勞働者仲間の荒くたい大喧嘩に、助太刀かシカヘシを引き受けて、ひとりでノコノコと二三十人の殺氣立つたなかへはひつて行つて、瞬く間にみんなノバしてしまひ、それ以來すつかり男を上げ、今では喧嘩の仲裁になくてはならぬ男になつてゐます。

カラテでポピュラアなのは、先づ、眼つぶし、睾丸蹴り、アバラ折り、などでせう。眼つぶしと言ふのは、手の指先を火箸のやうに眞直ぐに剛直させ、それで敵の眼を突きつぶすのです。睾丸蹴りと言ふのは、足の小指に沿つて踝へ走る甲のところで、跳ね上る途端に敵の睾丸を蹴り殺すのです。そして、アバラ折りと言ふのは、拳固の背のところで敵のアバラをゴンと行くのです。卽座にアバラを折つて敵を仆してしまふのもあります。が、達人になると、こいつは何日くらゐ生かして置いてから殺してやらうと、そのつもりでゴンとやつて置くと、十日なり一月なり彼の豫定した時間が經つてから、敵はまるで他の原因でのやうに自然に參つてしまふのです。

また、さう言ふ達人になると、ひらりと地を蹴つて跳び上るや、瞬間的にではあるが天井へピタリと吸ひついてしまふことも出來るのです。また、天井へ堅く引き緊つた豚肉の大きな塊を高くぶらさげて置きます。すると、跳び上るたびに指の力で必ず一握の肉をもぎ取つて來ることも出來るのです。

尤も、こんな達人になるためには、子供の時から一心に修業をしなければなりません。楔形の木片の一二尺のを土のなかに突き射して置いて、始終それを横から毆つては拳固を鍛へるのです。

話には聞いて知つてゐたものの、はじめてカラテを實際に見た時には驚いてしまひました。琉球出身の一人の勞働者と、或る友人の家で落ち合つたのです。さきに書いた關東自由のとはまた別の人間です。カラテの話が出たのです。彼は、新しく口に銜へたバットに火を點けるやうな顏をして、僕の前にあつた燐寸を差してある大型の瀨戸物の灰皿を「一ちよつとそれを。」と言つて手を差し出しました。僕は灰皿を彼の方へ押しやりました。彼はそれを彼の指先を擴げて自分の膝の前へ引きよせました。引きよせられた時、灰皿は粉微塵に碎けてゐました。

「こいつはどうだ？」
友人は、僕たちの横にあつた大きなチャブ臺を示しました。食事をするやつです。
「これくらゐ――だけど、構ひませんかね？」
「構ひませんよ。やつて御覽なさいな。」
彼は友人の細君の方を見て言ひました。
半分はまさか大丈夫だらうと言ふ氣もあつたらしく、友人の細君は笑つて答へました。チャブ臺は二つに割れたのです。
「僕なんかこれでお話にならないのですよ。これくらゐのカラテなら誰でもやりますよ。」
と彼は言ひました。
「では、記念に。」
その勞働者は、歸りぎはに、さう言ふと、玄關の壁に大きな穴をあけて行きました。
この噓のやうな威力を持つカラテの起原については、面白い話を聞きました。琉球は昔から支那と九州の島津家と兩方から迫害され强奪され續けて來ました。これらの抑壓者から抑壓されながらも自分を護るためにいろんな武器が發明され造られました。が、造られる尻からそれは掠奪者によつて沒收され禁止されて行つたのです。あらゆる武器が奪はれるのです。掠奪者は琉球をどこまでも武器のない島にしようとする。武器を持たないでどうして自分を護るか？かうして、必要がたうとう琉球に武器でない武器――カラテを發明させたと言ふのです。
この話は僕を非常に感動させました。プロレタリア黨が鋼鐵化して行く過程をあまりにもまざまざと聯想させるではありませんか。
カラテを育てる琉球の風習について、もう一つ美しい話を僕は聞いてゐます。――琉球の家庭では、よく、父親が、食事のたびごとに男の子のあるひは女の子の頭を、輕く箸で打ち込むと言ふのです。子が三つ四つの時分から。小さな子は容易に頭を叩かれます。父親はそれを毎日續ける。だんだん打ち込めなくなる。子が十六七になる頃には、どんなに隙を見て不意打をかけても、どうしても打ち込めないやうになると言ふのです。

――一九二九年十二月――

子供

私娼窟と工場地帶とを一本の川が區切つてゐた。川には橋が架つてゐた。私娼窟から出て來た男達は、橋の上まで來ると、きまつて、川のなかへ唾を吐き捨てて行つた。川は澱みながらいつも裸の腹を露出してゐた。それは腐つた墨のやうな泥だつた。瓦斯がブクブクと泡を吹き上げてゐた。複雜な臭氣が鼻を刺した。工場から流す硫酸やその他の藥品の臭氣もそれに混つてゐた。

夜になると、橋の側の工場の煉瓦塀に、女の子供に手を引かれた盲目の男が現はれ、古風な尺八の音を賣つた。川に添つて工場の煉瓦塀は長くつづいた。それの切れるところから、狹い空地を置いて、勞働者の住む街がはじまつてゐた。狹い空地は放尿と濕氣とで暗くむれてゐた。牛の腸や臟物を燒いて賣る男やおでん屋やバナナを盛り上げた屋臺店がそこに竝んだ。アセチレン瓦斯が流れた。人だかりがあつて臺灣パナマを被つた男が怪しい繪畫を賣つてゐた。

街は思ひ切り寄せ集めて置いて壓し潰したやうなバラックで出來てゐた。すべての道路がよれよれと意地惡くからみ合つてゐた。それらの道路は、赤土を含み、少し雨が降ると、沼のやうに泥濘んで、執拗く高下駄の齒を咬んだ。晴れた日、白い洗濯物は鼠色に乾き上つた。夜、露路の奧から、ミシンの音と犯罪と煮しめの臭氣とが漂つて來た。褞袍を漁夫のやうに羽織つて藥壜を下げた女工が、はげしく咳きながら、ドブ板を鳴らして、露路のなかに消えた。

恐らく偶然が、或る時、山の手の閑靜な高臺に住む一人の詩人を、この街へ連れて來た。すると、その詩人は、驚いたやうに、繰り返して、叫んだ。

「人が住む！　人が住む！」

われ〳〵はこの詩人の大仰な驚きを嗤ひ去ることは出來る。けれど、この叫びが觸發せずにはゐない、そして詩人自身は恐らく氣にも留めなかつたであらう一つの事實を見遁すことは出來ない。それはからだ。――ここには、人が住みすぎる！　あまりに多くの人が！

それらの人は、早朝と夕暮、工場の汽笛の前後、よれよれした道路に滿ち溢れた。ここには、また、あまりに多くの子供がゐた。道路の上で、「立ち退きごつこ」や「金を返せ」や「檢束ごつこ」を遊ぶ汚れ切つた子供達が。そして、あらゆる窓から水道端から背中から錢湯からガンガン啼き立てる赤ん坊が。

數へ年で五つになる、われわれの主人公も、それらの汚れ切つた子供達のなかの一人だ。

1

駄菓子を製造する家の店の間では煎餅があとからあとから燒けて行つた。子供は店さきに立つて永いことそれを見てゐた。が、誰も子供に注意を向けるものはなかつた。みんな手を働かせつづけた。子供に煎餅をくれようとするものは誰もなかつた。

子供は、不意に、空腹を感じた。子供は、店さきを離れ、家の方へ走り出した。

横町へ折れ曲る途端、

「小僧、危え！」

聲が怒鳴つた。子供は誰かの足に打つつかつてゐた。見上げると、大きな石を擔いだ人夫が

怖い顔をして立つてゐた。「復興局」がこの街の眞中へベラ棒に太い道路を打ち拔くのだ。「臨時雇」の人夫が澤山に入りこんでゐた。

「危えぢやねえか、すんでのところで踏み潰しちやふところだ。」

　露路をはひつて、家まで來ると、なかからミシンの音と赤ん坊の啼き聲とが聞えた。母親はまだ晝飯の支度にかかつてゐないのだ。子供に憂鬱が來た。六疊と二疊、家はこの二間だつた。が、六疊の方を夫婦ものの露店商人に借し、四人の家族はとつつきの二疊で暮らしてゐた。子供は駄目だとは知りながら、明けつ放しの閾から、夜のやうな二疊を覗きこんだ。

「おつ母あ、飯は？」

「うるさいねえ。この餓鬼は！　おつ母あが呼ぶまでどつかへ失せてゐろ！」

　母親は舊式の手で廻すミシンの上に屈みこんだまま、手を休めないで、叫んだ。母親の手のあひだでは女工用の晒のエプロンが一枚一枚と躍つて行つた。母親の背中では、三月ばかり前に生れた赤ん坊が、啼き立ててゐるのだ。そのために、母親はミシンの手を運びながら、絕えず、背中を搖り上げねばならなかつた。母親の全身はそんな動作を繰り返してゐた。

　子供は、再び家から離れると、露路の入口に立ち、往來を眺めはじめた。晝飯を喰ひに歸る小學校の生徒達が、みんな速足で、子供の前をすぎて行つた。その輕い足取りは子供に何だか雲の上の出來事を見てゐるやうな氣を起させた。子供は暗い泣き出す手前のものを感じた。

　跫音をひそめる心で、子供はまた家の前まで戾つて來た。ミシンの音も赤ん坊の泣き聲も止んでゐた。母親は赤ん坊を疊の上に寢かしつけようとしてゐるのだ。子供は晴れ出した。

　その時、一人の男が、露路のなかへ驅けこんで來た、子供に向つて、

「おつ母あは家か？」

と叫びながら。そして、子供が點頭く前に、家のなかへ首を突つこんでゐた。

　その男と母親とは、短いが非常に速力のある會話を交換した。次の瞬間、母親は何か銳く喚きながら、露路を飛び出してゐた。母親は閾の側にゐた子供を見向きもしなかつた。男が母親を追ふやうにつづいた。

　これは非常にわるいことが起つたに相違ない。と子供は感じた。今驅けこんで來た男、サーベルのない巡査のやうな服裝をしたその男が、父親の勤めてゐる鐵工所の門番だと言ふことを、子供は見知つてゐた。

2

　母親はなかなか戾つて來なかつた。空腹と所在なさとが子供を弱らせた。子供は家のなかにはひつた。赤ん坊はしづかな寢息を立ててゐた。それは赤く瘠せた醜い赤ん坊だつた。子供は赤ん坊の頰を摘み上げた。赤ん坊は眠つたまま乳を吸ふ時のやうに口を動かした。子供が赤ん坊の低い鼻に指を入れようとすると赤ん坊は眼を覺まして笑ひ出した。すると子供は赤ん坊に倦いた。

　子供はミシンに近づいてそれに觸れた。

　子供はミシンに倦いた　だが、母親はまだ歸つて來なかつた。

　銳い空腹が子供を締めつけた。それは空つぽの胃袋に滲みこんだまま忘れられてゐた煎餅の燒ける匂ひが食道をつたつてはひ上つて來る空腹だつた。子供は寢轉んだ。疊の破れを挘り取るために、

　だが、母親はまだ歸つて來なかつた。

　突然、子供は自分のすぐ側で啼き立ててゐる赤ん坊に氣づいた。赤ん坊は先刻から啼き立ててゐたのだが、子供はすつかり赤ん坊のことを

忘れ切つてゐたので、啼き聲は子供の耳にはひらなかつたのだ。

子供は今度は赤ん坊の啼き聲に注意を集めた。その注意の尖端で鋭い空腹がますます子供を締めつけた。

すると、或る一つの感情が子供を一杯にして來た。それは怒りの感情だつた。その感情は最初赤ん坊の啼き聲に對する憎しみにはじまつた。が、いつか赤ん坊に對する直接の憎しみにまで高まつて行つた。狂暴な強さで。

子供にはすべてが赤ん坊のせゐだと思はれて來た。それはさう思へば思ふほどさう思はれて來た。子供はぢつとしてゐられないやうな身震ひを感じて來た。空腹が子供から散つた。

母親は赤ん坊を憎んでゐると子供は考へ出した。それは赤ん坊が母親を苦しめるからだと子供は考へた。赤ん坊が何もかもわるくするからだと子供は考へた。

「どうするつもりなんだ！　こんな厄介ものをまた生ませやがつて！―」

子供は母親が父親と喧嘩をするたびに父親を罵る言葉を思ひ出してゐた。子供はまた母親が乳をふくませながら赤ん坊にいつか言ひ聞かせてゐた言葉を思ひ出した。

「生れて來なくてもよいものを！　親泣かせ！　お前のおかげでおつ母あは働けなくなつてしまつたぢやないか！　親泣かせ！　親泣かせ！」

母親が晝飯の支度と子供を捨てて飛び出して行つてしまつたのも、さうだ、何もかも、赤ん坊のせゐなのだ。

そこで、數へ年で五つになる、われわれの主人公は、毛を逆立てた猫の熱情で、啼き立てる赤ん坊に跳びかかつた。全身で赤ん坊の口を押へた。赤ん坊が溫和しくなるやうに。

3

工場監督によれば、三千人の職工のゐる鐵工所で一日平均十人の怪我人が出來るのは當然のことだつた。從つて、製罐部の職工である子供の父親が、グレンの下敷となり、手と足と胴とがバラバラになつたとしても、それは決して大した事件ではないのだつた。また、事實、最近二月のあひだに、この鐵工所では、死者が四人、重傷者が三人もあつたのだし…

母親は、血走つた眼を極度に見開き、失神の確かな足取りで、露路を歸つて來た。バラバラになつた手と足と胴と露出しの內臟とを載せた戸板がやがて運ばれて來るだらう。

だが、夜のやうな二疊へ、片足入れようとして、母親は、引き裂く叫びを擧げねばならなかつた。溫和しくなつた赤ん坊を兩手で掴み上げると同時に、彼女の足は子供を力限り壁へ蹴りつけねばならなかつた。蹴りつけられた子供は落體のやうな速度で音と一緒に壁からミシンへ跳ね返つて來た。そこで、母親は、今度は、ミシンと子供とを壁へ蹴りつけねばならなかつた。人間の作つたあらゆる神よりももつと聖らかなはげしさで。

――一九二八年十月――

年譜

一九〇四年（明治三十七年）七月十二日、大阪市東區で、漢學者の家に生れた。

幼年時代、岸和田市にゐたことがある。が、小學校へ入學する前後からずつと大阪市で暮らした。十歳頃から文學に親しみ、頻に兩親を悲しませた。

一九一七年春、大阪府立今宮中學校に入學。同級に、小野勇、武田麟太郎がゐた。芥川龍之介に傾倒した。詩を書いた。

一九二一年春、四年修了、岡山の第六高等學校文科を受けて不合格。

一九二二年春、大阪高等學校文科甲類に入學。二年から三年に上る時に病氣缺席のため落第。但し、病氣にならなくても落第してゐたであらうと友人たちは言ふ。この頃、同級の小野勇、神崎清と三人で同人雜誌「龍舫」を發刊、『化粧』その他數篇の小說を書いた。

一九二五年三月、小野勇他九人の友人と同人雜誌「辻馬車」を大阪 波驛近くの波屋書房から波屋書房主人故宇崎祥二の編輯で發刊。この年より翌二六年末までの間に、『首』その他二十篇の小說を「辻馬車」「文藝時代」「新潮」「文藝春秋」その他に發表した。すべて藝術至上主義の小說だ。その代表的な十七篇は改造社版『辻馬車時代』に收錄されてゐる。

一九二六年四月、上京、帝大英文科に入學した。

一九二七年早春、健康を害し、伊豆湯ヶ島へ去る。健康恢復、東京に戻り、秋から武田麟太郎の本郷の下宿に移る。思想的行き詰りの虚無的な時代。小說もずつと書けず。社會科學の研究をはじめる。心氣釋然たるものあり。帝大新人會に入會する。小說を止めようと思ふ。

一九二八年一月、再び健康を害し、伊豆に去る。體質の到底政治的生活に耐へ得ざるを思ひ知らされ、一時は暗澹となる。

一九二九年、再び小說の筆を執りはじめる。本集に收めたのはこの年の作品の重なものだ。秋また健康を害す。

一九三〇年春、帝大國文科を卒業。この年『生活の旗』『傷だらけの歌』『辻馬車時代』等の著書あり。日本プロレタリア作家同盟員。

暴力團記

日清戰後

村山知義

暴力團記（四幕九場）

（左翼劇場第十二回公演・心座第十一回公演臺本・一名「全線」）

場割

第一幕
第一場　鄭州附近の某河畔
第二場　同じく附近の某廟內
第三場　鄭州總司令靳雲鶚邸の一室
第二幕
第一場　鄭州總工會本部
第二場　同
第三幕
第一場　鄭州驛附近葉青山の家
第二場　同
第四幕
第一場　鄭州の某富豪邸の一室
第二場　鄭州停車場構內

第一幕

所　中國。鄭州及び鄭州附近

時　一九二三年一月

人物
周平市　暴力團綠黨の首領
保三　その乾分
德寶　同
馮竹生　吳佩孚配下の宣傳部員
居酒屋の爺
靳雲鶚　鄭州總司令
黃殿辰　警察局長
衞兵　三人
その他、暴力團綠黨の黨員及び新入黨者多數

第一場

背景は河。舞臺は街道。上手寄りに居酒屋。看板代りの古ぼけた幌子が樹にしばりつけられてダラリと垂れてゐる。居酒屋の中は土間に卓や椅子がしつらへられ、奧とのしきりの臺の上にかにのゆでたのや、豚肉の揚げたのなどがそれぞれ大きな皿に山盛りになつてゐる。一月初めの夕景。

いゝりゆうとしたみなりに太いベッカフ緣の色眼鏡を掛けた保三が一人で眞中の卓にがんばつてゐる。雜多なみなりをした雜多な年配の男達が五六人彼のうしろに控へておづおづしてゐる。

保三。（彼等に向つて）何でえ、もうちつと元氣を出せや。そんなしよげたれたざまで親分の前へ出られちやあ第一俺がきまりが恥しいや。と云つてしよつぱなからえらく自家人づらアしてのそばられるなア一層こたへられねえがね。まあどうだ。みんなちつと玉子を受けるか。（皆きよとんとしてゐる）玉子を受

けるたア酒を飲むつてことよ。ぼんやりしてねえでちつたア氣いつけて仲間うちの言葉使ひもおぼえるもんだ。それ脚が四本あるから馬の事ア四脚子と云はアな。花が開いたやうだから傘のこたア開花子よ。みんな理窟詰めだ。案ずるこたアねえや、おい爺や、酒を賴むぜ。まあちつとづつつけて來ねえ。

爺。（奥とのしきりの所へ首を出して）へい、かしこまりやした。おさかなは何に致しませう。

保三。まあいいつてことよ。心配しねえで酒を持つて來な。あとでかにでも貰ふことにすらアな。（爺引つ込む。ちよつと改まつて皆に向つて）さて手前達、明日ア愈々大親分の前へつん出て、正式に入黨させて頂くんだ。今これからその手續を話して聞かせるから耳の穴ア掃除してよく承はれ。手前達も相當の働きをしてえたもんだ。大事な處で妙にうろたへたりしちやゐられめえ。いいか、まづ廟の中へ這入るてえと正面に大きなテーブルがあらア。その向うにおいでなさるのが親分だ。まづ手前達ア順々にテーブルの左手に飾つてあるお祖師樣のお位牌に三跪九拜するんだ。いいか。

皆。へえ。

保三。そこで親分が黨の規約をお讀みんなる。それから手前達の心得べき條々をお話し下さらア。そこで愈々萬年千載長壽香といふものをいただく事になるんだ。ものはただのお線香だが、曰くが大したもんだ。テーブルの上にしよつぱなから押つ立ててあらア。そいつを親分がかう左手に握り、右手にだんびらを把つて「汝等、もし山主の命に從はず、黨規を嚴守する能はざれば卽ちかくの如し」と云つて一刀兩斷なさるんだ。これが卽ち萬年千載長壽香で手前達はそれを一本づつ頂戴して一生大事に持つてるんだ。これを持つてる間は手前達の命は手前達のものでまた手前達のもので無え。いつ何時此のお線香のやうに一刀兩斷にされても文句はござえませんといふしるしだ。いいか。

皆。へえ。

爺。（錫の器に入れた酒を持つて出る）へい、どうもお待ち遠さま。

保三。（皆に）さあ玉子を受けるとするか。あとはまたあとで教へてやらア。自家人てえのは身内の者つてこつたが、その自家人同志の辭儀の仕方がまたちよつとややこしいんだ。まあまあ一つ受けねえ。（ついでやる。一同酒を飲む）

その時下手から同じくりゆうとした服裝にチョビ髭を生やした德賓が三人の男をつれて出て來て居酒屋に這入る。保三と眼を合はせ、お互ひに相手をさぐるやうな樣子である。德賓が別のテーブルに座を占める間に保三は猪口の外側に箸を並べて置く。德賓はそれに氣がつくとツカツカと保三に進み寄る。

德賓。お見それ申して甚だ相濟みません。老大には手前内方とお見受け申しますがいかがでございませう。

保三。（立ち上つて）御丁寧のお言葉痛み入ります。おめがね通り、及ばずながら祖師の靈光に浴してゐるものでございます。

德賓。突然の詮議立て失禮の段お免し下さい。老大はいづれの御身内でございますか？

保三。ふつつかながら申し上げます。手前親分事、姓は周と申し、名は上が平で下が市と申します。

德賓。お問ひ立てして相濟みませんが碼頭はどちらを御支配なさいますか？

保三。どう致しまして、憚りながら次の碼頭で

ございます。

德寶。再三のお問ひ立て。失禮の段お免し下さい。老大には一爐の香を燒かれましたか？

保三。お言葉に甘えてお答へします。手前兄弟は萬年千載長壽の香を燒いたものでございます。

德寶。(丁寧にお辭儀をしながら)失禮致しました。手前は同じ身内の德寶と申すけちな野郎でございます。

保三。(彼をたすけて腰かけさせながら)お控へなさい、お控へなさい。手前は保三と申すふつつかものです。(自分と腰掛ける)さあお近づきにどうぞ一杯。(酒をつぐ)

德寶。(受けて)これは痛み入ります。(自分のつれて來た者達に向つて)やいみんな、保三兄貴に御挨拶をしろ。

皆。よろしくお願え申しやす。

保三。(それに答へながら、自分のつれて來た者達に向つて)やい、德寶兄貴に御挨拶申しあげろ。

皆。よろしくお頼ん申しやす。

德寶。所で保三さんとやら。つひぞお目にかかつたことがなかつたが、お前さんいつ頃から身内になんなすつた？

保三。まだやつと半年でござんすが、周親分の特別なお引き立てで、まあ今度のやうな役を振られる所迄漕ぎつけやした。足らねえ男でござんすから、どうか長いと思し召さば切つて下され。短いと思し召さば接いで下され。萬事よろしくお頼ん申しやす。

德寶。いや、さう云はれちやア痛み入る。今頃ア外國の侵略振りが愈々眼にあまり、俺達仲間ア益々人手のいる時だ。まあ一つお互ひにしつかりやりやせう。所でお前さん。大分頼もしさうな若え者を集めやしたな。

保三。いや、さう云はれると面目ねえがつん出して恥になるやうななア集めなかつたつもりでござんす。兄貴もこれだけの若え者を集めるなア、ナマな仕事ぢやアなかつたでござんせう。

德寶。いや、これもみんな國の爲めでさあ。まあ一杯。(兩人呑む)

保三。所で兄貴。かうやつて新しい若え者を驅り集めろと云ひつけられたなア、わつちだけかと思つてゐたら、かうやつて兄貴も集めておいでの所を見ると只事ぢやアありませんな。

德寶。わつちも今ふつとそこへ思ひついた所でさあ。元來新規の若え者を入れるつてこたアちよつくらちよつとのこつちやアねえ。元ア二年目三年目にそれも一度にせいぜい十人やそこらしか入れなかつたもんだ。近頃ア大分ゆるんで來たが、それでもわざわざこつちから人手を使つて集めて廻るなんて事アこれやアただごつちやアありませんや。

保三。この大身代になつて入黨金目當でもあるめえとすれや、これやア何か大きなでいりでもおつぱじまるのだと睨むよりほかアなささうでござんすな。

若い者の一。ええお話し中で失禮でござんすがすると何か戰爭でもおつぱじまるんでござんせうか？

若い者の二。(獨語)こいつア物騷な事になつたぞ。

保三。(若い者二を顧みて)馬鹿野郎。物騷たア手前達のこッた。摸掏、强盜、暗殺請負人から乞食に至る手前達の口から他に物騷があるかと聞かれた日にやア物騷の方で開いた口がふさがらねえや。(德寶に)所で兄貴。一つポツポツ出掛けることにしませうか。

德寶。合點だ。(若い者に)さあ皆、おみこしを上げるんだ。

保三。（奥に向つて）おい、爺さん。いくらだね。

爺。（出てくる）有難うごぜえます。ええ、みんなで二元頂戴致します。

保三。（銀貨を二枚出して）はいよ。（別に紙幣をやる）

爺。どうも毎度有難うごぜえます。

皆ドヤドヤと立ち上る。

爺は銀貨を噛んでみたり、音を聞いてみたりしてゐる。

（幕）

第二場

一月中旬。

入黨式の行はれる潘安廟内。正面に大テーブル。そのテーブルの上には、右にだんびら一口、左にピストル一挺、中央に香爐一箇、燭臺一對、線香一束が置いてある。左右の柱に「五湖四海三江水」「萬年千載長壽香」と書いてある。正面下手の壁に祖師の像が飾つてある。大テーブルの向うに控へてゐる鬚男が周平甫である。下手には主だつた黨員達（徳寶や保三もその中にゐる）が居並び、上手には新入黨者がしやちこばつて控へてゐる。入黨式は既に終りに近づき、萬年千載長壽香の分配が濟む所である。最後の二三人が一人一人進み出て、周平甫から兩斷された線香を一本づつ恭々しく受け取つて元の位置に復する。

周平甫。さて皆。これで手前達は愈々自家人になつたわけだ。これから後アさつき讀んで聞かせた十ケ條を固く守り、また身内同志は互ひに助け合はなくちやアならねえ。仕事があつた時にやア決してこそこそやつちやアいけねえ。一々俺の耳に入れて、俺の云ひ付け通りに動くんだ。わかつたか。

一同。へえ。（とお辭儀をする）

周平甫。（保三に向つて）ぢやア保三、一つ御苦勞だが皆に入黨證を渡してやつてくれ。

保三。心得やした。

保三は新入黨者の所へ歩み寄つて、長さ四寸程の長方形の黄色い布で作つた入黨證を一人一人にくばつてやる。

周平甫。さて皆。今手前達に配つたのが入黨證だ。萬年千載長壽香と一緒に肌身離さず持つてゐなくちやアいけねえ。どんな事があつても黨外の人間に見せちやアならねえ。もし萬一見られるやうなことがあつたら、立ちどころに見た男をばらしちまふんだぞ。いいか。

一同。へえ。

周平甫。ぢやア濟んだ。みんな引き取つてくれ。

新入黨者達は初めに周平甫に向ひ、右手を左肩に觸れ、身體を左から右に轉じて禮をし、次に上手の黨員達に向つて右手を左手の臂に觸れて同じく禮をしてから退場する。次に上手の黨員達も同じやうに周平甫に向つて禮をして退場する。

片隅に殘つてゐた徳寶がその時周平甫に近寄る。

徳寶。親分。

周平甫。徳寶か。何だ。

徳寶。ちよつとうかがひてえんだが、あの保三て野郎は一體何でございますかい。

周平甫。保三がどうかしたのか。

徳寶。あつしやア此間若い者を集めての歸り路に初めて遇つたんだが、聞きやアたつた半年前に身内になつたんださうぢやござんせんか。

周平市。うむ。それがどうした。

徳賓。それが見てゐれやア野呆圖な野郎だ。口先きだけアあつし等を兄貴兄貴と殊勝に奉りながら腹の中ぢやア見下してるのが、事々に眼につくぢやアありませんか。それを親分は見て見ねえ振をしてゐるばかりか、保三保三と眼にかけるに至つちやアどうしてもあつし等にやアうなづけません。そればつかりか會計方までお任せなさるんで、親方は御存じねえかも知らねえが野郎飛んだ荒い金使ひをしてますぜ。

周平市。（色をなして）手前、俺の仕打が不服だと云ふのか。

徳賓。これがあつし一人の僻目や不服なら思ひ直すなり胸に疊むなりしませうが、仲間みんなの氣持だからお耳に入れずにやアゐられません。

周平市。（折れて）さうか。みんなもさう思つてゐるのか。

徳賓。中にやアばらしちまへと云ふ奴さへゐないわけぢやアありません。

周平市。（腕をこまぬいて）さうか。いや、どうせそのうち話さなくちやアならねえことになると思つてゐた。今度の仕事の濟む迄はかくせるものならかくして置きてえといふ腹だつたが――

徳賓。へえ、今度の仕事。ふむ。すると矢つ張り何かでいりがあるんでござんすか？　どうも急に若え者を集める樣子が只事ッちやアねえと睨んでゐやしたが…

周平市。うむ。それについちやアどうせ二三日うちに皆の耳に入れるつもりだつたんだが――よし、すぐに皆を集めてくれ。俺の腹を聞いて貰ふことにしよう。だがその前に保三のことは手前だけにちよつと話して置くから、あとで手前から皆に納得させてくれ。まあ掛けろ。

徳賓。へえ。（掛ける）

周平市。實アあの保三の野郎は濟南の郊外にある大きな綿工場の二男なんだ。

徳賓。結構な身分で――

周平市。所があいつア故あつて大の國粹主義者なんだ。てえのはあいつの親父てえのが商用で、さうだ、今から丁度五年前だ、朝鮮に行つた時に、そら例の萬歳事件よ、あの朝鮮の獨立運動よ、あの騷ぎに捲き込まれて××の軍隊に×されたんだ。そればつかりか相當繁盛してゐた工場は抑されてからに段々工合がうまくねえんだ。それやこれやであの野郎外國と聞きやア身體のふるへ出す程嫌えなんだ。去年の夏よ、女の事かなんかで家の方と氣まづくなつて色街でフヤケてるあの野郎と俺アひよつくり知り合つた。段々工合がよくねえたア云ふものの、それでもあの地方ぢやア指折りの丸持ちの息子だ。俺がほつとく筈がなからうぢやねえか。都合のいいことに俺達ア國粹主義の排外主義よ。仇をうつにやこれが一番とか何とか、うまく說き落して滅法界な入黨金をふんだくつたのよ。

徳賓。へえ。どの位ふんだくりやした？

周平市。默つてろ、どの位だつて手前の知つた事ッちやアねえや。と云つて何もかくさなくちやアならねえッてわけもねえ。ぶちまけていやア八百元よ。

徳賓。こいつア凄え！

周平市。が何がさてそれだけの物を頂戴するにや國粹主義だけぢやアおつつかねえ。そこで、早速相當な顏に取りたててその上會計方にしてやるつてえことになつたのよ。

徳賓。成程さう云ふわけでござんしたか。だが親分、取つちやつたからにやアさういつ迄も奉つてゐる必要はござんすまい。

周平市。馬鹿を云ふな。たつた八百元取つたからつて野郎の家が潰れたわけぢやあるめえし、まだまだ機を見て絞るつもりよ。野郎の金使ひの荒いのを知つてて黙つてるなアそいつをもつと絞るキッカケにする下心があるからさ。

徳賓。わかりやした。すつかりわかりやした。どうも親分の心も知らず飛んだ下らねえ事をお耳に入れて申しわけありやせん。

周平市。いや、知らねえ者が不思議に思ふなア當り前だ。ぢやアこの話は手前から皆に話して納得させてくれ。保三の事はそれだけとして、所で早速皆に聞いて貰えてえ事があるから、ここへ呼んで來てくれ。古顔だけでいい。若え者共にやアあとで手前達から聞かしてやつて貰ふことにしよう。

徳賓。畏まりやした。（下手へ退場）

やがてゾロゾロと重だつた連中が這入つてくる。

周平市。ちよつと皆に聞いて貰ひてえ事がある。まあ席についてくれ。

一同周平市を取り巻いて着席する。

周平市。（キッとして）さて皆、今更事新しく云ふまでもねえが、俺達黨員の行動は仁義禮智信の五徳に依つて貫かれてゐなきやアならねえ。祖師以來この事アちやんと黨規にもうたつてあつて、そむくものは立ち所に斬殺して毫も假借せずとある。わかつてゐるな。

一同。おつしやるまでもねえこッてす。

周平市。さて今度一度に大勢若え者を集めたので手前達も恐らく不審に思つてるこッたらうが、これにやアこみ入つたわけあひがあるんだ。皆ようく聞いて貰ひてえ。一體手前達は現在の我が中國の有様をどう思つてる。これに就いて一應知つて置かねえと今度の仕事の氣持といふものが飲み込めねえのだ。萬年千載長壽香を頂いたからにやア親分の命令は天の命令と同じ事になるのだから、たとひ今度の仕事がちッとばかり手荒え仕事であらうとも、手前達の文句を一々聞くいはれはねえのだが、段々と世の中の進歩といふものを見て考えたのだが、これからは生命を的の大仕事に限つてよく事のわけを話し手前達の腹も聞いてからやつつけることにしようと思ふのだ。

一同。（口々に）何に拘らずあつし等の生命は親分のもんだ。火へ飛び込めと云ふなら飛び込みやせう。わけもへつたくれもあるもんか。やれ！と一口云つて下されやアそれであつし等は笑つて死んでゆく覺悟です。親分、水臭えこたア云はねえでおくんなせえ。

周平市。いや有難え。手前達の氣持アよくわかつた。有難く頂戴する。だがこれからの俺達の仕事は今迄のやうな小さな事ばかりぢやアねえ。方々へもひつかかりが多く、政治にも關係するこみ入つた仕事が少くねえのだ。氣持ア互ひにわかつてゐても、仕事の理窟を呑み込んでゐねえ事にやア時に臨んで便利が悪い。そこで今度アどうしても一通り聞いて貰はなくちやアならねえのだ。それに就いちやア此間から或る用事で俺の所へ來ていらつしやる馮竹生といふ方が若えけれども學のある方だから、今度の仕事、話にかかる前に、俺達の覺悟しなきやアならねえことを一應話して頂からと思ふんだ。丁度今隣の部屋に來ていらつしやるから早速話して頂くことにしよう。（彼は上手へ這入つてつれてくる。馮竹生はハイカラに頭を分け、金縁の眼鏡を掛けた三十位の男）馮先生だ。御挨拶申し上げろ。

一同。（お辭儀をする）

周平甫。ぢやア馮先生。御苦勞ですが一つお願ひして置いたお話を聞かせてやつて頂きたうございます。

馮竹生。キザな調子で職業的に）承知しました。では皆さん御免蒙つて、中國の現狀と我々の任務と云ふ事についてお話ししたいと思ひます。諸君。我が中國は茫々三千年の歷史と四億の國民と豐饒世界に比なき國土とを持つてをる。しかも何ぞや我が國最近の歷史は全くこれ屈辱の歷史に他ならんではないか。虎狼の如き諸外國は、息をもつがせぬ、流血と、流血の脅威に依つて、さながら一片の肉の如く我が中國を引き裂いたのである。租借地は奪はれ、利權は掠め取られたのである。これでも獨立國だと云へるであらうか？ 否、斷じて否。我國はこれ一隷屬國に過ぎんのである！ 諸君、かの阿片戰爭とは何であるか？ それは阿片の輸入が我が政府に禁止されたのに反對して、狼の如き英國が、阿片密輸入成金の利益のために、我が國民を毒害する權利を主張して戰を挑み、慘忍なる虐殺を行つた事を指すのである。しかも何ぞやその虐殺の結果彼等は我が國から香港を奪ひ去つたのである。爾來飽くなき狼の群が摑み去つたのは何處何處であるか？ 曰く香港、曰くマカオ、曰く旅大、曰く上海、曰く臺灣、曰く威海衞、其のほか治外法權、海關、勢力範圍、鐵道敷設權管理權、及び巨額の賠償金等彼等の盜賊――否、その、虎狼の如き貪慾のゑじきとなつたものは擧げて數ふることが出來ないのである。一英人新聞記者は嘗て余に語つて云つた。「世に奴隷人種なるものあり、支那人もまたそれなり」と。諸君。諸君は諸君が奴隷人種であり、我が國が奴隷國であることを許すことが出來るか？ 諸君、しかも彼等の狂暴さはただ愈々益々その度を加へるのみなのである。國難の秋である！ 諸君！ 實に國難の秋である！

周平甫。（深く感に堪へぬやうに）さうだ！ 實に國難の秋だ。

馮竹生。然らばかかる國難の秋に當つて、我等愛國の士は何をなすべきであらうか？ 云ふ迄もない、中國四億の民が一致團結して外夷に當るのである！

一同は初め神妙にしてゐたが、演說の進むにつれて段々と興奮してくる。そしてここに至つて口々に「さうだ、さうだ！」「一致團結だ！」などと叫ぶ。

馮竹生。よいかな、諸君！ 世界最大の國土と世界最多の國民とを擁し、無限の天產物を藏してゐる我が中國をして宇內に覇を稱せしめ、國民の生活を向上せしめ人生を享樂せしめる所のものは、一に我が中國四億の民が上下心を合はせ一丸となつて虎狼の如き外敵に當ることこれである。然るに諸君、此の重大なる時期に當つて、好んで區々たる內紛を起し、國民的一致を破るものがあるとしたならば、諸君、これは何であるか？ これはこれ賊である。かの外夷と同じく中國の敵である。

一同。さうだ。さうだ。

馮竹生。我等もし外夷を拂はんと欲すればまづ身中の內敵を滅さなければならんのである。諸君は問はれるであらう。然らばその憎むべき內敵とは何者であるかと。諸君よ、私はそれを諸君に告げるでありませう。よく注意して聞いて頂きたい。諸君、北京の正陽門より鄭州を經て南に二千四百十八淸里を走つてかの揚子江岸なる漢口の大智門に達する鐵道は京漢鐵道である。この鐵道が我が國南北交通の幹線であり、國富開發の脈管であ

ることは云ふ迄もないことである。更に、申し上げなければならんのは、鐵道の利權が多く外敵に掠奪されてゐる中にあつて、この京漢鐵道が純然たる中國國民のものだと云ふ事である、諸君、よくここに意をとめて頂きたい。然るに、然るにである、この京漢鐵道全線二萬の從業員は去年の八月、賃金値上等々の待遇改善を要求し、經營の實際上その要求の過大なるを以て拒絶せらるるや衆をたのんでストライキをなしたのである。中國の產業を開發し外夷のあなどりを退けるためには中國民たるもの勞資を問はずすべて心を一にし互ひに讓步協調して事を解決すべきであり、ストライキの如き卑怯なる手段に訴ふべきではないことは論を待たないのである。況んや身近代產業の血脈たる交通運輸の業にたづさはりながら、區々たる私利のために天下國家に害を及ぼす如きは天人共にいれざる大罪惡である。當路の大官は鐵道の停止の人民に及ぼす迷惑を察し、忍んで彼等の不當なる要求をいれたのである。然るに彼等從業員はこの成功に味を占めたりとなし、更に將來一層大きなストライキを決行するために總工會と稱する一大組合を組織し、最近に至つて遂に全線全驛の從業員をその下に統一せんとしてゐるのである。無智蒙昧なる彼等をしてかかる一大組合を作らしめることは京漢鐵道を累卵の危きに置くものであり、延いては我が國產業を危機に陷らしむることである。我等はまさに天下國家のために身をもつて總工會を解散せしむべきであり、これこそ國難に當つて國を憂ふる志士のなすべき仕事である。(周平甫に向つて)ではこの位で？

周平甫。御苦勞でした。どうも有難うござんした。

馮竹生は一禮して傍にさがり、ハンカチで汗を拭き、髮をくしけづりなどする。

周平甫。(進み出る)さて手前達、段々と馮先生のお話を伺つてとつくりと會得のいつた事と思ふ。俺達もうそろそろ天下國家のためといふ事を考へて、大きな仕事をやつてのけ、居眠りしてゐる奴共の眼を醒ましてやらなくちやアならねえのだ。そこでだ、まづ第一にやることは、今のお話にあつた總工會の叩き潰しだ。吳佩孚、曹錕、趙繼賢、蕭耀南なんどといふえれえ方々もこの事のためにヤア一肌も二肌もぬいでいらつしやる。自然警察も味方だから、今迄のコソコソ仕事たア違つて大手を振つてやれるわけだ。

一同。素敵だ！

腕が鳴るぞ！

周平甫。そこでだ、二月の一日に奴等の重立つた連中が鄭州に集まつて創――創――

馮竹生。(小聲で)創立大會。

周平甫。創立大會つてものをやるんだ。そいつが濟むつてえと愈々例の總工會ッてえものが出來上つちまふわけだ。どうしても叩き潰さなくちやアならねえ。何時出掛けてどういふ風に叩き潰すか詳しい手筈はそのうち聞かせるが、まづ以て皆の覺悟を聞かにやアならねえ。どうだ。生命を捨ててもこの仕事やりとげる覺悟か。

一同。云ふにや及ぶ。

親分やつつけやせう！

かうなつちやアこたへられねえ。

總工會でもさうですかいでも堪忍ならねえ。

周平甫。よし、さう皆の腹がきまつたからにやア早速手筈に取りかかることにしよう。出發はあさつてあたりになるだらうから手前達もそれぞれ用意に取りかかるがいい。ぢやアみんな引き取つてくれ。

一同興奮しつつ退場。周平甫は馮竹生と顏を見合はせてうなづき合ふ。（幕）

第三場

鄭州總司令靳雲鶚の私邸客間、立派な部屋。ストーヴを焚いてゐる。衞兵が二人衝立の蔭に立つてゐる。窓の外には雪が降つてゐる。一月二十五日。

衞兵に案内されて周平甫が這入つてくる。

衞兵。（椅子をすすめながら）閣下はすぐお眼にかかります。暫時お待ち下さい。

周平甫。いや、どうぞお構ひなく。

周平甫は席につき、あたりを見廻す。衞兵は去る。

靳雲鶚。（現はれる。脂ぎつた半白の男）やあ。

周平甫。（立つて恭々しく禮をする）總司令閣下でいらつしやいますか。初めて御拜顏の榮を得ます。手前事はお召しにあづかりました周平甫に御座います。

靳雲鶚。やあ、今度はわざわざお呼び立てして濟まなかつた。吳將軍からのお話もあり、一つお骨折を願はうと思うてな。

周平甫。恐れ入ります。手前共で御用に立ちますことなら、身命をとして御奉公致す心組みで御座います。

靳雲鶚。吳將軍からの御推擧ぢやから無論さうなくてはならぬ所だと思うて居つたが、頼母しいその言葉を聞いて一層安心しましたわい。

衞兵が茶菓を持つて來る。

靳雲鶚。所でと、吳將軍から差向けた男は如何でしたな。少しは役に立つたかな、何といふ名だつたか、若い奴だが仲々のやりてだといふ御自慢だつたが――

周平甫。へえ、馮竹生とおつしやる先生で、お年に似合はぬ學のおあんなさる方で、手前等無學な者はほとほと感心仕りました。只今の我が國の有樣といふものを諄々と說いて下さつたので、若え者達にもすつかり納得がいつたやうで御座いました。

靳雲鶚。それは結構。

衞兵。（現はれる）黃警察局長が見えました。

靳雲鶚。黃殿辰か。（一寸考へて）よからう。此處へ通してくれ。（衞兵去る。周に向つて）あんた無論黃を知つておいでぢやらうな。

周平甫。（ヘドモドしながら）へ、あの、警察局長の旦那で、へえ、それやあ、もう、いろいろ御迷惑をかけたり、その、何しろ御世話樣になつてをりますので。

靳雲鶚。うん、知つてゐるなら都合がいい。心配することはないさ。どうせこれからは一つ一緒に働いて貰はにやあならんのだから。まあお互ひに今迄の事は水に流して、天下國家の爲に盡力するんぢやな。黃も職務柄いろいろあんたにつらく當らにやならんこともあつたらうが、個人的にはちつとも惡意を持つてをらんどころかあんたの人格には敬服しよつたよ。

衞兵に導かれて黃殿辰が這入つてくる。瘦せた四十がらみの男。折鞄を持つてゐる。周は立ち上つてかたくなる。

黃殿辰。（周を見てギクリとするが、靳に向つて恭々しくお辭儀をする）大變どうも遲く相なりまして。

靳雲鶚。報告書は出來たか?

黃殿辰。（折鞄の中から綴ぢたものを取り出して靳に渡しながら）はッ。出來るだけ詳細にしらべあげまして御座います。

斬雲鵬。(ペラペラとめくつて見て　よし。所でと、君、周さんを知つとるね。

黄殿辰。はッ。(うなづく)

斬雲鵬。周さんにも今お話しした所だが　これからは力を合せてしつかりやつてくれ給へ。

黄殿辰。はッ。

斬雲鵬。所でと、君一つこの報告の内容を簡單に說明してくれんかね。あとでゆつくり讀むとして、丁度いいから周さんにも知つて置いて貰ひたいからな。

黄殿辰。はッ。畏まりました。(報告書を受取つて、めくりながら說明する)ええ、もう御承知で御座いませうが、一番最初から申し上げますれば、京漢鐵道の勞働組合運動はその端を一昨年一月一日長辛店に於いて勞働補習學校が成立した日に發してをります。以來、嚴重なる監視の下に、各驛に續々組合が生れ、昨年四月九日、長辛店俱樂部に於いて、全線總工會の準備會が開かれ、合計十四の團體の代表者が三日に亙つて會議を開き、全線を地區に分ち、遂に總工會の下地を作り上げました。同じく八月十一日に鄭州に於いて第二回代表者會議が開かれ　同月二十四日には長辛店支部の發起で二日間のゼネラル・ストライキを起し、日給十錢の增額、二ケ年を經過した臨時雇は全部常雇とすること、公傷治療期間中の給料全額支拂ひ、ストライキ中も減給せぬこと、長辛店に休息所を——

斬雲鵬。いや、そこらはいい、簡單にやつてくれ。

黄殿辰。はッ。その他の要求全部を强ひて通過せしめました。本年一月五日、總工會準備委員會は鄭州に開かれ、全線に亙る連絡、統一が殆んど完成したと察すべきものが御座います。總工會の規約草案もその際書きおろされ、部下の密偵の探知致しましたものは次の如くで御座います。細部に相違があるかは知れませんが、大體間違ひはないと存じます。ええ、讀みませうで御座いませうか？

斬雲鵬。どの位あるね？

黄殿辰。へえ、一枚、二枚、三枚と——ええと十二枚に亙つてをります。

斬雲鵬。ふう、彪大なもんぢやね。どら、見せ給へ。(鼻の先で笑ふ)ふん、無駄な骨折をする奴等だ。まあ後でゆつくり拜見することにしよう。所でと、一體どの位の勞働者が組織されとるんぢやね？

黄殿辰。はッ、各地からの報告を綜合致しますと、約二萬二千程に達するものと思はれます。

斬雲鵬。ふむ、で二月一日には確かにその大會をやるらしいんかね？

黄殿辰。はッ、それは確實で御座いまして、既にその通知書は各支部、各勞働團體へ發送されてをりますし、ええ、(懷中から紙片を引つぱり出しながら)各支部の代表者は殆んど全部乘り込んで來てをりますし、京奉、津浦、道淸その他全國の鐵道の代表者が六十餘名、その他、鐵道に關係ない勞働組合も、武昌機械工組合、武漢電話工組合、漢陽鋼鐵工場組合等三十餘團體から百三十餘人、外に北京、武漢その他の地方から男女學生代表新聞雜誌記者等の來賓が續々到着中で御座います。

斬雲鵬。ふむ、馬鹿な奴等ぢや。何が出來ると思つとるんぢや？　ふむ。會場もきまつとるんか？

黄殿辰。はッ、普樂園劇場ださうで御座います。

斬雲鵬。さうか。大會は絕對にやらせちやならんのだ。いいか。

黄殿辰。はッ。

靳雲鶚。集會は絕對に禁止だ！　それに就いて、この電報を聞いて置いて貰はにやあならん、（懷中から取り出す）呉閣下から一昨日吾輩に打つて來られた電報ぢや。（讀む）うゝと、まづ、鄭州、靳總司令麾下と。それからが本文ぢやがね。からだ。京漢鐵道趙局長よりの二十五日付來電に依れば二月一日該鐵道勞働者は鄭州に於て總工會創立大會を開かんとしつつあり、各鐵道よりの出席者亦多數を占むるものの如し。しかも地方官廳の許可なくして集合せむとするは、その勢の揚れるに驕りたるものにして、といふのは即ち去年の八月のゼネラル・ストライキの勝利を指してゐるんだね、で、驕りたるものにして、と、之を放任せんか、民衆一般への影響は眞に恐るべきものあり、將來永く禍根を殘すものと云ふべし。前途を望みて杞憂堪ふべからざるものあり、麾下の速かなる豫防と、機宜に適したる處置を切望に堪へず。本鐵道の安危はまた實に本地方の安危なり、即ち之が制止のための立法權を麾下に委す。呉佩孚。とかういふ電報ぢやがね。（懷中へしまふ）

周平市。
黃殿辰。｝はアッ。（感嘆する）

靳雲鶚。で、要するに處置萬般の責任が吾輩の雙肩に課されたといふわけぢや。で、呉閣下からこれだけの信任を頂いた以上、吾輩としても十分勤めあげんければならん。從つて君達の粉骨碎身を望むわけぢや。

周平市。
黃殿辰。｝ははツ。

靳雲鶚。あとの事は二人でよく相談して、萬事手ぬかりないやうにやつてくれ給へ。周さんは初めての御奉公ぢや、よく黃に聞いて、キッカケをうまく渡してやつてくれ給へ。（黃に）いいかね。鄭州は軍事上重要な地點なんだ。だから集會は許せんのぢや。萬一の場合のために軍警も配置して置くが、奴等の氣を立たせんやうにする方が怜悧だからな。ぢや解つたかね。（立ち上る）

黃殿辰。（周と一緒に立ち上りながら）はッ、心得ました。誓つて閣下の思召しに添ふやうに取はからひます。

靳雲鶚。（周に）ぢや周さん。御苦勞ですな。この事件でも片づいたら一つゆつくり骨休めをやるかな。この間押へて置いた素敵な阿片があるよ。

黃殿辰。（お辭儀をする）お邪魔致しました。

周平市。（お辭儀をする）へッ、失禮致します。

靳雲鶚は二人を送り出す。（幕）

第二幕

所　鄭州。總工會本部事務所

時　一月三十一日及び二月一日

人物

黃殿辰　警察局長

蔡和民
李煥章
張頼信
高玉林
陳立三
徐言發
曾玉良
柳成有
李金貴
呉海發
葉青山
｝京漢鐵道總工會支部代表者

その他

總工會中央執行委員長

代表者會議議長
留守居の男
軍警數人
暴力團多數

第一場

一月三十一日夜。鄭州の總工會本部事務所(二階)に於ける全線代表者會議。机は隅に片附けられ、ベンチや椅子が一杯に並べてある。壁には各支部、各團體が寄贈した篇額對聯其他、ポスター等が所狹い迄に掛けつらねてある。それには「萬國工人團結起來」「打倒軍閥專政統治」「全國工人集會結社自由」「自由的中華民國萬歲」「無產階級勝利萬歲」等と書いてある。代表者達が腰掛けたり、立つたり、歩き廻つたりして、ガヤガヤ、話をし、議論してゐる。

不意に階下が騷がしくなる。階段をドヤドヤ上つてくる足音。一段高い所に上つた議長が叫ぶ。

議長。諸君ッ！　諸君ッ！

皆靜かになる。

議長。吳佩孚に面會に行つた我々の代表、楊德甫、凌楚藩、李震瀛、史文彬、李煥章の五君が只今、洛陽から歸りました。(皆拍手する)依つて代表者會議を再會致します。最初に議長から簡單に、五君を洛陽に派遣するに至つた經過を報告致します。各支部の代表者六十五名、全國各鐵道の代表者六十三名、各勞働團體三十四團體その代表者百三十二名が殆んど全部ここに乘り込んで來、準備も完全に整つた二十八日に至り、警察局長黃殿辰は突如、集會の禁止を命令して來ました。勿論我々は此の横暴な命令を詰りましたが、彼から引き出すことの出來たのは、それが彼の意志ではなく上からの命令だといふ逃口上だけでした。「奴等の常套手段だ」といふ聲)所が三日目の昨日の朝に至つて、吳佩孚は突然我が本部宛、電報を送つて來ました、これです。(電報を取り出して讀む)至急要談すべきことあり、代表者の派遣を望む。暴壓の首魁は遂にその姿を現はしたのであります。(「打倒軍閥！」等の聲)我々は直接彼を詰問すべく、卽刻五名の代表者を選んで洛陽へ派遣した次第であります。では直ちに代表者の方に御報告を願ひます。

李煥章。(臺の上に立つ)報告します。我々五名は洛陽に着くや否や、軍閥吳佩孚の豪奢な邸宅に押し掛けました。所が彼は自分の方から電報を打つて置きながら會はないで「夕方電話で話をしたい」と秘書の奴に云はせたのです。そこでまあ、するだけの事をさせて見ろと思つたので、默つて夕方迄待つてゐると、今度は電話で、明朝八時に會ひたいから公署の方へ來てくれといふ挨拶です。我々は重ね重ねの馬鹿にしたあつかひに、餘程そのまま歸つてしまはうかと思つたのですが、明朝は確かに會ふといふので胸をさすつて待ちました。さて明朝卽ち今朝、公署に押しかけると、又もや吳佩孚は現はれず、副官長の徐と政務課長の白を出して、頭ごなしにおどかし見たいな言葉を並べさせるのです。此處に至つて我々も遂にこらへにこらへた憤怒を爆發させ、卓を叩いて面罵したのです。(「さうだ」「やつつけろ」「ごまかされるな」等の聲)奴等も我々の勢に辟易し、遂に吳自身が出て來ました。そして大體こんなことをしやべりました。ええ、君達勞働者のことは自分は非常に心配してゐる。(「ちえッ」「心配だらう

よ」）これまででも自分が君達を援助しなかつたことがあるかね？（「絞殺の手をゆるめたことがあるかね？」）今度の事だつて自分は君達に大いに同情してゐる。ただ鄭州は軍事上重要な地點だから集會して貰ひたくないといふだけのことだ。（「誰のための軍事上か？」）それから奴は更に圖々しくこんなことを云ひました。一體集會しないわけには行かないかね？ それが駄目だとすれやアせめて期日を改めて、ごく主だつたものだけが小人數で飯でも食ひながら話すといふ事にしちやアどうだね？（大笑。「どうも御苦勞樣です」「ワンタンのお代りッ」）自分は必ず諸君を保護する。諸君と難しい事を引き起さうなどといふつもりは毛頭ない。（「うそつけッ」）しかし今度の集會は不意に警察局長の方から報告が來たので、原則として許すことは出來ないといふ命令を與へてしまつた。（「横暴！ 横暴・・」）自分は軍人だから一度出した軍令を引つ込めるわけには行かん。（「何を云ふかッ」）まあこれからさき、諸君を保護する日も長いことだからこんなことで仲をまづくしたくない。（「何が長いもんか」「もうぢきぶつ殺してやるぞ」）しかしもし諸君が是が非でも集會を開かうといふならば、俺の力ではどうにも方法はないね。（「正體を暴露しやがつたぞ」「打倒軍閥」等の叫び堂に滿つ）諸君！ かくて我々は奴等の卑怯さと奸惡さをゲロの出る程見て來た。我々が代表に選ばれてわざわざ洛陽迄行つた事は、一見無意義であるかのやうであるが、この、奴の卑怯さと奸惡さを諸君に告げることに依つて、一層諸君の鬪志を堅めることが出來るとすれば、意義があつたと云ひ得ると思ふ。（壇を下る）

支部代表一。（手を擧げる）議長！ 正定支部の張賴信。

議長。張君。

張賴信。（立つ）彼等軍閥が我々の假借なき敵である事、就中彼等の食物である鐵道に我々勞働者が一大組織を持つ事が彼等にとつて堪へられぬ恐怖であること、彼等が死にもの狂ひの妨害を試みるだらうことは、我々の最初から知つてをり、覺悟してゐたことだ。（一齊に「さうだッ」）しかしながら我々は更に今の李君の報告に依つて、奴等が愈々あらゆる手段に訴へても我々の集會を叩き潰さうと決意してゐることを具體的に知り得たのだ。では諸君！ 我々は斷乎として集會を持たうではないか！（贊成 叫び）我々は我々の力で大會を守り通さうではないか！（滿堂をゆるがす拍手と叫び）

この時、階下から一人の男が駈け上つて來て議長に紙片を渡す。

議長。（それを讀んで）只今、停車場から報告が來ました。十時二十分着の列車で、武漢調整工組合の代表者二名、粤漢鐵道總工會の代表者五名、及び來賓として北京大學の男女學生が六名到着されました。

拍手喝采。

葉青山。（立つ）議長！ 鄭州支部の葉青山。

議長。葉君。

葉青山。私は今晩の全線代表者會議が、次の決議をすることを提議します。我々は、すべての事に拘らず、明日、鄭州普樂園劇場に於いて總工會創立大會を持つ・・

一同。異議なし!!（拍手喝采、滿堂の叫び）

（幕）

第二場

翌二月一日の夜、同じく總工會本部の事務所の二階。

幕開くと、第一幕の暴力團の連中——但

し周平市はゐない——が、所狹い迄に掛けつられてある扁額、對聯、ポスターの類を一つ殘らず取りおろしてゐる。醉つ拂つてゐるのもある。

○早えとこやつつけろ。

○ビラ一つでも殘しとくんぢやねえぞ。

遠くの方からインタナショナルを奏する樂隊の音、大勢の合唱、スローガンの絶叫などが聞えてくる。

○そら大會は濟んだぞ。

○引き上げてくるぞ。こちとらも引き上げだ、忘れ物をするな。

大風の吹き去るやうに、一同は引き上げてしまふ。あとには裸の壁と、壞された椅子が殘る。

間。

行列の音は段々近づいて來る。

警官隊に襲はれたらしい。音樂も合唱もやんで凄まじい怒號や叫喚となる。

やがて亂れた足音をさせて、全線代表者達が驅け上つて來る。

彼等は創立大會を守り通して歸つて來た所である。興奮し、血走つた眼をし、或る者は服をズタズタに破かれ、血を流してゐる。

皆は部屋に驅け込み、この變つた有樣に驚いて立ちどまる。

或る者はこの部屋の樣子に氣づかず直ちに窓に走り寄り、下を向いて帽子を打ち振り叫ぶ。

○京漢鐵道總工會萬歲！

○プ　レタリアートの勝利萬歲！

○どうしたんだ、これや？（口々に叫ぶ）

○畜生！　留守の間に襲はれたんだ！

○誰がこんなことをしやがつた。留守居の者は何處へ行つたんだ。

二三人が隣の部屋へ驅け込んで行く。猿ぐつわを掛けられ手足を縛られた男を、いましめを解きながら連れてくる。

留守居の男。（猿ぐつわをとられるや否や）暴力團だ、畜生、暴力團だ！

○どんな奴等だ？

○何處の奴等だ？

○何人位で來やがつたんだ？

留守居の男。（口惜し泣きに泣きながら）二十人も來やアがつた。ほんの十五分位前のことだ。

○書類はどうした？

留守居の男。（うしろから叫び掛ける）書類は大丈夫だ。戸棚にはさはらなかつたんだ。（皆に向つて）奴等は不意にドヤドヤと跳び込んで來るなり俺をしばり上げやがつた。中にはピストルを振り廻してる奴もあつた。それから猿ぐつわをかけられて隣の部屋へ投げ込まれたんだ。

隣の部屋へ跳び込んだ連中が出てくる。

○馬鹿な奴等だ。書類には手も觸れないで、旗だのポスターだのばつかり持つて行きやがつた。

○癪にさはる惡戲をしやがる。

○畜生、とつつかまへてたたきのめしちまへ。

○根こそぎ泥棒して行きやがつた。

昨夜の全線代表會議で議長をしてゐた男が叫ぶ。

昨夜の議長。諸君！　諸君は今日我々の行列が創立大會會場に乘り込まうとした時に、不意に妨害して集會禁止のキッカケを作らうとした暴力團を覺えてゐるか？　この部屋を荒した狼藉者も恐らくかの憎むべき暴力團の一味だと私は思ふ。

○　うむ、奴等だ。
○　さうだ、畜生。
昨夜の議長。思ふに奴等は命令された大會ぶつつぶしが失敗したので、此の部屋を荒して遣逐返しをしたのだ。
○　金に買はれた軍閥の手先をぶつ殺せ！
○　さうだ！　やつつけろ！
その間に隣の部屋で電話を掛けてゐる男がある。
○　もしもし、五大州旅館？　こつちは總工會本部だがそつちに宿つてゐる鐵道の代表者を誰でもいいから、すぐ電話口に出してくれないか。さう、總工會本部だ。大至急だ。
こつちの部屋では――
昨夜の議長。奴等は軍隊を持ち、軍警を持ち、警官を持ち、その上に暴力團まで買ひ取つてゐるのだ。糾察隊の組織が絶對に必要だ。（「異議なし」の聲）
○　（電話口で）誰？――ああ、君か、俺だ、わかつたか？――今歸つて來てみたら留守の間に本部に暴力團が闖入して、扁額、旗、ポスターの類をみんな盜んで行つちまやがつたんだ――なに？――えツ？――旅館が包圍されてる？――軍警？――絶對に外出させない？――畜生め！――ぢや、倶樂部の方もあぶないな？　いや、こつちはまだ包圍されちやゐない。暴力團にしてやられただけだ。
街路に爆竹の音。ののしり叫ぶ聲。大きな笑ひ聲。拍手。
數人が窓に走り寄つて覗く。
○　（唸る）うむツ、畜生！
○　（うしろから）何だ、どうしたんだ。
○　泥棒してつた旗と額だ。
○　ポスターも――
○　畜生！　滅茶滅茶に破つたり踏んづけたりしてやがる。
○　うぬツ、ふざけた眞似をしやアがる。
數人が外に驅け出してドヤドヤと階段を降りて行く。
窓から覗いてゐた人々が叫ぶ。
○　おや、軍警が多勢出て來たぞ。
○　しまつた！　包圍しやがるんだ。
○　聯絡を絶たれちやいかん。倶樂部へ電話をかけろ。
一人が隣の部屋に跳び込む。しきりに電話のベルを鳴らす。戻つてくる。
○　（出て來て）駄目だ、電線を切られた。
その時階段にドヤドヤと足音がして、カーキ色の詰襟服を着た軍警七八人が、さつき驅け出して行つた代表者達を部屋の中へ押し戻す。部屋の中の人々はドツと軍警に襲ひかかる。
○　出ろ！　出ろ！
○　何の用があつて這入つてくるんだ。出ろ！出ろ！
○　出ろと云つたら出ろ！
○　こん畜生め！（軍警をなぐる）
揉み合ひの後、遂に室外に押し出して、口々に叫ぶ。
○　黄殿辰を呼んでこい！
○　黄殿辰を連れてこい！
○　ここに來てこの暴狀の說明をさせろ！
その時、窓際にゐた人達が叫ぶ。
○　ゐる、ゐる！　黄がゐるぞ！
○　どこに？　どこに？
○　あそこで眞赤になつて旗や額を踏みつけてやがる。
○　（口々に叫ぶ）黄殿辰！
○　ここへ來て說明をしろ！
○　こつちを向きやがつた。
○　ここへ來るんだ。

○説明しろ！
○やつて來るぞ！
○來やがつた。來やがつた。
皆はドアを開けて待つ。
やがて、黄殿辰がノシノシと上つて來る。皆はつめよせようとする。軍警が間をへだてる。
皆は一度に怒鳴る。
○何故俺達を包圍するんだ。
○軍閥の手先！
○犬！
○何のつもりで旗や額を暴力團に泥棒させた。
黄殿辰。俺は紳士的にわざわざここ迄あがつて來たんだ。君達が態度を改めて紳士的に話をしないなら歸るだけの話だ。
○何が紳士的だ！
○泥棒紳士！
黄殿辰は歸らうとする。一人が跳び出して叫ぶ。
△待て！
黄はその勢に呑まれて立ち止まる。
△君は今朝我々が大會に臨まうとして行進してゐた時何故暴力團に命じて妨害させたのか？
黄殿辰。そんな事實はない。俺は全然知らん。
皆口々に叫ぶ。
○譃をつくな？
○恥知らず！
△知らんならば知らんでよい。では何故軍警に大會會場を包圍させたんだ？
黄殿辰。吳司令官の命令だからだ。
△では、我々が大會で留守の間にこの事務所で泥棒をしたのも吳司令官の命令なのか？
黄殿辰。そんな事實は知らん。
△何故電話の線を切つたんだ？
黄殿辰。そんな事はしない。
△何故俺達を包圍するんだ。
黄殿辰。吳司令官の命令だからだ。
△一體いつ迄包圍してゐるつもりなんだ。
黄殿辰。君達がそれぞれ此處を去つて出發してしまふ迄だ。
△君は何故君の知らない泥棒の盗んだ我々の旗や額を足で踏みつけてぶつこはしたんだ。
黄殿辰。そんな事をした覺えはない。
△馬鹿野郎！　もう何も聞く必要はない。
○出てうせろ？
○譃つき！　泥棒！
○犬！
皆は黄を追ひ出してドアを閉める。窓から覗いた一人が叫ぶ。
○おい、飯が來たぞ。
皆窓に驅け寄る。
○來た。來た。
○畜生、とても腹がすきやアがつた。
○朝つぱらから食つてないんだからなあ。
○（怒鳴る）おおい、萬年春！　早く持つて來おおい！
○おツ、奴等は萬年春の小僧を追ひ返してやがるぞ。
○黄殿辰の野郎が肩を突き飛ばしてやがる。
○畜生！　飯迄食はせないつもりだな。
○何處迄卑怯な奴だ。
パチパチといふ燃える音が聞え始める。
○や、旗や額を燃やし始めやがつた。
○ぶつこはしだけで足りないのか。
○畜生！
一人は外へ跳び出さうとしてドアを開ける。銃劍が突き出される。彼は口惜し泣きに泣く。
一人が叫ぶ。
□諸君！　諸君はかくの如き暴壓と侮辱を默

つて忍ぶつもりか?

△ 斷じて忍ぶことは出來ん。我々は我々の持つ最も强力な手段でもつて彼等に返答しなければならない。

○ さうだ。ゼネ・ストだ。

○ ゼネ・ストだ。

○ ゼネ・ストだ。

滿堂の拍手と叫喚。

□ 諸君! 全線代表者會議を持たうぢやないか。

○ (口々に) 異議なし!

○ 高君議長!

○ 高君議長異議なし!

○ (口々に) 異議なし!

高玉林。では私が議長になります。まづ最初に、かかる暴壓に對して我々はどういふ返答の仕方をするか、次にその實行方法及びそれぞれの分擔をきめたいと思ひます。

陳立三。議長! 黄河支部の陳立三。

高玉林。陳君。

陳立三。諸君! 我々は彼等のこの暴狀に對して、單に當局に決議文を突きつけたり、聲明書を發したりなんどといふ生ぬるいことでない、强力な現實的な抗議を叩きつけなければならない。だが諸君! それを決して單なる抗議に終らしめてはならない。我々の組織を更に更に强め、他の鐵道にもまた總工會を持たせ、全國鐵道總工會の確立を促進し得るやうに鬪爭すべきである。

滿堂の「異議なし」と拍手。

高玉林。では我々は如何なる手段に依つて――

○ (云ひ終らぬうちに異口同音に) ゼネ・スト! ゼネ・ストだ!

高玉林。ゼネ・ストを決行することに異議のない方は擧手して下さい。

一人殘らず擧手、拍手。

高玉林。滿場一致を以てゼネ・スト決行を決議致します。(滿堂の拍手) では、いつから始めますか?

蔡和民。議長! 信陽州支部の蔡和民。

高玉林。蔡君。

蔡和民。暴力團と銃劍を蹴飛ばして總工會は成立した。全線の勞働者の意氣は此の瞬間、最も高く燃え上つてゐる。ゼネ・ストは即刻始めるべきだ。

○ (口々に) さうだ! 異議なし!

蔡和民。我々は今夜か遲くも明朝鄭州を引き上げることが出來る。ゼネ・ストは四日か五日から始めるがいいと思ふ。

○ 四日。

○ 四日の正午。

○ 四日の正午異議なし。

高玉林。四日正午を期して決行することに異議のない方は擧手をして下さい。(全部擧手)

滿場一致をもつて、ゼネ・ストは四日正午を期して決行することに決定します。

滿堂の拍手。

高玉林。では次に、我々は如何なる要求を提出すべきでせうか?

徐言發。議長! 琉璃河支部の徐言發。

高玉林。徐君。

徐言發。警察局長黄殿辰の免職。(滿堂の歡呼拍手、異議なしの叫び) 軍警と暴力團とが破壞し燃やした扁額、旗、ポスターを初め、彼等が我々に蒙らしめたあらゆる損害の賠償。(拍手)

曾玉良。議長! 順德支部の曾玉良。

高玉林。曾君。

曾玉良。支部、旅館、俱樂部其他を包圍してゐる軍隊、軍警、警官の即時撤退。(拍手) 鄭州の地方官は鄭州支部に來て謝罪する。(拍手)

○（誰かが叫ぶ）每日曜日の休暇と工賃支給。

（異議なし、拍手）

○（誰かが叫ぶ）正月の一週間休暇と工賃支給。（異議なし。拍手）

柳成有。議長！　議事進行について！　正定支部の柳成有。

高玉林。柳君。

柳成有。さつき云はれたやうに皆の氣持が總工會創立で盛り上つた瞬間をとらへ、且つ鐵道當局の虚をつく等の點を考へ、今度のゼネ・ストは早く始められればそれだけよいのだ。從つて今晩はまだ討議しなければならんことが澤山あるので、要求條項の提出はこの位で打ち切り、新中央執行委員會を爭議團幹部とし、新中央執行委員長を爭議團長に擧げ、直ちに別室で爭議團の編成、爭議費用の捻出等を協議して貰ひ、一方變則ではあるが、便宜上、議長指名で五六人の委員をあげ、要求條項の整理、檄、聲明書の起草等に直ちに取りかかつて貰つたらいいと思ひます。

一同。異議なし。異議なし。

高玉林。では新中央執行委員諸君は直ちに別室で爭議團の編成、爭議費用の捻出等につき協議して下さい。（彼等は別室に行く）要求條項の整理、檄、聲明書の起草のためには、順徳支部の曾君、信陽州支部の蔡君、黃河支部の梅君、正定支部の柳君、許州支部の王君に當つて貰ひたいと思ひます。直ちに別室で協議起草して下さい。（五人は別室に行く）なほ本日の大會に於いて審議決定された總工會の綱領規約は直ちに活版印刷に附して諸君に持つて歸つて貰ふ手筈になつてゐましたが、かくの如く包圍され、外部との聯絡を全く絶たれてしまひましたからやむを得ません。各支部に一二枚づつでもわたるやうにすぐにプリントにして貰つたらどうでせうか？

一同。異議なし。

高玉林。ではそれを鄭州支部の書記局にお願ひしたいと思ひますがどうでせうか？

一同。異議なし。

高玉林。では鄭州支部書記局は至急プリントに取りかかつて下さい。

李金貴。議長！　高碑店支部の李金貴。

高玉林。李君。

李金貴。別室の協議がまとまる迄の間を利用して、ちよつと感想を述べて見たいと思ひます。

一同。やれ、やれ！（拍手）

李金貴。諸君！　去年の四月長辛店で持たれた全線總工會準備會を諸君ははつきりと覺えてゐるだらう。あの三日に亙る盛大な會議とその成果は、全中國の勞働者農民に大きな感動を與へたものであつた。それ以來の諸君の絶え間ない努力は遂にここに總工會を生みあげたのであるが、この輝かしい今日、あの長辛店での準備會を思ひ出すと、我々の陣營のめざましい强力化がまざまざと見えて、何とも云へぬ感激が胸にこみあげて來るのであります。諸君は今日のやうに大衆が一致して燃え上つたのを見たことがあるか？　我々は暴力團と、銃劍を持つた軍警の妨害を蹴飛ばして會場へ乘り込み、一歩でも泥靴が會場をけがすことを許さなかつた。スローガンは殆んど演説の句切り每に大衆的に叫ばれた。今日の大會には巨大な前進をしたプロレタリアの姿がまざまざと反映されてゐたのである。（拍手。叫び）諸君、京漢鐵道は國家の所有物だ。その管理權は政府の交通局にある。しかるに數年來鐵道に依る收入は殆んど全く彼等軍閥の掠奪にまかされてゐる。軍閥は我々の正面の敵であり、軍閥を倒す

ことなしには我々の自由はあり得ないのだ！（「さうだ！」「軍閥を打倒しろ！」）我々の今度のゼネ・ストは正にこの目的のために戰はれなければならないのだ！（「さうだ！一拍手）諸君、彼等は既に暴力團と銃劍に依る攻擊を始めた。それは我々が力強く鬪爭すればするほど狂暴になりまさるだらう。だが我々は全世界のプロレタリアートのために、死を以て戰ひ拔くことを誓はう！（滿堂をゆるがす拍手と歡聲。）

呉海發。議長！　江岸支部の呉海發。

高玉林。呉君。

呉海發。諸君。今奴等はボンヤリと銃劍を持つて街路に並び、入口をかため、そのドアのすぐ外に押つ立つてゐる。だが我々は今にもそれが我々の胸に飛び込んでくることを知つてゐる。我々は即時糾察隊を組織しなければならない。（「異議なし！」「さうだ！」）私は諸君が各支部に歸るや否や、眞先に糾察隊の組織に着手されむことを望みます。（「異議なし！」「喝采」）なほ、これは言ふ迄もないことだが、全爭議團員が總工會執行委員會を絕對に信用し、その命令に從つて、一步亂れず鬪ひ拔くことを望みます。（「異議なし！」「喝采」）

執行委員が別室から戻つてくる。

執行委員長。議長！

高玉林。出來ましたか？（執行委員長うなづく）では執行委員長から報告して貰ふことにします。

執行委員長。爭議團本部を江岸に置くこととし、執行委員會直屬の次の部を置きます。宣傳部、調査部、新聞部、記錄部、情報部、會計部、傳令部、應援部、出版部、接待部、他に糾察隊及び調査隊を置きます。爭議中は全員絕對に自由行動は許されません。全爭議團員は十人づつの組にわけられ組長がその全責任を――。　――と云つてゐる間に（幕）

第三幕

所　鄭州

時　二月

人物

葉青山　火夫。總工會鄭州支部執行委員

老婆　その母

翠英　その妻

魯玉山　總工會鄭州支部執行委員長

紳士

馮竹生

德寶

保三

若い女　その情人

其他、近隣の人達、子供一人、傳令、軍警等數人づつ。

第一場

鄭州停車場裏手にある長屋の一つ、火夫葉青山の家の內部、壁も床もきたない黑煉瓦で疊んである。歪んだ椅子、卓、アンペラ。オンドルの上は寢臺になつてゐる。正面に板戸。その外は狹い街路。

オンドルにひつついて老婆がボロにくるまつて箱の上に腰掛けてゐる。葉の妻翠英は粥みたいなものを煮てゐる。

夕方。

老婆。ちつともあつたかくないよ。

翠英。（返事をしない）
老婆。ちつともあつたかくないつてばよ、おい。
翠英。こつちだつて仲々煮えやアしないわよ。
老婆。石炭をいれとくれよ。ちつたア。
翠英。駄目だよ、幾度云つてもわかんないんだねえ。ストライキを始めたんだつてえに、石炭を儉約しろつてさつき傳令が來たぢやないか。
老婆。構やしないよ。すぐ濟んぢやふんだらう、この前みたいに。
翠英。さう行きやいいがね、婆さんの考へるやうに呑氣なこつちやアないらしいよ、こんだ、ア。命がけだつて云つてるからね。みんなも。
老婆。若い者ア大げさだよ。まあいいやうにやつとくれ。うう寒い。そこらにあるボロを取つとくれ。
翠英。雪にでもなられた日にやアつらいこつた。（云ひながらボロを老婆の身體にまとひかける）
　汽車の近づく音がする。汽笛。
翠英。（キッとなつて）おや、汽車だ！　今頃汽車の通る筈がない。どうしたんだらう。
　彼女は入口の戸を開けて半身を街路に乘り出す。
　同じく汽車の音に驚いて跳び出して、隣の家のかみさんに叫ぶ。
翠英。汽車だよ。
隣のかみさん。馬鹿にしてる。こんなだらしのないゼネ・ストつてあるもんか。始めたと思つたら、五時間もたたないうちにもう裏切りが出るなんて。
翠英。ざまアないよ。本當に。
隣のかみさん。停車場へ行つて見てくるよ。（走り去る）
　十四五の男の子が後から走つて行く。
翠英。（彼に叫びかける）とつとと行つて見てくるんだ。（中へ這入つて戸を閉める）畜生。裏切りやアがつて。
　汽笛。汽車は停車場でとまつてゐるらしい。何ともつかぬざわめき。
翠英。（呟く）意氣地なしめ、今朝の支部大會ぢやア勝手なオダアあげときやがつて。
　隅に少しばかり重ねてある薪を取つてオンドルにくべようとするが、止めてそれをもとに戻す。
　戸外でガヤガヤいふ女の話聲。
○あれやア三十八列車だよ。
○てえと保定仕立の急行だね。
○誰だい、一體機關手は。
　子供達が「裏切者をやつつけろ！」と、調子をつけて叫びながら走つて行く。
　やがて傳令がやつて來たらしい。
　女がガヤガヤ騷ぐ。
○どうしたんだい？
○誰だい、機關手は？
傳令。何でもない。何でもない。あれやア、十時四十五分保定發の急行で、保定支部は十一時からストライキに這入つたんだ。途中に停車驛がなかつたんで此處迄來ちまつたんだ。ここから先へは行かん。
○なあんだ。心配させやがる。
○乘客はどうしたの？
傳令。皆降りて貰つた。今皆で前後處置を考へてゐる。（少しへだたつた所で繰返してゐる）あれやア十時四十五分保定發の急行で——
　別の傳令が正面の戸を開けて半身を突つ込む。
傳令。あのなア——
老婆。寒いよ、閉めとくれよ、這入るなら這入

つて。

傳令。ごめんよ、婆さん、ちよつとだ。（翠英に向つて）あのなア、今の急行から降ろした客を分けて皆の所へちよつと休ませることにしたから、お前ん所へもすぐ二人ばかり來るから頼むぜ。（去る）

翠英は默つて椅子、卓などを置き換へ、床を掃除する。

外に人が來る。

○　ぢや、あんたとあんたは此處で休んで下さい。

糾察隊の一人が戸を開けて旅客を二人部屋の中へ入れる。一人は髯を生やし、氣むづかしげな紳士、一人は美しい着物を着た若い女。

翠英は二人をジロリと見て、默つて椅子をすすめる。二人は氣味悪げにまはりを見廻しながら腰かける。

翠英。（女に話しかける）どうも濟みませんね、迷惑をお掛けして。

女。いいえ。

翠英。どちらへお出でです。

女。漢口迄。

翠英。丁度都合の悪い時でしたねえ。

女。あのう、漢口迄送りとどけてくれるつて云ふんですが――

翠英。さう云つたんなら、それならお送りするでせう。

紳士。（身震ひして呟く）うら寒。

翠英。石炭を儉約してるもんだから、寒くてお氣の毒ですね。

隣の家から自由の歌が聞えてくる。翠英は茶をいれながら、それに合はせて口ずさむ。戸をバタンと開けて葉青山が這入つてくる。

翠英。おやどうしたの？

葉青山。七時迄交替で暇なんだ。（旅客に向つて）どうも御迷惑ですな。だが止むを得ません。これが我々に殘されたたつた一つの武器ですからな。

紳士。俺もそれは察しるがね、しかし交通機關といふものは天下の公器であつて、社會民衆のためにあるのだから、その運轉を中止するなどといふことは非常に考へ物だと思ふね。

葉青山。さうですよ。非常に考へ物ですよ。だから我々は命掛けでやつてるんですよ。

紳士。命掛けはいいがな、しかし全然關係のない乘客を迷惑させるのは面白くないな。

葉青山。第三者にはお氣の毒です。だが、と云つてそれなら我々、例へば鐵道、電氣、瓦斯、郵便、新聞など日常の生活とぴつたりくつついた仕事をしてゐる勞働者は默つて搾られ放だい、いぢめられ放だいになつてゐなくちやならんといふのですかね。悪いのは我々の人間的な要求を踏みにじつてる奴等でさア。（翠英に）あ、さうさう、さつき報告されたがね、北京の鐵道總局の給仕や小使が同情罷業を始めたさうだ。總局の中は火が消えたやうださうだ。

翠英。まあ、凄いわね！

葉青山。鐵道局長の奴、泡食ひやがつて早速各驛へおどし文句を並べた就業命令を突きつけて來やがつたよ。十二時間以内に就業すべし。就業しなければこれから起ることの責任は皆罷業者の方にあるんださうだ。へッ、笑はせやがらア。俺達に命令することの出來るのは總工會だけだ。局長なんぞがしやつちよこ立ちしたつて鼻も引つかけねえや。

この時一人の傳令が顔を突つ込んでいふ。

傳令。おい、今なあ。鐵道局長からの慰問使

だといふふれこみの變な野郎が三人で、支部の主だつた連中の所をまはつて歩いてやがるんだ。もうぢきここへ來るから、いい加減にあしらつて、正體を見極めてくれ。

葉青山。よし、引き受けた。慰問使たア御苦勞なこつた。どんな野郎が來るのか知らないが、一つ後學のために御面相でも拜見しておくか。

傳令。今、楊の家にゐるんだ。（首を引つ込めて外を覗ふ）よッ出て來た、出て來た。ここへ來るぞ。どんな事をぬかすか聞いて見給へ。ぢや失敬。（去る）

若い女は遠慮して隅の方へ引つ込む。葉青山は箱を椅子の代りに置いて待つ。

外で聲がする。

○ええと十二號。葉青山と。

○此處だ、此處だ。

ソット戸が開いてひどくオヅオヅしながら男が三人這入つてくる。それは服裝こそ變つてゐるが馮竹生、保三、德賓の三人である。若い女は保三を見るとギョッとして暗い隅の方に身をちぢめる。

馮竹生。ちよつとお邪魔をさせて貰ひます。（葉青山に向つて）あなたが支部執行委員の葉さんで。

葉青山。さうです。

馮竹生。どうも今度はお骨折ですな。並大抵の事ぢやない。お察ししますよ。（腰掛けて煙草を喫む）私達はな、その今の汽車で派遣されて來た、その鐵道局長さんからね、爭議團の方々を慰問するために派遣されて來た慰問使でしてな。局長さんも口では強い事も云はなきやならんが、しかしそこは上下の別こそあれ、同じ鐵道の仕事を長年一緒にやつて來たあんた方が可愛くてならんのですな。特に私達をからして派遣なさつたんですよ。

葉青山。（皮肉に）そいつアどうも思ひも寄らん御親切な事でした。

馮竹生。これは痛い。だが、まづその色眼鏡をはづすことが第一なんですよ。局長さんと雖も同樣雇はれの身でがせう。かうしたいああしたいとあんた方の爲に心を碎いても思ふやうにはそれ、實行出來んのでな、ついあんた方もええじれつてえといふ事になるんでせうが、そこを一つグッとこらへて、な。

紳士。さうだ。俺もさうあるべきだと思ふね。自分の事ばかり考へずに、社會といふ見地から物を見るんだね。

馮竹生。左樣、左樣、人間さう行かなくちやアいけませんな。

葉青山。（皮肉に）で、その社會といふ見地から見ると俺達はどうすればいいつてことになるのかね？

馮竹生。無論、そのストライキなどといふお互ひに氣まづい事はやめ、直ちに就業する。すると局長さんの方でもその意氣に感じて、あんた方に御滿足の行くやうに——

葉青山。しかし局長も雇はれの身で自由にならんと君は云つたぢやないか。

馮竹生。それはその——

葉青山。俺達が戰つてるのは局長なんてそんなケチな野郎とぢやアねえ。その上にゐて鐵道を橫領してゐる軍閥とだ。

保三。（初めて口を出す）だがね、兄さん、人間にやアそれぞれ具はつた力つてものがあらア、夢みたいな事を考へていきんだつて仕樣がねえぢやねえかね。

葉青山。俺達に軍閥をぶつ倒す力がねえツてのかい。警察局長の黃の奴も同じやうな口をききやアがつたよ、ゼネ・ストでも何でも力があるならやつて見ろ、へん、所でちやんと

御覧の通り、俺達にやア立派にやる力があるんだ。俺達がぶつ倒さないで誰が軍閥をぶつ倒すんだ。

保三。所がね、兄さん、さう甘くは問屋がおろされえツてことよ。何と云つても向うにやアいくらもキリ札があるんだ。いくらお前さん達がいきんだつて、例へば素手で鐵砲にやアかなふまい。

葉青山。へん、大變な慰問使だ、これぢやまるで威嚇使ぢやねえか。

德寶。それやお前さんの方の出方が悪いからだ。まア私達もかうして北京くんだりからわざわざやつて來たんだ。顏を立ててくれるもんだ。

葉青山。ふん、頼みもしねえに。

保三。俺達や何もおどかすつもりぢやねえ。君達の事を思へばこそ、警察や軍隊を敵に廻すと損だぜと忠告してゐるんだ。警察や軍隊だけぢやアねえ。一般の人民だつて迷惑だらう、鐵道が止まりや商賣に差し支へる者だつてちつとやそつとぢやアねえ、現にかうして旅をなさる方々は――

さう云つて彼は初めて若い女の方を振り向き、ギョッとして顏色を變へる。

若い女。（一歩前へ出て）保三！

保三。（默つて睨みつける）

若い女。お前さんと云ふ人は、よくも私を見棄てたね。よくも私に苦い水を飲ませたね。

保三。しッ、馬鹿。

若い女。お前さんのお蔭で、私や散々樓主に借金が出來て、足を拔くのにどんなに苦勞したか知れないぢやないか。それを、それを、一言の挨拶もなしに、姿を消して――

保三。（そばへ寄つて小聲で）よしよし金ならいくらでもやる。今は駄目だ。

若い女。金の事なんか云つてやしないよ。私やお前の人でなしが情ないんだ。譃ばつかりついて世の中は渡れるもんぢやないからね。

保三。いいつてことよ、默つてろ。

若い女。いいえ、默つちやゐられないよ。一體私をどうしてくれるんだい。

保三。わからねえな。だから今は駄目だといふんだ。大事なお役目で出向いてるんだから。

若い女。何が大事なお役目さ。お前さんが綠黨へ這入つて周親分の下で會計方をしてるつてことも私やちやんと知つてるんだから。

保三。馬鹿。（跳びかゝつて女の口を塞がうとする）

若い女。（もがきながら）金を何千元とか出せつて自分の家へ――家へ――脅迫――脅迫狀を出したのから足がついて――私やお前をおつかけてるんだ。さあ、もう放すもんか。

（あべこべにむしやぶりつく）

馮竹生と德寶とは遂に絶望して、「えい、畜生」と云ひながら二人を押して、外へ出て行つてしまふ。ひつぱたく音と女の泣く聲が聞えて、それが段々遠くなつて行く。

翠英。あきれたもんだ。

葉青山。（紳士に）どうです。立派な慰問使ですな。買收された暴力團ですよ。もう少しここに坐つてゐるといろいろ勉强になりますぜ。

四五人の女が首を出して云ふ。

○ どうしたのさ、一體。

○ 何だい、あの女は。

○ 可哀さうに、やけにひつぱたかれてたよ。

翠英。（戸の外へ出ながら）あきれた慰問使さ。綠黨ツて暴力團なんだよ、あれやア。飛んだお芝居さ。よくはわからないがね、あの女は――（云ひながら外へ出て戸を閉める）

葉青山はアンペラの上に寢つころがつて

「自由の歌」をうたつてゐる。

間。

傳令が額を出す。

傳令。おい、執行委員會だ。程の家へすぐ集つてくれ。

葉青山。(起き上つて)何か問題が起つたのか!

傳令。警察局長の黄の野郎が、いゝ市民大會を計畫してるんだ。その對策だ。

葉青山。ふん、何をモゾモゾやつてやがるんだ。

傳令。福顚坊の乞食共を全部買收したさうだ。明日普樂園劇場でやるんださうだ。傳單がチラホラ貼つてあるぜ。

葉青山。ドンドンひつぺがしちまへ。さあ行かう。(出て行かうとする)

紳士。ね、君、僕の方をどうしてくれるんだね。早く君。——

葉青山。大丈夫、送り届けると云つたら送り届けますよ。(去る)　(暗轉)

第二場

同じく葉青山の家。翌日の夜。

第一場から暗轉で、時間の經過を現はすだけの間の後、明るくなる。カンテラがともつてゐる。風が吹いてゐる。舞臺には老婆が一人ゐるだけである。

不意に一人の男が跳び込んで來る。鄭州支部執行委員長の魯玉山である。

魯玉山。お婆さん、濟まねえ。ちよつとかくしてくれ。

老婆。誰だい?

魯玉山。俺だ。魯だよ。

老婆。つけられてんのかい?

魯玉山。さうだよ、軍警に追つかけられてるんだ。

老婆。ぢや此處へおいで。

彼女はかぶつてゐたボロをぬいで立ち上る。

魯玉山。濟まねえ。寒いぜ。お婆さん。ちよつとの間だ。

ボロをかぶつて老婆のゐた所にうづくまる。老婆は寒さに震へながら箱に腰掛ける。

老婆。(押し殺した聲で)うちの子の居所は判つたかい。

魯玉山。ああ、總司令部にしよびいて行かれたらしい。可哀さうに、大分やられてるだらう。

老婆。畜生。うちの子をいぢめたつて仕樣がないぢやないか。ストライキをやつてるのは皆ぢやないか。お前達が意氣地なしだからこんなことになるんだ。お前さんは鄭州支部の執行委員長ぢやないか。

魯玉山。さうだよ、俺達が意氣地なしだからかういふことになるんだ。だが、ぢきに取りかへしてやるから堪忍してくれ。

老婆。あてにしないで待つてゐようよ。

不意に戸外に足音がする。軍警が四五人這入り込んで來る。

老婆。(立ち上る)何だつて默つて人の家へ這入り込んで來やがるんだ。

軍警一。(見廻しながら)若い男が來なかつたか?

老婆。何云つてるんだ。若い男なら今朝お前達がしよびいて行つたぢやないか。ここにやア婆アが二人しかゐないよ。さつさと出て行つとくれ。

軍警二。駄目だ。ゐねえや。

軍警三。畜生、何處へ行きやがつた。

ゾロゾロ去る。老婆は彼等のうしろからバタンと戸を閉める。

魯玉山。有難う、お婆さん。（出て來ようとする）

老婆。駄目だ。まだ危いからもちつとさらしてゐなさい。（間）どうだい、今度のストライキは見込みがあるかい。

魯玉山。俺達ア勝つ！ 俺達ア結局勝つんだ！ お婆さん、その點にかけちやア安心してゐなくちやいけないよ。

老婆。だがいつ勝つんだい？

魯玉山。それやわからない、明日か、それともずつと先になるか。

老婆。でその間にうちの子はどうなるんだい？

魯玉山。あれだつて俺達が勝つ事だけを望んでゐるんだ。そのためにやア命でも何でも惜しかアないんだ。

そこへ翠英が走り込んで來る。

翠英。うう寒。とてもひどい風だ。おや、誰？ なあんだ、魯さんか。

老婆。シッ。

翠英。ああさうか。

魯玉山。市民大會はどうだつたね？

翠英。市民大會が聞いてあきれるよ。無理矢理に掻き集められたのが四五十人、ぽかんとしてゐるだけの事ぢやないか。變な世話役みたいのや、町内の顏役つていふやうなのがストライキの悪口を云つて、結局、黄の拵へた決議見たいなものを讀んでおしまひさ。

魯玉山。へえ、何を決議しやがつたんだ。

翠英。（紙片を取り出す）そいつが前以てちやんと刷つてあるのさ。會が終ると買收した乞食共に小さな旗を持たせて、こいつを町中に撒かしたのさ。

魯玉山。下らん眞似をしやがる。

翠英。（紙片を讀む）勞働者諸君の反省を促すだとさ。勞働者は十二時間以内に就業すべし。然らずんば勞働者に物資の供給販賣を停止すべし。ひそかに勞働者及びその家族に物資を供給販賣する者あれば、暴徒に通謀する罪を以て論ずだとさ。

老婆。ストライキをやる勞働者は物を食べる權利がないといふんだね。畜生め。

翠英。まだあるんだよ。勞働者就業せざる時は家主はその貸家より退去することを迫るべし。勞働者並びにその家族を居住せしむる者あらばその家屋は沒收して公有財産とすべし。

老婆は怒りに身體を震はしながら立ち上る。

魯玉山。大丈夫だよ。婆さん、いくら黄が一人で騷いだつてこんな馬鹿なことが出來てたまるもんか。

老婆。それやさうだらうけれど、人をあんまり馬鹿にしてる。息子をさらつてつて拷問して、それでも足りずに、家迄取り上げようとは、人間の面した奴の云へる事かい。

翠英。だが此の一番おしまひの項目を聞いてごらん。家や食物の騷ぎぢやない、就業しなければ殺すぞとハッキリほざいてゐやがるんだ、いいかい。（讀む）就業せんと欲する者は停車場に至りて身體安全證を受領すべし。然らざるものは萬一土匪に襲はるとも警察はその保護に任ぜざるべし。

老婆は言葉も出ず、あへぎながら、机をかたく摑む。

魯玉山は立ち上る。

翠英。おや、何處へ行くの？

魯玉山。俺やちよつと行つてくる。皆にこのビラの事を、しやべつて來なくつちやあならねえ。

翠英。私もそれがちよつと心配だつたの。勿

論これが出鱈目で、おどかしに過ぎないつてことが解らないやうな事はないとは思ふけれど、やつぱり元氣よくアヂつた方が――

魯玉山。さうなんだ。大丈夫だらう。ちよつと行つてくる。婆さん左樣なら。

彼は戸を開けようとする。その時、戸が外から開く。魯は素速く物陰にころげこんで隱れる。

戸口に、片手に繩を掛けられた葉青山が拷問ですつかり疲れ果て、顏をダラリと下に垂れ、グラグラ搖れながら、四五人の軍警に押されて現はれる。一人が銃劍で葉の尻を突く。葉は半分氣を失ひつつ、顏を垂れたままとぎれとぎれに云ふ。

葉青山。我々はもう――戰へるだけ戰つた――力の限り――戰つた――此處迄やれば――誰に恥ぢる事もない――鐵道總局でも――我々の事情は出來るだけ考へると云つてゐるから――ゐるから――この際、無條件で――

その時、老婆は不意に「お前！」と呼び、長い叫びを擧げて倒れる。

葉はその叫びに愕然として顏を擧げる。そして、初めてそれが自分の家であつたことを知つて、「あ」と叫ぶ。

翠英。（泣きながら）いくら拷問されたからと云つて、何で――何で――屈服の勸告なんかするんです。恥づ――恥づかしくはないのか。大事な所なんだ――頑張らないでどうする？――死んでもいいから――死んでもいいから。

彼女は不意に軍警に跳びかかる。軍警は彼女を突きとばす。

翠英。馬鹿野郎！ 放せ！ 畜生！ 人殺し！

葉もあばれる。

葉青山。俺はもうやらん！ 殺せ！ さあ殺せ！總工會萬歲。

軍警は彼をグイグイ引き立てて去る。葉の「プロレタリア萬歲！」と云ふ聲が引つぱたかれ、こづかれる音と一緒に段々遠ざかつて行く。

後に殘つた三人はそれぞれ泣いてゐる。

間。

列車の驀進して來る音が聞える。

それは徐々近づく。

三人はキッとして首を上げる。齒を喰ひしばつてゐる。魯は走り出る。

列車は遂に停車場にとまる。

老婆。ああ。駄目か。（机に倒れ伏す）

間。かすかな騷ぎ。

不意に傳令が戸を開ける。

傳令。兵士だ！ 第十四師團の兵士だ。臆病になるな！ 最後まで戰ひ拔け！（去らうとする）

翠英。誰が運轉した？

傳令。鐵道總局の上級役員共だ。（去る）

翠英。ああ、有難い！ 裏切りぢやなかつた！

（幕）

第四幕

所　鄭州停車場及びその附近

時　二月六日の晝と夜

人物

周平甫

德寶

髯の男。乾分

保三

軍警部長

老婆。葉青山の母

男の子

勞働者多勢
軍警多勢

第一場

鄭州の或る金持の家の大きな一室。暴力團の幹部連中の宿所にあてられてゐる。

德寶と髯の男がボンヤリ阿片を吸つてゐる。

二月六日の夜頃。

髯の男は物倦さうに、一片の傳單を德寶に讀んで聞かせてゐる。

髯の男。(讀み續ける)だが、よそからの噂に依ると、諸君が此處へ來たのは、或るよくない事のためださうだ。君達は俺達を壓迫するために來たのださうだ。だが俺達はそんな事を信じたくない。なぜなら、君達も俺達も同じやうに勞働する兄弟だからだ。お互ひに力を合はせて助けるのが當り前で、殺し合ふべき筈がないからだ。

德寶。ふん。(鼻の先で冷笑する)

髯の男。(續けて讀む)もし君達が、噂の通り、軍閥の手先となつて俺達を殺しに來たのならば、よろしい、俺達はこの苦しみ拔いて來た生命を投げて、君達と爭はう。だが銃を持ち、劍を持つた君達が、身に寸鐵をも帶びてゐない俺達を殺せばとて何の譽れになるのだ。君達の農村が疲弊したのは誰の爲だ。君達が故鄕を離れて、こんな生命を的の恥づべき仕事に就かなければならなくなつたのは誰の爲だ。我々の敵は同じものだ！ 我々は味方同志なんだぞ！ 銃を捨てろ！ 俺達と手を握り合はう！

德寶。それつきりか？

髯の男。左樣。これでおしまひ。

德寶。ふん。そんな泣ごとで誰がだまされるもんか。

髯の男。さう云やアさうだがね、考へて見れやアあいつらもやるところ迄やるもんだね。

德寶。何がさ。

髯の男。だつて軍警がしやつちよこ立ちいしてえる上へ持つて來て、兵隊がワンサ乘り込んで來たんだから、いい加減腰がくだけてもよささうなもんぢやねえか、それようお前、こんなビラ迄刷つて兵士の宿舍へ忍び込んで撒いたつてんだから呆れたもんだ。

德寶。手前にやア無え度胸よ。

髯の男。兄貴とだつて緣が遠いぜ。

德寶。あたり前よ、二百や三百の目くされ金で命が棒に振れるけえ。

髯の男。ぢやアこちとらは尙更のこと五十や六十の涙金ぢやア刃物三昧はまづ御免だね。

間。

髯の男。兵隊が來れやアすぐ汽車は出るだらうと思つてたら、どうでえ、奴等が着いてからやがて一日にならうツてのに、絕えて通られえぜ。

德寶。命がいられねえとなつたら、ちよつと始末のつかねえものだな。

髯の男。時に親分はみつちりモノしたらうね。

德寶。きまつてらアな。まア、萬は缺けねえだらう。そこに拔け目はあるもんか。

髯の男。いい身分だな。

德寶。だが俺達だつてさう惡い身分ぢやアねえさ。

髯の男。それやア兵隊なんぞとくらべれやアな。

德寶。なアに、そんなものとくらべなくつてもよ。これで相當餘德があるからな。

髯の男。ちえツ、キハどい所でおのろけかい。

やめとくれよ。

徳賓。いつのうけた？　何を云やアがんでえ。まだのみけもしねえうちから出鼻を折るねえ。糞面白くもねえ。

周平甫がプリプリしながら這入つてくる。

徳賓。（起き上りながら）お歸んなせえ。如何でした。新雲鶚の方の首尾は？

周平甫。ふん、馬鹿にしてやがる。

徳賓。てえと？

周平甫。ビタ一文出さねえばかりか散々ッぱら人を怒鳴りつけやアがつた。

徳賓。へえ、呆れた野郎だ、聞きのがしならねえ、こつちのどこが不滿だと云ふのかね？

周平甫。總工會の創立大會の時の事まで引つ張り出しやアがつた。軍警隊にあばれさせるキッカケをトチつたなア惡かつたが、その代り事務所で散々あばれてやつたぢやねえか。

徳賓。さうとも、命を的の仕事をやつてるんだ。重箱の隅をほじくるやうなケチな事云ふない。

周平甫。それよう手前、俺達のやつた事ア何一つ役に立たなかつたとぬかしやがるんだ。

徳賓。飛んでもねえ野郎だ。

周平甫。成程慰問使の一件は保三の野郎のお蔭でドヂを踏んだが、あれにやア馮だつて責任がねえたア云はせねえ。

徳賓。さうですとも、さうですとも。

周平甫。いゝ、にせ市民大會の件と來ちやア、あれや全く黄殿辰の一存で、俺達アちよつと手を貸してやつただけのこつちやアねえか。それよう手前、すつかり俺達の氣のきかねえためだとぬかしやがつてビタ一文出しやアがらねえのだからひでえ野郎だ。

徳賓。（ニヤリと笑つて）ビタ一文出さねえたアひでえ奴でござんすな。

周平甫。警官ぢやアあるめえし、あんな野郎に飼犬みてえにこき使はれてたまるけえ。お氣に入らなきやア御勝手に、御縁がねえんでござんせうと、俺アよつぽど投げ出してやらうと思つたんだ。

徳賓。だが親分、腹も立たうがそいつアはやまらねえがようござんすぜ。

周平甫。だがかうなつちやア、俺達アいよいよ輕く見くびられるばかりよ。もともと軍警を正面に出さねえで濟むやうにと俺達にワタりをつけたんぢやアねえか。それがたうとう兵士まで繰り出すやうな事になつちまつたんだからなア。

徳賓。だつてそれやア何もこつちの落度ぢやアねえ。おどかしてもすかしても土寨勞働者がビクともしねえんだから仕様がねえ。死ぬ覺悟でゐるものに、殺すぞ、殺すぞツてタンカ切つた所で始まらねえなアわかり切つた話ぢやござんせんか。

周平甫。だからよ、それが新の野郎にやアわからねえから愛想をつかしたのよ。

徳賓。だがね、蹴つちまふのはわけはねえが、これでさきざきの事もよく考へなくつちやアいけませんぜ。今迄だつてせいぜいお目こぼしツてえ所だつたのが、ここでタンカを切つたお蔭で日蔭者なんざア考へもんですぜ。それに、あつしや思ふんですが、大體今迄あつし等があゝいふその何ていふか、政治家つてな連中とつきあひがなかつたのが飛んだ間違ひだつたんだ。あゝいふ連中にはきつと後ろぐらい事がふんだんにつきまとつてゐるもんです。正面に廻つちやア頭をさげてゐても、急所急所でギュッギュッと押へて行つてごらんなせえ。結構な身分ぢやアござんせんか。

周平甫。うーむ。

徳賓。こゝらで一つ手を變へて、氣を廣く持つ

てやつてごらんなせえまし。
周平市。ほんの短えつき合ひだが、さうする氣なら押へられる所が既にねえわけぢやアなささうだ。まあ第一にこの阿片だな。こんなものでもたぐりやアどんな芋が引かれて出ねえとも限らねえからなア。だが困つたもんだぞ。
徳寶。何がですえ？
周平市。俺ア業腹だつたので、ハイ左樣ならと迄は云はなかつたが、斬の野郎が、今度ア褌へてドヂい踏むなと笠にかかつて云やアがつた時に、さあ、やる事ア今迄通りやりませうが、お氣に入るかどうかはわかりませんといやがらせを云つて來ちやつたんだ。今度ア餘程うまくやつつけねえと、あいつの御機嫌は直らねえぞ。
　ここへ保三が息せき切つて這入つて來る。
徳寶。よう、保三が歸つて來た。
周平市。やい、手前、何處をほつつき歩いてゐやアがつたんだ。挨拶もしねえでこのいそがしい最中に、いゝか何かとドロンをきめられてゐて納まると思つてやがんのか。
保三。納まらなきやどうするんだ。
周平市。何だと?!（跳び立つ）何處へ行つてそんなセリフを覺えて來やがつた。親分に向つて何だ。
保三。ふん、親分かと思やア何だ、ケチな泥棒ぢやアねえか。
周平市。（寧ろ呆氣にとられる）な、何んだと？
保三。（おつかぶせて）貴樣は俺の知らねえ間に、二度迄俺の家を脅迫して二千元づつふんだくつたぢやねえか。そればかりぢやねえ。やれ愛國の正義のとぬかしやがつて、その實今度のざまア何だ。だまされて、チェッ、糞をくらへ。見つともねえ慰問使なんかにさせられて、生恥さらして——
周平市。何を云やあがる。こん畜生め。（跳びかかる）
徳寶。（彼を抱きとめる）まあ、まあ親分、相手になるだけの事アねえぢやござんせんか。
　その時戸口に一人の乾分が現はれる。
乾分。親分、大急ぎで電話口まで來ておくんなさい。總司令からでござんす。
周平市。（保三に）ちつと靜かに考えて見ろ。何處の世界に親分をつかまへて貴樣呼ばはりをする奴があるか、馬鹿め！（出て行く）
　徳寶と保三は暫くの間睨み合つてゐる。
徳寶。（不意に微笑して）手前はまだ青いなア。もうちつと人間が出來てると思つたのに。まあ、そんなにムキになつてのぼせるもんぢやアねえ。
保三。青からうが青くなからうが飛んだお世話だ。俺アあの女から、家が二度も脅迫されたつてことを聞いた時、餘つ程あのまんま突つ走らうかと思つたが、ヂッと樣子を見て考えてたんだ。だが見れば見る程貴樣達のやり方ア氣に食はねえ。一言怒鳴りつけてやらねえと氣が納まらなくなつたからやつて來たんだ。
徳寶。怒鳴るなアいくら怒鳴つたつてかまはねえが、怒鳴りやア怒鳴るだけ手前の損だから俺ア不びんだと思ふのさ。
保三。不びんたア手前達のこつた。不正不義をして掠めた金のおこぼれのおこぼれを貰つて這ひつくばつてやがる。
　周平市が跳び込んでくる。
周平市。（徳寶に）早速出掛けるんだ。今度ア一番ドヂ踏まねえやうにやつつけにやアならねえ。勞働者共の傳單を見て兵士までグラつき出しやアがつたんだ。今度ア手剛いから皆に覺悟をさせてくれ。時によつちやアぶつ

たぎつてもいいぞ。

德寶。いよいよ來たか。(立ち上つて行きかけ
る)

保三。やい、手前達ア まだやらうツて云ふの
か? あれだけしてまだ足りねえで、今度ア
ぶつたぎり迄しようといふのか。畜生め。も
う堪忍ならねえ。

保三は周平市に躍りかかる。格鬪。德寶
はニヤニヤ笑つて見てゐる。二人共散々
になぐられる。

周平市は蹴倒される。德寶もそこで遂に
援軍に出る。

德寶。こん畜生め! 野呆圖な眞似しやがると
たたつころすぞ!

三人で揉み合ふが、忽ち保三は德寶に蹴
倒されて、散々に踏んだり蹴つたりされ
る。戸の外へ蹴り出される。

周平市。出て——出てうせろ!　(幕)

第二場

鄭州停車場構内。二月六日の夜。
下手奥に機關車庫。その中から半分車
體を現はしてとまつてゐる機關車、上手
に停車場の建物、柵など。
闇夜。わづかにシグナルや構内電柱や建
物の窓から洩れるあかりや少數の人々の
持つカンテラで照らされてゐる。
上手から正面に掛けて一面の勞働者達。
それと機關車庫との間に軍警が銃劍を
擬して並んでゐる。
息詰るやうな沈默。
不意に沈默を破つて一人の勞働者が叫
ぶ。

○兵士諸君は銃を捨てたぞ。いつ迄君達は軍
閥の手先になつてゐようと云ふんだ。

○銃を捨てろ!

○銃を捨てろ!

だが軍警はただ默つて立つてゐる。
一人の男の子が出て來て一番前に立つて
ゐる軍警に云ふ。

男の子。自分で何やつてんのか判んないんだら
う? 軍閥の方が惡いんだつてことが判んな
いんだらう? 可哀さうだけど、馬鹿だなあ。

軍警は顏を歪めて默つてゐる。
部長が軍警のうしろから出て來て子供を
突きもどす。

部長。生意氣云ふな。(勞働者達に向つて)皆
行け行け! いつ迄立つてたつて仕樣がない
ぢやないか。お前達がいくら立つてゐたつ
て、この汽車は動く時にやア動くんだ。

勞働者。默れ! 汽車を動かす動かさないは俺
達の勝手だ。

○動かせるもんなら動かして見ろ。

その時勞働者達の中に動搖が起る。

○何だ、何だ。

○どうした。

□(叫ぶ)諸君!

○シッ!

○靜かに、靜かに!

□(叫ぶ　諸君! たつた今、警察局の裏手
の原に引きずり出されて、葉靑山は斬殺され
た!

大きな憤激の叫び。その中に際立つて老
婆の鋭い叫び聲が聞える。それを埋めて
勞働者達は叫ぶ。

○誰が、誰が殺したんだ。

□あの暴力團の連中だ! 周平市の一味だ!

○暴力團を叩きつぶせ!

○叩きつぶせ!

葉の母が前に押し出される。

老婆。息子！　息子！

□　諸君！　葉は最後迄頑張つた！　最後迄總工會萬歲！　を怒鳴つて死んで行つた！

大きな叫び。

老婆。息子の仇を打て！　息子の仇を打て！

○　葉の仇を打て！

○　暴力團を叩き殺せ！

○　軍閥をやつつけろ！

燃え上つた群集は上手になだれて行く。

狼狽した部長は怒鳴る。

部長。打て！　打て！　構はん！　ぶつ放せ！

軍警は勞働者達のうしろから發砲する。

大叫喚、滅茶苦茶な發砲。やがて段々に銃聲が止むと一緒に舞臺暗黑。

間。

不意に闇の中から聲が聞える。

○　諸君！　我々のストライキはかうして血にひたされて窒息してしまつた。それは失敗した。何故失敗したか？　諸君はその原因を眼のあたり見た。我々はそれを克服しなければならぬ一方我々は全國的總工會の基礎を抜き難く置いたといふ點で成功した。次の如きスローガンを我々の流血の闘爭の中から大衆的に戰ひとつた點で成功した。それは全爭議團員の口から出た一致した叫びだつたのだ。

軍閥を打倒せよ！

帝國主義を打倒せよ！

勞働者農民×××萬歲！

（幕）

（材料、考證等の點で藤枝丈夫君の助力を得たことが多い。記して好意を謝す。）

——一九二九・六——

日清戰後（五幕十二場）

所　東京。臺灣航路の汽船の中。及び臺灣

時　明治三十年十月以後

人物
小野田斧三郎。五十八歳。内務大臣
初子。四十五歳。その妻
楓。二十歳。その娘
國太郎。十七歳。その息子
野呂信吾。三十八歳。内務大臣祕書官
近江時三郎。五十二歳。ブ・ジョア
岩吉。五十七歳。車夫
横山。小野田家の書生
足部。その友達
月島保治。三十七歳。判事
市來。渡利。共にスッパ
杉山。三十九歳。總督府參事官
車夫。その手先
松田。日本鐵道會社課長
竹や。小野田家の女中
上野驛驛長
日本鐵道會社機關方、火夫等七八人
藝妓〆松以下六七人
川村音三郎一座の俳優多勢
同じく頭取
その觀客
物賣り
巡査（東京の二人、臺灣の六七人）
醉つ拂ひの兵士
臺灣土人多勢
通譯一人
技師二人
吏員二人
土人技手四人
代書屋
印形屋
船員多勢
船客多勢

第一幕

第一場

明治三十年十月。

東京神田三崎町川村座。川村音三郎一座の新演劇中。

舞臺はその劇場の内部で、客席と舞臺の一部を現はしてゐる。客席は下手舞臺端、花道に掛けて、ほんの一部分を作り、他は本當の客席を劇中劇場の客席と見なす。舞臺中央より上手に掛けて斜めに劇中劇場の舞臺。

劇中劇場の舞臺では、何か會議室らしい所で日本の將軍達が卓を圍んで會議してゐる所が演じられてゐる。だが、幕が開いた丁度その時、劇中劇場の舞臺は幕切れで、引幕がスルスルと引かれる。その引幕には、海を出る太陽の圖に「大日本帝國萬々歳。川村音三郎丈江」と書いてある。

引幕が引かれると一緒に客席はガヤガ

ヤと騒ぎ出す。
○や、大したもんぢや。樺山中將が一番よく似ちよつたぞオ。
○うん、似るには似ちよつたが意氣が足らん。そこへ行くと伊藤さんはいい意氣を出しちよつたワイ。
○いい意氣ぢやつた。名調子ぢやつたのオ。淸國うつべし！支那ぶつつぶすべし！と來た。
○（歌ふ）
倒れし戰友抱き起こし、
耳に口あて名を呼べば、
につこと笑うて眼に涙、
萬歲唱ふも口の內、
トコトットトット。
物賣り。ええ、お壽司はよろしう。ええ、お辨當はよろしう。
○ちよつと、壽司を一つに、上辨を一つおくれな。
物賣り。へい、有難う存じます。
○いくら？
物賣り。お壽司が四錢五厘、お辨當が十三錢で、十七錢五厘頂きます。
○（錢をやる）あいよ、ツリはいらないよ。
物賣り。へい、每度有難うござい。ええ、お壽司はよろしう。ええ上等のお菓子はよろしう。
　その時、揚幕の中が騷がしくなる。
木戶番。駄、駄目ですよ、駄目ですよ、旦那。
巡査。表へ出て！表へ出て！出ろと云つたら出んかッ！
兵士。（醉つてゐる）何をッ？失敬なッ！帝國軍人に對して何を云ふかッ！
木戶番。それや御國の爲に手柄のあつた軍人さんにや違ひないが、芝居をごらんになるにやア、やつぱり木戶錢を拂つて貰はなくちやア、困りますよ。
兵士。何ッ？我々軍人は貴樣等國民の爲に生命を投げ出して來たんぢやぞ。それを何ぢや、貴樣等はその間中、懷手で暮してゐやがつた癖して。芝居さへ我々に見せんとは何事ッちや。
巡査。懷手で暮して居つたとは何ぢや。戰場にこそ出なんだが、我々だつて寢る間もなく御奉公しとつたんぢやぞ。聞き棄てならん！表へ出え！
　ここで三人揉み合ひながら花道へ現はれる。
○また醉つ拂ひの兵隊だョ。
○それや生命がけで戰爭をやつて來たのは解るけど、近頃はあんまり鼻にかけ方がひど過ぎるョ。
兵士。只の芝居ぢやアねえ、貴樣等がやつてる芝居は戰爭芝居ぢやねえか。俺達のやつた事を仕組んだ芝居を俺達に見せねえッて法があるか。俺達をネタに金をまうけやアがつて、挨拶しねえたア何事ぢや。さア、俺アもう動かねえ！梃でも鐵砲でも動かねえぞ！（すわり込む）
　巡査がもう一人出て來る。
第二の巡査。何ぢや、また醉つ拂ひの兵隊か。
最初の巡査。こいつを表へおつぼり出してくれ！
第二の巡査。よし來た。さ、表へ出え！
　あばれる兵士を揚幕の中へ引きずり込む。內務大臣小野田斧三郎の妻初子が令孃楓をつれて棧敷に現はれる。初子も楓も當時の知識的婦人ゆゑ、髮は朝卷、就中楓は當時のモダン・ガールで、顏も中々ハッキリとして美しい。內務大臣秘書官野呂信吾が二人の後からついて

來て何くれと世話を燒いてゐる。髮を七三に分けた色白の好男子で、金縁眼鏡を掛け、モーニングを着てゐる。此のきらびやかな一群は忽ち客席の注目の的となる。

○よう、尤物が現はれたぞう。

○どれぢや、どれぢや、ほほう、これは踏めるぞ。

○貴公が踏んだ所でどうにもならんよ。高根の花ぢや。まああきらめろ。

○貴樣あのレデーの素性を知つちよるのか？

○知らんでどうする。有名な女ぢや。

○敎へろ、敎へろ、ホワット・イズ・ハア・ネエム？

○あれを知らんとは話せぬ男ぢや。あれこそは今を時めく內務大臣小野田斧三郎の一人娘楓の君ぢや。

　棧敷では――

楓。私もう少しで突き飛ばされさうだつたわ。

初子。本當に仕樣がないわねえ。もともと亂暴な所へ持つてつて、すつかり氣が荒くなつてるんだもの。何も芝居なぞへあばれて來なくてもよささうなもんぢやありませんか、ねえ、野呂さん。

野呂。しかし、ま、大槪の事は見遁してやるんですな。相當に働かしたんですから。

初子。それならそれでお巡りの方に、無暗と威張るばかりが能ぢやあるまいし、何とかうまく扱はせて、あんな大騷ぎにならないやうにさせたらいいぢやありませんか。

野呂。いや、これは一本參りました。確かに巡査も官權を笠に着過ぎてをります。早速何とか考へませう。全く兵隊とお巡りの喧嘩なんどといふものは國民敎育上面白くありませんよ。

初子。岩吉も岩吉だわ。折角お芝居を見せてやるつて云つてやつてるんだから、上つて來さへすれば今の騷ぎの時にだつて役に立つたんだのに、あのぢいやは變に頑固な所があつていけないよ。

楓。だけど母樣、やつぱり岩ぢいやの身になつて見れば、自分の息子が戰爭で死んだんだから、戰爭のお芝居なんか見たくないのは當然かも知れませんわ。

野呂。しかし、それにしても、名譽の戰死ぢやありませんか。我々だつたら、進んでかういふ芝居を見たいといふ氣になるでせうがなあ。

　土間では――

○（楓達の髮を見て）何だかをかしな結ひやうだわねえ。まるで馬鹿貝を見たやうで私ヤ好かないねえ。

○アラ、素敵だわア！　おツ母さんは古いから駄目なのよオ。

○つき從ふサムラヒは何者ぢや？

○心配か？

○さては知らんな。

○知つとるとも。口惜しいだらうが敎へてやらうか。あれこそは內務大臣祕書官野呂信吾と云つて、帝國大學初まつて以來の秀才と稱へられた、今では令孃楓の君の未來のハズバンドの第一候補さ。

○ふむん。無念ぢや。

○察するぞオ。

　木が這入る。

楓。（番附を見ながら）番附が英語入りですわよ。ちよつと感じがいいことねえ。

野呂。成程、成程。いい感じですねえ。カワムラス・ニュウ・シアタア・ゼ・ワア・オブ・ジャパン・アンド・チャイナ・カワムラス・カムパニイか。

初子。御前會議の場がすんだ所らしいね。今度は原口重吉宅の場ですよ。丁度よかつた。

重吉が出の時ですよ。

野呂。新聞で見ると再度に出来ない頑立をしてをりますねえ。だが、藝の方はどうでせうかねえ、評判倒れでもってことがあるといふ事ですから。

綱。だけど私、何だか、さもしいやうな氣がしますわ。

卸子。何がさ。

綱。だって自分の手柄話を自分が役者になつて皆のある前でやるなんて、いやですもないこと。

野呂。それやあんまり賞めた事でもありませんが、興行師として見れば、是が非でも引きずり出したい所でせうし、當人もまアそれで、國民の愛國心を涵養する一助ともなれば、何も恥ずるには及ばないことだと思ひますねえ。

綱。それやさうかも知れませんけど、それで、はれおてしくないとしたら、私どうしても重吉といふ人に好意が持てませんわ。

土間では——

○ あいつ中々英語も達者らしいのです。

○ 御門出の秀才ぢや、英語の達者は云ふ迄もないが、あまり生ッ白い顔をしてゐなさるから、あれで重造が三段、[illegible]の挑戰だとは驚いたらう。

○ ふむん。さうか。もう駄目ぢや。萬事は休した。

幕の前に頭取が現はれる。

頭取。さて皆々様、本日もかくは賑々しく御来場下され、樂屋一同になり代りまして、私より厚く御禮申し上げる次第にござりまする。さて幕も段々と相進み、次は原口重吉儀出の場でござりまするが、此の場よりにかねて御披露申し上げましたる通り、玄武門の勇士にして、名譽の金鵄勲章拜受者たる當代の軍神原口重吉自ら登場、親しく御目通り致しまする。何分演劇の方面は素人にござりますれば、藝の未熟は萬々にも御容赦の上、百聞は一見に如かず、結果に何なき此の有意義なる試みに御贊同あらむことを伏して願ひ上げ奉ります。さて本場の幕が相濟みますれば、[illegible]敵地へ出征のくだりと相成りますが、川村演劇が今回實演の脚本は、[illegible]も陣城に相當する次第につき、吾が陸海軍軍人に對しますも衷心は其の威嚴を示すため、すべて軍服を着用ゐますれば、自然戰時の事實に相違致すことと相成りまするが、それは右の次第とよろしく御推量の程願ひ上げまする。

猶、名譽ある勲章類が舞臺に現はれましたる其の節には、觀客諸君に於かせられましては、申す迄もござりませぬが、敬意の意を表せられたく、かくは豫め御注意申し上ぐる次第でござりまする。

頭取が引つ込むとすぐに幕が開く。上手二重、押入戸棚、すすけたる障子。破れたる鼠壁。下手門口。貧しき農家の體。原口重吉母親おまき、おくら重吉妹、仲人其他村の婦人等で塗へる。内藤家の書面。三々九度の盃事の最中よろし。原口の妻を見ると見物人しばしば頑立で騒ぐ。

○ 原口！ 重吉！——玄武門の一番乗！

○ 日本の守り神！——えらいぞ！

仲人。目出度い、目出度い。ホット重なるは忌言葉、三國一の嫁取濟ました、シャンシャンシャン。

おくらの父。重吉どんは陸軍中、品行方正、學術技藝に抜群し、善行證書を受けられたればは、おくらにとつてこんなよい婿はねえわい。

トばたばたになり、表の戸を開けて[illegible]

警官入り來る。

警官。（二重に片足掛けながら）竹家の伜重吉は近衞軍の兵籍にありて、既にその筋より徴發の令が出た。いざ來れ！

立ちかかる。皆々泣き騒ぐ。

○えッ、徴發の命令が。

○一夜の契も濟まねえうちに。

○今すぐにとは、ハア、情ねえ。

重吉の父。もし、憲兵樣、ごらんの通り、只今三々九度の盃事が濟んだばかり、慈悲だ、情だ、憲兵樣、せめて今晩一晩だけ――

憲兵。ええ、成らぬ。

重吉。ヤアヤア郷人、（チョボの乘地になり）さまで嘆き給ふべからず。徴發あるこそ幸ひなれ。鐵の草鞋を踏みしめて、國に仇なすヘロヘロのチャンチャン坊主がその首をチョキリチ　キリと切り落すこと水瓜冬瓜を切るよりもいと安し。ハヤおさらば。

ト立ちかかるを花嫁おくら取りすがる。

おくら。なう待つてたべ我が夫、あんまり聞えぬ重吉どん、そもや結納かはしてから、嫁入する日を待ちかねて、やつとの思ひで來たものを、固めの盃すむやすまずに御出陣、お前はそれでもよからうが、あとに殘つたこのわたし、辛き浮世にながらへて、人の口のはに上る恥をかけとの事かいなア。（ト隣家で淨るり――いやなづけある初菊殿、わしが事は思ひ切り、他家へ嫁入りして下され）エーモー折も折とて忌はしきあの淨るり、嫁入するとき門火を焚くは何のため、私やここまで死にに來た。何ぼう何でもやりはせぬ。

重吉。イヤ何というても御國のためぢや。ゆかねば日本臣民の義務が立たぬ。えゝ、聞分け（トおむらの肩に手をかけるを道具替りの知らせ）ないか。

ト つッぱなして憲兵巡査諸共に驅け去る。お初、楓、其他見物等涙を拭いてゐる。次の軍歌にて（道具廻る）

一 敵は幾萬ありとても
すべて烏合の衆なるぞ
烏合の衆にあらずとも
味方に正しき道理あり
邪はそれ正に勝ち難く
直は曲にぞ勝ち栗の
堅き心の一徹は
石に矢の立つ例あり
など て恐るる事やある
などてたゆたふ事やある――

この軍歌の途中で、聲を合せて歌ひ出す見物少からず。

舞臺一面の岩山、下手寄りに嚴重な門。門を圍んで泥土大石で築いた堅壘。壘の上に數流の黃龍旗が飜つてゐる。すべて平壤牡丹臺下玄武門前の體。上手寄りに十數名の日本兵が控へてゐる。道具留ると同時に喇叭卒白岩が突擊喇叭を吹く。と清國兵が一人壘の上に現はれて喇叭卒を射倒す。一人の兵隊が抱き起す。

兵隊。白岩、傷は淺いぞ。

白岩は死に瀕しながら、喇叭を口から放さず、とぎれとぎれながら吹き續ける。

少尉。白岩、立派だぞ。皆、進め！

日本兵は門の前に押し寄せる。すると壘の上に清國兵が多勢現はれて一齊射擊をする。日本兵手傷を負ふものが多い。

○やられたッ！

○うむ、殘念！

○大日本帝國萬歲！

彼等は止むなく手負ひを助け、一先、さつきの岩陰に戻り、傷の手當をする。原口重吉は矢立を取り出し手紙をしたためる。

少尉。こらッ、原口、何をしちよる。
原口。はツ。手紙を書いてをります。
少尉。誰にあてて書いちよるか。
原口。はツ。妻に宛てて書いてをります。
少尉。何、妻に？　こら、原口。この期に及んで女々しい心を出すとは何事ぢや。その手紙を見せい。
原口。はツ。（と手紙を差し出す）
少尉。（讀む）拜啓、軍人一たび家を辭して戰地に臨めば、又再び生還を期せんや。たとひこの重吉の身にいかなる事あるも、家人たるもの決して未練のふるまひあるべからず。我れ既に死を決せり。この他何事も云ふべきことなしと雖も、ただ一事心にかかるは、我れ出陣してより後に生れしといふ一女兒の事なり。たとひ我れに萬一の事ありとも、生長ののちは天晴軍人の士女と云はれ、婦徳の鏡とたたへらるるやう、今より家庭教育に注意すべし。草々。うむ、さうか。さう云ふわけであつたか。よい覺悟だ。叱つたのは俺が惡かつた。
原口。勿體ない事であります。
少尉。だが、お前はまだ結婚の式さへ濟まぬ。そのうちに、出陣したと云ふではないか。それに女の兒が生れたとは――
原口。お恥しい事であります。つい結婚の二月前から――

ト　その時壘の上に清國兵二人現はれて、可笑しき手眞似で馬鹿にする。

清國兵一。ちんしんようろ、くんけんくるめいたかりんかんきう、さうもうすがすんでいするとも、とらやあやあ。
清國兵二。うすうすうさすはもう、さきがちんぷんかくさんきんないろ、きんにやうにやう。
少尉。おのれ無禮なチャンチャン坊主。我が日本軍を輕蔑なすか。もう堪忍袋の緒が切れた。者共、突貫！

ト　サーベルを振つて先に立ち、一同突貫するが、再び一齊射撃に遇つてたじろぐ。

少尉。進め！　進め！　えい、意氣地のない奴原だ。誰か塀を乘り越えて、門を内から開く者はないか。

ト　原口が默つて飛び出して壘壁に取り附き、よぢ登り始める。

少尉。うむ、原口か。出來したぞ。おい、原口を見殺しにするな。壘上の敵に一齊射撃！

ト　兵隊等折敷の構へで壘上の敵を射撃して追ひ拂ふ。その間に原口は壘壁を越えて内に飛び降りる。内でワーッ、ワーッと云ふ騷ぎ、劍戟の音。やがて門扉がギーッと開く。

少尉。突貫！

ト　兵隊等を率ゐて門内に突入する。原口は再び壘壁の上に現はれ、日の丸の旗を立てて叫ぶ。

原口。大日本帝國萬歳！

ト　萬歳の形できまつてゐると、門内からステテコ節の合唱が聞える。

ゆうべ見たよな大きな夢を、
威海衞を背に負ひ、
鎭遠定遠を足にはき、
そのまた帆柱杖につき、
ほうかん山に腰をかけ、
四百餘州を一またぎ、
あんまり喉がかわくゆゑ、
黄河の水を、ひい、ふう、三口に呑みほせば、
何やら咽喉に立つたやう、
えへんえへんと咳ばらひ、
つばきを吐き出しよく見れば、
萬里の長城が飛んで出た――

觀客一同拍手喝采のうちに暗轉。タイトルが出る。

タイトル。だが、芝居と實際とは、何といふ大きな相違か。

暗黑の中、劇中劇場の舞臺の上のみが使用される。背景は映畫で、ボロボロの田舍屋、母親がボロをつくろつてゐる。不意に遠くで號外賣の鈴の音。騷ぎが近づく。（この短いシーンは德永直の短篇「カットされない場景」から借りた）

○號外だぞ、號外だぞ。

○おう、お吉、號外だぞ。早う行つて見べえ。

○勝つたのか。

○おう、早う來う、號外だ。

母。芳ッ！　何處にゐる。芳ッ！

母親はボロを抛り出して怒鳴る。

表から爺が一人覗き込んで去る。

爺。おう、平壤が落ちたぞ。平壤がよう。

芳が這入つて來る。母親に芳を外へ突き出す。

母。行くだ。早う行くだ。早う行つて號外貰つて來るだ。

芳は跳び出して行く。暗轉。背景は映畫で村はづれの路。號外の束を片手に差上げて、喚いてゐる號外賣を、爺さん婆さん女房子供連が身動きも出來ぬやうに取り卷いて、一塊のまま動いて來る。（背景の映畫を移動させる）

○よう、號外よこせ。

○何處が落ちたんぢや。

○平壤だとよ、平壤。

○早うよこせ。

號外賣り。いかん、いかん、五厘だ、五厘持つて來う。

○よこせ、よこせ。

突き飛ばされ、引きずられて、老爺老婆はまろびころびながら泣き騷ぐ。

○ありがたいこつちや。これで息子の顏が見られるなう。

○駄目だ。まだ始まつたばかりぢやねえか。

○平壤なんて、入口だねえか。

○ちよつと見しとくれよ。

○見したつていいぢやねえか。

號外賣り。どいた、どいた。五厘持つと來ねば駄目ずや。どけ、どけ。

○何が駄目ぢや。息子一匹おつ盜られたに、號外一枚がどうしてくれられんかッ。

○さうだ、さうだ、太十さとこは名譽の戰死が出ただ。一枚くれとけ。

○ぬすつと。出せ！

號外賣り。そんな事、俺が知るもんか。

○、何、知らん？

○どうしてもよこせねえか。ふんだくるぞ。

芳は素早くモグリこんで號外を引つたくり、バラまき、自分も二三枚取る。

號外賣り。こらッ、餓鬼ッ、叩つ殺すぞ！

芳は走る。（背景の急速な移動）一瞬の暗轉ののち、再び以前の家、芳が飛び込んで來る。

芳。おつかア。ほれ。

母親は受け取つたが、字が讀めない。

芳。（號外を引つたくつて）俺が讀んでやろ。（讀む）平壤――陷落す――九月十五日――元山枝隊長佐藤大佐――牡丹臺を攻む――激戰十二時間ののち――敵軍遂に――玄武門上に白旗を――揚げて降る――我軍日下平壤に入城中。

母。どうしたのかなう？

芳。平壤が落ちたんぢや。

母。ちやんは生きとるのかい？

二人の眼は號外の上をさまよふ。

母。原口重吉といふ名前は書いてねえのかい？

陸軍步兵一等卒だぞ。
芳。無え。書いてねえぞ。
母。もう一つの方のにや書いてねえ？
芳。どれだつて一つもんだい。馬鹿だなあ。
（笑ふ）
母。（怒つて芳をなぐる）この餓鬼め、ちやんが死んだ日にやお前達や明日からどうして食つてくだッ！　憑たれめッ！　ちやんが死んだ日にや——（泣き倒れる）聞いて來う。地主さんの所さ行つて、ちやんは生きとりますかつて聞いて來う。御奉公に役場さ草鞋十足も納めてあるだ。聞かしとくれるべえ。とつとと行つて聞いて來う。

芳はベソをかきながら表へ出る。一瞬の暗轉で、背景は立派な地主の家の裏口。

芳がションボリ立つてゐる。

芳。ちやんは戰死しましたでせうか？（答へなし）ちやんは戰死したでせうか？（答へなし。段々泣聲になる）ちやんは生きとりませうか？（答へなし。あとは啜泣きとなる）

（舞臺廻る）

第二場

神田末廣町にある小野田斧三郎邸。楓の書齋。嫁の書齋にしては書物が澤山置いてあるのが眼につく。同日の夕方。楓の弟國太郎が何か本を音讀してゐる。

國太郎。一寸御免を蒙りまして、日本の御百姓様、日本の御商賣人様、日本の御細工人様、職人様、其他士族様、御醫者様、船頭様、馬かた様、鷹匠様、飴賣様、お乳母様、新×様共、御一統に申上げまする。さてあなた方は皆々御同様に一つの大きなる寶をお持ちでござる。この大きなる寶とは何んでござる歟。打出の小槌か、錢のなる樹か。金か、銀か、珊瑚か、ダイヤモンドか、但しは別嬪の女房を云ふか。才智すぐれたる兒子の事か。いや〳〵こんなものではない、まだ是等よりも一層尊い一つの寶がござる。それが卽ち自由の權と申すものぢや。元來あなた方の自由權利は、中々命よりも重きものにて、自由が無ければ生きても詮ないと申す程の者でござる。ウン、これは中々書き方が民衆的でいいなあ。かういふ調子で行かなくちやいかん。

さつきから遠くで、「お歸りイ」といふ聲やバタバタ足音などが聞えてゐたが、下女の竹やが驅けて來て襖を開ける。

竹や。お坊ちやま、奥様やお孃樣がお歸りでございますよ。あら、こんなに暗い所で。梅やはランプを持つて來なかつたんでございますか？
國太郎。僕が姉さんの部屋へ這入りこんでることを知らないんだよ、きつと。
竹や。仕樣がない子だこと。すぐ持つて參ります。（去る）

國太郎は本を讀み續ける。楓が這入つてくる。

國太郎。（振り向かずに）お歸んなさい。
楓。また人の部屋を占領してるのね、國ちやんは。
國太郎。うん、どうも此の部屋の方が妙に感覺が落ち着くんでね。
楓。ぢやお母樣に申し上げていつその事國ちやんと部屋を取つ換へつこしませうか？
國太郎。いや、さうしちまふとまた此の部屋では落ち着けなくなつちまふかも知れないんだ。
楓。まあ、むづかしいのね。
國太郎。どうも始末に困るよ、から妙に感覺が鋭敏なのも。芝居どうだつた？

楓。ずゐぶん勇ましい事は勇ましかつたけど、原口重吉が自分で役者になつて、自分の手柄をやつて見せてるのは何だか姉さんなんかには厭に感じられたわ。

國太郎。それやさうだらうね、どうせ戰爭芝居なんて初めつから上ツつべりのしたものなんだから。

楓。さう一概に云つたものでもないわ。(着物を着換へる。帶の間から手紙を落す)

竹や。(ランプを持つて來る)遲くなつて申しわけがございません。(着換への手傳ひをする。遠くで男の笑ひ聲が聞える)

國太郎。おや誰か來てるの?

楓。ええ野呂さんが何かお父様に用があるからつて芝居から一緒に家へいらつしやつたの。國ちやんお會ひしてくるといいわ。

國太郎。ま、エキスキューース・ミーだ。御用があるなら向うからお越しを願ひたいね。

外で救世軍の樂隊が聞える。「信ずる者は誰も皆救はれむ。只信ぜよ、只信ぜよ、信ずる者は誰も皆救はれむ。——皆さん、今晩、神田美土代町の青年會館に於きまして、基督教のお話があります。どうぞおいで下さい。」子供の聲がする。「ヤソ、ミソ、テッカミソ。」救世軍が遠のく。數人の子供がうたふ。「夕燒小燒明日天氣になアれ。」子供が叫ぶ。「おい、かうもりが出たぞ、かうもりが出たぞ。」「草鞋持つて來い、草鞋持つて來い。」

楓。(着換へ終つて)今歸りしなに厭なもの見ちやつたわ。

國太郎。何さ。

楓。上野の廣小路の所でね、鐵道馬車の馬がまた泡を吹いて倒れてたの。白眼を剥き出してね、可哀さうだつたわ。

國太郎。厭だなあ。

楓。それをね、鞭でもつて滅茶苦茶にぶつてゐるの。しまひにはどこからか竹の棒を持ち出してそれでぶつてゐるの。

國太郎。厭だなあ。この夏は、毎日きまつて二匹や三匹倒れたつけなあ。

楓。私どうしても鐵道馬車にだけは乘る氣がしないわ。人間なら痛いとか苦しいとか云へるんだけどねえ。

國太郎。その人間も自由權利がなければ馬も同じことさ。リベルチーとライトだ。

楓。だつてさういふ議論は憲法御發布や國會開設の前には本當だつたかも知れないけど——

國太郎。なアに今だつて同じことさ。たとへば同じ人間でも婦人には參政權がないぢやないか。

楓。國ちやんの議論は過激に走るからいけないわ。

國太郎。所が僕は十年も前の自由民權論ぢやなくて、もう少し先迄考へてゐるんだ。例へば國家といふやうなものも僕にとつてはクエッション・マークなんだ。だから今度の戰爭なんか僕にとつては根本的に同感出來ないんだ。

楓。シッ、駄目よ、そんな大きな聲を出しちや。お父様に聞えたら大變ぢやないの。

國太郎。この植木枝盛の民權自由論を讀み始める前にね、ここに置いてあつたからちよつと此の凱旋記念帖を覗いて見たんだがね、何だか可笑しくつて思はず笑ひ出しちやつたのさ。そら、この人の卷の卷尾に歌がのつてゐるでせう。これが可笑しいんだ。皇軍の全勝を祝ひて。すめ國の神のみゐづのそはれればやたたかひごとに勝たざるはなき。ちはやふる神の御國の神風になびかぬ唐のしこ草もなし。日の御旗ふきなびかしし神風にいろうし

なへる唐にしきかな。あははは、どれを讀んでも神、神だ。これぢや救世軍と同じぢやないか。人智の開發もこの調子ぢや前途遼遠さ。(手紙を見つける)おや、何だい、これ。

楓。(あわてて取り戻さうとする)駄目よ、國ちやん。

國太郞。はゝア。また月島さんからだな。隨分勤勉な人だなア。

楓。返してつてば。(たうとう取り戻す)

國太郞。また相變らず理想主義のお說教だらう。文明はいかん、自然に返れと來るんだ。

　そこへ母親初子が這入つて來る。

國太郞。お歸んなさい。

初子。はい只今。まあ、お前さん達は何をしてるの？　野呂さんをあつちにおいてきぼりにして。早くお客間へおいでな。

國太郞。行つてもいいけど、どうもあの先生おしやべりだからなあ。口が滑り出したらキリがないんだから。

初子。爲になることならうかがつたらいいぢやないか。

國太郞　ところがあの先生の說は俗臭紛々だからなあ。

初子。何を生意氣云つてるのさ。來ないならこへおつれしますよ。

楓。駄目よ、ここはちらかつてゐるから。

初子。構やしないよ。家の人見たいなものだから。それより國太郞、野呂さんのお話に生意氣な插出口をするんぢやありませんよ。(去る)

國太郞。オーライト。

　楓はそこいらを取片付けてゐる。野呂が初子につれられて來る。

野呂。やあ、押し掛けて參りましたよ。構ひませんか。

楓。さあどうぞ。

野呂。國太郞君、近頃はいかがです、腦の方の工合は。

初子。お蔭樣で、近頃は痛むやうな事もないやうですよ。

野呂。それは結構です。何しろ家に引きこもつて因循するのはいけません。折角學業を半途で廢しても意味がなくなりますからなあ。たまに芝居見物などに行つて鬱を散ぜんといけませんなあ。

國太郞。川村のニュー・シアターは如何でした？

野呂。精神はよろしいが、技術が未熟なので殘念でした。それよりもまたもや××と××との衝突があつたのは苦々しいことでした。三國干涉で臥薪嘗膽などと口では云つてゐますが、何と云つてもまだ戰勝氣分に醉つてゐて、擧國一致といふ精神が不十分です。軟弱外交のなんのと云つて、日比谷に集まつたりするだけが能ぢやありませんよ。外交が軟弱なのも、もとはと尋ぬれば、これ皆國力が充實して居らんからぢやありませんか。

初子。本當にさうですわねえ。

野呂。しかも一方ですな、軟弱外交を責める輩が、遼東を還附したことばかり騷いで、臺灣といふ新領土を得たことを云はないのは皆がまだ臺灣の價値を知らんからだと私は思ひますな。愚見に依れば、臺灣は佛國の彼のアルゼリー、印度支那、英國のボルネオ、ローデシアにも優る殖民地です。我が國は領臺以來の一ケ年間に六百九十萬圓の補助金を支出しましたが、私は十年を出でずして、臺灣が必ず補助金を必要とせぬばかりか、母國に巨額の利益を與へる殖民地となることを斷言致してはばかりません。只今も閣下にお眼にかかつて、臺灣の有望な事について懇々とお話した所です。

楓。(調子を合はせて)まあ、臺灣てそんなにいい所なんですの?

初子。それやお前、よくなかつたら引き合やしないわね。十ケ月も戰つて、何千人といふ兵隊さんが生命を捧げてさ、分捕つたのが償金二億兩と臺灣きりぢやないか。だから、餘つ程よくなかつた日には折角の戰爭が無駄骨折になつちまふよ。

野呂。その點は御心配御無用です。天のなせる寶物庫とでも云ひませうか、砂糖、鹽、樟腦、茶、材木などは無盡藏と云つてもよろしい。例へば樟腦は樟樹から取りますが、臺灣の山には周圍が三十尺から四十尺にもなる大木が所嫌はずモクモク生えてゐて、そいつを打つたぎつて煮さへすればいいのですが、かういふ大木になると一本から一萬圓もの樟腦が取れるといふから凄いぢやありませんか。

初子。まあ、一本から一萬圓。

野呂。何しろ臺灣は熱帶ですから、樹木の成長が極めて敏速です。お茶の樹などにしましても親木から移植して三年たつと、もう三尺の高さになり、四月、六月、七月、八月、九月、十一月と六度も芽を摘むことが出來るのだから、弘法大師もハダシです。米などは二度の收穫は普通で、所に依つては三度收穫出來るといふから大したものです。さうさう、今日はお嬢さんにお土産を持つて來て居つたのですが、芝居見物に取りまぎれて今迄とんと忘れて居りました。ちよつと取つて參ります。(立ちかける)

初子。あら、ようござんすよ、女中に取りにやらせますから。(手を拍つ)

竹や。はあい。(現はれる)

初子。あの、お玄關ですわね?——

野呂。は、さうです。紫の袱紗に包んだ四角な本がありますから、ちよつと持つてきて下さい。

竹や。畏りました。(去る)

野呂。新領土臺灣寫眞帖ですがね、以前部下だつた者が總督府の參事官になつて行つとりますので、それが送つてよこしました。もう宣傳寫眞帖迄作つてゐるとは總督府も中々やるわいと感心しました。や、寫眞も印刷も相當立派に上つとりますよ。

竹や。(現はれる)これで御座いますか。

野呂。や、これこれ。御苦勞でした。(竹や去る。本を取り出して)表紙なども中々綺麗に出來とります。これが總督樺山大將と。(以下アルバムの頁をめくるに從つて、舞臺の片隅につるされたスクリーンに幻燈がうつる)これが玉山です。富士山より二千尺も高いといふ日本一の高山です。餘り高いので、始終頂にはかういふ風に雲がかかつてゐて、すつかり見えるのはごく珍しいといふから大したものです。これは郵便物を輕便鐵道に乘せて運んでをる所です。熱海にありますな、あれと同じ理窟です。人夫が一臺につき二人づつついてゐて、登る時は押す、下る時はかうして乘つてゐるのです。この郵便物の輸送といふのが中々骨でしてな、土匪が兎角郵便物を狙ひたがるのです。

初子。土匪つて何ですの?

野呂。土匪といふのは臺灣土着の土人でしてな、強盜殺人を業とする連中で、之には淸國も手を燒いて居つたのです。

楓。まあいやだ。

野呂。これについてはかう云ふ話があります。去年の四月、講和條約締結の席上、伊藤博文公が李鴻章に向つて「臺灣の島狀は如何でおはすか。」と聞いたのです。すると李鴻章が答へるには「臺灣には、三年小叛五年大叛といふ諺がおはして實に難治の地でおはす。」

さあ判らない。そこで伊藤公が「三年小叛五年大叛とは如何なる事でおはすか。」と聞くと李鴻章が答へて「それは島内を横行する不逞浮浪の徒が、黨をなして暴行を働き、良民を害し、財寶を横奪し、時の政府の施政方針に反抗する所謂暴徒の蜂起が、三年目には小さく、五年目には大きく反覆されるといふ語でおはす。」と云つたので、伊藤公は眉間に憂色をたたへられたが、やがて語をついで「その他には統治上參考になる事どもおはさぬか。」と聞くと「いや、島の地域の十分の六、七を占有する到底教化し難い生蕃といふのがおはす。」といふ大變な答へなのです。「教化し難いといふのは如何なるわけにておはすか。」と聞くと李鴻章答へて曰く「彼等は猛獸と等しく深山溪谷を住居として爭鬪を事とし、人の頭を獲るを以て最も誇りとする奇習ある者にておはす、之を以て臺灣を南蠻化外の地といふのでおはす。」南蠻化外、即ち南の方の荒れ果てた開化出來ぬ土地といふ意ですな。これ等がその生蕃です。これがピュマ族、こつちが男、こつちが女です。これはアタイヤル族の女。刺青をした上、耳に棒を突き刺してをりますな。パイワン族、ツォオ族、ヴォヌム族、アミ族、かういふ連中が深山幽谷の中に巣喰つてゐて、何かと云ふと人の首を切る。切るとその首をまづ谷川で洗つて――

初子。まあ、野呂さん、もう澤山ですよ、氣味の惡い。

野呂。や、どうもつい調子に乘つて飛んだ所へ脫線してしまひました。

楓。あなた折角さつき迄あんなに賞めてらしつたのに、これでは臺灣は臺無しぢやありませんか。

野呂。こいつは飛んだ所で失敗しました。だが美しい薔薇には棘があります。私は元來殖民地を持つてゐる民族は庭を持つてゐる家だと思つとります。庭に生えてゐる樹や草は人間の吐き出す濁つた空氣で育てられ、人はまた樹や草の出す新鮮な空氣で育てられる。國民は餘つた活力を殖民地に排泄し、殖民地はまた母國に新鮮な活力を給與する。さればこそ殖民地を持つ民族は世界いづれの國をとつて見ても、活動成長せざるは無き有樣です。しかし殖民地になるやうな所は天產こそ豐かなれ、未開野蠻な土地ですから、或ひは黑ん坊、或ひは生蕃、或ひは土匪、これらの徒が横行してゐることは理の當然なのです。しかし近衞師團や樺山總督の努力に依つて、臺北、臺南等といふ大都會の城内はもうお孃さんがいらしつたつて何の危險もありません。

楓。私、いやですわ、そんな所。

野呂。いや、日本もたうとう殖民地を持つ國になつたのですから、これからは婦人連も、國內で女子に參政權を與ふべしなどと演說ばかりしてゐないで、いや、それも結構ですが、そんなことより一つ殖民地へでも押し渡つて、といふやうな進取的な氣象にならなければ本當の新しい婦人とは云へんと思ひますなあ。國太郎君もどうです。一つ南方の天地に雄飛しては。

國太郎。土人や生蕃の首を切りにですか？

野呂。いや、そんな事は兵士なり警官なりがしてくれますよ。大鑛山王乃至は大砂糖王になるんですよ。何しろ國太郎君などは幸福な境遇に生れた人ですよ。尊大人が內務大臣で政權を握つて居られる。これで金力があれば鬼に金棒、世界に恐れるものはありませんよ。

その時、外で號外の鈴の音。「號外、號

野呂。外、大藏大臣の辭職。」(驚いて立ちかかる)えッ、諸井さんが辭職?　これやいかん。奥さん、すみません。一寸號外を買はせて下さい。閣下、閣下。

初子。竹や！　竹や！

二人は出て行く。外では號外の聲。地震が搖る。

初子。あらッ、地震だわ！

岡太郎。(平氣で)うん。

楓。地震よ、地震よ。(驅けて行く)(舞臺廻る)

第三場

岩吉の車夫部屋で下手の門に續いてゐる。岩吉と書生横山が坐つてゐる。前場に續いて地震が搖つてゐる。號外の聲が聞えてゐる。

横山。また、弱震の弱といふ所だな。

岩吉。戰に行つたものに取つちやあ、こんなものは何でもねえだらうて。ホラ、もうやんぢやつた。

竹や。(聲だけ聞える)横山さん！　號外、號外を早く買つておくれつて。何處にゐるのさ。

横山。ホイ來た。ええと號外の事は何々つたつけえかなあ。エキスプレスぢやねえ。ええと。(驅け出して行く)

竹や。(聲のみ)早くよう、横山さん、何を愚圖愚圖してるのよう。

横山。(號外を持つて走り過ぎる)占めたッ。さうだ、エキストラだ。(號外を渡して戻つて來る)

岩吉。何の號外だね。

横山。大藏大臣の諸井さんが病氣で辭職したんだ。

岩吉。へえ、こいつあ大事だね。諸井さんは内閣の金穴なんでせうに。

横山。さうさ。現内閣は云はば閥族内閣で、金穴と云へば諸井さんを通じて五井と結んでゐるだけなんだから、ここで諸井さんに投げ出されたら、この内閣も長い事はあるまいな。うちの大將も今頃はさぞガッカリしてゐるだらうよ。

岩吉。さうかねえ。これでこの内閣も倒れるのかねえ。

横山。倒れるね。次に來るのは五菱の呼吸のかかつた内閣だらう。去年の遼東還附の騷ぎの時に民軍の采配を振つて政府に肉薄したのが大熊さんの改進黨で、大熊さんは五菱の番頭みたいなものだから、そこらの所から推量を廻らすと、大よその當りは附くと云ふものさ。

そこへ横山の友達足部仁太郎が號外を握つて這入つて來る。

足部。今晩は、よう、岩吉君を相手に政治談かね。

横山。岩吉君は君、中々の政治通だぜ。しかも「門前のぢぢい習はぬ經を讀む」の域を脫して既に一家を成しとるよ。

足部。岩吉君の名聲は僕も夙に聞き及んでをるよ。所で君此の號外見たか？

横山。うん、今その號外のことで談論しとつた所だ。

足部。實に驚き桃の木だ。アイ・ウォンダー、驚愕の至りだ。諸井さんの心事が僕にはさつぱり了解出來ん。今辭職したら内閣が倒れる事は目前に見えてをるぢやないか。

横山。そこだ。そこに關して僕は面白い話を知つとるんぢや。昨年うちの大將が京都に旅行した事があつたらう。あの時の話を野呂

秘書官からちよつと聞き出したんぢやが、フト金につまつて五井の京都支店に金五百圓也の借金の申込をしたんぢや。

足部。ほう。

横山。政府の大官や閥族が富豪から返濟期無限の借金をすることはいつもの事ぢやが、この時京都支店長小田といふ男は一言のもとにはねつけたと云ふんぢや。

足部。ほほう、えらい事をやり居つたな。

横山。野呂さんがその事を話してえらくおこりよつたよ。今迄は二つ返事で用立ててゐたものが、急に開き直つて、銀行であるから無論貸出しは致すが、無擔保では御相談にならぬ、擔保を御持參あればいつ何時でも御用立て致すと來た。だがこの肱鐵を食つたのは、うちの大將だけぢやないさうだ。どうも流石の五井も閥族のお貸し下されには閉口して、斷然緣を切る氣になつたらしいな。

足部。ふむ、して見るとこれは奴等ももう、閥族の助けを借りなくとも十分やつて行けるだけの屋臺を得たと見えるなう。

横山。さうらしい。此の戰爭で日本の工業も愈々盛んになつたので、今迄の前垂主義を改めて、官邊の利權をアテにせず獨立獨歩で行く第一歩を踏み出したと見えるわい。

岩吉。お金持は段々えらくなつて行くばかりですな。

足部。さうさ。どうだ横山、ここらで我々もオピニヨンを改めて、法律書生にはグードバイして、株屋の手代にでもなつて年期を入れた方がよささうだぜ。

岩吉。あんた方はさうやつて、まあ勉強しさへすれやあ何にでもなれるからいいが、わつし等車夫と來た日にやあ、一生涯車の曳きづめでお抱へで十四五圓、もうろうにでもなつた日にやあ、朝つぱらから眞夜中迄働いて、日に四十錢にでもなれやおんの字でさあ。それでまあガキの一人もあつてごらんなせえ、まあ一日に割つて、(ソロバンを取つて)米が一升五合として十七錢、オカズに五錢、薪代炭代に五錢、石油が五厘、屋賃が七十五錢の長屋として日に二錢五厘、蒲團の損料が二錢五厘、それにまあ、酒に三錢、煙草に一錢、子供の小遣に一錢づつもはずみやす、これでもう三十六錢五厘だ。やれ車の稅だ何だといふのが何處から出ますい。それで車界黨といふやうなものをこしらへてあばれたもんでさ。

足部。さうさう、岩吉君に車界黨の話を聞かして貰ふ約束がしてあつたなあ。車の世界と書いて社會とモヂつたなんぞは中々風流氣があつたぢやないか。岩吉君も大分あばれたんださうぢやないか。

岩吉。あばれましたよ、十六年だから今からもう十二年も前の話でさ。一つ話すかね。

横山。一席頼むぜ。

岩吉。この鐵道馬車てえ奴が出來たんで、車夫仲間は仕事がなくなつたんで、奥宮てえ先生が音頭取りで、この上の神田明神に東京中の車夫が集まつて、馬車鐵道反對同盟會てえ奴をこさへたんでさ。こいつがあとで車界黨てえ名に變つたんだが、あつし等何も鐵道馬車を倒さうてだけのこつちやなくつて、甘く行つたら、この力で石崎初め金持共を片ッ端からやつつけちまふつもりだつたんでさ。

足部。成程ね。

岩吉。演說會なんて隨分盛んなもんでしたぜ。とても今時の演說會見たいな生やさしいもんぢやねえ。からハッピを着込んだ連中が、たんかを切る。中止になるてえと、拳骨が飛ぶ、煙草ぼんが飛ぶ、臨監の警部巡査なんかメチャメチャに擲つて半殺しにした。演說會で

烟草ぼんを差止めになつたなあこの時が初まりでさあ。

足部。ふうむ、こいつあ初耳だなあ。

横山。それにしても凄い事をやつたもんだなあ。

岩吉。所があんまり勢が烈しいんで、結社は禁止される、奥宮さんは石川島に送られる、それでたうとうオヂャンになつちまつたが、隨分盛んにやつたもんでさ。何しろ法律とか政府の命令とか云やあてんから從つちやあいけねえものと思ひ込んでゐたんだからねえ。

足部。こいつあいい。

岩吉。憲法が御發布になつて國會が開設されても、わつし等にやあ何のいい事もねえが、車夫仲間も近頃ぢやアからつきし意氣地がなくなつちまつたよ。だがこれで車夫なんかでも田舎の百姓にくらべれやまだましでさ。何しろわしの國の方ぢや、まあ一町歩位の地所持ちで一日の賃が一錢位にしきや當らねえんだからね。小作人と來た日にやア——

竹や。(聲だけ)岩吉さん! 旦那樣のお出掛け!

岩吉。はいよ。(立つて足袋を穿き草鞋を穿く)

横山。諸井さんの辭職で閣議でも開くんだらう。(去る)

足部ど。れ僕もグードバイとするかな。(立ち去る。岩吉は車を玄關の方へ持つて行く。「いつていらつしやいまし。」といふ多勢の聲が聞える。小野田を乘せた車を曳いて花道へ曳つぱり込む)

第二幕

第一場

逗子濱岸にある近江時三郎の別莊。海を見はらす高臺にある座敷。明治三十一年一月。

小野田斧三郎、野呂信吾、近江時三郎が酒を呑んでゐる。藝者六七人酌をしたり、唄つたりしてゐる。

△(唄ふ)

支那の李鴻章は鰯か雜魚かネェォイ、
鯛に追はれて逃げてゆくんだよ、ホイホイ。

□(追つかけて唄ふ)

旅順取られて威海衛が落ちる、
北洋艦隊全滅す全滅す、
これなら開戰するのぢやなかつたに、
落膽落膽、つらいつらい。

野呂。ア、つらいつらい、と。

○さあ御前、お乾しなさいよ。

野呂。乾すのは乾すが、もう、お前のお酌ぢや厭だとおつしやるんだ。

○アラ失禮なノーさんね。ねえ御前本當に妾ぢやお厭なの?

小野田。厭と云ふわけではないがの。ならうことなら、といふ所ぢやな。

○ならうことなら、してほしくないとおつしやるの?

野呂。ノーノー、ならうことなら〆松にして貰ひたいとおつしやるのさ。

○あははは、さうならさうとおつしやればいいに、御前はホンにお氣が小さいのね。だから妾は御前が好きなのさ。(抱きつく)可愛い鬚の赤ちやんや。さあ〆ちやん、早く御前にお酌をして頂戴よ。

〆松(雛妓)。あい、御前、お一つ。

小野田。むう。(呑む)

○アラ、ただ、むうツきりなの。色氣がないわね。何とかおつしやいよ。アイ・ラヴ・ユー。余はハッピーであるぞよ。あははは。

野呂。野呂懐中時計を出して時間を見る。御前、そろそろ始めませうか。正三時で
ございます。
小野田。新橋行の汽車は何時ぢやつたな？
野呂。五時半發のがよいと思ひますが。
小野田。さうか、ぢや始めるとしよう。
野呂。さあ妓共、ちよつと海岸へ散歩にでも行
つて來い。
○　アラ、追ひ立てなの？
小野田。國政上の大事な相談ぢや。一時間たた
んうちに歸つて來るんぢやないぞ。
△　あら御前、時は一月でございますよ。寒中で
すよ。
□　吹きつつあらしの所へ出たらお陀佛だわ、
それこそ。
野呂。國政上の大事な仕事だと云つたら判らん
か。
△　ひどいわ、御前。
○　即刻、近江時三郎の別莊より退去を命じ、
一時間以内出入することを禁ず。まるで保
安條令だわね。人は違ふけれど、矢つ張り内
務大臣に命令されたんだから、へいへいと出
て行くより仕樣がないわねえさ、〆ちやん、
行かうよ。

小野田。〆松は殘つとれ。
〆松。あら――はい。
野呂。でも――
小野田。子供ぢや。何が解るもんか。
近江。さ、〆松だけ殘つて皆出て行つた。出て
行つた。
　近江は部屋の周圍を見廻る。三人寄り
合つて坐る。小野田は片手で〆松の手を
弄びながら話す。
小野田。一體場所は何處なんぢやね。
野呂。（地圖を取り出して）ええと、新竹、竹南、
苗栗、ここでございます。この苗栗地方でご
ざいます。
近江。聞く所に依りますると、この地方は臺
灣中でも最も地味が豐かでございまして、
甘蔗には最も有望ぢやといふことでございま
す。
野呂。それに此の土地を買ふと云ふ吉田保之助
といふのは五井の影武者だと云ふぢやござい
ませんか。何でも物産の方の本店詰で、會計
か何かやつてゐた男ださうです。
小野田。生意氣な奴ぢや。
近江。所が、困りましたことに、既に此の吉田
に總督から假免狀が渡つてゐるといふ事なの

でございまして。
野呂。道はただ一つ。あの近邊を一應官有地
といふことにしてしまひ、改めて近江に拂ひ
さげるといふ事に致せばよいと思ひます。ム
ザムザ敵に糧を與へるなどといふことは馬鹿
氣てをりますよ。
小野田。それは出來ん事はないぢやらう。
野呂。そこで吉田を片附けた更にその先の事で
ございますなあ。製糖業を臺灣の主要産業と
するといふことに致しまして、總督府からま
あ、かう云つたやうな臺灣糖業獎勵規則と云
つたやうなものを出させるのでございます。
此處にちよつと控へ書をして參りましたが
な。まあ數字などはあてずつぽうで、どうせ
後に改正しなくてはなりませんが、ええと甘
蔗耕作のため官有地を開墾する者には之を
貸付し、成功ののち無代價を以て業主權を與
ふるべし。千圓以上の灌漑又は排水工事を
なす者には工事費の五割以内を下附すべし。
その臺灣では灌漑の費用が中々かかるもの
でしたな。
近江。や結構でございます。實に結構で――
野呂。當該官廳に於て檢定する製糖器械を裝
置して製糖する者には、其買入代價の二割以

上を下附すべし。何しろ器械も中々かかる。事業の初めには固定資本は出來るだけ儉約せんといかんからねえ。器械もどうせアメリカあたりの會社から輸入せんといかんだらうが、それも近江君、君の方で引き受けてやつてもいいぢやないか。

近江。結構でございますなあ。

野呂。更に開墾費だとか、肥料費だとか、苗代だとか云つて、補助を與へることが出來ます。それに就しましても、何しろ何時迄も臺灣を軍人の手に委ねて置いては開發の仕事は手が着きませんのです。

小野田。軍人の力で分捕つたんぢやし、その上、土匪や生蕃の討伐があるから、ここ一二年は取り戻せまいが、早い所奴等の手から取り返さにやあいかんなう。

野呂。總督府假條例では、總督府は民政局、陸軍局、海軍局といふ三つから成り、軍事以外の政務は全部民政局に屬すべきものと定まつてをるのですが、全く怪しからん話でございます。何とかしてこれは條例をもつとハッキリさせて、民政部の要求がなければ、斷じて兵力は用ひられんこと、總督府評議會に於ても、軍人は軍事以外の事では發言せんことにせねばなりませんと思ひます。

小野田。さうぢやなう。さうすれば仕事がしよくなるわい。

野呂。それにつきましても、私は月島保次を何とかして臺灣の覆審法院に判事として送りたいと思ふのでございますがいかがでございませう。何しろ臺灣での仕事は土人から土地を收容する事が第一着手でございますが、臺灣は目下特別の法典がございませんので、改まつて云へば、特殊法典の完成を見る迄は、母國の法律、若しくは法律上の格言に依り、ただし特殊なる風俗習慣歴史に基いて、多くの除外例を持つといふ事になるのでございますが、要するに法官にその人を得ることが大問題でございます。それに臺灣は內地の三級裁判と違つて、覆審法院が控訴院と大審院を兼ねた二級裁判でございますから、いよいよ覆審法院に誰か人を送つて置く方がよいと思はれます。

小野田。だが月島ぢや氣が弱くて碌な仕事が出來まいて。

野呂。それもさやうでございますが、しかし考へやうに依れば、却つてああいふ小心翼々たる男の方が、上司の命も聞き、あとの非難も少く、好都合だとも思はれます。

小野田。さうかも知れん。考へて置かう。（近江に向つて）それから、此の間云つて置いた二萬圓の件を一つ至急たのみたい——

近江。は、畏りました。明日、早速お邸の方に持つて參上致します。

小野田。すると話はこんなものぢやな。

野呂。はツ、大體——

小野田。（〆松に）おい、海岸へ皆を迎へに行かう。まだ時間があるぢやらう。

野呂。はツ、まだ十分。

小野田。こまかいことはよろしく二人で相談して置き給へ。〆松來い。（去る）

近江と野呂も送つて退場する。

近江。ああ、あの松林の方に聲が聞えるやうでございますな。

この時、岩吉が通り過ぎようとして、ちよつと立ち止つて、茂みにかくれる。近江と野呂戻つてくる。

近江。（小さな聲で）戀敵の月島さん追ひ出しの筋書には驚きましたなあ。

野呂。馬鹿を云ひ給ふな。一に君の利益を思つての遠謀深慮さ。

近江。何ともお禮の申し上げやうがございませ

ん。所で私の心配なのは、土地を士人からどうやつて政府に召し上げるかといふ段ですがーー

野呂。そんな事は心配し給ふな。土地調査規則といふものが最近出來ることになつとる。地租も增し、有望な所は沒收することになつとる。萬事こつちの胸のうちだ。

近江。大したもんですなあ。所で、この間お話して置いたお邸はお氣に協ひませんか。金子の方はちつとも御心配に及びません。楓の君との新婚の御家庭に捧げたいと思うとりますが。

野呂。うむ、あれや中々凝つてていい家だねえ。ただ場所が少し不便だ。

近江。それもさうですなあ。いやまだ他にも心當りがありますからそのうちまたお目にかけませう。所であなたのお考では、此の內閣の壽命はどんなものでせう。まあ云つて見れば、すがりにすがつてゐた親樹が、枯れるか枯れんかといふことは、私といふ蔓にとつては大問題ですからねえ。

野呂。大した肥つた蔓もあつたもんだて。その點にぬかりがあるもんか。君が蔓なら我輩も蔓だ。お互ひ親樹に異變があつては大事件だ。ちやんとスツパに活動させてゐるさ。

近江。スツパとは？

野呂。迂遠だね、君も。隱密のことさ。大熊の改進黨が五菱の尻押しで出てくるに違ひないから、奴等の內情をさぐらせてゐるのさ。スツパを使ふのだつて、機密費だけでは足らん、そこで我輩達も大分金がいるといふわけだな。

近江。成程。萬事よろしくお願ひ申します。この別莊も御用の時はいくらでもお使ひ下さい。

○（遠くで聲がする）アラ、御前。もう保安條令に依る追放は解けたんですの？

△死んぢまひますよオ。いゝ加減で堪忍して頂戴よ。ハクショイ。

□ハクショイ。

岩吉去る。　（舞臺廻る）

第二場

舞臺廻る間絃歌。數日後。新橋の裏通り。兩側になまめかしい家が立ち並んでゐる。雪の降つてゐる宵。「森川」といふ瓦斯燈の立つてゐる家の供待に車を置いた車夫が一人寢込んでゐるらしい。

スツパ市來多助が蝙蝠傘をさして出てくる。露路に立つて口笛を吹く。車夫が跳び起きて市來のそばへ行く。

市來。畜生め、お正月だといふのにあつちこつちで寄合をしやがるんで忙しいつちやねえや。おい、こゝに集まつたなあ何人だ。名前は皆判つてるな。

車夫。へい、皆で十五人、名前は判つてるだけは此處で書き出してあります。

市來。何だ、たつた八人しか判つてねえぢやねえか。働きのねえ奴だ。女中部屋へ廻つてしらべたか？

車夫。へえ、手を盡した擧句がこれだけなんで。

市來。首になりたくなかつたら、もうちつと氣を利かして御奉公するがいいや。

車夫。所が市來さん、一つ大きなネタを嗅ぎ出したんで。

市來。何だ。

車夫。こいつを一つ見ておくんなさい。（紙片を出す）

市來。（ひろげて見る）何だ。一我黨待遇期成大同盟會。日本鐵道各驛機關方に告ぐ。會社は我等を冷遇す。否愚弄す。諸君近來の出來事を見られよ。保線課一同は甲乙の別なく一人不殘增給せり。又運輸の方を見られよ。日給者にありては或ひは十二錢十錢、月給者及び年俸者にありては、一等若くは二等の上給者多く有之、是實に目醒しき盛事なり。實に一驚を喫せり。而して我等邊には微風だになし。何ぞ會社は冷遇否愚弄するの甚しきや。今や會社の眼中我々機關方あるなし。諸君以て如何とす。二十七八年軍隊輸送に際しては、其責任に當る者は准軍人と見做し、機關方、火夫、驛長、助役等は豫備役を免ぜられたり。見よ、責任は驛長、機關方、助役、火夫、同等なり。然るに其の戰後賞與の邊を見よ。關係驛長、助役等は或ひは二十圓或ひは五十圓の賞金勳賞褒狀を辱うせしにあらずや。而して眞に辛苦慘憺の局に當りし機關方、火夫は何物を辱うせしぞや。冷遇なり、罵言なり、何ぞ憤怒の價なしとせんや。某驛長は曰く。」何だ。これや。

車夫。へえ、確かに日本鐵道の機關方が何か隱謀をやつとるに相違ないんで。

市來。だつてお前、これつきりぢや仕樣がねえぢやねえか。「某驛長は曰く」でおしまひの筈はねえ。大きなネタが聞いて呆れらあ。それに、ちえッ、火夫や油差の寢言が何になるつてんでえ。手前も昨日今日此の道に這入つたんぢやあるめえ。ちつたあ仕事のタチを鑑定してかかるもんだ。お互ひ、どうで、なんぼ手柄を現はした所で警部になれる氣遣ひはなし、德になるやうな仕事をするもんだ。それにしてもだ、乘りかかつた船だ。この紙ツ片のあとの方も手に入れて貰ひてえな。何かにならねえとも限らねえ。一體何處で手に入れたんだ。

車夫。それが市來さん、をかしな所なんで。新橋ステンションの便所の中で拾つたんで。

市來。（紙片のにほひをかいで）ちえッ、きたねえなあ。

その時一人の男が露路の暗がりの中に立つて二人の話を聞いてゐる。車夫が氣がつく。

車夫。あッ、いけねえ。

市來。（氣がつく。逃げようとする變な男をつかまへる）やい、こん畜生め！

變な男。（逃げようとするが逃げられないので急に笑ひ出す）あははははは。

市來。おや!?

變な男。俺だよ。渡利だよ。

市來。ちえッ、渡利か、どうしたんだ。

渡利。驚いたか。

市來。當り前よ。よくねえ惡戯だ。

渡利。寒い中をお役目御苦勞だな。

市來。何をウ。

渡利。日本鐵道會社の社長に賣りつける件は一人ぢやまうけさせねえぜ。

市來。畜生、油斷のならねえ奴だ。いまいましい。だが此の件はまだ海のものとも山のものとも判らねえのさ。

渡利。まあ、とつくりとしらべることにするさ。所で可哀さうだから、俺の方からも一つ敎へてやらう。今夜のこの樣子ぢやア改進黨はもう例の件に感づいてるらしいぞ。

市來。例の件とは?

渡利。小野田の臺灣事件さ。

市來。ほほう。

渡利。裏から上り込んで、ちよつと小耳に挾んだんだがな、ちつたア證據も握つたらしいぞ。

市來。シッ。（車夫に向つて）おい、出て來る奴に氣をつけてろ。（少し傍の方へ渡利を引つ張つて行く）おい、かうッと、待てよ。さうだ。いゝ考へがあるぞ。

渡利。何だ。

市來。改進黨はこの一件を議會に持ち出して倒閣の道具に使ふつもりに相違ねえ。

渡利。當り前よ。

市來。そこでだ、今のうちからチョビチョビと野呂の奴に接待してゐたんぢやアさつぱり有難味が判らめえ。議會が間近に迫つて、改進黨の策戰計畫が愈々きまつた時にだな、ゴッソリと持ち込んで、ウンと野呂からしぼつてやらうぢやねえか。もう議會に間はねえ、相手の様子は知りたくて仕様がねえと云ふ時だ、かぶりついて來るに違えねえぜ。

渡利。うむ、手前見てえな惡人にかゝつちや、流石の赤門出の秀才様もざまアねえなあ。

市來。どうだ、我ながら妙案だらう。さうときまつたらお互ひ稼業に身を入れようぜ。

　その時「森川」の玄關が騒がしくなり、「お立ちイ。」「お車は？」「いやつい鼻の先だ。」「御機嫌よろしう。」「是非また御近日。」などの聲がして、一人の男がいい氣持で謠曲を低吟しながら出て來る。市來と渡利はパッとわかれて露路と軒陰にひそみ、そつと相圖を交し、市來がその男の後をつける。

暗轉。タイトルが出る。

タイトル。その間に、日本最初の交通勞働者の總罷業が著々準備されつつあつた。明治三十一年二月。

機關車の音、車輪の響。

舞臺の一部分に垂れたスクリーンに走る汽車のモンタージュされたフイルムが映る。一瞬の暗黒ののち、そのスクリーンの前に人力車に何か荷物を載せた岩吉が走つてゐる。背景のスクリーンに停車場の構の移動が映る。一瞬の暗轉の後、背景に機關手の溜りの内部が映る。機關手が五六人居る。

○（立ち上つて）や、御苦勞御苦勞。

△（同じく立ち上つて）濟まねえなあ、岩さん。

岩吉。（包みを一つさげて現はれる）なあに、こんな事何でもねえ。さ、早いとこ降してくれ。

□（車から包を降しながら）刷物つてのは案外重いもんだなあ。

×　これで汽車が止まらうつてんだから重い筈さ。

岩吉。一包みが五百通づつ、六つでいゝんだな。

○　さうだ。さてこいつを疊んで封筒に入れてと——

岩吉。弱音を吐くなよ。俺の若い時の元氣を見せてやりてえや。ぢや、あばよ。しつかりやりなよ。

△　親玉に見附からねえやうにしとくれよ。

岩吉。心配しなさんな。（去る）

○（刷物をたたみながら）元氣なお爺さんだなあ。

×　内務大臣も飛んだ者を抱へたもんさ。あははは。

　一瞬の暗黒のうち、再びスクリーンに走る汽車。一瞬の暗黒ののち、背景は映畫で止まつてゐる機關車、その前に機關方、火夫が五六人集まつて、一人が刷物を讀むのを聞いてゐる。

一人の機關手。——うゝと、某驛長は曰く、機關方は馬なり、我々驛長が叱咤の下に業務を全うさせば可なりと——

○　驛長づらと助役づらと來れやあ、何處も同じこんだと見えるなう。

×　默つて聞けや。

一人の機關方。――而して機關方にして平々拜々、恰も奴隷のごとくせば可なるも、若し一朝不平を稱へんか、鞭の下の擲打同樣の所爲に苦しむは必せり。大會社の一個人を苦しむる手段極まれりと云ふべし。

△　さうだ。うまく書えてあらあ。

一人の機關方。――立つて大會社に對抗するの道は、我等同業堅く集まりて散せず、熱血を以て正義を主張するにあるのみ――

□　成程なあ、いい元氣だぞ。

×　うむ、成程。

一人の機關方。――立て日本鐵道各驛の同業諸君、備へよや同業諸君。而してまづ運動の手始めとして、機關方火夫一同即刻上給の事を、必ず二錢郵劵を奮發し、社長、副社長及び課長に宛て、何百通を限らず東西南北より上願すべし――

○　こいつあ面白え思ひ付きだ、ふむ。

□　やい源、手前は二錢が惜しからうて。

×　馬鹿野郎奴、二錢位の錢ア糞ツ紙に使つてらあ。一々五月蠅え奴だ。默つてどんじり迄聞けや。

一人の機關方。――右の件成就する迄は、全線機關方以下は、心中にて堅く同盟し、所謂以心傳心を以て固く相誓ふべし――

○　さうだ。かういふ事アさういふ連輩に祕密にやらにやア駄目よ。

一人の機關方。――もし會社不承諾ならば、運動の第一着手として、服務規定三三三條に急行廢禁とあるを堅く實行すれば、運輸上日々二三時間は遲れて、時間表不必要となることと保險附なり。右を以て會社と對抗すべし。ふうむ。

△　それでおしめえか。

一人の機關方　――うむ。それでこれや上野から來たのか？

◉　うむ。青森、仙臺、盛岡迄すつかり廻つてる筈だ。東海道の方にやあ新橋から出てるつてこつた。

一人の機關方。ふむ、さうか。どうだ、驚いたなあ。

○　うむ、俺ア大賛成だな。

×　賛成は無論よ。當りきよ。

（口々に）――やつつけべえ。――さうだ、さうだ。――やつつけろ！――一人殘らずやらうぢやねえか。――賛成。おやすい御用だ。

一人の機關方。おい源、お前十時五十分の上りか。

×　うむ。

一人の機關方。上野へ行つたら知らせてやつてくれ。俺達の所ぢアみんなでやつつけることにしたつてことをな。

×　引き受けた。

一瞬の暗黒ののち、スクリーンに走る汽車の映畫。

（幕）

第三幕

第一場

上野ステーション下等待合室。前場より數日後の夕暮方。亂雜に置かれたベンチに丸まつて寢てゐる者、腰かけて居眠りしてゐるもの、何ともわびしい有樣である。足部も丸まつて眠つてゐる。人相の惡い男が十四五の娘をつれて隅の方にゐる。

男。畜生。まだ改札になりやがらねえ。（煙管

を出して煙草を喫む、娘はシクシク泣き始める）あれ、何が悲しいだ。うむ、それやチャンやオフクロに別れるなア辛からうが、お前がちやんとした機織女工さんになつてよ、家へ仕送りが出來るやうになれやア、これに越した孝行はねえぢやねえか。な、そのうちにやア、嫁入支度も自分で出來ると云ふもんだ。あははは、どんな婿さんでも選り取りだア。お前どんな男が好きだか？　え？（娘は泣きやめて、はにかむ）お染ちやんなんかは伊井蓉峰みたいなハイカラが好きだらう。あはははは。ちえツ、風が吹き込んできやがる。お前、寒かあねえか。

お染。（震へながら）いいえ。

男。川住の遊佐紡織場つて云やあ、お前、日本中に響いてる大きな工場だ。仲間が多勢ゐて、まるで女學校へでも行つてるみてえなもんさ。お染ちやんなんか悧巧だから、ぢきにお鳥目がうんと取れるやうになるあ。

間。外で風の音。

男。あゝ、ちいつと眠くなつて來た。お前眠くねえか？

お染。いいえ。

男。ぢや、叔父さんちよつとウツラウツラするから、お前、ガランガランて鈴が鳴つたらすぐに起しておくれ。いいかい。

お染うなづく。男はベンチの上に丸まつて居眠る。お染は彼に倚り添つて、眼を閉ぢたり開けたりしてゐる。舞臺が段々暗くなる。

お染と男の所にスポットがあたつてゐる。幻燈でタイトルが舞臺の一端にうつる。

タイトル。**明治三十年前後、紡績女工の勞働時間は十五時間乃至十八時間。**

タイトル。**女工多くは見習と稱し別に一定せる給金無し。三年以上のもの年に五圓、七年に及ぶ者二十圓の賞與金あり。**

タイトル。**しかも一日の定尺を織る能はず、或ひは虐使に耐へ兼ねて逃亡する時は、多く裸體となして檻禁搾責す。**

タイトルが消えると舞臺元の明るさに返る。外套を着、山高帽子を冠つた紳士が、驛長や助役につれられて這入つて來る。横山が後からスーツケースをさげてついて來る。

驛長。これが下等の待合室でございます。

課長。はゝあ、以前とは大分面目を改めて立派になりましたな。（ジロジロと見廻し、顏をしかめる）

驛長。ぢや私の部屋へいらしつてストーヴにでもあたつて發車をお待ち下さい。まだちよつと間がございます。

課長。ぢやさうしませう。

驛長。寒い時に北の方へ御出張は大變でございますなあ。

四人は部屋を横切つて去る。足部はフト目をさまし横山の後姿を見つけ、後を追つて去る。間もなく手ぶらになつた横山とつれだつて這入つてくる。

足部。どうしたんかと思つたよ。今のは誰ぢや？

横山。日本鐵道會社の課長の松田さんだ。

足部。そこの書生に住み替へたのか？

横山。うんにや。（聲をひそめて）鐵道にストライキが起りかけちよるんだ。

足部。僻せないね。

横山。それより先に君はまた何故こんな所へ來ちよるんだ。あひびきか？

足部。この足部を見そくなつたか。から見えても女にはお袋より他に知己はないといふ堅人だぞォ。

横山。それなら何のために來とるんぢや。

足部。親爺が國から出て來よるから、それを迎ひに來たんぢやが、どうも一汽車遲れやがつたらしい。それで、かくの始末さ。

横山。さうか。俺の始末は鐵道のストライキぢや。ま、それの詳しい話は、歸りに俺の所へ寄れ。すつかり話してやる。面白いぞォ。（聲をひそめ）岩吉がなア、昔取つた杵柄で盛んに力瘤を入れとるんぢや。

足部。それや愉々快々ぢやなら。

横山。そこでその今の松田といふ男がなら、狀況探聞に出張する事になつて、今度の汽車で御出發ぢや。それで出張前に一應うちの大將の所へ打ち合せに來たんだが、それ今日にも內閣總辭職といふ瀬戸際ぢや、うちになんか居りやせんわ。岩吉も居らん、そこで我輩がおわびかたがたここ迄お伴といふわけぢや。

足部。さうか、ふうん、鐵道のストライキか、戰爭後の好景氣もたつた一年で、去年からまたひどくストライキが多いなら。ええと天滿紡績會社の工女、友染職工、横山の船大工——

横山。あれも大きかつたぞ、保田の石切工の奴——

足部。うん、それから北海道の硫黄山の坑夫もやつたつけなう。所で內閣の總辭職は愈々確實かなう？　小野田さんもひどい目を見たいもんぢや。

横山。さうさ、大將ももう二度と人前へは出られんぢやらう。

足部。俺は小野田さんと云ふ人は、それやどうせ政治家だから、いろいろあるだらうが、もうちつたあ淸廉な人だと思つちよつたよ。

横山。いや今度の事で大將を判斷しては大將が少し可哀さうぢや。今度の事は全く野呂の口車に載せられたんぢやからなう。岩吉の云ふ所に依ると、野呂といふ奴は惡い奴ぢや。岩吉は大分種を握つとるよ。

足部。さうか、ぢやそいつも今晩、ストライキの話と一緒に聞く事としよう。

横山。ただ一つ不思議なのは、今度の臺灣製糖會社の一件を一體全體改進黨は何處からあんなに詳しく聞き込んで居つたかと云ふこつちや。

足部。さうよ、一昨日の議會で改進黨の連中がやつた攻擊演說のこまかさには社會一般舌を巻いたからなあ。

横山。何しろ、うちの大將の財產目錄から利益金の分配の割當までわかつてるんだからなあ。お互ひに大分スッパなぞを使つたらしいが、それにしてもこんなこと迄解る筈がないよ。あああ、我輩も拙くすると今度は食扶持に離れんければならんかも知れんて。何處か書生の口があつたら探しといて貰ひたいな。

その時、ガラン、ガランといふ鈴の音が鳴り渡る。「七時二十分、青森行きイ。」といふ驛夫の聲が聞える。寢てゐた連中が起きて改札口の方へ去る。

お染。（男を搖すぶつて）叔父さん、鈴が鳴つてますよ。叔父さん、鈴が鳴つてますよ。

男。ううう、何？　何云つてやがんでえ。（眼を醒ます）あ、さうか。鈴が鳴つた？　よし、それ、出發と行くか。やれ、やれ。（お染をつれて去る）

横山。ぢや、俺、ちよつと勤めを果してくるぞ。

足部。俺も改札口迄行つて待つてよう。濟んだら一緒に歸らう。

横山。親父はどうするんだ？

足部。面倒臭えや。どうせ總辭職をアテ込んで

何か利權あさりに出て來やがるんだ。これから小一時間も待つてゐられるもんか。

二人去る。驛員が二人出て來て出會つて小聲で話す。

○ おう、何してんだ。

× 松田の野郎が出掛けて行くつて事を各驛へすつかり電報を掛けて來た所よ。どうせあんな野郎が行つた所で何にもなれやあしねえがね。

○ さうとも。だが掛けといた方が間違ひがねえ。（行きかけたが、立ちどまつて）お、さうだ。八時十分の上りにやあ一ノ關の中野君が乘つてくるから、便所の裏で打合せよう。

外が騷がしくなる。號外賣の鈴の音。

「內閣愈々總辭職！總辭職！」「それ、內閣が總辭職だぞ！」プラットフォームでは、發車の笛、汽笛、發車の音。（暗轉）

第二場

神田末廣町の小野田邸。小野田の寢室。

家財道具は殆んど無い。

小野田が衰へて寢てゐる。枕元に藥瓶。前場より二十日程後。夜。行燈がともつてゐる。遠くを、太鼓を叩いて火の番が廻つてゐる。「火事は淺草千束町、火事は淺草千束町」と云つてゐる。

小野田。（眼を醒して呼ぶ）初子！ 初子！

初子。（廊下を廻つて來る）お眼が醒めましたの？

小野田。今何時頃だ。

初子。今しがた八時が鳴つたばかりでございますよ。

小野田。火事があつたらしいな。

初子。今晚はでも風がないからすぐ消えたでございませう。

小野田。國太郎は寢たか？

初子。いい鹽梅にやつと寢つきました。

竹や。（現はれる）あの、月島さんがお暇乞ひに上つたと云つていらつしやいましたが。

初子。あら、お暇乞ひつて――

小野田。（顏色を變へる）うむ――月島を――月島を――俺は――臺灣へやるやうに――

初子。えツ、月島さんが臺灣に？

小野田。畜生！ 野呂の奴――何處迄俺の一家を――

初子。どうしても駄目なんでせうか？ もう沙汰止みには――

小野田。（竹やに）通してくれ。

竹や。はい。（去る）

初子。（泣きながら）楓が可哀さうです。

小野田無言。月島が這入つてくる。

月島。夜分に伺ひまして相濟みません。

初子。さ、どうぞこちらへ。

月島。御氣分はいかがでございますか？

小野田。お蔭で神經痛の方だけはひいたやうぢやが、どうも心臟がもういかん。

月島。いいや、そんな事はございますまい。根が頑健でおいでですから。

小野田。いいや駄目だ。今度のことは徹底的にこたへた。で、君は臺灣へ行くのか？

月島。は、一昨々日突然臺灣の覆審法院の判事になれといふ辭令を貰ひました。どうせ獨り者ですし、卽刻行けといふ事ですから、明後日出發致さうと思ひまして、それで夜分をも顧みずお訪ねしたわけでございます。

小野田。君は誰が君を臺灣に追ひやつたか知つてゐるか？

月島。は？

小野田。俺だ？ この俺が君を臺灣に行くやうにさせたのだ。

月島。(顔色蒼白となる)——うむ、心の底では——或ひは——さうではないかと思つてをりました——私の居りますことは御令嬢のためによくございませんでしたらうから。

小野田。馬——馬鹿な。それは全然君の思ひ違ひだ。それどころか俺は何故楓をあれの願ひ通りに君の手に託さうとしないで人——人もあらうに——野呂などにやらうと思つたか——今となつて、臍——臍を嚙んでゐるのだ。

月島。(半分泣きながら)私には——解りません。私には——何だか——

小野田。俺は殘念でならぬ。何もかも——殘念でならぬ。何のために、俺は生きて來たのだ。月島君、俺は、まるで莫迦見たいに野呂の奴にだまされたんだ。君にも、家のものにも、仲間の者にも全く面目ない。(楓が廊下にかがんで、袖で涙を押へてゐる)議會であばかれた事は皆本當だ。何故あれが改進黨の手にあんなに詳しく這入つたかと云ふと、あの事件を書いた野呂自身が改進黨に賣つたからなんぢや。恐らく奴はそれで五菱から餘程の金と將來の保證を貰つたに違ひない。だが奴はそれでも飽き足らずに、露顯すると危險だからといふ名目で俺の財産をみんな奴のに書き替へてしまつたんぢや。俺の公人としての生涯を終らせると同時に、家族の者の生活迄奪つてしまつたんぢや。

月島。な、何とも申し上げやうがありません。

　私が東京に居られさへすれば——

小野田。いや、駄目ぢや。どうにもならんやうに仕組んである。それに奴は改進黨にすつかり喰ひ込んだらしいからなう。俺は君を臺灣にやつて近江の仕事をやり易くする積りだつたんぢや。頼む。月島君。奴の仕事を邪魔してくれ。事はもうずつと運んでゐるぢやらう。だが、君の力で出來るだけの事をやつてくれ。俺は口惜しい——このままでは——死にきれん。(泣く)

月島。(泣きながら)畏りました。私の力で出來得る限りの事は、誓つて致します。

小野田。糖業奬勵規則とか、土地調査規則とかが怪しいぞ。いや、何もかも怪しいぞ。

　小野田グッタリとなる。月島と初子は驚いて介抱する。楓も驚いて跳び込んで來て介抱する。

小野田。それから——月島君、今になつて云へた義理ではないが——楓の世話を見てやつてやつては貰へぬだらうか。

月島。私のやうな者で——よろしければ——

小野田。有難う。

　「鍋焼うどん」の呼聲と救世軍の樂隊がかすかに聞える。

月島。では、あまり遲くなりますから、私はこれで——

國太郎。(不意に奥の部屋で叫ぶ)人世の大道理、何を最要と爲す。能く宜しく人をして自由に其の才能を發展し得せしむべし。姉さん。何處へ行つたの？ 人民猿の如く羊の如く豚の如き有樣に至りて、ただ政府の法令に屈從して、へいへいはいはい然たるのときに至れば、之を國家能く治まれりといたして居ります。奇妙奇體こんな間違つたことがまたと世の中にあるものか。これ即ち天下の大亂でござる。姉さん、自由ぢや自由ぢや人間は自由、自由がなければ人形よ、官吏はおいらの雇ひ者、人の上には人はない、權利張れよや皆の人。

　精神錯亂した國太郎が臺灣寫眞帖を持つて這入つてくる。

楓。(立ち上つて彼を抱くやうにしながら)國ちやん、さ、寢ませう、ね。

初子。野呂のお蔭でこんな姿になりました。

小野田。(國太郎が手に持つてゐる寫眞帖を見て)おい、國の持つてゐる寫眞帖を寄越せ。

楓。國ちやん、これ姉さんに頂戴な。

國太郎。厭だ。

小野田。寄越せ。早く寄越せ。

初子。あなた。

楓。ね、頂戴、いい子だから。

小野田。ええ、寄越せと云つたら。(伸び上つてひつたくる)

國太郎。(泣き出す)馬鹿ア! 馬鹿ア!

小野田。(べりべりとその寫眞帖を破りに破る)ううん、畜生め! ううん、畜生め!

舞臺暗くなる。

タイトル。**同じ時に——**

背景は映畫で機關庫。その前に機關方、火夫等が池田を圍んで七八人集まつてゐる。

○ いいや俺達ア君を見殺しにするわけにやアいかんど。

× んだ。そんな事アどうしても出來ねえ。

□ んだ。それやいけねえ。

池田。俺ア何も停職されたつて、そんな事ア構はねえけんど、それぢや會社に對して、俺達が負けつてことになるど。

△ んだ。それが大切なとこさ。

◎ (やつて來る)おい、上野から梅林君が來たど。

梅林。や、失敬。池田君、やられたな。今度停職された者は皆で十人だ。尻内の石田君、菊池君、稻見君、一ノ關の中野君、田代君、横沼君、安居君、坂君、仙臺の藤田君、それにここの池田君と都合十人だ。

△ 隨分やつてけづかつたなア。

× んで、上野ではどうするだね。

梅林。宇都宮迄は意見が纏つた。どうしても負けてはゐられねえ。ストライキをするんだ。

○ ストライキをなア。

□ んだなア。他に道ばねえべ。

◎ ねえ。

× んぢやストライキだ!

舞臺暗くなる。

タイトル。**二月二十四日東北線各驛は全部ストライキに入つた。**

映畫がうつる。機關庫に立往生してゐる機關車。

タイトル。**二十五日東海道線も運轉が止んだ。**

映畫がうつる。構内に立往生してゐる客車。カラッポの停車場。

タイトル。**三月六日會社全く屈服、給料一割値上。解雇者一人もなし。**

タイトル。**四月五日待遇期成同盟會解散。最初の組合矯生會を組織す。**

タイトルが消えると、空車を曳いた岩吉がうれしさうにニコニコしながら舞臺下手に現はれる。足部に出會ふ。

岩吉。やあ、足部さん。

足部。よう、どうした。急成もうろう車夫、客が取れるかい? おや、いやに欣々然としてるぢやないか。

岩吉。さ、乘んなせえ、今日はうれしくて堪らねえ事があるから、ロハで乘せてやる。さア早く乘んなせえ。

足部。それや有難いがね、ハテ理解出來んねえ。何しろ乘せて貰ふぜ。

足部を乘せて岩吉はクックッ笑ひながら花道へかかる。半分程過ぎた所で——

足部。ははア解つた。鐵道のストライキが勝つたからだな。

岩吉。さうでさ。はははは。

笑ひながら揚幕へ曳き込む。 (幕)

第四幕

第一場

タイトル。**製糖會社はどうやつて出來たか？**

タイトル。**臺灣北西部海岸苗栗地方。**

幻燈に臺灣の地圖が出、苗栗の位置を示す。

苗栗に設けられた臨時臺灣土地調査局出張所。木造の安普請で上手に入口、受付があり、下手は部屋の内部を示す。

室内には板敷の上に數箇のテーブル、十數脚の椅子がある。壁には地圖がいくつとなく掛けてある。入口の柱に「臨時臺灣土地調査局苗栗地方出張所」と書いた看板が下つてゐる。

一つのテーブルでは一人の技師が二人の土人技手を相手に圖を引いてゐる。入口に近い椅子では××が一人居眠りをしてゐる。奥のテーブルでは一人の屬官が算盤をはじいては帳面に記入してゐるし、受付のテーブルでは帳面を持つた吏員が土人の通譯と向ひ合つて腰掛けて、何か教へてゐる。草鞋がけや足袋跣の者が多い。

土人通譯。（つまりつまり云ふ）第五條――土地の所有者――及び――境界は――境界は――

吏員。地方土地調査委員會。

土人通譯。地方土地調査委員會之を定むるものにして――もし――もし――此の判定に不服の者あらば――五十日以内に――

吏員。六――十――日。六十日だよ。

土人通譯。六十日以内に高等――土地調査委員會に申し立つべし。

吏員。第六條。

土人通譯。第六條――第六條――

吏員。また忘れたのか。馬鹿。（横面を張る）しかして申告をなさざる――

土人通譯。しかして申告をなさざる土地の所有權は――國庫に屬す。

吏員。しつかり覺えろよ。頭の惡い奴だなあ。こんな物覺えるに幾日かかつてんだ。

技師。（土人技手に）おいおい、もうちつと綺麗に引けや。そんなこつちや今期は賞與ばかりか、級を一つ下げられッぞ。（吏員に）だが癪にやアさはるが、此奴等ア日本語覺えるだけでも腦味噌が出拂ひだんべえ。ガミガミ云ふなア考へれや憐れ憫然よ。

吏員。あーあ、何だかまた雨が降りさうだなあ。早く雨期があけねえ事にやア、身體に蛆が湧いちまはア。

土人通譯。もう一月待つ――天氣よくなります。

吏員。呑氣な事を云つてやがらア。あーあ、大租戸、小租戸と來やがら。

技師。え？ 何だつて？

吏員。知らねえだらう。こいつにやア惱まされるよ。

技師。何だ、女に關した事か？

吏員。ちえッ、助平に出來てやがらア。こいつにやア我が大日本帝國が惱んでるのよ。

技師。大したもんだな。

吏員。そもそも我が臺灣に於てはだな、一つの土地を二人の人間が持つとるんだ。土地がそのどつちの物ともつかんのだ。地主を大租戸と云ひ、小作人を小租戸と稱するんだが、兩方ともその土地に權利を持つとつて、地主が小作人を勝手に追ん出すと云ふ事が出來んのだ。

技師。ほう、結構ぢやねえか。

吏員。さてはお前、小作人の倅だな。

技師。さう云ふお前だつて地主様のお坊ちやまとは受け取れねえぜ。

吏員。おきやアがれ。だがこれが爲にだな、一つの土地を處分するのに二人の人間が出て來てガヤガヤ云やアがるんで始末にをへねえのよ。されば我が大日本帝國は惱むのよ。どうもその小作人の方に、その土地を賣つたり貸したりする權利があるらしいんだな。妙な話よ。

そこへもう一人の技師が二人の土人技手に測量器具をかつがせて這入つて來る。

技師二。畜生め、やつと濟んだわい。

技師一。これですつかりチョンか。

技師二。お蔭様で。（お辭儀をする）畜生めえ。どうもここらは沼地が多くて、骨を折らせやがるわい。それ。（測量圖を渡す）

技師一。あいよ。

ボロボロの着物を着た土人の老婆が紙片を持つて受付へやつて來て何かしきりに喚く。通譯が突慳どんに應待する。

吏員。（通譯に）この婆ア何を云つてやがんだ。

通譯。昨日渡した布告――讀めないと云つてる。

吏員。誰か近所の者に讀んで貰へ。

通譯。近所の者誰も讀めない。

吏員。何處の奴だ？

通譯。（老婆に聞いたのち）南勢庄の劉。

吏員。あそこは官有地になる。さう云つてやれ。

通譯と老婆とはしきりに押問答をしてゐる。老婆はしまひに泣き出す。

技師二。うるさいなう。何をほざいとるんぢや。

通譯。土地を取られるのは斷る云うてます。

吏員。只取るんぢやねえ。補償として公債證書をやるんだ。

通譯又老婆と押問答する。

通譯。先祖代々百姓してから、土地賣ることいやだ云うてます。

吏員。いやなら勝手にしやがれ。

老婆は窓口に取り縋つて、猶哀叫してゐる。

吏員。窓を閉めちまへ！（通譯は窓をしめる）こつちア明日の支度で忙しいんだ。

そこへ隣の部屋からもう一人の吏員が厚ぼつたい帳面を五六册抱へて出て來る。

吏員二。（テーブルの上にドサリと帳面を置きながら）出來たよ、昨日の分迄の土地臺帳が。

吏員一。見るだけでもウンザリしやがらあ。

老婆が窓の下で相變らず哀叫してゐる。

吏員一。うるせえな、泥棒猫見たよな聲を出しやがつて（眠つてゐる××を起す）おいおい、角間君。

××。む？ むうう。（眼を醒ます）な、何？

吏員一。外で始末にをへねえ婆アが泣いてやがるんだ。おつ拂つてくれよ。

××。う？ よし來た。

彼は出て行つて老婆を引きずり起して何か土語でドナる。老婆は泣きながら曳き去られる。

吏員二。明日の用意はもう出來たのか？

吏員一。まだまだ。所でと、登記所の奴と代書屋と判こやは六時に來ることになつとるな？

吏員二。大丈夫かねの脇差。

吏員一。××五名來て貰ふ件もよしと。あとは天氣の問題だけだ。

吏員二。愈々宣戰の布告は下れりかね。

吏員一。皇軍行くとして勝たざるなしと。

××が歸つて來る。

吏員二。明日はあんなのが束になつて押しかけてくるんだから事だぜ。

吏員一。(ヤケになつて歌ふ)

てーきは幾萬ありとてもオだ、
すーべて烏合の衆なるぞオだ。
烏合の衆にあらずともオだ、
味方に正しき道理ありイだ、
邪はそーれ正イに勝ちがたくゥだ、
直は曲にぞ勝ち栗のオだ、
堅き心の一徹はだ、
いーしに矢のたつためしありイだ、
なーどて恐るゝことやあるウだ、
などてたゆたふ事やあるウだ。

××は再び椅子に腰かけて眠り始める。

歌の途中で暗くなる。

歌が止むと闇の中で罵り騒ぐ群集の聲。

タイトル。**その翌日。**

明るくなる。舞臺前と同じ。ただテーブル椅子の配置が異つてゐる。室内上手入口の取つつきにテーブル。そこに土地臺帳を前に吏員二人が通譯と一緒に控へてゐる。その次のテーブルに代書人。次に吏員一。次に登記所の役人。少し離れた下手に印刷屋。それらのテーブルに沿つて上手のドアから下手のドアへと綱を張つて作つた一條の道がある。上手戸外には××が五人、室内には一人、他に土人技手四人がゐて群集の整理に當つてゐる。

戸外の群集はそれぞれ××に向つて、質問し、罵り、哀訴してゐる。通譯が窓から首を出して怒鳴る。××は土人を一列に並べて室の中へ順々に入れようとする。老若男女の土人は口々に何事かを喚きながら、押し込まうとする。××は土人の男一人を曳き出してなぐつたり蹴つたりする。土人は聊か靜まつて、室の中へ這入つて來る。

吏員二。どれだ?

通譯。南勢庄の林少花。

吏員二。(臺帳を引つくり返して)これか?

通譯。それそれ。

吏員二。ええと二等水田面積一甲三分四十厘の小租戸と。南勢庄は皆官有地だ。(代書人に)さ、頼むぜ。書き込んでくれ。(臺帳の寫しを指して)これだ。(土人に)印形持つてるな?

通譯。持つてます。

吏員二。よし、あつちい行け。

彼は吏員一の前に行く。

代書屋。(呼びとめて)おい、これを持つてくんだ。(今書いた紙を土人に渡す)

吏員一。(土人からその紙を受け取つて)林少花と。二等水田面積一甲三分四十厘の小租戸と。これを大日本帝國政府は買ひ上げる。公債で支拂ふ。その額は總督府で追つて定める。解つたな。

土人技手が一々通譯して聞かせる。土人は呆然として、只恐れうなづいてゐる。

吏員一。こゝへ判を押して。あつちへ行け。

土人は登記所の役人の所へ行つて紙を渡す。登記所の役人は無言でその紙を受け取り、何か書付を渡す。技手二が彼を別の戸口からそとへつれ出す。その間に次の土人は既に代書屋の所迄廻つて來てゐる。

代書屋。印形持つてるな。

技手一が通譯するが土人は首を振る。

代書屋。(印形屋を指さして)ちやあすこへ行つて印形拵へて貰つて來い。(技手二に紙を渡しながら、印形屋に云ふ)その紙の篆文流だ。大急ぎでやつてくれ。

吏員一。印形屋は紙を受け取つて彫り始める。
あつちの隣い行つて待つてれ。
技手二に突きとばされ、奥の隣で立つてゐる。その次の土人が既に代書屋の所に廻つてゐる。

代書屋。印形持つてる〻。
技手が通譯するとうなづく。

代書屋。隣りへ行け。(紙を渡す)

吏員一。(土人から受け取つて)黄才と。三等水田面積二甲二分十五厘の小租戸と。これを大日本帝國政府は買ひ上げて、公債で支拂ふ。その額は總督府で追つて定める。ここへ判こをつけ。
技手一が通譯すると、土人は頻りに何か云ふ。

吏員一。早くせんか。

技手一。代金いくらか、聞きたい。現金すぐ貰ひたい云ふ。

吏員一。だから現金ぢやない、公債だ。額は總督府が追つて定めるちうとるぢやねえか。
技手一と土人とまた爭論してゐる。

技手一。どうしても厭云ふ。

吏員一。解らん奴だなあ。現金は公債證書で拂へんハシタ金だけしか拂はねえんだ。金額はまだきまつてねえ。きまつてねえものが云へるか。阿呆め。
だが土人は矢張り頑として頑張る。

吏員一。ようし、申告したくねえ奴ア勝手にしねえがいい。あとで吠え面かくな。申告をなさざる土地の所有權は國庫に屬すだ。(××に)おい、こん畜生追ん出してくれよ。

××。出ろ！ 出ろ！
土人は勝つたつもりで威氣揚々と出て行く。彼に應じて去る者が二三人ある。

吏員二。そんなに歸しちやつちや駄目ぢやねえか。出來る限り圓滿に納めろといふ内訓ぢやねえか。(最後に歸らうとする土人を指さし)おい、あいつ取つつかまへて來い。(技手一がつかまへてくる)他の奴ちよつと皆外へ出してくれ。
××、技手は判の彫れるのを待つてゐる土人を除いて皆外へ押し出す。窓から内を見ようとする。

××。(窓から首を出して外にゐる巡査に叫ぶ)おおい、こいつら内を覗かねえやうにしてくれえ！
××達は皆を窓に近寄せない。内では——

吏員二。名前は何てんだ？

通譯。(土人に聞いたのち)南勢庄の徐祿。

吏員二。(臺帳を引つくり返し、代書屋に向ひ)頼むぜ、ええと二等水田二甲一分の小租戸。(印形屋に)徐祿だ。これ(紙を渡す)彫つてくれ。手つ取り早い所。(煙草を出して吸ふ)さあ、判の彫れる迄一休憩だ。

吏員一。(窓から眺めて)ああ、隨分並びやがつたなあ。

××。(吏員一に)あれが坎間山だよ。

吏員一。妙な名だね。

××。あすこで君、一昨年の八月、暑い眞最中に殿下が御奮戰遊ばしたんだよ。

吏員一。ほおお？

××。俺も新竹で初めて軍夫に採用されてあの山で初めて戰爭をやつたが、暑いわ暑いわ、腹は下るわ、道は惡いわ、死ぬ苦しみを嘗めたわい。敵は土民兵の他に黒旗兵と云うて黒旗を立てるのがゐよつた。死骸が片つ端から腐りよつて、蛆が湧いて、そらひでえもんぢやつたわい。こいつ等も濟してやがるが當時は鐵砲持つて俺等を狙やあがつたんだべえ。ふ、ざまア見やがれ。

吏員二。まだ生蕃をブツ×した事アねえのか

い？

××。ああ、まだねえね。ここから七八里山ん中へはひつた隘勇線に勤めれやア、生蕃も×せるけんどね——

吏員二。その代りこつちも危えと來やがらあ。

××。隘勇線勤務は女房と一緒に住んでもいい事にしてあるが、俺見てえな獨り者ぢやあどうともならねえや。

吏員二。生蕃の娘でも引つかけろ。

××。お前にやア似合つてるだらう。

印形屋。出來ましたよ。大急行でさ。

吏員二。あい來た。（印形を受け取つて土人に突きつける）ここへ押すんだ。（だが土人は受け取らない）押すんだよ、此處へ！（土人は受け取らない。××に）こいつを持たせとくれよ。

××は土人の手をつかまへて、無理に印を持たせる。土人はふりもぎり、印を投げ出し、大聲で喚く。

吏員二。（立つて、土人の横面をひつぱたく）判を、すんだ！（だが土人は抵抗して喚く）ええ畜生め。（××に）そつちの手持つてくれ。

土人は兩手を取られ、身をもがき、泣き叫ぶ。だが遂にひつぱたかれながら、無理矢理に印を押させられる。

吏員二。裏口から出してくれ。

土人は大聲に泣き喚きながら裏口から去る。表ではこの間、彼の泣き喚く聲を洩れ聞いた土人達が不安げに動搖してゐる。印の彫れるのを隅で待つてゐた鄭は憤怒と恐怖のまじり合つた顏付で、この出來事をみつめてゐる。

吏員二。こんなに暇をくつてちやあ幾日かかつたつて濟みやアしねえ。次だ！　次だ！

次の番の女がおづおづ這入つて來る。舞臺暗くなる。瞬間の後、闇黑の中で鋭く女の泣き叫ぶ聲。（暗轉）

第二場

舞臺前面に張つた紗の幕に、波を蹴つて走つてゐる汽船が映る。これは日本郵船會社の神戶基隆間定期船（二千五百噸）である。第三幕第二場から十日後。

紗の幕の後ろに汽船の上等客のサルーンが出來てゐる。映畫の途中で舞臺にあかりが這入る。サルーンでは今、船員の餘興の最中で船客が酒など飲みながら、見物してゐる。その中に野呂と近江がゐる。臺灣征討に關した琵琶が終る所。ヤンヤといふ喝采。次に手風琴の獨奏。この間に何時の間にか紗の幕は上つてしまふ。獨奏が終ると船員が立ち上つていふ。

船員一。ええ、未熟なる藝を數々御覽に入れまして誠に恐縮でございます。

客一。ノーノー。

客二。立派なもんだ。

客三。玄人はだしだ。

船員一。（お辭儀をして）どうも有難う存じます。ではそのやうにお褒め下さりまするならば、お言葉に甘えまして、一つ今度は私共を見物人に廻して、お客様から隱藝を見せて頂きたいと存じます。

客四。ちえッ、こいつア甘くやられた。

客五。（假色で）油斷のならねえ、船員だなあア。

船員達が拍手を叩く。

船員二。ようよう。

船員三。玄人はだし！

船員一。（今の船客に）さ、あなたからどうぞ一つ。

客五。駄、駄目だよ、俺なんか。

船員一。いや、さうはお云はせ申せません。今の假色が何よりの證據でございます。さ、どうぞ。ええ只今から丸藻重臣さんが餘興として假色をやつて下さるさうでございます。

（船員等手を叩く。船客もそれに和する）

客五。駄、駄目だつてば。

船員二。や、どうぞさうおつしやらずに一つ。

客五。（少し憤つて）悪く強制するもんぢやないよ。

一座白ける。

近江。（小聲で）野呂さん、一つお得意をやつてやつたらどうです。何だか船員達が氣の毒見たやうぢやありませんか。

野呂。それもさうだな。折角面白くやつてたのになあ。妙に白けちやつた。よし、やつつけよう。（一人の船員を摑まへて）お前だつたな、さつき三味線をひいたのは。

船員四。はあ。

野呂。何やらうか。一つ賑かな所でやつつけよう。「奴さん」でもやるか。（身支度をする）

船員船客一樣に拍手喝采する。野呂は踊る。舞臺半ば廻轉する。サルーンの外のデッキ。サルーンのざわめきが聞える。野呂と近江が出て來て欄干に倚る。空には星がきらめいてゐる。

近江。相變らず鮮かなもんですなあ。

野呂。うさばらしさ。

近江。あんたもあんたらしくない。何時迄一婦女子に戀々としてゐるんです。

野呂。だが今度のいきさつはひどいよ。無理矢理に自分の手で愛人の首を斬らされたんだからねえ。君だから云ふが、今度だけは流石の野呂信吾、血の涙を流したよ。

近江。（ひやかして）お察し申します。

野呂。お茶らかすなよ。考へても見給へ。自分の飼つてる犬が、ネタを摑んでながら絶對絶命の所迄引つ張つて置いて賣込みに來るなんて、それだけだつて、飛んでもねえ、胸の中がムシャクシャする話ぢやないか。それに、かうなると、今度は逆にこつちから、臺灣の一件を改進黨に賣りに出て、内閣を倒させてやるからその代り、製糖會社も俺も見逃しておくんなさいと出るより他に助かる道はないぢやないか。

近江。如何にも。

野呂。うつかりしてれや小野田が助かつて俺一人がしよひ込まなきやあならない事になるからなあ。——ただ別離の悲しみだけなら、今度が初めてぢやアあるまいし、野呂信吾さうさう閉口垂れはしないんだが、あの女に父の仇、家の仇と憎まれてゐるのかと思ふと、何とも云へず淋しいわい。

近江。だが物は考へ樣でさ。今度の事のお蔭であんたもすつぱり政界から足をぬいて、愈々前途ある實業家として立つ事になつたぢやありませんか。なあに、金さへあれば女なんかいくらでもお望み次第でさ。あんた以前よく「殖民地は庭だ。」つてな事を云つてましたな、その庭でちよつと散歩するですなあ。

野呂。だが今度の臺灣入りは、どうも幸先がよくなかつたな。東京出發といふ其日に鐵道のストライキなんぞが始まつて立往生とは何ともはや。

近江。そんな心配が當分ないのが臺灣の有難い所なんだから、喜ばにやアいけませんよ。

野呂。（下を覗いて）おい、岩吉。何をしてるんだ。一人でひどくボンヤリしてるぢやないか。

岩吉。（聲のみ）おや、そこにおいででございま

したか。いえ、なに――あの――澎湖島といふ島は見えませんでせうか？

野呂。あれやお前、臺灣をずつと西に廻つた方だから見えやしないやね。澎湖島がどうかしたのか？　ああ、あそこでお前の息子が戰死したんだつたな。

汽笛の音。　（暗轉）

第三場

臺北にある總督府の中。支那風の木造建築。上手寄りに横斷された部屋の側面。下手に廊下。前場から一ケ月後。

廊下を覆審法院判事月島が興奮して歩いてくる。あとからついて來た給仕に部屋のドアの所で云ふ。

月島。いいか、杉山參事官に月島判事がすぐお目にかかりたいと云つてくれ。

彼は部屋に這入つてイライラしながら待つてゐる。杉山が給仕につれられて出てくる。

杉山。や、よくお出ででした。やつと雨があがりましたなあ。

月島。お忙しい所を濟みませんがな、今日はちよつと伺ひたい事があるのですがなあ。

杉山。はあ、何です？

月島。いや、妙な事實があるのです。一週間ばかり前に私の方に來た事件ですが、苗栗の南勢庄で村の共有地の竹林で土人が二人竹を切つてゐたら、突然警官に捕まつてしまつた。何時の間にかそこが官有地になつてゐたといふのです。それから段々聞いて見ると、ひどいぢやないか、土地調査規則の第六條を楯にとつて、知らないでゐた者の土地は片つ端から沒收する、それればかりか不服な者は××でもつて承諾させてるんだ。判を持つてゐないといふ者があればその場に印形屋を置いといてどんどん判を彫つて無理矢理に押させたんだ。しかも補償金の額は全然きまつとりやせんのだ。こ、こんなひどい事があるもんか。

杉山。そんな事はないでせう。

月島。なあに、無いことがあるもんか。僕アちやんとしらべて證據を握つとるんだ。

杉山。そんな事がある筈はないですがねえ。

月島。筈がなくたつて現にあるんだから仕樣がないさ。それとも君は僕が出鱈目を云つてるとでも云ふのかね。

杉山。ですがねえ月島さん。あなたはまだこつちへ來て一月にしかならないからよく事情がおわかりにならんのですよ。殖民地の統治と云ふものは母國のそれとは全然別物で、云はばここではまだ戰時狀態なんですからね。

月島。それや僕だつて相當の差異は認めるさ。しかし同じ日本の國民で、憲法の行はれてゐる土地ぢやないか。僕はこんな事が又起れやあ××だらうが××だらうが、片つ端から引つくくるつもりだからね。

杉山。いいや月島さん。さういふ見地から云つたら、それや現在臺灣で行はれてゐることは、一から十まで憲法のある國では考へられんやうな事ばかりですよ。だが月島さん、臺灣には××は行はれないのですよ。

月島。××が行はれん?!

杉山。細い法理論上の點に就いてはそのうちゆつくり御議論を承りたいと思ひますが、實際の話、××をここに行つて御覽なさい。母國人の權利は保護されず、土民權ばかり保護されるやうな始末になつてしまひますよ。實際の話、もし憲法がここに行はれるものとすれば、一體どういふわけで生蕃は××も

何もなしに毎日毎日×されてゐるんですか？　何故彼等は交通、居住の自由を限られてゐるんですか？

月島。そ、そんな無茶な議論があるもんか！

杉山。一體××は何の爲にあるんでせう。日本帝國の爲ぢやありませんか。大所高所から物を見なくちやいけませんよ。總督府は生蕃を二種に分けて、歸順する望みのある者は德を以て撫でるが、望みのない者は××させる方針で進んでゐます。あなたの××で行くと總督初め我々も皆××にでもされなきやならん事になりますなあ。殖民地の人間に向ふ場合、やれ正義の法律のと持ち出すことは、彼等に××を教へることですよ。

月島。（憤然として立ち上る）それが總督府の意見なのだな。よろしい。この上話す必要はない。

彼は廊下へ出る。すると通りかかつた野呂と近江にぶつかりさうになる。

野呂。おや、月島君、久し振りだつたな。

月島。（睨みつけながら）君はここで何をしてるんだ？

野呂。何をしてるんだは手きびしいね。今度は野に下つて商賣人だ。

月島。何の商賣だ？

野呂。苗栗製糖會社社長といふ商賣さ。

月島。ふむん、君が社長か。官有地拂ひ下げの手續きはもう濟んだのかね？

野呂。一昨日濟んだよ。

月島。それはお目出度う。（足早に去る）

近江。（見送つて）あれが月島判事ですか？

野呂。畜生め、俺が初めから臺灣に來るつもりなら、あん畜生を此處へ送るんぢやなかつたに。

杉山。（ドアの所に立つてゐたが、野呂の肩を叩いて）心配し給ふな、あんなのに臺灣の仕事が勤まるもんか。ま見てゐ給へ。長い事アないよ。

（暗轉）

第四場

藪の中。夜。武器を持つた黑い影が多勢、上手から下手へと、多くは無言で、時として低い聲で囁きながら、獲物を狙ふ猛獸のやうに靜かに爬つて過ぎる。過ぎてしまふと瞬間舞臺空虛。突然あまり遠くない所で、ワーッといふ大きな喚聲。形容出來ぬ物凄い叫びの混沌。唸り聲。物のぶつかり合ふ音。燃える音。下手の空が赤くなつてくる。

（暗轉）

第五場

苗栗臨時法院の判事控室。上手のドアに依つて法廷につらなつてゐる。ドアが開くと法官席の壇の背面が見え、法廷の會話が聞える。下手に廊下に通じるドア。部屋の中にはテーブル、椅子、茶碗、鞄、本箱、臺灣全圖等。舞臺空虛。下手のドアから野呂と杉山が這入つて來て低聲に話し合ふ。

杉山。月島が裁判長とは何しろうまい工合に行つたねえ。彼奴がどういふ判決を下すか、蓋し講和談判以上の興味だよ。

野呂　豫審以來、めつきり瘠せちやつたから痛々快々だよ。氣でも違つてくれれやア申分なしだ。

杉山。どれ一つ判決振りを拜見するかね。

上手のドアを細目に開ける。中の聲が聞える。

月島。最後にたづねるが被告羅福生は今となつ

てもなほ少しも悪事をしたとは思つてをらぬのか？

　通譯が通譯する。被告のハッキリした聲が聞える。

通譯。被告は自分のした事は飽く迄も正しい事だと申して居ります。

月島。被告陳阿榮はどうだ？

杉山。（野呂に）おい、特別傍聽席へ行つて見てよう。

　二人は法廷に這入つてドアを閉す。巡査が上手のドアに現はれる。

巡査。もうぢき判決が濟むから此處で待つとりなさい。

楓。はい、有難うございます。

　岩吉と楓が現はれる。楓はやつれてゐる。

岩吉。さ、お掛けなさいまし。（楓腰掛ける）本當によくまあ一人でおいでになれました。（あとは言葉なく涙を拭ふ。やがて）旦那様はたうとうおかくれ遊ばしたさうで、何とも申し上げやうが御座えません。お坊ちやまがあゝいふ風におなりになつては、奥様がどんなに大變でおいでかと――でも、月島さんはそれはそれはお嬢様をお待兼ねでござえました。

楓。（小さな聲で）さうお。

岩吉。だがこちらへ來ましてからも、私はもう野呂といふ奴のやる事を見てゐると憎さを通り越して恐ろしくなつて參りました。

楓。もうどうかあいつの事は云はないで、ね。

岩吉。お嬢様が折角お出でになつたばかりだのに、こんな事は申し上げたくござえませんが――全く――ここは――何とも申し上げられません――ひでえ所でござえます。今もかうやつて、現に七十人からが××の申し渡しを受けるのださうでござえます。

楓。（蒼ざめる）そして――それを――月島さんが――

　その時法廷で喚聲があがる。

岩吉。おや、どうしたんだらう。判決が下つたのかな。

　岩吉がドアの方へ行かうとした刹那、眼を血走らせた月島が上手のドアから這入つてくる。這入るや否やドアに鍵をかける。

楓　月島さん！

　だが月島のうつろな眼は一時彼女の顔に注がれるが、不意に驅け寄つて楓と岩吉を下手のドアから押し出してドアに鍵をかける。

　楓と岩吉は外からドアを叩く。月島は一瞬躊躇したのち、テーブルのひき出しからピストルを取り出して、轟然一發、額を撃ち抜いて倒れる。二つのドアを叩き破つて人々が跳び込んでくる。楓が叫んで月島の死體に取り縋る。岩吉も泣き喚く。群集が二人の姿を隱してしまふ。野呂が群集に揉まれながら中を覗き込んでゐる。彼が後向になつた時、岩吉が群集の中から跳び出して物をも云はず短刀で野呂に切りつける。野呂は體をかはして岩吉を投げつける。多勢が寄つてたかつて岩吉を押へつけてしまふ。

野呂。（まはりにたかる人達に）いや、何でもなかつたですよ。氣でも違つたんでせう。（部屋を出る）

暗轉。舞臺前面に紗の幕が降りる。映畫がうつる。工場。カメラは太い煙突を根本から段々に仰いで行く。その煙突には「苗栗製糖會社」と書いてある。煙を濛々と吐き出してゐる。それにダブッて改築された立派な總督府。次のタイトル

が順々に映る。

タイトル。明治四十年。北埔事件。××九名。行政處分九十七名。

タイトル。明治四十五年。林圮埔事件。××八名。懲役、無期一名有期三名。

タイトル。同年。土庫事件。××一名。懲役、無期二名有期十二名。

タイトル。大正二年。苗栗事件。××二十名。有期懲役二百八十五名。

タイトル。大正三年。六甲事件。××八名。懲役、無期四名有期十名。

タイトル。大正四年。西来庵事件。行政廳に於て處分した者二百十七名。××八百六十六名。有期懲役四百五十三名。

紗の幕の後ろにあかりが這入る。パントマイム。大きなコンクリートの塀。その前に多勢の土人が互ひに抱き合ひ、塀に耳を押しつけ、何かを待つてゐる。紗の幕は上つてしまふ。不意に塀の中で××××の音。靜寂。土人達は痙攣し、ぐつと小さな塊りになる。やがてその破れるやうに見開かれた眼を持つた顏は一樣に正面に向けられ、塊はふくれ、盛り上り、口には何事かを叫んで大きく開かれ、手が差しのばされる。眞紅の光線にひたつて――　（幕）

――注意。この戯曲は特に歌舞伎、新派等の既成俳優達が上演する事の出來るやうに企てたので、題材、構成、演技等すべてさういふ意企の下に統制されてゐる。主演俳優は野呂と岩吉とを早替りで演ずることが出來る。

年譜

自傳

私は一九〇一年、東京神田末廣町に生れた。父の家も母の家も醫者で、父自身も醫學士だつた。私は小男だが父は大きく頑丈で、帝大ではボートで醫科の第一選手の四番を漕いでゐた。私が生まれて二三年すると父は肺病になり、私が九つの時に死んでしまつた。それ以來私の家は何のたくはへもなく、貧乏に苦しんだ。それ迄の間にしかし私は小ブルジョアの子供として十分な種々の性格をそなへた。私はクリスチャンに仕立てられ、日曜學校に行き、コーラス・ボーイとなつた。母は私のために彼女として可能なあらゆる心づかひをした。私の家のキリスト教は内村鑑三氏を通してのそれだつたので、小ブルジョア的にではあるが、しかし、封建的なものや、假面をかぶつてゐるものや、壓制するものやに對する烈しい憎惡と反抗の心を養ふ役には立つた。開成中學の生徒だつた時に起つた世界大戰に對しては、人道主義的な立場から烈しく反對した。その頃から私の家は僅かのたくはへが全くなくなり、母の雜誌記者としての働きと親類からの借金とで暮した。父方の祖母の奸惡な性質は私の性格をねぢけさせた。第一高等學校在學中私はキリスト教を捨ててニイチェに走り、厭世思想に襲はれて憂鬱を極めた。校友會雜誌に二三の短篇を發表した。帝大哲學科に籍を置いたが殆んど出席せず讀書に沒頭したが、どうしても現狀ではやりきれなくなり、無理な借金をして獨逸に出掛けた。表現派全盛時代に會し、忽ちそのニヒリスティックな主張に共鳴し、夢中になつて繪を描いた。まる一年で歸つて來て、「マヴォ」といふ、ダダイスティックな造形藝術團體を作つた。その年關東地方大震災。震災後の世間の不安定な氣分に乘じて、「マヴォ」はあばれた。そのまゝずるずるとアナーキスティックな思想を持つやうになつた。

一九二五年六月小說『兵士について』を雜誌「文黨」に發表。それ以來小說戲曲に筆を染める。同年十二月築地小劇場のためにカイゼルの『朝から夜中まで』のセットを作つたのが病附きで、それ以來演劇に熱中する。翌年は心座を起した。その頃コムミュニズムを知り、「文戰」同人となり、前衞座に加はつた。それ以來プロレタリア解放運動の進展に從つて、プロレタリア藝術の分野に於いても分化と合同が繰り返された。一九二七年にはプロ藝を脱して勞藝を組織したが、勞藝が社會民主主義の陣營に沒落するや、更にそれを脱して前藝を作つた。翌年三・一五事件後間もなく前藝はプロ藝と合同してナップを組織した。その間を通じて私は主として演出や裝置に、また小說戲曲を作り、繪を描いてプロレタリア藝術運動の一兵卒として働いた。一九三〇年五月以後×××に關する事件により、引きつづき未決×にあり。

六年前に結婚して六歲になる男の子がある。

著書は短篇集、戲曲集四、藝術論集六、飜譯五、童話集五、童謠集一。

現在、日本プロレタリア作家同盟員、同劇場同盟員、左翼劇場員、プロレタリア科學研究所員、文藝家協會員。

作品

一九二五年

六月、『兵士について』（小說）

九月、『人間機械』（小說）

十一月、『何が道德的か』（小說）

著書、美術論文集『現在の藝術と未來の藝術』

一九二六年

一月、『孤兒の處置』（戯曲、一幕九場）『共同ベンチ』（小說）
三月、『街路越の殺人事件』（ラヂオ・プレイ）
四月、『一九二二年』（小說）
五月、『無宿者』（シナリオ）
六月、『罵られた子供』『脚』（小說）
八月、『女優』（シナリオ）『兄を罰せよ』（戯曲、二幕四場）
九月、『勇ましき主婦』（戯曲、一幕）
十月、『エッチングの教師』（コント）
十二月、『廣場のベンチで』（戯曲、一幕）
著書、戯曲、小說集『人間機械』美術評論『構成派研究』

一九二七年

一月、『愚劣な中學校』『老給仕人』（小說）
二月、『リジアの家』（小說）『進水式』（戯曲、二幕）『踊子になつた書記の妻』（戯曲、一幕）『水葬』（コント）
三月、『闇の陣營』（戯曲、一幕）『スカートを穿いたネロ』（人形劇、八場）『仕事行進曲』（戯曲、一幕）『弱い兵士』『老爺との別れ』（コント）
四月、『菊之助の決心』（戯曲、一幕二場）
『男の子』（コント）
六月、『矢張り奴隷だ』（人形劇）『彼』（小說）
七月、『カイゼリンと齒醫者』（戯曲、三幕）
十月、『ロビン・フッド』（六幕、四十場）
十一月、『十字軍』（小說）
十二月、『砂漠で』（戯曲、一幕二場）『小さいペーター』（脚色、一場）

一九二八年

一月、『薔薇』（脚色、三場）
六月、『或る演說』（戯曲、一場）
八月、『父と娘』（小說）『いぬにされたカスペル』（シナリオ）『恥しめられた映畫』（小說）
十一月、『少女と裁判』『悲壯なエピソード』（小說）
著書、戯曲集『スカートを穿いたネロ』

一九二九年

二月、『弟の死』（小說）
四月、『トラストＤ・Ｅ』（脚色、十八場）『妥協はない』（小說）
五月、『莫迦の療治』（改作、脚色、一場）
六月、『暴力團記』（戯曲、四幕九場）
七月、『上には上』（戯曲、三幕十場）
八月、『印刷機』（シナリオ）『最初のヨーロッパの旗』（戯曲、四幕八場）『點呼』（移動劇場用脚本）
九月、『立志傳中の少女』（コント）『スポーツ』（シナリオ）
十月、『鬪士』（コント）
十一月、『西部戰線異常なし』（脚色、五幕十六場）

一九三〇年

一月、『スパイと踊子』（戯曲、七場）
二月、『暗い選擧』（戯曲、二場）『何故？』（脚色　『醜い生死』（シナリオ）『子供』（シナリオ）
四月、『日清戰後』（戯曲、五幕十二場）
五月、『ハト』『何處迄も』（小說）
著書、戯曲、シナリオ集『最初のヨーロッパの旗』　戯曲小說集『暴力團記』　美術論文集『プロレタリア美術のために』　演劇論文集『プロレタリア演劇論』　戯曲、小說、シナリオ集『新選村山知義集』

砂糖の話

波のあひま

病氣なほる

新しい女

モスクワ指して

ドイツ國民黨員

中野重治

砂糖の話

砂糖の話をしませう。

ある秋の夕がた、一人のヨボ〳〵した爺さんが高臺の方から谷底の街の方へ歩いて行きました。

爺さんは毛ばだつたラシャの帽子をかぶつて黑いモヂリ外套を着てゐました。そのモヂリ外套には裏側向きに大きな腰上げがしてありました。しかし肩上げはしてなかつたので、手は兩方とも袖口のなかに隱れてゐました。爺さんはその手をカクシに入れないで、からだの兩側にぶらりと下げてゐました。そしてそれを振つて調子を取りながらやつと歩いて行きました。

お寺の前で爺さんは立ちどまつて見上げました。晴れた夕方の空に櫻の大木が立つてゐて、その葉がもうまつ紅になつてゐました。葉のなかには、まつ紅にならず少し黑ずんで、半分以上は綱のやうにスカ〳〵になつてゐるのもまじつてゐました。爺さんは何かひとり言を言はうとして口をあけましたが、途端にヂリヂリンといふけたゝましいベルの音が聞えたのでびつくりして立ち直りました。

「ホ、ワ……ホ、ワ……。」

爺さんはこんなことを叫びました。自轉車はその袖にすれ〳〵に走つて行きました。

「ホ、ワ、……ホ、ワ……。」

爺さんは口をあけたまゝ自轉車を見送りました。が、その眼は「やれ〳〵、何といふこつたらう。」と言つてるやうに見えました。その眼がのろのろと變つて行つて、とう〳〵、「いや、からしても居れぬ！」といふ色になりました。爺さんは、皺だらけの眼で目ばたきを一つして歩き出しました。

爺さんは曲り角の藥屋のところまで來ました。出逢ひがしらにまた自轉車にぶつかりはしまいかと思つたので、爺さんは、まづ顏だけさきに横町に入れました。自轉車は來さうにもありませぬ。爺さんはからだも横町へ入れました。

横町はちやうど晩飯の支度で上を下への騷ぎでした。そこには、煮物屋と、さかな屋と、八百屋と酒屋とが、小さな市場のやうに並んでゐて、買物のお神さん達が狹い店さきに一ぱいにたかつてゐました。

お神さん達のあるものはさつぱりとした、襟とポケットのへりとにふち飾りの取れたエプロンをかけてゐましたが、あるものはバサ〳〵の髮の毛をして、それを背中の子供が引つぱるので癇癪を起してゐました。

そこでは、煮豆、こんぶ卷、きんとん、煮しめた鯡、小さな章魚を三・四匹入れた淺い皿、紅殼染めの章魚の足、竹の子、シラタキ、いろんな野菜、「……しやいッ！」といふ威勢のいゝかけ聲、「……とおつ、とおつ……たあつ、たあつ……」と數を讀む聲、「およし、坊や……」といふ母親の金切り聲、あつちからもこつちからも出るむき出しの赤い腕、二の腕のところでゴムじめにした前垂の袖口、そこの窪みの垢、鹽引きの鱒のしつぽをつまみ上げる指、値段を書きつけた經木札のそりを起す指、何かに水をぶつかけるザアーツといふ音、子供の泣き聲、らつきようの匂ひなどがむちやくちやにこんがらがつて、それがめい〳〵にこづき合つて、そのために人間ばかりか、大根や數の子までも昂奮

してるやうに見えました。爺さんはそのなかへはひつて行きました。

爺さんはおづ〳〵と歩いて行きました。そこの旺んな活氣にまき込まれないために――捲き込まれたが最後爺さんは燃えてしまつたでせう。――爺さんは、腰にウンと力を入れ、わき見をしずに歩いて行きました。それはかう言つてるやうに見えました、「ごめんなさいよ。ごめんなさいよ。わたしは買物をするんでないんですで…しばらく來なかつたもんですでね…大分に日が短くなつたですでね…歸ればわたしも食事ですで…食事はあります…あります…さほどひもじい思ひもしませんですでね…ごめんなさいよ。」

しかし爺さんの眼にきれいな、黑塗りの箱にネットリと詰つた焦茶色の練物がチラッと映りました。爺さんはわき見をしたのです。爺さんは心の底から、「あ！　鯛味噌が一嘗め嘗めたい。」と思ひました。一度さう思ふと、爺さんの眼は、忽ち、そのすぐ側の、別のものに吸ひつきました。それは蕪を幾枚にも薄くおろして、卷いて、胴を綠色の昆布でしばつた一寸に五分位の大きさのものでした。それは冷たさうな水の底に沈んでゐましたが、爺さんにはその水が、どうしてもひどく甘酸つぱく思はれました。名前を知らなかつたので爺さんは、心の底から、「ああ、さぞやうまからう！」と思ひました。

爺さんはブルッと慄へました。爺さんは袖のなかで手を握りました。爺さんは拔け殘つた奧齒をカチ〳〵と嚙みあはせ、舌を上顎にぴたりとくつつけて、それで力一ぱい上顎をズー〳〵と擦り〳〵しました。爺さんはのろ〳〵と歩き出しました。

今や爺さんは、みづおちをグッと落して背中を圓くして歩いてゐました。それは爺さんが、長い年月のうちに自分で工夫したやり方でした。からだをまつすぐにして歩いてゐると、空つぽの胃の腑の吊る下つてゐるのが感じられて非常に厭な氣持でしたが、この恰好をすると、胃袋が手の平の上に安穩に支へられてるやうで、どんな腹のへつた時でも割りに凌げるのでした。買物のお神さん達を拔けて爺さんは橋の袂まで來ました。

三人の子守女が遊んでゐました。三人ともチャンチャンコで赤ん坊をおぶつてゐましたが、「ほおらよ、ばあ…ばあ…。」と言つて、お互ひに背中の子供を搖りながら見せ合つてゐました。赤ん坊はそんな簡單なことでも夢中になつて喜んでゐて、そのため子守娘達は、爺さんの通り道の邪魔をしてゐることに氣がつきませぬでした。

爺さんは困りました。

困つた拍子に爺さんは、今しがた煮物屋の前で辛い思ひをしたことをふいと忘れました。

「ごめんなさいよ。」

「あいよッ。」

一人の子守娘が、「ごめんなさいよ。」と言つたのが作り聲をした若い男か何かだらうと思つて、ぴしやりと一言で凹ましてやる言葉を考へながら景氣よくふり向きましたが、ヨボ〳〵した爺さんだつたので默つて通しました。

爺さんはそこのどぶ川について曲りました。それからもう一度橋を渡つて小さな格子戸門の前に止まりました。

爺さんは格子戸に手をかけて引きました。やくざな格子戸なので、上の方が一寸ばかり開いただけでそれが支へてしまひました。そのまゝ開けようとして見たけれど駄目なので、それをもう一ぺん戻して、今度はそろ〳〵と引いて、それからやつと爺さんは中へはひりました。爺さんはのろ〳〵と家の右横手へ歩いて行きました。爺さんの顏は嬉しさうになつたかと思へば

心配さうに曇りました。

「まあ、お爺ちやんぢやないの？」

箒で疊の上を掃いてゐた三十ばかりの女が、箒の手を休めてとんきやう聲をあげました。爺さんの顏が晴れ〴〵と照りました。

爺さんはニコ〴〵して、頭の帽子に手を掛けたまゝ上りがまちの方へ近寄つて行きました。

「ちよいとお待ちなさいよ。」

箒を持ち直したお神さんが半分は自分に言ひました、「一掃き出しつちまふから。」そして、疊の上に撒き散らした茶殼を急いで緣側の外へ掃き出しながら言ひました、「ずゐぶん暫くだつたわねえ…、おゝや、リョーマチを出したの？　それや大變だつたわねえ…さう、それや、ま…あたしんとこぢや待つてたんですよ、もう見えさうなもんだつて…あ、ちよいとお待ちなさい。」お神さんはチョコ〴〵と走つて行つて、廊下の端の手水鉢の上に懸けてあつた雜巾を取つて來て緣側の板の間を大急ぎで拭き、爺さんが何か言ひかけようとするのを、「それどころではない。」と言はぬばかりの忙しさうな身ぶりで抑へ、雜巾を元のところに懸け、前垂の端で手を拭き、閾の向うに二・三枚重ねて つた座蒲團を一枚持つて來て、それを緣側に敷くなりお神さん自身はその前に、板の間にベチャンと坐り込んでホッと一息つきました、「さ、お爺ちやん！」

爺さんは帽子を脫いで腰かけました。

お神さんは爺さんの顏を細い目をなほ細くして眺めました。お神さんは、鼻の上に人なつこい皺を寄せながら半分は上の空でもう一度言ひました、「ほんとに、ずゐぶん暫くだつたのねえ…。それで、あすこぢや藥やなんか飮まして吳れるの？」

「いんえ。それほどでもなかつたんですがね。晴れつゞきで、仕事を休まして貰つて…。」

「日向ぼつこをしたら癒つたの？」

「えゝ、日向ぼつこをしたら…癒つて…。」

お神さんは聲をたてて笑ひました。

お神さんは立つて電燈をつけ、火鉢を持つて來ました。それからお神さんは小さな重箱を持つて來てお爺さんの前で蓋を取りました。

「これおいしいのよ。」

箱の隅に靑豆の甘くグジョ〴〵に煮たのが塊つてゐました。爺さんは袖のなかから手を出して食べ始めました。

爺さんは如何にもうまさうに一口々々と食べて行きました。一口入れるたびに舌打ちをして、それでもまだ足りぬので一口每に首を傾げました。首を傾げると、その豆のうまさが我ながら納得行くやうに思はれました。

靑豆がなくなるとお神さんは、今度は砂糖を持つて來ました。砂糖は黑砂糖で、その塊りを削つたのを皿に入れて持つて來ました。爺さんは、添へてあつた箸で最初の一片を摘んで、それを左の手の平に載せて、顏をのけぞらせざま口を蓋しました。手を離すと砂糖は口にはひつてました。爺さんは砂糖の載つた舌をぺたりと上顎につけ、今までで一番首を傾げました。

「さう〴〵、あんたは戰爭に行つたことがあるんでせう、お爺ちやん？」砂糖を食べてる爺さんを眺めてたお神さんが言ひ出しました、「その話を聞いといて吳れつてのよ、玉木さん…玉木さんて、ほら、いつかお爺ちやんにチョコレエトを吳れたでせう？　チョコレエトつてのがお爺ちやん言へなかつたでせう？　あの玉木さんが聞いといて吳れつてのよ。」

「玉木さん。え、玉木さん。頂戴しましたよ…。今日はお留守な？」

「引つ越したんですよ、あの人…。」

「あゝ、引つ越した…。」

「それでね。玉木さんがね、いつかあんたが日

露戰爭に行つたことがあるつて話をあの人にしたでせう？　それで…。」
「いんや、それやわたしでねえんですで…。」
「あんたぢやないの？　海軍よ…。」
「えゝ、わたしでねえんですで…それや横川のこつてす…あのせいの高い方の…。」
「さう、あのせいの高い方の人なの？」
當ての外れたお神さんは、きびしよを持つて來て茶をいれました。
「玉木さんはお爺ちやんだつてもんだから…。」お神さんがもう一度話を戻しました「それでお爺ちやんは知らないの、その横川さんのこと？　軍艦の名やなんか…玉木さん近いうちに聞きに來るつてのよ、是非聞いといて呉れつてつてね…。」
しかしお神さんは、その横川爺さんのことを思ひ出したので訊ねました。
「横川さんはどうしたの？　この頃ちつとも顏を見せないやうだけど…。」
「………。」
「どうかしたんですか。」
「踝をたがへたんですよ。」
「踝をたがへた？　どうしたのさ、あんなお爺さんが？　あんたはあんたでリョーマチを出すし…。」
爺さんはしかめつ面をしました。お神さんの口元を見たり、見たかと思へば外し、口をモグモグさせ、全體としてドギマギとあわてました。
「どうしたんだらう？」お神さんは考へやした、「もしかしてこの人達は喧嘩をしたのかな？　たべ物やなんかのことで…しやうがない！　でも踝をたがへたのが本當ならちよいと出かけられないわねえ…。」
それでお神さんは訊ねました。
「でも、お爺ちやんは知つてはゐるんでせう？　横川さんが日露戰爭に行つたつてのは本當なんでせう？」
爺さんの顏が元通りになりました。
「知つてますよ。それや本當ですで…。」
「軍艦の名前はなんてえの？」
「軍艦の名は知らねえですで…！　あれやノーを惡くして忘れてしまつたですでね。」
「ノー？」
「腦…。」爺さんは自分の頭をさはつて見せました、「勳章を貰ひ損ねたですでね…。」
「まあ、勳章を貰ひ損なつたの？」お神さんは自分でも面白くなりました、「お爺ちやんの知つてることみんな話して頂戴。」
爺さんはのろ／＼と話し始めました。
「戰爭で軍艦に乘つてたですでね…旅順口かどつかで決死隊が出來たですで。横川も決死隊にへえらうと思つたんですよ…艦長がね、お前はいけねえから殘れと言つてね…殘してわしの傍に居れと言つてね…それでや勳章が貰へめえといふと、勳章はわしがきつと貰つてやると言つたもんでね…どうせ艦長が言つて呉れなけれや貰へねえんですでね…艦長の言ふなりになつたですよ…ところがね。その軍艦が沈んでね…艦長が死んでしまつてね…それで勳章も貰へず…決死隊とつても生き殘つたものもあつたですでね…その人等あ勳章貰つたですがね…それから觀兵式で號令をかけて、なんか褒美を貰つたつてえですがね…それやどうもはつ切りしねえですよ…日露戰爭に行つたな本當ですで…なんしろ腦を惡くして…。」
「勳章が貰へなくて頭が變になつたのかしら？」
「さあね…。」
話がと切れたのでお神さんは爺さんの顏を見ました。爺さんの眼が、「わたしはもう喋りくたびれましたで…。」と言つてるやうに見えま

した。するとお神さんは思ひました、「この話は思つたほど面白くなかつた。」お神さんは別のことを、亭主のことを思ひ出しました、「あと二時間ばかしでうちの人は歸つて來る。晩の御飯をこさへなければならない。一しよに食べようと思つて外の家より晩くしてゐるのだけれど、それでももう支度にかゝらなければならない……あゝ、わたしも腹がへつた。」

お神さんと爺さんとが申し合せたやうに外を見ました。うす暗くなつてることに二人一しよに氣づきました。

爺さんが云ひました。

「そんでや、わたしは今日はおいとましますで……。」

お神さんは立つて部屋のなかへ行きました。しばらくしてお神さんは小さな竹の皮包みを持つて出て來ました。そのなかに大きさ一寸角ほどの黒砂糖の塊りがはひつてゐました。それを爺さんに手渡しながらお神さんが言ひました。

「そいぢやまたね……。」

爺さんの顔に何とも云へぬさもしい表情が現はれて消えました。爺さんが言ひました。

「毎度ねえ……。」

爺さんがモヂリ外套の前をあけて、竹の皮包みを腰上げのなかへ押し込みました。お神さんが外のくらがりを見張り始めました。爺さんは竹の皮包みを、兩手を使つて次第々々に奧の方へ送りました。竹の皮包みは爺さんの左腰まで行きました。

お神さんが爺さんの耳へ低い聲で囁きました。

「氣をつけていらつしやいね。」

お神さんがさう言つてる時お神さんの手が爺さんの肩を撫でてゐました。

爺さんが低い聲で答へました。

「ごめんなさいよ。だんなさんによろしく……。」

「さやうなら……。」

爺さんは立ち上り、緣側から下り、帽子をかぶり、格子戸門をくゞり、元來た道をのろ〳〵と歸つて行きました。

八百屋の人ごみは消えてました。藥屋の角を曲つてからは餘り人通りもありませぬ。爺さんは袖で調子を取つてのろ〳〵と歩いて行きました。

のろ〳〵歩いてゐましたが爺さんは急いでゐました。石屋に突き當つて曲つた時はとつとと歩いてました。道はだん〳〵に上り坂になつて行きました。上つて行くにつれて爺さんは急ぎ足になりました。

爺さんは踏切まで來ました。

上り坂は踏切までで、平らな軌道面からは高臺の平地が始まつてゐました。

橫木は上つてゐました。

爺さんは恐ろしい勢で線路を越しました。

踏切を越えると爺さんは歩調をゆるめました。爺さんは立ち止りました。

二・三間向うに電燈が一つともされてゐました。その邊にその外に電燈は見えませぬでした。電燈は門燈で、門の石柱がぼんやりと照らされてゐました。門の向うには黒い立木が植わつてゐました。植ゑこみの向うには黒い建物が建つてました。

電燈の二・三間手前で立ち止つた爺さんは左の手をあげて後腰にあてがひました。爺さんはその手を前に引きました。竹の皮包みはありました。

爺さんは今度はいきなり兩手をポケットにつゝ込みました。爺さんは足をひろげ、尻をつき出して上體を前かゞみにし、皺だらけの首で力一ぱいに鎌首をもたげました。爺さんは息をつめました。そしてさういふ恰好で、爺さ

んを包みこんでゐた薄闇をジロ〳〵と覗きました。
　爺さんはからだを伸ばしました。そして門の方へ歩いて行きました。門の柱に眞鍮板が貼りつけてあつて、その上に打出し文字で「財團法人善隣養老院」と書いてありました。爺さんはそのなかへはひつて行きました。
　不幸な人々のためにこしらへた施設に孤兒院、癈兵院、養老院の三つがありました。
　どんなあばら家でも、また女のゐない家でも、「奧さん、ごめんなさい。」と言つてはひつて來るのが孤兒院の子供でした。
　彼等は上りがまちに箱を下して蓋をあけました。箱のなかには、筆、墨、歯ブラシ、シャボン、模樣入り封筒、偉人丹などがはひつてゐました。
「奧さん、わたしは岡山の孤兒院から參りました。」やつと歩ける位の子供が大人の言葉で言ひました。一番前へ、孤兒院發行の身分證明書が出してありました、「いかゞでせうか、歯磨は？　シャボンは御入用ではございませんか？　あはれな子供のために……。」
　子供は家のなかをキヨロ〳〵見廻してゐました。子供は人形を見つけました。髮の毛の取れたのが放り出してあつたのです。子供はそれを摘み上げて言ひました、「この墨は鳩居堂でございますが……。」
「うちでは今何もいりませんから……。」と言ふと初めて子供は顏を上げました。子供は睨みつけました。氣の弱い人達が、そんな小さな子供から仕返しされるのを恐れて當り障りのないものを買ひました。
　あつちの孤兒院　らも、こつちの孤兒院からもかういふ子供達が日本中に出てゐました。彼らは到るところで氣の弱い女や留守番を睨めました。年端の行かないものもそれを知つてゐました。それをしなければ自分がいたい目を見なければなりませぬ。それをしなければ腹一ぱい食べることが出來ませぬ。彼らは何によらずひとりでに會得して行きました。
　かういふ子供達が孤兒院長と澤山の事務員とを養つてゐました。かういふ子供達が、金持や金持の奧さんに、滿足の行く寄捨獻金の機會を與へました。金持達のうちには、色々とやつた惡業のために氣苦勞し、擧句の果てに少しばかりの金を孤兒院に呉れてすつぱりとその氣苦勞を脱け出したものもありました。政府が、孤兒院には補助金を、院長には功勞賞をやりました。やがて子供達は大きくなつてゐました。もうどんなものでも睨めました、彼等は睨めつけてそれから新しい闇に沈みました。
　××戰爭、××戰爭で澤山の元氣な男が死にました。しかしもつと澤山の元氣な男がかたはになりました。片目で、耳なしで、一本足で、いんぼで、彼等は歸つて來ました。働けなかつたから彼等は食ふことが出來ませぬでした。癈兵院が出來ました。何千・何萬のかたはのなかから何人かがそこに入れられました。入れられることを收容と言ひました。收容者がどうして選ばれたか、選ばれたもの以外に誰も知りませぬでした。
　何千・何萬のかたは達は、自分がいつの間にか親兄弟からさへ疎まれてゐることに氣づきました。それは傷よりも痛みました。傷は冬うづきました。
　足なし・手なしは手足の揃つた人間より一足早く死にました。彼等は細く細くなつて死にました。殘りのものは××ました。
　町や村からいつとなく癈兵の影が消えました。癈兵といふ言葉の分らない子供が澤山出來

てゐました。ある日新聞にきれいな寫眞が載りました。部屋に男が坐つてゐて男の後には違ひ棚がありました。床の間には大將の書いた字が下げてありました。男は頭を下げてゐました。部屋の前の廊下に××××人が立つてゐて、その人は軍服を着て、片手でサーベルを握り片手でシッケイをしてゐました。頭を下げてゐた男は昔の廢兵で今は一萬圓も貯金してゐました。新聞を見た人のなかに「戰爭に行つてかたはになつてもこれなら心丈夫だ。」と考へた人が大分ゐました。

身よりのない老人は養老院に行きました。

人の世話でそこへ行つて見ると、洋服を着て眼鏡をかけた人がテーブルの向うに椅子に腰かけてゐました。それと向き合つて老人も坐らされました。洋服を着た人とテーブルを挾んで椅子にかけて話すことは老人に初めてでした。老人は自分のやつたかも知れない惡事がすつかり知れてるやうな氣がしました。老人はビク〳〵しました。

養老院の人が訊ねました。

「生れはどこか？　どういふ經歷か？　身よりがないのか？　なぜないのか、どうしてそこへ尋ねて行かないのか？　病氣はないか？　どんな仕事が出來るか？　刑餘の人（養老院の人は刑餘の人と言ひました）ではないか……」

老人は遠方にある生れ故鄕の役場から戶籍謄本を取り寄せなければなりませぬでした。それを持つていやな警察に行かなければなりませぬでした。泥棒でもなく、政治犯人でもなく、ばくち打ちでもなく、淫賣婦でもないこんな老人は、警察に取つて面白くもありませぬでした。しかし老人は警察が自分の來るのを待つてたのではないかと思ひました。それほど老人は調べられました、老人は指紋を取られました。老人は思ひました、「養老院を思ひ切らうか？　それがないと思へばいゝ。」

ある人には、當人自身どうしても思ひ出せない惡事が發見されました、ある人には、聞いたこともない「扶養の義務ある」人が呼び出されました。二人ともひどく叱られました。

寄るべのない澤山の老人のうちから、重い病氣や傳染病にかゝつてゐず小さな惡いこともしたことがなく、一人で食ふだけの勞働に堪へないまでに衰弱し、戶籍のどこを探しても親兄弟も親類も緣者も一人もない、養老院で養つてやるのがいゝだらうと警察の證明して呉れた人だけが養老院に入れられました。

養老院には老人ばかりゐました。ある人は五十、ある人は六十、ある人は七十でした。八十以上の人もゐました。

六十にも七十にも八十以上になるまでも彼等は、人と喧嘩せず、不平を言はず、反抗せず、ばくちも打たず、身持ちがよかつたために惡い病氣をせず、人がさういふものに費す時間と勞力とを仕事に注いで來、根限り働いてもう働く力がなくなつてしまつた……妻にも死に別れた、息子や娘にも死に分れた、知るべも緣邊も行く方知れずになつた、それでも働きに働いて、もう弱つて、七十にも八十以上にもなつて、山の樹のやうに朽れて倒れようとしてゐる、そんな美しい老人ばかりが養老院にゐました。善隣養老院には二十七人ゐました。

舍で一番日あたりのいゝ南隅の部屋に横川、中江、沖の三人の老人がゐました。横川爺さんが一番若くて五十三、沖が六十六、中江が七十二で一番元氣でした。

横川爺さんは小豆島に生れました。元氣な青年になつて海軍にはひりました、二十八の時三等兵曹で日露戰爭に行きました。日本海々戰のあつた前年の千九百四年、横川爺さんは磐城に乘り組んで黄海で戰つてゐました。艦長は神

戸大佐でした。有名な決死隊が募集された時爺さんは一番に申し込みました。そしてさつき中江爺さんの言つた通り勲章を貰ひ損ねました、神戸大佐は戰死し、磐城は沈み、爺さんはまつ暗な海に放り出されました。

すつかり海嫌ひになつて、爺さんは歸つて來ました。爺さんは女房を貰つて百姓を始めました。うまく行かなかつたので山羊の乳賣りを始めました。なか〱工合よく行きました。ある年牛の病氣がはやつて來て山羊にうつりました、乳が出なくなりました。「山羊乳」のいやな噂が擴がつて行きました。そしてお神さんが死にました。子供はありませぬでしたが、お神さんが死ぬと爺さんは頭が變になりました。

「戰爭がすんで大觀兵式があつてね。わたし等は横須賀で毎日のやうに演習をやつてね。いよいよ青山の觀兵式になつたさ。わたしは號令官になつてね。號令官といふのは、隊長が號令したのを大きな聲で復唱する役目だ。ところが×××が號令を間違へてね、横須賀と青山とでは練兵場の正面が正反對だつたのだからね。カシラー左ッ！　誰も居やしないのよ。しかし默つてる譯にも行かないから、わたしは隊長の言つた通りに言つたよ。それから、今のは號令官の誤りいッ！　と怒鳴つてやつたよ。隊長があとで二十圓呉れてね。その頃の二十圓は大きかつた。

「舞鶴でイギリスの水兵と宴會をやることになつてね。日本の水兵が、水兵だけで、イギリス水兵を招待することになつたのさ。藝者を總あげにしようてんで藝者屋へかけ合ひに行つたんだよ。ところが、水兵なんてもな士官と違つて平生遊ばないからね？　水兵さんならお斷りしますと言ひやがつた。癪に障つてね。船の鉤にロープを結へて擔ぎ込んでね。中程に鉤をかけてね。ロープにみんなつかまつてヨイヤーサッと引いたのだ。三軒こはしたよ、三軒……。」

そんなことばかり喋つてるので、村の人が爺さんを、東京の親類に送つて見て貰ひました。その親類の家自身ひどく困つてゐたので、村の人の手前もありましたが、親類の人は、爺さんを養老院に入れました。

中江爺さんは奈良縣の十津川郷に生れました。十津川はよい所でした。「トント十津川御赦免どころ年貢いらずのつくり取り」といふ歌がありました。明治維新まで皇室直屬であつたため、百姓達が今も士族で、みんな皇室に深い尊敬心を持つてゐました。

ある年、山津浪が來て耕地がむちや〱になりました。大分の人が北海道に行つて新十津川村をこさへました。中江爺さんがその中に混つてゐました。

北海道で中江爺さんは一人の女に近づきになりました。別の男が出て來て女を取つた上、ひどく爺さんを辱しめて村をおん出しました。爺さんは小樽に行つてゴモを稼ぎました。寒い港で、パイ助（籠）でハシケに石炭を運ぶのが仕事でした。それから爺さんは室蘭に行きました。室蘭でも同じ仕事をやりました。室蘭ではそれを「脱走」と言ひました。

百姓から移民、移民からゴモ、ゴモから「脱走」と、爺さんは、次第〱に困つて行きました。最後に旭川市外に行き、そこの火防組合の伍長の世話で養老院にはひりました。

沖爺さんは二十七人のうちたつた一人の東京生れでした。お神さんを貰つて二人一しよに石灰工場にはひりました。二人とも元氣で働きました。六・七年たつとお神さんが女でなくなりました。石灰のため女として役立たずになつたのでした。爺さんは酒を飲み始めました。お神さんが死にました。酒を止めた時は爺さんのからだがすつかり弱つてゐました。

外の二十四人同樣、この三人の老人も、すつかり馬鹿にされて生きてゐました。

道場の廊下の端に大きな魚の恰好をした木の板がぶら下つてゐましたが、起床時刻が來ると小使が行つて、その魚の腹を叩きました。すると二十七人のヨロケ〳〵の老人が起きて來ました。

彼等はずつと早くから眼がさめてゐましたが、魚の板の鳴るまでは寢てゐなければなりませんでした。彼等は毎朝思ひました、「板の鳴るまで眠つて見たい。」しかしどうして見ても早く眼がさめました。

彼等はのろ〳〵と掃除をしました。それから道場の佛壇の前で淨土和讃をあげました。それから朝飯を食ひ、與へられた仕事をし、晝飯を食ひ、晴れた足場のいゝ午後には外廻りの仕事に出ました。

彼等は一部屋の定員四人一組になつて、貰ひものの白つぽい乳母車を押しながらのろ〳〵と街へ下りて行きました。車の上に淺黄に白抜きの旗が立つてゐました。親切な神さん達が、捨てる代りに野菜を、屑屋に拂ふ代りに古雜誌、古新聞、古着を呉れました。歸ると彼等はそれを、陽のあたる中庭で、係婦が戸口に現はれるまで選り分けました。それから夕飯を食ひ、夜の仕事を一時間やり、あとは八時までぼんやりと遊んでゐました。

仕事の出來ないものは朝起きるから夜寢るまでヂッとしてゐました。彼等は、たまに日向ぼつこをする時の外は、お互に顏を見合はせることもせず、一日中ほんとに一口も喋らないものもゐました。彼等は割りに肥つて皺だらけの、黄色い、たるんだ顏をしてゐました。

八時の板が鳴ると彼等は寢ました。舍の後の自宅からやつて來た院長が、その日の當直と係婦とを連れて見廻りに來ました。院長を裏口から送り出した當直はそこのスヰッチをひねりました。すると二十七人の老人の寢てゐる部屋部屋がまつ暗になりました。

日曜には道場で坊さんの法話がありました。時々は京都の本山から御使僧が來ました。御使僧は本山經營の養老院について話しました。講話がすむと會食になりました。院長はじめ職員一統が二十七人の老人達と一しよに朝飯を食べました。

年百年中さうでした。そしてそのどれもこれもが、坊さんの法話も、御使僧の話も、院長の訓辭も、係婦の口小言も、小使の横柄さも、それから日々の仕事も、二十七人の老人の生活力を少しづつへつて行きました。

三十年も五十年も働き續けて來た彼等は働き好きでした。彼等は喜んで働きました。しかし働いた結果がどうなつたか、古着や古新聞がどうなつたか、ついだ巻紙や表紙を貼つたボール箱がどこへ行つたか誰も知りませんでした。彼等はお仕着せと食事と寢室とを與へられましたが、仕事の報酬は受け取りませぬでした。新しくはひつて來たものは、最初誰も、少いながら報酬を貰へるものと思つてゐました。貰へないことが分ると彼等は考へました、「貰つたところで使ひ道もない。」

ある部屋に大きな雨漏りが出ました。そこの部屋のものが通りかゝつた小使を呼び止めて訴へました。小使は、老人の指して見せた天井をチラリと眺めただけで向うへ行きました。老人は考へました、「あゝ、これはわしが惡かつた。」

彼等はみな考へました。

「わし等は何とした不仕合せものであらう。わし等は何とした一人前でない人間であらう。わし等年配の世間の人は孫を抱いてるにわしは養老院のお世話になつてゐる。業の深いせゐで死

ねもしない。何とした恥かしい……。」

食慾といふものがなかつたら、彼等は、心も肉體も段々に縮こまつて死んだでせう。食慾がヨロ〳〵の彼等を引きずりました。

彼等の何よりの樂しみは「貰ひ」でした。晴れた日で外廻りの仕事のない日——乳母車を押して外廻りの仕事に出る日それを係婦が言ひに來ました——晝飯をすました老人達がそろり〳〵と門を出て行きました。彼等はめい〳〵お得意を持つてゐました。そこで彼等は鱈腹食ひました。なかでも彼等は甘いものを食べました。あんこ、あづき、あま納豆、やうかん、きんかん、キャラメル、砂糖、ザラメ、ありとあらゆる甘いものを彼等は嘗めました。

「歸つてから叱られはしまいか?」大福を食べながら彼等は考へました。

「なぜさういふことをするんですか? せつかく親切にして下さるのをお斷りする必要はない。しかしそのために院のきまつた食事を殘すといふに至つては……あすこでは食べるものも食べさせないのではないかと言はれたら、わたしはどうします? 殘つた食事は捨てんけれやならん。一粒の米のなかにもボサツが居られるといふがまことに勿體ない次第だ……。」

十人あまりのものが一しよに晩飯を殘した時、「貰ひ」を白狀させたあと一同を集めて院長が叱りました。院長は本當に泪を流してゐました。晩飯を殘したものも殘さなかつたものも心の底から後悔しました、「惡いことをした、恥かしいことをした、あゝ、なんといふ恥かしい、……もう、もう、二度と晩飯を殘すことはしまい。みな食べてしまはう。いや、いつそ貰ひに出ることを止さう。ぶら〳〵遊んでる身分できまつた食事の外にまだなんか食べるなんて、何といふこつたらう! 何といふ……。」

しかし彼等は「甘いもの」のことを思ひ出しました。彼等は砂糖のことを思ひ出しました。彼等は心のなかで泣きました、「甘いものばかりは駄目だ!」

彼等のうち誰も、あと何年か「あまいもの」なしでやつて行ける自信を持つてゐませぬでした。善隣養老院では二十七人の老人達に絶對にあまいものを呉れませぬでした。朝、晝、晩の食事にも一切砂糖を使ひませぬでした。日曜も旗日も一さい砂糖ぬきでした。

しかしあまいものは人體に必要でした。

どんな貧乏な家でも何かしらに砂糖を使ひました。力仕事をした人は仕事のあと無上にあまいものを求めました。あまいものの食へない留置所で人は、大福や金つばをうんとこさと食べた夢を見ました。酒、煙草の禁じられてゐる監獄でも時たまには、または買つて、菓子を食べられました。あまい乳をのんで子供は育ちました。瀕死の病人には葡萄糖が注射されました。そしてあまいものを食べてる老人の姿は見るに飽きないものでした。子供にあまいものを分けてやり、自分もそれをしやぶつてゐる老人の姿は人の胸を柔しくかき立てました、「爺さんよ。お前は赤ん坊だ。お前は瀕死の病人だ。お前の肉體は長い力仕事をして來た。お前の心は長い監獄生活を經て來た。爺さんよ、しやぶれ。」しかし三十年も五十年も働いて來た老人達が、善隣養老院で一かけの砂糖も與へられずにゐました。砂糖のことを考へて彼等はしばしばしく〳〵と泣きました。

砂糖の出來るさたうきびは初めガンガ河のほとりに生えてゐました。そこからしてさたうきびは一方は支那に行き、南洋諸島に行き、日本に行きました。これは東まはりでした。一方は西へ行きました。シリアに行き、エヂプトに行き、地中海の島々に行き、イスパニヤから南・北アメリカに行き、とう〳〵ジャワにまで行き

ました。
さたうきびの行つたところはどこも植民地でした。
第十五世紀から十六世紀へかけてヨーロッパ人は旺に植民地をこさへて歩きました。彼等は船に武器とさたうきびの苗とを満載して出帆しました。美しい島を見つけると彼等は上陸しました。彼等は「今日からこゝは我々の土地である。」と書いた棒杭を打ち込みました。そこに住んでゐた人達が文句を言ひました。ヨーロッパ人がその人達を切り殺しました。そこに住んでゐた人達は弓矢と棍棒とで反抗しました。それをヨーロッパ人が鐵砲で射ち殺しました。そしてその跡へ携へて來たさたうきびの苗を植ゑました。そして生き殘つた原住民の足に鎖をつけ、一方の手にその鎖を握り、他方の手に鞭を振り上げ、さたうきびの苗を育てさせ、それから砂糖を搾らせ、それを船に積んで持つて行きました。この強盗團の親玉がポルトガル王の妾の子ヘンリーでした。
ある時ヘンリーはアフリカの海岸を航行してゐました。彼は澤山の黒人を見つけました。彼は船を沖合にとめました。彼は笛や太鼓を鳴らして黒人を招待しました。醉からさめた黒人達は、まつ暗な船艙のなかに手足を縛られて投げ込まれてゐました。泣きわめく黒人達を呑みこんだヘンリーの船はカナリヤ群島に行きました。黒人達はそこのさたうきび畑で追ひ使はれました。
ユダヤ人がその頃イベリア半島で迫害されました。彼等はブラジルに逐はれました。彼等はさたうきびの苗を持つてそこへ逃げました。しかしユダヤ人はブラジルからも逐はれました。彼等は西インド諸島へ逃げました。西インド諸島のさたうきび畑が立派になりました。
今や地球上至るところにさたうきび畑が出來てゐました。風が吹いて來るとさたうきび畑は葉ずれの音をたてました。それは、土地を取り上げられ飢ゑしめられた植民地人民、だまされ奴隷にされた黒人、逐ひ立てられ鞭うたれたユダヤ人らの泣き聲でした。
日本の砂糖は臺灣のさたうきびから搾られました。臺灣はむかし高砂島または高山國と言ひました。千五百九十三年十一月、豊臣秀吉が高山國王へ手紙を書きました。
「おれは日本の豊臣秀吉だ。おれは朝鮮を征伐したし呂宋とも交通を開いた。お前もおれのところへ貢物を持つて來い。
高山國王殿。」
しかし臺灣の人達の生活は部落の聯合體を基礎にしてゐました。國王などといふものは臺灣にゐませぬでした。受取人がないので手紙はつつ返されました。原田孫七郎は持つて行つた時のまゝの手紙を持つて歸りました。
明治日本の資本家・地主は豊臣秀吉ほど無邪氣でありませぬでした。ある日臺灣人が眼をさますと自分達のさたうきび畑に「××××××××××××××××。」と書いた棒杭が打ちこんでありました。
「どうしたのであらう？　わしには畑を賣つた覺えがない。役場に行つた覺えも登記所に行つた覺えもない。證文を入れもしなかつたし受取りもしなかつた。第一、わしの手の中には代金がない……。」
隣りへ訊きに行くと隣りでもこつちへ訊きに行かうとしてゐたと言ひました。
「どうしたのだらう？　どうしよう？」
そこへ日本人が來て彼等を××××××××。死骸をころがしながら×××は言ひました、「何といふシブトイ奴等だらう！　これが××といふものだ。」
臺灣のさたうきび畑は繁りに繁りました。

千九百三年から千九百二十六年までの二十三年間の臺灣糖の産額はちやうど十倍になりました。世界のどこも、南・北アメリカも、イギリス領インドも、ジャバも、オーストラリアも、アフリカも、イスパニアも、そんなにふえた所はありませぬでした。臺灣が十倍になつた間にイスパニアは半分以下に減りました。そんなに澤山の砂糖が日本で出來ました。そして善隣養老院では、三十七人の立派な老人が砂糖氣なしで生きてゐました。中江、横川、沖の三人の爺さんも「貰ひ」に出て嘗める外は砂糖なしで暮らしてゐました。

しかしある夏の日以來、この三人の爺さんの生活と殘り三十四人の老人の生活との間に大きな距りが出來ました。

その日はちやうど日曜でした。ちやうど本山の御使僧が來てゐました。御使僧はその朝「異安心」について話しました。

その日はみな「貰ひ」に出かけました。「貰ひ」そのものは禁止されてゐませぬでした。院長が涙を流したのは晩飯を殘したことについてであつて、さうでなかつたら、在職十一年間に××××持になりはしなかつたのでした。

「貰ひ」から歸つた時から横川爺さんの樣子が變でした。どこがどうといふことなしに變でした。

晩の飯を食べて夜の一時間の仕事にかゝつても爺さんの變な樣子は續きました。

沖爺さんと中江爺さんとはボール紙箱の表紙貼り、横川爺さんは和本の皺伸ばしをしてゐました。

「臭いやうだよ、爺さん。」

沖爺さんが覗いて見ると、横川爺さんの火のしの下から煙があがつてゐました。火のしが燒け過ぎてゐたのでした。そんなことは今までなかつたことでした。

三べんも四へんも注意したあとでとう〳〵沖爺さんが言ひました。

「どうしたね、爺さん。」

「……………？」

横川爺さんは聞えなかつたかして顏だけあげました。

「どうかしたのかね？ いやに焦がすでねえか……。」

「焦がさねえ……。」横川爺さんが答へました。爺さんは親指に唾をつけて火のしの腹にさはりました。そこから湯氣がチュッと立ちました。

爺さんはニヤ〳〵笑ひながら言ひました、「あとでいゝものを見せてやるで……。」

中江爺さんの眼が沖爺さんの眼を見ました。

沖爺さんの眼がそれに答へました、「また氣狂ひ出したかな？……」

しかし三人とも間もなく寢ました。院長と當直の係婦とが廻つて來て歸つて行きました。裏玄關の鈴が鳴つて電燈が消えました。どの部屋でも老人特有のぜえ〳〵いふ鼾聲が聞えはじめました。

うと〳〵としかけた沖爺さんが行きなり搖り起されました。沖爺さんはすぐ眼を覺ましました。搖り起した手は右の方から出てゐました。右の方には横川爺さんが寢てゐました。「來たかな？」と思つたので沖爺さんは大きな聲で問ひました。

「何だな？」

「しつ！」まつ暗な中で、沖爺さんの顏にすれすれに横川爺さんの聲が言ひました。あまり近かつたので沖爺さんは默りました。横川爺さんのかすれ聲が言ひました、「起せや。」

それは「隣りを起せ。」といふ意味でした。

中江爺さんの聲が自分で言ひました、「どうしたな？」中江爺さんはゴソ〳〵と這ひ寄つて來ました。聲も低い聲でした。

「これな…。」
横川爺さんの皺枯れ聲が言つて、中江爺さんと沖爺さんの手とが固いものにさはりました。
「何だな、これや？」
「なめて見ろや。」
「なめれ？」
沖爺さんはそれをなめました。沖爺さんの膝頭がガク／＼言ひました。沖爺さんは膝頭で歩きながら叫びました、「おつ、砂糖だ！」
横川爺さんが沖爺さんを坐らせました。
中江爺さんが懐へながら言ひました、「砂糖？…。」
「ほら…。」沖爺さんは中江爺さんに渡しました。中江爺さんのなめる音がしました。沖爺さんが言ひました、「な？…。」
その夜三人は、顏の見分けられないなかに長いこと坐つてゐました。沖、中江の二人の爺さんはかはる／＼なめました。一なめ嘗めるとすぐ相手に渡しました。そして自分は、自分の舌を、精一ぱい吸ひました。舌の上にブツ／＼した面から、あまい汁が、後から後から出て來ました。それの出る限り舌を吸ひました。それからまた砂糖をなめました。
蒸し暑い夜で、横川爺さんの眠つたあとも二人はなか／＼眠れませんでした。彼等はそれぞれに、砂糖の始末について横川爺さんの話した明日のことを考へました。横川爺さんはそれを、明日の夜、天井裏に隠さう、隠し場所のメドはついてると言ひました。
沖爺さんは今朝の御使僧の法話を思ひ出しました。爺さんは自分に問ひました、「これが異安心といふものでなからうか？」そして自分で答へました、「そんなことはない。」それから爺さんは死んだ神さんのからだに石灰の粉がはひつて行つたことを思ひ出しました。爺さんは吹雪の日の縁側を思ひ出しました。幾ら戸をたて切つておいても何時の間にか吹雪きこんでゐたやうに、幾ら始末をしてゐても神さんのからだに、細しい石灰の粉がはひつてゆきました。そしてそれが凝結しました。何といふ理由なしに爺さんは考へました、「みんな俺が悪かつた。」そして眠りました。
中江爺さんは十津川村のことを思ひ出してゐました。そこは大變な山奥でした。昔大阪から十津川に來る人は遺言を殘して來たものだと人が言ひました。春になると一ぱいに櫻が咲きました。山の下から上へと段々に咲いて行く様子が眼に浮びました。
二人ともなんでそんなことを思ひ出したのか知りませんでした。
翌る日の夜、彼等は、計畫を實行しました。全舍の寢靜まるのを待つて彼等は起き上りました。
強い横川爺さんが兩方の肘と兩方の膝を腹の下へ寄せた四つん這ひになりました。その上に、壁に兩手を支へた中江爺さんが乗りました。一番輕い沖爺さんが、砂糖包みを懐に入れてその上によぢ登りました。
それは非道い仕事でした。中江爺さんと横川爺さんとは、顏を下向けたまゝ上の沖爺さんに言ひました、「まだか？　まだか？」
沖爺さんの伸び上るごとに下の二人が呻きました。氣の弱い沖爺さんがそのたびに言ひました、「いゝか？　大丈夫か？」一番下から横川爺さんが、うつむいたまゝ叱りつけました。「默つて速くやれ、馬鹿。」
仕事がすむと横川爺さんは、「ハアン…。」と言つたまゝ寢てしまひました。あとの二人も續いて寢てしまひました。その時から、この三人の老人と外の二十四人との間に大きな距りが出來ました。
「あすこにあれがある。あれはわし等のもの

だ。」

三人は天井を見上げるごとに考へました。

「ふん、馬鹿が……。あすこにはあれがある。あれはわし等のものだ。わし等はなめようと思へば何時でもなめられる。外の奴は何一つ持つてゐない。しかしわし等は持つてゐる。わし等の持つてゐることを誰も知らない。院長の馬鹿はなほのこと……わし等は持つてるばかりかふやすことさへ出來るのだ……」

腰を折られ折られして來た彼等の生活力がもう一ぺん蘇つて來ました。有難く思つてゐた院長がちつとも有難くなくなりました。日曜毎に說教をする坊さんには、說教を聞いてゐないことで腹癒せしないではゐられなくなりました。彼等は係婦のぶをんなであることを發見しました。彼等は小使や炊事係が物をごま化すのではあるまいかと疑ひ始めました。

「ふん、馬鹿が……。」院長を見るたんびに心の中で彼等は言ひました「養老院々々々と有難さうに云やがつて……。」

彼等はガラス瓶を手に入れました。ガラス瓶に白砂糖がこびりついて、それをおとすと氷砂糖のやうになつてるのが彼等を喜ばせました。

いつ何時でも彼等は恐しい人梯子をこさへました。人梯子のこさへ方が次第に上手に速くなりました。夜それが築かれる時、それは年齡の化物のやうでした。三人の年を合せると百九十一歲になりました。

中江爺さんがお神さんの所でお喋りして來た時から三月たつてゐました。もうすつかり寒くなつてゐました。もう寒にはひつてゐました。晝間子供達は中庭まではひつて來ました。彼等は正月前から「ミヤカショメリ」と羽根をつきました。

老人達は一歩も外に出ずにゐました。子供達の赤い頰をうちの中から見てゐました。谷底の街の方々にあるめい／＼の巢を老人達は思ひ浮べてゐました。そこにある火鉢や火鉢の引出しから出て來る色んなお菓子について考へてゐました。彼等は何度も谷底の街の方を眺めました。それを脅かすやうに窓が風で鳴りました。たとひ出て行つたとしても、彼等は、坂道で滑りころばなければならなかつたでせう。

おまけに彼等はまた一つ年を取りました。八十三にもなつてゐて八十四にもなる……！　こんなヨロケ／＼になつても年を取ることが老人達を悲しませました。彼等は寒く、悲しく、ひるまも慄へてゐました。そして大寒になりました。老人達のからだの中が冷えました。老人達は寒さのために病氣になりました。咳も出ず、熱も出ず、からだ全體が弱りました。そしてある朝沖爺さんが死んでゐました。沖爺さんの死骸は×××で醫學校に×られました。

それからしばらくたつて、ある晩、横川爺さんと中江爺さんとが砂糖をなめたくなりました。いつかどぶ川べりのお神さんの家で訊かれて、中江爺さんが答へるのを厭がつた横川爺さんの踝の怪我――それが人梯子で出來たので話すのを厭がつたのでした――も癒つてゐました。晝間のうちに二人はそのことについて相談してゐました。

裏玄關のベルが鳴つて電燈が消えると二人は話し始めました。

「やつて見るかね、爺さん？」

床にはひつたばかりで寒いので二人とも寝たまゝ話してゐました。中江爺さんは晝間から、とても二人では駄目だらうと言つてゐたのでした。

「やつて見ようよ、大丈夫だよ。」と横川爺さん

が言ひました。
「沖爺さんのゐた時やつとだつたでねえか？」
「それや、やつとだつたあね…。」
「わたしや無理だと思ふがね…。」
「それや無理は無理だがね…。」
「あの机が使へるかね？…。」
「さあね…。」そして横川爺さんはつけ加へました、「寒いねえ…。」
それにも拘らず二人は起きました。横川爺さんが寝床を運び出した時中江爺さんは一秒もおくれませぬでした。温まりかけてゐた二人のからだがガチ／＼と慄へました。
横川爺さんがいつものやうに兩肘・兩膝を寄せて四つん這ひになりました。中江爺さんがその上にまつ直ぐに立ちました。そして「駄目だ！」と言つて下りました。
横川爺さんは壁に造りつけの机につかまつて尻と背中とを持ち上げました。中江爺さんは、机の上にのぼり、片手で壁を押へながら爺さんの背中に上りました。そして壁を押へた手を段々に伸ばし、もう一方の手を天井に伸ばし、小刻みにそろ／＼と横川爺さんの尻の方へ歩きました。やがて壁を押へた手が伸び切り、次に指が伸び切りました。指先だけが壁につかへてゐました。爺さんは足を爪立てました。そして反對の手をうんと伸ばし、手のつけ根の肩をからだが「く」の字になる程伸ばしました。天井に伸ばした手の指先が天井にふれました。同時に、爺さんのからだが危くのめり倒れさうになりました。爺さんは「駄目だ！」と云つて背中から下りました。横川爺さんも机から起き上りました。横川爺さんはパン／＼と手と手を打ち合せて埃を拂ひました。
やにはに横川爺さんが中江爺さんを抱き上げました。腰のところを胸まで抱き上げ、腰と兩腕とで拍子を取りながら、五分、七分、一寸と、抱いた中江爺さんのからだを迫り上げました。中江爺さんはもう一度片手を伸ばしました。中江爺さんは、下に臺がある時のやうに兩足を揃へてぴんと伸ばしました。下に臺も何もなく、兩脚とも横川爺さんに抱かれてゐたので、中江爺さんのからだは反り加減になりました。そのため、天井に屆いてゐなかつた手がもつと離れました。
中江爺さんを抱いた横川爺さんの「ひかゞみ」が曲りました。横川爺さんの膝がカタンと下につきました。横川爺さんは腕を弛めました。中江爺さんのからだがズル／＼とずり落ちました。そこで二人の腕が互ひに相手のからだを巻きました。中はまつ暗でしたが窓ガラスの棧には白く霜が降りてゐました。そのまつ暗のなかで、二人の爺さんが蟲のやうにすゝり泣き始めました。

波のあひま

ある日の夕方私はひどく勞れて新宿の人ごみを歩いてゐた。暦の上ではもう秋にはひつてゐたが夏の暑さは去らないばかりか夕方になつて晝の熱さがむれかへつて來るやうに、その一夏の暑熱が一時にかへつて來て、それがはげしいいきれとなつて敷石といふ敷石から立ちのぼつてゐた。

　私はひどく勞れてゐた。何しろ七十分以上も市電にゆられて來たところだつたから。その時刻の電車の樣子は誰だつて知つてるだらう。搖られて來たといふのは間違つてるかも知れない。實際には搖れはしなかつたのだ、手離しでつつ立つてゐておまけにその最後の五分ばかりを私は、熱い入陽を眞向に受けねばならなかつたが、それをその上、袖口で拭く惡い癖のためすつかり傷だらけにしてしまつたチカ〱する近眼鏡ごしに受けねばならなかつたのだ。尤もそんなことが私の勞れの原因だつたのではない。原因は外にあつた。今日の仕事の不成功が原因だつたのだ。

（言つておくが、不成功だつたのであつて失敗だつたのぢやない。）

　その日の午後三時きつかりに、私は、河の向う側のある町のある地點の一軒のミルクホールに腰かけてゐた。私は牛乳をすゝりながらドーナッツを嚙つてゐた。この二つのものは私の嫌ひな食べものだ。牛乳はどうしても好きになれない。ドーナッツと來ては、あんなものをかしくつて食へやしない。で、これならば、牛乳一ぱいとドーナッツ一つで相當時間持ちこたへることが出來る。さうしてその通り、私はそこに、一杯の牛乳と一個のドーナッツとでちやうど三十分間坐つてゐた。さうして私の待つてる男は現れなかつた。

　私はそこを出て、そこから十分ばかり離れたもう一軒のミルクホールに行つた。そこでやはり一杯の牛乳と一個のドーナッツとで三十分間頑張つた。さうして私の待つた男はつひに現れて來なかつた。

　をかしい。」私は考へざるを得なかつた……、

「よくせきのことに違ひない！」

　一週間前のその日にも、私は、これと同じことをやつてゐたのだ。その日も私は、三時きつかりにそこへ行つて、二軒都合一時間と一寸を空費して、色んなことを考へながら家へ歸つたのだ。

「何かあつたんだらう。そのため二十分か一時間おくれたんだらう。私に逢へなくて隨分困つたかも知れない。今度の時は二週間分渡す必要があるかな？　いや、こんだからは、二週間分づつを每回渡してしかも每週逢ふことにしよう。さうすれば、ある日逢へなくてもその週の仕事に差支へることはない。また每週逢つてるんだから情勢の變化にはいつでも應じられる……。」

　勿論心の底に別の心配がないのではなかつた、―やられたんぢやないかな？

　いづれにしても、一週間の望みがすべて今日にかゝつてゐたのだ。その今日が又しても同じ不成功。私は前回よりももつと陰氣な考へにこびりつかれねばならなかつた。

　こゝで私は、私がなんの目的でどんな男を待つてたのかを言つておく必要がある。私の素性にも簡單にふれておかねばなるまい。

　私は畫かきだ。私はプロレタリア的な畫か

きのグループに屬してゐる。二年ばかし前まで私は、それをやつてる私自身を身ぶるひなしには思ひ浮べ得ないインチキな仕事をやつて來た。二年以來このグループに屬して仕事して來たが、私は、私と同じ考へのものをこのグループの中で澤山は見出せなかつた。それには私の惡い點もある。私は畫かきとして正式の教育を受けてゐない。私は西洋美術などあまり知らぬ。また私の持つてる畫かきとしての力は自分ながら見上げたものではない。おまけに私は、畫かきは畫さへかけばいゝのだといふ昔風の考への中で育つたため自分の考へを言葉で言ふことが非常に下手だ。そのため私は、畫かきとしての藝術の仕事とこの國の勞働者運動との結びつきの問題について、私の考へを仲間達にうまく説明することが出來なかつた。私はしばしば私の仲間と激論したが、十中の九までは私が負けた。しかし私は、たとひ私の考へが、それを一般的に通用させようとするなら、間違つて來るとしても、私一個に適用される限り許されるだらうとの意見を捨てることは出來なかつた。私の考へといふのは、ひと口に言へば、我々の藝術上の仕事をこの國の勞働者運動にピタリくつつけねばならぬ、すなはち、わが勞働者階級の日常鬪爭に我々の藝術の仕事が參加しなければならぬ、といふのだつた。

「といふと、具體的にやどうなるんだね？　具體案を出して呉れ、具體案を。」

私の意見に對して反對者はさういつた。「具體案を！」それは正しい。さうして私はそれを出せなかつた。どうしやうがあらう？　その頃我々の眼から、すなはち街上から――その頃まで我々の眼は街頭に注がれてゐた――わが勞働者運動の××的本流はある程度影を消してゐたのだ。一年も前なら私も簡單に具體案を出せたに違ひない。あの立派なポスター類が矢つぎ早に出た頃なら。私がこのグループに引きこまれて來たのもあの頃のことだつた。しかし今となつては私には分らぬ。我々のグループはその後、合法主義者や社會民主主義者の新手が次々と出て來たなかで××主義的立場に立つことを明示して來た。さうしてこの頃では、運動の革命的本流に通りでバッタリ出會すなんといふことは夢になつてしまつた。しかもそんな夢の馬鹿らしさを我々みんなが知つてゐるのだ。具體案を要求されて私はしょげ込まざるを得なかつた。私の仲間達だつて、何も私の揚げ足をとりたがつたのではない。我々全體その點であがいてたのだ、若干陰氣に。たゞその中でも私は困つてゐた。私は經驗上非常に狹い仕事しか出來なかつた。おまけに私はその頃東洋の畫につかれて、ハリ版も僞物で見たチイウンリンだのワウ輩（この字が私には讀めなかつた。）だのを夢にまで見た。私はさういふ美しい傳統を私の考へ通りの仕事のなかで生かしたいと願つた。願つたばかりでなく、當時の私の考へによれば、私自身の藝術を伸ばして行くためにも、どうしても、どんな小仕事でもいゝから直接そこに結びついて行く外はなかつた。それに成功するなら私は、私の考への正しいことを仕事の上で示せるばかりでなく、私の藝術そのものを伸ばしても行ける。それが駄目なら私の藝術そのものが死なねばならぬのだ。

私は私の考へがすべて正しかつたとは思はない。しかしあがきにあがいた擧句私は救はれた。

ある日私は見知らぬ一人の勞働者の訪問を受けたが、彼は私の先輩（かつて私を、今私の屬してるグループにはひるやう手引きして呉れた男）のつけ手紙を持つてやつて來た。

「この人は私の知人也。君の畫の方の意見を聞きたいさうだから話し合つて呉

れ。」

私の先輩のかうした意味の紹介狀は一通りならず私をまごつかせた。

「手紙に書いてあつたと思ひますが、畫の方の話をきゝたいと思つて來たのですよ。」そこで言葉を切つて彼は私の顏を見上げたが、私はみる〳〵まつ赤になつた。それは彼も見てゐたに違ひない。「それで、我々の方であなたの意見をどう理解してるかそいつを聞いて貰ひたいと思ふんですが……。」

「は、は。」

彼はそれを話し出したが、私はその時の私の驚きを言ひ現すことが出來ない。彼は私の考へをすつかり知つてゐたばかりか、私の考へを私以上にはつきり知つてゐて、それを一種獨特の言ひまはしで私の前に並べて見せた。何と譬へていゝか？ あたかも私は、エンマ大王廳の淨ハリの前に吊し上げられた哀れな罪人みたいなものだつた。私自身にぼんやりしてゐたものがそこにアリ〳〵と映し出されて、私は一種の戰慄の念をさへ覺えて來た。おまけに私は、私の考へがそこに理路整然と展開されるのに連れて、それが必ずしも全然正しくはないことに氣づかざるを得なかつた。今更それについて私自身何か言ふことは出來ず、私はます〳〵まごついたのだが、それをやはり彼が見てゐたのだらう。

「とするとこれや、全部の話にはならないといふことになりやしませんかね？」さう言つて彼はニッコリと笑つたが、そのため私はます〳〵まごついた。

「さうです。さうです。」と私はせきこんで言つた、「それや全然正しいとは言へません。僕はたゞ……。」

「分つてます。しかしですね、もしあなたのやりたい仕事が條件通り與へられたとしたら、あなたはそれをやつて呉れますか？」

勿論、いくら私でも一ぺんに理解した。私は私自身ののぼせ上つて來るのを感じた。その男はあとで人をよこすと言つて歸つて行つたが、私はすつかり昂奮して、外から歸つて來た私の姉を不思議がらせて、それに對して私が問題にもしなかつたため彼女を怒らしたほどだつた。

私は、彼があとから寄越すといつて行つた男の來るのを熱つぽくしやがみ込んで待つてゐた。それがとう〳〵一週間目にやつて來た。私の意外だつたことに、それがまだ十八九の色の白い少年で、始終ニコ〳〵しながら小聲で物を言つて、その上その言葉に、隱すに隱されぬ私の生れ故郷の訛りがあつたではないか？ よつぽど訊いてみようかと思つたが勿論訊きはしなかつた。しかし私は、恐らく偶然のそんなことにさへもひどく感動した。少年は、それから定期的にやるべき私の仕事を指定して、それを一週間後の日の何時にどこへ持つて來るかを言ひおいて歸つて行つた。かうして私は、その後毎週、この國訛りのある少年とそれ〴〵の場所で逢つた。私は日に〳〵生き〳〵として來る私自身を感じた。その少年に逢ひに行く時に私の心は、愉快とも苦痛とも知れぬ一種のうづきにふくれ上つた。一週一回で一ケ月に四回、半年續くとしても三十回近くの仕事が出來る。進め！

それがパッタリと駄目になつたのだ。前週の時には、何かの手違ひだと思へた。しかし二回續いてもまだそれを何かの手違ひと思ふことは出來ない。さうして手違ひでなければ大抵がきまつてゐる。

私は西洋の昔噺にある煙突掃除人の靴下のほぐし絲の話を思ひ出した。それをたぐつて行きさへすれば丈夫な細引がつかめたのだ。それ

が、指さきで摘んだ瞬間に消えちやつた。今や私はあの少年を探すことが出來ない。私に出來ることはたゞ待つことだけだ。

仕事のかういつた不成功がなぜかう人を勞らせるのか私は知らない。私は非常につかれて、そのためこのむし暑い夕方に何がなし快活に流れてゐるそこの人ごみに自分でも不愉快な反感を持たずには居られなかつた。

長い間の癖で、その日も私は、例の終點際の飴屋の飴切作業を見物した。今日は兄弟が三人揃ひでゐたが、大俎板の上に彼等が、庖丁の尻で合の手を入れながらころがしてゐる驚くべく賑やかな急調子も、いつものやうに私を快活にしないで却つて陰鬱にした。腕の達者な職人特有のその傲慢なしかめつ面を見てゐると、私は再び私自身の位置を思ひ出し、彼等の不動の飴切作業に――馬鹿げた話ながら――私の藝術上の仕事の浮動性を對置して暗い氣持にならずには居られなかつた。

「フン!」人が輕蔑をあらはす仕草で以て私は我にもあらずため息をついた。

それから二三日たつたある日、私は再びじめじめした氣持で家に坐つてゐた。私の横には私の姉がやはりじめ〳〵した蒼い顏をして坐つてゐた。私達は、彼女の胎の中の子供について二度目の喧嘩をしたところだつた。

私はその胎兒を始末してしまへと言つたに對して姉はいやだと言ひ張つた。私が色々事情を說明して聞かせる間彼女は默つて聞いてゐたが、では私の言ふやうにするかといふと絕對にいやだと言ふのだつた。なぜいやなのかその理由について彼女は一言も口に出さなかつた。

勿論私は、世間でてなし兒といふところのものをこさへて來たことに對して姉を非難しようなどとは毛頭考へてゐなかつた。それどころか、二十九になる今日まで一回の結婚すら出來ずに來たやうな彼女が、この年になつて子供をこさへたといふことに對しては褒言葉の一つもあびせてやりたいくらゐだつたのだ。しかし、實際に彼女がそれをこの世に生み落して、さうしてそれを育てて行くことを、考へると褒言葉をあびせる代りにそれの始末を提議しずにはゐられなかつた。さうしてかくも聞きわけのないこの女を憎々しい眼つきで睨めつけざるを得なかつたのだ。

「どうしてもいやかね?」

「いや。」

しかしまた私は、彼女のあはれさにも思ひ及ばずにはゐられなかつた。

むかし彼女は田舍の村で小學校の教師をやつてゐた。あまりに先生らしくないといふ點で無上に生徒に親しまれた彼女は、その同じ理由で校長からひどく虐待された。ある日彼女は組の生徒をつれて散步に出かけた。校門を出るが早いかまつ先に唱ひ出したのが彼女であつたほど彼女ははしやいで居た。一隊は野原のまん中に行つて休んだがその近所に立派な西瓜畑が並んでゐた。腕白な子供達が管をつくつてそれを西瓜の肉に插し込んで中味を吸ふ惡戯をやり始めた。誰か生徒がそれを先生に言ひつけた。先生たる彼女がやつて來た。だがその先生自身が忽ち夢中になつて管を吸ひ始めたのを見ると、一旦逃げた生徒達は再び戾つて來て、そこで先生を中にしてみんな大喜びで西瓜の汁を吸つた。そのことが無邪氣な生徒の口から洩れて(生徒達は彼等の喜びを分け合ふためにそれを口走つたのだつたらう。)校長の耳にはひつた。さうしてそれが彼女の首を切られる直接の動機となつたのだ。その話を人から聞いた時、まだ小さかつた私は恥しくて顏を赤くしたもの

だつたが、そのこと自身を後に私は恥ぢずにはゐられなかつた。

それにも增して私の辛かつたのがこの春の事件だつた。

この春の初め頃彼女は甲府のカフェで女給をしてゐた。ある日私のところへ甲府の警察から、彼女が怪我をしたから引取りに來いといふ電報が來た。

「やつたな！　あゝ、あゝ、いつそうまく死んぢまつて吳れゝばよかつたのに。怪我をしてるといふのだからやり損なつたのだらう。足だらうか、手だらうか？　咽喉の傷位ですめばいゝが、カタハでもなつて生き殘つて吳れたんだとすると……男の方が死んで女だけ助かつたなんぞとなつたら……。」

旅費をつくつて（その時私は私の往復分と彼女の片道分とをつくらなければならなかつた。）行つて見ると、彼女は心中をしたのではなくて自殺をし損ねたのだつた。警察の話によると次のやうなことだつた。

ある晩彼女がお客と喧嘩をした。その詳しいことは分らないが、最後にお客が、階段の上から草履で彼女の頰をさはつた。すると彼女はまつ蒼になつてその男に飛びかゝつて行つた。彼女の權幕に恐れてお客は二階へ逃げのびたが、彼女はビール瓶を提げてそれを追つて行つて、それで以てお客の頭をしたゝかになぐりつけた。すると今度は男の方が逆に氣狂ひのやうに狂暴になつて、そこは男だから今度は彼女の方がメチャ〳〵になぐられてしまつた。その夜はそれですんだが、彼女が切りに、「こんなに侮辱されてまで生きてゐたくはない。」といふ意味のことを口走るので、その店では警戒してゐた。と、その翌々日彼女の姿が見えなくなつた。すぐ警察に賴んで、何とかいふ瀧の近邊で危いところを捕へたといふのだつた。

彼女はもう三日以上も警察に保護されてゐたが、果して昂奮が退いてゐるかどうか私には分らなかつたし、警察の者のゐる前でもあり、私はたゞ、「まだ死ぬ氣があるのか？」ときいて見た。「いま、もう死なうとは思はない。」と彼女は答へた。

警察のものが非常に私を丁寧に取り扱つたことに色んな厭なことも考へられたが、そこでそんなことにふれたくもなかつたし、とに角私は姉を連れて歸つて來た。さうしてその姉が——世界でたつた一人の私の身內のもの——が、何時の間にやら身ごもつてゐたのだ。

「だつて手ぶらで產むつてことも出來ないぢやないか？　育てるといふことも無論問題だが、第一俺にやお產の金なんぞ出來やしないぜ。」

「お產の金をこさへて頂戴なんてあたしがいつか言つて？」

「言やしないさ。しかし一體どうするんだね？」

「どうするもかうするも……一體なぜあたしがあんたにそんなこと訊かれなきやならないの？」

彼女はもうヒステリックに泣聲を立てはじめた。

「わたしは子供が出來たのだからたゞそれを生むだけだ。そのために費用がかゝるかどうかなんてことはわたしは知らない。あんた方だつてさうだらう……。」彼女はいつの間にか私達の運動のことまで引き合ひに出して來た、「あんた方だつてさうだらう？　わたしには理窟は分らないけれど、とに角さうする外に方法がないからあんた方のやつてるやうなことをやるのだらう？　さうして、そのために監獄に入れられたり病氣になつて死んだりする事實の方はちつとも勘定に入れてないではないか？　わたしだつて同じことだ。あんたが金を出して吳れると

いふのなら貰つてもいゝ。しかしわたしから頼むのではない。」さうして再び泣聲になつて、
「今までだつてわたしは金錢のことであんたに頼つたことは一度もない。いつかなぞはわたしが、あんたがあんまりせがむものだから、あれはあの時店に出るのに必要だつたのだけれど、その着物を質に入れて北齋を買つて上げたではないか？　何もそのお禮をしてほしいといふのではない。さういふあんたから金のことなぞ言はれるのが口惜しいのだ。」
　かういふ意味のことを彼女は、彼女に珍しくまくし立てた。調子はヒステリ　クだつたが、とに角筋が通つてるので私は默つて聞いてゐた。
「だから心配しないで頂戴。ね？　あたしのことはあたしがしますから……あんた達だつてしきりに言ふぢやないの……。」そ言つて彼女はニヤリと笑つた、「獨自的活動とか何とか……。」
　そのうす笑ひと最後のひと言とが、神妙に聞いてゐた私の氣持をすつかりかき亂してしまつた。
　私は、彼女のあはれな境涯も、さういふことまで口走らねばならなかつたのかも知れない話の道行きもすつかり忘れて、さうした下司ばつた言ひ方に對して無限のさげすみで彼女を睨めつけた。私は肚の底で思ふさまの侮蔑で言つた、「何が獨自的活動だ、馬鹿野郎め！　そのからだで稼ぐがいゝや……。」
「居るかね？」
　私達は（姉もたしかにさうだつた。）ホ　とした。それは私達姉弟のよく知つてゐる山口だつた。
「あのね……。」ちよこまかとした話の後で彼は幾分改まつた調子で切り出した。さうして如何にも切り出したといふ恰好でけろりと姉の方を見た。姉はお茶をいれに立つところだつた。
「俺ね、あるところでちよつとした插繪を一枚見たんだがね。カットだ。こんな……。」彼はありあはせの紙の上へ無恰好な繪をかき始めたが、私はすぐそれが、暫く前に私がある刊行物に入れた插繪であることに氣づいたと同時に、なぜ彼がそんな面倒臭い遠慮しいしいの調子を使つてるかを一ぺんに了解した。
「俺だよ。」と私は言つた。
「やつぱしね……。」それで安心したといふやうな顔をして見せてから彼は、今度は、專門以外のことに口出しする時の彼特有のためらひ勝ちな調子で私の顔を覗きこんだ、「それであれや何かい、これや臆測なんだがね、あれで君は君のテクニックを、テクニックといふのか何だか知らないが、意識的に變へたのかね？　つまりわざと……？」
「さうなんだよ。」それをかいたのが私だと分らないためにした全努力の無駄だつたことを感じながら私は答へた、「字はギッチョでかいた……。」
「フーム。」
　しばらく私達は默つてゐたが、私はやはり一種不安の念を覺えて來た。
「やつぱし分るかね？」と私は訊いた。
「それやあ分るさ。そこでだね、」そこへ姉が藥罐を提げて來たので彼はもう一度そつちの方をけろりと眺めた、「俺に分つたとすれば外のものにも分つたと思はなけやならないだらう？　それやさう考へなけやならないよ。さうすれや、向うはあんな工合に追求してるんだから插繪一枚と言つてるわけに行かないだらうぢやないか？　ガラリと變へる必要があると思ふな……。」
「しかし俺やずゐ分とやつて見たんだぜ。」
「駄目だよ。」と彼は、幾分せきこんだ聲高な調子で言つた。「いゝかい？　あれをかいたのが君

だといふことが分つてるだけぢやないんだぜ。君が意識的に手法を變へながらあれをかいたつてことが分つてるんだよ。つまり二重なんだ。性質を承知の上でやつたといふことになるんだ‥‥。」

「しかしね‥‥。」

私は、人それ〴〵の持つてる手法といふものの、削つても削つても削り落し切れない頑固さについて思ひ考へざるを得なかつた。

「それやあね、」さうして彼は、私が心中に考へてゐたことを言葉までもそつくりに私に言つた、「人それ〴〵の持つてる手法といふ奴は頑固なものさ‥‥。」

彼自身もさういふ思ひ當るふしを持つてたのかも知れない、さう言つた彼の言葉の調子は、彼がほんの時たまにやるあの厚ぼつたい掌を私の肩に置いた時と同じやうな作用を私の心に及ぼした。

「實はね‥‥」あやふく私は、私の行き悩んでゐる繪ビラの行方について彼に訴へかけるところだつた。

「しかし何だよ、」と彼は、彼持前の元氣な、人を勇氣づける調子に歸りながら續けた、「さういふ條件にも應じて行くところに俺たちの技法の發展があるんぢやないかな？ 所詮なまやさしい仕事ぢやないよ。ふん、ところでね‥‥。」

何か不愉快な考へを打ち消さうとするやうにがぶ〳〵と飲み干した茶碗を下に置きながら彼は、「別の話だよ。」とことわつて續けた。「ゆんべ新宿でへんな奴に逢つてね‥‥ほら、安達さ。この頃小此木書房といふケチな出版屋に勤めてるんだよ‥‥それがあすこの人ごみん中でバツタリ出會つたと思つたら、いきなり俺の手なんぞ握りやがつてね、『をかしいね、君が無事でゐるとは不思議だねえ！』だとさ。それを何べんとなく言ふんだよ、俺の顏を覗いちやあをかしいをかしいつて‥‥あれや元は新聞なんぞ讀んでてね。それも俺がすゝめて讀ましたのさ。こなひだ俺や、ほら新聞二百號記念に日下部の書いた詩があつたらう？ うん、さう惡くなかつたさ‥‥あれを思ひ出したんだが、あれを見ると實際あの頃の運動がすつかり反映してるぢやないか？ つまりあの頃の俺達はあんな工合に、大事なエネルギーを通りの敷石へもつて行つてすつかり流しちやつたんだからね。それがつまりゆうべになつて『をかしいねえ！』となつて現れたのさ。そんな奴に限つて、『これでもどちらかといへば××黨に贊成の方だ。』なんて顏つきをするんだから、あんな人ごみん中でやばいつたらありやしない。」

私達は顏を見合はしてにが笑ひした。

「をかしいねえ、をかしいねえ、――。」そのいやな言葉を口眞似してゐた山口はやがて腰を上げた。

「それぢや、おれ、今日は歸る。姉さんに‥‥。」

彼は見まはしたが姉はどこか見えなかつた、「姉さんによろしく。」

玄關（？）へ送つて出てそこで彼が紐を結んでゐる靴を見ると私は驚いた。

「山口道玄はすばらしい靴をはいてるんだね！」

「惡い靴なんぞ‥‥」と彼はかゞみこんだまゝ快活な聲をあげた、「はけるかつてんだよ。」

さうして靴をはいてしまつてからだを起しながら「とに角無理にもがらりと變へるんだな。」ともう一ぺん言つて、それから埃のついた掌をパン〳〵と叩きながら、心持低い隱されぬ陰氣な調子でつけ加へた、「またボツ〳〵來てるらしいよ。」

「さうか‥‥。」

生き〳〵と盛り上つて來る生き甲斐の感じ、さうかと思へば言譯の出來ない種類の不愉快、

それからそれへと引つかゝつて行くおりのやうな種類の不安、「見ろ！」と言つてやりたい痛快な話、さうしてさういつたものの連續を風のやうに横切つて行く周期的な逮捕とガサと……姉との喧嘩からの不愉快さは忘れることの出來た私を、我々の仕事場全體を覆つてゐる空氣のたずまひ、そこからかもし出されて來る名狀しがたい一種のあせりと憂鬱とが執念く捕へて、そこを逃げ出せる日が何時來るのやら豫想も出來ないといふ考へが一層私を押しつけた。

それから一週間ばかりあとのある日の夜、もう夜の一時をすこしまはつたぐらゐの時刻だつた。が、締ビラの書稿を渡すべき紡績の少年からは何の消息もなし、姉との喧嘩はその後一度もやつてないだけに面白くなく、二人とも床の中にはひつてはゐたものの、姉もどうやら眠れないでゐるやうに私には思はれた。

「こんな馬鹿姉を連具してどうするといふのだらう？　こんな女をかついで行かねばならぬ義務が俺にあるのだらうか？　こんな女が一體我々のために何が出來るのだらう？　こんな女は道べたへ置いて行く方がいゝのぢやないか？　最惡の場合でも……。」と私は考へた、「淫賣婦が一人ふえるだけぢやないか？　淫賣婦が一人ふえることは大したことぢやない。つまり大して惡いことぢやない。だが、姉と一しよにゐるために俺の仕事に少しでも邪魔がはひるとすれば……勿論今までのところ別に邪魔になつてやしない。しかしそのために多かれ少なかれ氣持の上でも金錢の上でもわづらひにはなつてゐる。姉は今までのところ自分のことは自分でやつて來たし、今後もやつて行くだらうが、だからといつて一しよに家を持つてるといふことが大したわづらひなのだ。家を持つてゐる……何てこつた？　俺達は仕事の道具だけ持つてかる〳〵としてるのがいゝのだ。その日ぐらしの生活を……生活ぢやない、活計だ……それを一日一日引きのばすために心にもないインチキ仕事をするなんて……ひとつ馬鹿男をめつけて、そいつにピチンと嵌めこんでやらう、ボタンみたいに！……さうして俺は俺でそおつと身を引くさ。」

見ると姉は眠りかけたらしく、かすかな寢息は私の耳にもきこえて來た、と、私はまた俄かに逆の考へに支配され始めた。

「いゝや！」と私は、起き上りかねない勢ひで今まで考へ續けて來た考へ總體に對して反抗した、「一人のあはれな女を道べたに捨てて行く、それを合理化して、……ふん、馬鹿も休み休み……。」

「こんばんは……。」といふ聲を聞きつけたやうに思つて、そのため私の考へ續けが中斷された。

「こんばんは……。」

たしかに、夜更けたあたりを憚つてる氣な聲がもう一度して、これも遠慮がちな玄關の戸にさはる音が聞えた。私は、彼女自身も起きあがる氣はひを見せてゐる姉の枕許を通つて玄關に出て行つた。

「誰ですか？」私のスヰッチをひねつた電燈の光では、暗い外にガラス戸越しに立つてゐるらしい男の顏がはつきりしないので私は訊ねた。さつきからの聲は聞き覺えのないものでもあつたし。

「ちよつと開けてくれませんか？　ちよつと、あの……。」

それが「こゝで大聲で名乘れないからとに角開けて中へ入れて呉れ。」と言つてるやうに聞えたので私は下りてカチ〳〵と栓を外した。

「大變おそくなつてすみません。僕はこれです

が……。」

　さう言つて白絣の單衣を着たその男の差し出した紙切れを見ると、それは私達のグループの仕事をしてゐる事務所の責任者から廻つて來たもので、その人の用向きなぞも簡單に並べてあつた。部屋に上つて私達は、今まで寢てゐた蒲團をめくり上げて坐つた。起きて來た姉がボヤボヤしてゐるので「いゝから。」と言つて寢かしてから僕達は話しはじめた。

「それで、方々まはつて見たんですがどこも駄目なんですよ。日記の住所は殆んど全部違つてますしね。」

「あれや駄目ですね……。一體しかし何時ごろから切れたんです？」

「御大典からですよ。尤もそれや第一回目ですがね。それから四・一六……色々やつて見たんですが、九州だけさへどうにもならないんですからね。そのため合同の方ぢや分裂騷ぎが持ち上るし……。」

「そいぢやあんたは、」と私は、私達の耳にもはひつてゐたその分裂問題と、それが持ち上つた當時北九州へ行つてゐた筈の私達のグループの詩人大林園次のことを思ひ出して訊いて見た、「大林園次に逢ひましたか？」

「逢ひましたよ、戸畑で。今度こつちへ來たのもその時の大林君の言葉もあつたもんですからね。ナップへ行けば何とか連絡をつけてみれるだらうといふんで……。」

「大林はどうしてゐるかしら？　その後こつちへはちつとも便りがないんだけど……。」

「それが、炭田にはひつて行つたまでは分つてるんですがね……惡くすると、」と彼は私の顏を見上げた、「×されてるかも知れない。」

「×されてね？」

「えゝ。」

　又しても私に色々のことが考へられたが、これ以上しやべつてゐて明日朝寢坊をしても、困るので寢ることにした。

「寢間着がないんですよ。」

「いや……。」

　しかしやはり私達はもう少し喋つた。關門海峽を通つて（そこを無事に通過するのがその頃は一仕事だつた。）神戸で移動警察にやられて、大阪で二晩檢束されて、大阪から電車で京都に出て、それから名古屋まで來てあれから中央線を乘つて來たといふ長い道中のことを考へると、彼の望み通りのところへ連絡をつけられるかどうか自信がないだけに一層、それからそれへと話したいことや聞きたいことが折り重なつて來た。九州地方特有の「セ」を「シェ」と發音する彼の言葉……さういふ發音をする地方は外に關西と北陸の一部とがあつたが、九州地方のはそのどつちに比べても遙かに强かつた……は私に遠方を感じさせたし、そこに私と並んで闇の中に横になつてる旅勞れの出た彼の赤い眼は、それを掴むために彼がやつて來た一本の綱と、その綱の後ろにつかまつてゐる無數の勞働者の顏とを思ひ出させ、それが又しても私の紡績工場の少年を私に聯想させ、私は、勇氣と感傷との入りまじつた感情に一ぱいになつてなか〱にねつかれなかつた。私は心配になつて、五時にはまはしておいた眼覺まし時計の針をもう一ぺん確めたあとでやうやつと寢入つて行つた。

　それから幾時間位眠つたのか私には分らなかつた。

「今日はあ……おい君、荒川君……ちよいと開けて呉れよう……。」といふやうな三四人の變つた聲で眼の覺めた時に私は、「こんちきしやう！」と思つたと同時にそれよりもずつと大きな力で「早いとこ來やがつたな！」と思はざるを得なかつた。

山口がこの間言つて行つた奴か、昨夜來た金丸か？　前者にしてはあひがあきすぎてゐる。後者だとすれば？…しかし彼が來たのは昨夜の一時すぎだつたぢやないか？　さうしてほんの二三時間眠つたところを叩き起されるとすれば、これや當分今迄のやうなことぢやとても追つつきやしないぞ…それにしても金丸をどうする？　金丸をつけて來たのか、それとも俺の處へ來たのか？　俺一人なら俺一人で何とかなるが、金丸が北九州から出て來たことが分るとちよいと面倒くさくなるが…と、そんなことをゴチャ／＼に考へ乍ら、私は玄關へ立つて行く姉の後姿に「先生もお慣れなさつたね。」と感傷的な眼を流して、よれ／＼になつた單衣の上に綴んだ兵兒帶を締め直してゐる金丸に大體の樣子を打合せようと焦つた。

「それでね、からだ…。」私は先づ手元の紙の切れに電車道とその附近の道路の概略を書いて見せた。が、初めての土地で彼が逃げられるかどうか非常に心許なかつたので訊いた。

「駄目だつたらどうするね？」

「雜誌の讀者で遊びに…。」玄關でブツ／＼いふ聲とともに戸の開く音が聞えて、それが喧嘩調子にならないのを安心にも不安にも思ひながら、私は、とても十分に行きさうもない金丸との打ち合せをどうやら終へ、彼が所持品を手際よく始末した場所を一通り見廻して急いで玄關に出て行つた。

「何だい？」

「またすまないがね、」見知り越しの主任が常例の慣れ慣れしい調子で笑顏を見せながら言つた、「ちよいと來て呉れや。」

「ちよいと來て呉れつて何だよ？」

私が出て來るのと入れ違ひに引つこんで行つた姉と金丸との打ち合せを氣づかひながら私は、玄關の内と外とに立つてゐる男達の頭數を數へて見た。

「横手へまはつたのが二人で六人か？」

そんなことを考へ乍ら私は、自分の考へが咄嗟にきまらないので、相手が何を言つてるのやら上の空で返事してゐた。が、どうかすると、主任をさし置いて忠義顏に上つて來ようとする他の連中に靴をぬがせない算段をしなければならなかつた。

「とに角顏を洗ふからね。」

さう言つた私に自信はなかつたのだが、主任が「あゝ、どうぞ。」と言つたので私はすぐ流しへ下りた。ギシ／＼ポンプを押してゐると、私は流しへ下り姉は向うへ引込み、玄關の間が空になつたので彼等は上りにくいらしかつた。

「どうだね、お定さん？」

姉が出て來たらしく、刑事連がいやがらせに慣用の慣れ慣れしい口を利いてるのを聞きながら、私は、まあ行つて見るより外はなからうと考へて見た。

「飯は食はないで來て呉れよ。何なら御馳走をしてもいゝからね…。」

「はゝ…さうだ。」

さういふ彼等の自問自答をきゝながら私達は着物を着かへた。

「君や誰だね？へ　私はハッとした。少しでも長くするために鏡の前でネクタイを結んでる中に、とう／＼一人の奴が上つて來て金丸を見つけたのだつた。

「その人あ俺の知合の人でね…。」

「やつぱし來て貰ひたいな。」

「どうしても行かなくちやいけないかね？」

「君、君…。」と主任が口を入れた、「そんなこと分り切つてるんだから早くやつて呉れよ。」

「分つたよ。」私と金丸とは玄關へ下りかけた。

「ぢや行かう。」

「いや、君。」と、その時主任が私のそばへ寄つ

て來た、「君はいゝんだ。」
「俺はいゝ？ 行かなくていゝってのかい？」
「さうなんだ。君はいゝんだ。お定さんとこの人だけでいゝんだ。」
「お定さんて、家の姉貴はなにも‥‥。」
「いや、さうなんだよ。」見ると主任以外のもの達は、何か私が主任と口爭ひでもすると考へて、彼等の肉體的な癖にまでなつてる癖でグルりと私の前へやつて來た。「君は來なくてもいいんだ。さういふ話なんでね。」
「來て貰つたつていゝさ‥‥。」といふ聲が聞えたが私は不安になつた。姉の身元は彼等も何時の間にか知つてゐて、度々の檢束でも彼女はいつも留守居として殘つてゐた。一緒に引つぱられた時も彼女だけは一人先に歸されたのだ。實際、私を殘して姉を持つて行くといふことは、今日の檢束が何か特別の意味を持つてることを示すものとしか私には考へやうがなかつた。
「そいぢやさうするか‥‥。」私達は顏を見合したがさういふより外はなかつた。さうして彼等は、一しきり愛想のいゝざわめきを殘して金丸と姉とを連れて行つた。
「チ‥‥。」

着換へた洋服のまゝで私は部屋のなかにころがつたが、さてどうしたものか、今日の一日をどんな順序で廻つて見るか、一體どこへ當りをつけていゝか、どの邊を目がけて今日の檢束が來たのか、考へても考へても見當がつかず、何かの加減で金丸がしくじりはすまいか、姉の奴がつまらぬことを言やしまいか、姉が妊娠してることが分りやしまいか、分つたらどんな嘲弄を受けねばならないだらう、それにしても、‥‥紡績の少年工といひ、山口の殘して行つた話といひ、今日の今しがたのことといひ、この波の引いて行くのは何時なのか、俺達を明日の朝待つてるものは何なのか、上つた浪頭は落ちなけやならないが‥‥と、それからそれへと考へて行くと、私はもう一ぺん、山口の言つて行つた「がらりと變へるのだ。しよせん生やさしい道ぢやないよ。」といふ言葉を思ひ出して、それが單に私の晝の仕事の上だけのことでないことを一つの宏大な構圖として感じ始めてゐた。

病氣なほる

おちかばゝあは朝つからもう六時間も坐つてゐた。おちかばゝあは火の氣のうすい燒物の火鉢をかゝへてあをい顏をしてゐた。もしおちかばゝあがほんたうにばゝあであつたらば、彼女は、あをい顏になる前にもつと別な顏になつてゐただらう。ほんたうにばゝあであつたらば、彼女は、死人の顏色をしてゐただらう。つまり死んでゐただらう。

けれども彼女は、ほんたうには、まだやつと二十の若い女だつた。言ひかへれば、――彼女自身の陽氣な言ひぐさによれば――「まだ三十にもならない娘」なのだつた。彼女はいくらか別嬪でさへもあつた。いつも彼女はムチ〳〵とふくれたまつ紅な顏をしてゐた。さうして空つ風のやうに元氣だつた。それが元氣すぎる程に元氣で、いはゞそのために「ばゝあ」なのであつた。

しよげこんだりふさぎ込んだりするものがあると彼女は眞向からからかつて行つた。さうしてペチ〳〵と惡態をつくのだつた。彼女は實に巧みに相手の急所をついた。それが非常にあかるくて、輕妙で、やつつけられた方で怒るわけにも行かず、それで仕方なしに「このばゝあ！」といふやうになつたのであつた。

ある時一人の男がバスの車掌を見染めて夫婦にならうとした。世話好きな男がゐて、相手の女に話をして見て呉れた。するとその女にはもうちやんときまつた人があるといふことでその話は駄目になつた。しかしこの男は、そんなことが生れて初めてだつたのと、その後も仕事の關係上しよつ中その線のバスに乘らなければならなかつたのとで、少しばかり、ほんの少しだつたが、未練が殘つた。で、ある日も彼は、仕事のすんだあとで仲間の男どもに愚癡をこぼしたのだつた。

「途中ですれ違ふだらう？ 向うの車にどうしても奴さんが乘つてるやうに思へてね……馬鹿馬鹿しい話だが、つい覗きこんぢまふんだよ。ところが……」

「ところが……」と、そこへ何時のまにかやつて來て聞いてゐたおちかばゝあが、横つちよから口を出して、彼女獨特のうたふやうな口調で立てつゞけにまくしたてた、「ところが、バスのガラス窓はセルロイドと來てるだらう？ おまけに、セルロイドは傷だらけと來てるだらう？ 見えやしないやね。」さうして、そこで一旦口を切つて、その男の顏をジロリとながめて、それから臺所つゞきの障子の蔭へ消えながらゆつくりとほざいたのであつた、「た、い、し、た、もんだ！」

そんな工合で彼女は「ばゝあ」なのであつた。

その彼女が今日はあをい顏をしてゐた。彼女はもう二三日も前からあをい顏をしてゐた。彼女の亭主が二十日ばかり前に持つて行かれて、その時のは少し大きかつたかしてそれ以來ばつたりと人が來なくなり、彼女はすつかり獨りぼつちになつてあれにもこれにも困り切つてるのであつた。

第一に彼女は亭主のことが氣がかりでならなかつた。ちやうど一週間前に彼女は、一圓足らずの金をやつとこさでこさへて差入れに行つた。するとそれを受取つた亭主が、當分こゝへ來るな、家にヂッとしてをれと言ひつけたので

あつた。それ以來彼女は、その言ひつけ通りにヂッとしてゐるのであつた。さうしてどこからも何の便りもはひつて來てゐないのであつた。

第二に彼女は食物に困つてゐた。彼女はもう十日も、飯といへるやうなチャンとしたものを食べてゐなかつた。米がなくなつてしまつて、こゝ四五日は實にへんてこなものをこさへて我慢してるのだつた。どこかそこいらへ出かけて行きたかつたがそんなことは出來なかつた。近くの知合はみんな一なめになめられてゐた。少し遠い方まで伸すには、第一に電車賃がなかつたし、第二に――これが大事だつた――それではもうみんな散々な目に逢つてるのだつた。一せいにバアッとやられる、連絡が切れる、それを繋がうとして、尾行られてるのを知らずに、心あたりへ出かけて見る――連絡が取れてやれうれしやと思つた時には一層擴大された範圍で根こそぎに食ふ。實にひどい目に逢つてゐた。で、彼女は外へ出ることが出來なかつた。米はみる／＼なくなつて行つた。さうして、腹の減り工合が――彼女には確かにさう思はれた――何もしないのに一日々々とひどくなつて行つた。あげくの果には大人しかつた鼠までがあばれ出して來た。さすがのおちかばゝあもあをくならざるを得ないのであつた。

おまけに第三に、こんなところへもつて來てミツカがやつて來たのであつた。彼女はもう十二三枚も請求の紙つ切れを受取つてゐた。彼女はそれを片つぱしから壁に貼りつけてゐた。そしてそれがとう／＼今日やつて來たのであつた。

ガラガラッと玄關のあくたんびに彼女はおそろしいしかめつ面をした。彼女は腹のなかで、こんなところへやつて來るかけとりといふ奴をさんざつぱらこきおろした。それから口先で「チェッ！」と言つて、さうして玄關へ立つて行つて片つぱしから逐つぱらつた。あるものには說きつけ、あるものにはお願ひし、あるものにはオドシをかけ、あるものには言葉尻をとらへて一ぱい喰はせることによつて彼女は彼等を擊退した。さうして一人を擊退するごとに火鉢のところまで歸つた來た。かうして彼女はそれをもう六時間近くも繰り返してゐるのであつた。さうして電燈屋の來た時にとう／＼向つ腹を立つてしまつた。

電燈屋は實にしつつこかつた。その上彼は少し耳が遠かつた。耳の遠いものが誰でもさうするやうに、彼は、こつちの言ふことをなか／＼分らず、しかし自分の言ふことは大きな甲高い聲でしやべり立てた。

「先々月からなんですからね……今月のぢやないんですからね……この邊はみな」と彼は、片側六軒づつ兩側十二軒のその一劃を顎で、指しながらつゞけた、「みんな今日は頂いたんですよ、ふむ。いつ來てもお留守ですからね。それやわたしも……」

おちかばゝあはジリ／＼してゐた。彼女はそもそもこんな所へ引つ越して來た時のことを思ひ出してゐた。こんな腰辨連中の住んでるところはいやだと彼女は言つたのであつた。外に行きどこがなかつたのと、その時の仕事の關係とから、仕方なくこんな家を借りたのであつた。明日の日も分らないやうな連中が、こゝいらでは、自分の子やひとの子を「坊ちゃん」だの「お孃ちゃん」だのと呼んで、その「奥さん」たち自身は、亭主を送り出しておいてまつぴる間のこのこ錢湯に出かけるのであつた。この「奥さん」たちはガラのわるいおちかばゝあまでも「奥さん」といつて呼んだ。「でなけや手前が奥さんといつて貰へなくなるからね、イッヒヒ……。」と言つてその時は大笑ひをしたのだつたが、その奥さんたちも夏のガサ以來敬遠して口を利かなく

なつてゐた。それはありがたかつた。しかし、こんなところに住んでゐるせゐで、その「奥さん」連中の臭い體臭みたいなものがおちかばゝあ自身のからだにこびりついて來たやうに思へることが彼女には癪だつた。現にかうして電燈屋にガミ／＼言はれてゐると、彼女は、近所の手前なにか肩身のせまい思ひがして來るのであつた。「近所？　近所た何だい、べらぼうめ！」しかしまた彼女は、いつたいこんなことを氣にかけるそのことが「奥さん」連中の影響に外ならないことに氣づくと、もう一刻も早く引き拂つてしまひたくなり、それにしても亭主が歸つて來なければ話もならず、しかし電燈屋は、まつたく人の氣も知らずにまたもしやべり立てるのであつた。

電燈屋はつゞけた。

「電氣とかガスとかいふものは外のものとは違ふのですからね・・・お使ひになつた分だけを頂くのですからね・・・御夫婦でおつとめに出てらつしやる方はこれや仕方がありません・・・」

さうして彼は、彼女の眼の中を覗き込みながら如何にも意地の惡い調子で言つた、「今日はお目にかゝれたのですからねえ。」

それを聞くと　おちかばゞあは、「何もかもこいつのためだ！」と思つた。彼女はどなりつけた。

「ないもな無いもんぢやないか、どぶ板野郎！」

さうして彼女はさつさと火鉢のところへ歸つた。電燈屋の歸つて行く足音がきこえた。「をとゝひ來やがれ！・・・」電燈屋の足音はきこえなくなつた。

しかしその時またもや玄關があいた。彼女は飛びあがつた。彼女は、「もうあとは怒鳴りつけるばかしだ。」と思ひながら出て行つた。さうして「まあ！・・・」と驚いた。

それはかけ取りでなくて米を持つて來て呉れた消費組合の人だつた。

「どうですか？」と、その消費組合の配給係りは、持前の靜かな調子で言ひながら彼女にほゝゑんで見せた。それはかういふ場合に殘されたもの同士のかはすしようことなしの微笑だつた。

彼女は感動した。組合の人が米を持つて來て呉れた・・・もう幾日も米なしでゐたところへ・・・ひとりぼつちで・・・忘れないで・・・思ひ出して・・・まつたく・・・今日はちやんとした飯が食へる。・・・彼女はどうお禮を言つていゝか分らなかつた。それからしかし彼女はしやべり出した。長い間しなかつた話を十何日分一ぺんに取り返しでもするやうな調子でしやべり立てた。それに對して配給係りは、やはり物靜かな調子で、彼女の亭主の最近の消息をつたへた。

「一週間ばかり前まではS署にゐたんださうですよ。（S署といふのは彼女たちの住んでる所の警察で、一週間前までそこにゐたことは差入れに行つた彼女自身知つてゐた。）それからM署へまはされたさうです。わたしの方の山名君といふ人が昨日出て來ての話なんですがね。ええ、やつぱしSへ行つてたんですよ。その時主任の話でたしかにMに行つたらしいといふんですがね・・・」

「どうでせう、こんだは長いでせうか？」

「らしいといふんですがね・・・なんしろ私たちの方さへばた／＼持つてかれたんだから。」

「私たちの方さへ。」といふのは消費組合關係さへといふことで、消費組合のものが持つてかれるといふことはさうザラにはなかつた。それは彼女も知つてゐた、彼女はそれは困るだらうと言つた。青年はそれに對して、いや大して困らない、もう大抵は歸つて來たと言つて、しかし困つたことは別にある、それは組合員有力者のなかに組合をへんに協調主義的なものに考へ

てる連中がゐて、彼等は暇さへあれば組合を公設市場みたいなものにしようとするといふのだつた。

「かういふことがあるたんびにぐづり出すんですよ。なんしろ……」と、その青年は再び微笑をうかべながら言つた、「少し固い連中はどうしても拂ひが悪いですからね。委員が間にはひつて困つてるんですよ。」

「すみません。」

おちかばゝあ達は疑ひもなく拂ひが悪かつた。彼女は頭を下げた。

「いや、さういふ積りぢやないんです……」

「えゝ、分つてます……」

配給の青年は歸つて行つた。それを送り出すと彼女は大急ぎで米とぎにかゝつた。彼女は今日ほど消費組合をありがたいと思つたことはなかつた。今日ほど、消費組合のやうな方面で働いてる人たちの人知れぬ苦勞を感じたことはなかつた。彼女は大そううれしかつた。さうして殊に、お蔭で米がとげる！……彼女はトタンの米とぎばけつをガシャガシャッと搔きまはした。彼女はうれしくつて獨り笑ひをした。さうして獨り言をいつた、「ありがたい！」

その時またもや玄關があいて、「深田君かへつたかね……。」といふ間のびのした聞きおぼえのある聲がきこえた。

「來やがつたな。」それはS署の人のいゝ高等主任の聲だつた。この男たちが彼女の亭主を持つてつたのだつた。彼女は、前だれの端で手を拭きながら玄關へやつて來るなり怒鳴つた。

「何ですッ？」

「恐ろしい劍幕だね……」藤木といふその高等主任は笑ひながら言つた、「深田君まだなのかね？」

「まだかまだでないかあんたの方が知つてるぢやありませんか？」

「いや、知らないんだよ。ほんとに知らないんだ。あれや本廳の方で、僕んところはたゞ預つただけなんだから。」さうして彼は、上りがまちの所へ腰を下してポケ トから煙草を取り出しながら言つた、「すまないが、きみ、マッチをひとつ貸して呉れないか？」

彼女は默つてマッチを貸してやつた。藤木は火をつけてうまさうに煙草を吸ひはじめた。彼は如何にもうまさうに、物も言はずに煙を吸ひ込んだ。一本吸ひ終ると彼はまた一本袋から引き出した。さうしてそれを口にくはへて、いま吸つてゐた殆んど吸口ばかりになつた吸ひがらを逆さに持つて行つた。それはあわてものの藤木に似合はぬ仕草だつた。何しに來たのだらう？このあわて者が――彼はまつたく、あれでよく勤まると思ふ位にお人よしだつた。それは彼女自身知つてゐた――こんなに暢氣にしてるのを見てゐるのは實にへんてこだつた。彼女は亭主のことを訊いて見た。

「Mへまはされたつてぢやありませんか？」

「いや、Mぢやない、Yだ。」さうしてけげんさうな顏をして彼女を眺めた、「誰がMだつて言つてたのかね？」

どうも彼女にはいつもと勝手が違ふやうに思はれた。第一、高等主任が一人でブラリと來たことなんか今までに一度もなかつたし、藤木のお人善しのことは分つてるが、こんなトンチンカンなことは一度もなかつた。彼女の亭主の行方について根掘り葉掘りして見ても一向あいまいな返事しかしなかつた。それが隱してゐるのでなくて本當に知らないものとしか彼女には思へなかつた。もつと別な方法で、あたつて見ようか、それとも追ひ返してしまはうか、彼女は考へあぐんだ。

誰か君らの知つてる人で若い女の人はゐないかね？」

藤木が急にそんなことを言ひ出した。

「若い女？」彼女はます〳〵分らなくなつた。

「あたしだつて若い女ぢやありませんか？ フフ、、。」

「いや、君は違ふよ。さうぢやないんだ。實はね……」藤木は急に顏を赤くしてヘドモドと吃りはじめた、「僕あやめようと思ふんだよ。いや、止めるんだ。」

「警察をやめるの？」

「ン、止めるんだ。」

「恩給になつたね？」

「ウン、いや……」と彼は、話をそんなところへ引きずられまいと努力しながら吃りつゞけた、「それでね、僕あ商賣を始めようと思つてね……いや、カフェなんだ。カフェさ、ハハ……」こつちが笑ふとそれにつり込まれて彼も笑つた、「それで女給がほしんだよ……それでつまり……それで君らの知つてる人で、ないかね？」

「いつやめるんですか？」

「いや、あさつて止めるんだ。」

おちかばゝあは噴き出してしまつた。

「あさつて？……それであさつてからカフェを始めるんですか？」

「ン、始めるんだ……いや、もう始めてるんだ……これや默つてて呉れ給へよ……こなひだから家のものにやらせてるんだがね。それで、ないかね君？」

「ありますとも。幾らでもありますよ。」

「あるかね？」

「ありますよ。」そして彼女はいたづらさうに言つた、「あたしが行つて上げませうか？」

「フ、……」

大體あきらめがついたと見えて、藤木は、よろしく賴むとか、もう二三日だけ默つてゐて呉れとか、深田君には自分として出來るだけのことはしたのだから、惡く思はないで呉れとかいふことを繰り返して歸つて行つた。

「あゝ、驚いた、驚いた……」と、おちかばゝあは、再び米をとぎ始めながら考へた、「あさつてやめるんだ……これや君だまつてて呉れ給へよ、それでつまり、フ、……あんな奴に恩給がつくんだからね……いや、首になるのかも知れないね、あんな馬鹿だから……あれぢやこれからあ勤まりやしないやね……」

おちかばゝあはあをい顏をして寢てゐた。二三日前から彼女は、多分風邪を引いたのであつたらう、あをい顏をして寢てゐた。消費組合の親切な配給係りが米を持つて來て呉れた日からもう一月半以上たつてゐた。彼女の亭主と一しよの時に持つて行かれた連中もぼつ〳〵歸つてゐた。斷たれた連絡もある程度まで恢復してゐた。彼女の家にもまた元氣な男や女たちがやつて來た。さうしてそのうちの二人ばかりは彼女の家に泊り込んでさへゐた。さうして彼女は相もかはらぬ元氣なばゝあ振りであつた。たゞ彼女の亭主がまだ歸つて來てゐなかつた。彼はその後警察から警察へ轉々としてゐた。移るたび每に大ていは誰かが知らせに來て呉れたが、一二度はどこへ行つたのか皆目分らないこともあつた。たゞ噂では、しかし廻されはしないだらう、つまり起訴されるやうなことは多分あるまいといふことだつた。彼女もさうだらうと思つてゐた。しかしかうして寢てゐると、そんな風邪のやうなものではあつたが、色んなことが次々と考へられた。その考へのなかには、彼女らしくもない陰氣なものも交つてゐた。第一彼女が病氣になつたことがいけなかつた。彼女は、時たま世間にある「病氣を知らない」つまり生れてからたゞの一ぺんも患つたことの

ない人間だつた。それが二三日も寝こむやうな破目になつたため「わたしも病氣をするやうになつた！」といふ考へが彼女に浮んだのであつた。そんな考への浮んだことにびつくりして、彼女は、それを逐つぱらはうとした。それはこびりついて逐つぱらはれなかつた。彼女は無理にも逐つぱらはうとした。と、まつたく意外なことに、彼女は、そんな努力をしてゐる自分自身がかはいさうに思へて來た。さうして、彼女が寝てゐるために飯を男手でたいてゐるそこの男たちに非常にすまなく思はれるのであつた。

「こいつあをかしいぞ。」と彼女は考へた。しかしさう思つた時に知らず知らず彼女は言つてるのであつた、「すまないわねえ……」

「ばゝあにも似合はないね。」煮たきをしてる青年は元氣に彼女をからかつた、「すまないわねえ……か。」

いま彼女の枕許へその青年が來てきいた。

「晩にや何を食はうかね？」

「さうね……あたしは何でもいゝけれど……」

何でもいゝにしても彼女が指圖しなければならなかつた。彼女に指圖されないことには男たちに材料を買ひ集めることが出來なかつた。それで青年は昨日も一昨日も言つた言葉を繰り返した。

「何でもいゝつて何を食はう？」

「今朝の納豆はまだ殘つてるわね？」

「あゝ、殘つてるよ。」

「そいぢや……」しかし彼女は、ふいに、その納豆について思ひ出した。「あゝ、殘つてるよ。」といつたこの青年が今朝やはり彼女の枕許へ來て言つたのであつた、「おい、ばあさん、納豆を食ふかい？」

彼女は答へた、「あゝ、食ふよ。」

その青年は食卓へ納豆を持ち出して來た。それは藁に包んだ普通のものでなくて、木箱包みになつてゐた。汽車辨當のやうに上に紙が貼つてあつて、それには納豆の色んな能書をならべて、まん中に大さく「滋養衞生政岡納豆」と書いてあつた。

「大變な納豆なのね？」と彼女は言つた、「この頃はこんなの賣りに來るの？」

「十二錢、十二錢。」青年はとんきやう聲を出しながらその箱を振りまはした、「今朝納豆を賣つちやつてね……儲けたよ。ほら。」さうして彼はポケットから紙包みを引き出して、それを擴げて中の錢を見せた。銅貨や銀貨が一握りほどはひつてゐた。それをしまひ込みながら青年は言つた、「貸すよ、ばあさん。」

その青年は最近のうちにどこかへはひらなければならないことになつてゐた。たゞこゝの地域であとつぎが出來上つてゐなかつた。機關は大體形が出來てゐたがそれがまはり始めてゐなかつた。まはり始めるまで……こゝに泊つて居れば飯だけは食へた。しかし交通費が出なかつた。そしてこゝしばらくは實に交通費が要つた。そのことは彼女もうす〳〵知つてゐた。で、彼は、昔のことを思ひ出して、何年ぶりかで、今朝、一まはりまはつて來たといふのだつた。

「最初のひと聲が出なくてね……ウフ。」

青年たちは笑ひ聲をあげたがおちかばゝあは泪ぐんだ。そのことを今彼女は思ひ出したのであつた。それにしても何とか晩めしのことを言つてやらなければならない。

「そいぢやね……」

その時玄關の戸がガラ〳〵とあいて「今日は……どうだね？」といふ聲が聞えた。

「おや？」

おちかばゝあは枕から頭をあげた。

「誰だ？」と言つて出て行つた青年のとんきや

う聲が聞えた、「なあんだ！」それから當り前の調子になつて青年が言つた、「どうだい、カフエの景氣は？」
「まあね……」
「どこだね、店は？」
「Sの手前だ、停留場のすぐそばさ……おちかさん居るかね？」
「慾ばつてもから緊縮ぢやしやうがないだらう？」
「しやうがないよ。おちかさんゐるかね？」
「ゐるよ。」
「先に來た時ね……冗談に言つたんだらうけれど、行つてゝつこな話だつたんで寄つて見たんだがね……」
「それで？」
「いやね、僕んとこの店へ來て呉れないかと思つてね……」
「女給にかい？」
「ん…先ちよつとそんな話だつたのでね……」
「駄目だらう……いま寢てるんだ。」
「悪いのかね？」
彼女に、相手が乘り出してこつちの部屋の方を覗き込んでるやうに思はれた。
「風邪だ。」
「ちよつと訊いて見て呉れないかね。夜だけでも……通ひでいゝんだよ。」
「駄目だよ、女給なんか。」
「ちよつと訊いて見て呉れよ。おちかさんだつて困つてるだらうからね……君らは君らで居るしさ……」
おちかばゝあはムク／＼と起き上つて來た。
「歸れ、バカ！」さうして彼女は金切聲をあげた。
「歸れ、バカ！　豚のけつ、たどん、消しゴム、やまとのり……」
「駄目だよッ！」青年が驚いて飛んで來て彼女を押し戻した、「駄目ぢやないか起き上つちや……」
「いゝんだよ、乾ちやん。」それに抗ひながら彼女はなほも玄關の方へ首を伸ばしてわめいた、「歸れやがれ！」
「そんな君……そんな意味ぢやねんだ。」蕗木は吃りはじめた、「惡く取つて貰つちや困るよ……僕あなにも……」
「惡くとらないから歸つたらいゝぢやないか？」
「歸るよ……ぢや、君。」と彼は、青年の方へチラリと目を走らせながら玄關の戸に手をかけた、「また來るからね。」
「來なくてもいゝよ。」
さうして彼女は起き上つてしまつた。彼女は病氣がもうなほつてしまつたのだといつて青年の言ふことをきかなかつた、「チェッ……やめれや人間並のつきあひが出來ると思つてるんだよ……をかしくつて！」
さうして心配する青年に手を振りまはして見せながら言つた、「いゝのよ、これでもおちかばゝあですからね、エヘン。」
彼女はとう／＼晩めしをこさへてしまつた。
さうして旺な氣焔をあげてみんなを笑はした。
さうしてそのまゝとう／＼なほつてしまつた。

新しい女

なにごとも當今は國際的になつてまゐりました。ある一つの國の勞働者運動について見ましても、それはコミンテルンならびにプロフィンテルンその他の國際的組織をはなれては考へられませぬ。國際プロレタリアートが國際ブルジョアジーに對して持つて居る力の評價が大切であるといふことがある程度までひろく知れわたつて居るやうに思はれます。勞働者の祖國はサウエート同盟以外にはないといふ觀念なぞも、漸次一般的になりつゝあるやうに考へられます。

もつと手近な我々自身の個々の日常生活について見ましても、たとへば私の使つて居るペン先はイギリスのバーミンガムの工場で造られたものでありますし、私の一人の友人はよそからアメリカ出來のコンドビーフを貰ひましたが、それがアメリカでどんな風にして出來るかといふことをアメリカの作家のシンクレアの小説で讀んで知つて居たために、せつかくのその肉をどうしてもしばらくは食へなかつたさうであります。

それもこれもこと〴〵く國際資本戰につながつて居るものでありまして、我々の生活のほんの些細な一部を取つて見ましても、そのなかに我々はいつもこの無際限に大きな國際資本戰のミニアツールを見出す次第なのであります。さういふミニアツールをそれ〴〵からだにつけながら、もし人が何やかやを、この國際的な標準に照らし合はせないで考へるならば、それはまことに量見のせまい話であると申さなければなりませぬ。ヨーロッパやアメリカの話を口癖のやうに持ち出して、アチラではどうのコチラではどうのといふやうな利いた風の口を利く金持や金持の女房連があるやうでありますが、この節利札きりで平氣に暮してゐるためには、それ位のせまい量見と太い度胸とを持つて居なければならないのでありませう。

新しい女とか古い女とかいふ話にしても、やはりまたこの國際的規準に照らして物言ふべきものであつて、斷じて東京的、もしくは銀座的規準によつてしてはなりませぬ。

勿論わが國におきましても、最近は女の新しさといふことを勞働者の生活の側から問題にする人が見受けられるやうになりました。勞働者の生活といふものが國際的規準において見られる以上、女の新しさといふものを見るのに勞働者の生活の側からするやり方が間違ひのすくないことは言ふまでもありませぬ。

さていよ〳〵新しい女の實例をあげることにいたします。

尤も私は、この女が新しいといへるかどうかまだ考へて居ないのでありまして、たゞ彼女のなかに一つの新しさに近いものがあるやうな氣がするのである譯であります。本當にそれが新しさに近いものであるか、それとももとんでもない古さであるか、それは賢明な讀者諸君の判斷にまかせたいと考へます。

こゝに一人の若い女が居ります。彼女は亭主を持つて居りませぬ。鳥渡注意して置きますが、一人の女の新しいといふことはその女の年齢のすくないといふことには無關係であります。若い女の方が總じて年取つた女よりも新しいといふことは事實でありませうが、その逆、年が若いから新しいといふことは決して言

へないのであります。こゝに一例としてあげる女が若いといふことは、私ならびに諸君に取つて一つの偶然のしあはせにしか過ぎないのであります。彼女は雪國の百姓の家に生まれました。その家が古いやうに古い百姓でありました。ある年大雪が降つて、そのために家の棟の大きな垂木が二つに折れました。

それは一つの象徴であつたとも言へます。家の棟の垂木が折れたやうに、その古い百姓の生活そのものがまた二つに折れたのでありますから。それ以來彼女は、大體において、割りにふしあはせな年月を送りました。雪國は冬が長く、その冬の間ぢうは家のなかが「雪あかり」といふ言葉のあるほどに暗いのでありますが、彼女の生活もその通りに暗いものでありました。そして惡いことに、彼女の生活には微かなその雪あかりすらもなかつたのであります。

彼女は一人の兄貴を持つて居りました。つひに彼女はある日その兄貴のところへ出かけて參りました。兄貴のところでの生活は如何にも明るいやうに思はれました。兄貴は一軒の小さな家を持つて居ましたが、それは彼女の見たこともないトタン葺の屋根を持つたマッチ箱のやうな建物で、その上、兩方の隣りとあんまりくつついて居るために、隣りの夫婦の一々の口爭ひまでが手に取るやうに聞えるのでありました。

またその邊の家は形が一分一厘も違はぬまつたく同じ型の家でありましたから、初めのうち彼女は幾ら氣をつけても、つい隣りの家へ飛び込んでしまひ、しかも彼女は東京の言葉を知らないために(彼女の兄貴は東京に住んで居りました)、何といふ言葉であやまつていゝのか分らないのでありました。

兄貴の持つて居た家は兄貴一人で持つて居るのでなく兄貴とその友達とが共同に持つて居るものでありました。

彼等は、何か彼か、勞働者階級に關する仕事をして居るものでありました。

彼等は、朝は八時頃に家を出て、夜は十二時すぎなければ歸つて來ないのが毎日でありました。

スパイといふ警察のものが來るかも知れないから、來たらから〳〵いふやうに言へと彼女に教へて彼等は出て行くのでありますが、彼女はそれが見當もつかず不安で、思案に餘つて家に錠をおろし、近所の知合ひの家へ夜になるまで「避難」するほどでありました。幸ひ、スパイは一ぺんも來ないやうでした。そして彼等男どもは非常に元氣で、それを見てゐると、出來ないか知らないが、彼女自身も何かさうした仕事の手傳ひなりとして見たくなりました。

彼女は彼女にも出來さうなごく小さな仕事を見つけて貰つてそれを始めました。

彼女は言葉も分らず電車の乘り方も知りませぬ。そのためそんな小さな仕事をするにも色々と非常に困りました。どうやら少し、けれども彼女は、動けるやうになりました。ちやうどその頃、そのうちに寢泊りして居た一人の男が急な病氣で死にました。長い間仕事を熱心にやつて來て、その疲れが癒える暇もなく重なり重なつてとう〳〵亡くなつたのであります。彼女は悲しみました。

それから間もなくのこと、朝早く警察のものがドヤ〳〵と大ぜいやつて來ました。彼女は驚いて便所に飛び込みました。警察のものはピストルを持つて來たさうでありますが、驚きあわてた彼女の眼にはそれがはひらなかつたといふことであります。

兄貴の友達のうち一人は繩をかけられ、さうして一家揃つて、彼女も一しよに、警察へ連れられて行きました。

彼女たちは間もなく歸ることが出來ました

が、縄をかけられて行つた男はそのまゝ刑務所へまはりました。

今やこの小さなマッチ箱の家のなかに二人分のフトンがあまるやうになりました。

それでも彼等は、彼女も、元氣でありました。

ところが、ある日道を急いで歩いて居た彼女はふいに立ち停りました。足が動かず、心臟が苦しくなつたのであります。それは疑ひもなくリョーマチの再發でありました。

彼女は彼女の暗い年月のうちにリョーマチを得てゐました。肺病の若い女は感心出來るとしてもリョーマチの若い女は感心出來ませぬ。彼女は少し歩きすぎたために、それも電車に乘れないために要らぬ遠道をしたのでもありませう、寢つかなければならなくなりました。

それは何とかなほりました。しかし五六時間も歩くとまた加減が惡くなるのでありました。

一方彼等男どもは、非常に元氣でありながら金がないのでありました。金がないほど元氣であるやうにさへ見えることもありました。彼女は彼女の衣類を全部質に入れました。それでも追ひつきませぬ。男どもはしば〲、「おい何とかさん、少し榮養になるものを食はうぢやないか。」などと言ひますが、そのためには金の要ることを忘れて居るやうでありました。それにしても刑務所に行つた友達には、衣類・書物なぞを斷えず差入れてやらなければなりませぬ。まつたく、そこの壁のなかで或る幾日か讀む書物が切れたとしたら彼はどうすることが出來るであらう！

要するに彼女はリョーマチである。彼女はせつ角貰つた仕事を十分にしとげることが出來ない。彼女は手に何の職も持つて居ない。彼女は職によつて金を得ることが出來ない。男どもは朝から晩まで仕事に出てゐる。彼等が飯を食ふために仕事をしてゐるのでなく仕事をするために飯を食つて居るのである以上、彼等の彼女に渡す金が非常に不十分であるとしてもそれは致し方がない。何か彼女のやうな者にも金の取れる方法がないものであらうか？ 彼女の知つてゐるある女のごときは、疲れてヒョロ〲になつて、しかし代りの人がなく、今のその仕事を中絶させることがどうしても出來ないので、その肩が日毎にやせて薄くなつて行く！ あれを厚く出來たら！

多分彼女は、何も知らない頭で色々と考へたのであらう、カフェの女給といふものになつて金を儲けてやらうと考へついたのであります。

その話を兄貴の友達の一人に話したところ、その男は、「アッハ、アッハ、、、」と止めどもなく笑ひころげて、問題にもして吳れませぬ。「鯨がアハッハ、、谷川を、アッハ、、ハ、泳がうと……アッハ、、、。」

だが彼女はどうしても女給になつて金儲けをしようと決心しました。それをやつて亭主や子供を養つてゐる人もあるといふことだ！

彼女はあしたある知人に連れられてあるカフェのマネーヂャの試驗を受けに行くことになつてゐます。

もしその試驗に及第するなら、彼女は、昨日までガリ版を切つた手で眉を引くことでありませう。いゝ、なかうちをした手で皿を運ぶことでありませう。彼女の足にもうヒルは吸ひつかないでありませう。彼女はやつと覺えた歌の代りにかう唄ふでありませう。

「……よひやみせまれば……。」

お客は彼女の底ぬけの田舍つぺさに噴き出すでありませう。

さもあらばあれ、古ぼけた女よ、やりたいのならそれをやるがいゝ。そしてその酒しみのついた前垂をひるがへすこと正に×旗をひるがへす如くあれ！

モスクワ指して

一

「どうしたい李？」

「ウン？」

「おや、ビッコを引いてるな？」

「ウン。」

一九一九年のことだつた、十九になつたばかりの若い張と額に皺の寄つた五十一の李とが肩を組み合はすやうにしながら興安嶺の方へ急いで居た。

道は東支鐵道に沿うて、興安嶺を越え、コロンバイルに入り、ハイラル、マンチリア、チリを過ぎて遙にモスクワに續いてゐた。勿論、汽車の出來た今頃こんな途を選ぶものは誰もない。たま〳〵通るものがあれば、それは稅關の目をゴマ化してボロイ「ひと儲け」を目論む密輸入業者か、さもなければ密輸入業者の商賣の歸りを待ち伏せて、そのドッシリ重みのある合財袋をねらふあの風のやうに去來する馬賊の群に外ならなかつた。

草がチョロ〳〵生えて、それが夕方の風に吹かれて居た。木立もなければ人家もない。一帶のダラ〳〵した丘陵地で、向うの方に何か森みたいなものが見えてゐた。彼等二人が歩いて居るからこそ道と言へるやうなものの、二人の姿がなくなればたゞ荒れに荒れた内蒙古の不毛の原つぱが殘るばかりだつた。恐ろしい野獸や兇惡な馬賊の影にビクともしないやうな元氣な男でも、から云ふ原つぱの中程ではおのづと身ぶるひが出るだらう。

だが十九になつたばかりの張と額に皺の寄つた五十一歲の李とはさつきからトットと歩いて居た。

何で彼等はこんな危つかしい寂しい道を急いでゐるのだらう？

それにはワケがあつた。

一九一〇年（明治四十三年日韓併合の年）この方と言ふもの「我我の××の兄弟達」は身の毛もよだつ××××××のまん中に叩き込まれた。恐ろしいこのルツボの底で彼等は×と×と×とをドロ〳〵混ぜに搗き碎かれた。この搗き碎かれたものの中からやがて一つの透明な結晶體が現れて來た。それは叫んだ。

「××民族××萬歲」

これは奉祝門の前で提灯行列の中から叫ばれる代りに、××部屋で××の隙間から叫ばれた。それは人々の脊骨にヂカにからみついた。もと〳〵この恐ろしい、ルツボの中に投げこまれたのは、男、女、老人、子供、赤ん坊、農民勞働者であつた。で、この聲は、勞働者、農民、赤ん坊、子供、老人、女、男のすべての脊骨にからみついた。殖民地××に於ける民族××の火の手が、一萬四千方里の半島全國にわたつて龍卷のやうに捲き上がつた。

だが勿論この仕事は國際的なハカリに掛けられなくてはならなかつた。で、ある年人々は特定の男を選び、この選ばれた仲間は仕事の總計を携へてモスクワに行き、そこでそれが殖民地運動の世界的全圖の中で計量され、新しい方針が決定され、それが持ち歸られ、その後の苦しい一年の間にそれが生かされた。そしてその一年が今經過しようとして居た。一年間の仕事の結果がモスクワに持つてゆかれなくてはならない。再び仲間が選び出されなくてはならない。

仕事の總計は整理された。誰がそれを、××と張作霖と白の反革命黨との共同の網の目をくぐり拔けて首尾よくモスクワに屆けるか？

それを持つて行く人は少なくとも大膽であるほどに用心深く、落ちついてゐるほどにスバシこく、一切の變化する條件に應じられるほどに一切の條件を變化させる力を持つてゐなくてはならない。手つ取り早く言へば頭のギリギリから足の爪さきまで階級的でなくてはならない。

そして李と張とが選ばれた。

五十一歳の李は長白山脈をおほふ黑い密林のやうに靜かだつた。その中を縱横に走る金色の虎が十九歳の張だつた。この密林と虎にこそ次の言葉があてはまつた。

「俺ときては、
一すぢ繩では行かなかつた。
お前ときては
二すぢ繩では行くまいよ」

幾すぢ繩でも行かないこの一組は、ある日同志に見送られて間島を出發し、長白山脈を吉林省に下り、ハルピンを横つ外しに外し、チ、ハルのずつと南方でノン江を渡り、あの寂しい地域を急ぎに急いでゐた。

何で彼等はそんなに急いでゐたか？　彼等の前にはある日のチタ驛を通過する汽車の時刻が待つて居た。たとひ何千里の道のりであらうとも所定の時刻に一分後れることも許されない。彼等は「彼等の規律」を持つ黨員なのだから。おまけに、色々な事情から出發がおくれて今はギリ〳〵の時間しか殘つてゐなかつた。

所でさつきから、頑丈な李の足がとかく後れ勝ちだつた。加減でも惡いのかと訊かうとした途端に李の方が口を切つた。

「今日は二十一日だつたな？」

「さうだ。」

「今夜は月は出なかつたな？」

「さうだ。」

それつきり張は李の足のことを聞き忘れてしまつた。だがものの三十分もたつ頃には何もかもハッきりした。

「おや、ビッコを引いてるな？」

「ウン。」

「ウン。」と言つたかと思ふと李はそのまゝそこへガックリと膝をついた。

二

「どうしたんだ？」

びつくりして張が坐り込んだ李の肩に手を掛けた。その手をいゝきなり拂ひのけたかと思ふと李は背中を曲げてかゞみ込んだまゝ呻いた。

「いたたツ。」

ごく低い聲だつたが人を飛び退かせるやうな恐ろしい調子だつた。事實張は飛び退いた。

「どこだよ、痛いのは？」

「……。」

痛みに堪へかねたものと見えてしばらく李は返事もしなかつたが、そのうちに李の體はモチモチと動き出し、その右脚が張の目の前に伸びて來た。

「今診てみるからヂッとしてて呉れよ。」

「ヂッとしてゐるから靴を脫がして呉れ。そろそろとやつて呉れよ。すこし痛いのだ。」

思はず肩に手を掛けたやうなしくじりを二度と繰り返すまいといふ注意が張の方にあり、人を驚かすやうな無益な呻き聲を再び洩らすまいといふ用意が李の方にあつたにもかゝはらず、その右脚のズボンの裾をめくり上げ、その靴紐をしづかに解いてゆくうちに、張の手は慄へて來、その顏色はおのづと變り、半分腰を浮かし氣味にして我慢してゐる李の額には何時の間にかこまかな汗の玉が滲みはじめ、それが幾條か

ある額の皺の中を流れ始めた。そしてやがて靴が脱がされてむきだしになつた足が現れて來た時、張は知らず知らず溜息をついた。

「ほおつ！」

それは熟れた石榴のやうに割れて居た。その割れ目の表面は熟れた無果樹の實のやうに紫色になつて居た。そしてこの痛々しい大きな傷口を圍んでグジョ〳〵になつた肉、流れた血、しみ出た汁がへばり着いて居た。

これが李の足である。

これがあの山脈のやうな仕事を運搬するべきたつた四本のうちの一本である！

まことにこの四本の足に運ばれる仕事がどうして大きな山脈でなからうぞ！　それはその高さと大きさと重さにおいて山脈であり、廣々とした山麓を八方にひろげて無數の仲間達を養うてゐるといふ點において、またこれ等の山麓と平野との間を流れて我々の生活に必要缺くことのできない水、××の目標、××の方法、敵に襲ひかゝる熱情と勇氣とを常住不斷に與へて居るといふ點において正にあの宏大な大山脈である。

その足がいま傷ついたのである。だが足が、しかも李の足がどうして傷ついたらう？

一體、張や李の仲間達の足はちつとやそつとのことで擦り剝けたり血を出したりする足とは違つてゐた。彼等の足は彼等の意志ほどにも固かつた。何時か冗笑の好きなある仲間のものが次のやうに言つた位である。

「全くだ。彼の決意は彼の踵のやうに固い！」

勿論、幾ら彼等の足でも生れるときからこんなに固かつた譯ではない。だが例へば何處かへ行かねばならない用事ができた時彼等にどうすることができたか？

彼等の主として仕事をする北××及び間島地方の交通機關は殆ど言ふに足りない程度のものである。だが、たとひ幾等かの交通設備があつたにしろ、道の四つ辻、橋の袂、そして鐵道の停車場には殘らず日本の××が張つてゐた。そこで彼等は仕事を引き受けると、「よし來たつ」といふ短かい言葉を一つ殘して出發した、目的の地點に向けて「歩いて」五里でも十里でも五十里でも。彼等の足は初め血を流した。しかしやがて固まつた。彼等の××の決意が血の中に鐵となつたやうに、彼等の足もまた血の中に鐵となつた。そして李の足と云へば、彼の活動して來た長い年月と同じやうに鐵の中の鐵だつたのである。

小さな雜囊の中から、消毒藥、傷藥、繃帶、折疊式の鋏などを取り出しながら張が訊いた。

「どうしたんだらうね、一體？」

「二日ばかり前からのことなんだよ。」そして李は、思はぬ迷惑をかけたことに對する詫の色を眼の中にたゞよはせながらつけ加へた。

「まづかつたな！」

三

「二日前から？」

言ひながら張は器用な手つきで手當に取りかかつた。

「大したことはなかつたのだよ、最初は。尤も俺の足と來ちや何年にもカスリ傷一つ負つたことがないのだから、それが怪我をしたと言ふ點から言へや案外大したことだつたかも知れないがね。とに角俺は、君に心配させるにも及ぶまいと思うて默つて居たのさ。それが今朝になるとヅキ〳〵うづき出したのだ。それでもまだどうにか我慢が出來た。ところでさつき夕飯の時に、君は食事の支度で知らなかつたらうが、痛い方の足でしたたか躓つまづいたのだ。痛かつたよ。」

よほどの痛さだつたのだらう、こゝまで話し

て來て李は息を一つ吐いた。若しかしたらそれは手當に作ふ苦痛のためだつたかも知れない。

「すこし大袈裟に云へば危く悶絶しさうだつたと云へる位だ。全く俺もハッとした。同時に思ひ出したことがあるのだ。あれかな？　とね。君も知つてゐようが例の晉州の亂鬪事件だ。地主がニセ枡を造つて倉庫を建てた時の話だ。今でも衰へたとは思はないがあの頃の俺と來ては隨分と元氣だつたからね、あの時に足をやられたのだ。土ふまずから踵へかけて氷のひび割れのやうにやられた。しかも拔×した普通學校の××人校長にやられたのだから癇に障つたと言つたらない。治療してゐる最中でも思ひ出した。何べん飛び上つたか知れない位だ。でもどうにか元通り癒着してまた仕事が出來るやうになつたのだが、ひつ轉がつて起き上つたとたんにあれかな？　と、つまりまたあれが割れたかな？　と思つたのさ。だがそのうちに痛みも幾らかづつ退いて行くしどうやら君の目を眩まして尾いても來られた譯だ。考へて見れや一旦癒着した古傷が骨ならばともかくも肉がまた割れるなんて云ふのは醫學のことを知らない素人の馬鹿々々しい臆測ぢやないか？　ところで見て呉れ。」

李は手を上げて傷のついた自分の右足を指して見せた。足は張の手できれいに洗はれ、汚物はことごとく取り除かれて居た。傷は何處にあるか？　傷は火に燒けた足の裏の（李の足は裏さへも火に燒けてゐた。）土ふまずから踵にかけてその痛々しい大きな割目のありのまゝの姿を見せてゐた。

「勿論、晉州のやつが割れたのではあるまいがね。」

ともあれ「古つはもの」李の足は傷ついたのである。そしてこの足の歩かねばならない道のりは長いのである。

張は、或は張と李とは今や懸命に手當の完了を急いだ。李はどんな怪我人よりも我慢づよかつたし、張はどんな名醫よりも注意深かつた。藥が塗られ繃帶が卷かれた。ネルと麻布とで間にあはせた急ごしらへの靴もできあがつた。李が叫んだ。

「出發だ。」

李の聲には李の持前の精悍な響きが、萬一駄目な場合には、駄目な片足をその場へ殘してでも出發しさうなあの李に獨特の元氣な調子がこもつてゐた。

張は彼の腕を李の脇の上に廻した。肩を支へられて李は起ち上つた。出發の最初の一歩を踏み出しながら今度は張が若々しい聲を上げて叫んだ。

張と李とは文字通りに肩を組んで踏み出した。そして張の足だけが完全に踏み出した。次の足を踏み出すために全身の重量が右足にかかつて來たとき、李の足はそれは支へ切れなかつた。起ち上つた李の腰は再びずる〳〵と下つて來た。力を入れて居る張の腕もそれを支へることはできなかつた。張は再びゆる〳〵とではあるが地べたに坐り込んだ。

この廣々とした高原地帶で、この秘密の用向きを帶びた二人に取つて、傷に對して取られる一切の手段は悉くされたのである。しかも、この二人が帶びてゐる用向きは足の傷害のために遲れるやうなことは絕對に許されないのである。

二人は默つてゐた。何分たつたかも知れなかつた。ふいに張の耳が開いた。

「君、先に行つて呉れ。」

張の耳はこの言葉を聞いたけれども謂はゞ張自身は聞かなかつた。張は默つてゐた。

「君、先に行つて呉れ。」

「先に行つて呉れと言ふのだよ。」
張が振り向いた。「え？　何？」

四

「先に行つて呉れと言ふのだよ。」と言つた李の聲は至極落ちついたものであつたが、張の耳にはそれが大きな平手打ちだつた。
　この一言は張を飛び上らせた。それから腰を及び腰にかゞめさせ額をつき出させ李の眼の中を覗き込ませ、そして笛のやうな甲高い聲で噛みつくやうに怒鳴らせた。
「先に行け？……先に行け？……厭だ！」
　その勢ひはいまにもつかみかゝりさうに見えた。その聲は慄へを帯びて居た。けれども李は返事をしなかつた。
　張が再び叫んだ。
「厭だ！」
　やうやく李が口を開けた。彼は訊きかへした。
「厭だ？　なぜ厭なのだ？」
「そんなことは出來ないよ！」
「出來ない？　どうして出來ないのだ。」
「出來ないから出來ないんぢやないか！」
「おい張。」
　李が巖石のやうに張を抑へた。
「おい張。さういふ口調は君に適しない。俺は足を怪我したのだ。いゝかね？　俺達はその手當を出來る限りはやつたのだ。俺達は出發しようとしたのだ。そして俺の足の利かないことが分つた。俺の足が一歩も進めないことがわかつた。だが俺達は一分おくれてもいけない。一分でもだよ。これは大切なことなのだ。所で君は歩ける。君の足はその通り十分に頑丈だ。君は出發する義務がある。その義務を果せと云ふのだ。俺は厭だ、そんなことはできない、出來ないから出來ないと云ふんでは説明にならない。なぜ出來ないか、それを君は説明しなければいけない。それをしないと言ふなら君はわからず屋の我儘者だ。」
「よおし、説明する。」
　張が始めた。
「一體俺達仲間はなぜ、俺達二人を選び出したのだ？　なぜ俺達二人を一組に組みあはせたのだ？　二人を組合せて一組にした眞實根本の理由は何處にあるのだ？　それは彼等が、俺達が組合はされたものとして行動することを欲したからだ。彼等がそれを欲した。これが一切ぢやないか？　俺達は二人ぢやない、一組だ。この四本の足は二人の人間を意味しない、一組を意味する。その一本が傷ついたのは二人のうちの片方が傷ついたのではなくてその一組が傷ついたのだ。傷ついたのは俺の足だ、お前の足はそんなに頑丈だ。さう君は言ふ、だがそんなことは言はせない。それは俺の足だ、俺の足が傷ついたのだ、と俺は言ふ、それを俺に言はせるのは俺達の仲間なのだ。俺達を組合せた俺達仲間の意志なのだ。俺は俺達仲間の意志通りに行動することを欲する。これが第一の理由だ。」
「しかもだ。」張はつゞけた、「出來ないから出來ないのだと言ふのは分らず屋の我儘者の言草だと君は言ふ、そんならどうして出來るのだ？　二人の人間が仲間から選ばれて出發した。彼等は一組となつて歩いて行つた。途中でそのうちの一人が重い怪我をした。そして動けなくなつた。そこでもう一人の方が怪我をした方をほつたらかしにして歩いて行つた……そんなことがどうして出來るのだ？　あすこのモスクワで外から來た仲間達が俺に訊く、李はどうしたのだいと。すると俺が答へる、李は怪我をした。李は動けなかつた。それで置いて來た。たゞ怪我をして一寸歩けなかつたと言ふ理由でウラルの向うへ、大興安嶺の向うへ、人の通らない高

原の中にほつたらかしにして、若い張だけが一人でやつて來た。李は怪我をしてゐる、歩けないほどの怪我を。

しかし李は殘された。怪我をしたまゝで、一人ポッチで。それが××の今年の代表者だ。怪我をした五十一歳の同志を捨てて來たその若い男が世界の兄弟の前で××の報告をするのだ。おゝ、どうしてそんなことが出來るんだ？」

「勘違ひしちやいけないよ、張。」

李が口を挾んだけれども張は聞かなかつた。

「何が勘違ひだ？　そして君は言ふのだ、出發しろと、君は俺にそんな人間になれと言ふのか？　そんな恥づかしい人間になれと言ふのか？」

その時、李が突然錐をもみ込むやうな激しい調子で詰めよつた。

「君は誰だ？」

五

一人の老人が喘ぎながら歩いてゐた。

李であつた。

あれからまる二日間と言ふもの彼は一つ所にぢつとして居た。太陽は雲のない空に照り、空氣は夜もカラ〳〵に乾いてゐた。それが傷によかつたのか今朝になると足の心持がまことにさつぱりした。李は立ちあがつて見た。それからためしに歩いてみた。どうやら歩けた。躍れさうになるのを抑へて彼は傍に生えてゐた小さな灌木を一本切り取つて杖をこさへた。

彼は懸命に歩き出した。もう何時間も歩いてゐた。さうやつて歩いてゐるといまにも張に追ひつけさうに思はれた。彼は時々スガメをして地面を透かして見た。

「どこまで行つたらう？……影も見えない！」

影のないのが當り前だつた。足の頑丈な張が今頃こんな所をうろついて居よう筈がない。

ちやうど實に大きなそしてまつかな太陽が沈みかけて居た。杖を持つて足を結へた黒い影法師が、みる〳〵伸びて行つた。それはまたゝく間に地平線にとゞきそれを越えさうに見えた。しかし太陽が全く沈んだ。長い影法師は消えた。夕方の風が吹いて來た。李はさきをとゝひ別れた張の後姿を想ひ出した。

「奴め、とう〳〵我を折りやがつた。まつすぐに歩いて行つてとう〳〵一ぺんもあとを振り返らなかつた！」

一人になると二人の時には思ひも及ばなかつたやうなことが次々に考へられた。そして彼はふいに思ひ出した。

「さうだ、人相を敎へておくのを忘れた。」

チタには迎への者が出てゐる筈だつた。取りかはされる合言葉を張は知つてゐた。しかし若い張は相手の顏を知らなかつた。

「若しかしたらチタに着くまで追ひつけないかも知れないぞ。」

李は急ぎに急いだ。

しかし彼の足は思ふやうに進まなかつた、李は疲勞を感じて來、彼の息づかひは何時の間にか喘ぎ氣味になつて居た。

「一體、俺はどの邊まで來たのだらう？」

彼は眺め廻して見た。ずつと前の方に黒い塀のやうなものが見えた。

「あの時に見えた森の近くまで來たのかな？」

しかし森と思はれる黒いものは、つい鼻の先にあるやうに見えるかと思ふとまたずつと遠方にあるやうにも見えた。

要するに何も彼も黒ずんでぼやけてゐた。はつきりと識別することが出來なかつた。霧のやうな濃い影が十重二十重に取り罩めて、その底で溺れ込みさうに思はれた。

だが、事實彼はある森の近くまで辿りついて

居た。李と森との距離はほんの一哩そこいらに過ぎなかつた。そして李は、足が不自由で喘ぎ喘ぎではあつたが、とに角一歩々々森に近づいて居た。

が、さうやつて森に近づいて居た時、李とは反對の側から、異様な人影がやはりその森に近づいて居た。

それは十二人から成る騎馬の一隊で、みんな不揃ひな着物を着て居たが、不揃ひさが揃つて居たからやはり「制服」といふ事が出來た。彼等は新舊さま〴〵の武器を携へて居た。

この一隊は一種の方陣を作つて進んで居た。それはその中心をなす一騎を護りながら進んで居た。中心の一騎は特別のものだつた。騎者の鞍壺のところに一人の男がくゝりつけられてゐた。

騎馬の方陣は森の端まで來て止つた。中心の一騎が進み出た。くゝりつけられて居た男がおろされた。手はまだ後に縛つてあつた。

騎乘のものが皆馬を下りてそれを取り卷いた。一人の男が何か演説をすると二三人の者が進んでその捕虜を引つ立てた。彼等は捕虜の首に麻繩を卷き、馬を並べてそれを踏臺にしながら、折からそこに差し出て居た森の高い枝に吊し上げた。

この作業は物靜かにして手つ取り早く行はれた。作業が終へると彼等は再び馬に乘つた。そして風のやうに消えた。

李には何も見えずまた聞えなかつた。

李は次第に近づいて居た。

六

「やつぱり森だつたのだな。」

李の眼にもそれがはつきりと分つて來た。

高い木が隙間もなくびつしりと密生して夜空に黒々とそびえて居た。それは木の幹が密生して居るだけでなしに、細かい枝が縱横無盡に差し出て居て、それが互ひにからまり合ふばかりになつて居、文字どほり一種の塀を形づくつて居た。

遠くで見つけた時から大方森だらうとは思つて居たが、草もロクに生えないやうな地域にこんな密林があることは全く意外のことだつた。

「何といふ木かな？」

李は側へ寄つて行つて手をふれて見た。しかしそれをすぐ引つこめた。

「フン。針を持つてやがる。」

さて李はこの森の中へはひつて行くべきであらうか？　それとも今夜はこゝに止まるべきであらうか？　この森をよけて迂回すべきであらうか？

今夜も月は出なかつた。たゞ星だけが非常にキラ〳〵と輝いて居た。それを見上げながら李は色々と思案して見たがなか〳〵決着が着かなかつた。

その時彼は何の氣なしにもう一ぺん目の前の塀を見上げた。すると彼の眼は一點に止まつて動かなくなつた。彼は色々とからだの位置を變へて見たり、眼を細くして見たり、兩方の手の平を眼の横側へ持つて來て馬車馬の眼かくしのやうにしてその間から覗いて見たりした。

「フム。」

彼の見つけたものは全く「異様なもの」だつた。どう考へて見てもそれは人間らしかつた。一人の人間が首を縊られて高い木の枝に吊下げられて居るものとしか考へられなかつた。

彼の全身を不吉な豫感が走つた。

彼は急いでマッチを取り出した。それから蠟燭を一本取り出した。そして背伸びをしながら蠟燭の火を差し上げた。

「張！」

李はケダモノのやうな唸り聲と一しよに蠟燭を捨てた。

蠟燭の灯が消えて急に暗くなつた中で、李は腰に手を當てたまゝしばらく立つて居た。その間ぢう枝の上を見上げてゐた。

ふいに彼は地面の上にどかりと腰を下した。彼は小さな雜嚢を取り出して側に置き、それから上着を脫いで下着だけになつた。それから上着のポケットといふポケットをすつかり裏返して中にあつたものを一つ殘らず雜嚢に移し入れた。それが濟むと彼はその上着に猛然ととびかかり、まづ眞中からまつ二つにパリ〳〵と引き裂いた、それからそれをまた二つに、更に二つに、それから段々に細かくメチャ〳〵に引き裂いた。今や彼の一着の上着は細かい切れつぱしになり終せた。

するとその一筋を取つて彼は彼の足の右足を卷き始めた。一すぢ又一すぢと卷いて行つた。

右足の次には左足を卷いて行つた。足が濟むと今度は左手を卷き最後に口を使つて右の手を卷いた。

李の兩手兩足は重い怪我人のやうに彼の上着でグル〳〵卷きに繃帶された。

李は再び腰を上げた。

彼は高い枝を見上げた眼をそのまゝにして足を踏み出し、ちよつと腰をかゞめたと見る間にその針だらけの木の幹にとびついた。

彼はヨヂ登つて行つた。

それは人が思ひもつかないそして全く困難な仕事だつた。彼の皺のある額は高く上げられ、そこから汗がしたゝり落ちた。

終に李は張の所によぢり着く事が出來た。彼は老練な水夫のやうに輕々と身を扱ひながら吊られた張を綱から外した。そしてそれを自分の身體に縛りつけ、上りよりも數倍な下りの冒險に取りかゝつた。この困難を彼は切り拔けた。

脫がせた上着を並べた雜嚢の上に張のからだが横たへられた。

そして李は僅かに手の繃帶を取り除いたまゝで人工呼吸に取りかゝつた。

夜はだん〳〵に更けて行くやうに思はれた。星は空に一層輝いた。そして張が最初の息を吐いた。

ドイツ國民黨員

一

イギリスに捕虜になつてゐたウイルヘルム・マイヤーが歸つて來てドイツの國境に足を踏み入れ、三年目にはじめてまたドイツの地面を踏んだ時、大粒の泪が彼のほつぺたを流れ落ちた。彼はこゞみ込んで地面にキスした。連中が笑つた。

ウイルヘルム・マイヤーは腹を立てた。

「何がをかしいんだ？　俺が地面にキスしたからつてのか？　だつてこゝドイツの地面だぜ、ドイツだぜ、祖國だぜ。」

それから道すがらずつと、この默りやの、でなければいつも膨れつ面をして居る男はどの木にもどの家にも笑ひかけた、ちやうど仲のいゝ昔からの友達のやうに。

彼は誰にも待たれて居なかつた。兩親は死んで居た。たつた一人の兄きは戰爭で死んで居た。

彼が行き逢つた仲間友達や人々やは革命のことやカイザーの遁走のことや共和國のことやを昂奮して話した。ウイルヘルム・マイヤーにはそんなことはあまり面白くなかつた。彼には分らなかつた、どうして人が遁走することが出來たか、どうして危機に頻してゐる祖國を見捨てて走ることが出來たか――だが、帝國か共和國か――それは彼にとつてどつちでもよかつた、どつちだつてそれやドイツぢやないか、故郷ぢやないか、祖國ぢやないか、ぶちのめされた、貧乏な、だがそれだからこそ一層愛するドイツなのぢやないか。

「おれたちやドイツをもう一ぺん盛り返さにやならぬ。」

ウイルヘルム・マイヤーは言つて見た、すると彼の兩眼が輝いた。この小つぽけな貧相な男が巨人のやうな力を身うちに感じた、この偉大な事業をまつたく獨力でやり遂げることの出來るやうな。

彼は街へはひつて來た、戰爭前そこで彼が働いて居たところの。停車場の建物から彼は赤旗のなびいてゐるのを見た、彼を憤怒がとつ捕まへた、彼がかつて忠誠を誓つたあの愛する黑白赤の旗はどこへ行つたのだ？　それはどこにもなかつた。地面の上から消えて亡くなつたやうに見えた。ウイルヘルム・マイヤーの不愉快さがこみ上げて來た。何の權利があつて世間の奴らは彼の旗を盗つてしまつたのか？　公共建築物の上のあの赤いぼろつ切れは何をしたといふのだ？

一人の勞働者が彼のそばへ寄つて來た。

「いゝ旗だなあ全く、えゝ兄弟？」

ウイルヘルム・マイヤーはその見知らぬ男に洟をひつかけてやらうと思つた、だがやらなかつた。その男のしやべつて居るのはドイツ語だ。して見れば彼が力を合せてドイツをも一度昔のやうに盛り返さうとして居る同じ兄弟ではないか。

彼は昔つとめて居た商館へ出かけた、そして親切に迎へられた。彼の職場は勿論あいては居なかつた、だが彼は倉庫番人として雇はれることが出來た。商館の長男はもと兵隊で同じ聯隊につとめて居た。その頃彼は兵卒の間で無暗に惡まれて居たけれど、それでも今かうしても一度逢ふことがウイルヘルム・マイヤーに

は嬉しかつた。

「私達としちや是非お前さんにお頼みしたいのだ。」支配人が彼に言つた、「から不景氣な時節にや倉庫番人が必要なんでね。」

ウイルヘルム・マイヤーはうなづいて見せた。勿論彼は信頼されてよろしい。彼の處理するものはすべて最後の一點まで故國に屬して居る、貧乏なドイツに屬して居る、どうして彼が倉庫番の仕事を愼重にやらずに居られるか？

彼は持場へ出かけて行つた。

ウイルヘルム・マイヤーは村で大きくなつた。親父はつらいその日暮しをしなければならない水飲百姓であつた。この子供が小さかつた頃はいつも暗い蔭がかぶさつて居た。やりくりがつかなくなつたが最後家を捨てて出て行かなくてはならない！ 彼らはその見すぼらしい小つぼけな百姓小舍をさへ何か人間らしいもののやうに愛して居た。それから痩せた牛をも、くちくちの牡山羊をも。

少年は村の小學校へあがつた。こゝで彼はをしへられた、たつた一つのほんたうに立派な國がある、それがドイツ國だ。ドイツでは一切が善く一切が美しかつた。ドイツの皇室は何ものにもまして最も高貴な最も賢明な人たちであつた。たゞひたすらに臣民の幸福のためにお心を痛められた。それからまたこの臣民は世界中で一番立派な一番賢い人間であつた、寛大であり敏活であり、職分に忠實であり犠牲の精神に富んで居た。だがその隣りのフランス人と來たら、反對に、輕薄なまけ者の不道德な、そしてドイツ人のやうな深い氣持のない狡猾な人民だつた。奴らはかつて王樣や女王樣を殺すほどにも殘忍だつたことさへある。年取つた幾分か耳の遠い先生は、フランス革命の殘酷な事件を話す時にはすつかり若々しく雄辯になつた。

小さなウイルヘルム・マイヤーの精神の中にフランス人の肖像が出來上つて行つた。正直な信用の置けるドイツ人に今にも襲ひかゝらうとして、待ち伏せて居る野蠻な血にかわいた人間。

それからまたイギリス人といふ奴があつた。彼らはフランス人ほど惡黨ではなかつた。けれども先生は彼らをあきんど國民だと言つた。それはこのイギリス人といふ人間が、たゞもう自分の利益ばかりを考へる物ほしがりの錢ほしがりであるといふ意味だつた。それからずつと遠い東の方にはロシヤ人が居た。このロシヤ人といふ奴の話にはクラス中が大笑ひをした。ロシヤ人といふ奴は讀むことも出來なければ書くことも出來ないで牛や馬みたいな生活をしブランデーを普通の水やなんかのやうにがぶ飲みし、蠟燭を鼠みたいに嚙るのであつた。

小さなウイルヘルムが畑で働いて居ると、彼はよく教はつたことを考へた、そして彼がドイツ人であるといふこと、そして狡猾なフランス人でもなく野蠻なロシヤ人でもないといふことを喜んだ。それから彼はまたドイツが一八七一年にどんなに立派にフランス人を叩きつけたかといふことを考へた、それから更に、あの恐しいナポレオンに抗して敢然と起つたドイツの自由の戰士、シルだのキョルナーだのリュツォフだののことを考へた。彼らは學校でその頃の詩を教はつて居た、そしてこの少年は折にふれて、ひとりぼつちの時、大聲でその章句を口吟んで見た、それからまた彼は、彼の元氣な聲を張り上げ有頂天になつて、けれども幾らか間違つた――といふのが彼は耳が惡かつたのだ――「ラインの護り」を唱つた。

彼が十一になつた時恐ろしいまつ黑な蔭が落ちかゝつて來た、そして家中におつかぶさつた。屋敷は賣られねばならなかつた。髮の毛の黑い鼻の曲つた男が來てかはいゝ牛をひつ張つて行

つた。その時ウィルヘルムは立つて居た。涙がぼろ〳〵落ちた。親父は苦しさうな顔をして家の前の腰掛に掛けて居た。彼は口の中で怒鳴つた。

「ユダヤ人のちきしやう。」

そしてお袋が大聲をあげて泣いた。

彼らは町へ引つ越した。ウィヘルムは給仕の職にありついた。どうもすべてのドイツ人があの年寄りの先生が頑張つたやうな親切な思ひやりの深い人ばかりではないやうに思へることが度々あつた。けれども彼はから考へて自分を慰めた。

「あれやきつと町風といふのだ。」

兄きはある工場で働いて居た。老いぼれた親父はすつかりめ入り込んでしまつた。彼は高い建物や澤山の人ごみや八釜しい通りやを憎んだ、そして切りに村へ歸りたがつた。それから親父は酒を飲み始めた。醉つぱらつて來ると彼は一度うちへ歸つて居るやうな氣になつた、枯草のむれる匂ひを嗅いで居るやうな、根の張つた地面のすつぱいやうな匂ひを嗅いで居るやうな。彼は家族のものに取つてます〳〵重荷になつた、そして彼が雷にあたりそれから三日目に死んだ時、それは家族に取つて一つの開放であつた。

ウィルヘルムは非常によく働くことが分つて來た。彼は名譽心の強い少年であつた、彼はあらゆることを學んだ、そして書記に取り立てられた。

その時戰爭が來た。彼は胸をとゞろかして出發した。おゝ、この愛する平和な豫期して居ないドイツに襲ひかゝつて來たならず者共に眼にもの見せてやれ！ 彼はまるで彼一人で一聯隊全部を粉碎するやうな氣がした。

それから半年たつて彼はイギリスへ捕虜になつた。戰爭の二年目にはお袋が亡くなつた。そしてそれに續いて間もなく西部の戰線で兄きが死んだ。

さて今ウィルヘルム・マイヤーはもう一度歸つて來た、そして彼の精神と注意との全部が、祖國を助けて再び光榮に上せるために、も一度立派に「ドイツ國、世界に冠たるドイツ國」と呼ばせるために向けられた。

以前ウィルヘルム・マイヤーは政治などといふものにすこしも氣をかけなかつた。今はだが祖國のことが心配になるので新聞を讀み始めた。手に入れることの出來たあらゆる新聞を讀んだ。社會主義新聞は厭でことわつた。それは社會主義新聞が、貧乏な平和な全世界から襲撃されたドイツに世界戰爭の罪を着せようとして頑張つて居たからだ。それに比べれば國粹新聞の方がずつと彼の氣に合つた。彼は國粹的な澤山の新聞を夢中になつて讀んだ。彼はすべての言葉を信じた。そして彼が戰爭當時憎んで居たよりももつとずつと激しくフランス人を憎み始めた。

澤山の次から次へと代つて行つた政府はウィルヘルム・マイヤーよりももつと嚴格な批判者を持たなかつた。彼は注意深い眼を見張つてそれらの政府の政策を追求した、そしてそれらがどうしてもはつ切り飮み込めなかつた。一體全體何時になつたら、ドイツをフランスの壓迫から解放する人が來るのだらう、かつてのシルとその仲間達のやうな行爲の人、自由の戰士は何時出て來るのだらう？

國はます〳〵貧乏になつて行つた、窮乏は一層巨きくなつて行つた。誰が惡いのだ？「フランス人だ。」とドイツ國粹新聞が書き立てた、「そしてユダヤ人だ。」ユダヤ人！ さうだ、ウィルヘルム・マイヤーはふいに、久しい以前にあのかはいゝ牛をしよ引いて行つた髮の毛の黑い鼻の曲つた男を思ひ出した。あいつもユダヤ人

だつた。あの時彼の一家をめちやくにしたのもユダヤ人だつたのだ。勿論親父の第一の債權者はある物持の百姓だつた。けれどもこれは物事をお上へ持ち出して片づけたまでだ、自分でやつて來て何か持ち出すやうな眞似は決してしなかつた。愛する牛にまつはる古い少年の怒り、古い少年の悲哀がウィルヘルム・マイヤーの中に新しく燃え上つた。さうして今や彼はユダヤ人をフランス人よりも一層憎みはじめた。彼の讀む新聞はこのユダヤ人といふ奴に關して說明した、彼らは一切の國土に取つて呪ひの種である、あらゆるキリスト教徒が飢ゑにさらされて居る時、彼らだけがドイツでも今もなほ金を持つて居る、更にロシヤではボリシェウィキーといふ名前で政府を强奪し、ボリシェウィキーの言ふことを聞かないと銃殺したり絞め殺したりするのだ。そしてあの憎たらしい奴ら、戰爭の罪をドイツに着せようとして演說をする奴ら、あの社會民主黨員、中でもあの共產主義といふ奴ら、奴らはみなユダヤ人にあやつられて居るのだ。勿論一番憎たらしい奴は共產主義者だ、奴らはロシヤのユダヤ人と同盟を結んでドイツにまで騷動と恐怖とを流し込み、すべてのキリスト教徒をユダヤ人に無理矢理屈服させようとたくらんで居るのだ。

ウィルヘルム・マイヤーがこのことを考へた時、彼はますく不愉快になつていよく向つ腹が立つて來た。掠奪し奴隷にする犯人の手から愛する祖國を開放する人、フランス人とユダヤ人と共產主義者との手から開放する人々は何時になつたら出て來るのだ!?

ウィルヘルム・マイヤーは鷲十字章を一つ買つて來た、そしてそれをボタンの穴にぴつしり留めると彼は神さまに祈り上げられたやうな氣がした。これさへあれば、彼は出會すすべての人が、彼は祖國を何よりも愛し、そして祖國開放のために萬事を放擲する覺悟のものだといふことが分るにちがひない。彼は喜んで同じやうに鷲十字章を下げてゐる若い青年達に話しかけたかつた。けれども彼の中にはまだ人見知りをする百姓の氣六づかしさが生き殘つてゐる。そればかりでない。他の連中は殆ど例外なしに立派な着物を着て堂々たる恰幅をして居た。どうもその人達は「紳士」としか思はれなかつた。

ウィルヘルム・マイヤーはひしくと彼の寂しさを感じ始めた。彼はどんなに喜んで、誰にでも彼の新しい信仰について、彼の新しい認識について、語りたかつたらう。だが戰場の同僚たちは政治を見向きもしなかつたし、それに彼らにはこの默りこくつた氣六づかしい倉庫番人は氣に食はなかつた。彼にはなほその他に個人的な心配があつた。給金がやすかつた、物價がべら棒に高かつた。おまけに彼は戰爭で耳を惡くしてそれが段々惡くなつて行つた。萬一おれがつんぼになつたら、といふ陰氣な心配が彼を惱ました。現金な醫者は彼の氣に入らなかつた。その醫者は社會主義者であつた、おまけにユダヤ人であつた。ウィルヘルム・マイヤーは好んで自分から莫大な費用を支拂つた、そして別のドクトルの所へ出かけて行つた。

ある日彼は支配人の事務室に呼び出された。彼はふるへ上つた。

「おれの耳が片つ方惡いことに氣づいて支配人とうく首を切るといふのかな?」

彼は縁日のあらはな上着を撫でた。ゴムカラを丁寧に拭いた、そして事務室へはひつて行つた。

事務室には例の長男が居ただけであつた。彼は書きもの机の前に腰かけて太い葉卷をくゆらして居た。ウィルヘルム・マイヤーの鼻の孔

が切なさうにその葉卷の匂ひを吸ひ込んだ。すべての物價がこんなに高くなつてからといふもの、彼は煙草を止めなければならなくされて居たのである。

「やあ來て吳れたね、君。」

リュブケの檀那が口を切つた。

締めた！　どうやら首切りではなささうだ。

ウイルヘルム・マイヤーは長年の習慣で直立不動の姿勢で答へた。

「何御用でございませうか。はい。」

若い支配人はほゝ笑んだ。

「あんたと一寸話して見たいと思つてね。」彼は鷲十字章をちらりと眺めた、「まあ掛け給へ。」

どぎまぎまごついてウイルヘルム・マイヤーは一つの椅子の一番外の端に腰を下した。

「私の方ではあんたに至極滿足して居ます、ん、至極滿足してね。」

若い支配人が言つた。

それぢや給金があがるのだな。ウイルヘルム・マイヤーは考へた、そして默つてお辭儀をした。

「あんたは勉强家だ、それに責務に忠實だ。」

支配人は續けた、「全く責務に忠實・・・あんたは鷲十字章を懸けて居ますな？」彼はふいに言ひ添へた。

「は、はい！」

「で何かね、鷲十字章つてものがどんなものかあんたは御承知なんですな？」

ドイツの救濟、ドイツの開放、すべての眞の愛國者の結合、それを彼が知らなかつたかどうか。そして奴隷にされた祖國のための戰士の鬪爭を。彼は喜んでこれらの考へを口に出さうとした。けれどもあわてたために舌が引きつつてしまつた。彼はやつと吃りながら、顏をまつ赤にしてまとまりの無い言葉をへどもどと呟くことが出來ただけであつた。

だがリュブケの檀那はそれで至極滿足らしく見受けられた。

「あんたが正眞正銘の愛國者だといふことが分つて、いや全く愉快ですよ。」

彼は書きもの机の上の葉卷入れの方へ手を伸して一本つまみ出した。

「やり給へ、ひとつ、君。」

深い幸福感がウイルヘルム・マイヤーの中にみなぎつた。さうだ、これがすべての眞のドイツ人の兄弟づきあひと言ふものだ。支配人は彼を「君」と言つて呼んで居る、彼に葉卷をすゝめて吳れる、そして支配人の眼の前でそれを吸つてもいゝと仰しやるのだ！　兩方の手をふるはせながら彼はマッチをすつた。

リュブケの檀那は彼を注意深くながめて居た。けだものゝやうな口のまはりに笑ひが浮んだ、それが忽ち押へられた。

「何かね、あんたはドイツ國民黨にもうはひつてるのですね？」

一寸間を置いてから支配人が言つた。

ウイルヘルム・マイヤーはもう幾度もその政黨のことを聞きもしたし讀んでも居た、だが彼のやうなものでも入黨出來るのかどうかなどといふことはつひぞ考へても見なかつた。

「どう致しまして、あなた。」

「今夜集會があるのだがね。一しよに出かけませうや。八時に私の家へ來給へ。黨の話を聞いてれば先刻御承知のことだが、わが黨がドイツを救ひ得る唯一のものだといふことは全く明かなことだからなあ。」

「は、はい。」

そして突然彼は言葉を見つけた。年來彼が默つて身内に溜めて來た一切の愛情と一切の痛苦とが溢れ出した。祖國に對する熱情と仇敵に對する憎惡とがあふれて來た。彼はしやべり且つ

語つた。支配人は一層注意深く彼を見つめて居た。

「そしてドイツは、ドイツは、救はれるのです。さうぢやありませぬか、あなた。私達の愛するドイツはもう一度大きくなるのです。」

ふいに彼の兩眼に涙が浮んで來た。彼の咽喉がつまつた。彼は默らなくてはならなかつた。

リュプケの檀那はあくびを一つ噛み殺した、そしてすこしあせり氣味に答へた。

「あ、全く。で八時には間違ひなく來給へ。それから裏手の階段を上つて呉れ給へ。いゝかね。一寸訪問者があるのでね。」

ウィルヘルム・マイヤーはかつてあつたどんな時よりも幸福に感じた。祖國に對する憂慮はもはや彼ひとりのものではない。同一の努力が彼を結びつけるところの友人がある。彼が心の中では深く感じて居てもどう言つてそれを表していゝか分らなかつたことを、燃えるやうな言葉で殘らず言つて呉れる人々がある。だが外の連中は言葉を持つて居た、澤山の言葉を。ウィルヘルム・マイヤーが一つの集會から歸ると、それらの言葉が彼の頭を一ぱいに混亂させた。「愛國主義」、「國内の仇敵」、「ユダヤ人同盟」、「呪はれた共産主義者」、「民族的純アリア人的精神」。彼はアリア人的といふ言葉がどういふことか知らなかつた、彼はたゞぼんやりと、それは何でも善いものに違ひない。ドイツ的な、フランス的なものやユダヤ的なものとは反對のものだと考へた。また澤山の「立派な」人達とそんなに親しく交ることが出來るといふことが彼をうれしがらせた。全く、支配人は、勿論黨内の集まりの時ではあつたが、彼を指して「君」とさへ言つた位だ、一度ウィルヘルム・マイヤーは氣持の惡いやりしくじりに出會つた。ある土曜日の午後のことだつた。ちやうど彼は、ある町の市會議員選擧戰で、ドイツ國民黨が勝つたといふ吉報を得たところだつた。有頂天になり、すつかりいゝ氣持になつて彼は街を歩いて行つた。リュプケの檀那が美しい立派な着物を着た婦人を連れて向うの方からやつて來た。ウィルヘルム・マイヤーは彼の方へ飛びついて行つた。

「聞きましたか？　我々の勝利を知つてますか、君？」

そして何からんとしやべつた。

婦人はこのぼろ〱の男をびつくらして見つめた、そしてリュプケの檀那は幾らかまごついた。

「知つてるよ、知つてるよ、マイヤー。私はもうちやんと知つてるのだ。」

そしてあとは何も言はずくるりと向うを向いた。ウィルヘルム・マイヤーは驚いて眼を見張つた、彼には何が何やらさつぱりわけが分らなかつた。一體支配人が彼を恥しがるなんといふことがあり得るだらうか？　そんなことは絶對にあり得ない。一旦偉大な感情が人を結びつけた以上すべて一樣に兄弟ではないか、たとひ一方が金持の紳士でもう一方が貧乏人だつたとしても。

彼はやがて第二の幻滅にぶつかつた。もう隨分長く彼は給料を貰つて居なかつた。まだ一度も給料の袋を手にしなかつた。だが支配人に對する愛と、彼が彼のやすい勞働で祖國のために盡して居るのだといふぼんやりした感じとから、まだ給料のことを一度も口に出しては言はなかつた。だが今となつてはどうしても着物を一着買はなければならなかつた。彼の古いやつはもうこれ以上つぎを當てるわけには行かなくなつて居た。そして寒い秋風が縫目のあらはな着物を透して針のやうに刺して來た。彼は長

い間考へ込んだ、そして結局自分で自分がをかしくなつた。だつて支配人が彼の給料を上げて呉れるのは當り前ではないか、なぜと言つて支配人は彼の友達なのだから。彼は面會を求めて彼の要求を切り出した。支配人は額に皺を寄せた。

「私は君の口から給料袋の話なんぞを聞かうとは思はなかつたね、マイヤー。まるでボリシェウィキー見たいぢやないか。一體私の雇人に支拂ふ給料の高を私に命ずる權利を誰が持つてゐるのだらう? さういつた風な話はどうも自由なドイツ人にや一寸面白くないやうだが。」

ウィルヘルム・マイヤーはまごついてしまつた。彼は何も惡い氣でしたわけではなかつた、けれども、若し支配人さんが……いや彼は厚かましい振舞をしようなどとは微塵も考へては居なかつたのだ……たゞ……だつてもうこんなに寒くなつたし、それにこの古ぼけた上着は……。

リュプケの檀那は我慢がならないといふ風に鉛筆で机の上を叩いた。

「まことにお氣の毒な話だが、ねえマイヤー、御承知の通り商館は今非常に苦しいのでね。ユダヤ人會議のちくしやうが、何とも致し方がないのだ。」

彼はほゝ笑んだ、そしてウィルヘルム・マイヤーの肩を叩いた。

「私達ドイツ人は今こそあらゆる犧牲を拂はなくちやならないのだ。ねえ君、我々は貧乏な國民になつた。一切を放擲してしやにむに働くことだけが我々の祖國をも一度榮光の地位に上せることが出來るのだ、ね?」

さうだ。それをウィルヘルム・マイヤーは理解した。勞働と獻身。勿論支配人は二三日おきに違つた着物を着て來た、それから一月ほど前には新しい自動車を買ひ込んだ……どうもそこが少し分らなかつた。それにしても、祖國を愛するものはいつも、飢ゑ、凍え、しかも半分の賃銀で働く覺悟をして居なければならぬといふことはどうも理窟に合はぬ話だ。

つめたい十一月のはやての中をウィルヘルム・マイヤーはカラを立てて凍えながら火の無い自分の部屋へ急ぎ足に歩いて行つた。

二

ウィルヘルム・マイヤーがドイツ國民黨に入黨してからもう半年もたつた時分、ちやうど休憩時間のすぐ前だつたが、支配人が彼を事務室の中へ呼び込んだ。支配人はひとりではなかつた。ウィルヘルム・マイヤーが既に幾度か黨員の會合で見たことのある一人の相當年配の男が、軍人の服裝をして坐り心地のいゝ革張りの肘掛椅子に腰をかけて居た。

「この男なので。」リュプケの檀那が言つた。するとその老人の鋭い兩方の眼がウィルヘルム・マイヤーをじろつと探るやうに見詰めた。

「はゝあ。」やつとのことで彼は言つた、「友人のリュプケ氏から、あんたが我々の優秀な黨員だといふことはかねて聞いて居ります。で一つあんたを試驗して見たいといふ譯でね。一體あんたは、祖國のために命をかける勇氣がおありかな?」

「は、それは申すまでも、は……」ウィルヘルム・マイヤーが昂奮して叫んだ。

「問題は我が黨員の一人を共産黨の中へ入れようといふのだ。」その老人は續けた。「共産主義者どもがドイツに取つてどんな危險を意味するかはそれやもうあんたが正確に御存知の通りだ。」

「勿論、勿論でございます。」そしてその時その老人の男が全く非常に高貴に重々しく見えた

のでウィルヘルム・マイヤーは附け加へた、「はい。將軍閣下。」

「連中の目論見や陰謀を探り出す仕事をあんた引き受けて呉れますな？」その老人が訊きかけた。

「は、將軍、でございますがどういふ工合に仕事を始めましたらよろしいので……？」ウィルヘルム・マイヤーは少々まごついて言つた。

「あんたが共產黨にはひるのだ。」リュプケの檀那が說明した。そしてウィルヘルム・マイヤーがそれを斷りさうな素振りを見せたので、じれつたさうに彼は附け加へた、「はひらなくちやならぬのだ。どうかね、スパイの仕事をやつて貰ひたいんだがね？」

スパイ。この言葉は厭らしい響きを持つて居る。公然の戰鬪で祖國のために自分自身を擊ち、自分自身を殺すことは、若しそれが必要だといふのならば勿論異存はない、けれども信用を盜み、譃をつき、だまくらかし、自分の確信のあるところを押し隱すといふこと――それは汚はしい仕事だ。

その老人はウィルヘルム・マイヤーの腹の中を見拔いたやうに思はれた。

「君、お忘れではないだらうね、これは共產主義者どもの話なのだ、人類の汚穢の話なのだ、ユダヤ人ばらの話なのだ。かういふ奴等には良心も何も持つ必要は全然ない。」

ウィルヘルム・マイヤーはうなづいた。

「いや、仕事を引き受ける手筈はよろしいな？なに、さう一ぺんに立派な共產主義者になつたやうな顏をする必要はない、まあ段々に說服されるといふ形で行くのだね、これが、」彼はテーブルの上を指した、「例のパンフレットの類だ。讀んで見たまへ、勉强するのだ。」

「私は全く誰も共產主義者を存じませぬのですが。」ウィルヘルム・マイヤーが云つた。

「どこかの職場へはひるのだ、さうすれやそこで連中と一しよになれる。」

「でもこの頃のやうに失業者の多い時節に仕事が見つかりませうか？」

「それや君、私の方の心配さ。」リュプケの檀那が笑つた。「明日にでも君は、不熟練勞働者といふ顏でファルケン工場へ出かければいゝ、總ては私の方でちやんと引いてある。だがその鷲十字章は忘れても外して行き給へ。」

如何にも心苦しい顏つきをしてウィルヘルム・マイヤーはその高貴なシムボルの方へ手を伸ばした、そしてそれをポケットへしまひ込んだ。

「一週に一囘づつリュプケ氏に情勢報告をやつて頂きたい。」その老人が命令した、「それも夜の九時過ぎに、場所はリュプケ氏の別莊の方だ。」

「かしこまりました、將軍。」

「若し今まで働いて居たのは何處だつて訊かれた時には落ち着いてこゝの商館の名を言ひたまへ、そして社會主義を宣傳したためにおつぽり出されたんだつてね。」リュプケの檀那はさう言つて笑つた。

ウィルヘルム・マイヤーはパンフレットをテーブルから取つてお辭儀をして出て行つた。

「人のいゝデクの坊だ。」老人がつぶやいた。

「デクの坊つて奴にやあ全く持つて來いの仕事ですよ。」

「さう、だがあゝいふ單純な人間の場合には正直があだになつて幾らか危險だて、……

二人のものは聲を上げて笑つた。

巨大な工場內の勞働はウィルヘルム・マイヤーになか〳〵苦しかつた。いろ〳〵の機械のきしり聲が彼をうろ〳〵させた。鉛のやうな疲勞が彼を叩きのめした。勞働時間は彼には無限に永く思はれた。初めの數日中彼は彼がこゝに來

て居る目的をすつかり忘れてしまつて居た。ただ仕事について行くためにすべての力を緊張さして居た。彼の兩隣りに居た二人の勞働者は、彼がまごついてすつかり困つて居るのを直ぐに見つけた。彼らは出來る限り彼に手傳つて吳れた。仕事を始めてから三日目の休憩時にはウィルヘルム・マイヤーはもうすつかり疲れてしまつてとても足で立つて居られさうもなくなつた。彼は工場の前の雪の上に坐り込んでしまつた。兩手も兩足もぶる／＼震へて居た。眼の前が暗くなつて物の見分けがつかなくなつて來た。

彼の兩隣りの勞働者がやつて來た。一人は背の高い肩のひろい髮の赤い男で、も一人はすらりとして瘦せた髮の毛の黑い男だつた。

「おい。」髮の毛の赤い方が親切らしく言葉をかけた、「どうしたい？ お前この仕事にや不慣れと見えるな。」

「雪の上へ坐り込んぢや駄目ぢやねえか。」髮の毛の黑い方が言つた、「かぜを引くぜ。」

髮の毛の赤い大きい方が進み出てウィルヘルム・マイヤーを腕の下へ抱へ込んだ。そしてグイと引き起した。

「さ、うちへ歸るんだ、おい、病氣になるよ。かみさんが部屋を暖くしてるだらうぢやねえか。」

「おれや女房は無え。」ウィルヘルム・マイヤーは悲しげに答へた、「それにおれの部屋にや火の氣も無え。」

「おいらと一しよに來な。」髮の毛の赤い方が言つた。「おれん所なら臺所は幾らか暖いし、あついスープの一ぱい位なら飲まさうぢやないか。」

ウュルヘルム・マイヤーはさう言つてしやべる男の顏を見た。一體どうして人間が彼に、この見も知らぬおれにこんなに親切なのか？ 髮の毛の黑い方は自分の腕を彼の腕の下へくぐらした。

「さあ、お前もう寒くてまつ青だぜ。」

彼らはウィルヘルム・マイヤーがまだ一口も言葉を口へ出さないうちに歩き出した。

暖い臺所がどんなに彼に氣持がよかつたかとても口に言へる所ではなかつた。親切な若い女がいろ／＼世話を燒いて吳れた。小さな子供が籠の中で眠つて居た。彼らは彼を彼らの親類か何かのやうに歡待した。あついスープを彼はがつ／＼してすゝり込んだ。彼の眼は部屋の中を見まはした、そして壁にかゝつて居る二枚の繪の上に留つた。それを彼はぢいつと眺め込んだ。一つの方の下には「レーニン」といふ小字があるしも一つの方には「トロツキー」といふ小字が書いてあつた。

あやふく彼は手からフォークを取り落すところだつた。髮の毛の赤い大きい方の男ロレンツ・ウィンターが彼の眼を追ひながら言つた。「いゝ繪ぢやないかえ？」

ウィルヘルム・マイヤーは譯が分らなくなつて吃りながら呟いた、「君達や共產主義者なのか？」

「あたり前よ。」ロレンツが笑つた。

そして髮の毛の黑い方もうなづきながら訊いた、「お前どこの黨にもはひつて居ないのか？」

「はひつてねえ。」ウィルヘルム・マイヤーはさう答へてまつ赤になつた。

かうして彼は、運のいゝ偶然の機會から、共產主義者の祕密の中へまつ直ぐにはひつて行つた。彼はこゝでいろ／＼の結び目を結ぶことが出來た、いろ／＼の男と友達になつた。ふと彼はこんなことを考へ浮べた、さうとも、何時か奴らを裏切るために、おれが奴らの竈でからだを暖めるといふやうなこと、奴らのスープを啜るなどといふことはとんでもない恥しいこと

だ。けれども彼は卽座に自分自身を慰めた。だつてこれや共産主義者どもぢやないか、祖國を賣つた奴らぢやないか、下らぬごろつき共ぢやないか、これより良くしてやりやうはない。さう考へては見たがもうスープはうまくなくなつた。そして彼は匙を下に置いた。

　食事がすむと二人の男は熱心に政治論をやり始めた。ウイルヘルム・マイヤーはからだを固くして聞いて居た。自分の頭の中で考へ込みながら——奴らは何といふ譃吐きだらう、奴らの話はおれ達の黨の主張とはまるで反對だ。あんなことを奴らは本當に信じて居るのだらうか？　たつた一度だけ彼は彼らに贊成しさうになつた。フランスの資本家の話が始まつた時だつた。どんなドイツ國民黨員でも、ロレンツと髮の黑いマックスとがやつたよりももつと腹を立ててこのフランスの資本家どもを罵ることは出來なかつたらう。ウイルヘルム・マイヤーは眼を上げた、そしてこんどは彼の方から、注意をしい〳〵ではあつたが、あの「不倶戴天の仇敵」に就いて口を入れた。マックスは笑つた。

「さうだよ、おれ達プロレタリアはみんな一つの仇敵を持つてるのだ。だがそれやフランス人でもなけれやイギリス人でもない、世界中の資本家どもだ、ドイツのだつてフランスのだつて同じことだ。ドイツの資本家どもが信じるのは仇敵のお伽噺だつてことを君は信じないんだ、だが一旦儲け仕事がプロレタリアートを叩きつける段にでもなれや世界中の資本家の奴ら實にうまく共同しやがるからな。」

「だつてユダヤ人が……。」ウイルヘルム・マイヤーが叫んだ。

「それだつてユダヤ人の資本家の話さ。」ロレンツが答へた、「だがそれや奴らがユダヤ人だからぢやない、奴らが資本家だからだ。」

　今度はウイルヘルム・マイヤーが自分の方の興味から耳を傾けた、そして自分の引き受けて來た仕事のことを思ひつきさうになつた。この二人が間違つて居るといふことを二人に證明してやらう、そして説服してやらう、といふ考へが起りさうになつた。だが彼は自分の言ひたいことを言ふわけには行かなかつた。彼は用心しなければならなかつた。

「おれにや政治のことは些も分らない。」彼は言つた。だが、「君達共産主義者はユダヤ人の味方なんだらう？」

「ユダヤ人のプロレタリアの味方なんだ、キリスト教のだつて同じことだ。」

——ぢや君達は祖國を愛しないんだ。——

——祖國つてのは君は何だと思つてるんだい？——ロレンツが訊ねた、「ひとが腹が空つて行き倒れになつてる時に手前だけ食ひ醉つてるあの金持どものことかい？」

「さうぢやないよ、君。君達は知つてるぢやないか……ドイツのことを言ふんだ。」

「ドイツつてな何だい？　若し君がだな、何も氣がつかずに國境を越えたとして見給へ、その時君が外國へ來たといふことが分るだらうか？　空氣でも變るだらうか、花の匂ひが違つて來るだらうか、海や河や山が別ものになるだらうか？　誰かが君の方へやつて來る、そいつは君の知らない言葉で話しかける、そこで初めて君は君が國境を越えたことが分るんぢやないか。」

「だつて、おれ達や誰だつて生れ故郷の人間の方を、つまり自分の國の民衆の方をよけいに愛するんぢや……」

「さうだ、今度は君の方が正しい。民衆だ、ドイツだ、眞のドイツ、働きづめに働いて、物を生産してそして、腹が空つて死んで行く何百萬といふ人間なんだ。そしてそれをおれ達共産主義者は愛するんだ、それをおれ達は、救は

うといふんだ、それをおれ達や、その貧乏から、その慘めなひどい奴隷の狀態から解放しようといふんだ。フランスから解放しようつてんぢやない。」そして彼は、ウイルヘルム・マイヤーが何か口を入れようとして居るのを見つけて急いで附けたした、「斷じてない、おれ達やその上おれ達の、つまりドイツからも解放しようといふんだ、それに、君に安心させるためにもう一つ言へば、例のユダヤ系ドイツ人の資本家から解放しようといふんだ。」

「ぢや君達は、他國の民衆よりか自分の國の民衆の方をもつと愛するつてことは認めるんだね？」

「どうだかそんなことあおれは知らない。だがそんなことをするとなれば、それや他の兄弟よりかも雙生兒の兄弟の方をよけいに愛するといふやうなもんだから。」

ウイルヘルム・マイヤーは、ドイツ人といふものは殘らず雙生兒の兄弟だといふことを思ひ出した、現に彼をそんなに親切にもてなして吳れるそのロレンツが生きた證據だ、それから彼は突然、そのロレンツこそが共產主義者なのだといふことを思ひ出した、それからその他にもう一つ別なことを、つまりリイプケの檀那は彼に給料を上げることを拒絕したといふことを思ひ出した。そのことは何といつてもどうも兄弟らしいやり方ではなかつた。だがそれにしても、リニプケの檀那は眞の愛國者である、彼はその祖國を何ものにも增して愛してゐる、さういふ人にはそれ位の一寸した弱點は見逃さなくてはならない。

それはとても信じがたいやうな話ではあるが、ウイルヘルム・マイヤーは段々にこの二人の共產主義者を愛し始めるやうになつて來た。そして彼が彼らに一層あたゝかくもてなされるに從つて、自分の所屬なる黨のことを隱して置く事がます／＼六づかしく思はれて來た。こんなに正直なこれらの二人の男は、多分何かの間違ひからこんな飛んでもない共產黨なんぞに飛び込んで來たのかも知れない。誰かが彼らの眼を開けてさへやれば、眞實を語つてやりさへすれば、彼らは屹度ドイツ國民黨へ來るに相違ない。なぜと言つて、彼らもやつぱりドイツを愛して居るのだといふことを、ドイツを救はうとして居るのだといふことを――勿論彼らの間違つたやり方ではあるが――彼は益々はつきりと認めて來たのだから。けれども彼は無論默つて居なければならなかつた。それはリニプケの檀那が顏を合はせるたんびに彼に敎へて吳れて居る所であつた。

冬になつてウイルヘルム・マイヤーは激しい流行性感冒におかされた。マックスはその熱病やみを寒い屋根裏部屋から彼らの家へ連れ出して來た。そして彼自身のベッドへねかしてやつた。晝の休み每に彼は息せき切つて馳け戾つて來た、病人が何か欲しいものがあつたり、して貰ひたいことがあつたりしないか見るために。その貧乏な部屋は氣持がよくさつぱりとして居る。壁ぎはには本がぎつしり詰つた脊の高い書棚が立つて居た。そしてウイルヘルム・マイヤーは、よく夜おそくまで書物に讀みふけつて居る髮の毛の黑い靑年の勉强家なのに驚嘆して居た。段々に彼はいろ／＼の肖像を見覺えて來た。間もなく彼に取つて、レーニンとトロツキー、リープクネヒトとローザ・ルクセンブルグが親切な昔からの知り合のやうに思はれて來た。ある日彼がまだ床を上げることが出來ないうちのことだつたが、澤山の書物の間から彼がローザ・ルクセンブルグの手紙を見つけ出した。彼はそれを讀み始めた、すると忽ち彼はまごついて來た。これらの手紙を書いた婦人が、

ドイツ國民黨の連中が主張するやうな罪の深いあばずれであるといふやうなことは有り得べからざることであつた。何か物事に關して譃を敎へるといふのは、たゞに共產主義者ばかりでなく、彼の方の、つまりウィルヘルム・マイヤーの黨員達も同じことをするらしく考へられた。それならば人は彼らに善いことを敎へてやるべきではないか、なぜと言つて、自分自身を護ることの出來ない正直なドイツ人を小つぴどく惡く言ふことはよくないことなのだから。

ある晩マックスは一枚の新聞をひろげて居た、それは珍らしく見たこともない活字で印刷してあつた。ウィルヘルム・マイヤーは臆病らしくそれを橫眼で眺めて居たがやがて思ひ切つて訊いて見た、「それやロシヤ語かい？」

「うゝん、ヘブライ語さ。」

―君やヘブライ語が讀めるのか？―

―極つてらあな、おれやこれでもユダヤ人なんだ。―

ウィルヘルム・マイヤーは頭をがつんとぶつ叩かれたやうな思ひがした。彼はその男――十日もの前から淚のこぼれるやうな注意と親切とで彼の看病をして吳れた、そしてそのあるかなしの賃銀の大部分を彼に滋養になる食物を食はせるために割いて吳れたその男――の顏をぢいつと見つめた。「君がユダヤ人だ？」彼は吃つた。そして相手がそれにうなづいて見せると彼は矢にはに自分の頭を抱へ込んでしまつた。互に入り亂れもつれ合つた考へが彼の頭蓋の中をはね廻るやうに思はれたからであつた。

その次リュプケの檀那に會つた時――ウィルヘルム・マイヤーはその時氣がついたのだが、支配人は彼の病氣に對して何の同情も寄せて吳れなかつた――彼は思ひ切つて言つて見た。―御存知でせうか、支配人さん、この頃私はいろいろと考へて見ましたのですが、結局分つた所を申しますと、つまりその、ユダヤ人にもユダヤ人があるといふやうなわけで……」

次の五分間といふものウィルヘルム・マイヤーは自分が練兵場に居るのだと考へた。支配人は彼にまるで新兵に言ふやうに怒鳴り散らした。彼をドイツ魂の裏切り者だと罵つて最後に説明した。

「君は考へることなぞは何も入りやせん、私の命令を遂行しさへすれやいゝんだ。君みたいな無敎養な人間が一體物を考へこむなんてことがあつてたまるか！　分つたね？」

ウィルヘルム・マイヤーは水をぶつかけられた仔犬みたいにつゝ立つて居た。これが一體ドイツ人がその兄弟に物を言ひ付ける言ひ付け方だらうか？　おまけに彼は今一ぺんに無敎養な人間になつてしまつたのだ。自分にはどうも働きがないといつて彼が心配した時にあの支配人が一度ならず自分で、「君、ウィルヘルム・マイヤー、君はちやんとその通り賢い人間ぢやないか。」と言つた彼が。

そして彼は物を考へることも許されないのだ。突然彼は壁にはルーデンドルフとヒンデンブルグの肖像が懸り、黑――白――赤の旗と鷲十字章の旗で飾つてあるこの神聖な部屋の中で、いつかロレンツが口にした言葉を思ひ出した。

―資本家の奴らは民衆を馬鹿にするためにならどんなことだつてやるんだ、一から十までみんなそれが目的なんだ、新聞も敎會もキネマも芝居もみんな。一體プロレタリアが物を考へ始めたら資本家にどんなに危いかつてことは、君にだつてはつきり分らうぢやないか。」

その時はウィルヘルム・マイヤーは腹を立てた、といふのは、丁度その時彼が美しいフィルム「フリデリックス・レクス」を見て非常に興奮して歸つて來たところだつたから（支配人が

彼に入場券を呉れたのだつた)。だが今からなつて見ると、彼の心の中には例の恐ろしい考へが浮んで來さうであつた、「どうもロレンツの方が本當らしいわい。」だが勿論彼は忽ちふるへ上つた。彼が共産主義者のやうな考へ方をするやうになつたのだらうか。彼が、ウイルヘルム・マイヤーが、ドイツ國民黨の最も熱心な一員である彼が！

二月になつてからウイルヘルム・マイヤーは共産黨へ出入出來るやうになつた。そして今や彼は不思議な經驗を得た。彼はこゝの人間達の方は、彼の本當ノ黨よりも、あの口の八釜しい若い學生達よりも、そして彼に話しかける時にはいつも何處かわざとらしい愛想のよさで話すあの偉大な大人達よりも遙かに近い關係があるもののやうに思はれて來たのである。なる程こゝで、こゝの連中の間ではどうかすると物事のやり方が荒つぽかつた。彼の仲間達が彼を一度ならず馬鹿だといつたことがある。だがそれでもウイルヘルム・マイヤーは、それが惡意あつてしたことだとはどうしても感じられなかつた。そこで彼らはみんな一所になつてゐた、そして全く兄弟同樣であつた。彼はどんな仕事でもおいそれと言つてやる用意を て居る最も熱心な一員となつた。ある日同志達が言ひ出した。

「ウイルヘルムはなか／＼しつかりして來た。ウイルヘルムを入れようぢやないか。」

彼は熱心にビラ貼りをやつた。そして時として彼は、さうしたビラの上に書いてある事が眞理なのだといふ考へに捉まることがあつた。時には彼が自分の任務をすつかり忘れ切つてしまふ瞬間があつた。彼は正直な昂揚した氣持で黨の仕事をした。そしてそのあとでふいに、彼が今して居るのは敵の間にだといふこと、そしてこれらの人間に對しては彼は戰ひ探り出さねばならないのだといふことを――それは祖國のためにだ――思ひ出すのであつた。そしてその時彼は彼等の間に、彼自身に劣らずドイツを愛して居る同志達――勿論別のドイツをでありそして別のやり方ではあるが――を見つけ出した。今まであんな單純に考へられて來たこの人生といふものが、今は彼に全く複雜なものに見えて來た。今になつては彼も自分の方が正しいのだとはもう考へることが出來なくなつた。勞働をする人間だつて普通に生きて行かなくてはならない要求は元々、決して間違つたものではない。同じくまた怠け者がパンに對する權利を持つて居ないといふことも本當の話ではないか。そんならば共産主義者といふものは一體何を欲しいのだらう？ いつかこの質問を彼が自分に訊ねて見たことがあつたが、これには彼自身全く驚いた話だけれど自分で自分に答へてしまつたのだ、「正義がほしいのだ。」彼らもやはり一つの自由なドイツを欲して居る、解放されたプロレタリアートのドイツを欲して居る、この考へに對しては彼はたゞ贊成することが出來るだけであつた。矛盾が彼をいぢめつけた、夜は恐ろしい夢が彼を苦しめた。彼がドイツ國民黨の黨員と一しよに外を歩いて居た。行列の前に立つて鷲十字の旗が進んで行つた。音樂はエールハルト、リードを奏して居た。そして彼自身も一しよに唱つて居た。その時街の隅の所を、赤旗を風になびかして共産主義者が進んで居た、「おや、おれ達はあの武器を持つて居ない共産主義者達に鐵砲をうつのだな。」と、彼は夢の中で考へた。そして彼はあのロレンツが彼の妻と並んで先頭を切つて進んで來るのを見た。ロレンツの妻にあの小さな子供を抱き上げてゐた、そしてそのずつと後ろの方にはマックスやその外彼の好きな仲間のものが續いて居

た。彼らに呼びかけたかつた、「用心しろ。おれ達や君達を射たうとしてるんだ！」だが彼の咽喉からは一つも聲が出なかつた。そしてそのとたんに彼の方の陣のものが發射した。そして彼はあの小さな子供がまつ先に殺されたのを見た。その時彼はぐるりと向き直つた。そして憤怒と絶望とで、旗の柄を振りかざしながらめくら滅法に彼の味方のたゞ中へ撲り込んだ。汗でびつしよりになつて彼は眼が覺めた。そして長い間も一度寢入ることが出來なかつた。

ある日黨員の集會の席で、どこかの外國訛りのある一人の小さな老人が話をした。仲間たちは彼をアレックスと呼んで居た、そして彼の出席を非常に喜んで居るやうに見えた。ウイルヘルム・マイヤーはロレンツにあの男は誰だといつて訊いて見た。

「ロシアの同志だ。もう十五年もシベリヤへ流されて居たんだ。ほら、あの左の手を見給へ、まだ深い窪みがあるだらう。カセに嚙まれたんだよ。」

「あれはしかし勞働者ぢやないんだらう？」

「勞働者ぢやない。敎授だ。」

「へえ、それで居てプロレタリアートのために戰ふのかい？」ウイルヘルム・マイヤーは驚いて居た。

「勿論さ。最初は社會民衆黨さ、それから黨の分裂後はボリシエヴィキーだ。今はモスクワで非常に重大な位置について居る。」

「だけどあれやキリスト教徒だらうな？」

「さうだ。なぜだい？」

ウイルヘルム・マイヤーはまごついた。「おれやその、たゞ一寸さう思つたんで……その……非常に重要な位置についてるつてんだから。」

ロレンツは笑つた。「リ　イコフの位置は重大なものでないとでも言ふのかい？」

「だつてリュイコフはユダヤ人ぢやないか！」

「馬鹿な！　リュイコフは百姓の息子さ。」

「百姓の!?」ウイルヘルム・マイヤーは大きく眼を剝いた。「ぢや大百姓の息子だな？」

「うゝん、水飮百姓のさ……おゝまた話し始めたぞ。」

ウイルヘルム・マイヤーは演說の方はよくも聽いて居なかつた。彼は自分の考へごとで一ぱいになつて居た。水飮百姓の息子！　彼は彼自身の父親のことを考へた。大百姓の前で、市長さんの前で、お寺の坊さんの前で、村會議員の前で、しじうぺこ〱して居なければならなかつた父親の苦勞の絶間のなかつた一生を考へて見た。しかもあのロシヤでは……リュプケの檀那が口癖のやうに言つて居た言葉を彼は思ひ出した、「勤勉なものにすべての道を拓け！」だが彼の父親が、そして彼自身が、どんなに勤勉であつたとしても、それでも百姓の息子のリュイコフがロシヤで到達したやうなものにはとても到達しなかつたらう。ドイツでは金持にだけ道が拓かれてある。勞働者の國では反對に働くものに拓かれてある。親父の悲しげな顏が彼の眼の前に浮んだ。若しかしたら彼らは、あんなにも地面に執着して、その一生を飽きることもなく働きづめに働いて來た哀れな老人が、冷酷な厭な都會を駈けずり廻らなくともいゝやうに取り計つて呉れたかも知れないのだ、このリュイコフが、水飮百姓の息子が、その百姓の兄弟の世話をして呉れたかも知れないのだ。彼はその老人の切なげな眼の中を見分けられるやうな氣がした。そして何ものかが彼の心の中でさゝやいた、「安心しな、年取つた勞働者も老いぼれた百姓も、ロシヤぢアもう肥溜ん中へはふり込まれなくてもいゝんだよ、父つあん、そのうちにや、おれ達のドイツもそんな風になる日が來るだらうて。」

集會がソヴィエット。ロシヤの萬歲をあげた

時、ウイルヘルム・マイヤーは、全身の力をしぼり最もしつかりとした確信を以て一しよに大聲に萬歳を叫んだ。

三

リュプケの檀那は彼のスパイに不滿足であつた。ウイルヘルム・マイヤーは重要な報告を一つも持つて來なかつたのだ。彼が共產主義者どもから探り出して來たことは要するに彼らの新聞に出てゐる通りだと云ふのであつた。

「君や恐ろしいんだね、え?」支配人が嘲笑した。

ウイルヘルム・マイヤーは腹を立てた。

「私が臆病ものでないことは戰爭で十分分つてるぢやありませんか。」私は一に力を入れてウイルヘルム・マイヤーは言つた。彼の記憶の中に塹壕の光景が現れて來た。榴霰彈が唸りながら空中を飛んで居た。中隊長は塹壕の一番奧にしやがみ込んで兵卒に怒鳴りつけた。

「飛び出せ、臆病者ッ!」

だが一人の兵卒が怒鳴り返した、「手前が飛び出しやがれこの蟇口野郎!」

元より中隊長は祖國に對する愛など洌に示しもどうもしはしなかつた。

「とに角我々の會合へ出て來るんだね、マイヤー。一つ國民的感情を更新させる必要があるよ。」リュプケの檀那が命令した、「あさつての晩の八時だ。」

「かしこまりました。」

リュプケの檀那の見た所で言へば、會合は目的通りに行かなかつた。ウイルヘルム・マイヤーは見知らぬ人々の間へまぎれ込んだ新兵のやうな風に見えて居た。膨れつ面の馬鹿げた大學生どもの顏が彼をむしやくしやさせたのだ。一度ならず彼は報告者の言葉を聞きながら考へた、「馬鹿にしやあがらあ、あんなことは譃つぱちさ!」

そしてふいに何ものかが彼の胸に浮び上つた、今までかつて彼に氣のつかなかつたものが。こゝに集つてゐる愛國者どもが、彼らの兄弟の一部に對して抱いてゐる、つまりプロレタリアートに對して抱いてゐる兇逞な憎惡がそれだつた。

ウイルヘルム・マイヤーはひとり隅つこに引つ込んで考へ込んだ。

「こいつらがなんぼドイツ〳〵と言つて見た所がそれや俺のドイツたあ別ものだ。奴らが祖國祖國と言ふのは、そこで奴らが他人を搾つて手前の懷を勝手にふくらませる國のことなんだ、奴らが主人面をしやがつて、民衆を搾取して奴隸にして置ける國のことなんだ。そんなもなあ愛國者でもクソでもねえ。愛國者つてえのは、自分の國へ自由と正義とを持つて來ようと言ふ人達のことだ。頭に立つてゐる二人か三人の金持のことぢやねえ、十人か十五人の亂暴な馬鹿大學生のことぢやねえ、そんなもなドイツでも何でもねえ、大衆がドイツなんだ、プロレタリアートが。」

そして今度はもうウイルヘルム・マイヤーは自分の考へに震へなかつた。

リュプケの檀那が發言權を求めて次のやうな報告を始めた。

「ある確かなる筋より聞きつけたところによりますと、共產主義者どもは明晩一つの祕密會合をたくらんで居るのであります。今やドイツの國民的結束を攪亂するこの青二歲どもに、一擊を喰はすべき絕好の機會が到來したものと考へます。私は、十分に武裝せる四百人の一隊を以て、恐らく大して多數の出席を見まいと豫測されるこの祕密會合を一擧に襲擊せんことを提案するものであります。」

大學生どもが夢中になつて喝采した。

「奴らを徹底的に叩きつけなくちやならん、あの豚助どもを、あの呪はれたプロレタリアの奴らを！」

「寛大な處置は一切無用だ！」

「ユダヤ人同盟を撲滅しろ！」

ウイルヘルム・マイヤーの全身が震へて來た。昨日、支配人が一時間も彼に説教したあとで、この秘密會議の話を彼が支配人に洩らしたのであつた。その時はたゞかう考へて、「言つたつて言はなくつたつて違やすめえ。ガミ／＼のお説教から放免されれやいゝんだ。」

ところで今や彼は彼の仲間を裏切つたのである。然り、彼の仲間をだ。何となれば彼は今明かに知つたのである。彼が彼らに屬して居ることを、そしてこゝに集つてゐる奴らに屬してるのでないことを。彼は仲間を裏切つた、仲間達は襲撃されるだらう、背後から殺されるだらう、彼のお蔭で。

どうしたらいゝか？ ロレンツの所へ行つて一切合切白狀するか？ 駄目だ、とても出來ない。彼はそんなことを自分の口で言へる筈がない、仲間達も彼の言ふことを信用しないに違ひない、いろ／＼今までのイキサツを話してでなければ、幾ら彼が襲撃計畫の一件を話して見たところで。

彼は兩手で頭をかゝへた、絶望して溜息を吐き唸つた、――いつか彼がリュプケの檀那の所で逢つた老人が彼の樣子をぢつと見守つて居ることを少しも知らずに。

老人はリュプケの檀那に合圖をした、そして二人で隅の方に隱れた。

「例の正直なデクの坊ぢやがね、どうもをかしいて。」彼は切り出した、「あれを見て見給へ、あゝして坐り込んでる所はとんと例の惡い良心といふ奴が人間になつたとでも言ふやうぢやないかね？」

「閣下、あの男に限つては御心配は全然御無用ですよ、なに、私はそれの大丈夫な證據のためなら燒火箸を握つてもようございます。」

老人は馬鹿にしたやうにニヤリと笑つた。

「私なぞは誰のためにも、燒火箸なんぞ決して握りやせん。ところで今問題なのは、あの男が馬鹿よりももつと正直か、正直よりももつと馬鹿かといふことなのぢや。」

「私が、閣下、間違つとりました。」

老人はわる賢く續けた、「喃、かういふ馬鹿ものどもは、あれらの同胞に反抗しながらわし達を護つて呉れるわけなのぢやが、それにはそれ、かういふ連中を馬鹿者にしとくか眼つぶしを呉れとくかしなくちや……あれ等でも考へ込むことがあるから喃。」

話は意味ありげな眼配せで打ち切られた。

「萬事よろしうございます。閣下、」

「結構、結構！ なにこの方があれを二三日ぢたばたさせずに置くには却つて好都合ぢやて。どうぢやらうか、かへり道で一つ喰はしては？」

「は、でございますが閣下、私としてはあれを今少し手許に置いときたいと考へますのですが。あれでまだ中々使ひ道があるのでして……實はその、あの危險の伴はない別のプランがありますので……」

二人はコソ／＼聲で話し始めた。

老人が合槌を打ちながら笑ひ出した、「いや、妙案ぢや。よからう。」

會合が終るとリュプケの檀那がウイルヘルム・マイヤーの所へやつて來た。

「マイヤー君、大分晩いやうだが私の家の方へ來て貰へまいかね。一寸その君に見せたいものがあるのでね。歸りは自動車で送らせるさ。」

なる程話の調子だけは昔どほり慣々しいものだつた、だが、ウイルヘルム・マイヤーには

何處かいまはしいものが感じられた、と言つて彼にどうすることが出來よう？ ヘドモドして見てもそれを斷る理由が咄嗟には見つからなかつた……。

五分後自動車は、リユプケの檀那の屋敷を取り巻いてゐる華麗な庭の中へ曲り込んだ。

リユプケの檀那はウイルヘルム・マイヤーを一番上の部屋へ連れて行つた。「こゝは誰も棲んでないのでね。」

彼らはひやりとする屋根部屋にはひつた。

「ちよいとこゝで待つてて呉れ給へ、直ぐ來るから。」

リユプケの檀那は扉を閉める時大きなクシヤミが出さうな顏をした、全く大きなクシヤミだつた、そのためウイルヘルム・マイヤーにはリユプケの檀那が階段を降りて行つたのが聞えなかつた。

ウイルヘルム・マイヤーは部屋にたつた一脚きりある椅子に腰かけて待つてゐた。五分が過ぎ十分が過ぎた。リユプケの檀那は現れなかつた。彼は思ひ惱み自分で責めさいなまされた、だが彼は非常にくたびれてゐた、彼の頭は彼の胸の方へ垂れ、そして彼の目は自づと閉ぢられた。

ふいに彼は眼を覺した。驚いてあたりを見廻した。最初は自分が何處に居るのか分らなかつた。それからやつと思ひ出した。リイプケの檀那が卓子の上に置いて行つた蠟燭は殆んど燃え盡きてゐた。何時間一體眠つたらう？ 支配人は何處に居るのだらう？

蠟燭の最後の燃え上りの中でウイルヘルム・マイヤーは彼の時計を眺めた。二時だ！ 一體どうしたと言ふのだ！ リユプケが彼のことを忘れたなんてことがまさかあり得ようか？ 彼は扉の方へ踏み出した、そして靜かにカケガネをさぐつた。彼は力を込めてそれを廻した。駄目だ。彼はガチヤつかせゆすぶつた。何にもならぬ。彼は監禁されたのだ！

監禁！ しかもこんな時に！ 彼らは彼について何か氣取つたに違ひない。そして彼が同志に警告を與へることを恐れたのだ。ところで彼らは彼をどうするのだらう？ 殺すだらうか？ 殺すとは思はれぬ。殺すなら眞夜中にもうやつてる筈だ。襲撃が終るまで監禁して置かうと言ふのだらうか。支配人の言葉が彼に思ひ出された、「十分に武裝せる四百人の一隊……」それが何を意味するかを彼は知つた。尊敬すべきこの愛國者達が突然賤劣ないまはしい人殺しに見えて來た。彼らが憎くなつた、以前フランス人とユダヤ人と共産主義者とを憎んだ程、はげしくそして酷烈に。奴らこそ本當の敵なのだ、一切が彼らに取つてプロレタリアートを叩きつぶすための武器なのだ。譃、僞瞞、新聞、その後ろに彼らが居る所の政府、ピストル、機關銃、そしてちやうど彼のやうな貧乏人で人を信用し勝ちな祖國を愛する馬鹿者ども、それを奴らは愛國的な譃つぱちで吊つて奴らの賤劣な目的のために使ひこなさうとするのだ。彼は拳骨を握りかためた、ドキ／＼と脈が打つて來た、彼の全身が燃えて來た。

若し逃げ出すことが出來たら。明日は彼の仲間達が、彼がやられたと同じやうにやられるのだ。朝になつたら……いや、もう今日だ。どうするか？ どうすることが出來るか？

頭がメチヤ／＼になつて彼は部屋の中を歩きまはつた。朝は窓の隙間から白みそめた。青白いつめたい光が射して來た。それが十分明くなつた時彼は窓の所へ行つて外を見下した。家は三階建でかなり高かつた。窓の前に雨樋が立つてゐて下は芝生だ。暗くなつたら雨樋を傳つて下りよう、さう彼は決心した。その考へは彼に眼の眩む思ひをさした だがやらなくてはな

らぬ。七時半には十分暗くなるだらう。仲間達の居る街へは三十分で行ける。

實に無限にゆつくりと時間が過ぎた。彼の時計は止つてゐた、捲くのを忘れたのだ。午ごろになつて彼は疲勞のためとろ〳〵と眠りに落ちた。例の厭な夢がまた彼を苦しめた。大學生どもが、武器を持たない婦人と子供とを襲撃する、そして彼はぎり〳〵巻きに縛られて、足一つ動かせない。夢の中で彼は、彼が捕虜になつて居た時分あんなに屢々夢に見たドイツを覗き込んだ。それは美しい國で大きな都會と河と海がある、だが全ドイツを取り卷いて恐ろしい鎖が捲きついて居る。鎖は、ます〳〵狹くます〳〵締められて行く。支配人と例の老人とがそれを握つて齒嚙みをしながら締め上げようとして居る。慄へ上つて彼は眼を覺した。

最初の夕かげが窓から落ちて來た。頭がづきんづきん痛んだ、彼は昨日の午から何一つ食べて居なかつた、からだに力の無いのを自分で感じた。だがもうとろりとも睡つてはならぬ。彼は幾度も幾度も部屋の中を歩き廻つた、そして歩數を數へた。考へがゴチャ〳〵して來た、たつた一つのことだけがはつ切りして居た、「おれは共産主義者にちやんと間に合ふやうに知らせなくちやならぬ。」

とう〳〵暗くなつて來た。ウイルヘルム・マイヤーは齒を食ひしばつて狹い窓をやつと脫け出した。彼は雨樋に捲きついた。ずつと下の方に固い地面が見えた。彼のからだを戰慄が走つた。額に冷たい汗が浮いた。外すな、落つこちるな、落つこちたら最後知らせることは出來ないぞ、彼は自分に勇氣づけた。彼は眼をつぶつて雨樋を滑つた。

意外にも彼は柔かい芝生の上にとゞいた。彼の膝がガク〳〵慄へた、そのため彼は暫く腰を下さねばならなかつた。そこで出口は何處か? 右の方のあすこに違ひない。爪先立ちで彼は、繁みと樹立の蔭を門の方へ忍び寄つた。門は閉ぢられて居る。乘り越すか? だが彼は門の外に立つて居る街燈のことを考へた。そのキラキラする光が通行人に彼の姿を照して見せるに違ひない。かうなれや塀を越すまでだ。塀は高くて針のついた針金が張つてあつた。かまふもんか。その時遠い所で教會の時計が七時半を打つた。彼の心臟が縮んだ。一分も亡くなしてはならぬ。

非常な努力で彼は塀を乘り越えた、針が彼の左股にさゝつて深い傷を引いた。彼はそれに氣附かなかつた。血が下の方へ流れ落ちた。傷がづき〳〵痛んで來た。彼は馳け出した。その郊外の道でこの馳けて行く男に出逢つたものは一人もなかつた。

血が頭の中をぐる〳〵廻りした、胸が苦しくなつて息切れがして來た、足の傷が火のやうに燃えて來た。彼は走りそして走つた。一體道はどこまで續いてるのだ? ところで踏切へかゝらねばならぬ、彼の眼にさつきからその柵が映つてゐたのだ。畜生! 動いて居る。汽車! また何分かの損だ。踏切柵の前で彼は立ち止つた。列車はまつ黑い怪物のやうに、一臺また一臺と踊りながら通過した。ウイルヘルム・マイヤーの齒がガチ〳〵嚙み合つた。彼はすゝり泣き始めた、子供のやうに。汽車に怒鳴りつけた、「速く、もつと、もつとだ!」

やつとのことで柵が上つた。彼は線路を飛び越しながらよろめいた、彼は倒れた、膝をすり剝いて血が出て來た。もう彼は何も考へられなくなつた。たゞ何かが彼に力を與へた。何かが彼を前進さした。彼の足は跛を引きながら正しい道を進んで行つた。

とう〳〵彼は賑かな通りへ出た、だがもう馳

けることが出來なかつた。彼は番小屋を通り過ぎた。怖る／＼時計をのぞいた。八時！

あと五分だ。だがとても足が上げられない。彼の胸から息が、ゴロ／＼言ひながら笛のやうに鳴りながら洩れて來た。

彼は一本の細い道を曲り込んだ。その端に集會の場所があるのだ。まだ家數が二十軒はある・・・。

その時彼は、その通りの反對の方角にあのいまいましい大學生どもを見つけた、昨日の會合でリュプケの檀那が彼のプランを發表した時一番大騷ぎをして喝采した連中だ。その後ろに外の大學生どもがついて居る。來やがつたな！

ウイルヘルム・マイヤーはぴつたりと壁にへばり着いて横這ひに這つた。見つけられたが最後一切が亡はれる。奴等は、きつと彼のことをもう知つてゐ警戒してるに相違ない。

とう／＼その家に辿り着いた。戸口はしまつて居る。彼は叩いた、一度、二度。駄目だ。彼は二階を見上げた、會合がある筈の。窓が一つだけ開いて居る。

三軒目の所で大學生ども　立ち止つた。待つて居るらしい、

ウュルヘルム・マイヤーは何も分らなくなつた。もはや自分の危險について考へなかつた。彼は力一ぱいに怒鳴つた。「おゝいツ！」

一つの頭が窓のところに現れた。ウイルヘルム・マイヤーにそれが地區委員であることが分つた。

「おゝい！」彼はしやつくりしながら叫んだ、「襲撃だぞ、今夜、ドイツ國民黨だ・・・四百人・・・武裝して・・・。」

聲がと切れた。

とたんに部屋であかりが消えた。

銃丸が空氣をつんざいた。第二彈が續いた。

ウイルヘルム・マイヤーは喘ぎながら崩れた。もう一度彼は暗くなつた窓を見上げた、さうして眼をつぶつた。

まつくらな露路を四つの人――が疾走した、カラを立て帽子を額の上に引き下げて。

（ヘルミニア・ツーア・ミューレン）

年譜

一九〇二年

一月二十五日福井縣坂井郡高椋村一本田十三番地に生れる。次男。上は兄一人で歳が十ちがひ、それで一生に一ぺんしか喧嘩しなかつた。父が一時煙草專賣局の小役人をしてゐたので秦野町にゐたことがある。小學校に通ふため村にかへり、祖父母の膝もとで育てられた。小學校は高椋西尋常小學校。畫をかくことが好きだつた。

一九一四年

四月福井中學校に入學。SS、KN、MH、SK、NY、KU等の友達が出來、SSとは特に親しくした。幾何學と畫をかくことが好き。一級上に大島英夫、一級か二級か下に打方新之丞がゐたが知りあはなかつた。

一九一九年

この夏兄がウラジオで病死した。

九月金澤の高等學校に入學。酒をのんだり散歩をしたりして二度落第した。その間に茂吉を愛讀し、茂吉ばりの短歌をかいたが、のち詩を書くやうになつた。『路傍の人々』とかいふのが處女作。卒業近くなつてそのころ金澤に來てゐた室生犀星を知つた。

一九二四年

四月東京帝國大學に入學。はじめ「裸像」の同人となつて詩をかき、後に「驢馬」の同人となつて詩をかいた。「驢馬」は室生犀星のところに來てゐた堀辰夫、窪川鶴次郎、平木二六、西澤隆二、宮木喜久雄、中野重治等の詩の同人雜誌だつた。

卒業の前年ころ林房雄らを知り、新人會にはひつてマルクス主義のイロハを習ひはじめた。

一九二七年

三月に大學を卒業。

五月ごろ『レーニンのゴリキーへの手紙』を飜譯出版。

日本プロレタリア藝術聯盟が日本プロレタリア藝術聯盟と勞農藝術家聯盟とに分裂したとき前者に屬し、その機關誌「プロレタリア藝術」の編輯に參加し、『少年』、『交番前』、『歡迎會』などのごく小さな短篇小說を書いてみた。

一九二八年

三月ナップの結成と同時にそれに所屬。「戰旗」の編輯に參加。

この年は主として藏原と論戰して終つた。自分でも力を入れ、藏原に何度も叩きかへされ、非常にためになつた。

なほ「戰旗」八月號に『春さきの風』を發表、十二月ナップの組織がへでその作家同盟に所屬。

一九二九年

「戰旗」三月號に『鐵の話その一』を、同じく四月號に『我々は前進しよう』を發表。

四月佐藤武夫に死別。

九月「藝術に關する走り書的覺え書」を藏原の『藝術と無產階級』と一しよに出版。同じ裝幀にするから考案せよと彼が言ふので自分が裝幀した。

一九三〇年

三月の末か四月のはじめ頃、西澤と窪川とが

自分を呼びつけて原と結婚せよといふので、考へてみて結婚することとし、四月十六日に結婚した。

五月十六日東京驛出發、小林多喜二、片岡鐵兵、江口渙、貴司山治、大宅壯一らと一しよに「戰旗防衞三千圓寄金募集」のための講演に關西へ行く。

五月二十四日から十二月二十六日までルス。その間に『鐵の話』『夜明け前のさよなら』が出版された。『夜明け前のさよなら』は友人達の編輯してくれたもの、出版所の(編輯者のではない)手落ちのため插入されるべき高村光太郎のロダンに關する文章がぬけてゐる。

一九三一年

一月二十五日、誕生日で小豆飯を食ひ、貴司から手紙が來たのでこの年譜を書く。

同志愛

舞踏會事件

チタの烙印

借家人組合ニュース

貞淑な細君

貴司山治

同志愛

反幹部派祕密會議

一夏の暑さにやけたゞれたやうな、疲れた顔色の男たちが、十人ばかり、大川のみえる家の、狹い二階の部屋に集つてゐた。

この暑いのに、障子をしめ切つて、皆思ひ思ひに、足をなげ出し、腕をくみ、壁にもたれてゐる。その中から、突然、

「委員長！」

と、この一座でたつた一人背廣を着てゐる脊の高い中年の男に向つて、子供の如く、大きな手をあげ、

「結局、婦人部長を動かしうるや否やといふ具體的な結論に問題を局限して、討議を續行すべきだと思ひます。」

と一人の眼の丸い男が、早口にしやべつた。

「異議なし。」

といふ物倦さうな聲が、二三人の口から出た。

「僕もさう思ふ。ではこゝで十分間休憩するから、その間に具體案を考へてくれ給へ。」

脊の高い背廣服がかういつておいて、

「小便して來ます。」

と立ち上つた。のそ／＼と階段を下りて行つた。

あとでは皆が、猫のやうに體を崩してねそべつた。

「だれか女史に可愛がられさうな奴はゐねえかな。」

とナッパ服の顔の平つたいにこ／＼した男がかういつたので、皆げら／＼笑ひ出した。

「さうだ。戀愛交渉を以て婦人部長を乘つとるのが一番早いや！」

「異議なし。」

「いや、おれはあの人は今に左翼化すと思ふんだがな。九月の社會問題研究にのつてゐる河下さんの『小兒病を克服せよ』を「手品師河下博士の狡猾なるすりかへ」だ、とおれに大分話したよ。意識ははつきりしてゐると思ふ。」

「意識的左翼主義者か？……そんなもんなら女學生にだつていくらもあらあ！」

と、髪の毛のまッ赤な若い男が吠え立てた。かれは二三日前に留置場から出て來たばかりなのだ。警察の監房の中でかれの頭髮は營養を失つて赤くなつたのである。

「第一それぢや十月末の總會に間にあはないや。問題は具體的だぞ。」

と胸に毛の生えた半裸體の男がどなつた。

「だから、少しをかしいが、個人的に、だれかおれたちの仲間の者が婦人部長を物にするより外に效果的な具體案はないやうだぜ。」

さういつたのはナッパ服である。

「第一案贊成だ！」

と二三人の男が同時にいつた。そして笑ひ出した。あとはがや／＼となつた。

この二階の部屋はやつと六疊の一間きりである。そこに十人もゐるのだから、ぎつしりになつてゐる。疊のまん中には、灰皿が吸殼に埋もれてゐる。隣りに面した東側の窓はわざ／＼雨戸がしまつてをり、大川のみえる南窓は丁寧に障子をしめてあるから風らしいものは少しもはひらない。

九月の午後の殘暑はこのむん／＼した部屋にこもつて、だれの顔にも脂汗がにじんでゐる。

「えゝい糞！　へんな話になつちやつたぢやねえか！　え、おい！」
　とメガネをかけた男がおきて坐つた。
　そこへ、小便に下りた「委員長」がかへつて來た。皆おき上つた。
「ね、委員長、具體案として、つまり、その……一寸へんですが、婦人部長を、われ〳〵の內のだれかが、個人的に……」
　と眼の丸い男が口籠つて、笑つた。
「會議を續けます！　婦人部長をどうするつて？」
　委員長はその方をふり返つた。
　皆がげら〳〵笑ひ出した。
「委員長！」
　と別の方角からいがぐり頭の元氣さうなのが、
「今皆がさういふんですがね、つまり正當の方法を以てしてはわれ〳〵が所定の目的を達することはむづかしい。故に變則ではあるが女工部のイニシアチーヴを握る婦人部長に對して、個人的に、われ〳〵の仲間の誰れかが、働きかけて行つて、といつても普通の意味ではなく……それは、つまり、その……戀愛關係を持つことに成功して、その關係を利用して、かの女を反幹部派に引き入れる……甚だ苦肉の策だが、六、七、八月と、たえまない日常鬪爭を以て働きかけ可能なる限りの働きをつくしてしまつてゐる今では、そんな方法をでも利用するより外に具體案がみつからない、とかういふんですがね。」
　脊丈のずんぐりと高い、落ちついた顏つきの委員長は、うなづきながら、ちよいとネクタイをいぢくつた。
　それから、一同を見渡して、
「その外に具體案はありませんか？」
　だれも發言するものがなかつた。
「では今の第一案に對して僕がまづ考へをのべます。これは、恐らくわれ〳〵の戰術として取上ぐべき方向でない。すべての戰略や戰術は大衆的基礎において行はれなければならない。だから、これはこゝでは、即ち「委員會」では早速撤廢されなければならない性質のものだと思ふ。」
「委員長！」
「はい！」
「外に絕對に可能なる方法がない場合でも、撤廢すべきでせうか。」
「さうです。『委員會』はジノヴィエフの僞手紙を種に勞働黨內閣を倒した英國保守黨の遣口を考案する場所ではないからです。今の案は現實に何等かの可能性がある場合でも「委員會」には附議すべき事柄でなく、四疊半式ブルジョア政治のテクニックとして斷然排斥すべきだと思ふ。」
「成程。」
　と叫んだ男があつた。
「いや、委員長は公式主義だぞ！」
　と別の男が呶鳴つた。
「委員長！」
　いがぐり頭の男が勢ひよく手をあげた。
「はい！」
「ぢや、又暫く休憩して下さい。そして個人的雜談の時間を與へて下さい。それならこの問題を話してもいゝでせう。何れにしても、もつと話し合ふべきだ。」
　委員長は苦笑して、
「よろしい。休憩します。」
　そこで、いがぐり頭の男は早口でしやべり出した。
「實際婦人部長は家庭的にあんな風だらう。そしてさつき山本君がいつたやうに、意識的には可なり左翼化してゐるんだ。だからだれかあ

の女史の氣に入りさうな奴が大膽に戀愛交渉をおつ始めるんだな。きつとずる／＼とこつちの畑へはひつてくるぜ。條件は揃つてるんだもの。だれかやらないか。個人的な思ひつきとして…。あの女を大橋から奪略するんだ！」

「はゝゝゝ、貴樣やらんか。」

「おれぢや駄目だい！　吉田どうだ。」

「自信なし！」

「いやにはつきりしてやがる、木村君どうだ。」

「そんなカンパニアはいやだなあ。」

「何れをみても山家育ち。」

　とだれかが半疊を投げた。

「婦人部長はとても悧巧だし、それにあの病氣だらう。亢進してるぜ。この際理論鬪爭よりもいと健かなる若い燕の方がいゝんだ。全く……」

　その時、委員長が、皆があまりにこの話に熱心なのでふいと興味を持つたらしく、

「三枝君！　君どうだい!?」

　とさつきから、隅つこの小さな机で默つて記錄をとつてゐた篤夫に向つて冗談半分によびかけた。

　皆は篤夫の方をみた。

「三枝なら見込があるぞ！」

「賛成！」

　といふ二三の聲がとんだ。

「三枝君は大分婦人部長と昵懇ぢやないか。おまけに君あ、あの女の氣に入りさうな大學インテリだ。持てるぜ。やらんか、うわッははゝは。」

　と髮の毛の赤い男が正面から煽つた。

　机の向うで顏をあげた篤夫は、どうしたのか、眞つ蒼な顏をしてゐた。

　そして、無理に皆を見て笑はうとしたが、かれの口のところはヲカしく引きつれて、聲が出なかつた。

狀勢と指令

　夕日が雨の如く斜に照りつける新しく出來た淸洲橋を渡りながら、篤夫は委員長中田の高い肩の上にゆれてゐる日にやけた頰骨を何度も見上げた。――さつき、會合は終つて、委員たちは四方へ散つた。篤夫は、一人でかへる委員長をみつけて、あとを追つてきたのだ。並んで步きながらかれはさつきから、いひ出しかねてゐることを、漸く吐き出した。

「委員長、實は…ゆうべから、綾子さんが…僕の、下宿に…ゐるんですがね。」

「へえ？　君の下宿に？…どうして？」

　と中田は卒直におどろいた。

「ゆうべ突然やつてきて、いろんな家庭上の祕密みたいなことを、僕に打ちあけるんです。その話の最中に突然喀血して、熱を出して、そのまゝねてゐるんです。」

「ふむ…それやいけない。それやいけないね。あの人そんなに體が惡いのかなあ…」

「氣で保つてるんでせう。可なり惡いやうです。」

「君はしかし、婦人部長とそんなに懇意なのかい？」

　と中田は篤夫のみどり色の眉のところを、視た。

「委員長！」

　篤夫は步きながら中田により添つた。

「さつきの問題――僕は空想かもしれませんが、まじめに考へてゐるんです。僕自身の戰術としてならあんなことは許されるものでせうか？」

「何だつて？」

　中田はひよいと立ち止つた。笑ひ出さうとするかれの顏が、とても亢奮してゐるらしい篤夫の視線に逢つて、そのまゝ立消えた。――二人

は默つて橋を渡つて行つた。
いつのまにかどんよりと霞んだ空氣の中で、もう川上の新大橋に灯がついてゐる。
「美智子さんはこの頃健在ですか？」
濱町の通りへはひつてきた時、中田がきいた。
しかし、それには篤夫が答へなかつた。やがて電車通りが向うにみえた。――それをみて、篤夫は決心したやうに、いつた。
「さうかな……」
「僕は……委員長、かまはないです。」
中田は無愛想にうつむきこんで、二三度まばたいた。
「君、さつきもいつたやうに、これは戰術ぢやない。道德の問題だよ。プロレタリアの解放に協力する一切の行爲が×で、その反對が×だとの新しい階級道德の實踐として、君自身が解決してくれ。……たゞこの際……委員會は藁でも摑みたい位だ、といふことだけを、僕から、いつておくよ。」
と、途切れ途切れに低い聲でいつた。いつてしまつたあとも、篤夫の顏を見ようとはしなかつた。
「よくわかりました。」
と篤夫は頭を下げた。
「ぢや……」
中田はちらりとふり返つて今、電車の來た停留場の方へ、急いで別れて行つた。篤夫は、夕ぐれの中に、ひとり、とりのこされた。
電車がかれの目の前を通つて行つた。中田の乘つてゐる姿はもうみえなかつた。
篤夫は、電車通りを水天宮前の方へ歩いて行つた。そこの停留所に立つてかれは長い間躊躇してゐた。最後に、やつと和泉橋の方へ行く電車にのつた。――人のこんだ座席の片隅にぢつと目をとぢながら、かれはけふの委員會のことを考へ始めた。
――左傾學生として大學を中途で放逐された篤夫は半年ばかり「産勞」(産業勞働調査所)を手傳つて露命をつないでゐる内、一旦解散されて新しい××××を以て起き上つて來た左翼勞働組合全國共議會――かれらの間では俗に「全共」とよばれてゐた――のレポーターに使はれるやうになり、更にそこから、今ゐる東京紡績勞働組合へ派遣された。
東京紡績勞働組合――？　それは吾嬬町の東京紡績工場内にある組合で、「左翼」とは目の敵の、右翼ダラ幹の大同團結日本勞働總聯盟の所屬組合であつた。
一九二八年三月以來、日本の左翼勞働運動は、ブルジョア政府の××の下に、當然の苦しい運命を辿つてゐた。あらゆる左翼團體は解散され、戰鬪分子は珠數つなぎになつて續々と牢獄に下つた。けれども鬪爭は拋棄されてはならなかつた。「左翼」は三・一五の大檢擧以來、一齊に×××××つた。
「全共」も今では密閉された××體だつた。從つてそこに働く人間は×××と同樣、全く祕密の成員だつた。自分の所屬や與へられてゐる指令は、同志の間にさへも、漏してはいけなかつた。
「全共」の心臓であり、司令塔である「中央常任委員會」は一層堅い祕密の中に閉ざされてゐた。そこから任命された祕密の組織者が全國各地の右翼中間未組織の大工場に入り込んで行つた。
組織者は、一勞働者となつて右翼や中間派の組合のある工場にもぐり込み、一職工としてそこの組合にはひるのだ。さうして、かれは隈なく組合内部を、工場内部を、觀察する。そしてダラ幹部に對する攻撃を開始し、一人、二人、三人と、徐々に自分の身邊に幹部反對の細胞を作つて行き一定の人數に達した時、組合内

部に、「幹部反對派」のグループをかためる。

あとはこの幹部反對派の必死の活動によつて反幹部派自體の增大をはかりつゝ、公然といよいよ組合幹部のダラクを暴露、攻擊し、組合全體を、右翼ダラ幹の支配下から目ざめさせ、引きはなし、組合大衆を、現實のプロレタリア解放のための戰ひへと誘き出す。組織者の命がけの仕事であつた。——之が「反幹部派」の使命であつた。

すべて、大工場の內部は右翼であらうが、中間派であらうが、叉未組織であらうが、勞働者自體はみんな××してゐるのだ。××するやうな生活しか持つてゐないからだ。かれらは今に××黨が自分達を××にくると信じてゐる。それを幹部が懸命に抑へつけ、ゴマ化してゐる。右翼や中間派の組合の幹部はみんな工場主と結託してゐるからだ。だからダラ幹といふのだ。左翼の組織者は死を賭してこのスキをねらつて、食ひこんでゆくのである。

右翼の組合である東京紡績勞働組合の內部にも、リンゴのしんに蟲がくひ入るやうに、いつの間にか「全・共」の組織者が入りこんでゐた。そして最近になつて組合內に男工六七十人ばかりの「反幹部派」が生れてゐた。その中に祕密の「反幹部派委員會」が設けられ、三枝篤夫はこの書記として派遣されて來たのだ。

この「委員會」はいはゞ反幹部派の指導部だつた。わかれば、組合幹部のために除名されるのは勿論、××の手は、忽ちかれらを、半×しにしなければやまないだらう。

篤夫はうまくもぐりこんで、組合の機關紙編輯係りになつてゐた。で、組合の婦人部長をやつてゐる大橋綾子ともいつの間にか懇意になつた。

綾子は組合の創立者である大橋芳雄の妻である。

芳雄は東京紡績勞働の組合長で、同時に總聯盟の幹部の一人だつた。かれは今では有名なダラ幹である。

組合の實權はむしろ綾子が握つてゐた。といふのは、どこの紡績勞働組合でも皆さうであるやうに、東京紡績勞働でも、四千人近い組合員の內三千人迄が女工である。三千の女工たちは、婦人部長を絕對信任してゐた。實際綾子は不思議な勢力を女工の間に持つてゐた。組合長の芳雄の影がうすれたのも、かれが綾子をすてて總聯盟の幹部の一人である杉浦の妹と戀愛關係に陷つたためで、それに反感を抱いた女工たちが、翕然として、綾子についてしまひ、大會に采配をふらうとしても、野次と罵倒で葬られてしまふ有樣である。以來、毎年の大會には、綾子が議長をつとめてゐる。

かうした情勢の中にある東京紡績勞働組合內の反幹部派委員會は今年の五月の末に、「全共」から重大な指令を與へられてゐた。

「來る十一月下旬に開かれる總聯盟全國大會直前迄に東京紡績勞働組合を完全に乘つ取れ。」

書記の篤夫を加へて十人のメンバーを持つ委員會は、この指令をうけて必死の對策を講じた結果、六、七、八の三ヶ月間に五十人近い反幹部派新加盟者を獲得することが出來、こゝに反幹部派の勢力は男工部八百人中七十人あまりを占め、まづ十月上旬の組合總會における鬪爭は有望となつたが、三千を越える女工部が、大橋綾子の手中にあるため、大體の向背が危まれ、九月に入つて、祕密委員會の問題は、女工部を獲得するために婦人部長大橋綾子に對する效果的なる働きかけの方法如何といふ具體的な問題一つに歸着してしまつた。勿論、反幹部派の必死の日常鬪爭はたえず行はれてゐた。

しかし指令に定められた日はもうすぐ目の前に

迫つたのだ。

大川のみえる同志の家の暑い二階の部屋で「全共」から來てゐる委員長の中田を中心に、けふもこのことが討議された。みんなは焦つてゐた。焦らざるを得ない「決戰」の日が前に來てゐたのだ。

みんなは――あれからも篤夫に向つて綾子を籠絡しろと、盛んに煽動した。その煽動の半分迄が冗談で半分迄が眞劍だといふことは、さつき別れた中田の言葉でもよくわかつてゐる――。

ふと氣がつくと電車は上野驛の前迄きてゐた。かれはあわててそこで下りた。

戀のプチブル性

省線を日暮里に下車して西へ五六町、黄昏の向うに軍艦のやうな細長い鐵筋コンクリートの建物がみえる。同仁會のアパートだ。

篤夫はその建物の前迄來て、はひらうか、はひるまいかと長いことためらつてゐた。

――結局、引きずり上げられるやうに、かれは重たい足どりで、がらんとした入口から、暗い階段を上つた。

てつぺんの三階迄辿りついて、細長いうすくらがりの廊下を歩いて行つた。片側に並んでゐるどの入口も暑いのでドアを開けて、中に灯がつき、人がゐた。ラヂオが鳴つてゐた。――つきあたりのやうなところに、暗く閉つたドアがあつた。ドアの隅に、

第二一二號室
吉村美智子

といふ小さな、こゝの所定のらしい木の名札がくつついてゐた。

篤夫は、ドアの前に立ち止り、顏の前にきたこの小さな名札を、嘗めるやうに見詰めてゐた。ノックのために、擧げた手で、かれは自分の耳を掴んだ。

「よさう……」

とつぶやいて、引き返した。

しかし一間と離れぬ所で、よびとめられたやうに、立ち止つた。舌なめずりした。そろ〳〵又ドアに近よつた。

「……戀なんて……戀なんて、みんなプチブル的なものなんだ。戀の交渉から、何も階級のために役立つものは生れて來やしない……戀愛は、凡て反社會的な行動だ……捨てたつて、……ぶちこはしたつて……いゝぢやないか！　それが、闘爭のための一日の役に立つのなら、一生の、戀を、犧牲、に、したつて……」

さう思ひつゞけ、今も思ひつゞけながらこゝ迄來たのだつた。同時にかれに別の心があつて、美智子に、たまらない愛情を感じてゐる。いやそれは疼痛に近い烈しい感じなのだ。

「ゐなきやいゝ。きつとゐないんだ。さうすればけふ一日、何とかなる……」

と思つてかれはヤケに、平手でドアをノックした。

「どなた？」

ひどく遠い聲が、ドアの中でした。駄目だ、やつぱり、ゐたんだ！　どうしよう？　かれは今も逃げ出さねば耐へられないやうな上づつた聲で、

「僕、僕です！」

暫く、鍵の音がして、ドアが開いた。ボイルの洋服を着た女が首を出した。

「まあ、やつぱり……」

女はいくらか大きい口を嬉しさうにあいて、と朗かな無意味な笑ひ聲を一つ立てた。

「おはひり……」

女の部屋へ通つて、篤夫はそこにあつた椅子に腰をおろした。

「丁度よかつたわ、あたしこれから研究會

があるので目黑まで出かける積りでゐたところよ。」
「目黑？　あ、あの家か？　だれかくるの？」
「今夜は、全×合法よ。勞農同盟の責任者が來て解黨派批判をやつてくれるの。メンバアは、危いから、たつた六人！」
　と女は聲をひそめた。
　この部屋は八疊位の一間だつた。窓ぎはに小さな鐵のベッドがあつた。その枕頭に机、小さな電氣スタンド、本棚、それだけで部屋の中がふさがつてゐた。
「君、飯くつたの？」
「えゝ、今階下で食べてきたところ、あんたまだなの？」
「うん！」
「パン買つてきてあげようか。」
「うん！」
「三分間、待つててね、とんでつてくるわ。」
「うム……」
　女はアルミの茶壜を窓の隅にある小さなガスコンロにかけて、
「ぢや、これ見ててね。」
　と出て行つた。ほんたうに、駈け出して行く靴の音がカチ／＼ときこえた。

　——篤夫はその跫音のきえてしまつたあとで、切なげに、女のベッドの上に、體を投げ出した。
　そして、肱を曲げて額の上にのせた。そのまま、ぢつとしてゐた。女は、三分ではかへらなかつた。凡そ十分くらゐたつて、かけてくる靴の音がした。ドアがゆるくあいた。兩手にいつぱい何かかゝへてゐる。
「パン、ジャム、カクザタウ、リンゴよ。リンゴがもう出てるのよ。」
　と、かの女はひつてきながら、聲をかけた。
　しかし、篤夫は額の上の肱をとらなかつた。
「あら、湯がふいてるぢやないの！」
　紅茶の罐のフタをあけるポンといふ音がした。
「ね、トーストと、ジャムパンと、どつち先き？」
「……………」
「篤夫さん？　ね。」
「……………」
　男がいつ迄も答へないので、女はやめて、傍へきた。男の肱をほどいた。むつとして、眼をとぢた篤夫の顏があつた。
「疲れたの？」
「……………！」

「怒つたんぢやないわね。」
　とかの女は篤夫の手首を自分の頬によせて輕くたゝきながら、
「少し待たせ過ぎた？　そんなことないでせう。あたしも一緒にパンを少しと、お茶とを頂くから、召上れ！　ね、みんなあんたのために、あたし買つてきたんですもの……」
　それでも篤夫は物をいはなかつた。その代り、目をひらいた。疲れて充血したかれの目には、涙が白く浮んでゐた。
「まあ、どうしたつていふの？　どうしたつて……困るわ、あたし、心配しちやふぢやないの、言つて……早く言つてしまつて頂戴。」
　と女は篤夫の首を抱へおこした。小さな強い力で——。
「美智子さん！」
　咽喉迄上つて來た感情を食ひとめて、篤夫は女の手を押し退けた。
「僕、別れに來たんです……君と。」
　女は茫然として男の顏を見た。
「——だしぬけに、あなた、何をいふの!?」
「こんなことをしてゐちやよくない！　僕はさう思ふんだ。僕等の、こんな關係はお互ひに精算し切れないでゐるプチブルの殘り滓なんだ。

君が僕を――好いてゐてくれる。僕が君を好いてゐる！ こんな戀愛から、僕等には何にも抽き出しうるものがないぢやないか。これからの、君や、僕等には、こんな、私的な、お互ひの生活交渉に、一滴の精力も費してはならないんだ――僕等は、もつと〳〵鬪爭の方へ出て行かなきやならないんだ！」

篤夫は、半ば氣がふれたやうに、繼穗のない口調できれ〳〵に言つた。かれは喘いでゐた。

女はぢつと、篤夫の顏を見戍つた。そしてすぐに何かを見拔いた。

「篤夫さん！ あんた何かあつたんでせう！ あたしにかくしてらつしやるんでせう？」

―失敬な！―

「誰れかに何か言はれたんぢやないの？ あたし自分のことなら、いくらでも……でもあたしのことはあんたがうんと信用して下さつてるでせう。」

「そんな……いやだ、僕はそんな……今君のものを言つてゐるそのプチブル的な顏つきが、さういふ生活意識が、とてもたまらない。」

「あ、わかつた。」

女はびつくりしたやうにリンゴとジャムの罐を机の上から片手で掃きおとした。

「あたしがこんなものを買つて來たのがお氣にさはつたのね。さうでせう、そしてこんなヤールが三圓もするボイルで着物なんか拵へて着てゐるのが、プチブル意識だといふんでしよ。あたし、だれかにやつちまふからかんにんしてね！」

―僕はそんな小兒病を言つてやしない。」

篤夫はよつてくる女をおし戻した。

女ははじかれたやうに壁に背をもたせて、男の方へ、懸命に目をみはつた。

「深……深切に、言つて頂戴よ。どんなことでもするから！ あんたの力で、あたし、こゝ迄、來たんぢやないの！ だしぬけに別れるなんて、……そんな、――そんな、ひどいことをいひに來て――わかんないわ、あたし、ちつとも、のみこめないわ――」

といつてゐる内に、涙がいつぱいせり上つて來た。

篤夫は默つて、わきをむいてむツつりそこにあつたパンをむさぼり食つた。かれの氣持は爆發しさうにいつぱいだつた。けふのことをすつかり話さうか、話すまいかと迷つた。「委員會」のことなぞ話してはならないことだつた。けふ集つてゐた委員たちの顏が、かれの目にちらついた。でも、かの女が「研究會」に出かけるのでなければ――一晩中、何もかも皆ぶちまけてやるんだのに！――。

―君、出かけるんだらう？」

と、不意に外のことを言つた。

「出かけます！」

「一緒にそこ迄行かうぢやないか！ 僕は本所へかへるから。」

「だつて今のこと、すつかりわかるやうにいつて下さらなけれや、あたし、動かない！」

「そんなに心配かい？」

「えゝ！」

「君にはそれ程戀愛が大事かい？」

「ばか――」

「なに？」

「あなたがばかをいふのなら、あたしだつて、言つてあげる。戀愛なんて大事ぢやないわよ。あたしには三枝篤夫が大事よ。」

「あやまる。僕はしかし同志美智子をすてて外の女を好きになるかもしれないよ。かまはない？」

抑へに、抑へて、とう〳〵冗談をいつてしまつた。ほんたうに近い冗談を――

「ホ、、、。」

かの女は涙をこぼしながら笑つた。

「かもしれないのならいゝわ。あたし自信がある。あんたを外のヒトになんかとられないつていふ……」

「美智子さん！」

「何よ！」

「出かける前に、僕に君の體をうんと抱つこさせてくれないか。」

「ことわる！　知らないわ、ほんたうに。」

と頬が赤くなつた。

「眞劍だ！」

篤夫は荒つぽく、女の肩をつかんだ。

かの女は壁の隅で、體を、かれの腕に奪はれた。

篤夫は、兩方の腕の中に、かの女を抱へ上げて、狹い部屋の中をぐる／＼と歩いた。

宙に浮いてる間、かの女は、無意識になつて、目をつぶつてゐた。

體が、不意に、ベッドの上に投げ出された。

同時にかれの顏が、かの女の顏に近づいた。

知合つて、一年近く、初めて、美智子は篤夫の、汗ばんだ鹽辛い脣を知つた。

篤夫はすぐに退いた。

――しかし、かの女はあをむけに、ねたまゝ、度を失つて、茫然とベッドに、打ちたふれてゐた。

「行かう、出かけよう、美智子さん！　僕……僕は、もうかへるから……」

と、篤夫は、そこに突立つて、眼にいつぱい涙を浮べてゐた。

ダラ幹の妻

何のかざりもないうすきたない、六疊の部屋で、綾子はうつ／＼としてゐた。梯子段を上つてくる跫音がした。

――それから、しばらくまた眠つたやうな氣がして、眼をあくと、篤夫が青い沈んだ顏をして、ズボンのかくしに兩手をつつこみ、枕許に立つてゐた。

「……お、か、へ、り……」

と、綾子はさめきらぬぼやけた聲でいつた。そして首をうごかした。

「ねてらつしやい！」

篤夫は傍に坐つてからしづかに、いつた。

「熱は？……」

「えゝ、少しはあるわ。……一ぺん喀血したら二三週間、熱は出てゐるんだから……でも、もう大丈夫よ。感じでわかるのよ。」

と、かの女は、額に手をあてて、ほゝ笑んだ。ゆつくり肱をついて起き上りながら、

「あんたけふ事務所へ行つた？　誰れも來てなかつたかしら？」

――それは、殆んど毎日のやうに、組合事務所へ綾子を訪ねてくる女工たちのことをきいてゐるのだつた。

「うん、あの山根のお勝ちやんが來て、寄宿舍内の强制貯金のことで舍監のばあさんと衝突したからつて、四人づれであなたを待つてゐたさうですよ。僕は會はなかつたけれど……」

「まあ、さう……あたし、あしたはもうきつと出て行けるわ。あの舍監の奴、吉田秀生つて男みたいな名前の、それはいやな奴なのよ。どうせ會社のスパイなんだけれどいつも寄宿舍であたしんとこへくる若い女工たちをつかまへては、大橋さんは反幹部派だよ、なんてよけいなことばかりいつてゐるんです。」

綾子はぢつとねてゐるのがいら／＼するらしかつた。片手で髮をかき上げた。

「あんた飯くつたんですか？」

篤夫はそこへ長く足をなげ出し、かの女の方へ向いてタバコをすひつゝきいた。

「いゝえ、あんたに何かおごつて貰はうと思つ

て、待つてるんです。」
篤夫は赤い顏をした。
「おごつてもいゝが僕ア金がないや。」
綾子は、赤い博多の伊達卷の間から小さなガマ口をとりだしてのぞいたが、
「上げるわ…」
と、小さく折りたゝんだ五圓札を引きずり出した。
そして、別に何枚かの五十錢銀貨を、疊の上にころがすと、
「ばからしいからゆうべの埋合せにスキ燒でも食べようぢやない？　ね、序手に『銀釜』の五合壜でも買つてきてほしい！」
篤夫はおどろいた顏をして、
「そんなことをしちやアよくないでせう。」
「だつてあんたつまんなくない？　ゆうべからあたしの下らない夫婦喧嘩の話ばかりきかされて…」
「だつて、僕はもう外で食つてきました。」
「まあ、三枝さん…いやな人ね。どこで、何を食つたの？」
どこで、何を食つた？――といふきゝ方が、ひどく皮肉にきこえた。篤夫は眼をつぶつた。壁に頭をもたせた。美智子の顏がまざ〳〵とうかび上つた。
「しかし、少し位ならお相伴しますよ。」
と眼をつぶつたまゝいつた。
「ホヽヽ。ぢや早く、牛肉と、ネギか何かと、それと絲ごんにやくに、酒に…」
「本當ですか？」
「何がア？」
「本當に酒をのむんですか？」
「ホヽヽ。あんたにのませて上げるのよ。」
「僕あ酒なんかのんだことアない！」
「少し位ダラ幹のまねをなさいよ。」
「さう〳〵、さつきあの人にあひましたよ。」
「誰れに？」
「杉浦氏に！」
「へえ、どこで？　大阪へ行つた筈ぢやない？」
「今朝歸つたさうです。妹の見舞ひにきたつて…」
「ぢやあんたあのアパートへ行つたの？」
しまつた、と思つたが、
「えゝ、大塚つて日々の記者をしてゐる惡友があそこにゐるもんだから…」
「あの通りなのよ。杉浦氏は平氣であそこにゐる妹を訪ねるんですからね。あたしといふものを認めてゐるなら、同志として、信ずべからざる心持だわ。…實際三枝さん、今總聯盟にゐる人に本當にプロレタリアの解放のための鬪爭なんか考へてゐる人間は一人もゐやしないのよ。」
「僕がゐまアす！」
篤夫は冗談をいつた。綾子は、ちよつと癪にさはつたやうに、
「あんたみたいな反幹部派は論外よ。」
「へえ、僕ももうブラック、リストにのりましたか？」
「駄目よ、匂ひでわかるわよ。あたしはスパイとして、こゝへ坐りこんで動かないでゐるんですからね、ご用心なさい！」
「しかし、けふ機械部の山本、あの議論好きの、ね、山本に會つたら婦人部長は大いに意識的左翼主義者だといつてゐましたよ…」
「あんな子供に何わかるものですか、女つてものはね、三枝さん、つきあつてゐる相手の男次第で右へでも左へでもひつくり返るものなんですよ。あたしあなたとつきあひ出して、だんだん赤くなつた！」
「冗談でせう！　あなたは大橋氏の奥さんぢやありませんか。」
「その大橋と、もう半年近く、全然別居して、

ろくに口もきかないでゐるんですもの、この一二年の間、あたしが組合婦人部で何をしてきたか、少しはわかつて下さるでせう。尤もあんたはまだきて一年にもならないけれど…。」

「あなたのことが總聯盟や社民の常任委員會で絶えず問題になつてゐるといふことは、僕もきいてゐます。」

「杉浦氏や大橋はあたしを東京紡績から除けたいんですよ。しかし、あたしを除ければ三千人の女工が動搖して拾收がつかなくなることをよく知つてゐますからね。」

「しかし、大したもんだなあ、七年ですか？　八年ですか？」

「組合へはひつて？……」

「えゝ……」

「そんなになりやしないわ、今年で五年目よ。大橋たちが組合を作つてから九年目ですからね。」

「來年は十週年か。」

「十週年記念に、組合を背負つて總聯盟をとび出しちやひませうか？」

「それや面白いな！」

「よう、賴んで下さいな、あたしに何も食べさせない積り？」

「ぢや、これはしまつといて下さい。」

と篤夫は疊の上の銀貨だけをとつて五圓札を押し戻した。

「へんな人ね、とつといてくれたらどう？　文なしのくせに！」

「だつて、いつも——」

「プチ・ブル的な見榮を張らずに、素直になさい。ホホヽヽヽヽ。」

「ぢや貰つちまへ。サンクス！」

篤夫は立ち上つた。そして階下へおりて行つた。

そのまゝいつ迄たつても上つてこなかつた。綾子は蒲團を片づけ、帶をしめ直した。火鉢の傍へよつてタバコをすつた。壁の方をみた、壁にはレーニンの肖像がはりつけてあつた。

かの女は、篤夫がなか／＼かへつてこないので、レーニンの肖像の下へ行つて、ねころんだ。

——かの女の夫の芳雄は十も年下の杉浦の妹の敏子と去年の暮から日暮里のアパートで同棲してゐた。それはあまり世間が知らない。勞働運動家としての夫の名譽(?)のためにかの女が極力それをかくしたからだ。芳雄はそれをいゝことにして滅多にかへつてはこなかつた。かの女は長く一身上の進退に迷つた末、この夏、それ迄住んでゐた龜戸を引き拂つて尾久へ移り、夫とはまるで交渉を斷つてひとり暮らした。ついこの間のことだつた。組合事務所で落合つた芳雄が、綾子を小かげによんで「あの、ぜひあなたに賴みたいことがあるんだがね。」といひにくさうにして打明けたことが、敏子の姙娠といふありさうなことだつた。しかも夫は流石に世間體を恥ぢてそれを綾子の仕事の上のパトロンのやうになつてくれてゐるある婦人科醫のところへつれて行つてほしいといふのだつた。

かの女は「考へさせて貰ふ」といつて引き退つた。三日の間、芳雄は毎日妻を拜み倒した。四日目の夕方、綾子は默つて、夫の情人を、その醫者のところへつれて行つた。そして夫の希望通りに、敏子の×××してやつた。ところがその夜から敏子は發熱して、一週間といふもの、夜の目もねないで、綾子が看病してやらねばならない破目になつた。かの女は夫を自分から奪つた若い女の、汚い物まで一々洗濯してやりながら病院で暮らした。

そして十日目に無事に元の體になると、芳雄が自動車で迎へにきた。敏子は芳雄をみると子

供のやうに甘えて、自動車の中迄、かれに抱いて行つて貰つた。そして、二人が自分たちの巣へかへつて行つたあとで、かの女は打ちくだかれたやうに疲れ切つて、篤夫の下宿まで辿りつき「病院からのかへりがけだ。」といつて坐りこんだまゝ、昨夜、何もかもうちあけた末「あたしだつて女なんですもの、泣きたい！　泣きたい！　こゝで泣いてもかまひませんか！」と荷物をはふり出した上に顔を伏せて聲を揚げた。かの女は咳いて、ひどく喀血した。そのまゝ動けなくなつて、こゝに泊りこんでしまつたのだつた。ゆうべ三十九度も熱の出て來た中で「この病氣だつてみんな大橋にうつされたんです。大橋があんな風になつたのも一つは病氣のせゐなんですけれど、でも、あたしあの人に對する辛抱も、もうこれでごめん蒙るわ……」と、しきりに泣いてゐた自分が、何だかはづかしくなつて來た。もし、ゆうべ喀血したのでなかつたら、綾子の過去についてあまり深いことを知つてゐない篤夫のところへ突然のやうに訪ねてきて泣いたり迄したことがどんなに不自然にみえたかしれない。

「さとつたかしら？」

か、女は、ひそかに、かれに對して胸におしかくしてゐる愛の感情に頰が赤くなつた。

――これだけ豫め一切をぶちまけてしまへば、もう懸念する事はない。いやならいやと、はつきり答へてくれるだらう。――綾子の心は五年前の古い情熱をよびおこした。かの女は信州の古い大きな地主の娘だつた。二十の年、家出をしたかの女は東京である建築請負師に欺かれて終生ぬぐひとれぬやうな汚辱をうけた。そのために一度死を決したことがある。カフェの女給になり下つて働いてゐる時、まだ左右分裂前の花々しい日本の勞働運動界に、新人會出の若い鬪士として働いてゐた芳雄と知り合つて、戀をした。その戀の思ひ出が今、かの女の胸に現在の氣持を引き立てる勇氣となつて甦つてきた。

芳雄と結婚した綾子は芳雄たちが組織した東京紡績勞働組合に、結婚したその日からとびこんで働き始めた。

かの女にはそれは更生の生涯だつた。かの女は、色のすきとほるやうに白い、まれな美貌だつたので、忽ち組合の女工たちに慕はれ、かの女の手でとう／＼三千の女工の組織が成就した。かの女が「婦人部長」になつた時は、神戸の大分裂をへて、東京紡績は芳雄たちの居殘つた右翼の日本勞働組合總聯盟の所屬組合となつてゐた。普選が布かれて、かれらの間には社會民主黨が生れた。總選擧の演説戰に全國をとび廻つてから、綾子は一般的に有名な社民系の女鬪士となつた。

しかし私生活ではかの女はだん／＼不幸な女となつてゐた。それをかの女はひたかくしにおしかくし、公然とは何一つ世間へ傳へなかつた。その間に、かの女の思想的操持には次第に變化があらはれてきた。とめどもなくだらしなくなつてゆく芳雄と別れようとする惱みが、すぐにかの女を右翼主義者から左翼主義者へ目ざめさせようとする主義の上の心の惱みとなり、二つのものは一つの苦惱に綯はれて、いよ／＼かの女を苦しめた。

今年になつて、組合内部には、既に「反幹部派」の一團が公然と發生してゐた。足許に火はついたのだ。眠つてゐた東京紡績勞働組合は、燃え出したのだ。かの女は、自分の身邊、に左翼からの潛入者を物色した。かの女の心はその方へ惹かれたのだ。――芳雄の紹介で組合の機關紙編輯に這入つて來た篤夫を、綾子は潛入者に違ひないと思つた。そしてかの女は篤夫に五年前の芳雄の面影を發見した。いつの間にかかの

女は篤夫を戀してゐた。「惡いこととは思へないわ。」

もし篤夫が自分の立場に同情してくれ、自分を愛してくれるのなら、自分は芳雄との關係を清算して今の組合をとび出し、右翼をとび出して、×××××へでも何へでも、目をつぶつてとびこんでしまはう！ さうした盲目的な情熱が、特に芳雄と別居してからのかの女に襲つてきた。

「でも三枝はあたしをほんたうに好きになつてくれるだらうか？」

かの女は、さうした戀と思想とが一つにとけあつた烈しい感情になやんでゐたのだ。

「でもとう／＼くるところ迄きた！」

ゆうべからの自分を、篤夫がさとらないといふわけはない。一番好きな男の前で、自分の大きな恥辱を語り、他人との生活にすりへらされてしまつた過去をまざ／＼とみせつけるかのやうにかの女は惡い時に、喀血して一晩中その男に世話をさせた。

「でもこれで何もかもぶちまけたやうなものだ。」

かの女は肱を頭の下へおいて、壁のレーニンを見上げた。石版ずりのレーニンは、戀になやんでゐる右翼の女闘士を、にこ／＼したつぶらな眼で見下ろしてゐた。

竹の皮包みや、ネギや、酒の五合壜を不器用にいつぱいかゝへて、篤夫が上つて來た。

「あら、すみません！」

綾子はおきて坐つた。

「そんなにおきてもいゝんですか？」

篤夫は、部屋へはひつてくると、かゝへて來たものをおろして、

「臭いでせう、今、七輪を持つてきます。」

とネギの匂ひのするぬれた手を綾子の鼻さきへつきつけて、再び、下りて行つた。綾子はその仕草が、ひどく氣に入つた。ぼんやり、かすかなネギの刺戟を情感的に、鼻のさきに味つてゐた。

「きつと、好いてゐてくれるんだわ……」

階級的善行

二人は、まもなくスキ鍋を圍んで向ひあつてゐた。

「暑いな…これぢや。」

障子をあけつ放して、篤夫はシャツ一枚になつた。

「ホヽヽ。ご迷惑……」

綾子は徳利に酒を注ぎこんでゐた。

「僕はしかし、のみませんよ。」

「…あたしだからでせう？」

「なにをオいつてるんだ。」

綾子は呑氣さうに、舌で脣をなめながら、

「あたしがこゝにゐるつてことがまあちやんや松公たちに知れたら、面白いわね。」

二人ともかの女と同棲してゐる女工だつた。

「あんたは、あの連中と大分怪しい仲だからね。」

「いやな三枝さん！」

綾子は腕をのばして、篤夫の肩を拂つた。

「でもあたし大橋と別れて以來、家へくる娘たちがとても可愛くなつたわ。」

「同性愛！」

「いやアよ。同志愛よ！」

「へえ…！ 同志愛？」

「駄目！ 笑つちやア！ あたしさういふ氣がしてゐるんですもの、それやアねえ、あたしなんかアどうせ總聯盟のくさつたドブドロに咲いた花かも知れないけれど、その花の枯れたあとへ伸びてくる新芽は、きつと××的な赤い新芽よ。毎晩あたしの家へ來て、入れ代り番こにあたしの傍で枕を並べてねる娘が今ぢやみんな

合せて三十人はゐるんですよ。そのどの娘たちとつきあつても、今この人たちの魂が眼をさませば、東京紡績だつて、またゝく間に戦闘的な勞働組合となる！　もう一二年だ！　いやもつと早いかもしれない！　さういふ氣がするんです。だからあたし、その新芽が赤くのびるやうに、赤くのびるやうに、と目的意識的に導いてゐるんです。あたしがやる幹部攻撃はとても效果がありますからね。みんな、どん〳〵左翼的に、左翼的に、と育つてきますよ。それをみてゐると、あたしうれしくてたまらないんです。そこへ、去年の夏あたりから男工側に、自然發生的に幹部反對派といふものが生れてきたでせう。あたしそれを初めは三・一五の影響だと思つてゐたんです。えゝ、多分にさういふ理由もあつたんでせうが、地下へはひつた左翼がいつの間にか下からくひ込んで來て組織的に反幹部派を作つて行つた――といふ證據が今年になつてわかりました。かうなつてくるのが當然だといふ氣がしました。杉浦氏や大橋の今の仕事は何でせうよ。會社相手の勞働ブローカーぢやありませんか。あれがあの人たちの商業なんですもの、下から何度ストライキを起しかけてもあの人たちにどういふ風にゴマ化されてしまふか、自分たちの要求が何に變形してあの人たちの懐中にはひつてしまふか、だん〳〵勞働者たちにもわかつて來ましたからね。

會社の重役から黨の名で選擧費を貰つて、之は決して階級的裏切りでないなどと恬然としてゐるのをみては、いくら愚鈍な勞働者でも、かれらと重役との間に何んな關係があるのかといふことを考へずにはゐませんからね。反幹部派の生れる理由は自然に出來てゐたんです。常任の中田さんを幹部の奴らがあんな風にして追ひ出した時、あたしだつて、杉浦氏や大橋に絶縁狀を叩きつけてよつぽど、とび出したくなりましたわよ。このまゝ總聯盟の中になんか枯れ朽ちないで、もう一ぺん若い新しい分子と共に、女工側の反幹部派を作つて組合を切りまくり、同じ死ぬのなら××で死んでやる……と、さういふ氣になつたんです。それをうまく、とてもうまくその時は大橋に泣いて口說かれて思ひ止つたんです、ホ、、、、。でも女つて妙ね、妙な生活意欲を持つてゐるものね、あゝして、大橋が杉浦氏の妹とあんな風にしてゐるのをみてゐると、だん〳〵元の決心に返つてくるわ。はつきり、決定的に反幹部派にならうつて氣になつてくるわ！」

「しかし、又泣いて口說かれたら……でせう。」

「いゝえ！」

眞面目になつた二人の視線が急にカチ合つた。その間をスキ鍋の湯氣がゆら〳〵と上つた。

「あたし、もう、大橋に、未練なんか、ないわ！」

綾子は、一句一句、切つて、いつた。

篤夫は默つて傍のネギを山のやうに、鍋の中へはさみこんだ。しばらく沈默がつゞいたあとで女がいつた。

「でもあたし位年にとつた女つて、とてもへんね。思想上の轉換に、生活の實質が何もかもついてひつくり返らなければ……みち足りないつていつたどん慾さが十分にあるのよ。」

「といふと……」

篤夫は眼をかゞやかして綾子をみた。

「あたし、だれかが、あたしを大橋から切り放してくれるのを、固くなつて、待つてゐるのよ。」

綾子のいひ方はセリフのやうにぎごちなくきこえた。

「………！！」

「おのみにならない！」

「え!?」

ぎよツとしたやうに、篤夫は女の差し出した

盃をうけ取つた。
「だれか、左翼の人があたしを引きうけてくれればあたし、死んでも間違ひはないわ！」
といつた綾子の眸は、はり裂けさうになつてゐた。
「……………!?」
篤夫がだまつてゐるのでかの女は縋りつくやうな表情になつた。聲は極度に低く細くなつた。
「左翼へ走る……といふ思想上の行動だけを、ぢやなく、あたしの他の……女としての、生活の慾望をみんなみたしてくれる人があれば、あたし、立派に××××で、死んでみせる！」
「僕が引き受けます！」
篤夫は盃の中をぐイと干して、と、女にさした。盃の底が白くチカ〳〵と光つた。
「ほんたう？」
綾子は胸をのり出した。かの女の脣は水から上つたやうに色を失ひ、眸は泣き出しさうに瞠かれてゐた。
「…僕ぢや、いやですか？」
篤夫もまつ青になつてゐた。
「三枝さん!!」
相手の言葉を叩きふせるやうに叫んでかの女は膝をどらせた。篤夫はスキ鍋の前からにじつて、横へよつた。綾子も本能的に、にじつて、近づいた。
「僕……前から……前から……あなたを！」
――篤夫はかすれた泣くやうな聲を出してかの女の頸に片手をかけてゐた。そして、かれの心は、相手には氣づかれることのない心の虚僞に――無い感情のわざとらしい作爲に、まゐつてしまつてゐた。
綾子は何か大きな形のないものをのみこんだあとのやうな呼吸をしながら、子供じみた表情返つて、ぢつと篤夫の面を見戍つた。
「でもあたしの體、こんなでもいやぢやない？」
「僕が、そんな風にみえますか？」
篤夫はこみ上げてくるニセの感情の苦しさを押し切つていつた。
「ゆうべ、あんなに僕、世話をして上げたぢやない？」
「えゝ！」
「僕の、氣持、わかつてるでせう！……僕、あなたを、氣の毒だと、思つて、ゐるんです！」
「すまないわ!!」
綾子は泣きさうな聲を立てた。
「大橋氏と……ぢや、いつでも別れてくれる!?」
「えゝ!!」
綾子は篤夫の腕のつけ根のところへ顔を伏せた。
「僕……しかし、あなたを運動の上で、今よりうんと苦しめるかもしれない！ それでも!!」
「えゝ!!」
綾子は伏せた顔をおしつけた。篤夫はその壓力を感じて、初めてマトモな力強い心持になつた。
「僕、組合内の反幹部派のフラクションを知つてゐるんです！ あなたのことを……ぢや、話してよござんすか？」
「いつでも、どうぞ！」
「よござんすか？」
「だつて…あたし、決心して、ゐるんですの。」
「ぢや、この秋位に、婦人部を動かせますか？」
「動かせますとも！ 總會を待つて下さい！ あたし、大變な仕事を、きつとやつてみせるから……」
「みんな動きますか？」
「三千九十人の女工の内、三千十人迄はあたしについてきます！ だつて八十人は病院にゐる

んですもの。最初はどうせ自然發生的に動けばいゝんでせう。」

「總會迄に動けばあとは死物狂ひです。」

「あたしは女工部の各班にそれ〲私自身の役に立つ左翼的フラクションをもうちやんと作つておいてあるんです。あたしを同性愛的に慕つてゐる三十幾人の女工がみんなそれなんです！　あたし、今迄秋の總會に使つてゐたその中堅組を、今年になつてさういふ風に教育したんです！」

篤夫は、默つて強い力でかの女の肩口を抱へた。

「いたいわ……」

とかの女は、そつと顔をしかめた。篤夫は手をはなした。かの女はその手に頬をもたせて、

「でもいゝわ、もう一ぺん血を吐いて、五日でも、十日でも、あなたに介抱させたげるから……」

そして、無邪氣な、靨を、子供のやうに頬にあらはした。

「焦げてる！　食べない？」

篤夫は鍋の方をみた。

「いや、もう、食慾なんかなくなつた！」

と綾子は疲れたやうに篤夫の膝へもたれて、一杯お酒をのませてくれない？」

「いゝのかなあ！」

「いゝのよ、もう少うし、のんだ方がいゝのよ。」

やむをえず、篤夫は盃に酒をついで、綾子の唇のところへ持つて行つてやつた。綾子は、かすかに前歯をあいて、赤い唇の中へ、かれの手から酒をのんだ。靨が浮んだり消えたりした。篤夫は美智子にはこんな靨はない、と思つた。

「何、みてるの？」

「靨！」

「あたしの？」

「うん！」

「ホヽヽ……」

と綾子は丸く唇を開いて、

「あたし、信州にゐた時、五つ位の子供の時から、兩方に靨がある子だつておばあさんに可愛がられた。」

「君は…シャンだよ。」

「いやアなことをいふのね。でも國を出てからあたし靨はなくなつちやつたのよ。それが大橋と結婚した一年間程、又あらはれたわ、それから長い間きえてゐたのよ。靨があらはれる時が、あたしの一番幸福な時よ。今又幸福になつたのよ。こんなことといつてもかまはない？」

綾子の態度は、いつのまにか打つて變つてゐた。かの女は情熱の或る粘つこさをみせていつ迄も篤夫の膝にもたれてゐた。さうしてゐる内に篤夫はかの女の言葉から、息づかひから、眸の色から、靨から、男の本能をそゝるものを感じ始めた。かの女の、肢體が、何となく、普通の人間よりも熱く、猫のやうにしなやかなのを感じた。

かれは、自分の膝の上に、さういふ感じをたゝへた一人の女性のゐることによつて、初めて、美智子の存在を忘れた。

「ちよつとのま、ねむつても、かまはない？　このまゝ……」

といひながら、かの女は篤夫の膝に、頸をのせ向うへ膝をくねらせて、ねた。するとかの女の頸の重みが皆膝へきた。重たい頭だつた。自分の知らない日本の勞働組合運動の經驗に、重たくなつてゐる頭だ。――かの女はあをむいて、色の白い瞼をとぢた。三千八の女工を惹きつけるかの女の魅力がどこにあるのかを篤夫は、眠つたかの女の瞼に、みた。

女はねむつてゐた。

閉ざされた唇が赤くふくらみ、細かい縦皺がそのふくらみの上にあらはれて、かわいてゐた。

ふと、視線をおこすと、向うのくすんだ壁に、鳥打帽をかぶつたレーニンが、その大きな額の下からつぶらな眼をひらいて、こちらをみてゐた。この偉大な同志のいひのこした言葉が、その時、篤夫の心にうかんできた。

プロレタリアの解放に協力する一切の行爲が×である。

――女は、眼をとぢてかすかな息をしてゐる。

犠牲羊

次ぎの夜、篤夫が會合からかへつてくると、美智子がきてゐる。――かの女は綾子のねてゐる部屋の片隅で、半ば病人に背を向けて意固地さうに肩をすぼめ、壁にもたれて本をよんでゐた。

綾子は蒲團の縁に額を埋めて、額だけ出してゐた。

――おの／＼の光景が、上つてくる篤夫を待ちまうけてゐる瞬間の、不自然な姿態だと、すぐにわかる。

「ヤア・・・」

二人の、だれにともなくから聲をかけた時、美智子は本をすてて、ふり返つたが、篤夫は、蒲團の縁からはみだしてゐる綾子の眉に、視線を向けた。眉が動いたやうに思つた。かの女は、わざと額を出さないのだ。

「・・・何か急ぐ用だつたの？」

はじめて、篤夫は美智子の方をふりかへつた。

一間しかないこの二階借りの、病人の傍へムリに坐りこんでゐる美智子の意圖をおしはかつた篤夫の聲は自然けはしいものになつてゐた。

美智子は默つて篤夫を見上げた。そして篤夫の額にあらはれてゐるものをみてとると、みるみる悲しさが、かの女の顔にあふれ、全身に傳はつた。

――かの女は、小さな本をポケットにねぢこむと、しづかに立ち上り、ピッコをひきながら、階段の下り口へ行つた。

「どこいく？」

篤夫はよけい、けはしい聲を出した。女ははじかれたやうにちよつとこつちをむいたが、

「か、へ、り、ま、す！・・・」

と、首を低れて、階段をおりた。

「・・・・・・？」

篤夫は女の頭のてつぺんが階段の下へ沈んでしまふのを見戍つてゐた。――そして急に綾子の蒲團の傍へ行つてしやがむと、

「あんたに、何かいつたんぢやない？」

と蒲團の端をめくつた。綾子は充血した大きな眼をひらいてゐた。かぶりをふる代りに微笑して、

「・・・あの方どなた？　あたし・・・どうしていいのか、困つちやつたわ！」

「早くからきてゐたんですか？」

「朝からよ、二度も來て、三度目に、一時間ばかり前、こゝへ上つて來て、三枝のかへるまで待たせて下さいつて！　あゝしてらつしやつたのよ！　あたし、わざと、おきなかつたのよ、ホヽヽヽ。」

篤夫は、立ちながら、

「ちよつと、待つて下さいね、すぐかへつてきます！　あとで、何もかも話しますから・・・」

綾子は、枕に後頭部をつけたまゝ、靨をつくつた。そして、とても美しい額をしていつた。

「いつてらつしやい！・・・」

――かへつてきたまゝの裝で外へとびだした篤夫は、灯のある通りへ出て、すぐ果物屋の角で、かの女に追ひついた。

美智子はクレバネットの外套のポケットに

雨手をつっこんで、逃げるやうに歩いてゐた。物もいはず篤夫はかの女のやゝ低い肩口に並んだ。美智子は遮られたのを怒つたやうに、立ち止り、すぐに歩き出した。

「どうして、かへるの？」

篤夫は並んで歩いた。

――うつむいたり、まつすぐ、前をみたりして、かの女は、怒りにみちた聲を出した。

「おどろいた!!」

篤夫はさうした女の態度にひどく侮辱を感じ、もう引き返さうといふ發作的な氣持を、何度もやりすごして、半歩おくれて、ついて歩いた。

「篤夫さん！」

道が暗くなつたところで、美智子は歩調をゆるめると、

「あれ、大橋さんでせう?!」

「うむ……」

美智子は、ちらと篤夫の横顔を見上げながら、

「隨分……深切に、世話を、してお上げなさるの、ね！」

篤夫は答へなかつた。すると、かの女はくやしさうな聲を出した。

「あたしの縫つて上げたビロードの緣に、顔を埋めてねてゐるんだもの、あの人……」

篤夫は苦笑をかみつぶした。

「……君、何故知らない人の傍で頑張るんだ。あんな態度は、よくないよ！」

美智子はびつくりしたやうに、

「……そんなつもりぢやなかつたわ！　でもゆうべから、わかんないことだらけですもの、あんな風になつちまふのよ。」

「それで三度もきたんだね。」

「五度でも七度でも、大體あの人に入れ代つて、あたしがあそこでねてゐてもかまはない筈よ！」

「くやしいかい！」

「まア！　失敬な！」

「君、あゝしてにらみあつて、一言も口をきかないでゐたのかい！」

「あんな有名なダラ幹のご令閨に、うつかり口なんかきけやしない！」

「ふん――」

「――それに初めにちよつと首をあげたきりで、蒲團から眼ばかり出して、じろ〳〵みてゐるんですもの、話すにも話せないぢやありませんか。」

「向うは病人だよ。それに名乘らなけれや誰れだかわからないぢやないか。君の樣子がへんだつたんだ、きつと……」

「わかるわ、名乘らなくつても……わかつてるから、意地惡をしてゐるんです。」

「どう？　これからどこか、もつと、明るい、東京のまん中の方へ出かけない？」

「あなた、浮かれてるのね。」

「そんなやうにみえる？　實は僕、ぜひ話があるんだが、けふあすに、あひたいと思つてゐたんだ！」

近代語「揚棄（アウへーベン）」

二時間程の後、どこをどう經めぐつてゐたのか二人の姿は日比谷の交叉點に見出された。

夜はやうやく宵をすぎてゐた。二人は濠端の柳並木の鋪道を櫻田門の方へ歩いて行つた。帝劇や新聞社の灯が、黑い水にうつつて、濠が夜空のやうに深くみえた。

「こゝは涼しい！」

と男が柳の葉を見上げてつぶやいたが、女は何も答へなかつた。うなだれて、一足おくれて男について歩いた。

そのまゝ、いつまでも歩いてゐたが、ふと女は顔をおこすと、男の背に追ひついて、

「でも、あなただつて、綾子さんを、好き、なんで、せう？」
男は女の腕をいたはるやうにかゝへた。
「何度いつても同じこと！　僕は、ちつとも、好いてゐないや！　これで僕の個人的な幸福といつたやうなものは完全に滅茶々々になつたんだ！」
「なつたんだなんて、あたし、まだ、ちつとも納得してやしないわ！」
「納得が行くまで、丁度いゝや、夜があけるまでも、この濠端を廻つてゐよう！」
男は濠の向うにあやめもわかずこんもりとしづもる宮城の森をみながら言つた。
「……君と好きになり合つたのは僕等にまだ今ほど階級意識の高まつてゐない時代だつたからなア。運動にはひつても、別に、個人的な生活はちやんとやれる、と思つてゐた。いや、その時の考へでは、それ程はつきりもしないで唯どうにかなる、と思つてゐたんだ。ところが、運動に身をさゝげるといふことは、二十四時間をさゝげることだつた！　いや、今度僕のしようとしてゐることはそれ以上だ！　一日に二百四十時間も働かうとするやうなことを、しようとしてゐるんだ。一時も早くあの人をこつちに引き入れ、四千人の組合を一つ左翼へとるために……僕ア、何もかも投げこむんだ。潔く考へてくれ、ね、今迄の僕等の『戀』の中にひきずつてゐた僕等のプチブル性を清算し、それを大きなプロレタリア的價値へ揚棄するんだ！　そのために、さつきから、つらいのを我慢して君に話してゐる。別れようつて相談なんかをかうしてゆる〳〵やつてゐるだけに、まだ僕等は仕事も心持もインテリ的なヒマとスキだらけなんだ。だれも僕等の仲間で、かうして君のやうな若い異性とこんなところをブラ〳〵歩いてるやうなそんな『幸運』な、呑氣な人間はゐやしないんだ！」
「わかつてゐます！」
女は頰にかゝる後れ毛でも拂ふやうに、烈しく首をふつて、
「あたしは外のことをいつてゐるんです！」
「外のこと？」
「く、くやしくつて、たまらないんです!!」
「………」
男はだまつてしまつた。
「……綾子さんは美しいし、悧巧だし、年も、とつてゐるし…今にあなたは…きつと、ほんたうに、あの人が好きになつてくるわよ！」
うつむいて、恥ぢるやうに、それに對して男はつぶやいた。
「……僕は、ダラ幹の肺病をうつされて、體の半分くさつてしまつてる女の、ご機嫌をとらなけれや……ならないんだ！　そんなに、いぢめるものぢやない！」
「だつて、だつて！　あたしの方は、あんたに、はふり出されて、あんたがあの人のところへ行くのを、指イくはへてみてなきやならいなんです！　それとも、あたしに、これからだれか外の男の人をさがせつていふの？……死んだ方が、ずつと苦しかないわ！」
……ふと、街燈の下をすぎる時、美智子の頰に涙の傳はりおちるのを篤夫はみた。
「何故そんなに話を個人的なことばかりにしてしまふんだ、君！」
篤夫の聲は切なげにひゞいた。
「……何故もつと、僕等の仕事のことを考へない？　たとひ、君と僕とが結婚なんかしたつて、會社員や文士みたいに、家庭の生活なんか一日だつて味へるものかい!?　それどころか、今なら僕なんか、まだ合法的だが、今年の冬あたりからは、すつかり×合法な人間になつてしまふんだ。さうして、半年保つか、一年保つか？

あとはどうせ、××さ！　君と別れて、あの人と本當に一緒になつたからつて、半年か一年だ！　君が嫉妬して、一生懸命に今、氣に病んでゐるやうな——あの人に對する共同の生活や、愛着の心持が僕に與へられるヒマも糞もあるものか！　僕だつて、君だつて、少くともプロレタリアの、勝利を、信ずる人間だ！　その歴史的使命の遂行のためには、持つてゐるすつかりをさゝげるんだぜ！　君だつて——その信念に燃えてゐる筈だ！　僕だつて、さうでなければ君と、別れる——なんて…考へる、ものか！」

ゼンマイの力が丁度終りに近づいた時のやうに、篤夫の言葉はおそく、低くなつて、いつの間にか、かれの足も停つた。

かれは片手で眼や鼻を無暗にこすつた。

「クサメが止つたやうに鼻頭が痛いや！」

——嗚咽の感情を巧みにごまかした。

美智子は、柳の幹につかまつて、聲を立てて泣いた。

「よせ！　美智ちやん、僕ア、君が傍にゐるととてもいけないや。」

「堪忍して…苦しい!!」

たふれさうな女の頸を、男はあわててかゝへた。

女は男の手をつかまへて、巣にかゝつた木の葉をふるひおとすクモみたいに、ゆすぶつた。顔は石のやうにこはばつてゐた。

「ゆるしてくれ、ね。」

男は何度も、その顔をなでた。

「僕、どうしても、指令を護る氣だ！」

「えゝさうよ、えゝさうよ！」

女は男の腕に擁せられて、喘いだ。そして、何度もイキをのみこんだ。それから、言つた。

「あたしだつて、護る氣よ。あたし何も全共に、關係ないけれど、同志として…篤ちやん！　だから…いつそ、あたしを…殺してくれないッ！」

「何をいふんだ、馬鹿な!!」

「苦しくつて…苦しくつて、眼が暈ひさうだ！…頼む！　かうしてゐるから、君！　腕で！　絞めて…くびッとくれ!!」

美智子は、立つてゐる足の力を失つてゐた。あをむけに、斜になつて、篤夫の腕にたふれかゝつてゐた。

篤夫は、おこさうとして、困つて、矢庭に美智子の頸をひくとあたりを見廻した後、食つてとるやうに、その面を、接吻した。

われに返つたやうに、美智子も涙だらけの顔で、篤夫にとびついて行つた。離れては、又とびついた。

さうして、暗い舗道の柳の樹の下で、犬の如くあはれな二匹の男女が抱きあつてゐるさまを、もし人がみたら、滑稽で、卑しかつたに相違ない。けれども、幸にして、人通りは杜絶えてゐた。

濠端を、かなり山ノ手へ上つてゐるこの邊りは、濠の向うに宮城の森が黒雲の如く沈もり、遠く下にみえる帝劇のイルミネーションを背景に、建築中の警視廳の高塔が、骸骨のごとく夜空にそびえてゐるきりだつた。

夜の霧

二人がもとの、日比谷の交叉點まで戻つてきた時、夜の東京はまつ白な霧に包まれてゐた。濠端の灯が、砲煙のやうな白いもののたゞよふ中でまたゝき、自動車の首燈が交叉點でうすれた。

「さやうなら！」

つないでゐる手に二人は力をこめた。

美智子は疲れ切つた面に弱い微笑を浮べた。

「一生、怨んでる！」

「……」
篤夫は默つて、握つたまゝかの女の手を打ちふつた。兩方から、ぱつと離した。
その刹那に、美智子は恐ろしい孤獨を感じた。
一秋の總會の成功を祈る！」
とかの女は二三歩男からはなれながら片手を肩先きでヒラ〳〵とふつた。
そして、約束通り、かの女は北へ、東京驛の方へ、歩いた。二三間、無意識に歩いて、ふり返つて、――もとのところに突つ立つてゐる篤夫に、ちよつとまた片手を上げて、かるくふつてみせた。
篤夫は笑つてうなづいた。
美智子はくるりと、踵をみせて、電車線路に沿うた灯の下を、ちよこ〳〵と遠ざかつた。
五六間行つたところで、又ふり返つた。
そして又、片手をあげた。見えなくなる迄、立つて見てゐてくれ、といふさつきの約束のしるしである。今度は篤夫も、默つて片手をあげ、二三度その手をふつた。
美智子は次第に遠ざかつた。遠くなると、かの女は何度も、何度もふり返つた。その度に、霧の中で、かの女の顏が小さく白く光つた。
だん〳〵薄くかすかに、小さくなつてゆく美智子のクレバネットの外套の裾にみえる足が、あとから追つかけて行く自動車の首燈に照らし出されると、篤夫の心は愛着に緊めつけられた。
「あいつも、……牢獄につながれた多くの先輩――あの尊敬すべき婦人鬪士の如くに、たのもしい階級的良心を持つてゐてくれる！　肚の底には、淋しさや、嫉妬や、憤ろしさの、多くの暗いものが渦まいてゐるだらうのに、それを階級的良心でおしひしげて泣き盡きて、あんなにしてかへつて行く。……あの夜露にぬれた小さな細い體の中に、可哀さうな、重たい負擔がかぶさつてゐるんだ……」
篤夫は、一句一句を、言葉にして、胸一杯に思ひ描きながら、いつまでも、交叉點の一方にむいてつつ立つてゐた。
もう美智子の姿はみえなかつた。向うでもみえない霧の中から、きつと、またふり返つてゐるだらう。
「おう、同志よ！」
かれは遠慮なく咽喉の中で、よんだ。
涙がかれの眸を掩ふと、夜霧の外景は幻となり、馬場先門の方へつゞく街燈の、點々々々は光りの珠數となり、夜の幻の遠くのはてを、自分の戀人がまだとぼ〳〵と歩いてゐるのだと思ふと、篤夫は目の前の世界が正に資本主義第三期に顯現するイカモノの世の樣だとは思ひながら、この都會の夜の霧がなつかしかつた。

階級的善行は戰術にならない

篤夫が本所の下宿へかへつてきたのは十二時すぎだつた。
ちよつと出てくる、といつて美智子のあとを追つて出たまゝ、もう五時間以上たつてゐた。
綾子はほんたうに眠つてゐた。ぐつたり疲れた篤夫が枕許に坐つた時、眼をあいて、
「おかへり……」
といつた。
篤夫はさつき出て行く時と、あたりが何か變つてゐやしないかといふやうに部屋の中を見廻した。
「あの方は？」
綾子はねたまゝ、篤夫の顏をみた。
「もう、おかへりになつたの？」
「うん……」
掛蒲團をずり下げながら、かの女は兩手をさし出して、
「ちよつと、おこして頂戴！……あたしに馬乘

りになつて……」

篤夫は、はにかんだやうに苦笑して、

「駄々をこねないで起きるなら起きなさいよ。」

「あなたに、おこして貰つた方がいゝと思つてるのよ。」

「どうして？……僕酒をのまうかなあ！」

とそこにおいてあるゆうべの殘りの壜をみていつた。

「あんたはあたしを、ねかせたり、おこしたり、どうでもできると思つてゐる人だから……」

「どういふ意味ですかね。」

篤夫は酒壜をひきよせてゐた。

「ね、三枝さん、さつきの人、女子大の學生でせう。」

「さうです。」

「そして、日暮里のアパートに住んでゐるんでせう。」

「フ、、、、やつぱり、きのふの失言がたゝつたな。」

「そんなことで×合法運動なんかやれませんよ。そこにある週刊朝日にのつてゐる『陽氣な天才泥坊』といふのをよんでごらんなさい。どうしてもつかまらない泥坊が、どんなに身邊の些事にも細心の注意をはらひ、どんなに一言一行をもいやしくしないかといふことを書いてあります。あたし、きのふからそれをよんでつくづく感心してゐるのよ。あんたなんか、まだまだお芝居は素人よ……」

と、かの女はひとりでおき上つてきて、折柄、ひや酒を茶碗に注いでゐる篤夫の手首をつかまへた。

「僕を泥坊と一緒にしなくてもいゝぢやありませんか……」

篤夫は女の方をむいた。

「何もわざ〳〵あたしの前で、そんなに丁寧に馬脚をあらはさなくてもいゝぢやありませんか。」

「馬脚？……」

「ホ、、、、あとになさいよ、お酒なんか……ちつとものめないくせに！　それよりもどこへ行つてきたの？」

「僕……外へ廻つたんです！」

「今迄一緒にどつかを歩いてゐたんでせう。あんたの體に、あの女の方の體臭がしみついてるわ。早くおつしやい！　氣になつて仕方がないわ。あれ、あんたの『愛人』でせう……」

「邪推しちや困りますよ。」

「ぢや伺ふ！　あんた何故そんなに冷酒をあふるの？」

「肉薄か。弱つたな、もうのみません！」

「いゝえ、ほしければ今にお燗をしてあげます。でもかへつてくるなり、がつ〳〵のめもしないお酒にとびつくところなんか、新派芝居よ、安つぽくて、見ちやゐられない。あなたが外であの方とどんな愁嘆場を演じてきたか目にみえるやうだわ。」

綾子はさういふなり、二つ三つ拍手してみせた。

「かんべんしてくれ給へ、ね……」

篤夫は赤い顏をして、綾子の傍へよつた。

「まあ、とても正直ね、もうかぶとオぬぐの？」

「ぬぐ……」

「ホ、、、。素直すぎるわ。」

「だつて初めからかぶとなんか着てやしないや……」

「謔！　あんたあたしを欺さうとしてゐたんぢやない？」

「え？　僕……そんなことがあるものか。」

「ゆうべ、うつかり欺されかけた。」

「冗談ぢやない!?」

篤夫の顏色は少し變つてゐた。

「ぢや、ほんたうに、好いてくれる？……もつ

とヂャーナリスチックな用語を使ふと、ほんたうに、あたしを『愛してくれる』？　つてしつかり念をおしたいわ！」

口では冗談をしやべつてゐるのに、綾子の眼の中は、光つてゐた。

「僕は譃はいやしない。」

「ぢや、あたしと、結婚して下さる？」

「その積りです。」

「あたし、すぐ大橋と、離婚して、あんたのところへきてよ。」

「いくらでも念をおして下さい。」

「あたしがあんたを占領したら、あの方が泣くでせうね。」

「えゝ、もう泣いてるでせう。」

「今夜、どこで、泣いてきたの？」

「霧の中で……」

「え？」

「外へ出てごらん、大へんな霧です。」

「あなたも泣いたの？」

「泣いた！」

「まあ、うれしい！　何て名前？　あの方。」

「吉村美智子！」

「あたし……三枝さん、身を退きませうか……」

「……………」

「知らなかつたんです。あたし……」

篤夫は漸く顏色を立てなほした。

「待つて下さい、そんなこといはずに……僕は今あの女と別れてきたんです。そのためにへんな樣子にみえるでせうが、あなたも、大橋氏と、これから別れる筈ぢやありませんか！」

綾子はやつと、輕口をやめた。そして、いつた。

「でもあたしは大橋を少しも好いてゐません。あなたはあの方を、よつぽどあてにしてらつしやるやうだのに、あたしのために、別れたんでせう！」

「……………」

「三枝さん！」

「え？」

「あなた何か非常に不自然なことをしようとしてゐるのね、あたしこれでも今年二十六よ、あなたよか一つ上ね、でも女の二十五六は四十男の分別があるつていひますよ。あなたが何をしようとしてゐるのか位、わかつてよ。ホヽ、ホヽ、尤もゆうべはわからなかつたのよ。ゆうべは、あなたに、一杯食つちやつた！」

篤夫は、前にあつた湯呑茶碗を横に倒した。そして肩をのばして、必死の顏になつた。

「君は、僕をなぶるのか!?」

「――――？」

綾子は、おどろいて少しあとへにじつてゐた。かの女は、人間のそれ程必死な表情を長い間みたことがなかつた。今、自分の笑つたことが純良な、しかし少し無邪氣すぎるこの靑年の心にどんな惡い影響を與へたかといふことをあらためて合點した。

かの女はしかし弱身をみせまいとするやうにフラ〳〵と立ち上つた。そこにころがつてゐる湯呑茶碗をひろふと、襖のかげにおいてある酒壜の前にしやがんだ。半分ばかり、入れて、なめながら立ち上る時、伊達卷がほどけて、二尺ばかり、おちた。

片手でそれをおさへて、二口、三口、のんだあとで、

「君こそ、あたしを、どうしようつて、いふの？」

と前こゞみに、首をふつた。

篤夫は、まつ靑になつて、脣をふるはせてゐた。――かの女は目をすゑて、俄かに荒つぽく叫んだ。

「何ふるへてるんだい！　お立ち！……お立ちつたら、お立ち！　生がわきのマルクスボオイ！　立てないのかい！　おい!!」

篤夫はそろ〱と、立ち上つた。

「君は？　何をいふんだ？」

「――何だい、その腰つきは！　何をブル〱、慄んところォ、ふるはせてるんだ！　そんなことぢや、××にひつぱられ二つ三つなぐりつけられたら氣絶しちやふぜ！　ほんたうの×××××××といふものを教へてやらうか！」

その時、篤夫はわけのわからぬ感情で女につかみかゝらうとした。そして片手に持つた女の湯呑茶碗の酒を、眞ツ向からたゝきつけられて、「あッ?!」と肱で顏を掩うたまゝ、退つた。

「はゝゝゝゝはゝゝゝ。」

綾子は、空の茶碗と一緒に、疊の上にころがつて、花の崩れるやうな笑ひ聲を立てた。

篤夫は、茫然となつて立つたまゝ眺めてゐた。女の體から酒の匂ひがした。

「あはゝゝゝゝゝゝゝ。」

「君！」

篤夫がどなると、綾子は初めて笑ふのをやめながら、

「いやよ、いやよ、三枝さん！　人を、五時間も、ほつといて、お酒を、湯呑に、二杯のんでやつた。熱なんか、かまふもんか！　その代りあたし、あんたの、いふ通りにしてあげる！　くやしいけれど……あんたの、思つてゐる通りにしてあげる……よつてきちやいやよ！　退いといて、……あたし、一人ぼつちで、澤山だわ、澤山だわ。……澤山！」

どくりと何度もイキをのみこんで、

「あんたなんか、問題ぢやないわ。あんたの背後には中田さんがゐるんぢやありませんか。中田さんにいひつかつてきたんでせう。正々堂々と、やれないで、卑劣だわ……そんな手は！　でも、ペテンにかけられても、あたし、あんたが好きよ！　可愛いわよ！　いふとほりに、いふとほりに、なつてあげる！　大丈夫よ……大丈夫、ですとも。あんたや、あの方……美智子さんは……とても一徹な正直な、可愛い、新しい人達だわ！　踏んでらつしやい！　あたしの屍をふんでらつしやい！　い、い、い、い、いくら、でも、通してあげるから！」

しやべりつかれるとそこからさき、綾子は、傷ついた錦蛇のやうに、疊に頰をつけて、泣き出した。

同情者（シンパサイザー）

綾子はもう十日間、家へもかへらず、組合事務所へも居所を告げず、芳雄の愛人の介抱のために、こなひだまでゐた懇意な婦人科醫のところへ、今度は自分が病人になつて倒れこんでゐた。

その院長の下村博士といふのが社民黨ファンだつた。十年前、三星精錬所の病院長をしてゐた頃、精錬所が虐待する朝鮮人のために、待遇改善を叫んで、重役や、警察に狂人扱にされて以來、現代における殘酷な搾取機構を、はつきり認識した」といふ人道主義的な、しかしいかにも圭角の多いこの醫學博士は、レーニンを讀み、ブハーリンを語る。けれども近頃まさか共產黨支持だと名乘るわけにも行かず、社會衞生學の範圍に屬する限りにおいての急進主義者として、勞働階級の間に夜間無料診療を行ひ、產兒制限をひろめ、政治的立場の方では、まづまづ商賣安全な社民黨支持といふところにしてゐる。

――一九三〇年代の日本の尖端的知識階級にはかういふ人々が多かつた。

綾子はその下村を自分自身の仕事に利用することから懇意になり、下村は進んでかの女の仕事の上の「同情者」となることから、友人としての同盟を結んだ。のみならず今迄健康の氣づかひや「女鬪士」としての境遇上の必要から、綾

子は下村に二度ばかり姙娠中絶の手術をうけたことがある。――女が生物として、場合によつては死を賭しても護る秘密を、患者と手術者といふ近代的な理解のもとに失つてしまつたあとにのこる或る本能的な親しみがよけいに今では「同情者」としての下村をかの女になくてはならぬものたらしめてゐた。

しかし、今度ばかりは綾子はその下村の顔もみたくなかつた。話すにも話せない事柄でありすぎたから。

綾子はひつそりと醫院の二階の南側の一室に臥たきり、氣の狂れた人のやうに、一日中まるで口をきかなかつた。

病氣から來る發熱はむしろもう遠ざかつてゐた。五分程の微熱はのこつてゐたが、いつもその程度の熱は平氣で押して飛び廻つてゐるかの女の平常を知つてゐる院長に、今度の綾子の樣子が氣づかれないといふわけはなかつた。

「婦人部長は少しへんだね……」

と、下村は浴衣の襟元に夜涼を感ずるやうなあけ放した部屋での、晩酌の時に、細君にいつた。

「大橋さんの問題がコヂれたんぢやない？」

夫に比べて、すんなりと苦勞なしに育つた筈のこの細君は、夫がこれまでかの女の仕事の上の援助者であるといふことによつて、綾子に對してはたえず恩惠を施してゐる者に對するプチブル的な寛容な好意を持つてゐた。

「いや、さうぢやなからう。何かよつぽどのことがあつたんだぜ。」

「さあ……」

「亭主の問題でなら、あれくらゐあの色女の世話をするんだから、今頃、あんなに弱りこみはしない、別の原因だぜ、きつと……」

「でも女はさうでもないことよ。」

「いや、大橋に限つてそんなことはない。その點はエライよ。」

「ぢや、體がどこか惡いのぢやない？」

「それが大して惡いところがないからヲカしいんだ。月經時でもないし、どうも何かわけがありさうに思へるね。もう十日もあゝしてゐるんだから。」

「さういへばきのふ綾子さんのところへ遊びに行つた喜美子がすぐ下りてきて、をばさん泣いてるわよ、つてびつくりした表情をしてましたつけ……」

それをきいた下村は苦勞人らしい自負で以て、ふうム……といさゝか考へこみながら、

「……こつちから何かきいてやらないと惡いんぢやなからうか？」

「さあ……」

といつたまゝ夫ほど頭の働かない細君には、却つてそのために人柄のいゝやうなところがあつた。

「お前行つてそつと何かいつてやつてごらん……」

「あなた行つてお上げなさい。綾子さんにはあたしのチエぢや柄にないことよ、ホヽヽヽ。」

――間もなく、下村は默つて起ち上つた。

診察室の方で、浴衣の上に白の上つぱりをひつかけると、ついてこようとする看護婦に、

「大橋さんだけだから、いゝよ！」

と、聽診器をガチ／＼手の中に丸めこみながら廊下を階段の方へと行つた。

――綾子は、十日前とは、見ちがへる位やせてゐた。脣が褪せて下瞼にかすかなうす紫の蠟をぬつたやうな色がついてゐる。情熱のすべてを失つてこゝに倒れてゐるかのやうにみえた。

「どうです……」

と院長は枕許に坐つた。

物憂さうにおきた綾子は胸をはだけて院長の

型のやうな聽診打診をうけたあとで、默つて又ねてしまつた。

下村はつぎ穗のないさまで、氣まづさうに坐つたまゝでゐたが、不自然にちよつと笑つたあとを、

「大橋さん、あんた一體どうしたんです、え？」

綾子は梳いた髮の中に後頭部を埋めた儘、

「もう、二三日、こゝに、ぢつとねさせておいて、ね。……」

「うん、二三日が四五十日でも一向かまはんが、それよりも君、體はちつとも惡くないぢやありませんか……」

綾子はあきらかに不眠に疲れた充血のあとのあらはな眸を張つて、

「すみません、ご心配をおかけして……」

「いゝよ。僕は何でもかでも君の『同情者』だから……。少し話したらどうです？」

と、聽診器を小脇へ片よせる下村の――この際、こつちの氣持にちつともぴたりとこない苦勞人意識を、――綾子はふとからかひたくなつて、

「先生……その『同情者』つてお言葉は、××黨の用語ぢやありませんか？」

「××黨同情者つて奴ですかね。××黨は知識階級中の同情者を組織して黨に結びつけ、擴大や活動に利用するつて話だが、日本でもそんなことをやつてゐるのかな？」

明かに博士のその知識は「××××××の研究」からの拔萃にちがひない。

「えゝ、やつてますとも、現にあたしなんぞ先生つていふ有力な同情者を組織して、さんざ利用してるぢやありませんか。」

「おや？　あんたはいつの間にそんな『左翼轉換』をやらかしたのかな？」

「見縊つちやいけません。あたしでも、これで突然『赤』に變るかもしれませんからね！」

「治安維持法でひつくゝりますよ。」

「惡法は撤廢していたゞきます！　ホヽヽホ。」

下村は、まやかされてわからなくなると、苦笑しながら默つてしまつた。

「……とにかく、先生！　大橋のことなんかぢやないんですから、心配しないで下さい。」

「いや、だからちよつと、心配なんです。」

「ホ、ヽ、ヽ、ヽ。同情者を組織の内部へ入れることはできませんよ。」

「どうしても話せないやうなことなら別だが……」

「だつてそんなに何かあるやうにみえて？」

「あゝ、どうもへんだと家内といひあつてゐるんですよ、子供でも氣がついて、小母さん泣いてらつしやるわ、つて心配してる位ですからね。」

「あら！……」

綾子は赤い顏になつた。下村はすかさず日常的な微笑の中へかの女を誘ひこんで、

「毒ですよ。……何なら家内をよこしませうか……」

「いゝえ！　先生！　どうぞもう二三日このまま、そつとしといて……きつと、あとでお話するわ。いえ、ほんたうはお話しないかもしれないわ。」

綾子は眞面目になつた。その泣き出しさうな顏をみると、下村も初めて手持無沙汰にテレて、ぼんやり聽診器のゴムを、結んだりほどいたりして、ゐにくさうにしばらくそこに坐つてゐるより外はなかつた。

「清算」の苦惱

下村のかへつて行つたあとで、綾子は枕に額をおしつけて、しく／＼泣いてゐた。

こゝへきてからは、毎日心ゆくばかり泣いてゐたのだが、――さらして一切の個人的生活の

慾望を淸算できるものならしてみようと、健氣に思ひ立つてゐたのだが——下村からあゝいはれると、かうも涙があるものかといふやうに又悲しくなつて泣け出したのだつた。

かの女にあるものは決して單なる「失戀」の氣持ではなかつた。それは、澤山の仔をはらんだどん慾な牝犬が、産みおとしても、産みおとしても、あとから〳〵逞しい陣痛を先立てて産れてくる執念き慾望の「淸算」の苦しみだつた。

かの女は危く悲鳴をあげさうになる自分自身をやつととりおさへるために、眞夜中に何度もとびおきた。

「左翼へ！　なんて今更子供じみてるわ。やめよう！　年甲斐もなく、氣が狂れたか何ぞのやうに：：：」

と思ひ慕る心は、轉向をくひとめようとするこれまでの生活の軛だつた。

けれども、それならば現在の自分に止つて、運動をこの上どう眞實に展開できるといふのだ。婦選獲得同盟か？　勞働婦人教育か？　でも自分の屬する社會民主主義は、すべての勞働婦人を、プロレタリアの眞實の解放の途へまちがひなく動員しうるだらうか？

社會民主主義のなれの果は、立派に新興ブルジョア政黨にまで成長した英國勞働政府に見出すことができる。英國の社會民主主義政黨の完全になしえた仕事としては、たとへばランカシア一地方の勞働者及勞働婦人だけをでも解放しうることの代りに、女の大臣を一人製造しえただけではないか。

社會民主主義の存在理由である社會を部分的に改造して逐次に全體に及ぼし、以て勞働階級の解放を達成するといふひどく間に合せな、童話的信條さへ、その部分的改造の第一着手において、誠に見込薄いものであることが、今では世界に知れ渡つてしまつたではないか。

社會民主主義によるプロレタリア解放のためにマクドナルドは英國皇帝陛下の信任篤き臺閣に坐り、傳統いと古き大英帝國主義の派遣者として弗王國の資本主義と交歡する。

社會民主主義によるプロレタリアの勝利と幸福のために、アルベル・トーマは佛蘭西帝國主義政府の軍需大臣として幾百萬のプロレタリアを戰爭の血の海に送りこんだ。

さうして、社會民主主義によるプロレタリアの解放のために、鈴井文次氏は、あつぱれ、政友、それとも民政との、聯立內閣の無產大臣にならねばならない。

議會政策による立法手段を通じて、プロレタリアのための幸福な社會が實現しえられる——無限の搾取者たる資本家の充滿するこの社會をそのまゝに——そしてもしそれがダメなら、わたくしは引つこみますとおつしやる安邊先生のために、どうか引つこまずに盡力して頂くやう、天下泰平、無事安穩、ダメとわかる日の永遠に來ないやうに、祈らねばならない。

社會は、——この資本主義社會は、もろ〳〵の社會民主主義者の裏書のないひ分や、プロレタリアの名において嚴かに行はれるその一切の悖德にかゝはりなく、現象としてそれ自身に持つところの辨證法的な法則によつて間斷なき運動をつゞけてゐる。

第一次世界戰爭以後、世界の資本主義は資本主義體系內の生產諸力の恢復期をすぎて、第三期の向上線をたどつてゐる。この生長の型は日本においても歐米諸國にやゝおくれつゝも尙十分に遂げられつゝある。その證據が、この生長を包む外被たる制度との矛盾衝突の現象となつてあらはれてくる。卽ち大正九年以來、斷續する「恐慌」は、それ自身間もなく資本主義社會が、その內包する危險狀態を、突破して生きのびようとするための最後的な突貫に

轉形し、第二次帝國××となつてあらはれてくるだらう。

今正に世界資本主義は、資本主義最後の段階である帝國主義時代に在る。かゝる段階において××は最早不可避的であり、そして、××の周期律は、資本主義の全線的××を招來する日まで、その內部的法則によつて幾度もくりかへされるであらう。

さうして、この社會の、――この資本主義社會の、かゝる宇宙律的自己運動が凡そ何者の手を以てくひとめられるといふのか？

社會民主主義者のどのやうな努力が、果してこの地軸の回轉をとめうるといふのか？ 思へば笑止の沙汰ではないか？

――綾子には、自分が今の陣營にふみとゞまつてゐる限り、自分の仕事はたゞ三千の勞働婦人に、かの女たちの「淸き一票」を、光榮ある無產大臣の製造に協力せしめるため、せい〲婦人參政運動に奔命する位のものだといふことがわかつてゐた。

東京紡績は總聯盟の金穴である。社會民主黨に、多大の「理解」と「同情」のある社長天野嘉之助からこつそり選擧費用の若干金をとり出すために、會社の經營を破壞し、階級鬪爭を激發させるやうな、「爭議」などは絕對におこしてはいけなかつた。

それが東京紡績勞働組合の幹部である大橋芳雄以下のダラ幹たちの「指導方針」であつた。何事も隱忍して黨のために！――議會に五六十位の議席を夢み、大臣官邸を夢み、序でにもろもろの無產大衆のための立法や施設を夢み、それが貴族院と樞密院の「許可」を得られるだらうといふことを夢みてゐる社會民主黨のために――協力し奉仕することなのであつた。

こゝ五年の間、馘首と賃銀値下げのために、大正七八年の最好況期に比して、東京紡績從業員の勞働條件は、綾子の調査によつても百に對する六十四に下つてゐた。

幹部たちはそれを極力一般の產業界がこの通り不景氣なのだから、まだ之でもほんたうは平均指數の上にゐる。」と說明して、組合員の不平不滿を抑へて來た。幹部のこのやうな「指導方針」により、こゝでは四千人に係る勞働者が五年間に三割六分の利益を失つて來てゐる。

「何事も隱忍して黨のために――」わが光榮ある「社會民主黨」のために！

綾子は、一步退けば、このダラ幹によつて氾濫させられた泥濘の中に改めて、その足をおろさねばならなかつた。

「左翼へ！」

のかけ聲から遠ざからうとする退嬰心は、すぐにかの女に、この氾濫した泥濘を展開してみせた。

かの女は苦々しく目をとぢる。

「かまはないわ！ 行かう！ 突貫しよう！ ×合法へ！」

と叫び出す心が、同時にそれと反對の臆病な心でもあることに、かの女は苦惱し、赤面するのだつた。

かの女の眼の前にはじめ〲した留置場の闇に、うよ〲と蒼白い淫賣婦の顏の並んでゐるのがみえた。

又、一間に二間の狹い、小さな窓のたつた一つしかない洞窟のやうな未決獨房がみえた。

「たつた一人で……たつた一人であたしが、その中へはひつて行くんだ！」

と思ふとかの女の心は萎んだ。

かの女は自分の心が何故萎むのだらうと、惱んで、焦つた。

そして、そこに、心の奧にのこつてゐる反階級的な毒素、――社會民主主義者として、しらずしらずの間にためてゐたアカのやうな、數々

のプチブル的慾念のせゐだと氣がついた時、かの女は大きく自らを嘲笑つた。

篤夫と美智子は反幹部派の傀儡となつてあたしの前に凜々しくもかれらの「戀」を犠牲にしてみせた。何と手輕に個人的慾望を「清算」出來うる「新時代」よ。

あいつらは、たえず運動を小兒化してゐるマルクスボオイであり、エンゲルスガールにすぎないと思ふことに變りはなかつたが、たゞ「左翼」のために、「指令」のために、といへば、「戀」も「生命」も無分別に叩きこんでしまふ生一本な、治安維持法時代の若者であることには、參つてしまふ！ 成立しがたい戰術を實行にうつす稚氣は、そのまゝ××となつてこちらの胸を打つではないか。

たしかにあいつらは×合法の産物だ。××××の×しぶきの中から生れた魂を持つてゐる！

やつぱり、あたしなどは、××黨出現以前の運動家だ！ 左翼へ、プチブル的な個人的生活の慾望を携へたまゝ行けると思つて、篤夫を好きになつたのは、死におくれた喘ぎみたいなものだつた。

行くならそれらの不純物を清算して、左翼闘士の肉體を、飽迄も破碎しようと待ちかまへてゐる×××法の前へ、×××となつて自分自身をなげつけるばかりだ。

そこには、個人的生活の凡そ何一つかへりみる餘裕などあるだらうか？

「行かうか!? 行かうか!? たつた一人で！」

その時、俄然として大きな音がかの女の心臟の中で破裂した。

「何が！ 何が！ 何が！ 一人なものか!!」

何故、さつきから否、この十日ばかりの間「たつた一人で」とばかり思ひ詰めたんだらう。

組合幹部を除名されて、今頃きつと×へ行つてゐるに相違ない中田の、むツつりとした顏がかの女に思ひ出された。篤夫も、美智子も、——美智子は丁度、生きる途を失つて彷徨の門出をした頃のなつかしい自分の姿だ——みんな、同志ではなかつたか?! みんな何れは同じ……。

——さうだ。綾子は此頃、左翼の、古い闘士でわざと官憲につかまつた男が「何故逃げなかつたか？」と訊かれて、涙ぐみながら「なるたけ早く×××へ送つてくれ。おれも疲れた。久しく會はないみんなと一緒になりたいんだ！」といつたといふエピソードを思ひ出した。

追跡をうけながらの烈しい仕事に疲れはてた人々がさうした氣になる心持がわかる氣がした。×××の未決には何百人の同志がゐる。

すべての個人的慾望の抑制に鐵の如くきたへられたそれらの人々に、××の生活が、外部の人間がプチブル的な感覺や感情で思ひやつてゐる程に、不自由でつらいだらうか？

綾子の知つてゐるある若い女は×のレポーターに使はれてゐたが「こゝへきて電車賃をせびり歩く氣苦勞と、月末の拂ひの心配とがすつかりなくなつて、體が一貫六百肥りました。」といふ手紙を獄中からよこした。

「こんな不自由なところに閉ぢこめられても、マルキシズムの信奉者には歴史の必然としてのプロレタリアの×××對する信念が動かぬかぎり、不思議な程呑氣な圖々しい、ゆとりのある生活を送ることができてゐます。」といつか手にした「獄窓通信」といふ册子にのつてゐた××のだれかの手紙が、今更のやうに、綾子の頭に浮んできた。

かの女は、マルキシズムの世界に引きよせられ、レーニンやスターリンを××する事によつて、右翼での組合運動の長年の經驗を××××××の上に生かさうと、ふるひ立つたのであつた。蔽ひ切れぬ智慧と良心が自分をさうさ

せるのだと思つたのだつた。しかし、自分こそほんたうの××××××××でも何でもなかつた。

篤夫に、ほんたうの戀人があるとわかつてこんなにも打ちくだかれ、こんなにも惱んでゐるごく普通の慾深い女なのだ。

ほんたうをいへば篤夫をだつて、どこまで愛してゐるんだらう？　尤も獻身的な、他愛的な愛などといふものを信ずる程時代おくれではなかつたが：：しかし、自分の一所懸命に愛してゐたものは篤夫だつたのだらうか。それとも自分自身の慾情だつたのだらうか？

――それに答へるやうに、かの女の體のしんの方でちくりと疼くやうな感覺がおこつた。

「慾望を捨てるんだ！　自分を殺すんだ！」

かの女は眼をとぢて、ぢつと、天啓を待つ人のごとく心をしづめてゐた。

するとはからずも、心の底から、新たな、思ひもかけぬ涙がこみ上げてきた。かの女はいつの間にか眼をあけて、部屋の天井を眺めてゐたのだ。

そして、この部屋が、二年前、二度目の「手術」をした時、入院してゐた部屋であることを思ひ出した。かの女は更にその三年前の初めての「手術」の時のことをも思ひ出した。――二度共、强ひて産まうと思へば、營養不良による肺尖加答兒の增惡――といふ懸念はあゝにはあつたが、産んで産めないことはなかつた。それを半分は「運動の邪魔になるから。」といふ理由で二度共四ケ月目に中絕してしまつた。

最初の子が男で、次の子が女であつた。

「今あれば、男兒が五つで女兒が三つだのに：：：」

と思ふと、かの女は今度は他愛もなく、大きな聲をあげて、泣き出してしまつた。

「どうした!?　どうしたんです？」

下村がいつの間にか、心配したとみえて、上つてきてゐた。

「先生！　あたし、この世に自分の子供を一人も：：一人も、よう作らずに：：さ、さ、さよなら、いたしますわ！」

やにはに、かの女は、下村の膝にとびついてうめくやうに、むせんだ。

「あゝ、ほしい！　ほしかつた！　一人でも：：あたし、自分の生命を、この世にのこしておきたかつた！」

「――：：：：!?」

下村は、見當のつきかねた當惑顏をして、かの女の背中をなでさすつてやつてゐた。

明日へ！

泣いてゐたかの女は、突然、下村の膝の上に、ぐにやりとなつてしまつた。

「どうしたッ！」

下村は、びつくりして、しかしどこか醫者らしい用意のこもつた大聲を立てて、綾子を抱きおこした。

綾子は氣を失つて齒をくひしばり脣の色もなくなつてゐた。

手早く瞼をひらいてのぞいた下村は、かの女の體を、頭を下に、足を高くねかせようとして、

「おい！」

と、階段の方にゐる筈の細君をよんだ。さつきから階段の下でうろ／＼してゐた細君は、あわてて、足早に、上つてきた。

夫婦で、綾子の體を目的通りねかせてしまふと、下村は失神者の首筋を摑んで揉みほぐしてゐた。

細君が一旦下へ行つて、急いで葡萄酒を持つてきた頃には、綾子は、やつと眉間に皺をよせて、かすかに息をついてゐた。

「おのみなさい！」

細君が葡萄酒を與へた。
綾子は眼をつぶつたまゝ二口ばかりのんだ。
「何でもない。腦貧血だよ。」
下村は細君にいつて意味もなく笑つた。
「胸が……苦しかない？」
と、大きな聲で、綾子にきいた。
綾子は、かすかに眼を開いて、下村たちの方を見上げた。少し、苦しいといふ意味である。
下村は急いで、部屋を出て、下りて行つた。細君だけが枕許についてゐるのをみると、
「すみません。」
と力のない聲で綾子はいつた。
「しつかりなさいよ、灯を暗くしませうか？」
「か、ま、ひ、ません……」
そこへ、看護婦を先きに立てて、下村が又はひつてきた。
聽診と、檢脈を同時にしながら、
「心臓が重苦しければ、さらりと癒る注射をして上げようか……」
「えゝ……さらりと、死ねる、注射なら、なほいゝわ。」
綾子はかすかに微笑つた。
「なアんだ。冗談がいへる位ならよしとかう。」
下村も微笑つた。
「びつくりしましたわねえ。」
細君がほつとした表情になつた。
「おどろいたよ。ほんたうに……」
といつた下村は、
「もういゝよ。持つて行つてくれ。」
と看護婦に、注射の用意のニッケルの藥箱を、おし戻した。
「譯はしらないが、一度大橋君をよぶことにしたらどうです？ え？」
綾子は小さな聲で答へた。
「さうね……組合の女工さんたちが……あたしの行方が、知れないと、もう今頃騷いでるに……違ひないから、……あすあたり、大橋が自分で、こゝへさがしにくるでせう。」
「かまはなかつたら、電話をかけようか。」
いくら別れてはゐても、芳雄ならもつとつゝこんで綾子の苦悶をきゝ訊すことができるだらうと思つて、下村がさういつてゐるのが綾子にはよくわかつた。
「でも、可哀さうだから……あす迄、よばずにおいてやつて……下さい。」
「え？……」
下村にはのみこめなかつた。
「あたし、先生、あした、先生に立會つて頂いて、大橋と別れるわ！」
――やつぱり、さうか！ と下村はやつと見當がついて、細君と顏を見合せた。
「しかし……そんなことを急に……」
「いゝえ。」
綾子は抑へつけるやうに、
「十日間考へた上なんですもの！ 今でも別れてゐるやうなものだけれど、はつきり、片をつけたい必要ができたんです。」
「さういへば仕方がないやうなものだね、しかし、大橋君がどういふか？……」
「未練がましいことをいひ出したら、先生に介錯して、いたゞかうと思つて……ゐるんです。」
「困るね、そんな……」
「おいや？……」
「よしたまへ、病人のくせに、醫者をからかふなんて……」
「ごめん！」
「冗談ぢやない！ ほんたうに――」
しかし、綾子は少しづつ首をうごかせて、喜ばしさうな笑ひ聲でいふのだつた。
「あゝ、せい〳〵した。氣絶もするもんだわ、決心ができればあとは何て……樂なんでせう！

「先生、もう、大丈夫よ、あたし、もう泣かないわ、ほんたうに、安心して頂戴！　すみませんでしたわ、ホヽヽ。」

「そんなに、おしやべりをすると、いけません。又ふら／＼と來ますからね。」

「だつて、先生の介添で、あした大橋と別れるんですもの、こんなさつぱりした氣持のものはありませんわ。永い間の癌を切開したやうなものだわ。」

「あら、まあ！」

細君がいつた。

「僕は何も介添を引受けてやしませんぜ。困つたな、どうも――」

「先生はそんなに、ダラ幹を支持なさるんですか？　しよつちう、ブハーリンをよんでらつしやるくせに。」

「いや、ブハーリンも右傾してコンミンテルから追放されましたからね。」

「ダメよ、そんな、ゴマ化したつて…、あゝ、とてもうれしい。あしたは、あたしもうおきるわ、そして、退院するわ！　大橋と別れたら、あたし元の岸綾子になるんです。どうして、こんなに、氣持がいゝんでせう。早く明日がくればいゝに…明日が！」

指令を受取る

その同じ夜、本所松倉町の裏通りにある自由勞働者のあつまる一ぜんめしやのきたなく細長いテーブルの端つぽの方で、二人のみすぼらしい勞働者が、向ひあつて飯を食つてゐた。

年をとつた大きい方の勞働者が、みそ汁の椀をおいてうすぎたない顏をあげ、二十年も前にはやつたやうなビロードの鳥打帽の、色目もわからぬ位すゝけたやつを、片手でひよいと額の上の方へ押し上げた時、意外にもそれがいつかの反幹部派委員會に來てゐた委員長中田の顏であつた。

前に坐つてゐる若い方の男はボロ／＼のモヂリ外套をきてゲートルをまき、ゴム靴をはいて、一所懸命、おしんこで茶漬をかきこんでゐたが、それはまぎれもなく篤夫だつた。

二人は五分程前にこのめしやへはひつてきたばかりである。

「それで、どこへ行つたかどうしてもわからないのかい？」

中田が小聲で篤夫にたづねてゐた。

「えゝ、家にもゐないし、事務所へも姿をあらはさないので、又大橋さんと喧嘩して信州へ逃げてかへつてるんぢやないかしらつて、山根勝子、田川愛、三島由江つてな婦人部長のフラクションだといふ連中が事務所へ出て來て騒ぐんです。僕が知つてるだらうつて盛んに攻め立てるんですがね…で僕も、かういつたんです。綾子さんは、最近杉浦の妹が子供をはらんだのをご亭主にたのまれてその始末をしてやつた。それがすんだ晩、僕の家へたふれこんで喀血した。そのまゝ僕の家に三日ねてゐたが、よほどそのことで精神に打撃をうけてゐるとみえて、とても悲觀してゐた。三日目に自宅へかへつた筈だのに、姿がみえないので、僕も心配してゐる。こんなに綾子さんを苦しめる大橋氏は實にけしからん。あいつは畜生だ！　總聯盟の杉浦氏だつて名士だの代議士だのとぬかして自分の妹にそんな不義を働かせて知らん顏をして綾子さんをふみつけてゐる！　大體幹部連はみんな女郎屋の牛太郎か何かみたいな人格のない人間ばかりで風上にはおけない連中だ！　つてな風に大分アジつたんです。」

篤夫のかうした話をきゝながら、中田はむツつりと默つて飯を食つた。かれの癖でそんな時、うんとかフンとか返事の代りにうなづいてみせるといふことさへしなかつた。

篤夫はそのために中田が鐵人間か何かのやうにみえ、いつもとりつきにくく、妙なほこりくさい壓迫を感じてゐる。今もそれだけ話しても中田が、牛のやうに額を下げて聞えないものの如く飯を食つてゐるので、取りつくしまのないやうな心持に壓されて、默つてしまつた。

しばらくして、中田はそつと睡眠不足の眼をあげた。

「そのフラクション連中を、できるだけ全部、君の責任で君の家――が遠ければ、遠藤の家へでも、集めたまへ！ 今夜がよからう。婦人部長の行方不明について緊急相談したいからつてつてな。そして遠藤、山本、三宅ぐらゐが自然におちあつたやうにして、その會合に參加し、婦人部長を氣の毒だといふ女連の感情をうまく幹部攻撃にまで誘導して、フラクション連を結集してしまひ、それをほんたうの反幹部派フラクションに組織しろ！ そのフラクを使つて、寄宿舍内を斬りまくらせるのだ……いゝかね。第一寄宿舍から第四寄宿舍まで、それ〴〵内部に五六人づつのフラクを配置するんだ。フラクの任務は、幹部排撃のアジだ。まづ大橋に攻撃を集中して、他の七人の組合役員をも同類だとアジり、秋の總會迄に全部奴等を追ひ出し、婦人部長を組合長にして、女で天下を取るんだ……と煽るんだな――さうして、總聯盟幹部が干渉をはじめたら、東京紡績はいつでも總聯盟全體の、つまり全國的反幹部派運動へとのり出すといふ方針を與へてその時はすぐ男工部に連結させる。急に連結できない時、以來ずつと女工フラクの會合を持ち、君が責任者となつて、反幹委員會に結びつけろ！ あとは反幹委員會の問題だ。わかつたかね。」

と句讀點をうつやうに、考へ〳〵言葉を吐いた。

中田のさうした調子の發音がいつもかれの指令であることを承知してゐる篤夫は、指を折つて中田の言葉を數へたが、

「わかつたかね。」

といはれて、低聲で相手の言つたことを、反復して行つた。

「では！……」

中田はのつそりともう立ち上つてゐた。

赤ペンキで文字を書いためしやのガラス戸を、外へ出ると、軒先きに竹籠をのせた小型の荷車がおきすててあつた。中田はその轅棒の中に身を入れると、

「けふの問屋相場でボロが貫六錢の下げだ。いやになつちやつたい、ほんたうに……」

と急に妙なアクセントで篤夫に話しかけながら、車を引つ張つて、めしやの軒先きをはなれた。

篤夫は默つて二三町の道程の間、中田について歩いた。車を引つ張つた中田の姿は、どうみてもまぎれもない、のろ〳〵した屑屋だつた。着物の肩口が破れて、竹籠の中から秤の棒が頭を出してそれをつゝくやうに搖れてゐた。

電車道へ出て、停留所で、

「ようウ！」

と向うから聲をかけて別れて行つた。そのまままつッ立つてゐる篤夫の眼に、闇の中へ遠ざかつて行く中田の車を引つ張つた大きな背中と、カタッ、カタッとひどくひどくその荷車の輪とがいつ迄もみえてゐた。

多くの×員が、いろ〳〵な職業に身をやつしてゐるといふことを篤夫はきいてゐるが、古くから運動をやつて方々の警察に顏を知られてゐる中田はあゝしなければかくれてもゐられなかつたし、妻子五人を養つても行かれないのだ――と思ふと、階級的任務をになつたあのずんぐりと大きな、破けた中田の肩口に、亦あま

りにも重たい時代の軛がおはさつてゐるのだと思つて……篤夫はもうみえなくなつた方向を路傍にたゝずんだまゝ眺めてゐた。

女工フラクション

舎監に何かあるな、と氣づかれぬやう、寄宿舎にゐる女工を十人も一時に外へ引つ張り出すことは一寸骨が折れた。

二部交代の「早出」組が、工場から寄宿舎へかへつてくるのは午後二時である。出勤は午前五時だから、かの女達は毎日九時間を、職場に追ひ込まれてゐる。紡績工場のうん氣にゆだり、織機工場の轟音に耳をつんぼにされて埃のために頭髪は灰をかぶつたやうになつて、寄宿舎へかへつてくると、それでもかの女等、大勢の、紡績工業資本主義の犧牲羊は、じやがいもと朝鮮米の晩餐のあと就寝時間の九時までを、あはれにも人らしくはしやぐことができる。

「模範女工」は舎監の許しを得て門限の八時半までは他の一般女工よりはらくに「町」へ出かけられる。

婦人部長心酔者で、「模範女工」である第一寄宿舎の山根勝子を、篤夫が首尾よく寄宿舎の門口でつかまへたのは、中田と別れてから半時間とたつてゐないその夜の七時すぎだつた。

勝子は「婦人部長のことで急な相談事ができたんだ。」と篤夫からきかされると、「ふん。」といつてすぐに同室の田川愛と三島由江をよび出してきた。——とつて返して第二寄宿舎からも二人の仲間をつれ出して來た。

「第三と第四にゐる松永や安井、それからあと、なるたけ大勢婦人部長組を、そつとよび出してくれないか。みんなくるといゝ！」

「だつて松永や安井は今工場だもの、駄目だよ。」

「晝出は仕方ないさ。朝出の内の、婦人部長といゝ仲の子をみんな、そつとよび出してこいよ。」

「よし、その代り、こんなところに四人も五人も立つてちやへんだわよ。新ちやんの家なら、あたいわかつてる。あとからつれてくから篤公先きへ行つてろよ。」

新ちやんといふのが遠藤の名だつた。

「ぢや、待つてるからな。」

と篤夫が四人の女工たちとかたまつて歩き出した時、勝子はひとりで門内へ消えた。

遠藤の家は會社の正門のみえるすぐのところにあつた。さつき、篤夫が今夜の計畫を話しておいたので、遠藤は二階にねころんで女たちのくるのを今か今かと待つてゐたが、がや〱といふ氣配に、階段をとびおりてきた。

「よう！」

四人の女を中に挾んで、篤夫と遠藤が顔を見合せた。

「上れよ、上れよ！」

と篤夫が女たちにばかに大きな聲をかけた。女たちは障碍物のり越え競走みたいに下駄をぬいで土間から座敷へかけ上つた。

——二階におちつくと、十分とたゝぬ後から勝子が更に二人の女と一緒にやつてきた。女の數は七人になつた。男は遠藤と篤夫の二人である。

「何よ、話つてのは？」

と勝子がいくらかまくれ氣味の妙に可愛氣のある鼻をつき出すやうにして、篤夫たちの方をみた。

「居所がわかつたの？　大橋さんの……」

由江が傍からきく。——綾子や美智子とはまるで違ふ——第一、かの女たちは眸をきら〱させてゐた。かうして七人も揃ふと鹽つくさいはち切れさうなプロレタリアの生成力が篤夫の

とかく線の細い心理を、壓倒しさうだつた。

「いや……」

かはる〴〵丸い膝を跳ね動かせ、肩をくつつけ合つて迫る女たちを、篤夫は舌なめずりして制した。

「まだわからないんだ。僕ア一所懸命さがしてる、ところが……あるところからはつきり綾子さんの意志がわかつてきた。綾子さんは、組合長と、今度いよ〳〵別れるのに違ひないんだ！　その積りでかくれたんだ。しかしさうなると、いろ〳〵まだこの上に組合の事でよくないことがばれる――それで大橋芳雄、色を失つてやがる！」

「痛快！」

「へえ！　よくないことつて何？」

「別れるのがあたり前よ。婦人部長つたら辛抱しすぎたんだわ。」

「異議なし。」

「何よ！　默つて！　ねえ三枝さん！」

勝子が皆を抑へて、篤夫の方へ膝をのり出した。

「あたしたち、ゆうべ、みんなできめちやつたのよ。婦人部長がこのまゝ、組合からゐなくなるんだつたら、あたしたちも、みんなで脫退するつてことに……」

「それやいかん。」

と遠藤が横からいつた。

「さうだよ。君等が脫退すれば組合はつぶれてしまふよ。そんなことをするよりも、飽迄婦人部長をさがし出してき一、婦人部長が大橋氏と別れるんだつたら、大橋氏の怪しからんことを暴き立てて組合からあいつを追つ拂ひ、代りに綾子さんを、われらの組合長にするんだな、何事も積極的にやらないといかん！」

「うわあッ！　いゝわ、すてきッ！」

「贊成だわッ。」

七人の女は一緒くたに沸いた。

篤夫はつゞけていつた。

「第一、大橋氏や今の幹部だな、竹中にしたつて村井にしたつて、七人が七人ともぐるだぜ。今年の一月の操短で賃銀二割下げが實施された時、組合は爭議になりかけたらう。あの時、とうとう强制貯金の隨時拂戾、工場内の衞生設備改善てなわづかな交換條件で、泣きねいりにさせられたのをみんな覺えてるだらう。あの時以來、みんなの賃は二割づつ下つてるぜ。その前にだつて深夜業廢止にからんでうまい方法で一割下つてゐるだらう。この一年半の間に三割下つてるんだ。一年半前迄平均二十三圓程についた君等の收入が今はみたまへ、ざつと十七圓位にしかつきやしない。」

「だつて、不景氣だから仕方がないさ。」

今年十九の田川愛がいつた。

「さうだらう。不景氣だから仕方がない――と、僕等は幹部等にうまくあの時から欺されてるんだ。その實會社は、景氣のよかつた一昨年と同じ二割の配當をしてるぢやないか。不景氣だから仕方がないといふのは譃なんだよ。――そこに組合長以下七人の幹部等のからくりがあるんだ。」

「どんな!?」

「どんな?」

「あの今年の爭議のおこりかけた時、社長はあわてて大橋を呼んだ、組合長をだ……君困るぢやないか、この際工場を騷がせるやうぢや、社會民主黨への應援はことわる……といつた。應援といふのはその時、議會が今にも解散されるとわかつてゐたので、引きつゞく總選擧に金一萬圓也を社民黨へ寄附する話ができてゐた……そのことなんだ。その一萬圓を貰つて、杉浦敏也や町岡熊造が代議士に打つて出なければならない。いや第一、大橋が東京第五區から出た

いために、ぜひこれは爭議を犠牲にして、選擧費用を拵へなければならない、つて破目になつてゐたもんだから、世間一般が不景氣だから仕方がないの、一時的な辛抱だの、金解禁がすんだら又もとの通りになるだらうの、その代り工場内の食堂や便所をきれいに改善するからのつて、うま〳〵われ〳〵四千人の組合員をゴマ化したんだぜ。幹部はわれ〳〵の利益を社長に賣つたんだ。そして、大橋の奴なんか、あゝして見事落選しやがつたぢやないか。われ〳〵の血と肉をはいで行つた金で、選擧遊びをしやがつて、代議士にならうつて、自分一人のことばかり考へてやがるんだ。杉浦の妹と、日暮里のアパートで暮らしてゐるんだつて、何の金でそんな贅澤な眞似をしてやがるか、凡そ見當がつくだらう。われ〳〵はもう長い間欺されつゞけてゐるんだ。君等は婦人部長が可哀さうだ可哀さうだといつてばかりゐるけれど、君らだつてあはれなもんだ。いや三千人の女工はダラク幹部の食物になつてんだからねえ……僕ア、今迄は婦人部長に遠慮してこんなことアいはなかつたぜ。だけどもう綾子さんは大橋に愛想をつかしたんだ。別れるんだ。だから思ひ切つてぶちまけるんだが、ダラ幹共の惡事はまだ〳〵いくらでも、今夜中あばき立ててゐても數へ切れない位あるんだ。」

七人の女たちは、默つてしまつた。そして緊張した不審さうな顏になつて、てんでに、篤夫の方を一所懸命に、見つめてゐる。

遠藤が代つてしやべつた。

「そればかりでないんだ。おれはこの間から調べたんだぜ。押上の龜紡なんか、女工賃銀平均が現在二十四圓だ。もつと前は三十圓だ。龜紡では東京紡よりも四割も高いんだぜ。しかも、龜紡は八時間勞働だ。こつちは九時間だぜ。向うへ行つてみろ、寄宿舍なんか、あんなバラックぢやねえや。緣のついた青疊で、二十疊の間には二間の床と違ひ棚がついてゐて、天井はベニア板だ。――そこで、たつぷりある休み時間を利用して、行儀作法とか、茶の湯生花琴なんてものから裁縫、讀み書き、ダンス、體操つてなものまで敎はつてるんだ。龜紡の奴らはだからダンスなんかうまいぜ。何千人つていふ君たちと同じ年頃の娘がさ、毎日二時間少く働き、賃銀は四割多くて、おまけにそんな果報な目に會つてるんだ。何も茶の湯とか行儀作法とか、ダンスとか、そんなブルジョアの眞似事なんかどうでもいゝさ。どうでもいゝが、そんなにして、遊べるのが羨ましいぢやないか。龜紡ではそんな待遇をしてゐるんだぜ。それで當り前なんだ。更に進んで、七時間制で、週休を拵へるのが當然なんだ。ロシアなんか七時間だよ。一週一回休んで、もとは××だつた美しい大きな建物の中で自由においらのやうな勞働者が遊んでるんだ。――ロシアのことなんぞ、遠いからどうでもいゝが、つい目と鼻の龜紡と、この東京紡とで何故、そんなに違ふかつて、君たち今迄どうして氣がつかなかつたらうかネ。……何故東京紡は四割も安い十七圓で一時間多くこき使つて、あんな汚いバラックの寄宿舍へはふりこんでおくんだらう？」

――遠藤は七人の相手の一人一人の顏を、押しつけるやうに、見つめては、語つてゐた。かれはいつの間にか赤インキを刷いたやうな顏になつてゐた。

遠藤のあとを又篤夫がつゞけた。

「幹部のせゐだよ。勞働者は女工でも男工でも、戰はなければ、だん〳〵不利な條件に陷ちてしまふんだ。しかるに僕等の組合の幹部は、爭議がおこりさうになると、見ろ、いつだつて必死になつて喰ひとめるぢやないか。戰つて、會社に賃銀を上げさせ、働く條件を良くする要

求を、この二三年一度だつて會社へ持ち出したことがあるか？ ない！ ちつともないぢやないか。だからだよ、だから、こんなに惡くなつて來てるんだ！ われ／＼は幹部のために、とても損をさせられてるんだ。損してるんだよ。――得をしてゐるのは幹部だけだ！」

この時、遠藤が腹をつき出し、肩をそびやかして、

「天野から金を取つて、女狂ひをして、代議士になりそこねてやがるんだ！」

「さうだ！ 總聯盟の杉浦の奴なんか代議士になる前から、汽車なんかいつも一等にのつてやがる。」

「組合長の奴、こなひだ省線の二等の箱から下りてやがつた。親分杉浦を見習つてやがるんだ。」

「いや、組合長つていへばね、今年の春、杉浦の妹と密通いた時、婦人部長にかくれてそつと手に手をとつて京都へ遊びに行つたんだ！ 花見に行つたんだとさ、泊つた宿屋がどこだと思ふ、いつも杉浦の泊る定宿の、木屋町の福家つて大きな宿屋だ。一晩二十圓もとる宿で昔そこへは近衞侯爵とか、床次内務大臣、大木伯爵つてな人たちがよく泊つたものなんだ。杉浦はそこへ泊る。多分、杉浦の紹介で行つたんだらう、大橋とあの色女とはそこへ一週間滯在して毎日、自動車借り切りで京都中見物して廻つたんさ。ところが運の惡いことにはインクラインのところでよそのおばあさんをひきたふし、そのはずみに川の中へ自動車ごと轉りこんだ。何しろ總聯盟の大橋芳雄が色女と一緒に、自動車で川へはまつたつてんだから、大阪の新聞にでかでかと書かれた。折柄大阪では、總聯盟の所屬の三軒屋紡績にストライキがおこつてる最中だつたので、同じ總聯盟の幹部ともあらうものが同志が血みどろに戰つてる時に、色女と、自動車を借り切りで、京都で花見をして遊んでゐるとは何事だと組合員が憤慨し、ストライキよりもその方の騷ぎが大きくなつて、とう／＼東京の本部からこつそり町岡熊造が大阪へ出かけて行つて、百方陳辯してともかくも表面は事なくをさまつたが、その頃以來、大阪の總聯盟支部は杉浦、町岡、大橋一派に何事でも反對するやうになつたんだ。多分この秋の大會には大阪支部は分裂して、獨立してしまふのだらう、といつてゐる。」

「はゝゝゝゝ、いや全く、婦人部長でなくても大橋には愛想がつきらアなあ……」

遠藤が大聲で笑ひ出した。

――突然、前に坐つてゐる七人の内の三人までが、すゝり泣き始めた。

篤夫は、はつとした。すると、勝子が聲を立てて、篤夫の膝にとびついて來た。

「やだ、やだ！ いやだよぅツ！ そんな奴、奴、奴……あたい！」

と、とぎれ／＼に、いつて、がばとなつた。

「叩き出しちやへ！ そんな奴……」

あと何かわからぬことをいつて勝子は泣いた。

「だからさ勝ちやん！ 僕等、考へてるんだ。何とかして大至急、組合を改革しなければならないとな、そして、男工部の大勢とあつちや、こつちで相談してるんだ。男工部では婦人部長を組合長にすることにきめちやつた。大橋綾子――ぢやない、岸綾子さんを、來月の總會で組合長にして、幹部は全部とりかへるんだ。そして賃銀値上げ、待遇改善の要求をみんなで一致して會社に出すんだ。會社とぐるになつてやがるダラ幹共を追ひ出し、われ／＼を龜紡と同じやうにしろつて、要求するんだ！ さうだらう！ な、さうだらう！

篤夫は勝子の肩口を引きおこした。

「さうよ、さうよ！」

勝子はまだしやくつてゐた。愛子も芳江も、太つちよの太田、なすび齒の浦川、それから第二寄宿舍の小畑、竹野の二人も、一齊に「さうよ、さうよ！」と叫び出した。

「何でもないことなんだ。組合をほんたうにわれわれのものにするだけなんだからな。」

「總聯盟なんかから脱退するといゝわ。さうすれば代議士なんかが出て來やがらなくていい！」

田川愛がいつた。

「いや、脱退でなくて俺達も占領の方針でやるんだ。奴等はわれ〳〵を除名するだらう、その時こそ第二の方針が立てられるんだ。」

「さうだ！　どんなことだつて秋の總會に女工部が總立ちになれば、滿場一致さ。」

「なるわ、なるわ！　あたしたち、寄宿舍中、話してやる！　仕事なんかどん〳〵サボつておいて、みんなに話してやる。」

「異議なし！」

「贊成！」

「よしツ！　今に婦人部長をさがし出してくるからな。みんな働けよ。組合の改革だ。」

「ストライキになるといゝわ。」

と二人も三人もがいつた。

「きつと、なるよ。してみせるとも。だから今からおれたちは組合内に、みんなで刷新同盟を作るんだ。實は男工側には、刷新同盟ができてゐる。」

「あたし、知つてるわよ。女工部に何故作る話がないんだらうと思つてた。」

といつたのは第二寄宿舍の竹野である。

「さうかい、ぢやいよ〳〵早速こゝで、君たち七人で、刷新同盟を作らう！」

「七人でもいゝの、みんなよんでこなくつても……」

勝子が瞼をこすつた。

「いゝとも、七人で固く團結するんだ。君たちは、今夜すぐかへつたら、めい〳〵の部屋中の仲間をあつめて、幹部のおかげで賃銀が龜紡より四割安く、待遇なんか比べ物にならないんだといふ話を、今の話をだな……すつかり話して、それがみんな、總聯盟の幹部と、組合幹部のせゐだといふことをよく〳〵わからせるんだ。そして、刷新同盟に加入させるんだ。めい〳〵責任をおびて、今夜すぐ、みんなに話して、できるだけ澤山仲間に引き入れろ。そして、けふこゝへきてゐない晩出の婦人部長組にも話してみんな手別けして、あした工場の中でも宣傳するんだ。さうすれば一週間位でみんな刷新同盟になつちまふぜ。愉快だぜ。天下はこつちの物だぜ！」

「やるわ！　やるわ!!」

「面白いわ！」

みんな亢奮した。

「早く婦人部長出てくるといゝのに。」

「よう、三枝さん、婦人部長を一所懸命さがしてよ！」

「探してよ！」

「萬歳！　あたい、面白くなつたわ。」

「おやもう八時よ。」

「あした、晝出組の松永、安井つてな連中に一ぺんこゝで逢ひたいな、勝ちやん、あんた又あしたその連中を引つ張り出して一緒にこないか。こゝへ？」

篤夫は若い女たちに取りかこまれながらいつた。

「つれて來まあす！」

勝子は片手を上げた。

わけなく――全くわけなく反幹部派のアジトに屬する七人の女工フラクションが、一時間足らずの間に、生れた。

特高

××警察署の門前に、一臺の幌型自動車がとまると、背廣服中折の、埃つぽい男たちが五六人、ばら〳〵と地上にとびおりた。

痩せぎすな、色の黒い男が先に立ち、かれ等は一團となつて署內へはひつて行つた。

——遠くの柱時計のかゝつてゐる下の、机際から立ち上つて飛んで來たこの署の高等主任は、はひつて來た先頭の男にぺこ〳〵頭を下げながら、

「どうぞ——どうぞ！　こちらへ!!」

「ゐるね!?」

と先頭の男は右手の親指を出してみせた。高等主任はうなづきながら、

「お待ちしてをります！」

と一同を、ドアのしめ切られた署長室へ案內した。

署長室には、青いキレのかゝつた机があり、茶菓の用意などがしてあつて、制服の署長が自分の席について煙草をふかせてゐた。

「やあ、しばらく！」

色の黒い痩せぎすな男は、かう云つて笑ひながら日に燒けたまがひのパナマ帽をぬぐと、ハンカチを出して額をぬぐつた。

「どうぞ……」

署長は一旦腰を浮かせて、相手をすぐ前の椅子にかけさせてから、

「上海行以來お目にかゝりませんでしたね。」

と自分も坐つた。

「さうでしたね、何しろもう、だん〳〵いそがしくなるばかりで、困りますよ、全く……」

「しかし、上海での大手柄以來、あなたの名は、首相や、×××××までご存じださうですからね、羨ましいですよ、特高は花形だ！

——署長はしきりにお世辭を使つた。痩せた色の黒いこの男は河野といふ警視廳特高課詰の警部だつた。

日本に××主義者の組織運動が擴がつて來た一九二二年以來の狀勢に對して、これを、いゝせん滅しようとする目的の「治安維持法」が生れたのは三年後の一九二五年だつた。この支配階級の法律はその後の三年目に、國內のプロレタリアートはもとより、その他の自由主義的ブルジョアジーからさへの激しい反對をも押ひしやげて更に「改正」され、プロレタリアートの急進分子を、×刑を以て脅かすところの恐るべき威力を有するに至つた。

この階級的武器の使ひ手として登場して來たものが、法律の「改正」と同時に現はれた「特高警察」であつた。全國津々浦々にまで張り廻された一九三〇年代の「特高網」はプロレタリアートの立上りに對して「私有財產制度」と「國體の尊嚴」を擁護する帝國主義政治最高表現の一つである。

そして、日本の「特高」は僅かに生れて二年ばかりの間に花々しい仕事をやつた。

三・一五事件、四・一六事件、下谷の事件、キールン事件、中間檢擧、日常檢擧——と、かれ等の仕事は容易に歇むべくもない。そして次第に困難に、危險に、專門的となつて行く。といふことは、その反面に日本のプロレタリアートの急激な成長を、あからさまに物語るものであつた。

治安維持法はプロレタリアートの尖端的な力を地下に追ひやつた代りに、それを內燃させて行つた　××××××、××××××××××××××××。

突然、その火の手の尖端が「穩健なる右翼」の組合である「東京紡績」の中にあらはれたのだ。

「刷新同盟」といふ名で、女工の日常の不平不

滿に點火し、組合幹部排擊を通じてストライキを使嗾するアジ・ビラが職場と、女工寄宿舍とで一日の間に三千枚から撒かれた。いや、撒かれたのではなくて、組織的に、全部の女工にそのビラが手渡されたのだ。

何者の手によつて!?

舍監は、監督は、職長は、この突然の出來事にうろたへた。工場長は之等の連中の注進を一ときに受取つた。工場長の姿が會社の事務所にあらはれ庶務課長や、常務、社長などと、額を鳩せての協議が行はれたのはその夜のことである。

翌朝、早くから所轄署の高等主任が部下の特高係を三人ばかり引きつれて工場へのりこんで來た。そして職場と、寄宿舍からつぎ／＼にビラ配付の容疑者が引つこぬかれた。

工場附屬の事務所の一室には女工ばかり二十八人も、よび出された。二十八人の女工は二列になつて警察へつれて行かれた。

なかには、警察ときいて泣き出すものもあつた。

かの女たちは、一人のこらず、その晩警察に泊められた。工場はその噂で動搖を始めた。

そして翌日は、女工の内の二十八人がまだ警察から返されないといふ不安のために、全工場に亙る三千人の女工たちの間に、一種の怠業氣分が漲つた。だれか、その時、その怠業氣分を分析するものがあつたならば、きのふみたアジ・ビラの內容——今年の一月の操短での二割賃下げ、その前の深夜業廢止の時の事實上の一割下げ、それらの減給の泣きねいりとなつた代償の强制貯金の隨時拂戾しがどうして、その後決して行はれてゐないこと、工場內の衞生設備の改善が「費用の都合」でまだそのまゝとなつてゐること、組合幹部が、そんなことを少しも抗議せず知らん顏をしてゐるのは社會民主黨の選擧費用に社長から一萬圓貰つたからだといふこと、つゞいて大橋組合長の不品行問題——など、など、だれが、どういふわけで、こんなことを暴露するのかわからなかつたが、そのビラの內容は、明らかにだれの頭の中にも、はつきりとこびりついた。今まで、すべての女工たちの胸の奧に萎んでゐた不平の芽が急に萌え出したのだ。意識の表面では三十人近いビラ撒き容疑者が警察に拘留されたといふことの不安ではあつたが、その內、その底から湧き上る根强いめいめいの不平がその不安にまじつて、今朝からかの女たちの働く手を鈍らせてしまつたのだ。

警察はビラ撒きの中心メンバーをすぐにみつけ出した。それが山根、田川、三島の三人だつた。ところが三人が三人とも三千枚のビラの出所を頑として白狀しなかつた。念のために寄宿舍と、組合事務所とが搜索されたが、もとよりそんなところからは、ビラのかけらも出て來はしなかつた。

最後に田川と三島はヒイ／＼悲鳴をあげなければならないことになつた、とう／＼「お勝ちやんから貰つた。」と自白した。しかし山根勝子は、髮をふり亂し、いきり立つて調室の中を逃げ廻りながら、取り押へられて引き据ゑられると、

「殺されてもいはない!」

と頑張り出した。

遠藤からビラをうけ取つたのは、山根、田川、三島の三人だつたのである。そのビラはあの會合の翌日、遠藤と篤夫が相談して書いた。篤夫はその原稿を持つて、美智子の居るアパートへ出かけ、美智子が印刷と、その費用を引きうけて、三日目には、もうちやんと出來上り、夜おそく、二人の手によつて遠藤の家へ運びこまれた。

一方遠藤は、印刷物の出來るまでに七人のフ

ラクの手を通じて二晝夜半の間に、十四人の女工を引つ張り出した。それらはみんな綾子の被教育者ばかりだつた。綾子は若いかの女たちを、鬪爭を通じて教育するといふ左翼的なやり方を理解しなかつたやうだつたが、ともかくもかの女の教育によつて、それ等の女工達は可なり意識が高められてゐる者ばかりだつたので仕事はらくだつた。みんな、引つ張り出してくる片つぱしから反幹部派のフラクとなすことができた。

そして、三千枚のビラは遠藤の手から山根と、田川、三島の三人が二回にわけて受けとり、寄宿舍內へ持ちこむとすぐかの女たちが他のフラクたちにそれ〲分けて手渡し、配付させた。その動員中にビラ撒きフラクションは更に七人殖えて二十八人となつたのである。

「これはすぐばれるが、その時はどうする。」

と事を行ふ前に遠藤は、山根、田川、三島の三人にいつた。

すると勝子はうなづいて男のやうに笑つた。

「あたしが一人で引きうける！ いゝわ、安心おし!!」

で、警察へつれて行かれる途々で、かの女は田川と三島に「ばれて來たら、あたいから貰つたつていふんだよ。遠藤や三枝の名をこれッぽちも出しちや駄目よ。」とそつと注意した。さうした姉御氣取りの結果が、どんなに痛いものかといふことを、勝子は警察の調室でうんとこさ味はされた。しかし、かの女は二人の友達がくたばつたあとでも、頑張り通して、容易に實を吐かなかつた。

所轄署は勝子の背後にある正體を摑まうとして骨を折つた。午後になつて××にたへかねたかの女はとう〲篤夫の名をいつた。遠藤は勞働者で、篤夫は組合にゐるインテリだ。勝子には遠藤よりも篤夫の方があとの役に立ちさうでないといふ氣がした。考へた上、氣の毒だとは思つたけれど、篤夫の方を犧牲にしたのだつた。勝子はそれでも篤夫の名を××にいふことが、お產をするやうに苦しかつた。女の、一番の苦しみをかの女は、お產だと思つてゐるのだ。

篤夫を捕へれば「刷新同盟」の正體がほぐされると思つた所轄署は、篤夫の所在を探索すると同時に、「もう潮時だらう」といふので、事件を警視廳の「特高」に移牒したのである。

特高は動き出した。警部河野は有名な男である。××××××××××の大會を嗅ぎつけたのもかれだつたし、×××の組織事業の中心人物だつた××氏を上海まで行つて捕へたのもかれだつた。

そのかれが瘦せた色の黑い老猾なまでおちつき拂つた顏つきで、署長と雜談してゐるところへ、高等主任が、一件書類をかゝへてはひつてきた。

そこで、かれも署長も冗談をやめて、その方へむき直つた。

主任はつゝしみ切つた他所行きの態度で、署長と、河野を等分に見ながら、「事件」を說明した。一わたりききをはると、

「よし、わかつた！ で二十八人全部まだ留めておいてあるんだね。」

と河野は橫柄に主任にいつた。

「さうです。あなたの指揮の上で……と思ひまして……」

「フン……その中に別嬪がゐるかね、ゐるならみておきたいが、高が女工だ。小便臭からう、返してやりたまへ。」

河野はポケットから白扇を取り出して使つた。

「ぢや全部返すんですか？」

主任は妙な顏をした。

「いや……」
と首をふつて、
「その三人――山根勝子か？……そいつが一番臭いな、おい、要領はわかつたらう、他の二人だつてビラの出所を知つてゐるに違ひないんだ。その見込で君たち行つて、その二人を洗つてみたまへ。」
と、さつきからうしろに、みんな立つてひかへてゐるつれてきた部下たちの方へふり返つたあとで、
「その山根つて奴だけはこゝへつれてきて貰はう、僕がしらべるから、あとは皆さつさと返してやつた方がいゝんですよ。」
と主任の方へむき直つて、おしつけるやうにいつた。

戦術

篤夫は、反幹部派委員會を代表して中田をよび出す聯絡係をもかねてゐた。かれは中田が元ゐた關係で東京紡績内の反幹部派委員會を指導してゐる外に、どんな仕事をしてゐるかを正式には知らなかつた。
しかし、中田が××であり、「全共」の紡績勞働組合の全國單一組合組織を擔當してゐる最高責任者、即ち全共の中央常任委員だらうといふことを、暗默の裡に知つてゐた。その中田に妻子のあることはわかつてゐたが、中田がその妻子たちとどこに住んでゐるかは知らなかつた。
かれと會ふためには特に、二人の間に約束してある新聞の三行廣告欄を利用してこつちからよび出してゐた。
そのきめられた聯絡方法によつて、約束の時間に例の一ぜんめしやで一人しよんぼり篤夫が待つてゐるところへ、屑買ひの車のとまる音がして中田がはひつてきたのは、丁度警視廳の特高隊が××署の門前にのりつけた時刻だつた。
篤夫は一緒にめしを食ひながら、さし迫つた情勢を報告した。
「着々動いてきたね。」
中田はいつものむツつりとした表情をほどいて、
「君の色仕掛けよりも、辨證法仕掛けの方がやつぱりよかつたらしい。」
と冗談をいつた。
篤夫は赤くなつて苦笑した。
中田は例の鳥打帽を額の上の方へおしあげながら、顏をさしよせてきて、
「つゞいてもう一ぺん別のビラをつくりたまへ、君は文章がうまいんだから。日暮里のアパートであの人と膝つき合せて草稿をねりたまへ。情、熱、をこめてさ……フ、ゝ、ゝ。」
篤夫は、中田がこんなに機嫌よく冗談を連發するのをみたのはこれが初めてだつた。つりこまれて笑ひながら、
「やりますよ。やりますけれど、そんな馬鹿な……この前の原稿は遠藤と二人でつくつたんですよ。」
すると中田の表情は急に引きしまつて、
「しかし、これからが大切だぜ。少うし批判めいていふと、今度のことで、作つたばかりの女工フラクを全部表に出してしまつたのが大失策だよ。まるで素人だ。ビラの手渡し位はその内の三人か五人動員すれば十分だ。さうしないで一時に全部動かしてしまつたから女工フラクの全部が警察へ會社へ顏を知られてしまつた。大部分は今夜あたり放還されるだらうがいよいよ刷新同盟の名で反幹部派が公然の舞臺へとび出したんだから、ビラをまいた連中は惡くするとクビになるよ。勿論、凡ての女工は監禁同樣にして今後は決して自由に外出させないだらう。さうして、男工部との連絡を斷り、一方男

工部の方へは警察の手がはひつて、刷新同盟のフラクションだといふ證據の擧つたものはばさばさやられるだらう。さうした狀勢になつてくる中を突き進んでもう二回位アジ・ビラを出さなければならん。それも一週間か十日位の内にな…今度はそのビラを寄宿舍と通勤に手渡す行動隊を刷新同盟の男工中から至急組織するんだ。多少の犧牲が出るだらうが、寄宿舍へはあそこの西側のトタン塀が大分くされてゐるから××××××××××。又職場ででも手渡す。通勤は要所々々に手別けして網を張つてゐて出勤時と退出時に渡すのが一番いゝ。ことに出勤時に主力をそゝぐんだ。二回三回のアジ・ビラはダラ幹暴露を中心に、婦人部長の一件に主力を注いで組合部に對する反感を煽りそれを×××××敢行にまで高まらせなくてはいけない。――それから、けふ職場と寄宿舍内の樣子をみとどけたまへ。きつと、豫想外に動搖してるぜ。二十八人の檢束拘留が大きなセンセーションとなつてゐると思ふんだ。しかし、山根や田川、三島などはきつとすぐ白狀するに相違ないからね、君と遠藤とは住所をかへなければ危いぜ。すぐ×××になる方がいゝ。」

かうじゅん〳〵と說いたあとで、中田は首にかけてゐる大きな汚い財布をといて十圓札を五枚ばかり取り出した。

「ビラの印刷と、住所を作るのに使ひたまへ。遠藤にも一部分わけてやつてくれたまへ。――この金は、血の出るやうな金なんだがね。」

とそれを篤夫に握らせた。篤夫は默つてお辭儀をした。

「僕、下宿は一昨日豫めすつかり整理したあとですから心配はないんです。ぢや今夜から別のところをみつけます。何しろ僕はまだ馴れないからいざといふ場合、肝じんのことをお留守にしてしまつてゐたらしいんです。女工フラクの動員部隊を作らなかつたのは…かんべんして下さい！ 身を粉にしてでもきつと取り返しますから。」

篤夫の眸は不眠のためにか、疲れて充血してゐた。

「まあ懸命にやりたまへ。」

それから中田は又考へ〳〵通勤女工の××方法、行動隊以外の反幹部派男工の活躍方面など詳しく細かに篤夫に敎へるのだつた。

一切は進展する

別れる時になつて、中田はふと篤夫の顏をみてにや〳〵笑ひながら、

「三枝君、君はあれかい、今なら自分の私的利害を階級の利害におきかへることが、いつでもできるわけなのかい？」

「……？」

篤夫は中田が何をいはうとしてゐるのかをちよつと解しかねた。

「少しいひ廻しが遠くなりすぎたが、要するに、君はプロレタリアートの鬪爭のためにどれ位の決心が出來るかね。」

「……？」

篤夫は、永いこと中田の顏をみつめたあとで小さな聲で答へた。

「どんな決心でもできる積りです。」

「××決心でも？」

中田はにや〳〵笑つた。

篤夫の顏色はさつと變つた。かれは一切を諒解したのである。胸がわく〳〵なつて、涙がしらずにこみ上げてきた。今貰つた五十圓の金の意味がわかるやうな氣がした。かれはしつかりとうなづいた。

「その積りです！」

中田はもう立ち上つてゐた。

「ぢや出かけよう。」

二人は一緒に外へ出た、篤夫は中田ののろのろと引張つて行く荷車のわきについて歩いた。

「君にあひたいといつてゐる人があるんだ。その人の名は佐々木といふんだ。明日その人に會はないか。」

「會ひます！」

「ぢやその人はね、あす午後一時に、本郷の團子坂停留所に降りる。そして黑のアルパカの上衣、白のズボン、白靴、茶色の中折帽をかぶつてゐる。握りの所の白い黑檀のステッキを持ち、松屋呉服店の包みを片手にぶら下げてゆつくり坂を上つて行く筈だから、君は同じ時刻に本鄕肴町の停留所に下りて團子坂を坂下までおりてくるといゝ。中途であへるだらう。もし一時にあへなかつたら二時、二時にあへなかつたら三時に今いつたとほりやつてくれるといゝ。」

「承知しました。」

「ぢや失敬する。」

中田は車を曳いて横町の方へ曲つて行つた。

篤夫は汚れた印ばんてんを着て雪駄をはいてゐた。中田とあのめしやで會ふ時にはいつもさうした職人とも勞働者ともつかない服裝をして出かけることにしてゐたのだ。――市電で上野まで出て、省線にのりかへる間にも篤夫は印ばんてんの兩腕をくんで、わく／＼なる胸を押ししづめてゐた。

「佐々木、佐々木、……それはきつと×の組織者にちがひない。」

と思ふとこの階級社會における自分の役割が今やはつきりときまつてきたといふ氣がした。あした佐々木といふその人に會つて何をきかされるか、もう明白であつた。篤夫の心の中には、五年十年もの長い××の生活が見えてきた。かれはにつこりした。反幹部派委員の中で、これから何をなすべきかがかれの頭の中でめまぐろしく旋回した。

九月の終りのさわやかな晝の風が進行する電車の窓から吹き入つて、篤夫の頭に「十月だ」と云ふ感じを與へた。「十月は組合の總會だ！　つゞいて總聯盟の大會だ！　糞ッ！」

――日暮里でおりて、美智子のゐるアパートへやつて來たかれは、こゝへ遠藤、三宅、山本その他の委員たちがくることになつてゐるので、コンクリートの階段を上り、天井の低いうすぐらい三階の廊下を二百十二號室の方へ歩いて行つた。と、コンクリートの廊下のうすくらがりに二十一二の女工らしい女が一人うろ／＼してゐたが、篤夫の歩いてくるのを見て、

「あのう……」

と聲をかけた。

篤夫は立ちどまつた。

「何です？」

「こゝがアパートでせうか？」

「さうです、アパートですよ。」

「吉村美智子さんつて人がどこかにゐるでせうかしら？」

「や、……まあちやんぢやないか、君は。」

女はよほどおどろいたらしく篤夫を見上げた。篤夫はくされたやうなをかしな恰好の帽子をぬいだ。印ばんてんを着てゐるかれの姿は容易に誰れだかわからなかつたのだ。

「あ…まるで、おどろいちやつた！　まあ…」

と原松江といふその娘は口を丸くして、篤夫の傍へよつてきた。

「どうしたんだ一體？」

篤夫も女によりそつた。

「大變よ、あんた――婦人部長が今朝、警察へつれて行かれたわよ。」

松江はもうポロ／＼泣き出した。この娘は工場事務所の電話交換手で綾子と一緒に住んでゐた。

「え？――ぢや大橋さんは家へかへつてゐたの

かい？」

「何でもね、ゆうべかへつてきたんですつて、あたし工場からかへつてきてみると、隣りのをばさんがさういふのよ。ゆうべ九時頃婦人部長がかへつてきたところへ、どか／＼と刑事と巡査が來てすぐ連れて行つちやつたんですつて、増榮さんのをばさんもそれを見てゐたんですつて……」

「ふむ……でまだ歸らないのかい。」

「え丶、かへらないわ、でもね、へんな朝鮮人の女の人がね、留置場でこれをことづかつてきたつてつて、さつき持つて來てくれたのよ。あけてみると、この手紙を、日暮里アパートの三階に吉村美智子さんつて人がゐるから、そこへとゞけてくれつて、書いてあるのよ。だからあたし、持つて來たんだけれど……」

と、かの女は帶の間から小さく折り疊んだ一通の手紙を取り出した。

篤夫はそれを受取つてひろげてみた。それはあわたゞしい走り書であつた。

ビラの正體わからず迷つてゐるやうです。刷新同盟を、私の仕事だと疑つてゐるのです。廊下で山根と行きあひました。山根はビラを三枚に貰つたとのべてゐます。

三枝氏ご用心。

下宿へかへつてはいけません。私と山根は、ケイシチヨウのしらべをうけるため二三日か五六日とめられます。

私は刷新同盟を私の發案で若い女工と一部の男工を之に入れてゐるといふ風にいひました。

私が引きうけます。

又あとから。この中ではある方法で手紙が書けます。

健とうをいのる

これはまるでだれに宛てた手紙だかわからないやうになつてゐたが、それが綾子の用心らしかつた。

「いゝよ。おれが引きうけた。婦人部長はすぐかへつてくるよ！　かへつたらこゝへ知らせてくれないか。そして、こゝのことはだれにもいはないでね。」

「え丶……ぢや、三枝さん、あんた、こゝにかくれてるの？」

「ハヽヽヽヽ。かくれてるんぢやないんだよ、時々こゝへくるだけなんだよ。その内に君の家へ行くからね、待つてろ、けふは早くおかへり。」

「ぢや、さいなら。」

「おい原さん。」

「え？」

「キスしたげよか。」

「……ばかツ！」

松江は篤夫の思ひがけない冗談に赤い顏になつて、遠ざかつて行つた。階段の下り口で、こつちをむいて、手を上げて、下りて行つた。篤夫も手を上げてみせた。

そのあとでかれはもう一度今の手紙を出して見直した。

「一切が動き出した。このまゝ十月下旬の總會へのりつけるんだ、な！　總會よりも早くストライキがくるかもしれん。」

自分で自分によびかけて、かれは大股に美智子の部屋の方へ歩いて行つた。

「刷新同盟」行動隊

第一回のビラ事件の翌々日、果して二千何百人の寄宿舍女工は嚴重に禁足された。

勝子と田川、三島の三人はクビになり、國元の親をよんで引渡すと會社側でいつてゐるといふことが篤夫たちのところへ情報となつてはひつてきた。

會社は、五十人ばかりの暴力團を臨時に傭ひ入れて守衛の服を着せ、出入口と、寄宿舍と、各工場内外との警戒にあて、通勤工は男女工とも合せて十五分出勤時間が早められ、その十五分間に、守衛總がかりで一齊身體檢査を行ひ、しかる後職場へ入れた。

會社のさうした戰術は、警察で刷新同盟の正體がまだ掴めないために、よけいに嚴重だつた。

所轄は「刷新同盟」を大橋綾子を中心とする內訌問題だと結論してゐるやうだつたが、さすがに警視廳の特高は「刷新同盟」の背後に、元との組合の幹部だつた中田の存在を捕捉しようとしてゐた。そして中田が現在「全共」の常任になつてゐるらしいといふ見當の外れぬ限り「刷新同盟」は單なる內訌の產物などではなく、もつと恐ろしい組織に根ざした地下活動の現はれだとにらんでゐた。

ところが第一回のビラ事件から僅かに四日目のことであつた。

東京紡績工場の裏通りを一つへだてた塀の中にある女工寄宿舍が、曇つた秋の夜の闇の中に沈んだ時、河岸つぷちの西側のトタン塀の傍へ、黑い人影が、どこからかよりあつまつてきて、かたまつた。

ベリ！

ベリリ…

ベリリリ……！

といふ妙な物音が低く鈍くその影のかたまりの中から起つた。——よくみると十五六人の男達にとりかこまれて、鳥打帽をかむつた一人の若い男が鐵ばさみを兩手に持つてトタン塀を切り裂いてゐるのだ。

「よし！」

といふつぶやきと共に鳥打帽の男はうしろへ身をひらいた。待ちかまへてゐた男たちが肩を低めて、あとからあとからくりぬかれたトタン塀の穴をくゞつて、中へきえた。

鳥打帽の男だけがその穴の傍にしやがんでぢつとしてゐた。

＊　＊　＊　＊

寄宿舍の內へしのびこんだ男の數は十五人だつた。かれらははひつて行つたまゝ一時間ばかりはかへつてこなかつた。穴の傍に待つてゐゝ鳥打帽の男は退屈して、立ち上つた。そして穴をくゞつて中へはひつた。そこは寄宿舍の丁度裏にあたつてゐた。かれは闇の中をすかしてみたり二階建の寄宿舍を見上げたりした。

と、遠くから跫音が聞えた。かれは手にしてゐる鐵棒をうしろへかくした。跫音は一人でなかつた。二人、三人……かれは仲間が引き上げて來たな、と考へた。

―安井……ゐるか―

と向うから低い男の聲がした。

―森野か……―

近づいて來た男の兩わきにくつついてゐるのはねまきではだしのまゝの勝子と田川、三島の三人だつた。

―おれは、先きへかへるぞ。」

と森野は三人の女工を兩わきにぶら下げるやうにしてトタン塀の穴から外へ出た。

「外の連中はうまく行つたか？」

と鳥打帽の安井はそれを追つて行つてきいた。

「うむ……おれはこの三人をつれ出す役目だから外にゐたんだ。しかし、うまく行つてるやうだぜ。舍監の奴、外へ出たら同志が五六十人との寄宿舍をとりまいてゐるから危いぞ、命が助かりたければ、押入れの中へでもはひつてろつて怒鳴りつけられて、靑くなつて腰をぬかしてるさうだ。それは第一の方だが第二も第三も第四もどうせ皆さうだ。中へはひるもの、入

口を見張つてるもの、ちやんと手別けがついてるんだからな。何でも中では皆をそれ〴〵食堂へあつめてビラを配り演說をやつてるやうだぜ。」

「ふうん……あした又大騷ぎになるな、こいつあ、面白えや！　てへッ！」

安井は鳥打帽をくしやッとやつて、

「ねえちやんたち！　そんなはだしぢや困るから、森野に圓タクにのせて貰へよ。」

勝子はふり返つて、笑つた。四人はそのまゝトタン塀の外の闇の中へ消えて行つた。

まもなく、行動隊の連中がつぎ〳〵に引きあげて來た。

＊　＊　＊　＊

その同じ夜、東京紡績工場の正門がひらかれて晩出の女工があふれ出てくる時刻、――それは午後十一時何分かである――寄宿女工は裏門から出て行く。通勤女工は表門から出て、たいていは本所の方へかへるために、會社の前を流れてゐる北十間川といふ川を向う側へ越さなければならぬ。そのために西の橋の、北十間通りの方へ出て、そこの北十間橋を渡る。午後十一時すぎのこの橋の上は、東京紡績の工場から吐き出された二三百の女工の群れで黑くなるのだつた。

丁度この橋の畔に、ビラを小わきにかゝへた作業服の男工が二三間おきに五六人張つてゐた。橋の上にもゐた。かれらは女工たちの群れに逆つてゆつくり步きながら、だまつてビラを――それは小さく四ッに折つてあり、夜目につきにくくするためかどうか赤い紙に印刷してあつた――素早く默つてつき出した。

女工の中にはビラを突きつけられて、逃げ出すのもあつた。

「外の人にもわけてくれ。」

といつて、十枚位づつ手渡してゐる男もあつた。

「持つてかへつてよめ！」

といつてきかせてゐる男もあつた。顏みしりの女工をみつけると、澤山のビラを渡して、

「配れ！　配るんだよ。今にストライキだ！」

と叫んでゐる者もあつた。

橋の上で、不意にピイイッ！　と烈しい笛が鳴つた。すると、ビラをかゝへてゐた二三人の男が、いきなり、女工たちの七八人もかたまつてくるところへ、それを力まかせになげつけておいて、てんでの方向へ逃げ出した。

ビラは女工たちの眼の前で、散つた。

橋の上では一人の職工が刑事風の男に捕へられてゐた。笛を吹いた男らしい。しかし、捕へられてゐるのはその男だけで、今迄五六人ゐた男たちは、もうみんな逃げてしまつて見當らなかつた。夜風が地におち散らばつたビラをカサカサと吹き運んだ。

女工の群れは、刑事に捕へられて行く職工を見送つて、まばらに橋の上に氾濫してゐた。

動搖の力學

寄宿舍を襲つた男工の內、十人ばかりが擧げられて、家宅侵入とか誘拐とかの名で警察の留置場にぶちこまれた。

誘拐といふのは、山根、田川、三島の三女工を連れ出したからである。――この十人を、會社は早速クビにした。

すると、問題はこゝから發展した。十人のために男工側三百何十人の署名した復職歎願書が重役の所まで提出された。女工部はこれを見て動搖し、ある日、二交代の內の寄宿舍に殘つた千二百人ばかりが三々五々、しまひには大集團となつて、各室からあふれ出した。

そして舍監や、かけつけて來た守衞（臨時雇ひの暴力團）の制止を突破して工場廣場を橫斷

して工場事務所前に、刻々たかつて來た。

この狀勢は、すぐに五分とたゝない間に工場に入つてゐる千五百人の女工にも動搖を與へた。工場内にゐた男工中の刷新同盟フラクシヨンが巧みに活躍して、外の狀勢を職場の女工に傳へて廻つたのだ。

事務所前に集合した寄宿舍女工は口々に「山根、田川、三島の解雇取消」を叫び立てた　泣きながら叫ぶものもあつた。

事務所では工場長があわてながら部下を集めてゐた。

その時である。女工の集團のうしろの方で、

「組合事務所へ行け！」

「婦人部長のところへ行け！」

といふ新たな男の叫聲がおこつたのは――。

女工の集團はうしろの方の部分がそのアジテーシヨンをくらつて、動搖した。

その時、暴力團の守衞が五六人事務所からとび出してきて女工の煽動をした若い二人の男工を追つかけた。

女工の集團の中にはひつてゐた二人の職工は、女たちを押しわけて逃げた。その内一人はゐあはした二人の女の手を摑んで引つ張つて走つた。

「わあッ！　皆出ろ、皆出ろ！」

かれはさう叫び立てつゝ二人の女と互ひに體をぶつつけながら正門の外へ走り出して行つた。

それをみたあとのもう一人の男も同じことを叫びながら、一人の女工と手をつないであとを追つた。

「組合へ行けえッ！　組合へ行けえッ！」

この叫聲がきつかけとなつて、女工の大集團はわけもなく雪崩をうつてそつちへ走つた。十人、二十人、五十人、もうその邊からは全部の動搖と化して、泣き叫びの喚聲をあげつゝ、門前の方へ雪崩れて行つた。

「組合へ！」

「組合へ行け！」

「婦人部長のところへ！」

スローガンのやうにそれらの聲々が、土埃と一緒になつてまひ上つた。門衞所には守衞が三人ゐたが、たうてい手のつけられる光景ではなかつた。

そして、これはたしかに計畫によつて行はれたことであつたらしく、女工の群團が半分ばかり北十間川に沿うた通りへ出た時には先頭には紅の小旗を打ちふつて行進を指揮してゐる二人の男があつた。それは遠藤と三宅だつた。二人は小腋にかゝへてゐた澤山な同じ小旗を女工たちにわけ與へた。

千二百人の女工團は、思ひがけぬ寄宿舍脱出に成功して狂喜したやうに、北十間橋の方へ密集して走つた。

＊　　＊　　＊　　＊

その日は、綾子が警察から返された日であつた。かの女はかへるとすぐに組合事務所へ顏を出した。すると、事務所へは千二百人の女工が宿寄舍を脱出してこゝへ殺到してくるといふレポがはひつてゐた。かの女は事態がわからず茫然となつてゐた。すると、それは譃ではなく、初め二十人位の女工が、

「大橋さんッ!!」

と一かたまりとなつて、泣きながらかけこんで來てかの女を取りまいたあとから、續々として三十人、五十人、百人と列をくんでくりこんで來た。間もなく女工の集團は事務所の前の街頭にあふれ、遠藤と三宅がその中をおしわけて事務所の中へはひつて來た。

遠藤は綾子のゐるのをみつけるとつか〳〵と傍へよつてきて、何か耳打ちした。そしてふところの奥から一枚の紙片をとり出しながら、

「この通り分宿所がわれ〳〵の手で七ケ所も出來てゐるんです。あなたが統制して全體を七つの班に編成して下さい。」

「でも――でも食事はどうするの、千何百人もの食事を……」

「大島町の關東消費組合聯盟でちやんと全部の焚出しを引きうけてゐるんです。」

「まあ……ぢやもうしめた！　組合の金はあたしが取り出してこられますよ。あゝ大變なことになつてきたわ！」

遠藤は綾子の手を握ると、高くさし上げて女工團の方へ向いてわめき立てた。

「東京紡績勞働組合萬歳!!」

「わあわあわあわあうわあツ！」

「大橋婦人部長萬歳!!」

「うわあツ、うわあツ、うわあああツ！」

女工團は益々密集して綾子の方へ寄らうとひしめきあひながら、口々に喚聲を擧げた。

＊　＊　＊

翌日は、もう完全に形勢が急轉してゐた。

前晩千二百人の女工の連署に成る山根、田川、三島三女工の復職嘆願書が綾子の手で重役に提出されたのが、その一日前に出してゐる男工側の提案とともに、朝になつて一蹴された。

その日午前五時に職場に入る殘り千二百の寄宿舍女工は、きのふの午後二時に寄宿舍へ引きあげたまゝ一晩動搖をつゞけて今朝は從業せず、こゝに女工部は大部分事實上のストライキに移つてゐた。

通勤の三百人ばかりは定刻に入門したがそれだけでは仕方がなかつた。

會社はこの形勢に對して積極的に挑戰するとともに、暴力團を急に百人にふやして、寄宿舍に立て籠つた半數女工の外部との聯絡を防ぎ、社長、常務など皆、工場事務所へ出勤して來て、そこへは總聯盟の杉浦が、組合長の大橋芳雄とともに警官に守られてやつて來、裏口からそつと社長室へはひつた。

「けしからんぢやないか！　君等！　一體この騷ぎをどうしてくれるんだ！　こんな筈ぢやない！　こんな馬鹿なことはある筈ぢやないツ!!」

と天野社長は眼を三角にして、二人にたゝみかけた。天野の血相は變つてゐた。

「ご尤もです。ご尤もです！　みんなわたしが怠慢だつたせゐで、何とか無事に鎭壓しますから、どうぞお腹立ちのないやうに、お願ひします。お願ひします。」

と大橋はひたあやまりにあやまるのだつた。

「天野さん、どうも今度の刷新同盟はたゞのねずみではないやうです。煽動者です。たしかに××系の奴です！　奴等にこの平和なわれ〳〵の組合を攪亂させてたまるものですか。必ずわれわれの手でうまくをさめますから……どうかその……」

杉浦はかういつて太つた顎の下を丸い手で頻りとなでた。

そこへ、工場長がとびこんで來た。

「社長！　女工部と男工部とが一緒になつて今朝の嘆願書にまだいろ〳〵な條項を加へて『要求書』として、持つてきました！　一體どうしませう。」

「け、け、けつてしまへ！　中味なんかみる必要があるものか。警察は何をしとる!!」

「しかし……」

工場長の顏はまつ青である。

「拒絶するといたしますると、今の模樣では、男工部も、女工部に合流して、全然、その、ス……ス……ストライキに、陷りさうなのですが……」

「わかつてるツ！　そのストライキを、こゝにゐるご歷々が、無事に取りしづめてみせるとおつしやるんだから、おまかせしようぢやないか

ツ。」

天野社長は、今にも破裂しさうにコメカミの静脈を怒張させて、卓子をたゝいた。

争議日報第一號

日暮里アパートの二百十二號室は、謄寫刷版りの紙屑に埋もれてゐた。一人の髪の長い男が「争議日報第一號」と題された美濃判形の刷物を、もう何百枚も刷り上げてゐた。

顏をあげたのを見るとそれは篤夫だつた。かれは疲勞のために、老人のやうに痩せて額に皺ができてゐた。傍には美智子がやはり疲れた蒼ざめた顏をして、机にかじりついて原紙を切つてゐた。それもやはり「争議日報第一號」だ。何千枚も刷るので、同じ原紙が十枚は要る。ぎつしり文字を書いた一枚の美濃判原紙を切るのは四十分かゝる。それが、馴れない美智子の手では一時間かゝる。かの女はゆうべからもう十何時間、机にかじりついて鐵筆を握つたまゝなのだ。美しかつたかの女の眼がおちくぼみ、頭髪が灰色になつて光澤を失つてゐた。かの女は肩がぬけるやうにだるかつた。

しかし、五月の指令は、今や漸く遂行されてゐるのだ。右翼の東京紡績勞働組合男女工四千人の罷業はゆうべから完全に反幹部派の指導下に、おこつてゐた。あの灰色の大工場に、きのふから織機の轟音は消え、紡錘機のうなりはきこえなかつた。

反幹部派委員は八方にとんで活躍してゐた。篤夫の立籠つた美智子の部屋は、きのふから完全に争議團アジトとなつてゐた。否それは單なる争議團のアジトであるばかりではなかつた。こゝへは中田さへも知らない「佐々木」の使ひの人間がやつてきて篤夫にひそ〲何か話して行つた。

一所懸命に、謄寫版を刷つてゐた篤夫が髪をかき上げて、よごれた手をかざしながら腰をあげた時、美智子は向うむいたまゝ机の上に突つ伏してゐた。

「どうしたの…?」

篤夫はよつて行つて美智子をかゝへおこした。

「どうもしない。疲れたのよ。」

「苦しいだらう。こんなに熱くなつてゐる!」

と彼れはほてつた女の右手をうしろから握つた。

「十分間休憩だ。一服しよう…」

美智子をベッドの上にかけさせ、篤夫はこの部屋にたつた一脚しかない椅子にかけて顏を見合つた。

しばらくさうしてゐる内に、美智子は感激に滿ちた眸になつて、不意にベッドをずりおちると、椅子の中の篤夫に、抱きついてきた。

「何?…何?」

篤夫は、肩口におしつけてきてゐる美智子の顏をおし戻すやうにしてのぞいた。

「篤ちやん…あたし…いへないの! ゆうべから、うれしくて…うれしくつて…あたしたちの、お互ひの好き合つてる感情…ね。そんな、まるで個人的なものまで、…ちやあんと…あれでせう。闘争の中に訓練されてたわ…そして何かしら…今度の事に役に…立つたわ! それが…うれしいの! ものがいへないの!」

「さうか! よくわかる。僕にだつてわかる! 綾子さんを、ほんたうに覺醒させたのが僕等のその感情だつたつてこともいへるからな…。さあ、あの人のところへ——女の争議團長なんて日本で初めてだよ——あんなに必死になつて働いてゐるあの人のところへ、今夜中にこの『争議日報第一號』をとゞけるんだ! 總會よりもストライキが早く來た! 僕等の闘争の最初

の勝利がこれだ？　爭議日報第一號!!」

篤夫はそこにあつた謄寫版刷りの一枚を拾ひ上げた。美智子はいつの間にか男の膝の上にのつかつてゐた。二人は疲勞の底から光る感激の眸をかゞやかせ、肩をくみ合つてその印刷された字面に見入るのだつた。——そこには大きな字で書いてあつた。

ダラク幹部を叩き出せ！

組合長大橋は總聯盟の杉浦と共に昨日こつそり天野社長にあひ、偷こりもせずわれわれ四千人の血と肉を會社に賣りつけようとしてゐるぞ。

裏切者大橋芳雄を組合からはふり出せ！

組合は我々四千人の男女職工のものだ。

東京紡績勞働組合刷新同盟萬歲!!

（一九三〇年一月——四月）

舞踏會事件

一

大東京に！

年の暮れが、

大嵐のごとく、おしよせた。

——銀座も、淺草も、山の手の町々も、年の市だ。年末大賣り出しの、旗や、看板でかざられ、その間を、樂隊が鳴り、自動車が走り、靑バス、トラック、荷車、自轉車、そんなものが、川を流れるゴミくづのやうに、渦をまいて流れる、流れる。

ピリリリリ！

ゴミくづは、みんな交叉點にひつかゝつた。

そのゴミの中にあつぷ／＼する勞働者の顔、女の顔、男の顔。みんなゆがんでゐる。眼が光つてゐる。

交叉點を、黑ぬりの立派な、大きな自動車が、ぴかりと胴體を日に光らせ、町のゴミくづどもを尻目にかけて、人通りのない方へ曲つて行つた。

——その車の中には、だれがのつてゐたか？

自動車は、いう／＼と、この不景氣な昭和の世の中とはまるで別物のやうに、丸の內の、帝京會舘の、正面玄關へ着いた。

會舘は氷山の如く空にそびえた大きな建物である。玄關はまるで御殿の入口だ。こゝは、金持と、その手下の古い知識階級と代議士とが出入りするクラブである。

運轉手がとびおりて、自動車の扉をあけた。

中から現はれたのは？　中山帽をかぶつて朝禮服を着、白い手袋をはめた四十あまりの、いい身なりの男である。白い額をしてゐる。

扉をあけた運轉手はもとより、玄關の入口から奥へかけて、四五人、張番をしてゐたボオイどもが、この男の顔をみると、びつくりしたやうに、一齊に最敬禮をした。——その中を、つんと額をそらせたその男はだれに會釋もせず、さつさと、敬禮の中をとほりぬけて階段を上ると、すぐそこにある大きな部屋へはひつた。

大きな部屋——そこには晝だといふのに電燈がついて五十人位の男や女が蜂の巣をつゝいた如く、がや／＼と、いつぱい集まつて騷いでゐた。一本五圓もする葉卷の煙が、もう／＼とこの廣い部屋にたちこめてゐるだけで、もうここにあつまつてゐる連中が、一人一人何百萬圓、又は何千萬圓といふ大きなこの世の富をふところにねぢこんでゐる金持達であることがわかる。しかし今、白い手袋の男がはひつてきたのを見ると、

「侯爵だ！」

「侯爵閣下がみえた！」

と、てんでに、つぶやきつぶやき、ぴたりと皆靜かになつた。

「諸君！」

はひつて來た男は、部屋のまん中に立つて、つんと白い額をそらせたまゝ、無愛想な顔をしてすぐに演說を始めた。

「年末多忙の際、よくおあつまり下さいました。けふのご相談といふのは外でもありません。近頃、日本にも×××などといふ危險なものが發生しました。ぐづ／＼してをれば我々階級の世界がいつ×××××××しれないといふ不安に對しては、諸君も定めし同感の事と信じ

ます。」
「同感です！」
と金切聲をあげた男が二人も三人もあつた。
「近頃は世の中が動搖してゐます。それは世界戰爭後、うちつゞく事業界不振のために、職工の賃銀がどん〳〵下り、失業者が何十萬人もでき、そこへ又知識階級の方面でもこの頃は學校を出てもつとめる口がないので、不平と失望のあまり、勞働階級の不平不滿に共鳴して一緒になつて騷ぐからです。――過般檢擧された××黨員中に學生の多かつたのは卽ちこの證據でかく若い學生達が、勞働者の要求の代言人となり、ブルジョア攻擊の急先鋒となつては、われわれにとつて甚だ險呑であります。われ〳〵は彼等の結合を防いで勞働階級に力を與へないやうにしなければならないであります。――それには、今少しわれ〳〵が勞働階級の貧乏を救つて不滿の聲を收めさせなければなりません。ほんのわづかの小使錢でよろしい。折柄年の瀨が迫つてをる際でもあり、この際、われ〳〵が發起して貧民救濟の慈善事業を催したいと思ひます。これは結局我々自身の利益を計ることになるのであります。」
「ヒヤ、ヒヤ！」
と皆は額をほてらして一齊に手をたゝいた。

二

東京ホテルに、花々しい假裝舞踏會が催されたのは、暮れもおしつまつた二十八日の夜のことであつた。
お寺の本堂かなんぞのやうにだゝつぴろいホールの、天井には、花のやうな電燈が、ぶら下つて光りかゞやき、オーケストラボックスではたえず騷々しい音樂が吹奏されてゐる。
このにぎやかなホールへ、あとからあとからくりこんでくるのは皆今夜の會員である金持や華族の男と女たちだ。
そして、たれもかれも、一人としてあたりまへの服裝をしてはゐない。ひよつとこの面をかぶつた燕尾服の男は、孔雀のやうな洋裝に身をかざつた斷髮の娘とをどつてゐる。
ちよんまげのかつらをかぶつた若い男が、太つた色の白い女と手をとりあつて、浮き浮きとをどつてゐる。
その外、或は刀をさした侍のなりをしたもの、東西屋のやうなピエロの服を着た奴、人をくつたやうに脣をまッ赤にぬつた女、顏に白粉をぬつた男、足の太い青ぶくれのばあさん――さうしたとり〴〵の男や女が得意の扮裝假裝に、お互におどけ、笑ひながらてん〴〵に一組となつて踊り、浮れる大舞踏會場だ！
すえたやうな灯と香料と白粉と酒の匂ひがむんむんとむせ返るばかげきつた何ともいひがたい一種の陽氣が、さしもの廣い舞踏場をおほひつゝんでゐる。
――これが二週間前、帝京會館の樓上で天川侯爵の發起した貧民救濟慈善舞踏會の光景だ。
音樂がサッと鳴りやむと、舞踏者は立ち止つて、てんでに拍手喝采する。
「唯今から食卓の競賣を始めますから……貧民救濟のために、諸君ふるつて御入札あらんことを希望いたします。」
と主催者の天川侯爵――あの額の白いとりすました燕尾服の男が――場内の一段高い所にあらはれて演説した。
わけもなく拍手が起る。
「第一番に主卓！……獻立は既に諸君ご存じの通り！」
「五百圓！」
と叫んだのはピエロ服の男だつた。
「七百圓！」

ひよつとこの面が叫んだ。
「七百五十圓！」
「七百八十圓！」
あとはつゞかない。
「さあ、七百八十圓！　もうありませんか？」
「八百圓！」
「よろしい、八百圓！　それつきりですか？」
「よしッ！　千圓」
といふさびた聲が場の一隅でした。その聲をきいた場内の人々は俄かにどよめいた。
「さあ千圓！　もうありませんかね……」
侯爵は高い所から手を上げて大勢の貴顯紳士淑女を見廻した。
さすがに、今夜の宴會の、たつた一晩の主人公となるべき食卓に坐る權利に千圓以上を投ずるものはないとみえた。
侯爵は皆を見廻して、
「では私が札を入れます。二千圓……」
わッといふやうな叫び聲が隅々から起つた。
侯爵はたつた一つの食卓を二千圓で買つた！　二千圓！　二千圓！
「さあ、その次ぎ！　十二番の食卓です！」
「三百圓！」
人々は再びごつた返した。

かうして當夜の五十組あまりの食卓が、百圓以上、二千圓迄の間のそれ〴〵の値段で人々の間に落札された。
人々は、三々五々自分の買つたテーブルについた。ホテルの支配人が指揮するボオイの一隊によつて、料理と酒が運び出された。人々はかうしてよだれのたれさうなうまい贅澤な料理と酒に腹をいつぱいにふくらせ、更にいやが上に陽氣になつて騷がうといふのだ。
二時間の後、音樂はいよ〳〵たけり狂ひ、大舞踏場は物凄いやうな亂癡氣騷ぎに陷つてしまつた。皆が食卓に拂つた總額が三萬何千圓と、支配人が報告した。それらの大部分が年の瀬に首くゝりさうになつてゐる窮迫した貧民を救濟する結構な社會事業の基金となるのだ。「金持と華族」の食ひかすによつて貧民が救はれるとは？　何と有難い世の中ではあるまいか。
「ヘン！　ばかにしてやがらア。」
と、階上の欄干から舞踏者のごつた返してゐる場内を見下して、
「なアおい！　ばかにしてやがるぢやないか。」
と、さゝやきあつた二人の男があつた。二人とも粗末な背廣服を着てめい〳〵鳥打帽を手に持つてゐる。

三

鳥打をかぶつて欄干にもたれつゝ、舞踏場を見下してゐる二人の男は、一人は天川侯爵の自動車運轉手で、一人はその助手であつた。
「なアおい！　うちの親方も人をくつてるな！　こんな贅澤な底ぬけ騷ぎをして、これが即ち貧民救濟でございたア、ふざけてやがるぢやねえか！」
かう言つて運轉手が憤慨した。
「だから、かういふ催しは社會の階級心を挑發させるだけだと僕がいつてゐるとほりなんです。現に僕等のやうに安い月給で喰つてゐる無産者は、これをみて癪にさはつちまふぢやありませんか。」
助手は赤くなつて熱心に答へた――彼れは若い男である。
「ウム、全く――金持がいかに得手勝手だかこれで判つたよ。」
と運轉手は腕をさすつた。
―自分のすることが得手勝手なばかりでなく、ブルジョアは自分の得手勝手からわり出した都合のいゝ理窟を、之が社會の絕對の眞理だ、××だ！　命令だ！　とわれ〳〵に强ひるのです。

われ〳〵はだまされてはいけないんです。」
若い助手の言葉がいさゝか醉つてゐる運轉手を再び「ウム、全くだ。」と低くならせた時、突然二人のうしろでぽんと手を拍つた男があつた。
「あはツは……さうだぜ君！　兄弟！　若えのにうめえことをいふぢやねえか！」
二人がふり返るとそこには粗末な洋服を着た脊の低い男が突つ立つてゐた。
「えへゝゝ。こいつはお前さん、社會主義が好きでしてね、しよつちう河下博士とかの小むづかしい本をのぞいてゐる可愛い奴なんだ。しかし、之は内所ですよ、うちの大將に知れると……」
と運轉手がその男に助手を紹介したものだ。
「ほう、君は……さうですか、そして諸君は何故こんな所に立つてゐるんです。」
「僕等は天川侯爵家の運轉手ですよ。」
助手はめざとく、脊の低い男を警戒中の刑事と見てとつて、怪しまれるわけはないといふ風にきツとなつた。
「あはゝゝ、君！　僕は刑事ぢやないんだ。安心したまへ！　あははゝゝ。」
「ぢや何ですか？　君は？」
と助手は油斷しなかつた。するとその男は助手の肩を叩いた。
「君、僕だつて社會主義者だぜ。」
――もし助手がもう少し社會主義者といふものを知つてゐたら、こんな變ないひ方をする男を怪しんだのに相違ない。しかし、助手は運轉手の免狀をとる勉强といつしよにマルキシズムの本を熱讀してゐる十九歳の青年だつた。
「さうですか？　そしてどなたです……あなたは？」
と彼れは無邪氣に眸をかゞやかせた。
「平尾さ！　平尾辰馬だよ、僕は……」
「えツ？　平尾さん？　あなたが？」
と思はず助手が叫んだのに無理はない。平尾辰馬といへば現に毎日の新聞紙面を賑はしつゝある大井電氣會社爭議團の中心人物だからだ。
大井電氣のストライキはもう四十何日つゞき、爭議團の策戰が圖に當つて、京濱一帶の各種工場までもが形勢不穩に陷つてゐた。
總罷業！　もしさうなればこの不景氣に、關東一帶の工業會社は破産だ。
「どうしてくれるんだ。社會主義の不良職工共をさへ取締れない××に、一文の×××だつて出せるか。」
と資本家代表は青筋を立てて政府へどなりこんだ。×××××、××××××××××××××をよびつけて、
「理窟はいらん！　あの爭議團を叩きつぶせ！」
と赤くなつて命令した。警官は更に動員された。刑事は八方にとんだ。しかし爭議團はいよいよはつきりしてきて、騷ぎは却つて大きくなつた。
「あの平尾さへやつつければ！」
と報告を手にして××はくやしがつた。その平尾である。二萬の勞働者の有名なリーダーがこんな小さい男だとは？
「しかし、平尾さんが今頃こんな所へくるとはへんですね。」
と助手はまじ〳〵と平尾の顏を眺めた。
「いや、もう僕は駄目なんだ、逃げ廻つてるんだ。あすにもつかまるんだ。警視廳は僕をどんな目にでもあはせてみろ！　一層騷ぎを大きくしてやるんだ！」
「もし！　あなたはぢや、こゝへ何をしに來たんです。」
「知れたことさ！　君等の主人の天川侯爵の妹が嫁に行つてゐる山名鑛造こそ大井電氣の社長ぢやないか！　おい！　天川侯爵は、爭議

顔への面あてに、こんなことをするんだらう！　われ〳〵は之を默つて見ちやゐられない！　おれの體はどうせすぐ×××へぶち込まれるんだ。かうしてやる！」

といひざま、平尾は欄干に片手をかけて、股をひらくと先刻からポケットに忍ばせてゐた何か四角な××××××××、××××××××××××××××、

「えい！」

と、それを人と、音樂と、光りと匂ひで渦を巻いてゐる花やかな舞踏場のまん中めがけてはふつた。

ブリキ罐は青白い煙の尾をひいて宙を飛んだが、途中でその煙が異樣な音を發してひろがつたと思つた瞬間！　世界が、がばッ！と眞つ白になつて、一切が消えてしまつた。

四

天川侯爵家の自動車運轉助手山田三郎は丸ノ内病院の一室で、警官にとりまかれてゐた。警官の中に、背廣服を着て金縁眼鏡をかけた男がゐた。その男が山田を訊問するのである。

「お前は社會主義者だらう。」

「いゝえ、そんなことは‥‥」

「默れ！　それに違ひない。警察ではお前の事をすつかり調べ上げてしまつた。お前は舞踏場へ××××××をなげこんだ重罪犯人だぞ！」

「えッ！　僕は‥‥そんな‥‥」

「だれに頼まれてやつたんだ？」

「そんな‥‥そんな‥‥僕は、何も知らないのに‥‥」

「お前のなげた××××××のためにホテルのボオイが一人重傷を負つた。天川侯爵は頭にやけどをした。なほつても禿頭になつて、世間へ出られないというてゐる。その外紳士淑女たちで怪我をした者が三人ある。お前は少くても十年位の懲役に行かなければならないのだ。あの時のことを、ありていに申し立てれば情狀酌量といふこともある。正直にいへ！」

山田は震へ上つてしまつた。彼れはあの日、たしかに平尾辰馬が××をなげたのを目撃した。‥‥その瞬間に、彼れは×××震動をくらつて倒れた。氣がついてみると病院の一室にゐて刑事が嚴重に張番をしてゐる。彼れはあの時一緒にゐた運轉手がどうなつたか？　あの華やかな舞踏場がどうなつたか？　その後の事はちつとも知らないのだ。そして何も知らない間に自分が××犯人になつてしまつてゐる。

十年の懲役！

彼れは恐ろしくなつて叫んだ。

「××××××をなげたのは、僕ぢやないんです。外の人なんです——名前だつてしつてゐます。」

「え！　だれだ？　それは？」

と、彼れをとりまいてゐた連中が一齊に叫んだ。

「ひ、ひらをといふ人です！」

「ひらを？　平尾辰馬か？」

「さうです‥‥あの時、僕が運轉手の鈴木さんと‥‥欄干にもたれてゐると‥‥」

と彼れは手眞似でその時そこへあらはれた平尾のことを語つた。そして××犯人は平尾辰馬に違ひないことを立證した。訊問はあわたゞしく打ち切られた。

その日の午後、ベッドの上に、山田がうつらつとしてゐると、今朝みた金縁眼鏡の男がはひつて來て、彼れに一枚の寫眞をみせた。

「この男を知つてゐるか？」

山田は首をまげて寫眞をのぞいた。一向覺えのない勞働者風の男の寫眞である。

「いゝえ！」

「思ひ出せないか。」
「ちつとも知りません。」
「とぼけるな、これが平尾辰馬だ……」
「え？……」
大きな、――疑惑が彼れの頭を掠めた。
「どうだ、思ひ出したらう？」
金縁眼鏡の男が、寫眞を彼れのハナサキにつきつけた。
「違ひます！　違ひますよ、僕の見た平尾さんはそんな顏ぢやなかつたんです。」
と彼れは無我夢中で答へた。
「ふうム……さうか。」
と金縁眼鏡の男は、ぢつと山田の顏をみた。そして舞踏會場へ現はれた平尾辰馬の顏――について鋭く、質問をつゞけた。山田は汗みどろになつて半ば夢中で答へつゞけた。
「よし、ではけふはこれ位にしておかう。お前はあの時腦震盪を起したのだから靜かにしてゐなくてはいかんぜ。大切な證人なんだからな。」
と金縁眼鏡は初めてやさしくいつて、かへつて行つた。山田はその男が裁判所の檢事だといふことをもう知つた。そして、自分が今や恐るべき事件の大切な證據人として取調べられてゐるのだといふことも！
――夜になつた。
突然ドアが荒々しく押しひらかれてまだみたこともない赤ら顏の大島の着物を着た男が、色の黒い和服の男を二人つれてはひつて來た。
そして、いきなりねてゐる山田の肩口をつかみ起して、
「こら！　きさまは出鱈目をいふと僞證罪になつて二年以下の懲役にはふりこまれるのを知つてゐるのか？　何故正直に事實を白狀しないのだ！」
と、ふところから晝間檢事にみせられたのと同じ寫眞をとり出して、
「きさまがホテルで會つた犯人はこの男ぢやないか！　この男に違ひないぢやないか！　どこが違つてゐるんだ。」
赤ら顏の男は、いよ／＼眞つ赤な顏になつて山田の胸倉をつかみ上げた。山田は息が切れさうになつて、
「痛ッ！　痛ッ！」
ともがいた。

五

すると、うしろにゐた黒い顏の男が、
「そんな手荒なことをするもんぢやありませんよ。離してやりなさい。どきなさい。無法です。」
と赤ら顏を押しどけた。
「ね君！　痛かつたらう……しかし君もあの時のことを、思ひ違ひしちやいけないよ。あの時、平尾の顏をみたのは君ばかりぢやない。運轉手の鈴木君だつて見てゐる。そして鈴木君はこの男に違ひないといつてゐるんだ！」
と黒い顏は不氣味な笑顏を作つて、赤ら顏からとり上げた平尾の寫眞をみせびらかせた。
「ね、多分君の思ひ違ひなんだ。あの時君のみた犯人はこの男だつたんだ。何も心配することはない。さうですと一言いへばあとは君は全然無關係になるんだぜ、違ふといつてれば、鈴木君の證言と一致しないから尙取調べるために、君はあすにも刑務所へ收容されてしまふ！　そんなことになる前によく思ひ出してみたまへ！」
刑務所へ收容されるときいて山田はふるへ出した。
何でもいゝ、早くさうですといつてしまへ！　さういはれてみれば××××をなげた男の顏も、この寫眞にどこか似てゐたからな……そ

れにあの時自分は倒れて腦をやられたんだ。記憶がこんがらかつたのかもしれない。

「……僕、あの時頭を痛めたものですから……ほんたうは、よく、わからないんです。」

と彼れは苦しまぎれに遁辭した。

「それみたまへ！　君がみたのはこの男なんだ！　ね、この男だらう。」

黑い顏は再び寫眞をふりかざした――。

「さうかもしれません。」

山田は良心に恥ぢて蚊の啼くやうな聲を出した。しかし赤ら顏も黑い顏も、この山田の一言で、喜びに滿ち輝いた。

「それに違ひないんだ。鈴木君もさうだといつてゐるんだ。」

「鈴木さんがさうなら多分間違ひはないでせう。」

「よし、ではちよつと、こゝにその通り君の證言を書いたから、これに署名して捺印してくれたまへ……」

　とずつとうしろに控へて先刻から何か一通の書きつけを用意してゐた別の男がすゝみ出てきた。

「何でもないんだ。念のためだ。」

「心配いらないよ。あはゝゝ。」

四方からさういふ風に取りかこまれた中で、氣の弱い山田は、おづ／＼とペンをとつて名前をかき捺印をさせられた。

　しかし、彼れは心配になつて泣くやうにきいた。

「しかし、この書付が、裁判所へ出るんぢやありませんか。」

「心配するな、心配するな！」

「そんなことはないよ。」

　と忽ち左右から打ち消された。しかし赤ら顏の男は此の時、改まつて、嚴い聲で、いつた。

「ぢや山田……お前は今後だれの前でもこの通りにいはないといけないぞ！　この陳述と違つたやうなことを警察や裁判所で言つたが最後、お前はわれ／＼の手でどんなにしてでも××てしまふぞ！　いゝか？」

　山田は青くなつて、

「その通り、いひます。」

とふるへた。

「必ずそむかない！　と宣誓をしろ！」

「宣誓します。」

　すると黑い顏が横から又いつた。

「あす又あの金縁眼鏡がくるからその時にもけふの通りに答へるんだぜ、きのふのは、どうも思ひ違ひだつたとな――われ／＼は君の味方だ！　安心したまへ、決して惡くはしやしない。」

　かうして、一同は歸つて行つた。

　彼等が何者であるかといふことは、恐ろしくて山田はきいてみることもできなかつた。××の人間らしくもあつたが、どうやらさうではなささうだ。あれはきつと會社に雇はれてゐる陰謀團だ。最もタチの惡いスパイだ。――彼れは一晩中まんじりともせずにふるへてゐた。

　翌日は刑事につれられて檢事局へ出頭した。その後更に豫審判事の取調べをうけた。

　間もなく病氣は癒り、退院はしたがどこへ行くにも××の××がついた。ある日、彼れは芝口から銀座へ出る地點でたゞならぬ群集のどよめきをみた。

　幾旒もの白い旗を押し立てたナッパ服の一團が、烏のやうな警官の群と押しあひ、もみあつて、怒號してゐた。ナッパ服は一人づつ警官に引ッ立てて行かれた。ある一人のナッパ服は路傍の荷車の上にとび上り野次馬に向つてビラをまいたために、忽ち警官たちのために引きずり下され、手とり足とりまるで分捕品のやうに舁いで行かれた。

山田は足許へ散つて來たビラの一枚を拾ひとつた。

「××××××かけられて牢獄に呻吟する我等の闘士平尾辰馬を救へ。資本家は爭議團を全滅させんがため今や死物狂ひとなつて、われらに刃を向けてゐる。」

さうした文字が彼れの眼に映つた。××がうしろから彼れの肩を叩いて言つた。

「奴等こそ死物狂ひになつて譃八百のビラをまいてやがるんだ。だれが、こんなことをいつたつて信ずるものか。」

見れば××も亦、ビラの一枚を拾つてゐる。

「おウ！　僕は…僕は…知つてゐる！」

山田は、愕然として、又呆然として、町角を警官隊に追はれてゆく爭議團の群を眺めた。——

六

年が改まつて春となつた。ある春の夜のことである。品川警察の裏門からぬれねずみとなつた瀕死の男が、タクシイで運びこまれて來た。

「何だ？　何だ？」

と居合せた刑事が、運んで來た刑事の傍へよつた。

「なアに、身投げさ！　たゞちよつとふところにへんな書置みたいなものを持つてゐたのでね、調べてみると或重大な事件に關係のある男なんだ。　署長に電話をかけなくちやならない！」

刑事部屋へ、ねかされて、蟲の息となつてゐる自殺者は、顏の色こそすつかり青ざめて生氣がなくなつてゐるが、どうやら助手の山田三郎らしい。いや、よくみると、それは山田に違ひなかつた。

「これを見給へ！」

と刑事は同僚の刑事に、べと〱にぬれた手紙をみせた。

「どれ…」

その刑事は、ぬれ手紙をよむ。

「大井電氣の勞働者諸君。どうかゆるしてくれ給へ。僕は死を以ておわびをする。君等の指導者平尾辰馬氏を牢獄へ投じたのは僕です。公判で、平尾氏が七年の懲役にきまつたといふ新聞記事を今朝よんで、僕は良心の苛責に耐へず、死して罪を謝す決心をしました。

平尾さん！　まだお目にかゝつたことはありませんが、どうか氣の弱い僕をゆるして下さい。僕は弱者です。しかし僕にも正義の何たるかは判ります。しかし、弱い人道主義者の僕などは、生きてゐても何の働きもできませんから、せめて、死んでなりとあなたの宥しを乞ふ次第です。——元天川家の運轉助手山田三郎拜」

「ふウム——この男がこなひだの舞踏會事件の公判の時の證人になつたあの助手の奴かい！」

とよみ終つた。

そして二人は、倒れてゐる自殺未遂者の顏をぢつと眺めた。そこへ醫者がはひつて來た。二人の刑事はいそいで、ひろげてゐたぬれ×××××××。

＊　＊　＊　＊

山田の自殺のことは、どこの新聞にもあらはれなかつた。もし、これが世間へ漏れたならば、天下を震撼させた舞踏會事件の唯一人の證人だつた山田が自殺したといふんだから新聞はきつと大げさにかき立てた事だらう。或は知つてて一行もかゝなかつたのかも知れない。要するに事件はかうして萬事うやむやの裡に葬られた。

大井電氣の爭議は、平尾がやられた後、勞働者側の惨敗に終つた。ストライキに參加した職

工の大部分はくび切られ、組合は完全につぶされてしまつた。

職工たちは今更平尾がゐないことが自分たちにこれ位不利益なのだと、はつきりわかつた。平尾は大勢の頭の上におちかゝる大きな石を、支へてゐてくれた男だ。大なる味方だ。おちかゝる石とは、賃銀値下だ！　手當の棒引きだ！　休業だ！　くびだ！　資本家だ！

爭議慘敗と同時に、今やそれらが一時に頭の上におちて來たではないか。みんな苦しまなければならない。しかも、牢獄の中では平尾が苦しんでゐる。

プロレタリアは皆苦しんでゐる。苦しさは年一年とましてくる。しかしブルジョアは陽氣に、金を使つて、女とふざけて、太平樂をきめこんでゐる。

舞踏會事件以來、かうして足かけ三年の月日が流れた。世の中は、三年前と比べて、空氣はどこもかしこも險惡だ。それは、勞働階級の苦しみがましてくるせゐだ。

ある日の事、×××刑務所の面會所へ、一人の男がきた。

「平尾辰馬に面會させて下さい。」

「お前は何者だ？」

と看守は眼を光らせた。

「山田三郎、友人です。」

「そこに待つてをれ！」

面會人の控所にみちびかれて平尾の出てくるのを待つてゐる若い男、――顏は日にやけ、手は節くれ立つて、みちがへるやうだつたが、それが三年前の山田三郎だつた。三年たつて、彼れは一體こゝへ何しにきたのだらうか？

七

面會所の柵をへだてて、平尾辰馬と、山田三郎は、初めて顏を見合せた。

「何しに來たんだ。」

と平尾は公判廷に於ける×××スパイだつた山田の顏を憎々しげににらみすゑた。柿色の着物をきて、目の落ちくぼんだ平尾を山田はいたましさうに見上げて、

「平尾さん、許して下さい。僕はあなたをこんな日に會はせ、あの時の大勢のわれ〳〵の仲間を窮地に落し入れた人間です。」

「われ〳〵の仲間？　おい、それはお前のやうな×××の使ふ言葉ではなからう。」

「いえ！　さうぢやないんです。僕がどんなにあの事件で苦しんだかといふことをあなたは知らない。へマな僕はあなたに詫びるつもりで自殺までして、皮肉にも警察に救ひ上げられました。」

「そんなことは俺の知つたことぢやない！」

「いゝえ！　それから、僕はやうやく氣がついたんです。僕は支配階級の××××××を知りました。支配階級はその非をとげるためには、どんな××な、××なことでもする××××であるといふことを、知つたのです。そして、僕はしへたげられてゐるわれ〳〵多くの仲間のために、死ぬまで戰ふ決心をしたのです。――僕は今では一個の勞働者です。首を切られて、食ふものがなくなつてもビクともしない戰闘的勞働者です。かうなつたのも、皆あの舞踏會の晩の出來事のおかげです。」

山田の熱心な言葉に、平尾の態度が變つて來た。

「さうか、君はそんな男になつたのか？」

「さうです。僕はあれから二年、芝口電氣で働きました。その間ストライキに二度加はりました。今度三度目をやつて、首を切られ、きのふ留置場から出て來たばかりです。あすは、僕は東京をたつて友達の働いてゐる濱松のピアノ製造會社へ行きます。當分東京へ歸れない

のであなたに會ひに來たのです。僕はあなたを監獄へはふり込んだが、あなたの身代りになつて、働いてゐることを知つて貰ひたくて來たんです。之があなたに對するお詫です。」

と山田はペコリと頭をさげた。

「さうか、わかつた、偉いよ、山田君！　行け！　われ〳〵勞働者は互に戰友の屍を踏み越えて、前進しなければならない。われ〳〵は皆勞働階級のために××××××××！」

「ではお達者で！」

「濱松へ行つたら、うんと働けよ。旋風をまき起せ！」

「どうか見てゐて下さい。」

と山田はきのふに變る節くれ立つた拳を差上げて笑つた。

「あはゝゝ、ブルジョアはその××××××策略で、彼自身の敵を日に〳〵作り上げて行くんだな！　舞踏會事件で俺をブチ込んでも、君といふ新しい強い男が、すぐその場から生れてゐるのを……」

「發言を禁止する！」

傍から、看守が帶劍をガチャつかせて、平尾のからだを引き戻した。同時に面會所の窓が、ガタリとおりて、平尾の太い低い笑ひ聲だけが、窓の外に突ッ立つてゐる山田の耳に聞えた。

＊　＊　＊　＊　＊

濱松のピアノ會社に左翼の勞働組合が生れ、その組合が主體となつて爭議が勃發したのは、それから一年の後であつた。

ピアノ爭議、それは血の雨の降るやうな騷動となつて、全國のすべての人々の耳朶を打つた。爭議團には多くの犧牲者を出した。傷いて刑務所に收容された犧牲者の中に山田三郎がゐた。彼は、その昔、平尾辰馬と同じある罪名で公判廷に立たせられた。

裁判長が、金モールの法服の下からネクタイをはみ出させながら、

「お前が勞働運動をやるやうになつた動機を述べて見ろ。」

と山田に云つた。山田は日に燒けた赤黒い額で裁判長を見つめながら、

「動機を申しのべます。私は元天川侯爵家の自動車の運轉助手をしてゐた極く普通の男でした。所が……」

と、彼れはかつての舞踏會事件の思ひ出を滔々と半時間あまりのべ立てた後、自分が左翼的勞働者となつた理由をのべ、

「金持、地主、××、××、×××――之等の支配階級及びその機關が勞働階級を××××する程、私のやうな反抗者を激増させてくる。即ち金持階級は今日一所懸命になつて、おのれ自身の×××××こしらへてゐるのだ！」

すると傍聽席に××××××。廷内はざわめいた。裁判長は眞つ赤になつて、すつくと立ち上ると、

「傍聽を禁止し傍聽人の退廷を命ずる！」

と呶鳴つた。

傍聽席につまつてゐた鳥打帽やナッパ服の人々が、×××！　×××××××、看守とつかみ合ひながら外へ押しだされて來た。

（一九二八年十一月）

チタの烙印

日本に「過激派」といふ言葉の流行した頃の或るぼやけた物語

一

霧の深い九月の夜。

浦汐斯徳派遣軍司令部付きの通譯坂本一平は、キタイスカヤ街の或る喫茶店の中に坐つてゐた。

さつきから彼の眸は、往來に立つてこの喫茶店の飾窓を眺めこんでゐる美しい娘の顔を、またゝきもせずに見つめてゐる。露西亞特有の分厚いガラス戸のはひつた飾窓の中には狐色にこげたうまさうなパンや、チーズや、チョコレートや、火酒の壜が、陳列してあつた。

娘はそれを眺めてゐるのだ。いや、彼女が何よりも欲しさうに見てゐるのが、狐色にこげたパンだといふことまで、坂本にはちやんとわかつてゐる。何故といへば坂本は、もうこの喫茶店で二時間近くも坐りこんでゐるのだ。

――所が娘の方でもさつきからそれと同じ位殆んど二時間近く、飾窓の前を離れないのだ。行つてしまつたかと思ふと、往來の闇の中から映畫でみる「溶明」の如くすうと又その白い顔があらはれて、窓ガラスに頬をくつつけるやうに中をのぞいてゐる。うまさうにこげた狐色のパンを……。

坂本はもうあき〳〵する程彼女を觀察しつくしてゐた。で、彼はさま〴〵に女に對する見當をつけてゐた。――その頃舊制度の潰れたばかりの浦汐市では、財産を沒收されたブルジョワの娘が、夜の女となつて街頭を彷徨うてゐた。この娘もきつとさうした女の一人だな……と。そしてお腹がすいて仕方がないので、あの飾窓の中のパンを眺めながら身の上の悲しさを忘れてゐるのだ。――と。

そして、彼の心は、さうとわかつたさつきから、可なり人道主義的な亢奮に驅られてゐた。

坂本は今年外語を出たばかりの文學好きの青年で、ドストイエフスキイの心醉者だつた。その彼が戰時通譯になつて浦汐へ來たのも、ドストイエフスキイの「罪と罰」に描かれたやうな懷しい露西亞をあこがれてであつた。從つて又その彼が今、目の前に、腹の減つたらしいあはれな娘を發見して夢想に等しい人道主義的な亢奮に驅られたとしてもいたし方がない。

二

坂本は、狐色にこげたうまさうなパンの包みを小わきにかいこんで、往來へとび出してみたが、女の姿はもうその邊に見當らなかつた。

日初でいへば初秋といふ季節だのに、浦汐の町はひえ〴〵と寒く、そして華やかな灯のついたキタイスカヤ街はすつかり霧につゝまれてゐた。

坂本は灯と霧の中を足早に歩いて行つた。色々の物の影が歩くにつれて大きく黒く近よつてくる。――彼は知らない間に一人の女に追ひついてゐた。

女はふり返つた。――その顔を見た瞬間、坂本は反射的に帽子の廂に手をかけた。

「今晩は……」

と聲をかけると、女は恥かしさうにうつむいて足が早くなつた。

「君……お腹がすいてるんぢやないの？」

坂本は必死に追ひつき乍ら言つた。

「いえ!?…」

女は坂本の言葉がだしぬけだつたので、びつくりしたやうな妙な返辭をした。

「だつて、さつき…あれは…パンを見てたのでせう?」

「パン?」

と、女は不思議さうに坂本の顏をみた。

「あげませうか、パンを?」

坂本は小わきにかゝへてゐる包みをみせて、

「あなたのために買つてきてあげたのです。」

「まあ…」

と女は低く叫んだ。

三

女は蠟燭立てに火を移した。

部屋の隅に木で作つた寝臺があつた。彼女はそこにかけて一脚しかない椅子を彼にすゝめた。坂本は椅子にかけてから部屋の中を見廻した。すると一方の壁に、どこかで見たことのある老將軍の古ぼけた肖像畫がかゝつてゐた。

女は立つてきて坂本の肩に額を埋めた。そして、いつた。

「ね、あなた、日本の方、あたしを救けると思つて泊つて行つて、頂戴…」

坂本は、ふるへ乍ら女の手をとつた。

「ぢや僕は、君を…君を、そんな女だと思つてもいゝの?」

「えゝ、いゝのよ、いゝのよ、だつて、あたし、飢じいんですもの。」

そこで坂本は包みをほどいてパンを出してやつた。娘は大きなパンを兩手に持つて、かじり乍ら、眼に涙をためた。その眼に、壁の老將軍の肖像畫がうつると、彼女は青白いぬれた瞳をみひらいたまゝ、

「お父さん! 許して下さい…」

と、合掌した。

坂本はふり返つてもう一度その肖像畫をみた。無名の老將軍は、卓上の乏しい蠟燭の光りの中でパンを食つてゐる娘をぢつと見下してゐた。

「これはあなたのお父さんですか?」

と坂本が肖像畫を指すと、彼女は悲しさうにうなづいた。

その刹那に――ものゝハズミといふものは妙なもので、坂本は肖像畫の主がきのふ、赤衞軍に射殺されたと大きく寫眞入りで新聞に出てゐた浦汐獨立守備團司令官レオ・ペトロフ中將の顏であることを思ひ出した。同時に彼の心ははね上つた。

どうやら今、自分の眼の前にゐる娘は、行方不明になつたと新聞に載つてゐた一人娘のカテーリナ・ペトローワらしい! 坂本は勇氣を出して再び娘の手を摑んだ。

「お孃さん! あなたはカテーリナさんでせう!?」

女は、おどろいて食つてゐたパンをはふり出した。そして逃げようとした。坂本は放さなかつた。すると、彼女は逆に坂本の胸に額を埋めて、

「あたし、恥かしいわ。死、死んだ方がいゝわ!」

とすゝり泣いた。

娘をなだめすかして、平靜にかへらせるのに一時間ばかり、坂本は骨を折つた。彼女は落ちついてくると、やつと悲しさうな口調で、

「あなたは何故あたしを知つてゐたの?」

ときいた。

「だつてあなたのお父さんの寫眞がきのふの新聞に大きく出てゐましたからね。」

と坂本は再び肖像畫を指した。

「え? 新聞にお父さんのことが何つて? 出

てゐました。—
女が不安な顏になつたので、坂本は彼女がまだ父の運命を知らないでゐるのだと知つて、いつの間に自分がこの娘に、その父の悲運の最期を告げる役目に選ばれたんだらうと、運命をのろつた。彼は苦しさうに、やつと口を切つた。
「お孃さん！ あなたのお父さんは…きのふ赤衛軍司令部で、銃、殺……されたんです。」
果して女の顏は、眼とともにつれ上つた。彼女は、しばらく息もつかなかつたがそのまゝ、
「あゝッ！」
と叫んでのけぞつてしまつた。
坂本は娘の、しなやかに重みのある若い體を、寢臺の上にかゝへ上げた。
彼は困つて「今夜は何といふ晩だらう」と思つた時、うしろで靴音がした。ふり返るとそこに赤衛軍の將校がピストルを擬して立つてゐる。そのうしろには銃劍を持つた兵卒が五六人かたまつてゐる。將校は懷中電燈で坂本の體をなで廻すやうに調べ上げた後、
「出て下さい！」
といつた。坂本は何かいはうとしたが、恐怖に舌がもつれて聲が出なかつた。
「日本の泥坊だ！」
と兵卒たちが靴をふみならした。
「ど、どうするといふんだ！」
坂本がやつと聲を出した。
「私達は白軍の幹部だつたペトロフの娘を逮捕に來たんです！ お怪我のない内に、早く出て下さい！」
將校の命令に仕方なく坂本は帽子をとり上げた。ドアの外へ出る時、ふり返ると、カテーリナの氣絶した白蠟のやうな顏を兵卒たちがかかへおこしてゐた。

四

赤衛軍が浦汐斯德停車場を占領したのは三日前だつた。市中には日本軍がまだゐたが白軍は潰滅して殘兵が强盜化したため、日本軍はあすにも赤衛軍に市の實權を引渡して撤退しなければ納りのつかない破目になつてゐた。
坂本通譯はその夜宿舍の寢臺の中で、悶々の一夜をあかして、明け方近くとろ〳〵と眠り、今度眼をさますともう晝をすぎてゐた。彼は窓の外に車の軋つてゐるやうな物音をきいて、硝子戸をひらいた。
外には霧雨が街をぬらしてゐた。その中を葬式がとほつて行くのだ。オーケストラの響きが、黑い洋傘をさした人間の行列を粛々と行進させてゐる。行列の中に白い旗が二三旒纏つて近づいてくる。坂本は寢不足の眼をこすつた。旗には金釘流の露西亞文字がいつぱいに書いてある。
「我等のペトロフ死せり。」
「君の運命はやがて我等の運命なり。」
「レオ・ペトロフ中將を弔ふ。」
旗は風のない雨の中を力なくなびいて行く。
「ペトロフの葬式だ！」
坂本は窓にもたれて行列を見下した。
「カテーリナ！ あのやさしいおぼこな娘！」
すぐに、彼にはゆうべの女の運命がむごたらしく氣になつた。
彼は泣きたいやうな思ひをこらへて、部屋の中を歩き廻つた。

五

その夜——
司令部で明後日引上げの話をきいた坂本は、軍と一緒に日本へかへる氣はなかつたので部隊に辭職して、慰勞金を千圓あまり貰つて、宿舍へかへつた。彼はあのカテーリナに會つてから、

浦汐を去る氣がしなくなつたのである。カテーリナは彼を捕へた。しかし、彼女は今どこへ行つたのだらう？

とぼ〳〵とドアにノックがきこえる。寢衣のまゝおきて行つて引きあけると、ヒキガヘルのやうな顔をした脊の低い老人が外套と頭巾に身を包んで立つてゐる。

「だれだ！　君は？」

「ごめん下さい、坂本通譯は、あなたですか？」

「さうだ。」

「實はね、今夜カテーリナさんが死刑になるので、お知らせに來てあげたんですよ。」

と老人がのそ〳〵と部屋の中へはひつて來た時、彼がひどいセムシであることがわかつた。彼はせか〳〵といつた。

「ごめん下さい！　わしは、停車場の掃除人夫です。きのふから赤の監獄の看守になりましてね、いえ、停車場の地下室が臨時監獄になつてゐるんです。カテーリナさんは可哀さうですよ。だから賴みをきいてやつたんです。今、日本軍司令部であなたの宿所をきいてきました。死刑は午前三時です。銃殺ですよ、えゝ！　停車場裏手の糧秣廠内の秣を干す廣場でやるんです。十三人やられます。カテーリナさんは十一人目に立つてゐます。一齊射撃です。所がいかがです。鐵砲をぶッ放す男たちが二十六人……つまり一人に二人づつ、彈丸をくらはせるんですが……カテーリナさんを射撃する二人を五百圓づつで買收できますよ。合計千圓！　カテーリナさんは、鐵の格子の間から手を合せて、わしにいひましたよ。日本軍司令部の通譯タワリーシチ坂本が私のたつた一人の戀人だ！　お金の相談に行つてくれ！　そして、救け出して日本へ連れて逃げてくれるやうに話してくれ、とからなんですがね、いかゞでせう、ゴスポジンタワリーシチ！」

坂本にとつてこの老看守のもたらした話は晴天のへきれきだつた。ゆうべ彼女に自分の名を告げておかなかつたらどうなつたらう。彼は合掌して天をあふいだ。もう何も考へる必要はない！　ゆうべから彼女のためになやんでゐるこのおれを、カテーリナもまた愛してゐるんだ！　あの中將の娘が！　日本人の、このおれを、愛してゐる！　露西亞の男たち糞くらへ！　彼はをどり上つて司令部で今貰つて來た手の切れるやうな紙幣の束を、セムシの看守にたゝきつけた。セムシはとびつくやうに紙幣をつかむと、うれしさうな早口になつた。

「ではたしかに……このとほりわしは空彈を二發持つてゐます。五百圓で射手たちは、わしのこの空彈を、奴らの實彈とすりかへるのです。死刑執行がすめば死體に白木綿をかけるのはわしの役目です。そして長い白木の箱に入れて、引取人のあるのは、その方へ引渡します。でこれから、そろ〳〵出かけませう。そして、いゝ加減な名前で死體引取の手續をしなければいけません。」

坂本は老看守につれられて、自動車で停車場の赤軍司令部迄のりつけた。手續の書面にいゝ加減なサインをしたものを看守が中へ持つてはひつて行つたが、間もなく、裏へ廻つて待つてをれとの返事を得てきた。霧に閉ざされた停車場附近は灯の色もきえてしまつて、唯朦朧たる薄闇で三尺位先きがもう見透せなかつた。坂本は自動車の中で、しみつくやうな寒さを耐へ乍ら、二時間近くを待つた。そこは、元白軍司令部の糧秣廠の裏門だ。この中の秣を干す廣場で、死刑執行が行はれるのだ。坂本は腕時計をすかしてみた。

午前三時に十五分前だ。おう、もう十五分！　彼はいら〳〵してゐても立つてもゐられなくなつた。恰も自分が斷頭臺へ引きずり上げられる

やうな氣がして――。

「カテーリナ！」

と彼はたまらなくなつて叫んだ。無事に生きて、白木の棺の中へはひつてかつぎ出されてくるのだらうか！　蓋をあけてみたら、彼女の胸は血に染まつて……。

「もし／＼……ゴスポジン！」

はツとその聲に我れに返ると、いつの間にどこから出て來たのかさつき表門で別れたセムシの老看守が、霧の中から顏を出して、自動車の中をのぞきこんでゐる。

「うまく行きましたよ……へゝゝ、ところで、あなたは、銃殺の現場をみたいとは思ひませんか。……カテーリナさんがいかに上手にうたれて死ぬかを、ごらんなさる氣はありませんかな。」

「えツ！　中へはひれるのかい？」

と坂本、ドアをあけて車の外へとび出した。

脊の低いセムシは小さな惡魔の如く地上に小をどりして、銀色にみえる裏門を指した。

「決して……みつけられたら、序手に撃ち殺されるかもしれません。しかし、今夜は霧の深い晩だ……そつと忍び込めば、わけはありません！　わしがかうして忍び出て來た位だから……。さあ早く、もう十分もありませんよ。」

坂本は、老人のうしろから、幻のやうに、門内へきえた。

六

死刑執行場――。

霧の深い廣場に十三本の棒が立ち、向うの黑い建物の蔭から引き出されて來た十三人の白衣の人々が……それ／＼めい／＼の棒にくゝりつけられ、黑い布で目かくしが施された。

坂本は、十一人目を暗の中から凝視してゐた。一人の看守につれられてきたやゝ脊の低い白衣の死刑囚は、第十一番目の柱にくゝりつけられた。カテーリナだ！　見える！　見える！――霧の中のなつかしい顏――それもすぐ別の看守に黑布で目かくしされてしまつた。と、どうしたのか、彼女は一旦柱にくゝりつけられた手を又ほどいて貰つた。そして自由になつた手で、黑布の目かくしを、結びなほした、それから看守にその手を、もとの通り縛つて貰つた。

何といふ女らしい心遣ひだ！　それともどこからか坂本がみてゐるかも知れないと思つて、自分は救かることを知つてゐます――といふことを知らせる合圖なのだらうか！　おうお前の坂本はこゝに見てゐる！　この殘酷な深夜の悲劇を！

十三個の、白き墓標に似たる死刑囚の立ち並ぶ面前へ、これは又黑い死の影のやうな射手の一隊があらはれた。射手たちは、默々として、囚人の凡そ二十メートルの前面に散開した。

どこからか、死刑執行官らしい指揮者の影があらはれた。

執行官は霧の中で杖をふつた。霧の作用で杖の影がやりのやうに長くみえた。

射手達は、銃を上げた。立擊の構へだ！

十一人目を射つものはだれだ！　彈丸を外らすな外の射手奴!!

あゝ、見える！　見えてゐる。白い霧の中に、ぼんやりとカテーリナが、墓標につながれ、惡魔に銃口をむけられながら!!――あゝツ、坂本は、どしんと、地上にたふれて、顏を伏した。

その刹那に射擊の音は、鳴りひゞいて、夢のやうに餘韻をとほく停車場の方にコダマさせた。

「うゝ……」

坂本は地上に轉つて苦悶した。地の冷たさが彼の膚にとほつてきて、やつと落ちついた瞬

間に自分が撃たれたのではなかつたと氣がついた。

しかし、その時顔を上げた彼のもうろうたる視野に、今迄死刑囚の並んでゐた廣場は、白い柱だけになつてゐる。いや、それ〳〵の柱の根方にたふれて白く盛り上つた人間の屍の、一つ一つを、今、死刑執行官が檢視して歩いてゐる。杖で死體をつゝいてゐるその姿が、霧の中に、地獄の鬼の如くみえた。

七

坂本は、白木の寢棺をやつとの思ひで自分の部屋へ運びこんで一人になると、猫のやうに眞つ蒼に眼を輝かせて、海軍ナイフを逆手に、棺の蓋を切り開いた。

蓋を破ると、白布に包まれてあをむけになつてゐる大理石像のやうな女の屍があらはれた。

彼は、がた〳〵ふるへる手でその白布をめくりとつた。と、うす黒くなつた瞼を、もうコト切れたやうに閉ぢてゐるカテーリナの顔が、あまりにも近々と、彼の瞳の中に甦つた。

「カテーリナ！」

彼は心も狂はんばかりにその首を抱きおこした。カテーリナはしかし、眸を開かなかつた。

「カテーリナ！　カテーリナ！」

と彼は、彼女に頰ずりをし、片手でその心臓のあたりをさぐつた。と、彼の手は冷たいねばねばするものにふれた。びつくりした彼が、彼女の白い着物の胸のあたりをまくつてみると、血が……まつ赤な血の斑點が……！

「お、お、おう！！」

坂本はほえるやうに唸つた。彼は、怒りと絶望に我れを失つて、兩手を差し上げた。

「あいつ！！　セムシめ！！　おれを欺した！　欺したな！！　たゞの、死骸を、千圓に賣りつけやがつたな！！」

しかし、度を失つた坂本が、一時間ばかりもさうして、部屋の中を、鬼のやうに狂ひ廻つてゐるヒマに、寢棺の中では、カテリーナが、靜かに息をふき返してゐた。

狂ひ疲れた坂本がやつとそれに氣がついた時は、カテリーナは、彼がもう、永久に開かないと思つたその眼をかすかにあいて、不思議さうに坂本の方を見てゐた。坂本は、魂がぬけて了つたやうに、茫然となつて、寢棺の傍に寄つた。

カテーリナは、兩手を差し出した。彼は亡靈のために幽冥界へ引き入れられる人のやうに彼女の手をとつた。そして、我知らずずる〳〵と彼女の體を半分ばかり寢棺の中でひきおこした。するとカテーリナの肩や腋の下から白い花がはら〳〵こぼれた。不思議にもカテーリナは坂本の顔をみて笑つた。彼女が笑つた時に、坂本は初めて彼女の顔が、婚禮の晩のやうにこつてりとした厚化粧にいろどられ、その細い美しい唇が金色に反射する位、紅を光らせてゐるのに氣がついた。黒いと思つたその瞼は薄く墨をぬつて化粧してゐるのだ。そして彼女のさうした體からはえもいはれぬ香料の匂ひが發散してくる。

「カテーリナ！」

と坂本は泣きながら彼女の體をかゝへ上げた。そしてベッドの上へ連れて行つた。彼女のシャツや下着は血にぬれてゐたが、彼女の體には擦り傷一つ見當らなかつた。

「カテーリナ！　カテーリナ！　あなたは救かつたんだよ！　あなたは一體……これはまアどうしたんだ。」

坂本は狂ほしく彼女に接吻した。彼女はほつと、長い溜息をついて坂本の頭をかゝへ乍ら、

「みんな……みんな……あのイワノフが、てくれたのよ……」

イワノフ――セムシの老看守の名だ。

八

歸還兵と一緒に敦賀に上陸した坂本とその愛人カテーリナのことがはからずも大阪と東京の××新聞に大きく書き立てられた。カテーリナが浦汐獨立守備團の司令官だつたレオ・ペトロフ中將の一人娘であること――彼女が死刑の執行をうけて、しかも死なずに、いかにしてその愛人坂本の許へ來たか――それにはペトロフ中將の馬丁だつたイワノフといふセムシの老人が、赤衞軍軍事監獄の看守になつてゐて蔭から大いに働いたためだといふことなど、詳しく報道された。讀者諸君の内には大正×年頃の、××新聞のその記事を覺えてゐる人が少くなからうと思ふから、之れ以上當時のことはこゝへは書かない。

坂本とカテーリナは東京で結婚した。坂本の家は横濱の相當大きな絹布輸出商だつたが、兩親の死後、弟と二人で財産をわけあつて、その弟は東京である會社につとめてゐた。で、坂本自身には三十萬圓あまりの有價證券や何かの財産があつて、どこからも文句なしに自由にそれがつかへる身分だつた。

結婚前、坂本はそのことを彼女に話して、生活について色々相談した結果、その金の一部分で横濱の本牧に、或る英國人の住んでゐたといふ赤煉瓦造りの古い洋館を買つた。二人の新しい家庭では使用人などを一人もおかないやうにして、その代り出かける時などは、ぴちんと錠をおろし、何日留守にしても泥坊等にはひられる憂ひのないやうにしたいといふカテーリナの考へでその家の外に面したドアを全部スチール製特別錠前つきのものにとりかへたり、屋根を鐵筋コンクリートでやりかへたりして、すつかりそれが出來上つてから、二人はその頃とまつてゐた帝國ホテルで結婚式をあげたのである。

式に列なつた身内のものといへば弟と、彼等の後見人だつたたつた一人の伯父とだけで、あとは坂本の學友たち二三十人、そこへ浦汐にゐた時の縁故で、ペトロフ中將と面識のあるM大佐とK中尉が來てくれた。式はさほど盛大なものではなかつたが何しろ二人のロオマンスはよほど誇大に喧傳されてゐるし、殊にカテーリナがペトロフ中將の遺女だといふので、新聞記者が押しよせて來て、翌日の東京中の新聞には新郎新婦の寫眞が花々しくのつた。

そしてそれから後のことは、當時は勿論今だに世間は殆んど何にも知らないのである。

所が結婚式をすませて二人が本牧の館にかへつて來た夜の事であつた。

その時は午後十二時過ぎで、海に鴎の啼く聲がかすかに聞え、本牧の夜はしいんとしてまるで海の底にゐるやうな氣配だつた。

夫婦の居間は見晴しのいゝ二階の廣間で先住の英國人が使つてゐたまゝの時代のついた赤い緞子が、十八世紀風の煖爐の前から部屋一杯に奇怪な幻想のやうな模様をひろげてゐた。窓には重たいカーテンがおりて、これ丈は新しく取りかへられたシャンデリヤが無闇にさん〳〵たる光りを降らしてゐた。夫が寛衣に着代へて煖爐に火をつけてゐる間にカテーリナは黒つぽい毛皮の外套をぬいだ。そして火が燃えてきたので立ち上つてふり返つた坂本は、輝くやうな純白のローブ・デ・コルテを着たカテーリナが、金の靴の上にのつかつて部屋のまん中に突つ立つてゐる美しい姿に、改めて驚嘆の聲をあげ乍ら近づいて行つた。

その時、カテーリナは、理性の滿ちあふれた瞳に何とも知れない女性の魅力をたゝへて、

坂本！――――

とよんだ。

坂本は、妻の思ひがけない樣子にいさゝか面くらつて、

「なアに？　カテーリナ…」

とおづ／＼ときいた。

「あなたは下の扉をみんなすつかりしめて來ましたわね…」

「あゝ、しめたよ。」

「では、この大きな館の中にはあなたとあたしとだけが、かうして向ひあつてゐるのね。」

「さうだよ…」

「外にはもうだアれもゐないんだわね。」

「さうだよ、しかし鼠位はね…」

坂本は、妻の顏が一種の威嚴といはうか、理性といはうか近づきがたい美しい輝きにつゝまれてくるのを、茫然と眺めてゐた。

「坂本…」

と彼女は不意に悲しさうによびかけて、全身を、一瞬神經的にゆすぶつた。そして、いつた。

「あ、そんなによつて來ちやいけない！　あなたは、あたしの體に觸つちやいけませんよ…」

「何故？」

坂本は大きな不安におそはれた。

「あなたは知らない…あなたはあたしが誰だかを、知らないんです！」

と彼女は叫んだ。

「……」

坂本はぢつと彼女の顏をみた。

「カテーリナ！　知つてゐるとも！　あなたはわたしの妻ぢやないか！　そして永遠の愛人…」

「およしなさい！　何をいふんです！」

彼女の叫びは今にも泣き出しさうであつた。

「あたしはあなたの妻ではありません！　だつてあたしはカテーリナ・ペトローワではないんですもの！」

「え？…」

「あたしは、あなたの力に縋つて、この國へ逃げて來たのです。イワノフがあたしを見破りました。あたしは中將の娘ぢやないんです。ペトロフはあたしの父の侍從長でした！」

「何？　何！　何ですつて？…」

坂本は眞つ蒼な顏をして棒立ちになつてしまつた。彼女は彼に近づいた。

今度はやさしく、

「心配しなくてもいゝのよ、そのためにあたしはあなたと表向きの結婚をしたではありませんか、そしてこの館には使用人は一人もゐないし、戸じまりは嚴重になつてゐるんですから、あたしの祕密が世間へ知れることはありません…坂本、あなたは、あたしの味方になつてくれるでせう。あたしの祕密を守つてくれるでせう。ペトロフやイワノフがあたしにつくしたやうに…」

としづかに手をさしのべた。坂本はその手をそつと握つた。彼の手はビリ／＼とふるへた。

煖爐の火が勢ひよく燃えてゐる。どこから忍びこんだのか、館の中で梟が鳴いた。

九

彼女は、それから、毎日のやうに自分の部屋に引き籠つて暮した。坂本に買つて貰つた露文タイプライターを彼女はその寢室で、毎日叩きつゞけてゐたが、出來上つた原稿はどこへかくすのか少しも見えなかつた。

彼女は一日に一度しか食事をしなかつた。その食事も至つて簡略でトーストとハムのきれが少しとで足りた。で、毎日彼女のために食事を作つてやるのが坂本の仕事であつた。そのあとは、坂本はしづかに煖爐の前の安樂椅子でパイプをくはへ乍ら、ロシアの小說をよみふけつた　そして夜明け近くに、彼は一人で、冷た

い自分の寢室に這入るのがクセとなつた。
ある日、珍らしく彼女が寢室から出て來て、
「坂本、あなたは、とてもおとなしいのね。」
と傍へかけた。
坂本は瞳をふせて悲しさうに答へなかつた。
彼女は、坂本のよんでゐる本をのぞいて、
「おう、あなたはソログープをよむの！ そちらのご本をみせて下さい。何です、クープリン！ あなたは實に古い！ もつと新しいロシアに何故目をおあけにならないんです！」
しかし、次ぎの日も、次ぎの日も、彼は默つてクープリンをよみつゞけた。彼のよんだ中にクープリンの「柘榴石の腕腕」といふ小說があつた。ある貧しい郵便局の雇書記が侯爵夫人を戀して自殺するといふ筋である。それが彼の今の心持にぴつたりとはまつた。結婚の日以來、彼は遠慮して、何一言、妻に話しかけたことがない。だから、彼は自分の名ばかりの悲しい妻が、世に在りし頃のロマノフ家にオルガ内親王と呼ばれた人か、それともタチアナ内親王と稱へられた人か、何事も知らないのである。彼の見たのは、たゞペトロフ中將の娘カテーリナ。ペトローワである。それがこんな悲しい運命にならうとは？・・・

しかし彼の情熱は、愛は、少しも亡びはしなかつた。何故なれば彼は唯一人の愛人と一緒に住んでゐるのだから——。さう思へば彼の心はおとなしく、愛が情熱を手馴付けた。彼は妻とかうして、一緒に住んでゐられる自分に滿足した。たゞはけ口のない情熱のためにゆがめられて、彼の顏は、日毎に寂しくなつて行つた。
幾週間かが過ぎた、しかし、坂本は古城のやうなこの洋館の中で、少しも飽かずに、毎日一回彼女がタイプライターに打つてよこす食事のメニューを、默々と臺所で作つてきては、奴隷の如く彼女の寢室へ運んで行つた。
ある日、彼女が、居間の安樂椅子にパイプをくはへてゐる彼の所へ出て來た。
「坂本、あなたは淋しさうね。」
「さうです、僕は淋しいのです。」
と坂本は物憂さうに答へた。
「お淋しければ犬を飼つたらどう——お飼ひなさいよ、犬を・・・」
そして彼女は初めてそこで坂本のついだコーヒーをのみ乍ら、ツアルスコエ・セロの宮殿内の模様を話した。その話によつて、坂本は彼女がまさしく、その頃浦汐にゐるとか、日本に亡命して神戸の山手にかくれてゐるとかの噂の高くなつてゐる皇女タチアナに相違ないと思はれる節々を感じた。
——次ぎの日、坂本は彼女から命ぜられるままに犬を買ひに出かけようとした。迎への自動車が來た時、不意に寢室にゐた彼女が、
「あたしもつれて行つて頂戴・・・」
と玄關へ下りて來た。
彼は堅くなつて彼女の體にふれぬやうに車の内で氣を張つてゐた。三月前、彼女の體を抱いて寢棺からベッドへかゝへて行き、そこで烈しく接吻したことなどは夢の夢のやうな氣がした。

十

五百圓もするセバートのつや／＼した大きな栗色の犬を買つてかへつてから、急に彼女はよく寢室を出て來るやうになつた。犬はたえず坂本の安樂椅子の傍にねそべつてゐた。彼女は十分も二十分も犬を相手に一人ではしやいでゐた。そんな時は坂本も輕い幸福を感じた。
ある日、坂本は外から外國の雜誌をかゝへてかへつた。默つてその一冊をひらいて寢室を出て來た彼女にみせた。そこには皇帝皇后兩陛下とオルガ姬、タチアナ姬、ナアスターシャ

姫、アレキシス皇太子お揃ひの寫眞がかゝげられてゐた。

彼女の顔は、正しくその中のタチアナ皇女にそつくりだつたのである。――彼女は寫眞の上に涙をおとして、

―坂本……お願ひがあるのです、あたしに二萬圓ばかり、お金を下さい！」

「上げますとも！」

坂本は次ぎの日、銀行からとつて來たそれだけの金を、彼女に渡した。その翌日、坂本が午後になつて眼をさますと、彼女の姿は部屋のどこにも見當らなかつた。

坂本はしづかに眼をとぢて、煖爐の前に坐つてゐた。自分の死ぬ可き時が來た！ 彼は、ひき出しからピストルをとり出して、夜つぴて、みがきをかけた。冬にまれな海鳴りが遠くきこえて、カーテンのかげにはあやしいもののひそむ氣配がした。シャンデリヤの光りが煌々と照つてゐるのだけれど、彼には部屋の中がだんだん暗くなつてくる氣がした。

「おれのカテーリナ！ この不幸な男がお前をこれ程迄愛してゐたといふことを……」

坂本はピストルの彈丸を裝塡して、しづかに掛金をかけた。風がごとりと、どこかで鳴つた音に、火の傍に眠つてゐた犬が、ふと眼をさました。そのまゝ犬は耳をピクリと動かして、首をおこした。何かを待つてゐるものの如くである。

坂本は、一旦引金にかけた指の力をゆるめて、ぼんやりと、犬と視線を合せた。すると犬はそつと立ち上つて主人の傍へ來た。そして迂散臭さうに、膝や足首をかいだ。動物が蟲の知らせで別れを惜しむのだと思つて、彼は不意に涙をためた。――それは豫期しない涙であつた。自分に何か、發作がおこりさうだといふ氣のした彼は、いきなり安樂椅子の中にあをむけにひつくり返つて、ぴかりと光る銃口を胸にあてがつたまゝ、全身の力を手にあつめた！

轟然たる音響がおこつたが、坂本にはきこえなかつた。唯遠くのはてに、かすかにほえしきる犬の聲をきいた……。

十一

坂本が眼をさました時、自分のすぐ顔の上にいつか雜誌でみたタチアナ姫の美しい顔がぶら下つてゐた。

彼は不審さうに、その顔を眺めてゐた。

すると、みる〳〵顔には變化が起つて、大きな青いその眼の中に涙がたまつてきた。彼はその眼が涙をせくためにふさがれた時、眼玉の上へおほひかぶさつて來た柔かさうな瞼にかすかな灰綠色の色彩がのつかつてゐるのをみて記憶の聯鎖をしきりにたぐつた。そして、やつと浦汐のあの宿舍の寢棺の中でみたカテーリナの顔だとわかつて、かすかに、

「カチューシャ……」

と、愛撫稱をよんだ。すると、涙の顔はそのまゝ聲を出した彼の脣の上にかぶさつてきた。彼は女が何度も自分に接吻してゐるのだと知つたまゝ、また氣が遠くなつた。

十二

坂本が無事に快癒して退院した時は春になつてゐた。もとの館にかへつてみると、煖爐も安樂椅子もそのまゝにあつたが、火の燃えてゐる陰氣臭い空氣の澱みはそこになかつた。あの日、カテーリナは自動車で玄關までかへつてくると、犬のほえつゞけてゐる聲に、おどろいて二階へかけ上つて來たのである。すると、坂本は安樂椅子の中で朱にそまつて、倒れてゐた、といふのである。

―何故あなたはかへつて來たのです？――

と坂本は寂しい微笑をたゝへてきいた。
「だつてあたしお別れするといつて出て行きはしなかつたぢやありませんか。」
「……………」
坂本は默つてしまつた。――妻の留守に、浦汐時代に持つてゐたピストル掃除中、あやまつて引金に手がかゝつた……といふことで警察の方はすんだが、二人の間柄はこのことによつて今迄通りではすまされなくなつた。
「あなたはそれ程あたしを愛していらつしやるの？」
とカテーリナは冷たく落ちついていふのである。
「仕方がない！ 實をいへば、あなたが僕等の思ひも及ばぬ尊い身分の方かどうかといふことについては、僕は、半信半疑なんです。むしろ、そんなやんごとないお身分の人が、僕の眼の前にゐるとは信じられないんです！ それだのに僕はこの通り弱つてしまつてゐる！……それは何も僕があなたの正體を摑めないせゐぢやありません。あなたが僕を斬り苛むやうに弄ぶからです。」
「坂本――よけいなことをいはずに……あたしのきいてゐることにお答へなさい！」
「馬鹿!!」
坂本は、初めて、火のやうに怒つた。
「この上、何か言はなければ、お前は、僕のことがわからないのかッ！」
と彼はやにはに女の首を兩手に摑んで、ゆすぶつた。
「お、おれは、お前が、どんな女だつても、――どんな女だつても！ どんな！ どんな!! 女だつても!!」
愕然として、坂本は夢中になつてゆすぶりつづけてゐた女の首をはなした。彼が手を放すと女は床に崩れ落ちた。彼女は坂本に首をつかまれて窒息したのだ。
彼はあわてて、女をかゝへおこした。女の手先きはつめたかつた。頰も額も白くなつて脣の色がいつの間にか褪せてゐる。
「あ、あ――」
彼は、彼女の體を抱いて、部屋の中ぢう歩き廻つた。そして、彼女の體を、彼女の寢臺へかゝへて行つて、あをむけに、ねかせつけると、上衣をぬがせた。白い、丸い彼女の乳房があらはれた。彼は、彼女の首をさすつた。胸をおして、人工呼吸を試みようとしたが、そんな心得のない彼は、丸くふくれ上つてゐる彼女の二つの乳が邪魔になるばかりで法がつかなかつた。
コップの水を口にふくんで何度も何度も、彼女のとぢた顏にふきかけた。――さうしてゐる中に、人工呼吸といふのは胸部をおすのではなくて、下腹部をおして呼吸の回復をはかるのだと氣がついた。その時、彼は、初めて正氣に返つて落ちついた。何故なれば、彼女の體を彼女に無斷で解かなければならない自分を發見したのだから……。
しかし今はそんな遠慮をしてゐる時でない。彼は、彼女の手首を握つて、脈搏が斷れてゐるのをたしかめると、いよ／＼女の下着をはづして、その下のかたいコルセットを、骨を折つて外した。すると彼女の下體部は、妙に柔かく形が崩れてきた。彼はベッドの上に上り、女の體に跨つて、自分の呼吸に合せつゝ、兩手で人工呼吸を試みた。三回――五回――十回――二十回とつゞけて、彼の額が汗ばんで來ても、彼女は容易に復活しさうもなかつた。彼は疲れて、女の腹部をおす手をやめた。
その時、――その時、彼の眼にうつつた奇怪なものは何であつたか？
女の、下着の下からはみ出してゐる美しい肉體の面には、何といふことか、淺ましい刀の斬

傷が生々しく斜めに走つて、青白く眞皮を光らせてゐるではないか！

彼は、ギヨッとして、寢臺からとび下りた。そして、死んでゐる女の體を、氣味惡さうに視た。しかし、彼の興味はこの時、今迄の純粹な愛の氣持から、殘酷なある本能的なものに變つてきた。彼は――そつと片手をさし出してその傷口の上をなでた。死んだ冷たい皮膚の上を――すると手先きがひやりとして、脊髓の中核をヅーンとした耐へやうのない痙攣に似た感じがつゝ走つた。

屍の冷たさ――それが彼の手に今迄夢にも知らなかつた異樣な感覺をもたらした。

彼は俄かに、女の亡魂にみ入られたやうにそはそはしはじめた。自分が今女を蘇生させなければならぬ重大な役目を荷つてゐるのだといふ判斷が、彼の頭の中で、ぼんやりと曇つた。その代り、彼の今迄シメ木にかけて、おさへつけられるだけおさへつけてゐた暗い本能の血しほが脈管をみたしてぴくん〳〵と躍動し始めた。

彼の手は狂人のやうにふるへて、女の死んだ體をつかみおこしてゐた。

そして殘酷にあつちへ倒しこつちへ倒しした。

彼はぐにやりと首をうなだれた體をベッドの上に引きおこして夢中で背中のシャツをめくつた。すると、脂肪にふくれたその背中には、むごたらしいといふよりも、むしろ毒々しく、彼の本能に挑戰するやうな大きな丸い傷痕が――青白くあらはれた。それは刀の鍔程もある大きさで、形も丁度鍔か、花のやうな恰好だつた。

「あッ！！」

――坂本が、その傷痕を發見した時の驚愕の心理には可なり複雜なものがあつたことを說明しなければならない。何故なればその刀の鍔のやうな傷痕が、一九〇五年のロシア革命當時、ロシア政府が、共產黨員を西伯利亞に流した時、送りつける監獄名をあらはした烙印を、彼等の背中に捺した――その烙印であることを直覺したからである。

カテーリナ・ペトローワ――おうこの無邪氣な名の女の背中をみよ！　この女は過激派だ！　彼女の背中の烙印はあきらかに「チタ」と白くひきつれた文字の痕が光つてゐるではないか!?

チタ！　チタ！　チタ監獄！

――坂本は、たうとう恐ろしい眞相にぶつかつてしまつた。ツアルスコエ・セロの宮殿内の模樣を詳しく彼女が語りえたのも無理はない。そのロマノフの宮殿を土足にかけた女だ、これは！

坂本は、暗い本能の血しほがどこかへ過ぎさつたあとの不自然な眞つ青な顏を、ぼんやりと、今はなす術もしらず壁にもたせかけてゐた。

屍は月魄のやうに、青白くうつぶせに投げ出されたまゝ、寢臺の上で、いよ〳〵冷たくなつて行くらしかつた。

坂本はよろ〳〵と、未練がましく傍へよつて、冷たい屍に眺め入つた。そして、そつと瞼をまくつてみると目は青白くつれあがつてゐた。

「あゝ、あ――殺してしまつた！　醫者をよばうか！　いや！　いや、他人にこの女の體をみせたら、たとひこいつが生き返つても、おれのものにはならない！　警察が――こいつを早速捕へるだらう。巧妙な方法で赤化宣傳にきた過激派の女：：さぞ、新聞に賑ふだらうよ」。

坂本は女の寢室を出て、ふら〳〵と、火のない煖爐の傍まで行つた。そこの安樂椅子にかけたまゝ、彼は死んだやうにぐたりとなつた。そのまゝ一時間近くも、彼はうつら〳〵と夢ならぬ夢の中を辿つてゐた。

するとそつと、彼の肩に手をおいたものがある――。讀者諸君は、こゝで坂本が女の部屋か

ら出て來て、正に一時間たつてゐることを思ひ出して頂きたい。うつら〳〵としてゐた坂本には、時間の經つた觀念が少しもなかつたのである。彼は、警官が來た！ と觀念して、立ち上らうとした。そして顏をねぢまげた時眞ッ白な毛皮の外套に身をつゝんだカテーリナが跣足のまゝ、につこり笑つて、そこに立つてゐるのを見てしまつて、坂本は正直に「南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛」と肚の中で唱へた。

「坂本――」

今迄とは打つて變つた親愛の情をこめた聲で、彼女は安樂椅子の肱つきへ丸い尻をのせて、上から彼を見下した。

「……あなたはあたしの體を、見てしまつたのね……そしてすつかり、祕密をおぼえたのね。」

「キ、キ、君――」坂本は、舌がもつれてなかなか聲が出なかつた。

「君は……どうして、い、いき返つたんだ！」

「ホヽヽヽ。あなたを欺してあげたのよ。あたし最初からちつとも死にやしないのだから、生き返るわけもないぢやないの！ まあ何て妙なお顏を遊ばすの？」

「だつて、君は、息もしてゐなければ、心臟も――」

「あの藝當を覺えるのに三年もかゝつたのよ。――あれは、印度の婆羅門から出た假死法といふ術よ、知らなかつたの？」

「假死法？」

「催眠術とはまるで違ふのよ。調息法の奧義に達するとね……くツと息をつめただけで一分以上、一時間位、假死の狀態に陷ることができるのよ！ ね、坂本もう一度やつてみせてあげませうか！」

といつたかと思ふと、彼女の體は椅子の肱つきから、崩れおちて、まッ蒼になつたまゝ坂本の胸の上へ抱かれて來た。坂本がうん〳〵といひ乍らかゝへおこすと、カテーリナはもう脣の色も變つて、手先きや頰が冷たく、脈搏はとまつてゐる。

「カチューシャ！ どうしたの！ しつかりなさい！」

と彼は又あわて出して、彼女を抱いたまゝゆすぶつたが、彼女の首はあんぐりとあをむいて、睫毛の間が白く絲のやうに光つてゐる。

――坂本はあわてるのをやめて、急に惚れ惚れと、彼女の顏に見入つた。おれの腕の中で安心して死んでみせてゐる女――何といふ可愛い女！……この女はおれの生命がけの愛に、生命がけの信賴を以て報いてゐるのだ！ あゝさうだ。

「もういゝ！ 早く生き返つてみせておくれ！ おれのカチューシャ！」

坂本は、女の首をやさしく膝にのせてまだ一抹の不安に耐へつゝ、ぢつと上から顏をのぞきこんで待つてゐた。すると五分ばかりもたつた頃、彼女ばにはかに脣を動かして、にやッと顏をしかめたかと思ふと、つまつてゐた大きな息を一吐はき出して、ぽかりと眼をあいた。そこに待つてゐた坂本の眼とぶつかると、茶目ッ子のやうに微笑んで、

「ね……あたしたちは帝政時代にガウ問される苦しみを免れるために、こんな苦しい術まで稽古したのです。」

さうして彼女は坂本の膝の上でおき上ると、

「ね、坂本――あなたはあたし達を救けてくれるでせう！ ×××仕事を！ だつてあなたは、あたしの夫ですもの！」

「あたし達つて、外にだれがゐるんだ！」

坂本はかたくなつてきいた。

「あなたはみたでせう、あの死刑執行のお芝居を……あれがみんな『あたしたち』よ。同志よ。日本とロシアとは今國交が斷絕してゐるで

せう！ だからいろ／＼な方法を考へ出さなければ來られないんですもの。まツ先きにあたしが、日本への花嫁として、お化粧をして、バラでかざられ、箱に入れられて、贈り出されたんです！ ね、同志達は坂本を尊敬したんですよ。ね、あたしは尙更坂本を欺したんぢやない！ 命令だつたんです。でも、あなたを愛すること迄は、命令をうけなかつたけれど…ね、坂本、あたしは、あなたに、あたしの體をみせてしまつた！ あなたは、あたしがタチアナ姫だといつても、あたしを愛することをやめないで、仕方がないから自殺しようとした位です！ だからあたしが、あなたの怖がつてらつしやる過激派の女だといつても、愛することをやめはしないでせう！ ね、やめはしないでせう！」

坂本は返辭の代りに、女の首を抱いて痛い程接吻した、女の顏は醉つたやうになつた。そして急に囈言のやうにいひつゞけた。

「いゝわ！ 幸福だわ、あたし、すつかり事が成就した！ あたしだつてあなたを幸福にしてあげてよ、坂本、精神的にも肉體的にも…あたしのありつたけの經驗をつくして…ホホ、さういつても、あなたは怒らない？」

「君が…處女でないことは仕方がないさ。」

「それだけ！…まあ寛容なのね、坂本は…あたし正直に告白するわ、今迄にだつてそんなにあたし亂暴な眞似はしやしないのよ。」たゞね、二年程前にチタであたしひどい男にかゝつたのよ。その男はやつぱり同志は同志だつたんだけれど、…あたしをしよツちう氣絶させることが好きだつたんです!! あたしその男以來、ふつつり用心してだれにも、そんな目にあはされないやうにしてきたのよ。今度初めてよ、坂本…あなたのために、…でも、ね、でも…」

と急に彼女は喘ぎ乍ら苦しさうにいつた。

「…あなたがそれが、氣に入るんだつたら、あたし、毎日…あなたのために、屍になつて、あげるわ！」

カテーリナは、その頃まだ幼稚な段階に止まつてゐる日本の勞働運動を、國際的な狀勢に迄發展させるために、助力する目的をもつて潛びこんで來たコンミンテルン浦汐ビューローの女黨員だつた。

彼等はどんな方法によつてでも、國交の斷絕してゐる國へしのびこむ。そしてその國の勞働運動を世界の運動の步調に合せるやうに決死的な指導をするのである。

カテーリナは夫の坂本を使つて一年半の間あらゆる活躍をした。坂本はカテーリナの部下としてあらゆるかの女の命令を遵奉して働いた。今迄引つこみがちなブルジョア的な生活からぬけ出して彼は毎日外へ出ていろ／＼な手蔓を利用してはその頃有名な社會主義者や、勞働運動家に會ふやうになつた。今迄ドストイエフスキイの心醉者であり、ソログーブやクープリンの愛讀者だつた彼が、一年半の間に、だん／＼マルクス、レーニンの學問に興味を覺えるやうになり、まるで人間が變つてしまつた。

しかも彼の一々の行動は悉く本牧の古い洋館の中にかくれてゐるカテーリナの命令によつて動かされてゐた。

「我々は一日も早く××××黨が××るやうに努力しなければいけない。」

と坂本はカテーリナと机を叩いて議論するやうにさへなつた。

「さうです、そのためには日本の運動の現狀勢をどういふ風に指導すべきかといへば、何よりも第一に、日本のソードーメイを分裂させるのです。そして、社會民主主義と××××との相違を明瞭に、日本の勞働者にわからせなければなりません。」

さういふ議論になるとカテーリナは熱心だつた。坂本はこん身からわいて出るその熱を[illegible]にみなぎらしてゐる時のカテーリナをどれ位美しいと思つたかしれない。彼はカテーリナの美に引き入れられ、愛におぼれて、それを通路として、××××の××へといつの間にかはひつて行つたのだ。

一年半の後、坂本夫妻は京濱地方で官憲のために捕へられた。そしてカテーリナの素姓がわかつた。

しかしその時は、丁度ヨッフエが日本へ來て、熱海で會議をしてゐる最中だつたので、事を表面立てるとよくないといふので、カテーリナはそつと上海へ追放され、坂本一平だけは四年の懲役にやられた。

坂本が四年間、刑務所にゐる間に、第一次日本××が生れ、カテーリナのいつたやうに、「ソードーメイ」は分裂して大正十三年に關東地方評議會が生れ、十四年には更に分裂して日本勞働組合評議會が生れ、日本の左翼勞働組合運動が確立し、普通選擧制が布かれて、勞働運動の勢は燎原の火のやうに發展した。

そして坂本が出獄した時は治安維持法が發布されてプロレタリアの立ち上りに對するブルジョア階級の武備は嚴重となり、鬪爭の段階は漸く國際的規模にとゞかうとしてゐた。

で、もうカテーリナのゐた頃のやうな「過激派」といふ流行語はとつくの昔にだれもが使はなくなり、その代りに「×××」といふ言葉がとつて代つてすべての人々の頭にしみついてゐた。

坂本一平が出獄する日、カテーリナは上海まで來て待つてゐた。坂本はすぐに上海まで行つて彼女に逢つた。四年の間あはなかつたなつかしい〳〵彼女に――。

「タワリーシチ坂本！　あなたはすぐ又日本へかへつて働かなければなりませんよ。××××××、――日本のプロレタリアートのために――」

「いやだ！　おれはお前と別れることはできない。」

坂本はカチューシャに抱きついた。彼女は彼の頭を抱いて雨のやうにキッスをしながら、

「さうぢやないんです。あたしたちは一切の愛慾を我慢して……我慢して……大きな歷史的××××××××××××××××××××。」

「しつてゐる、しつてゐる――しかし、あゝやつぱりお前はさうか……」

坂本はカテーリナの、昔のやうに熱をおびた眸のひらめきをみて、つぶやくやうに、泣くやうに、かう答へて彼女の胸に顏を伏せてしまつた。

＊　＊　＊　＊

坂本一平はその後一人で日本へかへり、昭和××××××事件に連座して六年の刑をうけ、今は亦某地の刑務所にゐる。で、上海で彼女と別れた後の彼が、いかに愛するカテーリナの命令を守つたかといふことがそれによつて察せられるのである。

（一九三〇年四月改作）

借家人組合ニュース

一　組合宣傳ニュース

緊縮の折柄、借家賃ばかり不當に高いのは、東京郊外の地主家主が、東京に刻々とふえる勞働者階級、勤人階級のわづかな收入を、「借家賃」制度で不當にしぼりとる結果です。

東京は實に家賃が高い。生活は苦しくなるばかりだのに、これではやり切れないから細民がとかく過激な主義思想に共鳴してくる――それでは末長く細民大衆を資本家の意のまゝに××××ことがむづかしくなる。といふので地主家主よりも、もつと時世を知る大きな一流の大資本家が運動して大正十年の物價暴騰時代に作られたのが「借家法」といふ法律及大正十一年に作られた「借地借家調停法」といふ法律です。之によつて地主家主の頭が幾分おさへられたのです。

動機はさういふ風であるが、この法律は無產者にとつて、僅かに唯一つの與へられた武器です。どし／＼使用してこつちの利益をはからねばなりません。

所が相手もさるもの、この法律は日本全國に適用されはしません。ちやんと一方に又別の法律を作つて、東京、京都、大阪、横濱、神戸、名古屋の六大都市のしかも主として無產階級の一番多く結集してゐる場末の區域だけときめてあります。

で、われ／＼の住んでゐる地域はこの法律の適用範圍外です。けれども今や不景氣は深刻化して無產者の生活を日々に脅かすために家賃値下げの爭議は全國に流行し、しかも九十九%までは借家人側の勝利となつてゐます。

之はいくら裁判所でゞ借家人に味方しなければならない程に、今の家賃が諸物價に比べて高い證據です。

家賃値下げは全國一齊だ。「借家法」の區域も何もあつたものでない。どん／＼やればあなたの家賃でも今すぐ五割は下ります。

しかし一人ではダメです。一人では家主になめられてしまひます。皆が團結して借家人組合を作り、一齊に大會をひらき、家賃の不當なことを糾彈してまづ總括的に五割値下げ要求を決議するのです。

次にいよ／＼實行にとりかゝります。一番多く借家を持つてゐる家主へ、そこの借家人が組合大會の決議だから、我々は不景氣で收入が減り、月給は上らず、ボーナスが減り、賃下げをやられ、或は又失業して困つてゐるといつたやうな苦しい狀態だからと、ありつたけの苦情を持ちこんで、五割値下げを要求するのです。團結しなければ勝利はえられません。

我々町内有志は先日三十五人で右のやうな趣旨の演説會を開いて、そこで××町借家人組合といふのを作りました。そして唯今五割値下げを家主に交渉して爭つてゐる最中です。あなたが近所となりをさそひあはせて組合へはひれば、組合はいくらでも應援します。全部無料です。すぐ組合へはひつて下さい。當分の間、組合員の名前は外部へ發表しません。會費は年に五十錢です。その外組合ではお宅の電燈、下水、税金、敷金の撤廢、街燈費用、町内費等、何でも借家に關係のある一切の御相談に應じますから遠慮なくおいで下さい。借家人は借家人同志團結一致して利益を擴張せよ・・

二　最初の勝利の宣傳ニュース

××町借家人諸君、我々は今から一ケ月以前、三十五人で××町借家人組合を作り、內二十一人の同一家主の店子たちがまづ結束して、家主眞垣氏に對して、家賃五割値下げを要求しました。

一月十日に第一回の交渉に赴くと代表六名に對し、眞垣氏は言を左右に託して應答しませんので、更に一月十三日、二十一人全部勢揃ひして交渉に行つた所、眞垣氏父子は非常にフンガイし、「大勢でおどかしにきた。」といふものですから、「先日は六人で來たが、皆の意志かどうかわからんといふので、全部顏を揃へたのだ。」と答へました所、「そんなに大勢こられては話がわからん。」といふのです。

「だから最初から六人の代表者を選んで來たのにかゝはらず、誠意ある返答をしなかつたではないか。」

と我々は、二十一人全部で眞垣家の表座敷へ上りこみ、代表者加藤、小澤、山村、瀨田、古川、井口の六人が交々、物價下落に伴ふ生活の逼迫、家賃のみが暴騰當時の値段であること、値下げの當然なる理由をのべて、

「五割値下げを本月より實行してくれ。」

と持ち込みました。

「では一應考慮する。」

といふので、

「考慮は先日からしてくれてゐる筈だからこゝで即答して貰ひたい。」

との我々の要求に對し、眞垣父子は色をなして、

「あなた方はどうしても家主を脅迫するものだ！　それなら斷然おことわりする。」

といひがかりをつけて物別れとなつたので一同、夫吉組合長宅に集合、左のやうな內容證明書狀に二十一人がそれ〴〵署名捺印して代表者の手にとりまとめ、一まとめにして家主宛に發送することとなりました。

告知書

貴下から賃借中の××郡××町×番地木造平家建二十五坪の建物に對する賃借料一ケ月金三十圓は、現在の物價及び比隣の家賃に比し不當と認め、當一月より一ケ月金十五圓に減額相成度此の段告知候也

書留內容證明付のかうした通知を一齊に十四人から送りつけられた家主は非常に狼狽し、辯護士の所へかけつけたが、こんなことを依賴されても辯護士は大した金儲けにならないのと、もう一つは社會の大多數を占める借家人階級から敵視されることは人氣商賣たる辯護士にとつてひどく損なので「いゝ加減に和解しないと却つて不利ですよ。」とうまくごまかして相手になりませんでした。

一方、我々の組合では「××町の惡家主眞垣藤十郎を葬れ。」といふビラを全町に配布し、眞垣糾彈演説會を開催したことは諸君ご存じの通りです。

ところがこの演説會場へ、暴力團が二人、あばれこんで來て、演説を妨碍するために石をなげたのが運惡く、演説中の組合員中村たづ子氏の顏にあたつて、中村氏が負傷されたこともご存じの通りです。

中村氏は市電氣局につとめてゐた婦人闘士で先日の爭議でクビになつた人です。我々は中村氏の診斷書をとつて之を警察につき出しました。警察ではさすがにうちすててもおけず、當夜の犯人を物色して四日目に二人の犯人が擧げられましたが、何とおどろくべきことには、二人の暴力團は眞垣氏から、各五圓づつ貰つて、演説會を妨碍に來たのだといふことを警察で自

白いたしました。

しかもその金錢受授の際に同じ××町の大家主須山勘兵衞氏も傍にゐたといふこと迄わかり、須山、眞垣の兩家主が警察に拘引されたのです。

同時に警察署長が非公式に眞垣家借家人代表六人をよんで、

「家主は要求通り五割値下げに應ずるといつてゐるから一つこゝん所穩便に互に諒解してはどうか。中村女史の傷も幸ひ大したことはないのだから我慢して貰つて、その代りお見舞として金一封を二人から出させるから、別に二人の家主にたのまれたのではないが、僅かのことで罪人を作りたくない。」

といふ話なのです。

一緒について行つた末吉組合長、早川理事は、

「須山勘兵衞氏は××町に三十何軒の借家を持つてゐる。之も全部五割値下げするといつてゐますか？」

と署長に糺した所、

「いや、須山は別だ。須山の借家人は何も要求してゐないではないか。」

「では眞垣だけが五割値下げですか。」

「さうだ。」

「それでは眞垣氏を返して須山は起訴して下さい。」

「そいつは困る。君、それは話が……」

「だつてさうぢやありませんか。眞垣が五割下げるといふから告訴を取り下げるといつてゐるのに、須山がたゞで罪をゆるされるといふのでは片手おちです。須山はぜひ起訴して下さい。」

この理の當然に別室にとめおかれてゐる須山と我々の間を署長が往復して、

「仕方がない。では須山も借家全部五割下ると誓つた。」

と調停されました。そこへ被害者である中村たづ子氏が額を繃帶に包んで出席されまして、

「私は反對です。署長さん、私の金一封はいらないから、眞垣に六割下げて貰つて下さい。須山が五割下げるといふのに、元兇の眞垣が同じ五割では話がうますぎる。六割下げて、疊の表がへ斷行、敷金全廢、街燈料家主負擔、區費家主負擔は兩者同一に追加して頂きます。いやだといふなら、皆さんが何といはうと、被害者たる私は斷然二人を訴へます。」

と、まつ赤になつて署長に談判されました。

我々は全部こぞつて急遽態度を新しく一決して中村氏の案を支持しました。

何といつても家主の方には太刀のぬけぬ落度があります。間もなく要求は全部通り別室にゐた須山、眞垣兩家主も初めて我々と署長室で顏を合せ、覺え書を交換して、署長には勞を謝し、大勝利を以て解決しました。

おまけに、須山氏の借家人三十何人は思はぬ拾ひ物をしたと、非常に喜んで、こぞつて我が組合に加入し、ご恩返しのためにといつて皆々懸命に組合宣傳に努めてをります。當組合には中村たづ子氏の如き公然の利益のために一身をかへりみぬ勇敢な鬪士もをられます。

あなたも、近所隣りの同一家主の借家人と一緒にどうかさそひあはせて我が××町借家人組合へおはひりなさい。申込は××町××番地末吉正壽方へ。

三　組合員へ配付のニュース

須山、眞垣解決に幸先よしと、家主齋藤氏の借家人十四人は二月十一日末吉組合長方に參集、まづ松井君司會者として挨拶をのべ、滿場一致同君を座長として、

第一、我々の家賃値下げ要求をやはり五割

とするか。

を計り、滿場異議なく可決、即ち大正十三年の一般物價と今日のそれと比較すれば、約五割の下落であるが、我々の家賃は十三年以來少しも下つてゐない。之を物價通りに下げるのが當然だといふ理由によるのであります。

第二、街燈設置並びにその電燈料家主全額負擔。

について謀つたところ滿場一致贊成。

第三、道路下水の完成。

についても、是また滿場一致贊同。

第四、敷金の撤廢。

は議するに値ひしない程の熱狂的贊成。

第五、如何なる場合も個人交渉を絶對にしないと云ふ誓ひをしたい。

と座長が提議したところ、皆々異議なく贊成。直ちに別項の宣誓書を作つて朗讀し、一同これを承認しました。

第六、交渉委員を選ぶこと。

之は座長の名指しによつて南山氏、鶴島氏、元村氏に決定。

第七、交渉については一切の件を交渉委員に一任すること。

滿場これを承認しました。

これで懇談會を終り、諸處に起つた値下運動の情勢につき末吉組合長及び早川理事の報告があり、雜談數刻、和氣靄々裡に散會しました。

宣誓書

今般左記加盟者相謀リ家主齋藤三太郎氏ニ對シ、

一、家賃五割値下、

二、街燈設置並ビニソノ電燈料全額家主負擔、

三、道路下水ノ完備、

四、敷金ノ撤廢、

以上ノ要求ヲ提出セルニ付、コノ目的貫徹ノタメニハ如何ナル理由アリトモ家主ニ對シ個人的交渉ニ應諾セザルヤウ各自署名捺印シ誓ヲ嚴守スベキコト

右決議ス

昭和×年二月十一日

交渉委員報告書

第一回 交渉顛末 (二月十二日)

一、先づ第一に家賃五割値下げを懇談的に切出したところ、家主曰く幾分の値下げは當然と思ふけれども五割値引は絶對に出來ぬ。須山、眞垣とは事情も違ひ第一私のところでは以前から安く貸してあるから左樣に値下げする餘地がない。疊一枚が一圓二十錢につかぬばかりか、各戸の庭が廣くとつてある。

委員曰く――お話は一應もつともに聞える。しかし建てた當時もそれで十分採算がとれてゐたと思ふ。然らば、今日の物價下落の時代に於いては、それに相當した値下げがなされて然るべきだ。

家主――それではしばらく考慮さして下さい。

二、交渉委員――第二の街燈設置とその電燈料家主全額負擔の點について御承諾を願ひたい。

家主――今年から家屋稅取立の改正がなされるので、將來家主の負擔が重くなるから、今しばらく保留して戴き、稅金がきまり次第諾否をお答へする。

三、第三の道路下水の完備、これは我々のみでなく借地人も大いに惱んでゐる問題だ。道路の惡いことは我々の損失ばかりでなく家主地主である貴方の損失でもある。幸に町會議員であられる貴方が卒

先して盡力していたゞきたい。
家主――大いに努力します。
四、敷金をお返し願ひたい。
家主――月末に全部お返しします。
こゝで交渉委員は、なほ、疊や壁の修理について要求し、家主の承諾を得て歸宅しました。

第二回　（二月十四日）

家主――十七圓の家を十五圓に、二十圓の家を十八圓五十錢に、これでギリ〳〵一ぱいです。
委員――我々の要求は五割であつた。それにこれだけの値下げでは如何にしても承服しかねる。
家主――私の方でもこれ以上は採算が取れぬ。この邊で許してもらひたい。
委員――我々もかう云ふ風に切出した以上一歩も引けぬ。今一度御考慮願ひたい。
その夜直ちに借家人十四人全部の參集を願ひ、交渉の顛末を報告し、再協議を謀つたところ、十七圓を十圓に、二十圓を十二圓なら折合つてもいゝと云ふことになつた。
解決のつくまで支拂延期に一決。

第三回　（二月十七日）

家主――度々お出でを願つて申譯がない。考慮してみたが如何にしても御相談に應じかねる。
委員――それでは解決するまで家賃の支拂を延期する。
家主――私も實に困つた。いやになつた。
委員――我々も困つてゐるからお願ひに上つたわけである。
家主――誠に困つたことになつた。それではよく相談してお答へするから、今二三日御猶豫願ひたい。

第四回　（二月二十一日）

交渉委員宅に家主來談。
家主――十七圓を十二圓に、二十圓を十三圓にお願ひしたい。但し、此の不景氣がもつと續き、もつとひどくなる場合は、私の方で自發的に値下げをします。
委員――お申出の値下げでは我々の要求と甚だ差があるが仰せの條件つきで皆に話してみませう。それに疊や壁が大分いたんでゐるから、これは卽時修理されたい。
家主――さうして下さい。疊とかべは直ちに手配します。

第四回の交渉の結果を報告すべく、當日夜直ちに參集を乞ひ、報告し、一まづこれで打切らうと原案可決。茲に約十日間で齋藤氏の分の値下運動も一段落をつげました。
次に町會設立の件に移り、準備委員として鶴島君が推されました。以上。

我等の勝利は團結の力による。
次に來る障害を粉碎し、乘越えるものも、團結の力だ。
團結は家賃値下げの最大の祕訣なり。

附記　この一篇は勿論創作だが第三章「組合へ配付のニュース」は大部分作者の屬する武藏野借家借地人組合ニュースを原文のまゝ借用したことを斷つておく。

貞淑な細君

東作は毎日ぼんやりと、なすこともなく暮してゐる。

前はよく用はなくとも外へは出たのだが、この頃は、精も根もつかれはてたといふやうに、家でねころんでばかりゐる。

去年の三月、會社をクビになつて以來の失業者なのだ。職がほしい。しかし、どこにも勤め口がない、僅かの貯へも、もう目先きがみえてきた。

「今に餓ゑ死ぬだらう?!」

と思ふと、東作はすつかり打ちくだかれた氣分になつて滅入つてしまふ。いつそ今の世の中が、シャボン玉のやうに、めちやめちやにぶちこはれて、けしとんでしまへばいゝに、と癪にさはる。

「おらアもう生きてゐるといふことに何の望みもなくなつた。今はおれのやうな中間階級の滅ぶべき時だ。邦子、どうだ、夫婦心中とでもやらかすか?」

「みつともない、およしなさいよ、中井さんところなんか子供が四人もあつてもう二年も失業してらつしやるぢやありませんか、うちなんかは、苦しいといつても夫婦きりなんですからね。」

「いや、子供があれば苦しくても人生に望みを感ずるだらうよ。この社會のどこにもおれを使つてくれる所がないといふ恐怖と失望をおれにはまぎらす所がない。」

「子供を產んでお上げしないでお氣の毒さまね。……」

しかし東作はそんな細君の冗談に相槌をうつ氣もしなかつた。かれはあゝゝ……とたまらなさうにあくびをした。

「郵便!」といふ聲と同時に表戸があいて閉つた。東作はびつくりして、受取りに行つた。

世の中のどこからも相手にされなくなつたかれには、たまにやつてくる「郵便」にさへそれ程心がときめき、おどろくのだ。

疊の上におちてゐる封筒を拾ひ上げてみると、それはまるで見覺えのない女名前の手紙であつた。

「東作様、お別れしてからはや七年の月日がたちました。あなたのお住ひをみつけ、お宅の前を何度通つたかしれません。ぜひ一度お目にかゝつて山々のお話がしたいのです。十三日午後一時日比谷公園音樂堂南側のベンチに、赤い表紙の本をよみながら、あなたのお出でを待つてをります。初子」

「初子? 初子? だれだらう?」

東作の眼は俄かに生色をおびた。かれは失業の不安も苦痛もどこかへ忘れてしまつた。

「思ひ出せない! 七年前? かうつと? ええと? どこかで逢つた女に相違ない! や、や、やツ、十三日といへばけふだ。これやかうしてはゐられない。」

かれは手紙をふところにかくすと、そは〳〵として、

「邦子、ちよつと出てくる! 洋服を出してくれ!」

「まアだしぬけに、どこへお出かけ?」

「早くしてくれ、もう十二時だらう?」

「さつき十二時をうちましたよ。」

「思ひ出した用がある! すつかり忘れてゐた

んだ。一時迄に行かなくちやならないんだ。」
　で、洋服に着代へたかれが、あたふたと家を出て、折から日曜日の人ごみにもまれつゝ、やつと目指す場所に着いたのは、午後一時を二十分もすぎてゐた。
　音樂堂にはキネマ女優の實演か何かがあつて「南側のベンチ」どころか、ベンチといふベンチは人で埋つてゐた。
「おや、おや、おや？　これは？」
　かれは、ふところからあの手紙を出して、「南側のベンチ」とあるのをたしかめ、十三日とあるのをたしかめ、血眼になつて、混雜する群集の中から、赤い本を持つてゐる女を物色した。
　女、女、女、……女、女、女。
　ベンチにはいろ〳〵な女がゐた。しかし、生憎赤い本などを持つてゐる女は見當らない。―
かれは一時間以上、いや二時間も、三時間も、音樂堂をとり巻く人ごみにもまれて、どうしても思ひ出せぬ七年前の戀人をさがし廻つた。根氣よく、強い情熱を身に感じながら――。
　とう〳〵日がくれた。實演がすんで人が散つてしまつた。ベンチがだん〳〵あらはに目につき出した。
　と、夕やみの迫る向うの一つのベンチに、友達の中井友善がぐつたり疲れはてたやうに、かけてゐる。
　それをみると、東作は失望しかけてゐたけふ一日中の情熱が淡くも、もりかへしてきた。
「やア君！」
「よう！」
　と向うでも、東作をみて、びつくりして立つてきた。
「愉快だね、けふは、君い――そこ迄行つて、一杯やらう。」
　と中井は、どつしたのかひどくはしやいで、東作と肩をくんだ。東作も、實際愉快だつたので、中井の肩をかゝへて、大聲で、
「僕、けふひるからこゝへきてゐたんだよ。」
「僕もだよ。」
　と、笑ひつゝ公園を出て行つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

　二人は銀座裏のとあるおでんやでさんざ醉つ拂つて、往來へ出て來た。東作がもうかへるといふのを、中井が倚ほ引つ張つて、今度はあやしげなカフエへはひつた。
　中井はそこで東作を相手にかういつて氣焰をあげた。
「どうだい、かうみえてもおれは君よか先輩の失業者だよ。へん、どんなもんだい、全國五十萬失業者の一人さ、はゞかりながら仲間は多いんだからねえ。や、失敬、君も仲間だ。同志だよ。これがもつとふえて失業者の數七千萬てなことになると天下はこつちのもんだい。へえん、失業者をふやすことは資本家にとつては、自分で自分の胸を刺すやうなものぢやないか！ねえ、さうだらう。失業者の數がふえればふえる程、社會の空氣が惡化して、××××くるんだ！」
「そんなこと威張つたつて何にもなりやしないぢやないの！」
　と白粉をまつ白にぬつて脣をアメリカ映畫の何々孃といふ型に彩つた女給が、横合から半疊を入れた。
「何いッ！……」
　と中井は今度は女給の方へくつてかゝつた。かれは思ひついてふと懷中からずる〳〵と一通の手紙を引きずり出すと、
「ぢや……ぢや……きさま、これをみろ。おれア失業者だよ、失業者でも女に惚れられるんだ！　このラヴレターをみろ！」
　と女給の前に叩きつけた。女給よりも早く眼

を光らせたのは東作だつた。東作はやにはに、女給の手を拂ひのけて、その手紙をひつたくつた。

皺くちやになつた手紙には――書いてあつた。

「中井樣、お別れしてからはや七年の月日がたちました。あなたのお住ひをみつけ、お宅の前を何度通つたかしれません。ぜひ一度お目にかゝつて山々のお話がしたいのです。十三日午後一時日比谷公園音樂堂南側のベンチに、赤い表紙の本をよみながら、あなたのお出でを待つてをります。初子」

東作は酒の醉ひも一時にさめる思ひがして、いきなり自分のポケットから、今朝受けとつた手紙を引きずり出して中井につきつけた。

「き、き、きみ、みたまへ！　おれだつてこれと同じ手紙をもつてゐる！　まるで同じことだ！　一字だつて違やしない！」

＊　＊　＊　＊　＊　＊

それから、いかにみじめな恰好で二人がそのカフェから出たか――。

「ちえツ君、たしかにその手紙は僕の家内の手蹟だよ。」

「君の受取つたのは、僕んとこの奴の字に違ひない！」

「二人は相談して互ひの亭主を愚弄しやがつたんだ。ちえツ!!」

「實際、女房つて存在は反階級的だよ。失業はわれ〳〵に資本主義制度のからくりを敎へようとしてゐる。……しかるに、しかるにだ。女房は、われ〳〵の、この苦惱を、飽迄個人的問題の中に解消してしまはうとしてゐる。ひよ、ひよ、ひよつとしたら、君とおれの女房は、われ〳〵を元氣づけようとして、われ〳〵をかういふペテンにかけたのかもしれん……しれんが、正にこの手紙はペテンだ。魔睡劑だ。そして女房つてなものが第一阿片だ！　少しも階級的なものをもたぬイカモノだ。實際おらア、女房や子供がなければ××××這入つて金持をやつつけてやりたいんだ!!」

二年の失業は中井にさうした程度の「階級意識」を與へてゐた。しかし、資本家とか、プロレタリアとかいふことに殆んど興味のない東作は、それを中井のひがみだと思つた。

だが、けふ半日を中井と二人で、互の女房たちのペテンにかゝつたかと思ふと、東作は十分腹立たしい荒つぽい氣持になつてゐた。

一時間ばかり後、銀座の裏通りを、肩をくんで大きな聲で、

なつしゆツ
しぼれえ！
ぱツかあどオ！
女房は
なかまの
面よごしイ……。

と怒鳴るやうに唄ひながら歩いて行く二人の、更に一層醉つ拂つた姿が見受けられた。

（一九三〇年四月改作）

年譜

明治三十二年十二月二十二日、渦で名高い阿波の鳴門に生れる。家は小ブルジョア階級▲村の小學校を卒へた後は兩親のために家業に酷使され　後村書記になつたり、村の勞働者を中心に作られた消費組合の使用人になつたりして働いた。この時期に賀川豐彦の影響を大いにうける。又、河上肇の「社會問題研究」の創刊により大いに啓蒙される▲大正九年九月、二十一歲の時大阪へ出て印刷工になるつもりで大阪時事新報社主幹藤浪健二氏を、新聞に小說を投書したのを理由にして訪ね、面會して頼んだ所、印刷工ではなく記者に採用され、以來大正十三年の秋まで、記者生活をつゞけ知識階級と化して大阪の住人となる▲新聞記者時代は個人主義的思想のなやみの時期で、殊にその末期大正十二年より三年へかけては死の恐怖に囚はれて大いに行詰り世間を放擲して箕面の山寺にくらす▲大正十三年、心機一轉して　無職のまゝ大阪で勉强したり遊んだりしてゐる內、翌十四年の夏結婚の相手ができる▲昭和元年初めから京都にうつり黑谷山內の僧房に住み、四月に結婚し東京にうつる。僕二十八歲。妻悅子二十四歲▲この年は東京市外大井に住み、米鹽に窮し、食ふものがなくなる。プロレタリア階級のための大衆的な文學を創つてみせると決心しながら、すぐにはさうは行かず　ブルジョア新聞雜誌のための大衆小說を書き始め、これにより六ケ月目に窮乏を脫す▲生活に餘裕が出來た昭和元年後半期より舊評議會關係の人々と知り合ひとなり、シンパサイザアとして「左翼」に同件し始める▲一九二八年（昭和三年）評議會解散の秋、「無產者新聞」に最初のプロレタリア小說『舞踏會事件』を書く▲これを轉機として日本プロレタリア作家同盟に參加する▲この年、「東京每夕新聞」に小說『ゴー・ストップ』を連載し始め、一九二九年二月腸チブスに罹り、ねたまゝ醫者の眼を盜んで口述筆記で稿をつゞけつゝ、山宣暗殺事件をきき、四・一六事件をきく▲一九三〇年、「戰旗」二月號に『忍術武勇傳』を書く▲三月『ゴー・ストップ』を單行本として出版、發賣禁止さる。改訂版刊行▲六月より「婦人公論」に『同志愛』を六ケ月間連載する。この『同志愛』に對し同志窪川鶴次郎が「ナップ」十月號に「『同志愛』の與へた敎訓」と題して詳しい批判を書いてくれたことにより、作者は非常に敎へられる所多い▲その他この年には「裁判と盆踊」「幸福な老人」「ストライキ戰爭」「闘士」「ダラ幹の洋行」「社長の馬車」「職工慰安會」等を書く。これらは小說集『同志愛』「暴露讀本」の中に收まつてゐる▲以上はプロレタリア作家としての作者の第一期に屬し、この期の作品は作家同盟の文學大衆化の問題の討議にからみ批判の的となつて夥しい缺陷の指摘されたことは作者を益する所多し▲十一月、作者は第二期への用意を以て「改造」に『記念碑』を書き、「戰旗」に「波」を書き、「東京每夕新聞」に『ダラ幹』を書き始める。

附記。こゝに收めた私の小說はプロレタリア小說家としての私の前期的作品に屬し、作者自身にはどれもこれも改作したいものだが、特に『同志愛』は盟友窪川鶴次郎の批判「『同志愛』の與へた敎訓」によつていつかは全然別に之と同じ內容のものを書きたいと望んでゐる。今は窪川の批判から、ところ〲の小部分に添削を加へておいた。この事をちよつと附記しておく。

（一九三〇年十二月　作者）

赤色スポーツ

能率委員會

約束手形三千八百圓也

あ、ま、り、者

プロマイドを捨てる

馬

眼

カットされない場景

徳永直

赤色スポーツ

——「太陽のない街」近況——

1

「ボール。」

球審がどなる。

「ちえつ、も一本……」

ツバサとマークをいれたユニフォームの投手は、輪轉課の勇次郎といふ若者——弓なりに、ツンと身體が延びると、瞬間、球は直線に飛ぶ——。

「いゝとこ。」

ハズンだ聲と一緒に、やんはりミツトをふせた捕手は、おそろしく腰がガツちりしてるが、その筈、この青年は、電氣鉛版部のブラシはたきだ。

K印刷工場の空地は、いま正午の休憩時間だ。眞夏の太陽を浴びて、空地をとりまく鋸形の煉瓦建物の陽かげは、一寸だつて落ちてない。

幾十組のキャッチボール、女工達の繩飛びや、フットボール、人輪をつくつた相撲——幾百の、若い男女工達は、悲鳴や、怒聲や、笑ひ聲を一緒くたにブチまけながら、直線の太陽の下で、燃えあがる陽炎とともに、はげしく飛び跳ねてゐる。

二千の從業員を有するこの大工場で、最近は目にたつて、ユニフォーム姿が增えた。作業服より輕快で、女工にもてた。そして、ユニフォームのマークの幾種もある中で、ツバサとサゞナミが、權威をもつてゐた。ツバサは、輪轉、平版、ミーレー、平臺、其他印刷諸部門及び附屬工場を代表し、サゞナミは、活版、寫眞、凸版、モノタイプ其他整版諸部門を代表したオール・チームであつた。

秋の試合が近づいてゐた。サゞナミは、春の「關東實業野球大會」に、オールK印として出場したが、ツバサは、九月の「社長杯」を獲得しない限り、またこの秋にも出場權をサゞナミにゆづらねばならない羽目にある——からした事實が、從業員の特に精銳の若者達を、スポーツに熱中させた。

「社長杯」は野球のみでなく、相撲にも、柔道にも、それから、將棋クラブにも、釣遊會にもあつた。K印刷會社は、これらのために一昨年來、百坪の建物を、「太陽のない街」の長屋部落に建ててくれたのだ。

「いくぞ。」

ジットリ汗の滲んだ、荒くれた掌の中から、力の籠つたボールが、直線に飛ぶ。縱に、横に、斜めに、前に、うしろに——若者達の、精氣の一切が、球にこもつて、激しく飛び交つてゐる。

——十二社協定による賃銀の値下、深夜業の割增撤廢、工場協議會における從業員代表の骨拔き、勞働組合員たることの絕對彈壓、健康保險法による巧妙な馘首法——一切の新らしい搾取の重壓が——榮ある吾等の「社長杯」——に取り換へられてゐる。二千の從業員の先頭にたつべき青年達は、食後の三十分を、夜を、日曜を——搾られ殘りの一切の精力を、野球、相撲、柔道等々を通じて、「社長杯」に動員されてゐた。

われらのK印

われらのサヾナミ

　フレ！　フレ！　フレー

血の氣の多い、若い女工達は、これら有頂天のブルジョアスポーツ闘士のために、頬を赤くして、應援歌を唄つた。

「榮ある社長杯」のために、うれしき彼女の喜悅のために、青年達は、絞められてゆく首輪のなかで夢中だつたのだ。

　…………………

「一寸待つてくれ、影山。」

　食堂から、飯粒を嚙み嚙み飛び出してきた喜イ公は、呼びとめられて、慌てて振りかへつた。

「一寸、相談があるンだが……」

　呼び止めた男は四邊を見廻しながら、低い聲で云つた。色の白い、インテリ出らしい坊つちやんのやうな顏立の男は、平臺印刷室の雜役夫で、祕密にもぐつてゐるS勞働のオルグ、狹山と云ふ名だ。

「うーん、と。」

　喜イ公は、マヅい顏をした。ツバサの第一投手であるこの輪轉課の印刷工は、いま投げるつもりで、空地へ向つて飛び出して來たとこなンだ。

「……」

　狹山は相手の樣子を、シブい顏つきでぢつと見てゐた。狹山の家でやる「工場委員會」に獲得されて、まだ間もない青年だが、狹山はこの頑固さうな男に、望をかけてゐた。

「手傳つて貰ひたいことがあるンだが、ダメかね？」

「……」

　しかし、喜イ公の心は、工場空地に飛んでゐた。二人がたつてゐる廊下の腰板をこえて、第二投手勇次郎が、汗みづくになつて練習してゐるのが、ツイ鼻ッ先に見えてゐる。

「ぢや、いいよ。」

　狹山はあきらめた。一人でも欲しいンだが、××な仕事だ、自分達だけでやらう。

「だが、今夜の會合には、必ず出てくれよ。」

「ん。」

　大きな口と、仰向いた鼻、それに大い頭をガクンとうなづかした喜イ公は、廊下の腰板に手をかけると、一またぎに飛び越えて、空地の方へ駈け出していつた。

「勇公、代らう。」

　喜イ公が、グラブを嵌めると、捕手もしまつてかまへた。綱飛びしてゐた女工や、少年工達が寄つてきた。

「たのむよ、喜イちやん。」

「いゝとこ、一本ね。」

　狹山は、喜イ公を見送つて、暗い顏をしてゐた。

「會社ぢや、產業合理化で、大量馘首をはじめようとしてるのに……」まるで、かんじんの若者たちは、ブルジョアスポーツで夢中なンだ。

　狹山は腕時計を見た。もう十一分だ！　組合から連絡つけてある黨の同志は、××××、モウすぐに飛び込ンで來る時刻だのに——、大衆は斯も、のんきなものか——。

　この十幾棟の工場、二千の從業員中で、S勞働および×の影響下にあるものは、ホンの二十人足らずだつた。これだけの若い大衆がゐながら、搾取の重壓に苦しんでゐながら、この二十名がいつかうに擴がらないのだ、殖えないのだ、たつた二十名が、固い岩層の中で、祕密にやつと保たれてるきりだ。

—叫んでも怒鳴つても聞えない大衆……」

　狹山は、空地の若者達を、ぢつと見入りながら、しみじみと、英雄的孤獨を感じた。いつさらはれるかわからない自分達、××も××も

覺悟してゐるこの悲壯な氣持を、のんきな大衆よ、いつ理解してくれるといふのだ。――感傷的な、熱いかたまりが、グッと咽喉元までつぱつて來ると、彼はやがて痩せた肩をそびやかして、ツイと廊下の腰板をはなれたが、ふと向うから歩いて來る三人の洋服をめつけると、クルリと方向を變へた。

「糞ツ、社長の山羊ひげめ……」

向うから歩いて來た三人の洋服は、食堂の中をのぞいたり、そこらで、赤ン坊におつぱいをふくませてゐる女工達の、いんぎんな禮を受けながら、ゆつくりと、空地の見える廊下のところまで歩いて來た。

「なか／＼、旺んだね。」

山羊ひげの社長は、空地の方を見て足をとめた。溫情主義を看板にする社長の習慣は、きまつて、お正午時間に、各工場を巡視することであつた。

社長の背後に、專務と、守衞長が從いてゐた。加瀨といふ刑事上りの守衞長は、野球其他、各競技團體の總監督で、柔道二段の男だ。

「向うの人だかりは何かね、相撲？」

守衞長がこたへた。

「さうです、今夜は土曜で、大會だもんですからね。」

「ホ、ホ、なるほど。」

社長は、うなづきながら、歩き出した。

「いや、結構ぢや、結構ぢや。」

2

廊下のタヽキには、多くは世帶持の職工達が、シャツ一枚か、或はズボン一つきりの裸でしやがんでゐた。社長は、廊下を、笑顏をふり撒きながら通りすぎた。

「ちよつとおめえ、松の野郞は馘首だつて話だよ。ほら……」

社長の縞ズボンが見えなくなつてから、十人あまりでつくつてゐる輪の中へ今迄、廊下で立話してゐた男が加はつて來て云つた。

「どう？」

傍の二三人が振りかへると、別れて向うに歩いてゆく、浴衣がけの病人の後姿が見えた。

「ナニ、馘首だ？」

輪の眞ン中には、整版ゲラでつくつた將棊盤がある。掌の中でコマをいぢくりながら、背中に黃色いシミのあるシャツの親爺が、馘首だときいて、皆と一緖に振り向いた。

「松は肺だつけな？」

一人がさう誰にとなく云つたが、皆だまつて、その浴衣の後姿を見送つた。悲慘がいつも足許から湧いた。そして、工場ぐらしの永い世帶持達は、持病の痛みを撫でるやうに、その「悲慘」を默つて見送ることに馴れてゐた。

「王手だッ。」

それまで考へこんでゐた相手が、ガチリとコマをうつた。シャツの親爺は慌てて振りかへつた。

「仕樣がねえ、いちかばちかだ。」

向う鉢卷の相手の男は、うつたコマをも一度みてニヤリとした。皆もすぐ、そつちへ注意をうばはれた。

「ちくしやう、こいつはひでえ！」

シャツの親爺は、盤面を睨んで呻つた。とりまきの皆も、モウ「松の野郞」を忘れてゐた。

「うーむ、いゝ桂打だ。」

「凌ぎがつく／＼かな。」

馘首の話は、そのまゝ消えた。

…………………

浴衣がけの、健康保險患者は、二三間さきの、タヽキにしやがんで、新聞を讀んでゐた親爺と話してゐる。

まア、さう心配したもンでもあるめえ、そンときあ、ソンときでどうにか……」

新聞を讀ンでゐた親爺は、氣休めを云つてゐる。アト一週間で、會社と縁切れになることを宣告された、このヒョロ〳〵した肺患者が、アト七日で仕事が出來るやうにならないことは判りきつた話だ、どうにかなることは、十年以來の工場から、骨と皮だけの身體を、女房子供をノシつけて、ほり出されることだけのことだ。

健康保險法は、大工場では、その手切金を半分だけ職工に積立てさせるといふ重寶な役割をしてゐるのだ。この「浴衣」の患者も、規定の三ケ月では、「海綿」みたいになつてしまつた肺病を治すことは出來なかつた。

「……………」

健康保險患者は、だまつて其邊を離れた。彼が嘗て、同僚の「悲慘」を默つて見送つたやうに、いまは、自分が、見送られてゐる――。

重石にひきずられ、「悲慘」に、カドのすれた世帶持たちは、却々起ち上らない――。

そンなときに、この新聞を讀んでゐた親爺は、あわてて波のとばッちりを喰つて、いそいで殼に逃げこむやどかりのやうに、きまつて、己れ一人の「祕密」を考へる。

「郵便貯金が、三百と十五圓。今日迄の十一年間の退職手當が、四百二十圓と――」

それから、新聞をたゝんで、

「それで、えゝと、郷里へひつこむか、それとも一膳めしやでもやるか――」

自分のことだけを、自分の灯明りだけを、しつかと抱いて離すまいとしてゐた。そして、波がしだいにヒドクぶつつかつて來て灯明りがかき消されさうになると、暗い顔で呟く。

「あゝ、俺も永いことぢやねえに……」

………………………

「あたい、よんべ『東京行進曲』を見て來た……」

「アラ、隨分時代おくれね、いまどろ。」

「でも、あたいすつかり共鳴しちやつたわ、ホラ、あの藤村の坊つちやん良樹がさ、藝者になつた道代をたづねてゆくところがあんでせう……」

お洒落な女工が二人、廊下つゞきの洗面所で、顔ぢうを、石鹼の泡だらけにして喋つてゐる――。

「ね、時計の針ばかり見てさ、かう待ちアグんでゐるとこなンか、もうあたし……」

「ん、ん。」

聽いてる方の七三頭髪は、手拭に顔をうづめて泣きじやくりするやうにうなづく。喋つてる方の銀杏返しは石鹼の泡の中で、眼を赤くしてゐる。

「すつかり泣いちやつたわ。」

すると、手拭から顔を出した七三頭髪が、

「でもさ。」

「なアに。」

「あの夏川と瀧花が、印刷女工になるとこがあつたでせう。」

「ん。」

「あそこンとこ變ぢやなかつた？」

「さう、さう、あたいくすぐつたかつたわ。」

「いえさ、あンな、ノンキな印刷工場なンてありやしないわ。」

「それやあ『かつどう』だもン……」

「だつて、あたい達本職だけに、バカにしてると思つたわ。」

だが、彼女達は、「女工」から藝者に、藝者から奥様に、モダンで、金持の坊つちやんにおつかけられるといふ「道代」や「澄江」を、「馬鹿」にしてるとは思はなかつたのだ。彼女達はプルアチテーター×××と一緒に、コケた青い鉛毒の頬つぺたに安白粉をぬつて、「夢」の世界に醉う

ては、現實をぬかしてゐたのだ――。

…………………

「なンだ、そのざまは…。」

ヅヌケて、大かい坊主ツくりの男が、汗だらけになつて取つくンでゐる、二つの裸ン坊の背を、いやといふほどどやしつけた。

「ちやンと、四つに組んでみろ！」

工場空地の一ばん隅ツこ、ズボン一つツきりの裸ン坊の青年達が、三四十も背中をならべて輪をつくつてる――。

「もつと、左を深くさしこんで…。」

怒鳴つてる大かい、眞ツ黒けな、脣の厚い男は、相撲名からして、「印度虎」といふ、最近世帶持ちたての男だ。

ハア、ハア息をきらしながら、取つ組んでる裸ン坊は、四つに組んだまゝもう絶え入りさうだ。

「なんて、だらしのねえへツピリ腰だ、蹴飛ばすぞツ。」

土曜の今夜は、K印クラブで、東西の相撲大會――西の横綱印度虎は、いま西軍のコーチをしてるところだ。

東軍の横綱は、柔道二段の守衛長加瀨――しかし、柔道では加瀨に强味があつたが、相撲では印度虎のものだつた。「社長杯」は、こゝ二年を、西軍が保持しつゞけてゐる。

「突つ張つて、ウンと突つ張つて、え、バカヤロ、腰を落して仰向に反るンだ、間拔め。」

丁度その時刻だつた…。

まはりの若いやつらが立ち上つたので、印度虎も、何氣なしにそつちを見た。

廊下の向うから、學生みたいな男が、逃げるやうに駈けて來る。そして駈けながら、赤いビラを、パツ、パツと粉雪のやうに撒き散らしながら走つて來る――。

見てゐると、食堂の方からも、も一人新聞配達みたいな恰好したのが、廊下から、工場空地へ飛び出して來た。そしてこれも同じやうに、赤い小さいビラを投げつけ、投げつけ駈けて來る。

「何だ、社會主義者か。」

そつちを見てゐる若い奴の四五人が、好奇心だけで云つた。女工達も、キャッチボールをやつてる青年達も、べつに遊びごとを止めはしなかつた。ビラの舞ひ落ちるとこだけが道を開けて、他人らしく見送つた。

しかし、咄嗟の間に、どう嗅ぎつけたか、七八人の金筋の守衛達が、その「學生」と「新聞配達夫」を捕へようと飛び出して來たので、空地の皆は、遊びごとを止めた。

「そいつを捕へろ！」

「ビラを拾つちやいかん。」

守衛達は、不意の闖入者を追つかけながら、口々に怒鳴つた。

「學生」は製本工場の方へ駈け込んだ。空地を追ひつめられた「新聞配達夫」は隅ツこの印度虎達の方へ向つて走つて來た。勇敢な「新聞配達」見たいな若い男は、信ずべき味方に、大衆の中へ飛び込んで來ようとした。

「バカツ、つかまへるぞツ。」

おゝ、眞つ黒けな大男は、いきなり、行手に大手をひろげたのだ！

新聞配達は、ころげさうに踏みとまつた。おどろきで眼を剝いたやうに黒眼鏡がいかつた。咄嗟にきびすをめぐらして、空地の外柵の方へかけていつた。そして間一髮、彼の片足だけが、外柵にひつかゝつてゐるとこを、守衛の數十本の手がつかんだ。

蒼白にひツつツた濱色の「新聞配達夫」は、守衛詰所にひかれていつた。

「どら…。」

別に興味もなささうに、若いやつが持つてる

赤いビラをひつたくつて、印度虎は讀んでゐたがすぐ止めた。

「なンだ、産業合理化だの、大量馘首だのつて、譃八百を……」

チンと鼻汁をかンで足許に棄てた。

「×××のいふことナンかアテになるもンか……」

印度虎は、本氣にさう考へてゐた。

「さア、みないゝか、今夜はウンとガンばるンだぞ。」

3

夏の日が、すつかり暮れると、モウ八時だ。

緣臺將棊や、腰巻一つの女房たちやが涼んでゐる狹い二番長屋の露路を、K印工場の若い者達が、こつそりと、狹山の家へあつまつて來た。

狹山と、整版の田中といふ頭髪を長くした男とが、十五六人集つたうちの中心をつくつてゐた。暑いのに外方に向つた障子をしめてあつた。

喜イ公は隅の方で、默つて坐つてゐた。この中では一番新米だつた。

「お――」

突出し窓の裏口から、にょきりと、白い顔が浮いた。喜イ公はハッとした。それは晝間工場へ飛び込んで來た「學生服」の男だ。

湯上りを着て、ゴマかしてるその晝間の男は、S勞働の常任で、村越と名乘つてゐた。あたりを見廻してから、窓から忍び込むとジロリと皆の方へ鋭い眼で會釋した。

それが、よけい室ン中を緊張さした。「獲得」されて、まだ間もない喜イ公は、何よりもさきに、不馴れな、緊張した空氣を怖く感じた。

顔が揃ふと、まづ一番に、狹山が云つた。

「晝間の、ビラの效果はどうだつたかね？　各職場では？」

村越の眼が、また鋭く皆を見廻した。

「第三整版では……」

文選工らしい出ツ齒の若いのが云つた――地域的に離れてるせゐか、一枚も持ち込まれなかつた――。

出ツ齒の若いのは、心の中で呟いてゐた――事實は少し持ち込まれたが、殆んど馬鹿にされてしまつたのだ――。

「君の方は？」

製本工場の雜役夫は、長い頭髪を撫でながら、憤激した口調で云つた。

「俺の方は女工ばかりだから始末にいけねえ、おまけに今夜相撲大會だといふンで、皆そつちへ逆上せてゐやがつて――」

「君の方は？」

各職場の情勢は――狹山は齒ぎしりした――大して反響がないのだ――。

村越はガッカリしたやうに、眼を伏せた。

――まだ大量馘首が、表面にあらはれないからといふせゐはあるにしても……。村越は眼をつぶる。

――守衞につかまつた同僚は、空しく犬死したのか――。

「おやぢども仲間ぢや、コソ／＼S勞働の噂なンかしてる奴もあるけどね、×××といふ名を聞くと、皆潰つちまひやがンだ。」

狹山は默つて、さう語る男の方を見あげる――。

「おまけに若い奴らは皆、野球や、相撲なンぞに夢中になつてやがるしね。」

室ン中の皆も、工場ン中では、周圍の從業員達とは、壁みたいな空氣の中にゐるので、一緒に寄ると、自然陰謀的な昂奮に驅られた。

村越はバットに火を點けて、烟の間から、室ちうの皆を見廻してゐた。――この文學青年み

たいのや、お天氣らしい少數の勞働者が、帝國第三期に於ける重要産業中の最も知識的な印刷勞働者の、しかも東洋一を誇るK印工場の精鋭なのか!? 過去に三度のストライキの經驗をもつ、K印工場の精鋭なのか!?

村越は解せなかつた。

社會民主主義的な組合や、無産黨の影響すら、ごく稀薄な二千の從業員!

左翼的な組合及び×への組織率は、よし、彈壓のために阻まれて少數であるとしても、それを求めようとする力、壓力、二千のうち三十歳以下の青年が七十パーセントを占むるこのK印工場の、青年男女工達の、眞實への、自由への、階級的な叫びは、その巨大であるべき壓力は、いつたい、どこへ解消されてゐるのか!?

「おまけに若いやつらは……野球や相撲に……夢中に……」

それをきいたとき、村越はいま更らのやうにハッとした。

「さうだ、俺達は、あのブルジョアスポーツの反動團體をぶつつぶさなくてはならないんだ。」

そして村越のその考へが、そのとき云ひ出した狹山の言葉と一致した。

「諸君、俺達は記憶しとかなくてはいけない。今日、工場で、捕つた同志が、何故に逃げおほせなかつたか知つてるか?」

皆は默つて狹山の口許を見た。

「あの『相撲團』の反動野郎、『印度虎』のおせつかいによつて捕へられたのだ!」

皆のうちで、喜イ公が一等おどろいた。喜イ公は、印度虎とは親戚であり、印度虎の紹介で工場に入つてるのだ。

「印度虎だけぢやねえ。」

村越が口を挾んだ。

「野球團のサヾナミのキ　プテン松岡も、釣遊會の幹事『のんべ熊』も、みな、ブルスポーツを牛耳つてる奴あ、會社の『内意』を受けてンだ、俺達は、この一聯の反動をぶつつぶさなくてはならぬ。」

村越は、一つの光明がひらけて來たやうに、眼をかゞやかせて云つた。

「特に、印度虎は、同志を敵の手に渡したといふだけでも、俺達は相當の××をなすべきだ。」

村越は遠慮なく云つた。室ぢうの一致した憎惡が、印度虎に向けられた。喜イ公は室の隅で考へこんだ。

「やらう!」

出ツ齒の田中が、悲壯な決心を顏に現はして云つた。

「よし!」

異常に緊張した空氣が、室中の氣持をすぐ一緒にさせた。皆はひたひをあつめた。

喜イ公はそつと便所にたつた。同志を賣つたと云ふ印度虎を庇ふといふ氣は更にないが、果して村越の云ふやうに、印度虎にしても松岡にしても、「のんべ熊」にしても、心底の反動だらうか? 喜イ公は印度虎を熟く知つてゐた。

「あいつあお人好しで頑固な勞働者だ、たゞ誑されてるだけなンだ、知らないだけなンだ。」

しかし、それを連中に云つたところで今の場合無駄だ、またうまく話せもしない。それで、喜イ公は、便所の傍から、こつそり下駄をさぐつて戸外へ出た。

多分、相撲のハネを待つて、襲ふらしい皆の相談を背後にきゝながら、喜イ公は默つて家へかへつた。

4

「醉つたか、こら。」

白洋服が、でかい男の肩へ、ヒョロ〳〵と突つかゝる。

「な、なんのこれッぽつちに……」
社長邸の裏から「太陽のない街」に降りてる狭い坂道を、したゝかに酔つた足どりは印度虎と、守衛長の加瀬――。
「だが惡くねえ、勝祝の酒つてやつはなア、畜生！」
「おまけに、社長の振舞酒ぢや尚更だらう。」
守衛長は惡醉して、變にからんで來る。
「きさまア。」
印度虎は、ヒョロつく足を踏ン止まつて、
「きさまア負けたンで口惜しいのか、え！」
今年も西軍が「社長杯」を獲得した。二人は相撲のハネ後、社長邸で出た酒一樽に醉ひつぶれて、いまかへるところだ。
「口、口惜しいなンて贅澤だぜ、あンなにきれいに負けれやおめえ、ゲープ……と、雙差しでよ、グーッと押しきられれやおめえ、何も文句はねえ筈だ、ウーイと。」
印度虎は先になつて降りて來る。
「畜生、今のうちに嬉しがつてろ、その代りこんどの柔道試合にやあ、地獄の一丁目をのぞかしてやるから覺えとけ！
いつものズルい守衛長にも似合はず、ムキになるほど、これも醉つてゐる。

「なにを、そらアこつちで云ふことだ。」
グラ〳〵と、狭い坂道をいつぱいになりながら二人は降りて來た。そのとき、前にたつて歩いてゐた印度虎が、どうしたはずみか、ひよいとヘタばつてしまつた。
坂の西側の露路から、黒い影が、バラ〳〵飛び出して來た。そして四五人は印度虎の方に、アトの半分は守衛長の方へ飛びかゝつて來た。
「い、いてえッ、どこの野郎共だッ。」
不意に足をすくはれた印度虎は、×××殴られながら、怒鳴つてゐる。帽子を眼深に冠つたり、手拭で頬冠りしたりしてゐる輩は、無言で殴りつゞけるのだ。
隙をめつけて、守衛長の坂上の方へ逃げ出してゆくのが見えた。
「ひきあげろ！」
頬冠りの一人が合圖すると、皆バラ〳〵逃げ出した。
「畜生ッ。」
殴るだけ殴つて逃げ出さうとする中の一人を、足をつかんで引き倒した。頬冠りの男は、印度虎の顔の上に落ちて來た。
「おや、貴様は？」
頬冠りの下から覗いた白い顔を見て、印度虎は最初の瞬間、顔の見覺えで名を思ひ出さうとしたが、醉つてる頭は名前まで判別出來かねた。
頬冠りの男はバネのやうに、印度虎の手を振りもぎつて逃げ出した。
「畜生、待てッ。」
泥んこになつて起き上ると、印度虎は、殴られたいたみにヒョロつきながら、頬冠りの男を追ひかけた。
頬冠りの男は、グル〳〵露路を廻つて、長屋の方へ逃げていつた。そして印度虎がヒョロつく足で、頬冠りの男を見失つたとき、つい眼前に、歸りの遅いのを氣づかつてゐる彼の女房が赤ン坊を抱いて立つてゐた。
「あんたはまた喧嘩して來たんだね！」
「……」
印度虎は狐につまゝれたやうにキョトンとした。
「みつともない、口から×をふいてさ、着物もなにもすつかり泥ぢやないかね。」
馴れてる女房は、赤ン坊を家ン中へほり出すと、印度虎を臺所につれてつて、着物を脱がしてから、頭や顔に三つも四つもある××を洗つてくれた。
「止しなよ。ホンとにいゝ加減の年齢をして

さ、いつまでも喧嘩をする馬鹿があるもんかね。」

まだしたゝかに醉つてフラ〳〵してゐる亭主を、女房は赤ちやけた蚊帳のなかに押し込んだ。

「ガア〳〵云ふな。糞ッたれ阿女ア。」

大の字にフン反りかへつて、ぼんやりした記憶をたどらうとすればするほど、その憎い頬冠りの白い顏はわからなくなつてくる。

「たしかに工場の野郎だが……」

女房がガア〳〵怒鳴りたてる、赤ン坊が泣きわめく、夜の醉つてる頭は、ます〳〵もうろうとしてゐる。

到頭、そのうちに、傷のいたみも忘れて、睡つてしまつた。

5

夜半に、ひどく咽喉がかわいて來たので、印度虎は、眼がさめた。

「水だ、やかんは——こら。」

手を伸ばしてとなりに眠つてゐる女房の肩を押しゆすぶつたが、赤ン坊と一緒に、だらしなく眠りこけてゐる女房は眼がさめない——。

「チッ、糞ッたれ!」

ふら〳〵起きあがると、臺所へ一跨ぎに首をツン出して、ひしやくごと口へ持つていつた。

「フーッ。」

と、大きな吐息をして、ひしやくをほり出すと、そのまゝ蚊帳の中へもぐりこまうとしたが、フイと、變な物音を聞きつけた。

「おや?」

ゴツリ、チャラ、チャラ——。

音は臺所の外方、たしかに靴音と佩劍のぶつつかるひゞきだ。

「……」

印度虎は、臺所のながしへ、足を踏んまへて、そつと、戸前に顏をよせながら、

「だれだ?」

と怒鳴らうとしたが、咽喉にかすれて、大きな聲にならなかつた。それでも一度、怒鳴らうとすると、そのとき、靴音が五つも六つも一度に起つて、駈け出すやうに戸前を離れてゆくのだ!

印度虎は、いそいで、戸前の棒錠をガチ〳〵ひねつて戸を引きあけたが、その途端、筋向ひの長屋で、けたゝましい叫びがおこつた。

「なにをするツ。」

「バカッ。」

「抵抗するかツ。」

入口の戸がひんめくられて、狹い長屋露路に、電燈の灯をいつぱいに投げ出してるのは、同じ工場につとめてる狹山の家だ。二三人の私服と、五六人の正服が、その家ン中で土足のまゝでハネ廻つてゐるのだ。

「何だらう?」

出てゆかうとしたが、巡査がゐるのに丸裸だ。

「こら、着物もつてこい。」

物音に眼をさました細君が、赤ン坊だいて飛び出して來た。兩隣りも、向ひ側も、近所の家でもおどろいて戸を細目にあけた。そして、すさまじい活劇を、怖々のぞいてゐる。

ガチャン、チャリッ、ガッといふ器物のこはれる音、電燈にもぶつつかるらしく灯明が、暗い露路を、なゝめに大きくゆれる——。

「生意氣な……」

「さつさと歩けッ。」

左右に腕を捻ぢあげられて、露路へ出て來たのは狹山だ、蒼白な顏が、灯明の影になつてゐてもよくわかる。

「お——」

印度虎は、そんときやつと氣がついた。——畜生ツ、昨夜俺をひどい目に逢はせやがつたのは、こいつだ——。

「畜生め！」

かねてから蟲の好かねえ書生ツぽ野郎……印度虎は、ハダシのまゝそつちへ近づかうとすると、とりまいてゐた巡査が、ドンと胸を突き飛ばした。

「傍へ寄つちやいかン。」

とたんに、それを聞きつけた狹山の蒼白な顏が、印度虎の方を振り向いて、血走つた眼で睨んだ。

「は、反動め、少しあこたへたか……」

「ナニを？」

巡査を押しのけて、印度虎はなぐりかゝらうとしたが、そンときハッとして、譯なしに手を下ろした。

狹山の兩手に嵌つた、黒く光る手錠——。

「ち、畜生め！」

私服や巡査に押し距てられて、ぼんやり手をつかねながら、印度虎は口惜しさうに怒鳴つた。

「こ、こんどめつかつたら畜生、首根つこひきぬいてやるから……」

6

翌朝、印度虎は工場で、頭から顏の半分ばかりを繃帶してゐる守衛長と顏を合はせた。

「おめえの方がひどかつたな。」

印度虎は、若い野郎にきまりの惡い、頰の膏藥張りを撫でながら、

「あれからどうした？」

「どうつて……」

守衛長は、ドン〳〵從業員が出勤して來るタイムレコーダーのかげで、紫色の腫れの見える頰をぴくつかせながら、ブツ〳〵云つた。

「あれから××署へ飛び込んだんだ。」

「警察へ……」

印度虎は可笑しくなりながら、

「柔道二段にも似合ねえぢやねえか。」

すると、守衛長は、白くかさばつた頭部を振りながら、

「イヤ、少し考へがあつたからだ。」

「ハア？」

印度虎にも、日頃あまり口も利かない狹山なぞが、何で自分を覗つたかがわからなかつた。始業のベルが鳴り出したので、そのまゝ辨當を抱へて職場にゆかうとすると、守衛長が呼びとめた。

「あとでね、事務所の俺の室まで來てくれ。」

印度虎は、輪轉印刷室の、第三號機の擔當者、五人組長といふのだ。三號輪轉機のそばへ來ると、若い連中が眞黒けになつて掃除してゐた。スヰッチを入れ、調子を合し、インキの工合を見てから、工長から渡された今日の生産豫定表どほりいひつけて、それから、事務所の方へ出かけていつた。

「一寸、待つてくれ、外で……」

守衛室に入つてゆくと、意外にも、こんな朝早く社長の顏が見えた。傍に、ユニフォーム姿の男が二人ゐた。守衛長が手をあげて止めたので、ドアの外へ立つてると、十分ばかりして、ユニフォームの二人が出て來た。一人はサイナミのキャプテンで、第二整版の植字工松岡、一人はツバサのキャプテンで平臺室の轟といふ男だ——。

「お早うございます。」

印度虎は室ン中へ入ると、そこにゐる社長へ挨拶してから守衛長の方へ向いた。

「大變なことが出來たんだ。」

守衛長は、おごそかな顏付で云つた。

「この會社に、×××がゐるンだ！」

「ハ……」
「僕たちを、昨夜なぐつた奴らだ……」
印度虎は、×××はまるで、狂犬みたいだと思つた。
「まア君等は、會社の柱石だから、打割つて云ふが……」
守衛長は、社長のやうなことを云つた。
「これを見たまへ、昨夜、警察で知らして貰つたんだがネ。」
テーブルの上におかれた小さいノートに鉛筆でかゝれた文字が、二段にならんでゐる――。
一番先頭に、狭山や田中などの名があつた。
印度虎は、昨夜の狭山のフン捕つた一件を憶ひ出しながら、目を通してゆくと、終りの方に「影山喜三郎」といふ名前をめつけて、びつくりした。
「この男も、×××ですか？」
印度虎の指先がふるへてゐた。守衛長はすぐ氣がついた。
「その男は、君の乾分かね？」
「イヤ、俺の嬶の弟です。」
守衛長は、いさゝか拙いといつた顔をしたが、
「ま、そのへんは大して赤くもあるまいから、何とか君の顔をたてる方法もあらうぢやないか。」
振り返ると、社長がニコ〲してゐた。しかし、印度虎はすぐ云つた。
「イヤ、×××なら仕方ありません、たとひ弟でも、俺ア命乞ひなンかしません。」
キツパリ――と、印度虎は嘘ツ氣なく云つた。
印度虎の頭も、他の大衆と同じに、×××は、泥棒、放火より悪いもンだと、新聞やなンかで教へられてゐた。
惡人であるならば、たとひ親の首へでも、繩をかけねばならぬ。印度虎はこの氣持で、決心してゐた。
「まア、それはそれとして……」
守衛長は話をすゝめた。
「それで、今日は警察から來て、工場から×××を引ツぱるかも知れないんだがね、そンとき……」
かんじんのとこだといふ風に、守衛長も、社長の心持顔を寄せた。
「はたの從業員がさわぐとこまる。それで、君は、君の方の「相撲團」の有力者を通じて、輕擧妄動せんやう、注意し、警戒してくれたまへ――」
「ハ……」
「妄動すれば、いやでも處分しなければならんし、スポーツ精神の美風をほこる本工場の趣旨に對しても甚だ遺憾だし……」
「わかりました。」
用件はそれだけであつた。ドアの外へ出ると、おつぎの、釣遊會幹事である製本工の、「のんべ熊」が入れ代りに、はひつていつた――。

7

午前十時ごろ、××署から來た、私服と正服が二十人あまり……工場の裏口から、事務所の守衛長室へ入つていつた。
そして、すぐ三人一組の私服が事務所の給仕に案内されて、三階の第二製版工場、文選場へあがつていつた。
ケエスの蔭で、他の從業員と一緒に田中は仕事してゐた。今朝、眞夜半に狭山がヤラれたことも、まだ知らなかつた。
「君、田中君かね。」
肥つた眼の小さい私服が、ニヤリとしながら近づいた。聲にふりかへつた田中の顔が、瞬間ハツとしたらしく青ざめた。
「抵抗するかッ。」
ひよろ高い口ヒゲのある私服が、背後から、田中の腕を捻ぢあげた。

ケエスがゆらぎ、文選箱がはげしい音をたててひつくりかへつた。

「歩け！」

田中の背後にまはされた腕首に縄がかゝつてゐる――。

他の従業員達、仲間はあッけにとられて見てゐた。ボンヤリ――と、泥棒か放火かが捕まるのを見てるやうに――、階段を、ひつぱられて降りてゆく同僚の後姿を、あッけにとられて、或はヒドク怖々と、或は物めづらしさうに――彼等は見送つてゐたのだ。

…………………

輪転機室からも、一人持つてゆかれた。第三整版の出ッ歯の男も持つてゆかれた。

作業現場から、或は、一度、事務所の守衛長室へ呼び出して、解雇を云ひ渡し、帰つてゆくところをそのまゝ警察へ――。

最初の日が四人、次の日が三人――毎日つゞいた。ちびり〳〵と、ひつこぬかれて、工場の裏口から、こつそりと連れ出された。そして再び工場には帰つて来なかつた。

みな知らぬか、でなければ黙つてゐた。

まだ検挙され残りのS労働組合員達は、何かしなければならぬと焦つた。窒息させられるやうな状態を何とかしなければと踠いた。

しかし駄目だつた。手も足も出なかつた。周囲は皆他人であり、青年達は依然スポーツに夢中であつた。

さしのべてくれる手がなかつた。かくしてくれる壁がなかつた。枝や葉ッパがなかつた。××のための運動者に、××は××だつたのだ。

何故か？

丁度それは、敵に追はれた落人が、草原をはしつてるやうなものだつた。落人が逃げ込んで来ると、草は左右へさつと飛び開いた。敵の銃先は、間違ひなく覘ひがつけられたのだ――。

8

×××狩りが毎日つゞいた。事務所へ何気なく呼出されて、こつそり工場裏から、警察へ持つてゆかれた。

モウ、その数が四五十を超えた。××を持つてゐたとの××で、或は「戦旗」の読者だと云ふ××で――××にならない××で――モウ十日あまりもつゞいた。

喜イ公は、まだ職場に残つてゐた。

職場で働きながら、平常無口な男が、よけい無口になつてゐた。狭山の家への「工場委員会」に集つてゐたうちでは、他に誰一人残つてゐなかつた。何で自分だけが残されてるのかわからなかつた。事によると保證人の印度虎のお蔭で、馘首にならないのかも知れなかつた。「よけいな事をする」と思つた。同じ職場で顔を合しても、どつちも口を利かなかつた。

従業員たちは皆黙つて働いてゐた。蔭でブツブツ話し合ふ世帯持もあつたが、面となると、そんなどこでなかつた。若い者は相変らず野球や、相撲に熱中してゐた。

「×××と××はなぜ××だらう？」

喜イ公は毎日そればかり考へた。事件以来野球も止して考へてゐた。――会社は×××狩りの名にかくれて、大量馘首をやつてるのだ――。

「喜イ、一寸来い！」

お正午の時間に、ボンヤリ、空地の方を見て立つてると、背後で印度虎が呼んだ。黙つて食堂へついてゆくと、印度虎は、人気の少ないとこへいつて腰を下ろした。

向ひあつて腰かけた、長い飯台机の上に、飯ツブや醤油のシミがあつた。

二人とも頑固に黙つてゐた。

とう〳〵印度虎が口を切つた。

「おめえ、×××か？」
喜イ公は、じろりと相手を上眼に見たが、そのまゝ視線を外した。
「オイ。」
節くれた印度虎の腕が、強情な喜イ公の額を、押し向けた。
「いんや。」
喜イ公は、少しばかり首を振つた。
「だつて、おめえの名が、ちやンと警察の帳面にのつかつてるぞ。」
喜イ公は、また默つてしまつた。
「何かの間違ひかも知れねえが……」
印度虎の方が我を折つた。
「おめえ、これからつまらねえ眞似しねえだらうなア、え？」
「……」
「どうだ？」
まだ默つてゐる——。
「實は、俺の首を一緒にかけて、おめえの首をつないで貰つたンだ。」
すると、醤油のシミと、飯ツブから額をあげた喜イ公が云つた。
「止してくれ……」
「ナニ？」

印度虎はおどろいた。強情な奴だことは、こいつの姉である女房の性質からでもわかるが——その強情が印度虎の好きなところでもあつたが——これは大それた、×××に肩を持ちやがる——。
「てめえ、利いた風なことを……」
印度虎はクワッとして、喜イ公の首根つこをつかんだ。
「も一度云つてみろ！」
抵抗はしないが、痛みにヒンまげた脣のあたりに、飽迄つつぱつたものがある。
「義兄貴……」
と嗄れた聲で、喜イ公が云つた。印度虎は手をゆるめなかつた。
「おめえ、おめえが、會社に騙されてんだ。」
おどろいて印度虎は手はゆるめたが、
「バカな、俺が……」
二人とも中腰だつた。
「さうだよ、會社は×××の××くつつけて、人減らしをやつてンだよ。」
「でたらめを云ふなッ。」
「でたらめぢやないよ、だつて會社ぢや何のかのと理窟をつけて、モウ五十人あまり馘首にしたぢやねえか。」

「五十？」
「でたらめなら、會社へきいてみろ！」
印度虎は言句につまつた。喜イ公の言ふ五十が眞實とすれば、たしかに彼は會社にだまされたのだ！　だつて、警察の帳面にあつた名前は、ちやンと見た眼で二十人足らずだつたのだ——。
印度虎は光つた眼を、喜イ公の額から外すと、いそぎ足に食堂を出て行つた。

9

短氣な印度虎は、その足で、ツカ〳〵と事務所の守衛長室に入つていつた。
「おい加瀬さん。」
傍に見馴れない刑事らしい男や、專務などゐたが、印度虎は所を嫌はなかつた。
「いつたい、會社は何人馘首にするンだね？」
おどろいた室ぢうの顔が、この馬鹿々々しい質問に振り向いた。守衛長は、「場所柄でないよ」と云ふことを眼つきで知らせたが、印度虎はかまはず訊ねた。
「××××をくつつけて、もう五十人も馘首にしたつて云ふぢやないか。」
刑事達の眼が、一度に鋭く、印度虎にあつま

つた。慌てた守衛長が立ち上つた。

「まア、君、外方へ出たまへ。」

室外へ連れ出されると、印度虎はぢつと守衛長を見た。

「君ア、それをきいて何にするんだね？」

守衛長は吸ひかけの煙草を口に持つてゆきながら、ずるい眼を光らせた。

印度虎は、じれつたさうに、

「いま、その…俺の云つたことはほんとかね、それは…」

「ま、譃ぢやないがね。」

守衛長は、印度虎の顔を見い〳〵云つた。

「え？」

印度虎は、足許がぐらついたやうだつた。

「君達には會社の事情も諒解して貰はんければ、ね、いづれ一段落したら、詳しく社長からも話があるだらうが。」

「……」

默つてうつむいてゐる印度虎の肩をかるくたたきながら守衛長はおだてた。

「それまでは、君達にしつかりしてもらはなくては困るわけなンだ。」

子供をダマスやうに守衛長は會社の腹を打明けた。

機械を減らさずに人間を減らさねばならない事、生産單價を引下げねば大會社の發展が不可能な事——守衛長は印度虎の顔色を見い〳〵喋つた。しかし、印度虎は話はロク〳〵耳に入らなかつた。そして、ぼんやり職場へかへつてきたが、それきり石のやうに默りこくつて考へ込んでしまつた。

「畜生！　だまされた！」

10

「影山君。」

三番長屋の喜イ公の家へ、どこを逃げ廻つてゐたのか、ヒョックリ、村越がやつてきた。

暗い外方を見廻してから、コツソリ、上へあがると、低い聲で喜イ公に云つた。

「君が、まだ職場に殘つてるつて情報をきいたもンだから…」

「……」

「どんな風だね、工場は？」

村越は、例の黒眼鏡をはづして、眼をパチパチしながら、喜イ公の顔を見た。相手はまだ默つてゐる。

「ワイてるだらう、あれだけ××者が出たんだから…」

喜イ公は、俯目に考へ込んでゐたが、そのとき頭を振つた。

「駄目だ！」

村越はおどろいた。

「な、何故？」

そンな筈はない。賃銀は下る一方、馘首はやる。それで從業員が默つてる譯はない。——畜生、この男は×××がついたのか——

「可笑しいな。」

村越は相手をチッと見たが——しかし、丸つこい顔の、ヒドク頑固さうななかに、賢い眼をもつた若者は、別にビク〳〵してる樣子でもなかつた。

村越や、狭山は、この青年に望みをかけてゐた。まだ組合に首を突込ンで日が淺い故か、ひつこぬかれ殘りのこの若者に、組合としては、「工場委員會」再建の任務を背負はせる方針であつた。

「いつたい…」

ポツリと、喜イ公が云ひ出した。

「組合や、×××は、何故、皆とあゝ××だらう？」

「え？」

村越は眼をクリ〳〵さした。喜イ公は、自分

自身にも質問ねてゐるやうに……、

「だつて、工場の皆は、××者が出ても、知らん顔してゐる。なにか泥棒でもつかまつたやうな面付でゐる――」

「それやおめえ。」

何を云ふんだといふ風に、村越は笑ひを含んで云つた。

「×××××からさ、しかし、勇敢な若い青年分子はさうでねえ筈だ。」

しかし、相手はうごかなかつた。

「わからん！」

と云つて首を振つた。

「ぢや、君はどう思ふ？」

村越は少し、きつく、たゝみかけた。すると案外に、この無口な勞働者は、石を積みかさねるやうに、ポツリ、ポツリ、ポツリ云ひ出した。

「青年だつて×××××××、たゞ、マウロク親爺どもよりや、他人の『不幸』にも、自分の『苦しみ』にも、馴れつこになつてねえだけだ！」

喜イ公は顔をあげた。

「だいいち、おめえさん達の考へるやうに、勞働者は、理窟だけぢやうごかねえンだ。ビラでも讀んだら、クヮッと逆上せるだらうなンて考へてるンなら、それや見當ちがひぢやねえか。」

「……」

村越の顔を、狼狽に似たものが、サッと通り過ぎた。

「どういたしまして、俺らの『生活』にや、何千年の長い傳統と、十重二十重の重石がぶら下つてる、ビラ位で、ホイと逆上せるほどお手輕に出來てねえ。」

そのつもりではないが、すぐ口が惡くなる。村越は、それでも怒りはしなかつた。熱心に聽いてゐた。

「第一おめえさん達にや、飽きるほど本を讀んで、×××××××××××××、わかつてるだらうけども、かんじんの皆は、あつさり云つて、おさきまつくらなンだ。少々のことぢや動かれねえ、馘首だと知つても、足場がなきア眼をつぶつて押し流されるンだ。」

「一、一寸……」

そこンとこで、村越が口を挾まうとしたが、喜イ公は手をあげておさへた。

「待つてくれ、考へてゐただけを、一通り云はしてくれ。」

村越はうなづいて默つた。

「それで、その『足場』といふのが、皆の『生活』をほかにして出來つこねえ。皆はいくら給料が下り、食ふに困つてるからつて、朝から晩迄、憤つてばかりゐたり、泣ッ面ばかりしてる譯でねえ、死にかけてる病人だつて小便するやうに、皆も安直なことなら、何だつてやつてる、相撲でも、野球でも、淺草のレビュウでも、菊池寛の小説でも、活動寫眞でも、將棊でも、釣でも――たゞ惡いと云はれただけぢや無理だ、だつて、それや皆の生活だもの。」

「……」

「惡いといふからにや、いゝと云ふものを、代りのものを與へてくれなきあ無理だ、いままでの『工場委員會』がさうだつた。野球をやるやつには、『ブルジョアスポーツ』と非難した。少し頑固な奴には、『反動』の折紙をつけた。そして、『優良分子』ばかり探した。冗談ぢやねえ、『優良分子』とはどンな天才かしらねえが、そンな奴は、えてして、大衆とは縁の遠い野郎なンだ！」

村越は、ぢつと一つ所に眼を据ゑてゐた。

「かう云つたからつて、俺あ、これつぽつちでも、狭山君達××者を、惡く云つてる譯ぢやねえ、それは飽迄××してゐる。誤解しないでくれ。」

「いや、わかつた。」

しばらくしてから、村越は立ち上つた。

「俺一存ぢや不可ねえ、一應歸つて組合へ相談してまた明晩來る。」

それきりで、村越は、かへつてしまつた。そして翌々晩、また××××××やつて來た――。

「君、いゝことを云つてくれた！」

村越は率直に云つた。

「で、組合としては、『工場委員會』の方針をこンな風に樹てて來たのだ。」

村越は低い聲で話し出した。

> 一、K印工場、一切のスポーツ、或は、工場内にある同人雜誌見たいなものまで集團の一切を含めて「對策委員會」を持つこと。
> 二、組合本部は「K印對策委員會」をおき、同工場の事情に應じて、指令を出すこと。

「しめ！　さうでなくちやいけねえ。」

喜イ公は、決心を仄見せながら、村越に云つた。

「明日の晩から、各スポーツ團の、幹部達を訪問するから、おめえも一緒に來てくれ！」

11

「ちよつと、あンた。」

女房は、大の字にひつくりかへつてゐる印度虎をゆすぶつた。

「あンた、隣りのお内儀さんが來てるわよ。」

入口に、隣りのお内儀が、暗い顔して立つてゐた。このお内儀の亭主は、同じ工場のルラーに勤めてゐたのだが、病氣中に解雇になつてしまつたのだ。

「うるせえ。」

女房の手をハネのけて、印度虎は大きな圖體を、ゴロリと向うむきになつてしまつた。

「お内儀さん心配して相談に來たンぢやないか、おまへでわかるンなら、相談になつてあげなよ。」

この二番長屋で、印度虎は顔利きであつた。こまかい出來事なら、今迄、たいてい相談に乘つてきた。

「うるせえツてのに、俺にもわからねえンだ、ばかツ。」

酒くさい息で、ドナリつけると、またゴロリと寢返りうつた。

隣りのお内儀は、すご〳〵と歸つていつた。

どうしたのか、いつになく今日は工場を休ンで、朝ツぱらから、酒に醉つぱらつてゐる亭主の樣子が、女房には合點がゆかなかつた。

この長屋でも馘首になつたものが三人ある。そして、會社は、機械を增して人間を減らすと云ふ――。

印度虎にはわからなかつた。いつもならわからないまゝですごす。しかし、今の場合喜イ公の言葉が、つゝかゝつて來る。畜生ツ、小づら憎い守衞長の顔がちらつく――。

「だまされた！」

一克者が石にぶつつかつたのだ。印度虎は「フー」と吐息しては、寢返りをうつ――隣りのお内儀にだつて、いゝ加減のゴマ化しの挨拶は云へねえ――。

今迄は、誰か馘首になつて相談に來れば、仲間から餞別金を集めるとか、一寸、工長を通じて、嘆願してみるとか位ですました。それを當然と思つてやつて來た。――しかし、それは會社にも理があると思つたからだ。今度はそれが無かつた。「無いよ。」と、喜イ公の頑固なツラが頑張つてゐた。

その證據には、守衞長が、俺をおだててだました！

印度虎は、また「フー」と吐息する。

「いつたい何だね。」

女房は、赤ン坊をゆすりあげて、夕飯をこさ

へながら心配してゐる。
「喧嘩犬みたいに、フー〳〵ばかり云つてさ。」
「利いた風なことを吐かすな、阿女なンか默つてすつこんでろ。」
印度虎は、昨夜工場から歸つて來てから、怒つてばかりゐた。
「うるせえ、酒でも買つて來い。」
女房も、とう〳〵業を煮やした。
「飲みたけれや、トットと、自分で買つて來やがれ。」
「ナニを？」
しかし、印度虎は立ち上りはしなかつた。それよりか「考へ」の方が、身體を重くしてゐた。
「こんばんは……」
戸外で聲がした。誰も返事しなかつた。
喜イ公と、すつかり勞働者みたいな恰好になつた村越が入つて來た。
「病氣かね？」
喜イ公の顏を見ると、印度虎は、ムクリと起きあがつた。
「今日も、四五人馘首になつたよ。」
ポツリと喜イ公が云つた。印度虎は自分が責められてるやうに外ッぽむいた。
「それで、皆相變らず默つてるんだ。」
「……」
「今日、會社の貼出しあつてね。」
喜イ公は、一人で喋つた。
「柔道大會が、明後日の晩、ツバサとサヽナミの試合が、その翌日の日曜だつてさ――そして、今年は『社長杯』に金一封がつくと云ふンで、皆は馘首の話より、そつちに夢中なんだ……」
「……」
印度虎は、腕拱みしたまゝ默つてゐる。
「ねえ。」
喜イ公が、少し膝を寄せて云つた。
「義兄貴だつて、俺らだつて、野球だとか、相撲だとかで、會社にダシにつかはれてンだよ。」
印度虎が顏をあげた。
「それで、こんどは反對に、俺達の相撲や野球にしようぢやねえか。」
「俺たちの？」
「ん、勞働者のスポーツだ。會社のぢやねえ、俺らが、俺らのためにやる……」
ぢつと喜イ公は、印度虎の顏を見た。印度虎の顏を、瞬間、ピク〳〵うごいて、錯雜したものが通りすぎた。
「あの……」
村越が傍から、簡單すぎる喜イ公の言葉を足さうとした、喜イ公が眼で止めた。――大丈夫だ、この男は馬鹿ぢやねえ――。
印度虎は默つてうつむいたきりである。女房の背で、赤ン坊が泣きわめくのだけで、三人とも、息ぐるしくだまつてゐた。
喜イ公が、頃合をはかつて、とび〳〵のことを云つた。
「S勞働組合のことだつて、×××のことだつて、よく考へてくれれやわかるンだ。」
急所を、ドキッとつかれて、印度虎のワニ口が、みる〳〵歪んだ。そしてグイと顏をあげると、だしぬけに怒鳴つた。
「けえれ！」
「あ、けえる！」
村越はびつくりして喜イ公の顏を見た。喜イ公は落付いてゐた。
別に惡い顏もせずに、喜イ公がさきに立ち上つた。
「うるせえ、早くけえれ！」
云ふなり印度虎は、またごろりとひつくりかへつた。
「矢張り、あいつあ××だよ。」
外方へ出ると、村越がさゝやいた。
しかし、喜イ公は確信をもつてゐた。

「あれでいゝんだよ、あいつあ、今、たゝきつけられためゝずみてえに苦しんでやがんンだ。」

労働者の氣持は、労働者にはよくわかる——。

「大丈夫、あいつあ××な男ぢやねえから——まあ見てゐろ、きつと前方へ出る！」

12

翌々晩、長屋部落の眞ン中にある、平屋建のKクラブは、内も外も、人だかりでいつぱいだつた。

喜イ公と、村越は、裏口から、鈴生りになつてゐる窓の上の人々を押しわけて内部に入つていつた。

内部は人いきれでムン／＼してゐた。そしていやに靜肅だつた。頭と頭の隙間からはげしい叫びと一緒に、柔道衣の選手達の姿がチラ／＼見えた。

正面に、銀製の大きな「社長杯」が光つてゐて、それを抱くやうにして、專務の禿頭があり、左右に、各課工長なぞ事務所の連中がならんでゐた。

試合はモウ殆んど終りに近づいてゐた。事務所の特等席の背後に、いつも豪い政治家や、坊さんや、社會政策家が來て説教するときに用ふ黒板に、紅軍と白軍の成績が貼出されてあつた。そして勝越してゐた紅軍は、白軍の大將、守衛長の柔道二段に出られて、モウ最後の、紅軍の大將「印度虎」一人をあますところまで來てゐた。

喜イ公も、村越も、グリ／＼、頭で、人の背中を押しのけながら前方へ出た——。

喜イ公は、印度虎を眼で探した。紅軍選手席の背後の方へ、石のやうに無表情な印度虎が坐つてゐた。

「何か、ありさうだね。」

印度虎の眼附を見て、村越がさゝやいた。

「わからん。」

喜イ公は、首を振つたが、心では何かを期待してゐた。

「あいつはいつも口で云ふよりやる方がさきなンだから——」

場内は緊張し、靜肅だつた。選手達は精根をしぼつて、しめられながら、相手を絞めてゐる。一呼吸を一秒ながくつゞければ、「死」から「生」へ轉ずるのだ。相手を斃せるのだ。人々は呼吸をのみ、頬を硬ばらしてゐる。

「一本。」

しかし、袴の股立ちをとつた審判の聲がきこえると、緊張は急に、陽氣なブルジョアスポーツの精神にかへる、扇子や、ハンカチがうごき出し、ゆるぎなき、盤石の、ブルジョアスポーツの「平和」が、觀衆を、そして選手を「××主義」への威服へと驅りたてる——。

「館山虎太郎君！」

審判が印度虎の名を讀んだ。扇子やハンカチのうごきがとまり、印度虎ビイキの觀衆が拍手した。一本勝負、紅軍と白軍の勝敗も、「社長杯」の獲得も、これによつて決せられるのだ。

「印度虎あ——」

「黒ちやん、たのむよウ——」

觀衆は從業員だけに、守衛長より仲間の印度虎に、感情的にも勝たせたかつた。しかし、相撲とちがつて、柔道では守衛長に勝味があつた。

印度虎が出て來た。ベルが鳴つた。大將同士がぐつと近づいて型通り目禮すると、ツと立ち上つた。

両軍の選手達も膝小僧をつッたてるやうに前こゞみになつた。喜イ公は、立ちあがつた瞬間の、印度虎の眼色を見た——たゞごとでねえ——。

バッと音がした。守衛長がキマつて印度虎の

手をハネたのだ。立つて組んでは、强力でかなはなかつた。放れて業を打つか、寝てしめるか―守衛長の作戰は、素早く、疊を蹴つて逃げる態度でもわかつた。

印度虎は踏み込んだ。―畜生ツ―松根つこのやうな腕がふるへてゐる―また踏み込む―。

印度虎に作戰なぞなかつた。勝敗もなかつた。燃える眼の色が捨身になつてゐた。「平和」なブルジョアスポーツではなかつた。守衛長の足がまた逃げた。うす〳〵相手の眼色に感じたのだ。氣魄におされながら逃げた、逃げながら、隙だけを覗つてゐた。

選手達も應援團も、觀衆も、みンなウナされてゐた。怖ろしい印度虎の氣魄が、いままでの試合とすつかり違つてゐた。

「お。」

短い叫びが、守衛長の口から出た。選手のたまりまで追ひつめられた守衛長が、瞬間に、印度虎の浮いた左腰をねらつて飛びこむと、素早く印度虎の左手をたぐつて、そのまゝ「卷込」にゆかうとしたのだ。ホンの瞬間、印度虎の體が仰向に外つた。岩のやうな腰がくづれかかつた。モロくも斜めになつた。審判が駈け寄つた。

「チッ、畜生！」

腰が落ちたら、深く入つた敵の左肩が、盤石になるのだ！

「チッ、チッ。」

印度虎は喰ひしばつた歯の根から、血泡を吐くやうな聲を絞つて、瞬間をさゝへた。

誰一人、呼吸してなかつた。

「印度虎ア――」

觀衆の中で、ひいきの女工達の泣聲がきこえる――。

が、何といふ腰のつよさだ。くづれて落ちなかつた。相手は焦つて、腕をもつと深くしぼらうとしたが、そのまゝパッと飛び退いた。印度虎の右手が、首にのびて來たからだ。

「うぬッ。」

飛び退かれても、今度は、左手が相手の上袖をつかんでゐる。逃げられ、引き摺られながら印度虎は執拗に離さない。審判が規定の時間で、ベルを鳴らさうとした。が、こんどは印度虎が、ウオッと叫んだ。

强引にたぐつた相手の片腕を、そのまゝ深く入つたハネ腰にひつかつぐと、たすきにかゝつた一本背負ひ！　相手の身體が疊に落ちたとき、印度虎の眞黑な毛ズネが、その首根つこをおさへてゐた。

「一本ッ。」

審判が怒鳴つたが、どうしたのか、下敷になつてゐる守衛長は、ひくくうめいた。斜めにしごかれた彼の腕が、印度虎の股のつけ根あたりで、×××！　×××××××××××××××――。

審判は顏色變へて慌てた。選手も、應援團も、正面にならんだ事務所の連中もさわぎ出した。

「××、いまのは！」

「たしかに××だ！」

白軍の選手達は、顏色を變へて、肩で息をしながら、凄い眼つきで突立つてゐる印度虎の方へ詰寄つて來た。それはスポーツの精神に、××××してゐる！

「バ、馬鹿野郎ッ。」

印度虎は嚙みつくやうに怒鳴りつけた。印度虎に怒鳴られると白軍の選手たちもアトしざりした。印度虎は傍で、審判に蘇生さして貰つてゐる守衛長を尻目にかけながら、荒い息づかひで云つた。

「俺アいまたしかに×××××××××。だがこいつや、ホラ向うにゐる(專務達の席を指し

て）あいつらに、俺らの仲間は、何十人、××××××××、てめたちにやわからねえか。」

「さうだ、間違ひねえ。」

喜イ公が馳け寄つて、印度虎を庇ひながら叫んだ。

「印度虎の云ふことは眞實だ、嘘だと思ふなら皆のまはりを氣をつけてみろ！」

しかし、觀衆はそれをしまひまで聽かれなかつた。そのとき背後から投げられた×××××××××落ちて來たからだ。

スポーツを俺等のものにしろ！

從業員諸君！　會社は「俺達青年を、ブルジョアスポーツで、×××にさせてゐる。「×××」欲しさのため、俺達は、俺達の背後で、××××××××××合はされとるかもわからないのだ！

俺達のやるスポーツは、あくまで、勞働者のスポーツでなくてはならぬ。

野球も、角力も、柔道も、釣遊會も、賢母の會も、映畫交友會も、將棊天狗會も、俺らのやる俺らのスポーツからは、一切合切、會社××をハネのけろ！

「×××」××××！

ブルスポーツ××を、プロスポーツ××に取換へろ！

俺達の「××スポーツ」を確立しろ！

沸きたつ觀衆の中を、呆氣にとられて、手の出しやうのない事務所の連中や、受取り手のない「社長杯」を尻目にかけて、紅軍の選手や、喜イ公達は、印度虎を中心にして、場外へ押し出した。

「印度虎、ばンざあい。」

「××××××、ばンざあい。」

13

明けて日曜日の朝早く、工場ウラ空地には、昨夜の柔道大會より、五六倍もの多數の從業員が押しかけて來た。

刷かれた白線を中心に、サヾナミ側は一壘側に、ツバサ側は、三壘側に、觀衆全部が應援團であつた。作業部門の聯絡によつて、彼等はその近い方へ味方し應援した。

しかし、觀衆の中には、昨夜の柔道大會を見に來てゐた從業員が多數あつた。それが昨夜の出來事の噂をひろめた。

選手が入場して來た。サヾナミ側も、ツバサ側も、兩方の選手が一緒になつて入場してきた。

「おそろしく、仲がえゝなア。」

「ふンとだ。」

觀衆達は總立ちになりながら拍手した。先頭に、サヾナミのキャプテン松岡や、人氣男のツバサ投手喜イ公や勇次郎なぞもまじつて、元氣よくまるでメーデーのデモみたいに入場して來た。

そして觀衆達は、も一度おどろいた。選手團のすぐ次に、相撲團、柔道團の選手達にかこまれて、一本の竹の先にひらめかせた寒冷紗の旗が、ひるがへりながら入つて來る。

「な、なンだ。」

「――印度虎、を、クビにするな！　ホウ!!」

しかも、その先頭に、當人の印度虎が、坊主ッくりの眞黑けな大きな圖體で歩いて來た。皆、譯がわかつたやうな、わからないやうな顏附で――しかし、とにかく、彼等の親愛なる印度虎へ喝采した。

昨夜の一件の噂が、また皆の間を野火のやうに擴がつた。

――印度虎を馘首にするな！

旗はひるがへりながら場内を一周する選手團にかこまれてめぐつた。

皆は少しづつ譯がわかつた。そして一樣に、ネット裏の、天幕張りの事務所席を見たが、事務所の誰もゐなかつた。この特等席には、近所

の長屋の女房や、アセモだらけのガキ共が、いつぱいになつて占領してゐる。

日よけもない、工場ウラ空地は、煉瓦の建物にかこまれて、太陽が直射してゐる。紅い洋傘や、黄色くなつたカンカン帽やが、左右にゆれながら、やがて、一壘側から應援歌が歌ひ出された。

アジアにほこる
御國の柱
文化のさきがけ
大(K)印工場

これは會社制定の應援歌だ。調子が早くなつて、女工達は傘を、男工達は帽子を振る――。

われらのK印
われらのサヾナミ
フレ！　フレ！　フレー

試合開始だ！　サヾナミの先攻!!

印度虎や村越と、ネットのうらで話してゐた喜イ公が、そンとき駈け出していつた。

昨夜以來、印度虎も喜イ公も、村越やそれに柔道の選手團も雜つて今朝方まで、各スポーツ團體の幹部のうちを訪問して一晩のうちに、K印の各競技團體は、一致して「印度虎の馘首を護る！」までに漕ぎつけたのだ。

會社は先手を打たれた。これには、逆宣傳が利かなかつた。ゴマ化しが出來なかつた。おまけに團體であり、青年分子であつた。燃えつかせるだけの火力があれば――そして燃えつけばカンタンに引つこぬく譯にもゆかなかつた。

各スポーツ團體は、從業員全體への影響力を持つてるのだ――そして、S勞働のこまかい配慮と、喜イ公や村越の努力と、各スポーツ團きつての勢力家、印度虎が五十幾名の相撲および柔道の選手をひきゐての踏ンばりに、燃えつかぬ譯はない！

印度虎は、サヾナミとツバサの兩方の委員と聯絡をとるために駈け廻り、村越は、小さい紙片を觀衆のうしろから配つてあるいた。

サヾナミ側は釣遊會幹事の「のんべ熊」が應援團長、ツバサ側は「印度虎」・・・。そして各選手が前列へ出て一緒に音頭をとつてゐる――。

球審が、白い球をツバサの第一投手喜イ公に渡した。

「よウ、喜イ公ッ。」

「たのむわよウ。」

ニコ〳〵しながら、ボックスに立つと喜イ公は、力を籠めた最初の一球をおくつた。

「ストライクワン！」

ドッと喊聲がツバサ側に上る。そして觀衆の中に、また一本の新らしい長旒が突立つた――。

――×××××萬歳!!

ばんざあい！　ワケなしに觀衆はそれに應じた。火は燃え擴がりつゝあつた。

そして、逆上してまだはつきりしない觀衆を、不調和な騷音がかきみだした。應援團長が音頭をとつて、前列の方が唄つてゐる文句は調子が違ふのだ!!

にくしみのるつぼに
赤くやくる

馬鹿に調子ツぱづれに、まち〳〵に、――しかし、印度虎は兩肌ぬぎで、大きな腕をふりまはしながら音頭をとつてゐる。皆はさつきくばられた小さい紙片をとり出した。

鐵のつるぎを
うちきたへよ

サヾナミ側でも唄つてゐる。歌聲は少しづつ、ひろがつていつた。そしてしだいに、「會社の歌」を揉み消した。

屈辱の歴史
この日閉づる

急に、皆は、ブルジョアスポーツの陽氣さか

ら轉落した。へゝ、へんテコな歌の調子が、しだいに己れの現實へ誘つた。バットのひゞきも、守備軍の態度も、一様に場内の空氣に支配されて來た。

「そウら、モ一丁ッ。」

印度虎が、大きな腕を振る……。

太陽の熱氣はしだいにつよく、若い男女工も、長屋の女房やガキ共までが、涙のやうに汗を流しながら唄つた。

　鐵のつるぎを
　うちきたへよ

皆の頭に×がうまれた――非現實的な夢の、ヒッさらはれた眼前に、巨大な×がたつてゐるのを見た。

――印度虎を馘首にするな!!

そして今度はまた、外野の眞ン中に、十四五人の馘首者、或は××××××××たちに護られて、大きな旗が押したてられた。

――大量馘首に反對せよ、××的S勞働組合に參加せよ!

支へてたつてゐる人々は、觀衆にとつてツイ昨日までの仲間だつた。觀衆は、いま改めて、馘首された犧牲者達を見た。そしてそれは先日、一人と一人で默つて見おくつたそのときとはすつかり違つてゐた。大衆は、いま自分達の足場を知り、×を知つた。

皆は、拍手が出來なかつた。喝采が出來なかつた。犧牲者達の顏を見て、ゴクリと唾を呑ンだ。眞夏の太陽より熱いものが腹の底で沸いた。

「ガンばつて、も一丁。」

印度虎が、また音頭をとる――。

　屈辱の歴史
　この日閉づる

火が點いた。イブリながら、モミ消されようとしながら、いま急所に燃えついた。會社が動員した、選りすぐつた精鋭に、集團に、そつくりそのまゝ底から火が點いた。

眞赤な太陽の下で、カゲロフと一緒に、音をたてながら、火となつて燃えついたのだ。

　最後の戰ひを、
　戰ひぬかん

(一九三〇・八・五)

能率委員會

一

「アララララッ……」
K印刷工場構内の、中間通路を、輪轉機室へ原紙を運搬するトロが、彈みをつけてすつ飛んで來た。タヽキのトロ路は辷りがよく、況して歸りの空トロである。
「アの阿魔ッちよ共を、仰向にひつくりかへしてやるかな……」
若い雜夫は、十間ばかり向うに、かたまつてゐる女工達を見ると、急に威勢が出た。
アラララッ……」
十人あまりの、若い女工達は、「ザッ選り」の仕事を抛つたらかして、いま繩飛びをやつてゐる……。
ヨッチョイ、ヨッチョイ、
三度目の夜道……
彼女達は、各自にゲラ（組版を入れる箱）をトロ道の傍に置きつ放したまゝ、すつかり夢中になつてゐるのだ……。だん／＼繩が急速に廻轉するにつれて、彼女達は息を彈ませながら、飛鳥のやうに跳ねあがる……。
「あラッ、あぶないッ。」
すぐ足許に、トロが突進して來た。背後向に繩のはしを廻してゐる女が氣が注いて、金切聲で叫びながら、眞中に抱き合つて押し團まつてゐる女達の、胴や、足や、赤い腰卷まで、繩にひつかけたまゝ、引摺つて逃げ出した。
「きやつ……」
逃げおくれた女の二三人が、トロのレールに躓いて、俯向けに轉んだ。
「まーあ、ひどいッ。」
トロは豫定のやうに、際どいところで急停車した。
「なんて……なんて……」
女達はびつくりしておき上りながら、言葉を塞らせてゐるのを、若い雜夫はすぐおつかぶせた。
「氣を付けろい、間抜めッ。」
と怒鳴つた——が眼では笑つてゐた。逆に劍突を喰つたので、彼女達は眞赤に怒つてしまつた。
「なんて、ひどい惡戯しやがるんだい、この赤ッ鼻……」
「赤ッ鼻。」と云はれることは、この若い雜夫にとつては痛手である。眞ッ先に進み出た、作業服の胸に赤い工場協議員のマークを付けた、銀杏返しの女は、その效目をよく知つてゐた。
「ほらッ、見とくれ、こんなに血が出てるぢやないかッ。」
跛ひき／＼起き上つた、羽織の上から前垂を締めた肥つちよが、摺り剝いた膝小僧を捲つて、雜夫の足許へ突き出した。
「この男は、いつもこんな惡戯するんだ。」
「さうよ。さうよ。」
「赤ッ鼻の田舍ッぺ。」
彼女達は、多勢を恃んで、雜夫をおつ取り捲いた。
「コン畜生ッ……」
繩のはしを持つてゐる眼玉の大きい娘が、ソッと背後へ廻ると、雜夫の頭を、繩で引ッぱたいた。
「オウッ痛え——」
雜夫は節くれた掌で、頭部を抑へながら大

袈裟に叫んだが、心の裡で、少し怒らせ過ぎたかナと考へて、ニヤ〳〵してゐた。

「あやまんなさいッ。」

彼女達は、勝ち誇つて、澤山の手で、雜夫の肩を小突いた。雜夫はそんとき思ひ出したやうに、頓狂な聲で怒鳴つた。

「退け、退け、お前らみたいに、作業時間中に遊んでるから、『能率委員會』なんて出來るんだ。退け、退け、退けッ。」

彼女達は、一せいに笑ひ出した。

「能率委員會……、アハハハハ。」

彼女達が笑つてゐる間に、隙を見出したトロは威勢よく走り去つた。そして、彼女達の笑ひが止まらぬうちに、そのうちの一人が慌てて工場協議員のマークを付けた女の腕を引つ張つた。

「ちよいと君ちやん、おやぢ(職長)が、二階から覗いてるわよ。」

成程、眞上の工場窓から、禿頭のおやぢが夕立を喰つたとうがんのやうに、膨れたつらで睨んでゐた。

「いゝ加減で始めんかッ。」

――はい、はい――彼女達はてれ氣味に、各自の仕事場に蹲んだ。

「おやぢめ、妾達を不良分子にして、毎日屋外追放で、こんな仕事ばかりやらせるんだもの、少し位サボるなア、あたりまへよ。ねえ君ちやん……」

膝小僧を擦り剝いた肥つちよが、銀杏返しの方に振り向いて云ふ。

「いやに、ベタ〳〵はたくぢやないの、ブッ……」

眼玉の大きい娘が、怒つて立上つた。一人がゲラごと煽るたんびに、塵埃がサッと頭髮へ舞ひ落ちる。

「でも君ちやん、ほんとに『能率委員會』が出來上つたら、こんな呑氣にやつてられないわね!?」

髮をちゞらした洋髮が、覗き込んで訊いたが、しかしお君は生返事である。彼女は彼女の戀人のことを考へてゐた。

「ぴく〳〵しなくつたつていゝわよ。いざとなれや……」

お君に隣り合つてゐる肥つちよが、それを引取つた。彼女は、女に似合ぬ太い聲である。

「いざとなれば、S勞働組合の全力を擧げて鬪ふんだ。レーニンは云つた……」

肥つちよは、益々の太い聲を出しながら、選り別けた活字を、「滅箱」にあける拍子に、ゲラをトンとはたいて、

「吾々のレーニンは云つた。――得るものは全世界にして、失ふものは鐵鎖のみ……」

「騷々しいわね、このひとは……」

傍の、耳の少し遠い娘が、肥つちよの脇腹をつゝいた。

晝でも夜で――も、牢屋は暗い――。

お君が、頭髮を振つて唄ひ出した。他の女達も、一緒に聲を合せた。

いつでも、鬼めが窓から覗く。

のぞかうと、まゝよ――お。

これは、彼女達が、おやぢに對する示威運動の一つである。

中間通路の兩側の、各科、工場の入口には、赤、黄、綠、色々のビラ、傳單が、何十枚となく貼られてあつた。「單一無產政黨を支持せよ」「日刊無新輪轉機購入基金募集」等々。左側の第一から第四までの平臺印刷室、同じく右側の第一から第四までの整版室の各入口が、物々しい光景を描き出してゐた。

そして突き當りの、輪轉機印刷室のいかつい煉瓦建物の入口に、特に大きく「資本の攻勢に備へよ」と書いたのが貼られてある。まさしくこ

れは特異な光景であつた。

工場の家根にある窓から、午後の秋陽が流れ込んでゐて、高速度の輪轉機の廻轉と共に塵埃が、煙のやうに舞ひ上つてゐた。そしてその轟音の合間を縫つて、××歌が晴れ〴〵しくひゞいて來る。

告示

來る×月××日、鑄造科第一工場に於て「能率委員會」を開催する。各科工場協議員は、同日作業終了後、同工場に參集せられたし。

庶務課

この告示の貼り出されてある輪轉機印刷室の揭示板の下には、七八人の男工達が、ゴロ〳〵してゐた。彼等は交替時間までまだ間があつた。

「われ〳〵は……」

黑、赤などのインクで汚れたスポーツシャツを着た、色の黑い若者が、卷取紙の上に跳び上つて、大きく手を振りながら、怒鳴り始めた。

この虎公と云はれる男は、いま演說の稽古をするところだ。

しかし、他の男工達は、紙の上に寢そべつたり、腰掛けたりしたまゝ、可哀想に振向いても吳れない。

「われ〳〵は……」

彼は、工場協議員であるところから、「能率委員會」では、一席喋らなければならないのだ。彼は昨夜、組合の能率委員會對策協議會で、執行委員長の永井の演說を聞いて來たのである。

「われ〳〵……がどうした？」外ッ方向いたまゝ彌次る奴がある。

「われ〳〵は工場管理權を要求するッ。」

彼は、彼等の親愛なる鬪士、眞柄眞吾張りで、右手を背から股のところまで振下ろして一氣に云つて了つたが、すぐ次の言葉が發見からない……。

「が……しかし……」

漢語がうまく出て來ない。製版課の協議員に比べると彼等は漢語を數多く知らないのだ。永井の云つた言葉の意味はよく判つてゐるのだが——現在の狀勢に於て、工場管理權を獲得したところで仕方がない。勞働階級はその經營の技術に於て比較にならない。吾々はそれに代へると、工場協議會若くは能率委員會に於て、會社の資本主義伸長性、營業上、若くは利益配當上の決定權を牽制しうるほどのものを握ることが肝要である——といふのだが……。

「が、われ〳〵が工場を……」

虎公は、右手を高くあげたまゝ眼を白黑にしてゐる。

「しつかりやれ、協議員。」

腰掛けてゐる年老つたのが煽てた。

「工場を貰つたところで、仕樣がない……」

思ひ切つて、眼を瞑つた勢ひで虎公はたゝきつけた。

「大きなことを云ふなッ。」

寢そべつてる奴が、足許で怒鳴つたので、虎公はすつかり怒つてしまつた。他の男工達が一度に失笑した。

「おい虎公……」

其處へ、「父つちやん子供」みたいな勞働服が入つて來た。惡戲ではしつこさうなこの小柄な男は、熟く見ると三十位かとも思へる。

「一寸降りて來い！」

虎公はまだ膨れてゐた。件の男は虎公の腕を引ッ張つた。彼は工場聯絡係である。

「耳を貸せよ……」

工場外へつれ出した聯絡係は、足を爪立たせて、虎公の耳に囁いた。終ると虎公が云つた。

「糺察隊つて何だ？」

「いまいつた右翼の奴をよ……」

聯絡係は、鼬のやうに四邊を見廻してから「例へば、遠山のやうな奴をよ…行動を監視するんだ…」

「遠山を!?」

「さうだ、彼奴は過去に於てこそ、吾々の輝ける指導者だつたんだ。が今は奴はすつかり立ち止まつてゐる…」

聯絡係が、セカ〳〵した調子で續けた。

「今は非常に危險な時機だぞ、いゝか、吾々はS勞働組合の締付工場だと思つて安心しちや不可ない。會社は財界不況に尻をつゝかれて狂犬みたいになつてゐるんだ。今度の『能率委員會』は二三の右翼のヘッポコ共をあて込んでうまくゆけば分裂を覘つてるんだ。其處で、この危險な時機に於て、遠山が反動となるかも知れないんだ。」

虎公は默つて聽いてゐた。

「で…だ。お前の方の科で、そんな分子が幾人あるか、五時間内に、本部永井宛に知らして呉れ、いゝか、『能率委員會』は必度決裂だぞ――」

「すると、爭議の準備か？」

「さうだ！ 會社側の能率委員會提案は、爭議を覺悟しての提案だぞ。」

××歌が、輪轉機の騒音に雜つて流れて來た。

虎公は、吼えるやうに答へた。

「ようし、來い!!」

二

晩秋の朝空に、始業の電氣ベルが、鳴りひゞいた。

二千の彼等は、元氣よく、南北の兩通用門から雪崩れ込んで來る。此の工場では、通用門のあたりの何處にも、守衞の姿は見られなかつた。

その代りに、組合のビラ撒きが、毎朝のやうに立つてゐて、赤や、黃やの紙片を撒き散らす。

「おい、おいッ、お前、このビラが眼に入らねえかッ。」

慌てて素通りしようとした奴が、呼び止められると、そゝくさと、背後から押して來る職工達に突當りながら取つて返す。

「濟まねえ――ホイ來た…」

ビラは「能率委員會」に對する組合の態度を聲明してゐた。

――吾々は、故意に生産能率を低め、會社側をして、窮鼠の如き逆襲に出でしめる事は、敢て避けなければならない。此の意味に於て、吾々は會社側の提案「能率委員會」を或程度迄支持することを聲明する。――

しかしだ。財界はいま大戰後の胃擴張から、急速に胃痙攣に進みつゝある。吾々は全身の注意を「能率委員會」提案の背後に向けなければならぬ――。

彼等はビラを、ポケットに押し込み、女達は羽織の袖にしまひ込んで、工場に流れ込んだ。

男達は皆、一寸垢拔した勞働服を着て居り、女達は幾らか顏色に、血色をとり戻してゐた。それこそ彼等が、大正十三年の大爭議以來、彼等が自身の力に依つて獲得した賜であつた。

彼等は自分の力を知つてゐた。左翼勞働組合の搖籃の中にまる二年を訓練され、印刷産業勞働者一萬を擁するS勞働組合員として、彼等は二年間の過去に於て、まさしく天下の常勝軍であつた。

「いざ、起て友よ…」

彼等は晴れ〴〵しく唄ひながら、工場入口のタイムレコードの前に殺倒する。巨大な電氣時計のライチングに、交互に出勤簿を差上げながら、唄聲が波のやうに擴がる。

「いざ、鬪はん…」

モーターのベルトが羽ばたきを始め、各科十二工場は、瞬間に騒音の中に溺れて了ふが、元氣な唄聲は、合間々々を縫うて流れるのだ。

それと反對に、この十二工場の中心に聳えてゐる三階建の事務所だけが、泥棒猫のやうに、ひそまり返り、息を凝らしてるかに見えた。

社長室に六人の洋服が居た。經理、營業、工務、庶務の各課長と、專務及び副社長。

大きな綠色の、社長用の安樂椅子の背後に「生産高指數表」が、佛壇のお繪像のやうに懸けられてあつた。

本年度上半期から、まるで、彈丸を喰つた鳩のやうに、生産價額の赤線は、急角度に落下してゐるのに反して、賃銀青線はスタートを切つた飛行機のやうに跳ね上つてゐた。

六人の洋服の中で、副社長の痩せぎすと、ずんぐりの赫ら顏に肥つてゐる專務とが、一等明瞭な對照をしてゐた。而も、それは外型ばかりでなく、現在の二人の立場も、それに酷似してゐた。

正午には、最後の方針を決めるべく、社長が來る筈である。有島副社長に與へられた最後の期間は、それだけである。「能率委員會」を、徹頭徹尾支持するところの、右翼の二三の分子、彼の勞資協調に贊成する分子を纏めて一勢力とすることが、彼の現在の立場を救ふ唯一の途であつた。

副社長と雖も、社長と僅かの姻戚關係だといふことを除けば、ホンの日傭人足にしか過ぎなかつた。この洋行歸りの坊つちやんの、頭の惡さと、氣弱さとは、過去二年間に於て、まだいくらか餘裕のあつた財界の、ちよつぴり殘された自由主義の背景で、獨り善がりの勞資協調主義者となつてしまつてゐた。

それで專務に云はすれば、S勞働組合が、當會社にこれまで巣喰つてしまひ、會社がかゝる悲境に陷ち込んでしまつたことも、一に、副社長の罪に在る、といふのである。

「どうです？　遠山を呼んで見ては？」

不眠症の青白い顏を、卓子の上に兩手で支へて考へ込んでゐる副社長へ、專務が云つた。體驗主義で今日まで成上つた專務は、如何なる場合も、「實權は社長一人に在る」ことを忘れなかつた。

「儲かるうちは、社長だつて、たとひ勞資協調が、共産主義だつて、文句は云ふまいが、サテ、今度ばかりは……」意地惡い眼で、副社長の横顏をチラと掠めながら、專務は心の裡で呟いてゐる。「お氣の毒だ……」

副社長は、卓子の上にある、今朝勞働組合で撒いたビラを拾ひ上げて弄つてゐたが、それにも望みは薄かつた。彼は思ひ切つたやうに呼鈴を押した。

「第二製版工場の遠山を、階下の應接室へ呼んで吳れ。」

顏を出した女給仕は、すぐ降りて行つた。副社長は、モウすつかり自信を失つてしまつた。勞資協調の地上の樂園は、彼の今日迄の必死の努力にも拘らず(彼はさう自惚れてゐる)足許から崩れ落ちようとする。深夜業廢止も最低賃銀の制定も、工場協議會の設置も……樂園の肥料のために、彼の權力の許すかぎりを盡してみた筈であつたが、而も樂園の花達は、逆に棘の葉を持ち、劒の芽を萌いたのだ……。

眼先が眞暗になつて了つた。彼はこれ以上現在の椅子に止まることは不可能である。今これを救つて吳れるものは、唯一に「能率委員會」の成立一つである。が、然し、組合が急速に右傾でもしなければ到底望みはなかつた。

「遠山が來ました。」

ハッとした調子で、副社長は顏をあげた。遠山！　彼は幾らか明るい氣がした。さうだ、こ

の男がウンとさへ云へば――この男と右翼分子を結びつけることが出來さへすれば必度能率委員會は成立する。さうだ！

副社長は立上ると階段を降りて行つた。――あの男は、最近、組合の仕事を離つてゐる。あの男は左翼の連中と面白くない間柄になつてゐるといふのだ。

應接室の固い椅子に、作業服のまゝの、二十六七の鬚ツ面の男が、冴えない顔色で腰を下ろしてゐた。

「遠山君……」

副社長は、無理に笑顔を作つて、すぐ傍へ腰掛けた。

「能率委員會は、旨く成立しさうかね？」

遠山の顴骨の出ツ張つた九州人らしい鬚ツ面は、他の職工達に比べると、ひどく生氣がなかつた。

「さア、解りませんね。」

この職工は、ぶつきら棒に答へた。嘗て十三年爭議の指導者として、從業員中に重きを爲したこの男を、元氣のいゝ若者達は、もう今日、すつかり立止まつてしまつた用のない指導者として、その屍の上を踏み越えて歩いてゐるのだ。

「何とか、君の力で、成立さして貰へないかね？」

聲の調子に哀願的な響きさへ持つて、副社長は覗き込んだ。若しこの男が叛旗を飜せば！

少くとも望みはあるのだ。

「僕が、君達の要求を支持して來たことは君は熟く知つてゐるだらう。ね、僕の今の立場は君も察しがつくだらう。ね。」

先刻の女給仕がお茶を持つて來た。遠山は疲れ切つてるやうにぐつたりしてゐた。

「モウ、僕の云ふことなんか、皆がきゝませんよ。」

遠山は何も彼もが億劫であつた。

「それに第一、能率委員會の内容だつて、從業員にはホンの輪郭だけしか知らしてないぢやありませんか？」

副社長もそれきり默つてしまつた。遠山自身に組合の例へば永井達が、どんな腹でゐるか譯らぬやうに、副社長にだつて、原案が破れたならば、どの邊まで懸引があるか、それは一切、社長と專務にだけしかなかつたのだ。

彼等は、お互が既に、勞資兩方の主流から遠ざけられてゐるのを自覺しなければならなかつた。遠山と副社長とは朽ち腐れた蛤殻よりも醜く、離れ別れた。

檢束、亂鬪、貧乏、投獄、逃亡、病氣……遠山は、モウ何も彼も厭であつた。小僧のときから習熟した勞働だけを、コツ〳〵やつて、靜かな日が送りたい……。神經衰弱の焦立つ頭部を抑へて、彼は工場の廊下へ出た。

すると、つい眼前に、四五人の若いやつが彼の方を向いて立つてゐた。

彼は氣が注かなかつた。スッと通り拔けようとする彼の左側から、突如、ドンと打つ衝かつた若い作業服があつた。

「ナニをしやがるんだ。富公!?」

遠山は振返つて、この小生意氣な若僧を怒鳴りつけた。流石に面と向つて怒鳴られると富公は、笑止な顔で逃ッ込んだ。

「おい、遠山君、今誰と會つて來た？」

見覺えのない、多分は組合書記かなんかの學生らしいのが、ズッと彼の傍へ寄つて來た。

「なにい？」

遠山は、むつとした調子で睨みつけた。

「誰と會つて來たら、何うしようつてんだ？ てめえは一たい何だ？」

騷ぎが大きくならうとした。兩側の工場から、何も知らない連中が、ドヤ〳〵出て來た。「ど

うしたんだ？」

「喧嘩は誰が相手だ？」

――しよくたになつちまつたので、尻も頭も譯らなくなつてしまつた。

「てめえら、永井の間諜だらう？　馬鹿野郎。」

彼は、ぶり／＼しながら、工場へ入つてしまつた。

三

「能率委員會」を直前に控へて、××へクーデターが始まつた。

資本の攻勢に迎合せんとする二十人足らずの右翼分子が、工場近くの蕎麥屋の二階で、糺察隊に襲撃されて、蹴散らされた。もうろうアナキズムの一派が、組合脱退を聲明すると同時に、糺察隊に覘はれて、翌日から工場に顏を現はさなかつた。

糺察隊は、疾風のやうに、工場の塀外、長屋の隅々まで、荒れ狂つた。K印刷工場の周圍は、夜になつても、殺氣を含んでゐた。

「お止しなさいつてば……」

女は必死になつて、猛りたつ男の腕に縋つて離さない。

「馬鹿め……」

男は、女を剝ぎ離さうとするのだが、案外女の力が强かつた。

「俺を殴らうつてえのか……生意氣だ。糺察隊だなんて、離せッ。」

男は、女の片手を突つ離したが、その拍子に下駄が辷つて脱げた。

「怒らないで、モウ少し話を聽きなさいよ。」

女は前へ廻つて、下駄を拾つてやりながら男をベンチに押し据ゑた。

「あんた、どうしてさう怒りつぽくなつたんでせう……」

女も、息を切らしながら、男の横に坐つて云つた。

四邊は暗かつた。此處は工場裏の空地にある小さい神社の境内であつた。女は、あの「どん底」を唄つてゐたお君であり、男はその戀人の遠山である。

「ぢや、俺が家を留守にしてゐたら、奴ら、俺が風を喰つて逃げたとでも云ふんだらう……馬鹿な。」

「さうすぐ感情的になるもんぢやないわよ。」

お君は、飽迄落付いてゐた。

「馬鹿ツ、これが感情的にならずにゐられるかツ、間拔め。」

女は慌てて、また立上らうとする男の腕を抑へて、

「大きな聲を出すのはお止しなさいよ。人が寄つて來るわよ。」

尤も、内容はともあれ、他から見れば、たしかに媾曳に違ひなかつた。

「バタ／＼しなくつたつて、事によると探し當てて此方へやつて來るかも知れないわ……」

少しばかりの立木の向うの灯明りを、お君は振り返つて云つた。

「仕方がない、そんときあ妾も、一緒に殴られるわ。」

「お前をか？」

男は皮肉な調子である。

「さうよ……」

女が眞面目に頷くのを、男は信じなかつた。

「冗談云ふない。お前なんか、あの小兒病どもにとつちや、信賴すべき同志ぢやねえか……笑はせやがらあ。」

遠山は、自棄氣味で當り散らした。そして自分の言葉に、沁々孤獨を感じてゐた。

「まあ、あんた!?」

お君は、さう云つたきりむつとしたらしくしばらく默つてしまつた。――此の人は、自分の戀

人にすら、信用が置けなくなつてるんだわ――。
「ねえ……」
一寸間をおいて、優しく云つた。
「あんた、疲れてんだわ！」
「俺がか？」
「さうよ、すつかり疲れてしまつて、怒りつぽくなつてんだわ。」
お君は落付いた調子で、男とは外つぽの方を向いて云つた。
「俺あ疲れてなんかゐねえ、奴らの仕打が癪に障るんだ！」
「あんたは、貧乏と、闘爭と、それに工場勞働とで、頭腦も身體も疲れ切つてんだわ。」
二人は、各自に違つたことを云つてゐた。しかし、昂奮してゐる男の心は、少しづつ落付いて來た。
「俺疲れてなんかゐねえ。だけど小兒病どもが、あんまり生意氣だ……考へても見ろよ、糺察隊なんかこさへあがつて、何でもねえのに、俺を跟け廻……馬鹿野郎め。」遠山は、ペッと唾を吐いた。
「それやさうよ。個人的に云へば、あんたなんか毆られたり跟け廻されたりすることはないわ。糺察隊の連中だつて、そんな義理ぢやないわ、だけど！」
「何うなんだ？」
「だけど、運動全體から云へば、さうはいかないんぢやない？（お君は、はら〳〵した調子で）早く云へば、現在のまゝでは遠山といふ存在が、問題になるんだわ……」
男は默つて聽いてゐた。
「あんたは、十三年爭議以來の指導者として工場生え拔きの鬪士として、Ｓ勞働組合の基礎を作つた功績は、誰もが、例へば永井さんだつて十分認めてるわ……、それだけに今日、役目をすつかり抛ち、理論的にも組合幹部と衝突したまゝ、依然と突立つてゐることは、今日のやうな場合、組合として非常に危險があるのも無理ないぢやない？」
「それで、俺を毆らうつてえのか？」
「さうムキにならないで頂戴。あんたさつきお前をか？つて皮肉つたけど、大勢を決するには、そんな細かいこと云つてゐられないんぢやない？ 妾だつて今の場合あんたとかうしてれあ、毆られるわ、必度……」
「だつたら、さつさと、俺から離れつちまつたらいゝぢやねえか！」
「まあ……」
お君は、口惜しさうに、男の横顏を睨んだが、ぢつと堪へた。
「妾はね、信じてゐるわ。あんたが反動なんかなる人でないと……だけど。」
「だけど？」
「現在のあんたには、まだ勢力があり過ぎる……。あんたが右翼的な理論でも捏ちあげて、叛旗を飜したら、時機が時機だけに組合は半々位に引裂けるわ!!」
遠山は苦笑しながら呟いた。
「買ひ被るなよ。俺アもうそんな氣力はない。」
「さう、さうよ。あんたは疲れてるわ。あけすけに云つたら、あんたは休養が欲しい……。さうよ。誰が何てたつて妾にはよく判るわ。……しかし……」
お君は語尾を濁した。
「しかし、運動するものに休養はないつて云ふんだらう!? ハハハハ。」
遠山は力なく笑つた。
お君は、俯向いてしまつた。
しばらくしてから、遠山が欠伸するやうに呟いた。
「突進するか、でなきあ、亡びるかだなア……」
涼しすぎる風が、少し小高くなつてゐる境内

を通り抜けた。お君は、この男に何と云つていいか、言葉が發見からなかつた。

遠山が、フイと立上つて云つた。

「よし、永井に會はう!!」

「まあ、よかつた。」噪いだ聲で女は喜んだ――「感情を捨ててね……永井さんとだつて舊い親友だつたぢやないの――」

しかし、遠山は矢張り怒つた聲で、つゞいて身體を起さうとするお君にたゝきつけるやうに云つた。

「俺ア、一人で行く……」

四

組合本部の、玄關の障子を、遠山はプリ〳〵した調子で引き開けた。

取つつきの六疊に、ガヤ〳〵押し團まつて何か相談してゐた若い連中が、遠山の顏を見ると悸とした樣子で、一度に立上つた。

「永井は居るかッ。」

遠山は、何しに來た?と云つた顏付の、若い連中に云つた。

「二階だ。」

一人が不精々々に答へた。

遠山は、默つて二階へ、どん〳〵上つて行つた。廊下に沿つて二つ目が、幹部室であつた。

彼は荒々しく扉を叩いた。

「誰だ?」

「遠山だ。永井に會はせろ!」

「えつ、遠山?」

扉は開かれずに、二度目は永井の聲がした。

「……………」

扉が半分開いて、痩せぎすの、ひよろ高い男が首を出した。黑つぽい單衣を着たそれが永井であつた。

「話がある、顏を貸して呉れ!」

永井は、やはり默つて、靜かに遠山の顏色を讀んでゐたが、

「うん……」

と肯くと、室を出て來て、先に立つて隣りの室へ入つた。室内には謄寫版や紙片がいつぱい散らかつてゐた。

むつつりした調子で、二人共ひつちらかした紙片の上に向き會つた。

どつちからも、言葉が出なかつた。

彼等は半年來、睨み合つた立場に在つた。しかし、實に幾年振で、かう膝突合したことだらう。七八年もの親友が、而も今は或ものに隔てられてゐた。

變な空氣が續いた。

背後の障子が、ガタリと動いて誰か入つて來ようとした。

「入つちや不可ねえツ。」

永井が、顏をあげて怒鳴つた。神經質な青白い顏が、遠山より老けさせて見えた。重苦しい空氣の中へも、他人を入れさせまいとする、永井の氣持がいくらか沁みたが、遠山の頑な氣持は動かなかつた。

「糺察隊つて何だ?」

嗄れた聲が遠山の口から出た。しかし相手は默つてゐる。

「俺を毆らせる筈だつたのか?」

遠山の聲は十分に怒氣を含んでゐた。

「……………」

しかし、永井の青い顏は、默つたきり、動かない。

「貴樣は、年來の友を毆らせようつてえのか?」

遠山は、ジリ〳〵膝を寄せて行つた。そのとき永井は昂然として答へた。

「さうだ! 君が俺等の陣營の者でなくなる限り、俺達には敵だ!」

「何だと?」

遠山は、ぶる〳〵拳をさせながら、詰め寄

つた。

「ハッキリ云つておく、貴樣が右翼に陷沒する限り、俺の友ぢやねえんだ。」

永井が云ひ終らぬうちに、遠山の拳が、永井の顏面を掠めた。痙攣する永井の口邊に、絲のやうに鼻血が流れた。が、然し、遠山は拍子拔けして了つた。永井はそれでも靜かに動かなかつた。

そして、幾らか震へてゐる手付ではあるが傍の紙片を拾ひあげて、鼻血を拭いた。遠山は急に氣崩れがした。昂奮した呼吸づかひが、吾ながら慘めになつた。遠山はふいと立上らうとした。

「待て……」

そのとき、永井が呼び止めた。

「貴樣——まるで火取蟲見てえだな!!」

永井は、驚くほど落付いて云つた。青ざめた頰に笑ひさへ含んでゐた。

「お前は、いま沒落しようとして足掻いてゐるんだ。どうだ遠山!」

どきんと來た言葉が、急所を刺した。しかし遠山は、强情に突立つたきりである。

「貴樣は、嘗て俺達の輝ける指導者だつたんだ。呑んべで始末に終へなかつた俺なんかを、今日迄導いたなあ、いつたい誰だつたんだ……」

遠山にとつて、過去を憶ひ出すことは、億劫だつた。

「坐れ、坐れつてば……」

遠山は、無理に坐らせられた。

「おい、有島副社長は、今日の重役會議で辭職させられたんだぞ!」

「え?」

遠山は、驚いた。

「愈々、資本の攻擊が、その假面を剝いで、はつきり正體を現はしたんだ。これツぽつちの自由主義も、もう存在餘地がなくなつたんだ。來る、必度來るぞ!」

青ざめた永井の顏に、少しづつ血が潮して來た。

「貴樣は疲れて、まるで火取蟲見てえになつてゐる。しかし、今お前なんぞを休養さしとく餘裕がないんだ。引ツ張り出すか、でなきあ、たたきつぶすかだ。十二工場全體にさう云ふ奴らを手配せしたんだ。」

遠山は、しだいに顏を俯せた。

「さあ、握手しよう。明日の能率委員會のために、遠山……以前の元氣のよかつたお前になつてくれ。なあ兄貴……」

永井は、遠山の手を探つた。

「さあ、手を出してくれ、手を……」

遠山は、片手を委せながら、顏を反向けた。

「有難え!! さあこれでいゝ、お前と握手すれあ、ナアに怖いものはねえ……

眞正面に顏を合せれば、氣弱な淚がこぼれ出さうだつた。永井も顏を反向けたまゝ强い調子で云つた。

「なア、お互の屍を置くとこあ、職場でより他にねえ!!」

五

終業の鈴が鳴り熄むと、第一棟から第二棟へと、ベルトの音が、ヒタ〳〵と止まつて行つた。「總定時」の赤札が、各科工場に揭げられ、從業員達は元氣よく歸り支度を整へて、入口へ溢れて行つたが、鑄造科第一工場の前まで來ると、雪崩は氾濫して、幾つものコースを作り、やがて、その平家建の工場の周圍を、列を作つてめぐり始めた。

愈々、一時間後に、「能率委員會」が開かれるのだ。行列は次第に昂奮し、××歌が彼等の足音を消して了つた。「おい止めろ、此處を取り捲いちや不可ん。」守衛達が、遠くから怒鳴るが、

彼等は彼等の代表を、この會場へ送り込んでしまふまでは止めなかつた。

篩から振り出される胡麻粒のやうに、各科の工場協議員達は、行列の中から飛出して來て、狭い會場の椅子を、瞬く間に埋めていつた。

工場協議會に於ける、從業員側の代表者數は各科工長、事務所長を合せた會社側代表者數と同一であつた。四十八名の四十九名、そのうち一人が決議權を持たない議長一人。

遠山は早くから、最前列から二番目の椅子に頑張つてゐた。そして定刻七時カス〳〵に永井がグット後方へ、ひよろ高い姿を現はした。會場外の行列は止まり、唄聲も止まつて靜かになつた。その行列の中に關東地方評議會代表で來た皆見が、圓らな眼をキョロ〳〵して場内を覗き込んでゐた。

—おや？—遠山は、最右端に事務所用の椅子を並べた席に、副社長の他にもう二つの顔がなくなつてゐるのに驚いた。有島副社長系だつた經理課長と會計課長——。

永井もそれに氣付いてゐた。——哀れな自由主義の壊滅——。彼も、そして俺達も、その陣營内を、精算し、整備し終へたんだ　。

定刻のベルが鳴り終ると、スッと工場右端の扉が開いて、社長の肥つた顔が見えた。三四人の洋服に取巻かれて、物々しい容子でその巨軀を現はした。

ヨウ高島屋——工場協議員席の一隅で、床板を蹴りながら、笑聲が起つた。

「靜かに願ひます……」

中央の壇上に、ずんぐり脊の專務が、屹とした調子で口を切つた。その間に、各二枚の印刷物が、會場全員に配られた。會社側の腹を割つた提案及び、本年度上半期からの收支決算並びに、各種の一人當り平均生産統計表……。

「たゞ今から、能率委員會を開催します。」—嗄れたの太い專務の聲が、瞬間は、最後方から窓を越えた闇の中まで透つて聞えた。從業員側の代表者達は、印刷物に急いで眼を通しながら、第九條の能率委員會の構成員數に氣が注いて驚いた。各科工長次長二十四名、從業員代表二十四名、そして新に事務所側十二名とあつた。明かに會社側の絶對多數である。會社が曩に聲明した決議權割當とは全然別物ではないか……。

「いま諸君の手許に配付した統計表乃至は、收支決算表を御覽になつても判るが、會社はいまやまつたく窮境にある。大震火災當時に、非常に膨脹した財界は、いま急速に收縮しつゝあつて、當會社の受ける影響もまた莫大なものである。いま大正十二年下半期の決算表と十五年度上半期の決算表を比較にすれば、すぐ明瞭になることですが……」

專務は、力を籠めて數字を並べ始めた。——出鱈目を云ふない——從業員代表側は、お互の尻をつゝき合つて笑つた——自分の嚊や小學生の倅や、生れたての赤ん坊までが、大株主ぢやないか。世間體の數字なんざあ、どうだつてならアね——。

しかし兎に角、十二年度下半期は、純利益十七萬九千餘圓といふ數字があり、繰越金を差引いて一割の配當が出來てゐるに比較して、十五年度の上半期は前期繰越金を埋合せて、辛と三分の、しかも專務の言に依れば、名前だけの鮹配當だと云ふのだ。

「それでまた、半請負制度を復活して、吾々職工を軍鷄みたいに蹴合せようつて云ふんでせう。」

前列に五六人團まつてゐる女工代表席で、お君が、邊に聞えるやうに云つた。——馬鹿にしてるわよ——。

而も、夏枯れの時期を含む下半期に於て、それ

を埋合せる等は、到底不可能であります。――

營業課長や、工務課長達は責任を顧みて、社長の前に肅然としてゐるが、從業員代表席は依然ガッチリしてゐた。彼等は事實、昔に比べれば、幾らか仕事を怠けた。半請負制度（歩増し、或は職出しといふ）が撤廢されたればこそ、彼等はいくらか人間らしい顔色をとり戻せたのだ――。

　そして、會社が提案してゐる條件は、第一條、工場協議會の撤廢、第二條、半請負制度の復活。第三條、深夜業の復活、等、等、等。

「何だ、これは？　十三年爭議前に立戻ることになるぞ！」

「さうだ。挑戰だ!!」

　ギロリと鋭い眼を、絶えず從業員代表席に送つてゐる社長の顔へ、幾十の尖つた眼が、針のやうに刺さつた。

「その統計表に見らるゝ通り、生産價額はまるで彈丸を喰つた鳩みたいに、ガタ落ちしてしまつた。從業員諸君は、會社の作業能率よりは勞働組合の發展能率のために、努力してゐられたからだ……」

　聲を高くして、眞正面から專務は皮肉つて來た。中央の席に並んだ各科工長席から、拍手が起つた。同時に從業員代表席が、蜂の巣をつゝいたやうに騷ぎ出した。

「默れッ、禿ッ。」

「詭辯だッ。」

「戸外へ出ろい。」

　專務は立往生してしまつた。「議長ッ。」「議長ッ。」從業員達の例の奥の手が出た。完全に專務は口を封じられてしまつた。

　坊主頭の、鈍栗みたいな男が立上つた。第一印刷室の近藤といふ協議員である。

――專務は、會社の最近の不振を、一から十まで、從業員にその責任を押しつけてゐるが、印刷、整版の各單價は、十二年當時も今も同じか？」

　見事に、專務は受身に立たされた。

「いや、その當時からは、約三割位低落してゐる。」

　鈍栗坊主はすぐ追掛けた。

「では、會社の事業不振は、決して吾々の作業のせゐではないぢやないか？」

「しかし、諸君の給料は少しも下りません。早く云へば、諸君の能率を、諸君の給料とバランスがとれるまで引上げるか、でなければ給料を引下げるかです……」

　從業員代表達は眼を瞠つた。――この野郎、突けば突くほど怪しげな事を云ふ――。

「俺達の給料を下げる？　でも、生活日用品の價格は少しも下らないぢやないか？」

　近藤は眞赤になつて怒鳴つた。

「それは、當會社の責任ではありません――」

　專務は、得意になつて突つ放した。まさしくこれは名答辯であつた――！。しかし、今度は他の連中が承知しなかつた。

「馬鹿野郎ッ。」

　近藤がまだ突立つて怒鳴つてるのに、背後の方から幾つもの聲が飛び出した。「議長ッ。」

「議長ッ……」

「工場協議會は、何故廢止しなければならないのだ？」

　今度は、遠山が突立つて云つた。專務は坐つたまゝ答へようとするのを、彼は抑へた。

「俺達は、譃吐きの專務は信用しない。幸ひ其處に社長がゐらるゝから、直接に聞かしてもらひたい……」

「さうだ、社長に喋らせろ！」

「社長、どういふわけだ！」

　眞暗になつた窓外でも聲がした。從業員達はまだ會場のまはりを、追拂はれながら去らずにゐたのだ。

「それはね、遠山君！」

重々しく立上つた社長は、演壇の下へ歩いて来て、仇同士のやうにヂッと遠山の顔を睨んで云つた。

「能率委員會とダブルからだ……」

さう云つて縞ズボンの折目を見せながら、社長は歩み去らうとした。

「ぢや、能率委員會の決議權は、何故工場協議會と同様にしないのです？」

しかし、社長の態度は、平常と違つてすつかり假面を脱いでゐた。歩みを止めて、首だけを捻向けながら、強ひて落付いてはゐるが、昂奮した聲で、全然他のことを云つた。

「此の會社は、君達のものぢやない。從つて何時迄も、S勞働組合の巣にしておくわけにはゆかんからナ……」

「なニッ？」

遠山は嚇とした。

「默れッ。」

「社長、横暴だッ。」

從業員代表席は、再び騒然となつた。遠山は破けるやうな聲で怒鳴つた。

「ぢや俺達も、能率委員會に不賛成だッ。」

が、社長は振向かなかつた。從業員代表達は足踏み鳴らして叫んだ。窓外では罵聲が嵐のやうに昂まつた。

「能率委員會不賛成だッ。」

「深夜業復活反對だッ。」

「半請負制度復活反對だッ。」

怒號と喧噪の中に、永井は目を光らして、冷靜を失はなかつた。――來たッ、しかも正面だ。しかし、何が、あれほど社長を勇敢にしてゐるのか？ 危いッ、此まゝでは不可ない――！

彼は立上つて發言を求めた。

「緊急動議ッ。」

從業員代表側七名。會社側七名の小委員會を、即時、此の問題をよりよく討議するために開催せんことを提案した。そして瞬時の間も社長の顔色から眼を離さなかつた。――畜生ッ、何う出て來るのだ。

動議は、多數を以て通過した――。

六

昂奮した混亂の裡に、選拔された小委員會の委員達が、事務所二階の會議室に入つて行つた。從業員代表側は、永井、遠山、高木、近藤、他三名――。

彼等は會議室へ入るドアの傍で打合せした。

「いゝか決して焦つては不可ないぞ。俺達は、奴等の内幕を見破るためにも、努めて冷靜でなくちやならない……」

「おや？ 彼奴は何だ？」そのとき不圖氣が注いた近藤が、永井の背を突ついた――「見ろ、今あの室へ入つたなア、たしかに正服だぞ、俺あサーベルを見た！」

しかし、皆が振返つたときには、指さゝれた社長室へ通ずる、黒い把手の付いた扉は、堅く閉つてゐた。

「恐れることはない！」永井は、反對側の扉を開いて眞先に入つた。會社側の委員は、各課長に專務を加へて七名、既に社長室を背に並んでゐた。從業員代表等は、反對の窓際に……。そして、社長と、も一人の見知らぬ若い紳士が、少し離れて、並んで腰掛けてゐる……。

「その紳士は誰ですか？ 關係がないんならば退席してもらひたいですが――」

遠山は、坐つたまゝづけ〱云つた。するとその紳士は無遠慮にも、自分で立上つて云つた。――僕は印刷同業組合副組長の鈴谷です。傍聴さして貰ひます――。

皆は驚いた。さうか、これが十二社協定案を持廻つてる例の男か？ 遠山はまた云つた。

「では、吾々の組合を代表して傍聽者を一人呼びますから……」

すると、件の紳士が、無氣味なニヤ〳〵笑ひをしながら言つた——いゝでせう。それは合法的です……。

皆見がのつそり入つて來た。獰猛な面構のこの百姓男は、永井を蔭へ呼んで云つた。

「鈴谷が居たらう。萬事は明瞭だ。モウ躊躇するな!!」

十二社協定——東京市を中心とする十二社大印刷會社の聯合協定——職工標準賃銀の引下、製品單價の標準協定、深夜業割增手當の撤廢等、等。彼等職工が、工場のタヽキの上に、十時間乃至十五時間を縛りつけられてゐるその背後で、この十二大會社の紳士達は、もう半年も以前から……殆んど調印するまでに、協定を進めてゐたのだ……。

「わかつた……」肯いた永井の頭腦に、「何が社長を勇敢にさせたか?」が、ハッキリと、スクリーンのタイトルのやうに映つた。

從業員達は何時の間にか、事務所の周圍に押寄せてゐた。——深夜業復活反對だッ——半請負制度復活反對だッ——叫び聲が、また窓から飛込んで來た。途端、ワアッといふ叫喚と共に、激しく揉み合ふらしい物音がつゞいて起つた。

「何だ?」

皆見を初め窓際の二三が振返つて覗くと、五六人の正服巡査を中心に、檢束者爭奪が始まつてゐるではないか!!

「無法だ!!」

年若い近藤が、顏色を變へて飛出さうとした——。

「待て! 早まつちや不可ない!!」

大力の皆見が、杉山の左腕をしつかり抑へて、低い聲で止めた。「騷ぐな、これからだ!!」

永井は、ジリ〳〵腹底に燃え上つて來る憤りと、焦躁をガッシリ抑へて、靜かに云つた。

「專務、吾々の意見は次のやうに一致してゐます。吾々は會社側の提案する能率委員會を支持することに異議はない。但し、能率委員會に於ける決議權の割當は、工場協議會に於けると同樣のものであること。二、工場協議會の廢止、半請負制度の復活其他はその能率委員會成立後、該委員會に於て協議の結果決定すること。以上です……」

專務は、默つて社長の方へ顏を向けながらその顏色をうかゞつた。すると、意外にも、社長の隣りの紳士が徐ろに首を振つた。まだ三十そこその瀟洒たる洋服の男を、遠山達は驚いて見戍つた。

「それア結局同じこつた……」

專務が云つた。遠山は片手を卓子に支へながら、顏を突出して云つた。

「どうして同じこつた! 俺達は能率委員會の趣旨を支持してるんだ……」

妥協をするなッ! 不意に窓下から、怒聲が飛び込んで來た。——請負制度復活反對だッ——また押し寄せて來た從業員達の聲が、嵐のやうに捲き起ると、續いて騷然とした小競合が始まつた。

「社長ッ。」

永井が、立上つて呼び掛けた。

「社長は、會社が不振に陷つた罪の全部を吾々從業員になすりつけようとしてゐる。この會社の提案は、正しく吾々に宣戰を布告するものだ。例へば請負制度の復活は、すぐ近い將來に人員過剩問題を捲き起すだらう。……社長ッ、俺は從業員二千名を代表して君に訊ねるッ、君は締出をやる氣かッ。」

永井の語尾に顫へを帶びた聲が、室中にひゞき渡つた。課長連の二三が慌てて椅子から離

れると、庇護するやうに社長の周圍に立つた。
しかし、直に社長の口から言葉が洩れなかつた。專務は腰を浮かして口をモグ〱した。そのとき、例の紳士が、徐ろに立上つて、威嚇するやうな調子で社長と專務へ云つた。
「遺憾ながら、この會社の原案が駄目になるやうでは、僕として、十二社協定から、當社を暫く除外するやう、組合に報告す　ほかありません。」
社長は愕然として身を起した。そして蒼白な顏面を痙攣させながら、嗄れた聲で從業員代表達へ怒鳴つた。
「この會社は俺のものだ。いゝか、あの會社の原案はちよつとも引つ込めることは出來ん、わかつたか……」
「ナニ？」
遠山と、近藤が自制しきれずに、社長の前へ突進すると、拳を突き出して怒鳴つた。
「ようし。ストライキだ!!」
途端、專務が、パアーンと卓子を叩いて喚いた。
「明日から直に臨時休業だ!」
そのとき、皆見が、ズッと例の紳士の前に進んだ。
「よしい。ぢや俺も君と同樣に、全國評議會二十萬の組合員に、報告しようぜ……」
從業員代表達は席を蹴つた。そして次の部屋へ雪崩れ込んだとき、眞ッ先の永井が不意に仰向に倒れかゝつた。おう!!
皆は思はず叫んだ。弓なりに反つた永井の咽喉を、太い手が掴んでゐた――。
「うッ、暴、暴力團だ――」
きれ〲に叫ぶ永井の咽喉を締めた太い手へ、ゴム毬のやうに背を丸くした皆見が、彈丸のやうに飛びかゝつた。「畜生ッ!」
遠山は上衣を脱ぎながら、窓へ駈け寄つて聲を絞つた。
「けつ――いゝれつ――だア」
窓下の、眞暗な構內中間道路を、粘つこい液體のやうになつて、揉み合ひながら押して來る從業員達の中から、それに應ずる喊聲が跳ね返つて來た。
「けつ――いゝれつ――だア。」
モ一度怒鳴つておいて、飛鳥のやうに身を躍すと、遠山は、暴力團に取り捲かれ揉み合つてゐる仲間の委員達の亂鬪の中へ、まつしぐらに躍り込んでいつた。
（一九二九、九、二）

約束手形三千八百圓也

——眞理は常に具體的である——

プロローグ

産業の合理化による失業問題は、失業者自身にとつて呪はしき災厄であることは云ふまでもないが、その波動は各方面に及び、今や政界、財界の中心問題たるの觀あるに拘らず、これが對策に關しては、政府當局は固より、其他の方面に於ても全く暗中摸索の實狀にある、この憂ふべき事態を……（三月十九日　東京朝日新聞）

I　工場アパート

1　日歩

「日歩十八セン？」

工場裏空地で、洗面器から顏をあげた、鬚ツつらの親爺がきゝかへした。

「うん、それ位は覺悟してゐる……」

楊枝をくはへてドテラ着のやせぎすの男は、新聞の金融欄から眼を離さずに答へた。

「十八錢なア。」

バサ〳〵、手拭で顏を拭いてから、鬚ツ面の方が云つた。

「此節は十八錢でも危いだらうぜ、第一約手と來たら、高利貸でも怖がるからね。」

手拭をこんどは肩へかけて、それから鬚ツ面は、黃色く朝日の射して來る丘の上の方を向いて、パン、パンと柏手をうつた。

「南無金光大師、稼業繁昌、家運長久祈り奉る——パン、パン。」

丘の上には、中央印刷會社のコンクリートの大工場が聳えてゐた。押し開かれた通用門のあたりを、早出の職工達がチラホラ見えた——。

ドテラのをとこは、それに返事せずに、だまつて金融欄に見入つた。

彼等の背後に、馬車の幌みたいな百坪ばかりの大きな木造二階建の家があつた。附近で此家を工場アパートと呼んだ。

馬車幌式の建物に五つの工場があつた。左端から始めて、中印會社の鐵工部製のロール仲次販賣を兼ねてゐる赤木鐵工場、次が柏製本工場、以前製本職工で夫婦共稼ぎでやつてゐる工場、眞ン中が今約手融通の金融欄を探してゐるやせぎすの男小倉新三郎が經營してゐる文工堂印刷所、次が、一ケ月のうち十日くらゐしか機械が動かない靴下工場、最右端が、金光教信者で、山井といふ鬚ツ面の男が經營してゐる木材工場……。

大工場の周圍には——特に手工業的な部門をまだいくつも持つ印刷工業では——太陽をとりまく遊星のやうに、同一產業の中小工場がその周圍に集るものである。この丘の下にある工場アパートもその一つであつた。

そして、この馬車幌式の建物は、ある企業家が紡績工場に建てたのだが、操業開始と同時に、支那革命の動亂が起つて對支輸出が不況に陷つたので、そのまゝ立腐れになつたものであつた。

彼等中小工場主達は、各々歐洲大戰當時は、華やかな過去を持つてゐたのだが、今は第一の戰線からハネ飛ばされて、やどかりみたいに、この建物へ退却して來たのだ。

「假に四千圓の額面として……」
文工堂は、指を折つて胸勘定した。
「日歩十八錢なら、一日七圓二十錢――六十日間の四百三十二圓だ……」
齒磨粉を吐き出しながら、眼をつぶつたり開けたりした。まだ夜が明けたばかりなのにこの男は、もう夕方のやうな疲れた顔をしてゐた。
「それに約手はちかごろトテもあぶなくてな。」
木村工場主は、自分の苦い經驗で教へた。
「うーむ。」
文工堂だつて約束手形は、これまで幾度も扱つた。しかし何だか近頃は危險に感じられた。新聞の金融欄を見ても、何處にも約手融通は見當らなかつた。電話擔保が九百五十圓まで、恩給、年金、公債のボロ業の踏倒し、土地なら銀行の方で斷りと來る――。
「何處だね、出どこは？」
相見互ひだ、木村工場主はやさしく云つた。
「あかぢ出版會社だよ。」
「あ、××町の……。あの會社なら大丈夫だらう、額面は？」
「まだいまの仕事が上つてしまはないとハッキリ分らないんだ……」
「なんだ、さうか―― まあ明日のことは明日心配しろよ、俺だつてそんときやあ奔走してやる！」
信心深い木村工場主は慰めるやうに云つた。

2　戰爭願望

「お早う。」
ちび男の靴下工場主が、楊枝をくはへて出て來た。この男は稀にない大きな聲を出した。
「文工堂さんとこは、えらい景氣だな、昨夜も夜業ぢやねえか。」
「うん、やつてるにやゝつてるが、今やつてるやうな大物の仕事は、ぼくの工場なんかぢや合ひませんがね、他にないから仕方なく……」
「いんにや、何でもやつてれや、此節のこつた、いゝとしなくちやなんねえ、わたしんとこなんか御覽の通り、産業の合理化だか何だか知らないが、慘憺たるものですよ。」
靴下工場主は獨りで喋つた。
「値は下つちやふし、下手に大工場の下請でもしたら、あんよが出ちやふしね。それかと云つて職工をさういつまでも臨休さしとく譯にもゆかんしな……」
新聞を見てゐた木村工場主が口を挾んだ。
「お互ひさまだよ、俺らのとこなんか、金解禁のお蔭で、爲替相場が上つたとかで、暮に買つた材木が、ホラあの通り薪同然になつちまひやがつたよ、ほんとに――」
「まつたくな――」
靴下工場主は天を仰いで嘆いた。彼等は寄るとさはるとこんな話ばかりした。
「わたしや、いまに戰爭が始まると思ふがね、戰爭が……」
ちび男は軍縮會議の七割論者だつた。
「戰爭が始まつたらなあ――日本が勝つて……」
靴下工場主は、先づ日本が勝つても、自分の仕事の繁榮を空想した。大戰當時の華やかな過去が眼前に現はれた。軍隊手袋、靴下、ズック……まるで紙幣束の洪水――。
「戰爭がなア……」
彼等はそれを憧れた。ぼんやりと空間を見つめて紙幣束の洪水を夢見た。
しかし、そのとき文工堂はフト丘の上で、中央印刷會社の通用門前で、立騷ぐ職工達を見て叫んだ。
「おや、またビラ撒きが始まつたぞ……」
丁度出勤時間の通用門前の、黑く列をなした職工達の頭上で、赤いビラがサッと舞ひ上つた。

「おッ、ほんとだ！」

靴下工場主が眞先に丘の上へ駈け上つた。職工の列は亂れて、飛び出した守衛や、請願巡査が、ビラを撒いた勞働組合の男を追つかけまはしてゐるのが見える

「到頭一人捕まつちまひやがつた、あはゝゝ。」

木材工場主が面白さうに笑つた。

「ストライキになるんかな？」

靴下工場主が文工堂に訊いた。

「さあどうかね？」

文工堂は心の中で、若しストライキになれば、何からまい仕事にありつけると考へてゐた。しかし、彼がそんなことを考へてボンヤリしてゐる背後から、ヒドク面白くない男が寄つて來て、肩をたゝいた。

「こんちは……お早う。」

肩をたゝいた黒い洋服の自轉車を引張つた男は、その鈴の臭ひでも分るやうに、活字屋の親爺だつた。

文工堂は氣がついて「失策つた」と思つた。しかし、モウ姿をかくす譯にはゆかなかつた。彼はつつけんどんに云つた。

「朝つぱらから來たつて金なんかないよ！」

「でも……

活字屋の親爺は兩手を揉んだ。

「お約束の一昨日もお留守、昨日も留守で、仕方なく今朝お伺ひしました譯で……」

文工堂は外ッ方向いて聞えぬふりしてゐた。

「御承知の通り、私方も材料の方も止められるし、……何分こちらさまの入金がアテだもんですから……」

逃げる譯にもゆかなかつた。文工堂は先に立つて歩き出しながら云つた。

「とにかく工場へいつて話さう……」

II　不合理産業

1　「名劍地獄」

「とにかく今云つたやうな譯で、この『名劍地獄』があがるまで、甚だ濟まんが……」

小倉は帳場の机の前で頭を低げた。

「待つて貰ひたいんだ、たのむ。」

「でも私の方も、中央印刷の材料部との取引はとめられるし、おまけに商賣用のガスまで止められて……」

活字屋が十何べん日かを繰返すのを抑へて、

「わかつて、それやわかつてる。しかし俺の方も今云つた通りだ、たのむ。」

「こまつたな。」

活字屋は溜息ついて俯向いてゐたが、假にも顧客だ、それ以上攻めることは取引を中止するより他はないのだ。思案の擧句悄々と彼は歸つていつた。

活字屋が歸ると彼は、階下の印刷場を一わたり見廻して、それから二階の製版場へいつて監督臺の前へ坐つた。製版場には二十人あまりの職工が働いてゐた。算盤を前に置いて、彼はアトの日限を指で數へた。

「さうだ、マゴ〳〵してゐられない。製本の準備もあるし……」

隣りの柏製本工場へ、立つてゆかうとするトタン、だしぬけに激しい物音がして、兎のやうに二人の少年工が各種ケエス場から飛び出して來た。

「こらッ。」

追つかけられたのと、追つかけて來たやつの首根つこを掴んで押し搖すぶりながら、小倉は眞ッ赤になつて怒鳴つた。

「ど、どこのケエスをヒックリ返したんだ？」

この小僧達は、近藤勇と芹澤鴨と、どつちがつよいかで喧嘩した。そして一枚のケエスをひつくり返したのだ。彼等は一日十五時間を「名劍

地獄」の原稿を讀まねばならなかつた。この通俗作家のいゝ加減なかきなぐりは、相手の頭をハリとばして逃げ出したチビ小僧の方の持論をくつがへして、芹澤は脆くも近藤の一撃に斃れたことになつてゐた。

「此方へ來いッ。」

前額に青筋を出した工場主は、二人を現場へショッぴいていつた。納本期日が切迫して、毎日五時間の延長作業をやつてゐる現在、二枚のケエスが轉落したことも、鑄造機を持たない工場では痛手である。

「きさまら、今晩徹夜だぞ！」

ビーンと、頬つぺたを一つづつ、喰はされて、二人の少年工は顏を見合した。

「ケッ、給料も滿足に拂はねえ癖に！　ペッだ。」

ちびの方が、親方の後姿に赤い舌を出した。のつぽでも、も一人の小僧は新米だけに使ひ屋であつた。赤くなつた頬つぺたをおさへて、兄貴文選工たちの、お正午の辨當のお使ひをきいて歩かなければならない。

「お正午のお使ひはありませんかア……」

2　トムソン鑄造機

兄貴文選工達は、定時間（十時間）で九ポイント活字を平均十四箱づつ拾つた。一箱には千百二十本の活字が充たされなければならない。彼等文選工の指と神經は、時計の針よりも正確に、一秒といくらかゝうちに、一萬種類からの、複雜な國字の中から、誤りなくぬきとらねばならない。

そしてこれがナゲ（請取）の場合は更にヘビーをかけて二十箱から拾ふ職工があつた。母の胎内から飛び出したとき、もう活字を兩手につかんでゐた——と彼等が冗談云ふやうにそれは正しく神技であつた。

七年も年期を入れて——一人前になると彼等は「兄貴」であつた。そしてつい三四年前には三圓前後の日給をとつた。そしてそれが急速に落ちて現在では、彼等の平均賃銀二圓二三十錢——一箱當り文選賃銀十七錢——。

彼等は嘗ての勞働貴族から、急速に落ちてゆく自分達の運命を見た。

「死んでまたくるお釋迦の身なら、死んで
やりたいつらあてに——」

ケエスのトンネル、地下鐵道のやうに點けつ放しの電燈の下で、平均二十年も經つと、炭坑内の搬馬のやうに、彼等のガン（眼）はあがつてしまふ。彼等は弱つてゆく肺臟に、酒をそゝぎ込んで、また彼等の文選節を唄ふ

彼等は幾多の出版屋を成金にし、數百人の小說大家を世に送つた。コムニズムも、アナキズムも、軍國主義も、エロチシズムも、學校の教科書も、バイブルも、株式新聞も、おみくじも……凡ゆるものに彼等は彼等の血をそゝいで作りあげる。

彼等は從來職人としての自信を持つた。彼等は彼等の技術によつて、不熟練勞働者と區別されねばならぬと考へてゐたにも拘らず最近はさうでなくなつた。自由勞働者と同じく殆んど失業の狀態におかれてあつた。彼等は不平を腹の底にだん〳〵積み重ねていつた。

一箱十七錢當り……しかしまた主人は算盤で肘をさゝへて考へてゐた。

—中央印刷ではトムソン鑄造機が入つた。文選は半分の仕事カヘシ（返版）が省略された。一箱十錢見當で出來るんだ！—

主人は更に眼をつぶつて思案する。

—日給一圓四十錢に下げなければ、算盤がとれなくなつた！」

3　金策

「おーい。」

梯子の下から、印刷場の若いアテャの角刈頭が二階へ向つて怒鳴つた。文選場の石井といふ臨時工が頭を梯子の上へ出した。

「それでよ、」

二三段登つてきて、二人は低い聲で話し始めた。彼等の賃銀は、毎月繰越になつて、もう各自半月分もたまつてゐた。巧妙な主人は一文工堂券」といふ私製金券を出して、皆の不足給料を二月も三月も引張つた。小倉はそれを正當であると考へてゐた。

「どんな大會社だつて約束手形を出すんだ。小資本のものでは、當然從業員もその苦勞を頒つべきだ。」

しかし、從業員達は我慢しきれなくなつた。彼等の多くは關東印刷勞働に組織されてゐた。

「あんだうくせえ、やつちまへ！」

梯子を降りながら角刈頭が云つた。

「よかんべ。」

とおどけた調子で答へたニキビ面の石井は、職場委員であつた。試刷用の紙へ一枚づつ、鉛筆をなめながら書いた。

「來る月半ばの勘定日に私製金券を勘定に換算してくれないときは、一せいにストライキをやることに異議はないか――職場委員」

印刷場でも植字場でも、紙が一枚づつ渡された。皆は面倒くさうにチンと鼻汁をかんで窓外へ棄てた――異議なしだ――。

中小工場では、勞働者の結束に對しては、殆んど無防備であつた。それどころか、小倉はそんなことを考へる以前に、大資本の煽りにハネ飛ばされまいとシガミつくことばかりで十分であつた。

彼は監督臺で植字場の職工達を睨んでゐた。「名飢地獄」があがるうちだけの臨時工入れて七人――そして植字部だけがまだ大資本の工場との競爭の出來る手工業的な部分であつた。彼はこの七人の植字工の賃銀を安くし、絶えずたづねてくる失業者ととりかへることによつて仕事を競爭させた。そしてその幾割か浮んだ利益を借金の金利に廻した。

それでまた彼は算盤をとつてみる――植字工一人仕上高、十九圓二十錢（内譯四六ルビ付二十四頁、單價、十錢、作業十三時間）支出――賃銀十三圓と十錢也（内譯植字工他補助工三人）其他家賃、電燈、消耗品、雜費約四圓五十錢也――差引殘一圓五十錢――

彼はそこで、いくつもの借金の利子を思ひ出す。更に日歩少なくも十五錢からで切らなければならない約束手形を考へると、ウンザリして算盤をたゝきつける。

「チェッ、何のこたあねえ、俺ア職工達に飯を喰はせるために苦勞してるやうなもんだ。」

彼はかう云ふ風に考へる。それで彼が私製金券で給料を引延してゐることなどは、全く勘定の間近になつて考へる位なのだ。

「あなた……」

帳場から赤ン坊を抱いて上つて來た細君が、小さい紙片を指先でつまんで顏色を變へてゐた。

「大變ですよ、これを見てごらんなさい。」

紙は鼻汁でブヨブヨになつてゐた。偶然細君が拾つたのだ。小倉はソロソロ擴げた。

「なんだと？……

――來る月なかばの勘定日に……ときは、ストライキをやるのに異議はないか――。」

小倉は急にめまひがした。彼は近頃發作的な腦貧血に襲はれた。彼は監督臺の机にしつかりしがみつきながら、滲み出る青汗を腋の下に感じた。細君が急いで濡手拭を持つて來た。

「ちきしやうめ、足許を見やがつて！」

事實、こゝで半日でもゴタつかれたら日限は

遅れてしまふ、遅れたら罰金千圓也は契約書まで渡してあるのだ！

彼は眼頭が熱くなつて來た。兩手で額の濡手拭を押へながら、職工の一人一人を睨めて心の中で毒づいた。

「××主義者め、二日目にはストライキだ。いつたい誰のおかげで飯を食つてんだ、泥棒め！」

しかし、結局それは彼自身の僞りであつた。彼が資本家であるかぎり彼個人の利欲を守らねばならなかつた。そのためには痛い腹を押へても、二三百でも金策をして、一時を凌ぐことが最善である。

彼はやがて、青い顏をして、工場裏の空地を通つてぶら〳〵出ていつた。

III

1　飴屋の合理化

…はなれて遠き、マンシウの
赤い夕日に照らされて…

工場裏の空地で、松の根ッこ寄りに、近所のガキ共を集めた飴屋が、青年團と同じやうなカーキ色の服装で、喇叭をふきたててゐた。

阪妻も、丹下左膳も、月形龍之助も、捕手の役人も、胸をはだけ、帯をずり落し、後ろ鉢巻で鼻汁を垂らしながら、乾雲坤龍の竹ヘラを振り廻して「友は野末の石の下」を唄つた。

しかし、この三十個ばかりの坊主頭やオカッパのうちに動搖が湧いた。ミリタリズムの集團のうちに分裂が起つたのだ。

反對側の砂利置場に、ヴヰオリンの朝鮮飴屋が來た。この朝鮮飴屋は、チョビ鬚があり、色の變つた背廣を着て「東京行進曲」を唄ひ出した。

…ラッシアワーでひらいたバラを
せめてあの娘のおもひでに…

發音がたしかでないいちびの女の子達を先頭に、モダニズム派は、大膽に、喇叭の飴屋を見棄てて分裂して來た。

…かはる新宿あのむさしのの
つきもデパートの上に出る。
チャカチャッチャカ、チャカチャカチャッ
カ！…

綿サーヂの汚れたスカートや、小學校の霜降りズボンが、手を叩き、足拍子をとつて、ヴヰオリンの周圍を踊りまはつた。

ドブのボウフラや、蚊のやうに、このガキ共は、丘をめぐる長屋の群から湧いて來た。雨が土砂降りでもない限り、この空地は絶對に、彼等ガキ共のものであつた。地主である中央印刷會社の守衛が、繩を張らうと柵をつくらうと、このガキ共の「より興味ある破壞作業」以上のものでなかつた。

彼等は、三年前の會社の爭議（彼等は中央印刷を單に會社と稱んだ當時の工場破壞を、父や、兄や、また姉達によつて敎へられてゐた。

「ワッショイ、ワッショイ…」

彼等は數時間の後に、日當りのいゝ構内に在つて、凱歌をあげる。

そして、このボウフラどもの眼にも、近頃は飴屋や、屑屋やちんどんやの數が増えて來たのがわかつた。飴屋達は、このボウフラどもの要求に基いて互に競爭した。ビッコで老人のちんちん飴屋なぞは疾くの昔沒落してしまつた。

喇叭、太鼓、ヴヰオリン、まだこの他に、三味線で安來節を踊るのや、人形を踊らせ聲色をつかふ歌舞伎飴屋や、屋臺に白い風呂敷を張つて、活動寫眞を映して見せるカツドウ飴屋もやつて來た。

2　あまい母親

「かあちゃん、おあしおくれよウ…」

舌足らずの、チビのスカアトが、ヴヰオリン

の群から離れて駈け出していつた。

「おや、おつかあだ！」

氣がついた男の子も、つゞいて駈け出した。

木材工場の横手から、この空地へ入つて來た二人の長屋のお内儀が手押車に、折りの刷紙を、山ほど積んで押して來た。

「馬鹿ツ、飴屋が來るたんびに一錢づつ拂つてたまるけ。」

チビのスカアトに取り縋られて、手拭冠りのお内儀は、飴屋を仇敵のやうに睨みつけて、女の兒を突つ放した。

「ウソだよ！　ダッてかあちやんは、ヴヰオリンと、カブキ飴屋が來たときだけ、一錢づつ吳れるつて云つたぢやないか…、ヨウかあちやん。」

信賴すべき彼女の母は、體裁のいゝウソをついた。スカアトは泥に汚れたヅロウスを、足首までずり落して地團駄踏んだ。

「おつかあ、一センおくれな、ヨウ。」

十ばかりの男の子はてんで母をなめてゐた。

「ケイキがいゝぢやねえか、なんだ一センポッち…あとで俺が手傳つてやるよ。」

鼻汁をズウ〳〵音をさせながら、男の子は、手押車のヲリを見て、足許をつけ込んだ。

「この野郎ツ、親爺みたいなことを、ぬかしやがる…」

いきなり、平手で、男の子の學校帽が、スッ飛んだほど毆りつけたが、そのワリに、この半纏着の母親はアマかつた。

結局、二人の母親は、帶の間からガマ口を出して、一錢づつ渡さなければならなかつた。

「やりきれないね、まつたく…親爺は親爺で、倅は倅で…」

駈け出してゆく子供達を見送つてから、お内儀達は「名劍地獄」のヲリあがりを積んだ手押車を押して、柏製本工場の裏手へ廻つていつた。

3　この一戰

鰻の寢床みたいな長ツ細い柏製本工場は、まるで戰場であつた。まつたく、近頃にめづらしい景氣であつた。

動員された女失業者達が、中央印刷の輪轉機に折器械が出來て以來、ロクな仕事がないこの頃、めづらしく大物だけに精一杯にはたらいてゐた。主人の柏は三十足らずの製本職工あがりで、仕事にかけては目先が利いた。

「この一戰だ！」

彼は緊張してゐた。のるか反るか、他に仕事はなし、文工堂相手では危險だが、やらぬ譯にはゆかなかつた。

「親方、あがり一丁ッ！」

男の子になめられた先刻の半纏着のお内儀は、景氣にうれしく逆上せながら、喋いだ聲で裏口からドナつた。

「ホイ、きた！」

これも臨時に增えた男工達を指揮してゐた柏は、忙しげに飛び下りてきて、手押車の上を勘定した——一イ、二ウ、三イ…と。——荒繩で縛つた束をトン〳〵叩いて、それから賃銀の引換札を檢めて渡しながらいつた。

「かまはねえから、土間へ積み上げてくんな。」

カラになつた手押車は、すぐ隣りの、文工堂印刷場の裏口へ廻つた。刷り上つた部分の刷紙が艷々しい臭ひを發散しながら、手押車に載つけられた。

「親方、俺はあ、足許見る譯でねえが…」

土方の女房の、手拭冠りのお内儀が、云ひにくさうに、吃り〳〵云つた。

「一八にしてくんないか？」

柏は、眼玉をギョロリとさして、默つてお内儀を見返した。

「一六ぢやあんまり辛えで…」

四六半截四ッ折、千枚で十六錢を、十八錢に値上してくれろといふのだ。柏はムッとした調子で云つた。

「一六で惡けれや止してくれッ。」

人の氣も知らねえで……柏は怒氣を含んでドナりつけた。

「マア、マア、よつちやん止しなせえ。」

モ一人の半纏着のお内儀が、間に入つて云つた。

「柏さんは知らねえ人ぢやなし、さう惡かしねえから……、まア親方勘辨なすつて……」

お内儀たちは腰が弱かつた。

「ぢや今晩徹夜して、明朝屆けますだ。親爺も近頃は、ズッと遊びでうちにゐるから……」

五千枚積みあげて、半纏が押し、手拭冠りがひいてゆく後姿を見送りながら、柏は首を振つた。

無理はねえ！　景氣のいゝ時分は、外へ出るのが二四だつたんだ。しかし今ぢや……、これが中央あたりの輪轉機で刷るんだつたら、機械で折つてしまふ。……無料なんだ！

4　あかぢ出版會社

「無料より安いものはない。ヨイ〳〵と……」

誰かのをせしめたらしい眼たゞれの少年工が「朝日」を一本耳に挾みながら、ちやくれた恰好で裏口から飛び出して來た。

「こらッ！　松ッ。」

親方に怒鳴られて、松公は慌てて「朝日」をズボンのポケットに押し込んだ。

「お前鐵工場へ行つて來たか？」

松公は、小さい頭を振りながら、口早に答へた――ウヽン、まだ斷截の修繕は、出來てねえつてさ――。

柏は眉の根を寄せて、素早く仕事の手順を付けねばならなかつた。明日あたりから、化粧截ちを始めなければ、工場ン中が狹くなる。

「おめえ、かどり屋行つてな、出來た分だけを、少しづつでも屆けてくれつてな、さう云つて來い……。のそ〳〵歩くんぢやねえ、自轉車で行くんだ！」

それから柏は、隣りの鐵工場へ行つた。間が惡く斷截機のハンドを折つてしまつて、まだ修繕が出來てなかつたのだ。

無精者の鐵工場の親爺がいまやつと、肥つた身體をグラ〳〵動かしながら、仕事場の鐵板の上にねかされた、斷截のハンドの折れ目へ小さい鐵片を載せてゐた。

「ヤア遲くなつて濟みやせん。ツイ忙しいもんだから……」

蚊帳のひだのやうにダブ〳〵の顏面筋を波打たせながら、柏の姿を見ると、親爺は愛想を云つた。

「嘘つくなよ、お前さん、仕事してゐる事あ、滅多ねえぢやねえか。」

親爺も、柏も、一緒に笑つた。

「まあ、さう云ふなよ。」

ズリ落ちるズボンをゆすりあげながら、親爺は小學校出たばかりの息子に手傳はして鞴場に下りると、粉炭をかき起しながら、のろ〳〵と把手を動かし始めた。

「ときに、お前さんとこもあかぢ出版會社の仕事だな。」

親爺は振返つて云つた。

「あゝ、何故だい？」

柏は輕く訊き咎めた。

「イヤ、ちよいと、中央印刷の市川專務さんに聞いたんだ……」

この親爺は、鐵工部製のロールの仲次販賣をしてゐるので專務に信用があることを自慢にしてゐた。赤くなつた斷截機の折れたボートを引き出すと藁灰をくつつけて、また火の中へ突つ

込みながら云つた。
「あそこの會社は、近頃内容が悪いつていふんだよ、あのあかぢ出版は……」
「え？」
柏は急に足許が浮いて來たやうに思つた。
「まつたく見かけによらねえんだよ、あんな華美に商賣をやつてながら、やつぱり駄目だつて云ふんだからな……」
親爺は嘆息するやうに鞴をうごかした。柏はビックリした。
「ぢや破産したのか？」
彼は慌ててゐた。
「は、はさん？」
鞴をうごかしてゐた手を止めて、親爺は頓狂な聲であうむ返しに云つた。
「ち、ちがふよ、とんでもない。破産したらだいち俺が困る。文工堂に俺が入れてある機械の月賦がとれなくなるよ、とんでもない……」
親爺は鼻の頭に膏汗を浮かしてゐた。
「なんだ、内容が悪いといふだけか。」
柏はホッとしたやうに、その烏帽子型の五分刈頭を撫でた。
「あまり大袈裟に云ふんだからびつくりしたよ。」
柏は表の方へ出ながら、無理に元氣をつけて云つた。
「この節内容のいゝ會社なんかありやしねえさ。」

IV 約束手形參阡八百圓也

1 不思議な存在

第　　號
印紙　約束手形
一金參阡八百圓也
右金額貴殿又ハ貴殿ノ指圖人ヘ此手
形引換ニ無相違支拂可申候也
支拂地　東京市
支拂期日　昭和×年　月　日
支拂場所　株式會社　××銀行
昭和×年×月×日
東京市××區××町××番地
あかぢ出版會社々長　山一　寛印
小倉新三郎殿

二臺のトラックで納本した代價が、この拾錢紙幣よりも安つぽい紙片一枚であつた。
フクサにしつかとくるんであかぢ出版會社の玄關を出ると文工堂主人小倉は、すぐその足で從來一二度取引したことのある高利貸の家へ行つた。
「時節柄約手に困りますなあ。」
八字ヒゲのある高利貸は、大きなデスクの上にその手形をはふり出して眉を寄せた。
「でも、出どこはたしかだと思ひますが……ひとつお馴染甲斐に。」
小倉はペコペコ頭を低げた。
「とにかく、それでは二時間後に電話で、諾否を通知しませう……」
しかし、小倉が工場へ歸つてくるとすぐ、電話がかゝつて來た。
「お氣の毒ですが、駄目です。」
小倉は面喰つて慌てて云つた。
「あの、日歩は十八錢まで奮發しますが。」
すると、すぐ突つ返して返事が聞えた。
「日歩なんか今の場合問題ぢやありません。」
それきりだつた。工場の帳場では、柏や、活字屋や、鐵工場の親爺達が、首を長くして待つてゐた。小倉はまた飛び出していつたが二時間ばかり經つとぼんやりして歸つて來た。
「俺がいつて來る！」
小倉が裏書して印を押すと、活字屋がそれを持つて飛び出して行つたが、一時間くらゐで歸つてきた。
「駄目だ、少し金額が大きすぎる……」

次に柏が出掛けていつた。心當りを二三軒廻つてみたが駄目だつた。彼は珍らしく新聞金融欄に約手融通の廣告をみつけると、すぐ公衆電話に飛び込んだ。

「あ、××商店ですか、約手の金融して貰へるでせうか？」

「小切手ならやりますが、約手はお斷りします。」

「だつて新聞に廣告してあるぢやないですか。」

「でも場合によつて變更します。牛込の××番に問合せてごらんなさい。或は御相談にのるかも知れません。」

ケツ、馬鹿にしてやがる。」

柏は自棄にベルを鳴らした。

「ハイ、ハイ、私方へ御相談になるのは初めてですか？」

「さうです。」

「では暇どりますよ。」

「一ンち二日ではだめですか？」

「とても……振出人調査、銀行調べで、少くも十日間は待つてもらはなければ……」

「こまつたな、職工の賃銀も明日拂はなければならないのだ――なんとか都合出來ませんか？」

「出來ませんね、振出は何ちらさんです？」

「あかぢ出版會社ですが……」

「はア！」

相手が、先方で話し合ふらしかつた。そしてまた耳許で聲がした。

「失禮ですが、他樣へ御相談なすつて下さい。」

「え？」

慌ててガチャ〳〵受話器を鳴らしたがそれきり電話は切れてしまつた。

日が暮れてしまつた。是が非でも今日ぢうか明日までに金にならなければ、文工堂も、柏も、活字屋も、鐵工場の親爺も、一蓮託生で破滅の他はなかつた。

柏は手形の紙片をみつめながら、ぼんやり考へた。――價値を拒否される貨幣！　何て變な代物なんだらう？

2　破産

まるでリレーのやうに、今度は鐵工場の親爺が手形を持つて出掛けた。……俺あ他に心當りもねえ、會社の市川專務さんに泣きついてみるよ――。

から云ひおいて出ていつてから、モウ四時間あまりも經つたが歸つて來なかつた。

ボーンと一つ時計の振子が鳴つた。夜更けの寒さが坐つてる人々の身に沁みて來た。

「暇どるから出來るかも知れねえ。」

小倉はさう云つたが、心のうちでは晝間の高利貸からのあの返事が、何だか不安にしてゐた。他の二人は無言で坐つてゐた。明日になつたら――職工達が彼等を取り捲くのだ。

逐電！　小倉は心の中で、苦しまぎれの考へがフイと通りすぎた。――約手を掴んで、一切合切踏み倒して――。

――だがな、文工堂さん、あの約手が切れても切れなくても、私はあんたが相手だからな。」

小倉の心中を見透かしたやうに、柏が釘をうち込んだ。活字屋の眼が同じやうにキラリと光つた――逃げようたつて畜生！　逃がすもんか――。

×　　×　　×

しかし、逐電したのは……、文工堂ぢやなくて、鐵工場の親爺であつた。

鐵工場の親爺が、會社の近くにある社宅に、市川專務をおとづれたとき、ゴマ鹽頭の癖に、まだ青年のやうな血色のいゝ丸い顏をした專務は、女中相手に晩酌してゐた。

「ほう？　約手を切つてくれといふのかね。」

「へえ、そのお助け分にひとつ、これが現ナマにならねえことにや、だいいち會社へ納める分も出來ねえ譯で：：へえ。」

專務は太鼓腹を少しねぢ向けながら、約手を受取ると、大聲で笑ひ出した。

「アハヽヽ、これや君、この約手は反古同然だぜ。」

「エッ？」

鐵工場の親爺はおどろいた。

「と申しますと？」

專務は無造作に云つた。

「いゝ、あかぢ出版は破産したんだよ！」

「へえ？」

しばらく親爺は口あんぐりしたが、やがて氣がつくと、

「旦那、からかふんぢやねえですかい？」

「からかつたつてしやうがないよ。」

專務は落付いてゐた。チビリ〳〵飲みながら專務は他人事のやうに話した。

「僕の方の會社の債權額は二十三萬圓だ、一應整理したがよいと思つて僕の方で、今日破産を申請したんだよ。」

親爺は、丸つこい膝小僧をたてて息をつめてゐた。

「ぢや旦那、この手形はもう反古ですかい？」

「いや、反古つてこたあないさ。」

專務は商賣仇に對する意地惡さを見せて、皮肉るやうに云つた。

「整理がすむまで、半年ばかり待つとれや、三分の一か、五分の一の値が出るでせう。」

3　陷穽

「だゝ旦那、それやあんまりひどうがす：：」

親爺は、この手形が駄目になることは、自分にとつて破滅であつた。

「どうにかなりませんか、旦那、お願ひしやす。」

餉臺のハシにとつつきながら、彼は幾度も頭を低げた。

「お氣の毒だとは思ふがね、しかし何とも：：」

專務は冷靜であつた。しかし實は專務もあまり冷靜ではなかつた。――その譯は、實は破産は申請してもあかぢ出版會社は、事實上つぶれはしない。又つぶしてはならないのだ。問題は整理後の債權者會議で、誰が最高の債權者として、あかぢ出版の繼續事業の利益を收めることが出來るかだ。三つの全集物、幾百種の單行本、雜誌類、そして何十年の暖簾代――專務は確信を以て、社長と相談の上、破産を申請し、蓋をあけて見たのだが、意外にも反財閥系の富士製紙會社が十八萬五千といふ殆んど匹敵する債權者だといふことが、つい今しがた、電話で情報があつたところだつた。專務は女中相手にチビリ〳〵やりながら、事實は少し焦つてゐるところだつた。

「まあ、一ぱいやりたまへ：：」

悄げ込んでゐる親爺へ盃をにぎらせて、專務は手形の額面をもう一度見た。

「三千八百か：：」

小口の債權者は問題でない。況して中央印刷と同じ財閥にある小口債權者は、種々の方法で吸收することが出來た。しかし富士製紙は反財閥である。こちらが考へてるやうに先方でも小口の債權者を籠絡してゐるだらうことは、明らかなことだつた。

「まあ仕方がない、半年待つてみるんだね。」

專務は心と全然ウラハラのことを云つた。

「じよ、じやうだんはこまります。今夜中に何とかしなきあ文工堂はじめ凌ぎがつかねえ始末なんでして、旦那：：」

「それやほんとに氣の毒だな。」

専務は薄い眉根を寄せて殊勝な顔をした。親爺はすぐ他愛なく、その誘ひの隙に乗じてしまつた。

「旦那、お助けでがす、ひとつ、この通り……」

親爺は頭を疊へすりつけた。

「さう云はれても困るが……」

専務は少しからんで見せた。親爺は必死であつた。何とか現ナマの顔を見なければアガキがつかねえ、現ナマの……。

「こまつたなア。」

専務は眞實困つたやうな顔をした。

「ぢやね、千圓だけ、之を擔保にして貸してあげるから――若し不可なかつたら、明朝千圓持つてくれば、この手形を返すとしよう。どうだね？」

「でも、旦那、それぢや何の足しにもなりません。だいち三千八百をたゞの千圓ぢや……」

親爺は手を揉んだ。

「ぢや、持つて歸りたまへ、わしも君とは從來のよしみから差出口したまでだ。他にいつて當つたら貸手があるかも知れない。」

専務は至極おうやうに云つた。しかし此處で突き離されたら破産した約手だ、何處で鐚一文貸してくれよう。おまけに六十日の期限がある手形なんだ。親爺は決心した。

「ぢや、仰せの通りお願ひしやす。」

惡けれや明朝持つて來れやいゝんだ！ 親爺は自分に辯解した。

「さうかね、ぢや此れに受取證書いといてくれたまへ、いま持つてくるから……」

専務はヒョロつく足で立上りながら、女中に云つた。

「熱いところを酌してあげなさい。」

× × ×

外へ出ると一時に醉が出た。手形をおいて、現金で五百圓と、小切手で五百圓と、都合千圓を懷中に入れて親爺はフラつく足で社宅の露路をまがつた。

十二時を過ぎた工場街の夜はガランとしてゐた。破産手形！ たつた千圓……。

これでは自分の方へ廻る金もないにきまつてゐた。それがないことは、彼の鐵工場が明日からやつてゆけないことであつた。

「千圓あればなア。」

懷中の金が彼を誘惑した。丘の下方に、暗の底で、文工堂の帳場の灯が見えた。

彼は急に道を後戻りし始めた。文工堂の帳場で小倉達が逐電を考へてゐた時刻に、鐵工場の親爺もそれを考へついた。急に足を早めると、停車場のある方向へ向つて、暗のなかを逆つ立てられるやうに歩いていつた。

V 何が彼を社會主義者にしたか

1 破滅

夜が明けた。明るい春光がこの馬車籠みたいな工場アパートをつゝんだが、文工堂も柏製本工場も、鐵工場も表戸を閉めたまゝ開かなかつた。右鄰の木村工場で、丸鋸が時折思ひ出したやうに張りなく音だけが聞えた。

工場の表と裏とには、締出しを喰つた文工堂の職工達や、柏製本工場の女工、長屋のお内儀達がウロ／＼してゐた。

小倉の寢床の中で癡呆のやうになつて、ぼんやりしてゐた。聲も根もつきはてて、前後の處置も考へる力を失つてゐた。

――午前二時を過ぎてから、彼等は鐵工場の親爺の歸りを疑ひ出した。専務の家へ行つて事情を聞いたときには、モウ一時間も以前に歸つたといふ。

近所の交番へ鐵工場の親爺を搜索願人として

屆け出たが、小倉はもうすつかり打ちのめされたやうになつてゐた。

工場の表では職工達が鍵をかけられた入口を蹴つたりたゝいたりして騒いでゐた。人の好い細君はそのたんびに赤ン坊を抱いて二階へ逃げ上つた。

「開けろ、開けないか、所轄署のものだ。」

お正午過ぎに、巡査と刑事が三四人來て、表で騒いでゐる職工の二三人と、小倉を引張つて、警察署へつれていつた。

「何故給料を拂つてやらん、え？　おい。」

署長はテエブルに肱で頰をさゝへながら、小倉へ怒鳴りつけた。彼は青白くやつれた顏をあげて、嘆願するやうに事情を云つた。

「さやうな譯で、先方が破産しませんければ‥」

「馬鹿ッ。」

若い署長は威丈高に怒鳴りつけた。

「先方が破産しようとしまいと、職工の給料はちやんと拂はんければ不可ん、素ッ裸になつてでもまづ職工の賃銀を拂はんならん。」

小倉は首を縮めて、恨めしさうに署長の顏を見た。しかし署長はこんな小資本家に同情はしなかつた。

「第一君達のやうな不心得な中小資本家があるので、勞働爭議が絕えん、產業も振はん。‥‥あん、どうぢやすぐ今日給料を拂ふか。」

「でも、拂ひたくも手許には‥‥」

「まだつべこべ云ふか。」

署長は顏を赤くして怒つた——。

「よし給料拂はんなら拂はんでいゝ、その代り貴樣の工場では少年工の四名を每晚深夜業させて、一ケ月一圓の小遣で工場の隅ッこに寢かしといてコキ使つたらう。それだけでもすぐ起訴できる、一つ臭い飯食ふか、おい。」

「で、でも旦那。」

小倉は意外と云つた顏付で、

「そんなことは中央印刷の大工場でもやつとります。二重カード、少年工の徹夜業‥‥」

「餘計なことを云ふなッ。」

署長は皆まで云はせず怒鳴りつけた——。

「そんなこと貴樣にきく必要はない、第一きさまのところであれだけの設備ができるか。馬鹿ッ。」

小倉は小さくなつた。署長はつゞけて云つた。

「產業合理化の意義から云つても貴樣のやうな奴は徹底的に罰せんと不可ん。さあ給料を拂ふか？」

「ハイ。」

小倉はテエブルに頭を擂りつけた。

「それぢや、それでいゝとして、いま案內させるから、留置場へいつて、捕まつてる赤木鐵工場の親爺といふ男のツラ見て來い。間違つてるか、どうか見てくるんだ。」

「へエ？　赤木が捕まりましたか？」

「さうだ、今朝方捕まつた。すこし負傷して昂奮してゐるから聲をかけてはならんぞ。」

小倉は案內の巡査について、留置場へいつた。暗い留置場の三ッ目の鐵棒の檻の中で、泥によごれた黑服を着た男が、病氣した熊のやうに、向う隅にころがつて呻いてゐた。

小倉は暗くてよく判別がつかなかつた。巡査が金棒を蹴飛ばしながら怒鳴つた。

「おい、こらッ、赤木ッ。」

黑い熊のやうな姿は、呻きながら、少しづつ振り向くと金棒の方へ擂り寄つたが、外部の小倉の顏を認めると倒れるやうに背後の板壁に顏をかくしてうめいた。

「お、お、文工堂さん！」

2　悔恨

柏は昨夜からマンジリともしなかつた。

六疊一間きりの室內で、仕事着のまゝでぢつと考へてゐた。
傍にはモウ半年近くも患つてゐる女房が寢てゐた。乳の足りない二歲の男の子が、まだ立てないで母親の懐から出ると泣きながら柏の腰のまはりを這ひまはつた。
女房も一言も云はなかつた。柏も無言であつた。柏は、小倉と違つて元々勞働者だつた。夫婦で彼等はよく働いた。女房が肋膜を患つて寢ついてしまふほど働いた。仕事を貰ふには賄賂をつかはなければならなかつた。質屋通ひしては手間賃を拂つても、二ケ月先付の先方の支拂に惡い顏をしてはならなかつた。
しかし彼等夫婦は「稼ぐに追つつく貧乏なし」といふ信條を持つてゐた。それ故に長い年月を血で血を洗ふ苦痛を忍んで來たのだ。
にも拘らず、彼等夫婦の信條は足許からくづれて來た。夫婦はお互ひにそれを口に出さなかつた。それは怖ろしいことだつたから・・・。
「おい賃銀拂はねえか！」
「泥棒野郎、幾日待たせるんだ！！」
夜が明けると、女工や長屋の女房達が、表や裏の明り窓や障子の孔から怒鳴るのが聞えた。
しかし、もう謝る言葉も盡きてゐた。質草は勿論、最後の商賣道具以外には何もなかつた。女房は時折眼を開けて、寢ながら窓外の聲の方を見た。子供が泣いた。それでも柏は默つて考へてゐた。
壁につきあたつた小鳥のやうに、彼の考へは十時間經つても無慘にどうどうめぐりしてゐた。彼は血みどろになりながら焦つた。世の中に眞理がない譯はない。彼は根氣よくまた壁にブッかつていつた。
彼はフイと、己れの少年時代のある日を思ひ出した。無智で正直な親爺は日傭取の小頭にだまされて一週間も働いた賃銀を一文も貰はないで歸つてきた。五人の子供を抱へた母は雛ッ子を奪はれた牝鷄のやうに金切聲を出して怒つた。彼は母と一緒に、電車にも乘らないで、一日のうち三四回もその小頭のうちに、賃銀を請求しにいつた。
そして、その間一週間も飯を食ふことが出來なかつたことが、苦い記憶になつて、彼の眼前に現はれた。彼は居眠りから醒めた人間のやうにハッとした。
とたん、小石が窓障子にバラ〱とブッかつた。
「泥棒野郎、ツラ出せえ！」
「かまはねえからたゝきつぶせ！」
お内儀達の金切聲が窓外で起ると、また小石がバラ〱飛んで來た。その一つが寢てゐた女房の胸のあたりに落ちた。
女房は默つて、やせた手でその石を拾つてのけた。そのフトしたハズミに夫婦は眼がカチ合つた。柏は慌てて外らした。
「ねえ。」
女房が微かな聲で云つた――。
「あんたどう思ふの？」
柏は默つてゐた。女房はまたおそる〱云つた――。
「商賣道具、賣り飛ばしたら！」
ギクリとそれが柏に應へた。おゝ、商賣道具、千圓足らずの商賣道具！ それこそ彼等夫婦が十年の月日、血を以て護つて來たものではなかつたか！ 柏は強情に默つてゐた。
窓外でフトガヤ〱話し合ふ聲が聞えた。そして窓障子が開くと、若い娘が一人、其處から入つて來ようとした。
「おや、お仙ちやないか、どうしたの？」
入つて來た娘は女房の妹であつた。此娘は中央印刷の製本部に勤めてゐた。

「どうつて！　姉さんたちの噂をきいたもんだから工場を早退けにして來て見たのよ。一たいまあどうするの、みんなをあんなに怒らして？」

氣丈な娘は、今度は義兄に喰つてかゝつた。

「こんなちつぽけな道具なんか賣飛ばしちやひなさいよ、こんなもの……、皆あんなに怒つてるのに、妾友達に顏向けが出來ないわ。」

柏はうつむいて火の氣のない火鉢を撫でた。

「よう義兄さん！」

お仙は義兄の肩を押し搖ぶつた。

「こんど會社には自働製本器が入つたのよ、明日から試運轉よ、もウこんなちツぽけな道具なんか追つつきやしないわ。」

「自働製本器？」

柏は顏をあげた。

「さうよ、一臺で定時間仕上高、女工五十人分だつてさ。」

柏は息をつめて、空間を見た。最後の迷霧が瞬間に消えていつた。

「おい。」

柏は女房に呼びかけた。女房は眼でこたへた。

「俺達の考へがまちがつてんだなア。」

柏は吻と息を吐くと吾知らず瞼が熱くなつた。

「さうね、永い間、悪い夢を見たもんさ。」

女房は微笑みながら靜かに云つた。大きな兩眼に、圖らず涙がポツリと浮いて枕に落ちた。柏が云つた。

「お仙、皆さんにたゞ今道具を處分して、賃銀をお拂ひしますつて云つてくれ！」

×　×　×

その晩、柏一家は女房の實家お仙の家へ移轉した。

子供をお仙が抱いて、女房を柏が負つて、夜風のふく丘の上の長屋へ歩いていつた。

暗の向うに、中央印刷の大工場がそびえてゐた。子供は風に噎せ返るたびに、激しく泣いた。

「泣くんぢやねえ。」

柏は子供を叱りつけながら、背中の女房に云つた――。

「しつかりしろよ、これからだ！」

女房は背中で、ウンとうなづいて見せた。

柏は元氣よく、女房にもお仙にも云つた。

「俺達の仇あ、貧乏人の仇あ、ホラ眼前にあるんだぞ！」

VI　資本家的合理化の本性

1　金融獨占化

「市川さん、どうだつたね、一昨日の同業組合の支部總會は？」

女事務員が、ドアを開けて紅茶を運んで來ると社長は、新聞をデスクに投出しながら、向ひあつてゐる專務に云つた。

「いや、どうもさん〴〵でした。」

市川專務は例の丸い顏で苦笑しながら云ふ。

「さん〴〵とは？」

紅茶の湯氣に薄い顎鬚をからませながら、社長はかるく訊き返した。

「工場規則統一反對！　標準賃銀協定反對！　と來るんですよ。いやはやどうも、奴さん達、中小の工場ばかりでせう、まるで死物狂ひで中央印刷會社の提案に喰つてかゝるんですよ。」

「ふーむ、成程ね。」

社長は北叟笑みしながら、自分が打つた芝居の效果を、專務の顏色から讀んでゐた。

同業組合の××區支部は、當會社を除いては殆んど、中以下の工場主ばかりであるが、全體の持つてる仕事は、二百數十の工場で當會社

の約四十パーセントに過ぎなかつた。社長はこの四十パーセントの註文品を自分の方へ吸收し盡すことが當面の任務と考へてゐた。

「ホラ松山印刷の親爺ですね、支部幹事の……」

「ウン。」

「彼奴が、標準賃銀の協定反對を怒鳴り出しましてね、わしの方の顧客は殆んど中央印刷にとられてしまつた。標準賃銀の協定よりは、お互の顧客を荒さないやうな協定をしてもらひたいと叫ぶと、他の連中が拍手するんですよ。」

「アハヽヽ、さうか……」

社長も専務も顔見合せて笑つた。事實、中印會社の方針は全力をあげて中小工場の顧客を吸收した。そのためにはその出版屋に何か目ぼしいものがあれば、支拂は手形ででも何でも、六ケ月も、どうかすれば一ケ年でも待つた。出版屋にとつてはそれが第一の誘惑であつた。中小工場主は干潟の魚のやうだつた。

「しかし、それは國家の大計産業合理化の大方針に背くものぢや。」

社長は氣品のある五十ヅラの頸鬚をしごいた――。産業は合理化せなければならぬ、能率の向上、生産費の低下、海外輸入品の壓倒――！それには先づ大資本の合一、金融資本の獨占化だ！

「それから社長、これ見て下さい、この約手は千圓の擔保ですよ。」

専務はいま勘定してゐるあかぢ出版會社の債權證書類の中から、一枚の約手を抽出して社長に見せた。

「ほう三千八百か小倉新三郎？　小倉とは？」

「ホラ、あの工場アパートにある文工堂ですよ。」

「なるほど、しかしあんな小つぽけな印刷屋が大きな仕事をやつたもんぢやないか。」

「他に仕事がないからでせう、しかし向う見ずですよ、まつたくね、きつと彼處はつぶれたと思ひますがね、私の考では……」

「ふーむ。」

社長は別に興味もなささうに、眼を窓外に向けたが、そのまゝで云つた。

「あかぢ出版の方は、見込たちましたか？」

「え？　殆んど大丈夫です。」

窓外には、鋸歯形に屋根を並べた工場が、潑剌とした音響をつゝんで、遠くまでつゞいてゐた。社長は確信をもつて云つた。

「今年中には、あかぢ出版を、わしの中央出版會社に併呑して見せる!!」

2　機械化と勞働强化

ドイツ人技師、テオドルが入つて來た。この男は、最近當會社に購入された六色オフセット輪轉機に附屬して、獨逸タールキン會社から派遣されて來たのである。

「さあ、どうぞ。」

社長が、専務のとなりの椅子をすゝめた。

「御苦勞でした。お蔭で六色輪轉機は非常に調子がいゝやうです。これで當會社は、日本一の、いや東洋一の新鋭の機械と、二つの特許權を持つことが出來た譯です。」

社長は、安樂椅子の背に心持、反りながら鷹揚に云つた。

××××製版法の特許權も中央印刷は持つてゐた。

テオドル技師は、その蒼い眼玉を、眞直ぐに社長に向けてゐたが、しばらくしてから馴れないアクセントで云つた。

「アシタ、ジドウセイホンキノ、シウンテンヲヤリマス。」

「さうですか、豫定より一日早かつたですね。」

専務が口を挾んだ。社長は釦を押して女事務員をよんだ.

「工務課長へ一寸來るやうに……」

社長、テオドル技師、專務、工務課長と、四人の男が、社長室で相談した。

「印刷課では新鋳輪轉機の擴充、鑄造課ではトムソン鑄造機の增加、製本課では自働製本器の購入によつて、一通り産業の合理化實際を擧げることが出來る。しかし、モ一つ重要な、そして面倒くさい活版製版課が何の機械もないんだ。モノタイプなんか役にたゝん。それでこの製版機械の發明ぢやが、テオドルさん一つ考慮して貰へませんかな。」

獨逸人技師は、しばらくしてから答へた。

「シホンガアレバデキマス。」

社長は眼を輝かした。

「できますかな、資本は勿論望みに應じますがね。」

「デキマス、シホンガアレバ……」

獨逸人技師は手品師みたいなことを云つた。

「キカイハシホンノコドモデス。」

「はゝあ。」

社長はよく呑み込めなかつたが――。

「とにかく、どんな廉い賃銀でも、人間は始末にこまる、こはれやすくておまけに文句を云ふんでね、あはゝゝ。」

社長も、專務も、禿頭の工務課長も笑つた。

「まつたく機械にかぎりますね。」

禿頭が相槌うつた。

「そこでですな……」

專務が今度は少し聲を低めて云つた。

「これ位は、削除出來ますな――」

專務と工務課長との成案、小さい手帳に記した數字を社長は讀んだ。

印刷課八十名、製本課五十名、輪轉課三十名、事務所十五名、其他二十五名！ 計二百名……

ふーむ。

社長は念入りに見てから云つた。

「印刷課は八十名も馘首して仕事に差支へないかね？」

「えゝ大丈夫です。」

工務課長が、顏を手帳の上に突き出しながら云つた。

「から云ふ案があるんです、從來一臺の機械で二人だつたのを二臺で三人にするんです。すると百臺の機械で五十といふ數字が浮くんですよ。」

工務課長は得意の鼻をうごめかした。社長はしばらく考へてゐたが、

「さて馘首方法ぢやが、當會社の周圍には關東印刷勞働組合があるから迂濶にやれん……」

專務が笑ひながら云つた。

「大丈夫ですよ、社長、あの組合員は當工場にホンの二三十人しかゐないですよ。」

「いや、その二三十人がいかん。」

社長は首を振つた――。

「あの組合は、總同盟や何かと違つて完全な××系統ぢや、一人にでも爪痕をたてたらすぐ百人位は動かす不思議な强さを持つとるんだ。虱ぢやないがつぶした血からまた湧くと云つた工合だからな。」

「しかし社長。」

工務課長が云つた――。

「そんなにビクついてゐたら、合理化は出來ません――。」

「いゝや不可ん。」

社長は頑固に首を振つた。

「斷じて一度に馘首してはならん。世間體も惡いし、工場内も動搖する――それよりか、少しづつね、時期を見て……」

專務と工務課長は社長の口許を見た。

「小刻みに――目立たぬやうに――」

社長は低く途切れ〳〵に云つた。

「わかりました。」

事務と工務課長が頭を低げた。

VII 饑餓は彼等を勇敢にする

1 底流

産業の合理化は國富の増進

敏速第一

親切第一

安全第一

どの工場にもこんなモットーが、刺戟の強い赤や、青のポスターに刷られて貼つてある。

輪轉機室の廣い工場の隅々、煉瓦の壁にも貼られてある。職工達は目まぐるしく廻轉する輪轉機の間を驅けめぐりながら、どうかしたはずみにこのポスターが眼に入る、そしてどうかしたはずみに考へる。

「産業の合理化つておめえ何だね。」

河のやうに流れて來る刷紙を、束にして繩で結きながら、訊かれた出ツ齒の兄貴職工はじれつたさうに怒鳴りつける。

「産業の合理化つておめえ、矢張り産業の合理化ぢやねえか、間抜けめ！」

「へえ？」

わかつたやうなわからないやうな顔をして、怒鳴られた追廻しの若造は、またでかい油差を抱いて、輪轉機の下にもぐり込む。

しかし、これは彼等の一部分である、もひとつの部分がある。

鉛筆を耳に挾んだ若い菜ツ葉服が、職工便所に入つていつた。三十分ばかりすると、その菜ツ葉服は、悠々と出て來る。

そのアトから驅け込んでいつた職工達は、皆首を傾けながら便所を出て來る。

「なるほどなア。」

便所の中には丁寧に貼紙がしてある。

日本の資本家は大戰後の××で行詰つてゐる、彼等は産業の合理化によつて××しようとしてゐる！　俺達はいま非常に大量的な馘首のまへにさらされてゐる。奴ら大資本家の復活の犧牲に××大衆を……。

諸君よ、吾々は大量馘首に反對しなくてはならぬ……。

彼等の底流は鐵のやうに重い、そしてそれが日毎に烙かれて灼熱してゐる。

更にも一つの部分がある。

彼は職工のスパイ的集團の××會だ。こいつらは、ヒドく狡い職工か……でなければ猫のやうに大人しく、豆腐のやうに節操のない職工達の間に支配權をもち、一方會社事務所のスパイ的役割の副業を勤める。

そして中央印刷のやうに、過去に幾つもの爭議をもつた會社では、尚更らかういふ種類の存在が多分であつた。

2 アルバイター

六色輪轉機は、輪轉課第一室の中央に君臨してゐる。

日本にたゞ一つしかないといふ新鋭の機械三十幾つかの廻轉胴、數百の調整されたストッピング、數千のシリンダー――、トロで運ばれて來る卷取紙は絕えず河のやうに流れて、機械に吸ひこまれると、こんどはまつたく手品師のやうに、眼が醒めるばかりの極彩色の美人畫が、微笑みながら飛び出して來る――。

精巧な機械は、ピアノよりも調整された音樂的價値をもつ。風の加減であるときは、花園の蜜蜂の集團のやうにうなり、あるときは子守唄よりも優しく囁く。

ルラー置場で交代の職工達は、ひツちらかさ

れた紙の上に寢そべつてゐた。

「しかし、すげえもんだなア、六色一度刷り、一分間百枚、一時間六千枚てんだ、まつたく‥‥。丁度おめえ、普通オフセットの三十六臺分だぜ、どうだい。」

義齒の金を自慢にしてゐる親爺が、隣りのフチのとれたアミダ帽の若いのに云つた。

「だからどうしたつてんだ。」

居眠りも出來ないで、少しじれてゐる癇癪持ちのアミダ帽は眼玉がでかく、頬骨がたかく、ノッポの大男である。

「あまりボヤ〳〵感心してやがると馘首になつちやふぞ‥‥」

「お、おどかすない！」

金の義齒は、內心ヒヤ〳〵してゐた。事實六色輪轉が入つてから、彼等の受持、二號や三號の輪轉機は、もう一週間も、止まつたきりだつた。

「おどかしぢやねえやい、なアおい‥‥」

隣りの若いずんぐり脊の菜ッ葉服は眠つてゐた。

「なあおい、平戶‥‥」

アミダ帽に、肱でつゝかれて、平戶は眼をさました。まるで松の根ッこみたいな感じのする若者だつた。

「ウン‥‥」

此の若者は無口だつた。それだけ云ふと、またヒックリかへつた。

その途端、かたまつてゐる彼等五六人の背の上に、ドサリと何か落ちてきた。

「おい、ビラだ！」

アミダ帽が、すぐ二三枚を拾ひあげた。平戶は寢返りざまに、背後の小さい鐵棒のカッてある窓を見た。其處に、血の滲んだ‥‥おそらく、鐵格子で擦りむいたらしい傷のある片掌が、少しづつ外へ消えてゆくのを見た。

3

「大變だ、いよ〳〵馘首だッ。」

短氣なアミダ帽はビラを鷲掴みにすると工場ン中へ駈け込んでいつた。

他の義齒や四五人のものは、額を寄接け合つて讀んでゐたが、やがて怖々と、それを以前のとこへはふり出した。

「バカッ、棄てるんぢやねえ。」

平戶は、何かなしに怒鳴りつけた。皆は落ちたやつをまた仕事着のズボンや、ポケットに押し込んだ。

しかし平戶は別に、このビラの出所、關東印刷勞働組合に、馴染のある譯ではなかつた。ただ俺達のためにだけ撒かれたものだと信じた。それはあの血のついた‥‥片掌が、それを信じさせたのだ。彼もポケットに押し込んで工場ン中へ戾つて來た。

と、どうしたんだ？　先刻のアミダ帽が、守衞と請願巡查に捕まつて工場外へ引摺られてゐるではないか？

「けいさつなんか、俺ゆかねえ‥‥俺たゞビラを‥‥」

アミダ帽は、バタ〳〵暴れた。五六人の守衞達はそれを手取り足取り外部へ引摺り出した。口髭を生やした工手の三村といふ野郎が請願巡查に囁いた。

「あの野郎たしかにビラを持つて工場ン中へ駈け込んで來たに違ひありません。」

輪轉機の蔭から飛んで出た職工達は、默つて見てゐた。一間引摺られると一間、三間引摺られると三間、默つて從いていつてその光景を見てゐた。

工場の廊下へ出ると、他の工場からも飛び出して來て職工達が引摺られるアミダ帽を見た。平戶は移動する圓周の眞ン前で見てゐた。そし

てフト氣がつくとその背後の方で、さつきのビラが撒かれてゐた。

素ばしつこく、大膽に動いてゐる色の黑い五分刈頭が人混みを潛つてゐた。平戸はハッとした。その素ばしつこい男の右の手は、甲の所に血が黑く滲んでゐた！ あの男だ！

平戸はそれを默つて見てゐた。五分刈頭の男は紳だつた。紳は關東印刷の働き手だ――。

いやもおうもなく、アミダ帽は引摺られて、請願巡査の詰所に消えた。皆はまだ散らないでそれを見てゐた。平戸のズボンのカクシは圓くふくれてゐた。それにさつきの三村が覘ひをつけてゐた。この男は爭議の度に出世して工手になつたのだ。

アミダ帽が引ッ張られるひまに、ビラは殆んど、手から手へ、工場の隅まで行き渡つた。

工長に追ひ散らされて、職工達が輪轉機室に入りかけたとき、それまで覘ひをつけてゐた三村が平戸のズボンを目蒐けて飛びかゝつた。

「何をする？」

松の根ツこみたいな若者は、ビラを掴みかけた三村の腕を捻ぢあげた。

「い、いてえ！」

ちよび髭を歪めながら三村は唸つた――。

「き、きさまビラを‥‥いてえッ――」

「なんだと！！」

平戸は力にまかせてネヂあげながら、

「變な眞似しやがると畜生！ おれのズボンに指一本さはつてみろ！」

傍にあつたルラー芯の鐵棒を振りあげて怒鳴りつけた。

「こん畜生！ 生かしちやおかねえぞ、このスパイめ！！」

VIII 眞理は常に具體的である

1 目立たぬやうに小刻みに

會社の廣い工場の隅々に、不平と不安が、日毎に堆積していつた。

朝の出勤時刻や退時には二十幾人の會社の守衛と請願巡査と、所轄署の刑事たちが物々しく警戒したにも拘らず不穩なビラは何時の間にか、風のやうに潛つて、工場の隅々にバラ撒かれてゐた。

ある日、特高課の刑事が、會社の庶務課長を訪ねて來た。警部補上りの庶務課長は來訪者の目的をすぐ察知した。

「いや、工場内に澤山居りますよ、お察しの通り‥‥」

「一々人名が分つてゐますか？」

「分らぬこともありませんがね。」

ちやんと、工長や工手に命じて、調べてはあつたが、庶務課長はいくらか氣を持たせた。

刑事と庶務課長は三十分ばかり話し込んだ。

庶務課長は云つた。

「ぢや、一應專務にことわつて‥‥」

刑事は歸つていつた。庶務課長は自分の計畫を專務に明した。

「さうか、そいつあいゝ！」

專務は社長室に入つていつた。

「さう云ふ譯なんですがね、どうでせう？」

社長は、よく言外の意味が呑み込めぬらしく、眼をしばたゝいた。

「かうなんですよ。いはゆる社長の――目立たぬやうに、小刻みに――そして手當が要らないやうにッて奴ですよ。」

社長はやつと呑み込んだやうに、狡くわらひながら云つた。

「あ、さうか‥‥さうか‥‥うん、さうか！」

2 カードが消える

昨日の刑事が四五人連でやつて來て、事務所

の隅で茶を飲んでゐた。

庶務課長のまへに呼び出された印刷課のわかい職工が立つてゐた。

「…職工定期券を失くしたことはないね、ぢや歸つてよろしい。」

「何でえい。」

若い職工は譯のわからぬ呼出に馬鹿々々しくなりながら仕事場へ入つてゆかうとする背後から、飛んで來て背廣服の男がグッと腕を捻ぢ上げた。――署まで來い――！

第二の職工、第三の職工――そして輪轉課の平戸も…ボツリ〳〵と櫛の齒を缺くやうに――。

同僚は氣がつかなかつた。カードケエスの失くなつてゐる出勤簿に氣がついて――野郎病氣でもしやがつたかな――。

カードはだん〳〵消えていつた。そして彼等は警察の留置場から再び工場には歸つて來なかつた。

3　つぶせぬ卵

しかし、火は消えなかつた。大量馘首反對のビラは、守衛がツイいま見廻つたばかりの工場の廊下に、モウ百年も前からあつたやうな恰好で撒かれてあつた。

火は消えない――個人を引拔いても、また燃え上る火の種は、穩和な職工、不穩な職工に拘らず持つてゐたから、いや持たせられてゐたから――いや、いや、眞實の火の種は、消さうと焦る會社自身が、事實は投げひろげてゐたのだから…。

しかし社長は自分の力を信じてゐた。いや自分達資本家階級の力を信じてゐた。專務とテオドル技師を從へて、今日は試運轉濟みの自働製本機の作業振を見てゐた。

機械の枕臺の所にはお仙と二三人の女工達が折られた刷紙を絶間なく流した。巾廣い調帶は河のやうに流れて、刷紙は波動に躍つてコトコトとスミを合した。流れは急湍に落ち、鐵片は一册づつ咬へてトンネルに潛るとやがてトンネルの中から飛び出した一册は、いま美容院から出て來たモダンガールのやうに、ツンと濟まして傍へに積み重ねられた。

「ふーむ。」

社長は滿足であつた。それからぐるり工場内を見廻してから、まだ幾十人といふ不要な女工達が眼に入ると少し不滿になつた。

そしてモッと不滿な現象がすぐ背後で起つた。

運搬屋と同じ恰好した五分刈頭の男がフイと入口から姿を現はすと、急に脱兎のやうに工場内へ驅け入つて、左右にビラを撒きながら走り過ぎようとした。

「おッ、あいつをフン縛れ！」

社長はぼんやりしてゐる守衛に怒鳴つた。守衛達が五分刈頭を追つかけると他の女工達がそれを遮つた。社長は焦立つた。

「みんなヒツくゝつてしまへ！」

片腕を捻ぢられて五分刈頭はビラの束をお仙へ向つて投げた。それは柏だつた。

お仙はそれを持つて、隣りの工場へ驅け込んだ。

「殺人的馘首に反對しろ！」

柏は狂人のやうに怒鳴つた。七八人捕まつた。そして柏とお仙だけが請願巡査の詰所に引摺り込まれ、後の五六人は卽座に解雇を云ひ渡された。

4　誰が絞めたか

もう三四十人もが引かれていつた道を、お仙と、柏は、暗くなつてから引かれていつた。

通用門を出て、社宅の露路を拔け、丘を下り、

そして工場アパート裏の空地を通つて、警察署へ行くのだ！

丘のうへには、春にしてはさむい風がふいてゐた。傾斜に沿うて幾棟の工場長屋があつた。お仙の家のある長屋の棟も見えた。

柏がさきに、お仙が次に、巡査がひとりづつ繩尻をとつてゐた。

丘を下ると工場アパートの馬車幌のやうな屋根が、灯の光もなく、うづくまつてゐた。

柏の胸に苦い追憶が甦つて來た。

誰が、誰が、俺にこの道を選ばしめたのか？

彼等はアパート裏へ廻つた。夜露が降りて、お仙の跣足の足首を冷たく濡らした。

工場裏の暗の空地に、飴屋が足溜りにする松の木が黒く立つてゐた。

巡査が何かみつけたらしく突然云つた。

「一寸こつちを歩け！」

引張られていつた松の枝に、黒いものが風にゆられるやうにフラ〳〵動いてゐた。

「おい、首縊りだぞ！」

柏の巡査が、お仙の巡査に云つた。

「なに？」

お仙も引張られて寄つてきた。巡査が懷中電燈を黒いものに突きつけた。

「おツ、文公堂だ！」

柏は縛られてゐる諸手をひかれるやうに、うしろへよろめいた。

小倉の青紫にかはりかけた、長細い首がガックリ細引に吊されて、五體と共にフラ〳〵と搖れてゐた。

「義兄さん！」

お仙がよろけて、肩で柏にブッつかつた。

「……………」

柏は無言で暗の奥を見た。そして彼はハッキリと、その暗の底に、今の世の正體を見た。……

「眞理は常に具體的だ！」

再び巡査につゝかれて歩き出しながら、彼は自分に云ひ聞かせた。そして眼をつぶつてもなほハッキリと眼底に浮んでくる、暗の底にレールのやうに、白く光る道！　おゝ必然に歩かねばならない道！　を見た。

柏は振返りながら義妹に云つた。

「元氣で歩け！」

（一九三〇・三・二二）

あまり者

郷里の家に少しばかりの金を、送金したその受取りの返事を、今朝（工場の休みを）まだ寝床にゐた私の枕許へ、臺所にゐた妻が持つてきた。

郷里を出て、モウまる三年といふもの、私と郷里の消息は、いつも、この月々の僅かの仕送りの返事に附け足されたものに依つて知ることが出來た。

その消息から推して、私は、私の幼い時分の故郷が、山と、田圃と、小さい町と、川とに彩られた、嘗て、田山花袋氏の全國行脚集に、日本で一等「田舍らしい田舍」と言はれた、私の故郷が、だん〲に都會化しつゝあることを想像させてゐた。

××山のてつぺんに、上水道の貯水池が造られ、×××谷の清流に發電所が出來、二作に、間作まで稔る××の田圃が開拓されて、電車が通ひ始めたといふことなど……

「兄さん、私は車掌の試驗を受けて合格しました。明日から乘務することになりました……」

家からの手紙を凡て代筆する弟から、この消息を受取つたのは此の前の手紙でであつた。

彼處の森を伐つたといふから、電車は、あの池の上邊を通つてゐるだらう。さうすれば××町のあたりは軒並も多少變つたらうし、賑やかにもなつたらう……あの池も、この前のやうに、あんな澤山の鮒や鯉はゐなくなつたかも知れない……ひよつとすれば、多少埋立てたかも知れない？……等と、私は想像をめぐらしてゐた。

そして、今朝の手紙に、また、多少の想像が、證據だてられるやうな、變化を消息されてゐるだらうと思ひながら、私は寝床に腹這ひながら、封を切つて讀んでみた。

しかし、そんな風物の移り變りに就ては、今度の手紙は何も知らさなかつた。たゞいつもの通りの送金受取りの簡單な禮と、次のやうなことが記してあつた。

「……兄さんは、市川兵五郎さんを御承知でせう、あの魚獲りの名人、あの人がね、七日に死なれました。まだ三十五だつたさうです……」

市川兵五郎？と一寸私は、私の記憶を探した。そしてすぐ思ひだした。そして單に兵さんと言へば、もつと早く判つたらうと思つた。市川兵五郎と物々しくなつたので、あの、色の黒い、親しい男を、すぐ想像する事が出來なかつたのだと思つた。

兵さんが死んだ……私は「へエ」と思つた。

「おい、兵さんが死んださうだ。」と妻に呼びかけた。

「たれが、たれが死んだの？」

妻は「死んだ」と言ふ語に驚いたらしく、前掛で手を拭き〲一寸解せないらしく、「兵さん？」と言つて、そのまゝ默つた。

妻は私の田舍を熟く知らなかつた。それで「兵さん」と言つても、それが誰であるかを知らないらしかつた。

「死んだかなあ！　何で死んだんだらう？」

私は肩邊の冷え切つたのを感じて、少し蒲團の中に頭を引き込めながら、かう呟いた。

「病氣とも頓死とも書いてないわ。」

拋りだされた手紙を拾ひ讀みながら、妻は私に言つた。

「多分、病氣にちがひない。」と私は言つた。
頓死ならばまだ例が少ないだけに、書いてあるだらうと思つたからだ。

何病氣で死んだんだらう？　あの頑丈な男が……眼玉のギョロリとした、色の眞つ黒い、慓悍そのもののやうな骨格であつたあの男が……

「コレラ？　ハア……死にますかなあ、ハア。」

何時だつたか、私の家へ、獲つて來たばかりの鯰や、鮒などを賣りに來た時心配屋の私の母が、時節柄、チブスやコレラの流行を怖れて買はなかつたら、兵さんは、怪訝さうに、

「私や、よんべも食ひましたがナア。」

兵さんは、不思議さうに、片手に提げてゐる魚籃を、ランプの燈の方へ寄せて、一方の手で、ひつかき廻したのだつた。

「もつとも、兵さんにや、コレラの方で御免だよ。」

皆は、笑ひこけたのだつた。

その兵さんが死んだ。河童の兵さん、鰻獲りの兵さんが死んだのだ。

私は、兵さんの舊友だつたのだ。

兵さんは、まつたく、この世の中に、不用な人間のやうにして、生れ出て來た。そして、世の中に、これほど遠慮しい／＼生きながら、また、餘計な人間のやうに、取り扱はれた人はないだらう。恐らく、兵さんから、あの特種な、鰻獲りの技術と、泳ぎの手練を除いたら、あの男は、或ひは、世間の人から撲殺されたかも知れない。

と、言つても、決して兵さんが惡い人間であつたからではない。それは、餘りに正直であり、勇敢であり、貧乏であつたからだ。

私は、兵さんを、私が物心のついた時分から知つてゐる。

兵さんの親は、お近婆さんと言ふ母親一人きりしかなかつた。兵さんの父なる者は、後にも先にもなかつた。恐らくは、徳市といふ兄と共に、或ひは、少し低能な母親と共に、永久に自分の父親は何人であるかを知らないだらう。

兵さんの母親、お近婆さんは、いゝさわら（藁で作つたタワシ）賣りであつた。

百あまりのさわらを擔いで、ボロ／＼の着物を引きずつた二人の子を引張つて、町々を賣つて歩いた。

寒い木枯の夕暮など、母親三人とも、ブルブルふるへながら、私の家へよくやつて來た。

私の家は、陸軍の殘飯（兵卒の食ひ餘し）を賣つてゐたので飯を食べに來るのだつた。

「まあ、お近婆さん、徳ちやんと兵ちやんは、顏色が變つてゐるぢやないか。」

私の母は、その殘飯を量り賣りしながら、あんまり、ひどさうなので、注意したことがあつた。

「はい、朝から食はんのだけん、さつき、××町の交番のところで、凍えて、くたばりかけましたたい。ばつてんがあゝた、あそこに寢かしておくと、交番の巡査さんが、居らすもんだけん、うんと、打つたくつて、連れて來ましたたい。」

お近婆さんは、地獄の牢士の婆みたいに、骨と皮ばかりの青い顏を、ひつつらせながら喋つた。

子供達は、ガタ／＼慄へながら、土間の隅つこにちゞこまつて、煎りつくやうな眼で、母が盛つてゐる殘飯を睨めてゐた。

私の家は、かういふ種類の人が、毎晩何十人となく集まつてゐた。從つて、私の家は乞食の元締みたいな、役割を自づと持つてゐた。

それで私の記憶に殘つてゐる人が幾つもある。私が兵さんの少年時代の記憶で、一番は

つきりしてゐるのは、その母が盛つてゐる殘飯を、全く、生命がけで睨んでゐる、あの痩せこけた顔の中に、ギョロリと光つてゐる眼である。

その後、お近婆さんは、二人の子供を置き去りにして行方不明になつた。二人の子供は、仕方なく私の家に來てゐた。そして土間の隅つこで、毎日、私の犬、はちと稱んでゐた野良犬と一緒に遊んだりしてゐた。

兵さんは、その頃でも、決して泣かなかつた。不思議な位、泣いたことはなかつた。一緒に遊んでゐた私はすぐ泣聲をあげたが、兵さんは、少々私が無理を言つたり、私と德市と合同して、兵さんを毆つても、決して泣くやうなことはなかつた。

しばらくして、お近婆さんは男と一緒に夜逃げしたのだと判つた。それは兵さんの家の隣の小屋にゐた飴賣りの親爺と、かけ落したと言ふのだつた。勢ひ、二人の子供は、それ〴〵何とかせねばならなかつた。そこで兄の德市は十五歳位になつてゐたので、町の商店へ奉公に出し、やつと十歳の兵さんは、他家へも出せないので、私の家へ居付くこととなつた。

私の家には兄弟が澤山あつたので、兵さんは毎日、私の弟や妹の守をさせられてゐた。口やかましい私の母は、兵さんを隨分怒鳴りつけてゐたのを、私は覺えてゐる。

それでも、決して口答へなぞしなかつた。何と言はれても、默つて動いてゐた。ある晩のことだつた。みんなで飯を食つてゐると、しきりに、石油の臭がした。父がやつと發見したら、ランプの油壺に龜裂が入つて、そこから石油が、しづくになつて洩れてゐたのだつた。ランプの掃除は兵さんの役目だつた。父は案の定、大きな聲で兵さんを怒鳴りつけた。然し、兵さんは默つてゐた。

やがて、母が、その滴れが落ちたところを拭かうとしたら、どこにもそれが見つからない、ランプの眞下には、兵さんが坐つて飯を食つてゐるのだつた。

「どうしたんだらう。」

母は、しきりと不思議がつた。そしたら兵さんは、おづ〳〵と言つた。

「私が、茶碗の中へ落して、食べました。」

父も母も驚いて、大騷ぎをして、藥をのんで、はきだして終へと言つて、すゝめたが、むつつりした兵さんは、やつぱり我慢してゐた。

その晩中、氣色惡さうにしてゐたが、翌朝は、何時ものやうに働いてゐた。

何時も母は、兵さんの背に弟を渡して、帶を結びつけてやるときは、

「遠出してはならないよ、日が暮れるまでには、一度乳を飲ませに來なきやあ駄目だよ。」

と言つてやるのだつた。然し兵さんは、一旦、弟を負つて村の方へ遊びに出ると、そんな事は何時も忘れてゐた。四ツばかり年下である私が、後を追つかけて跟けて行きたがると、兵さんは、田圃の稻のかげなどにかくれて、すぐ私をまいて終つた。そして背で弟が泣からうが、眠らうが問題にせないで、どん〳〵田圃を横切り、川のあたりを越えて隣村まで遊びに行き、よく喧嘩したり物をかつさらつたりして來た。

「どろばう。」

と言ふ言葉をきくたびに、私は何時も、兵さんの顏を想ひだすほど、兵さんの顏は、「どろばう式」である。私は子供心に兵さんが、こはいものに感じながら、それでも、兵さんは何か面白いことをやる樣に思はれて、兵さんの遊びに行く尻をしたつた。

尤も、私達は、その頃の傲慢な百姓の子供が、一緒に遊んでくれないので、勢ひ、兵さんの跡を追つたせゐもあつた。日露戰爭前後の、

私達の村（熊本市外）の百姓は、比較的豐穰な諸作の收穫と、穀價の騰貴とで、百姓は身體を粉にすることによつて、小金を殘してゐたから、一體に自作農階級が傲慢な、ことにも一段下の階級である私達には特に、さう言ふ態度をとつた。

ある時、私は兵さんに從いて、龍田山に登つた。それは私達の村はづれ、田圃のつきるところ、坪井川の源であるところに重疊する山脈の一つの突起であつて、きのこのよく生えるところであつた。私は兵さんが、弟を負ぶしながら身輕にどん〳〵奧の方へわけ入つて行くので怖くなつた。

私はたうとう兵さんに取り殘されて、大聲出して泣きだした。小暗い密林のなかで、兵さんの姿は消えてしまつて、私は、今來た道さへ判らずに泣きだしたのだつた。私の泣きつかれた頃に、ひよつこり姿を現はした兵さんは私を見ると大聲で、どなりつけた。

「弱蟲野郎ッ……」

私は驚いた。内ではあんなに從順な兵さんのこの態度は、まつたく反逆だつたからだ。

「俺がかうして、樹の枝を一つ〳〵曲り角で、ヘシ折つて行くから從いて來い。」

兵さんは、そばの樹の枝を一つヘシ折つて示した。そしてドン〳〵先に立つて歩き出した。兵さんは、まつたく私といふものが足手まとひで、自分の自由な活動を障害するものの様に思つてゐたのだ。

私は泣いても追つかなかつた。

私は、ころんだり、傷したりしながら、猿のやうに敏捷な兵さんの後姿を追ひながら山中をかけて歩いた。

やがて、私達は麓へ出た。

麓のだん〳〵畑には、霜がれた薩摩芋の蔓が、畑一面に萎えてゐた。芋蔓が枯れる時には、地中の芋は、まつたく成熟し切つてゐた。私達は、お腹が空き切つてゐた。

兵さんは、あたりの野良に人かげのないのを見濟まして、畝の中に手を入れて芋を掘りだした。大きな芋が五ツ六ツころげでた。私は惡事を平氣で、しかも落ちつき拂つてやつてゐる兵さんの態度に驚いてゐた。

「默つてろ！　家へ歸つてからそんな事を言つたら、これ、これだぞ。」

兵さんはすごい目つきで私をにらめた。私は脅えながら肯いたのだつた。

兵さんは畑下の土手かげに、うづくまると、さつき、山で拾つて來た枯枝を集めて、どこで盜んで來たのか、マッチを出して火をつけた。それは本當に用意周到であつた。

「マッチを持つてゐると、兵さん、お巡りさんにとがめられるだらう？」

私は母なぞに、何時もさう言つて脅かされるまゝに、おづ〳〵と兵さんに言つた。

兵さんは返事もしなかつた。そしてこのどゐいばら少年はニヤリ〳〵笑ひながら、丁度、暑さに萎えた草が、雨にいきづいた時のやうに、ゆつくりと味ふやうに、めらり〳〵燃え上る焚火の下に芋を埋めながら、眼を細くした。

幼な心に、私は怖かつた。

「誰か來たい？　兵さん？」

私は、さう言つた。すると兵さんは、その例の眼をギョロリとさして、

「默つてろ！　どん百姓が何かのと言ふなら、山も野も原も燒き拂つてやる！」

兵さんは、すごい文句を並べた。弱い、晩秋の陽に、黄色く霜枯れた、かやすゝきが土手を一面に彩つて、山のくろまで續いてゐた。野燒が山火事になつた例は從來もあつたのだつた。

「兵さん、四郎ちゃんが來たぞ！」

ピク〳〵してゐた私の眼に、百姓の息子の四

郎次と次郎とが二人で斧をかついで、上の畑のくろをこちらにやつて來るのが眼についた。
　兵さんも、流石に悸としたらしかつた。そして、一寸腰をあげて、上の畑をのぞいてみた。
　四郎次と次郎とはすぐのとこへ來てゐた。
「どうしよう？」
　私は慌てた。モウ、然し四郎次は土手の上へ來て、私達を發見た。
「アッ！　お前達は芋を掘つたんだらう、ぬすと、ぬすとだ。」
　兵さんと同年くらゐの四郎次と次郎は大聲で喚きたてた。
「うんにや、俺は掘つたんぢやねえ、拾つたんだ。」
　私はどぎまぎしながら辯解した。四郎次の家は私の家の家主だつたし、私は全く大變なことになつたと思つた。
「譃言へ、兵が掘つたんだ、ちやんと掘つたあとがあらあ。」
　腕白の次郎は四郎次に先立つて下りて來た。手に天秤棒を持つてゐた。
　兵さんは、默つてゐた。四郎次と次郎は、かさにかゝつて毆らうとした。すると突然、
「よし。」
　兵さんは低く呻ると、サッと右手を前へ突きだした。次郎はワッと言つて尻餅をついた。兵さんの手には、三四寸の肥後守の小刀が握られてあつた。
　四郎次も驚いた。私もびつくりした。どうしてそんなものを兵さんが持つてゐたかと驚いた。四郎次と次郎とは逃げださうとした。
「逃げるな、逃げると打つた切るぞ。……いゝかい、家へかへつてから、この事をおふくろに話したら、これだぞ！」
　四郎次と次郎は全く慄へ上つてしまつた。
　しかし、私と兵さんが家へかへつた時は、四郎次のおつ母が來てゐた。そして脊の低いけちんばうの四郎次の阿母は、兵さんと私を見るとニヤリとした。仕事から歸つたばかりらしい跣足の父はしきりと、頭を下げて詫びてゐた。
　私は怖くて家へ這入れなかつた。四郎次の阿母が歸つて行くと同時に、私と兵さんとは、井戸端の柿の樹に、縛りつけられて、散々にひつぱたかれた。私はひい〳〵聲を出して泣いた。
「モウ、止したら……」
　母は止めてゐた。しかし父は止めなかつた。
　私は泣きながら、これは四郎次の阿母が言ひ付けたから、家主の手前こんな酷いことを父がするのだと思つた。私は心から四郎次と四郎次の母が憎かつた。
　私は毆られる度に、身悶えしたので、後手にくゝられた手が、荒い柿の肌で、むごたらしく擦り剝けた。
　然し兵さんは泣きもしなかつた。そして默つて毆られてゐた。父に肥後守やマッチを取り上げられて、
「まだこの後も惡いことをするか？」
と父に言はれてもおし默つてゐた。
「惡かつたとあやまれ、え、兵どん、あやまれ！」
　母はうろ〳〵しながら、しきりと強情な兵さんにあやまる事を勸めたのだつた。
　それ以來、四五日は兵さんも私も外出を禁ぜられた。四郎次と次郎とは兵さんの姿を見ると遠くから逃げだした。兵さんは無論復讐する心算らしかつた。
　母はなるべく兵さんと一緒には私を遊ばせない樣にした。
　その頃になつて、又ひよつこり兵さんの母、お近婆さんが何處からともなく此の村へ歸つて來た。私の母はすぐ兵さんをお近婆さんの許に返してやつた。それで私と兵さんが一緒に遊ぶこ

とも、あまりなくなつた。その後兵さんはある百姓家に奉公へやられたのだつた。

日露戰爭後の不景氣がやつて來た頃、私の家では殘飯賣りを止めたのだつた。そして日傭稼ぎを止した父は日露戰爭に從軍したので一時金百五十圓で馬を買つて荷馬車挽きを始めた。村の百姓家も穀價の多少の下落はあつたが蠶業と煙草の栽培が盛んになつたので依然勤儉貯蓄といふ風が奬勵されて、小作人が半自作農になる位の順調さがあつた。それに戰捷當時のしかも第十三聯隊麾下の私の村では在鄕軍人會が發展して青年達は軍國主義的な氣風と、私達細民階級に對する蔑視觀念が強くなつてゐた。

從つて私は小學校を卒業して活版屋の小僧になると、なほさら氣まづい村の青年達とは一緖に行動をするのが嫌で、市內の工場勞働者達の群にゐた。

その頃は兵さんも、もう一廉の若者になつてゐた。牛や馬と同樣に納屋の天井裏に、鼠と一緖に寢起しては酷き使はれながらも、兵さんは二十前後のちやんとした若者であつた。

小山の樣に澤山の桑の葉を擔いで、運んでゐる時の兵さん、村の休み日等に仲間外れにされて、しよんぼりと用もない、面白くもない私の家等に來て、屈託さうに時間をつぶしてゐる兵さんを、私は見かける度に、ほんたうに「あまり者」だと言ふ氣がした。牛や馬以上に從順であつても此の通り、モシ、從順でなかつたら、傲慢な百姓達は恐らく此の「あまり者」を打ち殺して了ふだらうと私は思つた。

ある晩だつた。村祭も間近くになつた。鎭守の境內に青年團の有志と言ふのが、ごた／＼集まつてゐた。そして何かのきつかけから、石燈籠の臺を擔ぎつくらをしてゐたのだつた。私は青年團にも入らなければ、また入れてもくれなかつたが、ブラ／＼見に入つた。

群の中に珍らしく兵さんの頰冠りしてゐるのが見えた。

石燈籠の臺が二ツ三ツ村の相撲の土俵の上に轉がつてゐた。

「こつちを擔げる奴は居ねえだらう。」

力自慢の一人が、二十貫以上もあらうと思はれる石を動かして見ながら言つた。

「あゝそいつあ駄目だ。」

十人餘りの若い者は小悧巧さうな顏をして腕組をしてゐた。兵さんもうづくまりながらそれを見てゐた。

私は兵さんのかうした仲間に加へられてゐることを嬉しく思つてゐるらしい眼付を見た。

一人前の若い者、ゆく／＼は、家の一軒も持つて、女房子供と共に暮らす安穩の日が、來るだらうことを信じてゐるらしい眼付が、嘗ての少年時代の兵さんを思ひ合せて、私は淚ぐましい氣になつた。

「兵は強いぞ、兵なら擔ぐかも知れない？」

若者頭の巳之さんが煙管をくはへたまゝ言つた。兵さんは實際強かつた。

「兵、一つやつて見ないか？」

四十餘りの巳之さんといふ若者頭は面白半分に言つた。

「うんにや、俺アだめだよ。」

兵さんは、謙遜してゐた。それにまた二十貫といふ石は、誰にしても擔ぎあげられさうになかつた。然し兵さんは、村の娘ッ子も立ちまじつて見物してゐる此の場で、自分の名を稱ばれた事が、彼の黑い顏をポッと赤くさした程、うれしいことだつた。

「ナアニ、お前ならやれるよ、やれ／＼。」

若い連中は煽てた。煽てる內心には、兵をひどい目に會はせて嘲笑してやるつもりである。それは自分たちが悧巧である事と、兵は自分達とは全然區別された別種の劣つた人間である事

を示すためには、いゝ機會だつたのである。

「サア、サア。」

傍にゐた若いものは、兵さんを、眞中へ押し出した。

兵さんは、從來の兵さんに見たことのないほどの善良さを現はしながらドギマギした。

「やれ、やらないと青年團から除名するぞ。」

今來たらしい四郎次が、冷笑を泛べながら言つた。大人ぶつた四郎次の顔を見ると、兵さんは一寸頭を下げた。四郎次は青年團の幹事である。

兵さんは、皆のからかひ半分の冷笑のなかに、着物を脱ぐと、件の二十貫以上もある大石をゆすつて見たが、さすがに自信がないらしかつた。それを見ると若い連中は、尚さら、おだてたり、からかつたり、脅迫したりした。私は癪にさはつて仕樣がなかつた。「やめろ、やめろ兵さん」と呼んでみたが、兵さんは決心したらしく、ウンと氣張ると、膝の上まで持ち上げた。

膝から腰へ、腰から胸へ持ちあげて來たが、とても腰がきれさうにもなかつた。私は「止せ、止せ」と叫んだ。

胸まで持ちあげただけでも、十分であつた。然し若い者は誰一人聲援する者もなかつた。氣取つた村の娘たちは、力んで顔をくの字なりに、ヒン曲げた兵さんを、あはれむやうに見てゐた。

呼吸を矯めてゐた兵さんは、ウンと唸りながら、殆んど奇蹟的な力で腰をきつた。が、石は肩に乗り切らないで背後に辷つた。

恐ろしい渾身の力であつた。が、若い者も娘も一齊に笑ひだした。それは、腰をきる際に無理な筋肉の緊張のために、プッと屁を放つたのが可笑しかつたらしい。

私は見てゐられないで、兵さんを引ッ張つてその境内を出た。

「兵さん、あの石を、四郎次にブッつけてやればいゝんだ！」

兵さんは、キョトンとして、私を見返した。

「おめえ、飼馬よりも馬鹿にされてんだぞ、馬鹿に……おい。」

暗がりで、私は泣きながら、兵さんの胸倉を押し搖すぶつた。

（大正一四、一一、一）

プロマイドを捨てる

一

——よウ、丸髷が似合ふぞ。

お澄の肩がポンと叩かれた。いつも遅刻しては、コッソリ彼女達の背後を通つてゆく差換工の佐久間だといふことは、俯向き加減の彼女には、判つてゐたが振向いて怒鳴りつける勇氣は流石に今朝は出なかつた。

——ナニ、丸髷？

——どれ、どれ、澄公が？

——おやツ、素敵だね。

キリンのやうに、首を延ばした文撰場の男たちが、彼女達の解版臺と向き合つてゐるケエスの上から幾つもの顔を並べて騒ぎ立てた。

——やい、何喰はぬ顏してんなんて圖々しいぞ。

活字が、バラ〱飛んで來て、まだホツレ毛さへ少ない彼女の丸髷に打つかつた。

でも、彼女はいつものやうに、小肥りの器用な指先で、八ポイントの活字を、ドッシリ持ち扱ひながら、トン、トン、トン……小箱の順に、漢字、假名、約物と選り別けてハタキ込みながら、ソツと下唇をかんでゐた。

——畜生ツ、到頭レッテルを貼つちまひやがつた。

文撰場の男たちには、あこがれの對象が、今朝からは一つ奪ひ去られた口惜しさがある——。

——いゝか、長さんに云ひ付けてやるぞ。

ノッポの銀公がまた云つた聲に、彼女は反撥的に心の裡で云ひ返した。——あゝ云ひつけな、あの人だつて、他から嫁さん貰つたぢやないか——。

彼女は、ゝゝ、やけにハンコをたゝいて持ちあげながら、さう云はれると口惜しくなつて、ふだんの彼女に似合はず、涙がころび出さうだつた。

彼女は、ツト眼をさげて、仕事臺の隅つこに飾つてゐる一枚のプロマイドを見た。それには彼女の結婚前の戀人、植字工の長さんに、眼と口許に甚く類似點を持つてゐる林長二郎が「人形武士」の若武士で、魅惑的な容姿で立つてゐた。

——アヽア、長二郎が泣いてらア。

執拗く、まだ覗いてゐる男達が、大げさに浴せかけた。そして活字がまた飛んで來た。

——何をしやがんだい。

堪りかねて振り向いた彼女の顔は、汗ばむほど紅く血が潮してゐた。

——ワッハヽヽ。

男達は、それで滿足した。

彼女は、口惜しかつた。瞼が熱くなつて來た。

——まア、まア、さう騷がれるうちが、まだ花だよ。

解版長の小母さんが、ニタ〱しながら、恰好のいゝ、彼女の髷を撫でて行き過ぎた。

しかし、彼女は決心した。——お晝食の時間にこの髷を壞してやる——。

二

彼女は、林長二郎のプロマイドを何十枚と持つてゐた。彼女が長二郎ファンであつたから、その優型の顔の輪郭にも類似點を持ち、彼女と同じ江戸ツ子の植字工の長さんに惚れたのか、或は長さんが好きであるところから、長二郎ファンになつたかは、彼女自身でも判別は

出來なかつたが、兎に角、彼女が長二郎のプロマイドを、電車賃を絞つて買ひ集めるのと正比例して、長さんと彼女との戀仲は、彼女達の工場では、誰も知らぬものはなかつたほどになつてゐた。

しかし、最近の、彼女の仕事臺の隅つこに日毎に姿態を變へて取り換へられる長二郎のプロマイドに、淋しい蔭がクッキリと印されて來た。

長さんは、他から嫁さんを貰つてしまつた――。

彼女達は、最後の媾曳を、白鬚橋の袂で、泣いて別れたのである。

――いつそ、大阪まで二人で飛んぢまはうか？

長さんは強い決心を見せて、かう云つたが、

――一緒に稼ぎや何とかなるわねえ。

彼女も、かう答へても見たが、二三年前なら兎に角、この不景氣に大阪へ飛んでも、職に有りつけようなんて望みはまづ無かつた。現在の工場に、大阪から舞ひ戻つた手合が、たかりに來るときの話でも、よく判つてゐた。

彼女は、老母に三人の弟妹の扶養義務を背負つてるやうに、長さんにはそれ以上の家庭負擔があつた。俠氣のある工場の職長が、二人をまとめてやらうと奔走したにも拘らず、彼女達が工場で唄ふやうな

まとまるものならまとめておくれ
いやでわかれた仲ぢやない――。

文句以上の、成行きになつてしまつたのだ。

そして、長さんは、出來うるかぎり家庭的係累のない女を發見けて結婚させられたやうに、彼女は越後出の一人ぼつちで、小男のあてや（印刷工）と、つい一昨夜、所謂蠟燭の典（華燭の典をもじつて彼達はかう云ふ）を擧げねばならなかつたのである。

つれて逃げても手に職なけれや
猫に紙袋で、あともどり――。

だるい聲で、無意識に唄つてゐる文撰場の男たちの聲を聽いてゐると、彼女は頭が餘計重く〳〵なつた。頓馬で、コセ〳〵してゐる、三十位にも見えれば、二十歳位にも見える新らしい亭主の、女のやうに白い、腋臭の臭のする肌が、まだこびりついてるやうで嘔氣すら催して來た。

――あんとき駈落したら何とかなつたのか知れない――。

彼女は、こんな後悔も湧いて來た。長さんは嫁を貰つてからすぐ、二月も以前に他の工場へ鞍替してしまつた。そして媾曳の機會も絶たれてしまつたのである。

――長さんだつて、今の嫁さんを好いてるわけぢやない――。

練馬村からポッと出の、あの百姓女に、長さんが、眞から好きになれよう道理はない。彼女は、長さんの氣持をよく知つてゐた。だが、それだといつて自分をいつまでも、以前のやうに想つてゐてくれるだらうか？

――おや？　頭髪こはしちやつたのかい？

解版長の小母さんが、背後を通りかゝつて、むつちりと小肥りの彼女を肩越しに覗き込んで、櫛卷の頭髪を撫でた。

――え？　頭髪が重くつてしやうがないもの。

多少甘つたれた彼女の言葉を、小母さんは皮肉にとつて、ニヤ〳〵した。

――御馳走さま、お頭も重いでござんせうよ。

肩をたゝかれて彼女はハッとしながら、思はず赧くなつたが、次の瞬間、怒つた顏を見せて、

――だ、だれが、あんな男――。

彼女は、ジリ〳〵する口惜しさが、泥に汚れてだん〳〵解け流れる雪のやうに、腹の底に溜

つてゆく淋しさがたまらなかつた。

――長さんに逢つて、ウンと、ありつたけを云つてやりたい。

眞ッ黑く汚れた指で、汗拭きをつまみあげながら、滲んで來る額の汗を拭いて、ホッと嘆息を吐いた。

が、丁度そのとき、ガヤ〳〵してゐる雜音の中に、フト際立つて緊張した言葉が、彼女の頭髮をピンとさした。

――おい、文京社が爭議だとよ。

――縮少で、二十人も馘首だつてさ。

文京社？　神田の文京社は長さんの勤め先きだ。それでどうしたらう？　彼女は仕事の手を止めて、隣りの松ちやん達と同じやうに、首だけを捻ぢむけて、何時もさうした騷ぎの中心になる文撰場に注意した。

――ひでえなア、解雇手當三日分で、追拂ひだとさ。

突つぱしりの銀公が、出目金魚のやうな眼玉をキヨロ〳〵させて、喚き廻つた。

――で、文京社から誰か來てんのか？

植字場でも、ステッキをおいて、出て來た男達が云つた。

――ウン來てるよ。

使ひ屋の少年工が、得意氣な顏で云つた。

――工場の裏口に踞んで待つてるよ、寄附金を集めるんだつて――。

植字場の男達は、セカ〳〵した調子で、

――誰か、誰か知つてる者は來てないか？

すると銀公がひき取つて云つた。

――長さんが來てるよ、長さんが――他の二人は俺ア見知らねえ――。

三

――よかつた。壞してしまつてて。

彼女は、頭髮にちよつと手を觸りながら、階下の工場裏に踞んでゐる長さんを、覗いて見ようかと思つたが、他の男達が云ひ出した。

――上つて來いと云へ。ナニ構ふこたあねえ、長さんに上つて貰つて樣子を聞かうぢやねえか――、なアおい。

――あ、それがいゝ、工場規則なんか構ふもんか――。

男達は、中央の職長臺から少し離れたところで、圍り合つてゐた。文撰場も植字場も一時怠業狀態であつた。彼等は五人、十人と一緒に集團すると、平氣で職長の存在を無視する勇氣が湧いて居た。

――こちとらだつて、危えもんだ。

植字場で一等古く勤めてゐるシャツ一つの老人が云つた。彼は停年期間が近づいてゐる理由で睨まれてゐることを意識してゐた。彼等全體が、慢性になつてゐる失業不安の痛みが、胃痙攣のやうに、すぐ眼前に疼き始めてゐるからだ。

――來るよ、いま裏の入口を開けて來たよ。

頭部の太かい、少年工の清公が、勢よく飛び込んで來た。

――長さんが、演說するつてさ――。

ほう!?　皆は顏見合してニヤ〳〵した。――えれえぞ――。

お澄は、初めて、長さんと媾曳したときのやうに、ドキ〳〵してゐた。三月もフッツリ逢はなかつた男であつた。人目の隙があつたら、何を云つてやらう。ジリ〳〵してゐる口惜しさをたゝきつけてやらうか？　そしたら怒つちまふだらうか？

名ばかりの、ホンの工場法の申譯につくられた裏の梯子からの入口に、彼女は長さんの姿を待つた。澁くて細かい市松格子かなんかの單衣に、平ぐけの博多なんか、グッと下に結んで、ゆつくり擴げた素肌の胸下に、純白のさら

いの腹帯をちよいと覗かしてゐる長さんの小粋な澁いつくりが、彼女の眼底に殘つてゐた。

おや？　しかし驚いたのは、彼女ばかりではなかつた。スッと入つて來た男は、坊主ッくりの霜降りズボンに黑い上着かなんかの、長さんだつた。

――やあ――。

元氣よく近づいて來た長さんは、ボク〳〵の古短靴を踏鳴らせて、皆に一々會釋した。

――ひでえことになりやがつた。

額の汗を拭いて、グル〳〵職長臺の方を見やつてから、ズボンのかくしから「奉加帳」をひつぱり出して云つた。

――實あかうなんだよ。

彼は、テキハキした言葉と態度で、爭議になつた理由を話し出した。

皆は、キョトンとして、長さんの喋るのを聽いた。長さんは、すつかり以前と容子が變化つてゐた。――この男は、まあどうしたんだらう？

ケエスの蔭、解版臺の背後から、男も女も立つたり蹲んだりして、職長の禿頭がポッンと取り殘されて職長臺で澁面つくつてゐる以外は、皆、長さんのぐるりを取りまいて、熟睡してゐるときのやうに、口を開けて話を聽いてゐた――。

お澄は、自分の存在が、ひどく氣になつた。長さんの眼が、自分の顏を捜しあてたら、何かありさうな氣がした。

しかし、長さんは、平氣で爭議に移らなければならなかつた理由を、だん〳〵熱を帶びて、演說口調に聲をたかめて喋つてゐる――奴らは、二口目には、不景氣だから、不景氣だからつて云ふ。勿論不景氣にや違ひねえ、だがいつたい、そのあがきもつかねえほどの不景氣にや、誰がしたんだ!?

――んだ、んだ――。

秋田訛のゲラ運搬屋が、低能な聲で應じたが、皆は平常のときのやうに、その秋田訛を笑はなかつた。

お澄の顏が、前に立つてゐる男の蔭から、だんだん喰み出して來た。皆の顏を見廻して喋つてゐる長さんの眼が、彼女の瞳にぶつつかつても長さんの顏色には、チラとも動搖がなかつた。

彼女は、少し不滿になつた。

あの女泣かせの、あの眼は、どんな小つぽけな感情でも現はれないことはない筈だつた。

――それとも、自分にすつかり愛想つかしてるのか？

彼女は、髷を潰した櫛卷頭を俯向けて、足許を見た――それとも、自分が婿を貰つたことを知つて、嫉妬て怒つてるのか？

男の眼色が讀めなかつた。――讀めないばかりではなく、長さんの眼色は何も示してゐないのだ。あの男は自分をすつかり忘れてゐる――。

彼女は、たとひ婿は貰つても、今日までの心中立てが口惜しくなつた。彼女は、皆の間を擦り拔けて自分の仕事臺へ歸つて蹲んでしまつた。

――よし俺が、奉加帳の筆頭をやらうぜ――。

一通りの話が終ると、ノッポの銀公が、長さんの手から奉加帳を引つ奪くつた。

――止せ、止せ、汝なんかせい〴〵二貫くらゐで筆頭されたら奉加帳が泣かア。

植字場の世帶持連が、またそれをとりあげた。――おやぢ(職長)に書かせろ、おやぢにウンと書かしちまへ――。

――んだ、んだ――。

――よし、皆で行け。

彼等は奉加帳をさしあげて、職長臺をとり

捲いてしまつた。

――あたい達、どれ位出しやいゝの。

解版場は女達だけで、小母さんを中心に相談し始めた。いつもこんなときの喋ぎやのお澄は、ぼんやりしてゐた。

――二貫だよ、あたい達はね、だつて、植字が五十錢で、文撰が三貫でせう。ねえ。

小母さんが、最後の決定をした。廻つて來た奉加帳に、針のやうに痩せた字や、當人だけしか讀めないやうに崩れた字が、河岸に上つた魚のやうに、てんでに寢轉がつてゐた。

彼女は、さつさと、蟇口から錢を出して、小母さんに渡すと、便所へ下りて行つた。

――馬鹿にしやがつて――こつちから口なんか利くもんか。

自棄氣味に、手洗をガチャ〳〵させながら――すつかり、二月以前とは容子の違つてしまつた男が癪にさはつた。

梯子を上つて、差換臺の後を廻るとき、ボクボク短靴の音が近づいて來るのを彼女は知つてゐた。

――おい……。

振り向かなくても、その聲は――彼女を流石にドキ〳〵さした。彼女は强情に振り向かずに默つて立つてゐた。また男の聲がした。

――おい……。

口惜しくも、その聲音に、急に崩折れてゆく自分の氣持が、齒痒かつた。

――なあに……。

白ばつくれて……努めて平氣に、振り向いたが、視線は外ッ方向いてゐた。

――電車賃貸してくれ……、爭議が終つたら返すよ……。

男の聲も急いてはゐるが、ひどく事務的であつた。彼女はそれが面白くなかつた。

――長さん！

眞正面に振り向いた彼女の眼は、熱くなつてゐた。しかし、男は、平氣で見下ろしてゐた。

彼女は、ガクリと顏を落して、しばらくしてから干凋びた調子で云つた。

――窓から抛るわ……。

男の心が、益々わからなくなつた。彼女はそのまゝ仕事臺へ歸つて、着物置場から蟇口を持つて來た。

そして、小さな紙片に鉛筆を舐めながら、何か書くと、たゝんで蟇口に入れた。

他人に氣付かれないやうに、窓下へ近よると、長さんは二階を見上げて立つてゐた。

手垢に黝ずんだ小さい蟇口が、垂直に落下して行つた。長さんが受取つて蟇口から、さつきの紙片をとり出したのを見屆けると、彼女は、ピシャンと窓を閉めた。

四

お澄は、それから髷に結つて來なかつた。

五六日經つた或朝、彼女は三十分ばかり遲刻して出て來た。

さつぱりした洋髮で、コッテリした下町好みの半襟まで、單色の無地に取換へてゐるのが、同僚の女達に眼についた。

――遲くなつて――濟みませんでした。

彼女は元氣よく解版長に挨拶した。

人の好い小母さんがニタ〳〵して、またからかつた。

――まあ、まあ、澄ちやんにや、當分皆勤はとれないさ。お互ひ覺えのあるこつたから……。

他の女達が、擽られるやうに笑ひ出した。

――さうーウ、ぢやまあ當分お目こぼしを願ひます。

彼女は、さつぱりとすりぬけた。

――おやまあ、圖々しく手放しだわね、怒らなきあ駄目ぢやないか――おい淸公、澄ちやん

が使ひがあるんだとさ――。

しかし、彼女は、今朝はすつかり元氣になつて、落着いてゐた。

男の氣持が、よく判つた。――彼女達は三晩も媾曳した結果だつた。男は三ケ月ばかりのうちに、すつかり變化つてゐた。長さんは、勞働組合に所屬していろんな本を讀んでゐた。そして矢張彼女を愛してゐたのだ。長さんは、昨夜、日比谷公園で別れるときから云つた。

――俺達は、いま戀愛よりも何よりも、勞働者としての本家の鬪ひに參加することだ。俺はお前を誰よりも愛してゐる。だけど、それをいつしよにさせなかつたのは誰だ？　どいつがしたんだと、お前は思ふか？

誰が、どいつが、彼女達を夫婦にさせなかつたか？　彼女は、昨夜から考へてゐる――大體は判つたやうな氣がした。

――妾も、勉強するわ。

彼女はさう云つて別れた。

スペースとインテルとを選り分けながら彼女は昨夜長さんが唄つてゐた文句を唄ひ出した。

奴らが樂しむ劇場も……奴らが飛ばす自動車も――

そのとき、不意と、隅つこに飾つてゐるプロマイドに氣がついた。「人形武士」の長二郎が、落し差の心意氣で、朧夜の丸窓の下に、そゞろ戀人の憶ひ出を懷しむ風情であつた。

彼女は、ぢつとそれを見てゐるうちに、馬鹿馬鹿しくなつた。彼女の長さんは、もうそのブロマイドの何處にも住んでゐなかつた。

彼女は手を延ばして、サツと剝ぎとると、仕事臺の下にある屑籠に抛り込んだ。

――必度勝つて見せる――と云つた長さんの方の爭議は益々激しくなつてゐた。

彼女は、職業的な器用さで、高麗鼠のやうに素ばしこく、ポン、ポン、ポン……と音をたてながら、また唄ひ出した。

みなおれたちが血と汗の――。

（一九二九、八、二三）

馬

私は馬が好きです。

それも、駄馬が、一ばん私には、親しみを感じます。

で、あの、ちやんととりすました、貴公子を乗せて、毛並のきれいな、恰好のいゝ馬は私は、嫌ひです。却つて私自身が侮辱されてるやうな氣がするからです。

馬の中には、隨分、あばれる馬もゐます。神經の尖つた半狂亂な馬もゐますが、それでも、私は、暴れ馬でも、私は好きです。

可哀さうな馬！

暢氣さうな馬！

暴君のやうに威張つた馬！

曠限に、放たれたまゝの馬などは、都會の馬に見ることの出來ない、人なつこいところがあるものです。

馬は、他の動物よりも並外れて、大きい眼を持つてゐます。馬の眼の青黑い瞳は、ずゐぶん大きいです。

睫毛が、その瞳に影をうつすくらゐで、疲れ切つて、まだ遠い道を歩かねばならない時などは、その睫毛が二三度、こまかに動くと、大きな涙粒が、ひとりでに、その瞳を潤してしまふのです。

馬が泣くのを見てゐると、ほんたうに、共に泣かされてしまふものです。

私が十四で、弟が十一のときでした。

いつもなら父と二人で、ゆくのですが、父が病氣で寢てゐるために、私と弟と二人で、馬を牽いて、仕事に出てゐました。

ある日、私達は、夜の十時頃から、氷詰にした魚を澤山積んで、七里ばかり距れてゐる、植木と云ふ町へ、行かねばならなかつたのでした。

私の馬は、八歳ぐらゐで、栗毛の駒でした。

私が手綱を握つて、弟が提灯を持つて歩いてゐました。

しかし、町を出てしまつて、野道にかゝつて來たころには、弟が疲れて來た樣子でしたから、荷物を積んだ車の上に乘つけて、ときをり唄なんど唄つて歩きました。

眞暗な晩でしたので、空には星なんか見えません。涯しのない野原は、都會に棲んでゐる子供さん達には、到底一人歩きなんか出來ないくらゐ淋しいものですが、私達は、ちよい〳〵父に連れられて歩いてゐるので、割合に淋しいと思はないのです。

三里あまり歩いたと思ふころから、何んだか雨催ひになつたのです。私は、車の上でいつか眠つてしまつたらしい、弟を呼び起して、荷物に雨具を被けました。

私と弟とは、すつかり心配し始めました。その前の日も、雨が降つてゐるので、これに降られては、金釘の難所が、うまくゆくかしらんと、氣遣ひはじめたのです。

一本松の茶店を過ぎたころ、雨がドッと降つて來ました。

「困つたなあ。」

私は心配で、馬を止めて、馬に筵を被せて、風邪をひかないやうにしながら眞暗な空を見上げて、雲行きと、雨あしを圖つて見たのです。

父に敎はつたりしてゐる經驗で、西の空と、

南の空から、すばらしい勢で、薄雲のやうな比較的明るい空へ、眞黒な雲が、ヒタおしに蔽ひ冠つて行くのを見て、これはひどい雨になると思つたのです。

弟の半纏も、私の半纏も、みる〳〵中に雫がポタ〳〵垂れました、雨合羽は父のが一枚きりより外にないのです。それで、私は、提灯を消さないやうに、身體を前かゞみにして大きな小田原提灯をかい抱いてゐる弟に、その合羽を着せてやりました。

私は「困つたなア」と思ひながらそれでも元氣をつけて、馬の平首をたゝいて、坂道にかゝると「ホラ、ホラッ」と掛聲しながら歩きました。

私は道が段々に、泥濘になつてゆくのが一ばんしんぱいでした、車や何かを挽いた人でなければ、その味が分らないでせうが、この道路がわるいほど、私達にとつて心配はありませんでした。

雨は、ます〳〵土砂ぶりになつて來ました。

初夏の頃ですが、夜更けのことではあり、冷たさが身に沁みます。

馬も疲れたらしく、しきりと、首や顔を、私の顏にくつつけて、足を鈍らすのです。

でも、この雨が一時間や二時間で歇みさうもなし、また少しでも雨の降つた時間が永ければ永い程、金釘の難所がひどくなるだらうと思ふと、無理矢理に、馬の手綱を、ヒウ〳〵とひきしぼりながら、馬をひつぱたいて急がなければなりませんでした。

荷が重くなつては不可ないので、弟も車の上には乘せませんでした。

「サッサと歩け!! そしたら暖かくなる。」

私は弟をも怒鳴りつけました。弟は轉びさうになる泥濘を、それでも、元氣よく歩きました。しかし、柄が小さいだけに、深みに足をとられて、倒れさうになるたびに、提灯を消してしまひます。

「コン畜生! しつかりしろ!」

性急の私は、惡いと思ひながら、いきなり足をあげて蹴飛ばします。

いよ〳〵、私達荷馬車を挽く仲に、最も怖れられてゐる難所の金釘にかゝつて來たのでした。

急坂の一町ばかり手前で、私達は馬を止めて息を入れました。

「兄ちやん、大丈夫かな。」

弟は全身泥にまみれて提灯をかゝへながら私を見上げて云ひます。

「なアに…」

私は元氣をつけて云ひました。そして車の抽出から鎌をとり出して提灯の灯りで、草を少し刈つて來て、馬に喰ませました。馬は大分疲れてゐるらしく、一寸銜へたまゝ、フウ〳〵息を吐いてゐます。

「兄ちやん、ウンと草臥れてるぜ。」

馬が草を直ぐ喰まうとしないのを見て、弟は云ひました。私は帽子を脱いで傍の溜りから、濁つた水を汲んで來て、馬に呑ませました

そして、私達も車の上に腰かけて、握り飯を食ひました。グショ〳〵に濡れた澤庵は味も何も無かつたんですが、それでもよかつたのでした。

一寸、小降りになつたのを見て、私達は手綱をとりました。弟は竹切れを拾つて來て、馬の向う側に廻りました。

「いゝか、たのむぜ。」

馬は平首を叩かれて、頷くやうに胴ぶるひ一つすると前足をガッキと踏みたてました。

「ホラ、ホラッ。」

私も、手綱を車の梶棒に結はひつけて、肩にかけて、引張りながら、この急坂の中溜りまで引きあげようと、思ひました。弟も車の横を

驅け出しながら、馬の尻を叩きます。
泥濘は、とてもひどかつたのでした。車の半ばは埋まつてしまふ程でした。狭い坂道の左手へ少し横切らうものなら、二三間あまりの崖で、その下は、沼みたいな田圃になつてゐるのです。

「サア、もう一息だ。」

から云つたけれども、その時は、馬も弟も私も、殆んど疲れ切つてゐました。

「ソラッ！」

馬も一生懸命です、私も必死でした、しかし、泥濘は、車に吸ひついたやうに、一寸も動かうとしません。

荷物の魚は、夜が明けるまでには、植木の魚問屋に下ろさないと役に立たなくなるのです。

車がわづかに動きました。

「ホラ、ホラ。」

弟は泣きながら、竹切れで馬の尻を叩きます！

坂の七分目まで來て、馬は動かなくなりました、馬は前足を折つて、泥の中に坐つてしまひました。荷を輕くしようにも、上積の重いのは、子供の力で下せようもありませんでした。

「畜生！　意氣地がねえ。」

私も滅茶苦茶になつて、馬のたてゝ髪を引張りましたが、馬は死んだやうに、わづかに首を動かしたきり、折つた足を再び踏み立てる元氣はありません。

「兄ちやん、どうしよう……」

弟はおろ〳〵しながら、提灯をかゝへて泥濘へ坐りました。提灯の灯りの下に、平首を擦り付けてゐる馬の大きな眼には、涙がいつぱい溢れてゐました。それを見ると、私も堪らなくなつて、弟と二人で馬の平首にとりついたまゝオイ〳〵泣き出してしまひました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

私達はそれから一時間ばかりして、同じ植木通ひの仲間にたすけられて、やつと坂を越すことが出來ましたが、ほんたうに馬くらゐ正直な動物はありません。私は、今でも荷車を引張つてゐる馬などを見ると心から親しみを感じます。

馬は泣くばかりでなく、よく笑ふことがあります、しかし東京あたりでは、笑ふやうな、のんびりした馬は少いやうです。

（大正一四、六、七稿）

眼

「ね、あんた、今のうち、尾久の家（親類）へでも、行つちやつたがいゝと思ふんだけど……」

　女房のお初が、利平の枕許でしきりと、口説きたてる。利平が、爭議團に頭を割られてから、お初はモウスツカリ、怖氣づいてしまつてゐる。

「何を……馬鹿な……逃げ出すなんて、そんな……アツ、ツ、ツ。」

　眼をむいて、女房を怒鳴りつけようとしたが、繃帶してゐる毆られた頭部の傷が、ピリヽヽとひきつる。

「だつてさ、あんた……」

　お初は、何かに追つたてられるやうに、

「あんた、爭議團では、また今朝、變な奴らが、澤山何ツかから、來たんだよ……あんな物騒な奴らだもの、あんた、ほんたうに、命でもとりかねないよ……あれ、ホラ、あんな澤山ガャヽヽ云つてるぢやないの、聞えない？」

　聞えないどころか、利平の全神經は、たつた一枚の塀をへだてて、隣りの爭議團本部で起る一切の物音に對して、測候所の風見の矢のやうに動いてゐるのだ。

　ナ、何を馬鹿な、俺は假にも職長だ、會社の信任を負ひ、また一面、奴らの信頼を擔うて、數百の頭に立つてゐるのだ……あンな恩知らずの、義理知らずの、奴らに恐れて、家をたゝんで逃げ出すなンて、そんな侮辱された話があるものか。

「うるさいツ……あんな奴らはストライキで飯を食つて歩いてる無頼漢だ。何が出來るものか……うるさいから階下へ行つてろ、階下へ行けツてば……」

　お初は、仕様ことなく、赤ん坊を抱いて立上つたが、不安は依然として去らない。

「あたしはおろか、子供たちだつて、外出も何もあぶなくて出來やしない。」

　口のうちで、ブツヽヽ云つてゐる。

「おい、おい、階下にゐる警察の人に、川村檢擧りましたかつて、聞いて來い。」

　昂奮すると猶のこと、頭部の傷が痛んで來た。醫者へもゆけず、ぐるヽヽにおしまいた繃帶に血が滲み出てゐるのが、黒い塀を越して來る外光に映し出されて、いやに眼頭のところで、チラチラするのである。

　恩知らずの川村の畜生め！　餓鬼時分からの恩をも忘れちまひやがつて、俺の頭を打ち割るなんて……覺えてろ！　ぶち込まれてから吠面掻くな……。

　仰向けに、天井板を見つめながら、ヒクヽヽと、うづく痛みを、ヂツと堪へた。

　會社がロックアウトをして以來、モウかれこれ四十日である。印刷機械の錆付きさうな會社の内部に在つて、利平達は、職長仲間の團體を造つて、この爭議に最初の間は「公平なる中立」の態度を持すと聲明してゐた。尤もそれを信用する爭議團員は一人もありはしなかつたが……しかし、モウ今日では、利平達は、社長の唯一の手足であり、杖であつた。會社の浮沈を我身の浮沈と考へてゐた。彼等は爭議團員中の軟派分子を知つてゐた。またいろヽヽの團員中の弱點も知つてゐた。それで第一に行はれたのが、「切り崩し」「義理と人情づくめ誘拐」であつた。しかしそれも大した功を奏しなかつた。そこで今度は、スキャップ政策をとつたが、そ

れも鞏固な爭議團の妨碍のために、豫測程の成功ではなかつた。トラックの中に、荷物の間に五六人のスキャップを積み込んで、會社間近まで來たとき、トラックの運轉手と變裝してゐた利平が、ひどくやられたのもこのときであつたのだ。

それでも、職長仲間の血縁關係や、例へば利平のやうに、親子で勤めてゐる者は、その息子を會社へ送り込んで、どうやら二百人足らずのスキャップで、一方爭議團を脅かすため、一面機械を錆びつかせない程度には、空の運轉をしてゐたのである。

「君、會社の中で養生してゐた方がいゝぜ、爭議團本部と、くつつき合つてゐる君のうちなんか、まつたく物騷だよ。」

仲間にも、しきりと止められた利平であつたが、剛情な彼は肯かなかつた。たかが多勢を恃んで、時のハズミでする暴行だ。命をとられる程のこともあるまいと思つた彼であつた。刑事や正服に護られて、會社から二町と離れてない自分の家へ、歸つたのだつた。そして負傷した身體を、二階で横たへてから、モウ五六日經つた朝のことなのである。

お初が、上つて來た。

「檢擧られたんですとさ、川村が。」

「何時だ、昨日か？」

「昨夜ですとさ、いゝ氣味だね、畜生、恩知らずが、昨夜ひどい目に逢はしたんだつてさ。」

「フーム。」

利平は、グッと頭部の痛みが、除かれたやうに瞬間感じたのである。社會主義者みたいな、長い頭髮と、賢さうな、小さいがよく冴えた眼の川村が、急に、小さく〳〵哀れつぽくなつたやうに思はれて來た。十二三歳の小兒のころから、怒鳴りつけられたり、毆りつけられたりしながら、自分に仕事を教はつてゐたあの頃の、川村の顏が、あり〳〵と彼の眼に映じて來たのだ。

一昨日の晩も、二三十人檢擧され、その十日ばかり以前にも、百四五十人檢擧された爭議團である。いくら三千人からの爭議團とは云へ、利平たちから考へれば、あまりにもその勝敗は知れきつてゐた。

「爭議が濟んだら、俺が貰ひ下げに行つてやらう？」

そしたら奴らどんな顏するだらう。

彼は、何だか、眼前が急に明るくなつたやうに感じられた。腹心の、子飼の弟子ともいふべき子分達に、一人殘らず背かれたことは、彼にとつて此上ない淋しいことであつた。川村にしても、高橋にしても、齋藤にしても、小野にしても、其他十數人の、彼を支持する有力な子分は、皆組合の手に奪はれてしまつたのだ。

それを、いま自分が、爭議中の一切の恨を水に流して、自ら貰ひ下げに行くことは、どれだけ彼らに大きな影響を與へることだらう。

まだ組合なんか無かつた頃の、皆可愛い子分達の中心に、大きく坐つて、祝杯などを擧げた當時のことなどが、彼に甦つて來た。

「そんな、ひどい目に遭はしたのか？」

利平は、蒲團の上へ、そろ〳〵と、起き上つた。

「だつてさ。」

女房は、すこし、不審しさうに、利平の顏を見た。

「かまやしないぢやないの、あんな恩知らずだもの。」

「ウム、それやさうだが！」

彼は、女房の手を離れて、這ひ出して來た五人目の女の兒を、片手であやしながら、窓障子の隙から見える黑い塀を見てゐた。

丁度、そのとき・・・塀向うの爭議團本部で、

「ばんざーい、ばんざーい。」
と高らかに、叫ぶ聲があがつた。
五十人も、百人もの聲である。
「何だらう？」
夫婦は、眼を見合した。
「どれ……」
お初が起つて行つた。そして怖々に、障子を開けて塀越しに覗くと、そのまゝ息を凝らしてしまつた。
「何だ、どうした？」
それでも、お初は默つてゐる。
利平は、傷みを忘れて、赤ン坊を打つちやつたまゝ、お初の背後に立つた。
と、其處は、本部の裏緣が見えて、緣下の土間まで、いつぱいに、爭議團員が、ワイ〳〵云つて騷いでゐるのが、眞正面に展開されてゐる。
緣の上には、三十人の若い男たちが、折柄の寒中にもめげず、スポリ、スポリと勞働服を脫いで、眞ツ裸だ。
「猿股も脫しちまへ、とてもたまらん。」
と云ひながら、眞ツ赤になるほど、身體中を搔いてる男もある。
「アラ、まあ大變な虱よ。」
赤い襷をかけた女工たちは、甲斐々々しく脫ぎ棄てられた勞働服を、ポカ〳〵湯氣の立ち罩めてゐる桶の中へ突つ込んでゐる。
「おい止せよ、女の眼前で、そんなの脫がすのは止せよ。」
「止せたつて……、おいお前たち、女の人は、一寸向うを向いててくれないか。」
「アッハヽヽヽ。」
「オッホヽヽ。」
男も女も、ドッと哄笑する。
「どうしたんだらうね、何なの？」
お初は、利平にそつといふ。しかし利平は默つて答へないが、いふまでもなく、それは今朝、留置場から放免されて歸つて來た爭議團員たちを、他の者たちが歡迎してゐるのだ!!
利平は驚いた。暗い處に數十日をぶち込まれた筈の彼等の、顏色の何處にそんな憂色があるか！　欣然と、恰も、凱旋した兵卒のやうではないか！……迎へるものも、迎へらるゝものも、この晴れ晴れした哄笑はどうだ!!
暖かい、冬の朝暾を映して、若い力の裡に動いてゐる何物かが、利平を擊つた。緣端にずらり並んだ數十の裸形は、その一人が低く歌ひ出すと、他が高らかに和して、鬱勃たる力を見せる××歌が、大きな波動を描いて凍てついた朝の空氣を裂きつゝ、高く彈ねつゝ、擴がつて行つた。
……民衆の旗、×旗は……
一人の男は、跳び上るやうな姿勢で、手を振つてゐる……と、お初は、思はず聲をあげた。
「アッ、利助が、あんた利助が？」
お初は、利平の腕をグイ〳〵引ッ張つた。
「ナニ利助？」
まつたく！　目を瞠るまでもなく、つい眼前に、高らかに、咽喉ふくらまして唄つてゐる裸形のうちに、彼が最愛の息子利助がゐたのだ！
利平は、呆然としてしまつた。
そんな筈はない……確かに會社の中へ、トラックで送り込んだ筈の利助だつたのが……しかし、まがふべくなく利助は、素ツ裸で××歌を歌つてゐるのだ。
「皆さん、着物を着て下さい。御飯も出來ましたよ。」
女工の一人が大聲で云つてゐる。女達がてんでに、お櫃を抱へて運ぶ。燒かれた秋刀魚が、お皿の上で反り返つてゐる。
「これはどうしたことだ？」
利平は、半ば泣き出したい氣持になつた。利

助、利助。」女房は、塀越しに呼びかけようとした。

「馬、馬鹿ッ、默れ。」

利平は、女房の口に手を當てて、默らせた。

「さあ、引ッ込め、障子を閉めろ。」

利平は、障子に手を掛けたとき、ひよいとモ一度、利助の方を見た。

そのとき、知つてゐたのかどうか、利助は着物を着ながら、此方を振り向いた。そしてぢつと、利平の顏を見た……と思つた、その眼、その眼……。

利平は、あわてて障子を閉め切つた。

「あの眼だ、あの眼だ、川村もあの眼だ!」

利平は、おしつぶされるやうに、寢床に坐つてしまつた。

「あんた、利助はどうして會社から脱け出したんだらう……え、あんた。」

利平は、頭をかゝへて默つてゐた。

爭議以前から、組合の用事だと云へば、何かにつけて飛んで行つた利助である。利平の云ふまゝになつて、會社へ送り込まれるといふことからして、今から考へれば、少し變には變だつたのだ。

「コレぢや、まるで、親も子も、義理も人情もあつたもんぢやない。」

利平は、咽喉がつまりさうであつた。それに熱でも出て來た故か、ゾッと寒氣が背筋を走つた。

彼は夜具を、スッポリ頭から冠つて、眼を閉ぢた。いろんな事が頭をひつかき廻した。

あのときも……。

四五人のスキャップを雇ひ込んで、××町の交番横に、トラックを待たせておいて、モ一人の家へ行かうと、屈つた露路で、フト、二人の少年工に發見け出したのだ。幸ひだと思つて、「オイ、三公、義公。」と呼んだら、二人は變裝してゐる自分を、知つてか知らずにか、振り返つて近づいて來た、と、二人は「宮本利平だ!」と、冷たく云ひ放つて、踵を返してバタ〳〵逃げ出してしまつた。奴らは見張をしてゐたのだ。生意氣に「宮本だ」と、平常親より怖れ、また敬つてゐる自分へ、冷たく云ひ放つたときも、あの眼だ。

トラックを急がせて、會社近くの屈り角へ來たとき、不意に横合から、五六人の男が、運轉手臺へ飛び掛つた。スハと思つて、身がまへしたとき、運轉手臺の後の窓を破つて、ジリ、ジリ、と詰め寄せて來た時の、あの川村の眼……。

「あの眼は、親だらうと、恩人だらうと殺しかねない!!」

利平は、身内を、スーッと走る寒さに似た恐怖を感ぜずにゐられなかつた。

「おい、支度をしろ、今日のうちに、引越してしまはう。」

おど〳〵してゐる女房に、かう云つた利平は、先刻までの、自信がすつかりなくなつてキョロキョロしてゐた。

(昭和三、一〇、八稿)

カツトされない場景

――落ちた、九連城が落ちた――。

けたゝましい叫び聲が、町の方から飛んで來た。號外賣の鈴の音と一緒くたになつて、鋭い叫び聲が、村の方へ飛んで來た。

――直ッ。

裏の野菜畑にゐた母が、悸とした顏色で私へ怒鳴つた。私は裏の柿の下で、メンコで遊んでゐたのだ。

――早う、早ういつて、號外ば買うて來い――。

私は、メンコをはふり出した。そして跣足のまゝで、表の方へ驅け出した。

烙きつくやうな、眞夏の午下りの赭土色の村道を、砂埃りを蹴立てて、私は鈴の音のする方向へ驅けて行つた。

村の入口の三辻に、號外賣は、村人に包圍されてゐた――號外の束を持つた片手を高く差上げて、涙のやうに落ちくる汗だらけの顏で、何か喚きながら、その包圍から泳ぎ出ようとしてゐた。

――落ちたかい、九連城が落ちたかい――。

野良から横つ飛びに飛んで來た女房が、前の人へのしかゝつて號外を掴まうとする。

――あゝ、ありがちやこつたい――。

背後へはね飛ばされて婆さんが、立ち上りもしないで、ぽろ〳〵涙を、地べたに落した。

――おがいの息子も、生きとる顏が見られるばいなあ――。

號外賣は、この老爺や女房の第二國民軍の包圍から飛び出さうと必死に踠いた。彼等國民軍は一枚五厘の號外代を、殆んどいつも持つてゐなかつた。

――不可ん、不可ん、五厘持つて來う――。

號外賣は、赭い砂埃りを蹴上げて怒鳴る。

――何が不可ん。息子一匹おつ盗られち、どうして、號外一枚ばかりが、呉れられんかッ――。

鉢巻の手拭を鷲掴みにした、老爺が、ぶる〳〵ふるへながら、號外賣に喰つてかゝつた。

――この奴盗人め、兄き息子の生命で足りねえで弟息子の生命まで、押ッ盗らうちふかッ――。

老爺の赤銅色の萎びた皮膚に突起した頬骨の上を、涙と、汗がころがりもつれて流れた。

――知らん、俺が知るもんか――。

片眼の號外賣は、號外の束を後手に匿しながら、後退りした。

――そぎやん、そぎやん――。

女房や老婆たちが一せいに老爺に應じた。

――どうしてくれんなら、押ッ盗るぞッ――。

私は、勢ひづいた。私も五厘持つてゐなかつた。私は素早く包圍した人々の足のところから首を突つ込むと、後手に掴まれてある號外束を、力まかせにふん奪つた。

紙片が發じけて、女房や、老爺たちの頭の上まで飛んだ。私は二三枚を懷中に捻ぢ込むと夢中で逃げ出した。

――コラッ餓鬼ッ、奴ッ、たゝッ殺すぞッ。

背後で、號外賣の怒聲がひゞいた。しかし私は驚かなかつた。下駄穿きの號外賣に、跣足の私が負ける筈がないと考へたからだ。(私達小作人の餓鬼は跣足に馴れてゐた)足首まですべり込む赭土の埃の中を、私は毬のやうに驅けた。

——かゝさん——ほうらッ。
　私は、號外を末の妹に乳を銜ませてゐる母の前へ突き出した。土間へしやがんだ母はしわくちやになつた紙片を、大事さうに擴げて寫眞を見るときのやうに、紙片の眞ン中に視點を据ゑて、息を凝らしたのみであつた。
——俺どんが讀んでやろ——。
　母は字が讀めなかつた。私は紙片を引ッ奪くつて、片假名を拾ひながら讀んだ。
——九連城、遂に陷落せり、——我軍、猶ほ追撃中——
　しかし、額を擦り合せてゐる母にも、その意味が分らないやうに、讀んでゐる私にも、文句が呑み込めなかつた。九連城が日本軍の手に歸したことは分るが、「つゐげきちう」だとか、「一撃破」だとかわからない文字ばかりで母は不安な顔色でやはり息を呑んでゐた。
　母が求めてゐるものは「陸軍歩兵二等卒徳永礒吉」であり、己れの亭主であり、そして何よりも、四人の子供の父であるところの、彼の生死如何であつた。
　私は根氣よく、假名を拾つて讀んだ。でも「二等卒徳永礒吉」のことなんか、號外の何處にも書いてなかつた。母は火のやうに泣きつく妹を押し飛ばしながら云つた。
——とゝさんは生きとるのかい——。
　私は、眼色を變へてる母の額を、キョトンと見上げただけであつた。
——そつちのやつに、書いてにやかい——。
　母は焦立つて、私の懐中から喰み出してゐる一枚の號外をひつぱり出した。
——同じこつたい、皆一つもんだい、馬鹿らしい。
　私は、母の無智が可笑しくなつて笑ひ出した。すると、母は、嘗て私に覺えのない程怒つた母は、いきなり私の頰をなぐりつけて怒鳴つた。
——こん餓鬼がッ、とゝが若しも死んでたらお前たちあ、明日からどうして食つてゆくかッ！
　私は號外を握つたまゝ、上り框から逃げようとした——が、何故だか、何時も叱られるときのやうに、景氣よく表へ飛び出せなかつた。
　私は上り框の上から片足をすべらしたまゝ、なぐられた頰をおさへて、眞赤になつてる母の額をヂッと偸み見た。
——あくたれの役立たずがッ、とゝが戰死したら、お前たちは——。
　母の咽喉がゴロリと鳴つた。そして淚が一粒ポロリと土間にこぼれ落ちた。
　私も不意に悲しくなつた。汽車の窓から帽子を振つて出征して行つた父の顔が、眼の前にひよこりと現はれた。
——とゝは生きとりますかつて訊いて來う——。
　さう云ひ終らないうちに母は咽びあげて泣き出した。
　私は默つて表へ出た。そしていつもこんなときに訊きにゆく「地主さん」の家に行つた。
——とゝは、センシしましたでしうか？
　裏の畑を一枚距てた、大きな柿の木のある「地主さん」の裏口から、私は何度も聲をあげた。しかし、薄暗い廣い土間の奧からは返事がなかつた。
　私は、何となしに淋しさが込みあげて來る、淚が溢れさうになつた。
——とゝはセンシしましたでしうか？
　四五へんめに、中學校の制服を着た「坊ちやん」が、白い額だけ出して突慳貪に云つた。
——そぎやんこつあ、わからん——。
　私は、號外で額を押へて、家の小さい柿の根つこまで歸つて來ると、我慢し切れなくなつて、柿の幹へしがみついて——とゝさん——と

叫ぶと、あとから〳〵と涙が溢れて來た。

午下りの熱氣で、草も木も皆んな垂れてゐて、蟬の聲も途絶えてゐた。

汗と涙に濡れながら私は三十分も泣いてゐたが、そのときフト見るともなしに氣が注いたのは「第二十三聯隊」といふ號外の文字だつた。「第二十三聯隊」は、父の所屬する聯隊であることは、父の「グンジユウビン」で知つてゐた。私は何かなしに、それだけで父が生きてるやうに感じられて、無上に嬉しくなりながら、家の裏口から飛び込んだ。

——かあさん、ほら、第二十三聯隊！

母は赤くなつた眼をあげた。

——だから、とゝは戻つて來るかも知れんたい？

母は、不安ながら、幾分顏色をとり戻しながら、そろ〳〵云つた。

——號外を佛壇にあげなはり——

それから、母は足を洗つて佛壇の前に坐ると大きな聲で題目をあげはじめた。佛壇代りの棚の上に、號外が置かれて、長男の私をはじめ、三人、弟、妹が母の左右に坐つた。

母が云つた。

——とゝが、どうぞセンチから生きて歸りますやう、お願ひします——つて拜みなはり——。

私も、次の妹も、弟も、ペコンと頭を下げて、號外に掌を合した。

これは私の尋常一年生のときの、記憶である。それから、もう二十五年經つた。

父は足に負傷して歸つて來た。そして私達の村から四十幾多の戰死者を出した日露戰爭は終局した。

今年三十一歲になつた私は、もう柿の木にしがみついて泣いたり、號外に手を合せて拜むやうなことはしなくなつた。

凄じい資本主義の高速度發展が、私を農村から驅りたて都會の工場で働かしめるやうになつたが、しかし、生活の苦しさ戰爭の怖ろしさは今でも微塵も變らない。

そして、激しい資本の彈壓は、私達をまだ二十五年以前の私達と同樣の、境遇と意識に置かうとして、あらゆる反抗の新芽を、摘み取りたゝつきり、枯らさうとしてゐる。

しかし、私は、私の生涯の存續する限り、あの二十五年前の眞夏の或日の光景を、如何なる彈壓を以てしても、私の胸からカットすることだけは不可能であらう——。

（昭和四・六・二八）

年譜

明治三十二年
一月二十日熊本市黒髪村に生る。家は貧農にして、父は日露戰役に出征して負傷す。尋常一年頃より講談本を耽讀す、黒髪尋常小學卒業後、十三歳にして、印刷工場の徒弟となる。露文豪ゴルキー物に心醉す。

大正七年
米暴動以後、文學に飽足らず、熊本市青年思想研究會を作り、翌年新人會熊本支部を、同僚米村、角田と共に主宰す。翌九年、熊本印刷勞働組合を創る。

大正十一年
熊本を追はれて上京し、山川均氏宅に假寓す、二三の印刷工場を流轉し、博文館印刷所に勤む、此間、出版從業員組合を創立し、小石川久堅支部長となる。

大正十三年
四月三十日、宮城縣登米町生れ、看護婦佐藤とし子と結婚す、結婚當夜博文館印刷所第二工場炎上し、翌五月一日に、全從業員メーデーに參加す、超えて九日終に總罷業となり、リーダーとなる。爭議勝利し、二割値上全國に波及す。

大正十五年
博文館、共同印刷所と改稱し、一月七日より三月十一日まで大爭議となる、慘敗して同僚千七百名と共に失業す。

昭和二年
八月、長男光一生る、翌年失業者相倚つて生産組合共働印刷所を創る。

昭和四年
三十一歳にして初めて長篇『太陽のない街』を「戰旗」六月號より十一月號まで連載發表す。日本プロレタリア文學に時代を劃すものと云はれ、翌五年一月左翼劇場、これを演出して、前後二十一回の公演連日滿員となる。

四年十月、「中央公論」に、『能率委員會』を發表し、漸く、作家として認めらるゝに至る。

其後發表せるもの、

『小資本家』　「戰　旗」三月
『約束手形三千八百圓也』　「經濟往來」五月
『失業都市東京』　「中央公論」二月
『千二百圓』　「週刊朝日」三月
『麥の芽』　「中外日報」三月
『赤色スポーツ』　「プロレタリア文學」八月
『嵐を衝いて』　「中央公論」九月
『赤色スポーツ』　「改　造」九月
『石炭の木』　「文學風景」十月
『社會病』　「文學時代」十月

其他にして、就中、『失業都市東京』『嵐を衝いて』『赤色スポーツ』等好評を博す。

短篇集『能率委員會』同『小資本家』同『約束手形三千八百圓也』の三册、長篇『太陽のない街』同『失業都市東京』の二册を刊行。

倘、日下出版豫定中のものは長篇『何處へゆく？』一册あり。

執筆中のもの、「改造」一月『輜重隊前へ！』、「中央公論」一月、集團製作の一『豐年飢饉』、「新潮」一月『赤い戀以上』、「文學風景」一月『銀行合併』等なり。

染色體（クロモゾオメン）

落合三郎

染色體

一

デザートにはひると、型の通り祝辭が始まつた。

友人の一人として指名された寛勘三は、ナプキンをはづしながら勢ひよく立ち上つた。

『新郎佐治恒夫君は、我々と同じく、雜誌、思想研究の同人でありまするが、もつとも頭腦明晰な論客として知られてゐる少壯マルクス主義學者であります。新婦波留子孃――ではない波留子夫人は、御承知の通り、故下山博士の令孃にふさはしい豐かな藝術的天稟を有せられると同時に、敬虔なカトリック信者であります。』

メーン・テーブルの眞中では、祝辭を受ける二人が、くすぐつたさうな薄ら笑ひを眼のふちに漂はせて心もち顔をうつ向けてゐた。

『で、マルクス主義學者である新郎は、いふまでもなく唯物論者であり、カトリックを信仰される新婦は、もとより唯心論者であります。この正反對の思想をもたれる兩君が、今日こゝに、偕老同穴の契を結ばれたといふことは、我々にとつて非常に興味ある問題……といつては失禮でありますが、佐治君の唯物論果して新夫人の唯心論を克服するか、はた又、新夫人の魅力、よく佐治君を感化して唯心論者たらしめるか……』

哄笑と拍手が爆發した。ところが、

『兩君の幸福を祈つてやまない次第であります。』

きよとんと、甚だきよとんと尻切れとんぼに腰をおろして了つたのである。

なあんだ？ あれでお了ひか……參會者は間の拔けた頃になつて、やつと彼の祝辭が終つたのであることに氣づいた。

『君に似合ない、うがつたことをいふぢやないか。』

隣の席にゐた古谷角造といふアナキストの文藝評論家が肘をつついた。

『マルキストが、帝國ホテルで結婚披露式をやるつてこと自體が、まことにうがち過ぎてるからな。』

コーヒ茶碗を口へもつて行きながら勘三が應酬した。

『サロン・マルキストの落ち行く先はつて奴だね。』

『始まつたね、ぼつ〳〵。』

『何が？』

『君のおはこがさ。』

拍手が起つた。向ひ側のテーブルで、髮をもじやもじやにした脊のひよろ高い男が立ちかけてゐた。

『だれだい、あれや？』

評論家が勘三に訊いた。

『諏訪つて醉つ拂ひの理學士だ。何をいひだすか分らないぞ、あいつ。』

で、二人は私語をやめてその方を見守つた。

理學士諏訪庄吉は、およそ生眞面目な顔をしてしやべりだしたものである。

『佐治君は、恒ちやん時代から僕に泣かされてゐた親友であります。でありますから、僕が佐治君の仕合せを願ふやうに、佐治君の方でも僕のためを思つてゐてくれるに違ひないのであります。さうでないと不公平だと思ふのであります。』

笑ひ聲が起つた。理學士は無表情な顏で續けた。

『ところで僕は、目下、へ、その緒の張力に關する物理學的研究をしてゐるのでありますが、この研究は、その性質上、多くの生れたての赤ちやんを實驗材料として必要とするのであります。で、私のこの研究を助ける友情的意味からしましても、願はくば佐治君夫妻が、一時も早く貴重なる赤ちやんを……』

おびたゞしい笑聲の波が後を消して了つた。

純白の洋裝をした花嫁さんは、自分の方がその生れたての赤ちやんでもあるやうに、つややかな赤い顏をしてゐた。

二

控室の方へ出て行く人波の尻尾で、花婿が燕尾服の尻尾をひらつかせてゐた。筧勘三は、凹字形のテーブルのさくを遠回りしてそこまでたどりついた

「停車場まで行つて兩君のボン・ヴォアイヤージュを怒鳴りたいところなのだが、今夜これから回る所があるんでね、殘念ながらこれで失敬する。」

「牛込へ行くのかい？」

後から肩をたゝいたのは古谷であつた。

『僕も寄らうと思つてゐたんだ。』

佐治は、自分より少しばか・先輩であるこの二人を見較べた。

『何があるんです？』

『フェビアン協會の總會さ。』

古谷が無造作に答へると、佐治は傍にゐた新妻の方をチラと横目で見た。

「あ、さう〳〵、今夜だつたんですね……つい……』

『なに、いゝさ。』

勘三は忙しく佐治の言葉を制へた。

『今夜は一問題起きるかも知れないんだが、君の意見は僕にもよく分つてゐるし……まあ、思ふ存分奈良の風景でも樂しんで來給へ！』

「困るなあ、どうも……』

佐治は赤くなりながら、差しだされた勘三の手を握つた。

『ぢやあ失敬。』

古谷も勘三の後を追つた。

『ホネー・ムーンか……今頃奈良はいゝだらうな。』

古谷がひとり言のやうにいつた。

『よせよ！　妬く柄でもないぢやないか！』

『お互にね。』

「はゝ！』

『あつはつはつ！』

聲を合せて、傍若無人に笑ひながら玄關の方へ出てくると、

『おい勘三、飲みなほしにゆかないか？』

だしぬけにかう聲をかけた者があつた。

ふり向いて見ると、そこに、兄の勝彦が、例のへ、その緒の理學士と連れ立つてゐた。

『なんだ、兄さんか。』

『兄さんかぢやない……さつき司會者がおれを指名すれば、お前の愚論を論破してやらうと思つてたんだがな、はゝゝ。それより、これから諏訪君とおでん屋を襲はうといふ計畫なんだが、どうだ、參加しないか？』

「困つた不良老年共だな。」

『共だけはよけいだよ、君。』

横から諏訪が口をだした。

「參加したいんだが、今夜はこれからまだ行かなくちやならん所があるから……』

勘三は、にや〳〵笑つてゐる古谷を促してそこを立ち去つた。

爽かな風が吹いてゐた。

『日比谷まで歩かうか？』

「よからう。」

バットの煙を吹かしながら、ゆる〳〵足を運んでゐると、交叉點の近くまで來た時、向うから、大股に裾を蹴つて歩いて來た脊の高い女が、すれ違ひざまに、

「あら！」

と小さな聲を擧げて立ち止つた。

『おや！』

勘三も足を止めた。

古谷は、わざと一人だけ先へ歩いて行つた。しばらく行つてから振り向いて見ると、頻りに何か勘三とさゝやき合つてゐる女の顏が篠懸のかげにほの白く浮んでゐた。

三

『や、失敬。』

勘三が女と別れて追ひついてくると、古谷はいきなり無遠慮に問ひかけた。

『誰だい？』

『兄貴の助手さ。』

『助手？…女助手か。』

『女だつて助手は勤まるさ。』

『タイピストかい？』

『そんなんぢやない。研究室の助手だ。』

『へえ…するとあの女もやはり、生物學者なんだね？』

『さあ、學者つて程ぢやないかも知れないが、あれで兎に角、仙臺を出た理學士なんだからな。』

『なか〳〵美人ぢやないか。』

『こんな晩に見るとね、一層さう見えるだらう。』

『こいつ！』

『女學者だからつて、姥捨山ばかりとも限らないよ。』

『君の兄貴も存外隅に置けないんだね。』

『柄にないことをいふな。』

笑ひはしたものの、勘三は然し、浮かぬ顏をしてゐた――今時分、何だつて兄貴を探してゐるんだらう？…もつとも、助手が教授を探して歩いたからつて別に不思議はないはずなんだが…チョッ、くだらない心配けよせ！

勘三は短くなつたバットをパーヴェの上へたたきつけて、ぐしつと靴先で踏みつぶした。

電車が來た。

フェビアンの總會は、神樂坂のある貸席で行はれてゐた。

會場になつてゐる二十疊ばかりの日本間は、煙草の煙がいちめんに立てこめてゐた。集まつてゐる四十人足らずの人間が、だれがだれやら、ちよつと見當がつかない程であつた。

『ひどい煙だな。』

『うむ…だが、さつきの場所からこゝへくると、煙の臭ひからしてまるきり別物だね。』

『あすこのは君、ハヴァナとスリーキャッスルをこねまぜた煙のカクテルさ。』

『すると、こゝの濁つた煙は、さしづめ、どぶろくか燒酎のなほしつてところだね。』

が、二人の無駄口屋にはかゝはりなく、會議は、バットと朝日の煙幕の中で、さかんに進行中であつた。

『議長！』

發言を求めたのは、東北訛りのある戀愛小說家で、外出するたびに、缺かさず一つ以上の失戀を落つことしてくるといふ、世にも奇特な失戀の大家で、かねて社會主義者でもある紺野といふ男であつた。

『私は唯今の意見に反對であります。たとひブルジョア作家であらうとも、當人がこの協會の趣旨を贊同の上、入會しようといふのである以上、寧ろ積極的に歡迎すべきであると思ひます。』

『ノオノオ！』

四五人一せいに野次をいれた。

『ノオ〳〵といはれる諸君は、今一度、イギリスのフェビアン協會の例を顧みて頂きたい！』

演説者は氣取つた恰好で、一時代前の活辯もどきに、左手を後へ回しながらぐつと見得をきつた。

『だれのことをいつてゐるんですか？』

勘三は、傍にゐた顔だけ知つてゐる色の白い青年にきいて見た。

『福地翰のことですよ。』

青年は女性のやうな聲で答へながら、きやしやな手付で頭髪をかきあげた。

四

なるほど、と勘三には合點がいつた。會長の矢部幾造氏が、婦人小説の大家福地翰を、會員に引きいれようとしてゐるといふ話は、彼も薄々聞き知つてゐたのである。

矢部氏にさういふ心持を起させるに到つた直接の動機は、その頃福地翰が、ある雜誌に『社會主義實現論』といふ論文を書いたことであつた。

社會主義者が運動に成功しないのは、要するに金がないからである、早い話が彼等は宣傳ビラ一枚刷るにも、自分の思ふやうになる印刷機械一臺すら持つてゐない、そんなことでは駄目だ。だから、眞に社會主義社會の實現を欲する主義者は、まづ相場でも競馬でもやつて、しこたま金を儲けるべきである！　然る後に運動すべきである！……といふのが、この論文の大要であつた。

血の氣の多い連中は、この論文を見て、憤慨したり嘲笑つたりした。

『一應、傾聽すべき議論です。』

矢部氏だけは泰然としてゐた。

勘三は――そんなことはどつちでもよかつた。

演説者は一段と聲を張り上げた。

『イギリス・フェビアン協會の耆宿バアナード・ショオは、かういふことをいつてをります……』

しかし、バアナード・ショオがどういふことをいつて居るかは、殘念ながら勘三は聞きもらさねばならなかつた。受付の者が電話を知らせて來たからだ。

電話室で、勘三は何がなしどきんとした。

『私、志摩でございます。』

受話機の聲は女であつた。

『急用が出來たんで僕は歸らなくちやならん。もし決をとるやうだつたら、僕の決議權は君に委任するからよろしく頼む。』

電話口から歸つて來た勘三は、古谷の傍へ行つて囁いた。

『兄貴の所から飲みに來いつていつて來たんだらう？』

『馬鹿いへ、本當に急用なんだ。』

古谷は疑はしさうに、にや〳〵してゐた。

『ぢやあ頼むぞ。』

勘三はいひ棄てて階段を下りた。

たとひ名義だけにしろ、勘三はフェビアン協會の幹事の一人であつた。それが、總會に遲れて來て、おまけに顔をだすとすぐ中座するといふのだから、さすがに後めたい氣持がしないではなかつた。だが、底を割つて見れば、フェビアン協會に對して、いや一般に、さういふ風な仕事の全てに對して、前程な熱情がもてなくなつて來てゐたのだ。

もしさうでなかつたとしても、この場合の彼は、失戀の大家が舌足らずの英語交りで取次ぐバアナード・ショオの言葉を拜聽してゐるよりも、電話の主の招きに應ずる途の方を選んだで

あらう。

『至急、折りいってお願ひ致したいことがございますのですが、すぐお目にかゝつて頂けませんでせうか？』

と、うはづつたやうな聲で哀願された時、

『では、すぐにそちらへ伺ひませう。』

と即座に元氣よくいひ切つた程、もと／＼彼はギャラントでフェミニストだつたのである。

二十分後に、彼は銀座のある喫茶店で、そこに待つてゐるはずの志摩圭子を探してゐた。

五

『兄貴には會へなかつたんですか？』

『ほんの一足違ひで……』

『何か急用があるんなら探してあげませうか？諏訪君と一緒に飲みに行つたはずだから、どこへ行つたか、大體見當がつかなかないんです。』

『えゝ、至急お會ひしたいんですけれど、その前に一度、あなたに御相談した方がよくはないかと思つたものですから。』

『ほう。どういふことなんです？』

勘三は眼鏡の奥で瞼をぱち／＼させた。

『あのう、實は……』

圭子は急に聲をひそめながら、テーブル越しに、勘三の方へ上半身を傾けた。近所のテーブルはいづれも空つぽであつたのだが。

はしりの苺をのせた薄桃色のシャーベットが、無愛想なボオイによつて運ばれて來た。

勘三は默つて煙草に火をつけた。

『だしぬけに、兄が訪ねて來たんです。』

ボオイが立ち去るのを見送つてから、圭子が、やはり聲を殺してさゝやいた。

『兄……つて……俊平君がですか？』

勘三は驚いた時の癖で、そゝくさと眼鏡をゆさぶつた。

『えゝ。』

『いつです、一體？』

『今日、夕方。歸つて見ると、たれもゐないはずの部屋の中で、むつくり寢臺から起き上つて來たんですもの、本當にびつくりしてしまつて……』

圭子は青山の方の或るアパートに住んでゐたのだ。

『圭坊、暫く居候だから覺悟しろ、つて、いきなりからなんですの……』

圭子は眼だけで笑つて見せた。

『志摩の奴、相變らずだな……で、どうしたんです？』

『どうつて別に、詳しいことは何も話さないから一向分らないんですけれど……』

『逃げてゐるんですね？』

勘三が圭子の先まはりをした。

『さうらしいんですの……こゝも餘り安全とはいへないが、當分は大丈夫だらうつてから兄はいつてるんですけれど、私は不安で仕方がないんです。何しろあんなアパートのことで、人の出入りは多いし、一人暮しの女の所へ、若い男が轉がり込んでゐたんでは、すぐと人目につくにきまつてゐますから……』

『さうですとも……それにしても、たれもゐないあなたの部屋へ、よく一人ではひれたものですね。』

『えゝ、私もそれを聞いて見たんです。すると、それ位のことが出來ないやうでどうするもんかつて濟ましてゐるんです。』

『あいつらしい。』

勘三は苦笑した。

『あなたの所で居候するつたつて、第一、寢る時に困りやしませんか？』

『だつて兄妹ですもの。』

思はず外へ出たこの言葉は、外へ出されてしまつた瞬間、しかし、圭子自身を敏感に赤くさ

せた。

『そんなことよりも……』

圭子は、さつきからいぢくつてゐたシャーペットを、初めて氣がついたやうに一匙口へ持つて行きながら續けた。

『何しろ、もつと安全な場所へ置いてあげた方がいゝと思つたものですから……』

勘三は默つてうなづいた。

六

『それで、私、考へた擧句、先生のことを兄に話して見たんです。すると……』

ぷつんと言葉をきつて、圭子は入口の方へ眼を擧げた。

『イクチヨザウルス哲學を語らず。』

『リノケロス歌はずか。』

でたらめなおしやべりをしながら、二人連れの醉つ拂ひがはひつて來たのだ。二人とも、襟にSの字をつけた大學生であつた。

圭子は、ちよつと眉根を寄せてそつぽを向いた。が遲かつた。

『あツ、志摩さんだ。』

『ウア、いけねえ！ 見つかつちやつた！』

二人のうち、背の低い方が角帽をとつて、ふらふらしながら、わざとらしい大げさなお辭儀をした。

『濟みません。醉つ拂つちやひまして！』

『いゝ御機嫌ですのね。』

圭子も仕方なしに笑つた。

『イクチヨザウルス・パレオントリオム！ 相すみません、以後氣をつけます！ ブレケケケックス！』

『何いつてやがんだ、こいつ！……濟みません、醉つてるもんですから。』

背の高い方が、自分はさも醉つてゐないかのやうに、圭子にとも勘三にともつかず、しかつめらしい會釋をして、

『やい、チンパンヂイ！ よせつたら、こいつ！』

がむしやらに、力づくで相棒を引つ張つてゆきながらスタンドの方へ向いて怒鳴つた。

『ブレン・ソオダ二つ！』

がたん！……凭れの高い椅子が一つ引つくり返つたのだ。

圭子は勘三の方へ向き直つた。

勘三は、口元を歪めて學生達の醉態を見送つてゐた。

『それで、先生のことを話すと、兄はとても乘り氣になつて、大學教授の、おまけにまるで方面の違ふ生物學者の家なら、こいつは絶對に安全だ、ほんの暫くの間だから、是非お願ひして見てくれとかういふんです。』

『なるほど。』

勘三はテーブルの上で腕を組み合した。圭子は、勘三が何かいつてくれるのを待つた。が、勘三はそのまゝ口をつぐんで、何かを思案するやうに、ぼんやり、上眼使ひに天井をにらんでゐた。

勘三のその態度が、しかし、どんな意味にしろ、『不愉快』を現してゐるのではない、といふことだけは圭子にもすぐ分つた。

で、圭子は、一語々々を、自分で十分かみ碎いて見ながらつゞけた。

『兄のしてゐる仕事が、どういふ性質のものかつてことは、私にもよく分つてゐるんですけれど、それも唯、抽象的に漠然と分つてゐるだけで、現在兄がどこでどんな仕事をしてゐるのかといふ、具體的なことは勿論話してもくれませんし、だから兄の身體が、現在どの程度に危險なのかといふやうなことは、ちつとも分らないんで…。』

『それやさうでせう。』

勘三は圭子に同意した。そして圭子の方へ眼を向けずに、そつぽを向いたまゝでつゞけた。
「さういふことは滅多にたれにも分るもんぢやないんです。現在志摩君達のグループがどんな仕事をしてゐるかつてことは、僕達にだつてちつとも分らないんですからね。それや無論、大體の見當がつかなくはないが……」
この最後の言葉は、勘三のはかない見得であつた――おれだつて、すつかり『運動』から足を洗つてしまつてゐるわけぢやないんだからといふ。

七

『もしもの場合、先生に御迷惑のかゝるやうなことさへなければ……』
是非暫くの間かくまつてやつて頂きたい――といふのが圭子の頼みであつた。
『兄貴んとこなら大抵大丈夫だが……』
勘三は、やはりまともに圭子の顔を見ないでいつた。
『では、お願ひして見てもいゝでせうか』
『さあ……』
煮えきらない返事である。だが圭子は熱心であつた。
『私からぢかにお願ひして見ませうか? それとも、あなたから口を利いて頂いた方がいゝでせうかしら?』
『一應僕から話して見ませう。』
かういふより仕方がなかつた。追ひ詰められたのである。
『嫂にもよく話して置かないといけないし……』
『濟みません。わがまゝなことばかりお願ひして。』
圭子は神妙に頭を下げた。
圭子と別れて、中央線の電車に乘つた勘三はひどく憂鬱であつた。
『馬鹿野郎ども!』
それは、さつきの醉つ拂ひの學生を罵つた言葉なのだが、しかし、實際に彼の頭の中は、あの學生の姿を特別に描きだしてゐるわけではなかつたのだ。『御遠慮下さい』の掲示を無視して、彼はやたらに煙草を吹かした。
『チエ、うまく出來てやがる!』
わざとシニカルに頭を働かせて、勘三は憂鬱を吹き飛ばさうとした。夕方から、僅か數時間の間に應接した事柄――佐治の結婚披露、フェビアンの愚論、追はれてゐる志摩俊平、兄思ひの圭子――それ等のことが、連絡のあるやうな、ないやうな、たとへば手製の望遠鏡で星を見ながら劇しい性欲に襲はれた時のジャン・ジャック・ルソオのやうな當惑と憂鬱の中へ彼をめり込ませたのだ。
佐治恒夫、志摩俊平、寛勘三――この三人は、いづれも大學時代に『新人會』の仲間であつた。佐治が經濟、勘三が獨文、そして志摩俊平は、新人會の中で毛色の變つた人類學であつた。
一高寄りの裏門近くに虐待されてゐる古ぼけた教室の中で、直立猿人の下顎骨は、猩々のそれよりも何ミリメートル大きかつたか、ネアンデルタール人の毛髪は金色であつたか栗色であつたか、現在、大日本帝國の青年男女(もしくは少年少女)が、フランス語交りに戀を囁く井ノ頭公園の窪地は、その昔アイヌ族の男女が愛の營みを營んだ所ではなかつたか? 所であつた!――などと、シベリヤ出兵に、金塊事件に、恐慌に、失業に、自殺に、ストライキに、およそ何の關りもない浮世離れた篤學な顏をして、泥細工の破片や、石ころのきれつ端などをいぢくり廻してゐた志摩俊平を、無理矢理、新人會へ引つ張り込んだ下手人は、當時學内での『不穩分子』寛勘三と佐治恒夫だつたのだ。

『やい志摩！　それでも貴様、若い、生きた血が通つてゐるのか？　ろくでもない骨董いぢりなんか豚に食はせて、もつと今日の社會を見ろ！　生きた現實を見ろ！』

勘三は馬のやうな鼻息で俊平をどやしつけた。六七年前の話である。

その後の彼等は――いや、それは、佐治が帝國ホテルで華やかにシャンパンを抜き、勘三が晴れがましいテーブル・スピーチを試みてゐた丁度その時、俊平が自分自身のことでない何かの「必要」から身を潜ませる場所を探してゐたといふ一事だけで、一切の説明を駄足なものにして呉れてゐる……

勘三は東中野で電車を降りて、兄の家の方へ向つた。

八

井ノ頭公園の池の端をめぐる小徑――吾人の先住民族たるアイヌ族の男女が、いみじき愛の營みを營んだ地點が、果してこのあたりであつたかどうかは、志摩俊平に聞いて見なければ分らぬ。

が、志摩俊平は、目下、人類學教室ならぬ東中野の寛博士邸の一室に閉ぢこもつて、一歩も外出することがなく、相場師の見習ひにでもなる積りか、毎日々々、丹念に新聞の經濟欄を切り抜くことだけを日課にしてゐる。そして、博士夫人と、時々訪ねてくる圭子以外、めつたにたれとも顔を合さない。

だから、アイヌ族の武藏野における愛欲的遺跡に關する彼の蘊蓄の一端を披瀝してもらふことは、この際、遺憾ながら困難な事情にあるといはざるを得ない。

この困難さは、しかし、當面の事態に對して、さしたる支障も不便も齎すものでないことだけは確かだ。といふのは、やまと民族東征以前の先史時代的な戀愛の如何に拘らず、今まさに、この池の端をめぐる小徑の上で、明瞭に現代史的な戀愛が進行中だからである。

『あら、何でしよ、あれ？』

少女の聲である。

『どれ？』

青年の聲である。

『あれよ、あの妙な子供達。』

少女が頤で示した方向――建武の昔、新田義貞と稱する戀愛至上主義の武將が、出陣に際して願がけをしたといふやきもちやきの辨天樣、この東洋的ヴィーナスの星霜幾歳月、灰色に蟲が食つて折角「ありがたさ」がついて來た社殿を、無遠慮な無神論者の大地震が、てもなくぺしやんこに潰してしまつたので、今では新しい白木の御殿が立つてゐる。その附近で、十二三から十六七位までのいが栗頭の少年の一隊が、どれもこれも、みんな色のあせた淺黄の半纏に淺黄の股引といふ單一色の姿で、せつせと樹木の手入をしてゐるのだ。そしてその傍に、アメリカの巡査が着てゐるやうな（但し品物の質はずつと落ちるらしいが）服を着た男が二人、兩手を後で組んで、ぶら〳〵歩きながら見張番をしてゐるのである。

『ね、何でしよ？　少年團にしちや、いやに野暮つたいし。』

『筒袖の半纏に股引のボオイスカウトといふのは見たことがありませんね。』

『國粹主義のボオイスカウトかも知れないわ。』

『國粹主義でないボオイスカウトつてのがありますか？』

『ぢや國産奬勵かしら？』

だが、この時、青年は何かを發見したのである。

『冗談はおよし、ちいちやん、あれは感化院だよ。』

『感化院? まあ……こんな所へ連れて來て何を感化させようつてんでしよ?』

『あつちへ行かう。』

青年と少女はくるりと回れ右をして歩きだしたのである。少年らしいまどらかさを失つたけはしい幾つかの眼が、ぢつとその後をにらんでゐた。

一方は老杉の密林、片方は翼のやうに下枝を擴げた柳の大木が池の面へ覆ひかぶさつてゐる所。そこまでくると、この二人、默つて足を止めた――公園の設計者は、近代的野外戀愛學の第一章をよく心得てゐる。卽ちさういふ場所へは必ず、ごゆつくり! と一臺のベンチを置くことを忘れないのだ。

たれも見てゐないし、たれにも見られてゐない……が、將に、辨天樣を嫉妬で狂はせようとしたその途端、二人はハッと飛びのいたのである。人間がゐたのだ、つい足許の柳の木の下に!

九

柳の下だからつて、人間がゐて惡いといふ法はない。

だから、現代史的戀愛ドキューメントに、新しい一ページを書き込まうとした青年と少女の折角のよき意圖を、ぶちこはしに導いた場所柄をわきまへぬ人間がそこにゐたからといつて、しかもそれが、青年と少女の口惜しさにまで、これ又男女の一對であつたからといつて、敢て彼等をとがめ立てするわけにはいかない。ぶちこはした方の二人は、しかし、ぶちこはされた方の二人と同じ目的を追求してこの公園へ來てゐたのではないらしい。第一、男の方は短く刈り込んだ口髭に、白い色が半分位まじつてゐるやうといふ中年過ぎの紳士であり、女の方は、その紳士よりはずつと年若だが、さればといつて、感化院の少年とボオイスカウトを無邪氣にとつ違へる程の女學生的存在でもない――と、思はせぶりな回りくどい說明は拔きにして、男は筧勝彦博士であり女は助手の志摩圭子であつた。

ベンチに腰を下ろした青年と少女が將に脣を觸れようとしたその刹那、この場合極めて不都合な同時的偶發により、池の水際で玉網をさしのばしてゐた博士が、ぽちやんと片足を水の中へ墜落させたのだ。

『あッ危い!』

圭子が叫んだのである。そして青年と少女がとびのいたのである。

『あゝびつくりした! あたし、まだ胸がどきんどきんするわ!』

キヤタストロフを招いた震源地を遠去かりながら、少女が片手でワンピースの胸を押へた。

『驚かしやがる!』

青年がペッと唾を吐いた。

『何をしてゐたんでしよ、あんな所で?……魚をとつてゐたのかしら?』

『あれを見てごらん。』

答へる代りに、青年は細杖の先を擧げて、つい近くの橋際に立つてゐる立札の面を指した。

『魚をとつちやいけないのね。でも、何かすくつてゐるやうよ、ほら。』

振り返つて見ると、かなり遠くなつた例の柳の根方で、しきりに何かをすくつてゐる博士と、その橫で白いバケツを支へてしやがみ込んでゐる圭子の姿が、二人の眼にはひつた。

『おもりのあぶくでもすくひやがれだ、ペッ!』

青年はもう一度唾を吐いた。

『何なの、それ?』

『およそユーウツになつちやつた、僕。』

少女は青年の細杖を引つたくつて、頭上の木の枝をひつぱたいた。

『腹が空いて來たね。引き揚げよう。』

柳の木の下では、しゆつと玉網の水をきりながら博士が腰をのばした。
『まあ、びしよぬれ！』
圭子が博士の右足を見ながら眉を寄せた。
『危く心中し損ふところだつたな、はゝゝゝ！』
『あら、いやな先生！』
横に突き出た柳の幹へ不器用に手をかけて、博士は危つかしく小徑の上へはひ上つた。それからバケツを受取つてベンチの横へ置き、圭子の手をぐいと掴んで引き上げた。
『これだけあれば當分間に合ふだらう。』
博士は煙草を出しながらバケツの中を覗き込んだ。
『先生、一度靴をお脱ぎになつては？……氣持がお惡いでせう？』
圭子は、べつとりと水藻のまつはりついてゐる博士の足ばかり氣にしてゐた。

一〇

『公園の入口に料理屋みたいな家がありましたね。あすこで飯を食ひながらズボンと靴下を乾かしてもらふことにしよう。』
『はあ、さう致しませう。』
圭子は氣輕に同意してバケツをさげた。

辨天の祠の傍で、木蔭に腰を下ろして、梅干のはひつた麥飯のむすびを頰張つてゐた感化院の少年達が、暗い眼色でじろ／＼と二人を睨んでゐた。
『何でせうね？』
圭子も、さつきの少女と同じ疑問を口にだした。
『感化院らしい。』
博士は言下に答へた。
『何だつてこんな所へ連れてくるんでせう？』
『さあ……あ、重いでせう。僕が持たう。』
博士は、圭子がバケツを持つ手を變へたのを見て、自分の右手をだした。
『いゝえ、いゝんですの。』
池の曲り角まで行つた時、圭子はも一度少年達の方をふり向いて見た。

『いらつしやいまし。』
氣取つた字で御料理旅館と書かれてゐる門を潛ると、襟白粉をこつてりつけて、馬鹿々々しく大きな黃楊の櫛をさした女が、ちやちな衝立のかげから顏をのぞかせた。そして、『はてこれは！』といふ風にきよとんと眼を見張つた。
古びた臺灣パナマを冠り、鼠色の詰襟の服を着て、片足を膝から下づぶぬれにし、子供がめだかをすくふ時に使ふやうな玉網をもつてゐるごましほひげの紳士。ペンキ塗りの白いバケツをもつて、その横に立つてゐる奥樣ともつかず令孃ともつかず、總じてぢみな服裝をした、だがひどく顏容のすぐれてゐる若い女――
客の素性を一目で鑑定することにかけては、時として、『ソヴエートを除けば世界一』であることを誇つてゐる警視廳の鑑識課員以上に熟練工であるこの種の女にも、この一組の男女が何者であるかは、ちよつと見當がつかなかつたらしい。
『何をとつていらしつたんですか？』
飛石傳ひに庭の奥の離れの方へ二人を案内して行きながら、女中は圭子のさげてゐるバケツの中を覗き込んだ。そして、
『あアらまあ、氣味の惡い！　なんでせう？』
大げさな聲を擧げたものである。
バケツの中には、寒天をぐしや／＼にしたやうな、どろ／＼のものが、一杯はひつてゐたのだ。
『蛙の卵だよ。』
靴を脱ぎながら博士が無造作に說明した。
『圭子さん、折角の獲物を犬にでも引つくりかへされちや臺なしだから、上へ持つて行つとか

う。』

『はい。』

圭子はバケツを下へ降ろさないで、博士がぬれた靴を脱ぎ終るのを待つてゐた。

『まあ、蛙の卵をどうなさるんです？』

女中は眼をまんまるくして、くる／＼と二人を見較べた。

『三杯酢にしてビールのさかなにするんだ。』

圭子は、博士がかういふ女を相手にして、氣輕に冗談がいへるのを、いたづらしい眼つきで興味深く見てゐた。

彼女は、かういふ場所へ來たのは初めてであつた。で、何となく物珍らしかつた。が、若し相手が、信頼し尊敬してゐる博士でなかつたら、きつと薄氣味悪く思つたに違ひなかつた。

博士はビールを註文した。

二

圭子が、博士と二人きりで一室に閉ぢこもつてゐることは、決して珍らしいことではなかつた。だがそれは、顯微鏡と試驗管のある室内のことだ。

『御同伴歡迎』の料理屋の離れは、アカデミツクな研究室とは、あまりにも類似品が無さ過ぎる。

だから——といひたい所だが、しかし博士の態度には、ふだんと少しも變つた所がなかつた。

ビールを運んで來た女中が、一人合點の思はせぶりなお辭儀と言葉を殘して引つ込んで行つても、圭子はそんなことから、何の暗示も受けはしなかつた。

博士とかういふ所で、『さし向ひ』の食事をするつてことが、唯妙にをかしかつた。

彼女は、おどけた氣持で、茶目つて見たくなつた。で、急にわきあがつて來た笑ひを、『くふつ！』とかみ殺して、

『お酌致しませうか？』

やんちやに、すんだ黒い眼をくる／＼と動かしたのである。

『お酌？……これは驚いた、はゝゝゝ！』

博士も、わだかまりのない笑ひで肩をゆすつた。

『でも、澤山召し上つてはいけませんことよ。』

『大丈夫、理學士のお酌ではさうは飲めない。』

『あら！』

『いや、これは冗談だ……時に……』

博士は、髭の先へついた泡を手の甲で拂ひながら眞顔になつた。

『一度、ゆつくりあんたに聞いて見ようと思つてゐたんだが、あんたは兄さんをどう思つてゐますね？』

だしぬけな質問であつた。

お轉婆娘は、忽ち聰明な端麗さに返つた。

『わたくし、兄は大變好い人間だと思つて居りますけれど……』

博士の心持を計りかねて、語尾が濁つた。

『それは、わたしもさう思ふ。』

博士の聲はハツキリしてゐた。

圭子は眼を輝かせた。兄俊平のことを博士がどう思つてゐるか——自分の師事し、尊敬してゐる生物學者としての博士が、兄をどんな風に思ひ、兄の思想や行動をどんな眼で見てゐるか、これは圭子が是非知りたいと思つてゐたことであつたのだ。

恩師と肉親の兄——たゞさういふつながりだけから、俊平に對する博士の批判が、圭子にとつて深い關心事となつたのではなかつた。勿論それもある。だが、兄達のやつてゐるやうな仕事に對して、一般に自然科學者はどんな態度をとつてゐるのか、兄達のやつてゐるやうな仕事は、自然科學の世界とは、全然沒交渉な無關

係なものなのであらうか？……一生を自然科學の研究に捧げようと決心してゐながら、同時に、兄達の仕事を唯わけもなく貴いものに思つてゐる圭子にとつて、これは言葉が内容する最大の意味で眞劍な問題であつた。

『逃げ隱れしてゐるといへば卑怯なやうだが、自分の主張をぐん／＼實行に移さうとする態度は偉いな。お前や恒ちやん(佐治の事)なんかよりずつと男らしいぞ。よし、置いてやらう。』

あの晩、俊平のことを頼みに行つた勘三を博士はかういつて苦笑させた。圭子はその話を後で聞いた。

男らしい奴だ、面白い、氣にいつた――たゞそれきりの『俠氣』といふ風なものだけから、奧の一間を兄に提供して呉れてゐるのであらうか？

それとも？……

圭子の方こそ、

『兄をどうお思ひになります？』

と訊いて見たくて仕方がなかつたのだ。

二

『人間としては、それや確かにいゝ人間です。よ過ぎる位だといつてもいゝ……もつとも、一體に理想主義者つてものは、概して生一本な、善良な性質をもつてゐるものだが……』

この言葉は圭子の首を傾げさした。

『先生は、兄を理想主義者だと思つておいでなんでございますか？』

『あゝいふ運動をしてゐるものは、あんたの兄さんに限らず、だれにしろ、みんな一種の理想主義者です。』

おとなしく博士が斷定した。

『でも兄なんかは、理想主義といふ風なものをひどく輕蔑してゐるらしいんでございますけれど。』

『つまり唯物論者を以て任じてゐるといふんでせう。』

『えゝ。』

『だがそれは自分の主觀の上だけのことで、客觀的に見れば、大變な理想主義者――といふよりも寧ろ空想家といつた方がいゝ位ですね。』

『と仰しやるのは、到底實現されさうにもない空想を追つかけてゐるといふ意味なんでございますか？』

『さう。』

博士は大きくうなづいた。

『唯物論者といふ點では、我々の方が遙に徹底した唯物論者ですよ。』

『さう仰しやられゝばさうかも知れませんけれど……』

圭子は曖昧に同意した。強ひて、博士の意見に反對するだけの自信もなかつたし、それに、兄俊平と博士とが、どちらがより多く唯物論者であるかといふやうな穿鑿は、今、それほど重要なことでもなく、從つて、その一點にこだはることは大して意味のないことだ、と聰明に頭を働かせたからであつた。

『一體、政治、經濟組織の變革といふやうなことで、萬人を幸福にする社會が實現出來るやうに思つてゐるのが空想です。』

相當強い方であつたが、晝間のビールはいくらか利いたらしい。博士はやゝ饒舌になつた。

『だがわたしは、あんたの兄さん達の仕事に反對しようとは思はん。大いにやるべしだと思つて居る。』

豪快らしく一息にコップをあけて、

『がまあ、それは兎に角として、今急にこんなことをいひだしたのは、あんたに、今の仕事から逃げだして貰ひたくなかつたからですよ。』

『逃げだすと仰しやいますと？』

『あんたは如何にも科學者らしい明晰な頭をしてゐる。それでゐて同時に、わたしの見るとこ

ろでは、非常な熱情家だと思ふ。そこで……』

そこで、圭子がその熱情の故に折角物になりかけた自然科學の研究を抛つて、兄俊平達の運動の中へ飛び込んで行くやうなことをしやしないか？　近頃何だかそんな風に思はれてならない――と博士はいふのであつた。圭子には、しかし、少くとも今の所、そんな氣持はなかつた。博士の教へを受けつゝ、博士の實驗の手傳ひをすることが、現在の圭子にとつて唯一の生甲斐のある仕事であつたのだ。

にも拘らず、兄達の運動と自分達の世界とが全然沒交渉なものであるのかどうかは、やはり、解きたい眞劍な疑問であつた。

博士が現在沒頭してゐるのは人工的單爲生殖の實驗であつた。なるほどそれは、巨大な資本主義の組織に對して、必死になつて鬪つてゐる俊平達の運動とは、およそ縁遠いものに相違なかつた。

無受精の蛙の卵から、人工的に百萬のおたまじやくしを育て上げることが出來たとしても、それは一人の失業者の饑死を營養不良から救ふことにもなりはしない。

といつた所で、科學者といふものは――

三

俊平を主題としての二人の會話は、結局、大した收穫を圭子にもたらしてくれはしなかつた。

日暮れ近くに、二人は大學の門をくゞつた。構内はひつそり靜まつてゐた。が、半ば出來上つた安田講堂の前で、スポンヂボールをやつてゐた一群の學生が、にや〳〵笑ひながら二人の方を見て何か囁き合つた。

研究室で、圭子が、採集して來た蛙の卵を別な器物へ移しかへてゐる間、棚の上に列べてあるフラスコや水盤を次ぎ〳〵のぞき込んでゐた博士は、

『や、や、や、や！』

と、突然うなるやうな聲をだしたと思ふと、

『志摩君、來て見給へ、早く！』

せつかちに、聲をふるはせて叫んだ。

透明な、部厚いガラス器の中を見すゑてゐる博士の眼は、その冷たい鑛物をやき斷るやうに燃えてゐた。

『まあ、ほんとに！』

急いで寄つて來た圭子も、思はず腹の底から感嘆した。

『まあ！』

も一度叫んだ彼女は、大きく肩を波打たせた。

苦心に苦心を重ねて來た實驗が、今、二人の目前で成功の實を結びかけてゐるのだ！

長い沈默があつた。悦びの度が大き過ぎたのだ。

緻密な計算と冷靜な推理とだけで生きてゐるやうに見える科學者にも、もとより、情熱の燃えたぎる瞬間がある。いふまでもないことだ。けれども、この場合の二人の絶大な悦びは、いはゞ學究的精神のカタルシスであつた。

淨化された學問的歡喜――だがその底に、當人の意識すると否とに拘らず、學者的野心の充足された愉悦が横はつてゐなかつたとは誰がいへよう。

『志摩君、今夜は徹夜だ！』

博士の彈力的な聲が圭子の耳朶を撃つた。

博士と圭子が、新しい公式を作成するために、異常な昂奮にかり立てられつゝ、それまでの實驗記録を整理してゐた時、東中野の博士の家では、夕方訪ねて來た勘三が、俊平と話し込みながら、博士の歸りを待ちわびてゐた。

『遲いですね、どうしたんでせう？』

勘三は、果物を持つて上つて來た嫂の顏を見た。

『研究室へまはつたのかも知れないけれど、それにしても、もう歸る時分よ。』

『日曜でも研究室へいらつしやるんですか？』

寢そべつてゐた俊平が、むつくり起き上りながら、丁寧な言葉で訊ねた。

『えゝ時々……勘三さん、お急ぎなら電話をかけさして見ませうか？』

『さうですね……ぢや濟みませんが、一寸聞き合して見て下さい。』

嫂が出て行くと、勘三は皮のまゝの林檎にかぶりつきながら俊平を顧みていつた。

『僕は最近、フレーザーを讀んでゐるんだが、實に面白いね。』

俊平は再びごろりと腹ばひになりながら、これも勘三と同じやうに、丸いまゝの林檎を口へもつて行つた。

『フレーザー？』

『うむ。ほら、金枝篇さ。』

『へえ……ゴールデン・バウつて君、とても尨大なものだらう？』

『資本論の二倍以上ある。』

『ふむ。良く根が續くね。』

俊平は林檎の心をぺつと吐きだした。勘三には俊平の言葉が皮肉なものに聞えた。で、その皮肉に腹を立てるよりも、たじろいだ、てれた氣持の方が先きに來た。

一四

『君は、フレーザーは讀まなかつたのかい？』

ちよつと間をもつて、からたづねた勘三の聲は、だから、てれかくしらしい響きをもつてゐた。

『學校にゐた時、トーテムに關する短いレポートを一つ讀んだことがあるきりだ。それも、もう忘れてしまつたよ。』

『あいつを讀んでゐると、家族に關するエンゲルスの理論なんかが益々はつきりしてくるね。』

『さうかね。』

俊平は一向興味がなささうであつた。

勘三は手持ぶさたに默り込んだ。

すると今度は、俊平の方から話しかけた。

『それやさうと、フェビアンはその後どんな工合かね？』

『解散してしまつたよ。』

『ほう、さうか。』

俊平はちらと横目で勘三を見ただけであつた。『なぜ解散したんだ？』と訊きもしなかつた。そして、そこにある丸い罐の中から、煙草を一本拔きだして火をつけながら、

『このジャスミンて煙草はうまいね。』

とまるきり別なことをいつた。

『ジャスミンか。兄貴からふんだくつたな。』

『人聞きの惡いことをいふな。公明正大に奥さんからもらつたんだ。』

『ふん、何しろ兄貴ときたら、臺灣から歸つて以來、煙草とさへいへば、この世界中にジャスミン・ナンバア・スリーだけしか存在しないやうに思つてゐるんだからな。』

階段に音がして、嫂が上つて來た。

『今夜は研究室で徹夜ですつて。』

さびしさうな聲であつた。

『え？……弱つたなあ、そいつあ。』

勘三は例の癖で眼鏡をゆさぶつた。

『何でしたら、これから學校の方へまはつて見てはいかゞ？』

『さあ……でも、仕事の邪魔をしては惡いから、明日にしませう。』

『さう。』

それきり、嫂は又下へ降りて行つた。

『君の兄さんは何を研究してゐるんだい？』

『生物學さ。』

『それは分つてゐるが、何か特殊な研究をやつてゐるんだらう？　たとへば、蛭の研究とか、めだかの研究とか……』

『いゝめだかの研究つて奴があるか……が、まあ似たやうなものかも知れないな。』

勘三はくすりと思ひだし笑ひをした。

『何しろ、人生どこを風が吹くかつてな學問をしてゐるよ。博士になつた時の論文は「蚕の生殖細胞におけるクロモゾオメンの研究」つていふんだがね。』

『何だい、それや？』

俊平はあきれた顔をした。

『博士論文さ。恐ろしく小さなことを調べたものさね。』

『で、今でもその蚕の細胞を研究してゐるのかい？』

『いや、違ふ。こゝ數年來、パルテノゲネーゼつて奴の實驗に沒頭してゐるんだ。』

『分らんね。』

『かういふことになると、無論、圭子さんの方が專門家だけに僕なんかより遙かに詳しいがね……僕も一度、兄貴から詳しい説明を聞いたことがある。まあ一口にいへば何だね、この世界中から、一切の男性を不必要なものにしてしまふための準備研究みたいなものだね。およそ、天下の男性を愚弄した話さ。』

しかし、俊平には、自分達男性が、どう愚弄されてゐるのか、まるきり見當のつかない話であつた。

一五

覓勝彦博士が、毎日、極微顯微鏡をのぞいたり、蛙の卵と睨めつこしたりしてゐたのは、果して天下の男性共を愚弄する爲であつたかどうか保證の限りでないが、勘三の知つたかぶりの言葉が、必ずしも出まかせな駄法螺でなかつたことだけは、最近四半世紀の間に、人工的單爲生殖の實驗をめぐつて生起したジャーナリズムの歴史がこれを證明してゐる。

カリフォルニアとさへいへば、直ちに、ハリウッドとジャズとナンセンスを思ひ起し、若干食齋坊の輩は、サンキストのオレンヂとメロンを涎と共に聯想する——といふのが現代の常識であり、都會人のセンスであるらしい。

が、勞働者や、中國筋の百姓が、カリフォルニアといへば、すぐ『出かせぎ』を思ひ浮べるやうに、そして、政友會や民政黨の『外交通』が、米田實博士論ずる所の『移民條令』をかつぎだすやうに、このアメリカ東海岸の名稱は、生物學者達をして、巨大なバアクレイの臨海試驗場へ思ひを躍らせる。

その試驗場から、勘三の言葉をかりれば、『男性愚弄』の第一聲が擧つたのだ。

個體發生の各段階は、環境の如何にこそ、もつとも大きな關係がある——といふ、近代發生學說のチャンピョンであつたヂャック・レエブが、受精してゐない海膽の卵を、人工的な方法で發育させることに成功した。一九〇〇年の初頭である。

一八四七年に、デュメリルが、物理化學的方法による單爲生殖の可能を論じた時、彼は、十字軍時代に航空の可能を主張した男と同じ程度に氣違ひ扱ひをされた。

だが、一九〇〇年に、カリフォルニアの一角から、ヂャック・レエブが發表したのは、『可能』の論議ではなくて、成功した實驗の報告であつた。

と、引き續き、多くの學者が、海盤車、圓口魚類（これが本邦秋田産の八つ目鰻であつたかどうかは、文獻に明らかでない）、蛙、蝦蟇等に對する實驗の好結果を發表した。

大騒ぎしたのは、新聞！――就中アメリカの新聞であつた。

『この驚歎すべき發見の結果は、吾人をして、科學的に意の如く家畜を生産し(マヽ)、人類における種の保存をも、合理的、計畫的に遂行せしめ得るに至るであらう。囂々たる産兒制限論の如きも、やがては無意味なる腐說と化し去るであらう。サンガー夫人、もつて如何となす？』

シカゴ・ニュースが、荒つぽい筆でこんな風に論じ立てた。

ニューヨーク・タイムスの學藝記者は、流石に學藝記者らしい感傷的な美文を草した。

『ヨーロッパにおいてもアメリカにおいても、又、漸く文明の息吹に眼ざめたアジアにおいても、今や到る所で、女性の獨立が叫ばれ、女權の伸張が論ぜられてゐる。この時に當り、然り正にこの時に當り、一群の自然科學者は、生物界において、男性が全然無用の長物であることを證明しようと努力し、かつ、既に一部證明してゐる。

即ち、一定の、機械的、化學的、あるひは物理化學的刺激を卵子に與へることによつて、生殖における男性の役割をことごとく免除じようといふのである。かゝる人工的作用を施された卵子は、毫も男性の干渉を受けることなく、新個體にまで發育し成長するといふのである。男性一般にとつて、かくも屈辱的なことが他にあらうか？　だが、女權論者及びその他の「フェミニスト」諸君にとつて、かくも悦ばしき福音が他にあらうか？　今にして吾人は思ふ、かの有名なる「サムソンとデリラ」の著者カミーユ・サン・サアンが、彼等を「フェミニスト」と呼ばずして寧ろ「ホミニスト」と呼んだならば、さらに正確だつたのではあるまいかと。なぜなら「フェミニスト」の目的は「男性にとつて代る」ことであり、そしてその目的は將に實現されようとしてゐるのであるから……』

うんぬん。

一六

『もつと面白いことにはね……』

俊平が、存外熱心に耳を傾けてゐるのを見て、勘三は得意になつて受け賣りを續けた。

『そんな風に、やたらと新聞がヨタを飛ばしたお蔭で、當時、實驗の結果を發表した學者達の所へ、女權論者からさかんに感謝狀が舞ひ込んだつて話だ。母となる爲に、是非とも男性の力をかりなければならなかつた恥づべき境涯から解放して呉れたことを、全女性の名において感謝するつて……』

『まさか、おとぎ話ぢやあるまいし！』

『いや、ほんとだよ、君！』

勘三は口を尖らして主張した。

『で、何かい、その實驗は人間にも適用して見たことがあるのかい！』

から訊き返しながらも、俊平は口のあたりから、ひやかすやうな笑ひを消しはしなかつた。

『そいつはまだなか〳〵らしい。が兄貴の話によると、兎に角兩棲類を生殖させることには成功してゐるんだから、やがては哺乳類に對してもこの實驗が適用されるやうになるだらうし、そしてそいつがうまくゆけば、人間にだつて、この方法で子供を生ませることが出來るやうになるはずだといつてゐたよ。』

『新しい人造人間か……だがそれはいつのことだい？』

俊平は、今度は眞顔で訊ねた。

『そいつは僕なんかには分らんさ。だが、そんな研究が完成したとなつたら、己達男性は、少くとも種族の保存といふ見地からは、全然必

要がなくなつてくるわけだね。』

『それで、どうなるんだい？』

『どうなるか分らんが、己の考へでは、一切の男性は、生殖方面とは全然無關係な、働蟻のやうな境遇に置かれるんぢやないかと思ふね。わりの悪い話さ。』

さうなると　戀愛なんてものも無くなるわけだな。』

『さういふわけだ。有島武郎と波多野秋子も、外國某殿下と何とか姫も、新聞電報のネタにならないつてことになる。』

『ふざけた話だな。』

俊平は口をゆがめた。

『で何かね、圭子の奴もその研究をやつてゐるのかね。』

『それや、兄貴の助手だもの、やつてゐるに極つてるさ。己なんかよりはずつと專門家だ。今度會つたら詳しく聞いて見給へ。』

―大變な女學者が出來たものだな。はゝゝは！』

俊平はくるりと仰向けに寢返つて天井を見た。そして又、別なことをいひだした。

『それはさうと、君は遠くへ行くつて話だが、本當かい？』

『別に、遠くつてほどでもないが……』

勘三は、微かに顏色を動かした。

『だれに聞いたんだい？』

『こゝの奥さんにさ。大學の先生になるんださうぢやないか。』

『なに、まだ極つてゐるわけぢやないんだ。』

勘三は眞赤になつてゐた。

『何を受持つんだ？』

俊平は、相手の顏色などに頓着しなかつた。

『まだ何とも極つてゐないんだから……』

勘三は益〻赤くなつて、ぎこちなく同じ辯解を繰返した。

勘三が、柄になくこんな風に間誤つくにはわけがあつた。彼は、最近新設される事になつた臺灣大學の先生にならうとしてゐた。そのことで、この日も、兄貴の添書をもらふために來てゐたのだが、それを俊平の口からいはれる事は彼にとつて、まことに恥かしい事だつたのである。

一七

翌日晝過ぎまで、博士は研究室の中へ閉ぢ籠つたきりであつた。圭子だけは、夜が明けると間もなく、一度身體を休ませに歸つて行つた。

漸く一通りの整理を濟まして、例の臺灣煙草ジャスミンに火をつけながら、第二次分裂の徴候を現してゐる蛙の卵を、滿足氣に見いつてゐるところへ、忙しさうな顏をして勘三が訪ねて來た。

新設される臺灣大學で、有力な地位につくはずになつてゐる京大のS理學博士が、數日間滯在の豫定で目下上京してゐる――で、是非その博士に紹介してもらひたい、といふのが勘三の用件であつた。

『Sさんなら、おれよりも諏訪君の方がずつと懇意なはずだから、諏訪君に紹介してもらつた方がいゝだらう。』

『さうですか、ぢやあさうしませう。』

勘三が立ち上がると、

『おい。』

と博士が後から呼び止めた。

『おれの實驗にも、どうやら目鼻がついて來たぞ。』

『え？……するといよ／＼女だけで子供を產むことが出來るやうになつたんですか？』

『いや、そこまではまだなか／＼だが……』

『さうですか。今度詳しく敎へて下さい。』

いつもの勘三なら、分りもしないくせに分つ

た顏をして、兄貴の實驗を根掘り葉掘り聞きほじくるのだが、今は自分の就職問題の方が先であつた――

諏訪理學士は、相變らず髮をもじやくにして、ちぢむさく不精髯を伸ばしたまゝ、からくたの中にうづくまつてゐた。

『やあ。』

『やあ。』

『構ひませんか？』

『どうぞ。』

『相變らずですなあ。』

勘三はがらくたを眺め回した。いびつにねぢくれた扇風器、コイルの解けかゝつた電磁石、アイスクリーム屋にでもありさうな玩具のやうな小形のモーター、エナメルがはげて地金の赤錆が出てゐるヴォルトメーター、等々、どう見たつて、電機古道具屋の物置としか思へない。

勘三は用件を話した。

『S博士なら、僕も暫く會はないから、一緒に訪問してもいゝが、三時頃までこゝを離れるわけにいかないんでね。』

諏訪は時計を見ながらいつた。

『今日の午後子供が一人生まれることになつてゐるんで、病院の方からしらせがあるのを待つてゐるんです。』

『へえ、さうですか、そいつあどうも……』

『なに、僕の女房が産むんぢやない、よその女房が産むんだ。』

『……？』

『出ものはれもの所嫌はず、ぢやない、時刻を嫌はず、でね、大體三時頃までには生まれるといふのだが、いつ何時おぎやあとおいでなさるか分らないので、さつきからぢつと待つてゐるんですよ。』

『あゝなるほど。』

勘三には合點がいつた。

『へゝその緒ですね。』

『さう。』

諏訪は皮肉さうに顏をゆがめたと思ふと、

『世の中にはまだ博士になりたがる馬鹿者が多くてね、醫學部の奴等は、僕のこの研究を博士論文のネタにするんだとでも思つてゐやがるんだから笑止千萬な話さ。』

勘三はあいさつに困つた。こゝでも彼は妙に忸怩たるものを感じないではゐられなかつた。

一八

大學の先生になることを無上に有難がつて、血眼になつてゐる奴がゐる、笑止千萬な話だ――勘三には、諏訪の言葉がこんな意味に聞えた。

電話のベルが鳴つた。

『そら來た！』

諏訪は飛びつくやうに受話機をはづした。

『え？　なに？　死産？　……なあんだ、さうか……』

諏訪はがつかりしたやうに、苦笑しながら勘三を顧みた。

『ぢや、出かけよう、君。』

『待ちぼけを食つたわけですね。』

『さういふわけだ……腹の中で既に死んでゐる赤ん坊を、一度この世へ引つ張りだして、それから又始末をするなんて、餘計な手數をかけるもんだ。どうも人間のやることには無駄が多い。』

『赤ん坊つていへば、兄貴は、例の單爲生殖とかつて奴の實驗に成功したらしいですよ。』

『ほう、そいつは面白い。』

諏訪は眼を見張つた。

『歸りに研究室へ寄つて見よう。』

二人は附屬病院の通用門から外へ出た。

三丁目の方へ向つて足を運んでゐると、向う

から四人連れの學生が這つて來て、そのうちの一人が勘三にお辭儀をした。

『はて、たれだつたかな？』

と勘三がちよつと思ひだしかねてゐる間に、學生が口を開いた。

『今夜はいらつしやるんでせうね？』

『どこへ？』

勘三には、何のことだか分らなかつたのである。

『今夜、演說會があるんぢやないんですか？』

いひながら、學生はポケットをさぐつて、もみくちやにした一枚のビラを引きだして見せた。

無產政黨結成促進大演說會

主催　思想研究社

そして、河村滿、和田重造、森要一、佐治恒夫などといふ名前の中に、寬勘三といふ三字も、四號ゴチックで仲間入をさせられてゐた。

勘三は眼をパチ／＼させた。

『あゝさうだ。今夜だつたんだ……』

取りつくろふやうにいふ勘三の顏を學生は不審さうに見詰めた。

『無論、僕も行きます。』

しかし、實のところ、勘三は、演說會のことは何も知らなかつたのである。

若干、勘三の氣持は穩かでなかつた。何故己にだけ通知を寄來さなかつたんだらう？……いくら、同人會議に缺席してばかりゐたからといつて、己に無斷で己の名前をだすといふ法はない……だが結局、その方がかへつて都合がいゝ、通知のなかつたことを口實にして、今夜の演說會には出ないで濟む……

『あのSつて博士は面白い男でね……』

勘三の逃避的自己辯護には何の關りもなく、だしぬけに諏訪庄吉がいひだした。

『先生の二度目の洋行と、僕や君の兄貴がドイツへ行くのと丁度同じ時で、みんな一緒の船に乘つたんだが、S博士の發議で、氣に食はない氣障な野郎を一匹、インド洋の眞唯中で鹽づけにしてやつたことがあつたよ。』

『海ん中へたゝき込んだんですか？』

勘三はちよつと驚いた。

『いや、さうぢやない、熱帶を通つても腐らないやうに腸を鹽づけにしてやつたのだ。同胞のよしみでね、君も、臺灣へ行くんなら氣をつけた方がいゝぜ、暑いからな。』

『…………？』

勘三は流石にむつとした。

だが諏訪庄吉は、まことに洒然たる顏付をしてゐた。

一九

腸に鹽をして腐敗を豫防する、君も氣をつけたがいゝ——この言葉は、諏訪庄吉の意圖が何であつたにしろ、勘三にとつて甚だ痛い皮肉であつた。

腸はとにかくとして、勘三はすつかり氣を腐らして了つた。いつそ、このまゝ別れて歸らうかとも思つた。が、それだけの決心もつきかねた。

S博士は快く二人を迎へて吳れた。

『あなたのことは聞いてゐました。蕃族の研究をなさりたいんださうですね。』

そして、臺灣は暑いから、腸に鹽をした方がいゝでせう、とはいはなかつた。

勘三は安心した。

S博士は、文部省のある役人にあてた紹介狀を書いて吳れた。

夕方家へ歸つて見ると、思想研究社から速達が來てゐた。本所の方の劇場で行はれる今夜の演說會に是非出ろといふ通知狀であつた。

どうしようかな？と思つた。文部省での會話を思ひだした。

『思想研究との御關係は？』

『なに、有名無實ですよ。』

『さういへば、滅多に何もお書きにならんやうですね。』

『この頃はエスノロジイの方ばかりやつてゐますから。』

『御もつとも。』

だから、その矢先、政治的な演說會へ顏をだすことは當然、遠慮すべきである、と勘三は思つた。

『が、演壇には立たないとしても、一應顏だしをして、佐治にだけでも事情を話して置いた方がよくはないかな。』

氣の弱い一面が、こんな風にも考へ直させた。

で、とにかく出かけることにした。

萬世橋で省線を降りて、本所ゆきの電車に乘ると、思ひがけなく、その電車に圭子が乘つてゐた。

『おや、どちらへ？』

『ちよつと……。』

圭子は言葉を濁した。

『あなたは？』

『今夜演說會があるんで……』

『お出になるんですか？』

『いや、僕は出ないんだが……』

それきり雙方とも口を閉ぢた。

暫くすると、又勘三の方から話しかけた。

『昨夕は大變だつたらしいですね。』

『えゝ。先生も、あたしもすつかり昂奮して了つて……』

圭子は頰を赤くしてゐた。それは昨夜の精神的昂奮がいまだに續いてゐるためか、それとも睡眠不足による變調のためか、どちらか分らなかつたが。

淺草橋の交叉點まで來ると、一たん止つた電車がまさに發車しようとする間際になつて、圭子は、

『あ、乘換だわ！』

と、あわてた聲を擧げながら飛び降りた。

が、二臺ばかりやり過ごしてから後に乘り込んだ電車には、やはり前の電車と同じやうに『本所綠町ゆき』の方向板がぶら下つてゐた。

間違へたのでない證據には、圭子が、はつきりその方向板を見定めてから乘つたことである。

何の目的があつて、こんな小細工をするのだ？……

圭子は、も一度新たに切符を買つて、『月島行き』の乘換をもらつた。

『どうせインテリのやる演說會だ。大したことはないさ。』

向ひ側に腰かけた二人連れの勞働者の一人が仲間にかういつてゐる聲を圭子は耳にした。

二〇

月島二丁目で、圭子は電車をおりた。

潮の香をはらんだ風が、快く圭子の胸をふくらませた。と同時に、數多い工場に隣接したバラック建ての勞働者街の狀景が、物珍しく彼女の氣持をゆすぶつた。

小さな紙片に書きつけた地圖を便りにして、ごた／＼した露路を幾つも曲つてゆきながら、彼女は自分が、さういふ土地柄とはいかにも不似合ひな『他國人』であることを、ひし／＼と感じさせられた。賴りない、わびしい氣持であつた。

けれども『冒險』がひどく彼女の顏を緊張させてゐた。

實際、彼女は今、一つの冒險を遂行しようとしてゐる――と、自分だけでは大げさにさう信じ込んでゐた。

年若い美しい女の夜の冒險――といへば、

甚だロマネスクであり、色彩的である。が、現在、彼女の歩いてゐる場所が、甚だ非ロマネスクであり、非色彩的であるやうに、彼女が自ら「冒險」と信じ込んでゐる事柄の内容も、現代銀座文明の泡共がことほどロマンス的内容とは、およそ緣遠いものであつた。

昨夜、實驗の成功から來る悦びと昂奮にひたり切つた博士の横で、一睡もせずに記錄の整理をしたり緻密な計算からなる方程式を作成したりして夜を明かした彼女は、充血した眼をして、今朝、青山のアパートへ歸つて行つたのだ。

歸つて見ると、手紙が二通來てゐた。

一通は國元の父からで、二年以來、消息の絶えてゐる兄俊平のことを氣遣つてゐる文面であつた。もし、何か心當りでもあれば知らせて呉れと書いてあつた。

さすがに、圭子の氣持は動搖した。だが、兄との約束を裏切るわけにもゆかないし……

疲れた頭で、ぼんやり父の姿などを思ひ浮べながら、彼女はもう一つの方の手紙を手にとつた。

美しい女文字の、だが知らない名前であつた。首をかしげながら封を切つて見ると、二重封筒になつてゐた。

たれにも氣づかれないやうに、この手紙を俊平君へぢかにお手渡し下さい——と、これはごつごつした男の手で書かれてあつた。そしてその横に小さく『もし何かの都合でどうしても渡せないやうでしたら、このまゝお燒き棄て下さい』と添へ書きしてあつた。

睡眠不足からくる生理的理由が手傳つたことも勿論であらうが、圭子は自分の耳にも聞えるほど激しく心臟を波打たせた。

到頭、彼女は寢なかつた。

『圭子……頼まれてもらひたいことがあるんだが……どうだ……やつて呉れないか？』、

薄い紙に、小さな字で細かく書かれた手紙を讀み終つた俊平は、それを灰皿の上で燒きすてながら例になく、重々しい調子で、ぽつり〳〵といつた。

『あたしに出來ることなら……』

『難かしいことではない。ある所まで使ひに行つて來てもらへばいゝんだ。』

『どこへ？』

『月島の方だ。おれが自分でゆくわけにはいかないんでね……』

『行つてあげませう。』

言下に答へはしたものの、彼女はちよつと考へてから附加へた。

『あたしで大丈夫なら——』

『大丈夫さ。今夜、七時頃に行つてくれないか。』

そして俊平は、一通の手紙を書いた。

『この手紙を渡せば、先方から又こつちへ渡して呉れるものがあるからね、そいつを受取つて、御苦勞だが、も一度こゝへ持つて來てもらひたいんだ。』

『もしこの人がゐなかつたら。』

『大丈夫、必ずゐる。』

俊平は確信を以て斷言した。

二

圭子は、妙な立場にある自分を顧みた。

彼女が、今朝がた寛博士を研究室へ殘して、自分だけ家へ歸つたのは、疲れた身體を休めるためだつたので、兄俊平の仕事の手傳ひをするためだつたのではない。

筋合からいへば、だから、こんなことをしてゐる暇があるなら、すぐ博士の許へ歸つて行くべきである——といふことになるのだが……

一體、自分は寛博士の助手なのか、俊平の助手なのか、と、そんな分り切つたことを、今

更らしく頭の隅つこでちよつと考へて見たりした。

圭子は、俊平の頼みを引受けることが、自分を兄達の『冒險』の中へ一歩踏み込ませることであると思つた。が、事實は、圭子はもうとつくに、その冒險の一部に參加してゐたのだ。漠然とではあるにしろ、兎も角も事情を知つて、俊平を隱してゐたのだから。

『ほら、これだ。』

俊平は詳しい地圖を書いて渡した。今まで、下町の方にほとんど緣のなかつた圭子には、月島何丁目何番地と訊いただけでは、まるきり見當をつけることさへも出來なかつたのだ。

『ぢや頼むぞ。氣をつけて行つて呉れ。』

『大丈夫、引受けたわ。』

圭子は快活にいひ放つて、ちよつとお俠らしく、胸をたゝいて見せる眞似をした。

俊平は默つて笑つた。

漸く探し當てた目的の家は、ある鑄物工場の裏塀に向つて並んでゐる粗末なバラック長屋の一つであつた。

圭子は、一應、あたりを見まはしてから格子戸を開けた。

『太田さんと仰しやいます方は……』

『僕が太田ですが……』

たくましい骨格をした二十四五の若い男が、上りかまちに突つ立つたまゝじろりと圭子を見下ろした。

『あの、太田寅次さんですね？』

圭子も相手の視線を避けないで、ぢつとその顏を見詰めたまゝ、はつきりした聲で念を押した。

『さうです。』

低いが力強い聲であつた。

圭子は、も一度、格子戸の外をすかして見た。たれも見てゐないのを確めてから、默つて、小さく折りたゝんだ俊平の手紙を差しだした。男も默つて受取つて默つて讀んだ。それから、太い眉を寄せてちよつと思案してゐたが、

『濟みませんが、そこまで一緒に行つて呉れませんか。』

いひながら、圭子の返事も待たずに、もう土間へ下り立つてゐた。

黑々とした大きな工場の塀を囘つたり、人一人やつと通れる位の細い拔道を通つたりして、十分間以上もぐる〳〵と引つ張りまはされた擧句、圭子は、佃の渡場に近い河岸へ連れて行かれた。

『ちよつとこゝで待つてゐて下さい。』

男はいひ棄てて闇の中へ姿を消した。

渡船が數囘往復した。曳船が通つた。モオターボートが通つた。

圭子は待ち疲れた。

男はなか〳〵歸つて來なかつた。

三

三十分以上も——事實はどうであつたにしろ、圭子にはそれ程も永い時間に思はれた……——圭子は、ひた〳〵と岸を洗ふ潮の音を聞いてゐた。

『お待たせしました。』

やつと歸つて來た太田が、豹のやうに、油斷なく氣を配りながら、圭子の傍へ寄つて來た。

『これを、志摩君にお渡しして下さい。』

厚ぼつたい角封筒であつた。

圭子は太田に敎へられた通り、來た時とは道をかへて、向ひの築地河岸まで舟で渡ることにした。

渡場の棧橋で別れる時、太田は熱の籠つた低い聲で、圭子がちよつと間誤ついた程耳の近くへ口を近づけながら囁いた。

『成功を祈つてゐるぞつて、さう傳へて下さ

い。』
『はい。』
圭子も低く答へて、大きくうなづいて見せた。太田の言葉が何を意味してゐるのか、具體的なことは無論、少しも分らなかつたが、何かしら重大な使命が、兄の上へ課せられてゐるに違ひないといふことだけは、圭子にも十分直感することが出來た。

舟べりを流れる黒い水の面をぢつと見詰めながら、圭子は兄の『使命』について、あれこれと想像をめぐらしてゐた。

翌日、俊平は、小さな手提鞄を一つ持つたまゝ飄然と寛博士邸を立ち去つた。
『落ち着く場所が見つかりましたから。』
といふのが、その口實であつた。だが、どこへ落ち着いたのかは、だれにも分らなかつた。

それきり、圭子には再び研究室だけの生活が戻つて來た。俊平の出現がもたらした小さな波紋は、跡方もなく消えて了つた。

夏休みが來た。

けれども、寛博士と圭子は、研究室へ通ふことをやめなかつた。棚の上に列べて置かれた大小二つの半楕圓形の水鉢が、博士の全生活を左右するやうになつてゐたのだ。

小さい方の水鉢には、胴と尻尾のさかひ目から、後足の先を三ミリばかり突きだしたおたまじやくしが――卽ち、幼生から蛙への轉化の徴候を確實に示してゐるのが四匹、水藻の間をゆるやかに泳ぎまはつてゐた。そして、も一つの大きい方には、まだ足の生えない小さいおたまじやくしが、數十匹ちよろ〳〵と動きまはつてゐた。

小さい水鉢の中の四匹は、博士の苛酷な實驗を耐へ忍んで來た選手であつた。

産卵間際の母體の中から無慈悲にメスとピンセツトで引つ張り出された淸淨無垢な卵――受精してゐない卵――一萬個のうち、電熱を加へられたり、振盪されたり、針で刺されたりして、兎も角もおたまじやくしにまで孵化したのは百二十四に過ぎなかつた。

一萬個のうち百二十四――といへば、その孵化率は非常に僅少である。けれども、この百二十四は、男性無用論を、身をもつて實證する勇敢比類なき先驅者であつたのだ。

父親の味を知らぬこれ等の先驅者は、しかし、不幸にも非常に短命であつた。そして、確實に轉形への第一歩を踏みだしたのは、生き殘つた四匹に過ぎなかつた。だからこの四匹は、選手の内の選手であつたのだ。

も一つの水鉢の中でちよろ〳〵泳ぎまはつてゐる數十匹の仲間は、これは曾て博士と圭子が、井ノ頭の池で、青年と少女を驚かしながら採集して來た受精した卵が、自然に孵化したものであつた。

圭子の日課は、この兩者の發育狀態の差異を、微細な點にまでわたつて觀察し記錄することであつた。

その記錄に沒頭してゐたある日、勘三がそゝくさと汗をふきながら暇ごひに來た。

二三

勘三は、いよ〳〵臺灣行きが決定したことを報告に來たのであつた。
『さうか、それはよかつた。で、いつ立つんだ？』
『まだすぐつてわけぢやないんですが、なるたけ早く立ちたいと思つてゐます。それで、一度、兄さんとゆつくり話したいことがあるんだが……』
『今夜、家へくるといゝ。』
『さあ、それでもいゝけれど……』

『いゝけれどつて、家ぢや工合の惡いことがあるのか？』
『なるたけなら外がいゝ。』
　勘三は思ひ切つていひ放つた。
『さうか。ぢや夕方、も一度こゝへ來てくれ。どこかで飯でも食ひながら話さう。』
『えゝ、さうしませう。』
　勘三が出て行くと、博士は圭子の方を顧みた。
『圭子さん、その後、兄さんからの消息はありませんか？』
『はあ、ちつとも。』
　圭子は不審さうに眉を寄せた――今頃、何故だしぬけに俊平のことなんかいひだしたのだらう？
『今度の實驗の結果を通じて、僕は最近、いろいろなことを考へてゐるんだがね、どうもやつぱり、俊平君達は偉いな。』
　單爲生殖の實驗と、社會主義運動と、どうつながりがあるのか、まして、その實驗が、なぜ、俊平達の偉さを博士に考へさせたのだか、圭子には、まるきり見當のつかないことであつた。
『と仰しやるのは、どういふことなんでございますの？』
『といふのは、つまり勘三なんて奴はくだらない奴だつてことさ。』
『……………。』
　圭子はあいさつに困つた。
『今度の實驗で、振盪の方法を用ゐた奴は、細胞分裂まではいつたが、それもみんな不規則であつたね。そして、結局、どれも孵化しなかつた。勘三なんて奴は、つまりはこの部類なんだ。』
　圭子には、やゝ分りかけたやうな氣がして來た。
『すると、兄なんかはこの方だと仰しやるんでございますか？』
　例の滿足に育つた四匹のチャンピョンが泳いでゐる水鉢を指していつた。
『まあ、さうだね。一體、勘三のやることには、一から十まで一貫した目標といふものがない。いやに人道主義者ぶつて理想論をふりまいてゐるかと思ふと、社會主義者になつて見たり、さうかと思ふと、今度は大學の教師になりたがつて見たり……』
　博士は、なぜか勘三の行動にひどくあきたらぬものをもつてゐるらしかつた。
『震災の時など、僕の所へ驅け込んで來て、マルクス、エンゲルスに關する文獻だけ袋にいれて來たから預つて呉れ、外の書物は、丁度いゝ幸ひだからみんな燒いて終ふんだ、などと大きなことをいつてゐたが、いつの間にか大學の先生になりたがるやうな根性になつて終つた。そこへ行くと、あんたの兄さんなどは、確かに尊敬に價する態度だ。』
　博士は、やゝ昂奮してゐるかにさへ見えた。
　圭子は、實際、何とも返事のしやうがなくて、當惑し切つてゐた。
　夕方、約束どほり勘三が博士を誘ひに來た。『鉢ノ木』の奥の方のテーブルで二人は向ひ合つた。
　勘三が話したい事柄といふのは、自分に關したことではなく、博士の身の上に關したことなのであつた。
『實は圭子さんのことで……』
　と勘三が口を切つた。

二四

『圭子さんがどうかしたのか？』
　勘三の改まつた言葉を聞いて、博士は、いつもの洒然たる樣子とはまるで反對な、やゝけはしい程な顏になりながら訊き返した。

『いや、圭子さんが別にどうしたつてわけぢやない。實は……』
いひ辛さうに勘三は口ごもつた。
『實は？』
『實は、圭子さんのことについて、嫂さんが大變心配してゐるもんだから……』
勘三は眞赤になつてゐた。
『道代が、圭子さんのことを何を心配することがあるんだ？』
博士はひどく不機嫌になつた。勘三はぢつとその顏を見た。兄の顏には、勘三が豫想してゐたやうな、『當惑』も『てれ隱し』も現れはしなかつた。はてな？　違つたかな？――勘三は次ぎの言葉に困つた。
『何もないのならいゝけれど……』
『何の事だかおれにはさつぱり分らんな。』
『さうですか。然し、嫂さんは本當に、ひどく氣にしてゐるんですよ。』
『だから、何を氣にすることがあるんだといつてゐるんだ。』
『嫂さんは。』
と勘三はも一度ぐつと兄の顏を見詰めた。
『兄さんと圭子さんのことを變な風に疑つてゐるんです。』
『馬鹿な！』
苦々しさうに言葉を吐きだした博士は、嘲るやうな眼を勘三に向けながら、
『それで何か、お前が探偵を命ぜられたのか？』
『探偵はひどい。』
勘三も思はず苦笑した。
『冗談でなく、嫂さんは本當に氣にしてゐるんですが、今までこのことで、兄さんは何も嫂さんからいはれたことはないんですか。』
『このことにもあのことにも、何もいはれるわけがないぢやないか。』
それきり、二人は口をつぐんで默々とフォークを動かした。いかにも不味さうな食べ方であつた。
暫くたつてから、今度は博士の方から口を切つた。
『だがな勘三、お前は一體、その、戀愛つて風なものをどう考へてゐるんだい？』
『どう考へるかつて……』
勘三は眼をぱち／＼させた。
にべもなく圭子との關係を否定した兄が、何だつて又、こんなことをいひだしたのだか、勘三にはその眞意が分らなかつたのだ。
『つまり、戀愛つて奴は、人生に是非とも必要なものかどうかつてことなんだ。』
『さあ、是非とも必要なものかどうかつてことになると何ともいひかねるが……』
一度言葉を切つてから勘三はにやりとした。
『種の保存つて見地からだけ見れば、現在はとにかく、將來は必要がなくなるんぢやないかな。』
『それはどういふ意味だ？』
『だつて、兄さんの今やつてゐる研究が完成すれば、子孫が欲しいと思へば、必要な數だけ計畫的に製造することが出來るやうになるんぢやないですか。』
『それはさうなるかも知れない。』
博士はにこりともしないで答へた。

二五

『しかし、さういふ遠い未來の話は別として、現在、兄さんには、全然、さういふ風な問題は何もないんですか？』
勘三は、又話を元へ返した。
『問題なんか何もないさ。道代にしてもお前にしても、まるきり見當違ひのことを想像してゐるんだが、まあいゝ、道代には己からよく話をして置く。』

『さうですか。ぢや、この話はこれでやめませう。で、今度は僕のことなんですが、臺灣で生活するについてのいろ〳〵な豫備知識を敎はつて置きたいのですけれど…もつとも、それは今すぐでなくたつていゝんです。』

『一體、お前の今度の臺灣行きは敎授になるのが目的なのか、生蕃の研究をするのが目的なのか、どちらなんだい？』

『それや無論、敎授の方は手段で生蕃の研究が目的なんです。』

『さうか。首をとられないやうにしろ。』

『まさか。』

『いや、おれのいふのは、酋長の娘にほれられたりなんかしないやうに、用心しろつて意味なんだ。』

『それだとロマンチックで面白いんだが、何しろこの柄ではね。』

『なに、さうでない。元來、お前は生蕃向きに出來てゐる…。』

『生蕃向きはひどいな。』

『何しろ、うつかりほれられると大變だぞ。生蕃の娘は嫉妬深いからな。』

『ふん！』といふやうな顏をして、勘三は唇をゆがめた。

何かある、きつと何かある――兄貴と圭子との間には、敎授と助手といふ關係以外に、何か「私的な」交渉があるに違ひない。だから、それをいひだされたてれ隱しに、こんな出たらめをいつてゐるのだ…

勘三は兄貴の心理の奧底までも見拔いたやうな、大いに穿つた氣持で、兄貴のヨタを聞き流してゐた。

ところが――

この臆測が、單なる臆測でないといふことを、勘三に思はせるやうな偶然が、その夜の兄弟を見舞つたのであつた。

洋行歸りの學者達が概ねさうであるやうに、勝彥博士もまた、ビールを、就中ドイツビールをひどく好んでゐたといふことが、勘三をして、自分の洞察力に對する大きな自信をもたせるやうな結果を將來せしめたのであるかも知れない。

「鉢ノ木」を出て兄と別れた勘三は、その足で高圓寺の高臺に在る佐治恒夫の宏壯な邸宅を訪問した。

雜誌「思想研究」九月號の編輯のために、同人中の六七人が集まつてゐた。彼等は、曾て毒舌家のアナキスト古谷角造から『サロン・マルキスト』と呼ばれたことにふさはしい瀟洒な客間で、唯心論者たる波留子夫人の運んで來た冷たい飮物をすゝり、ウエストミンスターを吹かしながら、『イデオロギッシェ』とか、『アルバイター』とか、『バルタイ』とか、しきりにドイツ語を連發しながら、『マルクス主義理論雜誌』の編輯方針を討議してゐた。

そこへ勘三が顏をだしたのである。

『よう、新任敎授！』

前田末吉といふ、ビール會社の重役のやうに肥つた吃りの男が頓狂な聲を擧げた。

この『マルキスト』達が、友人の敎授になつたことを『祝福』する爲に銀座へ乘りだして、ドイツビール專門のバアへぞろ〳〵繰込んだことが、勝彥博士にとつてはいたましい不運の種となり、勘三にとつては、その洞察に自信をもたせる原因となつたのだ。

隅の方のテーブルで向ひ合つてゐた博士と圭子――圭子までが、めづらしく眼のふちを赤くしてゐた。

二六

まゐつたのは量的には、博士よりも寧ろ勘三の方であつた。

つい數時間ばかり前に、あのやうな話をしたばかりである。こんな酒場で、圭子を連れた兄貴に會ふなどは、どだい、物事が餘りにも逆說的に出來過ぎてゐる――

が、勘三の當惑にもかゝはらず、兄貴の方では、少くとも表面の上では、わりにしやあ〳〵としてゐた。

『やあ、えらい所で會つたもんだな。』

勘三はかういふより仕方がなかつた。

『しばらくでした。』

勘三の横から佐治恒夫が額を赤らめながら、おとなしい聲で挨拶した。もつとも、佐治が、この場合額を赤らめたのは、かういふ場所で、ひよつくり、古くからの知合ひである博士に出會つたといふことが原因なのではなく、博士の女連れであることが、彼をてれさしたのである。一體に、この種の紳士的マルキストにとつては、マルキストとして行動するよりも前に、紳士的に振舞ふことの方が、より多く肝要なことであつたのだから、隨つて、酒場に於ける婦人連れの先輩に對して、一應『紳士的羞恥』の意志表示をすることが、この際、紳士道からいつて、もつとも時宜に適したやり方であつたのかも知れない。

『筧君の兄さんだ。』

佐治は、博士を一味徒黨に紹介した。この紹介はよけいなことであつたかも知れない。唯、佐治が、妙てこりんな手持不沙汰をふせぐためのつくろひであつたのだから。

一味の面々は、にや〳〵しながら、默つてお辭儀をした。

『ぼ、ぼく前田末吉です。』

どもりの前田だけが、一人、名乘りを擧げた。

この男は、平素から爭議の度毎に金をまうけて肥り過ぎた最右翼の組合官僚某のやうに、機會ある毎に、孜々として、自分の名を吹聽することに努めてゐたのである。

博士達のテーブルから少し離れた場所に位置を占めて、ビールのコップを傾けだすと、前田は横目を使ひながら、低い聲で佐治に訊いた。

『あの、び、びじんはだれだい？』

佐治は默つて勘三の額を見た――いつてもいいか？

勘三は笑つてゐた。

『志摩の妹さ。』

『志摩の妹？……志摩つて君、志摩俊平かい？』

『さうさ。』

『さうか。あいつにあんな妹があつたのか。で今、な、なにをしてゐるんだい？』

佐治は、も一度勘三の方を見ながら何も答へなかつた。

『おい、己を紹介しろよ。』

『紹介したらどうするんだい？』

『ど、どうもしないさ。だつて君、同、同志の妹ぢやないか？』

『こいつ都合のいゝ時にだけ同志を振り回しやがる。』

額だけは笑はせながら、嘲るやうにべらんめえ口調でいつたのは、滑方子爵であつた。この若い子爵は、思想研究の同人であると同時に、つまり少壯マルキストであると同時に、有名なアルピニストであつた。そして名前を二つもつてゐた。

學習院出の貴公子達と白馬を征服する時には親譲りの滑方幸政を名乘り、思想研究では浦路實と名乘つてゐた。この浦路實なる世を忍ぶ假の名が、たとへば、曾我廼家五九郎一座の二枚目の名前に似てゐるからといつて、てつきり婦女子の好感を得ようがためにつけたのであらうなどと早合點をしてはいけない。何故なら、この假名は、ウラヂミール・レーニンのウラヂミー

ルをもじつたものであつたのだから！

二七

若しも、何かの機會で、この小說のこゝらあたりを讀むことがあるかも知れない勞働者諸君に告げるが、子爵滑方幸政が、ウラヂミールをもじつた名前をつけて、宏壯な邸宅のソファの上で、小間使にかしづかれながら、あるひは又仲間の紳士達と共に酒場で美人の品定めをしながら、諸君のことをドイツ語で呼んだり、ウラヂミール・レーニンのことを同志呼はりしたりすることがあるからといつて、諸君の憤りをこの作者たる私に向けるのだけは許してもらひたい。私は唯、事實をありのまゝに書いてゐるのだから。

いや、これはよけいな事であつた。諸君は今日、かういふ『紳士社會主義者』どもを、現實に、腐る程見せつけられてゐるはずだつたのだ。

さて――

體内に注入されたアルコオル分上昇の物理化學的原理は、必然に思想研究の一黨を饒舌にさせ、『紳士的デリカシー並にギャラントリー』を稀薄にさせた。

前田末吉は、コツプを持つたまゝふら〳〵と立ち上つて、圭子の傍へ寄つて行つた。

『僕、前田です。』

圭子は眉をひそめながら、默つて會釋した。

『志摩君とは、以前、ずつと一緒に運動をやつてゐたことがあるんです。』

『さうでございますか。』

圭子はかういふより仕方がなかつた。

『近頃、兄さんはどうしていらつしやるんです？　一向、消息を聞かないが……』

『存じません。』

圭子は、この肥つちよの眞赤な顏に、唾を吐きかけてやりたいと思つた。

向うのテーブルでは、高圓寺の編輯サロンをこゝへ移した積りか、再び『イデオロギイ』とか『プロレタリア』とかいふ名詞が傍若無人な高い聲で語られてゐた。

勘三は、この仲間のうちでは一番酒に弱い方だつたので、一番早く醉つ拂つて、椅子の背にもたれながら、眠さうな眼をしてゐた。

そして時々、にや〳〵と思ひだし笑ひをしてゐた――兄貴の奴、涼しい顏してゐやがる！

『馬鹿野郎！』

だしぬけに、人々の話聲をぴたりとやめさせた程の、大きな怒聲が響き渡つた。

片頰を押へて、いぎたなくへたばつた前田末吉を、その横に突立つた勝彦博士が、ぐつと睨みすゑてゐた。へたばつた方がなぐられたのであり、立つてゐる方がなぐつたのであることは、たれの眼にも、一目瞭然たるものであつた。

圭子は、青白い顏をして、固く口を結んでゐた。

なぐられた前田の同僚達は、事があまり突發的だつたので、唯、唖然としてその場の狀景を見まもつてゐるだけであつた。

『どうしたんです、一體？』

やつとこさ、勘三がかういつて博士の傍へ寄つて來た時には、博士は平然と腰を下ろして、コツプの底に殘つたビールをぐいとあふつてゐた。

『先生、あたくし失禮さして頂きますわ。』

圭子がいつた。

『待ち給へ、僕も歸る。』

仲間の紳士達に援け起された前田は、自席の方へ連れてゆかれながらほえ喚いた。

『おれはコンミュニストだ！　天下の前田末吉だ！　チャック・ロンドンの友達だ！　くそ！　殺すなら殺せえ！』

さすがに、紳士諸君も持てあました。

二八

『随分亂暴な人だな。』
『驚いたよ全く。』
『なにもなぐらなくたつていゝぢやないか。』
『一體何がどうしたつていふんだ？』
博士が、圭子を連れてさつさと立ち去つて了つた後で、紳士諸君はなほがや〳〵騒いでゐた。
『おい前田、しつかりしろ！　一體どうしたんだ？』
『ど、どうもからもない、己は、己はなぐられたんだ……』
『こいつ！　なぐられたのは分つてゐるさ。だからなぜなぐられたんだつて訊いてゐるんだ。』
『ば、ばかやらう！　なぜだか己に分るかい！　なぐつた奴にきいてくれ！……己は、己はくやしいんだ……畜生、己をなぐりやがつて。己を、己を一體だれだと思つてゐるんだ！　天下の……』
『もういゝ。分つたよ。天下の前田末吉ともあらうものが、泣く奴があるか、見つともない！』
實際、前田末吉はだらしなく泣いてゐた。
勘三は極度の憂鬱に陥つた。
仲間達のこの始末は、殊に前田のそれは、勘三の眼には、明かに、鼻持ちのならぬ『醜態』であつた。同時に、兄の唐突な振舞も解せないものであつた。
兄貴の奴、確かにどうかしてゐる。もつとも、學生時代には随分亂暴で手におへなかつたつて話は聞いてゐるが、それにしても今夜の態度は――圭子だ、明かに圭子だ、一切合財が圭子だ。圭子との問題が兄貴をいら立たせてゐたのだ、屹度。
勘三は、いつ行つて見ても、茶の間でさびしさうに編物か何かをしてゐる嫂道代の姿を思ひ浮べた。
『いつでもあんなのかね、君の兄貴は？』
浦路實こと滑方子爵が、默然としてゐる勘三の肩をたゝいた。
『つまらないことに癇癪を起す癖があるんでね。』
勘三は辯解めいた口調でいつた。
その晩、博士は遲くまで圭子の家にゐた。
靜かな青山の通りを、澁谷の驛の方へ向つてゆる〳〵足を運んで行く博士の姿には、いつもの濶達な豪放さが見られなかつた。
まるで、坂道をでも登る時のやうに、ゆるやかな規則正しさで、一足毎にこつん〳〵と鋪石の上へステッキの音をさせて行く博士は、何かをひどく思ひ煩つてゐるらしかつた。
假説と推理と實驗――博士は、自分を徹底した唯物論者であると思つてゐた。
美しく咲き誇つた花を見ても、そこからすぐ審美的な美を感ずる前に、まづそれを植物の生殖器官として觀る、といふ風なメンタリティーが、長い間の習慣によつて植ゑつけられてゐたのであつた。
だから『戀愛』も、『性慾』といふ一點だけからしか考へられなかつた。原因もプロセスも結末も、性慾に始まり性慾に終るのが戀愛であつた。戀するものが、惱んだり笑つたり、悲しんだり悅んだり苦しんだりする、それ等の心理的波動も、博士にいはせれば要するに『内分泌の作用さ。』といふ一語に盡きるのであつて、戀人の嫉妬や法悅も、交感神經に及ぼすアドレナリンの作用の輕重を分析した明瞭な方程式をもつて表はすことが出來る――と博士は信じ込んでゐた。
結局、性慾のないところに戀愛はない。
ところが博士夫人道代は、斷じて毫も不具者

ではなかつたのだ。

『とすると、圭子に對する己のこの心持は、一體、どう說明さるべきなのであらうか？』

〝1—メチラミノ〟うんぬんの方程式だけでは、さすがに、現在の心持を解決づけることが困難であつた。

二九

十月の末——だが、臺灣の十月は東京の七月だ。

勘三は、基隆で泊らずに、まつすぐ臺北までくると、驛前のステーション・ホテルで旅裝を解いて、早速ボオイに持つて來させた水々しいマンゴスチンを貪るやうに味つた。

四五日は、總督府の中央研究所と、大學事務局への日參で費された。申し合はせたやうに、夕方必ず襲つてくる驟雨が、晝間の暑さを見事に調節して呉れた。

『存外住みよい所だな。』

と勘三は思つた。だが、一體に、眼にはひる風物は殺風景至極なものであつた。

熱帶植物が一面に生ひ繁つて、裸體の女が椰子の木蔭に晝寢してゐる常夏の國、綠の國——などといふ幻想は、奧地の方はどうか知らぬが、少くとも臺北附近の風景には當てはまらなかつた。

見ただけでムッと息苦しい暑さに見舞はれる赤土の不毛地、干からびた、ひねくれた感じのする植物、廣漠たる烏龍茶の畑——だが、これは附近の景色で、市内は、整然とした幾何學的なアスファルトの大道路と、白色の多い洋風建築とで作られ、土着の臺灣人（といつても元は南方支那からの移民だが）と、「ならされた」蕃族と、内地人とが、それ〴〵の風習とそれぞれの顏つきとで歩いてゐる中を、警察官と軍人とが恐ろしく威張つてゐる風景、一言でいへば『植民地都市』の一典型であつた。

『一體、どうもこの臺灣人といふ奴は、暑いところで育つてゐる癖に、朗らかな、はき〳〵した所がありませんでね、妙に卑屈で陰險なんです。』

總督府の役人の一人が、勘三にこんなことをいつた。

『はあ、それやさうでせう。』

と勘三もさう答へた。

大學の方は、急に出るにも及ばないやうな狀態であつた。で勘三は、一通りの打ち合せやあいさつが濟んだら、早速、蕃社の調査に出かけようと考へてゐた。

丁度、幸ひなことに、臺北州東海岸の羅東の奧地の方に在るタイヤール族の蕃社で、彼等の年中行事のうちで一番大事な、シミアッドといふ五穀祭が、近いうちに行はれるといふことを聞かされたので、來着早々ぶつかつたこの絕好の機會を、斷じて逃してはならないと思つたのである。

ある夕方、ヴェランダに出て食後の煙草を吹かしてゐると、ボオイが、註文して置いた名刺をもつて來た。

『臺灣大學講師、臺灣總督府中央研究所囑託、筧勘三』と印刷されてあつた。

この肩書が、各地の蕃社附近にある警察官に對して物をいふのだ。

名刺を藏ひに自分の部屋へ歸る時、勘三は、かぎの手の廊下の曲り角で、向うへ通り拔ける一人の男の橫顏をチラと見て、はつとその場に立ちすくんだ。

『確かにあいつだ。をかしいな、いつ何しに來たんだらう？』

三〇

チラと橫顏を見た男は、かういふ所で會は

うとは全く思ひもかけぬ人物――志摩俊平であつた。

　自室に歸つた勘三は、窓際の椅子に腰を下ろして、おぼろかに暮れて行く空を見上げながら、東中野の兄の邸を飄然と立ち去つた俊平が、今頃、なぜこの臺灣に姿を現してゐるのか、あれこれと想像をめぐらして見た。

　今、第一次の普通選擧――これが果して嚴密な意味での『普通』選擧であるかどうかは、勘三程の男にも分らないことはなかつた――を前にして、政黨の結成といふことが、勞働運動者、社會運動者の間で、囂々たる問題の渦を卷起してゐることは、勘三にもよく分つてゐた。

　よく分つてゐたが、しかし、勘三は明かにその渦卷の外にゐた。けれども、志摩俊平が、勘三と同じであらうとは、どうしても考へられぬことであつた。たとひ、表面に現れてゐようとゐまいと、俊平が、この渦の中で、かなり重要な役割を演じてゐるに違ひないといふことだけは、確實に想像の出來ることであつた。

　とすれば、今頃、なんだつてのんきさうに臺灣あたりを旅行してゐるのだらう?

『ふむ。歸りだな。』

　勘三はさらに想像を發展させた。政黨結成の問題を當面に控へて、俊平は、何か重大な使命を帶びて、ある方面との聯絡をとりに多分上海あたりへ出かけた歸りかも知れない。いや、それに違ひない。だが、上海からの歸りだとすると、少し道順がをかしい。直接、長崎若しくは神戸へ上陸することが危いので、一應、基隆へ寄り道をしたものとしても、わざ／＼臺北まで深いりして來る必要はないではないか。

　勘三には、どうもよく分らなかつた。

　扉をたゝく音がした。

　驚いたことに、俊平が訪ねて來たのだ。

『おゝ、やつぱり君だつたのか……さつきチラと見かけた時、どうも君らしいとは思つたのだが……』

『到頭見つかつちやつたので、僕の方から先手を打ちに參上したわけだ。但しおれはかういふ人間だから間違はないやうにしてくれ。』

　俊平が差しだした名刺には、『神戸市元町二丁目エッチ・ダブリュー商會店員木村元雄』と書かれてあつた。

『歸りかい?』

『うむ。』

『基隆へ上つたのかい?』

『いや、高雄だ。福州、廈門と迂回して高雄へ上陸したんだ。』

　俊平は、割に平氣な顔をして答へた。

『なるほど。』

　勘三にはやつと、なぜ俊平が臺北へ來てゐたのか、そのわけが分つた。

『ほう、いよ／＼就任したんだな。』

　俊平は、勘三が小卓の上へ置きつ放しにしてあつた例の肩書付の名刺に目をとめたのだ。勘三はてれた顔をかくし切れなかつた。

『ところで君は、こつちへくる時、郵船の船に乘つて來たのかい?』

と俊平が訊いた。

『うむ、郵船だ。』

『このまゝずつとこのホテルにゐるのか?』

『いや蕃地の方へ行く。』

『いつ行くんだ?』

『まあ、四五日經つたら出かける積りだ。』

『さうか。基隆には君の顔を知つてゐる奴がゐるかい?』

『いや、だれもゐないはずだが、どうしてだ?』

『なに、ゐなきやそれでいゝんだ。』

　四五日後に、『臺灣大學講師、臺灣總督府中央研究所囑託、筧勘三』といふ名刺が、基隆港の

大阪商船切符賣場で差しだされた。

當の勘三は、その頃既に、東海岸の蕃地の方へ旅立つてゐたのだが・・・

三

筧博士の研究室には、完全な轉化（メタモルフオース）の一歩手前で生命を亡くした四匹の蛙が、實驗の貴重な成果としてアルコールづけにされてゐた。

動物學會の年次大會が、十二月早々開かれることになつてゐた。博士と圭子は、この大會に出席する學者達に手交するための、レポートの校正に沒頭してゐた。

ドイツ語やラテン語や、精密な圖解や、複雜な方程式などのはひつた、植字工泣かせの厄介千萬な印刷物であつた。

博士の實驗は、既に、學界の一部を騷がせてゐた。だが、一般のジャーナリズムは、博士のこの苦心の結果に對して、ほとんど無關心であつた。

日々の新聞の紙面を賑はしてゐる連續的な、もつとも大きなトピックは、近く結黨されようとしてゐる日本最初の無產黨に對して、政府が如何なる處置に出るか、さらに勞働組合内の左右兩翼がどんな戰術をもつて臨むか、さら結黨の曉には黨首として誰が選ばれるか——等々の問題であつた。

博士は、さういふことに對してまるきり無關心であつた。ロクに新聞を見ない日すら多い程であつた。來るべき動物學會大會の席上で、日本最初の實驗の結果を報告する——この學者的野心が、この日頃の博士の全生活を支配してゐたのだ。

レポートの印刷は、晝夜兼行で急いでも、ぎりぎり、大會の間に合ひかねる程度のものであつた。博士は氣が氣でなかつた。

ところが、十一月の半ば過ぎになつて、印刷所から校正刷の送付が、ぱつたり途斷えて終つた。

『ちよつと工場の方に故障が起つたものですから・・・なに、ちきに回復致します。どうか暫くお待ちを・・・』

電話に出た事務員が、忙しさうな早口でかう辯解した。

三日經つても校正は來なかつた。四日經つても同じであつた。圭子が每日電話をかけた。印刷所の事務員は同じ辯解を繰返した。博士は業を煮やした。さうしたいら立たしさを繰返してゐたある日、圭子が博士の前に一枚の新聞を差しだした。

『先生、この記事を御覽になつて？』

圭子が指さした紙面には、

『S・S印刷に爭議勃發、從業員全部罷業決行』

といふ大きな見だしがついてゐた。

『さうだつたのか！』

大きな溜息を吐いて博士は力拔けがしてしまつたやうに、ぐつたり椅子の背へもたれてしまつた。

『印刷所をかへるしかございませんね。』

『駄目だ。あゝいふこみいつた印刷は、なれた所でなければやれません。』

結局博士は、大會の席上で、自分のノートだけを賴りにして報告することを決心するしかなかつた。

S・S印刷の爭議は十二月まで持ち越された。おまけにその爭議は、S・S印刷と霸を爭つてゐるK印刷にも飛火しさうな形勢を示しだした。

さういふ形勢の中で、一九二五年十二月一日、日本農民勞働黨が生れた。が、この政黨は僅か三時間の生命しか持つてゐなかつた。明智光秀の天下よりも七十時間ばかり短く、筧博士のシュテッヒェン作用によるおたまじやくし

の生命よりも數百時間短かつた。
時の内務大臣は、新聞記者團の質問に對して、
「この結社は我が國家社會の根本的組織と相容れぬものがあるから禁止した。』
とうそぶいてゐた。

その翌日、動物學會の年次大會が、山上御殿で開かれてゐた。

三

家族制度といふものは、私有財産制度と同じく、資本主義社會がもつてゐるかさぶたの一つだ——とたれかがいつた。そして、寛博士の實驗報告は、この種のかさぶたが、將來、無意味な、無駄なものになるかも知れないといふことを、「生物學的に」證明しようとする、まことに、物騒千萬なしろもので、おまけに、山上御殿に集まつた學者達の興味と期待は、ことごとく、この實驗報告に向けられてゐたのだが、しかし、内務大臣は、この大會が、必ずしも『我が國社會秩序の根本と相容れない』ものであるとは思はなかつたらしい。

緊張しきつた、熱心な拍手が、厚ぼつたいフールスカップのとぢ込みを抱へて壇上へ足を運ぶ寛博士を迎へた。

たゞ一人の女性會員として、座席の一隅につつましく腰をおろしてゐた圭子は、眼頭が熱くなるのを覺えた。

博士は、妙なところから講演のスタートをきつた。

「曾てフランスの詩人シュリー・プリュードムなる男は、フランス學士院創立二百年記念祭に際して、これをことほぐ詩の中で、こんな風なことをいつて居ります——いとも華やかにして誇りやかな天文學より、いともさびしくつゝましき生物學に至るまで……さらにまた、偉大なる天文學者といはれたル・ヴェリエ教授は、いつだつたかアカデミー・フランセーズの例會の席上で、何か新しい學説を發表した時、『生物學者の諸君にもお分りになるやうな平易な言葉で説明しますならば』などと、失敬千萬なことをいつて居ります。これ等の言葉は、要するに、フランスにおいて、生物學が如何に輕蔑されてゐたかを示すものでありますが、私の今日申し上げようとする人工的單爲生殖の學説が、このフランスにおいて最初の口火を切られたといふことは、いさゝか注目に値することかと思ひます。」

こゝで、博士は、一口コップの水を飲んだ。

「私自身の實驗の結果を御報告致します前に、今日まで既に發表されました外國の諸學者の學説並びに實驗の報告を、一應簡單にお傳へして置きたいのでありますが、一八四七年に、デュメリーが鱗翅類の幼蟲に對してこの實驗を試みまして以來、一九一九年までに報告されましたもののうち、相當、見るべきもののみにしても、九十六種の多きにのぼつて居りまするし、そのうち代表的な、レエブ、ドゥラージュ、リリー、バタイヨン等諸氏の實驗だけを取りだして見ましても、すこぶる複雜多岐にわたつて居りまするので、實は、私の申し上げようとすることを正確に理解していたゞきますために、豫め、諸君のお手許にまで、相當詳しく要點を書き記した印刷物を差しあげて置く心組だつたのであります。然るに、その原稿の校正中、思ひがけなくも印刷所のストライキのため、諸君に何等の資料を差しあげず、たゞ口頭のみで、この複雜な實驗の内容を説明致さねばならなくなりましたことを、甚だ困難に思ふと共に、遺憾に存ずる次第であります。新たな實驗の結果を、廣く學界の諸君に報告して、その批判を仰がうとする一學徒にとりましては、その印刷物の期限通りに刷り上ることがまことに大事なことなの

でありまするが、さればといつて、印刷所の従業員がパンの爲に起したストライキを、やめてくれと要求するやうな權利は、殘念ながら我々に與へられてゐないのであります。」

「ひや〳〵、異議なし。」

不遠慮に、大きな聲で贊成的野次をいれたものがあつた。話し手も聽き手も、びつくりしてその方を振り向いた。

三

野次をいれたのは、K・T大學の講師で、山村專一といふ、若い理學士であつた。

苦々しさうに眉をひそめる老教授があつた。反對に、我が意を得たりといふ風に顏をほころばせる者もあつた。

眉をひそめた老教授連は、厳粛な學術會議の空氣が、政談演說會的「卑俗さ」によつて毒されやしないかを虞かつたのである。

筧博士も筧博士だ、生物學的實驗報告の冒頭に、何もわざ〳〵、ストライキの話などを持ちだして來なくてもいゝではないか？　およそストライキの如きは、高尙深遠なる學問の殿堂に馳せ參ずるものが、口にするべき性質のものではない！——そんな話を持ちだしてくるもんだから、見ろ、忽ち「赤い奴」に乘ぜられるんだ！……

生物學者としての山村專一は、生殖學、性慾學の大家であつた。東大の動物學教室にゐた時分には、彼はゐもりの睾丸ばかりにらんで暮した。しかし、現在の彼が、老教授連から、赤い奴」と思はれてゐたのは、いゝ、永年彼が研究の對象にして來たゐもりの腹が赤かつたからではない。

「山村專一用箋」と印刷してある書簡箋の兩側には、「萬國の勞働者團結せよ！」といふ言葉と、「全國水平社運動を支持せよ！」といふ言葉とが九ポイント活字で麗々しく刷り込まれてあつた。

雜誌社や出版屋からの原稿依賴の返事にも、大學事務局への休講屆けにも、彼は平氣でこの書簡箋を用ゐた。宇治の川べりにある親讓りの廣い屋敷は、しば〳〵、水平運動者や、勞働組合、農民組合の人々の集會所として提供された。いや、單に、集會の場所を提供しただけでなく、彼自身、さういふ集會へ顏をだして、「猥談的社會變革論」を一席辯じることが珍しくなかつた。

「猥談」は彼のもつとも得意とする所であり、そして、關西方面の勞働者間に非常な人氣を博してゐた。だが、彼の「猥談」は、それを聞き終つたものが、男女間の性的問題を離れて、いつの間にやら、社會變革の法則に關する一定の印象を植ゑつけられてゐるといふ點に特徵があつた。

一言でいへば、彼は、自然界に對すると同樣、社會に對しても、厳正な科學者であることをやめなかつたのだ。大抵の自然科學者が、「國家」及び「社會」に對しては、忽ち科學者でなくなる場合が多い時に、そして、「社會」に對する厳正な科學者は、さうでないものから、「赤い奴」として眺められる場合が多い時に……

山村專一の出現並にその存在が老教授連に苦々しい思ひをさせたのは、彼等が、以上の如き山村專一の日常を知つてゐたからだけではなく、さらに、つい前日行はれた例の農民勞働黨の結黨大會へ、彼山村が、關西地方の代表の一人として出席したのを、新聞その他によつて知つてゐたからである。

結黨後直ちに解散を命ぜられるやうな、危險な團體と關係のある男——だが、その男が、明白に生物學者であり、明白に動物學會の會員である以上、この年次大會への出席を拒む理

由は毛頭ない……

休憩中に、圭子は、食堂で筧博士から山村學士に紹介された。山村は、博士の實驗に對して、他の學者以上に、異常な興味を抱いてゐるらしい樣子であつた。

『僕の今度の實驗は、完全にこの志摩君との協同研究ですよ。』

と博士がいつた。

圭子は面はゆさうに顏をうつむけた。

三四

再開後の會議でも、引き續き筧博士の報告がなされた。

今度は、『ひや〳〵』とも『異議なし』ともいはないで、眞劍に耳を傾け、所々、要點をノートしてゐる山村專一の熱心な學究的な態度が、圭子の深い興味を誘つた。

前後四時間半にわたる長い報告が終つた。

さすがに、たれ一人居眠りするものもなく、魅せられたやうになつて聽きとれてゐた會衆は、一せいにほつと溜息をついた。

少憩の後、質問が行はれることになつた。微細な點にまで及ぶ專門的な質問應答が繰返されて、會場はにはかに活氣づいた。

『博士は、今後さらにこの實驗を押し進めて、哺乳類にまで及ぼされる意圖をおもちの由でありますが、結論として、この實驗を人類にまで適用し得る豫想をおもちでありますか？』

報告の內容に關する一通りの質問が終つてから、かういふ總括的な大きな問題が提出された。

『この問題に關しましては、然りとも斷言致しかねまするし、否とも斷言致しかねまする。』

と筧博士は答へた。そして、この實驗が、卵生動物から胎生動物へ移行した場合にぶつつかるであらう樣々な困難を詳述した後、だがそれ等の困難は、たとへば外科手術が、母體の奧深くひそめる卵巢の中から、卵子をそのまゝの狀態においてとりだすことに成功する程高度に發達するならば、『理論的には』取り除かれ得る困難であると說明した。

『さらに又、卵巢內の卵子をそのまゝ取りださずに、やはり人工的方法による體內受胎をなさしめるといふことも、一應理論的には考へられることであります。が然し、實踐的に考へて見ますならば、從來、人工的單爲生殖に際して用ゐられて來た諸々の酸類、アルカリ類、鹽類、及びその他の溶液が、母體に何等かの障害を與へずにはおかないといふことであります。しかしながら、これ等の障害とてもやはり、外科手術の場合と同じく、化學の高度の發達に期待し得られないことはありません。けれども、今日、我々學徒が、かゝる實驗を繼續するに當つて、我々の自由な、思ふ存分な研究を妨げるものは、實は外部的な障害、いひかへれば、社會的な障害であります。今朝、報告にはひります前に申しあげました通り、印刷職工の經濟的要求によるストライキは、諸君の御手許へ印刷に付したレポートを差しあげることを妨げました。もしかりに、化學工業に從事する職工達がストライキを起しますならば――彼等も又飯を食ふ人間である以上、起さないとはいへません――我々は、あらゆる實驗に必要な藥物を手にいれることが出來なくなるかも分らないのであります。しかも、かゝる障害は、我々が幾百遍顯微鏡をのぞいても、幾萬の方程式を作成しても、遂に除き得ない障害なのであります。』

ぱち〳〵〳〵――手をたゝいたものがある。又しても山村理學士であつた。

會議第一日は、夜の十時頃に終つた。

青山へ歸つて來た圭子は、アパートの入口の所で、見知らぬ二人連れの男に聲をかけられた。

「志摩圭子さんですね？」

「はい。」

あんまりだしぬけだつたので、圭子は何がなしぎよつとした。

二人とも外套の襟を立てゝソフトを目深に冠つた人相の惡い男であつた。

三五

「ちよつとお訊きしたいことがあるんで、さつきから御待ちしてゐたんです。」

人相の惡い男は、アパートの門燈の明りに透して、不遠慮に圭子の顔をのぞき込むやうにしながらいつた。

「あの、どなたでございますか？」

腹立たしさと薄氣味惡さとで、圭子は身體を固くした。

「立話も出來ませんから、兎に角、御部屋へ上らしてもらひませう。」

男達は、圖々しく圭子の先に立つて、アパートの中へはひつて行きかけた。圭子は急いでその横をすり拔けて男達の前へ立ちふさがつた。

「一體、あなた方はどなたですか？　失禮ぢやありませんか！」

やゝ昂つた聲で詰りながら、圭子は、勝氣な負けず嫌ひな眼できつと相手を睨みつけた。

だが相手は、「小しやくなあまつちよ奴！」といふ風に、ちよつと顔をゆがませただけで、默つたまゝ、にく／＼しげに圭子の鼻先へ名刺を突きつけた。『××警察署高等係。　　』

圭子は、名刺の面をちらと見ただけで、それを受取らうとはしなかつた。

「どういふ御用ですか？」

「御部屋で話しませう。」

やむを得なかつた。今度は、圭子が先に立つて歩きだした。

戸を開けると、男達は、ほとんど圭子を突きのけんばかりにして一齊に部屋の中へ飛び込んだ。そして猫のやうな眼で部屋ぢう隅々まで忙しさうに見まはした。

一人の方が、寢臺のカバーをめくつた。

「何をなさるんです！　失禮な！」

圭子は心底から腹が立つた。

男達は一向平氣な顔で何か囁き合つてゐたが、やがて圭子の方へ向き直つた。

「寢臺はこれ一つですか？」

腹立たしいうちにも吹きだしたくなるやうな質問であつた。

「見たら分るぢやありませんか。」

「なるほど、これは御あいさつだ。」

男達はしやあ／＼として煙草に火をつけた。

「昨夕のお客さんはどこへ行きました？」

「昨夕のお客さん？……お客さんなんかたれもありません。」

「冗談でせう。兄さんが來たぢやありませんか。」

なるほど、これが時々話に聞いてゐた『かま』つて奴だな、と圭子は思つた。だが、數ケ月前に、月島へ使ひをしてやつて以來、圭子は、無論、一度も兄の顔を見たことがないのである。だからこの『かま』は、圭子にとつて一向手應へのないかまであつた。

「何を御想像なさらうと、それはあなた方の御自由ですが、こゝへは、確かにたれも來は致しません。」

「ふむ、さうですかね。だが最近どこかでお會ひになつたでせう？」

「いゝえ一度も……隨分前から、兄とはすつかり行き來が絶えてゐるんですから。第一、兄がどこにゐるかさへ私は知らないんです。」

『さうですか。ぢや、こつちから教へてあげますが、兄さんは四五日前から東京へ來てゐるんです。なに、ちよつと訊きたいことがあつたもんですからね、それでこちらへ伺つたわけですが、別に大したことぢやないんです。』

それから二人でちよつと何か目くばせをすると、

『いや、どうもお邪魔をしました。』

存外おとなしく頭をさげて出て行つたのである。

あんまりあつけないので、圭子は却つて張合ひ抜けがした。

三六

圭子は、かういふ種類の人間と何等かの意味で、兎に角、『交渉』をもつたのはこれが初めてであつた。

で、弱味を見せまいとして張り切つた氣持でゐたのだが、相手が思つたより簡單に、あつけなく引きあげて行つたので、ひよいと肩すかしを食つたやうに、張合ひ抜けがしてしまつたのだ。

が、ほんの暫く經つと、底の知れないやうな不安が、一時にむらがり襲つて來た。

彼女は、その不安をぢつと押し殺すやうにして、兄俊平に關する想像を、出來るだけ系統的に秩序立てて見ようとした。

夏休み前に、佃の渡場近くで潮の香をかぎながら、太田といふ若者から受けとつた厚ぼつたい角封筒のこと、その時太田がさゝやいた『成功を祈つてゐるぞつて傳へて下さい』といふ言葉――

あの封筒を受けとると、その翌日、兄はどこかへ姿を消して了つたのだ。

『あの封筒の中には確かに札束がはひつてゐたやうな氣がする』と、彼女は初めつからそんな風に思つてゐた。

兄は、何かしら重大な『使命』を帶びて、どこか遠くへ行つてゐたに違ひない。それが、今度の、農民勞働黨の結成に際して、ひそかに東京へ舞ひ戻つて來たのであらう……四五日前から東京へ歸つて來てゐる、とさつきのスパイがいつた。

『もしつかまつたらどうなるんだらう?』

が、そのことよりも、もし確かに兄が東京へ歸つて來てゐるとすれば、その身邊に、陰險な眼が光つてゐるといふことを、さしあたり、何とかして兄に知らせてやつた方がいゝのではないか?――もつとも、それ位なことに、自分が殊さら注意してやるまでもなく、兄自身の方で百も千も承知のことではあるだらうが、しかし、この前の時のやうに、ひよつくりこのアパートへ顏をだすやうなことがあつては、それこそ危險この上もない話だ……

翌朝、寢卷のまゝ窓のカーテンを開けて、何氣なく往來の方を眺めた圭子は、向ひ側の煙草屋の店先に腰をかけて、ぢつとこつちを見てゐる鳥打帽子の男があるのを發見した。

『いよ〳〵、このまゝ放つて置くわけにはいかない。こつちへ立ちまはるのは危險だといふことを何とかして知らしてあげなくちや……』

だが、無論、何とも聯絡のとりやうがなかつた。ふと、あの月島の太田といふ人を訪ねて見ようかとも思つたが、それは一層危いことに思はれた。

どうすることも出來ない――全くもどかしいことであつた。

『せめて勘三さんでもゐて呉れたら。』

かういふ場合にどうすればいゝか、打明けて相談の出來るやうな相手を、實際、たれ一人、圭子はその周圍にもつてゐなかつたのだ。

紅茶を溫めてすゝりながらも、圭子は、自分

の眼の前で、あの人相の悪い男達から引つ張つて行かれる兄俊平の姿を、幾度か思ひ浮べて慄然とした。

山上御殿へ行く時間が迫つて來た。

と、ある考へが、稻妻のやうに圭子の頭をかすめた。

『さうだ、あの方に相談して見よう。あの方ならきつと相談に乘つて下さるに違ひない！』

彼女は大急ぎで着物を着替へた。

三七

圭子は、念入りに窓のカーテンを閉め、入口のドアにぴつたりカギをおろして外へ出た。

電車へ乘り込んでしまふまで、彼女は安心が出來なかつた。後をつけられてゐるやうな氣がして仕方がなかつたのである。もつとも、たとひつけられたにした所で、山上御殿の學者達の會議へ出かけて行くのだから、一向、差支はないわけなのだが……

しかし、兎に角電車に乘つて終ふと何がなしほつとして、携へて來たその日の新聞を膝の上に擴げて見た。

筧博士の實驗報告が、社會面のトップに大きな見出しで報道されてゐた。その記事の内容は、曾てのシカゴ・ニュースやニューヨーク・タイムスのそれのやうに、大げさな馬鹿げたものではなく、割合ひ手際よく、博士の講演の要點を摘記してあつたが、それと並べて、著名なMといふ老生物學者の談として、

『筧博士の實驗は、學界に貢獻する所多大なるものといはなければならない。だが、博士は本日の講演中、學問の自由な研究は社會革命の行はれた後でなければ十分にこれをなすことが出來ないかのやうな口吻をしば〳〵漏らされたことは、不謹愼な話であつて、眞摯なる學者の言葉として首肯しかねるものである。』

といふやうな意味のことが書かれてあつた。

『まあ、たつたあれだけのことがこんなに氣になるのだらうか？』

圭子は、老生物學者の『神經過敏』をあはれみたいやうな氣持にさへなつた。

筧博士は、何も、『社會革命』なんてことを口にだしはしなかつたではないか、たゞ現在のやうな時代においては、學者が、思ふ存分に、自由な學問の研究をすることが、しば〳〵『社會的な』事情によつて妨げられるといふことをいつたに過ぎない――もつともそのことはとりやうによつては、この老生物學者のいふやうな意味にとれないこともない……だが、もしさうとしても、なぜそれが、『眞摯なる學者の言葉』としてをかしいのであらうか？

圭子は、ふと、最近にある雜誌の上で讀んだ某法醫學者の歐米視察談を思ひだした――もつとも進んでゐるだらうと豫想してゐたドイツは案外駄目で、かういふ學術的方面では一番遲れてゐるに違ひないと思つてゐたソヴェート・ロシアの學者が、到底我々の及びもつかぬ程高度の研究に成功してゐるのは全く驚歎に價するものであつた、うんぬん。

『學術を人類のために役立てる』といふ言葉が、現實には、實際何を意味するかといふことを、圭子は、おぼろげながらも理解するやうになつて來はじめてゐたのだ。

山上御殿へ着くと、圭子はすぐ山村理學士を探した。俊平のことで、「あの方に相談して見よう」と思つた「あの方」とは、山村理學士のことだつたのである。

だが、集まつてゐる人々の中に、どうしたわけか山村專一の姿は見えなかつた。

「山村さんが見えないやうですけれど、今日は來られないんでせうか？」

圭子は筧博士にから訊いて見た。
『さあ、どうしたんだらう？　何か用があるんですか？』
『えゝ、ちよつと。』
圭子は聲をひそめた。博士にだけは知らして置いた方がよくはないかしら？――で、彼女は昨夜からの出來事を手短かに物語つた。
『なるほど。さういふ問題なら山村君も專門家だ。いゝ智慧を貸してもらへるかもしれない。』
博士も山村と相談することに贊成した。
H臨海試驗場の技師が、中毒魚類に關する新しい研究報告をしてゐる間中、圭子はほとんどうはの空で、會場入口のドアの方ばかり見てゐた。
午後の休憩時間になつてから、山村專一はやつと姿を現した。

三八

志摩君が、是非君にお願ひしたいことがあるといつて、今朝からお待ちしてゐましたよ。』
山村の顏を見ると、いきなり筧博士がから聲をかけた。
『ほう、さうですか。どういふことなんでせう？』
山村は圭子の方へ向いて輕く會釋した。
『あの、後程……』
圭子は言葉をにごした。大勢の人間がごたごたしてゐる場所でいひだせるやうな問題ではなかつたのだ。
『さうですか……今朝は內務大臣の所へ談判に出かけてゐたもんですからね、それで遲れてしまつて。』
『ほう。例の政黨禁止問題ですかね？』
山村は博士の方へ向き直つた。
『さうなんです。いや、もう話にも何もなりませんよ。いづれ行政訴訟を起すことになるでせうがね……』
筧博士は、珍しく興味深さうな顏をして、結黨禁止のいきさつを聞きほじくつた。そのうちに、突然、山村は話頭を轉じた。
『それはさうと、勘三君は臺灣大學の教授になつたつて話を聞きましたが本當ですか？』
『なに講師さ。』
博士は吐きだすやうにいつた。
『へえ、どつちにしろ面白いもんですね。僕は近頃どうやら大學の方の首が危くなつて來てゐるんですが、いゝ、ゐもりの研究をやつてゐる動物學者を煙たがる大學があるかと思ふと、わざ〳〵マルクス主義者を雇ひいれる大學がある……』
『はゝ、全くだ。だが、勘三なんて奴がマルクス主義者なら、マルクス主義が夜逃げしてしまひますよ。』
『分らんもんですね。昔は隨分勇敢だつたんだがなあ……』
山村は眞面目にいつた。
『空元氣さ。それより、どうです君、今朝の新聞を見ると、M博士は僕を立派に危險人物扱ひにしてゐる。』
『さう〳〵、見ましたよ。あれは愉快ですね。一體、あのM博士つてのは、ひどく、貴族院議員になりたがつてゐるつて話ぢやありませんか。』
『そんな話です。敕任教授が敕選議員になるのは、これは普通の道行きかも知れんがね……』
振鈴が鳴つて午後の會議が始まつた。
中毒魚類に關する研究報告の續きであつた。
圭子は再び、熱心な學徒としての山村專一の姿を見た。
五時に日程を打切つて、大食堂で懇親晩餐會が開かれることになつてゐた。
圭子は、山村に賴んで、席をはづしてもらつた。

『かまはなかつたら、僕の宿へ來ませんか。ゆつくりお話が出來ますが。』
『は。ではさうさして頂きませう。』
宿は神田の方にあつた。上京のたびに、山村が自宅のやうにしてゐる氣のおけない旅館であつた。
『失敬しますよ。』
書生っぽ式にいつてのけて、山村は圭子の眼の前でさつさとどてらに着替へた。
『實は兄のことなんでございますが……』
『兄？』
『志摩俊平と申します。御存じないかも知れませんが……』
『え？　志摩俊平？』
『御存じでいらつしやいますか？』
『知つてるどころぢやない！……さうでしたか、やつぱり志摩君の　妹さんだつたんですね……どうも苗字が同じだとは思つてゐましたが……さうでしたか……』
山村は、ひどく感慨深さうにいつて、圭子を見直すやうにした。

三九

圭子は、兄のことを詳しく說明した。
『あゝして見張りをされてゐるところへ、この前の時のやうに無頓着に歸つて來たりしませうものなら、きつと、すぐ捕まつて了ふに極つてゐますし……』
『ふむ。』
山村は大きくうなづいて、暫く何か考へてゐた。
『だが志摩君にしても、若しほんとに身邊をねらはれてゐるやうな危險な狀態にあるのなら、あなたの所へ立ちまはることが敵の網の中へ食ひ込んで行くやうなものだつてことぐらゐは分つてゐるでせう。』
『それだと安心なんですけれど。』
『大丈夫、それくらゐの細心な用心深さはもつてゐるはずです。またさうでなければ、あゝいふ仕事は出來るもんぢやありませんからね。もつとも、時には思ひもかけないやうな大膽な振舞に出て、かへつて敵の裏をかく、といふやうな遣り方をする場合が、ないでもありませんが……』
『兄にはその冒險的な性質の方が多いやうな氣がするんです。』
『さうかも知れません。だが、あなたの所へ立ちまはるやうなことはまづないでせう。それだけは安心していらして大丈夫です。』
はつきりした、斷定的な山村の聲が、圭子の胸に力强く響いた。
山村は、きやしやな手つきでお茶をいれた。
この人にこんな優しい一面があるとは？――圭子は、興味深いまなざしで、山村の白い手さきを見た。
『兄のこともございましたけれど、その外にも、いろ／＼お話を伺ひたいことがございますのですが……』
『はあ、どんなことですか？』
『あなた方のなすつていらつしやる運動のことについてなんですが……』
『僕達の運動のことについて？』
山村はまつすぐに圭子の顏を見た。
『はあ。自分の不勉强のせゐなんですけれど、いろんな點で、澤山疑問があるもんですから。』
山村は、圭子の一つ／＼の質問に丁寧に答へて、勞働者運動の初歩的な知識を說いて聞かせた。そして、さらに附加へた。
『勞働者が、自分の階級的立場をはつきり自覺して、巨大なブルジョアジイの政治組織と有效な戰ひをすることの出來るやうな中心勢力を築き上げるまでには、非常に大きな困難と犠牲を

踏み越えて行かなければならない。これはいふまでもないことです。少數の自覺した分子が、一定の工場なり職場なりを目標にして、勞働者の戰鬪組織を植ゑつけ、又は擴大して行く――その仕事の進め方は、丁度、生物學における細胞の減數分裂と同じやうなものですよ。日本の運動は今は丁度その時機なんです。志摩君なんかは、いはゞまあ、新しい個體を生みだすための生殖細胞が包含してゐる染色體の一つみたいなものですね。』

女中が來客を知らせて來た。

『諏訪さんて方がお見えになりましたが。』

『諏訪君？ ほう、それは珍しい、お通しして下さい。』

女中が下へ降りて行くと、山村は圭子を顧みて訊ねた。

『諏訪庄吉、御存じでせう？』

『はあ、存じてをります。でも、私これで失禮さして頂きませう。』

『いゝぢやありませんか。まあ話していらつしやい。』

〝へその緒の理學士諏訪庄吉が、相も變らぬ曇然とした無表情な顔つきでぬつとはひつて來た。

四〇

『やあ、たれかと思つたら、あんたか……』

諏訪庄吉はそこに圭子が居合せたのを見て、いくらか驚いたらしい樣子であつた。

共に理學士であるとはいへ、實證的生物學と抽象的理論物理學と、まるきり異つた科目を專攻してゐる山村と諏訪とが、ひどく親密な間柄であるらしいのを見て、圭子は多少、意外な感じがしないではなかつた。

『どうだ、〝へその緒の實驗はその後進行してゐるかね？』

と山村がきいた。

『うむ。だいぶん目鼻がついて來たが、まだなかなかだ。』

諏訪庄吉は鞄の中から、厚ぼつたい原稿のつゞりをとりだした。

『實は、最近、こんなものを書いたんだが、一應、君の意見を聞かしてもらひたいと思つてね。』

山村は、差しだされた原稿を手にとつて見た。

『數學における階級性の認識……ほう、面白い研究をやつたもんだな。だが、數學は僕の專門とは違ふから、こいつを讀ましてもらつても別に意見なんか述べられないよ。』

『いや、數學そのものについては兎に角、いろんな形態で現れてゐる各時代の階級鬪爭の姿と、その時代に適應した數學との關係を論じて置いた部分が多いのだが、政治的、經濟的事象の記述の中に間違ひがありはしないか、そいつを一應君に見てもらひたいんだ。』

『さあ、僕に歯が立つかどうか知らんが、……それにしても、えらいことをやつたもんだな。君が、こんな方面に手をつけてゐようとは夢にも思はなかつた。』

『階級鬪爭の實踐の中へ飛び込んで行けないおれのやうな人間はまあ、そんなことでもして良心の滿足を得るしかないんだな。』

諏訪は顔をゆがめて、自分を嘲るやうにからいつた。

『ふむ……しかし、數學における階級性つて、一體どういふことなのかね？』

『そいつを讀んでもらへば分るが、簡單にいふと、「階級社會の生産物の一つである數學のうちに、その時代の人間が如何なる姿でかくされてゐるかを調べ、結論として「數學といへどもやはり、利用されることによつて、それを利用する階級の性格を帶びて來、ある點までその階級の存在を有利ならしめる方向に向つて發展す

る』といふことを論じて見たんだ。』

『面白い！』

山村は眼を輝かせた。

『是非讀ましてもらはう。』

圭子は、こゝでも又、自分達のやうな仕事をしてゐるものが、どんな方向に向つて進まねばならないかを示唆してくれる一つの例證を見たと思つた。

寛博士、勘三、俊平、山村、諏訪――それ等の人々のそれ〴〵の生活態度を思ひ較べて見ながら、獨り住居の冷え〴〵とした夜のアパートへ歸つて行つた。

煙草屋の店先はもう閉つてゐた。

だが、どこかそこいらの薄暗の影に、やはり陰險な眼が光つて、自分の部屋の方をぢつと仰ぎ見てゐるやうな氣がしてならなかつた。

四一

それから四五日經つたある日、圭子は署名のない手紙を一通受取つた。

『明日の晩、八時きつちりに、××驛待合室前まで來て呉れ、誰にも氣づかれないやうに――俊』

文面はたつたこれだけであつた。

到頭！

圭子は身體が小きざみにふるへるやうな氣がした。

向ひの煙草屋の店先には、もう、あの不氣味な眼が光つてはゐなかつたが、どこへどんな風に潛んでゐないとも限らない。

推理と計算にならされて來てゐた彼女の思考力は、かういふ場合に、奇想天外な妙案を思ひつくといふ風には出來てゐなかつた。だが、彼女にも、彼女だけの機智は働いた。

翌日の夕方になると、彼女はタオルと石鹼を入れた小さな金盥をもつてアパートを出た。が、勿論錢湯の前は素通りして、通りかゝりの自動車を呼び止めた。

××驛へ着いて見ると、指定の時刻八時にはまだ六七分間があつた。彼女は胸を波打たせながらも、何氣ない風で待合室の附近を探して見た。俊平らしい男の姿は見えなかつた。

『どうしたんだらう？　來られなくなつたのかしら？……』

だが、この不安は、改札口の大きな電氣時計がぴつちりと八時を指した時、驚きと共に救はれた。

『待つたかい？』

後から輕く肩をたゝかれて振り向いて見ると、そこに、久し振りで會ふ兄が、しかも『見知らぬ兄』が立つてゐたのである。

もじりの外套を着て白足袋をはき、金縁の眼鏡をかけた兄――さうした服裝がまた、どうしたわけか、ひどくいたについてゐるのである。

『まあ！』

圭子は眼を見張つた。

俊平は、默つて步きだした。圭子もその後に隨つた。

俊平は、ほとんどしなだれかゝらんばかりにぴつたり圭子と寄り添つて步いた。第三者から見れば、二人の樣子は、どうしたつて仲の良い夫婦か情人であつた。

とある橫町を曲つた所に、榮えない淋しさうな喫茶店があつた。俊平はそこのドアを押した。

『又、例の所まで行つて來てもらひたいんだが、どうだ、行つて呉れないか？』

『例の所つて、月島？』

『うむ。』

『今夜すぐ？』

『いや、明日の朝でいゝ。』

『行つてあげるわ。』

俊平は、耳の穴の中へでもはひつて了ふ位に小さく丸めた紙片をだした。

『これを渡してもらへばいゝんだ。返事はいらない。』

圭子は、その鼻くそのやうに小さな紙つぶてを財布の中に藏つた。

『私、山村專一さんにお會ひしたわ。』

『山專に？　ほう、さうか……どこでだ？』

『動物學會の大會でお會ひしたんだけれど、お宿へ行つて、いろ／＼社會運動の話を聞いて來たわ。』

『さうか、それはよかつたな。おれも暫く會はないが、どうだ、元氣だつたか？』

『えゝ、とても！』

『あいつもおれなんかと同じやうに、生粋のインテリだが、土性骨だけはしつかりしてゐる。』

『さうらしいわね。』

『ぢやあ賴むぞ。』

俊平は立ち上つた。

『兄さん、』

『何だ？』

『あたしんとこには危險よ。見張りがついてゐるの。』

『分つてゐる。こなひだ傍まで行つて樣子を見て來た。』

『まあ！』

事もなげにいふ兄貴の顏を、圭子は、も一度驚きの眼で見詰めた。

四二

寛博士は圭子の姿を見なくなつた。

大學はもう冬休みになつてゐた。けれども博士は、例の通り、研究室通ひをやめなかつたのである。ところが今まで、一度もそんなことのなかつた圭子が無斷で出て來なくなつたのだ。

初め博士は、病氣でもしたのだらうと思つてゐた。だが、三日經つても、やつぱり何の音さたもないので、到頭、博士の方から青山のアパートへ電話をかけてみた。

アパートの方でも、先日夕方に出て行つたきり歸つて來ないので心配してゐるといふ返事であつた。

博士は、異常な決意をもつて、胎生動物に對する單爲生殖の實驗に取りかゝらうとしてゐた。

その矢先、圭子が行方不明になつたといふことは、博士の決意に大きなひゞをいれることであつた。

圭子のゐない研究室は、博士にとつて、反射鏡のない顯微鏡のやうなものであつた。

明かに圭子は寛博士の『助手』であつた。だが、圭子の存在が、博士の心理の上へ『助手』以上の作用を及ぼしてゐたといふことは、數日間の圭子の不在が博士の心持を波立たせたといふことによつて、益々はつきり證據立てられた。

さすがに博士は、自分の心理をさういふ風に判斷して見るだけの省察力をもつてゐないことはなかつた。

さういふ博士の憂鬱は、博士と圭子のことについて、暗いイメーヂを抱いてゐた道代夫人の心持を一層暗くさせた。その暗さが博士の心持へさらに反作用した。家庭は冷たくさびしかつた。

博士は大部分の時間を研究室で過ごした。だが、ガストーヴの前で、ぼんやり煙草を吹かしてゐる時間の方が多かつたのである。

圭子が姿を見せなくなつてから丁度一週間目の朝、朝食を終つて洋服に着替へようとしてゐる所へ、博士は××警察署高等係、といふ名刺をもつた男の訪問を受けた。

『志摩圭子といふ婦人を御存じで御座いませうか？』

『僕の助手ですが、どうかしましたか？』

『はあ、當人も先生の助手だと申してをりますが、それに相違ないんで御座いませうな。』

『疑ふなら、大學へ行つて調べて見給へ！』

ぐつと癪にさはつて、博士は聲に憤りを見せた。

ねち／＼と、いろんなわき道へ外れたり、遠まはりをしたりした擧句、その男は、圭子が××署で二十日の拘留處分を受けてゐるといふことを教へた。

『一體どうしたといふんです？』

『目下取調中ですが、どうもレポーターをやつてゐたらしいんです。』

博士は、その日の午後、早速××署へ出かけて行つて、圭子に會はして呉れと頼んだ。

面會は許されなかつた。しかし、

「當人の將來もあることですから、あなたが責任をもつて、今後、あゝいふことをしないやうに監督をして下さるなら、身柄だけは、一時御預けしてもいゝです。」

と、主任らしいのがいつた。

博士は、どのやうにでも、十分責任を以て監督すると斷言した。

だが、一度、さういふ洗禮を受けたものが、もとの白紙に立ち復るかどうかは、博士といへども、十分知り抜いてゐることだつた。

『結局圭子は、おれの懐に止まつてゐる女ではない。』

博士は、はつきりさう思つたのである。

留置場をだされた圭子が、その後どうなつたか？　それは、たゞ一人の志摩圭子がどうなつたかを意味するのではない。

（一九三〇年九月）

年　譜

本名は佐々木孝丸。

明治三十一年一月三十日、北海道釧路國、釧路川の上流屯田村といふ僻村で、當時、監獄の教誨師をしてゐた父諦熏の三男坊として生れた。

八歳の時、父の故郷香川縣へ歸り、小學校を濟ませてから京都の東山興正寺へ、門跡附の小姓として出され二年間其處にゐた。佛教の勉強をさせられる。

國へ歸つて一年ばかり坊主をやる。それから家を飛び出して神戸で電信屋になり、神戸郵便局、東京葵町電信局、麹町郵便局、東京中央電信局等を轉々し、その間に、はなはだセンチメンタルな文學青年となり、圖書館でがむしやらに文學書を讀み、傍らフランス語を獨習する。

秋田雨雀氏に師事し、一身上のこまかいことまで非常な世話になつた。

大正八年の秋、秋田氏の世話で、新潮社からドゥミュッセの「二人の愛人」を飜譯して出版する。爾來、飜譯で飯を食ふ。シェニキキッチ「大洪水」、スタンダール「赤と黑」等をいづれも新潮社から、「モウパッサン全集」中の一卷を天佑社から、「ラ・フォンテーヌ寓話全集」を近代社から、バルビュス「クラルテ」を叢文閣から、マルチネ「夜」を金星堂から、ロニー・エーネ「十萬年前」を資文堂から出版する。

これより先、一九二〇年十二月、日本社會主義同盟が生れ、恩師秋田雨雀氏等もこれに加盟したのに刺戟され、行動を共にす。翌、二一年十月、我國プロレタリア文藝運動の礎石「種蒔く人」を、小牧近江、金子洋文、村松正俊等と共に創刊する。さらに、秋田氏等と共に「先驅座」を起す。それ以後、飜譯で命をつなぎながら、プロレタリア文藝運動と演劇運動の爲にずつと仕事を續けて來た。

一九二五年十二月、同志山田清三郎等と日本プロレタリア文藝聯盟の設立を企て、これを實現する。現「ナップ」の最初の組織である。

翌二十六年十一月、村山知義、佐野碩、千田是也、小野宮吉等を語らつて「前衞座」を組織し、プロレタリア演劇運動の第一歩を踏み出す。俳優と、飜譯と、雜文と、演説とが仕事になる。

日本プロレタリア文藝聯盟では、中央委員であつたが一九二七年六月、分裂して勞農藝術家聯盟が生れ、これの執行委員長となる。同年十一月、さらに林房雄、藤森成吉、山田清三郎、藏原惟人、村山知義等と、「勞藝」を脱退して前衞藝術家同盟を結成、執行委員長に推さる。後、「前藝」「プロ藝」合同するに及び、新團體全日本無産者藝術團體協議會（ナップ）の中央常任協議員、同協議會加盟日本プロレタリア劇場同盟（プロット）の中央執行委員長として現在に及ぶ。

一九二七年十一月前衞藝術家同盟の機關紙「前衞」が發行された時、これに初めて、落合三郎のペンネームによる小説「山嶽黨」を連載。それ以後、このペンネームによる主なる作品左の如し。

戲曲「筑波祕錄」「慶安太平記後日譚」「荷車」「勸進帳」（いづれも單行本）

小説「加波山」（未完　雜誌「大衆」に半ケ年連載）「染色體」（「東京朝日新聞」連載）「花嫁の憂鬱」（一九三〇・十二月號「改造」）「ぷりまどんな」（目下一九三一・一月號より「婦人公論」に連載中）

目下は、小説や戲曲を書きもするが、それより、東京左翼劇場員及びプロットの役員としての仕事の方により多く力を注いでゐる。

昭和六年二月十一日印刷
昭和六年二月十五日發行

現代日本文學全集 第六十二篇

編輯者 山本三生

發行者 山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地

印刷者 杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一二一番・一一二二番・一一二三番・一一二四番

株式會社秀英舍印刷

山谷

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02979 0946

改造社